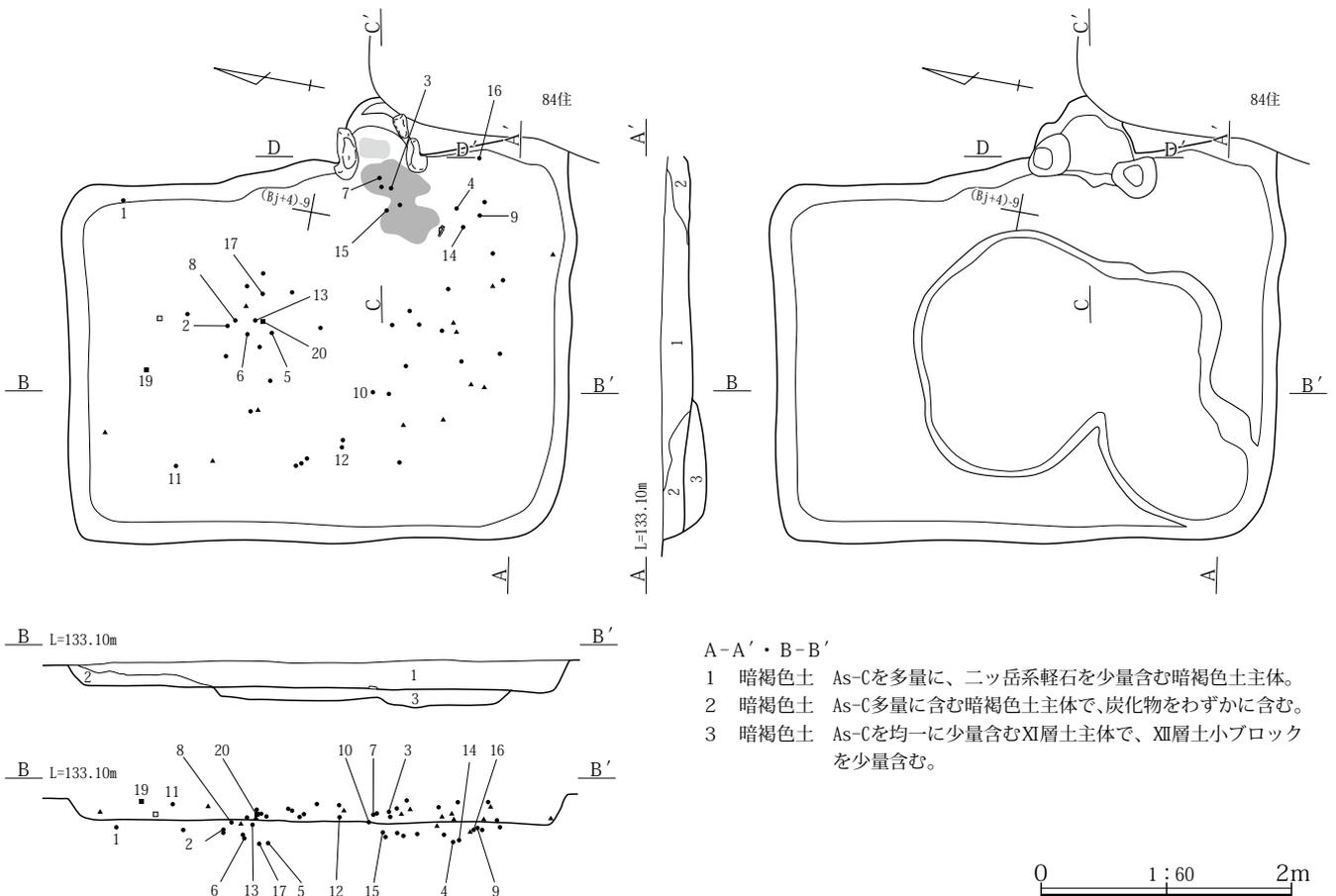


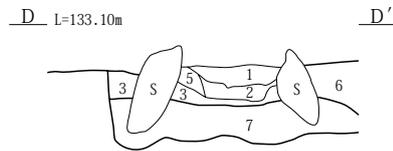
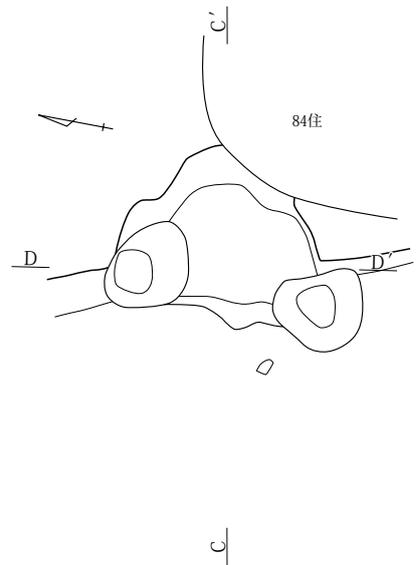
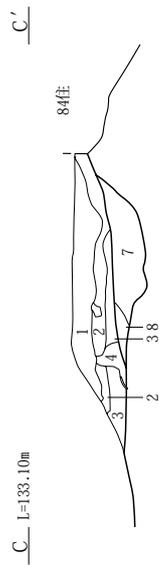
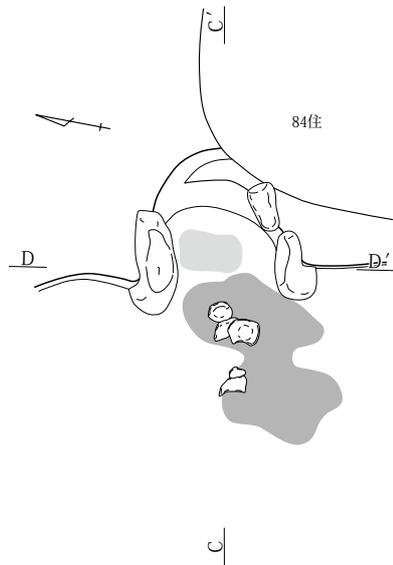
83号住居(第644～646図 P.L.146・278)

位置：Bj- 8・9グリッド 形状：隅丸台形 規模：2.87～3.20m×3.99m 残存深度：0.20m 主軸方位：E-13°-N 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁中央の南寄りに設置されており、主軸方位をE-12°-Nとする釣鐘状の平面形を有するカマドである。燃烧部は壁外に位置しており、底面中央に顕著な焼土が残存していた。住居壁との境に構築材として礫を立てており、右側壁にはさらに1ヵ所礫が立てられていた。煙道部は、燃烧部から一段上がった位置から短く立ち上がっていたものと考えられる。燃烧部底面には掘り方を含めて支脚の存在を窺わせる痕跡は残っていなかった。焚口部から屋内側やや右寄り方向に黒色灰の広がりが認められ、灰の掻き出しの所作が復元できる資料である。遺物：カマド前面の黒色灰面上から須恵器壺(3・7)、土師器甕(15)が、南東コーナー部から土師器甕(14・16)、須恵器壺(4)が出土しており、灰釉陶器壺(10・11)・瓶(12)は西寄りの床面のやや上位から、棒状の鉄製品(19・20)、土師器壺(2)、須恵器壺(8)・羽釜

(17)・鉢(13)は、中央部北寄りから出土したものである。21の鉄製刀子は埋没土の掘り上げの時点で上がってしまい、出土位置が特定できない。重複：84・120号住居及び14号溝と重複しており、検出状況などから120号住居→14号溝→83号住居→84号住居と考えられる。所見：Ⅸ層土中で平面確認をしたもので、二ッ岳系軽石の含有の有無及び、やや明るい色調の違いによって比較的容易に確認をすることができた。壁は顕著な崩落も認められず、南東コーナーの上部が84号住居との重複によって失われている以外、全周良好な検出ができた。床面は、カマドの灰面の延長、及びⅦ層土が斑状に検出された面として捉えたもので、この時点で重複している14号溝の形状が明瞭に確認することができた。貯蔵穴は床面精査及び掘り方調査においても検出することはできなかった。掘り方は、中央部から南西コーナー部にかけて土坑状の掘り込みを検出したが、南西コーナー部の掘り込みについては、14号溝の埋没土部分を掘り下げた可能性があり、本来は中央部に径2.00mほどの不整形円形の土坑状掘り方であったものと考えられる。時期：10世紀前半



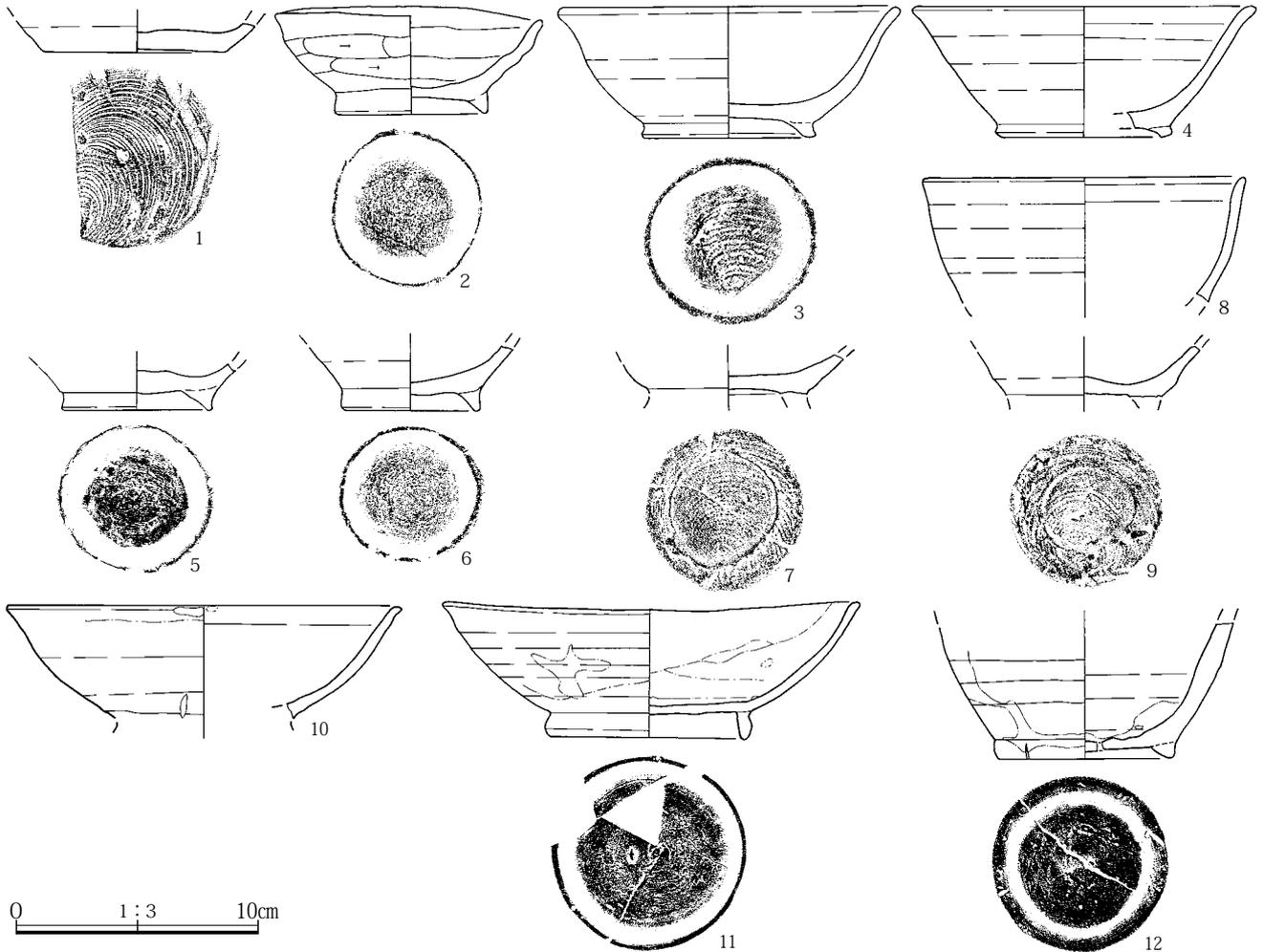
第644図 83号住居



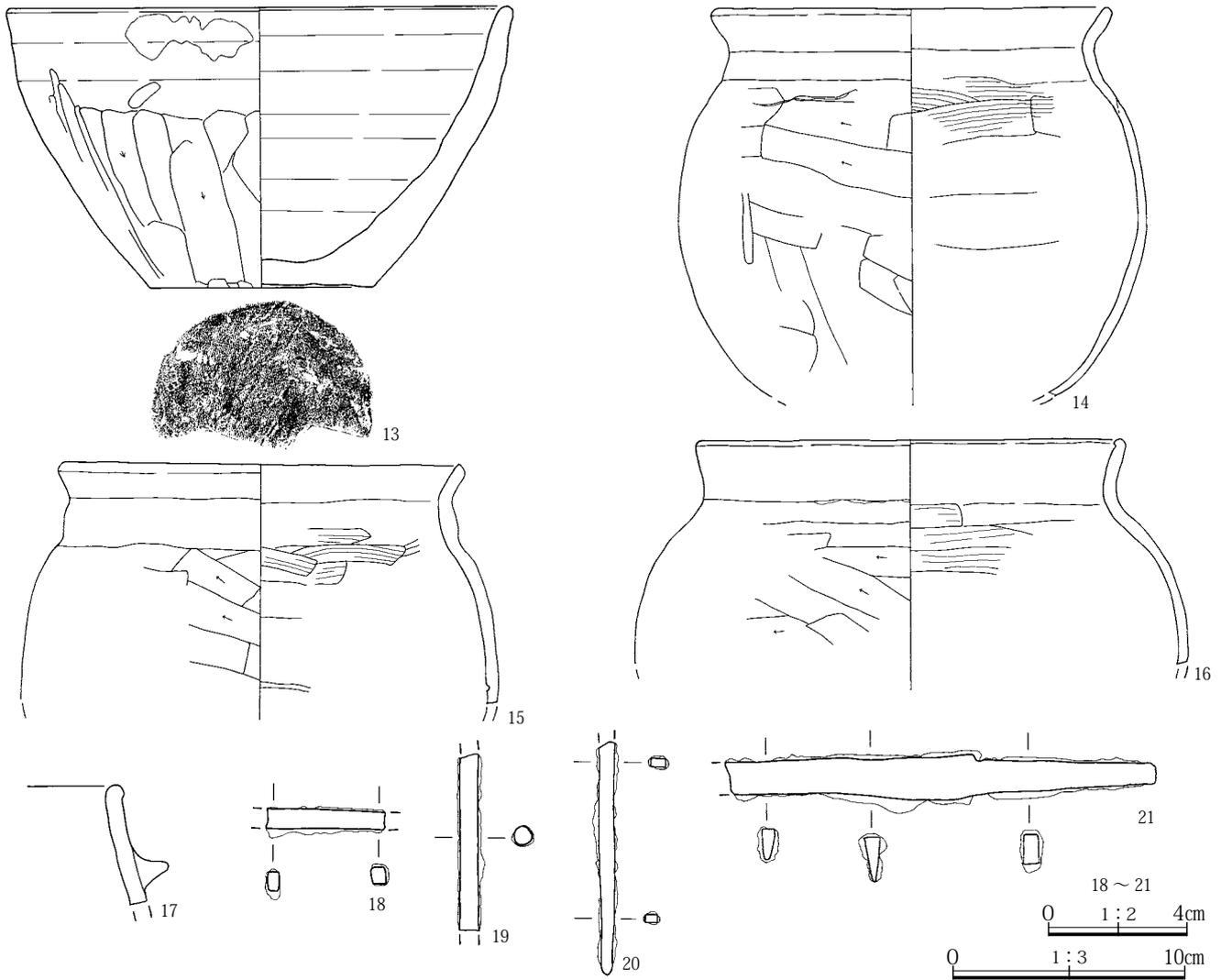
C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く、二ツ岳系軽石細粒をわずかに含む暗褐色土で、黒色灰を少量含む。
- 2 黒褐色土 As-Cをわずかに含む暗褐色土で、黒色灰を多量に含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土で、XII層土ブロック・焼土粒を多く含む。
- 4 黄色土 XII層土ブロック。
- 5 黒褐色土 2層に類似するが、焼土粒をわずかに含み、黒色灰の含有が2層より少量。
- 6 暗褐色土 As-C・炭化物を含む暗褐色土。
- 7 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、XII層土大粒を含む。
- 8 黄色土 XII層土ブロック。

0 1:30 1m



第645図 83号住居カマド・出土遺物(1)

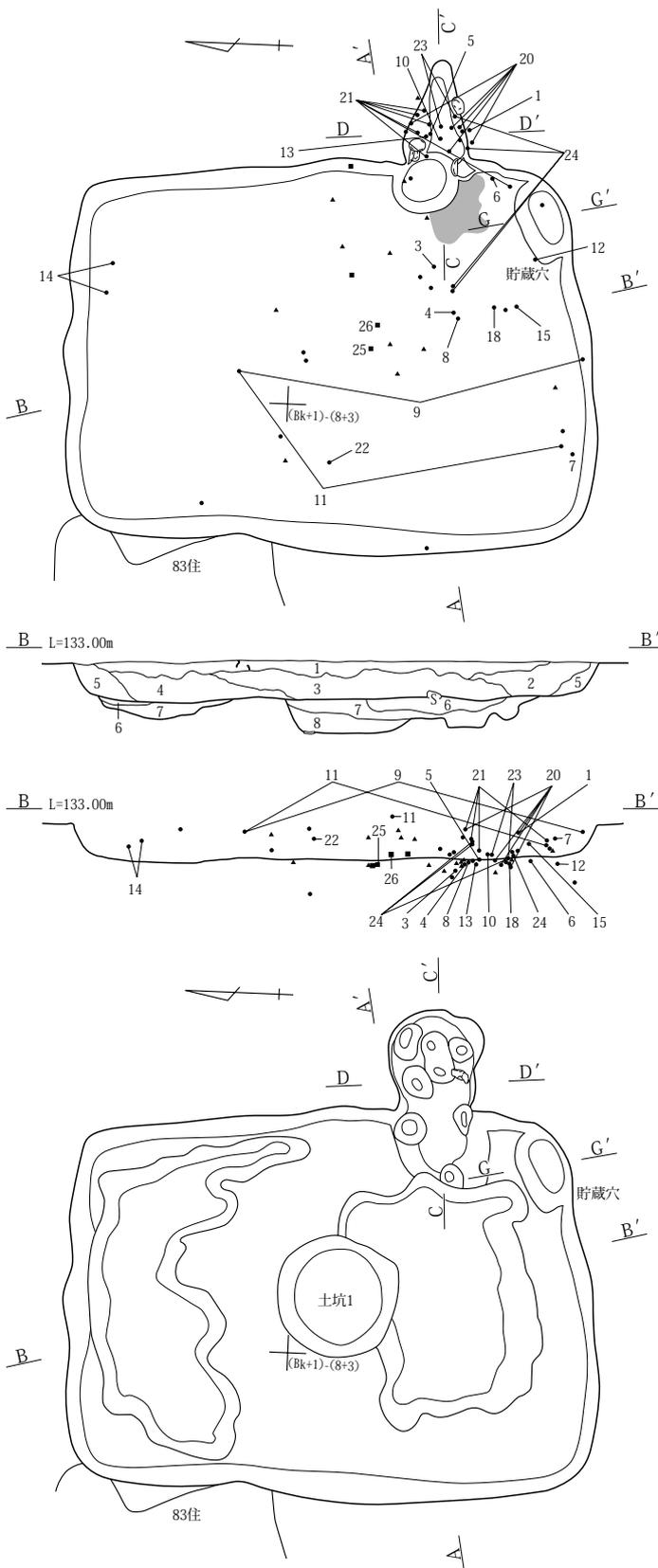


第646図 83号住居出土遺物(2)

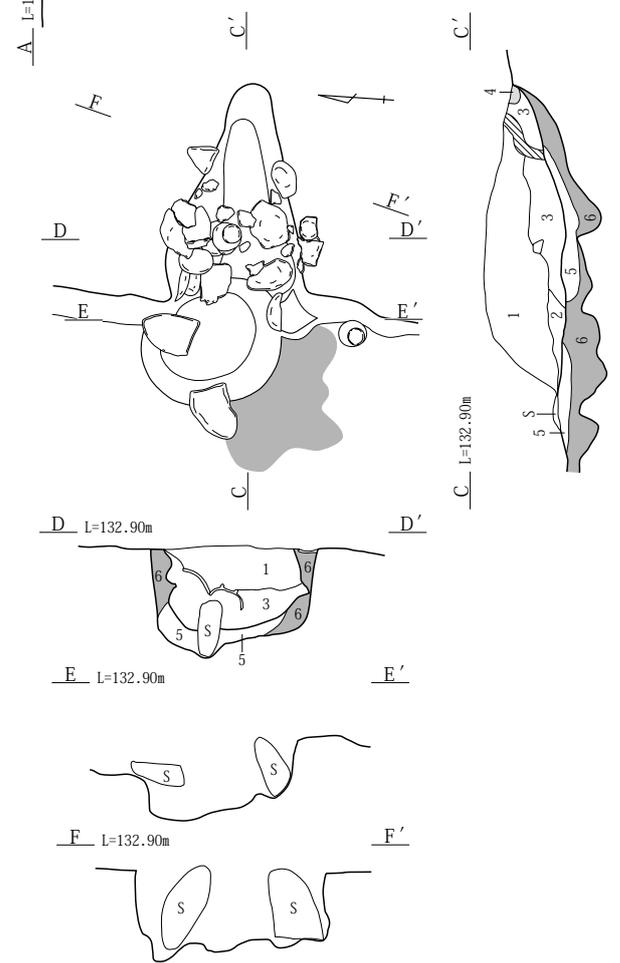
84号住居(第647～649図 P L.147・279)

位置:Bj・Bk- 8グリッド **形状:**隅丸長方形 **規模:**3.31m×4.42m **残存深度:**0.36m **主軸方位:**E-2°-N **埋没土:**VII層土主体で、ニッ岳系軽石含有量は少なく、XII層土ブロックを含む。**柱穴:**未検出 **カマド:**東壁の南東コーナー寄りに検出され、E-2°-Sの主軸となる隅丸三角形の平面形を有するカマドである。焚口部の右側壁部には構築材の礫が立った状態で検出されたのに対して、左側壁部には構築材が認められなかったが、焚口部底面から倒れたような状況で出土した礫が本来構築材であったものと思われる。燃烧部主体は壁外に設けられており、中央部のやや北に偏った位置に支脚として棒状礫が立った状態で検出され、2の土師器碗が高台を上にして支脚上部に被せたな状況で出土した。当該時期の一般的なカマド形状と比較して煙道部がやや長く検出されており、燃烧部との境両側に礫が据えられて

いた。煙道部左側壁の一部を除いて焼土の形成は顕著でなく、ブロック状の焼土が検出されている。焚口部底面には5cmほどの厚さの黒色灰層が形成されており、やや右寄りに広がっていた。こうした灰の残存状況は83号住居などでも観察されており、カマド内に溜まった灰の掻き出しが右手方向に成されていたことがわかる。**遺物:**足高高台の碗(13)、土師器碗(5)、羽釜(20・21・23)はカマド燃烧部から、須恵器坏(3・4)・碗(8)、灰釉陶器皿(15)・平瓶(24)、鉄製品2点(25・26)は、カマド北西の床面のやや上位から出土した。他に北東コーナー部から灰釉陶器碗(14)、南壁際中央から須恵器碗(9)、土師器碗(7)が出土している。**重複:**83号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物の比較から83号住居→84号住居と考えられる。**所見:**XI層土中で平面を確認したものであり、As-C及びニッ岳系軽石の含有によって容易に平面を確認することができた。壁は全周検出され、



- A-A'・B-B'
- 1 暗褐色土 As-Cを含むXI層土主体で、XII層土粒を含み、ニッ岳系軽石を少量含む。
 - 2 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石細粒を少量含む暗褐色土主体で、XII層土ブロックを多く含む。
 - 3 暗褐色土 As-Cを多く、ニッ岳系軽石粒を少量含む暗褐色土主体で、XII層土ブロックをわずかに含む。
 - 4 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土とXII層土ブロックの混土。
 - 5 黄褐色土 XII層土主体で、暗褐色土ブロックを含む。
 - 6 暗褐色土 XII層土ブロックを少量、As-Cをわずかに、炭化物粒をごくわずかに含むシルト質土。
 - 7 暗褐色土 XII層土を全体にブロック状に、As-Cをわずかに含む。シルト質土で、しまりがやや弱い。
 - 8 暗褐色土 7層に類似するが、7層よりしまりが弱い。



- C-C'・D-D'
- 1 暗褐色土 As-Cを多く、ニッ岳系軽石細粒をわずかに含むXI層土主体で、炭化物をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 As-Cをわずかに含むXI層土。
 - 3 暗褐色土 2層主体で、焼土ブロックを含む。
 - 4 赤褐色焼土
 - 5 黒褐色灰層 XII層土小ブロックをわずかに含む。
 - 6 黄褐色土 暗褐色土粒とXII層土粒の混土。

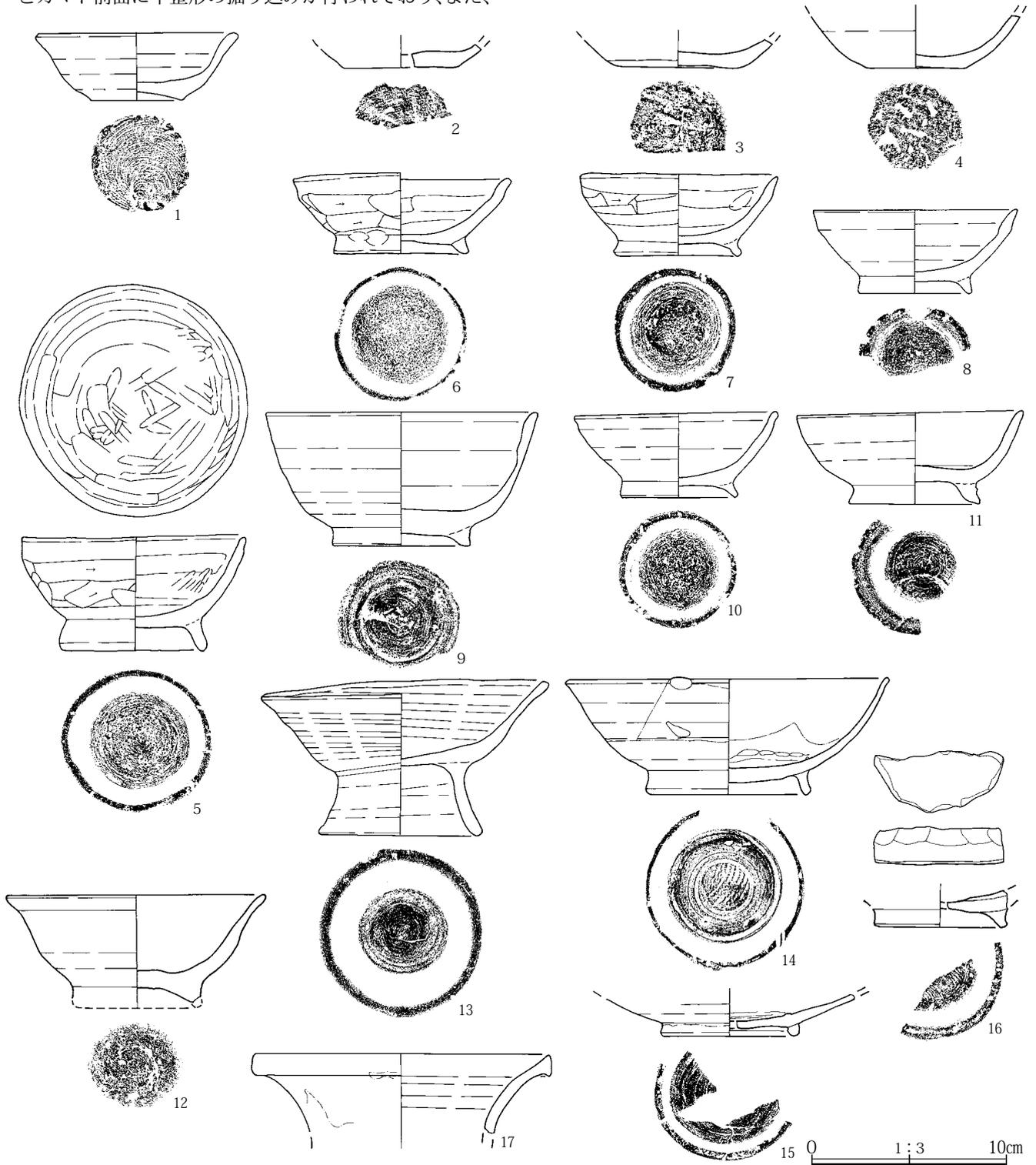
0 1:60 2m

0 1:30 1m

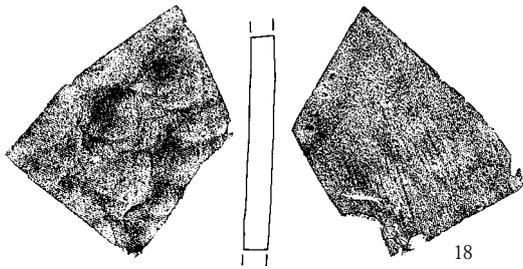
第647図 84号住居

西壁の一部に若干の崩落の乱れが認められる。床面はカマド灰面の延長、及びⅡ層土の検出面として捉えたもので、南壁寄りにわずかな段差が認められた以外は平坦に検出されている。貯蔵穴は、南東コーナー部の0.70×0.40m、深さ0.16mの楕円形を呈する壁外にオーバーハングした掘り込みと考えられる。掘り方は、北壁寄りの部分とカマド前面に不整形の掘り込みが行われており、また、

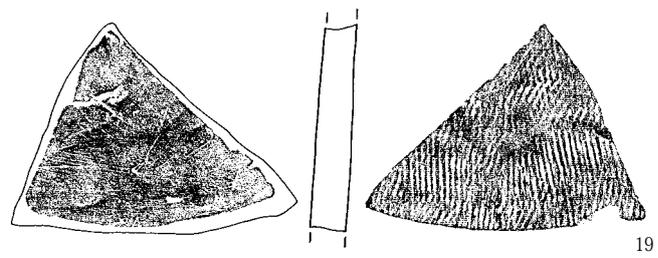
住居中央部に径0.97m、深さ0.28mの円形を呈する土坑1が認められる。特筆されるのは、24の灰釉陶器平瓶が、東に13mほど離れた位置にある3号道及びその上部遺構である47号溝から出土した破片と接合しており、84号住居と3号道が併存していた可能性が示唆されることである。 時期：10世紀後半



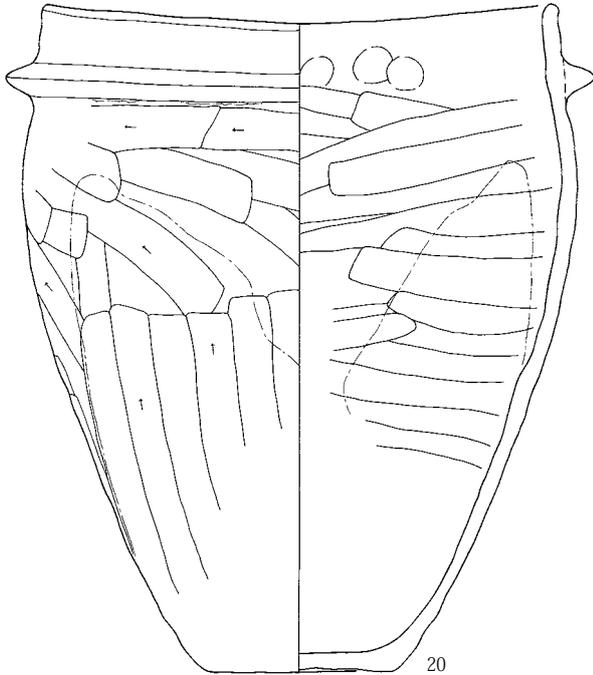
第648図 84号住居出土遺物(1)



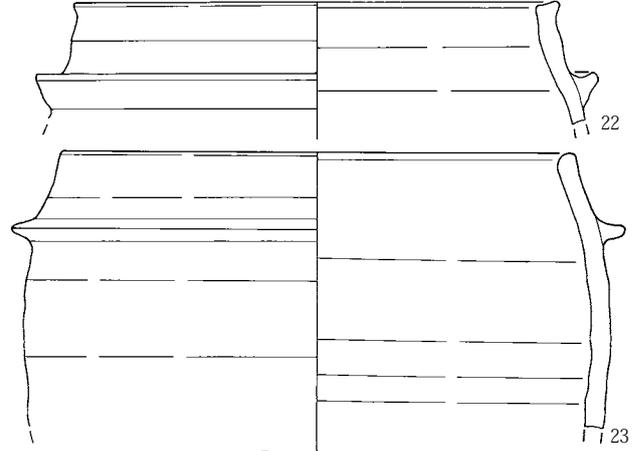
18



19

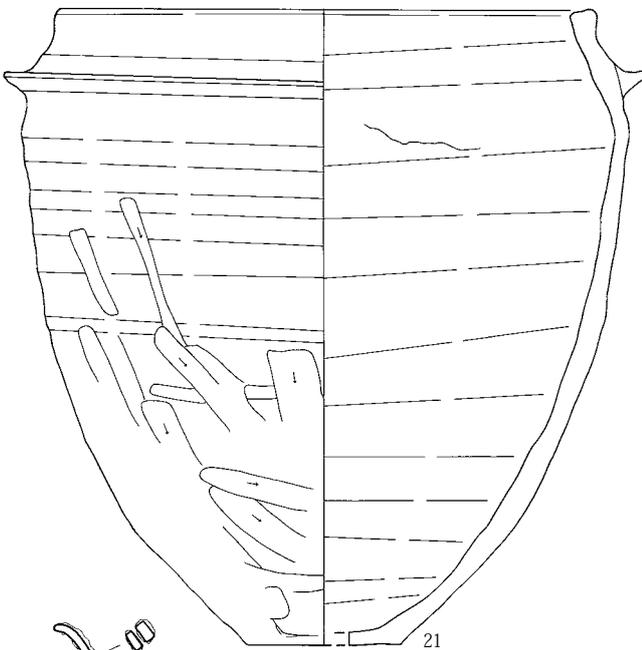


20

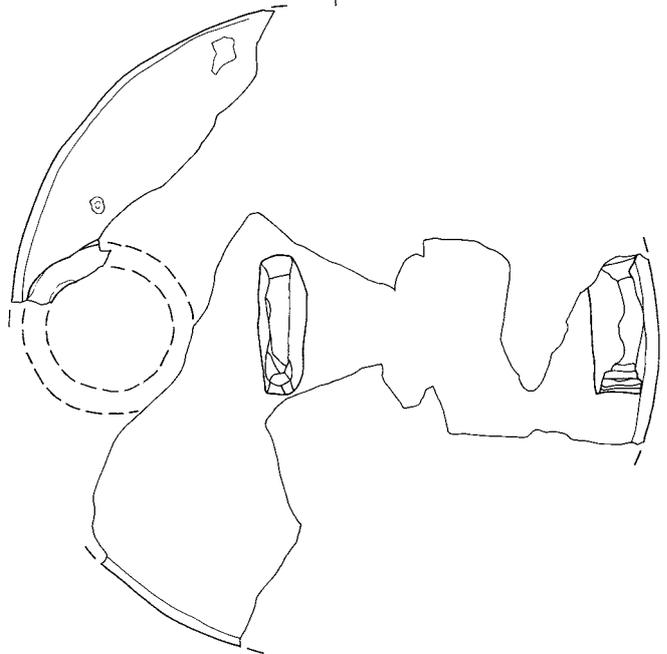


22

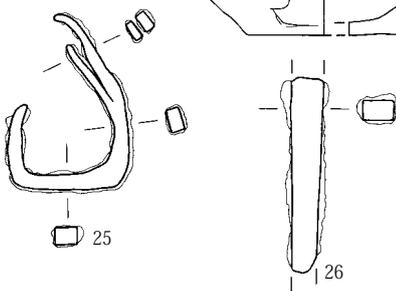
23



21



24



25

26

25・26
0 1:2 4cm

0 1:3 10cm

第649図 84号住居出土遺物(2)

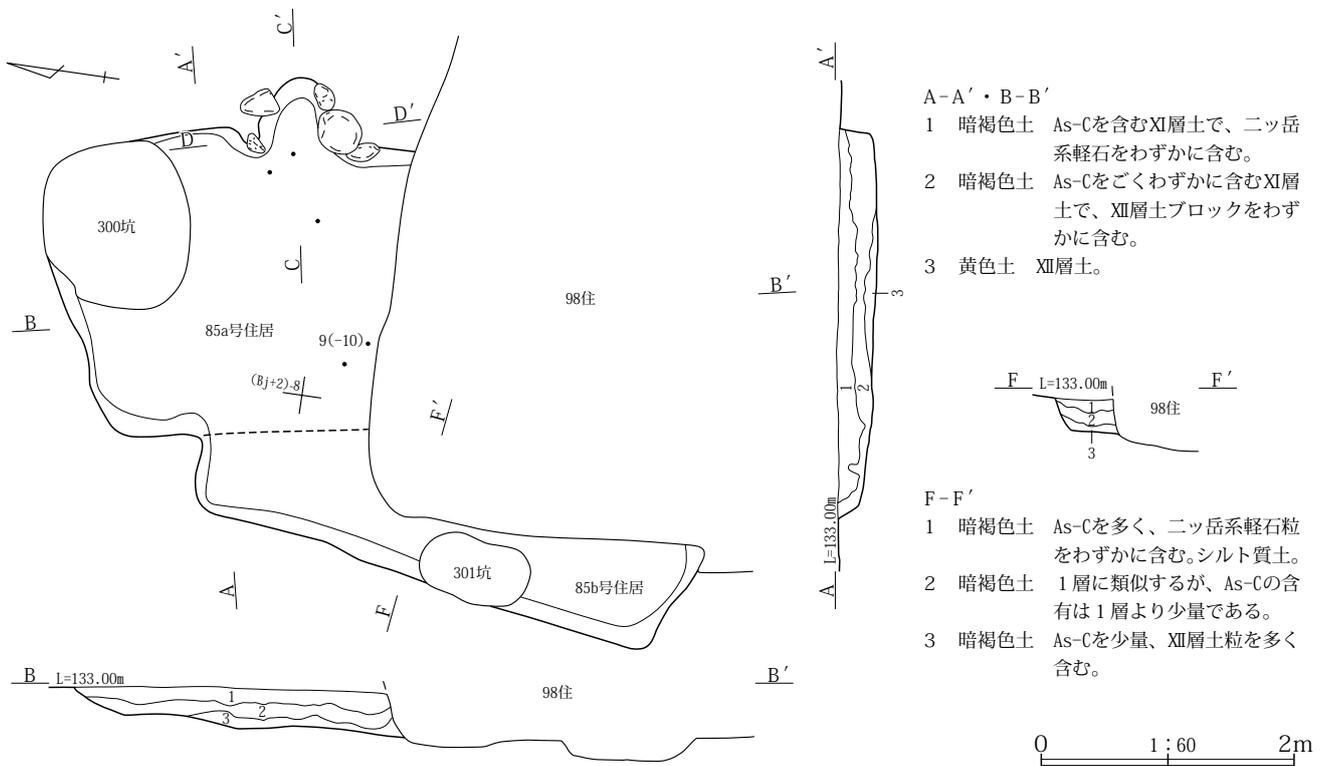
85a号住居(第650・651図 P L.147・279)

位置：Bj- 7・8グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.40m×(2.78)m 残存深度：0.23m 主軸方位：E-17°-N 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁のほぼ中央に設置されていたものと考えられ、燃烧部底面付近だけが検出されたものである。残存部から推定される主軸方位はE-5°-Nであり、燃烧部を壁外に設けた釣鐘状の平面形となるカマドと考えられる。右側壁に3カ所、左側壁に2カ所礫が検出されたが、立てられた状況が窺えるのは右側壁奥の1カ所だけであったが、他の礫についても検出された位置から推して構築材であったものと見てよいであろう。遺物：埋没土中から出土したものばかりで、カマドからの遺物出土も見られなかった。重複：85b・98・122号住居と重複し、検出状況及び残存状況から122号住居→85b号住居→85a号住居→98号住居と考えられる。また、北東コーナー部は、300号土坑との重複によって失われている。所見：ⅩⅡ層土中で平面確認を行ったところ、複数棟の重複と思われるⅦ層土の範囲を検出した。埋没土の違いから平面的に分離ができなかったため、全体を平行して調査を進めた結果、最も掘り込みが深く、土層断面で重複関係を明らかにできた98号住居は分離できたものの、残りの部

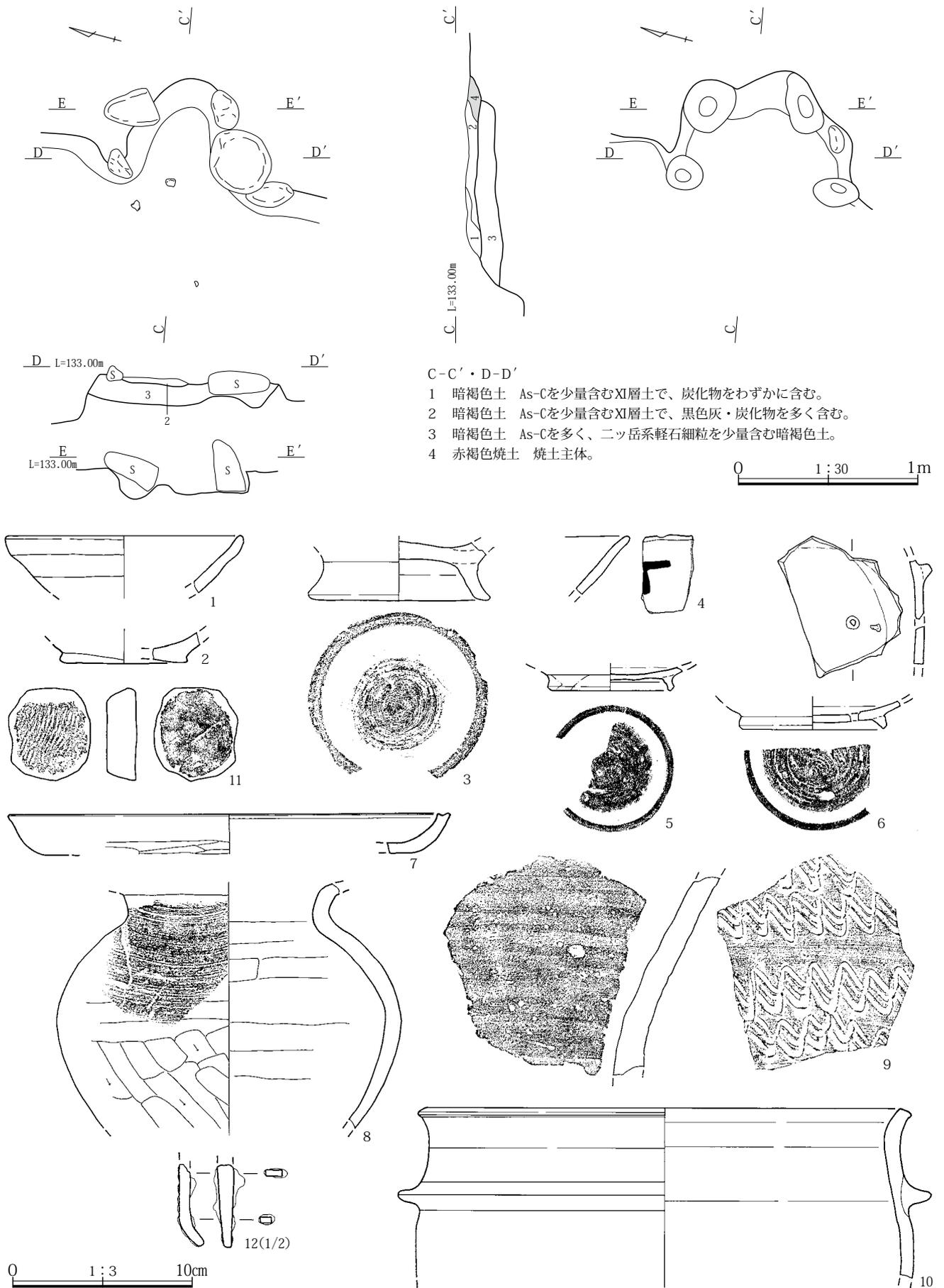
分については土層断面でも判断ができず、最終的に85号住居という1つの遺構番号のまま調査を終了した。しかし、平面形は少なくとも2棟の住居が重複している可能性が高いものであるため、整理段階でabを付して2棟に分離した。85a号住居の床面は、埋没土との相違が判断できないままに掘り下げたために、結果的に掘り過ぎてしまった。ⅩⅡ層土を直接に床面としていた可能性が高いが、土層断面においては平坦な面としては捉えることができなかった。時期：10世紀前半

85b号住居(第650図 P L.147)

位置：Bj- 7・8グリッド 形状：隅丸長方形？ 規模：(0.91)m×3.89m 残存深度：0.24m 主軸方位：E-10°-S 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：未検出 遺物：85a号住居との分離ができない。重複：85a・98・122号住居と重複しており、検出状況及び残存状況から122号住居→85b号住居→85a号住居→98号住居と考えられる。所見：土層断面において85a号住居との新旧関係を判断できなかったが、西壁の直線的な残存状況や主軸方位などから、少なくとも85a号住居の時期として想定した10世紀前半よりはやや古い遺構であることが示唆される。床面は、85a号住居同様に平坦な面としては捉えられなかった。時期：10世紀代



第650図 85a・85b号住居

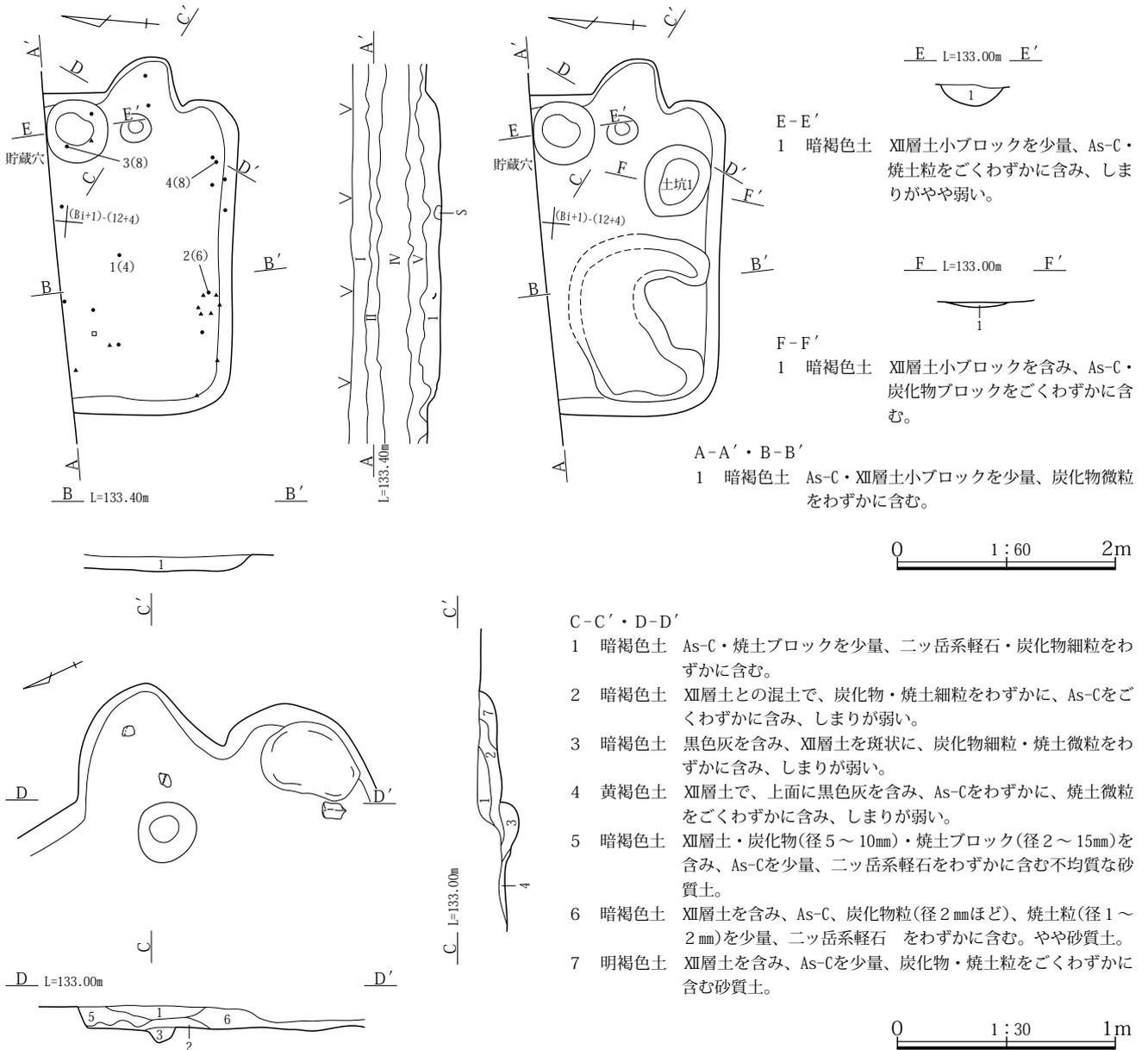


第651図 85a号住居カマド・出土遺物

86号住居(第652・653図 P L.147・148・279)

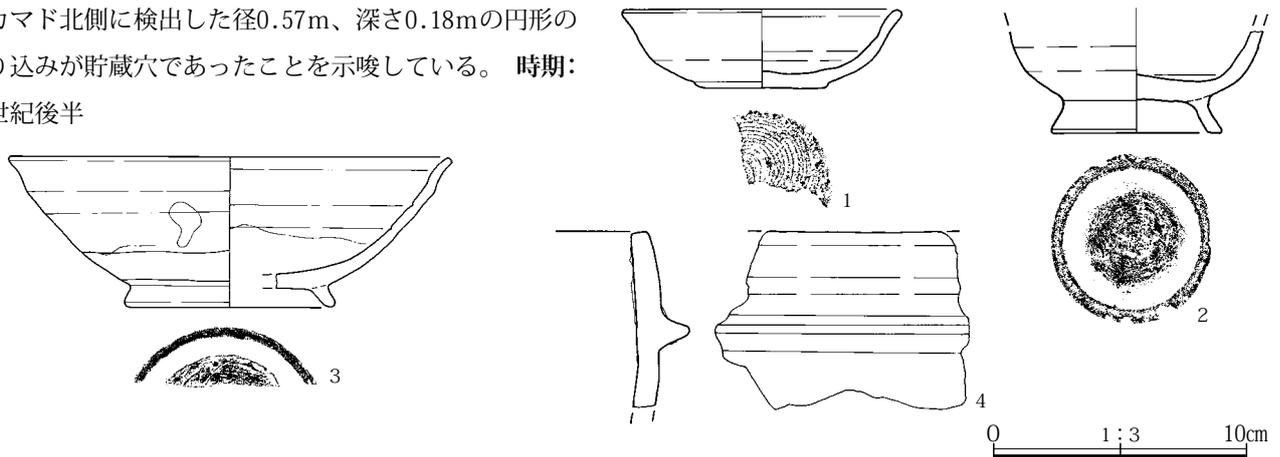
位置：Bh・Bi-12・13グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.96m×(1.76)m 残存深度：0.22m 主軸方位：E-5°-N 埋没土：Ⅶ層土主体であるが、二ツ岳系軽石の含有が明瞭ではない。柱穴：未検出 カマド：東壁の南東コーナー部寄りに検出した。屋内側に袖部の痕跡は見られないことから、主軸方位をE-5°-Sとした焼土部を壁外に設けたカマドと考えられる。残存が悪く焼土や灰層の形成も認められない。焼土部の精査を行ったが、構築材が据えられていたような痕跡もなく、構造が判然としない。遺物：遺物出土は極めて少なく、貯蔵穴と考えた掘り込みから3の灰釉陶器碗、中央部及び南壁際から須恵器環(1)・碗(2)が出土した。重複：

35・53号住居と重複しており、検出状況及び残存状況から53号住居→35号住居→86号住居と考えられる。所見：Ⅱ・Ⅲ区の調査区境に位置しており、図示したのはⅢ区で検出された部分である。Ⅱ区調査においては、53号住居と35号住居の重複部分にかかっており、新しい時期の住居であるにもかかわらず認識できなかったために、壁や床面の検出には至らなかった。Ⅲ区においては、住居の南側1/3程度を検出したものと思われ、壁の傾斜がやや緩いものの、平面形の乱れはなく土層断面にも崩落の状況は認められない。床面はほぼ平坦であり硬化面は見られない。床面の精査で、南東コーナー部に土坑1(0.70×0.59m、深さ0.14m、楕円形)が検出され、位置的に貯蔵穴にふさわしいのであるが、規模や遺物出土の状況



第652図 86号住居

はカマド北側に検出した径0.57m、深さ0.18mの円形の掘り込みが貯蔵穴であったことを示唆している。 時期：10世紀後半

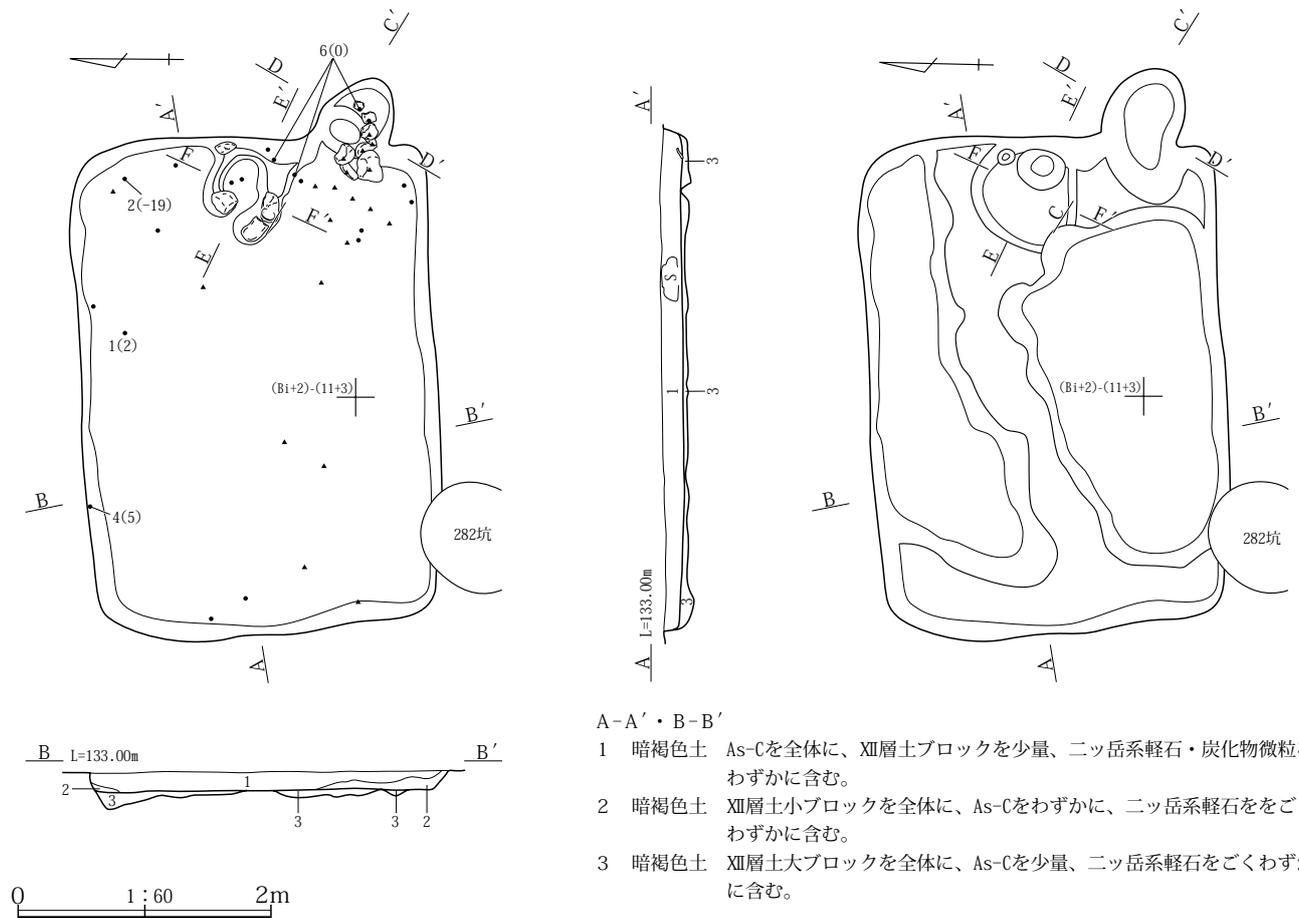


第653図 86号住居出土遺物

87号住居(第654～656図 P L.148・279)

位置:Bi-11・12グリッド 形状:隅丸長方形 規模:3.94m×2.78m 残存深度:0.16m 主軸方位: E-3°-N 埋没土: VII層土主体 柱穴: 未検出 カマド: 南東コーナー部際に礫の集中と焼土ブロックが検出されていることから、この部分がカマドと考えられる。焼土粒やブロックの分布から想定される主軸は E-30°-S であり、南壁で計測した住居主軸方位とはまったく違ってお

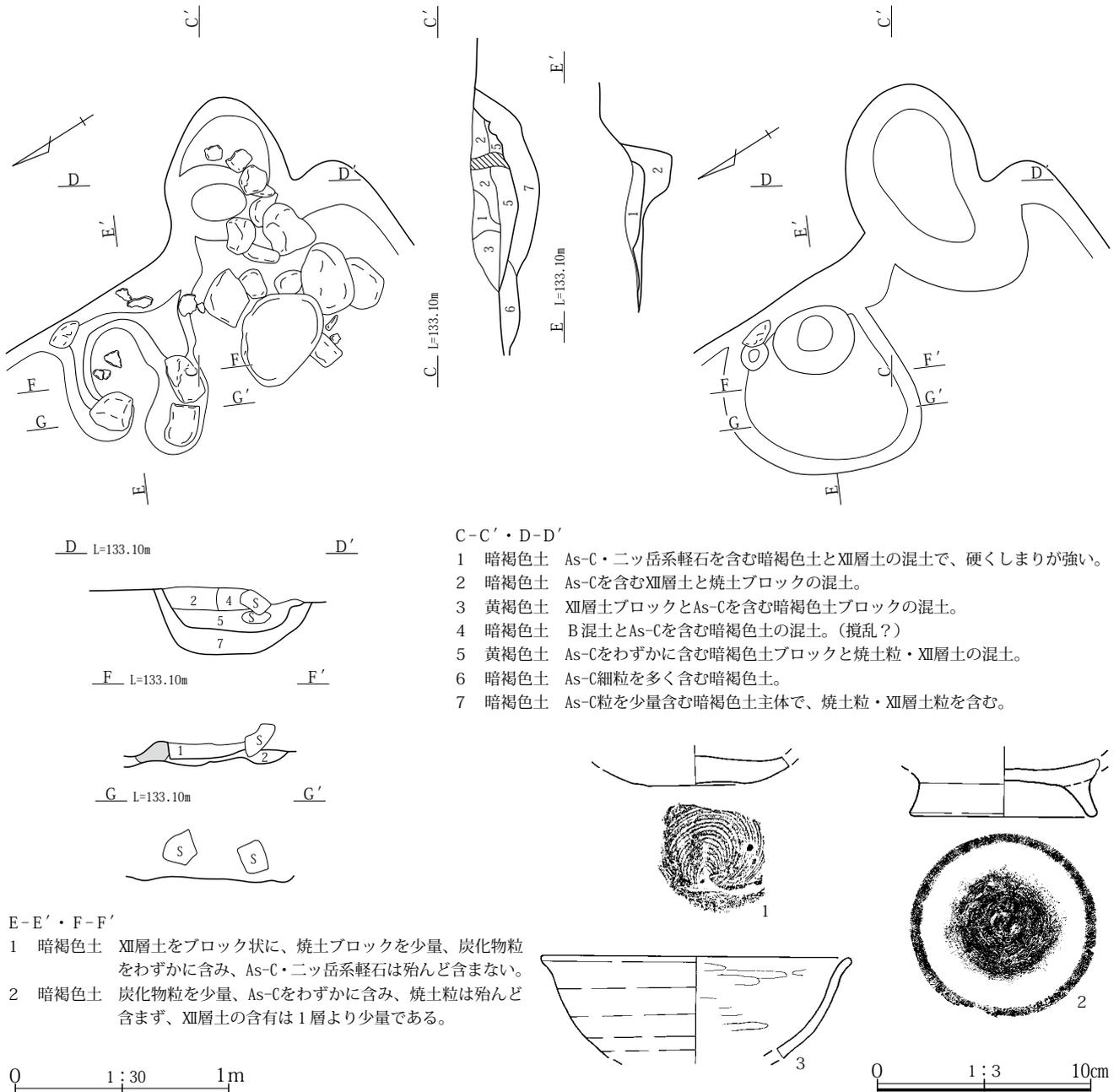
り、コーナーカマドに近い状況を呈している。集中していた礫は、不定形の角閃石安山岩や扁平礫であり、カマドの構築材とするには不向きな礫が多く、しかも被熱痕跡が見られないものである。これに対して、カマドすぐ北側にカマド袖部のような位置関係で、被熱した礫が検出されたため、調査時点ではこれもカマドの痕跡として調査を進めた。焼土や炭化物もわずかに検出されており、カマドではないと断言はできないものの、燃焼部に当た



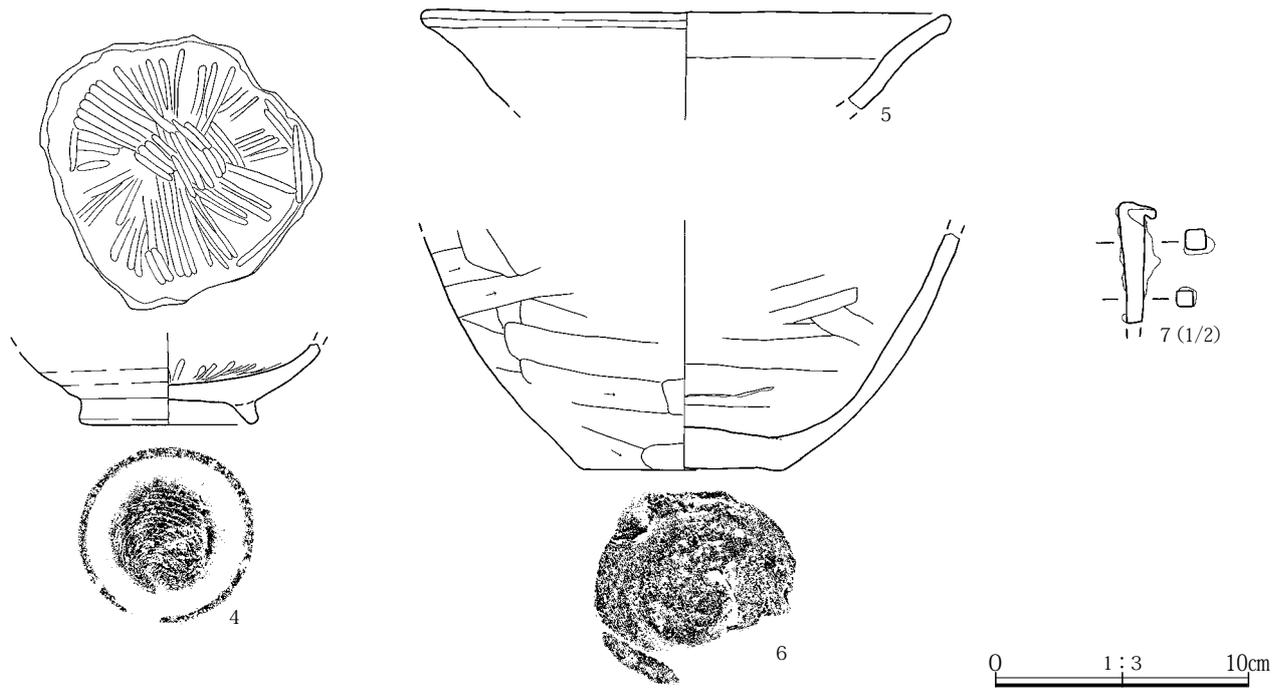
第654図 87号住居

る位置に焼土や灰はなく、しかも煙道が壁外へ延びている形跡が見られないことから、この部分はカマドではなく本来のカマドに使用されていた構築材が廃棄された場所と考えられる。 **遺物**：カマド付近を主体に礫が多量に出土しており、遺物の出土は少ない。カマド燃焼部及び北側部分から6の羽釜胴部下半が、北東コーナー部から須恵器壺(2)、北壁際から須恵器坏(1)・黒色土器壺(4)が出土した。図示しなかったが、灰釉陶器の破片が8点出土している。 **重複**：119号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から119号住居→87号住居である。 **所見**：XI層土中で平面確認を行い、VII層土の範囲として

比較的容易に確認をすることができた。壁は、282号土坑との重複で失われた部分を除いて全周検出された。壁の崩落を示すような平面形の乱れはなく、土層断面においても崩落を示すような土層堆積は観察されていない。床面は、XII層土が斑状に検出された面として捉えたもので、硬化した部分はなく南北両壁寄りに浅い不整形の掘り方の範囲が確認できた。貯蔵穴は、床面の精査及び掘り方調査においても検出されなかった。遺物の項で触れたようにカマド前面に礫が集中していたが、床面に接するような出土状況を示すものがあり、住居埋没の初期に周辺から廃棄された可能性が高い。 **時期**：10世紀後半



第655図 87号住居カマド・出土遺物(1)

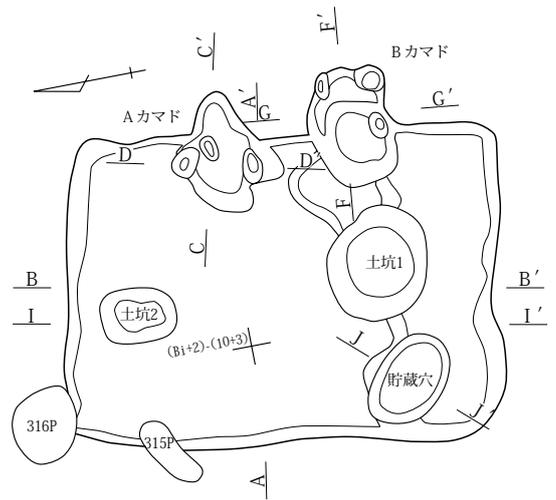
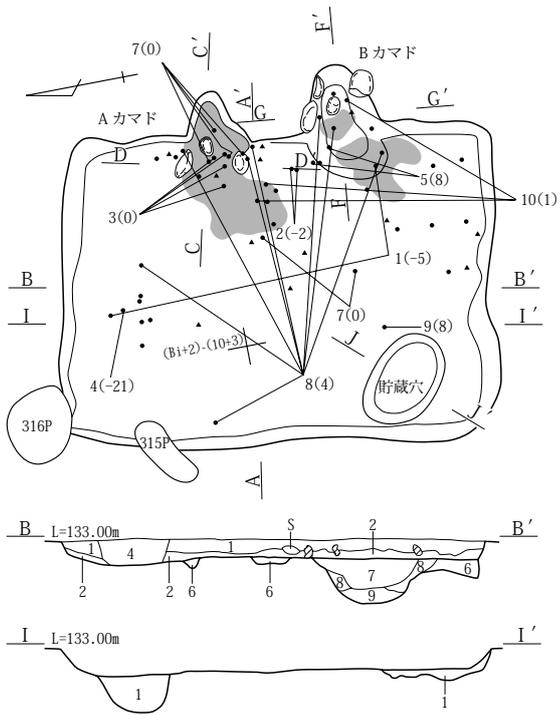


第656図 87号住居出土遺物(2)

88号住居(第657・658図 P L.148・149・280)

位置：Bi-10グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.52m×3.38m 残存深度：0.17m 主軸方位：E-8°-S 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁中央北寄りと南寄りの2カ所にカマドが検出され、土層断面の観察や平面形から2棟の住居重複とは考えられないため、新旧2時期のカマドと判断した。残存状況の良好な北寄りのカマドを最終使用と考えAカマド、前段階の南寄りのカマドをBカマドとした。Aカマドは、燃烧部の1/2ほどが屋内側に張り出した位置に構築されていたものと考えられ、両袖部の構築材となる礫と支脚の礫が屋内側から検出された。燃烧部底面から続く薄い黒色灰層は、右手屋内側に広がっていた。袖部などの位置関係から推定される主軸方位はE-4°-Sである。Bカマドも燃烧部が屋内に張り出した位置に構築されていた可能性があるが、屋内側の袖部の痕跡はなく、東壁に掘り込まれた部分の側壁構築材の礫だけが残存していた。これはカマドの造り替えに伴い、屋内側の部分を片づけたことを示していると考えられる。構築材などの位置から想定される主軸方位はE-3°-Sであり、Aカマドとほぼ一致している。Bカマドにおいても燃烧部から右手方向への灰面の広がり観察された。遺物：須恵器坏(1)、砂底の小型の土釜(5)はBカマド燃烧部、羽釜

(7)はAカマド燃烧部から、8の土師器甕は両カマドから出土した破片が接合した。特筆されるのは、Aカマド燃烧部から出土した灰釉陶器碗(3)と5mほど東に位置する103号住居埋没土中の破片が接合したことである。重複：なし 所見：Ⅸ層土中で平面確認を行ったもので、Ⅶ層土の範囲として明瞭に確認をすることができた。この時点で東壁に焼土痕跡が2カ所確認されたことから、当初は2棟の竪穴住居の重複の可能性も考えたが、平面形に破綻するところがなく、土層断面観察においても重複が確認できなかったことから、カマドの造り替えと判断した。カマドの項目で述べたように南側のBカマドが当初に構築されたもので、Aカマドが造り替えられ廃棄段階まで使用されたものと判断した。床面は、カマド灰面の検出された面の延長として確認したもので、土坑状掘り方の行われている部分以外は、Ⅻ層土が床面となっていた。貯蔵穴は、検出位置から南西コーナー部近くで検出した0.78×0.53m、深さ0.07mの楕円形の掘り込みと判断した。掘り方は、南壁寄りに径0.93×0.80m、深さ0.35mの円形を呈する土坑1、北壁寄りに0.59×0.43m、深さ0.30mの楕円形を呈する土坑2が掘削されていた他、南壁寄りの部分がわずかに掘り窪められていた。時期：10世紀後半

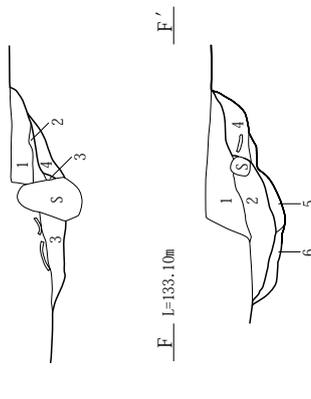
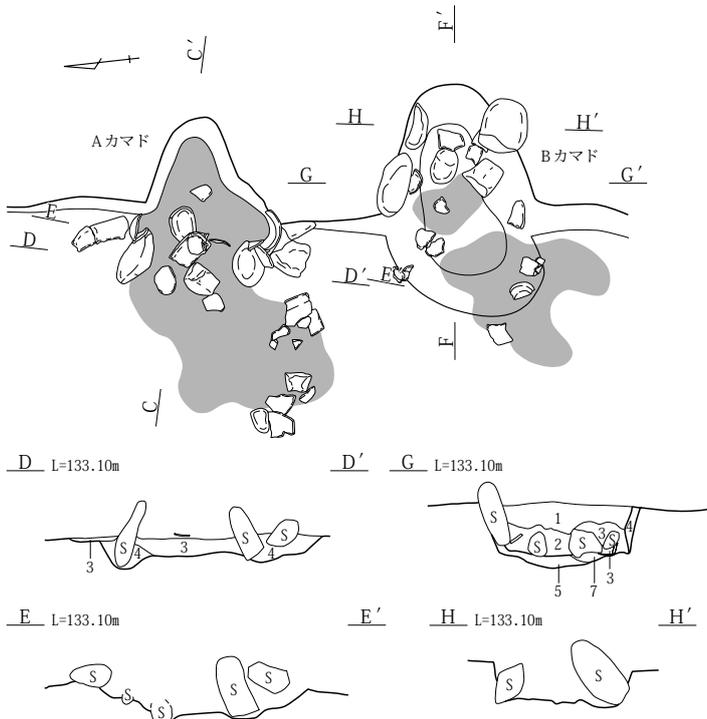


A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量、ニッ岳系軽石・炭化物微粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 XII層土小～大ブロックを含み、As-Cをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、炭化物を全体に含む。
- 4 暗褐色土 As-Cを全体に、ニッ岳軽石を少量含み、XII層土ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 XII層土をブロック状に全体に含む。
- 6 暗褐色土 XII層土との混土。しまりが弱い。
- 7 黄褐色土 XII層土で、As-Cをごくわずかに含み、しまりが弱い。
- 8 黄褐色土 XII層土主体で、暗褐色土の大ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含み、しまりが弱い。
- 9 暗褐色土 XII層土をブロック状に、As-Cをごくわずかに含み、しまりが弱い。

- I-I'
- 1 暗褐色土 As-Cをわずかに含むXI層土で、XII層土ブロックをわずかに含む。
- J-J'
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土で、炭化物粒・XII層土大粒を含む。

0 1:60 2m



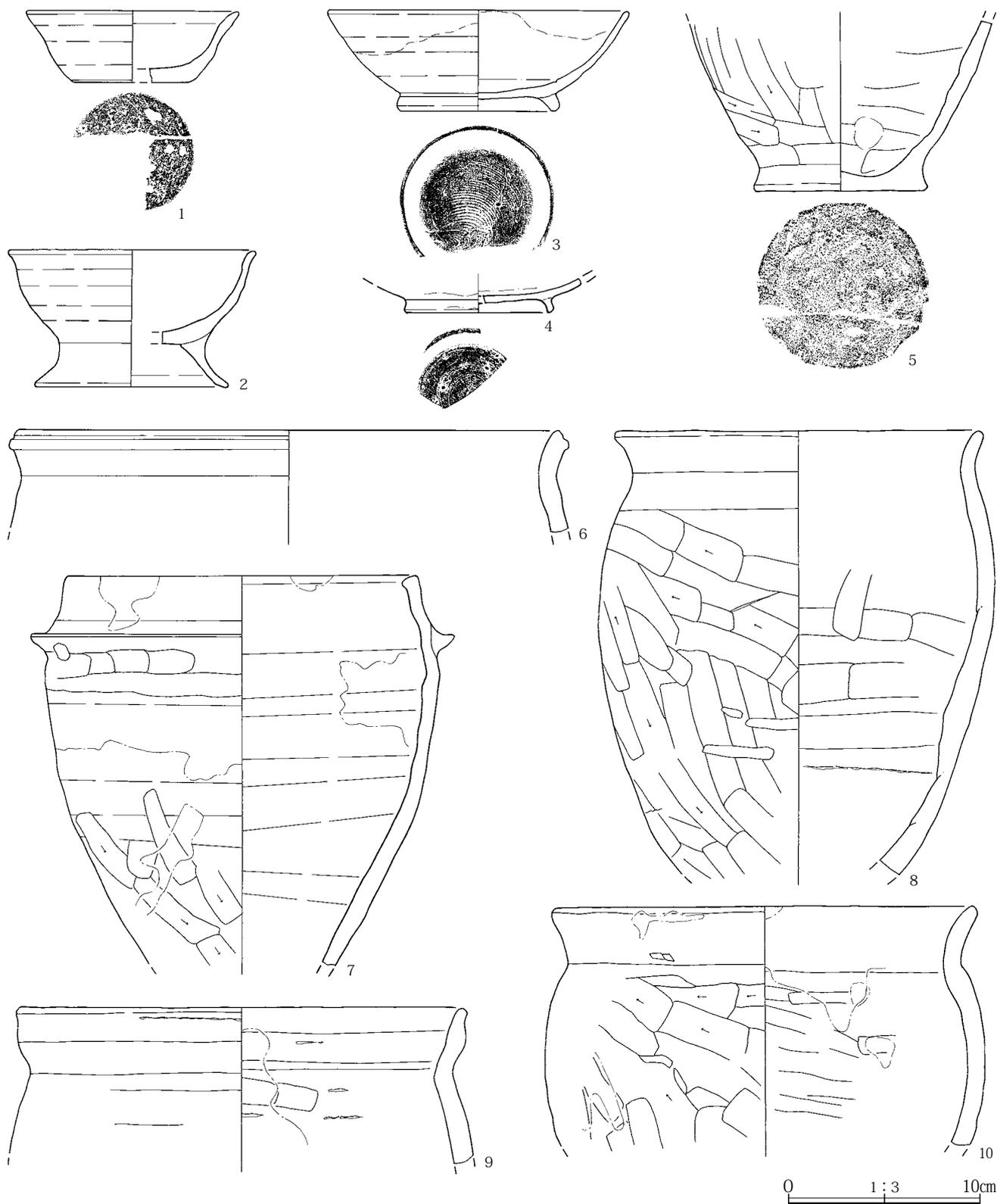
F-F'・G-G'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量、ニッ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土 As-C微粒を少量含む暗褐色土とXII層土ブロックの混土で、炭化物を多く含む。
- 3 黄褐色土 As-C微粒をわずかに含むXII層土と焼土ブロックの混土。
- 4 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cを含み、暗褐色土小ブロックを少量含む。
- 5 黄褐色土 焼土との混土で、炭化物小ブロックを含む。シルト質土で、しまりが弱い。
- 6 暗褐色土 XII層土との混土で、炭化物を層状に含むシルト質土。
- 7 暗褐色土 XII層土との混土。シルト質土で、しまりがやや弱い。

- C-C'・D-D'
- 1 黄褐色土 XII層土主体で、As-C・炭化物粒を少量含む。
 - 2 黄褐色土 XII層土主体で、炭化物・焼土粒を少量含む。
 - 3 暗褐色土 XII層土で、炭化物粒を多量に、As-Cを少量、焼土粒をわずかに含む。
 - 4 明褐色土 XII層土主体で、炭化物粒をわずかに含む。

0 1:30 1m

第657図 88号住居



第658図 88号住居出土遺物

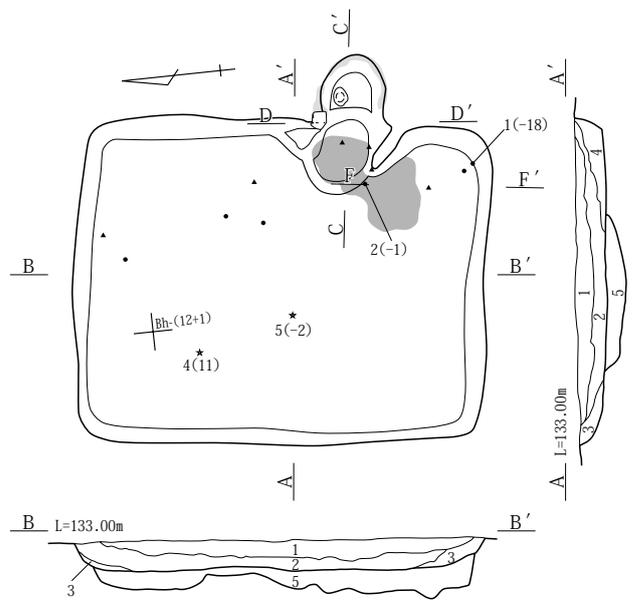
89号住居(第659・660図 P L.149・280)

位置：Bg・Bh-11・12グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.60m×3.21m 残存深度：0.24m 主軸方位：E-10°-S 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁やや南寄りの位置に検出したもので、砲弾状の

平面形を呈しており想定される主軸方位はE-14°-Sである。燃烧部は壁外に設けられたものと考えられ、燃烧部中央左寄りの位置に礫を立てた支脚が検出された。焚口部の構築材は左側に礫が1点残存していた。右屋内側から礫が2点出土しているが、構築材とするには小さ

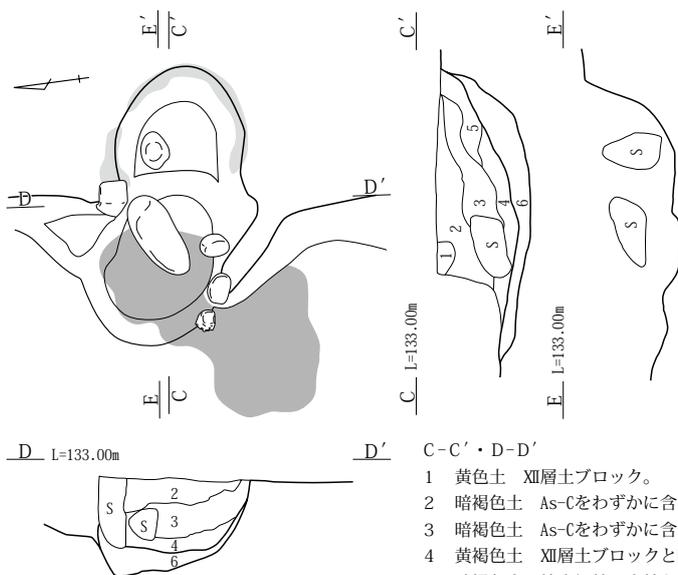
なものであり、据えられた痕跡も見られないことから構築材とは考えられない。焚口部底面から大礫が1点出土しているが、焚口部の天井とするには長さが足りないので、右側壁の構築材であった可能性がある。燃烧部は側壁から奥壁にかけて上位の焼土化が顕著であった。また、焚口部から右手方向に黒色灰層の広がりが見られる。遺物：「立？」の墨書された須恵器杯(1)は南東コーナー部の床面から18cmほど下位から、2の底部内外面に「×」の刻書された杯は中央やや東寄りの床面から出土した。土錘2点(4・5)は掘り方から出土したものであるが、重複する118号住居の遺物である可能性がある。

重複：118号住居と重複しており、検出状況から118号住居→89号住居と考えられる。 所見：XI層土中で平面確認を行ったもので、VII層土範囲として比較的容易に平面形を捉えることができた。重複する118号住居とは軽石含有量の違いがあったため分離ができた。床面はカマド灰層検出面を目安に検出していたもので、掘り方が行われていた部分以外は、XII層土が斑状に検出されたが、硬化した面は皆無であった。貯蔵穴は平面形をとらえることができなかったが、南東コーナー部の床面より下位から須恵器杯が出土しており、この位置に貯蔵穴があった可能性があるが、掘り方との区別ができず確認することができなかった。掘り方は、住居中央部から西壁南寄りの「L」字状の部分を除いて0.18mほど掘り下げられていた。 時期：10世紀前半

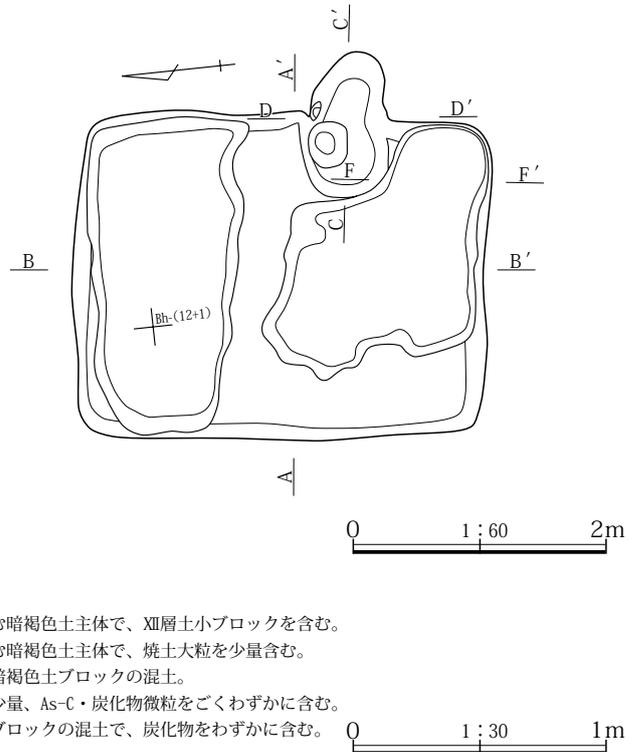


- A-A'・B-B'
- 1 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を少量、炭化物細粒・XII層土小ブロックをわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 XII層土小～大ブロックを少量、As-C・炭化物細粒をわずかに、ニッ岳系軽石をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
 - 3 暗褐色土 XII層土を斑状に、As-Cをごくわずかに含み、しまりが弱い。
 - 4 暗褐色土 2層に類似するが、As-Cをごくわずかに含み、ニッ岳系軽石を含まず、しまりがやや弱い。
 - 5 暗褐色土 XII層土を全体に、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに、炭化物粒をごくわずかに含み、しまりが弱い。

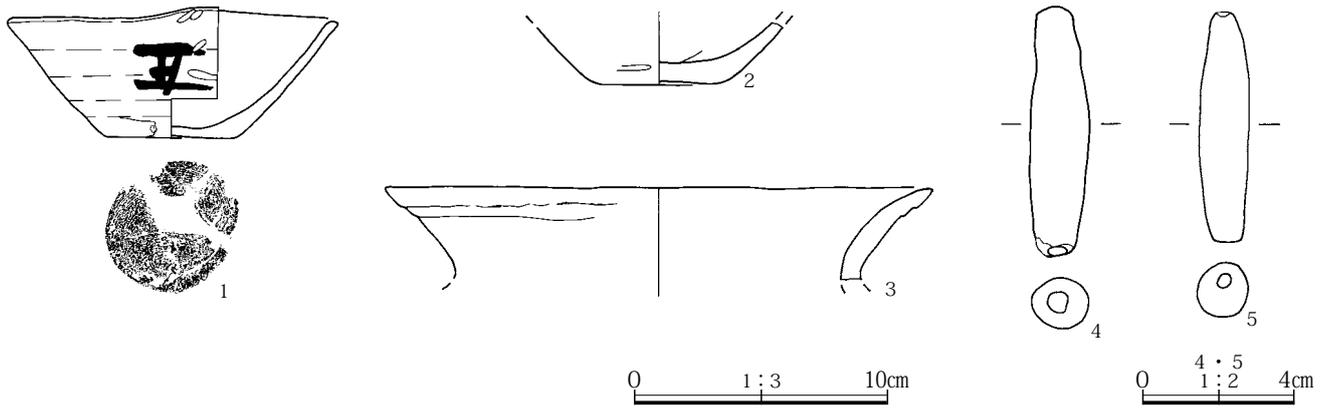
- F-F'
- 1 暗褐色土 XII層土ブロックを全体に、As-C・ニッ岳系軽石・炭化物粒をごくわずかに含むシルト質土で、しまりが弱い。



- C-C'・D-D'
- 1 黄色土 XII層土ブロック。
 - 2 暗褐色土 As-Cをわずかに含む暗褐色土主体で、XII層土小ブロックを含む。
 - 3 暗褐色土 As-Cをわずかに含む暗褐色土主体で、焼土大粒を少量含む。
 - 4 黄褐色土 XII層土ブロックと暗褐色土ブロックの混土。
 - 5 暗褐色土 焼土細粒～大粒を少量、As-C・炭化物微粒をごくわずかに含む。
 - 6 暗褐色土 暗褐色土とXII層土ブロックの混土で、炭化物をわずかに含む。



第659図 89号住居

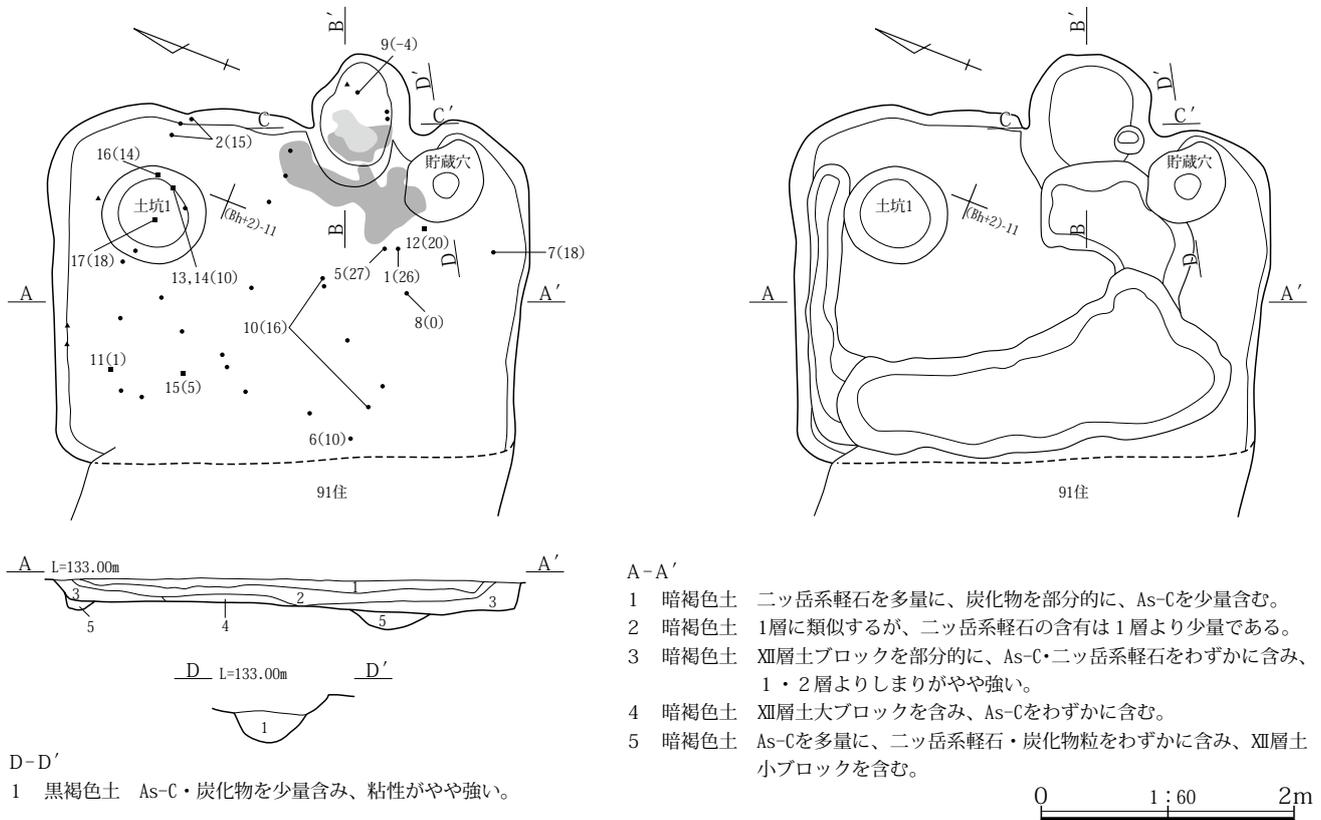


第660図 89号住居出土遺物

90号住居(第661~663図 P.L.149・150・280)

位置:Bg・Bh-10・11グリッド 形状:隅丸長方形 規模:
(2.80)m×3.75m 残存深度:0.23m 主軸方位:E-
22°-N 埋没土:Ⅶ層土主体で、二ッ岳系軽石含有量
が多い。柱穴:未検出 カマド:東壁南寄りに検出
され、やや不整な砲弾状の平面形を呈している。想定さ
れる主軸方位はE-20°-Nであり、北壁を基準に計測
した住居主軸方位と近い方位である。カマドの残存は悪
く、側壁構築材や支脚は痕跡も認められない。焼土部主
体は屋内側にわずかに張り出した位置にあったものと思
われ、この部分の底面が焼土化していたが、側壁及び奥

壁の焼土化は認められなかった。前述の焼土部底面の焼
土部分より屋内側に黒色灰層が残存していたが、他の住
居カマドに見られたような右手方向への偏りは見られな
かった。遺物:遺物出土は比較的多かったが、ほとん
どが床面よりも上位からの出土であり、埋没土中に入っ
たものである。須恵器碗(1・2・5)がカマド前面及び
東壁際北寄り、甕の破片(9)はカマド燃焼部、黒色土器
碗(6)は西壁近く、灰釉陶器碗(7)は南壁寄りからそれ
ぞれ出土した。特筆されるのは、鉄製品が目立つことで、
紡錘車(12)はカマド前面、方形の鉄製品(11)は北壁寄り、
棒状を呈する鉄製品4点(13・14・16・17)は北東コーナ-



A-A'

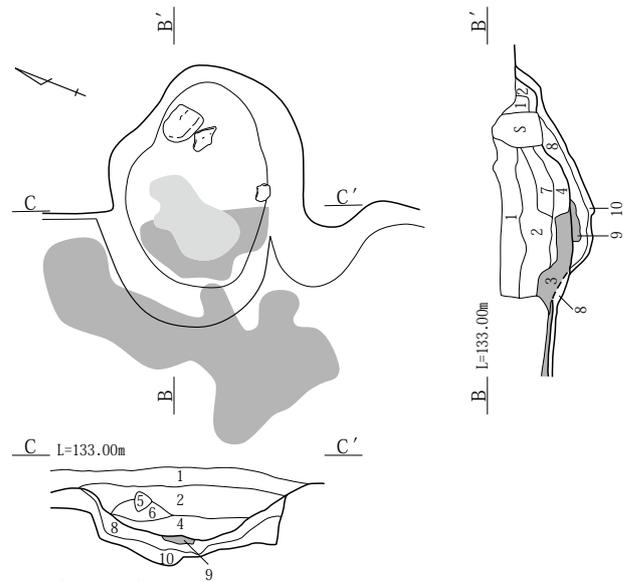
- 1 暗褐色土 ニッ岳系軽石を多量に、炭化物を部分的に、As-Cを少量含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、ニッ岳系軽石の含有は1層より少量である。
- 3 暗褐色土 XII層土ブロックを部分的に、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含み、1・2層よりしまりがやや強い。
- 4 暗褐色土 XII層土大ブロックを含み、As-Cをわずかに含む。
- 5 暗褐色土 As-Cを多量に、ニッ岳系軽石・炭化物粒をわずかに含み、XII層土小ブロックを含む。

D-D'

- 1 黒褐色土 As-C・炭化物を少量含み、粘性がやや強い。

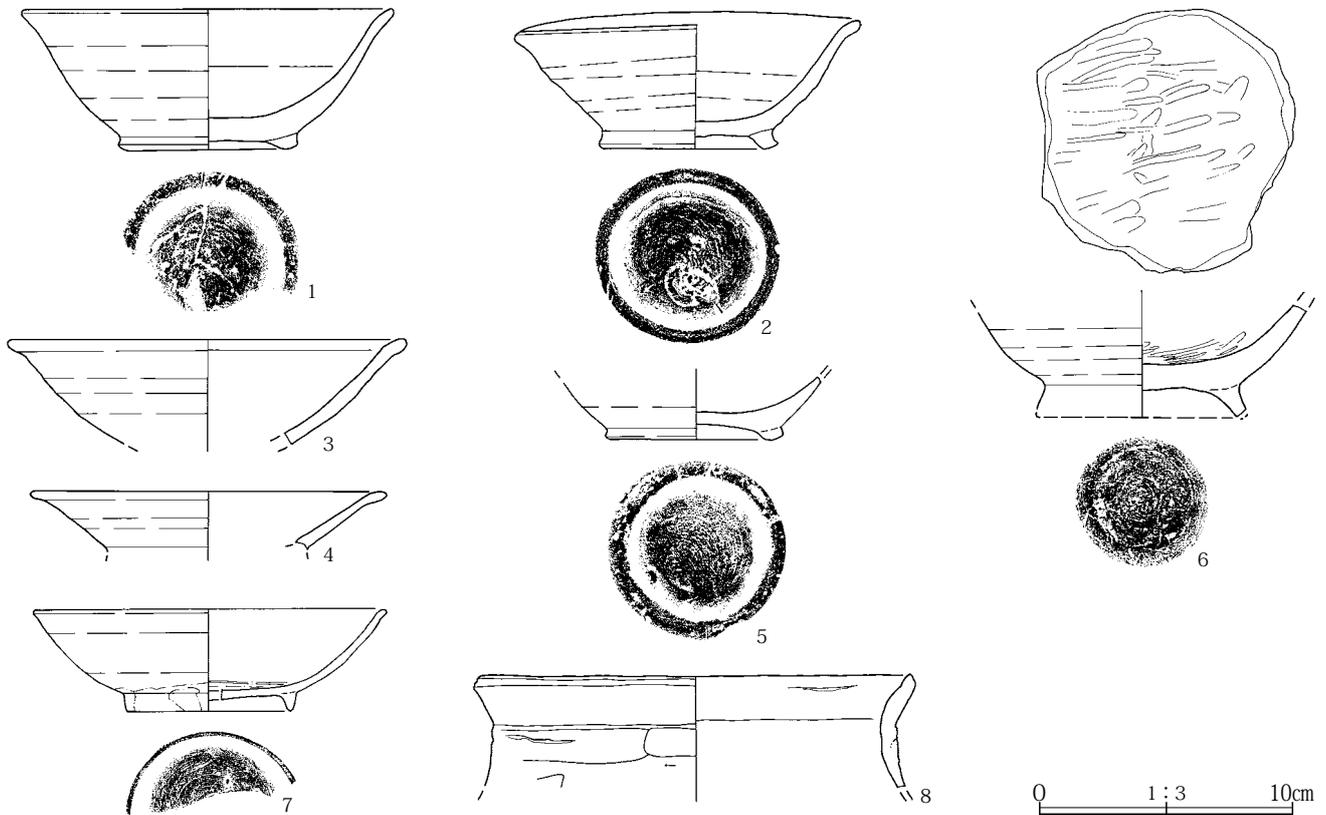
第661図 90号住居

寄りに検出した土坑1から出土した。また、10の須恵器瓶底部は、住居中央部の埋没土中及び掘り方から出土した破片と8mほど東に位置する108号住居の埋没土中から出土した破片が接合した。重複：91号住居と重複しており、検出及び残存状況から90号住居→91号住居と考えられる。所見：Ⅻ層土中で平面確認を行い、西側を南北に走る市道までの間に重複する複数の住居が確認された。壁は、91号住居との重複で失われた西壁を除いてⅫ層土の面として検出された。床面はⅫ層土が斑状に検出された面として捉えたが、南半は掘り方埋没土と住居埋没土の判別ができず、若干掘り過ぎてしまった部分がある。貯蔵穴は、南東コーナー部の径0.58m、深さ0.22mの不整形円形を呈する掘り込みと判断した。掘り方は、カマド前面から西壁寄り、北壁に沿って溝状に浅く行われていた。他に北東コーナー寄りの部分に、床面精査の段階で検出した土坑1(径0.80m、深さ0.10m、円形)も本来掘り方として掘削されたものと考えられる。遺物の項目で触れたように、90号住居と108号住居出土の須恵器瓶の破片が接合していることは、両住居がほぼ同じ時期に埋没過程にあったことを示している。時期：10世紀前半

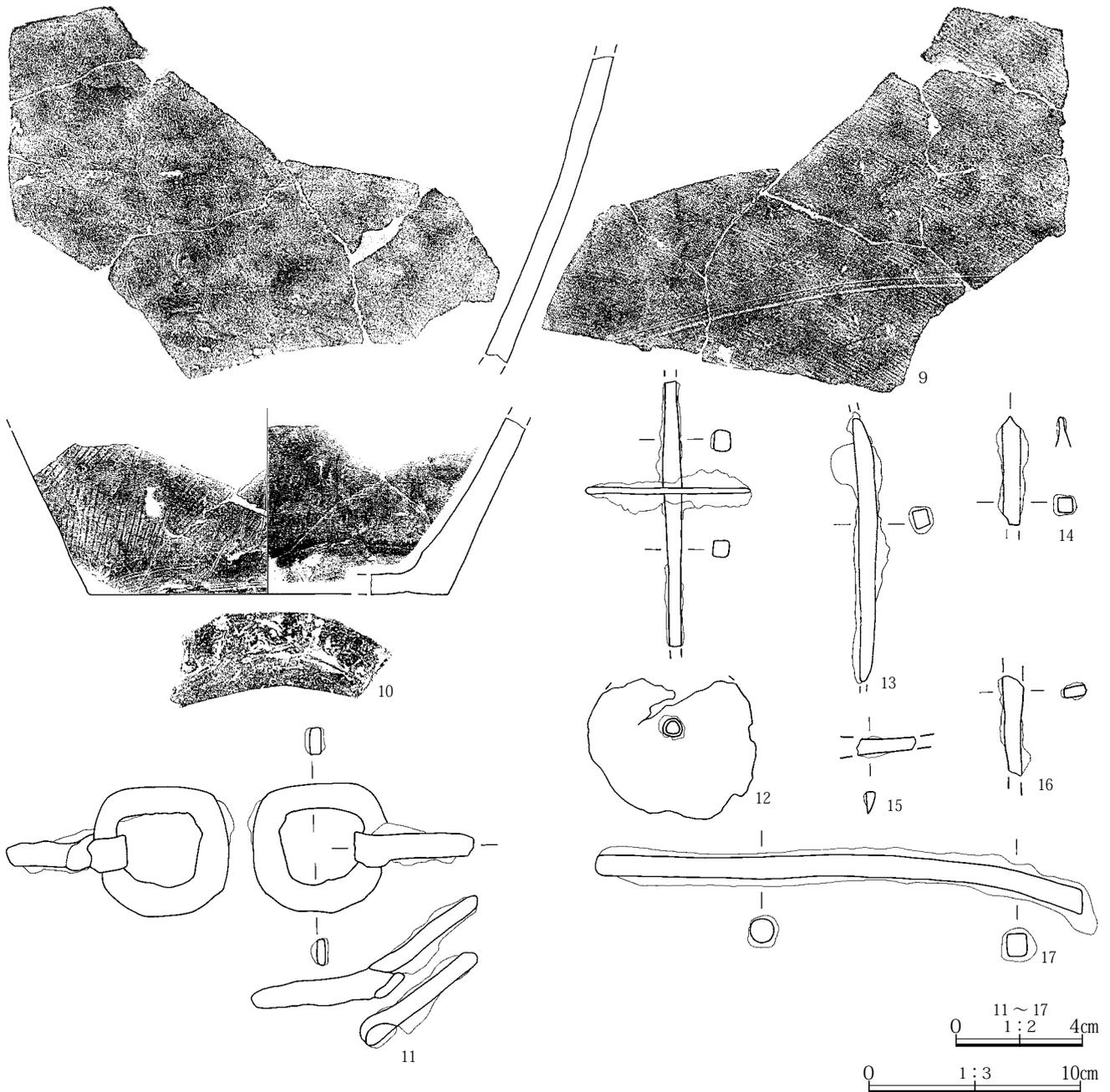


B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物・焼土粒を含む。
- 3 黒色灰層 殆んど黒色灰主体で、As-Cをわずかに含む。
- 4 褐色土 As-C・ニッ岳系軽石・軽石などは殆んど含まない。粘性が強い。
- 5 黒色土 黒色土ブロックで、焼土粒を含む。
- 6 褐色土 焼土粒で構成された層で、軽石は殆んど含まない。
- 7 暗褐色土 2層に類似するが、炭化物・焼土粒の含有は2層より多量である。
- 8 暗褐色土 炭化物をわずかに、As-Cをごくわずかに含む。
- 9 赤褐色焼土 焼土主体で、6層よりも粘性が強い。
- 10 黄褐色土 軽石などは含まない。シルト質土。



第662図 90号住居カマド・出土遺物(1)



第663図 90号住居出土遺物(2)

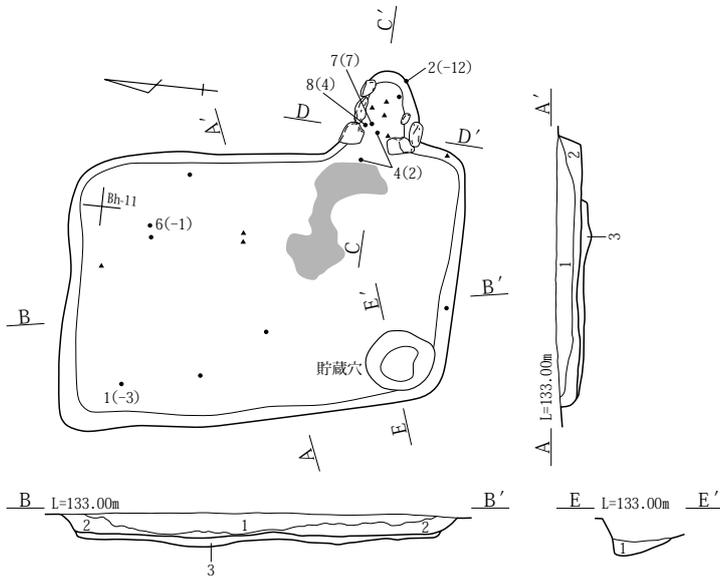
91号住居(第664・665図 P L.150・280)

位置: Bg・Bh-10・11グリッド 形状: 隅丸台形 規模: 1.96~2.15m×3.07m 残存深度: 0.17m 主軸方位: E-6°-N 埋没土: VII層土主体で、As-C含有量がやや多い。柱穴: 未検出 カマド: 東壁の南東コーナー部に寄り偏った位置に検出された。燃烧部を壁外に設けた砲弾状の平面形を呈し、左側壁に3カ所、右側壁に2カ所構築材の礫が残存していたが、右側壁の屋内側に位置する構築材は、燃烧部側に傾斜しており、原位置を保っているとは考えられない。構築材の位置から想定した主軸方位はE-4°-Nであり、東壁で計測した住居

主軸方位に近い方位である。燃烧部からは直立したような状態で出土した礫もあるが、底面に達しておらず据えられた痕跡もないことから支脚とはしなかった。燃烧部中央のやや屋内寄りの底面の一角に5cmほどの厚さの焼土が形成されていた。燃烧部に灰層は残存していなかったが、カマド焚口部前面から左手方向に長く薄い黑色灰層の広がりが認められた。遺物: 遺物出土はごくわずかで、カマド燃烧部から出土した黑色土器碗(4)・羽釜(7・8)以外は、床面のやや上位から出土した。重複: 90・102号住居と重複しており、検出状況及び残存状況から90・102号住居→91号住居と考えられる。所見:

XI層土中で平面確認を行ったもので、南壁よりも北壁がわずかに長い逆台形状を呈している。壁は他住居との重複部分を除いてXI層土の面として明確に検出することができた。床面も同様で、XI層土の面として捉えられた

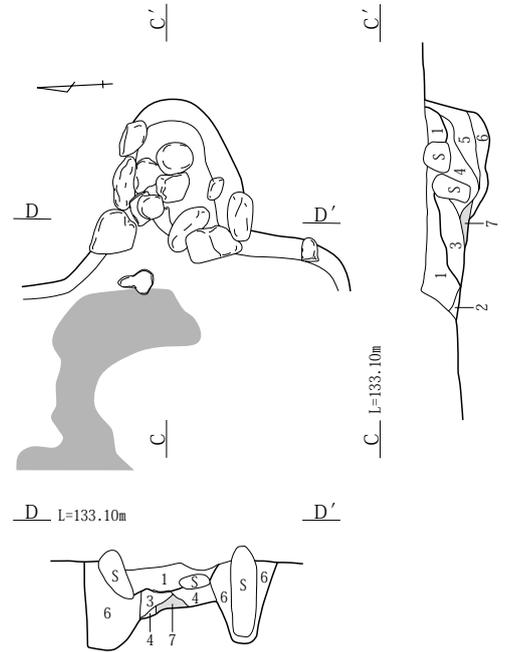
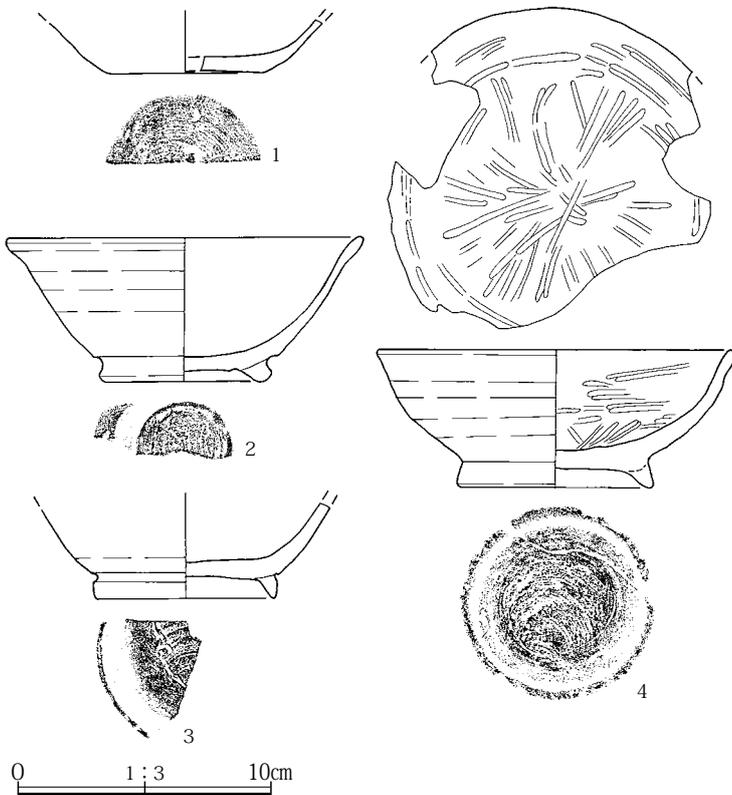
もので、カマド前面の黒色灰層も床面と同一面に検出されている。貯蔵穴は、床面検出時点で南西コーナー部に明瞭に検出されたもので、径0.48m、深さ0.12mの不整円形を呈する。 時期：10世紀前半



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを全体に、ニッ岳系軽石を少量、炭化物細粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 XI層土をブロック状に、As-Cを少量、ニッ岳系軽石・炭化物細粒をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 As-Cをわずかに含むXI層土とXI層土小ブロックの混土。

0 1:60 2m

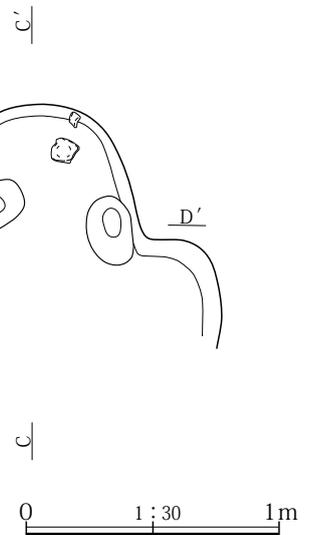


C-C'・D-D'

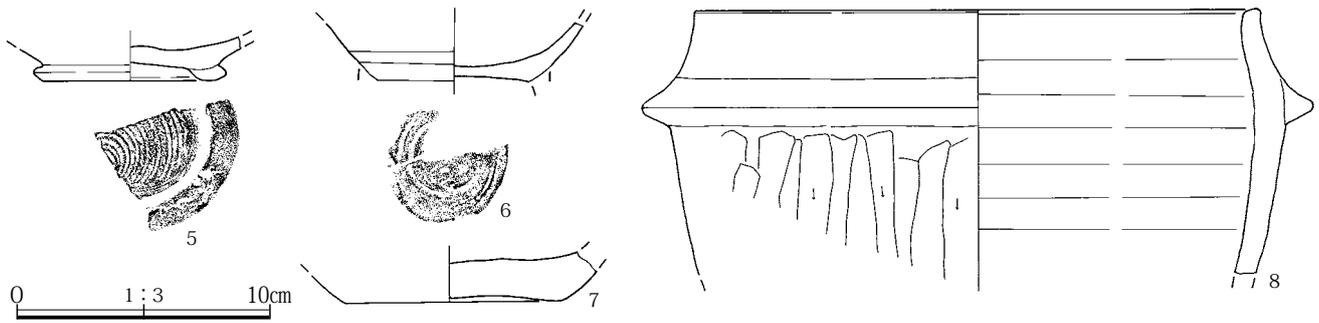
- 1 暗褐色土 As-C・炭化物粒を少量含む。しまりが弱い。
- 2 黄色土 XI層土ブロック。
- 3 赤褐色焼土 焼土小ブロックと炭化物・暗褐色土小ブロック・XI層土大粒の混土。
- 4 暗褐色土 As-Cを比較的多く含む暗褐色土主体で、黒色灰・焼土粒を多く、炭化物細粒を少量含む。
- 5 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、XI層土を多く含む。
- 6 暗褐色土 As-Cを多く含むXI層土で、XI層土粒を多く含む。
- 7 赤褐色焼土

E-E'

- 1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、炭化物をわずかに含む。



第664図 91号住居・出土遺物(1)

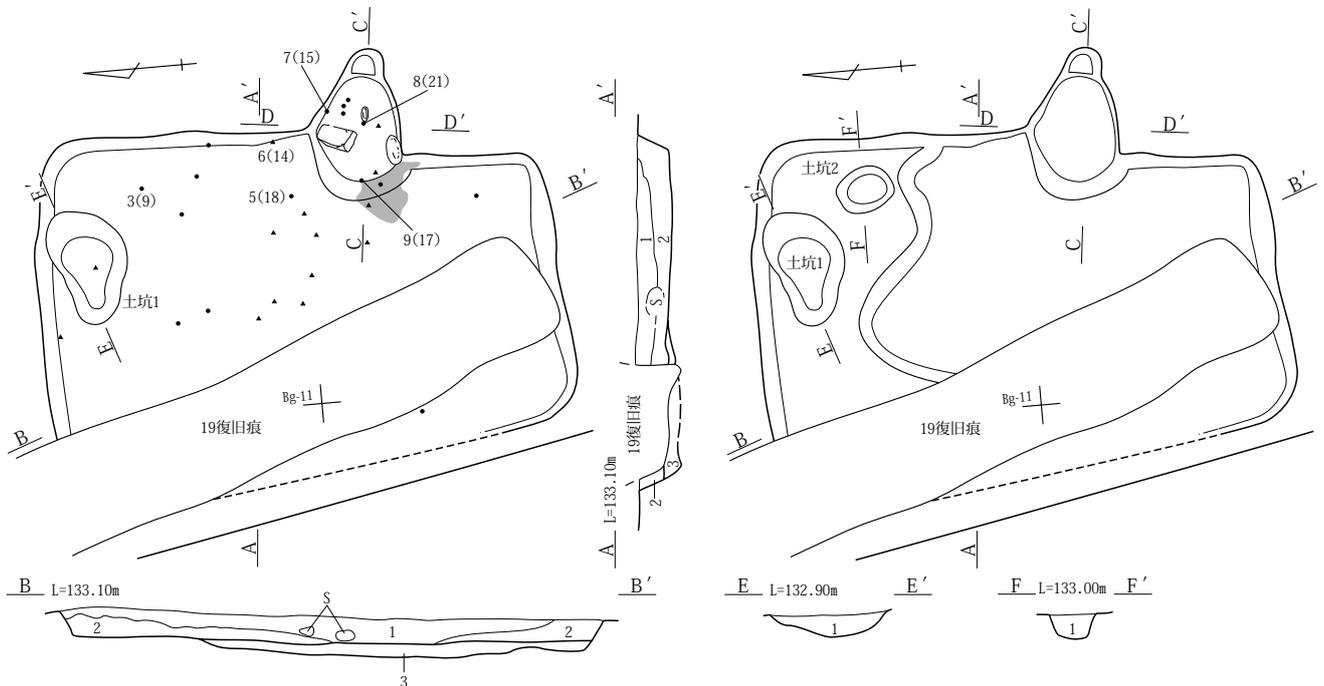


第665図 91号住居出土遺物(2)

92号住居(第666・667図 P L.150・151・280)

位置：Bf・Bg-10・11グリッド 形状：隅丸長方形？
 規模：2.20m×4.10m 残存深度：0.25m 主軸方位：
 E-1°-S 埋没土：Ⅶ層土主体で、下層にⅫ層土ブ
 ロックを含む。 柱穴：未検出 カマド：壁面の焼土化
 が比較的顕著であったため煙道部が短く突出する釣鐘状
 の平面形が良好に確認された。カマド構築材は、焚口部
 両側壁部だけに検出された。右側壁部の構築材は大形礫
 で原位置を保っているのに対して、左側壁部の構築材は
 角柱状の截石で、中央に向かって倒れかけていた。燃烧
 部中央のわずかに右寄りの位置から礫を立てた支脚が検
 出された。構築材の燃烧部側及び支脚の屋内側には煤の

附着や被熱による変色が認められた。燃烧部底面直上
 は最大で5cmほどの厚さの黒色灰を多量に含む層が形成
 され、黒色灰の薄い純層が焚口部の右寄りの位置に残存
 した。構築材と煙道部との位置から想定される主軸方位
 はE-9°-Sであり、北壁で計測した住居主軸方位よ
 りもわずかに南に振れている。 遺物：羽釜(8)及び甑
 (9)がカマド燃烧部、須恵器鉢(6)は東壁際の床面から
 わずかに上位から出土した。また、灰釉陶器の破片が4
 点、鎌と見られる鉄製品が出土しているが、ほとんどが
 埋没土中の出土である。遺物出土で特筆されるのは、緑
 釉陶器破片(4)が1点出土したこと、及びカマド前面に
 扁平な礫が集中して出土したことである。 重複：102



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、ニッ岳系軽石細粒をわずかに含み、粘性がやや強い。
- 2 暗褐色土 As-Cを多量に、ニッ岳系軽石細粒をわずかに含み、Ⅻ層土小ブロック・炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土とⅫ層土ブロックの混土。

E-E'

- 1 暗褐色土 As-Cを含むⅪ層土主体で、Ⅻ層土ブロックを多く含む。

F-F'

- 1 暗褐色土 As-Cをわずかに含む暗褐色土主体で、黒色灰・炭化物粒・焼土粒を少量含む。

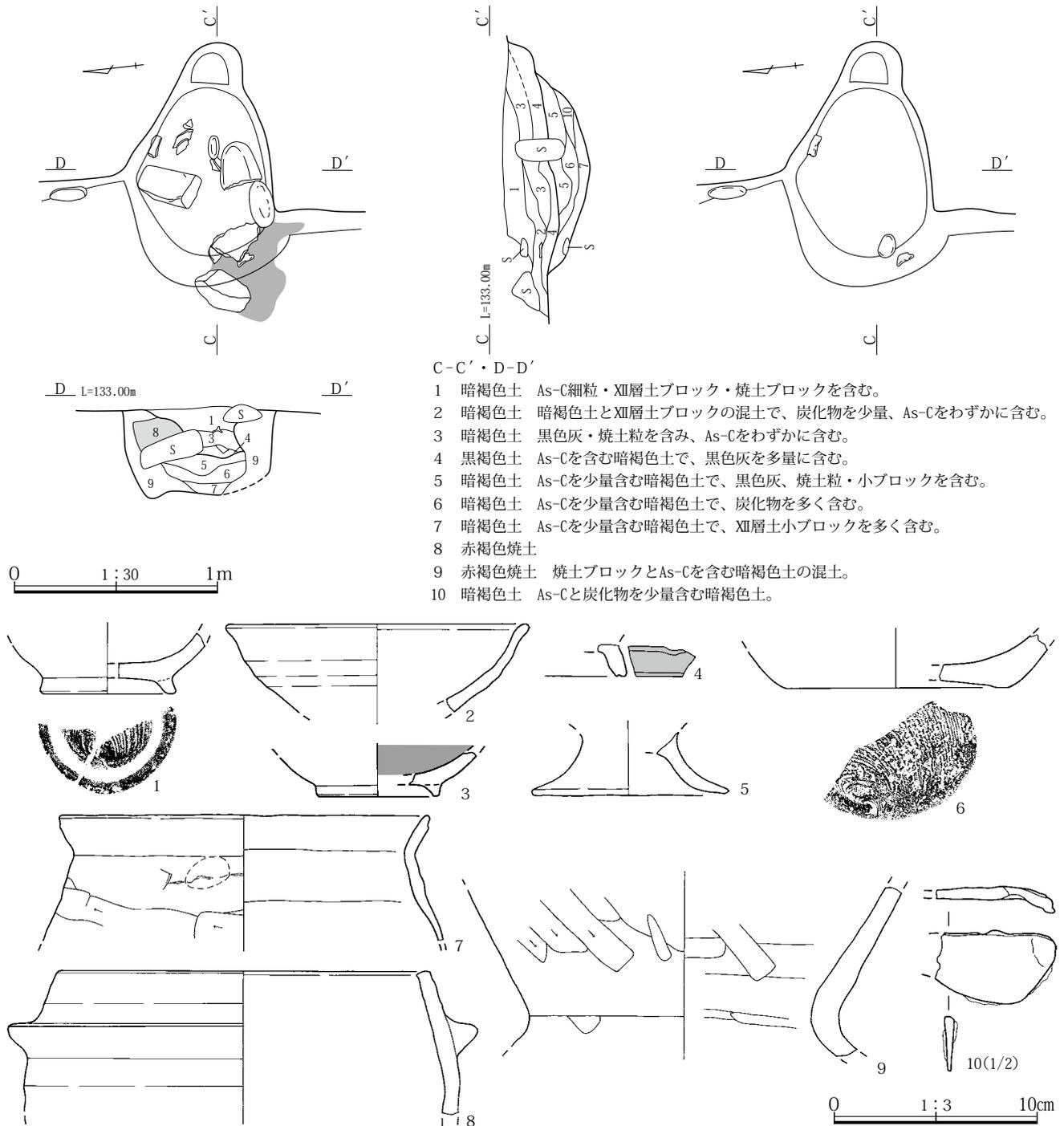
0 1:60 2m

第666図 92号住居

号住居と重複しており、検出状況及び残存状況から102号住居→92号住居と考えられる。所見：XI層土中で平面確認を行い、東側については埋没土の違いから重複する102号住居との分離が比較的容易であったが、西側は19号復旧痕との重複のためか西壁の位置を捉えることができなかった。床面は、掘り方の行われていない北側部分で、XII層土が検出された面として捉えたもので、それより南側は、全体に10cmほどの深さの掘り方があり、VII層土とXII層土ブロックの混土によって床面が構築されてい

た。北壁寄りに土坑1(0.93×0.59m、深さ0.17m、不整楕円形)を、東壁寄りに土坑2(0.43×0.35m、深さ0.20m、楕円形)をそれぞれ検出した。積極的な根拠はないが掘り込みの整形な東寄りの土坑2が貯蔵穴の可能性があると考えている。カマド前面の礫の集中については、他にも類例があったように、住居の埋没過程の比較的早い段階に周辺から廃棄されたものと見てよいであろう。

時期：10世紀前半

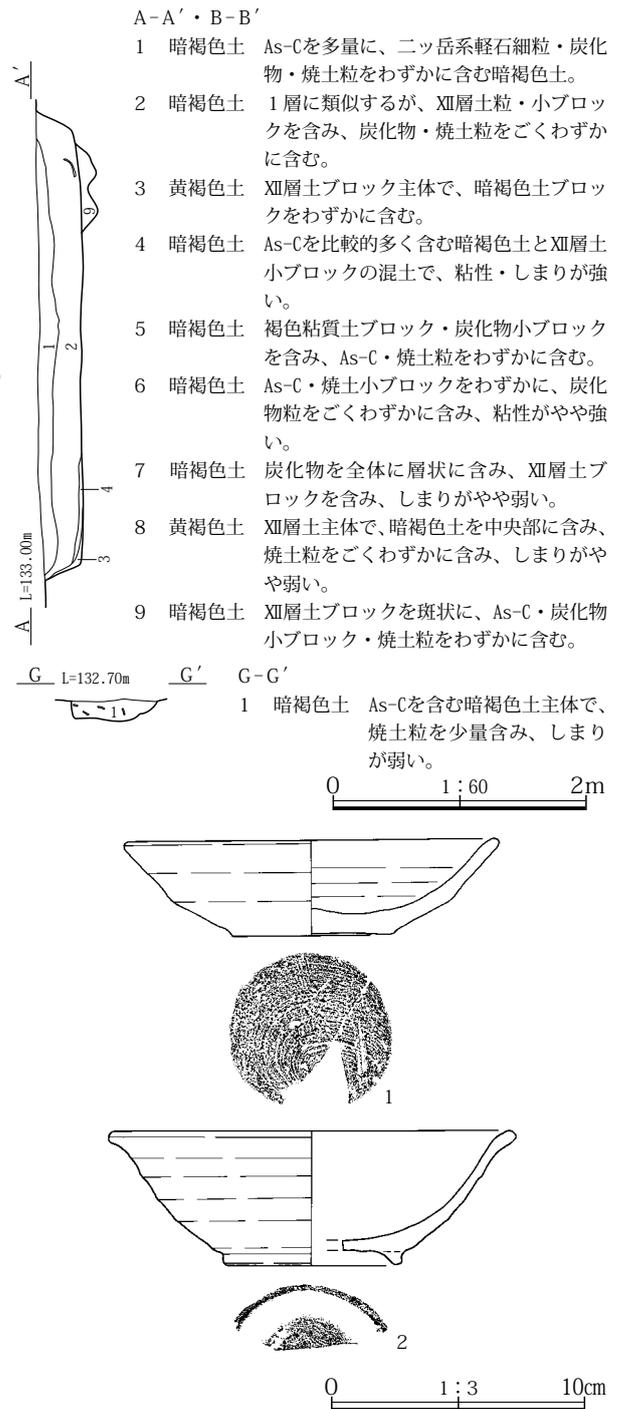
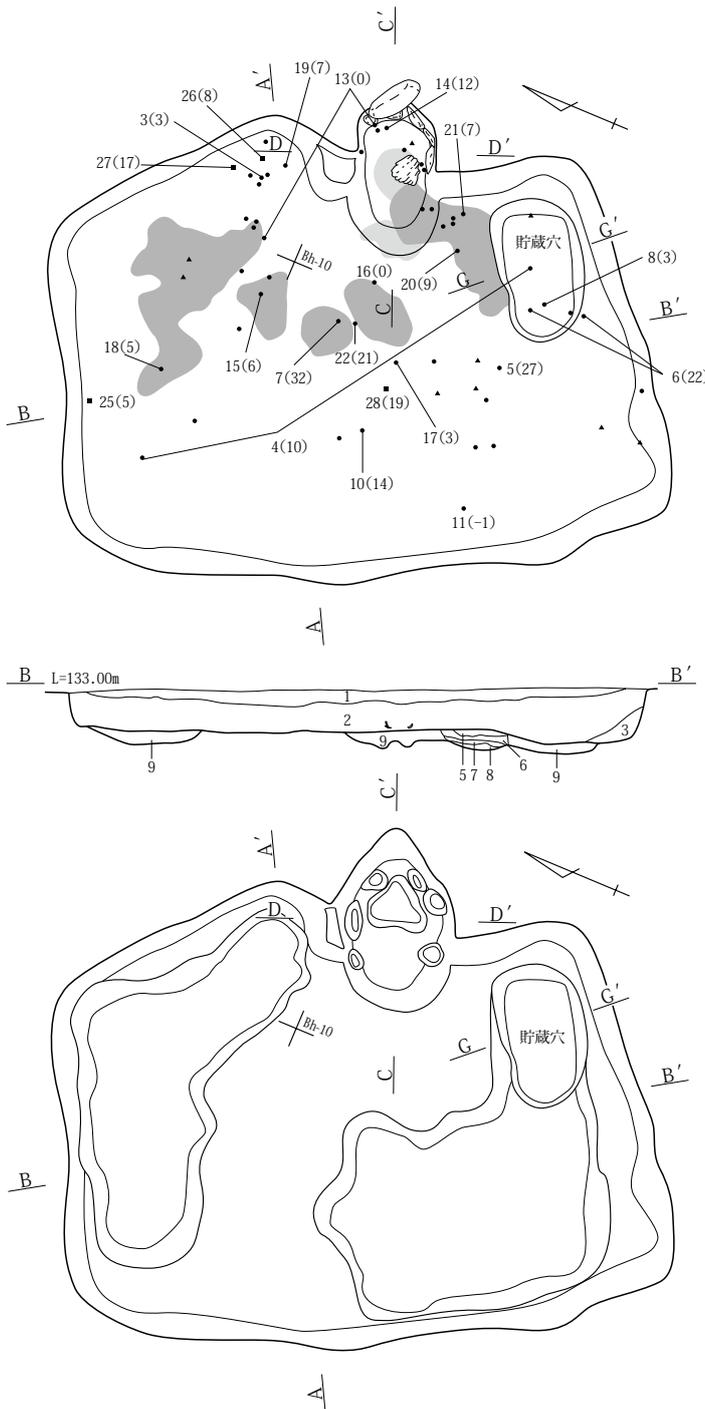


第667図 92号住居カマド・出土遺物

93号住居(第668~671図 P.L.151・281)

位置: Bg・Bh- 9・10グリッド 形状: 不整隅丸長方形
 規模: 3.12~3.71m×4.36~4.76m 残存深度: 0.33m
 主軸方位: E-27°-N 埋没土: VII層土主体で、As-Cの含有量が多い。柱穴: 未検出 カマド: 東壁中央やや南寄りに検出した。壁外の平面形は釣鐘状を呈しており、想定される主軸方位はE-24°-Nである。カマド右側については袖が屋内に張り出すことはないが、左側は住居壁が東側に突出するためXII層土が袖部として

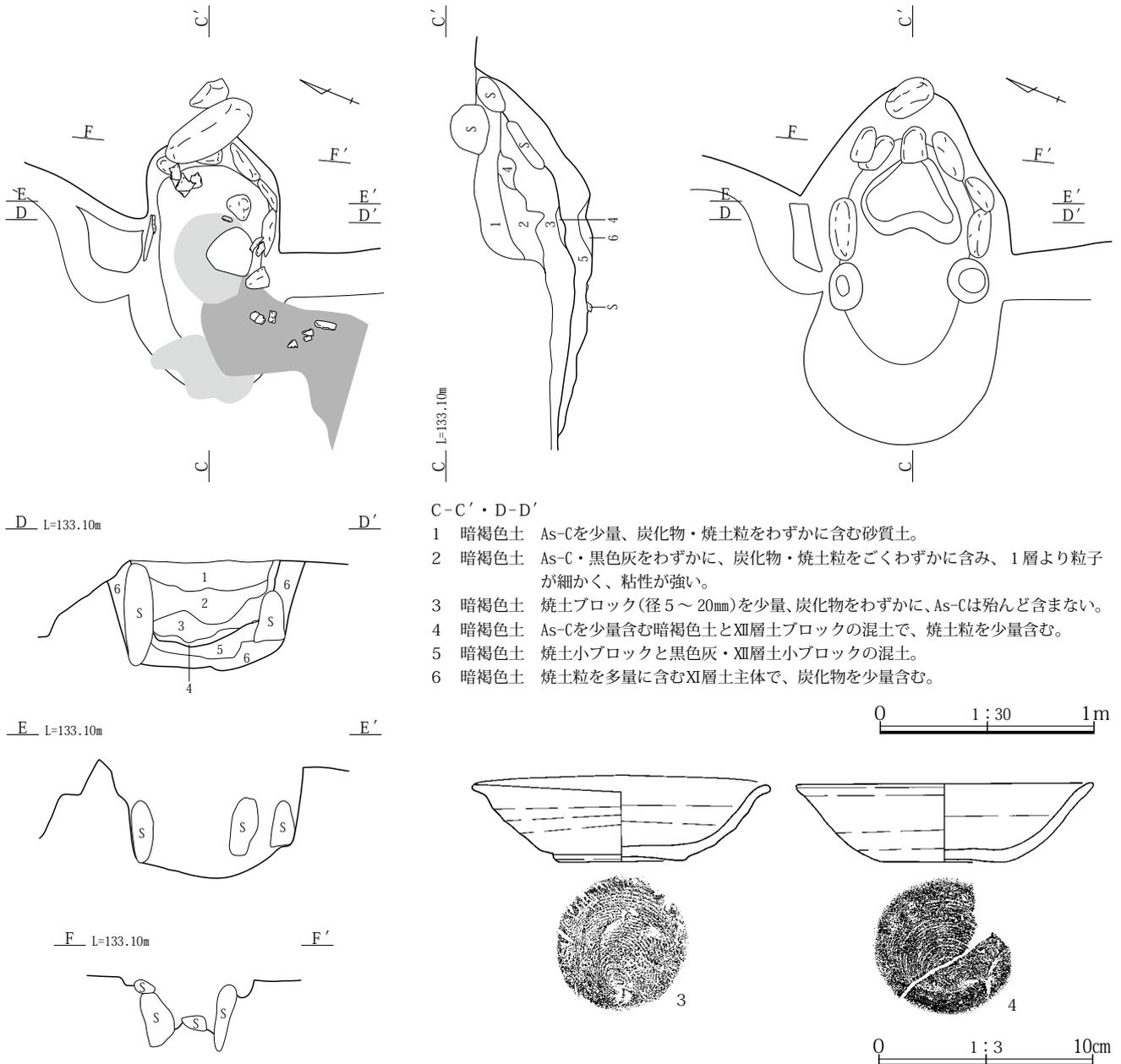
張り出すような特異な形状となっている。側壁から奥壁にかけて礫が構築材として使用されており、奥壁の構築材の上位から出土したやや大きめの礫は、燃烧部と煙道部間の天井石であった可能性が高い。支脚は礫を立てたもので、燃烧部奥の右寄りに偏って検出されたが、位置が通常よりも壁に寄り過ぎてるように感じられることから、双脚の支脚であった可能性がある。燃烧部から焚口部さらに右手方向へと続く黒色灰を主体とする層が広がっており、灰の掻き出し方向を見るに良好な資料であ



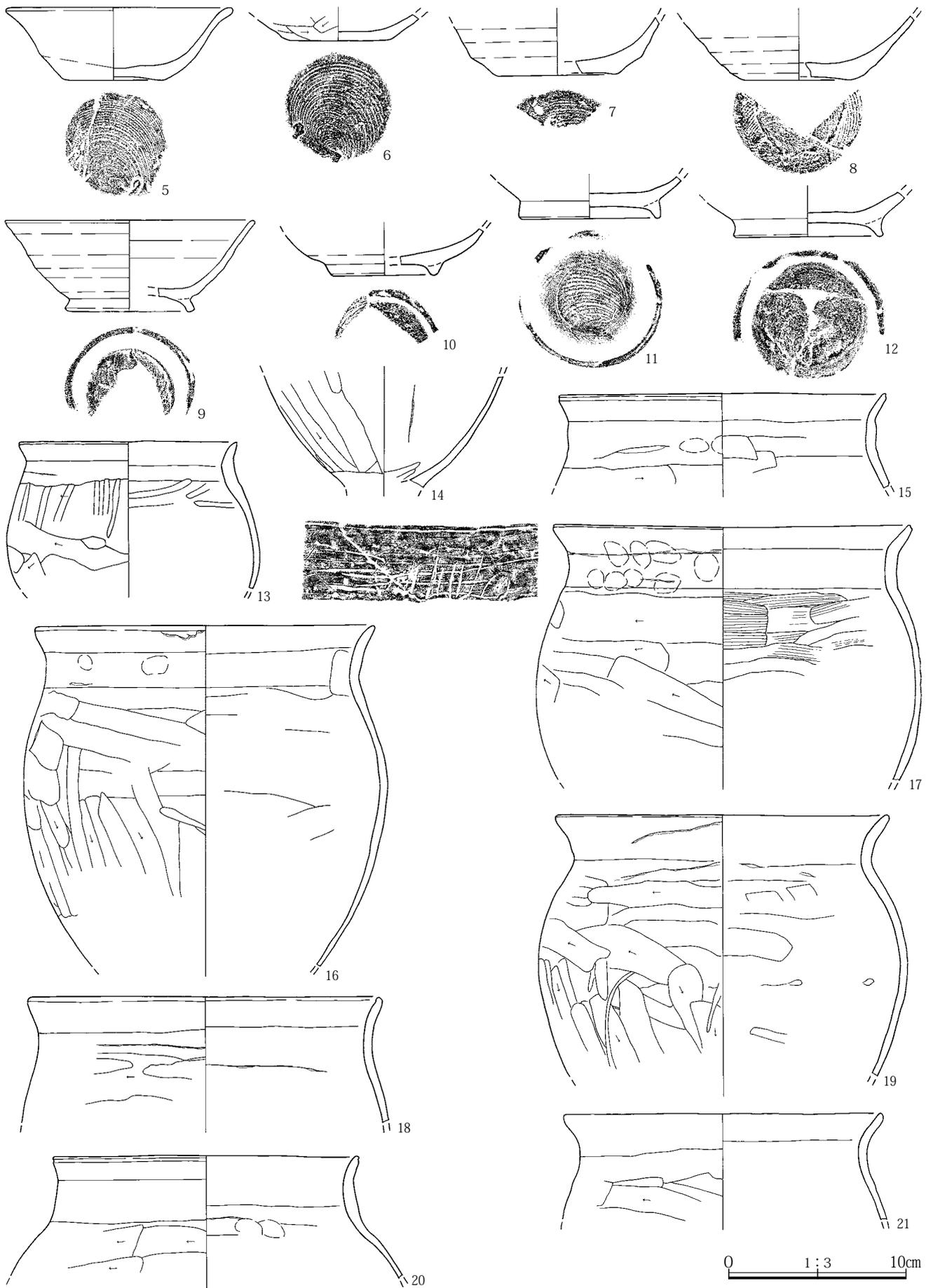
第668図 93号住居・出土遺物(1)

る。遺物：遺物出土は住居全体に及んでいるが、ややカマド寄りに多い傾向がある。土師器甕(16)はカマド前面の床面に密着して出土し、3の須恵器杯はカマド北側の張り出し部から、13と14の台付甕はカマド燃烧部から、8の須恵器杯は貯蔵穴からそれぞれ出土したもので、住居の時期を示す遺物と考えられる。また、刀子が3点(25～27)出土しており、これらも床面付近から出土したものである。重複：なし 所見：As-Cを多量に含有する埋没土の特徴をもとに平面確認を行ったところ、カマド北側が東に突出する特異な平面形となった。当初は土坑などとの重複によって変形したものと考えたが、土層断面において重複遺構は認識できず、また出土遺物に時期

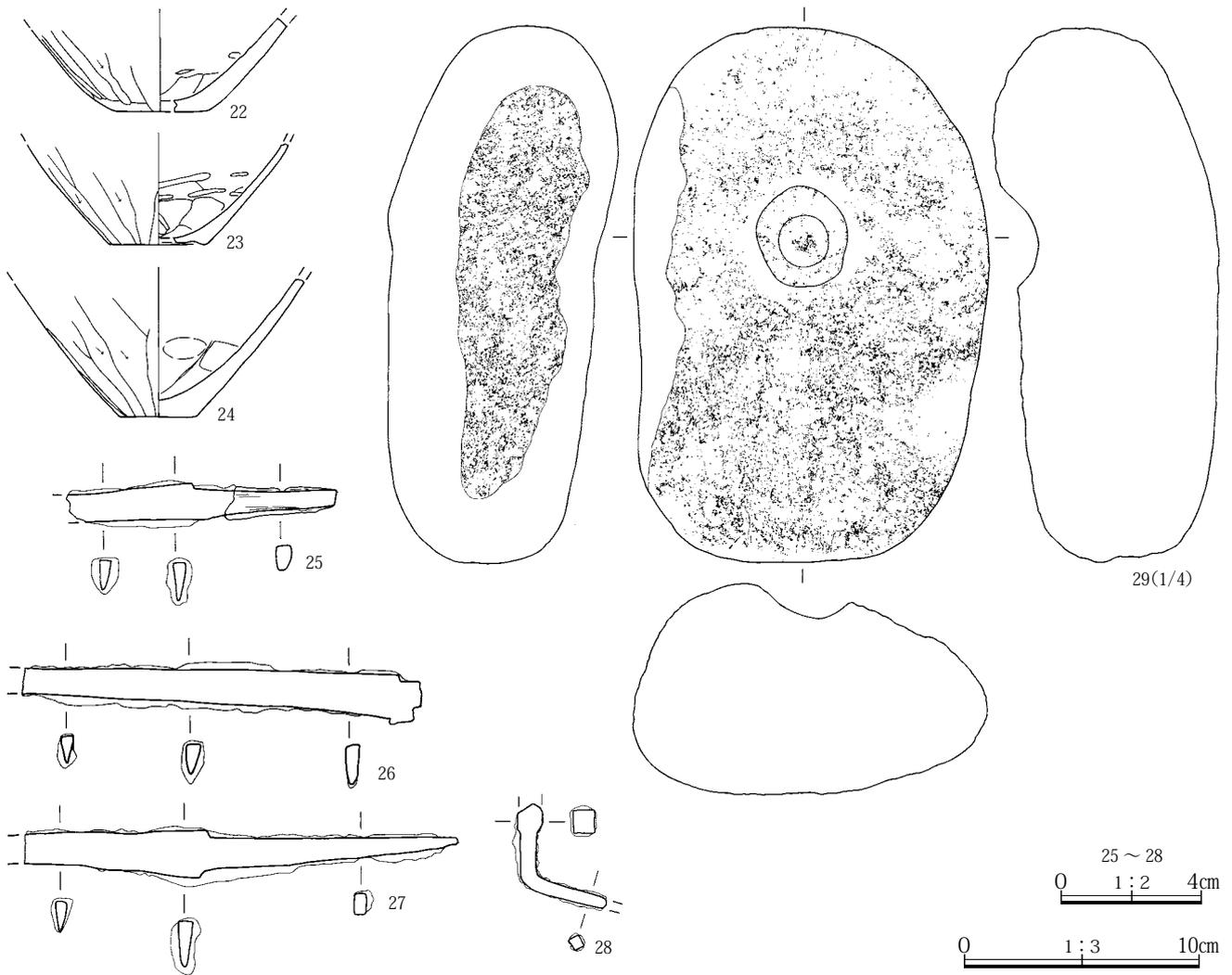
差が見られない上に、掘り方も一連で行われているものと判断されたことから住居の一部として調査を進めた。壁は全周Ⅻ層土の面として検出したが、形が均整でないことから崩落があったものと予想したが、土層断面に崩落の堆積層は認められなかった。床面は、掘り方の行われていない部分においてⅫ層土が斑状に検出された面として捉えたもので、住居中央から北寄りに薄い黒色灰層の広がり方を5地点検出した。貯蔵穴は、南東コーナー部の1.14×0.67m、深さ0.13mの楕円形を呈する掘り込みであり、カマドから広がる灰層が貯蔵穴の輪郭に沿って途切れていた。時期：9世紀後半



第669図 93号住居カマド・出土遺物(2)



第670図 93号住居出土遺物(3)

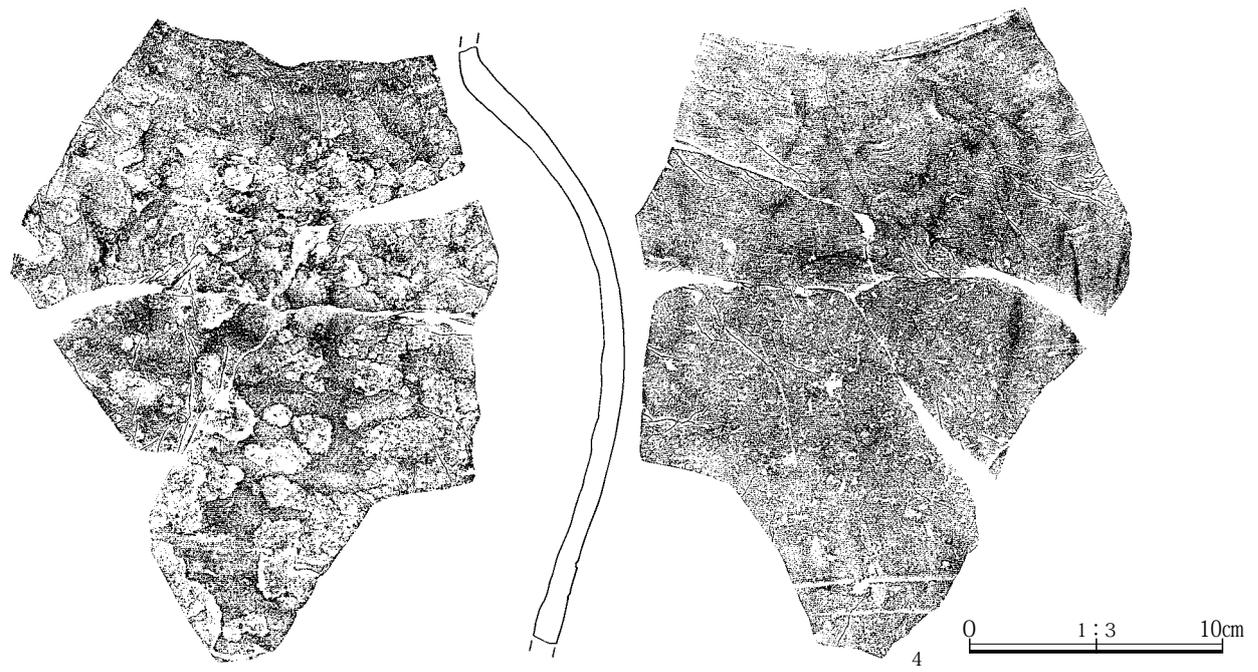
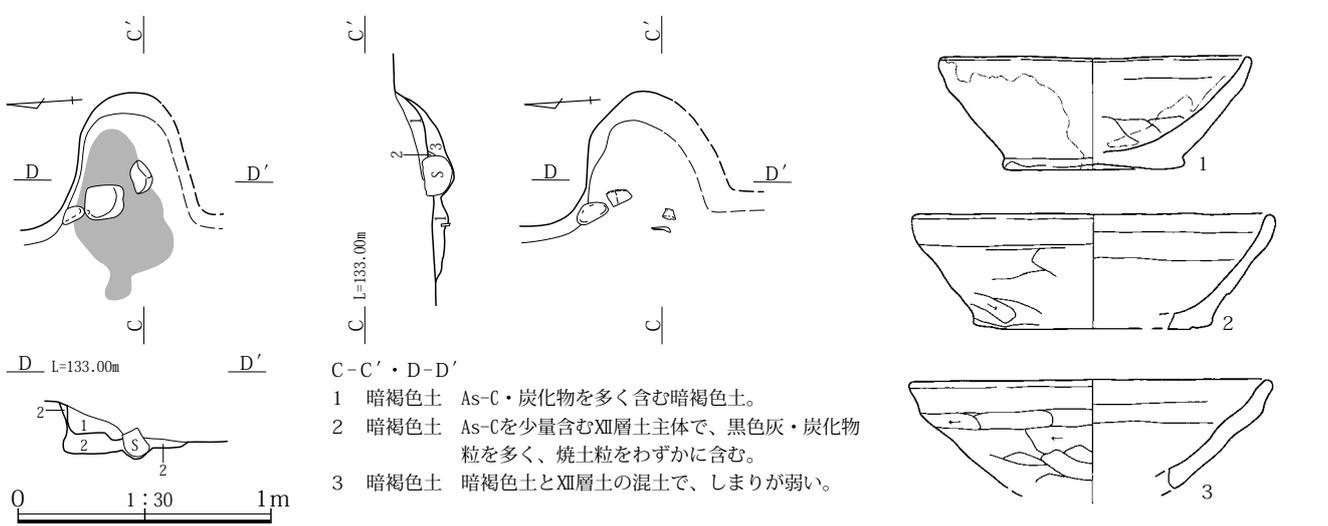
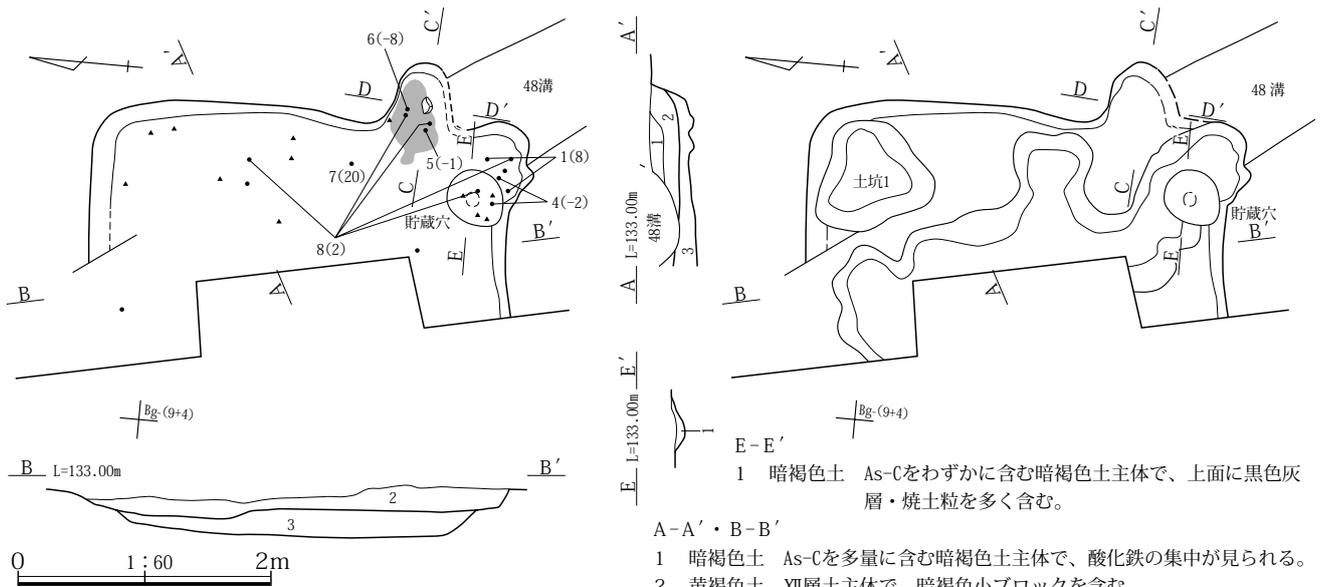


第671図 93号住居出土遺物(4)

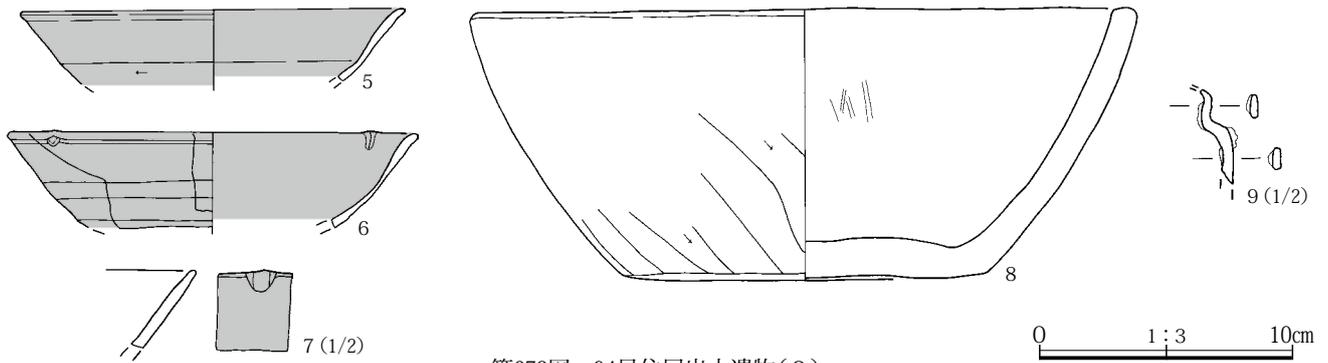
94号住居(第672・673図 P L.151・152・281)

位置: Bg- 9 グリッド **形状:** 隅丸長方形? **規模:** (2.07)m×3.30m **残存深度:** 0.17m **主軸方位:** E-4°-N **埋没土:** VII層土主体であるが、ニッ岳系軽石含有が目立たない。 **柱穴:** 未検出 **カマド:** 東壁の南東コーナー寄りに検出したが、48号溝との重複で南側が削平されており、残存したのは北半の壁と燃烧部底面である。残存部から想定される平面形は砲弾状を呈するものであり、主軸方位はE-2°-Nである。カマド形状から見て燃烧部は壁外に設けられたものと考えられ、中央部に支脚として据えられた礫の下半だけが残存した。支脚以外の構築材は残存しておらず、掘り方調査においても据え方などの痕跡は検出されなかった。支脚は被熱のために変色していたが、燃烧部底面や側壁に焼土は形成されておらず、燃烧部底面に薄い黒色灰層が残存しただけである。 **遺物:** 出土遺物は少ないながら、大半は

床面近くから出土しており、礫の出土も目立っている。特徴的な土師器坏(1)、須恵器甕(4)、鉢(8)は南東コーナー部及び貯蔵穴から出土した。また、カマド燃烧部及びカマド北側の床面から5~7の緑釉陶器の破片が出土した。 **重複:** 48号溝によって削平されている。 **所見:** 調査区の西端に検出したもので、西側1/3ほどは市道下にかかるため調査ができなかった。また、48号溝が南東コーナー部から対角線方向に重複しており、カマドを含め削平を受けている。床面は、カマド前面については灰層を目安に捉えることができたが、北半の一部は掘り過ぎてしまった部分がある。南東コーナー部のやや西寄りに検出した、径0.40mほどの窪み状の浅い掘り込みを貯蔵穴と判断した。掘り方は、南東コーナー部から対角線方向に深さ0.10mほどの不整形に掘り込まれていた他、北東コーナー部に0.88×0.85m、深さ0.09mほどの不整形を呈する土坑1を検出した。 **時期:** 10世紀前半



第672図 94号住居・出土遺物(1)

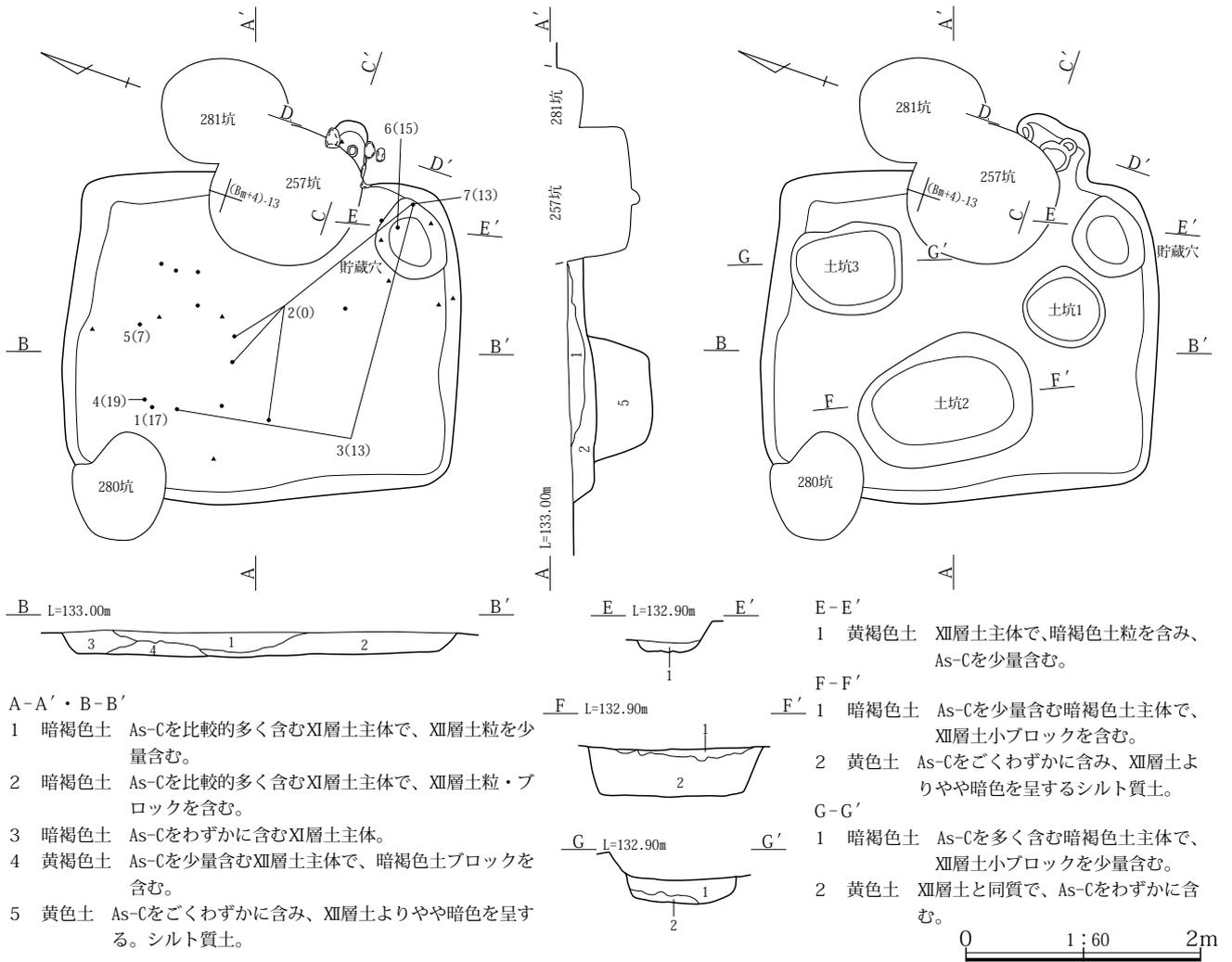


第673図 94号住居出土遺物(2)

95号住居(第674・675図 P L.152・281)

位置：Bm・Bn-12・13グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.86m×3.36m 残存深度：0.20m 主軸方位：E-21°-N 埋没土：Ⅶ層土主体であるが、ニッ岳系軽石含有が目立たず、ⅩⅡ層土粒とブロック含有が多い。柱穴：未検出 カマド：257号土坑との重複で燃烧部西半が失われている。残存部の形状は砲弾状を呈しており、構築材の位置から想定される主軸方位は、E-10°-Nであ

る。燃烧部が壁外に位置するカマドと考えられ、左側壁に1カ所、右側壁に3カ所構築材として礫が残存していたが、左側壁に検出した構築材は、並びから判断して最奥部のものであり、屋内側に少なくとも2カ所構築材が据えられていたはずである。燃烧部底面の精査で、中央よりやや奥の位置にピット状の掘り込みが検出されており、位置的に支脚の抜き取り痕であろう。燃烧部底面はⅩⅡ層土であったが、焼土化や灰層の残存はなく、使用感



第674図 95号住居

A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを比較的多く含むⅩⅡ層土主体で、ⅩⅡ層土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを比較的多く含むⅩⅡ層土主体で、ⅩⅡ層土粒・ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 As-Cをわずかに含むⅩⅡ層土主体。
- 4 黄褐色土 As-Cを少量含むⅩⅡ層土主体で、暗褐色土ブロックを含む。
- 5 黄色土 As-Cをごくわずかに含み、ⅩⅡ層土よりやや暗色を呈する。シルト質土。

E-E'

- 1 黄褐色土 ⅩⅡ層土主体で、暗褐色土粒を含み、As-Cを少量含む。

F-F'

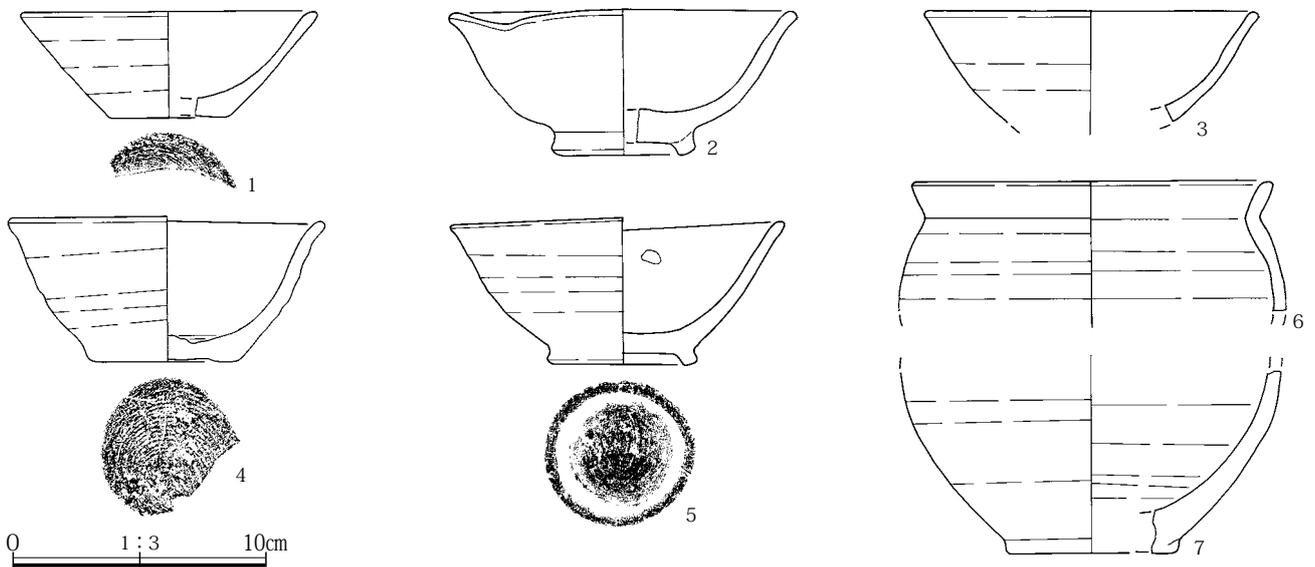
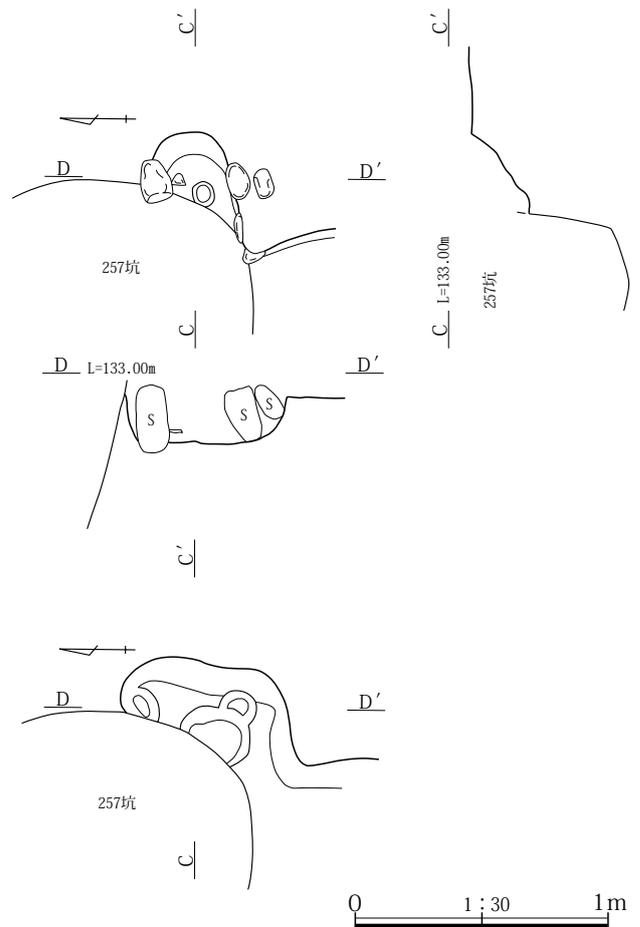
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、ⅩⅡ層土小ブロックを含む。
- 2 黄色土 As-Cをごくわずかに含み、ⅩⅡ層土よりやや暗色を呈するシルト質土。

G-G'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土主体で、ⅩⅡ層土小ブロックを少量含む。
- 2 黄色土 ⅩⅡ層土と同質で、As-Cをわずかに含む。

の薄いカマドとの印象を受けた。遺物:遺物の大半は、床面より上位から出土しており、埋没過程の中でもたらされたものと考えられる。須恵器坏(1・4)・埴(2・5)は中央北寄りから出土したものである。灰釉陶器の細片が1点、北東コーナー部近くに検出した土坑状の掘り方内から出土したが、細片であるため図化していない。

重複:257・280号土坑と重複し、検出状況及び残存状況から95号住居→257・280号土坑である。所見:調査区を南北に貫く低地部の上部で検出されたもので、東半はXI層土、西半は低地部上層を構成するVII層土中で確認を行った。埋没土中に含まれたXII層土ブロックが目安となって平面形は比較的容易に確認することができた。壁は土坑との重複部分を除き良好に検出され、床面も東側はXII層土、西側はVII層土面として平坦に捉えることができた。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出され、0.71×0.60m、深さ0.08mの不整楕円形を呈しており、XII層土粒を主体とする土層で埋没していた。掘り方は、土坑1(径0.67m、深さ0.04m、円形)、土坑2(1.52×1.08m、深さ0.40m、楕円形)、土坑3(0.95×0.80m、深さ0.21m、不整楕円形)の3カ所を検出した。時期:10世紀前半



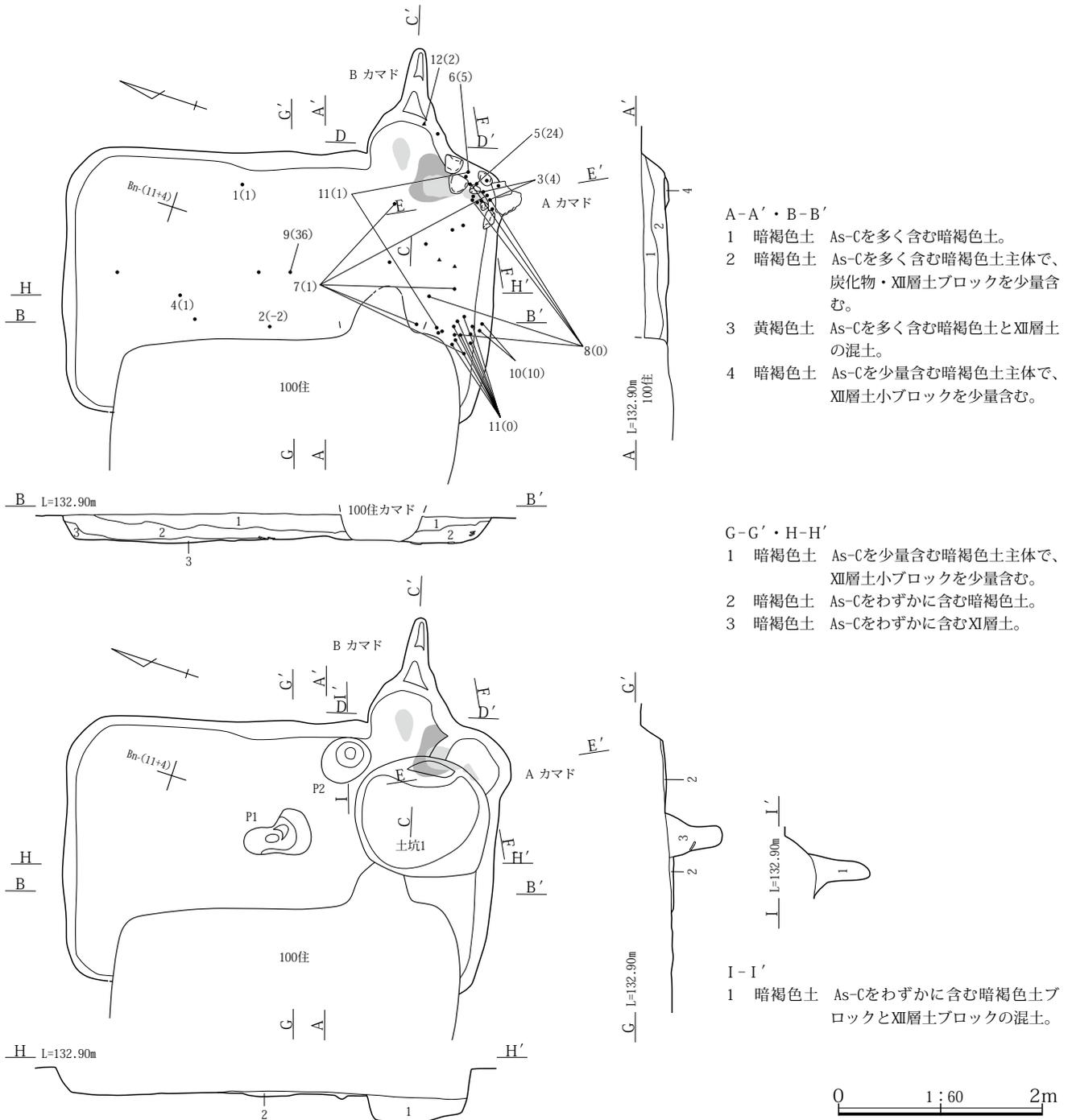
第675図 95号住居カマド・出土遺物

96号住居(第676～678図 P L.152・153・281・282)
位置: Bm・Bn-11グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 2.62m×4.21m 残存深度: 0.24m 主軸方位: E-18°-N 埋没土: VII層土主体であるが、二ツ岳系軽石が目立たない。柱穴: 未検出 カマド: 当初はE-11°-Nに主軸方位を有する煙道のやや長いカマド1基とし

て調査を進めたが、南東コーナー部に当初に認識したカマドよりも残存状況の良いカマドがあることが判明したため、カマドの造り替えがあったものと判断し、構築当初のカマドをBカマド、最終使用されたコーナーカマドをAカマドとして調査を進めた。Aカマドは、S-35°-Eに主軸方位を取るものと考えられ、左側壁に3カ所、

右側壁に1カ所構築材として礫を立て、燃烧部主体となると思われる位置に2カ所礫を立て双脚の支脚としていた。燃烧部と煙道部の境には須恵器甕の破片が並べられたような状況で出土しており、煙道部の天井を構成していたものと考えられる。Bカマドは、東壁を掘り込んで燃烧部としており、燃烧部底面から段差を持って掘り込まれた煙道が比較的長く伸びていた。燃烧部側壁に構築材は残存しておらず、構築材を据えた痕跡も検出されなかった。燃烧部底面中央部に焼土化した部分があり、A

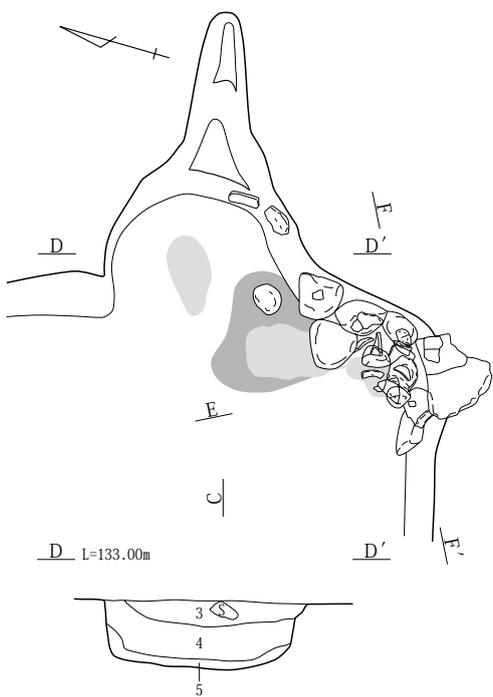
カマド寄りに検出した黒色灰層の広がりにはBカマドから掻き出されたものである可能性が高い。 **遺物**：南壁中央の壁際から須恵器瓶(11)・羽釜(8・10)が、中央北寄りの床面近くから土師器碗(2)、須恵器碗(1)・小型の土釜(4)が出土した。6の須恵器甕の破片はAカマド煙道部天井として使用されたもので、12の砥石は、Bカマド燃烧部奥壁際で出土したものである。 **重複**：100号住居・14号溝と重複しており、残存状況から14号溝→96号住居→100号住居である。 **所見**：西半が調査区中央



第676図 96号住居

を南北に貫く低地部にかかっており、西側の平面形が完全に捉えられないまま調査を進めたところ、南北方向に設定した土層断面にカマドに伴う焼土が検出され、西側に住居が重複していることが判明した。そこで西側で重複する住居を100号住居として分離し、100号住居調査後に96号住居調査を再開した。重複によって失われた西壁を除いてⅫ層土が壁面として検出された。床面は掘り方の行われた部分以外Ⅻ層土が斑状に検出された面として捉えた。貯蔵穴は南東コーナー部に新しいカマドが構築されていることから、南西コーナー部または北西コーナー部に掘削されていた可能性が高いが、100号住居と重複している上に低地部にかかる部分でⅦ層土が上層を構成しているために検出することができなかった。掘り方は、Aカマド前面の位置が顕著で、径1.25m、深さ0.25mの円形を呈する土坑1が掘り込まれていた。また、中央部にP1（0.52×0.27m、深さ0.53m、楕円形）、Bカマド左側にP2（0.50×0.41m、深さ0.55m、楕円形）が検出された。 **時期：10世紀後半**

Bカマド

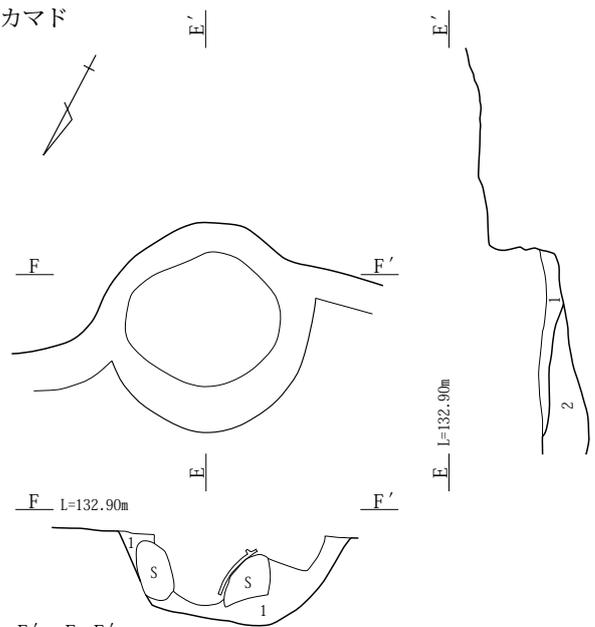


C-C'・D-D'

- 1 黄褐色土 As-Cをわずかに含むⅫ層土主体で、Ⅻ層土小ブロックを少量含む。
- 2 黄褐色土 Ⅻ層土とⅫ層土ブロックの混土。
- 3 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、Ⅻ層土粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、炭化物を少量含む。
- 5 暗褐色土 4層に類似するが、Ⅻ層土小ブロックを少量含む。

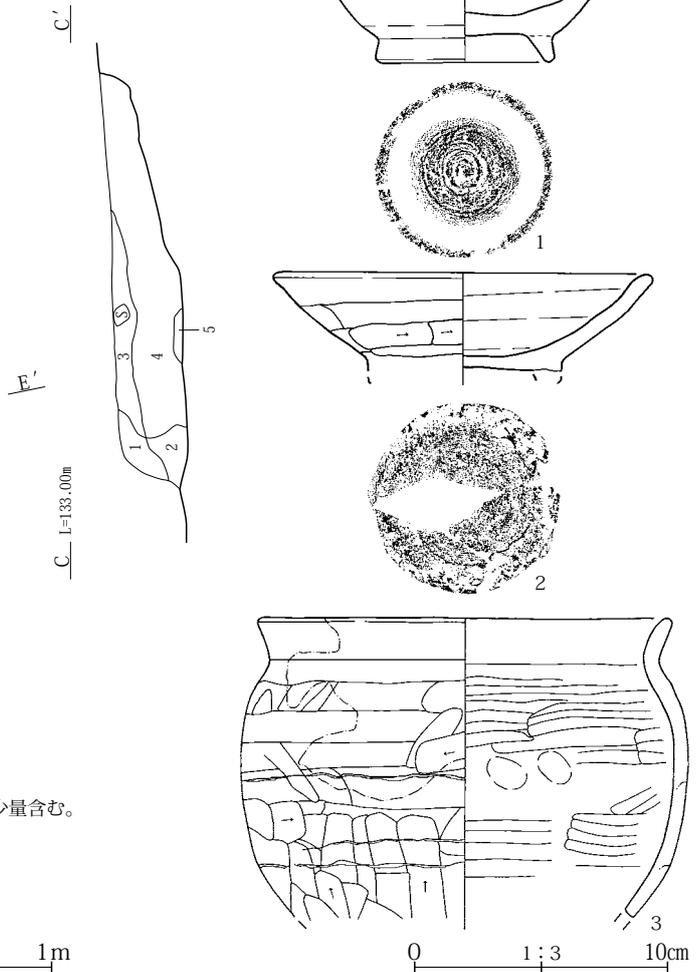
0 1:30 1m

Aカマド

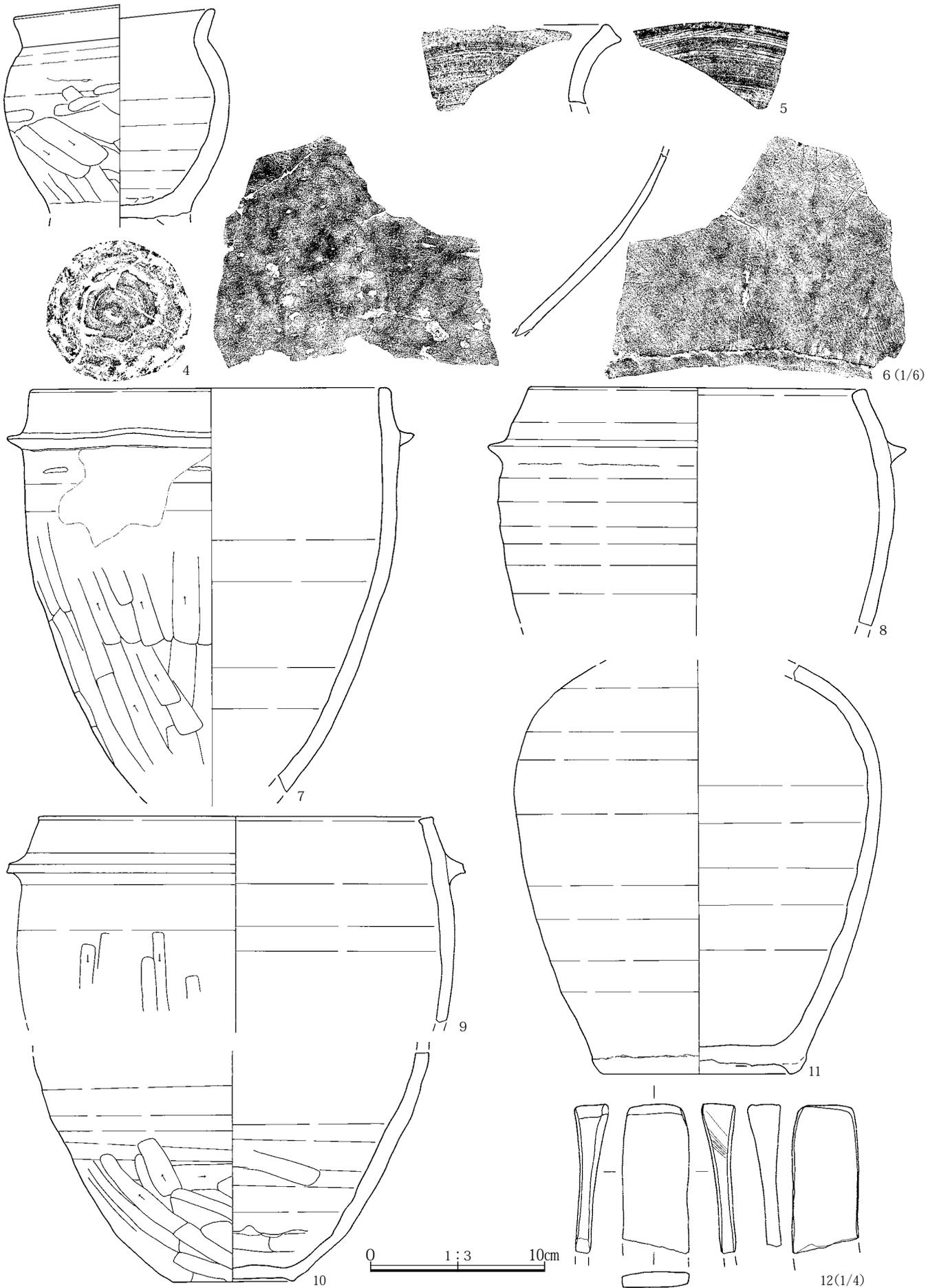


E-E'・F-F'

- 1 暗褐色土 As-C細粒を少量含む暗褐色土主体で、Ⅻ層土小ブロック・炭化物粒を含み、しまりが強い。
- 2 暗褐色土 As-C・二ッ岳系軽石粒を少量、炭化物粒をわずかに含む暗褐色土とⅫ層土小ブロックの混土。



第677図 96号住居カマド・出土遺物(1)

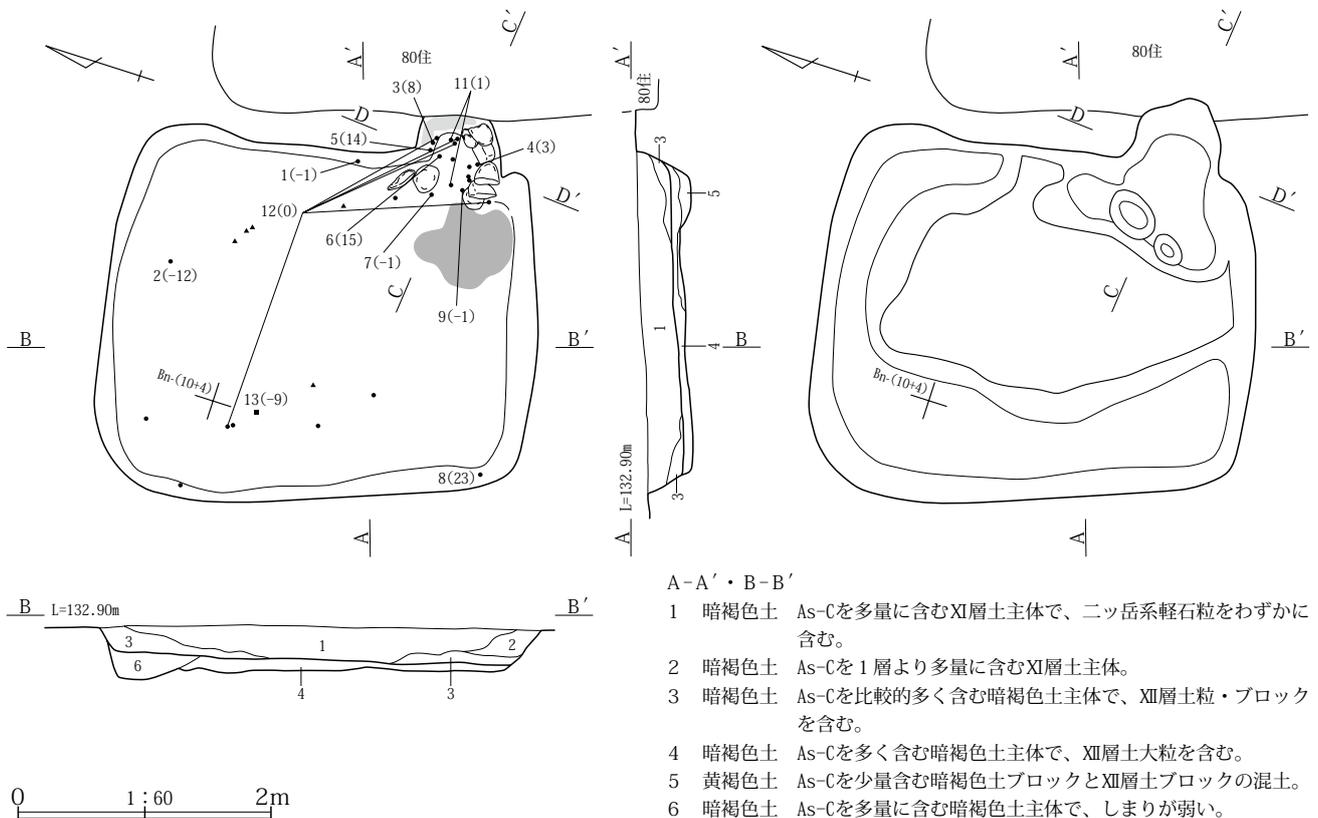


第678図 96号住居出土遺物(2)

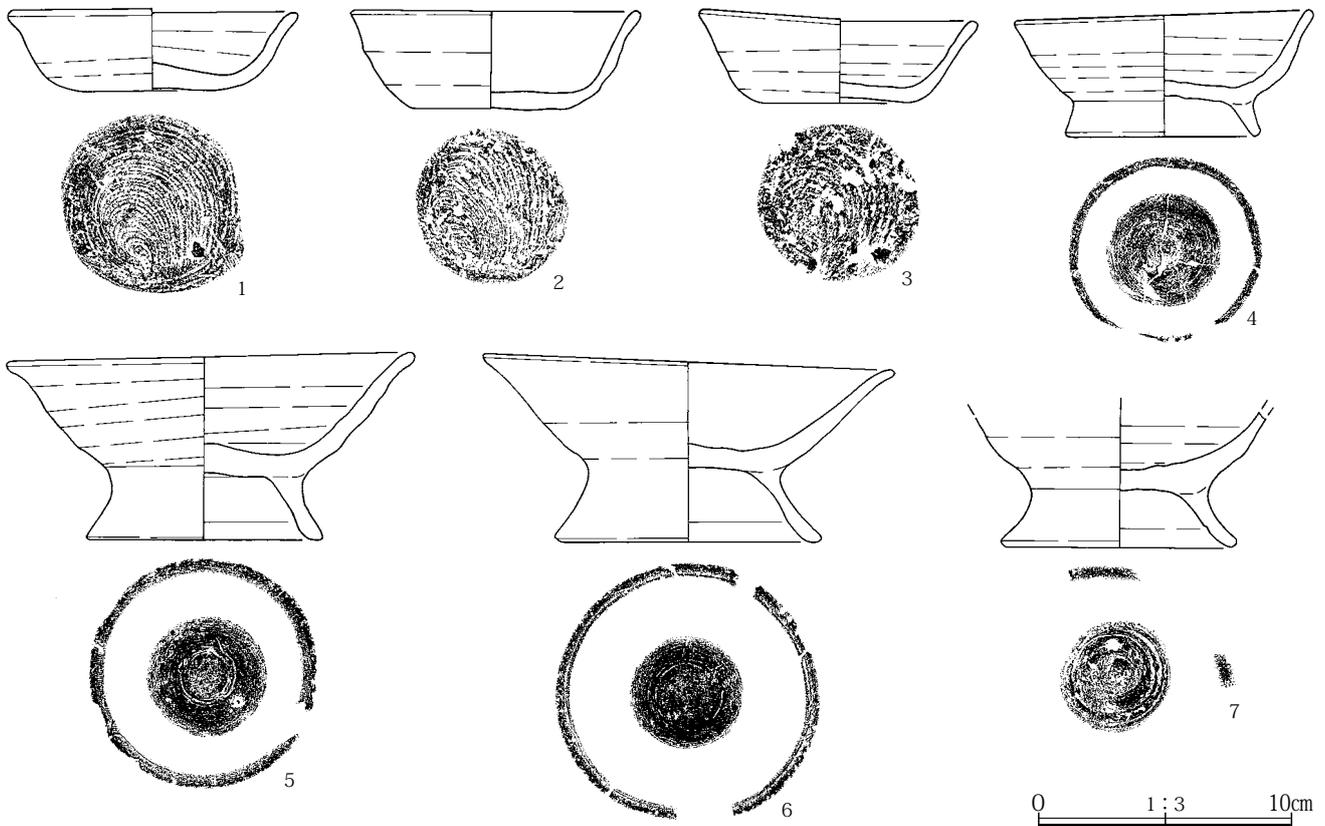
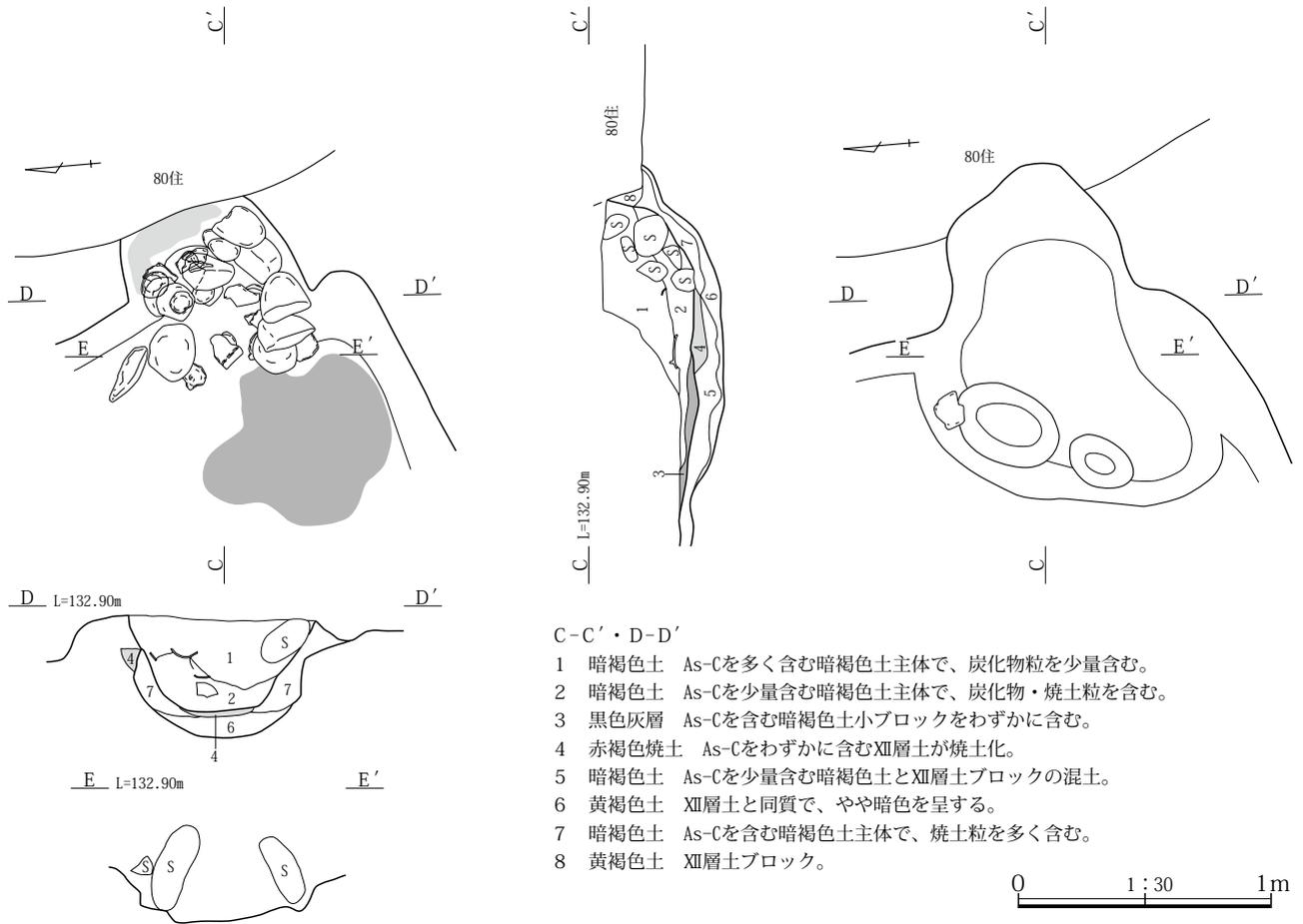
97号住居(第679～681図 P.L.153・282)

位置：Bm・Bn-10・11グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.80m×3.42m 残存深度：0.28m 主軸方位：E-16°-N 埋没土：ニッ岳系軽石含有が微量なⅦ層土主体。柱穴：未検出 カマド：南東コーナー部に接する位置に検出されたが、主軸方位はE-5°-Nであり、基本的には東壁に対して直行するような方位を示しており、いわゆるコーナーカマドではないと考えられる。焚口部の両側には構築材の礫が内傾気味に立てられており、右側はさらに上部に礫が積まれたような状況で出土した。また、右側壁奥にも1カ所礫が据えられて検出された。これらの構築材として原位置を保っている礫の他に、燃焼部からは礫が数点出土している。被熱により一部変色したのものもあることから構築材であった可能性はあるが、土器の上に被さるように出土していることから壊されて廃棄された状況を示しているのであろう。遺物：須恵器坏(3)・埴(4)・足高高台の埴(5～7)、灰釉陶器段皿(9)、羽釜(11・12)が燃焼部に折り重なるように集中して出土した。須恵器坏(1)はカマド北側の東壁際から、2は北壁寄りの掘り方から、13の刀子と見られる鉄製品は西壁寄りの掘り方からの出土であるが、カ

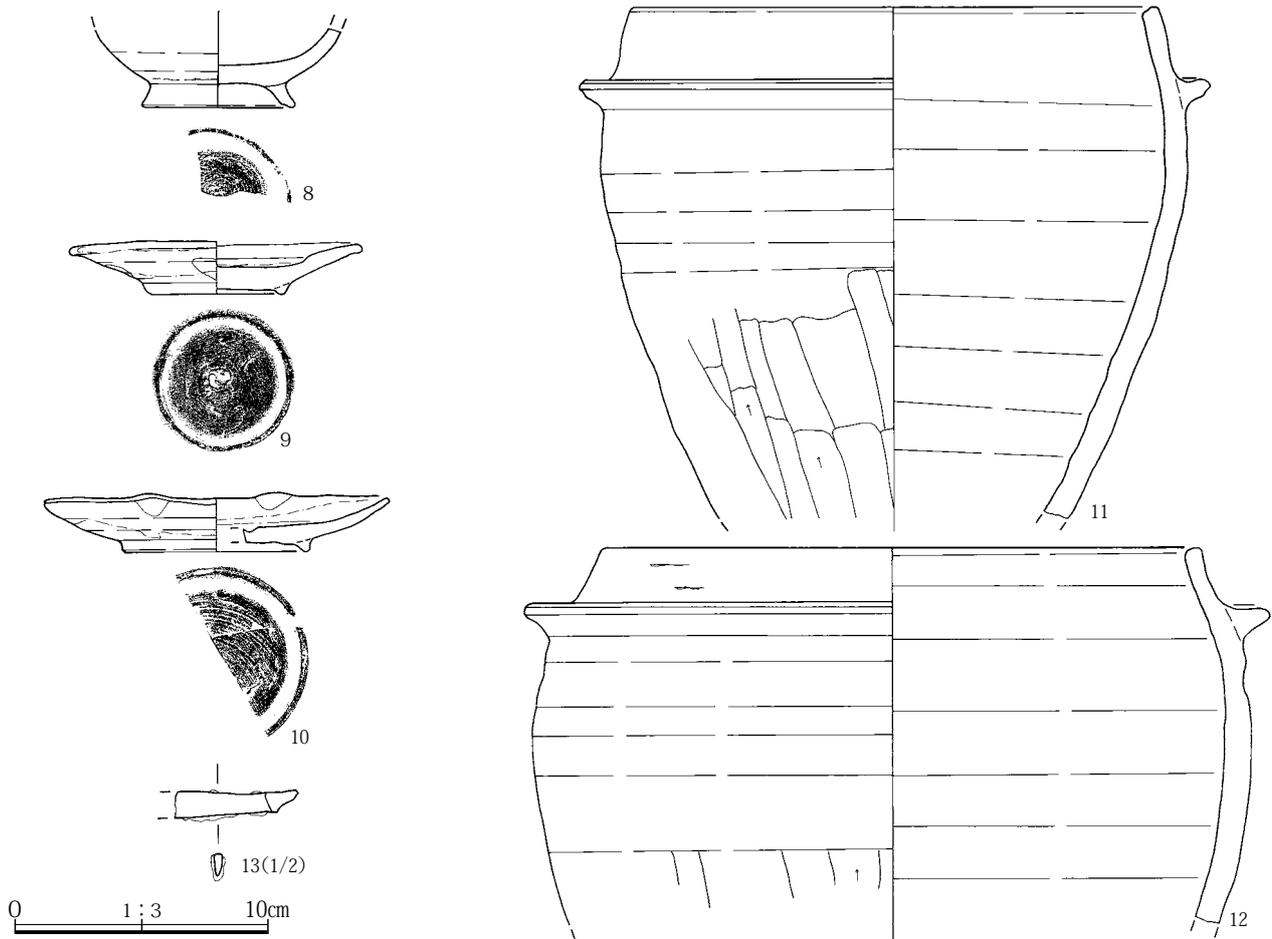
マド以外の場所からの出土は極めて少ない。出土した坏・埴の残存率は高く完形の資料も2点ふくまれており、出土状況からも住居廃絶時に廃棄されたものと見てよいものであり、時期の特定に有効な遺物である。重複：東側で80・110号住居と重複しており、検出状況及び残存状況から110号住居→97号住居→80号住居と考えられる。所見：調査区を南北に走行する3号道に隣接して、Ⅺ層土及びⅦ層土の面で平面が確認された。カマド煙道部が80号住居によって削平されている以外、全体を検出することができた。東側の壁はⅪ～Ⅻ層土面として明瞭に捉えることができたが、西側はⅦ層土中であるためやや捉えにくい状況であった。床面はカマド前面に検出された黒色灰層の検出面を広げていくことで捉えたもので、全体にⅦ層土類似の土で貼床がされていた。貯蔵穴は、床面精査及び掘り方調査においても検出することはできなかった。重複する80・110号住居との位置関係をみると西から東に向かって新しくなっているが、出土遺物の比較では3棟の間に大きな時間差があるとは考えにくいことから、短時間の間に建て替えが行われた状況を示している可能性がある。時期：10世紀後半



第679図 97号住居



第680図 97号住居カマド・出土遺物(1)

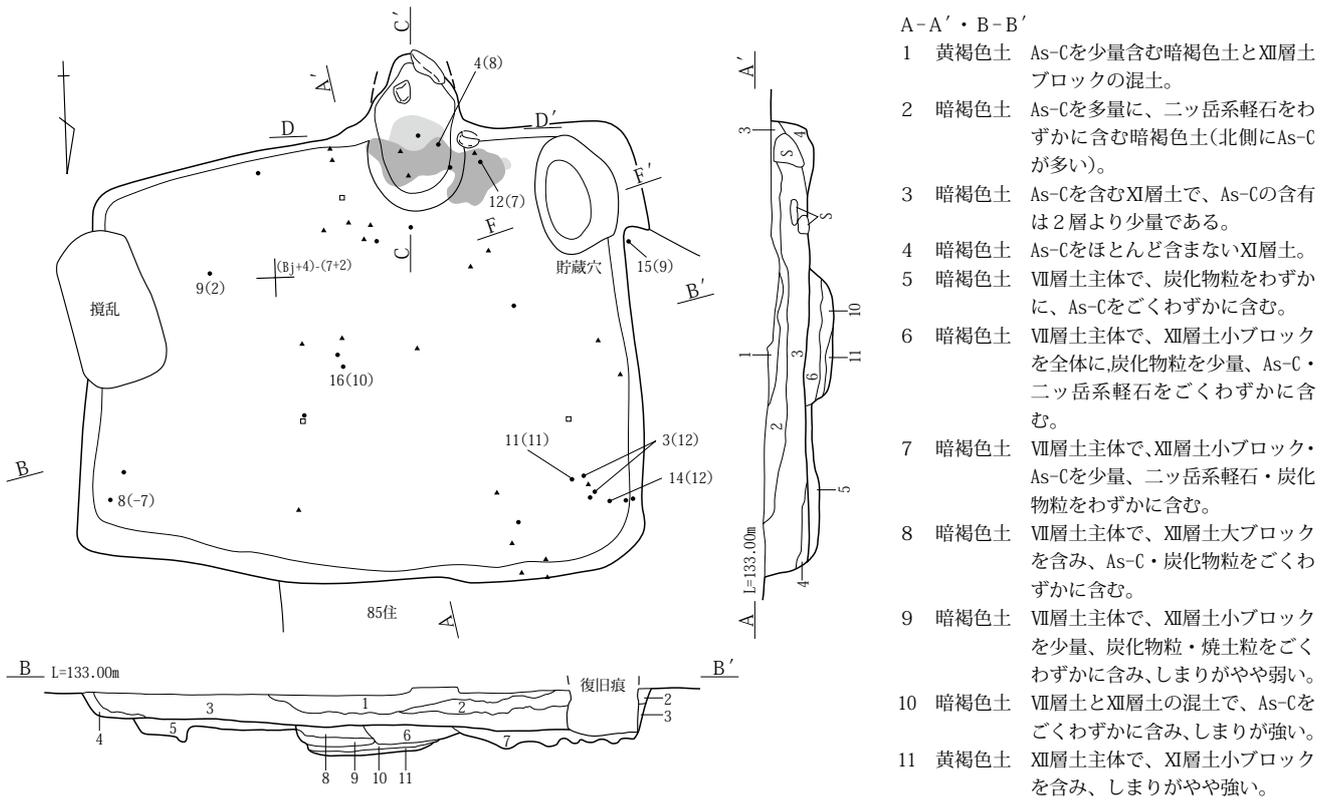


第681図 97号住居出土遺物(2)

98号住居(第682・683図 P L.153・154・282)

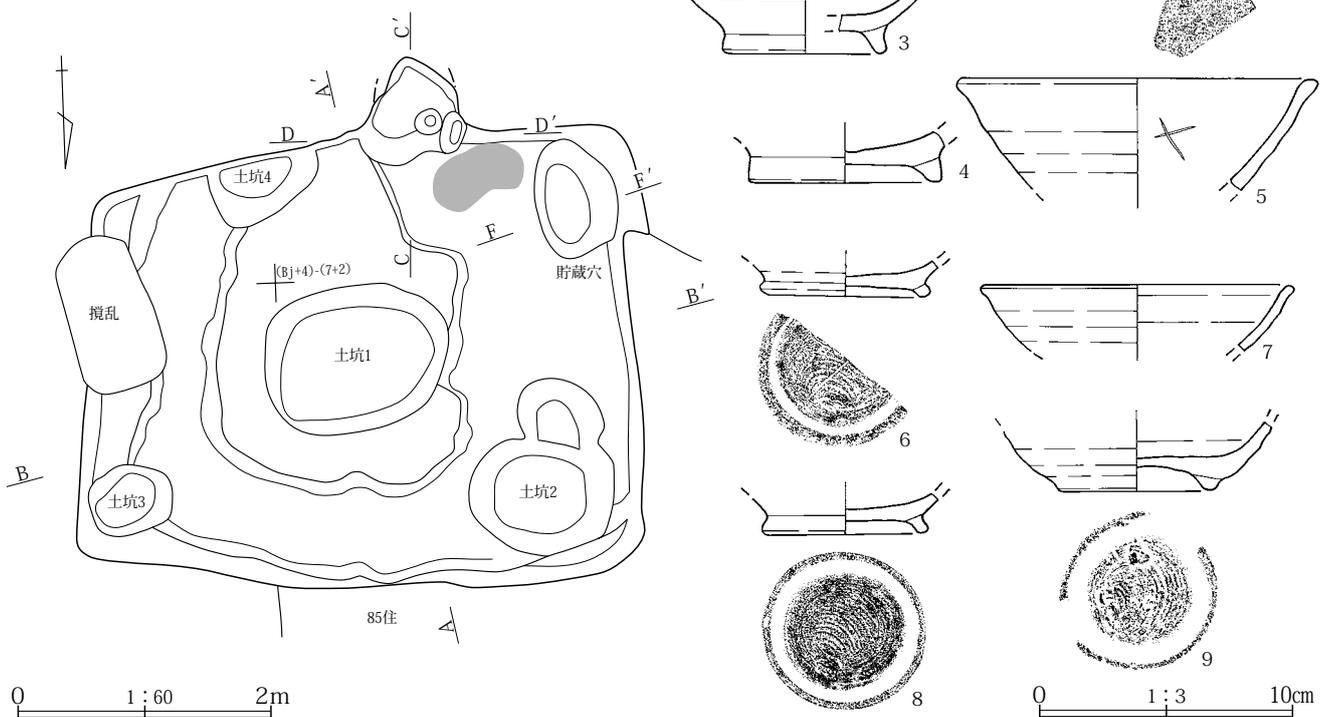
位置: Bj・Bk- 7グリッド **形状:** 隅丸台形 **規模:** 2.38~3.56m×4.43m **残存深度:** 0.34m **主軸方位:** S-3°-E **埋没土:** VII層土主体で、北寄りにAs-C含有が多い。**柱穴:** 未検出 **カマド:** 南壁中央やや西寄りに設置されたもので、主軸方位がS-1°-Eとなる南向きのカマドである。同様の向きのカマドは101・103号住居にも見られたが、他にはほとんど類例がない。調査区境に位置していたために煙道部が掘りきれなかったが、燃烧部はほぼ全体を検出することができた。焚口部右側に扁平な礫が1カ所検出されているが、平坦面を下にして置かれたような状況であるため、構築材とは考えにくい。燃烧部側壁に構築材の痕跡は皆無であり、掘り込み面をそのまま壁としていたものと考えられる。燃烧部奥の左に偏った位置に棒状礫を立てて支脚としており、支脚周辺の底面に薄い焼土が形成されていた。焚口部から右寄りにごく薄いものであったが黒色灰層の広がり確認された。**遺物:** 大形礫の出土が目立っており、土器は概して小破片が多い。注目されるのは、緑釉陶器破片が5点、及び灰釉陶器破片が10点出土していること

である。特に北西コーナー部から11・14の緑釉陶器、3の須恵器碗が出土している。**重複:** 85a・85b・122号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から122号住居→85b号住居→85a号住居→98号住居と考えられる。**所見:** 整理段階で85a・85b号住居とした住居と一連の確認作業で検出したもので、土層断面の観察などから1棟の住居として分離することができた。床面は、掘り方が行われているために捉えにくかったが、カマド焚口部に検出した灰面を目安として広げていくことで平坦な面を検出することができた。貯蔵穴は、南西コーナー部に検出したもので、0.95×0.65m、深さ0.17mの楕円形を呈している。掘り方は、中央に土坑1(1.45×1.15m、深さ0.23m、楕円形)があり、0.35mほどの間をおいて壁側をドーナツ状に浅く掘り込んでいた。また、北西コーナー部に土坑2(1.13×0.89m、深さ0.24m、楕円形)、北東コーナー部に土坑3(1.14×0.90m、深さ0.30m、楕円形)、カマド東側の南壁に接して土坑4(0.88×0.55m、深さ0.13m、不整楕円形)がそれぞれ掘り込まれていた。**時期:** 10世紀前半

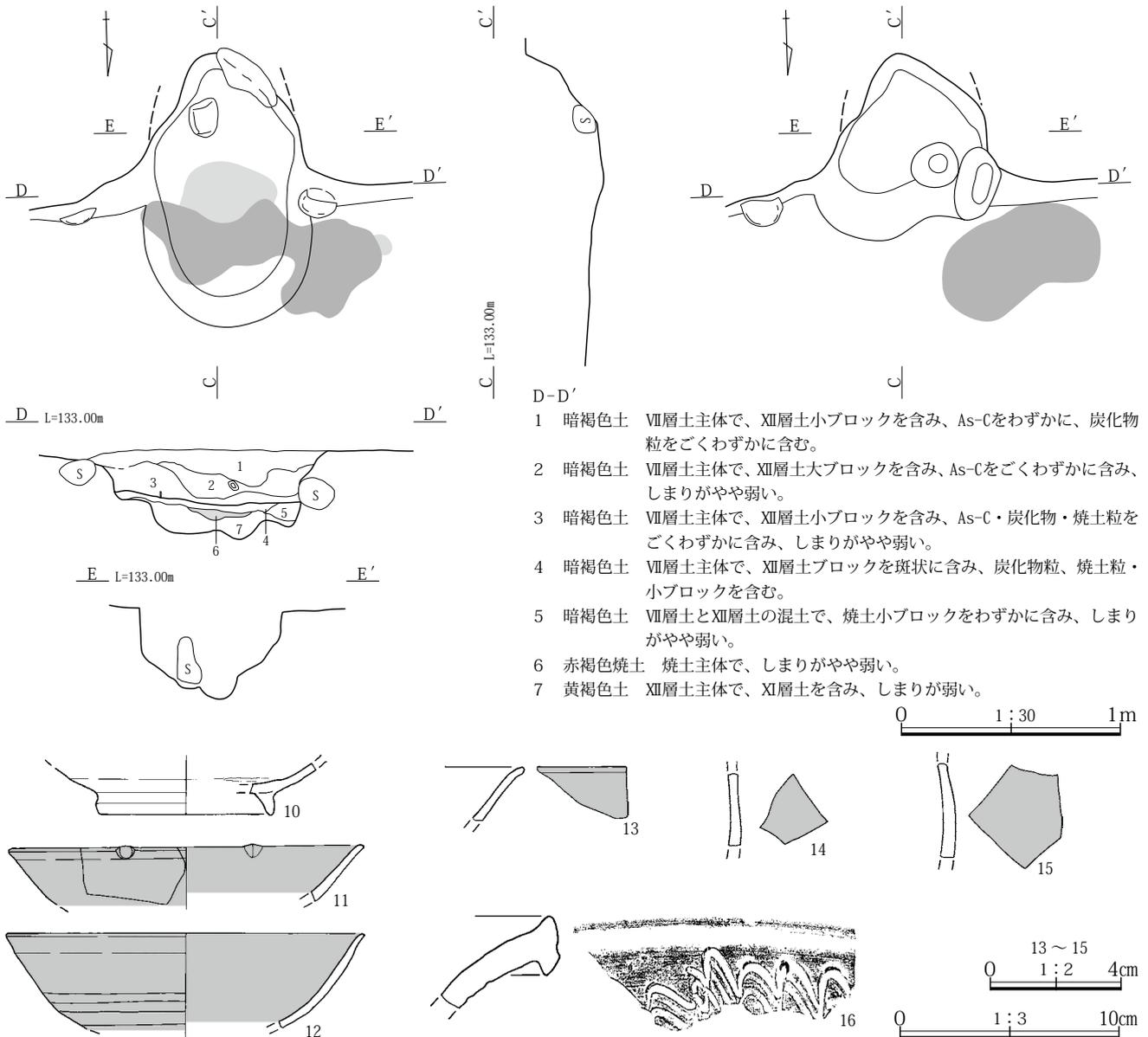


- A-A'・B-B'
- 1 黄褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土とⅫ層土ブロックの混土。
 - 2 暗褐色土 As-Cを多量に、二ツ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土(北側にAs-Cが多い)。
 - 3 暗褐色土 As-Cを含むⅪ層土で、As-Cの含有は2層より少量である。
 - 4 暗褐色土 As-Cをほとんど含まないⅪ層土。
 - 5 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、炭化物粒をわずかに、As-Cをごくわずかに含む。
 - 6 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅻ層土小ブロックを全体に炭化物粒を少量、As-C・二ツ岳系軽石をごくわずかに含む。
 - 7 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅻ層土小ブロック・As-Cを少量、二ツ岳系軽石・炭化物粒をわずかに含む。
 - 8 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅻ層土大ブロックを含み、As-C・炭化物粒をごくわずかに含む。
 - 9 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅻ層土小ブロックを少量、炭化物粒・焼土粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
 - 10 暗褐色土 Ⅶ層土とⅫ層土の混土で、As-Cをごくわずかに含み、しまりが強い。
 - 11 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、Ⅺ層土小ブロックを含み、しまりがやや強い。

- F-F'
- 1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土で、炭化物をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土とⅫ層土ブロックの混土で、炭化物細粒を少量含む。



第682図 98号住居・出土遺物(1)

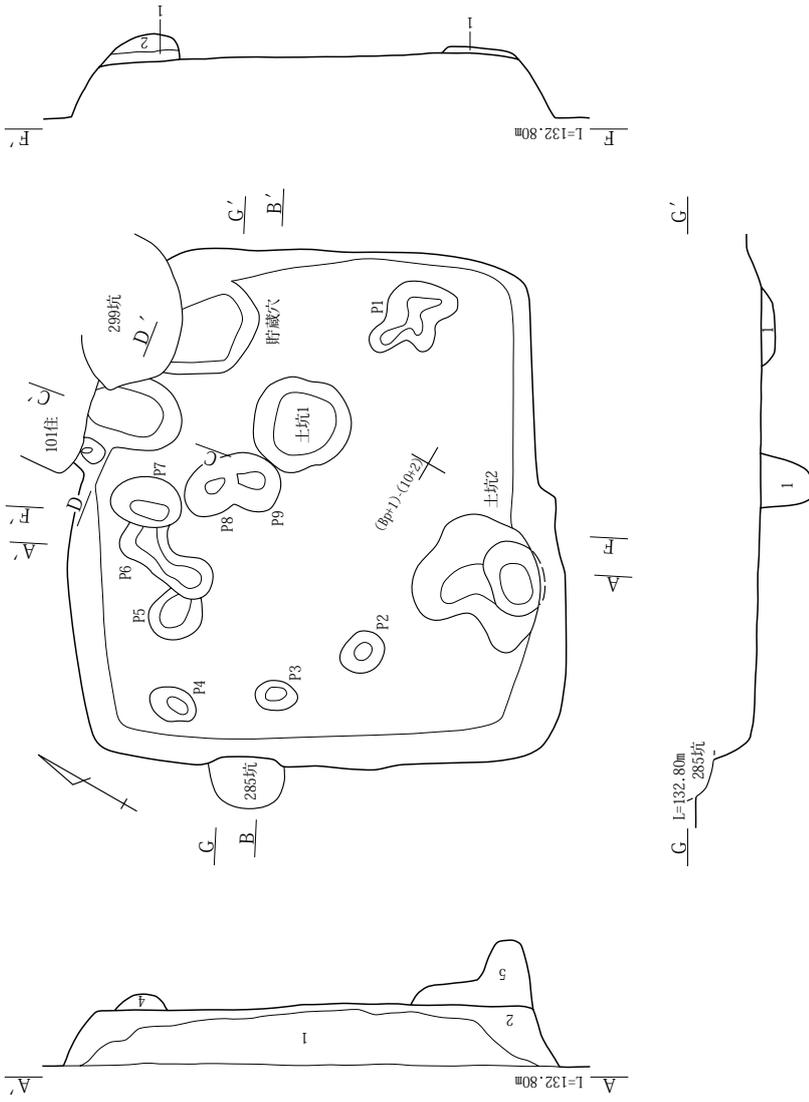


第683図 98号住居カマド・出土遺物(2)

99号住居(第684~686図 P L.154・283)

位置: Bo・Bp-10グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 3.88m×4.08m 残存深度: 0.46m 主軸方位: N-30°-W 埋没土: VII層土主体で上層に礫が多く混入しており、下層はXII層土粒が主体となる。柱穴: 未検出 カマド: 北壁の東寄りに検出したもので、主軸方位はN-27°-Wである。煙道は101号住居との重複によって失われているが、時期的に見て長く北に延びていたものと考えられる。焚口の掘り込みが屋内側に広がっていることから、燃烧部主体は壁外に掘り込んだ部分から屋内にかけて設けられていたものと考えられる。袖が屋内に張り出して構築されていたはずであるが、左側の住居壁との境に構築材の礫が1カ所検出されただけで、屋内側に張り出し

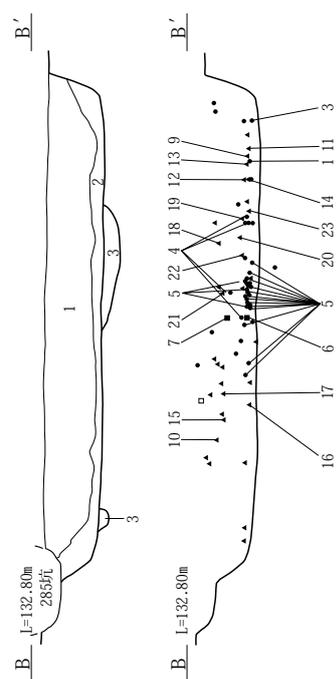
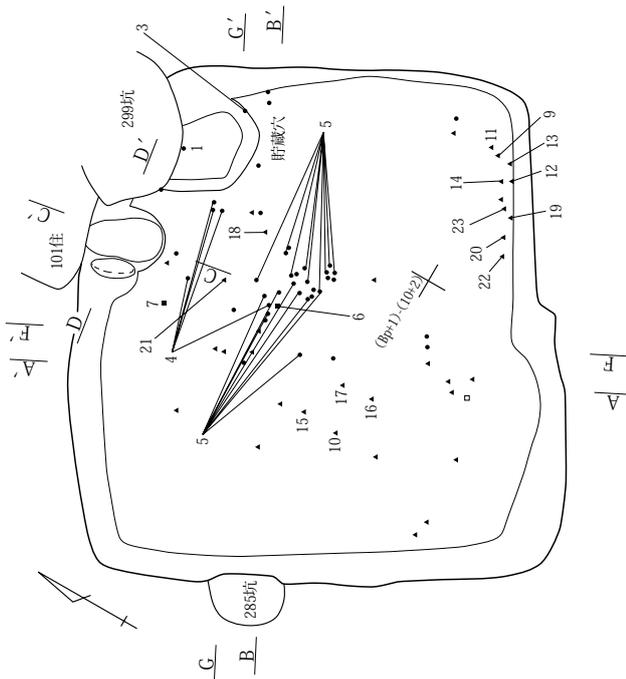
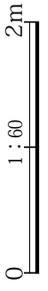
た位置には礫の検出はなかった。右側にも対応する位置に構築材が立てられていたものと考えられるが、299号土坑との重複によって削平されて残存しなかったものと思われる。燃烧部中央には最大5cmほどの厚さの焼土が形成されていたが、黒色灰層の残存は認められなかった。遺物: 土器よりも礫の出土が目立っており、中央部から出土した礫は上層からの出土であり、明らかに埋没過程で入ったものである。こうした礫とは違って、南東コーナー部の床面に11~14のような棒状礫が10点ほどまとまっており、いわゆるこもあみ石と言われる礫の典型的な出土状態を呈していた。他に、床面中央のやや西寄りの位置にも礫が9点ほどまとまっていたが、棒状を呈していないものも含まれている。土器は床面よりやや浮い



第16表 99号住居 ピット計測表

番号	規模	深さ	形状
P 1	—	0.17	不整形
P 2	0.34×0.30	0.17	楕円形
P 3	0.33×0.23	0.11	楕円形
P 4	0.38×0.27	0.13	楕円形
P 5	0.44×0.38	0.15	楕円形
P 6	—	0.21	不整形
P 7	0.56×0.40	0.29	楕円形
P 8	(0.43)×0.38	0.45	楕円形
P 9	(0.53)×0.43	0.27	楕円形

- F-F'
- 1 暗褐色土 XI層土主体で、XI層土小ブロックを含み、As-Cをごく少量含み、しまりがやや弱い。
 - 2 黄褐色土 XI層土主体で、XI層土小ブロックをわずかに、As-Cをごくわずかに含み、しまりが弱い。
- G-G'
- 1 暗褐色土 XI層土主体で、XI層土小ブロックを全に、As-Cを少量含み、しまりが弱い。

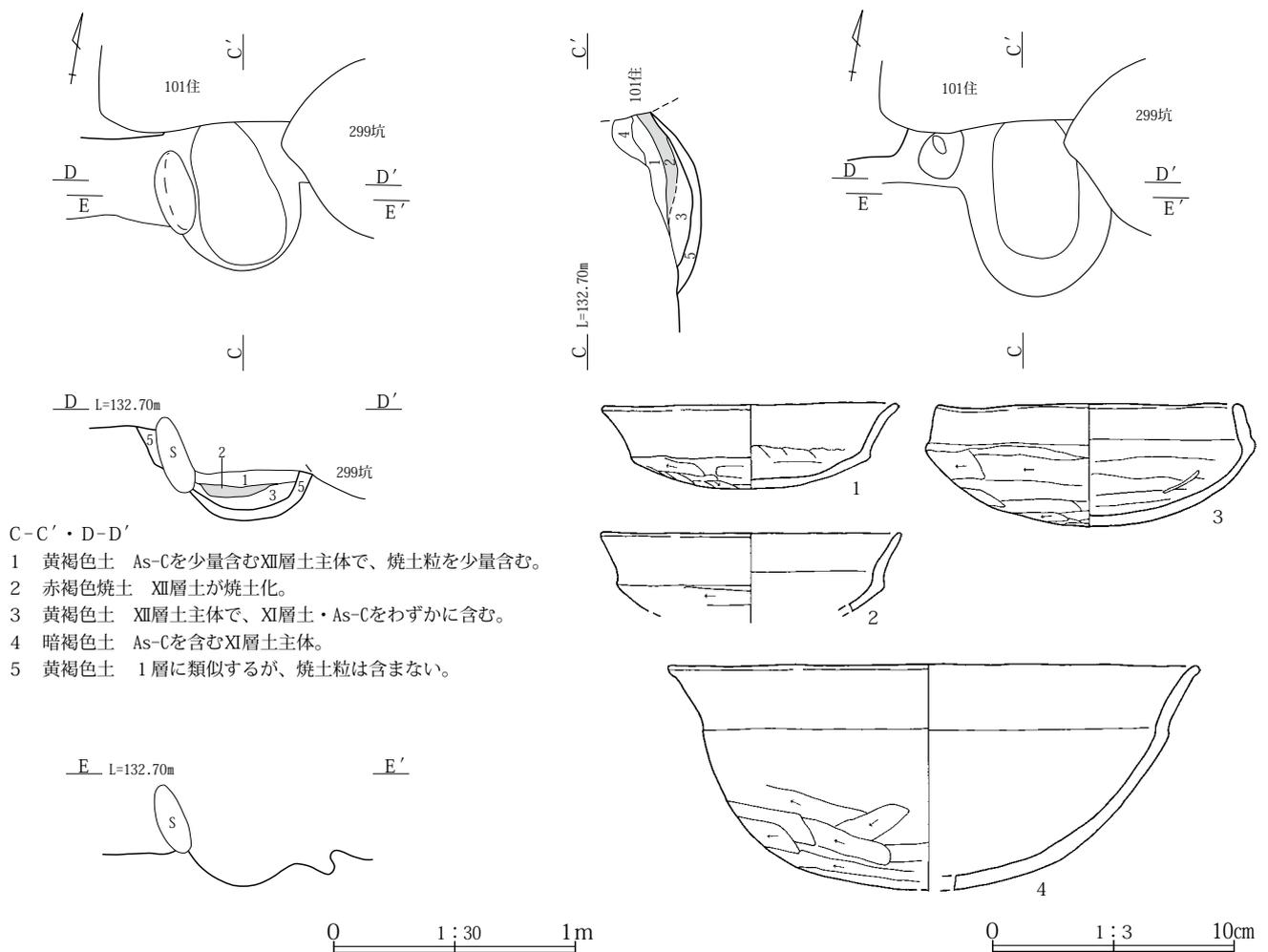


- A-A'・B-B'
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ッ岳系軽石をわずかに含み、河原石を上面に含む。
 - 2 黄褐色土 As-Cを比較的多く含むXI層土。
 - 3 暗褐色土 XI層土小ブロックを全体に、As-Cを少量含む。シルト質土で、しまりがやや弱い。
 - 4 暗褐色土 XI層土との混土で、As-Cを少量含み、しまりがやや弱い。
 - 5 暗褐色土 XI層土小～大ブロックを全体に、As-Cをごくわずかに含み、しまりが弱い。

第684図 99号住居

た位置から出土しており、鉢(4)と球胴の甕(5)は、カマド正面の位置に破片が散らばったような状況で出土し、1・3の土師器杯は北東コーナー部の貯蔵穴上面からの出土である。鉄製品は3点出土しており、6の鉄鏃が鉢の破片に混じって出土している。灰釉陶器碗の破片が1点出土しているが、住居確認面からの出土であり、この住居に伴うものとは考えられない。 **重複**：101号住居と重複しており、残存状況及び出土遺物から99号住居→101号住居である。 **所見**：平面確認段階では、カマドと見られる痕跡が1カ所しか捉えられず、その痕跡を99号住居のカマドと考えたために99号住居が101号住居よりも新しい住居として平行調査をおこなった。調査の進捗に伴って99号住居のカマドのすぐ東側に101号住居の南向きのカマドが存在することが判明し、また、99号住居の遺物よりも101号住居出土遺物が明らかに新しいものであることがわかったので、101号住居を先行調査後に99号住居の調査を進めた。壁は101号住居及び299

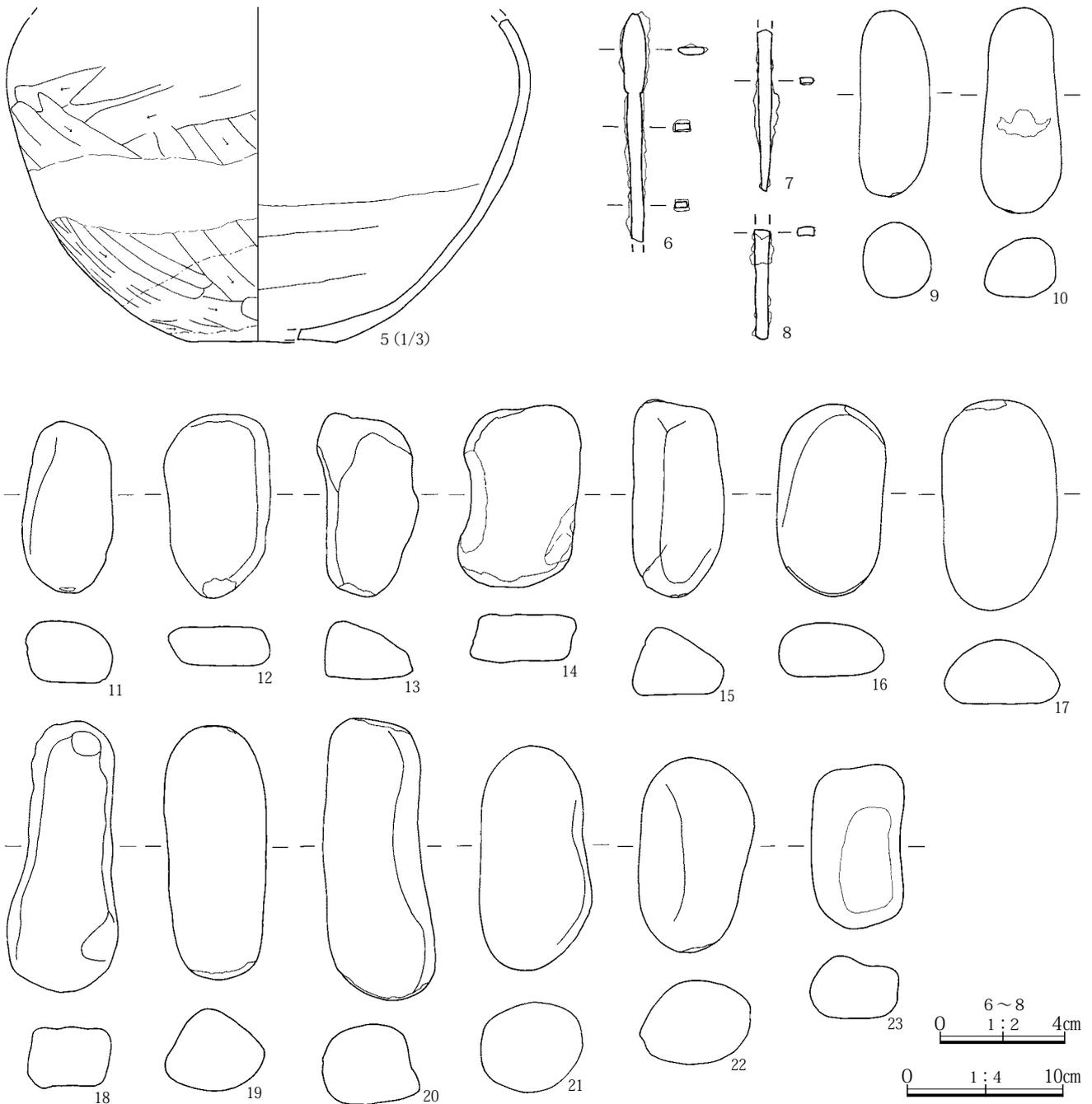
号土坑との重複部分を除いて検出することができ、やや傾斜を持つものの良好な残存状態であることが確認できた。南壁の中央に見られる壁の段差は溝との重複で上半が削平されたことによるものである。床面は、掘り方の行われている部分を除いてⅫ層土面に平坦に構築されていた。貯蔵穴は、北東コーナー部に検出した深さ0.14mほどの楕円形を呈すると考えられる掘り込みと見られるが、299号土坑と重複部分にあたり判然としない。掘り方は、床面中央に検出した土坑1(径0.76m、深さ0.15m、円形)、及び南壁西寄りに接して検出した土坑2(1.03×1.00m、深さ0.52m、不整形)が顕著なもので、他にピット状及び不定形の掘り込みが不規則に検出された。柱穴について、当該時期に近い住居では柱穴検出例があったために、位置を予測して井桁状にトレンチを入れてみたが、断面に掘削の痕跡はまったく検出することはできなかった。 **時期**：7世紀前半



C-C'・D-D'

- 1 黄褐色土 As-Cを少量含むⅫ層土主体で、焼土粒を少量含む。
- 2 赤褐色焼土 Ⅻ層土が焼土化。
- 3 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、Ⅺ層土・As-Cをわずかに含む。
- 4 暗褐色土 As-Cを含むⅪ層土主体。
- 5 黄褐色土 1層に類似するが、焼土粒は含まない。

第685図 99号住居カマド・出土遺物(1)



第686図 99号住居出土遺物(2)

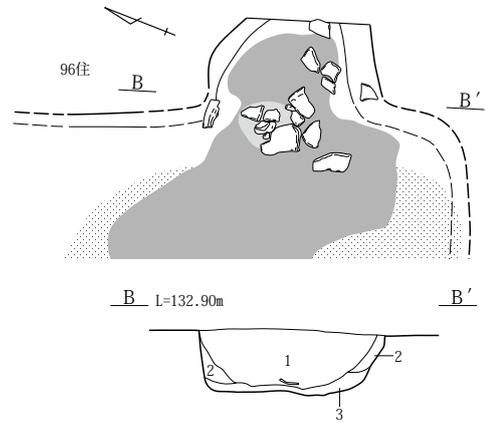
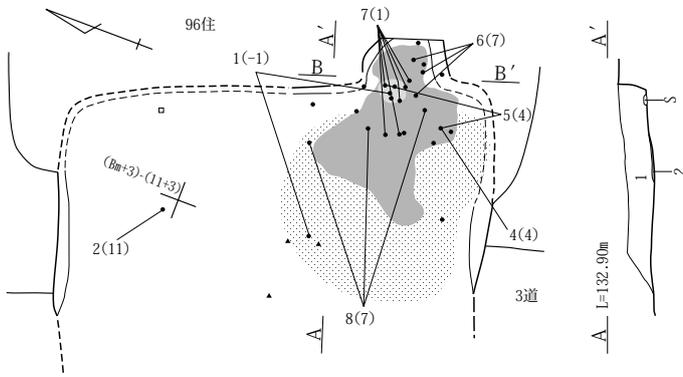
100号住居(第687図 P L.283)

位置:Bm-11グリッド 形状:隅丸長方形? 規模:(1.70m×3.41m 残存深度:0.21m 主軸方位:E-19°-N 埋没土:Ⅶ層土主体で、全体が均質な土層で埋没していた。柱穴:未検出 カマド:96号住居に設定した土層観察のためのベルト中で確認したもので、東壁の南寄りに位置しており、煙道部は96号住居の調査に伴って削平してしまった。燃烧部だけを調査したものであるが、想定される主軸方位がE-20°-Nとなる、燃烧部を壁外に設けたカマドと見て良いであろう。袖などに構築材

が使われていた痕跡はなく、支脚も残存していなかった。燃烧部の焼土形成はほとんど見られなかったが、燃烧部から屋内側に黒色灰層の広がりが観察された。遺物:遺物の多くはカマド燃烧部からその前面に集中した。8の羽釜はカマド前面の20cmほど上位から、土釜(7)と台付鉢(6)はカマド燃烧部から、須恵器环(1)は中央部床面から出土したものである。2の須恵器环は北寄りに離れた位置の上位から出土した。特筆されるのは、東壁の想定される位置のやや上位から、鉄滓が1点出土していることである。重複:96号住居及び3号道・14号溝と

重複しており、検出状況及び残存状況から14号溝→96号住居→100号住居→3号道の可能性が高い。 所見：調査区中央の低地部への落ち際に位置しているため、当初は住居の存在が認識できなかった。96号住居の調査時点で内部にカマドが検出されたことで住居の存在を確認し

た。西側は3号道によって削平を受けたものと考えられ、壁は南北壁及び東壁のごく一部とカマド側壁だけを検出した。床面はカマド灰層の広がりで容易に捉えることができ、カマド前面の径1.50mほどの範囲が硬化した状態で検出された。 時期：10世紀後半



A-A'

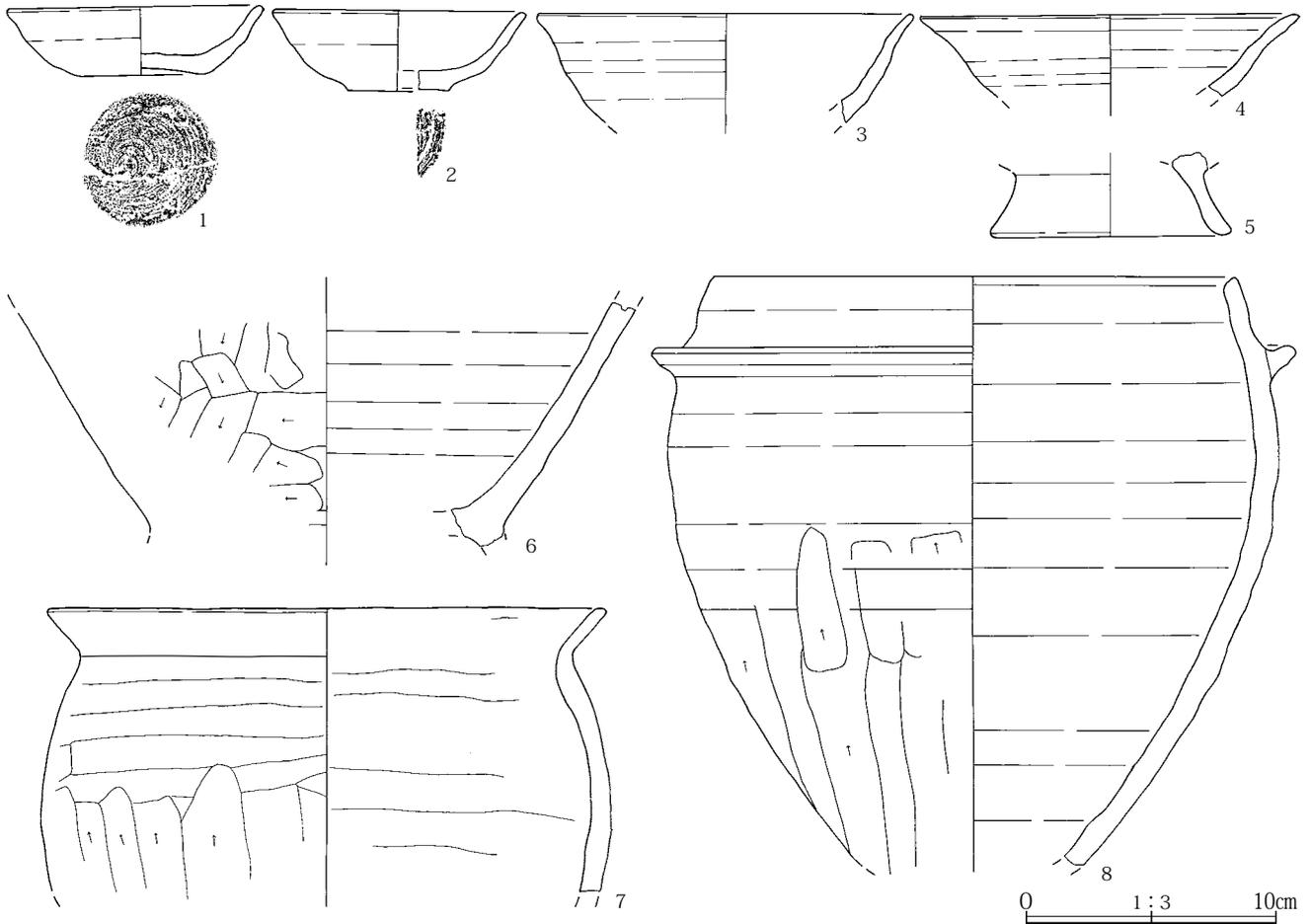
- 1 暗褐色土 As-Cを多く、二ッ岳系軽石粒を少量含む暗褐色土主体。
- 2 黒色灰層

B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土で、焼土粒を含まない。
- 2 赤褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土で、焼土粒を多量に含む。
- 3 赤褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土で、炭化物・焼土粒を含む。

0 1:60 2m

0 1:30 1m

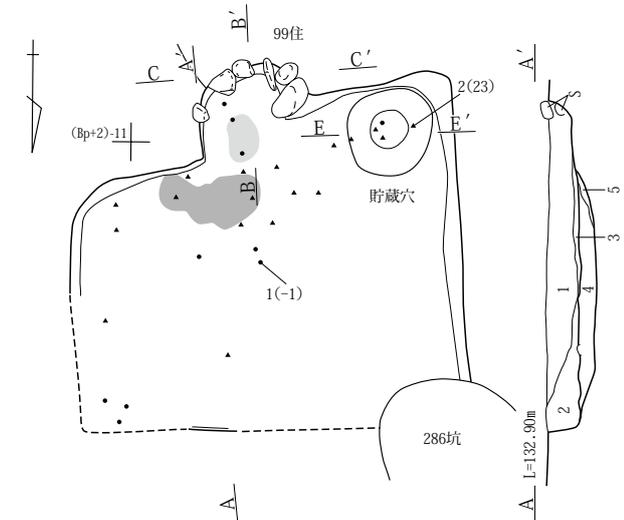


第687図 100号住居・出土遺物

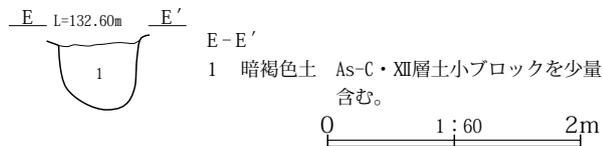
101号住居(第688・689図 P.L.154・155・283)

位置:Bo・Bp-10・11グリッド 形状:台形? 規模:2.08～(2.42)m×3.10m 残存深度:0.27m 主軸方位:S-5°-E 埋没土:Ⅶ層土主体で、上層のニッ岳系軽石含有が少ない。柱穴:未検出 カマド:南壁中央に検出したもので、カマド外形を捉えきれないで判然としないが、構築材の位置から想定される主軸方位はS-9°-Wである。燃烧部に形成された焼土層の位置から、燃烧部主体が壁外に設けられたカマドであり、奥壁部分に礫が構築材として立てられていた。燃烧部の焼土層の左寄りの屋内に黒色灰層の広がり確認され、灰の掻き出しが他の事例と異なり、左側に行われたものと思われる。カマド前面に比較的まとまった礫の出土が見られたが、被熱で変色した礫が混じっており、カマド側壁の構築材の一部が外されて廃棄されたものと考えられる。遺物:遺物の出土はごくわずかで、須恵器碗(1)と羽釜の小破片がカマド正面の床面から浮いた位置で、2の砥石が南西コーナー部の貯蔵穴内から出土した。重複:78・99号住居と重複しており、検出状況及び残存

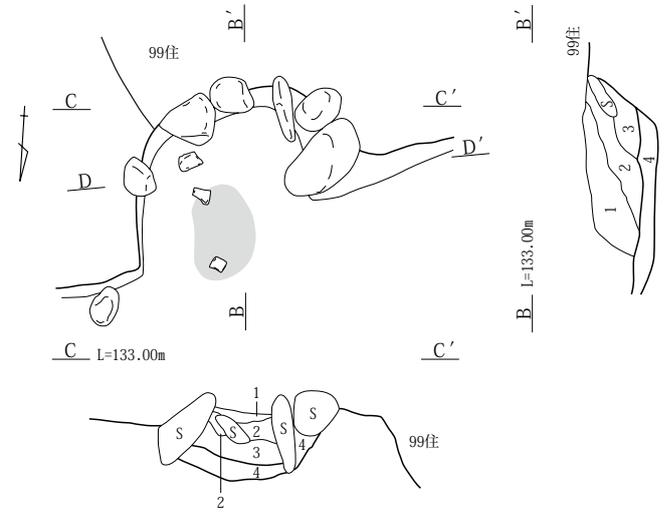
状況から78・99号住居→101号住居と考えられる。所見:78・99号住居と新旧関係が捉えられないまま調査を進めたもので、結果的に101号住居が最も新しい時期の住居であることが判明した。西壁は直線的に掘削されていたが、東壁から南東コーナー部は酸化鉄の凝集が多く、平面形が捉えられない部分があった。また、78号住居との重複部分は平面的に違いを確認することはできず、土層断面の観察で認識した色調の違いをもとに壁の位置を判断した。その結果捉えた平面形は、東側が異様に狭く南西コーナー部が南に張り出した特異な形状となっていた。しかし、西壁と南西コーナー部は比較的良好に確認されており変更の余地がないことから、東壁と北壁の位置が違っていても整形な平面形とはならないものと考えられる。床面はカマド灰層の検出面の延長で平坦に検出しており、中央部分を主体として0.15mほどの深さに掘り方が行われていた。貯蔵穴は、南西コーナー部に検出され、径0.69m、深さ0.52mの円形を呈していた。時期:10世紀前半



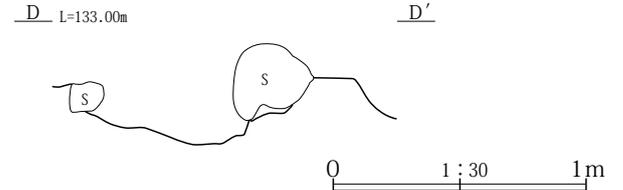
- A-A'
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体。
 - 2 暗褐色土 As-Cを少量含むⅪ層土主体で、ニッ岳系軽石をわずかに含む。
 - 3 黒色土 As-Cを斑状に含み、Ⅻ層土ブロックを含む。
 - 4 暗褐色土 As-Cをわずかに含むⅪ層土とⅫ層土ブロックの混土。
 - 5 黄褐色土 Ⅻ層土で、As-Cは含まない。



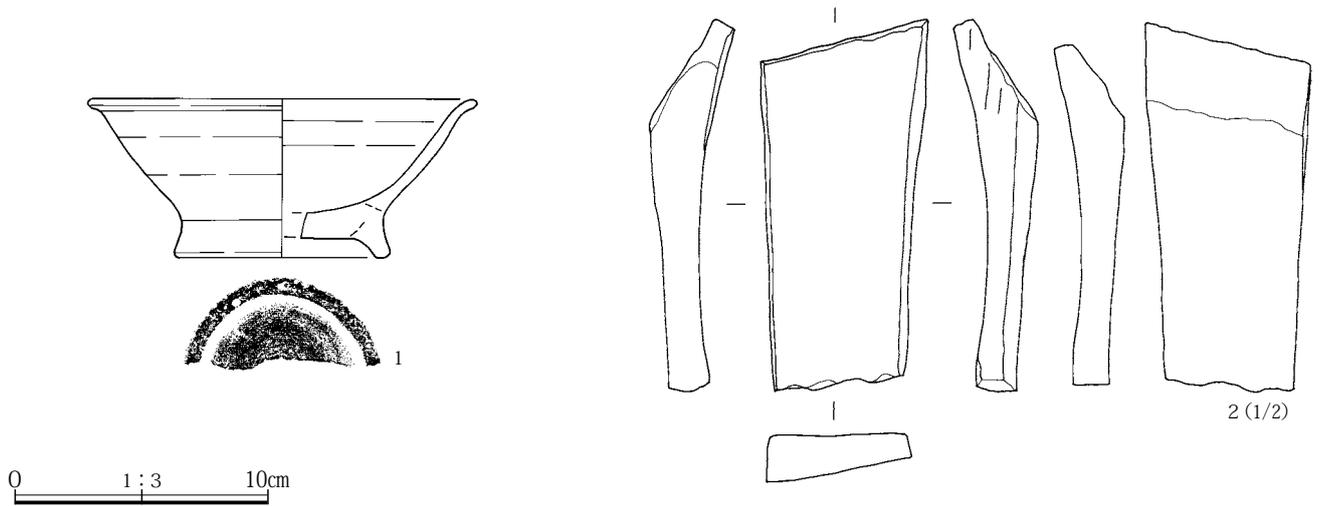
- E-E'
- 1 暗褐色土 As-C・Ⅻ層土小ブロックを少量含む。



- B-B'・C-C'
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土で、黒色灰・焼土粒をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 焼土粒を多量に、黒色灰を少量、As-Cをわずかに含む。
 - 3 暗褐色土 黒色灰を多量に、焼土粒を少量、As-Cをわずかに含む。
 - 4 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土。



第688図 101号住居

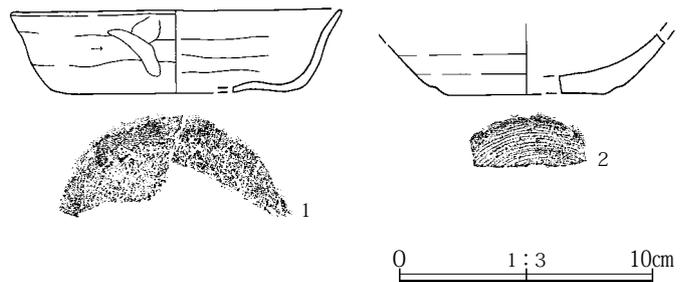


第689図 101号住居出土遺物

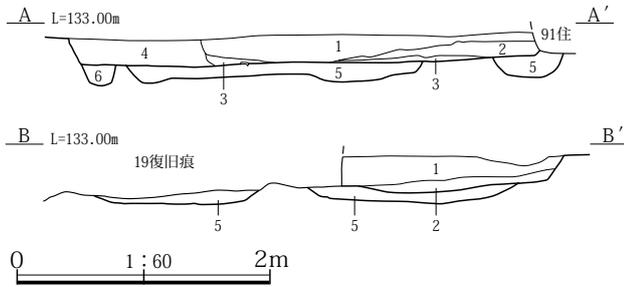
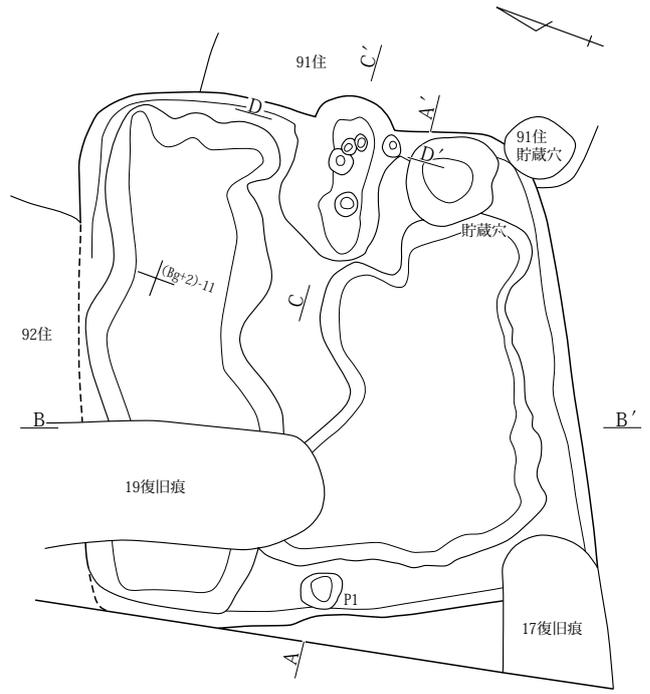
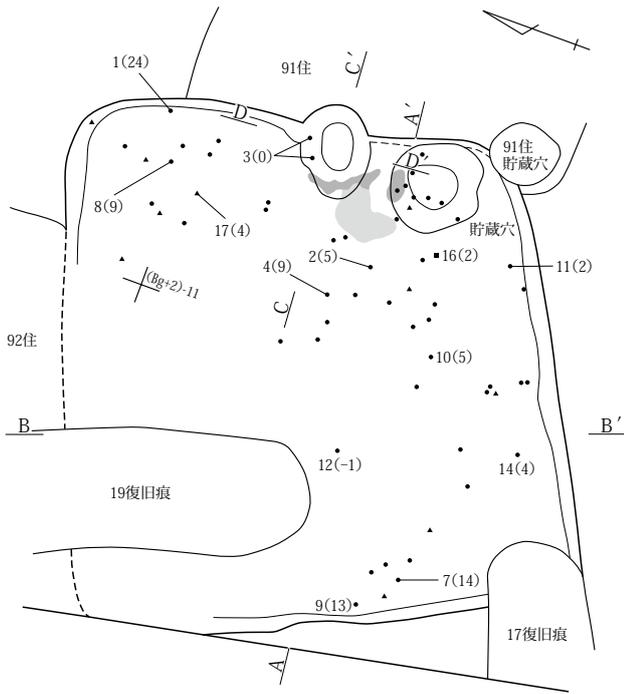
102号住居(第690～692図 P L.155・283)

位置：Bf・Bg-10・11グリッド 形状：隅丸台形？ 規模：3.75～(4.18)m×3.98m 残存深度：0.20m 主軸方位：E-28°-N 埋没土：Ⅶ層土主体で、二ッ岳系軽石の大粒を含む。中央西寄りに他遺構との重複を示すような土層の違いが認められる。柱穴：未検出 カマド：東壁中央わずかに南寄りに位置しており、上部は重複によって失われているため、燃烧部底面付近だけが残存した。燃烧部の窪みから推定した主軸方位はE-23°-Nである。燃烧部中央と考えられる位置に焼土層の形成はなく、焚口と見られる部分にわずかな焼土層が残存し、焼土層よりも屋内の左寄りに黒色灰層がわずかに検出された。掘り方は屋内に長く張り出した不整楕円形を呈しており、構築材を据えたような痕跡はまったく検出されていない。遺物：遺物の出土は破片が多く、北側から出土した遺物よりも、南寄りの遺物は高い位置から出土している。これは、遺物の多くが南側から廃棄されたことを示しているものと考えられる。須恵器環(2・4)、土師器甕(11・12)・台付甕の脚部(10)、須恵器甕の破片(14)、鉄製品(16)などが、この南寄りからの出土であり、土師器環(1)は東壁際の上位から、須恵器碗(9)は西壁際から出土した。埋没土中からは灰釉陶器の破片が5点出土しているが、小片であるため図化していない。重複：91・92号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物の比較から102号住居→91・92号住居である。所見：Ⅺ層土中で平面確認したものであるが、掘り込みが浅かったものか残存状況は不良である。東側のカマド

部分は91号住居との重複によって上半が削平を受け、北西部は92号住居との重複で失われている。直線的な西壁と南壁及び北東コーナー部は比較的明瞭に確認されていることから、台形状という形状が掘り過ぎによる変形ではないと考えているが、一点気になるのは、東西方向の土層に認められた東壁から2.60mほどの位置の縦方向の土層の違いである。こうした土層の違いは通常遺構の重複を示していると思われることから、南北壁の位置を一致させるような2棟の住居が東西方向にわずかにずれて重複している可能性は捨てきれない。ただし、出土遺物に明確な時期の相違するものは含まれていないので、重複であるとするは極めて近い時期の住居と考えざるを得ない。復旧痕による削平を受けている部分もあり、床面で条件良く平坦に検出されたのは南寄りの部分だけである。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出され、径0.70m、深さ0.33mの不整円形を呈している。掘り方は、北寄りと南寄りに住居を二分するように0.10～0.15mほど掘り込まれていた。また、西壁に接してP1(径0.30m、深さ0.16m、円形)を検出した。時期：9世紀後半

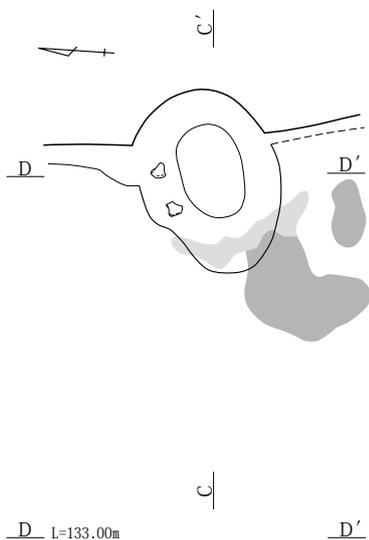


第690図 102号住居出土遺物(1)



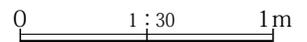
A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ッ岳系軽石(径5～10mm)を少量含む暗褐色主体で、しまりが強い。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを少量含む粘質土で、やや灰色を呈する。
- 4 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土とⅫ層土ブロックの混土。
- 5 暗褐色土 Ⅻ層土を全体に含み、As-Cを少量、炭化物粒をごくわずかに含む。
- 6 暗褐色土 Ⅻ層土大ブロックを斑状に、As-Cをごくわずかに含み、しまりがやや弱い。

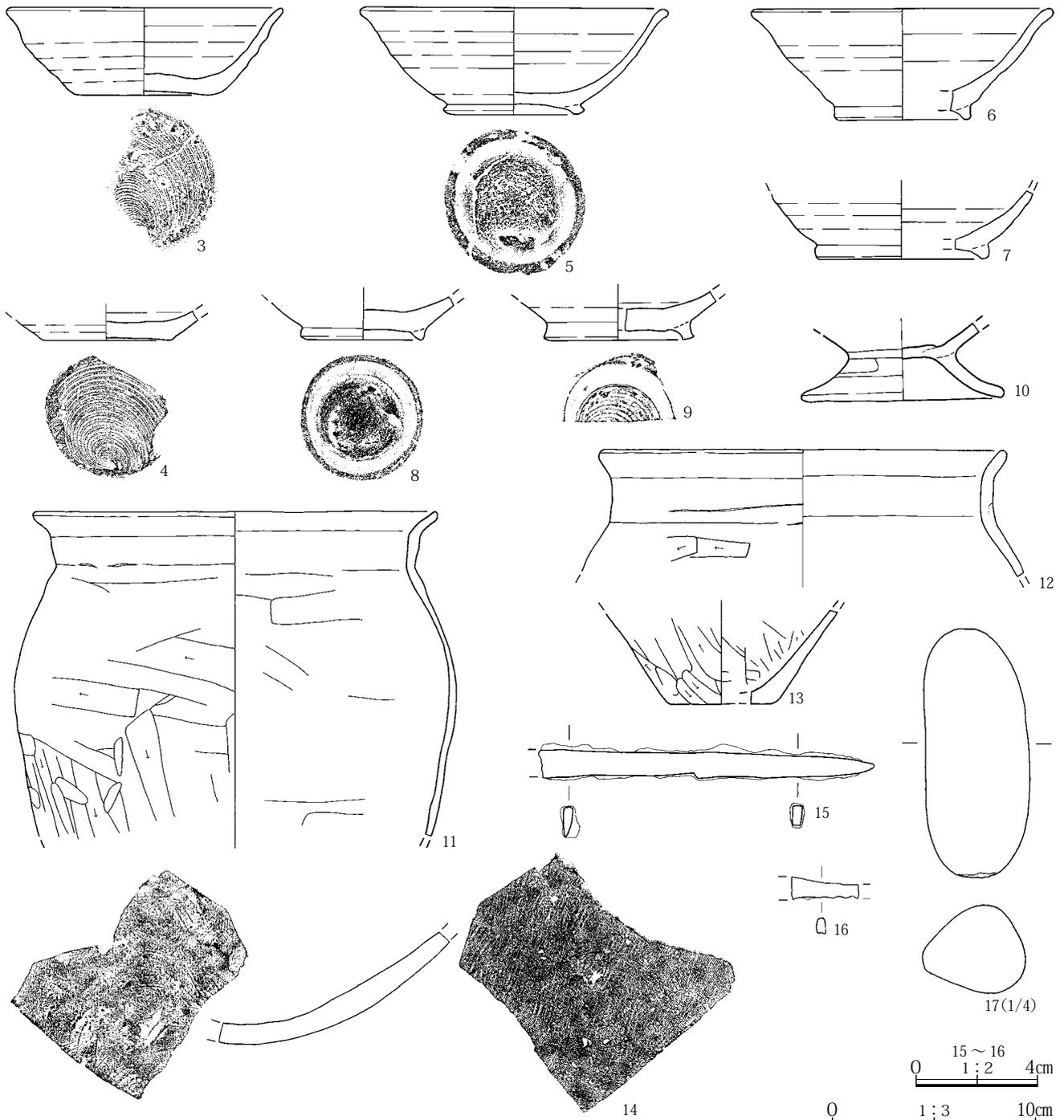


C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、As-C・炭化物・焼土粒を少量含み、しまりがやや弱い。
- 2 暗褐色土 炭化物を層状に、焼土粒をごくわずかに含む。
- 3 暗褐色土 Ⅻ層土をブロック状に、炭化物粒・焼土粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、焼土粒・小ブロックを多く含む。
- 5 暗褐色土 炭化物小ブロック・焼土小ブロックを少量含み、しまりがやや弱い。
- 6 暗褐色土 5層に類似するが、Ⅻ層土をブロック状に含む。
- 7 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅻ層土小ブロックを含み、焼土粒をわずかに含む。
- 8 赤褐色焼土
- 9 黒色灰層



第691図 102号住居



第692図 102号住居出土遺物(2)

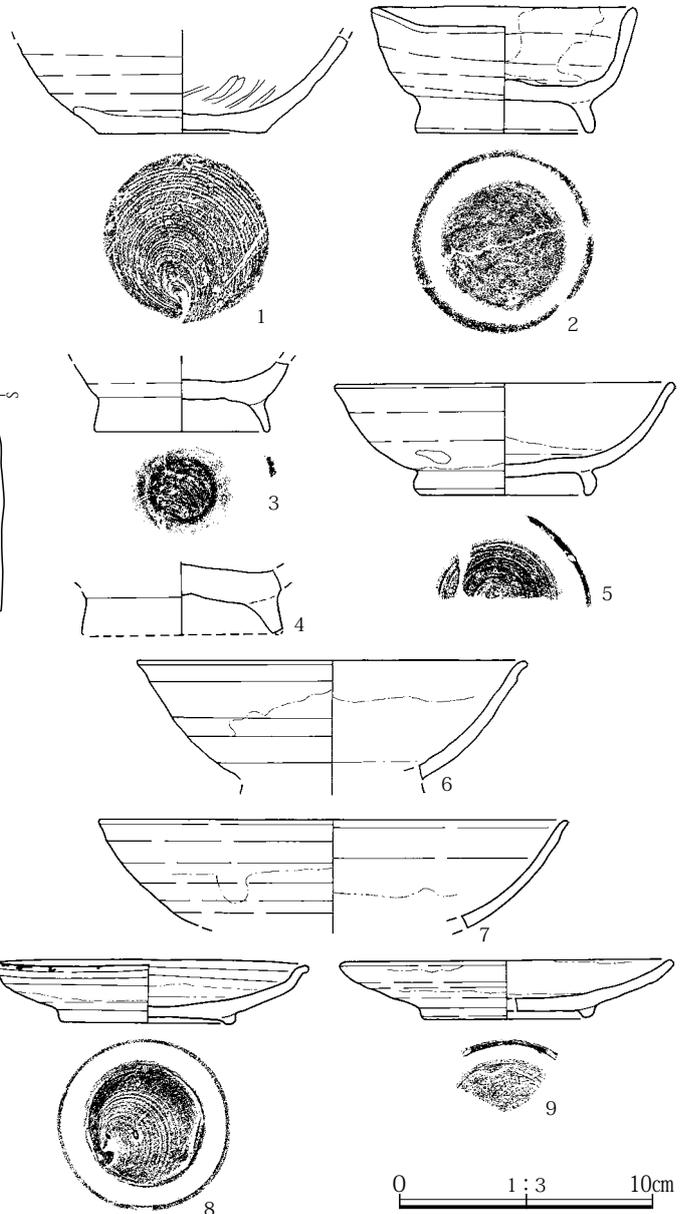
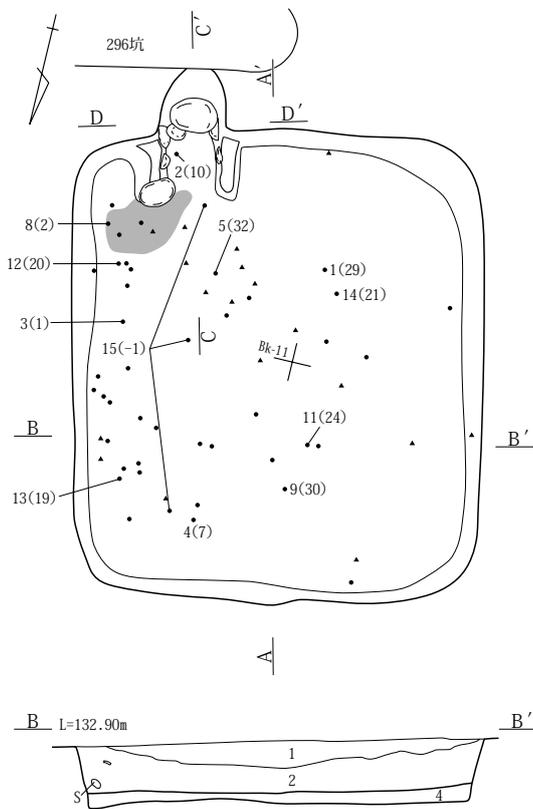
103号住居(第693・694図 P L.155・283)

位置：Bj・Bk-10・11グリッド 形状：隅丸長方形 規模：3.75m×3.24m 残存深度：0.38m 主軸方位：S-15°-E 埋没土：Ⅶ層土が主体で、色調の違いで上下2層に大きく分層することができる。柱穴：未検出 カマド：南壁東寄りに偏った位置に設置されていた。掘り込みが比較的深く平面確認の段階ではカマドの位置が特定できなかったが、埋没土を掘り下げていく過程で焼土粒と炭化物が目立ってきたことで位置が判明した。出

土遺物の時期から当初は燃烧部主体が壁外に設けられたカマドと考えていた。しかし、壁との接点に据えられた壁構築材と天井石との間は極めて狭く、奥に羽釜を設置するような空間は得られないことは明らかである。したがって、検出した壁構築材と天井構築材は、燃烧部と煙道との間に設けられたものであり、必然的に燃烧部主体は屋内に張り出して設けられていたものと考えられる。屋内の床面近くの位置に焼土ブロックが多く検出されていることがその証左と見られるが、焼土面として検出さ

れたものではなくブロック状を呈していることは、廃絶時点でのカマドの破壊の可能性が示唆される。カマド前面の床面に扁平な礫が5点出土しているが、被熱による変色等は観察されていないので、カマド構築材とは考えられない。検出部分で計測した主軸方位はS-13°-Eであり、西壁で計測した住居主軸方位とほぼ一致している。**遺物**：遺物は東壁寄りの床面から高い位置で出土したものが多く、西側では比較的少ない。したがって遺物の多くは東側から住居埋没過程で廃棄されたものである可能性が高いものである。これに対してカマド前面から出土している扁平礫は、ほぼ床面に接しており、住居廃絶に伴い廃棄されたかまたは廃絶後あまり時間の経過しない時点に入ったものであろう。住居の時期を知る手

掛かりとなり得る出土遺物は、カマド燃焼部から出土した須恵器碗(2)と羽釜(15)である。埋没土中からの出土遺物では、灰釉陶器碗(5)・皿(8・9)や緑釉陶器の破片(10)などがある。**重複**：住居との重複は見られないが、北西コーナー部で267号土坑、カマド煙道部を296号土坑によって削平を受けている。**所見**：Ⅶ層土中で確認ができたために壁の残存は良好で全周直立気味に検出された。床面は、カマドの焼土ブロックの検出面や扁平な礫の出土面を目安に捉えたが、硬化面もない上に色調の違いも捉えにくかったために、北寄りの一部は掘り抜いてしまった部分もある。床面とした面の精査を行ったが、貯蔵穴に相当するような掘り込みは検出されなかった。**時期**：10世紀後半



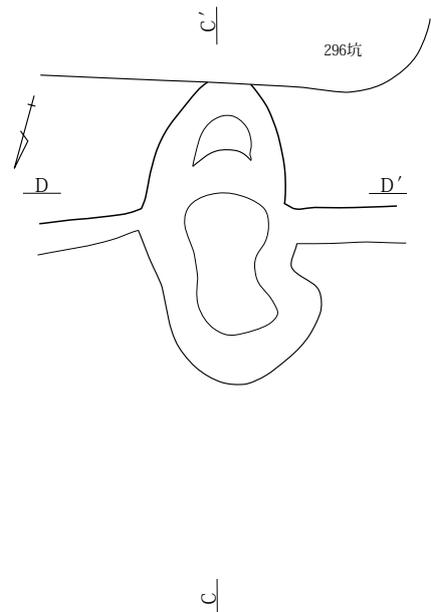
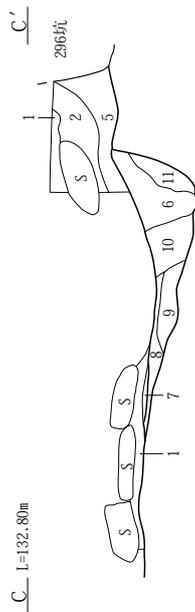
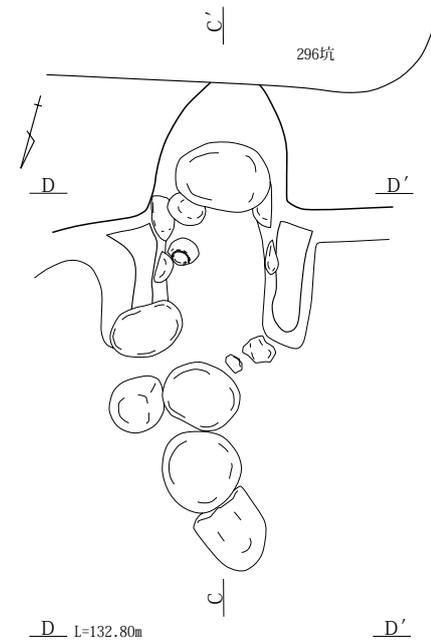
A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-C・Ⅺ層土大ブロックを全体に、ニッ岳系軽石を少量、炭化物細粒をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 As-Cを全体に、ニッ岳系軽石・Ⅺ層土小ブロックを少量、炭化物細粒をわずかに含み、粘性がやや強い。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、ニッ岳系軽石の含有は2層より少量である。
- 4 黒褐色土 As-Cを全体に多量に、ニッ岳系軽石・Ⅺ層土小ブロックをわずかに含み、粘性がやや強い。

0 1:60 2m

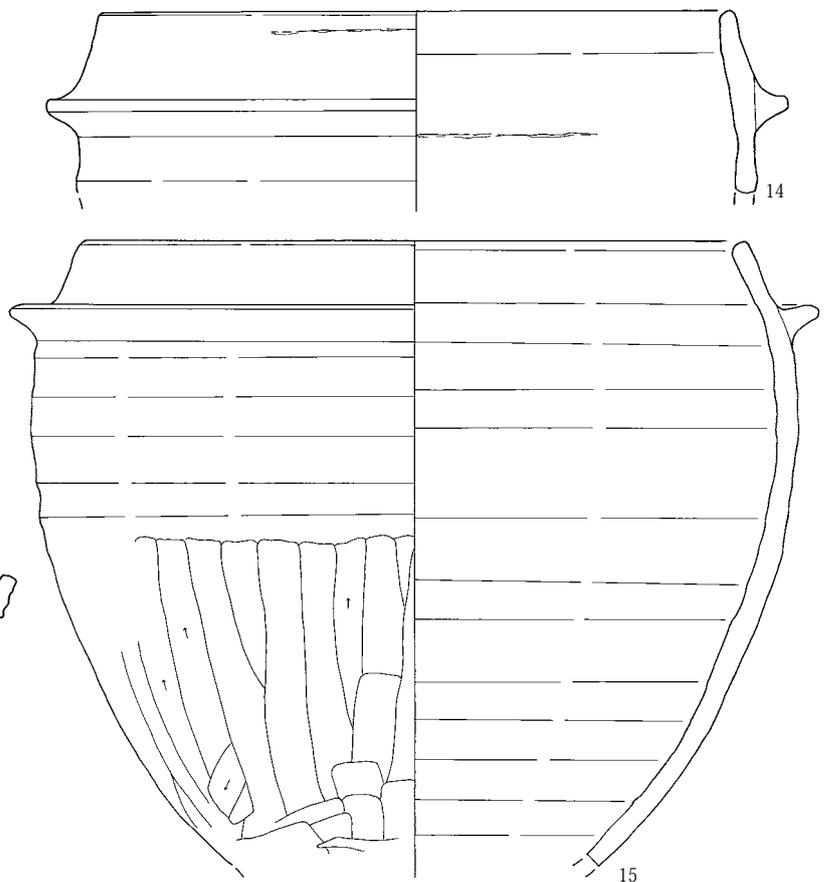
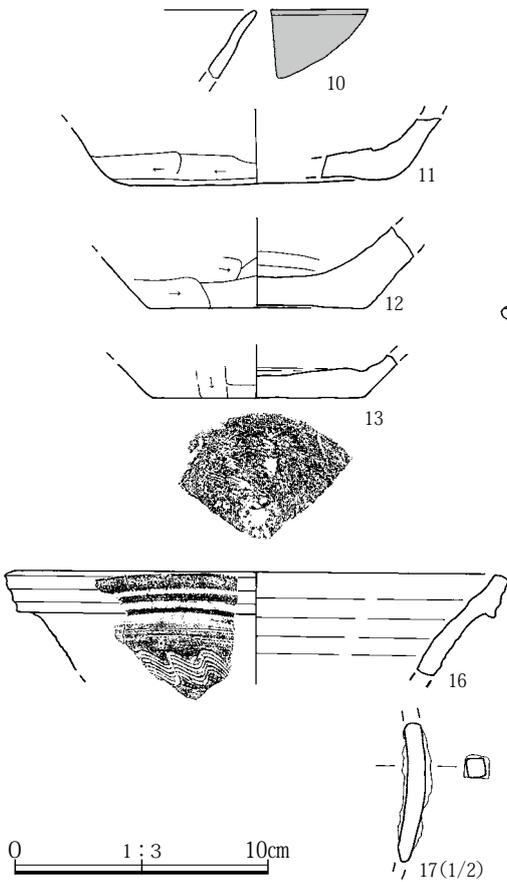
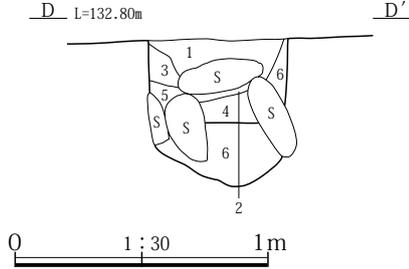
0 1:3 10cm

第693図 103号住居・出土遺物(1)



C-C'・D-D'

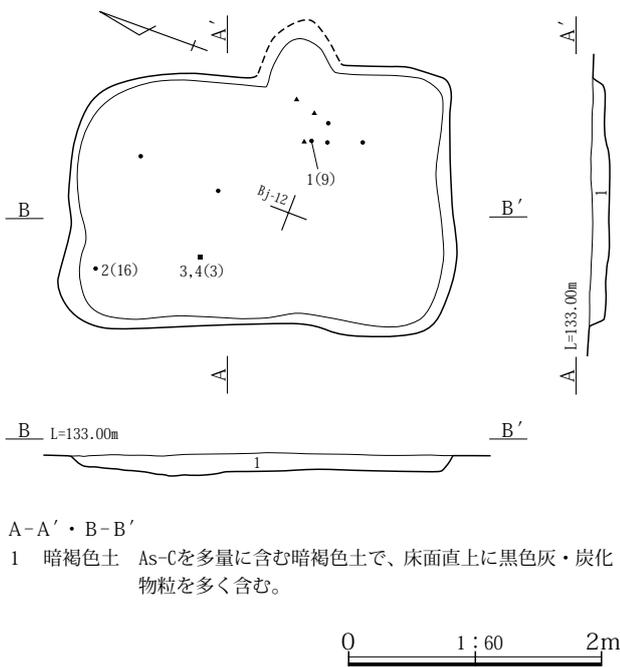
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ッ岳系軽石細粒を少量含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、焼土粒をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 1層に類似するが、As-Cの含有は1層よりやや少量で、しまりが弱い。
- 4 暗褐色土 As-C・焼土粒を多量に含む暗褐色土で、しまりが弱い。
- 5 暗褐色土 3層に類似するが、焼土粒をごくわずかに含む。
- 6 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土で、しまりが弱い。
- 7 暗褐色土 As-C・炭化物粒・焼土粒を少量含む。
- 8 暗褐色土 炭化物を層状に、As-C・焼土粒を少量含み、粘性がやや強くしまりが弱い。
- 9 赤褐色焼土 焼土主体で、As-Cをブロック状に含み、しまりが弱い。
- 10 暗褐色土 焼土粒・ブロックを少量、As-Cをわずかに含み、しまりが弱い。
- 11 暗褐色土 As-Cを多量に、炭化物・焼土粒をほとんど含まず、粒子が粗い。



第694図 103号住居カマド・出土遺物(2)

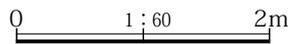
108号住居(第695図 P L.156・284)

位置：Bi・Bj-11・12グリッド 形状：隅丸長方形 規模：2.15m×3.00m 残存深度：0.12m 主軸方位：E-21°-N 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁中央やや南寄りに位置するものと考えられるが、確認面ですでにカマド本体は失われており、燃烧部底面がかろうじて残存していた。焚口と考えられる位置から礫が2点出土しているが、構築材が据えられるような位置ではなく、被熱痕跡もないことから構築材であった可能性は低い。遺物：遺物出土は微量で、床面から10cm



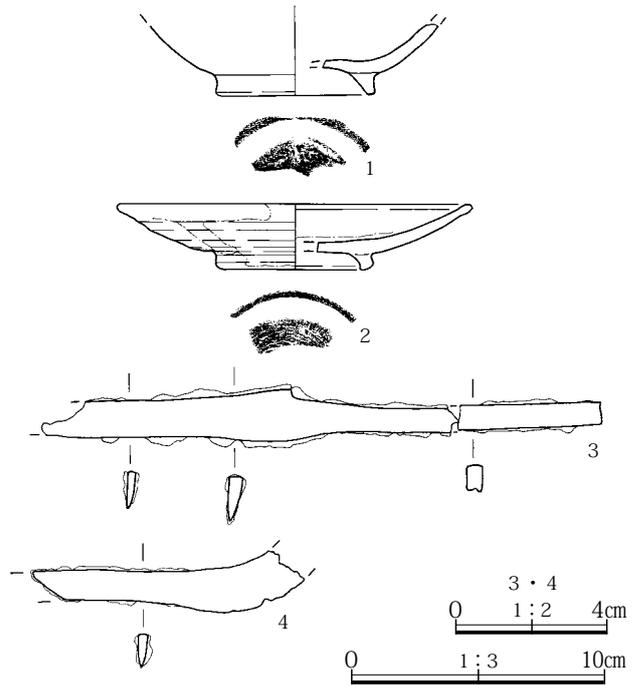
A-A'・B-B'

1 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土で、床面直上に黒色灰・炭化物粒を多く含む。



第695図 108号住居・出土遺物

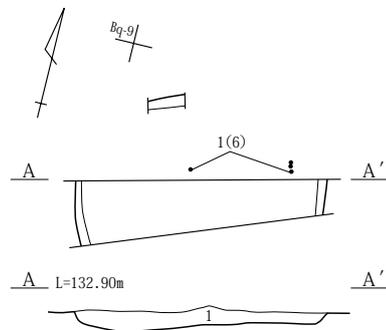
以上上からの出土であるが、灰釉陶器皿(2)が北西コーナー部から、3・4の刀子が中央西寄りからそれぞれ出土した。重複：西壁中央で87号住居と接するような位置にあるが、掘り込みそのものが重複してはいない。所見：Ⅸ層土中で平面確認を行った。床面は、西側はⅫ層土が床面となっていたので比較的容易に捉えることができたが、東側は低地部にかかっていることからⅨ層土と低地部埋土との識別がつかずに掘り過ぎてしまった。掘り過ぎの部分も含めて貯蔵穴になり得るような掘り込みは確認されなかった。時期：10世紀前半



109号住居(第696・697図 P L.156・284)

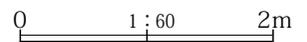
位置：Bp・Bq- 8グリッド 形状：不明 規模：1.97m×(1.08)m 残存深度：0.15m 主軸方位：E-20°-N 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：未検出 遺物：中央部の床面より0.08mほど上位から、1の足高の塼が1点出土した。重複：64・107号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から64号住居→107号住居→109号住居である。所見：調査区の南際に位置しており、Ⅰ区の調査ではまったく認識されていなかった。Ⅲ区の調査でも平面的には確認できず、64・107号住居の土層断面で確認したために、床面・壁ともに土層観察用のベルト部分でしか捉えることができなかった。Ⅰ区とⅢ区との調査区境に未調査部分はほとんどなかったが、この調査区境に偶然に位置していたこと

で検出できなかったか、または掘り込みが浅かったために確認面の段階でカマド本体は削平されていたものと考えられる。時期：10世紀後半

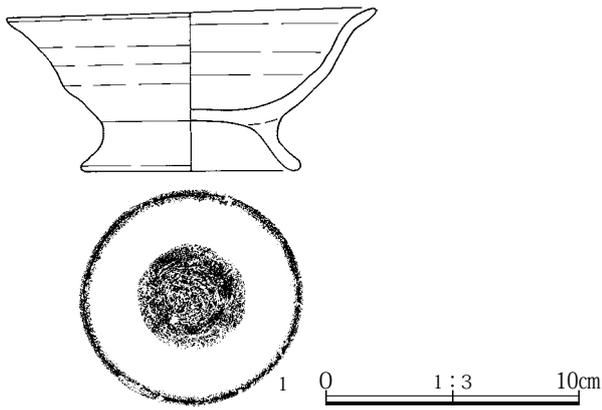


A-A'

1 暗褐色土 As-Cを少量、ニッ岳系軽石をわずかに含む。



第696図 109号住居

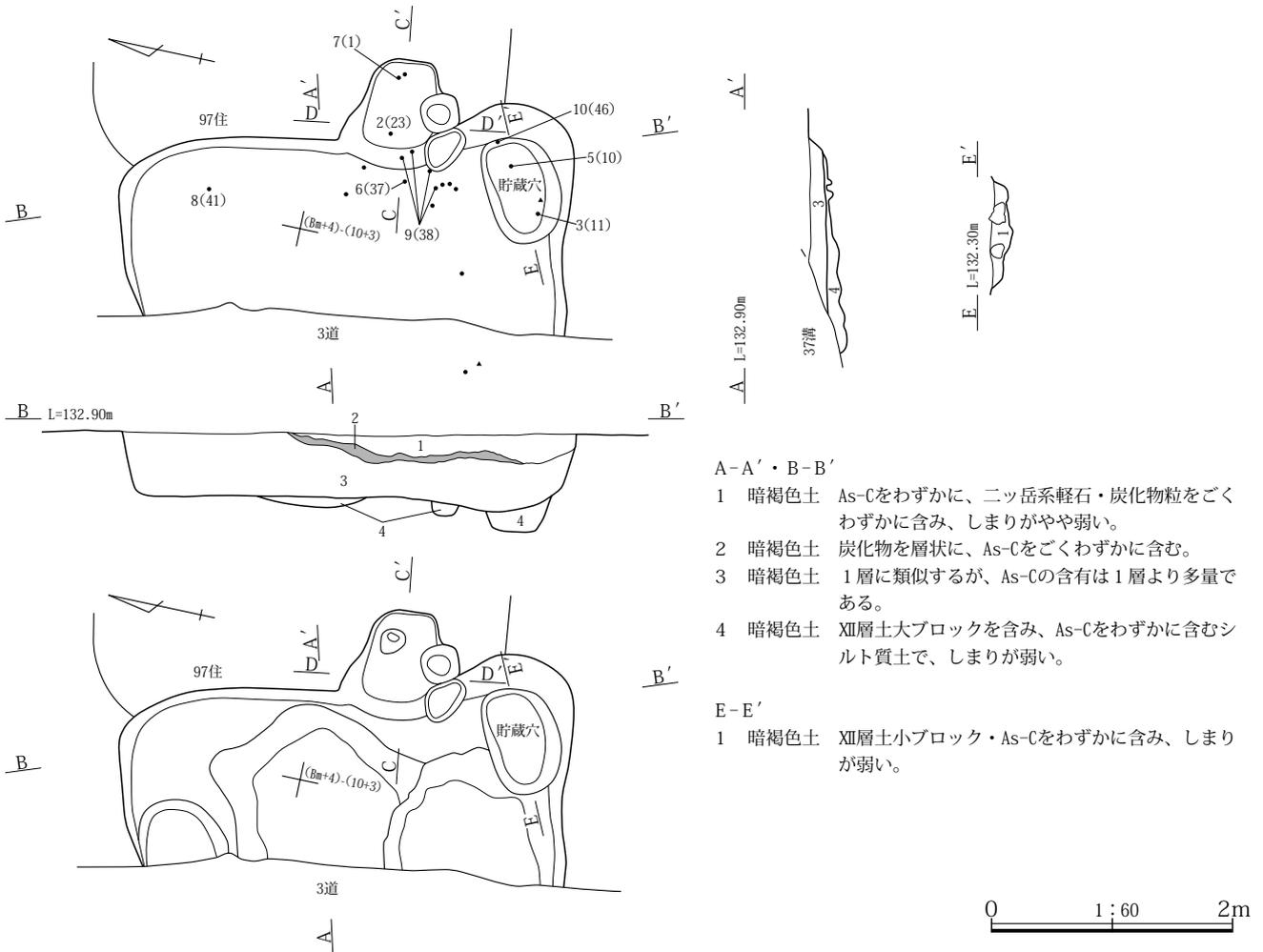


第697図 109号住居出土遺物

110号住居(第698・699図 P.L.156・284)

位置: Bm・Bn-10グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (1.95)m×3.75m 残存深度: 0.51m 主軸方位: E-17°-N 埋没土: VII層土主体の土で埋没しているが、炭化物を多く含有する薄層を挟んで上下2層に分層できる。柱穴: 未検出 カマド: 東壁南寄りに位置しており、97号住居との重複によって削平され掘り方だけが残存した。掘り方平面をもとに計測した主軸方位はE-10°-

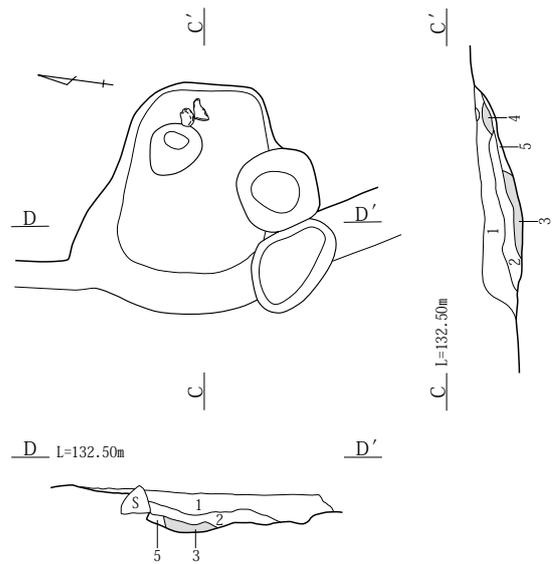
Nである。燃烧部中央と見られる位置に焼土層が残存しており、壁との位置関係から燃烧部が壁外に位置するカマドと見て良いであろう。左袖の位置に欠けた礫が1カ所検出され、被熱による変色が見られたことから構築材の下半が残存したものと考えられる。右側の対応する位置に礫の残存は見られなかったが、ピット状の掘り方が検出されたことから礫が据えられていたものと思われる。燃烧部奥の左側に偏った位置にもピット状の掘り込みがあることから、この位置に支脚が据えられていたものであろう。遺物: 須恵器碗(2)はカマド燃烧部掘り方で、須恵器碗(3・5)は貯蔵穴から出土したものであり、住居廃絶に伴う遺物と考えられるが、カマド燃烧部及び焚口から出土した自然釉の掛った瓶(9)や北東コーナー寄りの位置から出土した足高高台の碗(8)は、床面から20cm以上も上から出土したものであり、住居廃絶との時間差がありそうである。特筆されるのは、埋没土中からの出土であるが、鞆の羽口が2点出土していることであるが、110号住居は鍛冶遺構とは考えられないので、



- A-A'・B-B'
- 1 暗褐色土 As-Cをわずかに、二ツ岳系軽石・炭化物粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
 - 2 暗褐色土 炭化物を層状に、As-Cをごくわずかに含む。
 - 3 暗褐色土 1層に類似するが、As-Cの含有は1層より多量である。
 - 4 暗褐色土 XII層土大ブロックを含み、As-Cをわずかに含むシルト質土で、しまりが弱い。
- E-E'
- 1 暗褐色土 XII層土小ブロック・As-Cをわずかに含み、しまりが弱い。

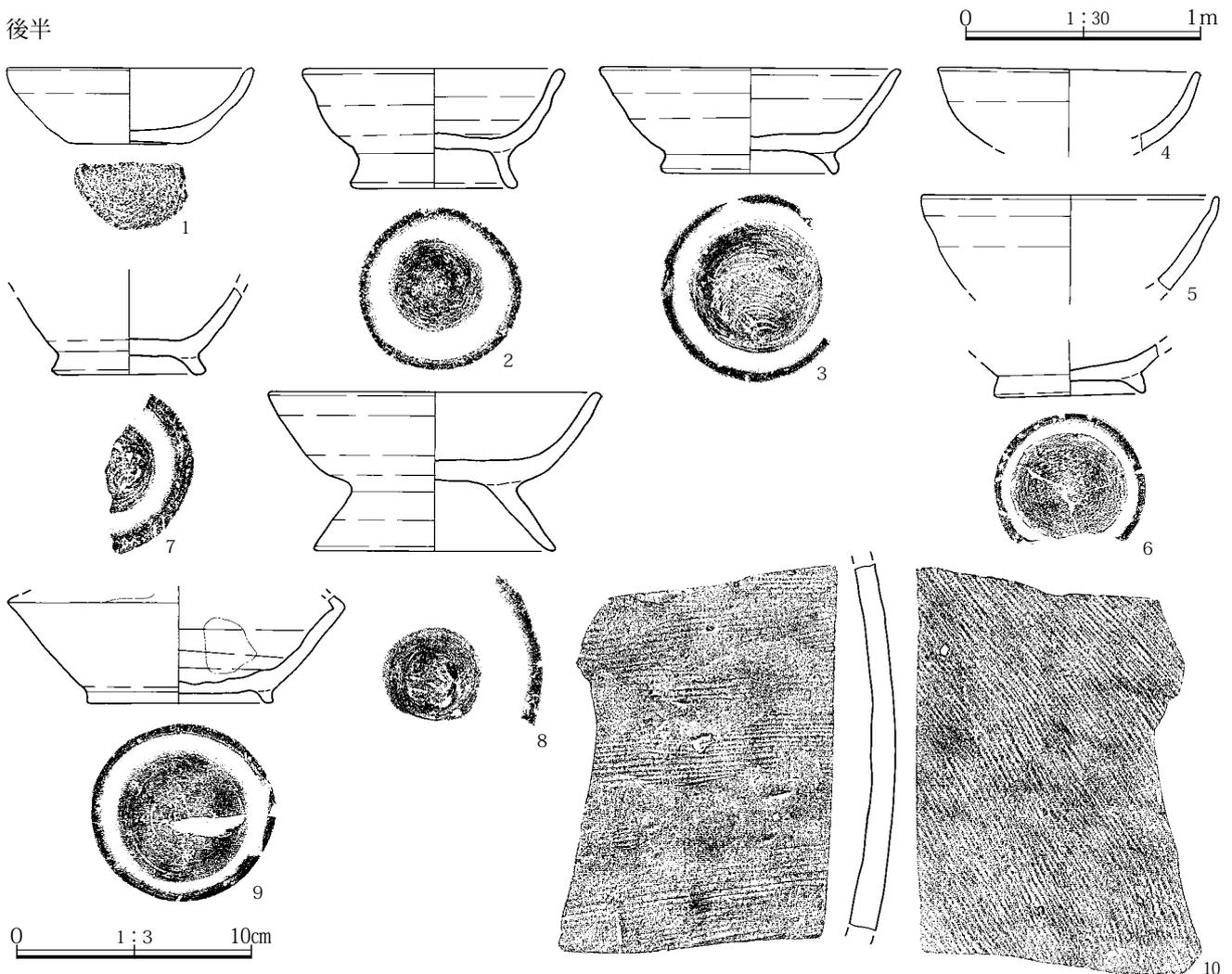
第698図 110号住居

埋没過程において周辺から混入したものであろう。重複：97号住居及び3号道と重複しており、検出状況及び残存状況から110号住居→97号住居・3号道の可能性が高い。所見：97号住居とともに平面確認した時点で、カマドの存在が確認できなかったために110号住居が古い時期の住居と判断して97号住居を先行調査した。その結果、97号住居の床面精査時に110号住居のカマド痕跡が確認され、97号住居の南西コーナー部に接する位置に110号住居の南東コーナーが位置することも判明し、住居の南北方向の規模がほぼ特定できた。住居西側は3号道の掘り込みによって削平されたものと考えられ、3号道の確認時点では住居の存在はまったく認識できなかった。床面は全体にⅦ層土中に築かれたものと考えられ、わずかではあるが掘り方が行われたものと判断した。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置しており、0.91×0.60mの楕円形を呈し、深さ0.17mで底面は平坦ではなく、礫2点とともに須恵器壺が出土している。時期：10世紀後半



C-C'・D-D'

- 1 暗褐色土 As-C細粒を多く含むⅦ層土。
- 2 暗褐色土 1層と類似するが、黒色灰を多く含む。
- 3 赤褐色焼土 Ⅶ層土が焼土化。
- 4 赤褐色焼土 焼土ブロック主体で、天井の崩落と思われる層。
- 5 黄褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅶ層土を含み、焼土粒をごくわずかに含む。

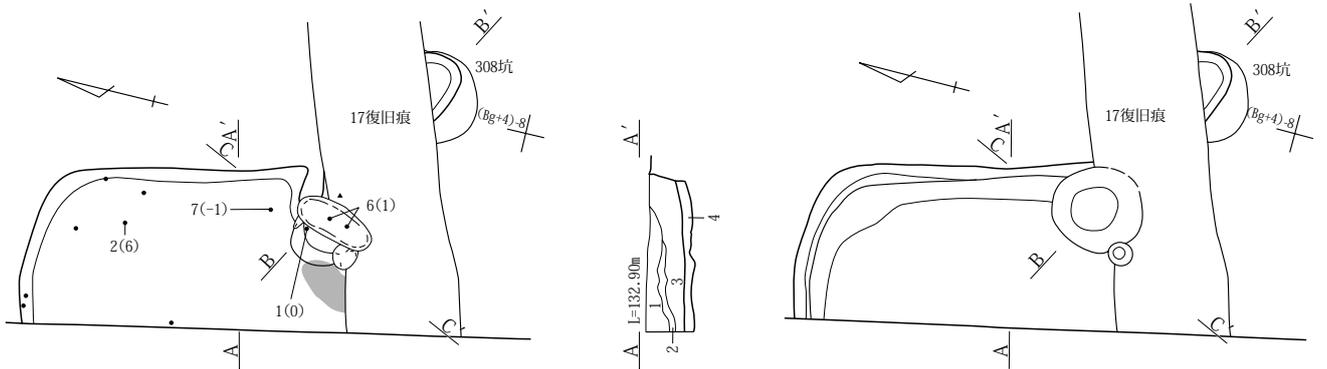


第699図 110号住居カマド・出土遺物

111号住居(第700・701図 P.L.157・284)

位置：Bg- 8グリッド 形状：不明 規模：(1.27)m×(2.53)m 残存深度：0.30m 主軸方位：E-14°-N
 埋没土：Ⅶ層土主体であり、下層にⅩⅡ層土小ブロックを含む。 柱穴：未検出 カマド：17号復旧痕との重複によって燃烧部南側から煙道部が削平されている。南東コーナー部に位置するコーナーカマドと思われ、当該時期の住居では珍しい例である。燃烧部は、屋内に張り出して設けられており、袖部の先端には礫を構築材として据えており、上に長さ65cmほどの楕円形の大形礫を天井石

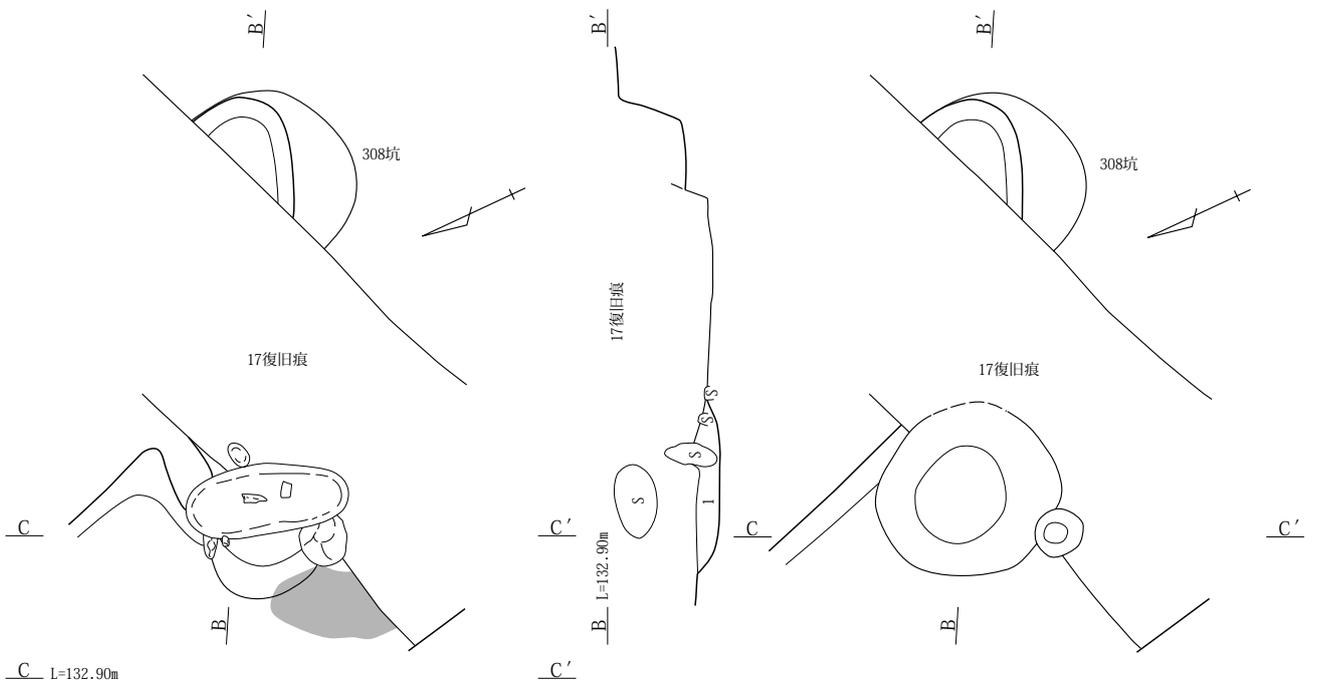
として載せていた。燃烧部中央の左寄りの位置には、棒状礫を住居側に傾けて据えて支脚としていた。燃烧部埋没土中層には焼土がブロック状に検出されており、天井部の痕跡と思われる。また、焚口部の屋内側右寄りの位置に黒色灰層が残存しており、灰の掻き出しが右手方向に行われたことが想定された。煙道部は17号復旧痕との重複で失われたものと思われるが、復旧痕を挟んで南東側に検出した303号土坑の底面に焼土が検出されており、煙道先端がこの部分まで延びていたものと判断した。両袖構築材と先の煙道から推定される主軸方位はE-20°



A-A'

- 1 暗褐色土 ⅩⅡ層土小ブロックを含み、As-Cを少量、ニッ岳系軽石をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 ⅩⅡ層土との混土で、As-Cをごくわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 3 暗褐色土 ⅩⅡ層土小ブロックを含み、As-Cを少量、炭化物粒をごくわずかに含む、しまりがやや弱い。
- 4 暗褐色土 As-CとⅩⅡ層土小礫を含む暗褐色土。

0 1:60 2m



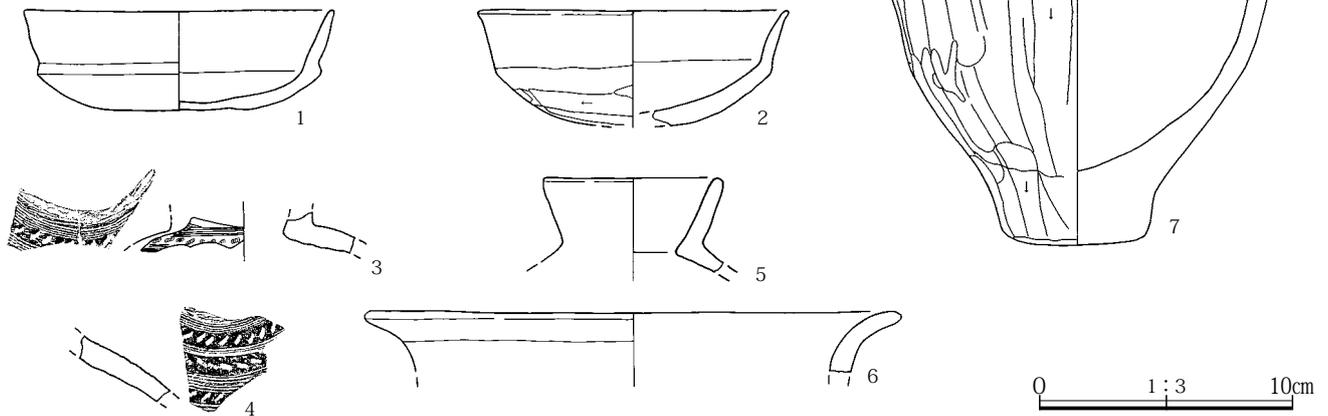
B-B'・C-C'

- 1 暗褐色土 ⅩⅡ層土を含み、As-Cを少量含む砂質土。

0 1:30 1m

第700図 111号住居

—Sである。 **遺物**：カマド燃焼部から土師器坏(1)・甕(6)の破片が、カマド左袖際の床面から甕(7)がほぼ完形で口縁部を東に向けた状態で出土した。 **重複**：17号復旧痕によって南壁及びカマドの一部が削平されている。 **所見**：調査区西端に検出されたもので、東側1/3程度を検出したものと考えられる。17号復旧痕が深くまで及んでいるため南壁は削平され失われている。床面は、カマド灰面の検出面として捉えたもので、北寄りの部分では小礫層が表面に現れていた。標準土層ではⅫ層土に当たるものであるが、基盤の小礫層が高い位置にあるためか検出部分では掘り方は行われていない。コーナーカマドとなるため、貯蔵穴は南西コーナー部または北西コーナー部に想定されたが、調査ができなため検出することができなかった。 **時期**：7世紀前半

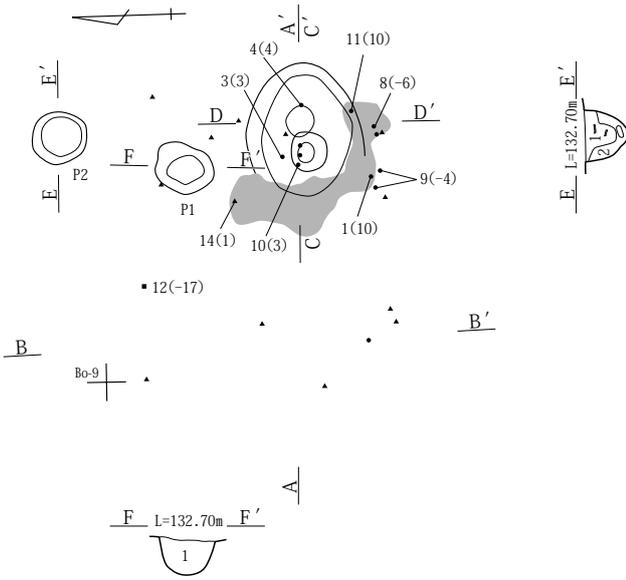


第701図 111号住居出土遺物

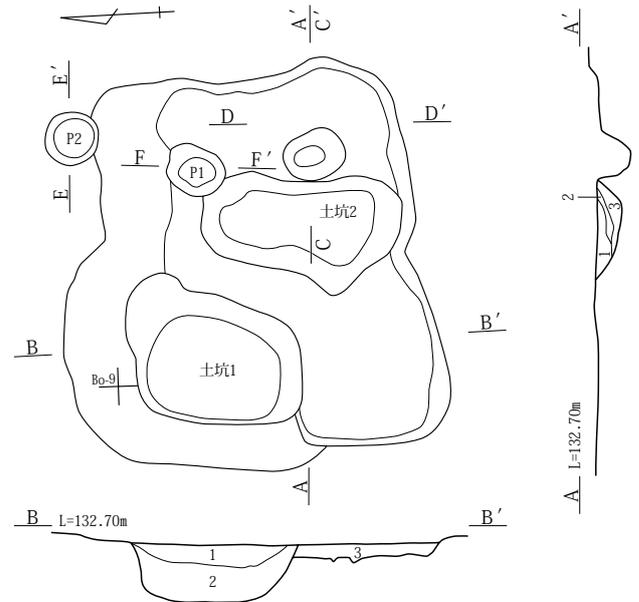
112号住居(第702・703図 P L.157・284)
位置：Bn・Bo- 8・9 グリッド **形状**：隅丸方形? **規模**：3.08m×2.97m **残存深度**：0m **主軸方位**：不明
埋没土：Ⅶ層土と思われるが不明。 **柱穴**：未検出 **カマド**：東壁南寄りの位置に検出したもので、燃焼部中央と考えられる場所には比較的厚い焼土層が形成され、焚口には黒色灰層の広がりが認められた。カマドの側壁はほとんど残存しておらず平面形は判然としないが、燃焼部が壁外に設けられていたものと思われる。 **遺物**：須恵器坏(1・3)・埴(4)・羽釜(10・11)はカマド燃焼部から、14の砥石はカマド焚口近くの黒色灰層上から出土した他、12の刀子が西寄りの床面近くから、鋤先(13)と思われる鉄製品は北寄りのピット状掘り込み内から出土した。灰釉陶器埴(8)は、カマド掘り方調査で、南側に接するような位置で出土したもので、厳密には燃焼部より外になるが、この部分で他の遺構との重複は想定しに

くいことから、112号住居の遺物として扱った。 **重複**：73号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から73号住居→112号住居である。 **所見**：Ⅻ層土中で平面確認をしたが、整形の平面形を捉えることはできず、Ⅶ層土で埋没した不整形の掘り方とカマド痕跡が検出され、さらに遺物が一定の範囲から出土したことから住居と認定した。床面はカマド付近では灰層の検出面として捉えることができたが、西側は確認時点で下げ過ぎて掘り方が現れてしまっていた。掘り方は、住居範囲が判然としないため全体に及んでいたものか判断できなかったが、西寄りで検出した土坑1(1.32×1.05m、深さ0.44m、隅丸長方形)が最も顕著なもので、他にカマド前面に土坑2(1.58×0.71m、深さ0.07m、不整楕円形)、北寄りにP1(径0.38m、深さ0.19m、不整円形)、P2(径0.42m、深さ0.31m、円形)を検出した。 **時期**：10世紀前半

第5章 2面の調査 (中世～古墳時代後期)

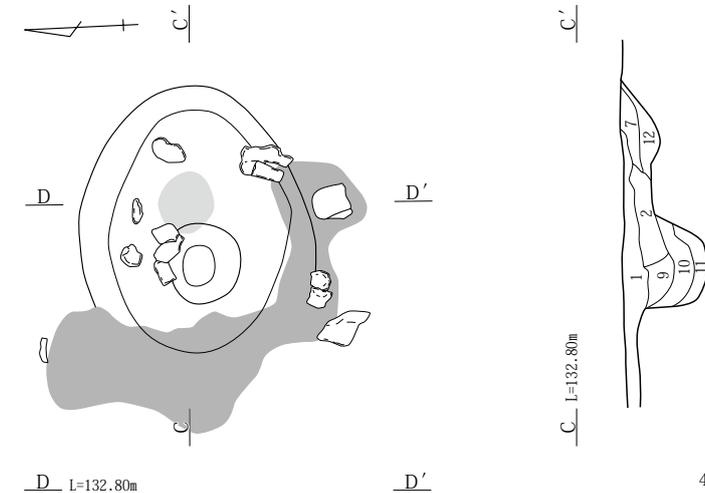


- E-E'
- 1 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土をブロック状に、As-Cをごくわずかに含み、しまりが弱い。
 - 2 暗褐色土 1層に類似するが、As-Cは含まない。
- F-F'
- 1 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土ブロックを含み、As-C・炭化物小ブロック・焼土粒をごくわずかに含み、しまりが弱い。



- A-A'
- 1 暗褐色土 XII層土をブロック状に少量、炭化物(径2mmほど)を少量、As-Cをわずかに含む。
 - 2 黒褐色土 炭化物を多量に、XII層土をブロック状に少量、焼土粒をわずかに含み、黒味が強い色調を呈する。
 - 3 明褐色土 XII層土主体で、焼土を少量、炭化物をわずかに含む。
- B-B'
- 1 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土小ブロックを全体に、As-Cを少量、炭化物小ブロックをごくわずかに含み、しまりが弱い。
 - 2 黄褐色土 XII層土主体で、XI層土小ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含み、しまりが弱い。
 - 3 暗褐色土 As-Cを少量含むXI層土主体で、炭化物をわずかに含む。

0 1:60 2m

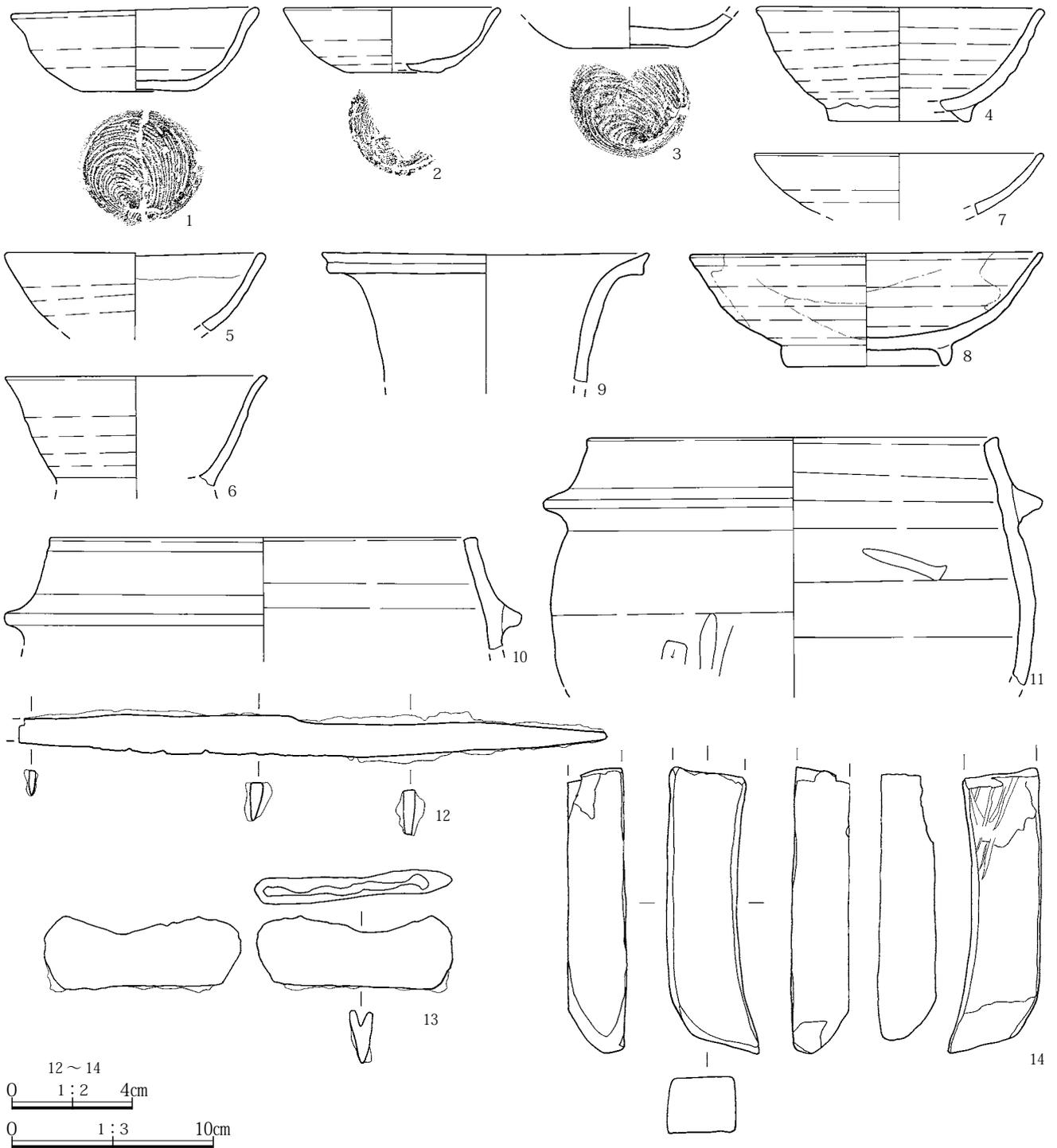


- C-C'・D-D'
- 1 暗褐色土 XI層土主体で、炭化物粒、焼土粒・ブロックを含み、As-Cを少量含み、しまりがやや弱い。
 - 2 暗褐色土 XII層土との混土で、焼土粒を多量に含み、しまりが弱い。
 - 3 暗褐色土 XII層土ブロックを含み、As-C・炭化物粒・焼土粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。

0 1:30 1m

- 4 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物の含有が1層より少量である。
- 5 暗褐色土 焼土を多量に、XII層土ブロックを5層と同程度、炭化物(径3mmほど)を少量、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む。
- 6 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cをわずかに含む。
- 7 暗褐色土 6層に類似するが、XII層土ブロックを含み、As-C・炭化物粒・焼土粒を少量含み、しまりがやや弱い。
- 8 褐色土 XII層土主体で、上面に焼土を含み、As-C・炭化物をわずかに含む。
- 9 暗褐色土 XII層土をブロック状に、炭化物・焼土粒をわずかに含む。
- 10 暗褐色土 XII層土をブロック状に40%程度含み、炭化物をわずかに含む。
- 11 褐色土 XII層土を60%程度含み、焼土ブロック(径20mm)を1点含み、炭化物をわずかに含む。
- 12 暗褐色土 XII層土をブロック状に、As-Cをわずかに、焼土粒をごくわずかに含む。

第702図 112号住居

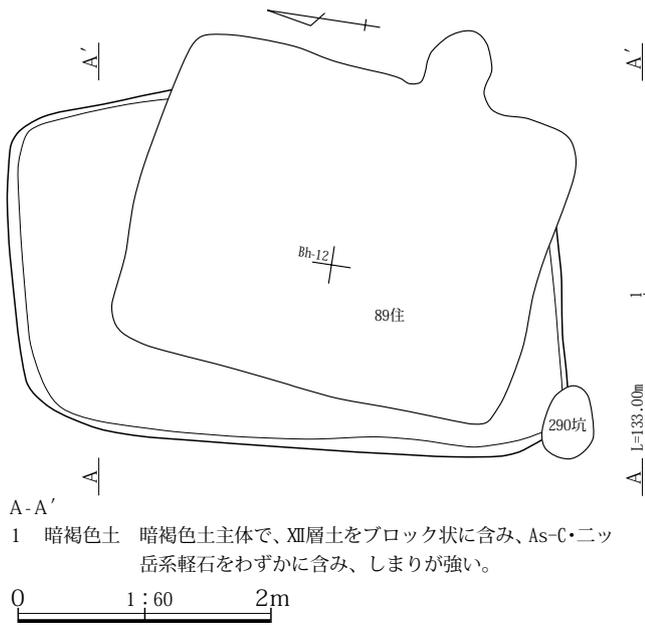


第703図 112号住居出土遺物

118号住居(第704図 P L.157)

位置：Bg・Bh-11・12グリッド 形状：隅丸長方形？
 規模：2.50m×4.29m 残存深度：0.05m 主軸方位：
 E-14°-N 埋没土：Ⅶ層土主体でⅫ層土ブロックを
 含む土層で、残存深度が浅く分層はできなかった。 柱
 穴：未検出 カマド：東壁に設置されていたものと思
 われるが、89号住居との重複によって失われたものと思
 われ、痕跡も検出することはできなかった。 遺物：な

し 重複：89号住居と重複しており、検出状況及び残存
 状況から118号住居→89号住居である。 所見：Ⅻ層土
 中で平面確認をしたもので、Ⅶ層土類似の土で埋没して
 いたため容易に確認をすることができた。しかし、わず
 かに一掻きで床面のⅫ層土が検出されており、ほとんど
 残存していなかったことが判明した。床面は平坦に検出
 したが、硬化面はなく貯蔵穴などの検出もなかった。
 時期：不明

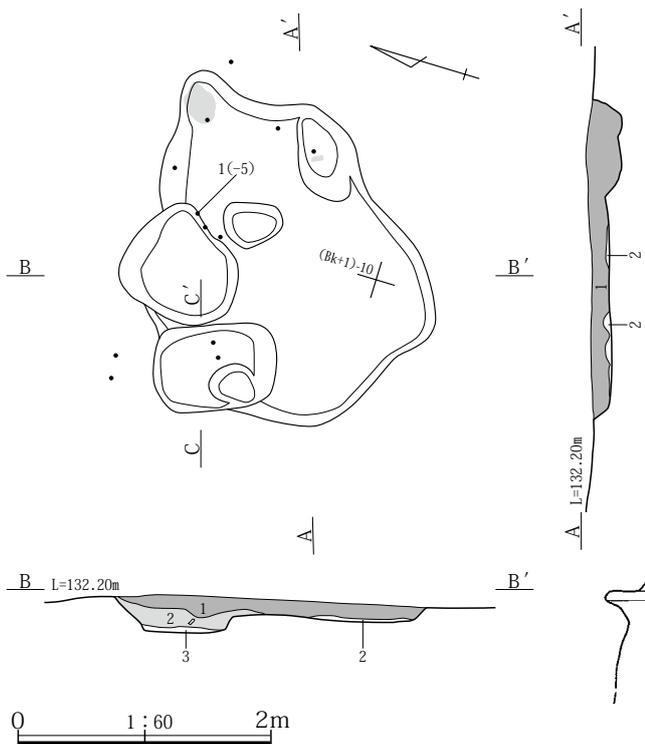


第704図 118号住居

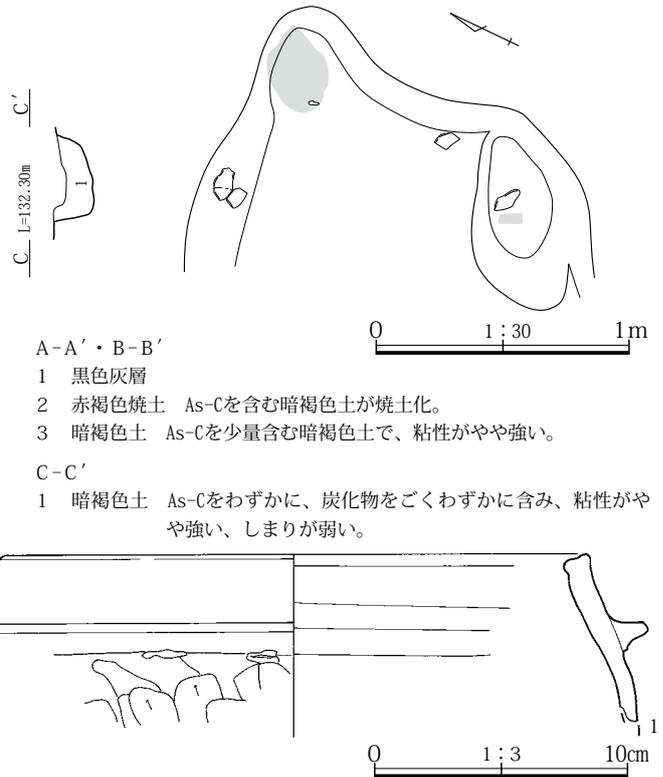
A-A'
1 暗褐色土 暗褐色土主体で、Ⅱ層土をブロック状に含み、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含み、しまりが強い。

126号住居(第705図 P L.157・284)

位置：Bk・B1- 9・10グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：-1m 主軸方位：不明 埋没土：Ⅶ層土と考えられるが未確認。柱穴：未検出 カマド：掘り方が残存したもので、燃烧部は焼土が形成されていたことから位置の特定ができたが、平面形までは捉えることができない。焚口から燃烧部にかけて隅丸三角形の掘り方が行われており、中央と両側にピット状の掘り込みを検出したが、構築材の据え方であるかどうか判断できなかった。燃烧部の位置関係から東壁に設置されていたことは确实であるが、詳細は不明である。遺物：唯一実測可能だった羽釜(1)は、カマド焚口に当たる位置から出土したものである。重複：なし 所見：カマド掘り方が残存したもので、住居平面形など詳細は不明である。 時期：10世紀代



第705図 126号住居・出土遺物

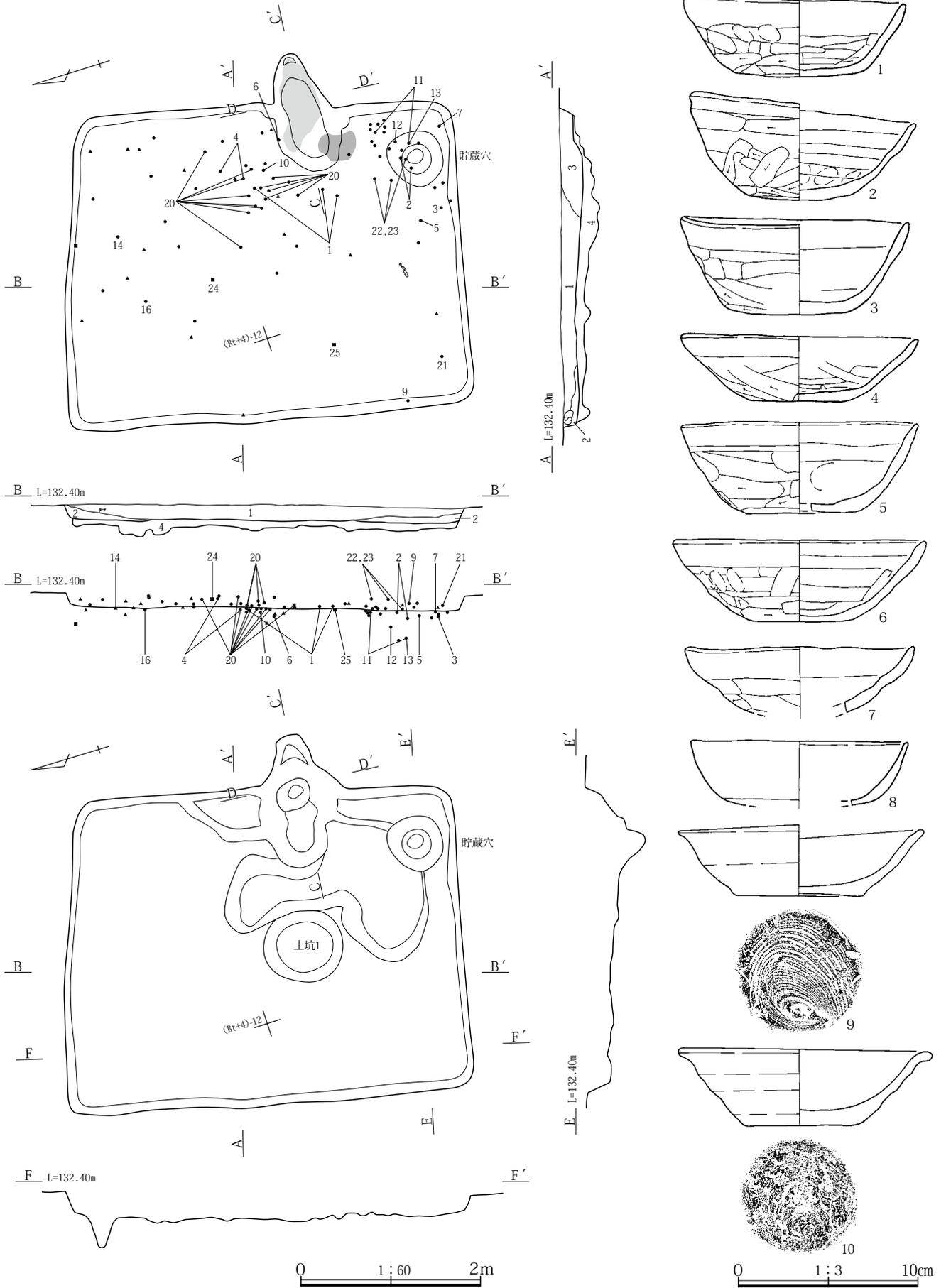


A-A'・B-B'
1 黑色灰層
2 赤褐色焼土 As-Cを含む暗褐色土が焼土化。
3 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土で、粘性がやや強い。
C-C'
1 暗褐色土 As-Cをわずかに、炭化物をごくわずかに含み、粘性がやや強い、しまりが弱い。

128号住居(第706～708図 P L.158・284・285)

位置：Bt・Ca-11・12グリッド 形状：隅丸長方形 規模：3.45m×4.47m 残存深度：0.18m 主軸方位：E-12°-S 埋没土：Ⅶ層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁中央やや南寄りに検出した。三角形の平面形で主軸方位はE-7°-Sであり、西壁で計測した住居主軸方位よりもわずかに北に振れている。燃烧部底面から側

壁下部は焼土化しており、焼土形成の主体が壁よりも外側に偏っていることから、燃烧部が壁外に設けられた当該期に多いカマド形態と考えられる。また、焚口右寄りの位置には薄い黑色灰層が残存しており、灰の掻き出しが右手方向に行われたことを物語っている。燃烧部には構築材や支脚は見られず、掘り方調査でも痕跡は認められなかった。燃烧部からは礫や遺物が出土する場合は多



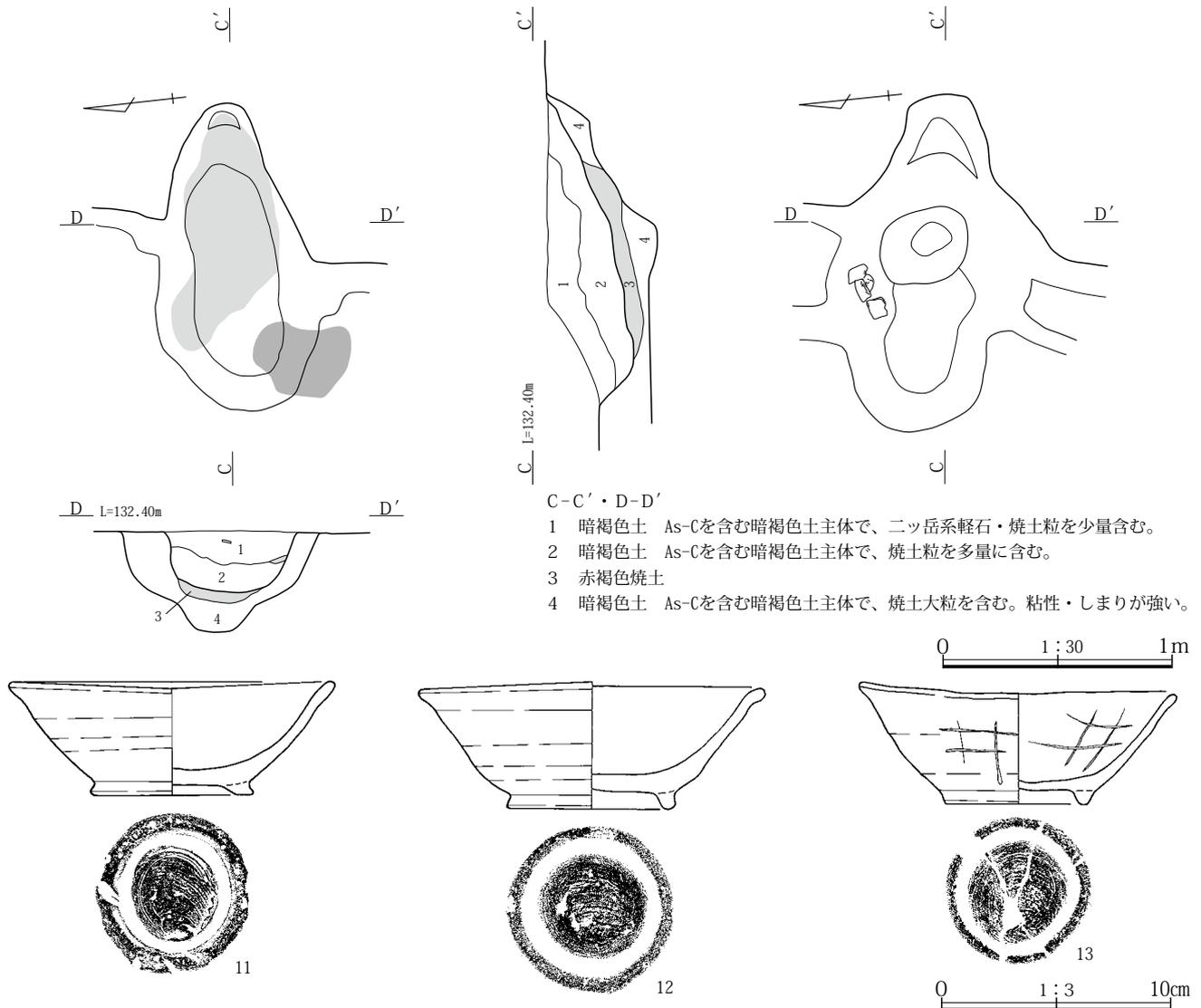
第706図 128号住居・出土遺物(1)

いが、土器の細片を除いてほとんど遺物出土が見られない。**遺物**：ほぼ全域に散在するが、カマド前面から貯蔵穴付近にやや集中する傾向がある。貯蔵穴内部から出土したものを除いて、床面直上から出土したものは少なく、わずかに浮いた位置からの出土である。武蔵型甕(20)がカマドの左手前方至近の位置から破片の状態で出土し、同じ場所には土師器杯(1・4)、須恵器杯(10)が集中していた。また、須恵器碗(11～13)・甕(22・23)、土師器杯(2・3・5)は貯蔵穴内及び周辺から出土し、9の須恵器杯は西壁の南寄りの位置から出土した。刀子2点(24・25)は、中央部から出土したものであり、灰釉陶器は貯蔵穴から出土した碗(18)の他に掲載しなかったものを含めると12点出土している。**重複**：なし **所見**：IX～XI層土中で平面確認を行い、埋没土のやや明るい色調と、ニッ岳系軽石の含有から比較的容易に平面形を捉

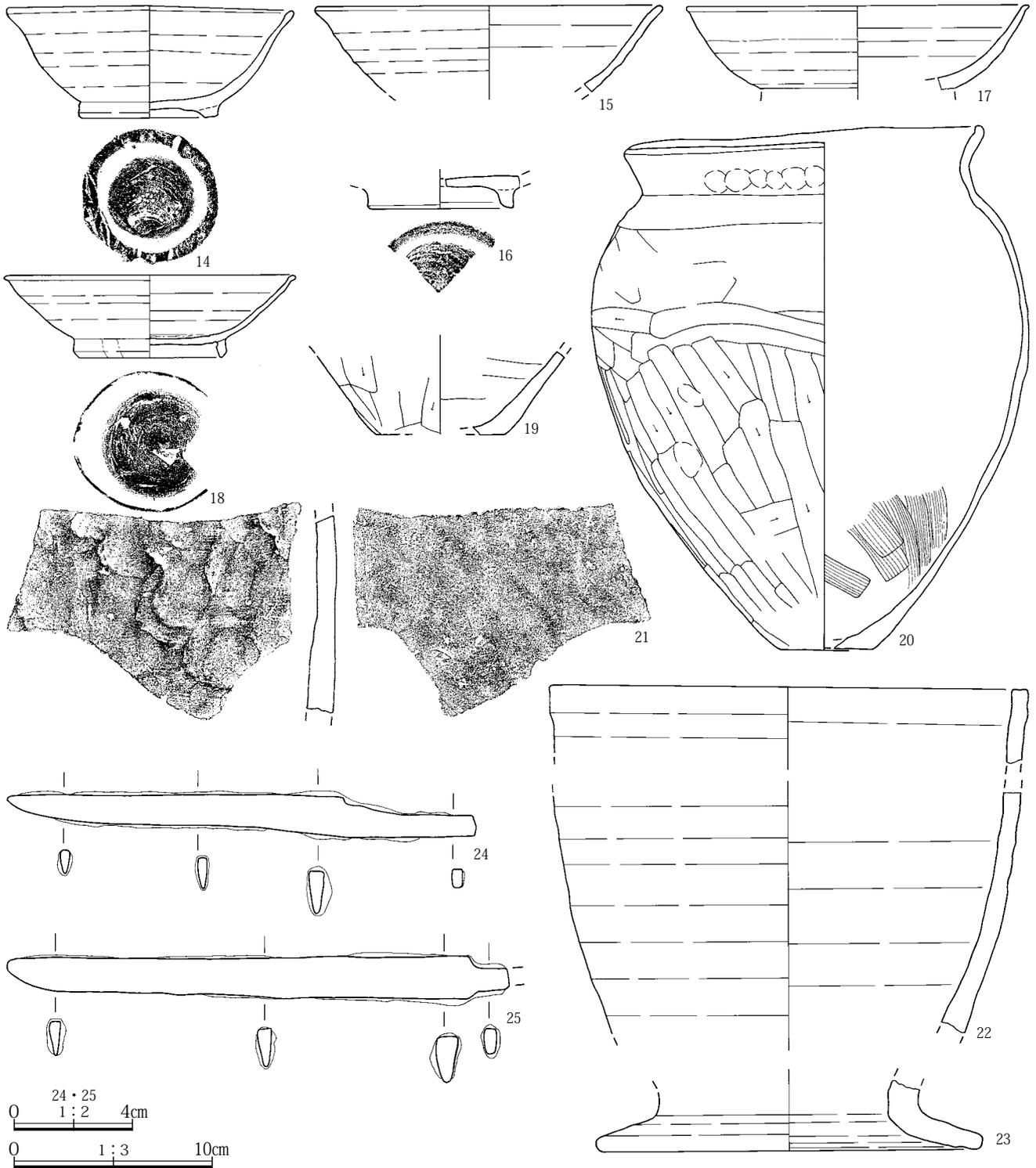
えることができた。壁は全周比較的良好に検出したが、掘り込みが浅かったものか残存壁高はわずかであった。床面は、VII層土にXII層土ブロックが混じった土で構築されており、埋没土との識別が困難であったが、カマド灰層の検出面を広げることで捉えることができた。貯蔵穴は、南東コーナー部で、径0.60m、深さ0.45mの円形を呈している。掘り方は全体に及んでいたが、特にカマド前面部分が深く、また、中央部に径0.80m、深さ0.16mの円形を呈する土坑1が検出されている。 **時期**：10世紀前半

A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を多く含む暗褐色土主体で、XII層土小ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を多く含む暗褐色土主体で、XII層土ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を多く含む暗褐色土主体で、XII層土小ブロック・焼土粒を多く含む。
- 4 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土とXII層土の混土。



第707図 128号住居カマド・出土遺物(2)

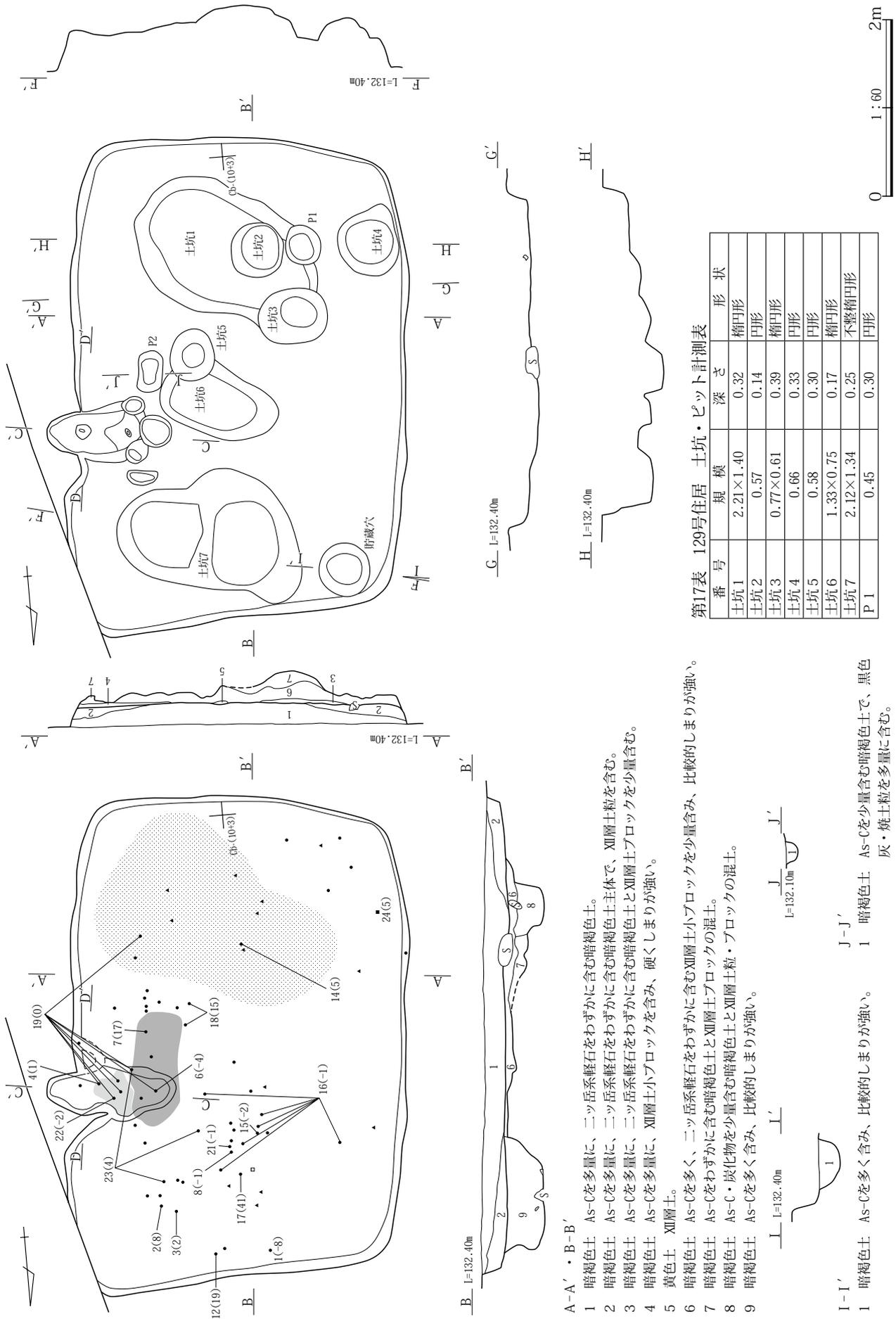


第708図 128号住居出土遺物(3)

129号住居(第709～712図 P L.159・285)

位置:Ca・Cb-10・11グリッド 形状:隅丸長方形 規模:
3.78m×5.38m 残存深度:0.28m 主軸方位:E-7
°-S 埋没土:Ⅶ層土主体 柱穴:未検出 カマド:
東壁の北寄りに偏った位置に検出した。燃烧部底面の屋
内側に焼土が形成されており、燃烧部主体が屋内に張り
出した位置にあったことがわかる。両袖の形成はⅦ層土

類似の土であり、他の例のようにⅩⅡ層土を使用したもの
ではなかった。袖及び側壁に構築材は見られず、支脚の
痕跡も検出されなかった。平面形は砲弾状を呈するもの
と考えられ、主軸方位はE-3°-Sである。遺物:
床面及び掘り方出土遺物が目立っている。須恵器坏(1)・
足高高台の埴(12)は北壁際中央、坏(2・3)・黒色土器
埴(8)・羽釜(17)・甑(23)は北壁寄りの掘り方から、カ



第17表 129号住居 土坑・ピット計測表

番号	規模	深さ	形状
土坑1	2.21×1.40	0.32	楕円形
土坑2	0.57	0.14	円形
土坑3	0.77×0.61	0.39	楕円形
土坑4	0.66	0.33	円形
土坑5	0.58	0.30	円形
土坑6	1.33×0.75	0.17	楕円形
土坑7	2.12×1.34	0.25	不整楕円形
P1	0.45	0.30	円形

第709図 129号住居

A-A'・B-B'

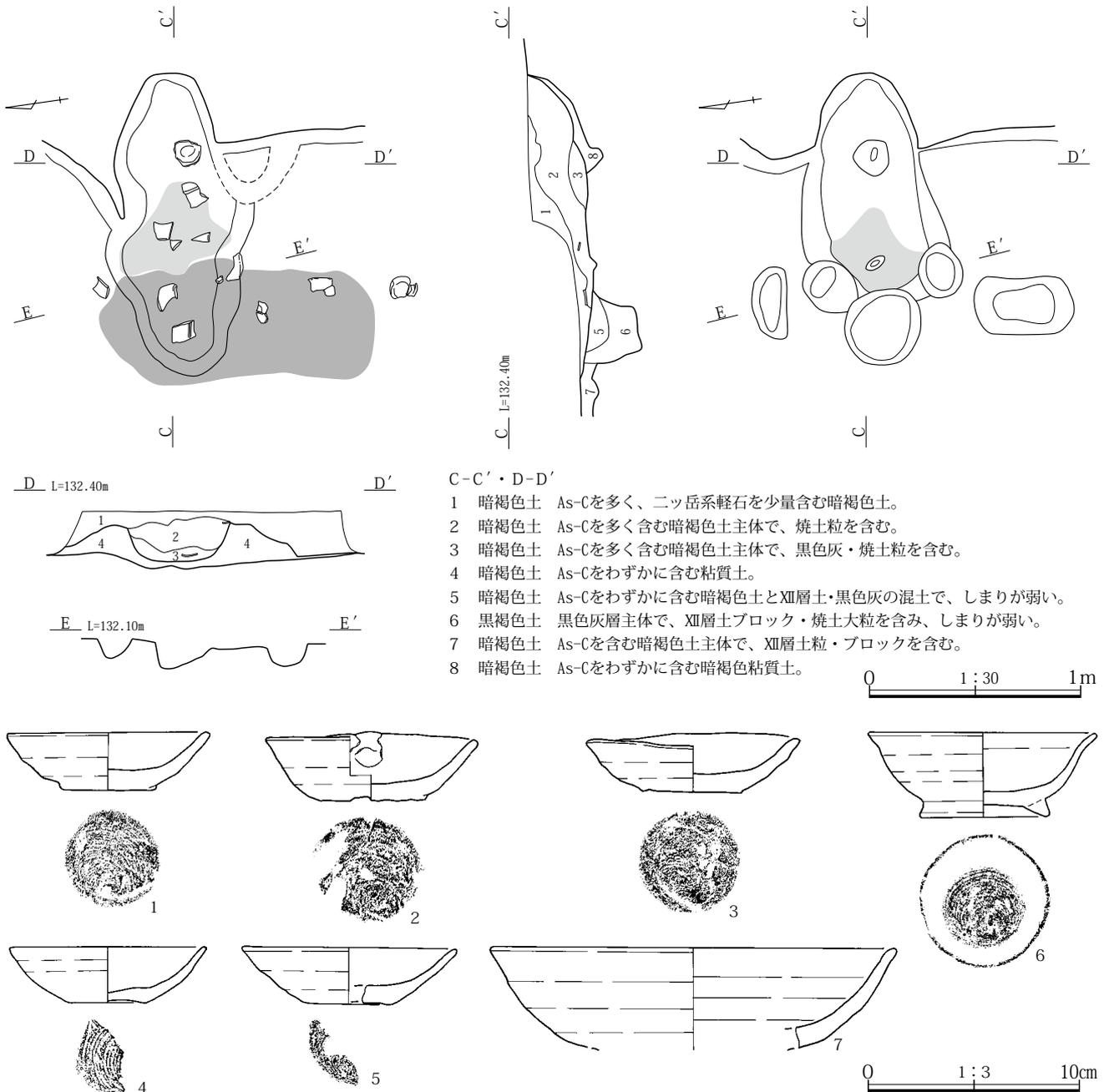
- 1 暗褐色土 AS-Cを多量に、二ツ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土 AS-Cを多量に、二ツ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土主体で、刈層土粒を含む。
- 3 暗褐色土 AS-Cを多量に、二ツ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土と刈層土ブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 AS-Cを多量に、刈層土小ブロックを含み、硬くしまりが強い。
- 5 黄色土 刈層土。
- 6 暗褐色土 AS-Cを多く、二ツ岳系軽石をわずかに含む刈層土小ブロックを少量含み、比較的しまりが強い。
- 7 暗褐色土 AS-Cをわずかに含む暗褐色土と刈層土ブロックの混土。
- 8 暗褐色土 AS-C・炭化物を少量含む暗褐色土と刈層土粒・ブロックの混土。
- 9 暗褐色土 AS-Cを多く含み、比較的しまりが強い。

I-I'

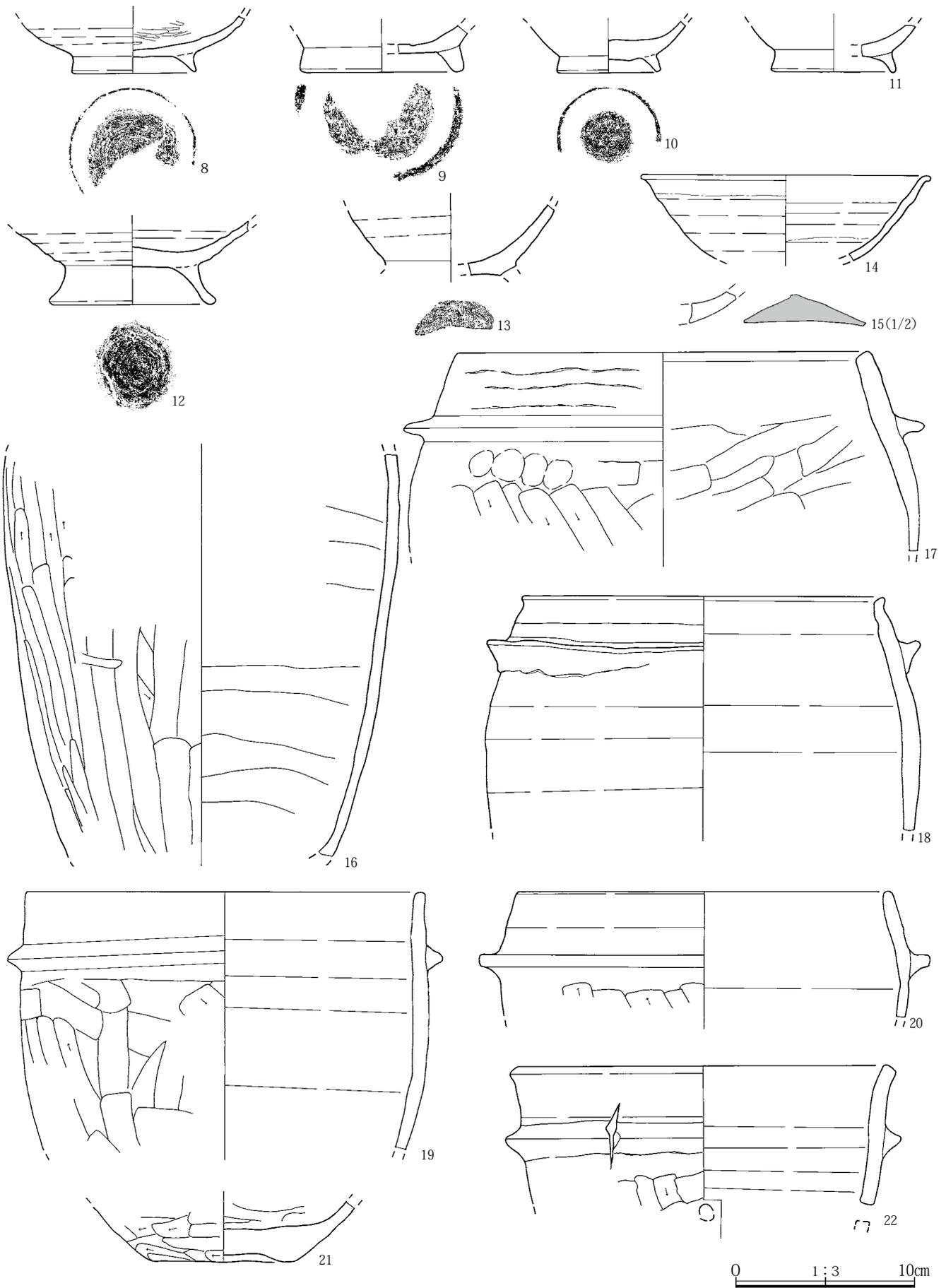
- 1 暗褐色土 AS-Cを多く含み、比較的しまりが強い。
- 1 暗褐色土 AS-Cを少量含む暗褐色土で、黒色灰・焼土粒を多量に含む。

マド燃焼部からは羽釜(19・22)が、南西コーナー部近くの円形掘り方から棒状の鉄製品(24)が出土した。他に、灰釉陶器碗(14)は床に据えられた礫上面から、緑釉陶器碗(15)は北寄りの床面から出土した。 **重複**：140号住居と重複しており、検出状況から140号住居→129号住居と考えられる。 **所見**：IV区の東際に検出したもので、IX層土中で二ッ岳系軽石の含有を目安として平面形を捉えた。全体に掘り方が行われており、VII層土近似の土を充填して床面が構築されていることから床面は捉えにくかったが、カマドからの掻き出しによって形成された薄い黒色灰層の広がり、床面南半に検出された硬化面によって床面を把握することができた。床面精査においては貯蔵穴を検出することはできなかったが、掘り方調査で北西コーナー部に径0.57m、深さ0.31mの円形を呈する土坑状の掘り込みが検出され、掘削された位置や形状から貯蔵穴と判断した。また、床面中央の南寄りの硬化面の形成されている場所に扁平な礫が平坦面を水平にして出土したが、この扁平礫は床面に窪みを残すような状態であり、廃棄されたものではなく目的を持って据えられたものと考えられる。掘り方は全体に及んでいたが、特に南北に並んで3ヵ所不整楕円形に掘り込まれた部分が検出された。 **時期**：10世紀後半

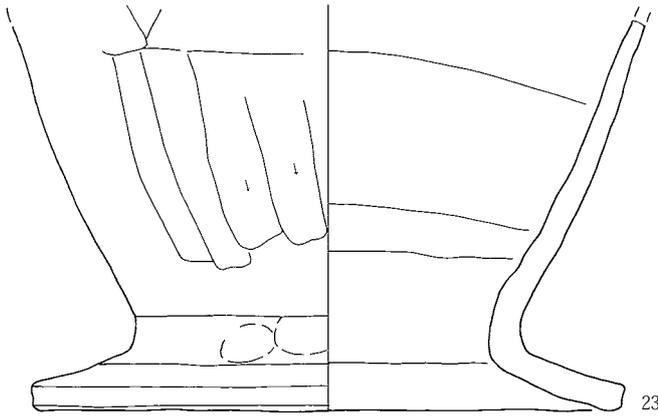
よって床面を把握することができた。床面精査においては貯蔵穴を検出することはできなかったが、掘り方調査で北西コーナー部に径0.57m、深さ0.31mの円形を呈する土坑状の掘り込みが検出され、掘削された位置や形状から貯蔵穴と判断した。また、床面中央の南寄りの硬化面の形成されている場所に扁平な礫が平坦面を水平にして出土したが、この扁平礫は床面に窪みを残すような状態であり、廃棄されたものではなく目的を持って据えられたものと考えられる。掘り方は全体に及んでいたが、特に南北に並んで3ヵ所不整楕円形に掘り込まれた部分が検出された。 **時期**：10世紀後半



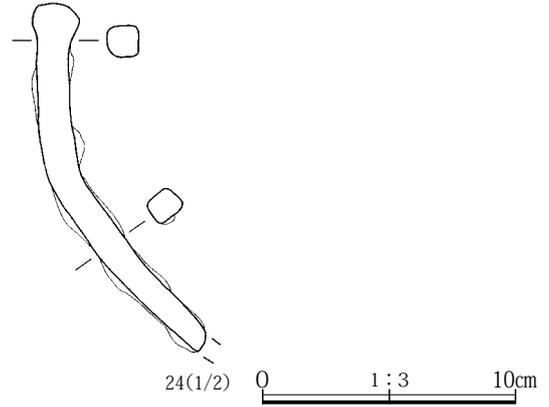
第710図 129号住居カマド・出土遺物(1)



第711図 129号住居出土遺物(2)



第712図 129号住居出土遺物(3)



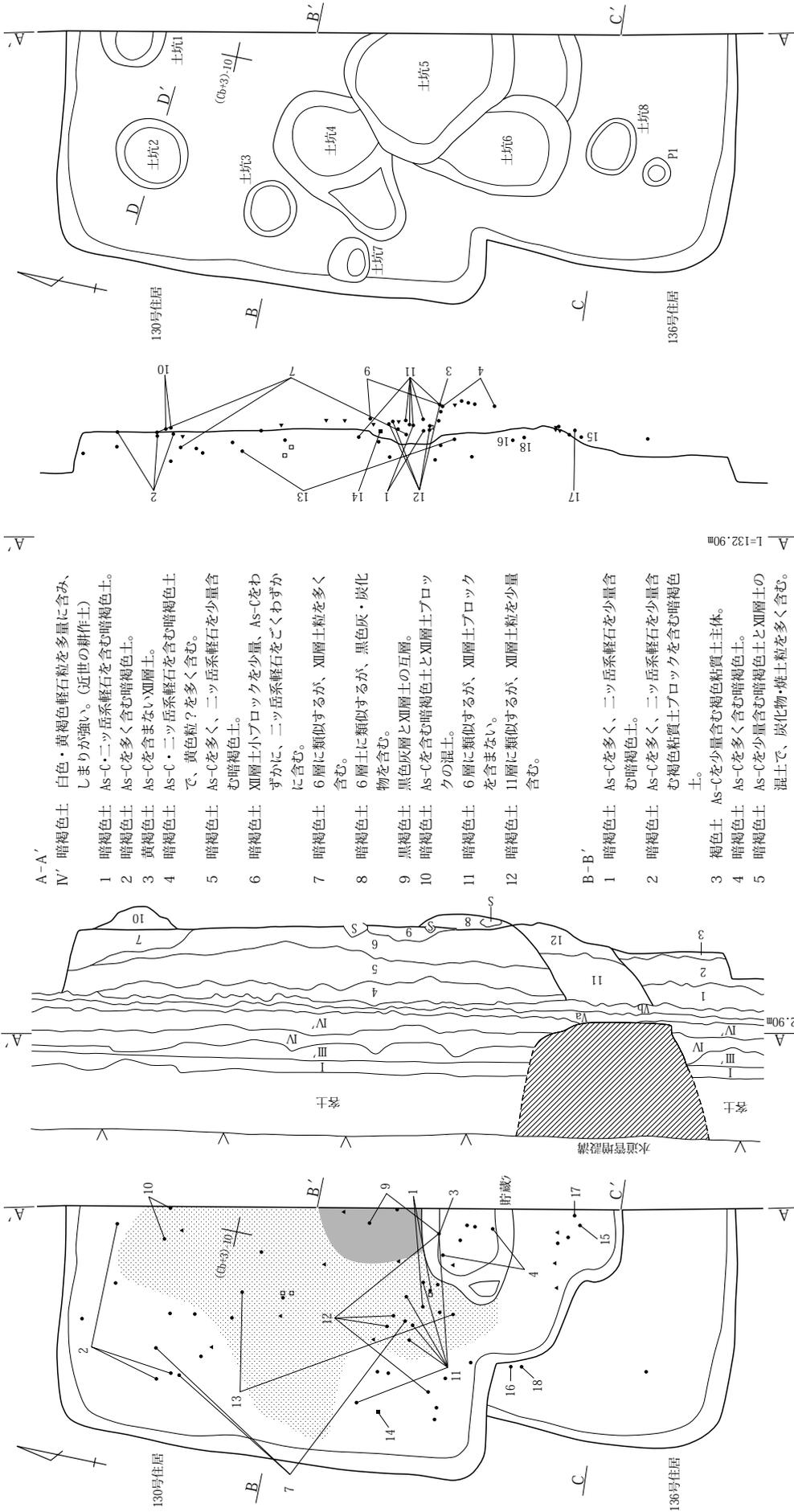
130号住居(第713～715図 P L.159・285・286)

位置: Cb- 9・10グリッド **形状:** 隅丸長方形? **規模:** (2.64)m×4.26m **残存深度:** 0.64m **主軸方位:** E-5°-N **埋没土:** VII層土主体にXII層土ブロックを少量含む。 **柱穴:** 未検出 **カマド:** 調査区外に位置するため未検出。 **遺物:** 羽釜(11・12)・須恵器壺(3・4)は貯蔵穴と考えられる掘り込みから出土したものである。また、須恵器壺(1・2)は床面にごく近い位置から出土したものであり、いずれも住居廃絶時期を示す遺物と見てよいであろう。また、14の鉄製品は西壁寄りの床面近くの出土である。その他、掲載はしなかったが灰釉陶器壺の破片が10点埋没土中から出土している。 **重複:** 136号住居と南側で重複しており、検出状況及び出土遺物から136号住居→130号住居と考えられる。 **所見:** 調査区の東際に検出されたもので、カマドを含む東側1/2は調査区外のため調査できなかった。検出はIX～XI層土中であり、二ッ岳系軽石の含有が比較的多かったことから比較的容易に確認することができた。掘り込みは深く壁の残存も良好であったが、南側の重複部分の壁は傾斜が緩やかで、直線的に検出することはできなかった。この張り出し状を呈する部分は、土層断面で観察すると130号住居南壁と同程度の傾斜で立ち上がっていることから、番号を付していない遺構が介在している可能性が高い。床面は平坦で壁際の部分を除いて全体に硬化していた。南壁寄りの部分に、床面から0.15mほどの厚さで炭化材の小片が密集する層が形成され、その層は南壁に接する位置に検出した(0.75)×0.90m、深さ0.13mの楕円形の貯蔵穴と考えられる掘り込み内部にも及んでいた。炭化材を含む層はカマドにからの掻き出しの可能性はあるが、これまで薄い黒色灰の掻き出しの事例は多

く検出しているものの、このように多くの炭化材小片を含む床面から盛り上がった状態の掻き出し例はなく違和感がある。掘り方は床面全体に及ぶものではなく、貯蔵穴部分に掘り込まれたものを含めて土坑を7カ所検出した。 **時期:** 10世紀前半

136号住居(第713・715図 P L.162・286)

位置: Cb- 9グリッド **形状:** 隅丸方形? **規模:** (2.35)m×(2.28)m **残存深度:** 0.25m **主軸方位:** E-11°-N **埋没土:** 粘性の強い暗褐色土主体 **柱穴:** 未検出 **カマド:** 未検出 **遺物:** 西壁寄りで灰釉陶器壺(16)と土師器甕(18)が出土しているが、130号住居との間に住居の可能性のある遺構が介在しており、この遺構に伴う遺物の可能性が高い。 **重複:** 130号住居及び未命名の遺構と重複しており、土層断面観察によれば、136号住居→未命名遺構→130号住居である。 **所見:** IX層土中で二ッ岳系軽石の有無をもとに確認を行い、130号住居などとともに出した。壁はIX～XI層土中にあり、床面はXII層土の面とほぼ一致している。埋没土は130号住居などと比較すると基盤となるXII層土などの割合が多く、あまり攪拌を受けていないように見える特異なものである。ここでは住居としても違和感のない整形な平面形の一部が捉えられたことから住居として扱ったが、遺物の明確な出土もなく埋没土も異質であることから住居ではない可能性もある。掘り方床面として捉えた面で土坑8(0.58×0.46m、深さ0.04m、楕円形)とP 1(径0.27m、深さ0.07m、円形)を検出した。前述の住居であるかどうかについては、上武道路として東側部分の調査が行われる予定であり、その時点で結論が出るであろう。 **時期:** 9世紀後半



第18表 130号住居 土坑計測表

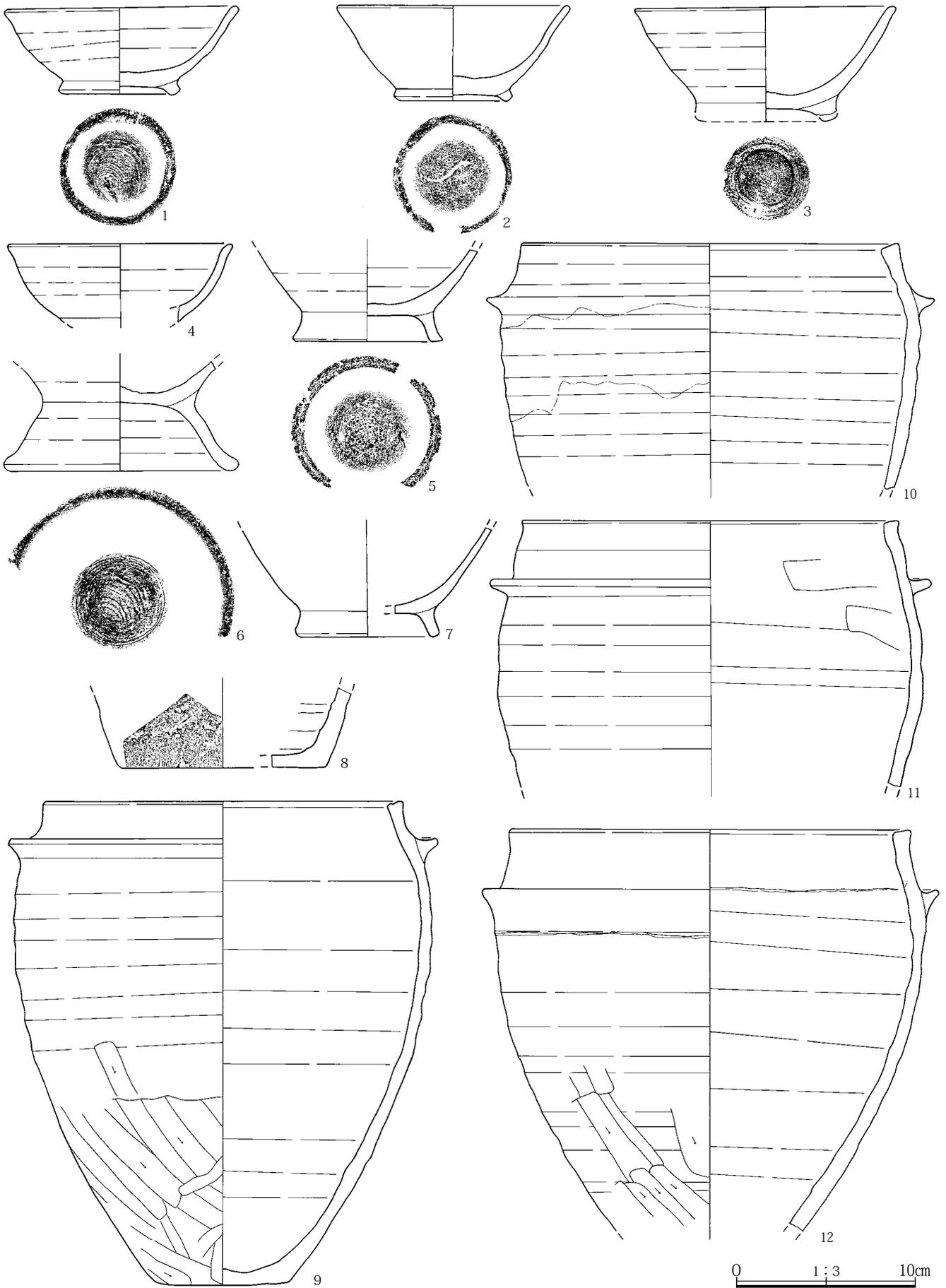
番号	規模	深さ	形状
土坑1	0.62	0.24	円形
土坑2	0.67	0.24	円形
土坑3	0.54	0.14	円形
土坑4	1.68×0.85	0.25	不整楕円形
土坑5	1.65×1.34	0.14	不整楕円形
土坑6	1.50×1.00	0.30	楕円形
土坑7	0.45	0.23	不整円形

第713図 130・136号住居

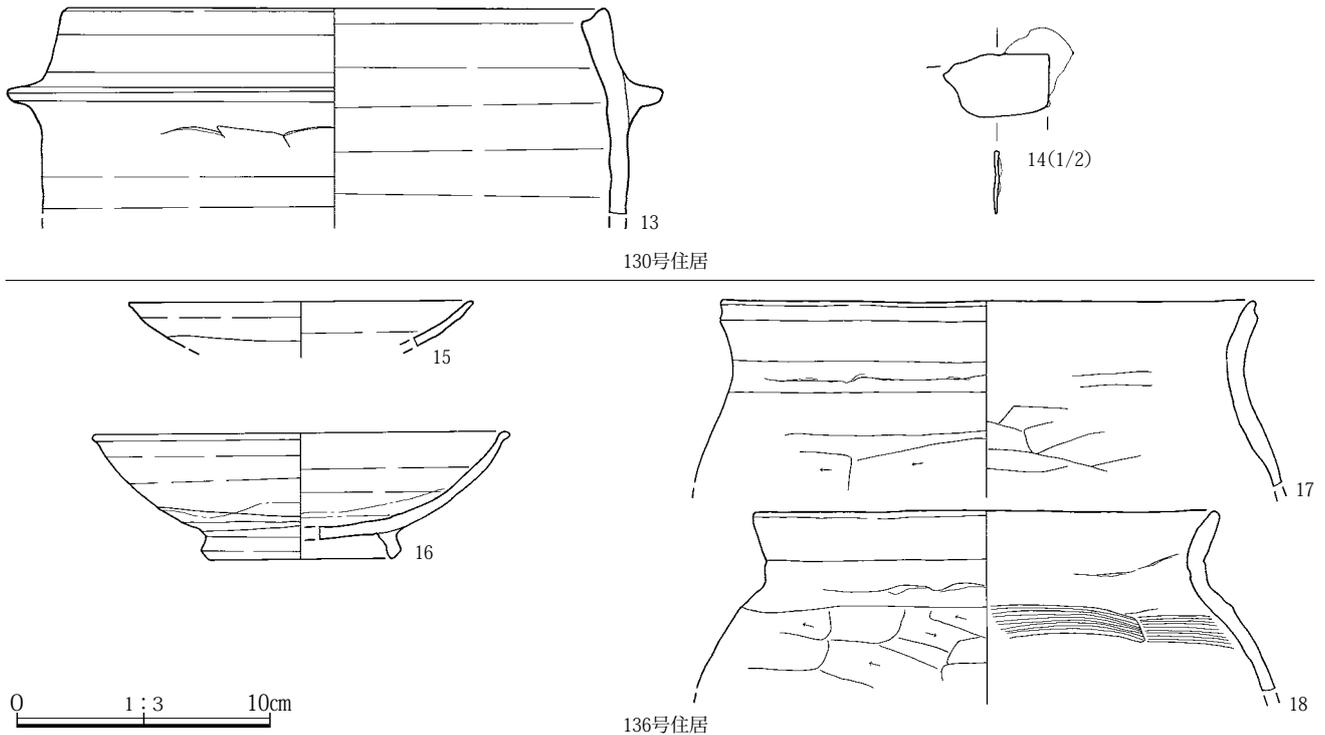
- A-A' 暗褐色土 白色・黄褐色軽石粒を多量に含み、しまりが強い。(近世の耕作土)
- IV' 暗褐色土 As-C・二ツ岳系軽石を含む暗褐色土
- 1 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土
- 2 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土
- 3 暗褐色土 As-Cを含まない如層土
- 4 暗褐色土 As-Cを多く含む
- 5 暗褐色土 As-Cを多く、二ツ岳系軽石を少量含む暗褐色土
- 6 暗褐色土 如層土小ブロックを少量、As-Cをわずかに、二ツ岳系軽石をごくわずかに含む
- 7 暗褐色土 6層に類似するが、如層土粒を多く含む
- 8 暗褐色土 6層土に類似するが、黒色灰・炭化物を含む
- 9 暗褐色土 黒色灰層と如層土の互層
- 10 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土と如層土ブロックの混土
- 11 暗褐色土 6層に類似するが、如層土ブロックを含まない
- 12 暗褐色土 11層に類似するが、如層土粒を少量含む
- B-B' 暗褐色土 As-Cを多く、二ツ岳系軽石を少量含む暗褐色土
- 2 暗褐色土 As-Cを多く、二ツ岳系軽石を少量含む褐色粘質土・ブロックを含む暗褐色土
- 3 褐色土 As-Cを少量含む褐色粘質土主体
- 4 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土
- 5 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土と如層土の混土で、炭化物・雑土粒を多く含む
- C-C' 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、しまりがやや弱い
- 2 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、黒色灰ブロックを含み、しまりが弱い
- 3 暗褐色土 As-Cを多量に、二ツ岳系軽石を少量含み、しまりが強い
- 4 暗褐色土 C混土の暗褐色土と如層土・ブロックの混土

- D-D' 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土主体で、如層土小ブロックを均一に含む

0 1:60 2m



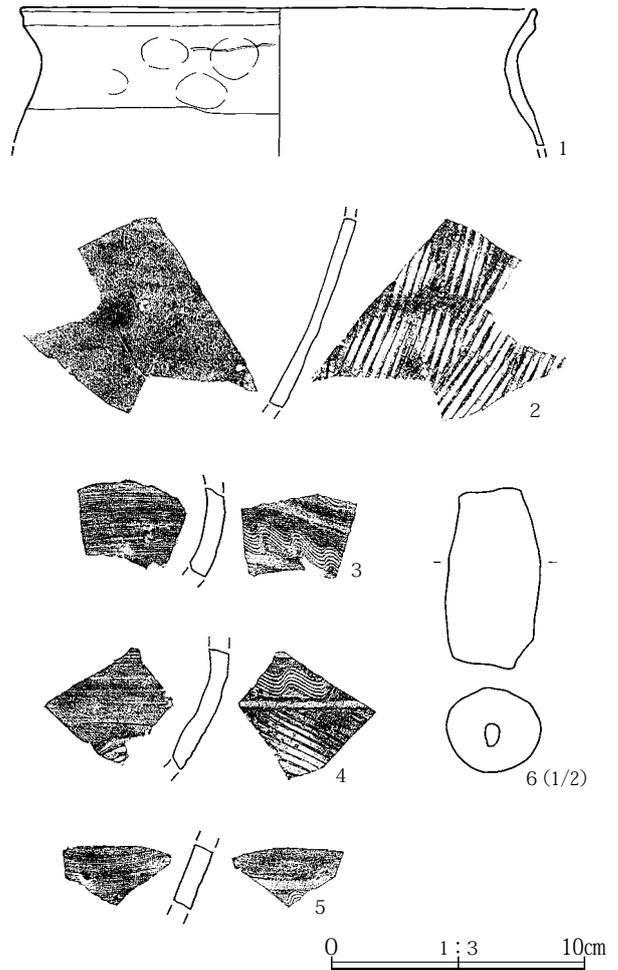
第714図 130号住居出土遺物



第715図 130・136号住居出土遺物

131号住居(第716・717図 P L.159・160・286)

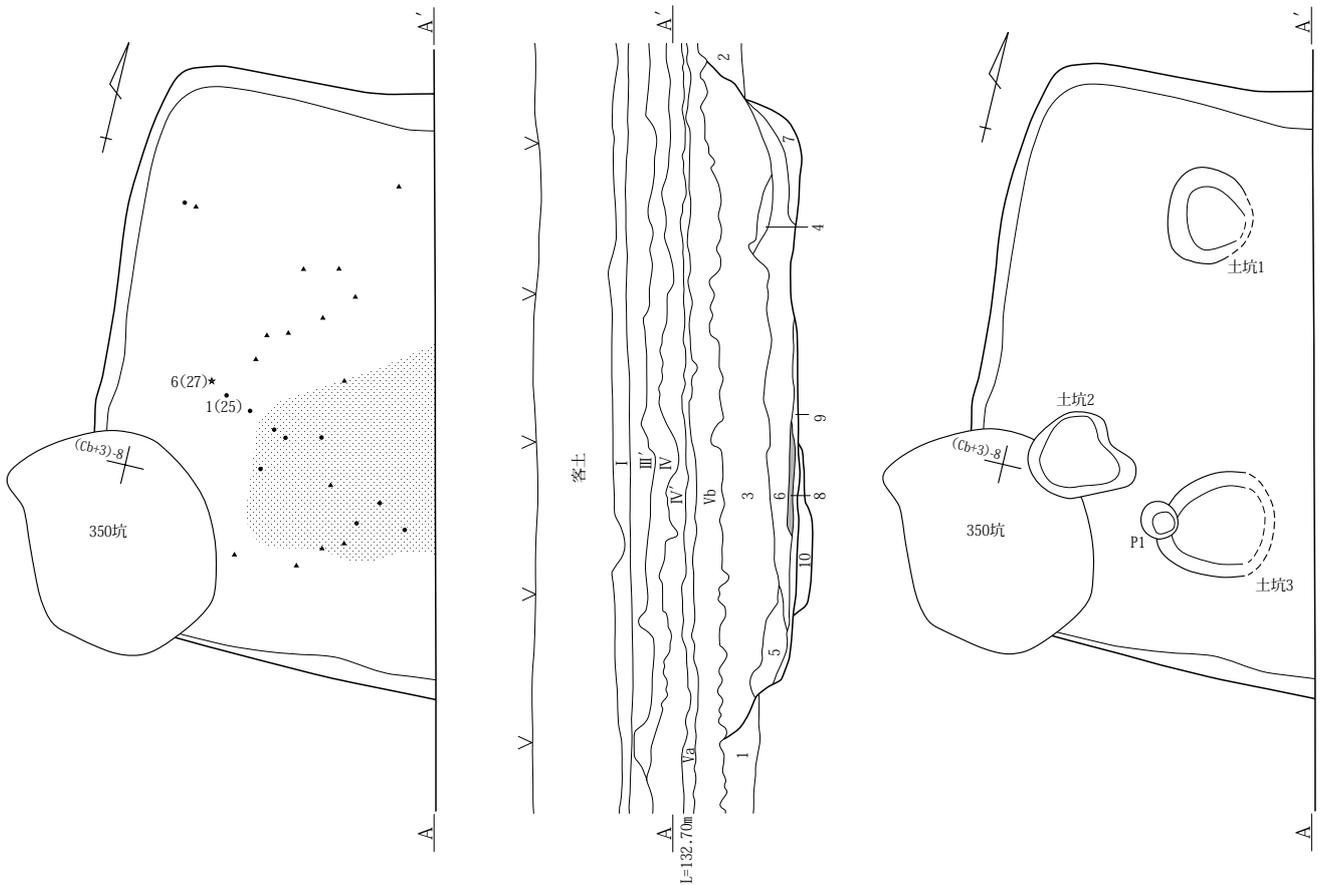
位置：Cb・Cc- 7・8グリッド 形状：隅丸長方形 規模：(2.73)m×4.58m 残存深度：0.42m 主軸方位：E-1°-N 埋没土：Ⅶ層土主体であり、下層にⅩ層土ブロックを含む。柱穴：未検出 カマド：調査区外にあるため未調査。遺物：中央部に礫が9点出土した他、西壁寄りの場所から土師器甕(1)、土錘(6)などが出土しているが、いずれも床面より20cm以上高い位置からの出土であり、住居廃絶後に廃棄された遺物と考えられる。他に灰釉陶器碗が1点埋没土中から出土しているが、小片であるため掲載しなかった。重複：137号住居、345・350号土坑と重複しており、検出状況及び残存状況から137号住居→131号住居→350号土坑→345号土坑と考えられる。所見：調査区東端に検出されたもので、東側1/3程度が調査区外にあるためカマドを含めて未調査である。調査区東側の側壁断面で観察すると、南北壁ともに下半の傾斜が比較的急であるのに対して、上半の傾斜が緩やかな傾向があり、壁の崩落を想定させるような状況である。しかし、壁際に形成された埋没土中には壁を構成しているⅩ層土が際だって含有されていないことから、壁崩落によるものではなく、当初から壁の傾斜を変えていたものと考えられる。床面は平坦で、中央部に硬化面が形成されていたことで容易に検出することがで



第716図 131号住居出土遺物

きた。掘り方は全体に及ぶものではなく、中央寄りに土坑1(径0.53m、深さ0.09m、不整円形)、土坑2(0.87×0.69m、深さ0.20m、不整楕円形)、土坑3(径0.85m、

深さ0.20m、円形)、及び土坑3と重複するようにP1(径0.28m、深さ0.25m、円形)を検出した。 時期：9世紀後半



- A-A'
- IV' 暗褐色土 白色・黄褐色軽石粒を多量に含み、しまりが強い。(近世の耕作土)
 - 1 暗褐色土 As-C・二ッ岳系軽石を含む暗褐色土。
 - 2 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土。
 - 3 暗褐色土 As-Cを多く、二ッ岳系軽石を少量含む暗褐色土。
 - 4 暗褐色土 XII層土ブロックを多く、As-Cを少量、二ッ岳系軽石をわずかに含む。

- 5 暗褐色土 4層土に類似。
- 6 暗褐色土 XII層土小ブロックを少量、As-Cをわずかに、二ッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 7 暗褐色土 6層に類似するが、XII層土粒を含む。
- 8 黒褐色灰層
- 9 暗褐色土 As-Cを含む粘質土。硬くしまりが強い。
- 10 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土で、黒色灰・炭化物を少量含む。

0 1:60 2m

第717図 131号住居

132号住居(第718～722図 P L.160・161・286)

位置：Bt・Ca-12・13グリッド 形状：隅丸長方形 規模：4.02m×—m 残存深度：0.61m 主軸方位：E-1°-S 埋没土：VII層土主体 柱穴：未検出 カマド：東壁中央に位置するものと考えられるが、壁上半の崩落と同様にカマド部分も崩落したのと思われる、煙道も先端のごくわずかな部分だけに焼土が残存していた。残存部で計測した主軸方位はE-3°-Nであり、煙道がわずかに突出した釣鐘状の平面形になるものと考えられる。調査された状況では両袖が屋内に突出したように見える

が、壁上半の崩落による変形であり、基本的には燃烧部が壁外に位置するカマドである。煙道に続く奥壁及び燃烧部底面には焼土が形成されていたが、側壁は焼土化していなかった。構築材は検出されておらず、掘り方調査においても据えたような痕跡はなく、支脚も検出されていない。焚口を取り巻くように薄い黒色灰層が比較的広い範囲に検出されているが、掻き出し方向を示唆するような状況は認められなかった。燃烧部から甕などの煮炊き具が出土することが多いが、燃烧部内からの遺物出土は皆無であり、特異な状況を示している。 遺物：遺物

出土はカマド前面の黒色灰層上から土師器甕の破片が3点(7～9)出土しており、住居廃絶時期を示す遺物と見てよいであろう。また、6の甕は南西コーナー部近くの上位から出土しており、住居廃絶に近い時期に廃棄された可能性が高い。**重複**：133号住居と重複しており、残存状況から133号住居→132号住居と考えられる。**所見**：132～134号住居は、遺構確認の段階では西側の壁が直線的に連なり、埋没土に差異が認められなかったために溝として認識し、北壁部分で土層観察ができるものとして一連の作業で掘削を行ってしまったために、132号住居の土層観察は詳細におこなうことができなかった。東壁の調査が下半に及んだ時点でカマドに伴う焼土などが検出され住居であることを確認した。東壁の傾斜は比較的急であったが、南壁及び西壁は傾斜が緩やかで中位で傾斜角が変わっていた。132号住居が構築された場所は、古墳時代には南東方向に向かう浅い谷となっていた場所で、榛名山噴火起源泥流によって埋没していた。住居壁上半部はこの泥流層中にあり、脆弱な土層であるため崩落により変形したものと思われる。床面はカマド前面から広範囲にわたって硬化面が形成されていたために容易に検出され、カマドから掻き出された黒色灰もこの硬化面上に検出されている。南東コーナー部から対角線方向に傾斜して、炭化物と黒色灰が60cmほどの幅で帯状に検出された。他の部分に炭化物の残存は認められないが、焼失している可能性がある。貯蔵穴は南東コーナー部の炭化物が検出された下部にあり、0.75×0.50m、深さ0.41mの不整楕円形を呈している。掘り方は、ほぼ全体に行われており、南西部には土坑1(1.75×1.11m、深さ0.33m、不整楕円形)が掘削されていた。**時期**：9世紀後半

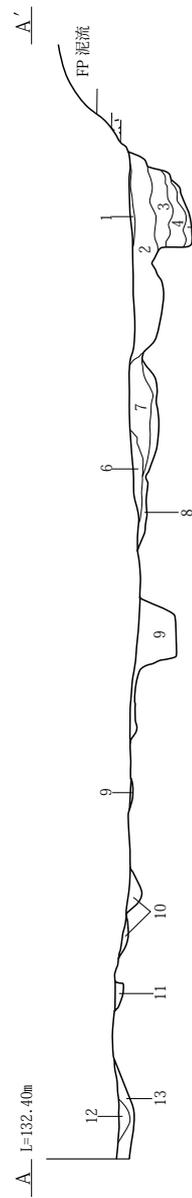
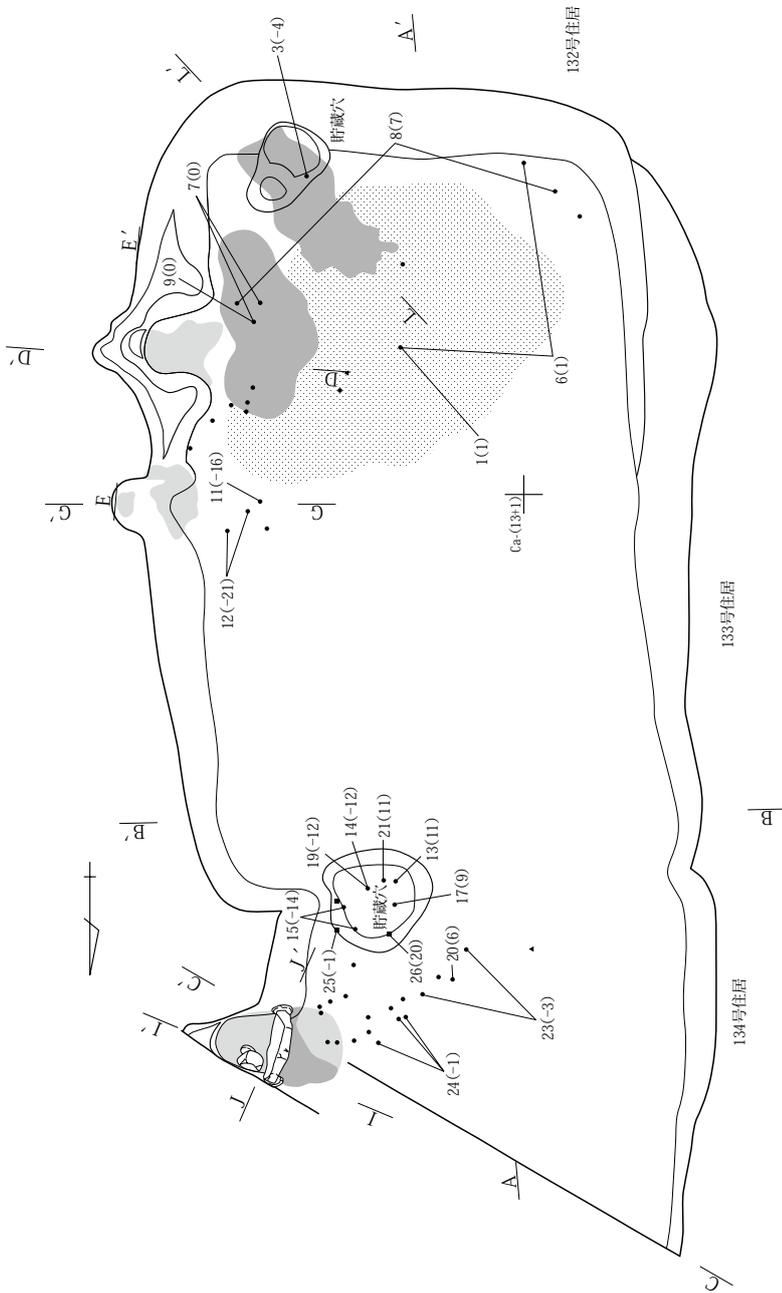
133号住居(第718～722図 P L.160・161・286)

位置：Bt・Ca-13・14グリッド **形状**：隅丸長方形 **規模**：4.00m×—m **残存深度**：0.61m **主軸方位**：E-10°-N **埋没土**：Ⅶ層土主体 **柱穴**：未検出 **カマド**：132号住居のカマド北側至近の位置に煙道部だけが検出されており、東壁の南寄りに偏って構築されたものと考えられる。燃焼部などは132号住居との重複によって削平されたものと見られ、奥壁に焼土がわずかに残存しただけであった。煙道が短く突出する構造と見られ、基本的には132号住居のカマドと同じ形態になるものと

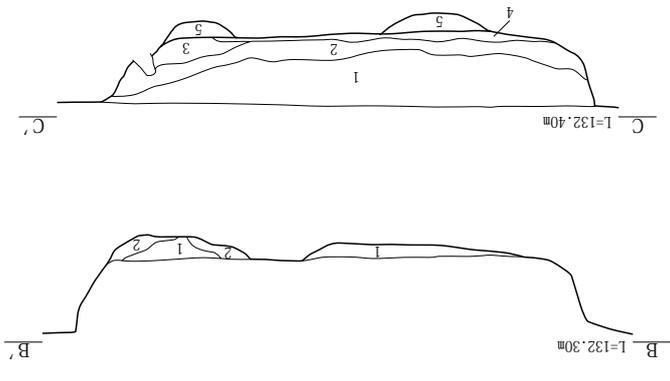
思われるが、残存部分がわずかであるため主軸方位の計測などはできなかった。**遺物**：カマド燃焼部にあたる位置から小片がわずかに出土しただけである。**重複**：132・134号住居と重複しており、残存状況及び出土遺物から133号住居→132・134号住居と考えられる。**所見**：132号住居と東西壁をほぼ共有しており、南北方向に平行移動したような重複関係を示している。壁の状況は132号住居で述べたような状況であるが、北東コーナー部付近は崩落もなく急な立ち上がりを示している。床面は132号住居と同一面であるが、硬化面は検出されていない。貯蔵穴は、当初は132号住居カマド前面の位置で検出した土坑2(0.65×0.46m、深さ0.31m、楕円形)と考えたが、この土坑は132号住居に伴うものと考えられ、最終的には北東コーナー部に掘削された径1.02m、深さ0.24mの円形を呈する掘り込みと判断した。133号住居に伴う掘り方は、土坑3(1.03×0.84m、深さ0.22m、楕円形)、土坑4(1.96×0.65m、深さ0.30m、楕円形)の2カ所である。**時期**：9世紀前半

134号住居(第718～722図 P L.160～162・286)

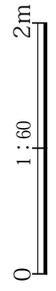
位置：Bt・Ca-13・14グリッド **形状**：隅丸長方形？
規模：3.51m×(2.98)m **残存深度**：0.49m **主軸方位**：E-4°-S **埋没土**：Ⅶ層土主体で、下層にⅧ層土粒及び小ブロックが混入する。**柱穴**：未検出 **カマド**：東壁の南寄りに位置するものと思われ、調査区際に検出されたため全体を明らかにすることはできなかった。壁とカマドとの接点部に礫を構築材として立て、その上に長さ60cmほどの板状の礫を載せて焚口部天井を形成していた。天井の礫は、被熱による変色が認められ、砂質で脆く二つに折れて出土した。平坦面にハツリ痕が見られ、板状を呈することから自然礫ではなく、鳥羽遺跡などで確認されている地山から切り出されたものが使用されたものと考えられる。しかし、遺跡の立地する場所の基盤層は砂礫層であるため、他地域で切り出した素材が持ち込まれたものと考えられる。支脚は左側壁に接するような位置に偏って据えられており、燃焼部底面には焼土が形成され、その上には黒色灰を多量に含む層が比較的厚く堆積していた。構築材及び煙道の位置をもとに計測した主軸方位はE-10°-Sであり、西壁で計測した住居主軸方位よりも南に振れている。**遺物**：カマド正面の床面から土師器甕(23・24)、須恵器坏(20)が破片で出土



- A-A'
- 1 暗褐色土 二ツ岳系軽石を多く含む暗褐色土。硬くしまりが強い。
 - 2 暗褐色土 二ツ岳系軽石を多く含む茶褐色土とXII層土ブロックをマーブル状に含み、しまりが弱い。
 - 3 暗褐色土 二ツ岳系軽石をわずかに含む暗褐色粘質土とXII層土の混土。
 - 4 黄褐色土 XII層土主体で、暗褐色土をわずかに含む。
 - 5 暗褐色土 3層に類似。
 - 6 黄褐色土 XII層土主体で、下面に炭化物を含み、XI層土をわずかに含む。
 - 7 黄褐色土 XII層土とFA泥流・Hr-FAブロックの混土。
 - 8 黄褐色土 7層に類似し、粘性がやや強い。
 - 9 暗褐色土 二ツ岳系軽石を含む暗褐色土主体で、XII層土小ブロックをわずかに含み、しまりが弱い。
 - 10 暗褐色土 暗褐色土とXII層土小ブロックの混土。
 - 11 黄褐色土 XII層土主体で、XI層土をわずかに含む。
 - 12 茶褐色土 XII層土主体。
 - 13 暗褐色土 XII層土とXI層土の混土で、炭化物をわずかに含む。



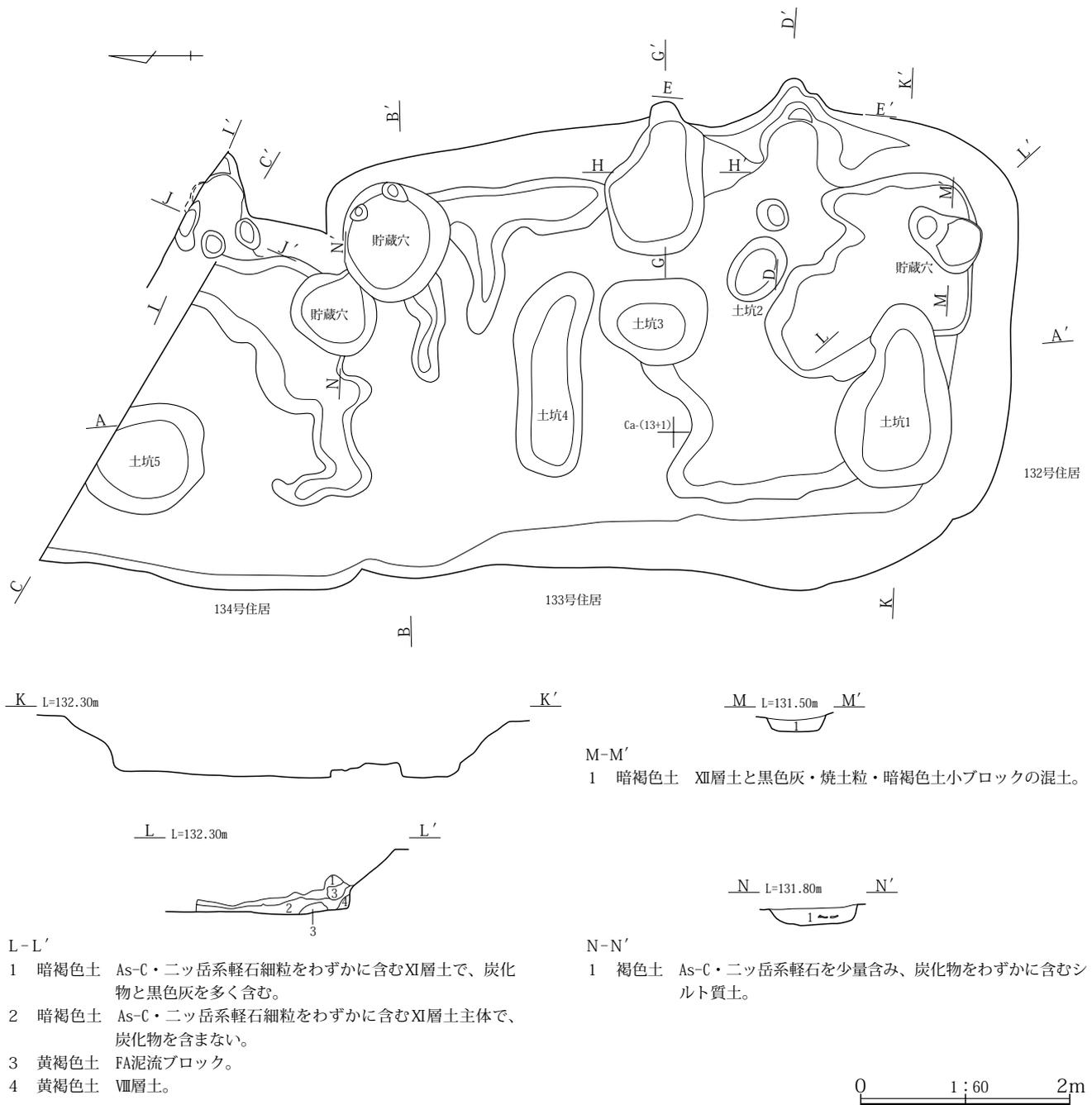
- B-B'
- 1 褐色土 FA泥流主体で、全体に暗色を呈する。
 - 2 黄褐色土 1層とXII層土の混土。
- C-C'
- 1 暗褐色土 二ツ岳系軽石を多く含む暗褐色土主体で、FA泥流のXII層土ブロックを含む。しまりが弱い。
 - 2 黄褐色土 FA泥流のXII層土主体で、XII層土ブロックを含む。しまりが弱い。
 - 3 暗褐色土 1・2層の中間的な土層で、炭化物・焼土粒をわずかに含む。
 - 4 黄褐色土 XII層土主体。
 - 5 褐色土 FA泥流主体で、全体に暗色を呈する。



第718図 132・133・134号住居

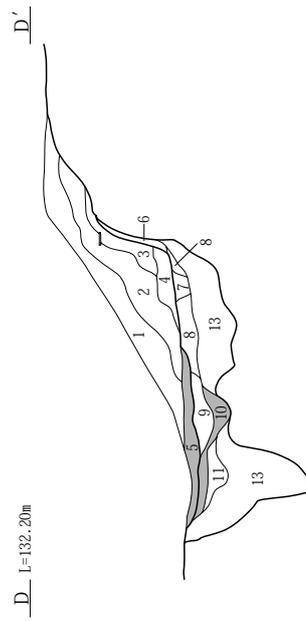
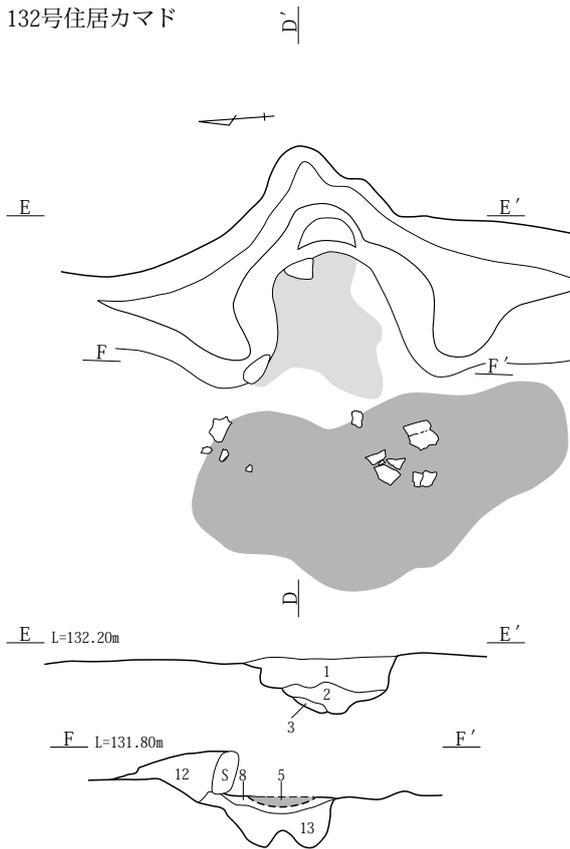
し、須恵器坏(13～15)・皿(21)、棒状の鉄製品2点(25・26)は貯蔵穴からの出土である。重複：133号住居と重複しており、残存状況及び出土遺物から133号住居→134号住居と考えられる。所見：調査区際に検出したもので、カマドの一部及び住居北半は未検出である。132・133号住居と同様に当初は溝と判断して一括して調査を進めてしまったため、133号住居との重複関係を層位的に捉えることができなかった。壁は132・133号住居と比較すると傾斜が急でやや残存状況は良好である。床面はⅪ層土中に構築されており、埋没土との相違が顕著であ

るため容易に検出することができた。平坦に構築されているものの、明瞭な硬化面の検出はなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置しており、0.85×0.66m、深さ0.33mの不整楕円形を呈し、底面は平坦で完形の須恵器坏と皿が出土しており、炭化物をわずかに含むⅦ層土類似の土が充填していた。掘り方は、カマドから貯蔵穴付近に不整形の掘り込みが検出された他、住居中央部に径1.05m、深さ0.13mの不整円形を呈する土坑5が掘削されていた。時期：9世紀後半



第719図 132・133・134号住居掘り方

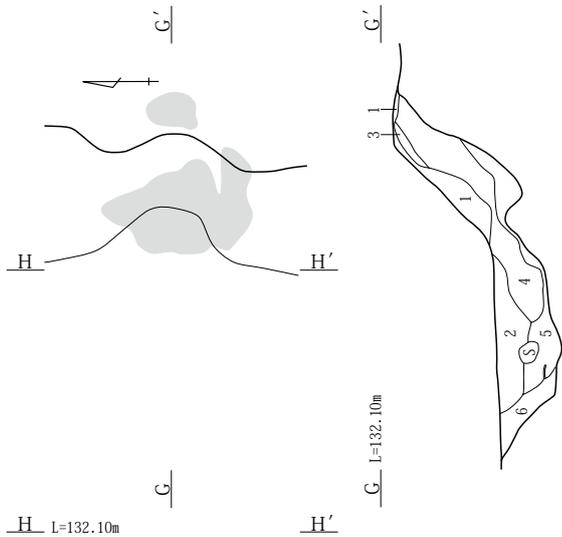
132号住居カマド



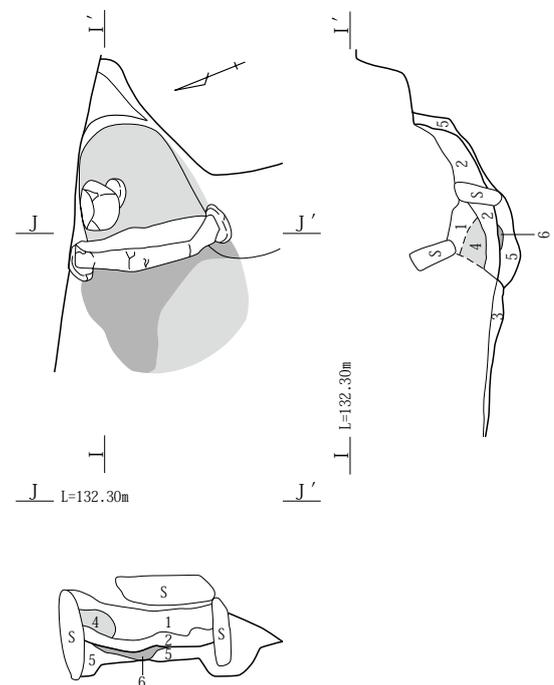
D-D' ~ F-F'

- 1 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を少量含む暗褐色土主体で、XII層土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石を少量含む暗褐色土ブロックとXII層土の混土で、黒色灰・焼土大粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 暗褐色土と焼土ブロック・XII層土ブロックの混土。
- 4 黒灰色土 黒灰色灰主体で、焼土大粒・XII層土小ブロックを含む。
- 5 黒色灰層 焼土粒を含む。
- 6 黄褐色土 7層に類似するが、焼土粒の含有は多量である。
- 7 黄褐色土 XII層土(粗粒)主体で、焼土粒をわずかに含む。
- 8 暗褐色土 XII層土主体で、黒色灰・焼土粒をわずかに含む。
- 9 暗褐色土 XII層土と暗褐色土小ブロック・黒色灰・焼土粒の混土。
- 10 黒色灰層 XII層土小ブロック・焼土大粒を含む。
- 11 暗褐色土 9層に類似するが、黒色灰の含有は多量である。
- 12 黄褐色土 XII層土主体で、ニッ岳系軽石粒をわずかに含む。
- 13 褐色土 ニッ岳系軽石・As-Cを含むXI層土とXII層土ブロックの混土。

133号住居カマド



134号住居カマド

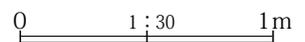


G-G'

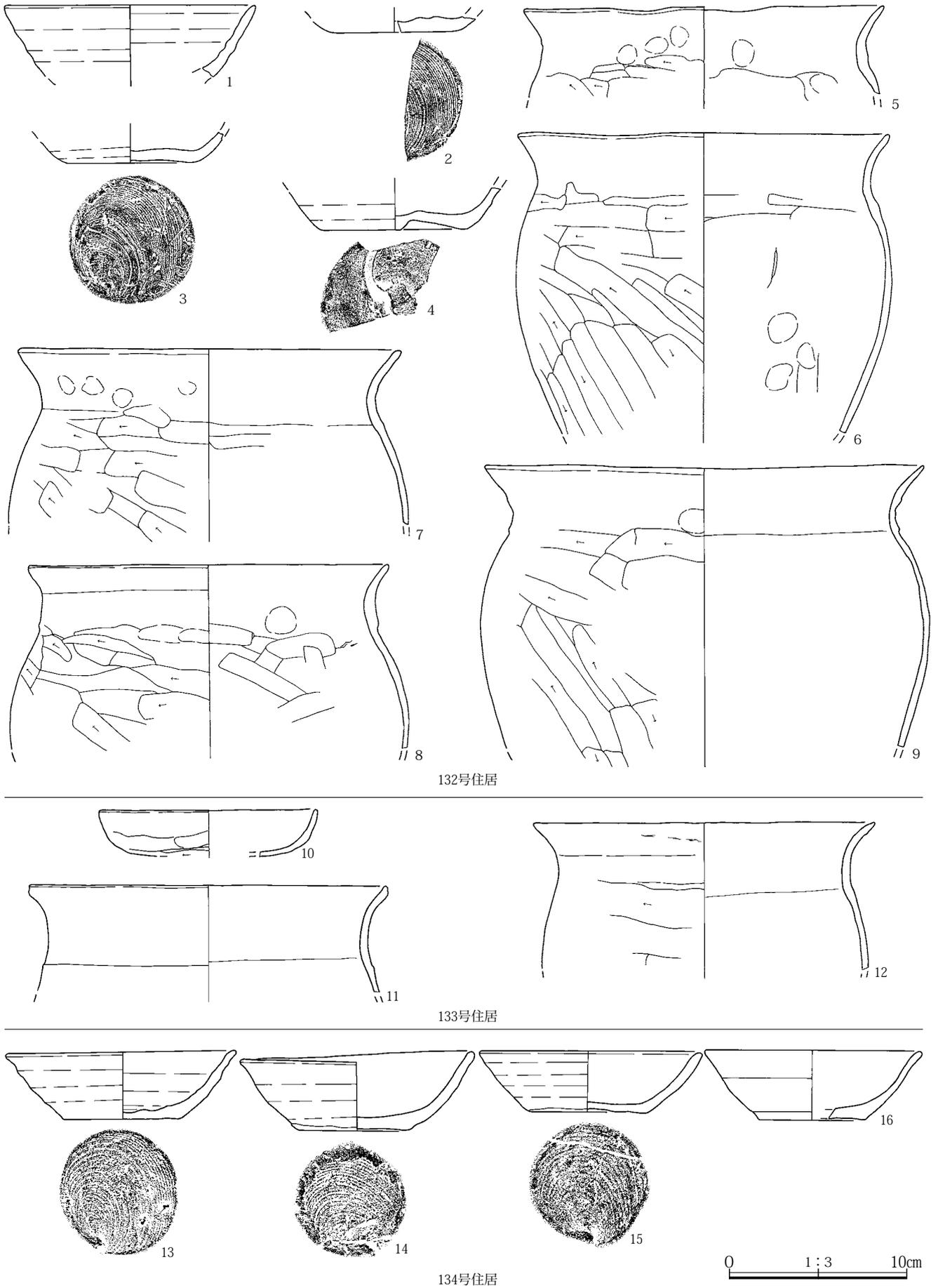
- 1 暗褐色土 As-C・ニッ岳系軽石粒を少量含む暗褐色土主体で、焼土粒・小ブロックを多く含む。
- 2 黄褐色土 XII層土主体で、FA泥流をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 シルト質土の暗褐色土主体で、FA泥流をわずかに含む。
- 4 赤褐色土 XII層土主体で、焼土粒を多量に、焼土ブロックを少量含む。
- 5 黄褐色土 XII層土ブロックと黒色灰ブロック・焼土小ブロックの混土。
- 6 暗褐色土 5層に類似するが、黒色灰の含有は多量である。

I-I'・J-J'

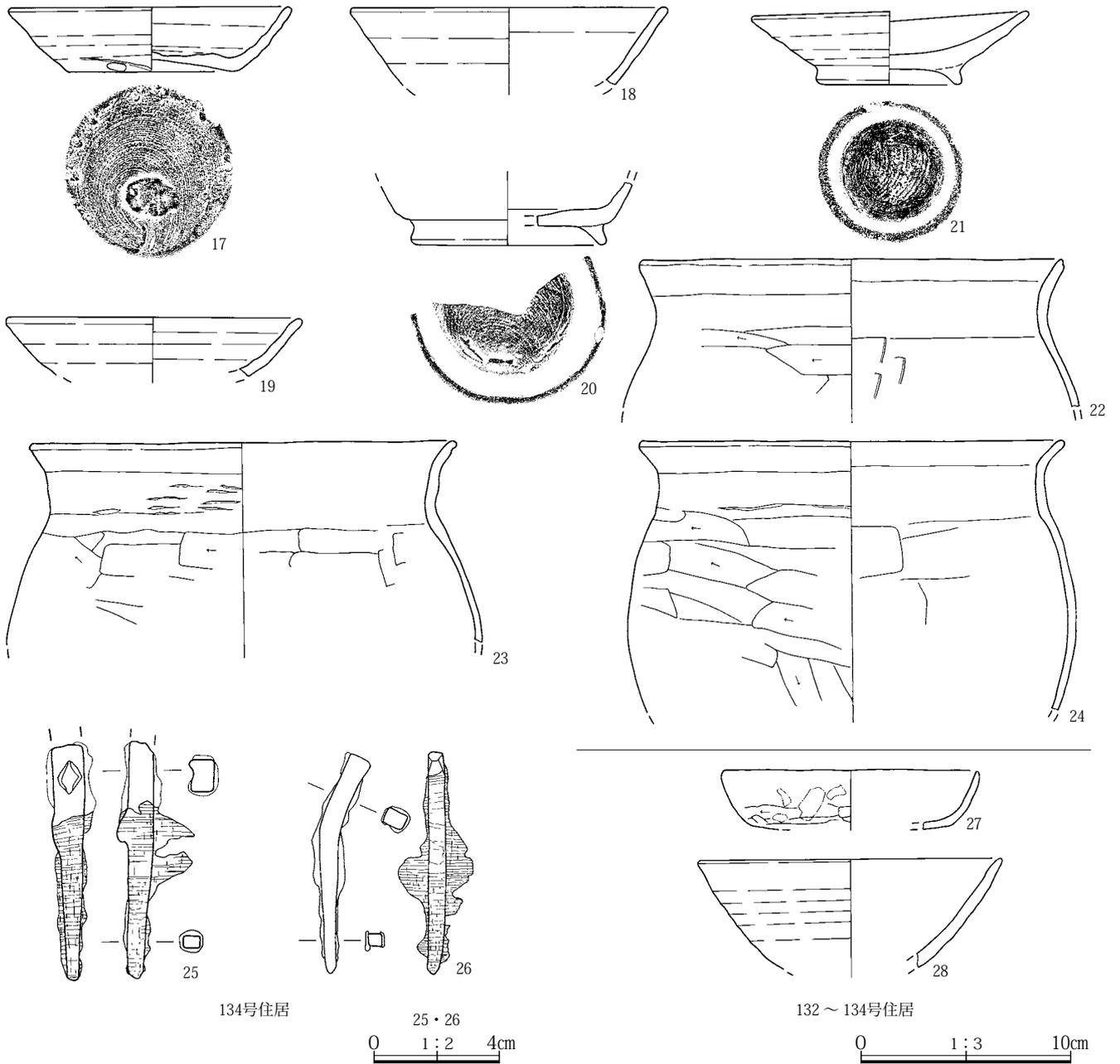
- 1 暗褐色土 XII層土とFA泥流主体で、粘性・しまりが弱い。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、焼土粒を多く含む。
- 3 赤褐色土 シルト質土主体で、黒色灰・焼土粒を多量に含む。
- 4 赤褐色焼土
- 5 赤褐色焼土 焼土主体。
- 6 黒色灰層



第720図 132・133・134号住居カマド



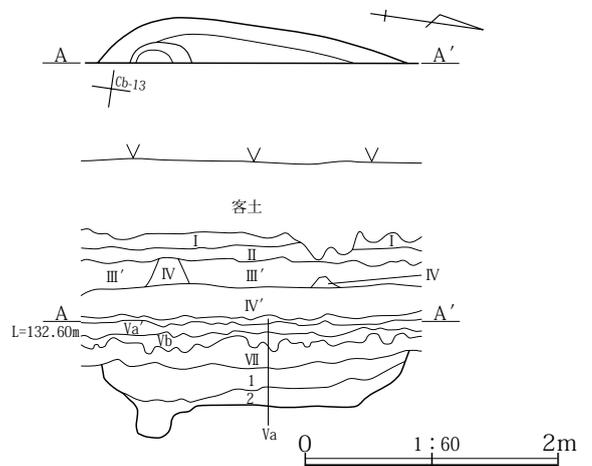
第721図 132・133・134号住居出土遺物(1)



第722図 132・133・134号住居出土遺物(2)

135号住居(第723・724図 P L.162)

位置：Ca-13グリッド 形状：不明 規模：不明 残存
 深度：0.45m 主軸方位：E-3°-S 埋没土：Ⅶ層
 土主体 柱穴：未検出 カマド：未検出 遺物：土師器
 甕の破片(1)が埋没土中から出土した。 重複：不明
 所見：調査区東端に、南西コーナー部から西壁の一部を
 検出した。埋没土及び埋没土中から出土した遺物から当
 該期と判断した。南西コーナー部に深さ0.25mほどの円
 形を呈すると思われる掘り込みが見られ、検出位置から
 貯蔵穴の可能性はあるが、ごく狭い範囲の検出であつた
 ために詳細は不明である。 時期：9世紀後半



第723図 135号住居

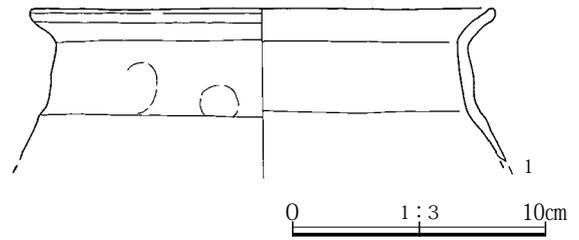
A-A'

IV' 灰褐色土 白色軽石(径2～20mm)・As-Bを多く含む砂質土。
(近世水田耕土?)

Va' 茶褐色土 As-B主体で、酸化鉄集が多い層。(水田床土?)

1 暗褐色土 As-C・二ッ岳系軽石大粒を少量含むシルト質土。

2 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物を多く含み、しまりが弱い。



第724図 135号住居土層注記・出土遺物

137号住居(第725～727図 P L.162・286)

位置:Ca・Cb-7・8グリッド 形状:隅丸長方形 規模:

(4.29)m×3.25m 残存深度:0.30m 主軸方位:

E-0°-N 埋没土:Ⅶ層土主体で、二ッ岳系軽石含

有量が多い。柱穴:未検出 カマド:東壁に設置さ

れていたものと考えられるが、131号住居、345・350号

土坑との重複によって失われている。遺物:遺物出土

はごく少なく南側に偏った出土状況を示している。須恵

器蓋(3)は南西コーナー部から、土師器環(1・2)は南

壁際から出土した。中央部には廃棄されたと思われる礫

が4個まとまって出土した他、棒状礫が5点ほど出土し

ているが、散在した状況での出土のため実測掲載はしな

かった。重複:131・138号住居、345・346・350号土

坑と重複しており、検出状況及び残存状況から137号住

居→131・138号住居→345・346・350号土坑と考えられる。

所見:Ⅺ層土中で遺構確認を行い138号住居と同時に検

出した。壁は崩落などによる変形もなく、明瞭に捉える

ことができた。床面は中央部に比較的広範囲にわたって

硬化面が形成されていたために、明瞭に捉えることがで

きた。掘り方は、中央部やコーナー部などに深さ0.20m

ほどの不整形や楕円形の掘り込みが行われていた。こう

した掘り方とは違って、南壁中央に接して径1.07m、深

さ0.29mほどの円形を呈する土坑1が検出されたが、位

置的に貯蔵穴とは考えられない。貯蔵穴は削平されてい

る南東コーナー部付近にあったものと思われる。時期:

8世紀前半

138号住居(第725・726・728図 P L.162・163・286・287)

位置:Ca・Cb-6・7グリッド 形状:隅丸長方形 規模:

3.57m×4.46m 残存深度:0.26m 主軸方位:E-13

°-N 埋没土:Ⅶ層土主体であるが、137号住居埋没

土と比較して二ッ岳系軽石の含有量が少なく、粒径も小

さい。柱穴:未検出 カマド:東壁中央やや南寄りに

検出された。煙道部がわずかに突出した釣鐘状の平面形

で、主軸方位はE-13°-Nである。住居壁との接点には

両側に構築材として礫を据えているが、天井石にあたる

礫は周辺を含めて検出されていない。燃烧部底面及び

側壁、奥壁の焼土化は顕著で、遺構確認段階でもカマド

形状が明瞭に把握することができた。カマド埋没土下層

に焼土粒や小ブロック、灰の含有が目立っていた。支脚

は検出されておらず、掘り方調査でも痕跡はなかった。

遺物:遺物の多くは床面より上位から出土している。住

居に伴う可能性の高い遺物では、貯蔵穴から出土した須

恵器環(5)・埴(9・14)、カマド燃烧部から出土した

羽釜(17・19)がある。21の刀子は柄の木質の残るもの

で、ちょうど137号住居との重複部分であり、帰属につ

いて確定しがたいが、138号住居からは22の刀子をは

じめ棒状の鉄釘(25)など鉄製品の残存が良好であること

から138号住居に帰属するものと判断した。他に灰釉陶器

が3点出土している。重複:137号住居、345・346号

土坑と重複しており、検出状況及び出土遺物の比較から

137号住居→138号住居→345・346号土坑である。所見:

Ⅺ層土中で遺構確認をしたもので、西壁の一部が調査区

境に係るために調査できなかつた他、137号住居との重

複部分が検出できなかつた。床面は平坦で壁際を除いて

広範囲に硬化面が形成されていた。貯蔵穴は、南西コー

ナー部に掘削されており、径0.85m、深さ0.19mの円形

を呈する掘り込みのコーナー寄りに、さらに径0.43m、

深さ0.63mの規模で円形掘り込みが付属していた。カマ

ド正面の位置から扁平な礫が4点とやや小振りの礫3点

が集中して出土した。こうした事例は重複する137号住

居でも認められ、他にも大礫が集中出土した例は時期を

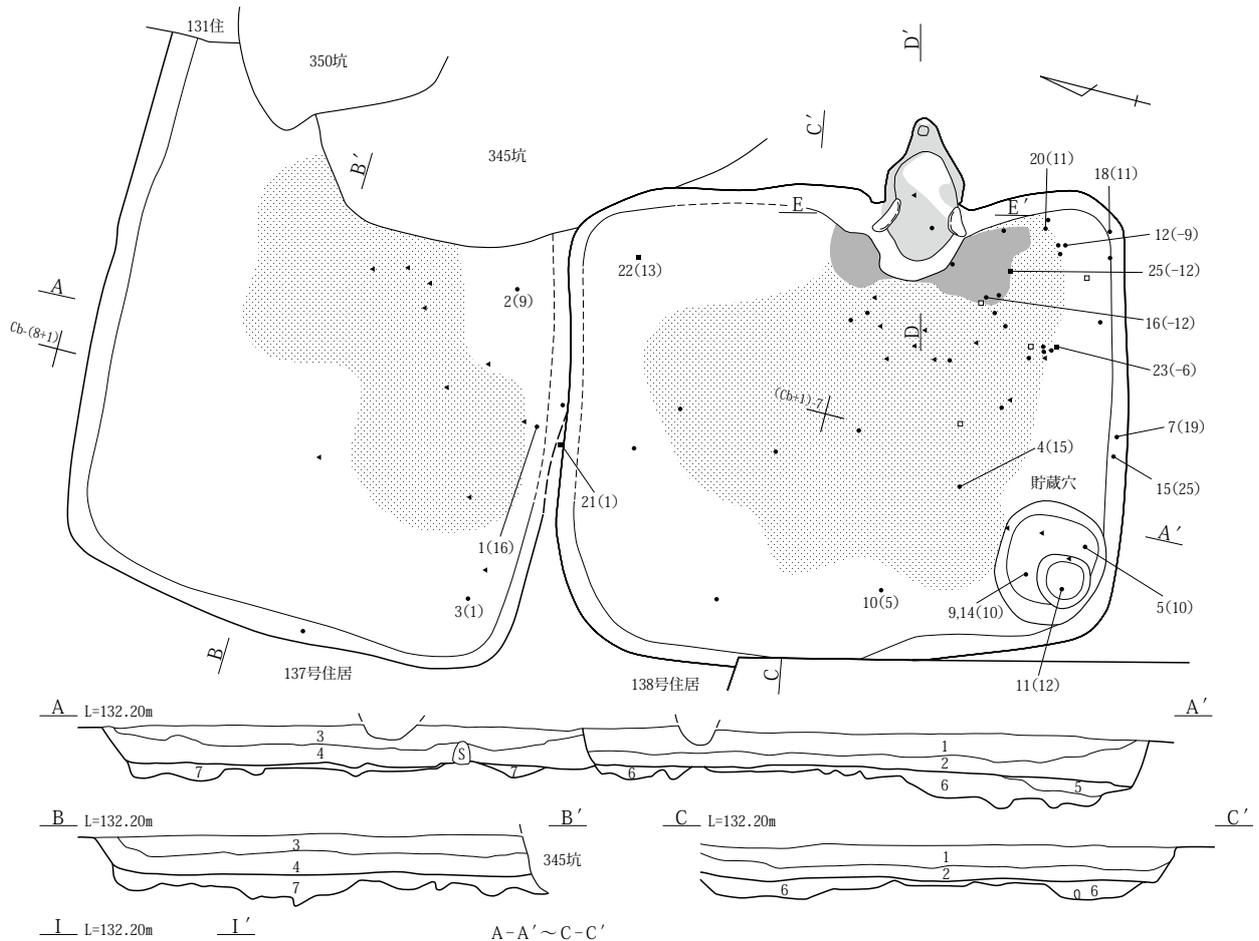
越えて認められる。礫の大半は被熱痕跡などなくカマド

の構築材の片づけられたものとは考えられない。また、

住居掘削は礫層まで達するものはごく稀であり、掘削に

際して出土した礫を片づけたものとも考えられない。し

たがって、住居廃棄時に何らかの意図をもって行われた

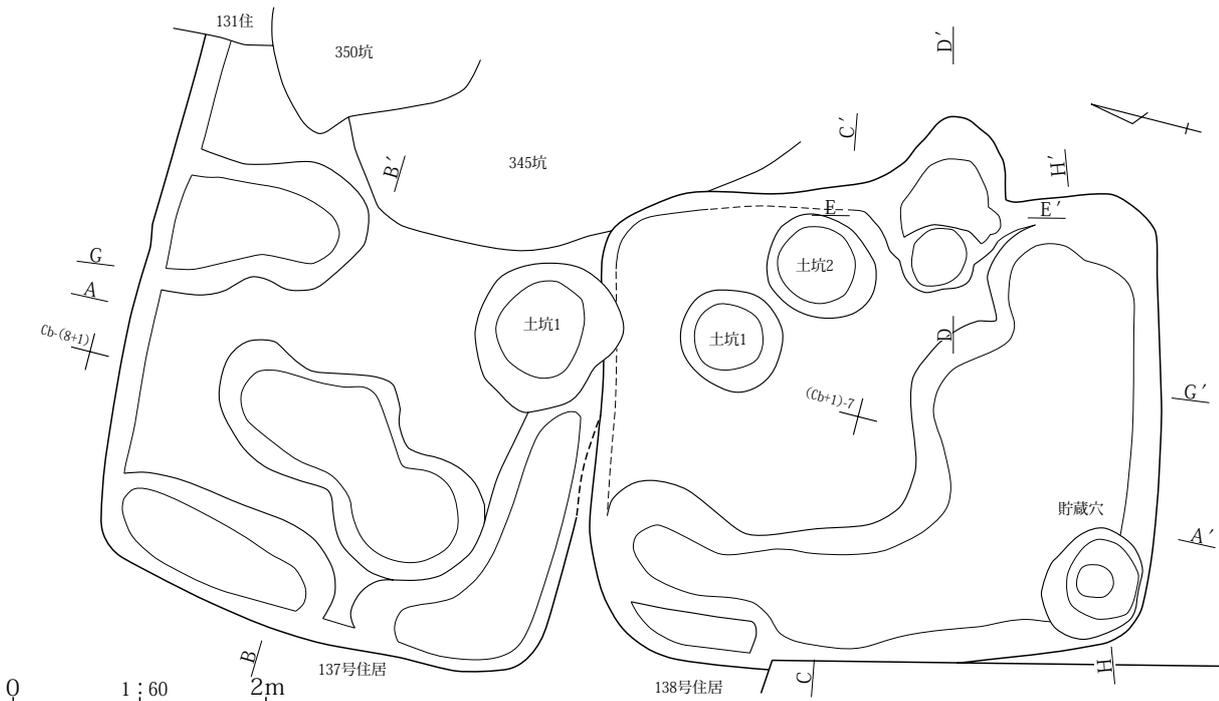


I - I'

1 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土主体で、ⅩⅢ層土粒をわずかに含む。

A - A' ~ C - C'

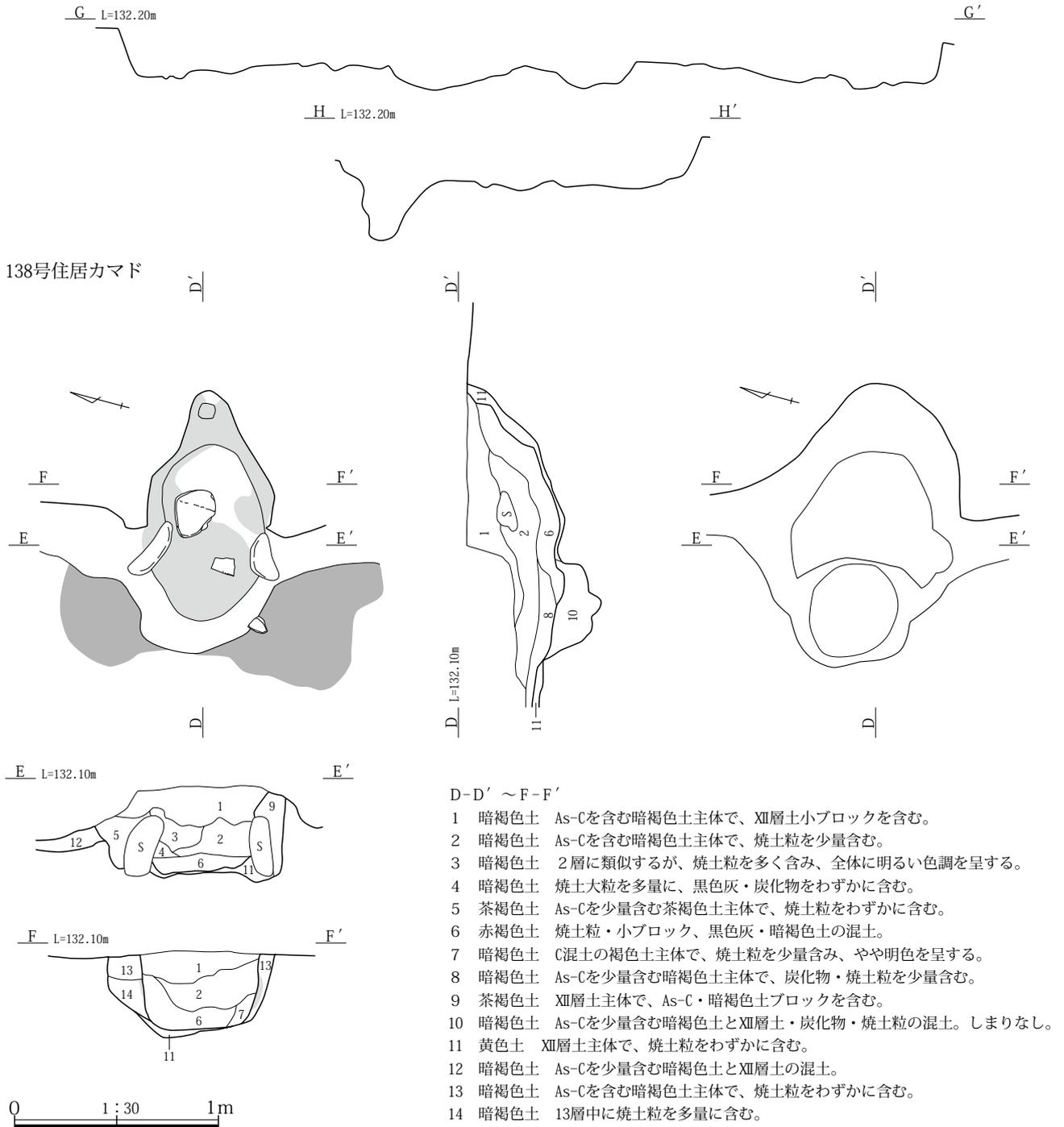
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ッ岳系軽石(5~10mm大)を少量含む暗褐色土主体。
- 2 暗褐色土 ⅩⅢ層土ブロックを少量含み、二ッ岳系軽石の含有は1層より少量である。
- 3 暗褐色土 As-C・二ッ岳系軽石(5~20mm)を多量に含む暗褐色土主体。
- 4 暗褐色土 As-Cを多く、二ッ岳系軽石を少量含む暗褐色土主体で、ⅩⅢ層土ブロックを少量含む。
- 5 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土とⅩⅢ層土ブロックの混土。
- 6 暗褐色土 As-Cを少量含む 暗褐色土とⅩⅢ層土ブロックの混土。
- 7 暗褐色土 As-Cを多く、二ッ岳系軽石を少量含む暗褐色土主体で、ⅩⅢ層土小ブロックを少量含む。



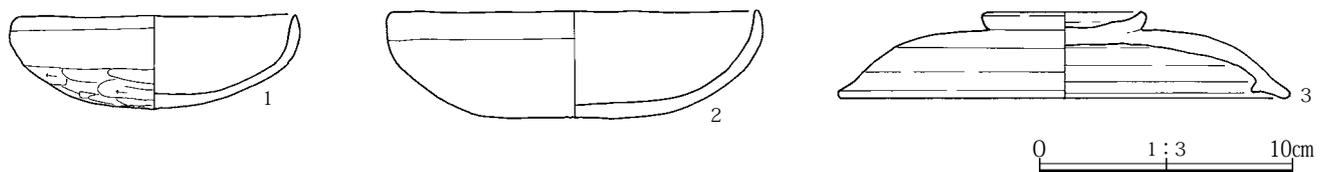
第725図 137・138号住居

行為である可能性があらう。掘り方は、全体に浅く掘削されていたものであるが、特に南東コーナー部から南壁、さらに西壁に沿って「L」字形にやや深い部分が認められ

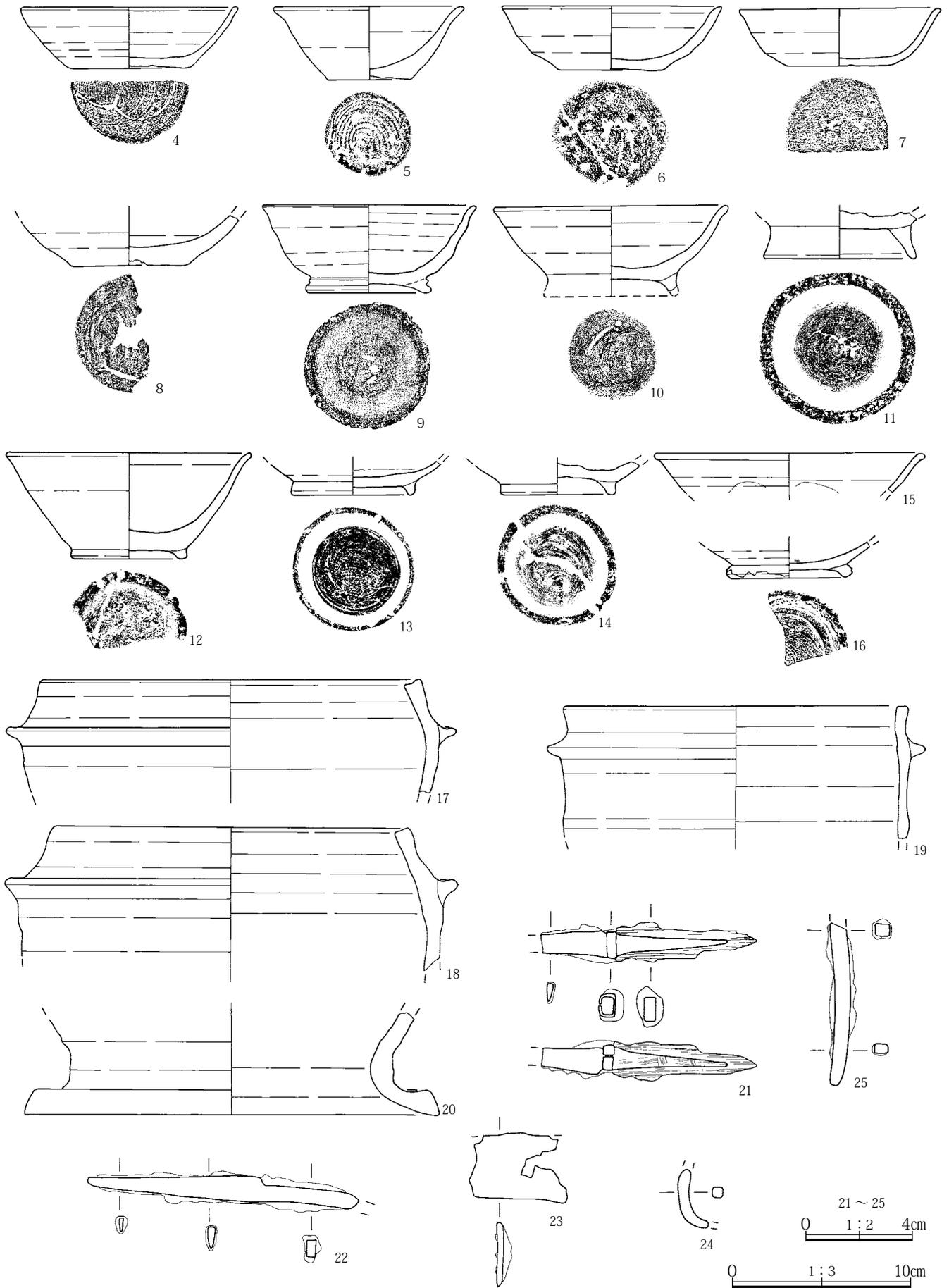
た。また、北東コーナー寄りには土坑1（径0.78m、深さ0.24m、円形）と土坑2（径0.78m、深さ0.20m、円形）が掘削されていた。 時期：10世紀前半



第726図 137・138号住居高低図・138号住居カマド



第727図 137号住居出土遺物

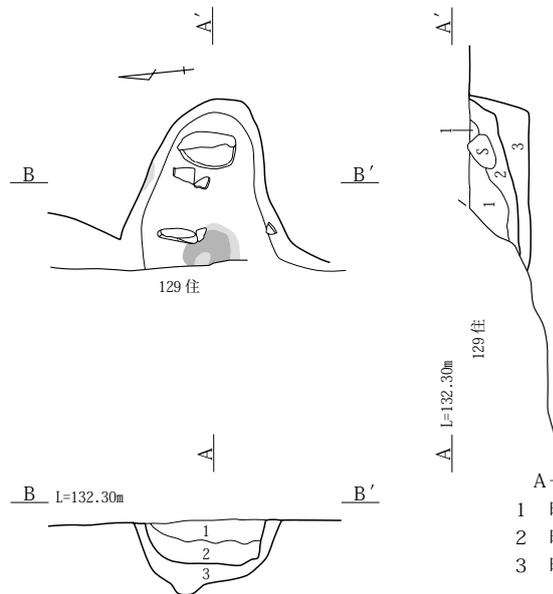


第728図 138号住居出土遺物

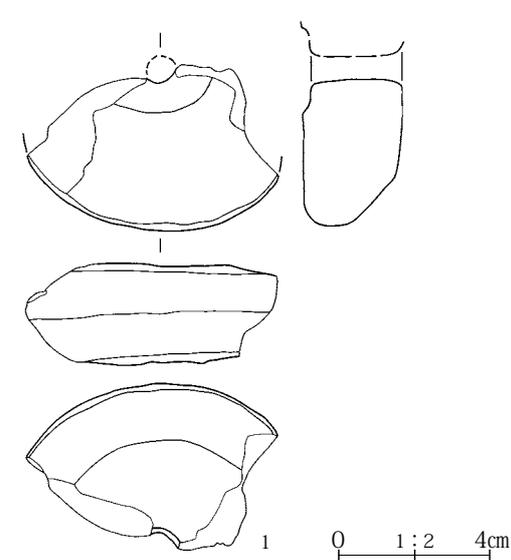
140号住居(第729図 P L.163・287)

位置:Cb-10・11グリッド 形状:不明 規模:不明
 残存深度:不明 主軸方位:不明 埋没土:Ⅶ層土主体
 と考えられる。柱穴:不明 カマド:東壁の南寄りに
 偏った位置に設置されたものである。燃烧部には焼土が
 形成されていたが、検出された場所は屋内との境にあたる
 位置であり、この場所が燃烧部中央であったとすると
 屋内にわずかに張り出す形態のカマドであった可能性が
 ある。燃烧部側壁の一部にも焼土化した部分があり、奥
 壁近くから出土した礫は1/2ほどに被熱による変色が認め
 られることから、本来は側壁などの構築材であったもの
 と考えられる。残存した平面形はやや歪んだ砲弾状
 であり、主軸方位はおおよそE-11°-Sである。遺
 物:燃烧部から土製の紡錘車(1)が1点出土した。重

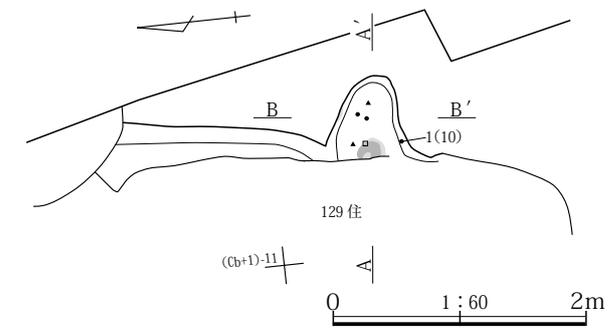
複:129号住居と重複しており、検出状況から140号住居
 →129号住居である。所見:129号住居の調査時点で、
 東壁の壁面に焼土及び炭化物が検出されたことから、カ
 マドの存在を認識した。住居本体は、カマド北側の東壁
 の一部が残存していた以外、129号住居との重複によっ
 て完全に失われており、掘り方調査においても痕跡は検
 出されなかった。時期:不明



A-A'・B-B'
 1 暗褐色土 As-Cを多く、二ッ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土。
 2 暗褐色土 1層主体で、炭化物・焼土粒を多く含む。
 3 暗褐色土 As-C・二ッ岳系軽石を少量含む暗褐色土主体で、焼土粒をわずかに含む。



第729図 140号住居・出土遺物

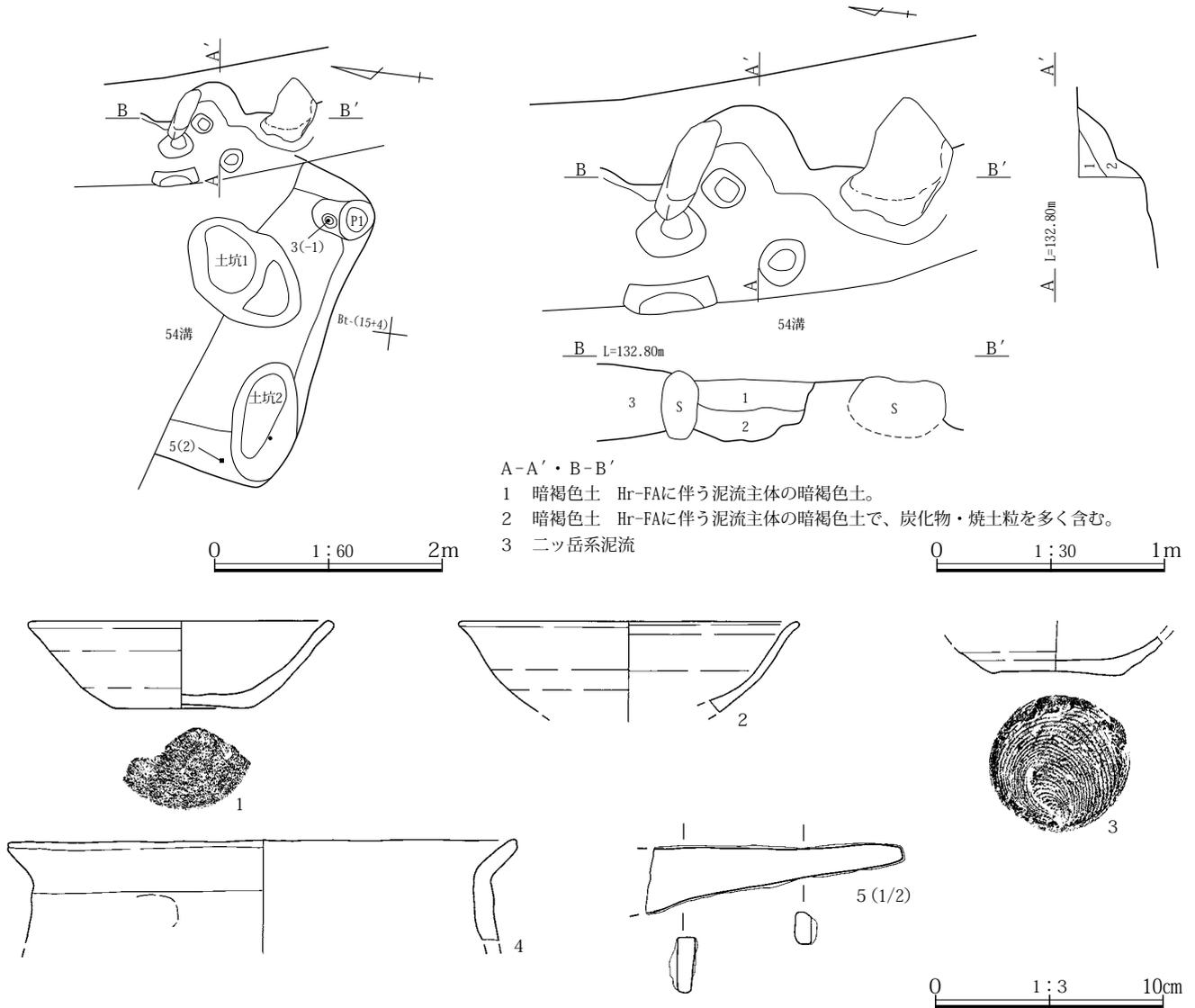


141号住居(第730図 P L.287)

位置:Bs・Bt-15・16グリッド 形状:隅丸長方形? 規模:
 2.86m×(2.25)m 残存深度:0.14m 主軸方位:E-
 13°-S 埋没土:二ッ岳系軽石含有の多い黒褐色土。
 柱穴:未検出 カマド:東壁の南寄りに設置されていた。
 左側壁の構築材の礫が1点残存していた他に構築材は認
 められなかった。燃烧部埋没土下層には焼土と炭化物が
 多量に混入していたが、底面に焼土化した部分はなかつ
 た。E-10°-S 遺物:土坑2近くから不明の鉄器(5)
 が出土した。重複:54号溝と重複しており、検出状況
 から54号溝→141号住居である。所見:Hr-FAに伴う泥
 流によって埋没した南東方向に向かう谷部に位置してお

り、下部に54号溝が構築されていたことから窪みとなり、黒褐色土が堆積していたために住居の存在が認識できなかった。溝の調査を進めていく中で、9世紀代の遺物が出土したことで溝の南側に住居南半の形が捉えられ、さらに東調査区際にカマド構築材が検出されたことで、住居の存在に気づいた。したがって、住居が認識された時点で床面と考えられる面を掘り下げてしまったために、

詳細な観察はできなかった。調査のできた南側1/4ほどの部分では、掘り方が行われていたことが確認され、特に南東コーナー部にP 1 (径0.30m、深さ0.04m、円形)、中央寄りの位置に土坑1 (1.18×0.78m、深さ0.21m、楕円形)、南西コーナー部に土坑2 (1.07×0.57m、深さ0.14m、楕円形)がそれぞれ掘削されていたことが判明した。 時期：9世紀後半



第730図 141号住居・出土遺物

(2) 溝

10号溝(第731図 P L.164)

位置：Bm・Bn-15～17グリッド 規模：(14.20)m×0.81m 残存深度：0.14m 走行方位：N-33°-W 遺物：なし 所見：調査区北端から南東方向に向かい、12号溝との重複部分で走行方向が不明となっている。B混土(V層土)を除去した時点で検出されたもので、As-B純層に

よって埋没していた。純層であることは青灰色の火山灰が検出されていることから明らかで、底面との間に間層が認められないことから、As-B直下の溝と見て良いであろう。残存状況は良好ではないが、掘削は直線的であり区画溝と見るのが妥当であろう。

14号溝(第732～734図 P L.164・287)

位置：Bh～Bp-6～20グリッド 規模：(79.48)m×1.35

～2.00m 残存深度：0.40m 走行方位：N-17°-W
 ～N-0°-W～E-40°-N 遺物：須恵器環・蓋が
 出土した。 所見：Ⅱ区からⅢ区にかけて検出されたも
 ので、Ⅱ区においては南北にやや弓なりに走行したもの
 が、Ⅲ区では南西方向に走行し、Ⅰ区との境で1面の道
 路及び溝との重複によって先が辿れなくなる。Ⅱ区で14
 号溝として調査を開始したが、Ⅲ区調査では連続するに
 もかかわらず新たに50号溝としてしまった。そこで整理
 段階で50号溝を欠番として14号溝の名称に統一した。断
 面は鍋底状を呈しており、底面に硬化などは認められな
 い。埋没土はしまりの弱いⅦ層土を主体とするものであ
 り、下層が2～3層に分層できるのに対して上層は1層
 であり、埋没の仕方に違いがありそうである。この埋没
 土中に砂の堆積は認められていないことから、通水され
 ていた可能性はなく、おそらくは区画を目的とした溝
 と考えられる。11・14・77・83・96・100号住居及び3
 号道などと重複しており、10世紀前半に位置付けられる
 14・83号住居に削平されていることが確認されているこ
 とから、これ以前の段階で埋没しており9世紀代の溝に
 なる可能性が高い。他に埋没土中から、14号溝の走行方
 向の変化は比較的緩やかなものであり、先の辿れなくな
 る市道下で南北いずれかに急激に走行を変えるとは考え
 にくく、そのまま西側へと続いていたと考えるのが妥当
 であるが、田口上田尻遺跡側ではほぼ対応する位置に当
 該時期の溝は確認されておらず、その代わりやや位置が
 ずれるものの、2面Ⅱ期として報告した69号溝が位置し
 ている。69号溝は中ほどの位置から西側では薬研状の深
 い掘り方であり埋没土の状況からⅠ期に位置付けたもの
 であるが、東半分は鍋底状の断面形状をしており、14号
 溝に類似する様相が認められることから、14号溝の延長
 部分が後世に掘り直しされている可能性がある。

19号溝(第731図 P L.164)

位置：Bm～Bo-1～3グリッド 規模：(14.63)m×0.80
 m 残存深度：0.30m 走行方位：E-28°-N 遺物：
 少量出土した。 所見：復旧痕が密に掘削されていた場
 所であり、Ⅶ層土中で平面を確認した。西側は2号住居
 及び復旧痕との重複で失われ、東側は1号道によって削
 平されており、これより東側には検出されていない。走
 行方向については記載したとおりであるが、やや蛇行ぎ
 みに走行している。2号住居と重複しており、2号住居

の南北土層断面には19号溝が認識できないことから、19
 号溝→2号住居であるとすると、8世紀前半よりも古い
 時期の溝になるものと考えられる。

25号溝(第735図 P L.164・287)

位置：Bj・Bk-13～17グリッド 規模：(20.70)m×0.50
 ～1.12m 残存深度：0.38m 走行方位：N-22°-W
 遺物：埋没土中から礫の出土は顕著であったが、提示で
 きるような遺物出土は見られなかった。 所見：3号道
 と2.5mほどの間隔で平行するように検出されたもので、
 南側は立ち上がっており、これより南には対応する溝は
 検出されていない。埋没土は、Ⅶ層土を主体とするもの
 で中間に灰褐色粘質土ブロックを含む帯状の層を挟ん
 で、上下2層に分層が可能である。上面を覆うⅤ層土の
 存在と埋没土の状況から古代の所産であることは確実で
 ある。しかし、時期を推定し得るような遺物の出土がな
 いたために、時期を絞り込むことができないのであるが、
 走行方向の類似など3号道と無関係とは考えられないこ
 とから、3号道に想定した10世紀後半代に近い時期を想
 定しておきたい。

27号溝(第735図 P L.165)

位置：Bj-14グリッド 規模：3.52m×0.31～0.80m
 残存深度：0.10m 走行方位：— 遺物：なし 所見：
 25号溝に直行する位置関係で検出したもので、湾曲する
 ように掘削されているため、走行方向の計測はしなかつ
 た。埋没土の主体はAs-Cを含むⅦ層土であり3面の遺構
 とも考えたが、ブロック状に入った灰褐色粘質土が25号
 溝にも共通するものであったため2面で扱った。両端立
 ち上がっており区画や水路としての用は無さない。畑の
 サクの一部が残存した可能性もある。

29号溝(第735図 P L.165)

位置：Bm-15・16グリッド 規模：2.96m×0.71m 残
 存深度：0.32m 走行方位：N-4°-W 遺物：なし
 所見：中央を168号土坑との重複で削平されている。168
 号土坑は、埋没土の状況から古代の土坑と考えられるこ
 とから、これよりも古い時期の遺構ということになる。
 全長が短く長楕円形の土坑との見方も可能であるが、調
 査時の判断に従って溝として報告した。南北両端で明瞭
 に立ち上がっており、これ以上南北に延びるとは思われ
 ない。性格は不明である。

31・54号溝(第736・737図 P L.165・287)

位置:Bm～Bt-16～18グリッド **規模:**(34.50)m×3.25m **残存深度:**0.80m **走行方位:**E-19°-S **遺物:**棒状礫が出土した。 **所見:**国道17号を挟んで東西の調査区で検出したもので、Ⅱ区31号溝とⅣ区54号溝が走行方向や検出状況から一連の溝であることがほぼ間違いないと考えられることから一括して記述する。溝の断面形状は、上端が開いた「U」字状を呈し、南西側の傾斜がやや緩やかである。特筆されるのは、掘削面がほとんど荒れることなくHr-FAが直上に堆積し、さらに5層ほどの色調と粒径の異なる砂層を挟んだ上を径30mm大の軽石が覆っていた。この軽石層中には径300mmを超えるような軽石も入っており、流下堆積したものであることは明らかであり、Hr-FPに伴うと考えられる泥流にあたるものである可能性が高い。また、溝は元来南東方向に向かう浅い谷に掘削されたもので、溝を覆っていたHr-FAは地形に沿っても堆積しており、最終的に泥流の堆積によってほぼ平坦な地形になったものと思われる。3面Ⅰ期で記述した30号溝とは、調査区北側至近の位置で交差する位置関係であるが、30号溝の掘削された南に向かう谷にはHr-FA及び泥流の堆積は認められず、31・54号溝が掘削された時点では埋没していたものと考えられる。可能性としては、30号溝の掘削された谷が埋没していく中で、この谷に代わって開析された谷が31・54号溝の掘削された谷になるのではないだろうか。前述のように31・54号溝は、掘削後あまり時間を置かずHr-FAに覆われ、その後泥流によって谷もろとも埋没したものと考えられる。掘削後に通水されたものか確認はできなかったが、本来は通水を目的として掘削されたものと思われ、その目的とするところは東側の低地帯への給水ではないかと考えられる。この溝の南東側は今後実施されるであろう上武道路の発掘調査においても検出されるはずであり、より詳細な検討が可能となろう。

44号溝(第738図 P L.165)

位置:Be～Bh-16・17グリッド **規模:**(15.20)m×2.21m **残存深度:**0.50m **走行方位:**E-17°-N **遺物:**小片が出土した。 **所見:**調査区の北西端で検出したもので、Ⅸ層土中で平面の確認を行った。断面形状は鍋底状を呈しており、壁上半の立ち上がりは緩やかである。底面に硬化した面は形成されておらず、道になる可能性は低いと思われる。東側は調査区外になるが、直線

的に掘削されたものであれば東端で14号溝と直行するように確認されたはずである。しかし、この部分には検出されず、南側にも対応するような溝は検出されていないことから北または北東方向に走行を変えている可能性が高い。西側は延長上に田口上田尻遺跡7号溝が検出されており、断面形状などの共通性から連続するものと考えられる。埋没土などから4世紀代の遺物が多く出土しているが、これらは周辺遺構から流れ込んだものと思われ、少量ながら出土した須恵器杯・埴などの時期と見られることから9世紀後半頃に位置付けられる溝であろう。45号溝と重複しているが、検出状況から45号溝→44号溝と考えられる。

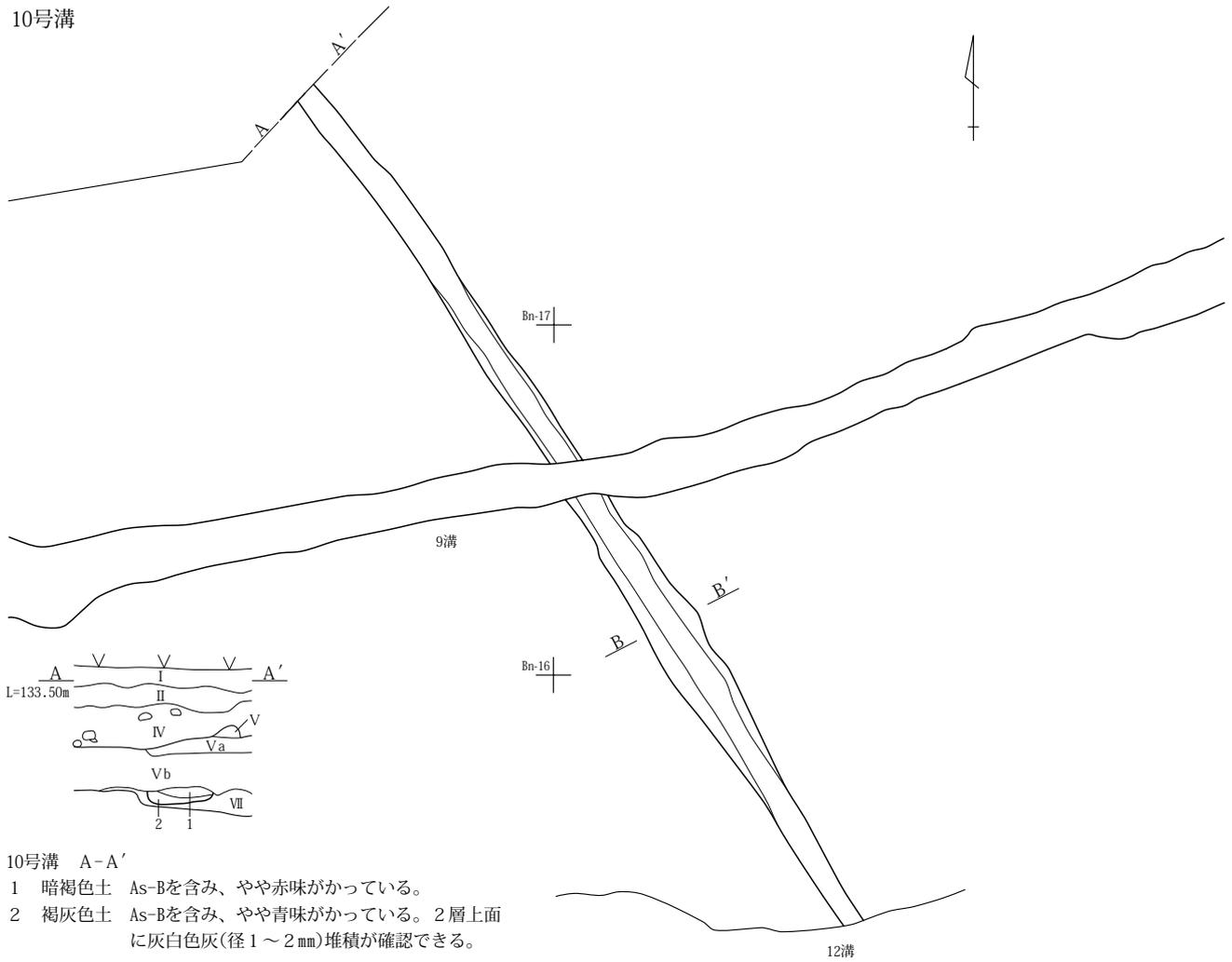
45号溝(第738図 P L.165・166)

位置:Bg-17グリッド **規模:**(2.82)m×0.95m **残存深度:**0.58m **走行方位:**N-4°-W **遺物:**なし **所見:**44号溝と直行する方向で検出されたもので、検出状況から45号溝→44号溝と考えられる。北側に延びることは確実であるが、南側は44号溝の南壁の位置で立ち上がっており、南側には対応する当該期の溝は検出されていない。埋没土はⅦ層土を主体とするもので、砂の堆積など通水されたような痕跡は見られないことから、区画溝の一部と考えられる。

52号溝(第738図 P L.166)

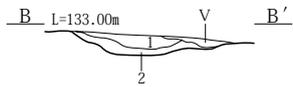
位置:Bs-16グリッド **規模:**(2.45)m×0.42m **残存深度:**0.22m **走行方位:**E-24°-S **遺物:**なし **所見:**141号住居と332号土坑によって東西端が削平されており、141号住居よりは古い段階の遺構である。また、確認したのはHr-FPに伴うと考えられる泥流上であることから、6世紀中ごろよりは新しい。時期を推定できるような出土遺物がないために、これ以上の時期を特定することはできない。掘り込み面が軽石を主体とする泥流面であるため、検出状況はあまり良好ではなかったが、断面形状は逆台形状を呈する掘り方のしっかりとした溝である。埋没土は粒径のやや小さなFA泥流起源の軽石を主体とするものである。下部の54号溝と走行方向が近いことは、掘削時期は異なるものの、南東方向への通水目的で掘削されたものである可能性が高い。

10号溝



10号溝 A-A'

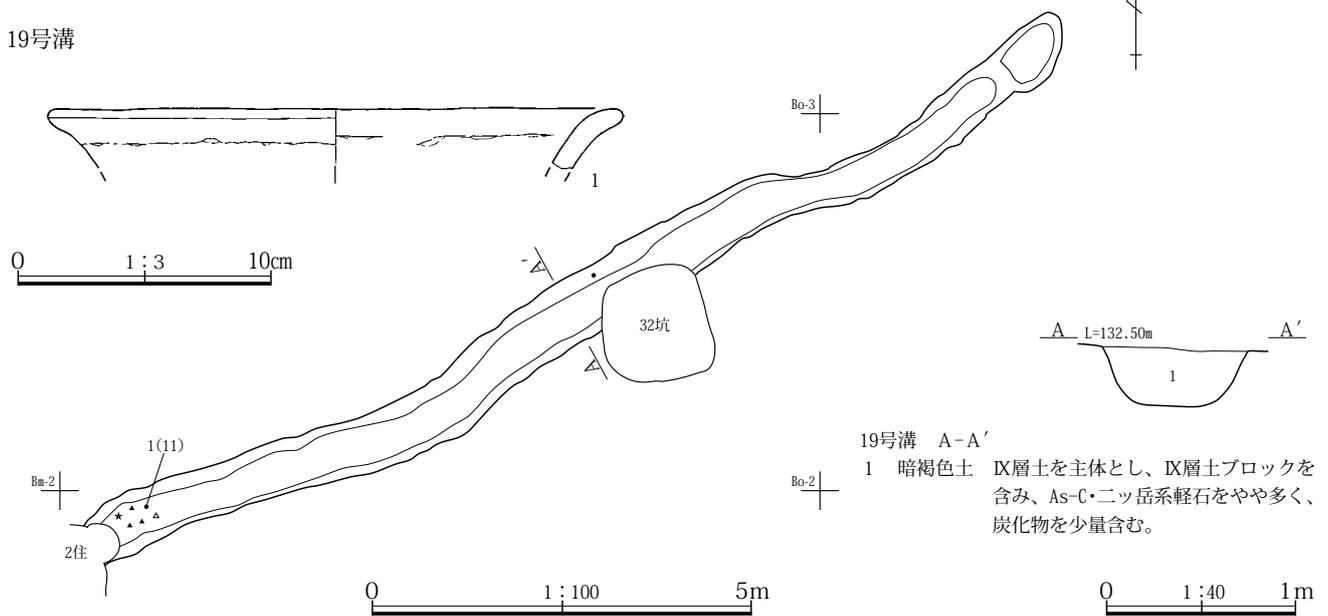
- 1 暗褐色土 As-Bを含み、やや赤味がかっている。
- 2 褐灰色土 As-Bを含み、やや青味がかっている。2層上面に灰白色灰(径1～2mm)堆積が確認できる。



10号溝 B-B'

- 1 暗褐色土 As-B主体の層。
- 2 暗褐色土 As-B主体で、グレーアッシュを層状に含む。

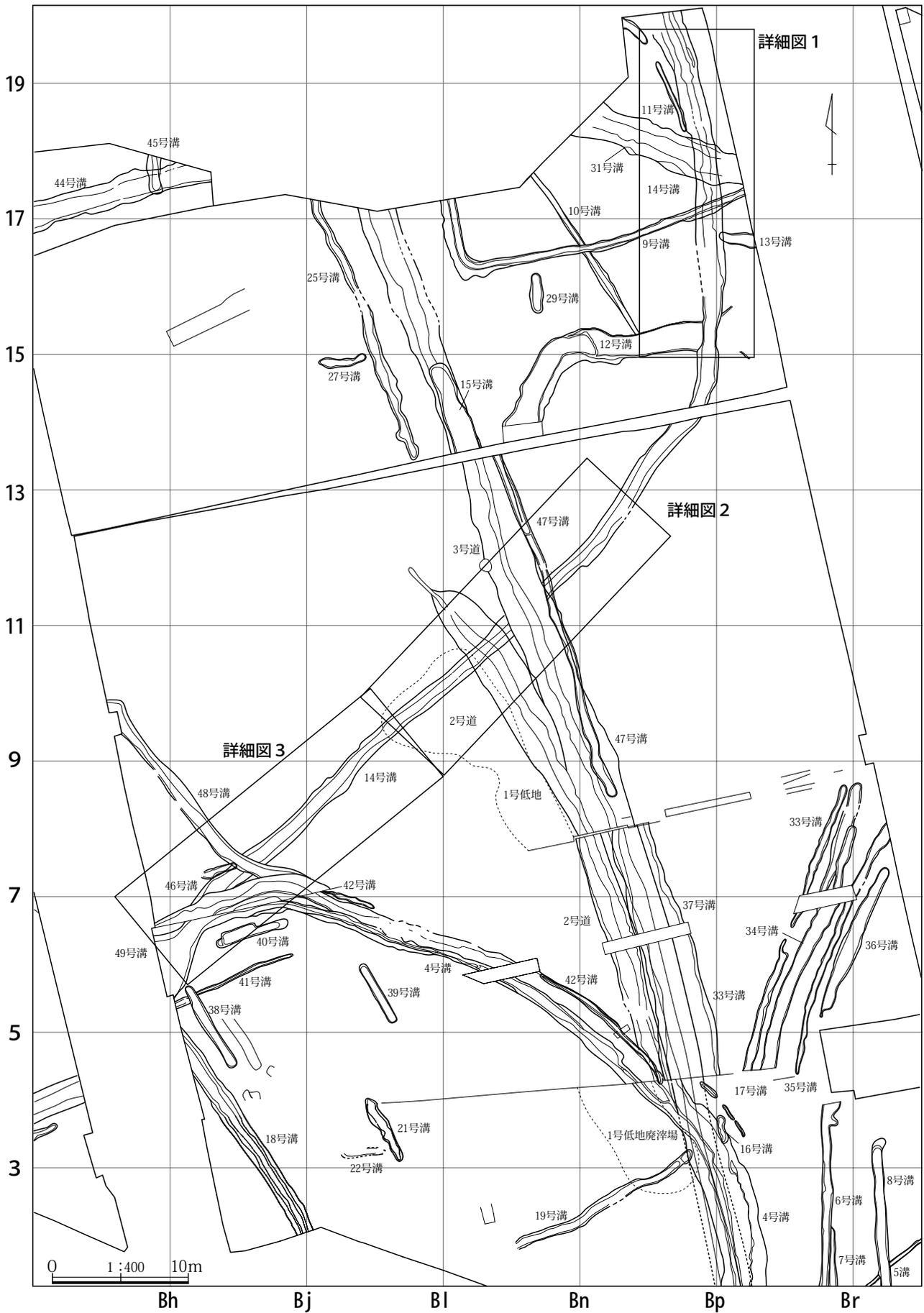
19号溝



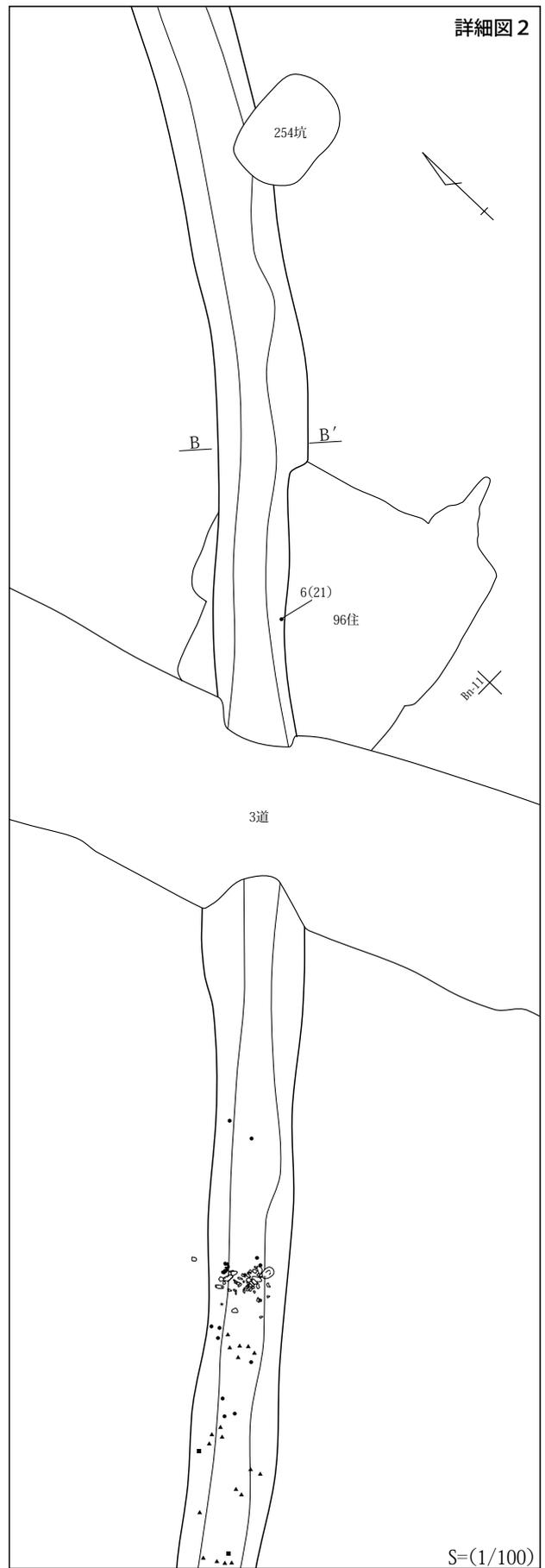
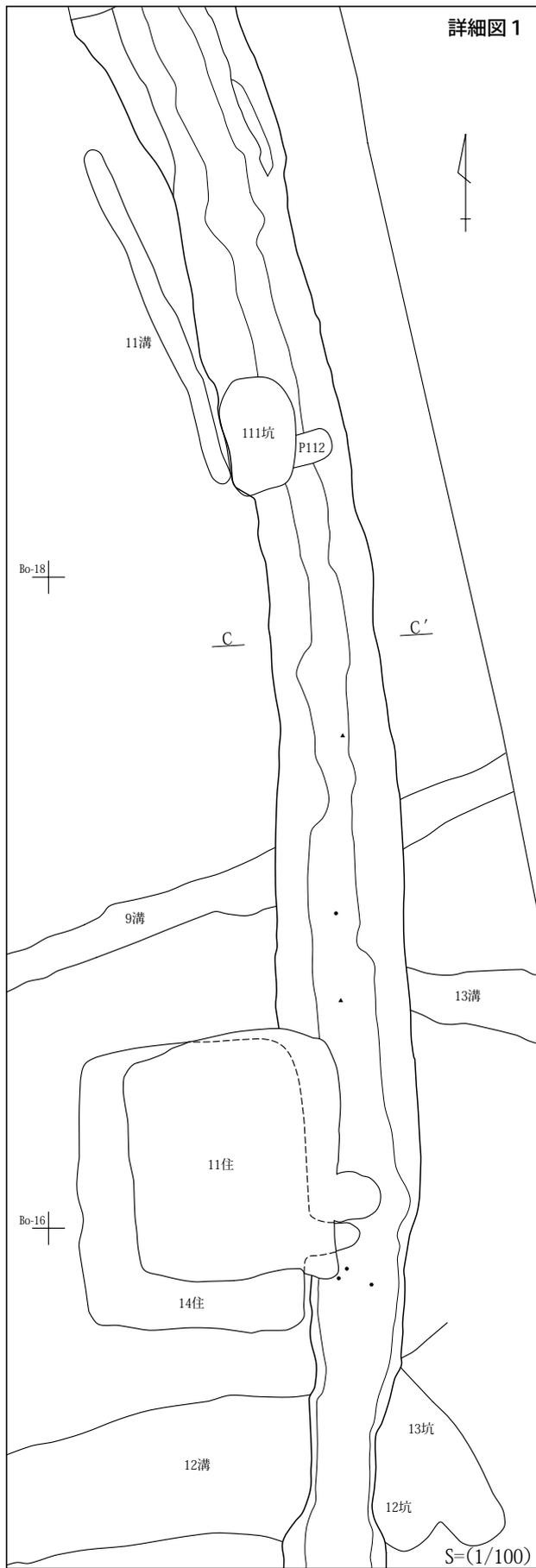
19号溝 A-A'

- 1 暗褐色土 IX層土を主体とし、IX層土ブロックを含み、As-C・二ツ岳系軽石をやや多く、炭化物を少量含む。

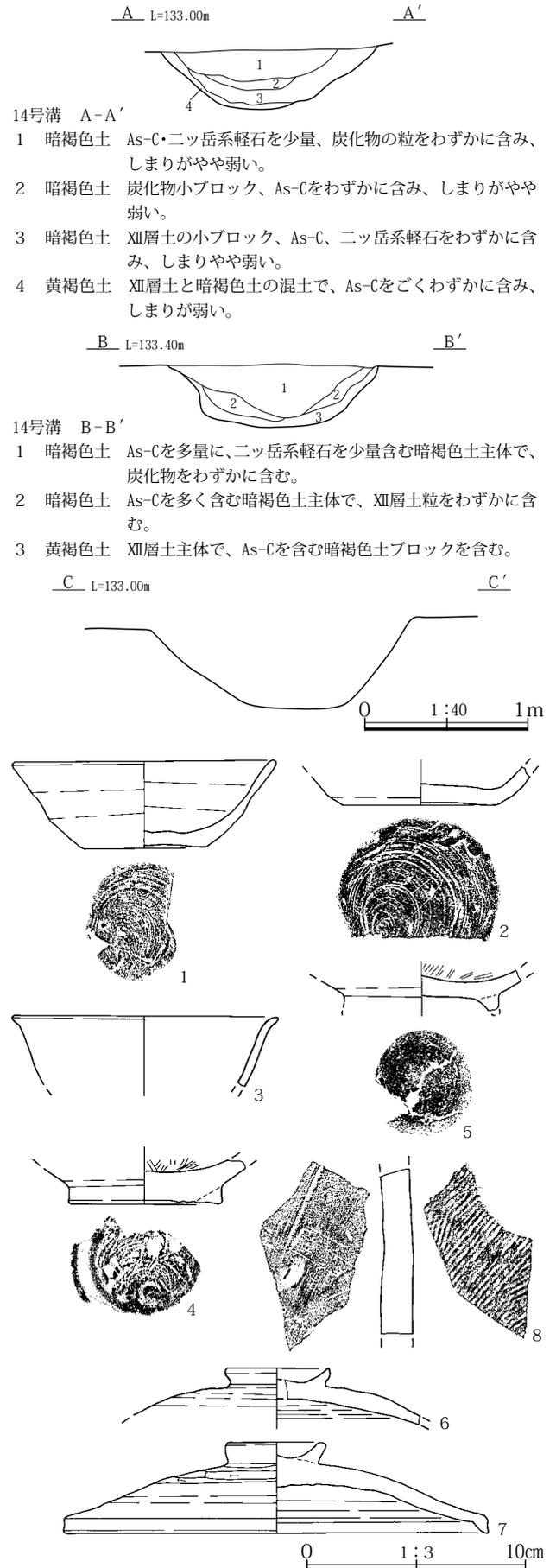
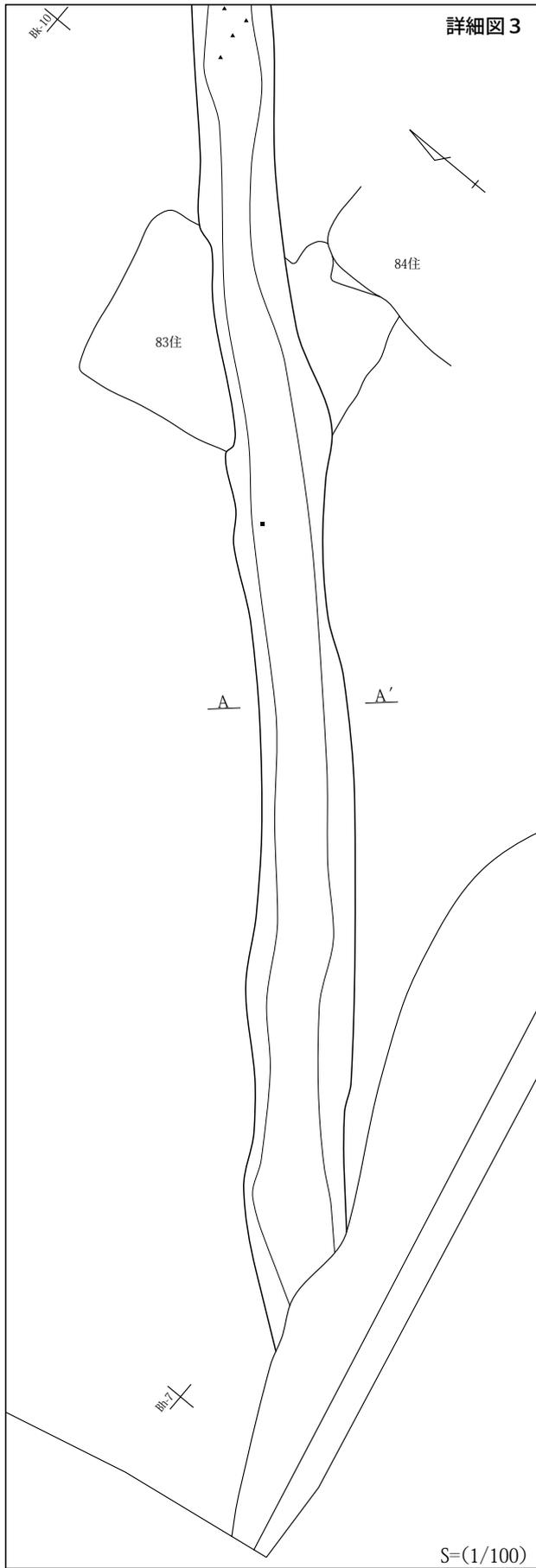
第731図 10・19号溝・出土遺物



第732図 14号溝全体図

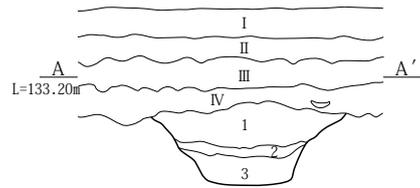
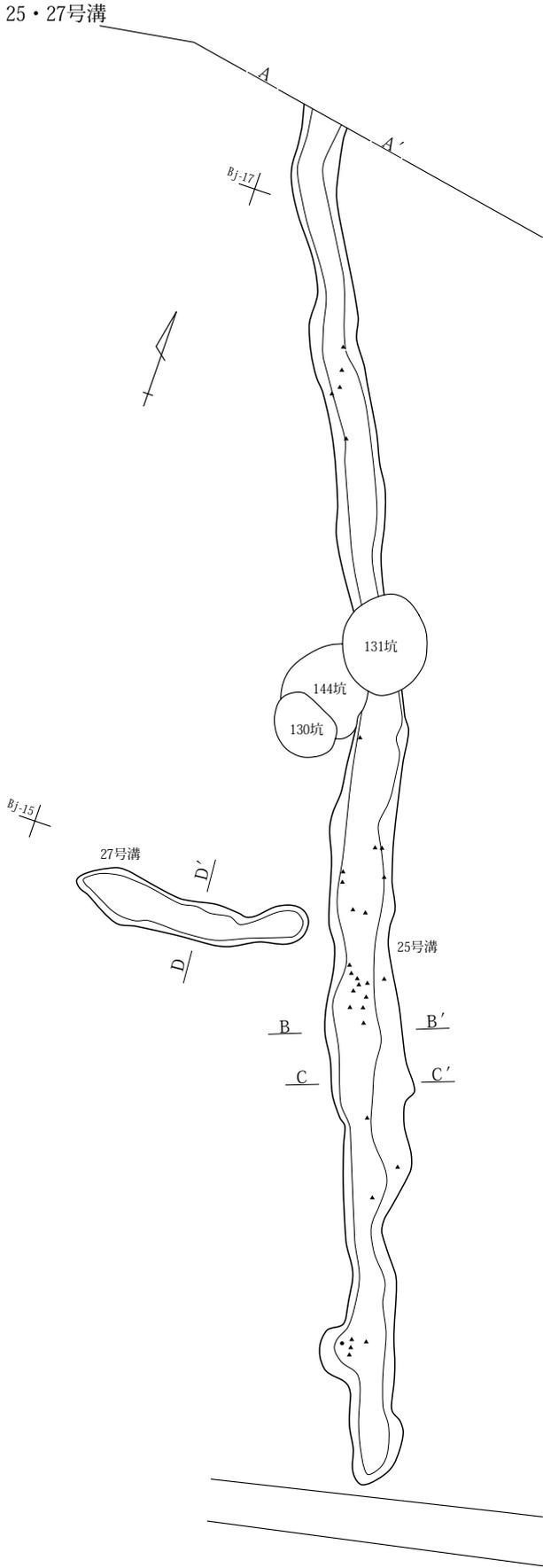


第733図 14号溝詳細図1・2



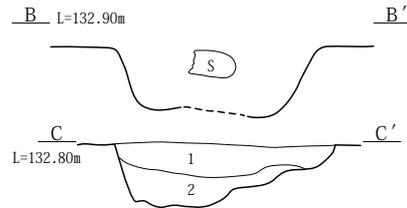
第734図 14号溝詳細図3・出土遺物

25・27号溝



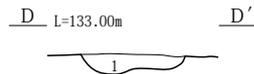
25号溝 A-A'

- 1 黒褐色土 VII層土主体で、ニッ岳系軽石を多く含み、As-C・炭化物を少量含む。
- 2 黒褐色土 I層に類似するが、灰褐色粘質土ブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 IX層土主体で、As-Cを多く含み、ニッ岳系軽石・炭化物・灰褐色粘質土ブロックを少量含む。



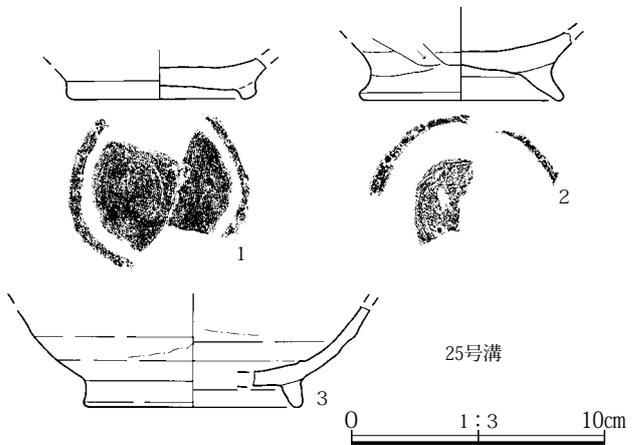
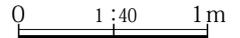
25号溝 C-C'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石・礫を多く含む。硬くしまっている。
- 2 暗褐色土 VII層土主体で、As-Cを多く含み、ニッ岳系軽石・礫を少量含む。

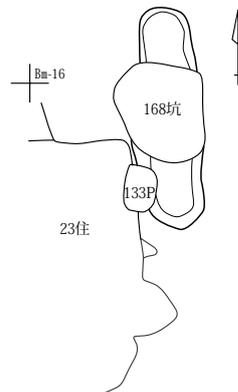


27号溝 D-D'

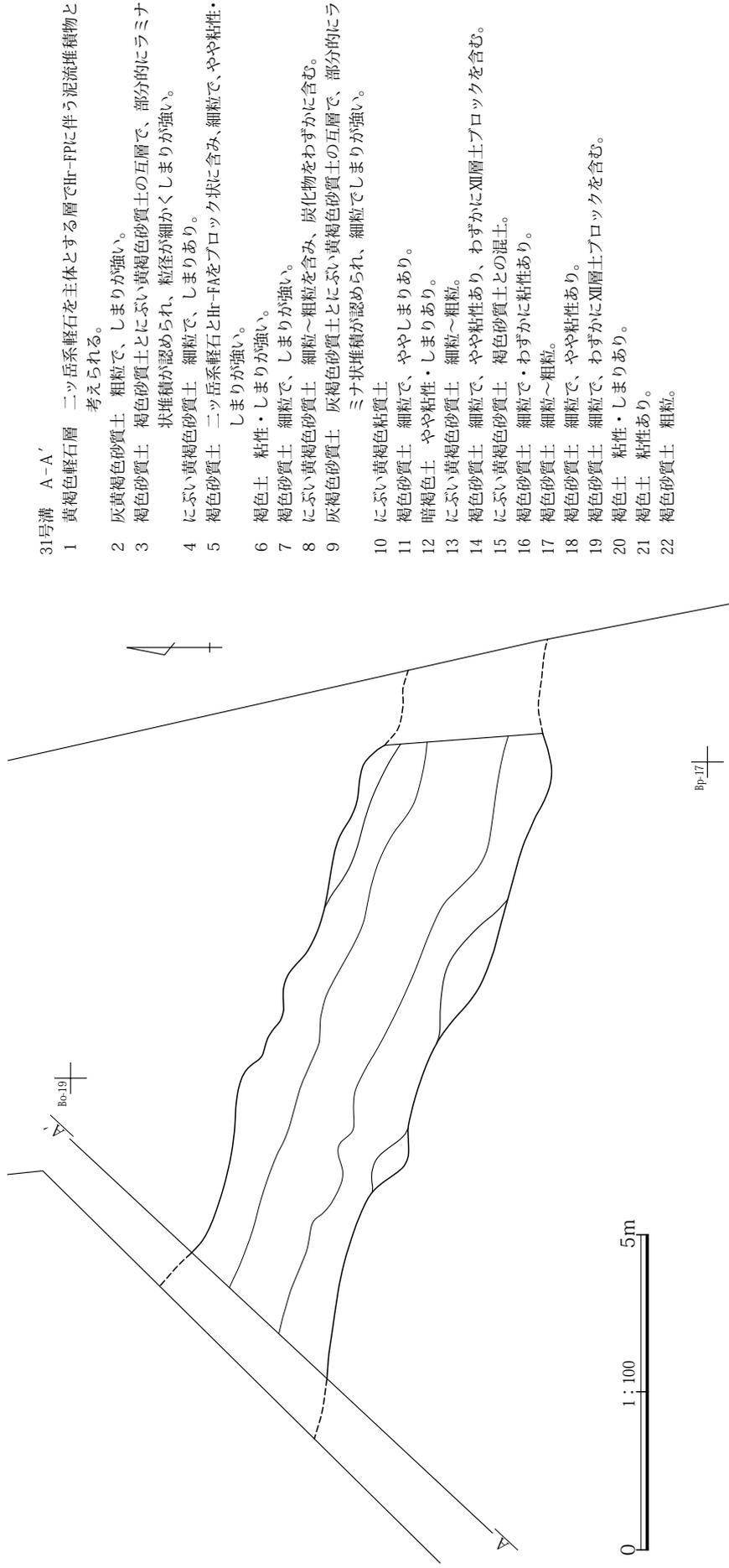
- 1 灰褐色土 XII層土とAs-Cの混土で、灰褐色粘質土を含む。



29号溝

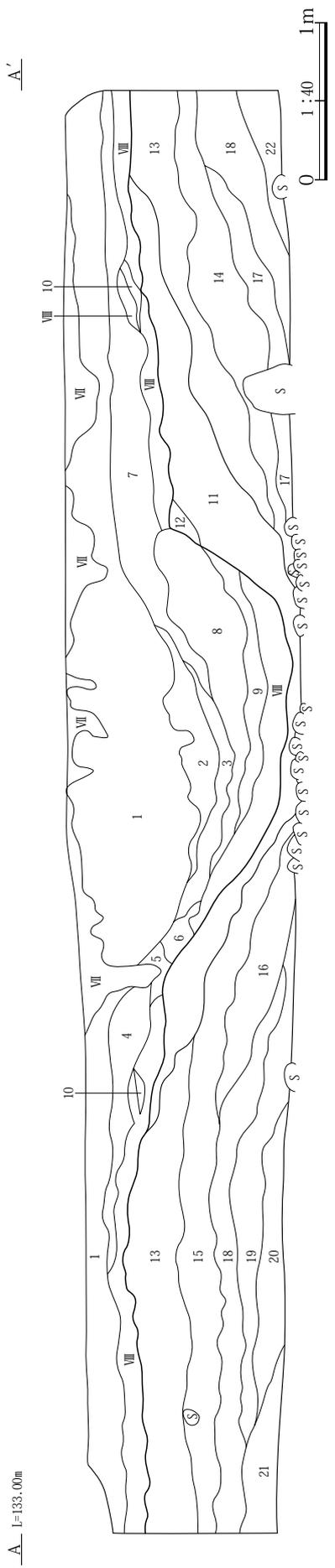


第735図 25・27・29号溝・出土遺物



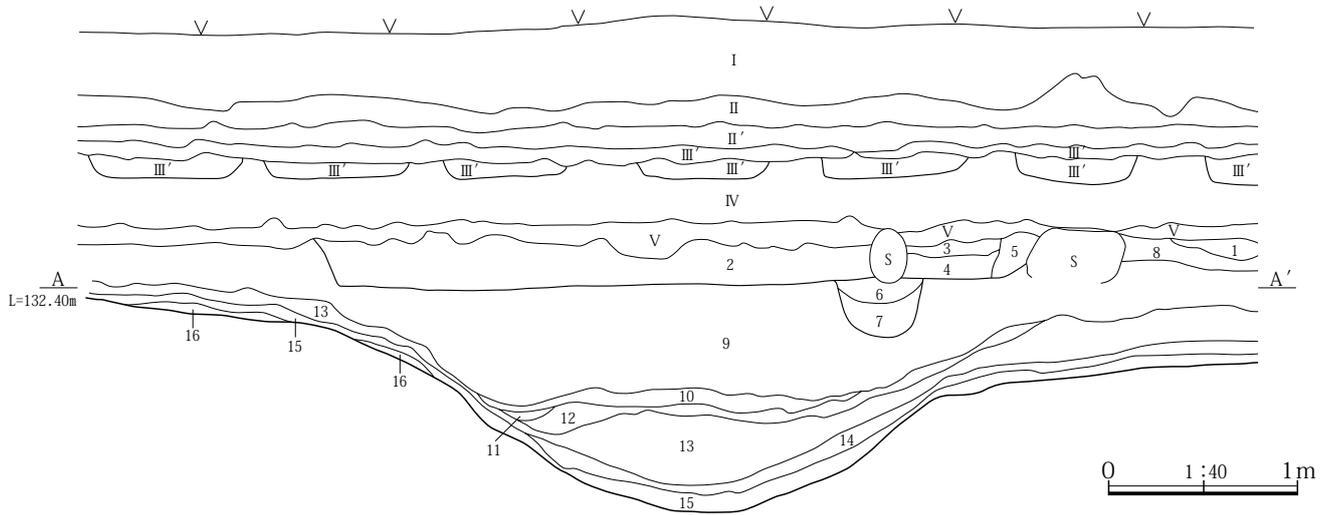
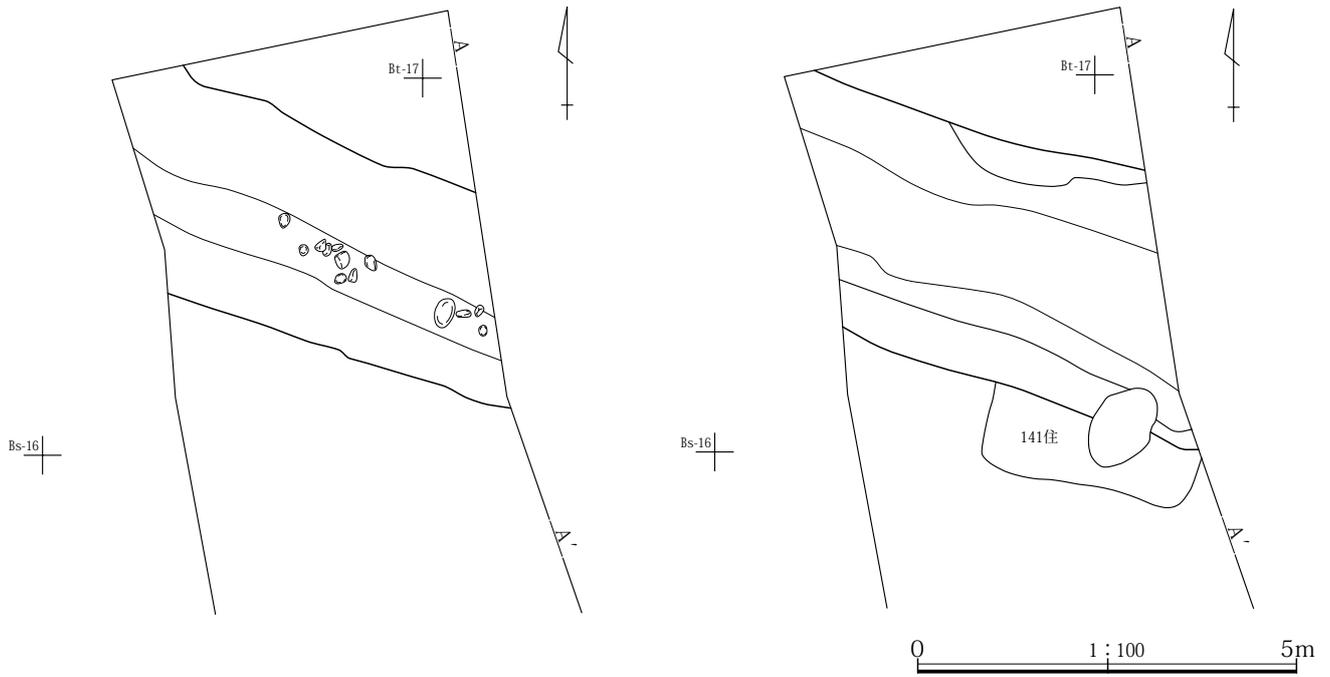
31号溝 A-A'

- 1 黄褐色軽石層 二ヶ岳系軽石を主体とする層でHr-PPに伴う泥流堆積物と考えられる。
- 2 灰黄褐色砂質土 粗粒で、しまりが強い。
- 3 褐色砂質土 褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土の互層で、部分的にラミナ状堆積が認められ、粒径が細かくしまりが強い。
- 4 にぶい黄褐色砂質土 細粒で、しまりあり。
- 5 褐色砂質土 二ヶ岳系軽石とHr-FAをブロック状に含み、細粒で、やや粘性・しまりが強い。
- 6 褐色土 粘性・しまりが強い。
- 7 褐色砂質土 細粒で、しまりが強い。
- 8 にぶい黄褐色砂質土 細粒～粗粒を含み、炭化物をわずかに含む。
- 9 灰褐色砂質土 灰褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土の互層で、部分的にラミナ状堆積が認められ、細粒でしまりが強い。
- 10 にぶい黄褐色粘質土
- 11 褐色砂質土 細粒で、ややしまりあり。
- 12 暗褐色土 やや粘性・しまりあり。
- 13 にぶい黄褐色砂質土 細粒～粗粒。
- 14 褐色砂質土 細粒で、やや粘性あり、わずかにXII層土ブロックを含む。
- 15 にぶい黄褐色砂質土 褐色砂質土との混土。
- 16 褐色砂質土 細粒で、わずかに粘性あり。
- 17 褐色砂質土 細粒～粗粒。
- 18 褐色砂質土 細粒で、やや粘性あり。
- 19 褐色砂質土 細粒で、わずかにXII層土ブロックを含む。
- 20 褐色土 粘性・しまりあり。
- 21 褐色土 粘性あり。
- 22 褐色砂質土 粗粒。



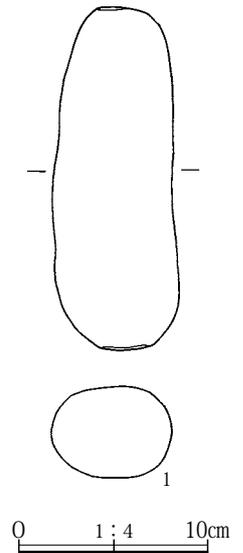
第736図 31号溝

第5章 2面の調査（中世～古墳時代後期）



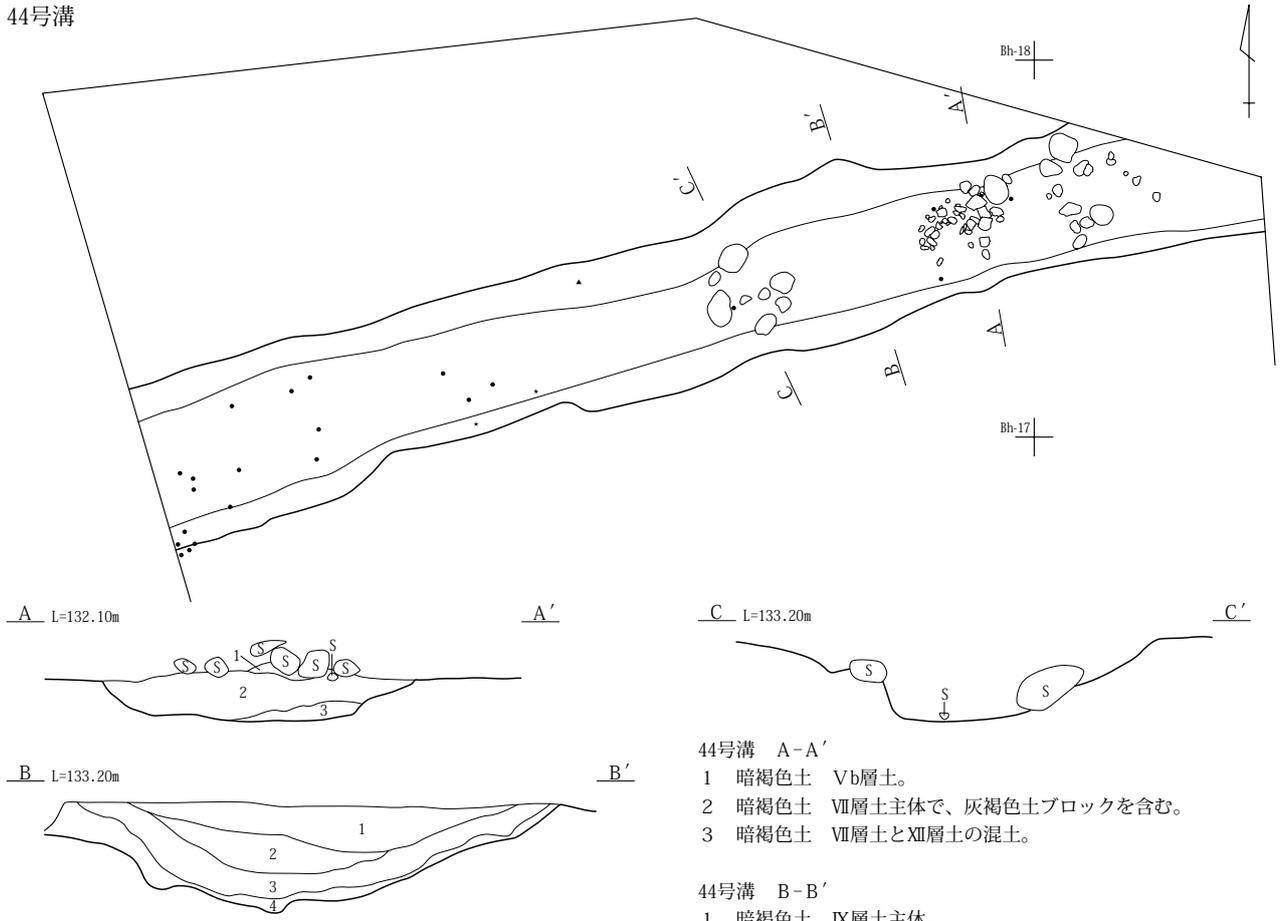
54号溝 A-A'

- II' 茶褐色土 As-A泥流を鋤き込んだ土で、天明3年以降の耕作土。
- 1 茶褐色土 FA泥流を主体とする層。
- 2 暗褐色土 ニッ岳系軽石を比較的多く含むしまりのない層。
- 3 暗褐色土 ニッ岳系軽石を比較的多く含むしまりのない層で、わずかに焼土粒を含む。
- 4 暗褐色土 ニッ岳系軽石を比較的多く含むしまりのない層で、焼土粒(大粒)・黒色灰を多く含む。
- 5 Hr-FP泥流
- 6 黒褐色土 ニッ岳系軽石泥流と黒褐色土の混土で、しまりが弱い。
- 7 黒褐色土 ニッ岳系軽石泥流主体で、黒褐色土を少量含み、炭化物をわずかに含む。
- 8 黄褐色土 ニッ岳系軽石泥流と暗褐色土の混土。
- 9 黄褐色軽石層 径300mm大のニッ岳系軽石を含む、軽石主体の層で、Hr-FPに伴う泥流と考えられる。
- 10 灰色砂
- 11 黄色砂
- 12 黒色粗粒砂
- 13 灰色砂
- 14 灰色粗粒砂
- 15 Hr-FA
- 16 XII層土



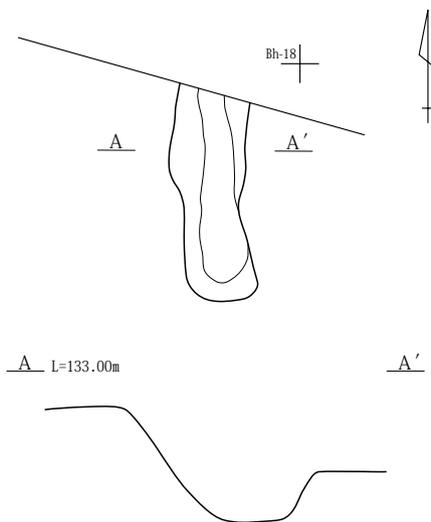
第737図 54号溝・出土遺物

44号溝

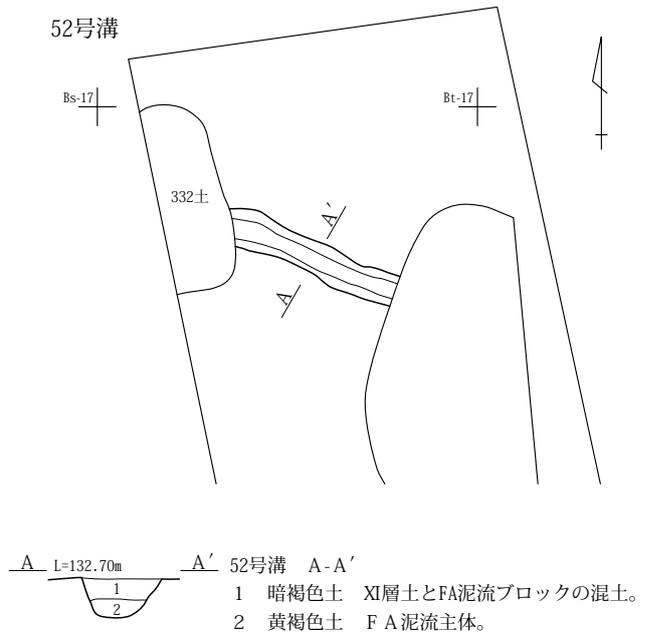


- 44号溝 A-A'
- 1 暗褐色土 Vb層土。
 - 2 暗褐色土 VII層土主体で、灰褐色土ブロックを含む。
 - 3 暗褐色土 VII層土とXII層土の混土。
- 44号溝 B-B'
- 1 暗褐色土 IX層土主体。
 - 2 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土粒を含む。
 - 3 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土ブロックを含む。
 - 4 黄褐色土 XII層土主体で、IX層土ブロックを少量含む。

45号溝



52号溝



- 52号溝 A-A'
- 1 暗褐色土 XI層土とFA泥流ブロックの混土。
 - 2 黄褐色土 FA泥流主体。

0 1:40 1m

0 1:100 5m

第738図 44・45・52号溝

(3) 低地

1号低地廃滓場(第739～742図 P L.166・167・287)

位置：Bl～Br-1～8グリッド 遺物：土師器坏、須恵器坏・埴、灰釉陶器埴、緑釉陶器埴、羽釜、羽口、鉄滓等が出土した。 所見：酸化鉄の凝集で硬化したV層土を取り去った時点で、鉄滓や韃の羽口が比較的広範囲から出土し、遺物種から鍛冶遺構の存在が想定されたことから分布図を作成しながら遺物の取り上げを行った。その結果、鉄滓などの集中は確認できたものの、炉や炉壁などは検出できなかったことから、鍛冶遺構本体ではなく廃滓捨て場であろうと判断した。鉄滓などの分布を第739図に示したが、I区の下面調査で1号低地とした範囲の中に帯状にほぼ納まっている。1号低地は、4世紀代に南北方向の谷状の低地となっていた部分であるが、上面に7世紀後半の竪穴住居が造られていたことから、少なくとも7世紀後半にはほぼ平坦な状態に埋没していたものと考えていた。しかし、鉄滓などの垂直分布は、第739図に示したように窪地に沿って廃棄された様相を示しており、詳細に観察すると西側にやや偏った堆積が窺えることから西側からの廃棄が想定される。つまり、西側で操業していた鍛冶遺構で生成された鉄滓などが、窪地化していた場所に廃棄されたものと思われる。田口下田尻遺跡で鍛冶遺構と見て差支えない遺構は5号住居と45号住居の2棟があり、5号住居は8世紀初頭、45号住居は10世紀後半代にそれぞれ操業していたものと考えられる。鉄滓に混じって緑釉陶器や灰釉陶器の破片が数点出土しているが、これらの遺物はI区の調査では十分に把握することができなかった10世紀代の2・3号道に帰属すべきものである可能性があることから、比較的至近に位置している5号住居の廃滓捨て場と見るのが妥当であろう。

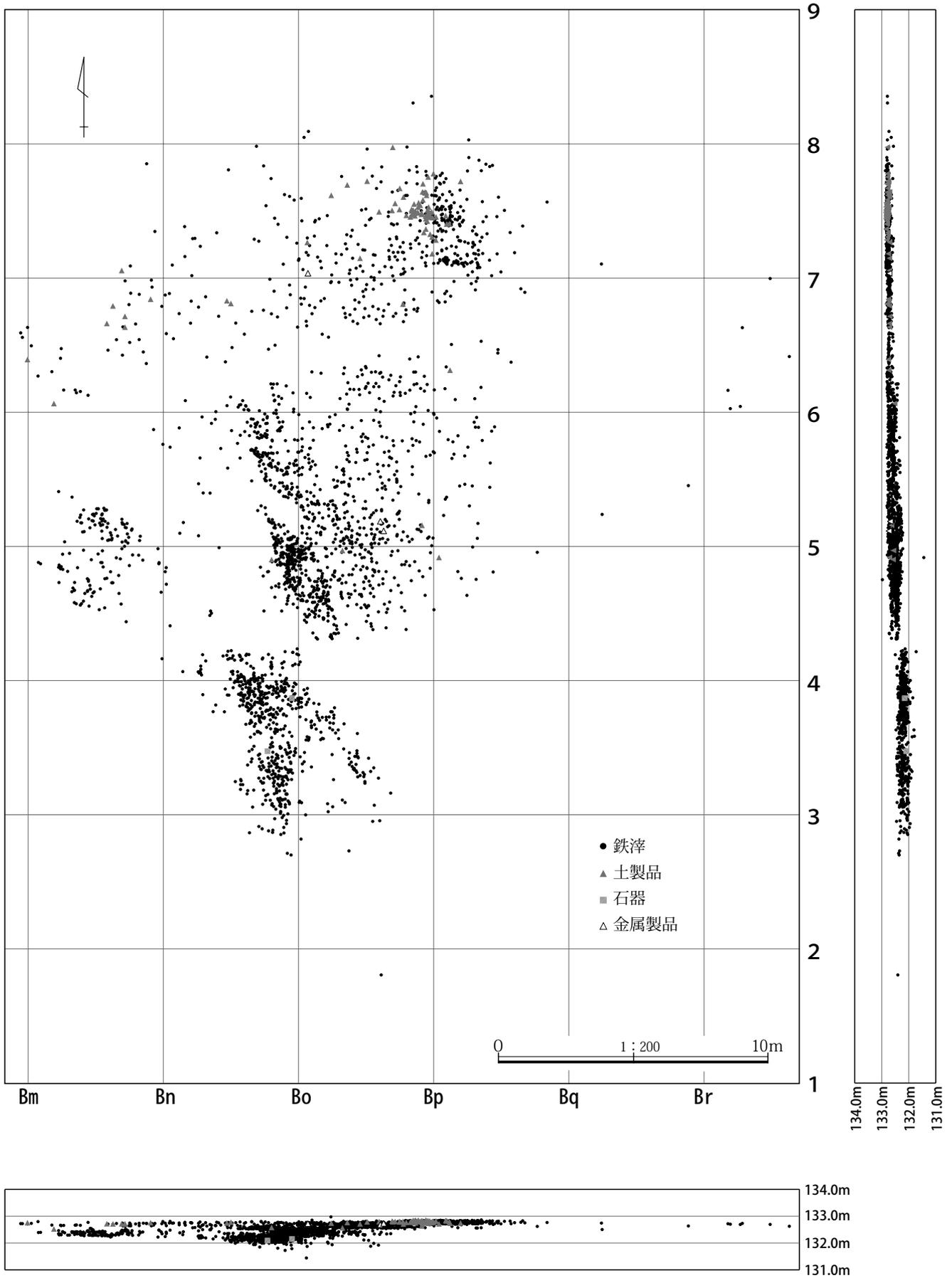
2号低地(第743図 P L.166・167)

位置：Bk～Ca-12～20グリッド 遺物：なし 所見：Ⅲ区北東端からⅣ区北側で確認したもので、概ねE-28°-Sの方位の谷地である。北側の立ち上がりが検出されていないので規模が不明であるが、検出部分は幅26.60mほどで、平坦部と底面との比高は0.90mほどである。低地の中央と見られる位置には31・54号溝が掘削されている。低地及び31・54号溝底面は直上をHr-FAが覆っており、さらにその上部をHr-FPに伴うと考えられ

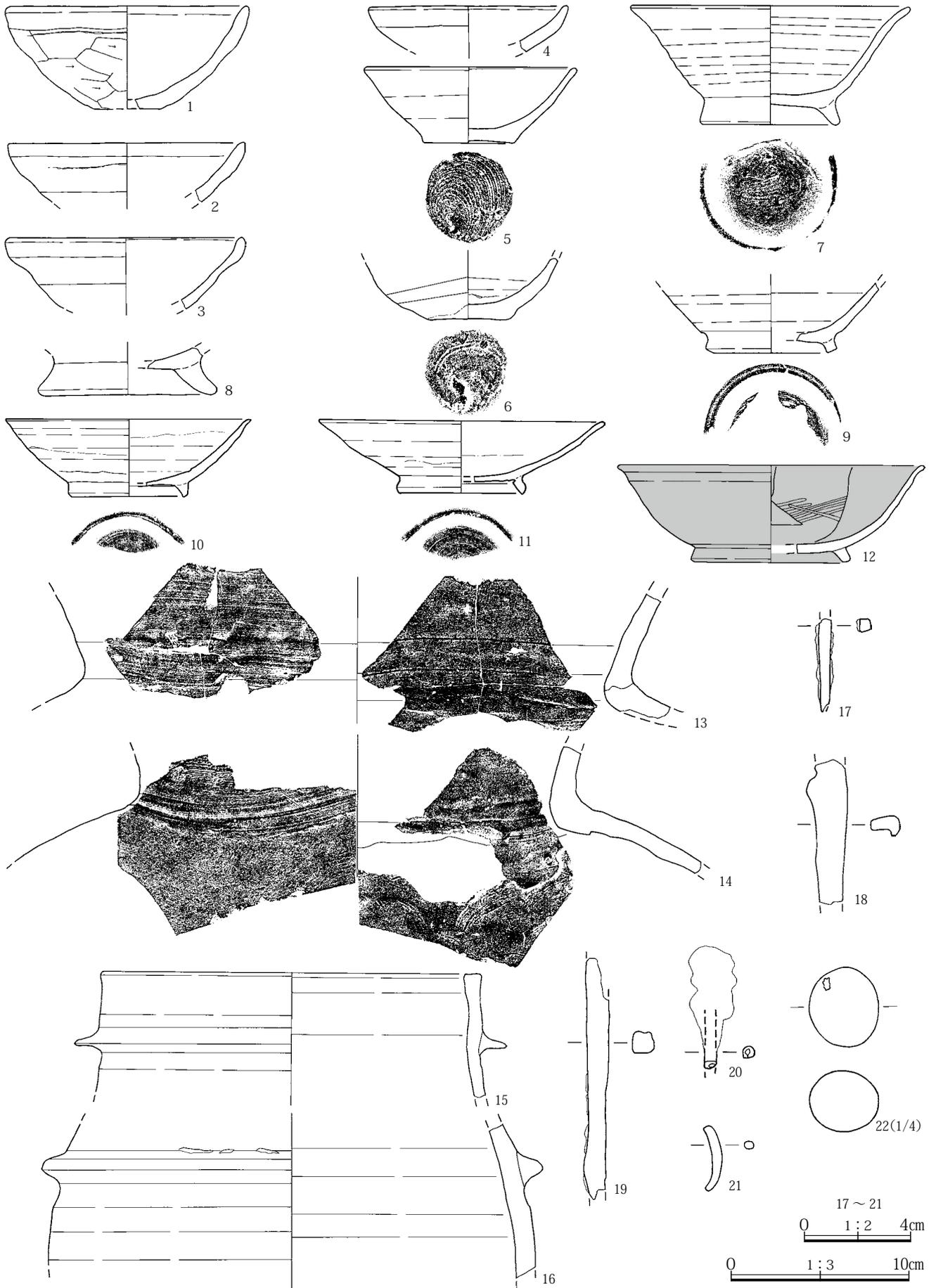
る泥流が覆うことで平坦化している。Ⅳ区の調査では低地南側の壁面にはⅨ層(As-C混土)が確認されているものの、低地部にはまったく検出することができないことから、低地の形成はⅨ層土の形成よりも後の時期とすることができる。3面I期で記述した3号低地と同様に、低地の規模から見て人為的なものではなく、自然地形と考えられる。おそらく3号低地の埋没に伴って変流した小河川によって形成された谷地と考えられ、この谷地を利用して31・54号溝は掘削されたものと思われ、3号低地と30号溝との関係と同様である。

3号低地(第744・745図 P L.167・174・287・288)

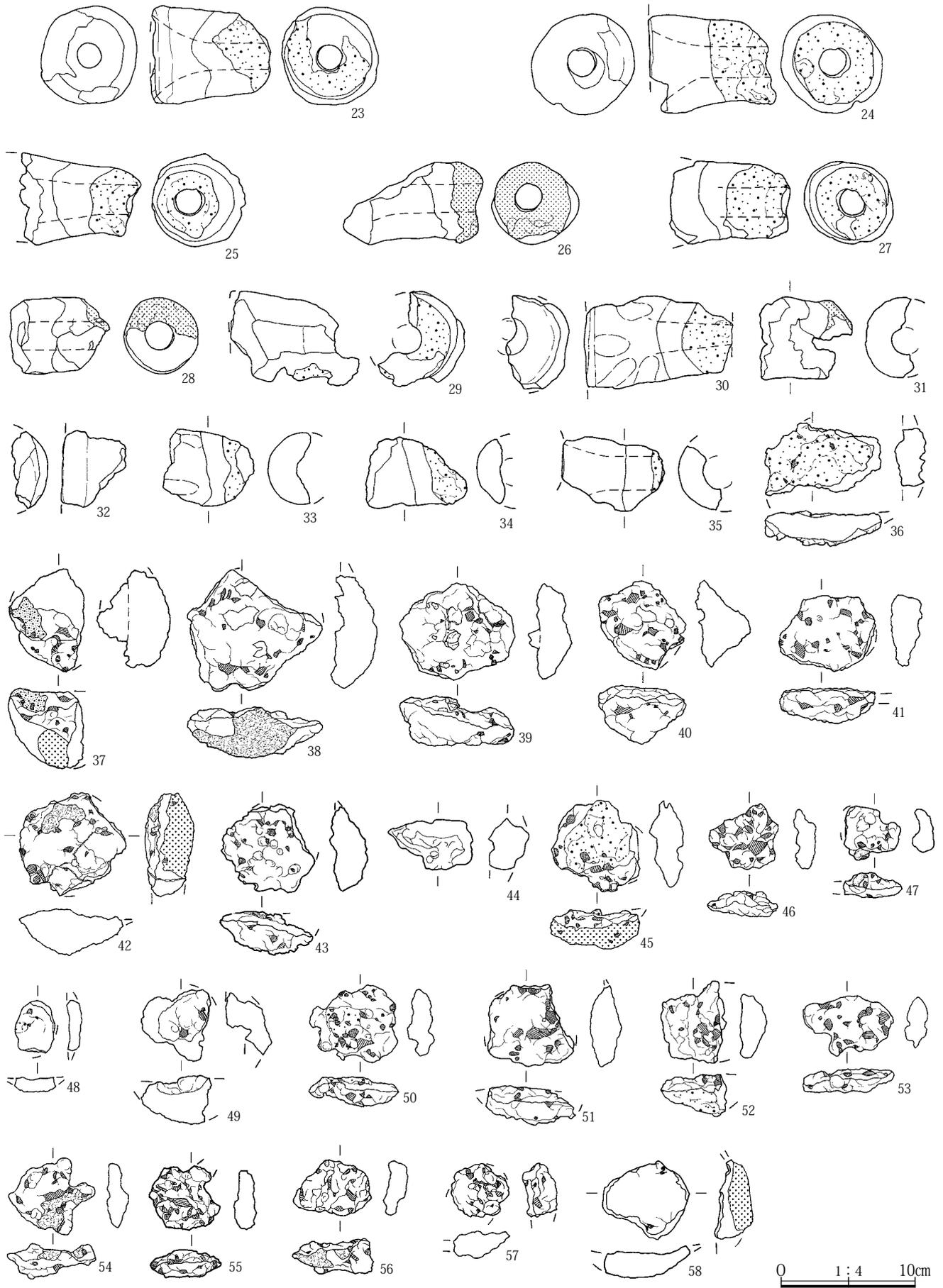
位置：Ca～Cc-1～6グリッド 遺物：須恵器坏・埴、土師器甕、鎌が出土した。 所見：Ⅳ区南側で確認したもので、調査時点ではこの一帯について1～4号低地として調査を進めていたものであるが、全体を3号低地としてまとめた。狭い範囲での調査であったため全体像を捉えることは難しいが、周辺の遺構の分布状況や底面の検出状況から、南西側に開口する谷頭状の低地であった可能性があるが、後年に実施予定の上武道路の調査によってより詳細な検討ができるものと思われる。低地上層を埋めていた土層は、Ⅶ層土が主体でHr-FAやHr-FPに伴うと考えられる泥流の堆積は認められなかった。また、下層にはブロック状のAs-Cや、Ⅸ層土が傾斜堆積していることが確認されており、後述する1号低地と類似する状況が見られる。1号低地は南側で東に広がっていた可能性があるが、3号低地としたものが1号低地から連続する低地であった可能性が高い。違っているのは、1号低地は遅くとも7世紀の後半代には一部が窪地化していた可能性はあるもののほぼ平坦化し、竪穴住居が構築されるような状況であったのに対して、3号低地の場合は、低地の南縁を画すようにV層土主体で埋没した53号溝が掘削されていることから、中世段階においても窪地として認識されていたのではないかとと思われる。3号低地の大きな特徴は、古代において40基を超える形状、規模の異なる土坑が重複しながら掘削されていたことである。土坑の中には、平面形が長方形を呈し内壁が焼土化し、埋没土下層に炭化物を含むものが複数基存在しており、土器焼成などのような場として使用されていた可能性が高い。



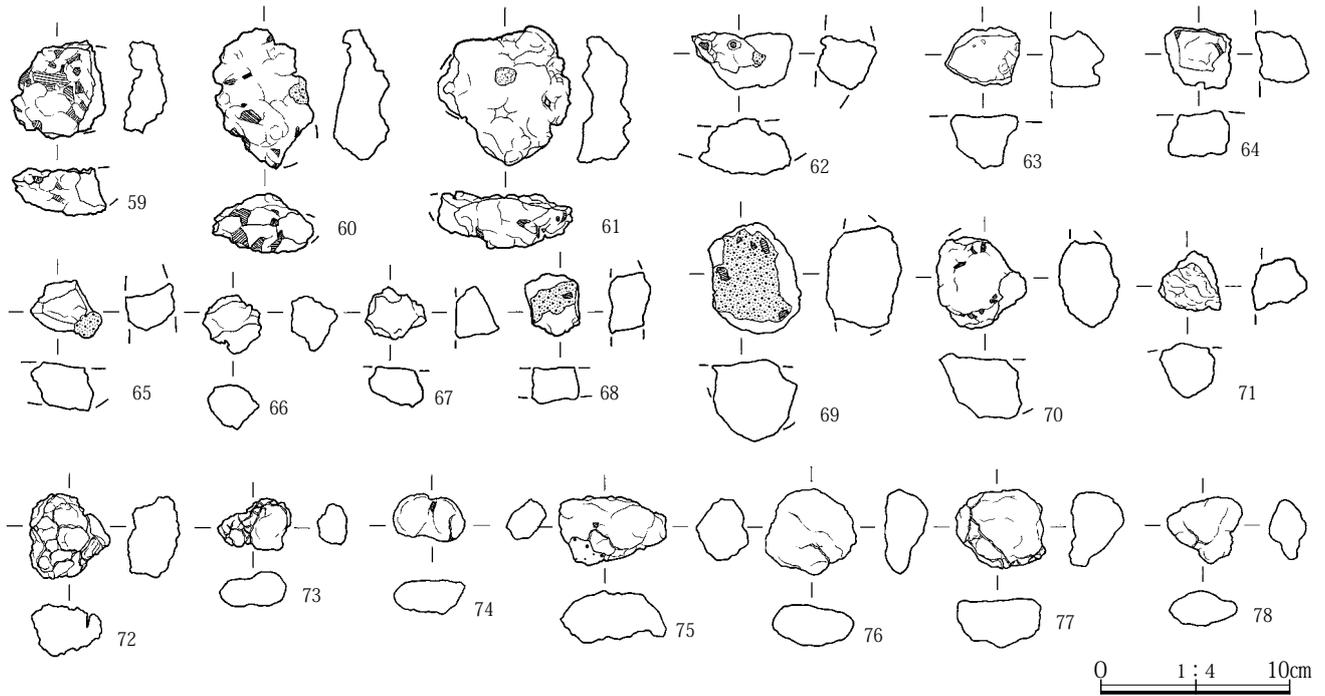
第739図 1号低地廃滓場遺物分布図



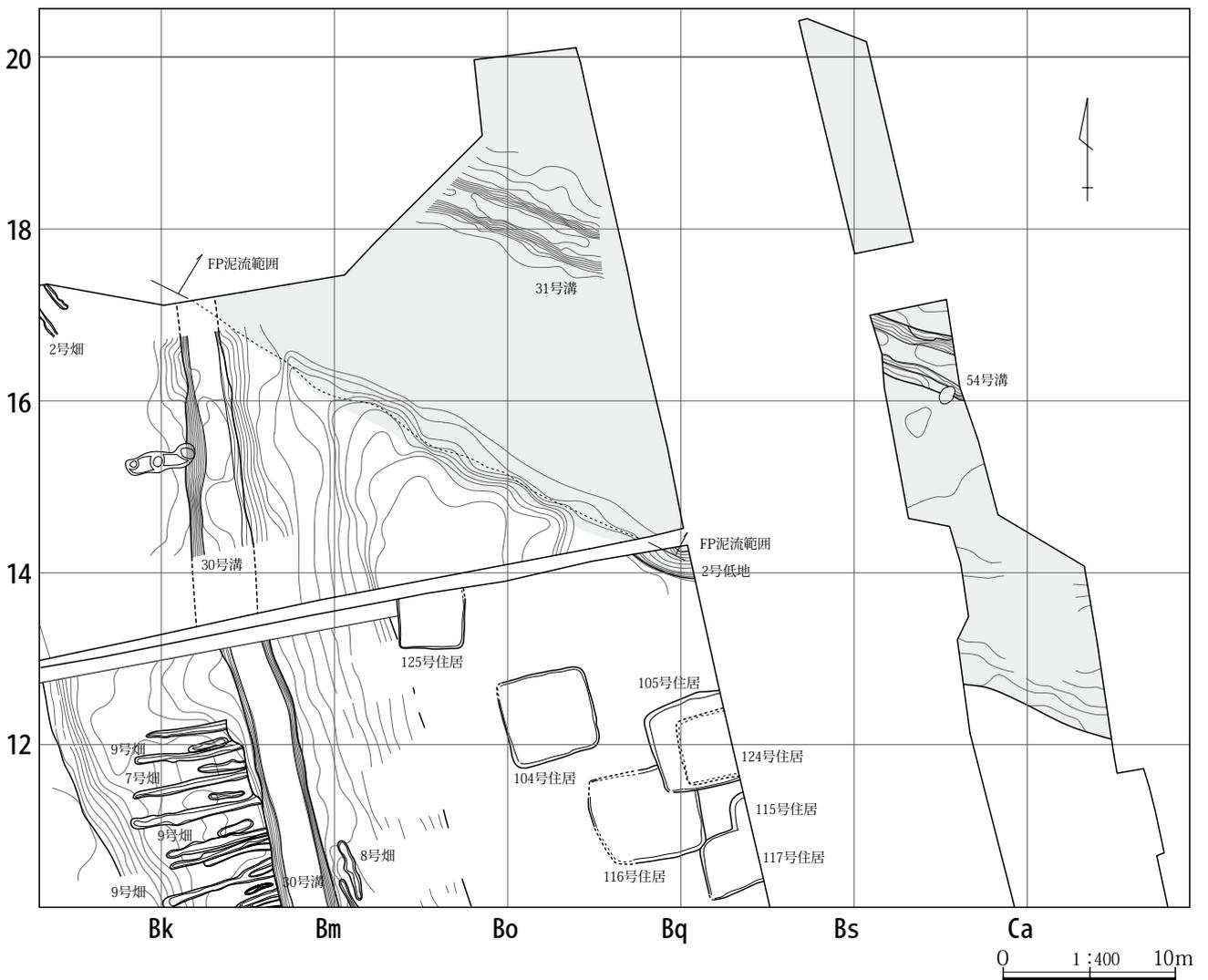
第740図 1号低地廃滓場出土遺物(1)



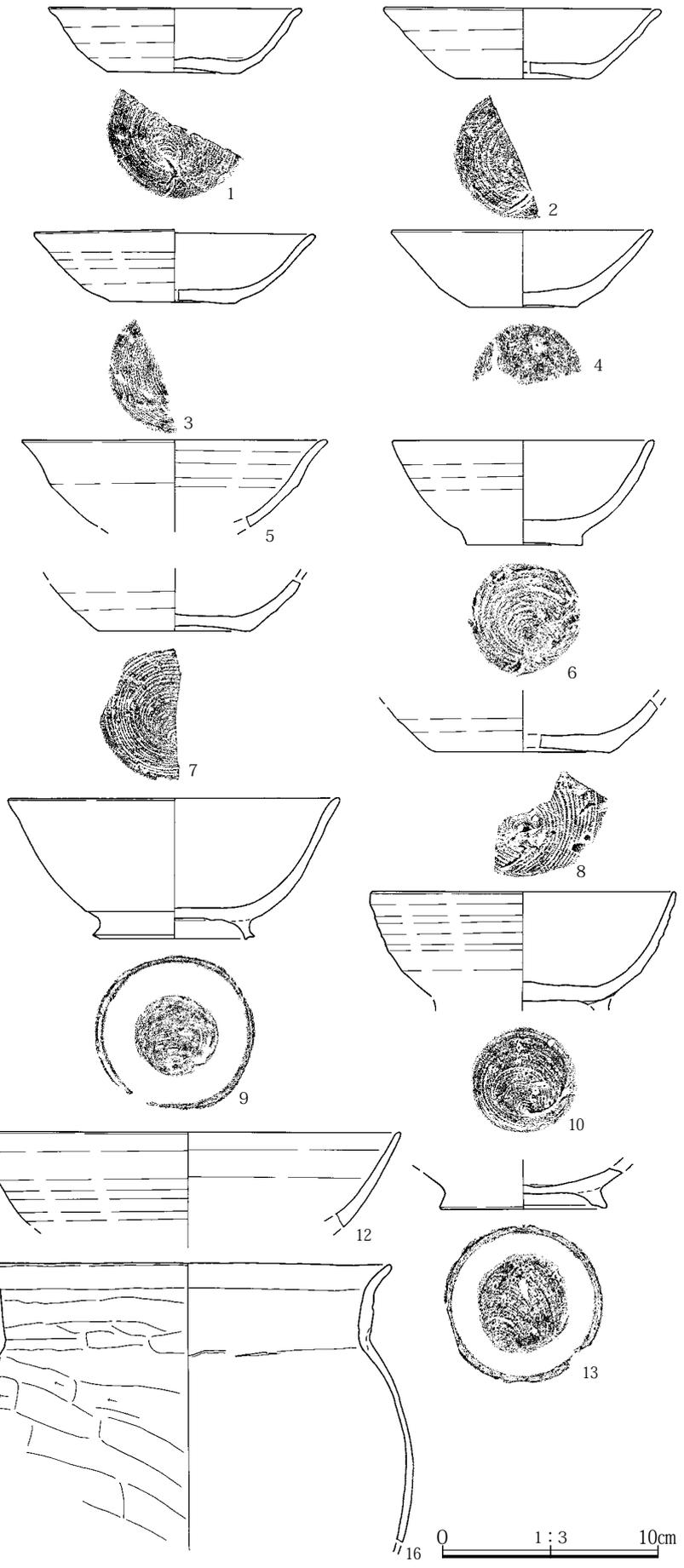
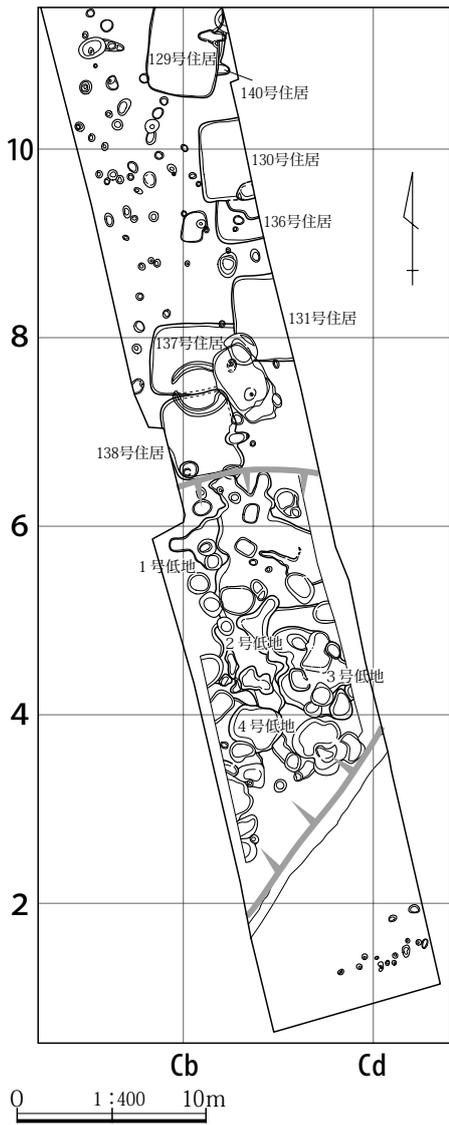
第741図 1号低地廃滓場出土遺物(2)



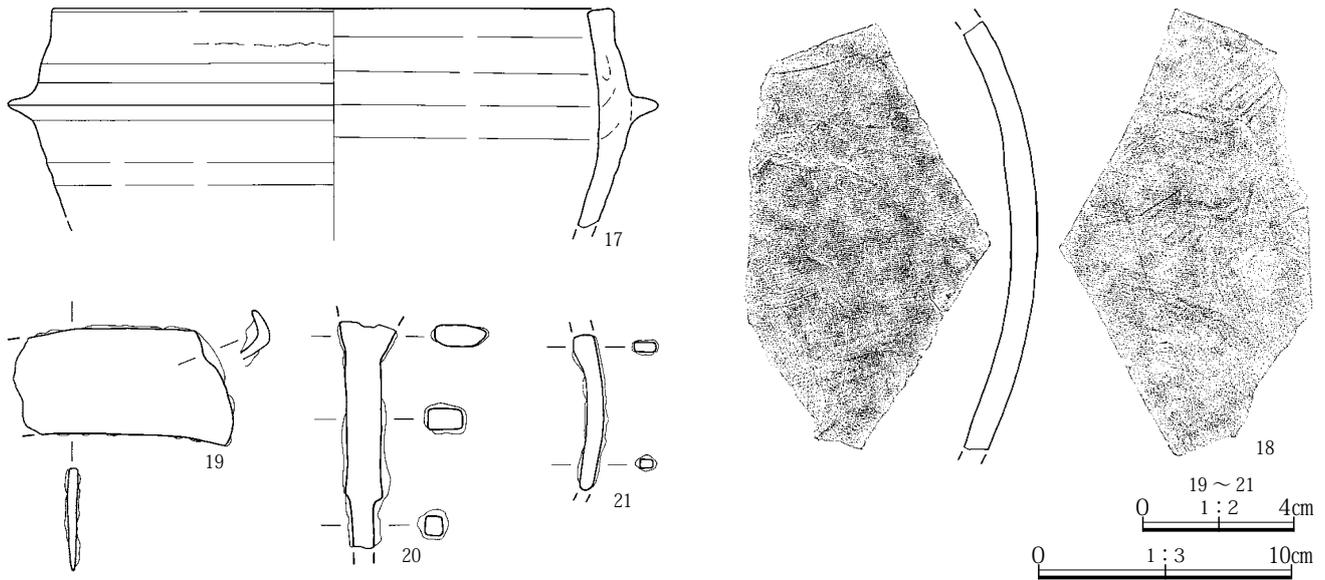
第742図 1号低地廃滓場出土遺物(3)



第743図 2号低地



第744図 3号低地・出土遺物(1)



第745図 3号低地出土遺物(2)

(4) 道

2号道(第746・748～751図 P L.167)

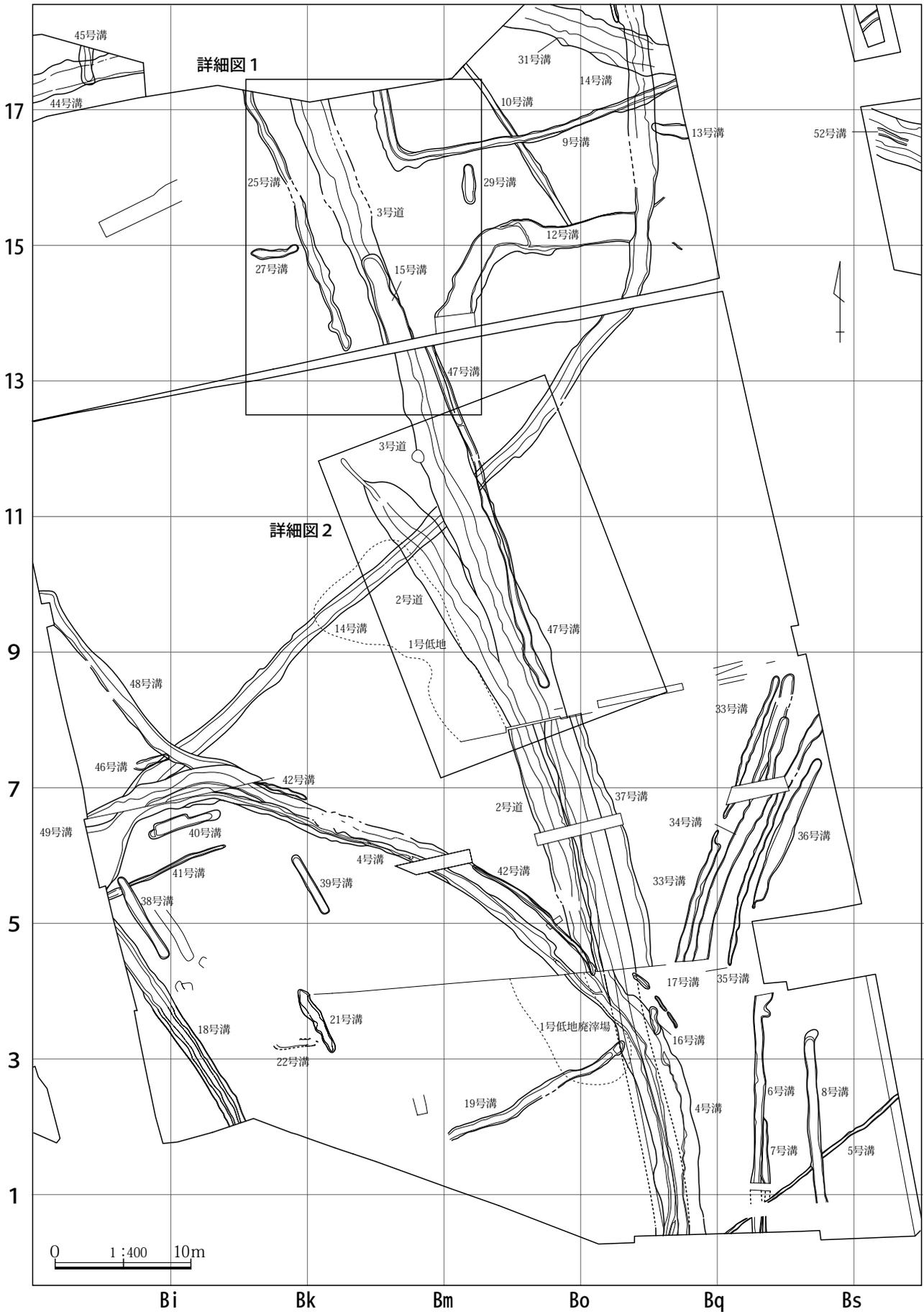
位置:Bk～Bo- 4～11グリッド 規模:(42.90)m×3.30m 残存深度:0.42m 走行方位:N-17°-W～N-41°-W 遺物:埋没土中や路面近くから須恵器環・埴、灰釉陶器皿、土師器環、羽釜などの破片が出土した。

所見:溝状に掘り窪めた底面を路面とした道である。I区北調査区で最初に認識したもので、Ⅲ区では北西方向へと走行方向を変え、徐々に浅くなり走行方向が捉えなくなる。I区南調査区では、1面の1号道と重複していたために攪乱され、認識できないまま調査面を下げてしまったため、検出することができなかった。溝状の掘り込みは緩やかで、路面となっている底面もわずかに東側に傾斜しており、40～50cmほどの幅の硬化面が検出された。硬化面の厚さは1～2cmであり、灰褐色に変色し二ッ岳系軽石が敷き込まれたかのように目立っていた。3号道と上下の関係で重複しており、3号道の路面よりも0.50mほど高い位置に路面が構築されていた。土層断面の観察と検出の状況から2号道→3号道と考えられるが、2号道がⅢ区の中で北西方向に走行するのに対して、3号道はそのまま北上しており、走行方向を異にしている。埋没土の上面をV層土相当の層が覆っていることから古代の道であることは確実であり、出土遺物などから10世紀前半になる可能性が高い。

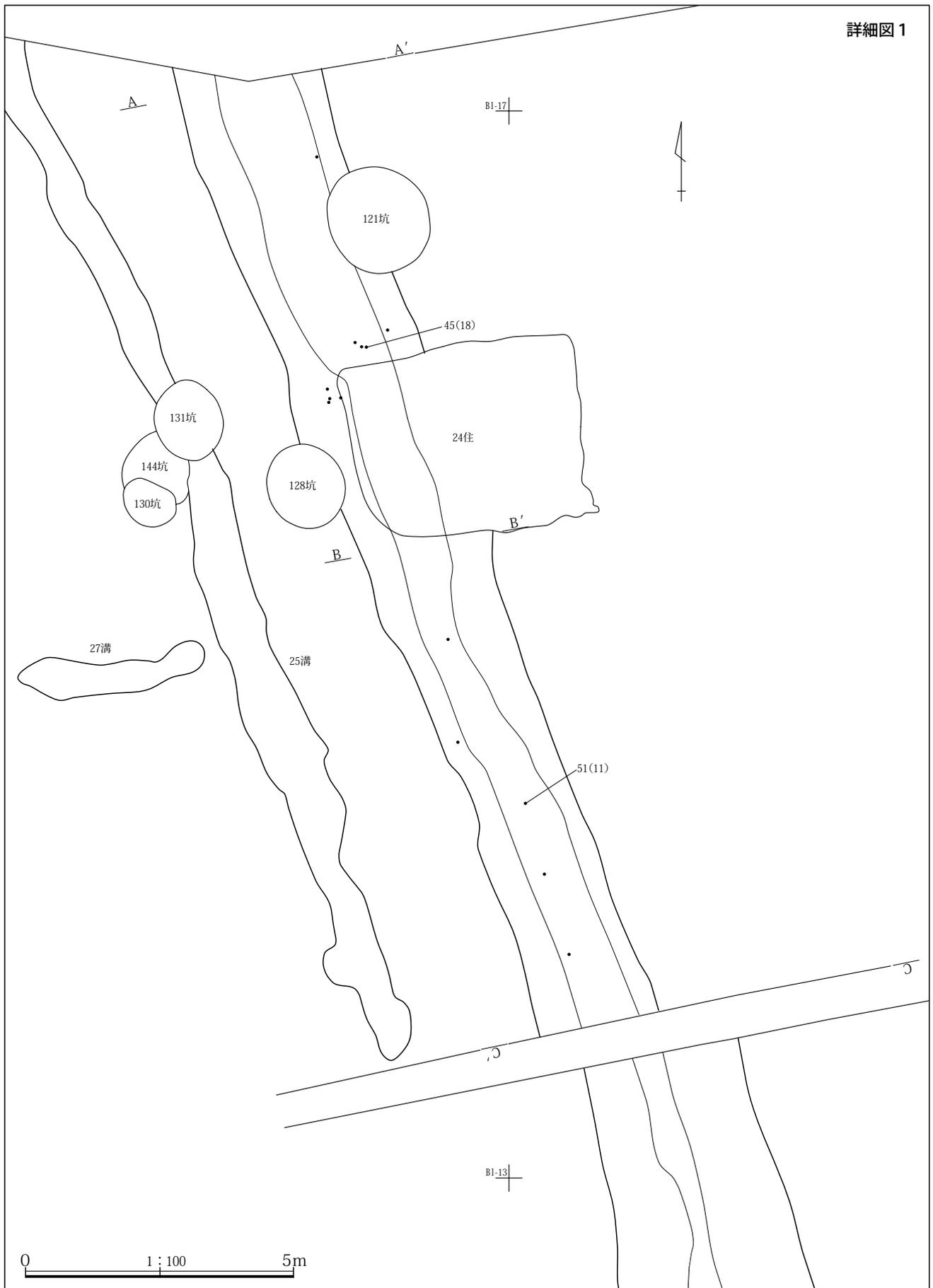
3号道(第746～753図 P L.167～168・288)

位置:Bj～Bp- 0～17グリッド 規模:(68.15)m×1.85

～3.71m 残存深度:0.68m 走行方位:N-17°-W～N-20°-W 遺物:埋没土中から須恵器環・埴・黒色土器埴、灰釉陶器埴・皿、緑釉陶器皿、羽釜、土釜、鉄滓などが出土した他、Ⅲ区の南半の位置では礫が集中したため、5～6号集石として別に記述した。所見:調査区を南北に貫くように検出した道で、溝状に掘り窪めた底面を路面としている。I区南側の調査においては近世の1号道の攪乱によって判然としなかったが、北側調査区で0.50mほどの高低差のある上下2条の路面を検出した。土層断面の観察により2号道→3号道という新旧関係と判断した。3号道は、溝状の比較的深い掘り込みとして確認されたために当初は28号溝として調査を進めたが、土層断面の観察で硬化面が確認されたことから道と判断した。走行経路は、古墳時代前期の段階には南北方向の低地(谷)であった場所で、道が構築された時点でもわずかに窪地化していたものと思われ、そこを選んで道を通過させた可能性が高い。最初に着手したI区南の調査においては、遺構の存在を認識できないまま低地部を掘り下げてしまったために、本来残存していたはずの3号道を検出することができなかった。道の掘り込みは、東西非対称で東側がやや緩やかに掘られているため、必然的に路面は中央よりもやや西寄りに位置している。路面は30～70cmほどの幅で硬化しており、2号道と同様に1～2cmの厚さで灰褐色に変色し、二ッ岳系軽石の含有が目立っていた。また、硬化面をさらに掘り下げたところ10cmほど下位から構築当初の路面と見られる硬化

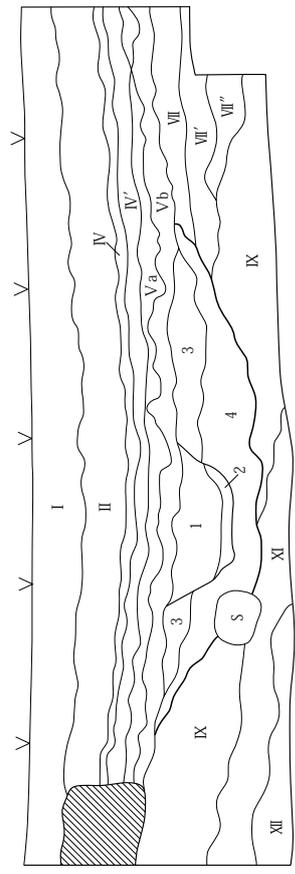


第746図 2・3号道全体図



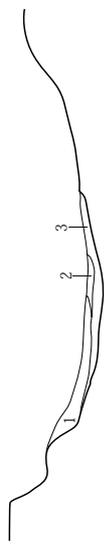
第747図 3号道詳細図1

A- A' I=134.00m



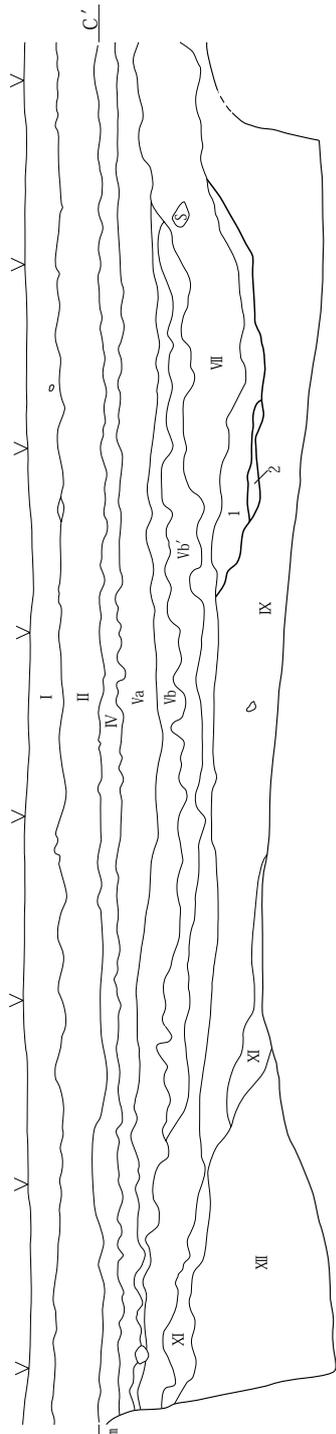
- 3号道 A-A'
- IV 暗褐色土
 - IV' 暗褐色土
 - VII' 暗褐色土
 - VII'' 暗褐色土
 - 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 暗褐色土
- IV層土とV層土の混土。
 VII層よりやや明るい色調を呈する。
 VII層主体で、二ツ岳系軽石と思われるブロックを含む。
 IX層主体で、As-C・二ツ岳系軽石及びX層土粒を少量含む。
 I層に類似するが、軽石の含有量が少ない。
 I層と比較して色調が明るく、二ツ岳系軽石の含有量がやや少ない。
 I層よりやや色調が暗く、二ツ岳系軽石の含有量が多く、しまりが強い。

B- B' I=132.80m



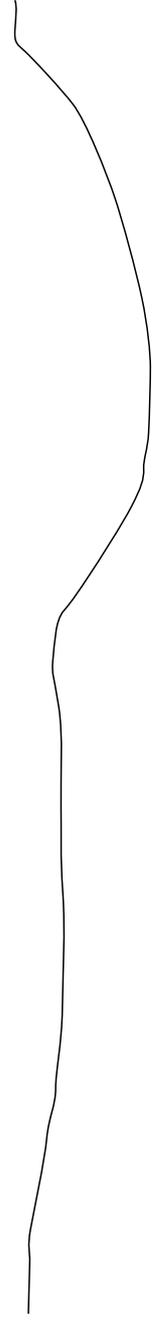
- 3号道 B-B'
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色粘質土
 - 3 暗褐色粘質土
- VII層主体で、As-C・二ツ岳系軽石・褐色砂質土ブロックを少量含む。
 VII層主体で、褐色砂質土ブロックを多量に、As-C・二ツ岳系軽石をわずかに含み、粘性が強く硬くしまっている。
 2層に類似するが、褐色砂質土は少なく、硬くしまっていない。

C I=133.20m

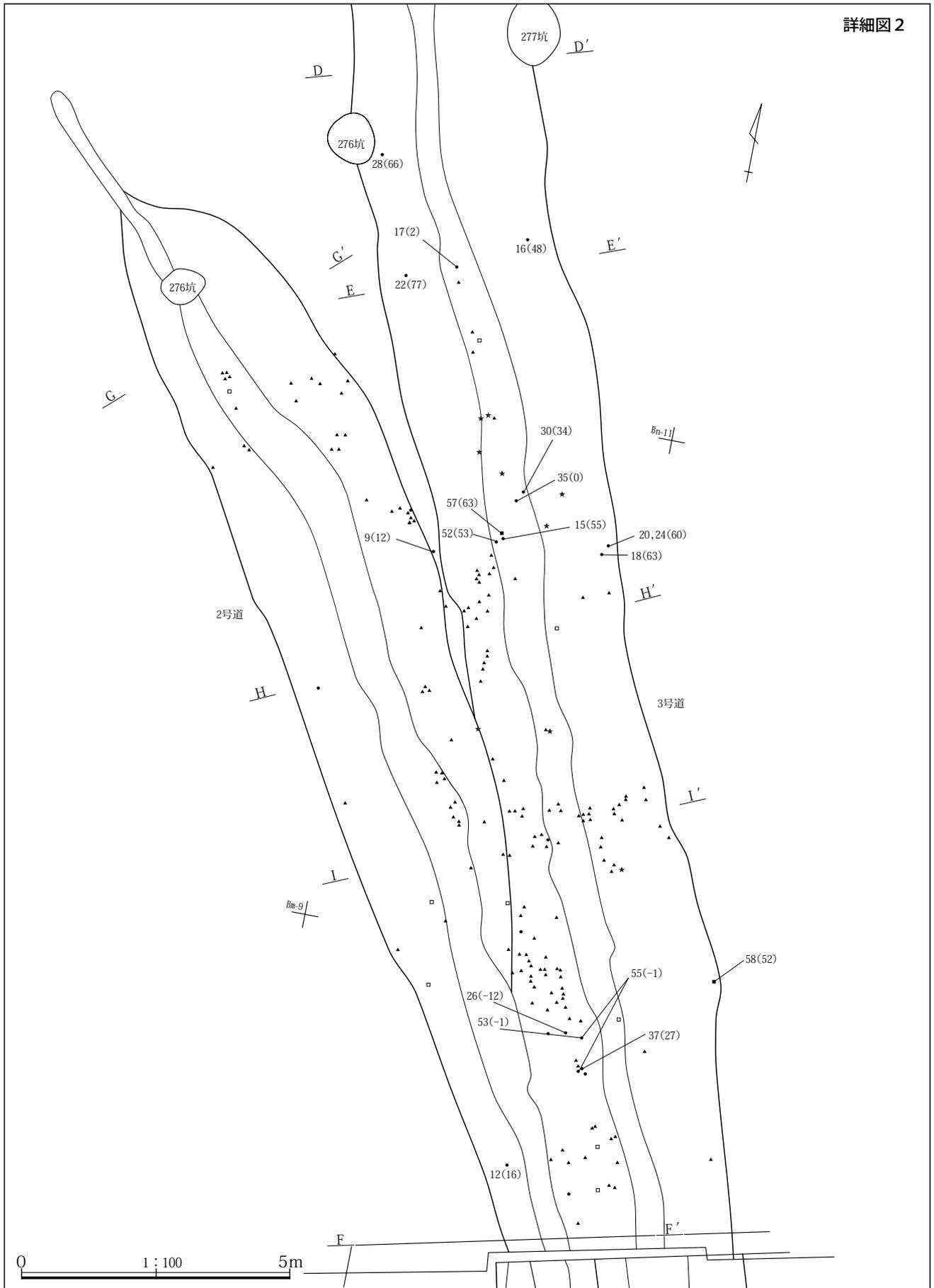


- 3号道 C-C'
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土
- Vb層に酸化鉄が凝集した層。
 VII層主体で、As-Cの含有量が多く、灰褐色粘質土ブロックを含む。
 VII層主体で、灰褐色粘質土を多く含む。上面硬化(路面)

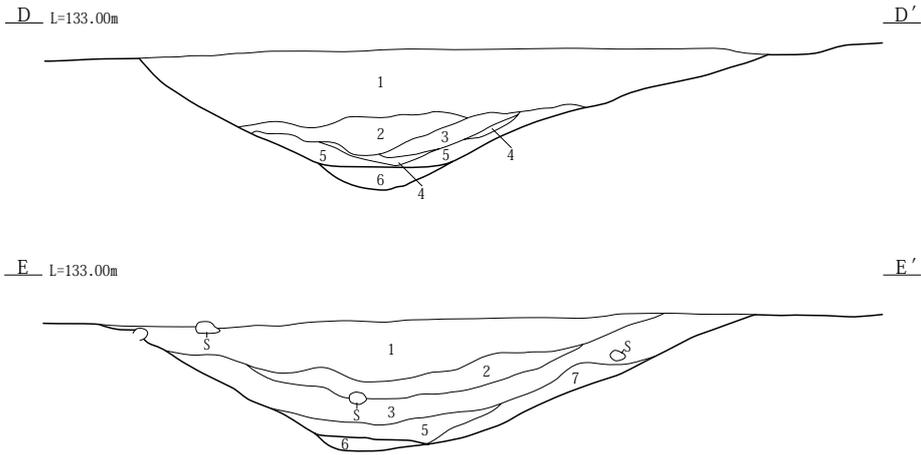
H- I=133.00m



第748図 2・3号道土層断面図・高低図(1)

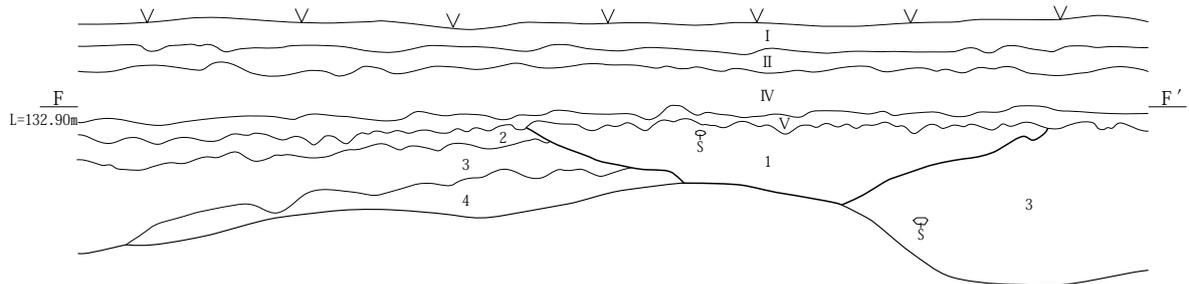


第749図 2・3号道詳細図2



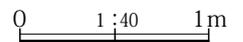
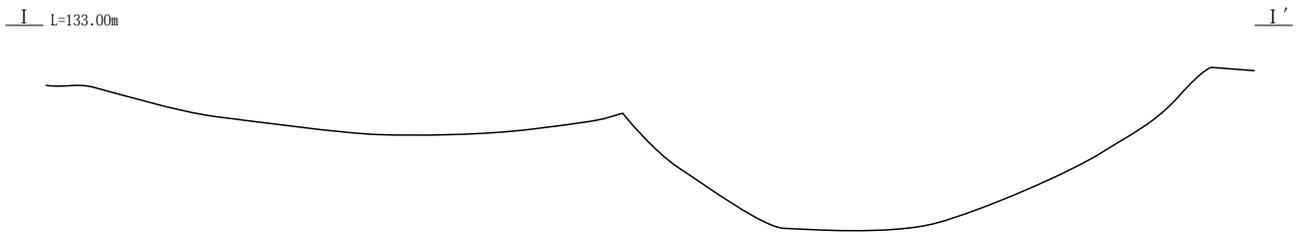
3号道 D-D'・E-E'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ッ岳系軽石を少量含む暗褐色土主体で、炭化物を少量含む。
- 2 黄褐色シルト XII層土主体で、As-Cを多く含み、暗褐色土ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土主体で、わずかにXII層土粒を含む。
- 4 黒褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土主体で、黒色灰を多く含む。
- 5 暗褐色土 1層に類似。
- 6 灰褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、硬化し、灰褐色土に変質した層。(上面が路面)
- 7 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土で、全体に暗色(X層土)



2・3号道 F-F'

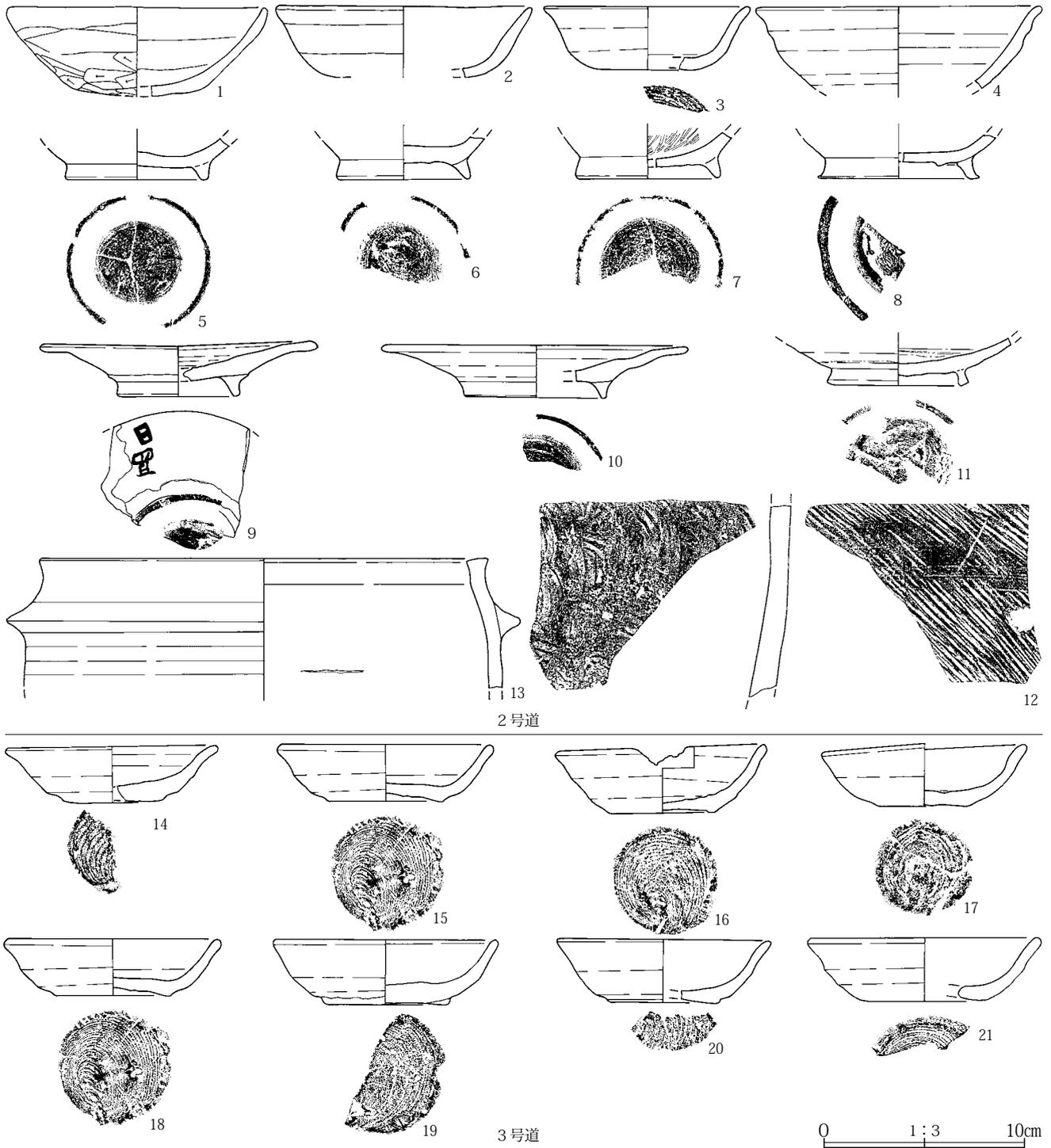
- 1 暗褐色土 VII層土主体で、二ッ岳系軽石よりもAs-Cを多く含む。
- 2 暗褐色土 1層に比べ、As-Cを多量に含む。
- 3 暗褐色土 VII層土を主体とし、1層より二ッ岳系軽石の含有量はわずかである。
- 4 暗褐色土 XII層土を主体とし、全体的に暗色を呈する。



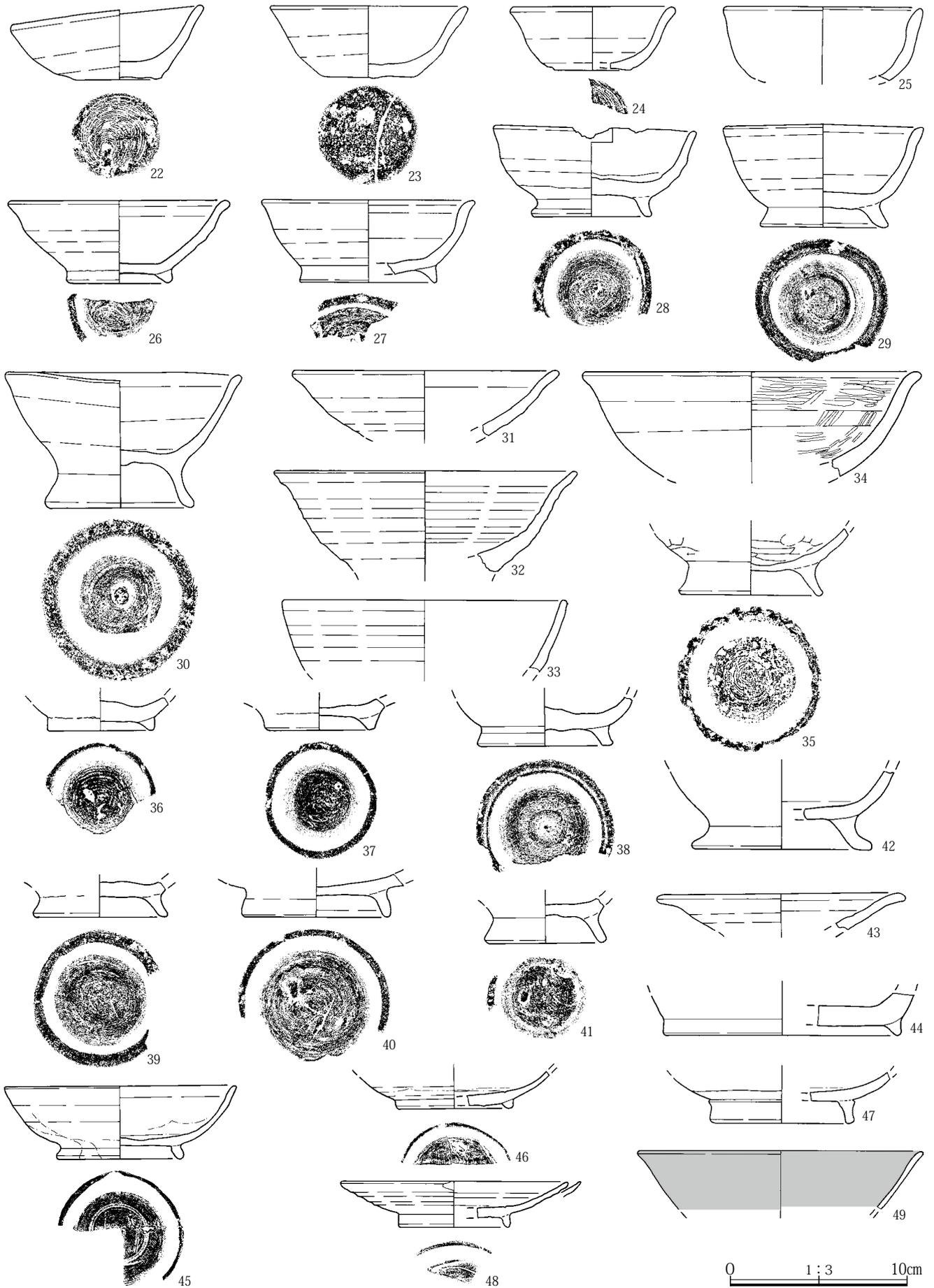
第750図 2・3号道土層断面図・高低図(2)

面が検出され、路面の造り替えが行われたことが判明した。また、Ⅲ区では、道構築当初の硬化面がⅫ層土中に形成されていたが、硬化した層を除去したところ下から深さ20～30cmほどの楕円形掘り込みが連続して検出されており、これも道の構築に伴うものである可能性が高い。3号道は15・24・100・110号住居、14号溝と重複しており、検出状況及び残存状況から、15号住居・14号溝→100・110号住居→3号道→24号住居という新旧関係が

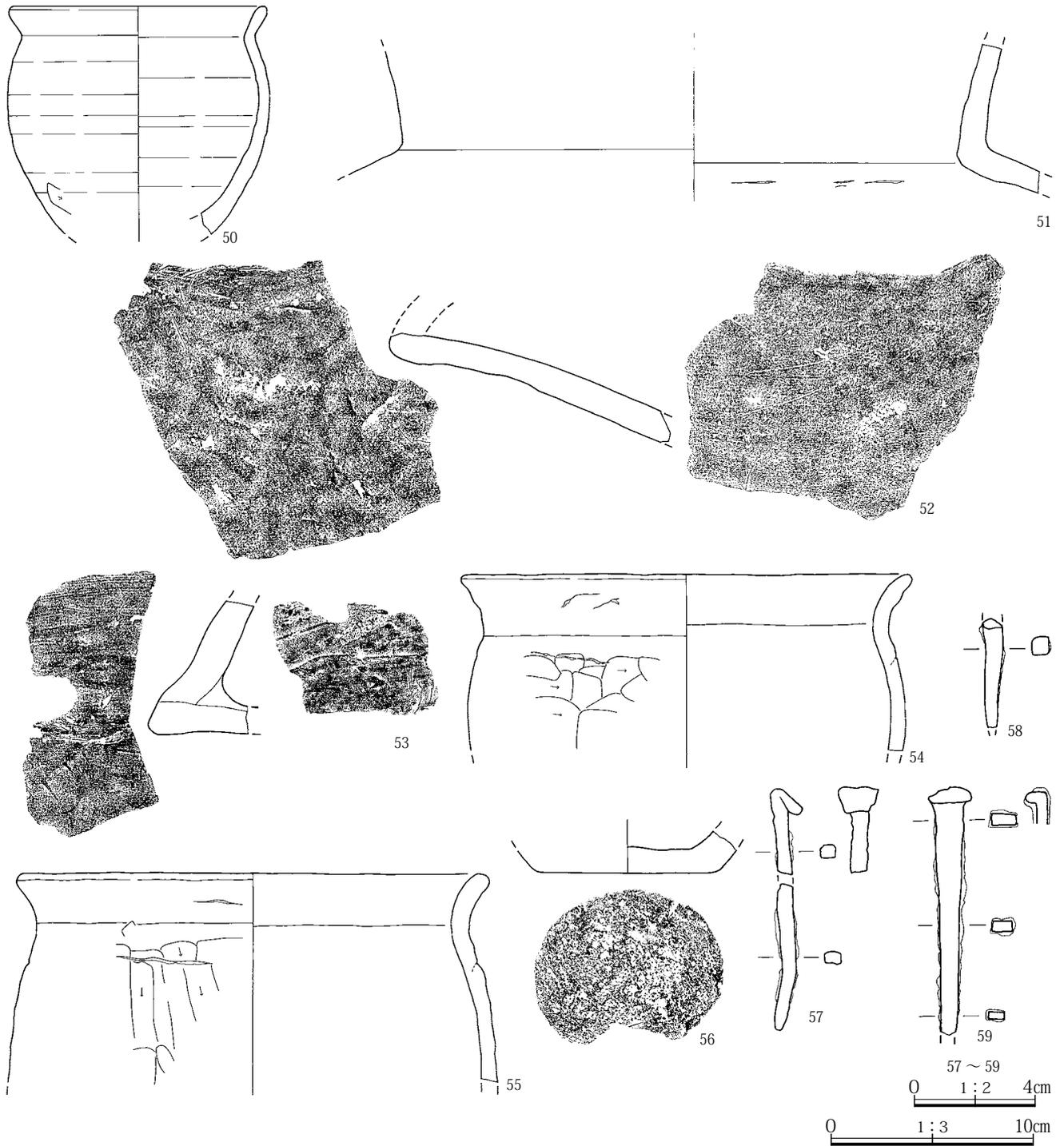
想定される。重複遺構の想定年代は、15号住居が7世紀後半、14号溝が9世紀代、24・100・110号住居が10世紀後半代であることから、10世紀後半代の中で構築され廃絶したものと思われる。遺物の項目で述べたように、埋没土中からは土器類の他に礫や鉄滓などが集中していた場所があることから、埋没過程で周辺からの廃棄場所となっていたものと考えられる。



第751図 2・3号道出土遺物



第752図 3号道出土遺物(1)



第753図 3号道出土遺物(2)

(5) 墓坑

170号土坑(第754図 P L.168・288)

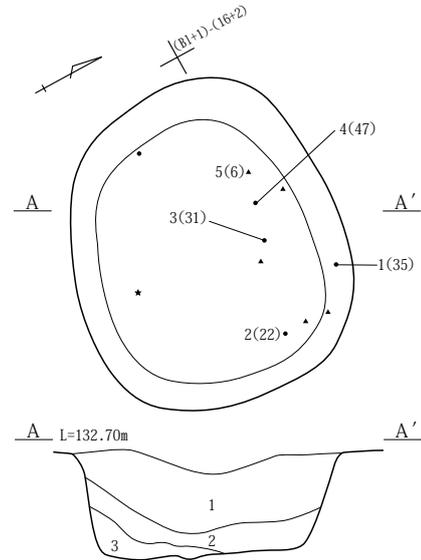
位置:B1-16グリッド 形状:楕円形 規模:1.68m×1.45m 残存深度:0.58m 主軸方位:E-10°-S 埋没土:埋没土はAs-Cや二ッ岳系軽石を含む暗褐色土であり、ⅩⅦ層土ブロックなどを含まないなど、Ⅰ期とした202・205号土坑などと比較して異質であり、締まりや粘性がある。 遺物:上層中から灰釉陶器皿(4)、須恵器碗(1

～3)、砥石(5)が1点出土した。 重複:9号溝、172号土坑と重複しており、検出状況から172号土坑→170号土坑→9号溝である。 所見:埋没土に積極的に人為的埋没を示すような状況は見いだせないが、埋没土中から骨が出土し、これが人骨の可能性あることから墓坑として扱った。骨の残存状況は悪く、埋葬状況など詳細を知り得るような状況にはない。

346号土坑(第755図 P.L.168)

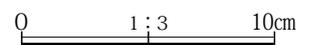
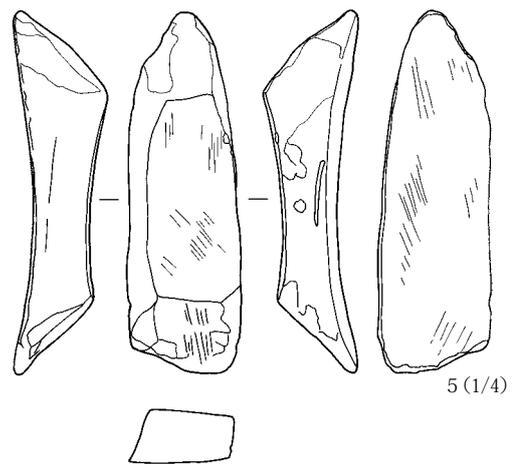
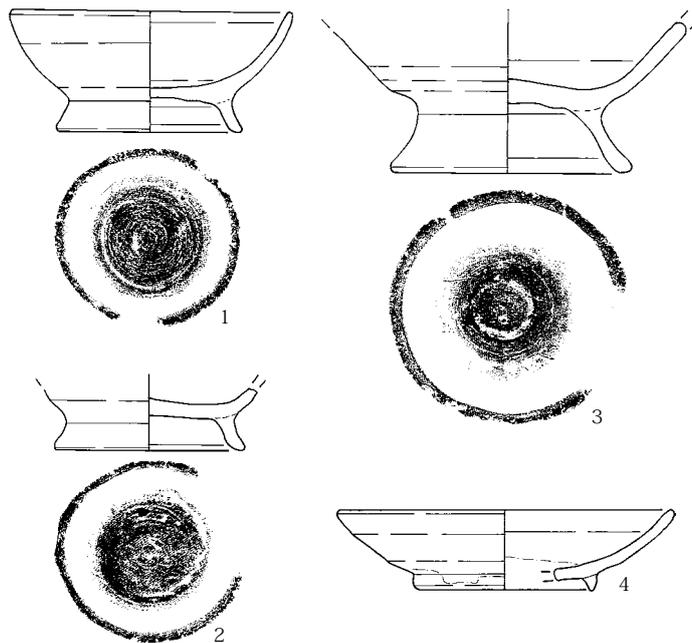
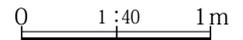
位置：Ca・Cb-7グリッド 形状：ドーナツ状 規模：径2.92m、幅0.40m 残存深度：0.10m 埋没土：炭化物を含むⅦ層土。 遺物：土師器坏の小片が出土した。 重複：137・138号住居及び345号土坑と重複し、検出状況から137・138号住居→346号土坑→345号土坑である。 所見：住居の確認をするためにⅦ層土を下げている途中で、炭化物と焼土が面的に検出されたことから精査を行った。その結果炭化物粒がドーナツ状に分布していることがわかり、さらに南側には炭化物、焼土に混じって灰白色を呈する焼骨の細片が含まれていたことから、墓坑の可能性を考慮してここで報告をした。提示した平面図は、炭化物が含まれたⅦ層土部分を掘り上げた状態を作図したもので、土質の明確な違いを捉えて壁や底面を検出したものではない。焼骨の検出量は極めて少なく、焼骨が人骨であった場合一体分には遠く及ばないので、焼骨の埋葬土坑と断定することはできない。時期は10世紀前半に位置付けた138号住居よりは新しく、As-Bを濃密に含む土層(Vb層土)によって埋没している345号土坑よりは古く、しかも炭化物粒や焼土が含まれている土層中にAs-Bはまったく認められないことから、As-B降下以前の古代の遺構と見てよいであろう。346号土坑のようなドーナツ状を呈する土坑としては、県内では鳥羽遺跡SK332、日高遺跡52号土坑などが知られており、規模は

346号土坑がやや大きいものの同じ範疇で捉え得るのではないかと考えている。この仮定が成り立つとすると、墓と断定することはできないものの、鳥羽遺跡報告で指摘されているように「葬制あるいは墓制に関連する」という見解に従っておくが、葬制とした場合に構造を明確にすることはできないが「荼毘所」の可能性があるのでないだろうか。

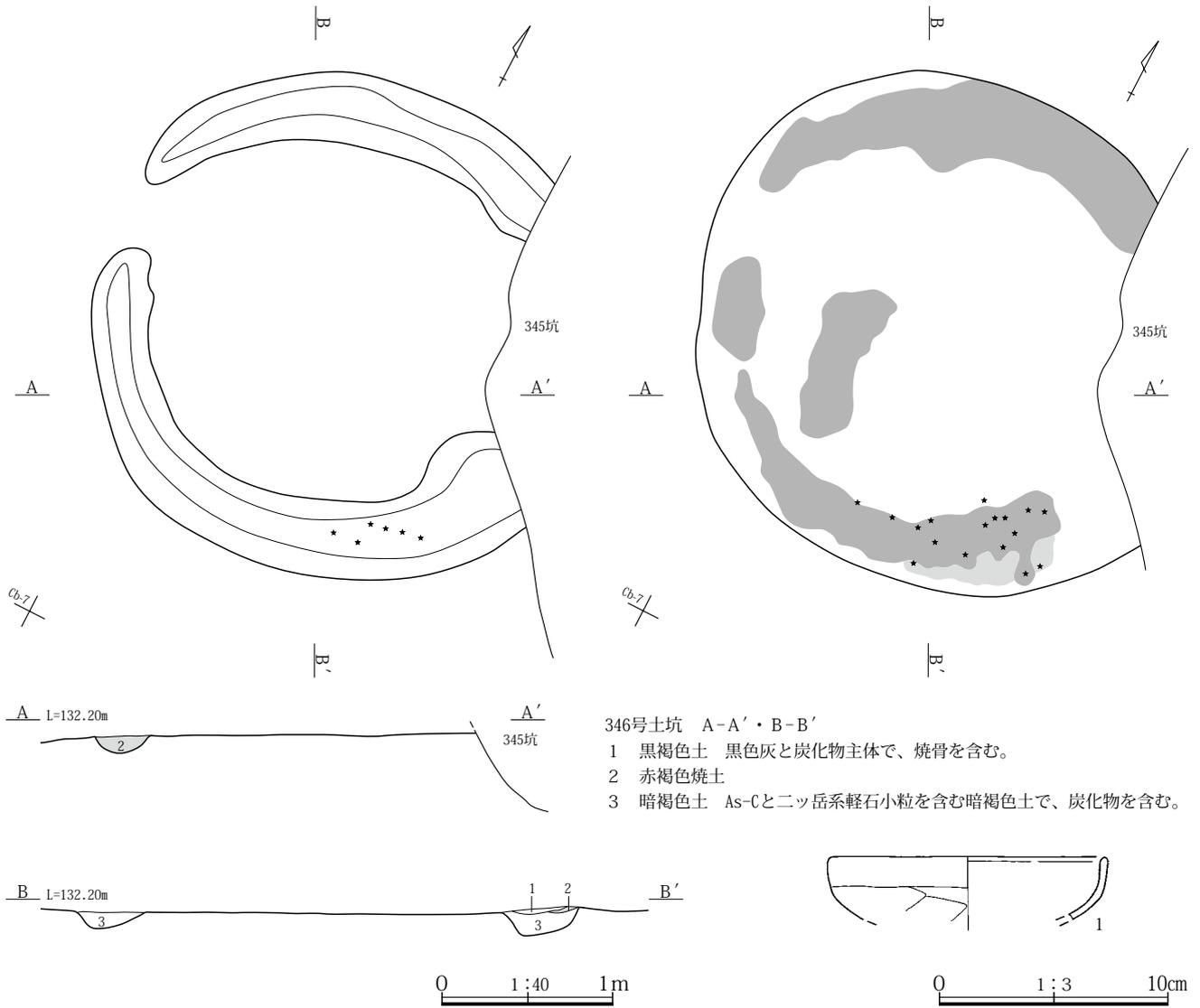


170号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、As-Cと二ツ岳系軽石・炭化物をやや多く含む。やや粘性あり。
- 2 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、As-Cと二ツ岳系軽石を少量含む。やや粘性あり。
- 3 黒褐色砂質土 As-Cと二ツ岳系軽石をわずかに含む。粘性あり。硬くしまっている。



第754図 170号土坑・出土遺物



第755図 346号土坑・出土遺物

(6) 集石

4号集石(第756図 P L.168・169)

位置: B1-13グリッド **規模:** 1.25m×1.34m **遺物:** 礫に混じって須恵器碗(1)・甕・羽釜(2)、灰釉陶器碗がいずれも破片で出土した。 **所見:** 古代の住居確認のためにⅦ層土を掘り下げていたところⅢ区北端に検出された。小礫を主体として円形に礫が集中し、わずかに大形礫が混じった状況であった。検出状況の平面図を作成し、図化した礫を取り除いたところ、中央部にわずかに顔を出していた礫は扁平な大礫で水平に置かれたような状態であり、これを囲むような小礫が新たに検出された。さらに中央の大形礫と周囲の小礫をはずしながら掘り下げると、下部にも小礫が検出され、最終的には径1.25m、深さ0.40mの円形を呈する土坑内に礫が入っていたこと

が判明した。一見すると建物の礎石とも見えるが、建物が構成できるような位置に同様の遺構は検出されていない。10mほど南に古代の所産と考えた集石が4カ所検出されているものの、同様の礎石様を呈する集石は24mほど離れた8号集石だけである。また、水平に置かれた大礫下部の土層に突き固めたような状況も窺えないことから礎石の可能性は低いものと考えられる。塔心礎のように単体で機能したことも想定したが、周囲に柱穴に成り得るようなピットも検出されていないので、その可能性も低いであろう。礫の配置は単に土坑内に礫を廃棄したようなものではなく、目的をもって配置したようにも感じられるのであるが、その目的は不明である。出土遺物から10世紀代の所産と考えられる。

5号集石(第757図 P L.169)

位置：B1-10グリッド 規模：4.43m×3.73m 遺物：なし 所見：2号道の調査時に検出されたもので、3号道の西寄りに偏って路面に近い位置に集石されたものである。礫は自然礫ばかりで若干の高低差をもつものの、基本的には一面的で東に向かってわずかに傾斜しているように見えることから、西側から入れられたものではないかと考えられる。集石の目的は判然としないが、道の施設の一部と見るよりは周辺の遺構掘削に伴って出た自然礫を道の窪みに廃棄した可能性が高い。

6号集石(第757図 P L.169)

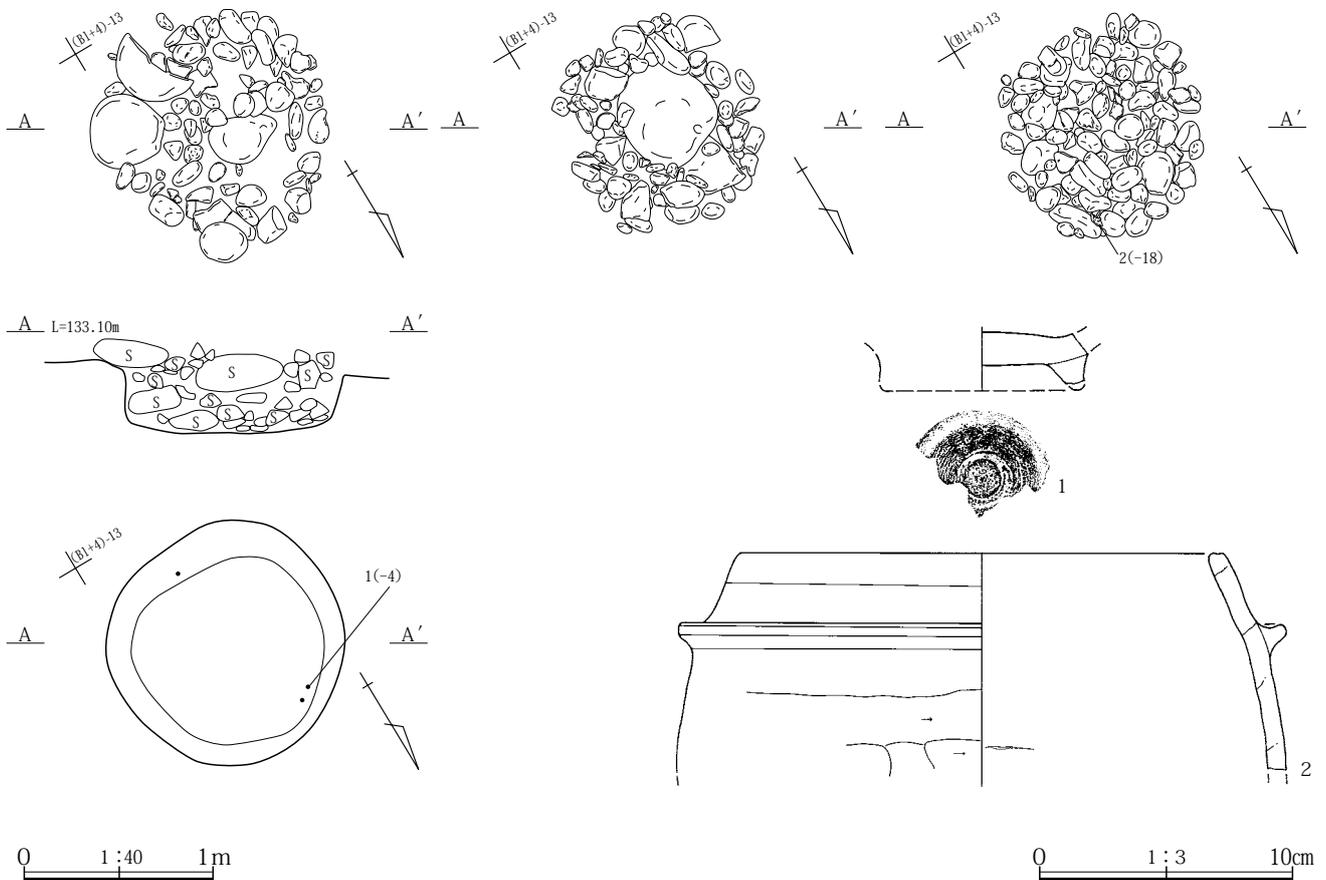
位置：B1・Bm-10グリッド 規模：2.70m×1.29m 遺物：礫間から須恵器碗が破片で出土した。 所見：3号道の調査に伴って検出したもので、路面よりはやや高い位置に自然礫が道の掘削傾斜に沿うように面的に検出された。作図したものでは5号集石との間に礫は見られないが、道の調査に伴って取り上げた礫もあることから、5号集石と一連の集石の可能性が高い。

7号集石(第758図 P L.169)

位置：Bm- 9・10グリッド 規模：5.65m×1.25m 遺物：礫間から須恵器坏(1・2)などが破片で出土した。 所見：3号道の路面近くに集石されていたもので、6号集石の南に連続するような位置関係である。下面にやや小さな礫が敷き詰められたような状態で、やや浮いた位置から大形礫が出土している。集石に傾斜は認められないが、基本的には5号集石と同様に道の窪みに礫が廃棄されたものと考えられる。

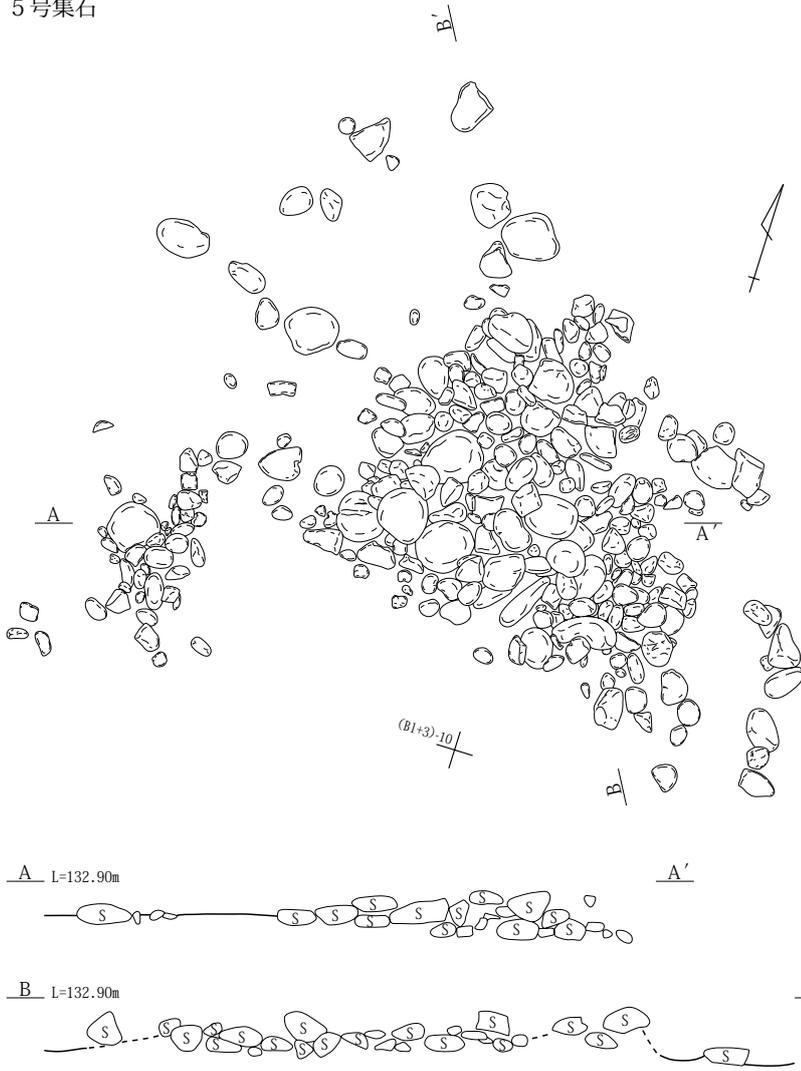
8号集石(第757図 P L.169)

位置：Bm- 8グリッド 規模：1.61m×0.89m 遺物：礫間から須恵器瓶(1)が破片で出土した。 所見：Ⅶ層土中で検出したもので、確認時点ではやや小規模ではあるが4号集石と同様に円形に礫が集中したものと認識した。ここでも小礫主体でやや大振な礫が混じっていた。当初は礫が一面的に集中したものと考えていたが、下部調査によって礫が3～4段重なって検出されたことから、本来は土坑状の掘り込み内に礫を集石したのものと考えられたが、埋没土と周囲の土層との見分けが難しく、掘り込みの形状を認識することができなかった。

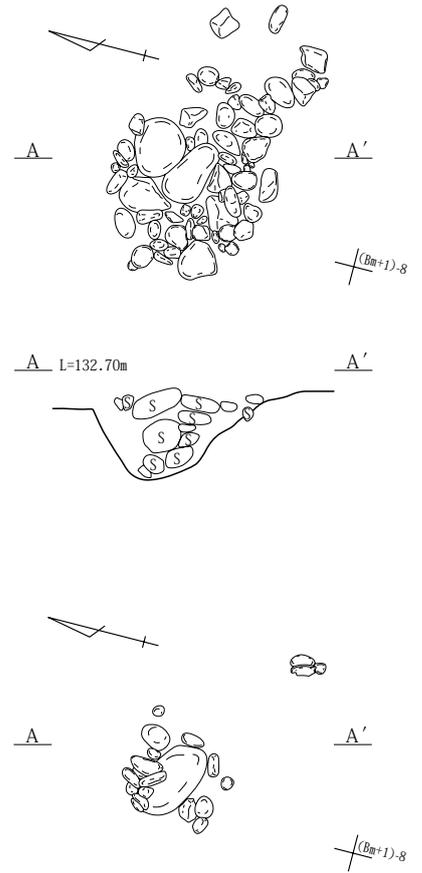


第756図 4号集石・出土遺物

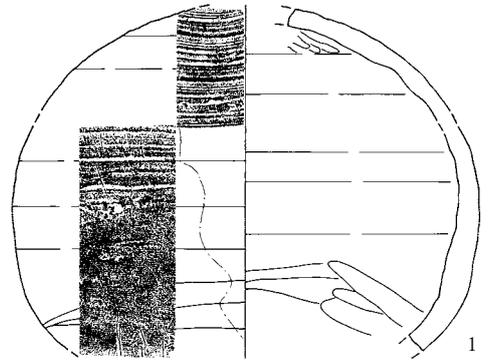
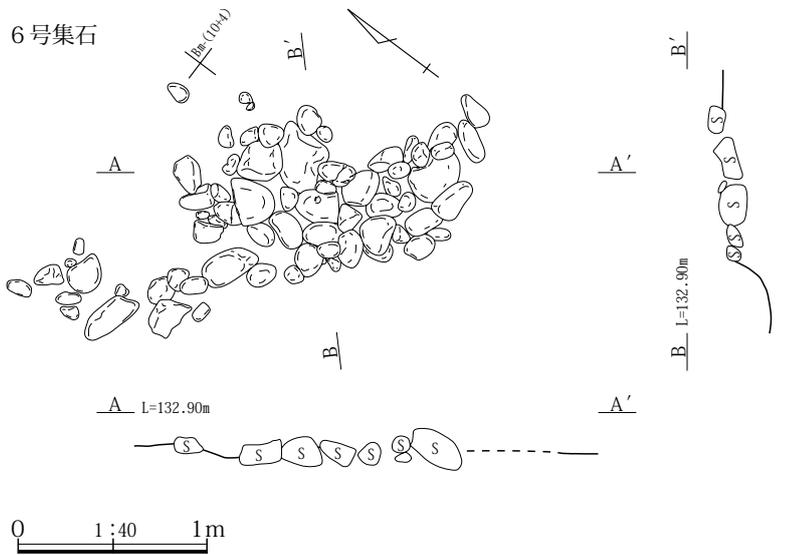
5号集石



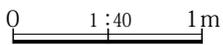
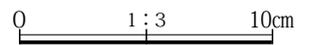
8号集石



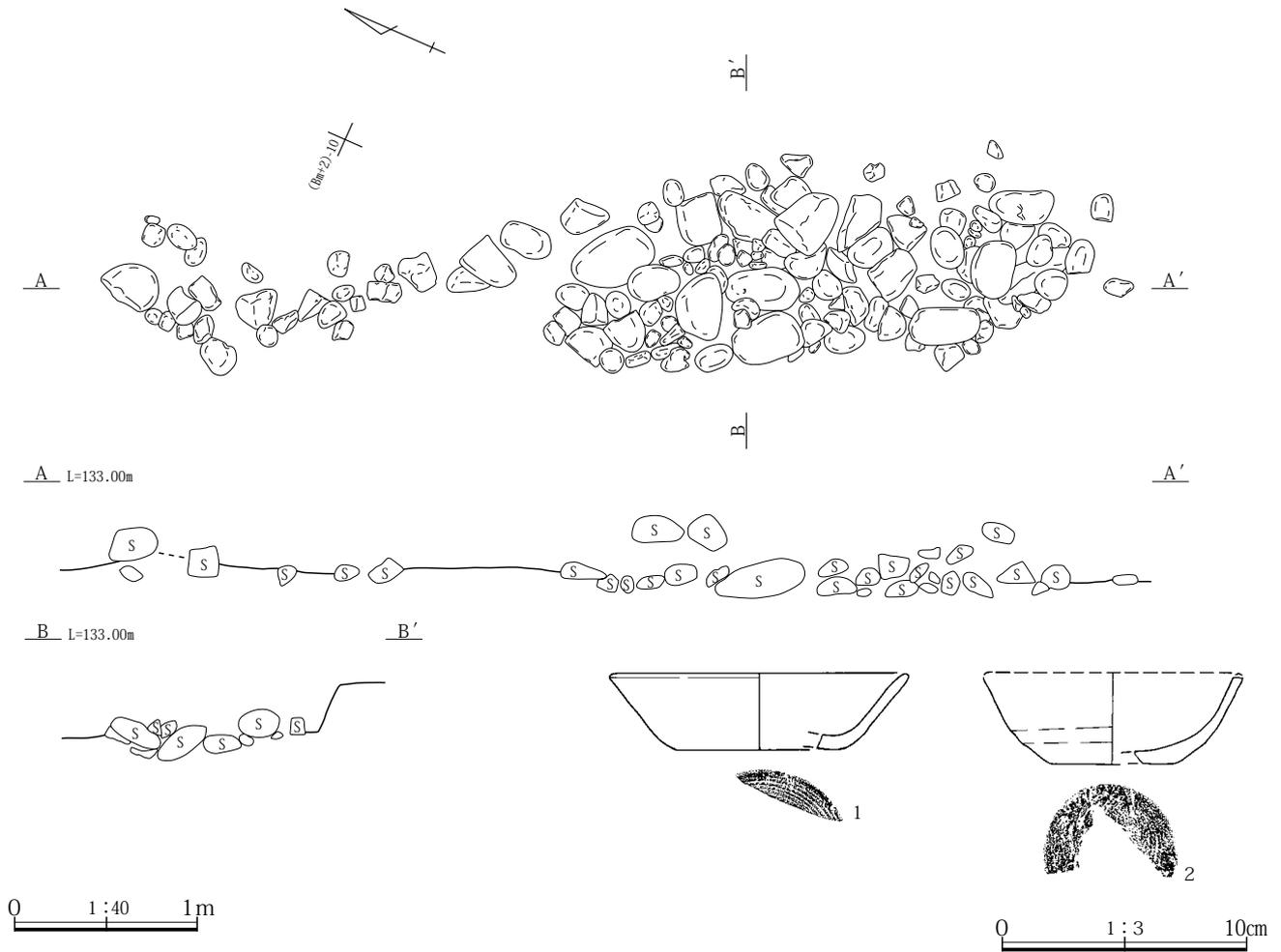
6号集石



8号集石



第757図 5・6・8号集石・出土遺物



第758図 7号集石・出土遺物

(7) 土坑

田口下田尻遺跡で検出した当該期の土坑は、円形、楕円形、隅丸長方形を呈するものが多い。広範囲に調査したⅠ～Ⅲ区においては、特に集中する傾向は認められないが、Ⅳ区では3号低地とした部分に土坑が集中的に掘削されていた。重複するものも多く継続的に掘削された

ものと思われるが、用途が明らかにできたものはない。371・372号土坑のような内部に焼土が形成され、炭化物が出土したものは、土器などの焼成坑の可能性があるので考えられる。しかし、紙数の関係もあり個別記載はせずに計測値等の基本的な項目を一覧で提示した。

第19表 田口下田尻遺跡 II期土坑一覧表

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考
10	土坑	759	Bg・Bh-15	不整楕円形	1.35×0.93×0.16	N-0°-E		VII層土?	
19	土坑	759	169	楕円形	1.62×0.93×0.46	E-28°-S		VII層土?	
22	土坑	759	169・288	楕円形	2.00×1.34×0.46	N-8°-E	灰釉陶器	VII層土	10世紀後半
23	土坑	760	169	楕円形	1.32×1.06×0.50	N-19°-W			
31	土坑	169	Bm・Bn-1	不整楕円形?	1.80×1.47×0.25		須恵器		
33	土坑	760	Bn-0	円形	1.53×-×0.35		須恵器・羽口		
36	土坑	760	170・288	隅丸長方形	2.84×2.61×0.55	N-18°-W	緑釉陶器・灰釉陶器・刀子	VII層土	10世紀後半
37	土坑	760	Bn-2・3	円形	1.09×-×0.25			IX層土	
38	土坑		B1-3	円形	0.76×-×0.45				
40	土坑		Bk-3	隅丸長方形	1.15×0.85×0.22	N-18°-W			
41	土坑	760	170・288	隅丸長方形	2.15×1.42×0.30	E-2°-S	灰釉陶器・金属製品	VII層土	10世紀代
42	土坑	772	170・288	楕円形	1.42×1.24×0.56	N-28°-W	灰釉陶器・刀子		
43	土坑		Bk-3	楕円形?	1.65×0.68×0.30			IX層土	
45	土坑	761	170・288	円形	1.05×-×0.40		須恵器・刀子		10世紀後半
49	土坑		Bm-3	楕円形	0.78×0.57×0.23	E-32°-S			

第5章 2面の調査(中世~古墳時代後期)

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考	
50	土坑		Bm-3	楕円形	0.65×0.46×0.30	E-42°-S				
51	土坑	760	Bk-3	楕円形	1.36×0.85×0.65	E-12°-N				
53	土坑	772	Bk-2	不整形	3.42×2.62×0.30		緑釉陶器・灰釉陶器		10世紀代	
54	土坑	772	Bk・B1-2	不整形	2.83×(1.73)×0.23		緑釉陶器		10世紀代	
56	土坑	772	Bi-2	隅丸長方形	(12.6)×12.4×0.35	E-32°-N	須恵器		9世紀代	
58	土坑	761	Bj-2	不整形	2.07×1.58×0.36		土師器	VII層土		
59	土坑	170	Bj-2	円形	1.01×-×0.17					
60	土坑	170	Bk-3	隅丸長方形	1.02×0.71×0.23	E-12°-S				
61	土坑	170	Bj-2	楕円形	1.11×0.73×0.17	N-51°-E				
67	土坑		Bj-2	不整形	0.78×0.61×0.13					
70	土坑		Bi・Bj-3	不整形楕円形	1.03×0.66×0.21	E-30°-N				
71	土坑		Bk-3	楕円形	1.08×0.64×0.22	E-27°-N				
72	土坑		Bj-3	不整形	1.43×1.05×0.18		砥石			
75	土坑	772	Bi・Bj-3・4	不整形	2.56×1.79×0.29		緑釉陶器・灰釉陶器		10世紀代	
76	土坑		Bi・Bj-3	不整形	1.53×1.10×0.29					
78	土坑	761	Bk・B1-1	不整形	3.05×(1.24)×0.36		灰釉陶器		10世紀後半	
81	土坑		Bs-2	楕円形	0.83×(0.52)×0.45	N-11°-W	灰釉陶器		10世紀代	
83	土坑		Br-3	円形	0.83×-×0.32					
84	土坑	170	Br-3	円形	0.99×-×0.30					
86	土坑	170	Br-2	円形	0.99×-×0.26		灰釉陶器		10世紀代	
87	土坑	170	Br・Bs-2	楕円形	1.50×0.85×0.19	E-0°-N				
88	土坑		Bs-3	円形	0.67×-×0.22					
89	土坑		Bs-2	円形	0.99×-×0.25					
90	土坑	170	Bq・Br-1	円形	0.78×-×0.21					
92	土坑	170	Bo-0・1	楕円形	1.12×0.91×0.19	N-17°-W				
95	土坑	762	Bo-0	楕円形	(0.97)×1.25×0.36	N-33°-W		XI層土		
96	土坑	762	Bo-0	楕円形	1.30×1.03×0.37	N-3°-E	土師器	IX層土		
97	土坑	762	Bn・Bo-0・1	不明	1.71×1.44×0.26		須恵器		8世紀代	
98	土坑	170	Bn・Bo-2	楕円形	1.76×1.13×0.65	N-13°-W	土師器			
99	土坑	762	Bo-0・1	不整形楕円形	20.0×1.56×0.72	N-20°-W	須恵器	VII層土	9世紀代	
100	土坑	762	Bn・Bo-1	楕円形?	(1.58)×1.35×0.36	N-12°-W		VII層土		
101	土坑	762	Bn・Bo-1	不整形楕円形	3.23×2.06×0.69	N-38°-W	須恵器	VII層土	10世紀代	
102	土坑		Bj-2	隅丸長方形	1.55×1.48×0.16	N-30°-W				
105	土坑		Bk-3	不整形	0.68×(0.43)×0.45					
108	土坑		B1-3・4	不整形	(0.70)×(0.26)×0.42		羽口			
109	土坑		B1-3・4	不整形	0.85×(0.58)×0.33					
110	土坑	772	Bo-18	楕円形	0.99×0.61×0.53	N-13°-W	須恵器		10世紀代	
111	土坑	762	Bo-18	隅丸長方形	1.77×1.09×0.27	N-9°-W		VII層土		
112	土坑		Bm-17	不整形	0.90×0.49×0.24					
113	土坑	762	Bm-16・17	楕円形	1.60×1.32×0.53	N-23°-W	鉄滓	VII層土		
114	土坑	763	Bm-16	楕円形	1.57×1.39×0.29	N-24°-W	灰釉陶器		10世紀代	
115	土坑	763	Bm-15	不整形円形	1.78×-×0.35					
118	土坑		Bi・Bj-2	不整形	1.53×0.65×0.32		灰釉陶器		10世紀代	
119	土坑		Bj-2・3	不整形	1.19×0.56×0.26					
120	土坑		Bm-17	円形	0.66×-×0.16					
121	土坑	763	Bk-16	円形	2.00×-×0.85		灰釉陶器・鉄製品	VII層土	10世紀代	
122	土坑	763	Bk・B1-16	楕円形	1.45×1.10×0.36	N-34°-W				
123	土坑	171	B1-16	円形	0.92×-×0.25					
124	土坑	772	Bn-16・17	楕円形	1.26×1.20×0.70	E-15°-N	羽釜		10世紀代	
125	土坑		Bn-16・17	楕円形?	1.03×(0.46)×0.52					
126	土坑		Bk-14	楕円形	0.83×0.67×0.07	N-30°-E				
127	土坑		Bk・B1-3	楕円形	2.63×2.03×0.32	E-30°-N				
128	土坑	763	171・289	Bk-15	円形	1.60×-×0.77	灰釉陶器	VII層土	10世紀後半	
129	土坑	763	171	Bo-17	楕円形	1.22×0.78×0.48	E-13°-S	灰釉陶器	10世紀代	
130	土坑	763		Bj-15	楕円形	1.05×0.79×0.39	E-32°-S	灰釉陶器	VII層土	10世紀代
131	土坑	763		Bj-15	楕円形	1.53×1.27×0.39	N-12°-W		VII層土	
132	土坑	171		Bo-17	円形	0.92×-×0.15				
133	土坑	171		Bo-17	不整形円形	0.79×-×0.15				
134	土坑		Br-0	楕円形	1.31×0.90×0.18	E-6°-N				
135	土坑		Bn・Bo-19	隅丸長方形	1.14×0.79×0.27	N-43°-W				
136	土坑		Bn・Bo-19	楕円形	0.70×(0.45)×0.15					
137	土坑		Bo-14	円形	0.66×-×0.26					
138	土坑	171		Bo-14・15	円形	1.02×-×0.30				
139	土坑	171		Bo-14	円形?	0.72×-×0.20				
140	土坑	764	171	Bm・Bn-17	楕円形	1.30×1.10×0.26	E-3°-N		VII層土	
141	土坑			Bo・Bp-14	楕円形	0.95×0.65×0.25	E-29°-S			
142	土坑	764	171	Bm・Bn-18	隅丸長方形	1.40×0.78×0.26	N-23°-W		VII層土	

第2節 第II期 古代～古墳時代後期

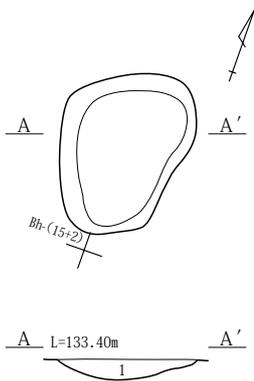
番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考	
143	土坑		Bo-19	隅丸長方形?	1.12×1.00×0.40	N-24°-W				
144	土坑	763	Bj-15	不整円形	1.34×-×0.35		須恵器	VII層土	10世紀後半	
145	土坑		Bn-3	隅丸長方形	0.90×0.63×0.10	N-22°-W				
146	土坑	764	Bj-15	不整円形	1.22×-×0.34		土釜	VII層土	8世紀代	
147	土坑		Bj-15	楕円形	1.02×0.70×0.10	E-7°-S				
151	土坑		Bk-14	楕円形	1.38×0.75×0.18	N-17°-W				
152	土坑		Bj・Bk-14	円形	0.70×-×0.09					
153	土坑		Bj-13	楕円形	(1.25)×0.81×0.40	N-40°-E				
155	土坑	764	Bj-13・14	円形	2.10×-×0.18			VII層土		
156	土坑	764	Bh・Bi-12	隅丸長方形	2.35×(0.85)×0.49	E-12°-N		IX層土		
157	土坑	764	172・289	隅丸長方形	1.93×1.05×0.54	E-10°-N	灰釉陶器	VII層土	10世紀後半	
158	土坑	764	Bi・Bj-14	隅丸長方形	1.27×1.25×0.33	N-9°-W		VII層土		
159	土坑	764	Bf・Bg-14	楕円形	1.64×1.12×0.33	E-8°-N		VII層土		
160	土坑		Bh・Bi-13	円形	1.00×-×0.41					
161	土坑		Bo・Bp-17	楕円形	0.80×0.68×0.09	E-36°-S				
162	土坑		Bp-17	隅丸長方形	0.93×0.40×0.32	N-20°-W				
163	土坑		Bm-17	円形	1.03×-×0.18					
164	土坑		Bm-15	円形	1.18×-×0.28					
165	土坑		Bm-17	円形	0.99×-×0.33					
166	土坑		Bk・Bl-16	円形	0.76×-×0.10					
167	土坑	772	172・289	楕円形	0.91×0.71×0.10	N-41°-E	須恵器埴		10世紀後半	
168	土坑	765	Bm-15・16	不整楕円形	1.36×1.10×0.35	N-10°-W		VII層土	10世紀後半	
169	土坑		B1-13・14	不整楕円形	1.38×0.92×0.43	E-14°-N				
171	土坑	765	172	Bi・Bj-15・16	隅丸長方形	2.06×1.65×0.46	E-17°-S	須恵器	VII層土	10世紀代
172	土坑		B1-16	不整形	1.28×(0.50)×0.29					
174	土坑	765	289	Bg-15	隅丸長方形	1.29×0.87×0.66	E-20°-N	土師器	VII層土	7世紀後半
175	土坑		Bh・Bi-14	楕円形	1.15×0.82×0.07	E-16°-N				
176	土坑		Bh-12・13	不整形	0.95×(0.48)×0.29					
178	土坑		Bi-13	不整形	0.90×(0.40)×0.28					
180	土坑		Bi-12・13	円形	0.69×-×0.34					
182	土坑		Bn・Bo-19・20	楕円形	(0.98)×0.71×0.15	N-40°-W				
183	土坑		Bn-19	円形	0.80×-×0.23					
184	土坑		Bn・Bo-18	円形	0.97×-×0.32					
185	土坑		Bn-18	円形	0.70×-×0.30					
186	土坑		Bn-18	円形	0.72×-×0.25					
187	土坑		Bo-19・20	不整形	0.84×(0.27)×0.20					
188	土坑		Bo-15	円形	0.90×-×0.30					
189	土坑	765	172	Bi-16・17	隅丸長方形	1.40×1.35×0.25	N-12°-W		VII層土	
190	土坑	772		Bi-16	楕円形	1.00×1.62×0.19	N-14°-W	須恵器坏		9世紀代
191	土坑		Bi・Bj-16	円形?	1.20×-×0.33					
192	土坑		Bj-16	円形?	0.65×-×0.28		灰釉陶器・羽口		10世紀代	
194	土坑	765		B1・Bm-15・16	楕円形	1.79×1.46×0.30	E-6°-N		VII層土	
207	土坑		B1・Bm-4	不整円形	2.06×1.95×0.34		灰釉陶器		10世紀代	
208	土坑	765		Bj・Bk-4	不整形	1.65×1.48×0.35			XII層土	
209	土坑	765	172・289	Bj・Bk-4	不整円形	2.08×1.79×0.44		灰釉陶器	XII層土	10世紀前半
210	土坑		Bi-3	円形	0.76×-×0.16					
211	土坑		Bj-3・4	隅丸長方形	1.42×1.00×0.30	N-17°-W				
213	土坑		Bo-7	円形	0.86×-×0.31		羽口・鉄滓			
218	土坑	766		Br-6	円形	1.06×-×0.35			IX層土	
221	土坑	766		Bp-7・8	楕円形	1.09×0.90×0.56	N-20°-W	灰釉陶器	VII層土	10世紀代
222	土坑			Bp-7・8	楕円形	0.80×0.63×0.15	E-29°-S			
223	土坑	766		Bp-7	楕円形	1.42×1.17×0.24	E-5°-N	鉄滓	VII層土	
224	土坑			Bq-7	円形	0.69×-×0.38				
234	土坑	772		B1・Bm-5	楕円形	1.30×0.88×0.20	E-33°-S	羽口・須恵器埴		10世紀代
238	土坑	766	172・289	Bm・Bn-4	円形	1.10×-×0.30		鉄滓・須恵器	VII層土	10世紀後半
243	土坑	772		Bj・Bk-7	隅丸長方形	1.98×(0.64)×0.30	E-13°-N	土師器甕		10世紀代
244	土坑			Bj-7	不整形	-×-×0.15				
247	土坑			Bh-17	楕円形	1.92×0.87×0.20	N-10°-E			
248	土坑	766		Bh-17	楕円形	1.50×1.22×0.19	E-24°-N	須恵器	IX層土	10世紀代
251	土坑	766		Bp-12	円形	1.25×-×0.44		須恵器	VII層土	
252	土坑	766		Bo-11	隅丸長方形	1.46×1.15×0.12	E-8°-N		VII層土	
253	土坑			Bo-10・11	円形	0.65×-×0.13				
255	土坑	766		Bn-12	円形	1.00×-×0.12			VII層土	
256	土坑	766		Bm・Bn-12	円形	1.14×-×0.29			VII層土	
258	土坑	767		Bh-8・9	楕円形	2.05×1.38×0.12	N-0°-E		XII層土	
261	土坑			Bi-9	楕円形	0.55×0.40×0.17	E-15°-N			
262	土坑			Bi-9	楕円形	0.81×0.64×0.14	E-38°-S			
263	土坑			Bi-9・10	円形	0.65×-×0.27				
264	土坑	767		Bi-11	楕円形	1.06×0.88×0.12	E-38°-N		VII層土	

第5章 2面の調査(中世～古墳時代後期)

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考
265	土坑		Bi-11	楕円形	0.67×0.58×0.12	E-34°-N			
266	土坑	772	289	Bj-10	楕円形	1.10×0.85×0.25	E-0°-N	須惠器環・埴土錘	10世紀後半
268	土坑		Bq-11	楕円形	0.80×0.59×0.31	E-23°-S	須惠器		
269	土坑	772	289	Bn-11・12	円形	0.95×-×0.12		刀子	
270	土坑		Bl-11	不整円形	0.76×-×0.26				
272	土坑	767	172	Bk・Bl-12	不整円形	0.88×-×0.27			VII層土
273	土坑	772		Bh-7	隅丸長方形	2.18×1.48×0.45	N-17°-W	須惠器環	10世紀代
275	土坑		Bg-7	不整形	(1.75)×(1.28)×0.43				
276	土坑		Bl-11	不整円形	0.94×-×0.20				
277	土坑		Bm-12	楕円形	1.32×0.97×0.18	N-15°-W	灰釉陶器		10世紀代
278	土坑	767	172	Bn-9・10	楕円形	1.50×1.28×0.28	N-25°-W	羽口	IX層土
279	土坑	767	289	Bj-7	楕円形	1.68×0.76×0.38	N-7°-W	灰釉陶器	VII層土
280	土坑		Bm-12・13	楕円形	0.97×0.79×0.14	E-20°-N			
281	土坑		Bm・Bn-12・13	円形	1.05×-×0.22				
282	土坑	767		Bi-11	円形	0.91×-×0.23		土師器	VII層土
283	土坑	767	173	Bp・Bq-10	円形	1.23×-×0.27		灰釉陶器	10世紀代
284	土坑	767		Bq-10	円形	1.08×-×0.32			VII層土
285	土坑		Bo-10	円形	0.60×-×0.15				
286	土坑	767	289	Bo・Bp-11	円形	1.22×-×0.84		須惠器・土錘	IX層土
287	土坑	767		Bp-11・12	隅丸長方形	1.50×1.39×0.13	E-12°-N		IX層土
288	土坑	772	173	Bn-13	円形	0.90×-×0.07		須惠器埴	10世紀代
294	土坑		Bm-13	円形	0.85×-×0.18				
295	土坑	768	173	Bn-13	円形	0.99×-×0.40		須惠器・土錘	IX層土
296	土坑	772	173・289	Bk-10	楕円形	2.56×0.77×0.25	E-9°-N	灰釉陶器皿	10世紀前半
298	土坑		Bj-12	円形	0.63×-×0.18				
299	土坑		Bp-10	楕円形	1.19×0.79×0.45	E-4°-S	土師器環		
302	土坑		Bh-8・9	不整楕円形	1.01×0.64×0.15	N-26°-E	土師器		
303	土坑		Bg-8	不整形	0.70×(0.36)×0.28				
305	土坑	768	173	Bk-10・11	楕円形	1.96×0.89×0.30	N-20°-W		IX層土
306	土坑		Bh-12	楕円形	(1.03)×0.80×0.15	E-18°-N	須惠器甕		
307	土坑	768	173・289	Bl・Bm-13	隅丸長方形	2.66×2.06×0.48	E-15°-N	灰釉陶器・土釜	VII層土
308	土坑		Bm-13	円形	0.59×-×0.07				
309	土坑		Bm-13	不整円形	1.08×-×0.10				
310	土坑		Bm-12	楕円形	0.78×(0.46)×0.12	N-15°-E			
311	土坑		Bm-11・12	円形	0.98×-×0.19				
312	土坑		Bm-11	楕円形	1.55×0.83×0.18	N-0°-E			
313	土坑		Bn-11・12	楕円形?	1.03×(0.95)×0.2	E-42°-N			
315	土坑		Bn-8	楕円形	0.86×0.55×0.07	N-0°-E			
316	土坑	768	173	Bm-10	隅丸長方形	1.65×1.14×0.57	E-17°-N	須惠器	IX層土
317	土坑		Bj-9	不整形	(0.91)×0.70×0.30				
318	土坑	772	173・289	Bk-10・11	不整形	1.95×0.95×0.21		灰釉陶器埴	10世紀前半
319	土坑		Bk・Bl-7	円形	1.05×-×0.48				
320	土坑		Bl-7・8	隅丸長方形?	1.62×(1.10)×0.3				
321	土坑		Bl-7・8	不明	2.60×1.88×0.40				
322	土坑		Bm-9	楕円形	0.86×(0.53)×0.09	N-17°-W			
323	土坑		Bm-9	円形	1.02×-×0.18				
324	土坑		Bl-8	円形	1.40×-×0.40		須惠器埴		10世紀後半
328	土坑	768		Bm-10・11	楕円形	(0.83)×0.90×0.50	N-34°-E		IX層土
329	土坑		Bo-13	不整楕円形	0.91×0.81×0.44	E-12°-N			
331	土坑		Bg-7	不整形	0.86×(0.78)×0.25				
332	土坑	772	173	Bs-16・17	隅丸長方形	2.54×(0.86)×0.15	N-14°-W	須惠器埴	10世紀前半
333	土坑		173	Bs-15	楕円形	0.82×0.67×0.17	E-4°-N		
334	土坑	768	173・289	Bs-15	楕円形	1.83×1.12×0.34	N-15°-W	灰釉陶器	砂質土
335	土坑		173	Bt-15	不整円形	0.95×-×0.35			
336	土坑		173	Bt-14・15	不整形	(1.46)×1.0×0.29			
337	土坑	772	173	Bt-14・15	不整形	(1.75)×1.25×0.15		土師器甕	9世紀後半
338	土坑		173	Bs-14	円形	0.96×-×0.2		須惠器埴	
339	土坑		174	Bt-14	隅丸長方形	0.77×0.76×0.09	N-27°-W		
340	土坑			Ca-13	楕円形	0.85×0.66×0.05	N-37°-E		
342	土坑	769	174	Bt・Ca-10・11	楕円形	1.45×1.03×0.48	E-28°-N		IX層土
343	土坑	772	174・289	Bt・Ca-10	円形	0.77×-×0.36		灰釉陶器・不明鉄製品	10世紀代
344	土坑		174	Bt-10	円形	0.51×-×0.30			
347	土坑			Ca・Cb-9	隅丸長方形	1.60×1.12×0.10	N-3°-E		
348	土坑	769	174	Cb-8	楕円形	1.34×0.99×0.43	N-0°-E		VII層土
349	土坑			Cb-8	楕円形	0.7×0.47×0.17	N-12°-W		
350	土坑		174	Cb-7・8	楕円形	1.83×1.53×0.42	E-42°-S		
351	土坑		174	Ca-8	円形	0.62×-×0.13			
353	土坑	769	174	Ca-9	楕円形	0.83×0.65×0.55	N-5°-W		IX層土・FP泥流

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考
354	土坑	772		Cb-11	楕円形?	1.43×(0.55)×0.5		須恵器碗	
355	土坑	769	174	Bt-14	円形	1.12×-×0.4			
356	土坑		174	Bs-15	円形	0.78×-×0.08			
357	土坑			Bt-12	隅丸長方形	0.83×(0.65)×0.48	N-13°-W		
358	土坑	769		Cb・Cc-6	不整楕円形	1.78×1.26×0.3	N-40°-W		VII層土
359	土坑	770		Cb・Cc-3	楕円形?	(0.94)×0.78×0.21	N-43°-W		VII層土
360	土坑	771		Cb-2	円形?	1.27×-×0.48		土師器	VII層土
361	土坑			Cb・Cc-3	円形	0.69×-×0.21			
362	土坑	771		Cb-3	隅丸長方形?	1.58×(1.16)×0.36	E-2°-S		VII層土
363	土坑	771		Cb-3	不整楕円形	1.36×0.80×0.36	E-3°-S	須恵器	9世紀前半
364	土坑	771		Cb-2	不整楕円形	1.05×(0.36)×0.36	E-13°-N		VII層土
365	土坑	771		Cb-2・3	不整形				VII層土
366	土坑	771		Cb-2	不整形				VII層土
367	土坑	770		Cc-3	不整楕円形	2.75×1.55×0.46	E-42°-N	土師器	VII層土
368	土坑	770	175・289	Cc-3	隅丸長方形	1.50×1.26×0.61	N-45°-W	須恵器	
369	土坑	769		Cb-4	楕円形?	1.64×(1.07)×0.26			
370	土坑	769	175	Cb-5	円形	1.17×-×0.23			IX層土
371	土坑	771	175・289	Cb-5	楕円形	1.90×1.51×0.27	E-15°-N	須恵器	VII層土
372	土坑	771	175・289	Cb-5	隅丸長方形	1.28×1.08×0.63	E-34°-S	灰釉陶器	VII層土
373	土坑	769	175	Cb-5	隅丸長方形	0.81×0.81×0.23	N-7°-W		VII層土
374	土坑		175	Cb-5	方形	1.15×0.84×0.09	E-38°-S	須恵器坏	
377	土坑	770	175・289	Cc-3	不整楕円形?	2.19×(1.35)×0.70	E-40°-N	土師器	
378	土坑	770		Cc-3	隅丸長方形	0.96×0.81×0.28	N-15°-E		VII層土
379	土坑	770		Cc-3	不整楕円形	1.52×0.71×0.27	N-42°-E		VII層土
380	土坑			Cb-6	円形?	0.66×-×0.10		須恵器碗	
381	土坑			Cb-6	楕円形	1.07×0.79×0.27	E-30°-N	灰釉陶器	

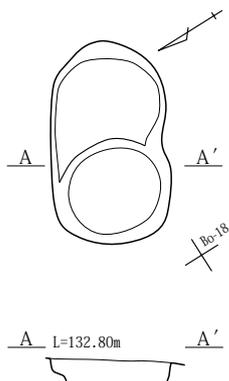
10号土坑



10号土坑 A-A'

1 黒褐色粘質土 明褐色土ブロック(径5mm以下)を多く含み、炭化物(径5mm以下)白色軽石(1.5cm以下)を少量含む。粘性があり、やや硬くしまっている。

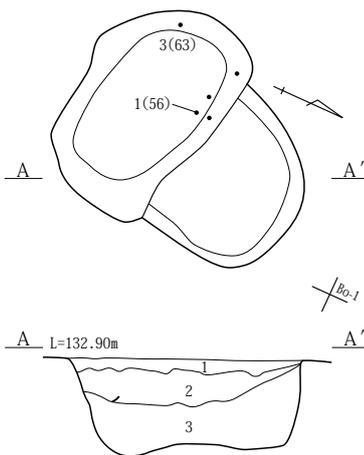
19号土坑



19号土坑 A-A'

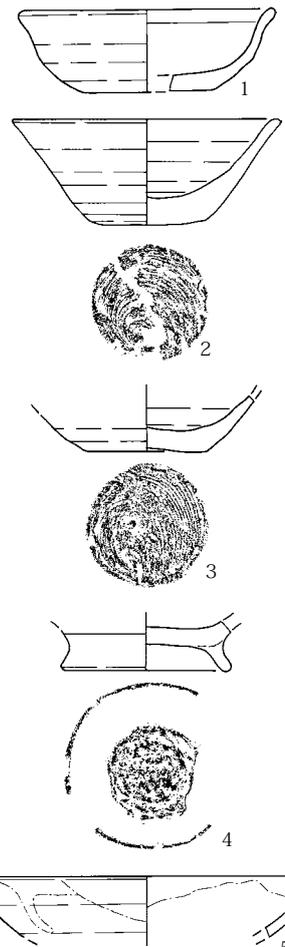
1 暗褐色土 XI層土主体で、軽石を少量含む。

22号土坑

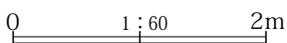
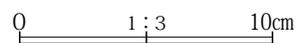


22号土坑 A-A'

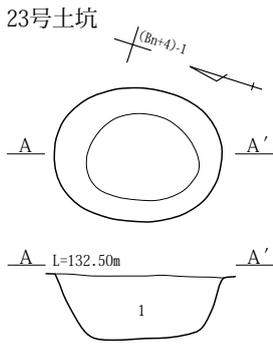
1 暗褐色土 XI層土主体で、As-Cを多く、As-Bを含み、ニッ岳系軽石・小礫を少量含む。全体に粗い。
 2 暗褐色土 XI層土主体で、As-Cをやや多く、ニッ岳系軽石・小礫・炭化物を少量含む。
 3 暗褐色土 XI層土とXII層土の混土。As-Cとニッ岳系軽石・小礫を少量含む、厚さ5mm程の粘質土が複数含む。



22号土坑

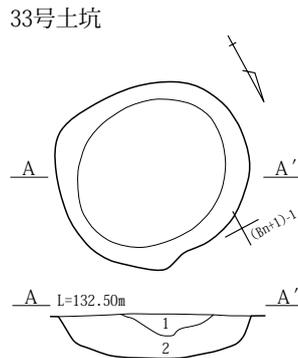


第759図 10・19・22号土坑・出土遺物



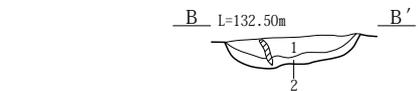
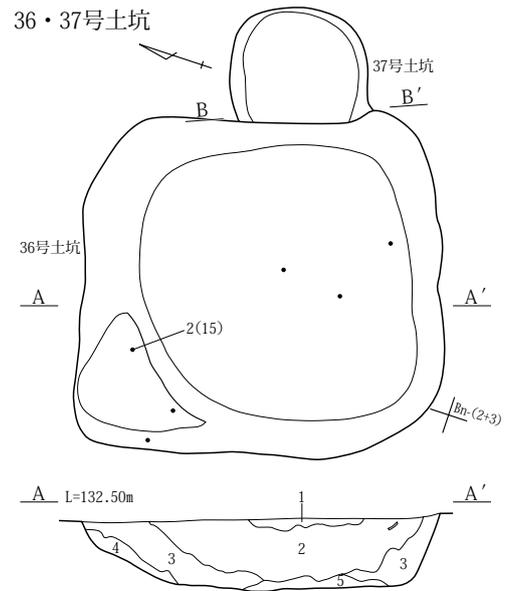
23号土坑 A-A'

1 暗褐色土 XI層土とXII層土の混土。ニッ岳系軽石をごく少量含む。均質で柔らかい。

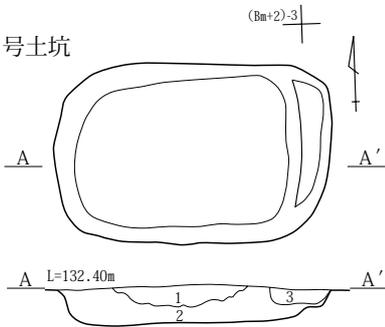


33号土坑 A-A'

1 黒褐色土 XI層土を主体とし、As-Cを少量含む。
2 暗褐色土 XII層土がやや黒ずんだ土。柔らかい。

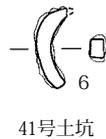


41号土坑

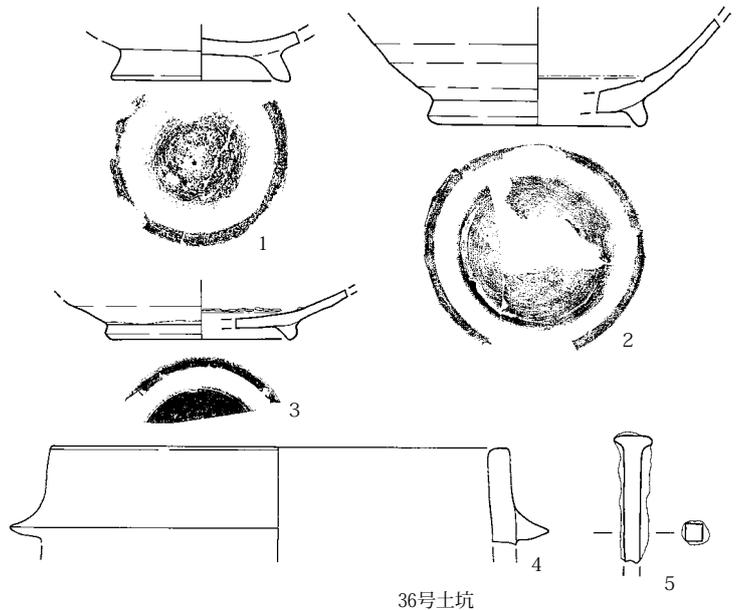


41号土坑 A-A'

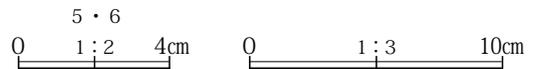
1 暗褐色土 XI層土を主体とし、As-Cを多く含み、ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。
2 暗褐色土 XI層土を主体とし、XII層土小ブロック・As-Cとニッ岳系軽石を少量含む。
3 暗褐色土 2層に類似するが、炭化物を多く含む。(隣の住居?の埋没土)



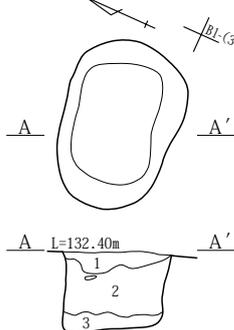
41号土坑



36号土坑

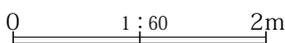


51号土坑



51号土坑 A-A'

1 暗褐色土 XI層土を主体とし、XII層土ブロック・炭化物を少量含む。
2 暗褐色土 IX層土を主体とし、XII層土ブロックを多く含む。やや粘性あり。
3 暗褐色砂質土 XI層土とXII層土の混土。柔らかい。



36号土坑 A-A'

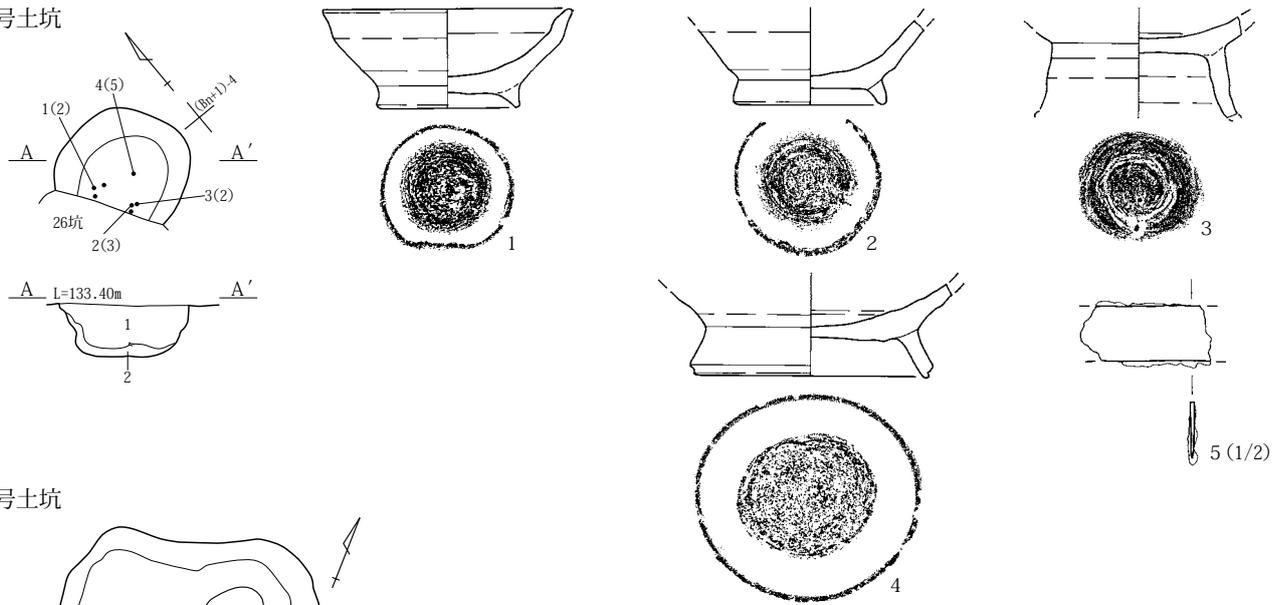
1 暗褐色砂質土 XI層土を主体とし、XII層土ブロックを多く含む。
2 黒褐色土 IX層土を主体とし、As-Cとニッ岳系軽石・炭化物・XII層小ブロックを少量含む。やや粘性あり。
3 暗褐色砂質土 XI層土を主体とし、XII層土ブロックを多く含み、As-C・炭化物をごく少量含む。
4 暗褐色砂質土 XI層土を主体とし、XII層土ブロックを多量に含む。
5 暗褐色砂質土 XI層土を主体とし、IX層土ブロック・XII層土ブロックを多く含み、As-Cを少量含む。

37号土坑 B-B'

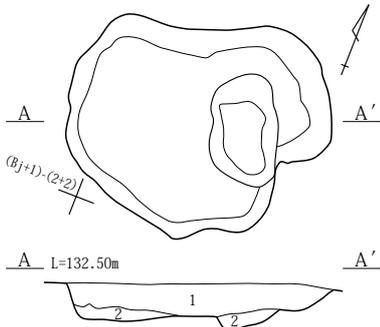
1 黒褐色土 IX層土を主体とし、As-Cを多く含み、炭化物・XII層小ブロックを少量含む。粘性あり。
2 黒褐色土 IX層土を主体とし、XII層土ブロックを多く含み、As-Cを少量含む。粘性あり。

第760図 23・33・36・37・41・51号土坑・出土遺物

45号土坑



58号土坑



45号土坑

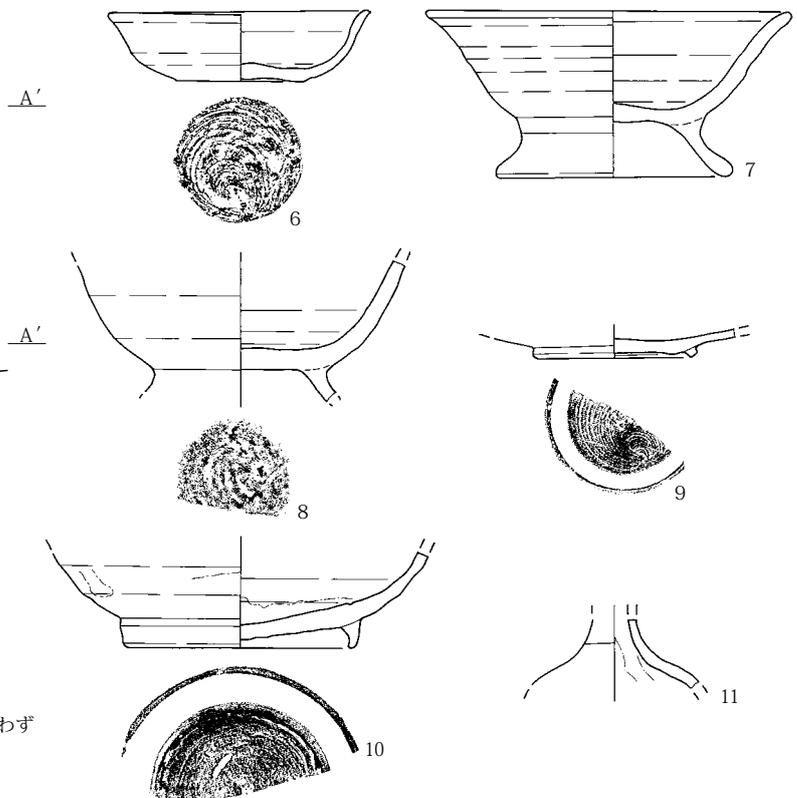
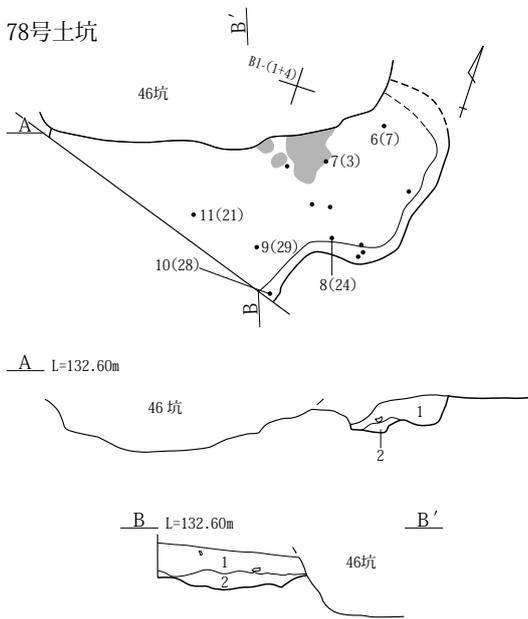
45号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 IX層土を主体とし、XII層土を多量に、小ブロックを含み、炭化物をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 IX層土とXII層土の混土。炭化物を少量含む。

58号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 XI層土を主体とし、XII層土ブロック・As-Cとニッ岳系軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 XI層土を主体とし、XII層土ブロックを多く含み、As-Cとニッ岳系軽石を少量含む。柔らかい。

78号土坑



78号土坑 A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、炭化物を多く含む。
- 2 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cを均一に含み、炭化物をわずかに含む。

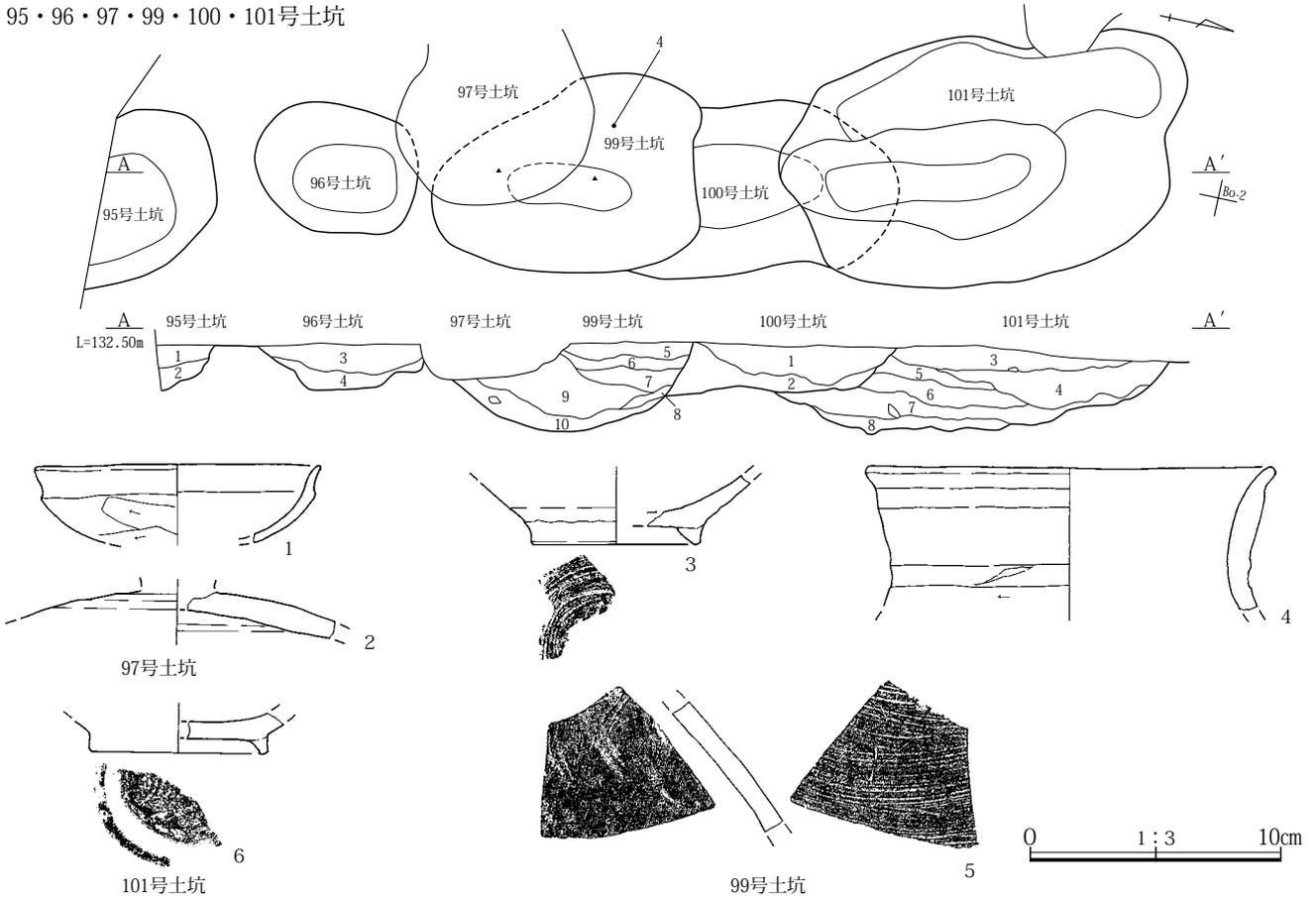
0 1:60 2m

78号土坑

0 1:3 10cm

第761図 45・58・78号土坑・出土遺物

95・96・97・99・100・101号土坑



95号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 XI層土を主体とし、As-C・XII層土ブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 XI層土を主体とし、XII層土ブロックを多く含む。

96号土坑 A-A'

- 3 黒褐色土 XI層土を主体とし、As-C・XII層土ブロックを少量含む。
- 4 黒褐色土 XI層土を主体とし、XII層土ブロックを多く含む。

99号土坑 A-A'

- 5 暗褐色土 XI層土を主体とし、As-Cとニッ岳系軽石・XII層土小ブロック・炭化物を少量含む。
- 6 暗褐色土 5層に類似するが、XII層土ブロックをやや多く含む。
- 7 暗褐色土 5層に類似するが、ニッ岳系軽石をやや多く含む。
- 8 黒褐色土 XI層土を主体とし、As-Cとニッ岳系軽石・XII層土ブロック・炭化物を少量含む。やや粘性あり。
- 9 暗褐色土 5層に類似するが、XII層土ブロックを多量に含む。
- 10 暗褐色土 5層に類似するが、XII層土ブロックを多く含む。やや粘性あり。

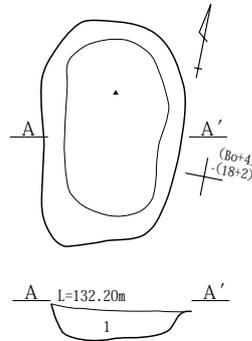
100号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 XI層土を主体とし、As-Cとニッ岳系軽石・XII層土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、XII層土ブロックを多く含む。

101号土坑 A-A'

- 3 暗褐色土 100号土坑1層に類似するが、As-Cをやや多く含む。
- 4 暗褐色土 100号土坑1層に類似するが、炭化物を少量含む。やや粘性あり。
- 5 暗褐色土 100号土坑2層に類似するが、さらにXII層土ブロックを多く含む。
- 6 暗褐色土 100号土坑2層に類似するが、XII層土ブロックを多量に含む。

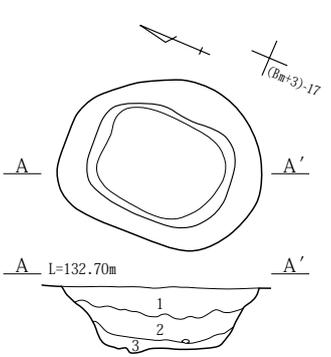
111号土坑



111号土坑 A-A'

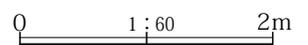
- 1 暗褐色土 XI層土を主体とし、XII層土ブロックをやや多く含む、ニッ岳系軽石をごく少量含む。

113号土坑

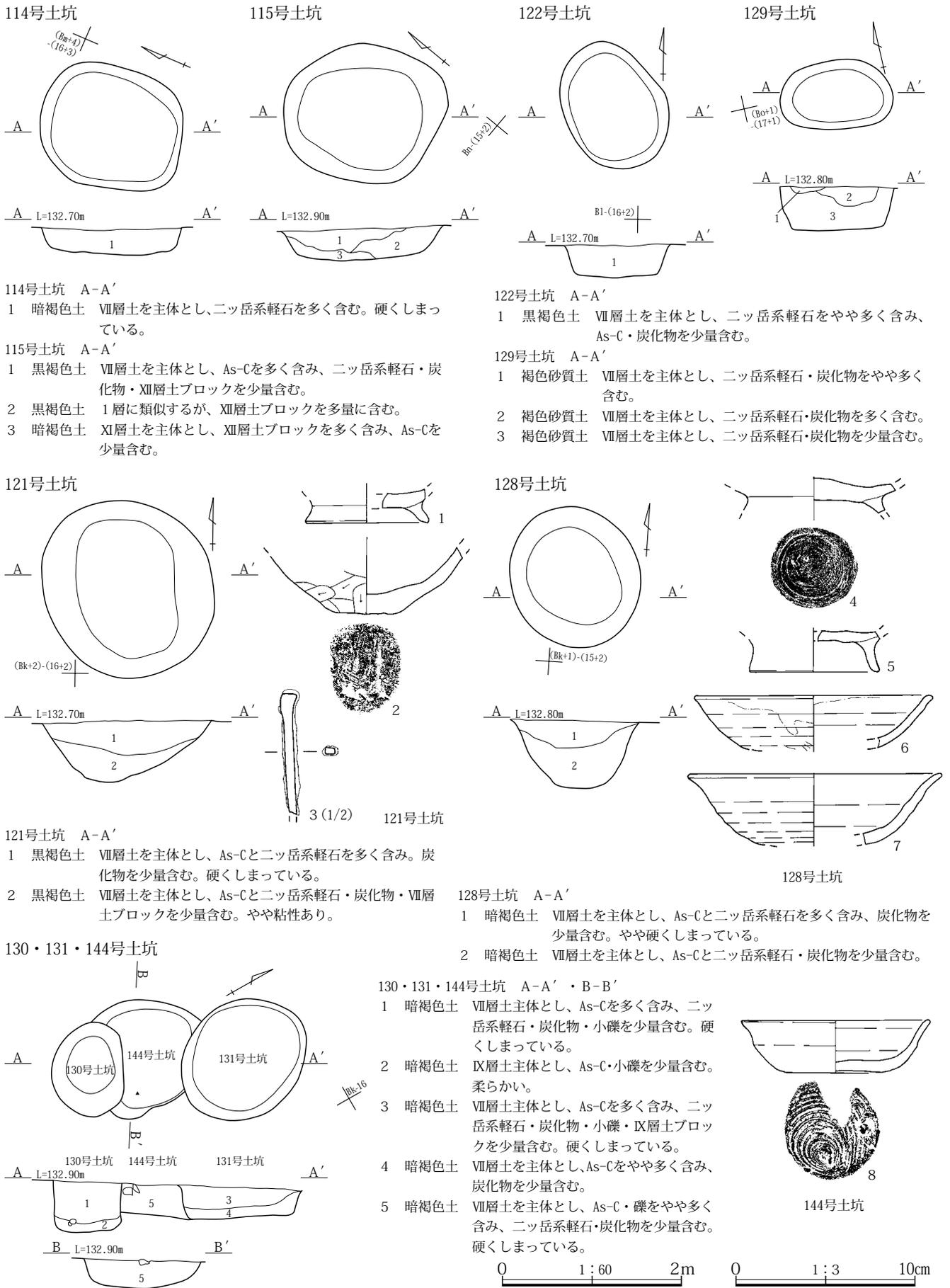


113号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 VII層土を主体で、ニッ岳系軽石を多く含む。
- 2 黒褐色土 VII層土を主体で、ニッ岳系軽石・炭化物・XII層土を少量含む。
- 3 暗褐色土 VII層土を主体で、炭化物を多く含む、XII層土ブロックを少量含む。やや粘性あり。



第762図 95・96・97・99・100・101・111・113号土坑・出土遺物



114号土坑 A-A'
 1 暗褐色土 VII層土を主体とし、ニッ岳系軽石を多く含む。硬くしまっている。

115号土坑 A-A'
 1 黒褐色土 VII層土を主体とし、As-Cを多く含み、ニッ岳系軽石・炭化物・XII層土ブロックを少量含む。
 2 黒褐色土 1層に類似するが、XII層土ブロックを多量に含む。
 3 暗褐色土 XI層土を主体とし、XII層土ブロックを多く含み、As-Cを少量含む。

122号土坑 A-A'
 1 黒褐色土 VII層土を主体とし、ニッ岳系軽石をやや多く含み、As-C・炭化物を少量含む。

129号土坑 A-A'
 1 褐色砂質土 VII層土を主体とし、ニッ岳系軽石・炭化物をやや多く含む。
 2 褐色砂質土 VII層土を主体とし、ニッ岳系軽石・炭化物を多く含む。
 3 褐色砂質土 VII層土を主体とし、ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。

121号土坑 A-A'
 1 黒褐色土 VII層土を主体とし、As-Cとニッ岳系軽石を多く含み。炭化物を少量含む。硬くしまっている。
 2 黒褐色土 VII層土を主体とし、As-Cとニッ岳系軽石・炭化物・VII層土ブロックを少量含む。やや粘性あり。

128号土坑 A-A'
 1 暗褐色土 VII層土を主体とし、As-Cとニッ岳系軽石を多く含み、炭化物を少量含む。やや硬くしまっている。
 2 暗褐色土 VII層土を主体とし、As-Cとニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。

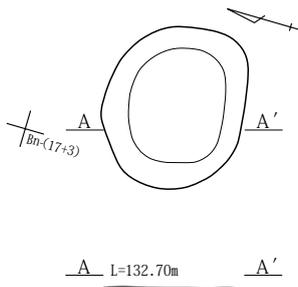
130・131・144号土坑 A-A'・B-B'
 1 暗褐色土 VII層土主体とし、As-Cを多く含み、ニッ岳系軽石・炭化物・小礫を少量含む。硬くしまっている。
 2 暗褐色土 IX層土主体とし、As-C・小礫を少量含む。柔らかい。
 3 暗褐色土 VII層土主体とし、As-Cを多く含み、ニッ岳系軽石・炭化物・小礫・IX層土ブロックを少量含む。硬くしまっている。
 4 暗褐色土 VII層土を主体とし、As-Cをやや多く含み、炭化物を少量含む。
 5 暗褐色土 VII層土を主体とし、As-C・礫をやや多く含み、ニッ岳系軽石・炭化物を少量含む。硬くしまっている。

128号土坑
 144号土坑

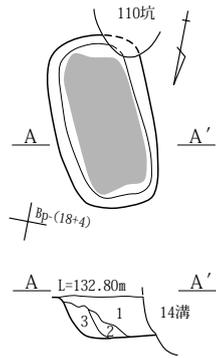
0 1:60 2m
 0 1:3 10cm

第763図 114・115・121・122・128～131・144号土坑・出土遺物

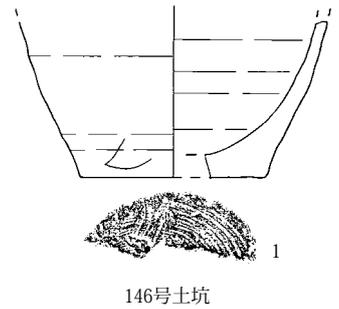
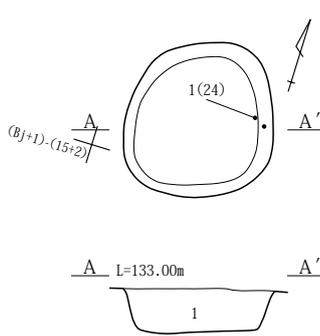
140号土坑



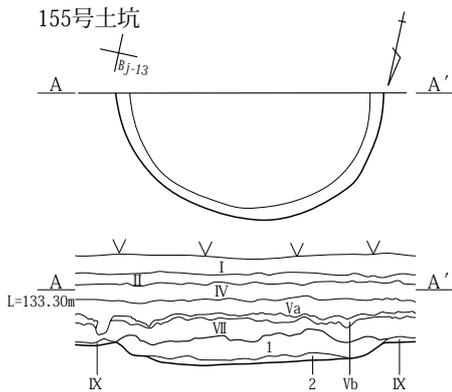
142号土坑



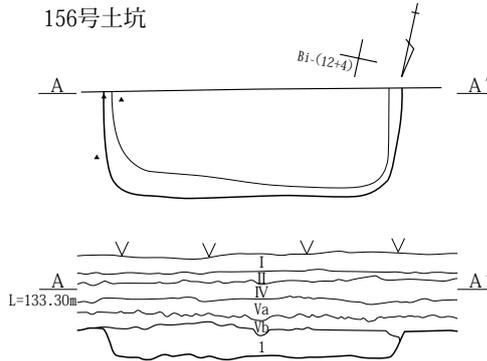
146号土坑



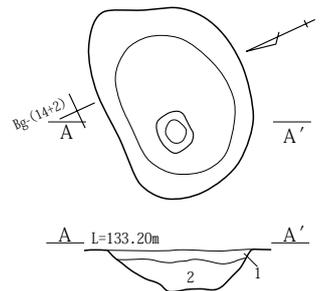
155号土坑



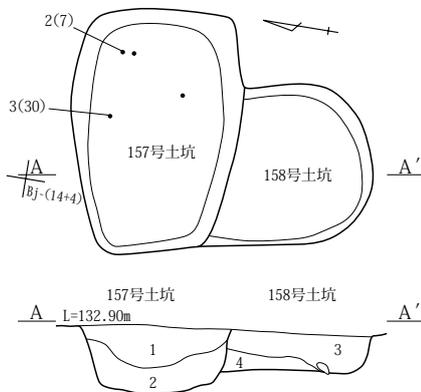
156号土坑



159号土坑



157・158号土坑



140号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 VII層土を主体とし、ニッ岳系軽石を多く含み、黒褐色土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 VII層土を主体とし、ニッ岳系軽石を多く含む。

142号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 VII層土を主体とし、ニッ岳系軽石をやや多く含み、As-C・炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 VII層土を主体とし、炭化物をやや多く含み、As-Cとニッ岳系軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土 VII層土を主体とし、ニッ岳系軽石をわずかに含む。柔らかい。

146号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、As-Cを多く含み、ニッ岳系軽石・褐色土ブロック・炭化物を少量含む。

155号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土粒を少量含む。

156号土坑 A-A'

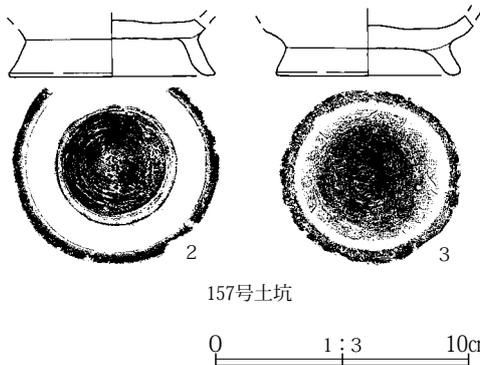
- 1 暗褐色土 IX層土とXII層土ブロックの混土。

157・158号土坑 A-A'

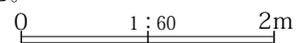
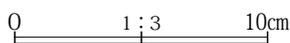
- 1 暗褐色土 VII層土主体で、As-Cを多く含み、ニッ岳系軽石・炭化物・褐色土ブロックを少量含む。硬くしまっている。
- 2 暗褐色土 VII層土主体で、As-C・褐色土ブロックをやや多く含み、ニッ岳系軽石を少量含む。やや粘性あり。
- 3 暗褐色土 VII層土主体で、As-Cとニッ岳系軽石・褐色土ブロックをやや多く含み、炭化物をわずかに含む。硬くしまっている。
- 4 暗褐色土 IX層土主体で、As-C・褐色土ブロックを多く含む。やや粘性あり。硬くしまっている。

159号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土小ブロックを少量含む。

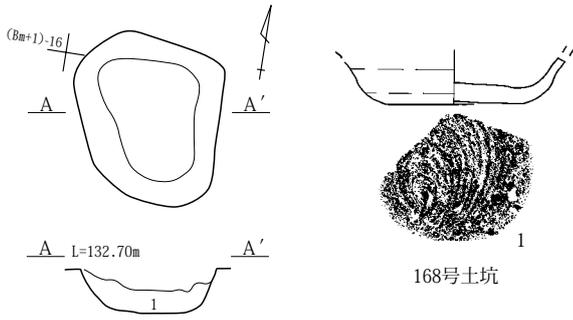


157号土坑

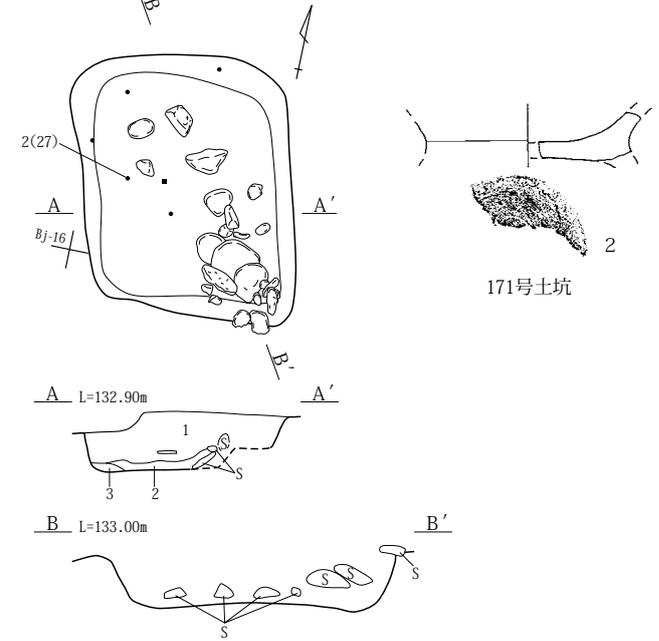


第764図 140・142・146・155～159号土坑・出土遺物

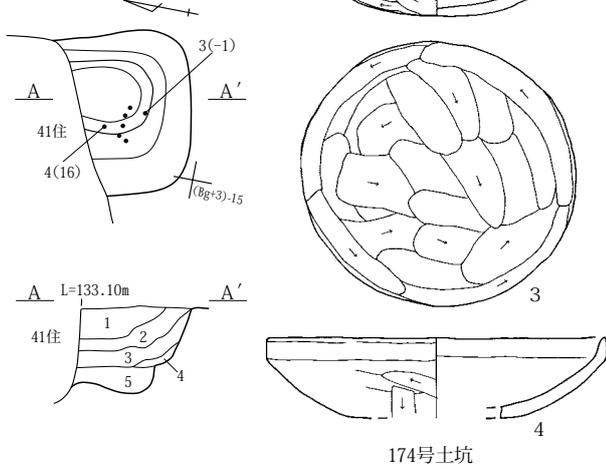
168号土坑



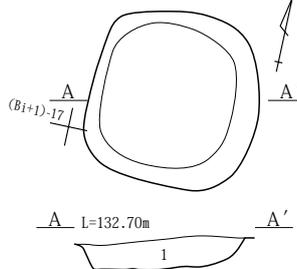
171号土坑



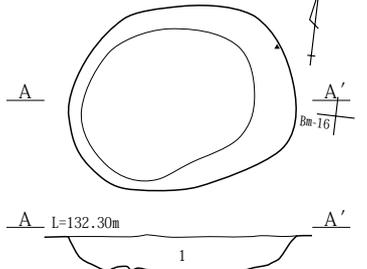
174号土坑



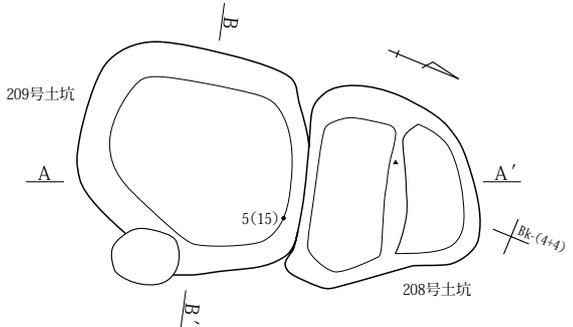
189号土坑



194号土坑



208・209号土坑



168号土坑 A-A'

1 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土ブロックをやや多く含む。

171号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、炭化物をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 VII層土主体で、炭化物・焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 VII層土とXII層土の混土。

174号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 VII層土主体。
- 2 黄褐色砂質土 XII層土主体で、As-C・VII層土を含む。
- 3 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土ブロックを含む。
- 4 黄褐色土 XII層土主体で、VII層土を少量含む。
- 5 暗褐色砂質土 XI層土主体で、炭化物を少量含む。

189号土坑 A-A'

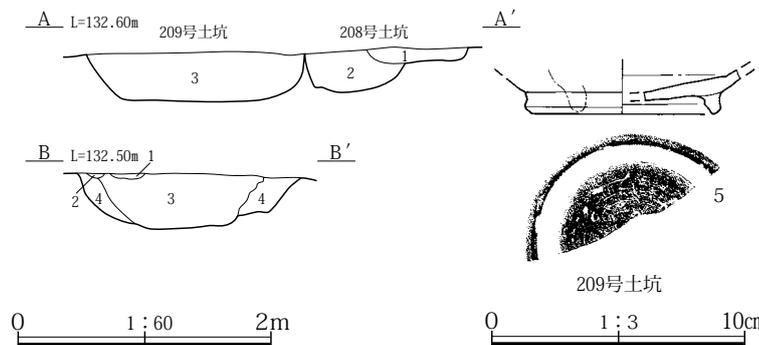
- 1 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土小ブロックを多く含み、炭化物・焼土粒をわずかに含む。

194号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土ブロック・炭化物を少量含む。

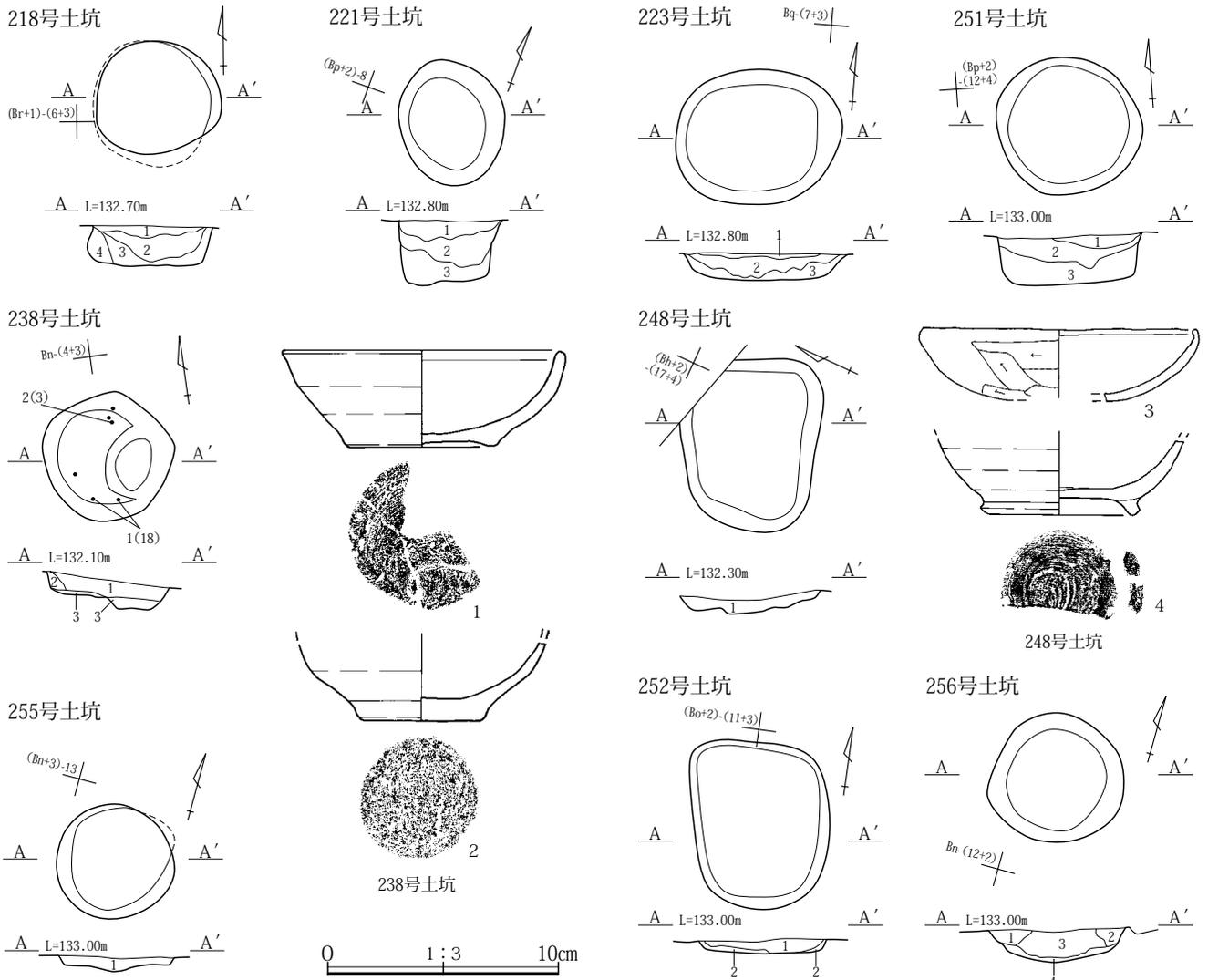
208・209号土坑 A-A'・B-B'

- 1 黒褐色土 As-A泥流とXII層土大粒の混土。
- 2 黄褐色土 XII層土主体で、XI層土粒を多く含む。
- 3 暗褐色土 XII層土小ブロックとXI層土ブロックの混土。
- 4 暗褐色土 XII層土主体で、黒褐色粒をわずかに含む。



第765図 168・171・174・189・194・208・209号土坑・出土遺物

第5章 2面の調査(中世~古墳時代後期)



218号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 Va層土主体で、As-Bを多く含む。ニッ岳系軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 XII層土主体で、黄褐色粒をわずかに含む。As-Cを少量含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、As-Cがより少ない。
- 4 暗褐色土 2層に類似するが、As-C粒をより多く含む。

221号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 Va層土主体で、As-B・ニッ岳系軽石を多く含む。As-Cもわずかに含む。
- 2 暗褐色土 VII層土。
- 3 暗褐色土 IX層土主体で、黄褐色粒、ブロックを多く含む。

223号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 Va層土主体で、As-B・ニッ岳系軽石を多く含む。As-Cもわずかに含む。
- 2 暗褐色土 VII層土。
- 3 暗褐色土 IX層土主体で、黄褐色粒、ブロックを多く含む。

238号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、炭化物を含む。しまり弱い。
- 2 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土ブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、炭化物を多く含む。粘性が強い。

248号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 IX層土とXII層土粒・小ブロックの混土。

251号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cとニッ岳系軽石を全体に均一に含み、酸化鉄を少量、XII層土を斑状に含む。
- 2 暗褐色土 暗褐色土とXII層土の混土。As-Cを少量、ニッ岳系軽石をわずかに含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、軽石をごくわずかに含む。

252号土坑 A-A'

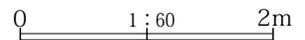
- 1 暗褐色土 XII層土の小ブロックを全体に含み、As-Cとニッ岳系軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土 暗褐色土とXII層土の混土。

255号土坑 A-A'

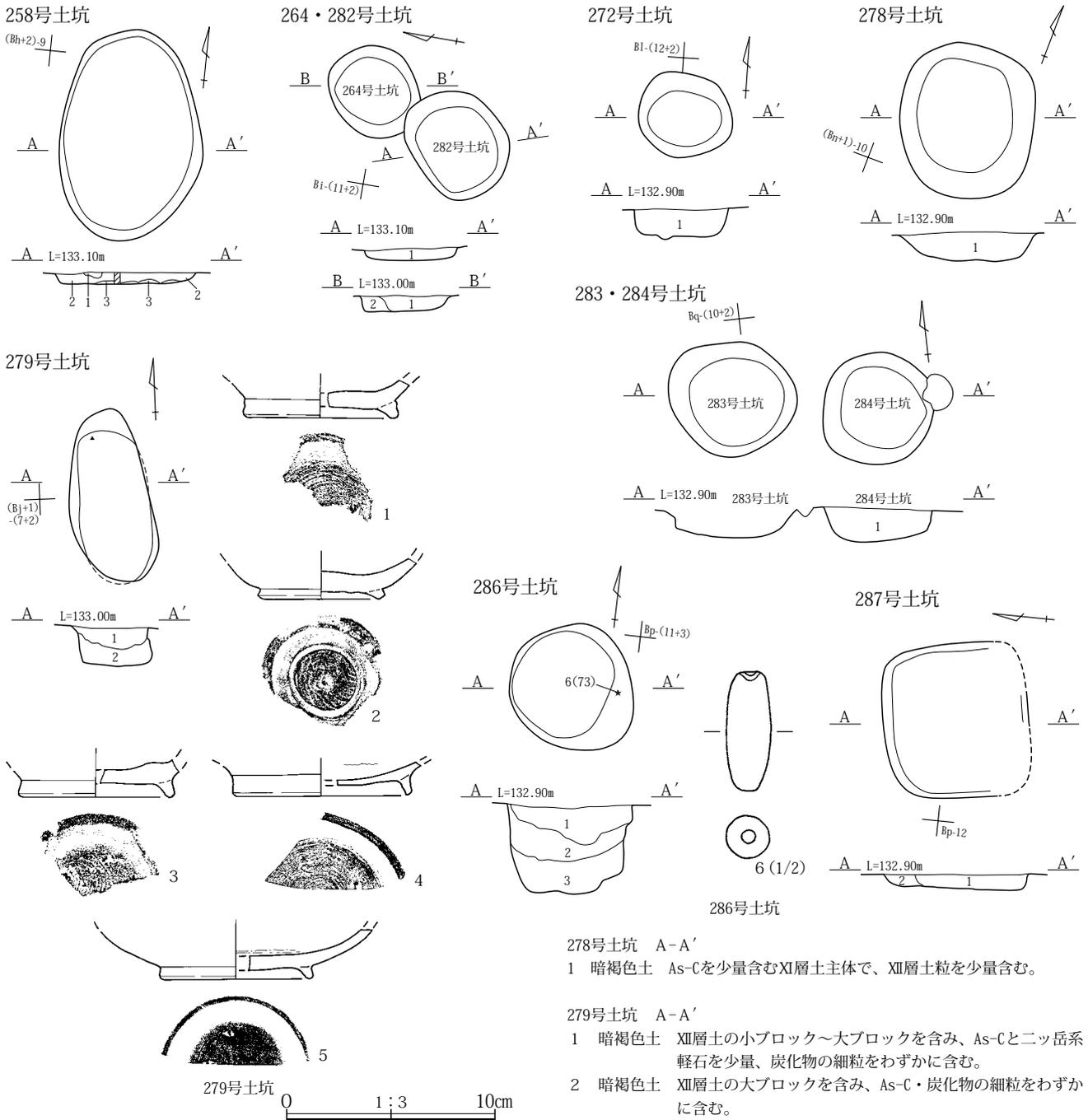
- 1 暗褐色土 XII層土の微粒を全体に含み、As-Cとニッ岳系軽石をごくわずかに含む。As-Bのブロックを上面に含む。

256号土坑 A-A'

- 1 褐色土 酸化鉄・As-Cを全体に含み、ニッ岳系軽石・マンガンの微粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 暗褐色土とXII層土の混土。マンガンの微粒を全体に含み、酸化鉄・As-Cをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを少量、XII層土の大ブロックをわずかに含み、ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 XII層土を斑状に含み、As-Cとニッ岳系軽石をごくわずかに含む。



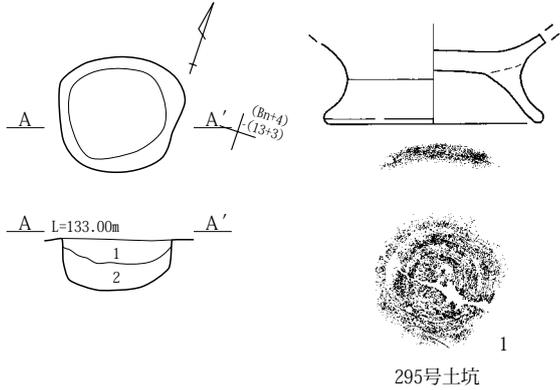
第766図 218・221・223・238・248・251・252・255・256号土坑・出土遺物



- 258号土坑 A-A'
- 1 灰褐色土 シルト質で、Ⅻ層土の大ブロック・酸化鉄を全体に含み、炭化物の微粒・Ⅻ層土の小粒をわずかに含む。
 - 2 黒褐色 シルト質で、As-C・炭化物の微粒・小粒を少量含む。
 - 3 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、黒褐色シルトを少量含む。
- 264号土坑 B-B'
- 1 暗褐色土 As-Cを全体に均一に、Ⅻ層土の小ブロックを少量含み、ニッ岳系軽石をわずかに含む。部分的に大ブロックを含む。
- 282号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 Ⅻ層土の小ブロックを全体に含み、As-Cとニッ岳系軽石を少量、炭化物の細粒をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 Ⅻ層土の小ブロックを部分的に含み、As-Cを少量、炭化物の微粒をごくわずかに含む。
- 272号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 As-Cとニッ岳系軽石を含む。ややしまりあり。
- 278号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含むⅫ層土主体で、Ⅻ層土粒を少量含む。
- 279号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 Ⅻ層土の小ブロック～大ブロックを含み、As-Cとニッ岳系軽石を少量、炭化物の細粒をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 Ⅻ層土の大ブロックを含み、As-C・炭化物の細粒をわずかに含む。
- 284号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 As-Cとニッ岳系軽石を含む暗褐色土主体で、Ⅻ層土の小ブロックを少量含む。
- 286号土坑 A-A'
- 1 黄褐色土 As-Cを少量含むⅫ層土とⅫ層土の混土。しまりあり。
 - 2 黄褐色土 Ⅻ層土に類似するが、Ⅻ層土の含有量が多い。
 - 3 黄褐色土 As-Cを斑状に含むⅫ層土。しまりなし。
- 287号土坑 A-A'
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含むⅫ層土主体で、Ⅻ層土ブロックをわずかに含む。
 - 2 黄褐色土 As-Cをわずかに含む黄褐色土主体で、Ⅻ層土を少量含む。

第767図 258・264・272・278・279・282・283・284・286・287号土坑・出土遺物

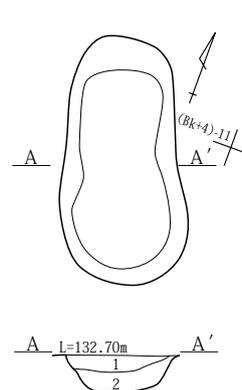
295号土坑



295号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 XII層土の小ブロックを含み、As-Cを少量含む。
- 2 暗褐色土 XII層土の大ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含む。

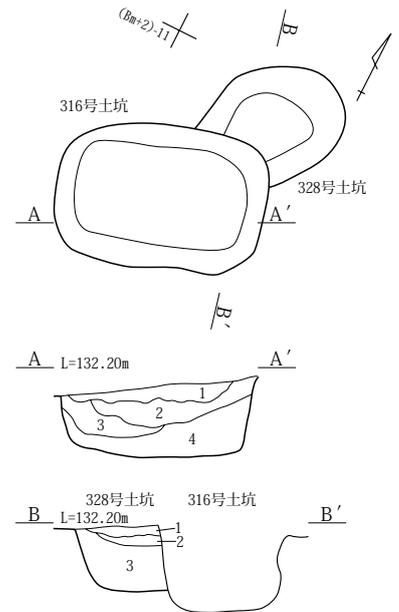
305号土坑



305号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土主体で、炭化物粒を含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物・黒色灰を多量に含む。

316・328号土坑



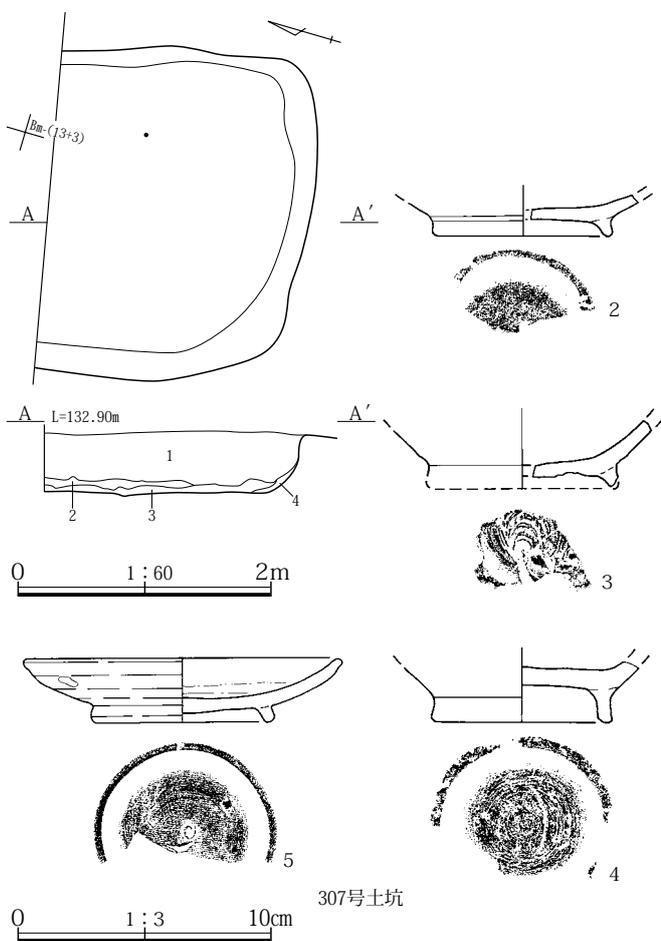
316号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-C細粒を少量含むXI層土。
- 2 暗褐色土 As-C細粒を少量含むXI層土主体で、XII層土ブロックと粒子を多く含む。
- 3 黄褐色土 XII層土主体で、XI層土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 XII層土ブロックと暗褐色ブロックの混土。

328号土坑 B-B'

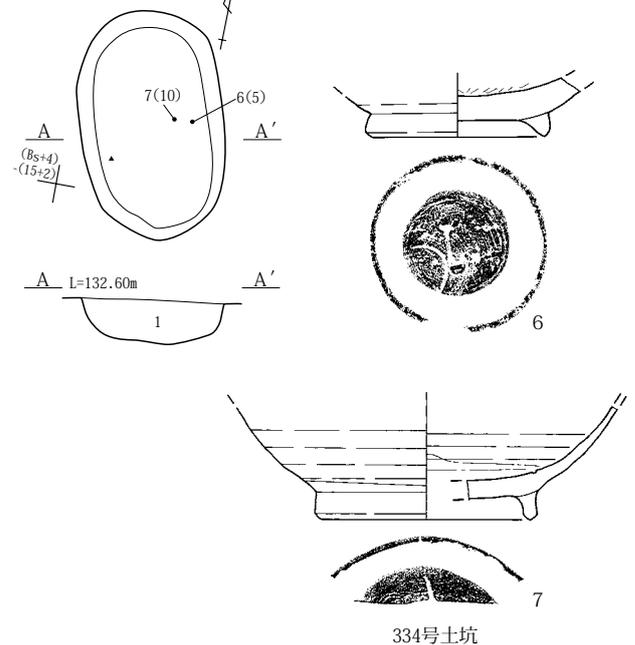
- 1 暗褐色土 As-Cをごくわずかに含む、XII層土の小ブロックを斑状に含む。しまりやや弱い。
- 2 黒褐色土 As-C・XII層土の小ブロックをわずかに含む。粘性ややあり。
- 3 暗褐色土 1層に類似するが、As-Cを多く含む。やや粘性あり。

307号土坑



307号土坑

334号土坑



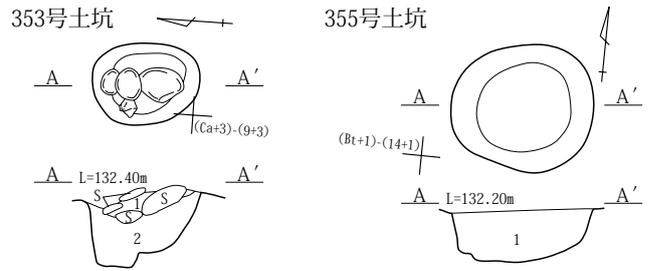
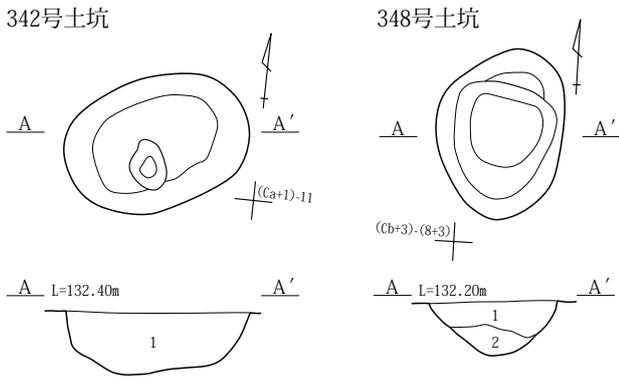
307号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く、ニッ岳系軽石を少量含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土 IX層土主体。
- 3 暗褐色土 XI層土・As-Cをわずかに含む。しまりあり。
- 4 暗褐色土 XI層土・As-Cの密度が高い。

334号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 Hr-FPに伴う泥流と砂質土の混土。

第768図 295・305・307・316・328・334号土坑・出土遺物

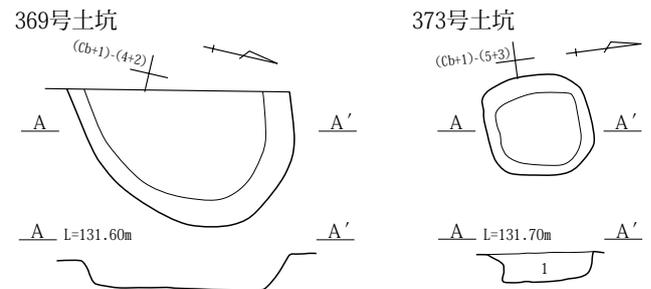
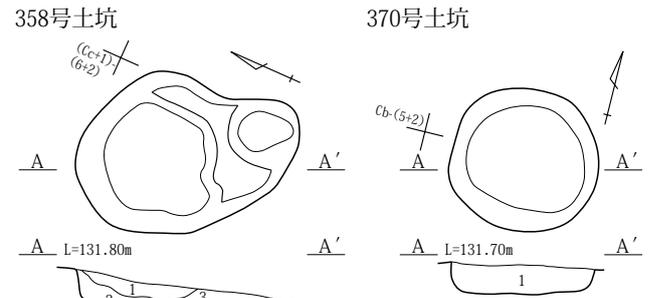


342号土坑 A-A'
1 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、Ⅻ層土ブロックを多量に含む。

348号土坑 A-A'
1 暗褐色土 As-Cと二ツ岳系軽石を含む暗褐色粘質土。
2 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土。

353号土坑 A-A'
1 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、As-Cを多く含む暗褐色土ブロックを含む。
2 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土～茶褐色土主体で、Ⅻ層土ブロックを含む。

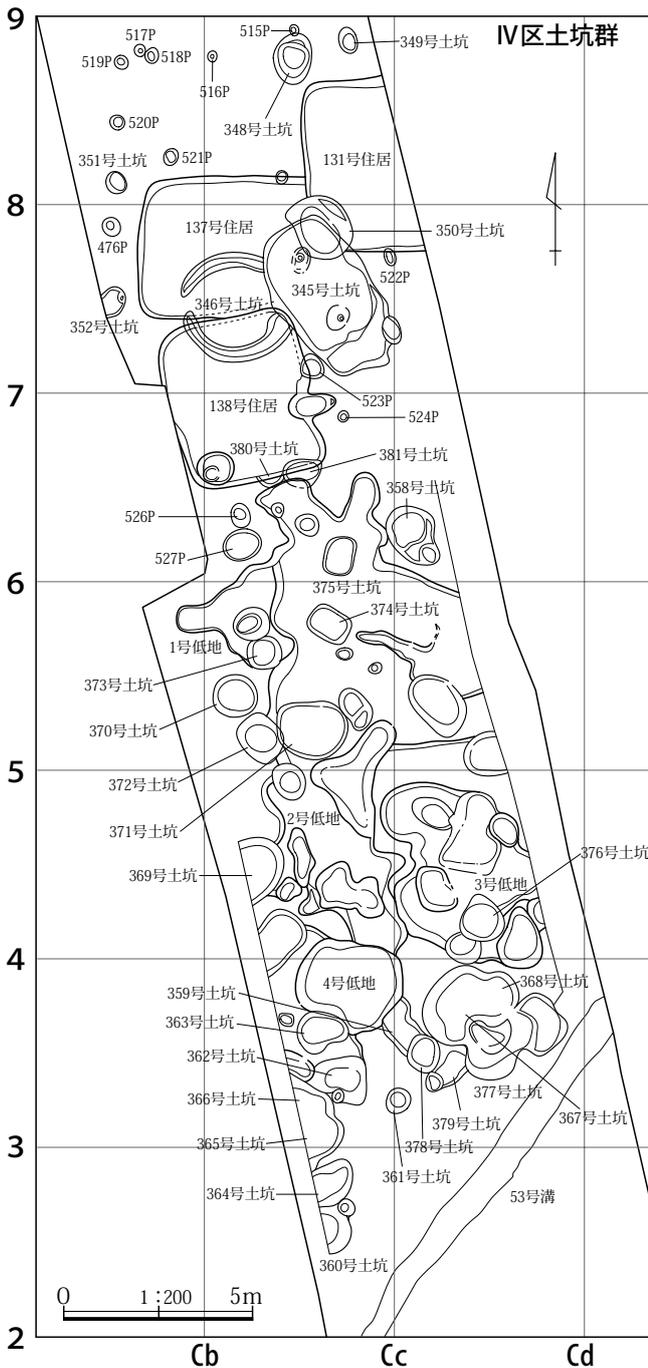
355号土坑 A-A'
1 暗褐色土 やや濁ったHr-FPに伴う泥流主体。炭化物をわずかに含む。しまりなし。



358号土坑 A-A'
1 暗褐色土 As-Cを多く、二ツ岳系軽石を少量含む。
2 暗褐色土 As-Cを多く、二ツ岳系軽石を少量含む主体で、Ⅻ層土ブロックを含む。
3 暗褐色土 2層に類似するが、As-Cの含有量が少なく、地山ブロックが多い。

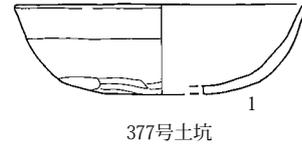
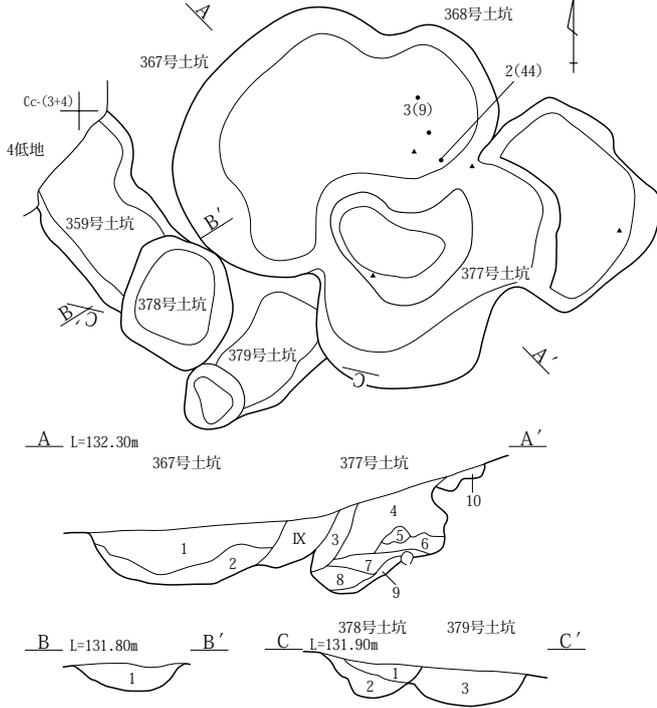
370号土坑 A-A'
1 暗褐色土 As-Cを少量含むⅫ層土主体。

373号土坑 A-A'
1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ツ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土主体で、炭化物を少量含む。



第769図 342・348・353・355・358・369・370・373号土坑・IV区土坑群

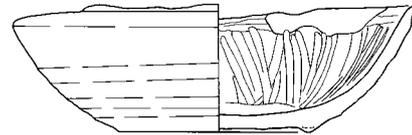
359・367・368・377・378・379号土坑



377号土坑

367・377号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く、二ッ岳系軽石を少量含む。しまり弱い。
- 2 暗褐色土 やや淡色のAs-CとⅫ層土ブロックの混土。
- 3 暗褐色土 As-Cを多く含む暗褐色土主体で、二ッ岳系軽石・Ⅻ層土粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 As-Cを多量に含み、Ⅺ層土ブロックをわずかに含む。
- 5 As-C
- 6 暗褐色土 Ⅺ層土(地山土)主体で、As-Cをわずかに含む。
- 7 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、Ⅻ層土小ブロックを多く含む。
- 8 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土主体で、Ⅻ層土粒を含む。
- 9 暗褐色土 Ⅻ層土ブロックとⅪ層土ブロックの混土。
- 10 暗褐色土 As-Cをわずかに含む粘質土。



359号土坑 B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石を多量に含む暗褐色土。しまり強い。

378・379号土坑 C-C'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く、二ッ岳系軽石をわずかに含む。硬くしまっている。
- 2 暗褐色土 As-C・Ⅻ層土小ブロックを多く、二ッ岳系軽石をわずかに含む。粘性強い。
- 3 暗褐色土 As-Cと二ッ岳系軽石を比較的多く含み、地山ブロック粒を少量含む。



2

0 1:60 2m



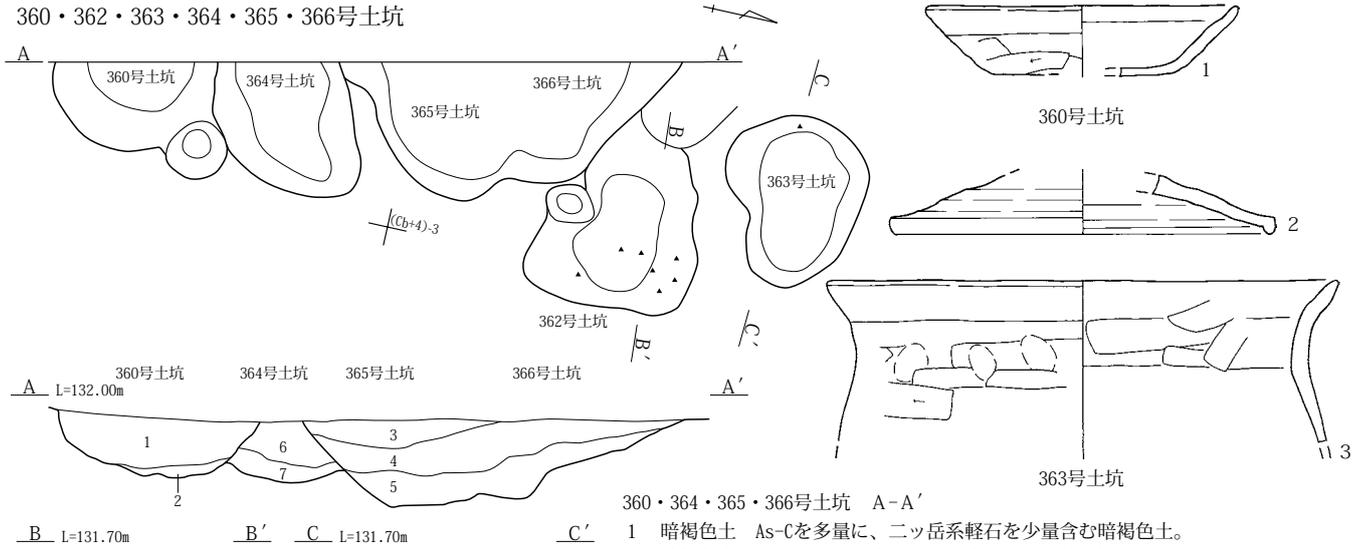
3

368号土坑

0 1:3 10cm

第770図 359・367・368・377・378・379号土坑・出土遺物

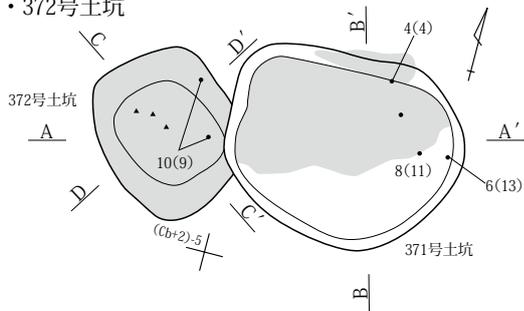
360・362・363・364・365・366号土坑



360・364・365・366号土坑 A-A'

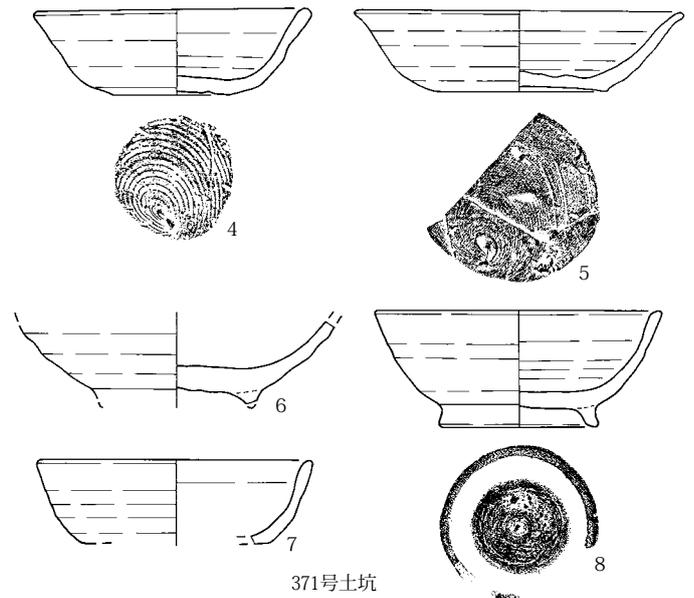
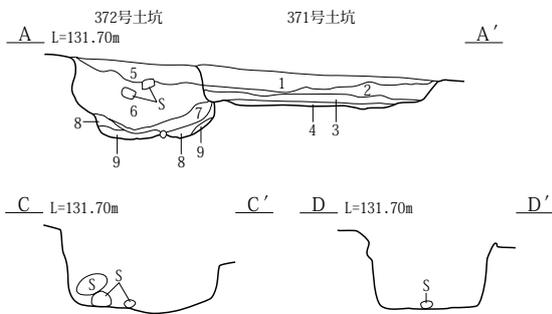
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、ニッ岳系軽石を少量含む暗褐色土。
- 2 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土とⅫ層土粒の混土。
- 3 暗褐色土 1層とⅫ層土ブロックの混土。
- 4 暗褐色土 1層主体で、炭化物をわずかに含む。
- 5 暗褐色土 1層とⅫ層土が縞状に入った層。
- 6 暗褐色土 As-Cとニッ岳系軽石を多量に含む。
- 7 暗褐色土 As-Cとニッ岳系軽石を少量含む層主体で、Ⅻ層土の小ブロックを少量含む。

371・372号土坑



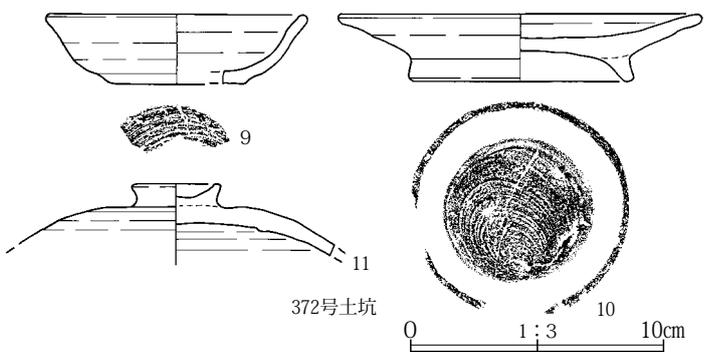
362号土坑 B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cとニッ岳系軽石を含む暗褐色土で、Ⅻ層土ブロックを少量含む。



371・372号土坑 A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、ニッ岳系軽石を少量含む暗褐色土主体で、炭化物と焼土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、炭化物(大)と焼土粒を多く含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・焼土ブロックを多量に含み、As-Cを含む。
- 4 暗褐色土 Ⅻ層土と黒色灰・焼土粒の混土。
- 5 暗褐色土 As-Cを多量に、ニッ岳系軽石をわずかに含む暗褐色土主体で、炭化物粒を少量含む。
- 6 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、黒色灰を多量に含み、炭化物を少量含む。
- 7 黒色土 黒色炭化物層で、やや大きめの炭化物あり。
- 8 黄色土 Ⅻ層土。炭化物と壁(焼土化)片を少量含む。
- 9 黒色土 黒色炭化物層。

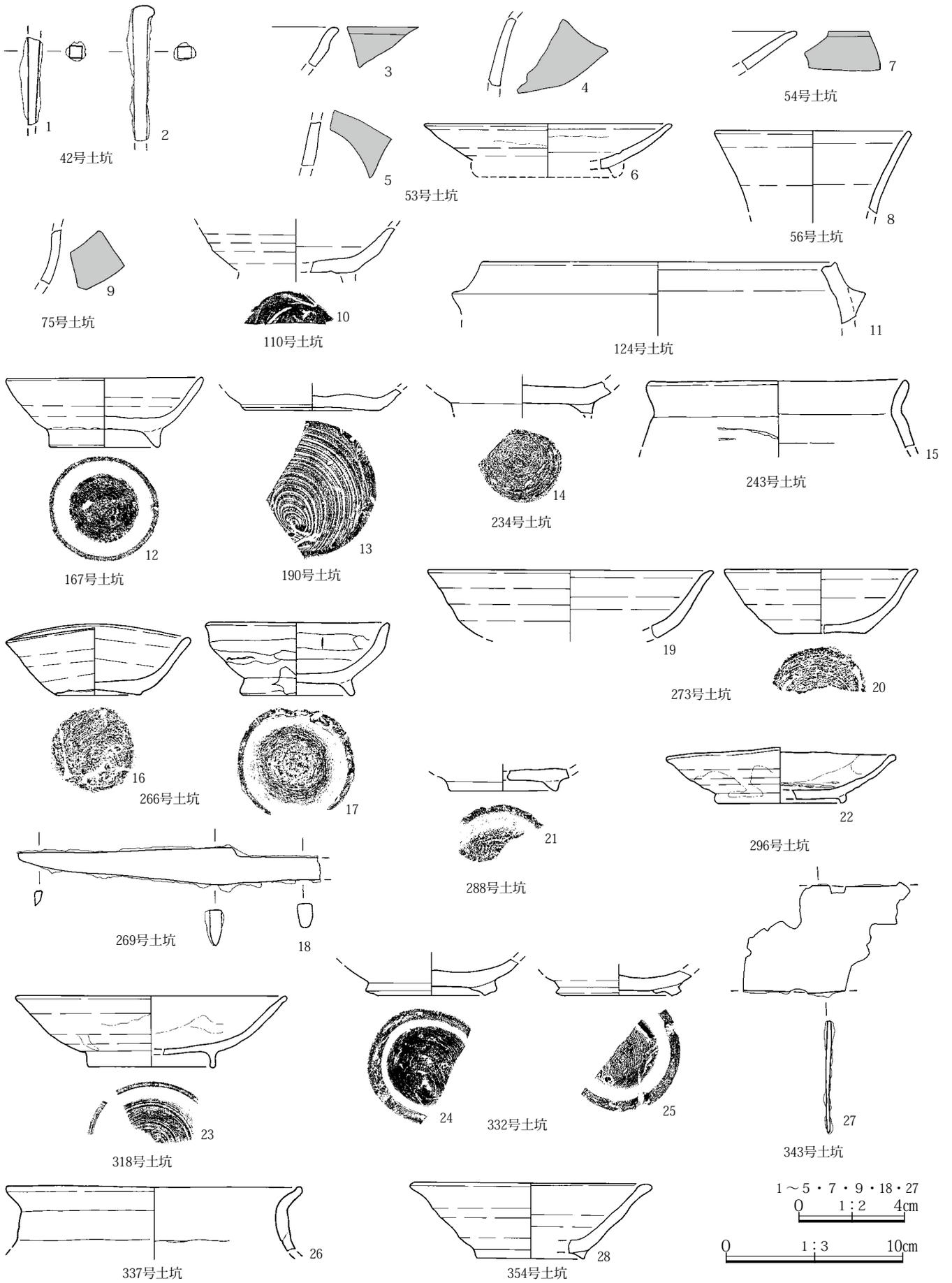


0 1:60 2m

0 1:3 10cm

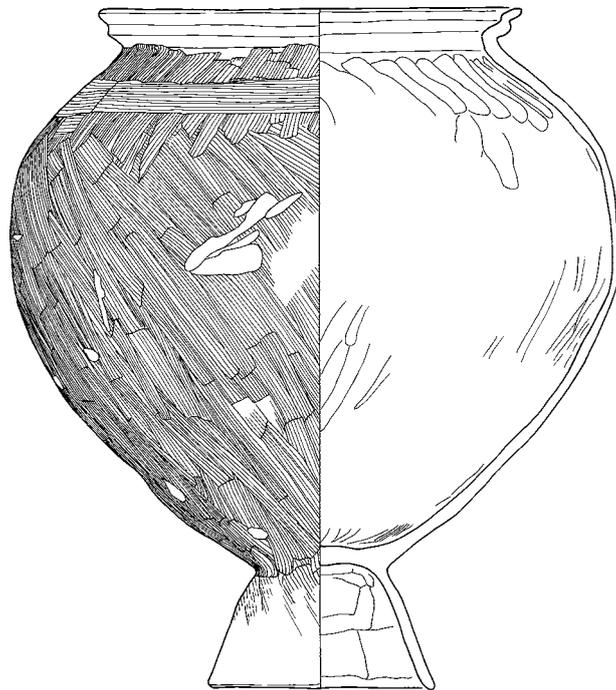
第771図 360・362～366・371・372号土坑・出土遺物

第5章 2面の調査(中世~古墳時代後期)



第772図 42・53・54・56・75・110・124・167・190・234・243・266・269・273・288・296・318・332・337・343・354号土坑出土遺物

第6章 3面の調査
(古墳時代中期～前期)





第773図 3面全体図

第6章 3面の調査 (古墳時代中期～前期)

第1節 第I期 (As-C降下以降)

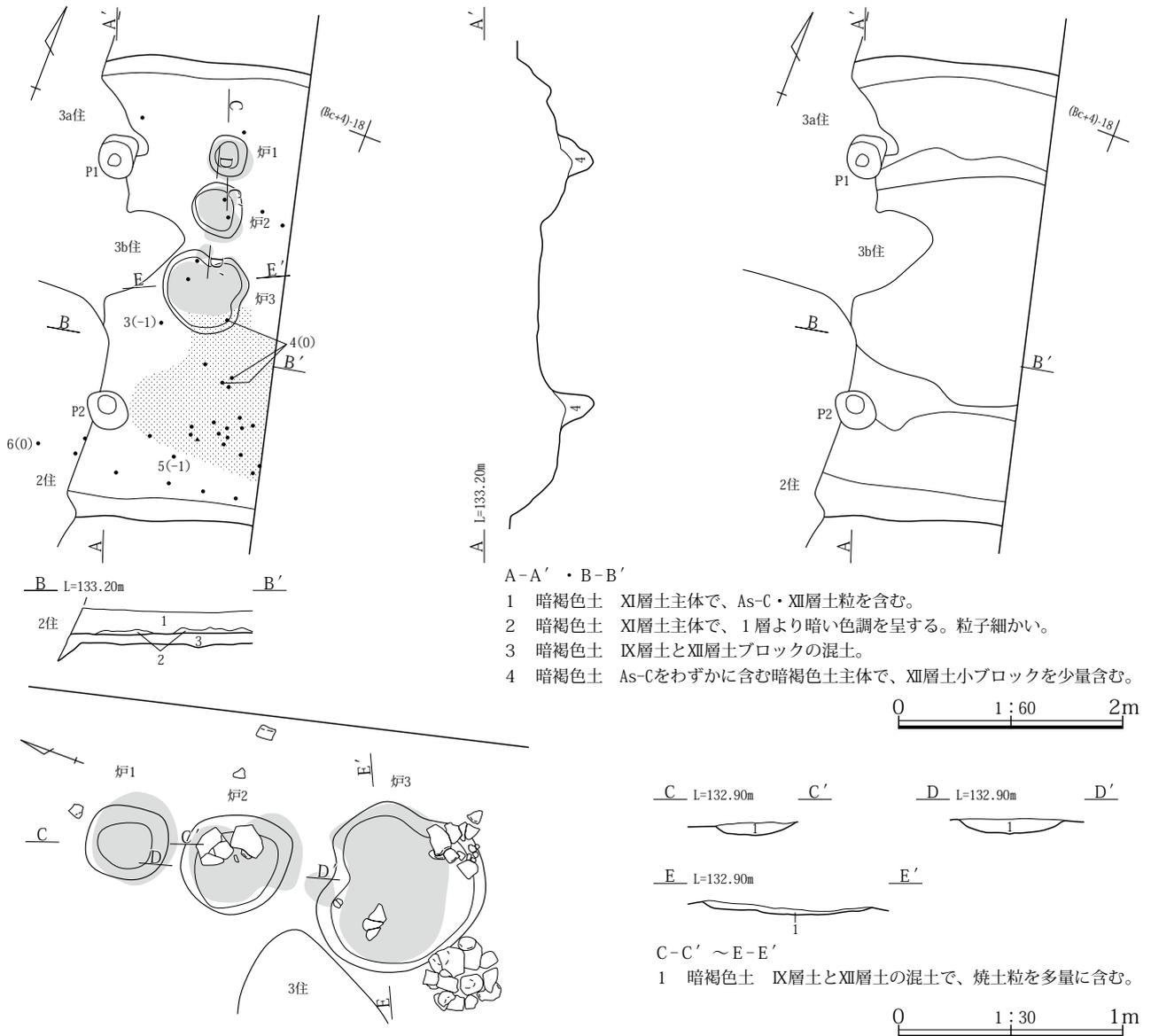
第1項 田口上田尻遺跡

(1) 竪穴住居

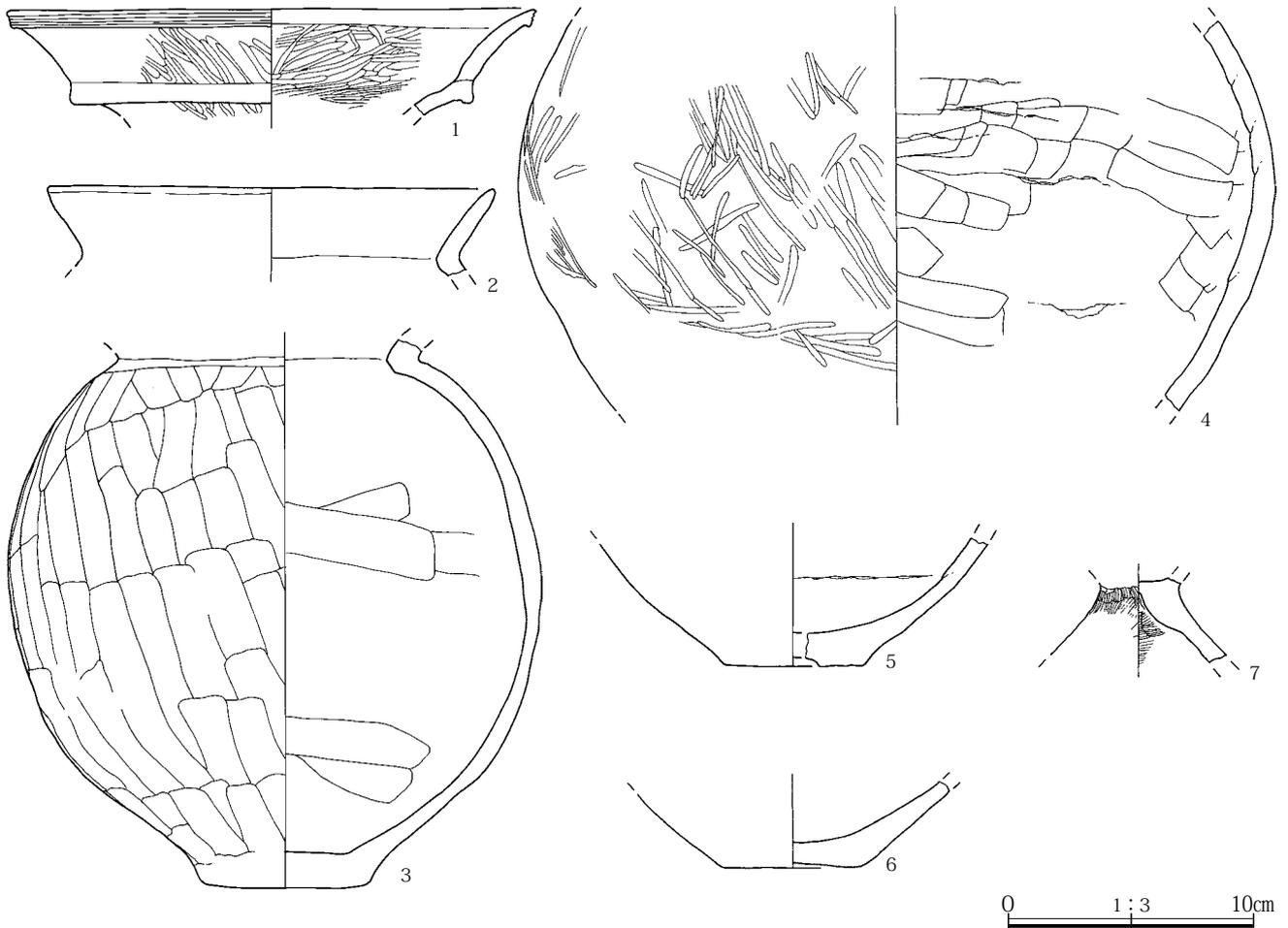
4号住居(第774・775図 P L.176・290)

位置：Bc-17・18グリッド 形状：不明 規模：4.12m × (1.83)m 残存深度：0.23m 主軸方位：N-17°-W 埋没土：As-Cをわずかに含むⅪ層土主体。柱穴：西寄りにP1(径0.30m、深さ0.45m、円形)、P2(径0.32

m、深さ0.49m、円形)の2カ所を検出した。P1-P2間は、2.20mほどの距離がある。東側の2カ所は市道下にあるものと考えられる。 炉：住居中央北寄りの位置に南北に並んで3カ所の焼土を検出。 遺物：炉の周辺から壺(3・4)が潰れたような状態で出土した他は、小片が全体に散在していた。 重複：2・3a・3b号住居と重複している。 所見：住居中央部のわずかの範囲だけが調査された。3号炉の南側に硬化した床面が検出された。掘り方は、ほぼ柱穴で囲まれた部分を除いて周辺が溝状に掘り下げられていた。 時期：4世紀前半



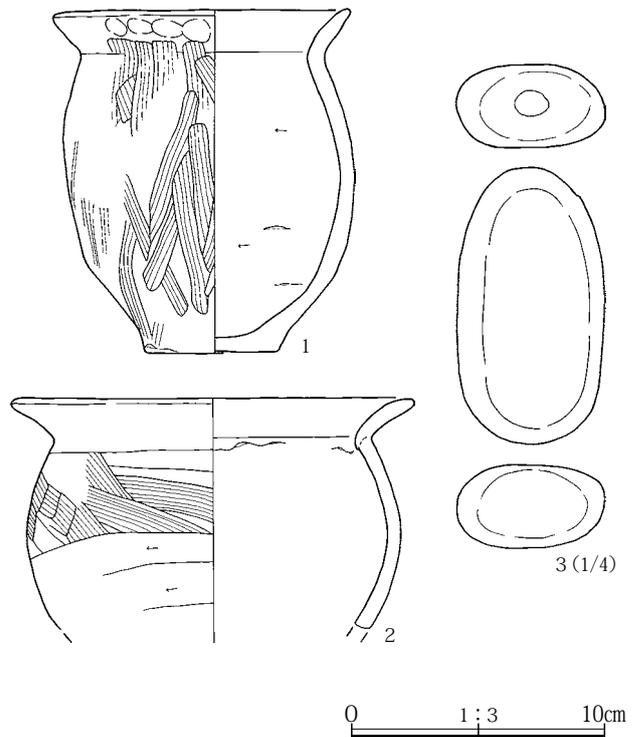
第774図 4号住居



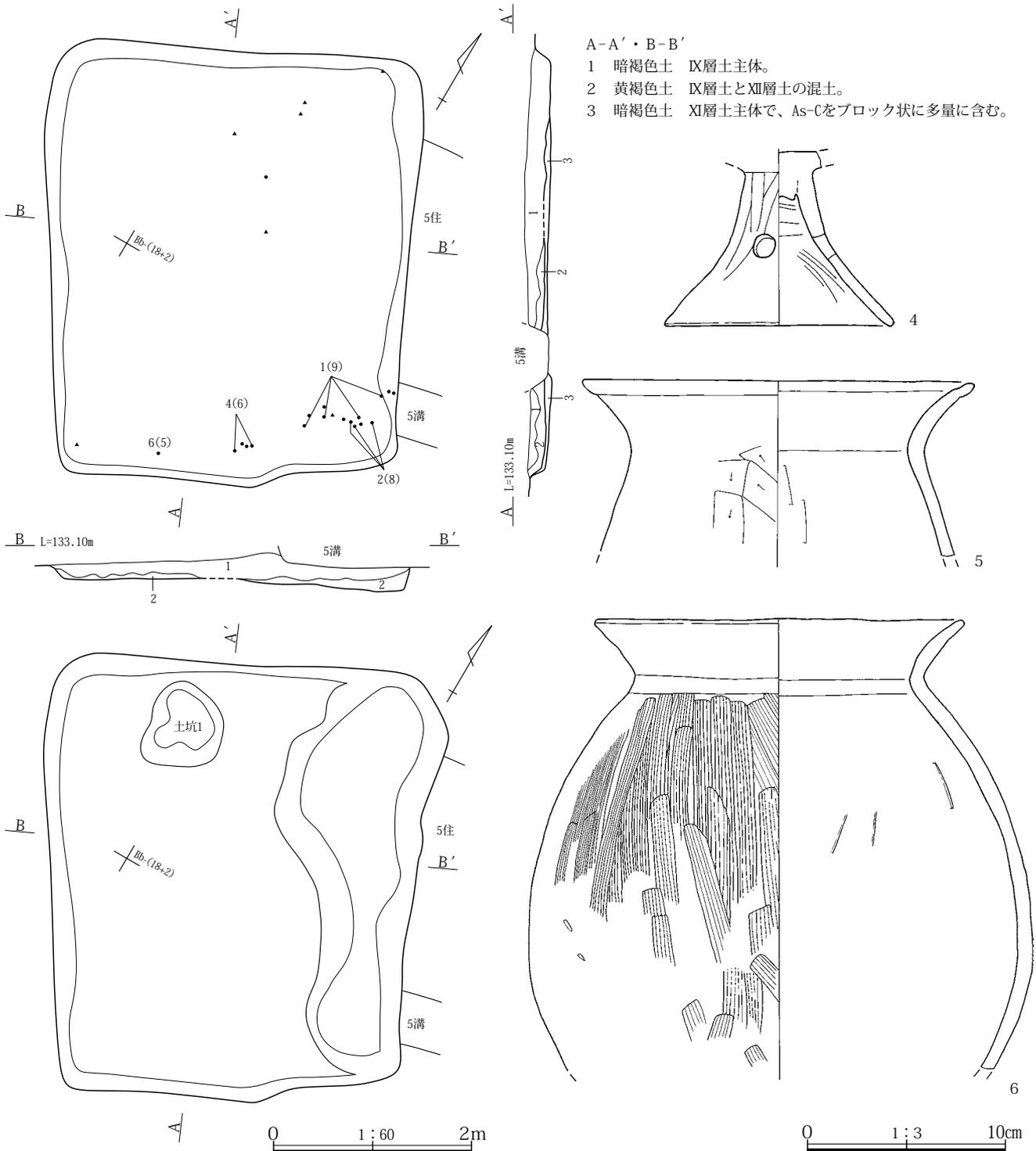
第775図 4号住居出土遺物

6号住居(第776・777図 P L.176・290)

位置: Ba・Bb-17・18グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 4.41m×3.63m 残存深度: 0.23m 主軸方位: N-28°-W 埋没土: IX層土主体 柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 南東コーナー部から甕(1・2)が、南壁際から高坏(4)と甕(6)が出土した。重複: 東側で5・7号住居と重複し、新旧関係は7号住居→6号住居→5号住居と考えられる。所見: 床面は平坦であるが硬化面はまったく確認されず、炉に当たるような焼土化した部分や炭化物の集中する部分も検出されていない。掘り方の調査で、東壁寄りの部分がわずかに掘り下げられていたことが判明した他、北壁に近い位置から不整形の土坑1(0.90×0.82m、深さ0.16m)を検出した。時期: 4世紀前半



第776図 6号住居出土遺物(1)



第777図 6号住居・出土遺物(2)

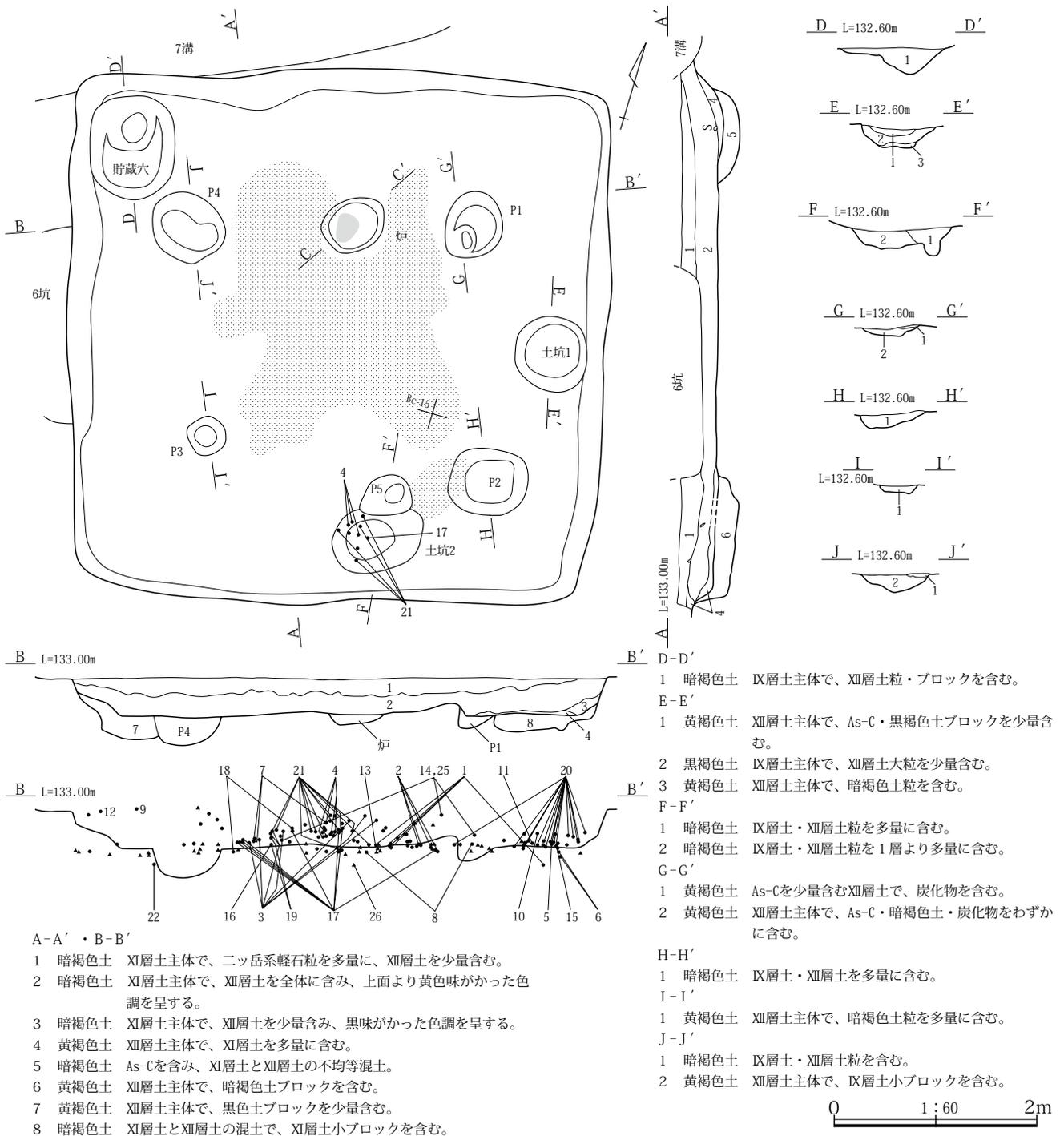
9号住居(第778～781図 P L.176・177・290・291)
位置: Bb・Bc-14・15グリッド **形状:** 隅丸方形 **規模:** 5.32m×5.33m **残存深度:** 0.35m **主軸方位:** N-14°-W **埋没土:** As-Cを含むXI層土主体。 **柱穴:** P 1(径0.54m、深さ0.23m、円形)、P 2(0.78×0.67m、深さ0.30m、楕円形)、P 3(径0.35m、深さ0.20m、円形)、P 4(0.76×0.63m、深さ0.24m 楕円形)の4カ所検出

した。柱穴間の距離は、P 1-P 2間2.60m、P 3-P 4間2.05m、P 2-P 3間2.80m、P 1-P 4間2.80mである。 **炉:** 北側の柱穴間に検出した。0.52×0.63mの楕円形の浅い掘り込みで、中央部が焼土化していた。 **遺物:** 床面付近から炭化材とともに多く出土したもので、北東コーナー部から甕(20)・鉢(5)、北壁中央部付近から埴(1・2)、南壁寄りの中央から鉢(4)・埴(3)・高

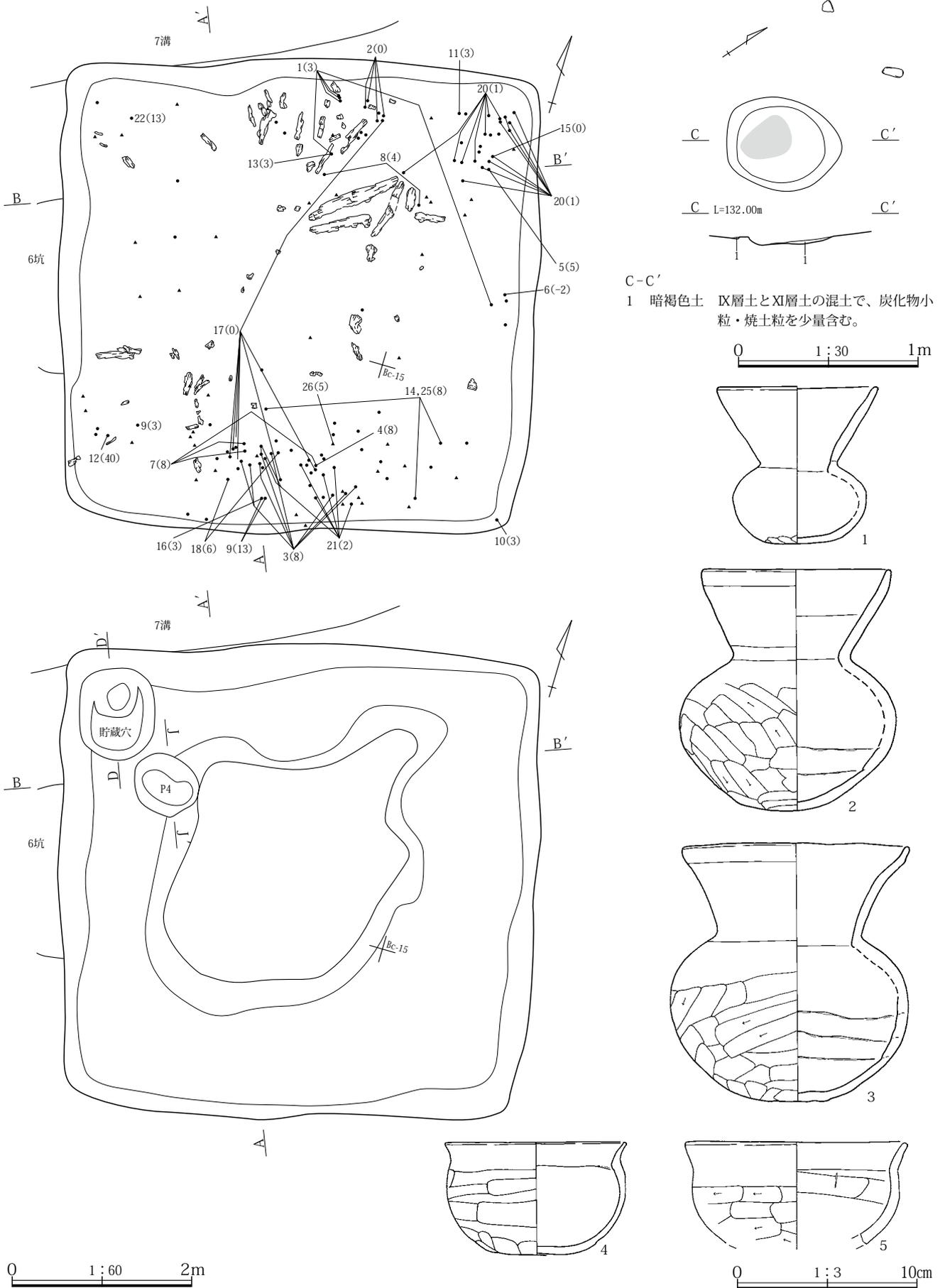
坏(7)・甕(21)などが集中していた。特筆されるのは石製紡錘車(27)が埋没土中から出土したことである。重複：10・21号住居と重複している。新旧関係は検出状況および覆土の状況から、10・21号住居→9号住居と考えられる。所見：他の住居と重複しているが、掘り込みが深く平面形などが完全に捉えられた遺構である。4カ所の柱穴を除き、床面精査では、北西コーナー部に1.03×0.84m、深さ0.26mの楕円形を呈する貯蔵穴を検出した他、東壁中央に接して土坑1(径0.70m、深さ0.29m、

円形)、南壁際で土坑2(0.93×0.65m、深さ0.24m、楕円形)、土坑2に接してP5(0.52×0.39m、深さ0.40m、不整楕円形)を検出した。床面は平坦で柱穴で囲まれた内部に硬化した面を検出した。覆土中に焼土や炭化物の含有が顕著な傾向は見られないが、床面近くから炭化材が検出されていることから焼失したものと見られる。掘り方は、中央部を除き周辺が浅く掘り窪められていた。

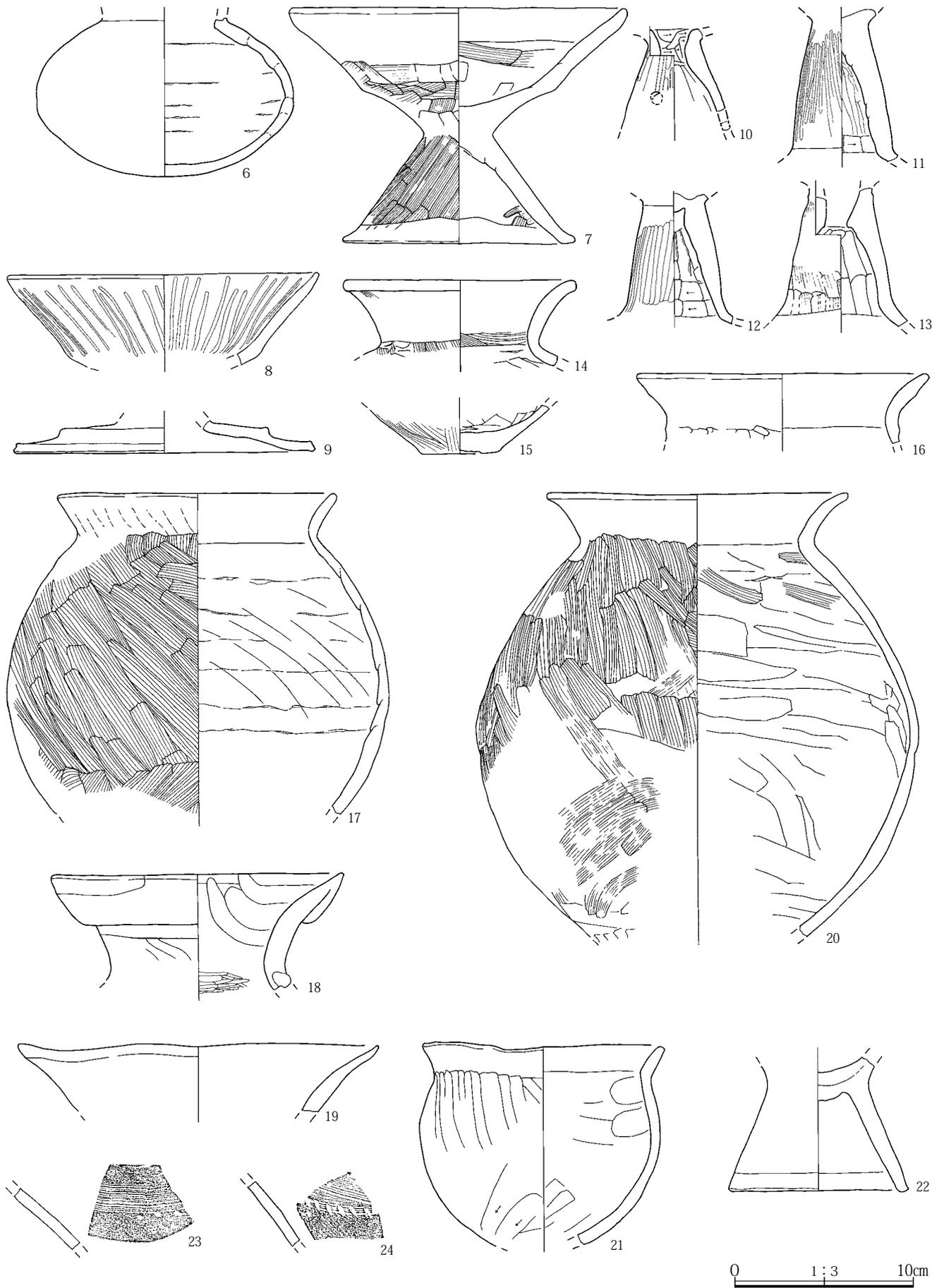
時期：5世紀前半



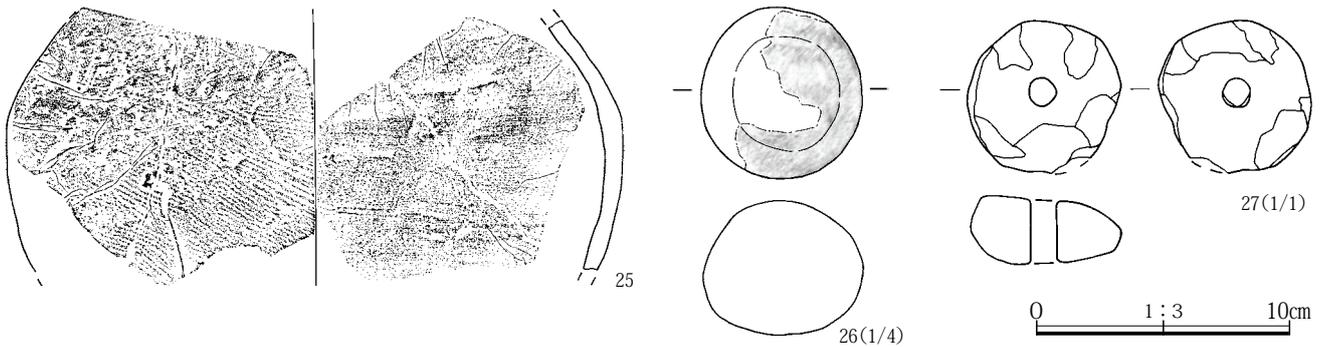
第1節 第I期 (As-C 降下以降)



第779図 9号住居遺物出土状況・掘り方・炉・出土遺物(1)



第780図 9号住居出土遺物(2)

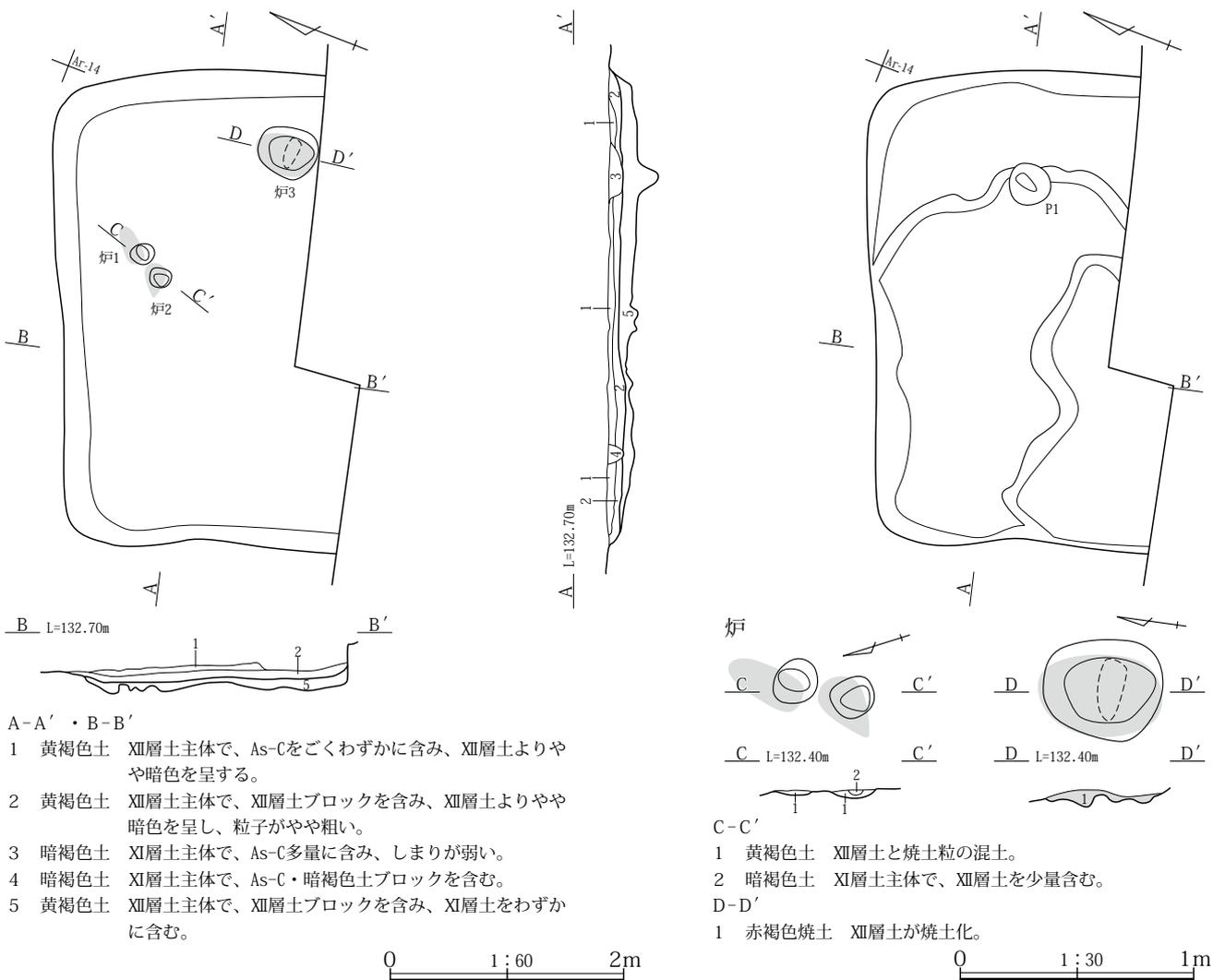


第781図 9号住居出土遺物(3)

12号住居(第782図 P L.177・178)

位置:Aq・Ar-13グリッド 形状:隅丸方形? 規模:4.12m×(2.51)m 残存深度:0.12m 主軸方位:E-23°-N 埋没土:As-Cをわずかに含むXII層土主体。柱穴:なし 炉:中央北壁寄りに2カ所、東壁際に1カ所検出した。いずれも床面が焼土化した状態である。遺物:小片をわずかに出土した。重複:なし 所見:調査区

境に位置していたため二次の調査を行ったが、南側調査区(VI区)においては認識することができなかった。II区でも遺構確認をVIII層中で行ったことから、遺構の残存はごくわずかとなっている。掘り方は全体に及んでいたものと考えられ、東寄りにP1(径0.35m、深さ0.25m、円形)を検出した他に、柱穴・貯蔵穴などは検出されなかった。時期:古墳前期



- A-A'・B-B'
- 1 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cをごくわずかに含み、XII層土よりやや暗色を呈する。
 - 2 黄褐色土 XII層土主体で、XII層土ブロックを含み、XII層土よりやや暗色を呈し、粒子がやや粗い。
 - 3 暗褐色土 XI層土主体で、As-C多量に含み、しまりが弱い。
 - 4 暗褐色土 XI層土主体で、As-C・暗褐色土ブロックを含む。
 - 5 黄褐色土 XII層土主体で、XII層土ブロックを含み、XI層土をわずかに含む。

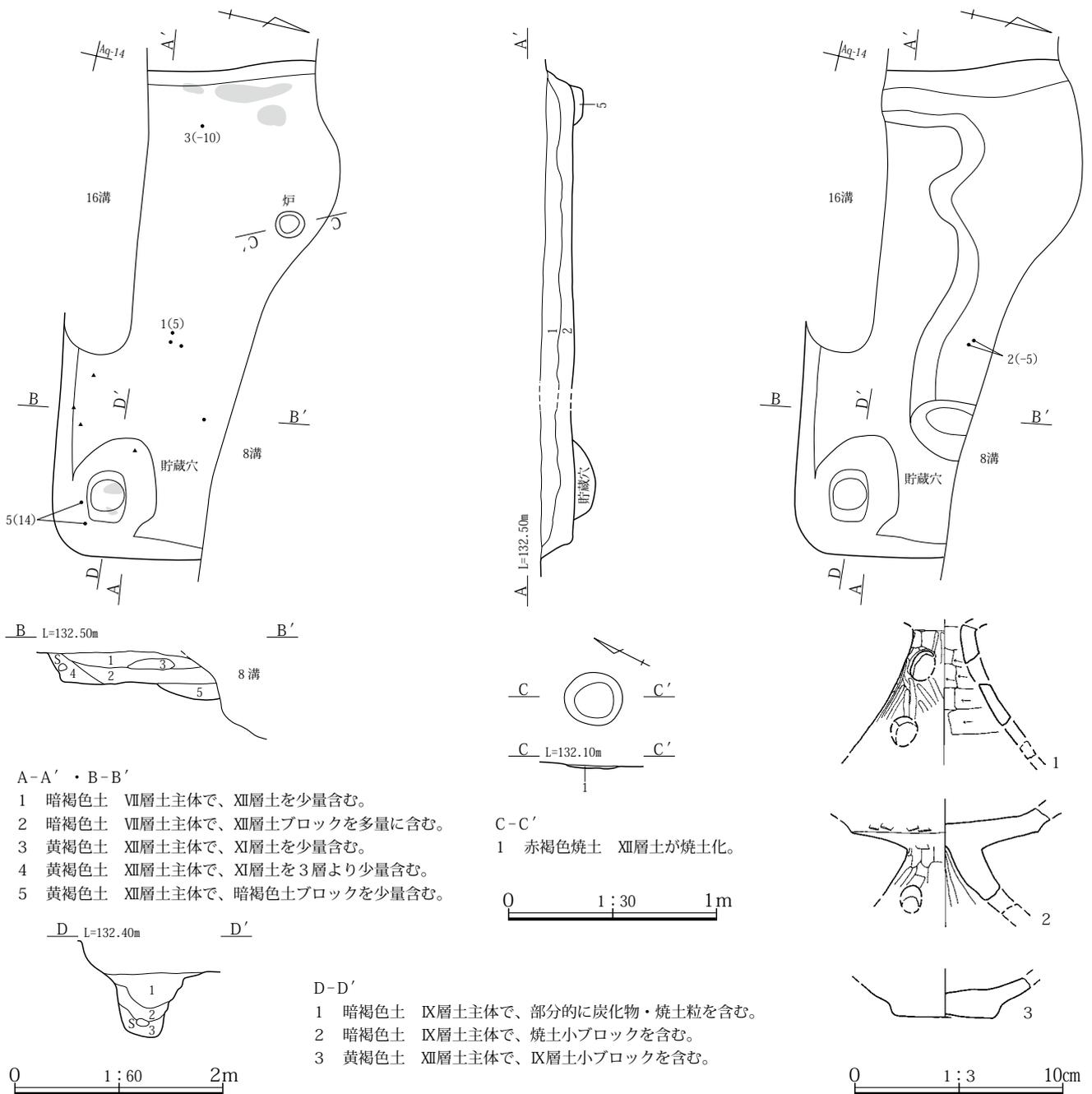
- 炉
- 1 黄褐色土 XII層土と焼土粒の混土。
 - 2 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土を少量含む。
- D-D'
- 1 赤褐色焼土 XII層土が焼土化。

第782図 12号住居

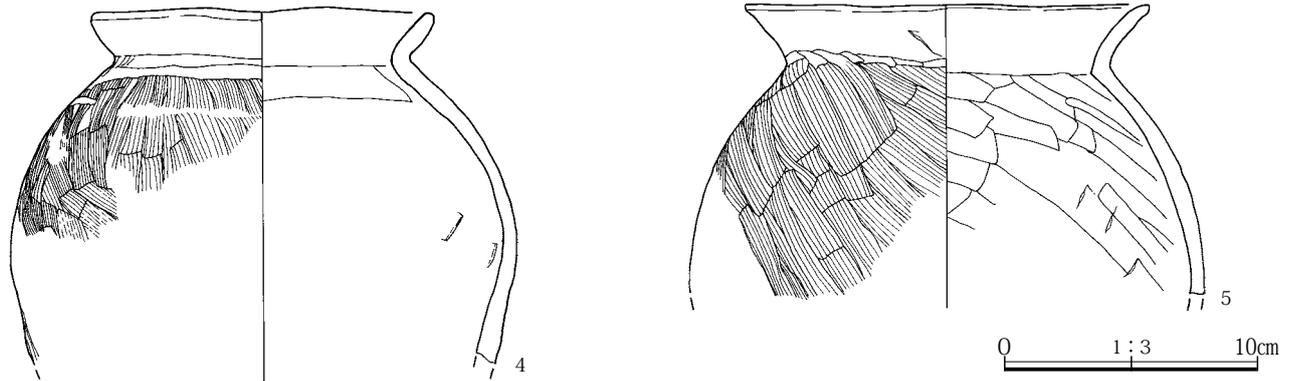
13号住居(第783・784図 P L.178・291)

位置: Ap・Aq-14グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: 4.72m×(2.55)m 残存深度: 0.32m 主軸方位: E-10°-N 埋没土: As-Cを含むⅫ層土主体。柱穴: 未検出 炉: 中央西寄りに1カ所検出した。ピット状に示した部分が1cmほどの厚さで焼土化しており、床面を炉面としていたことがわかった。遺物: 南東コーナー部の貯蔵穴から甕(5)、中央部から器台(1)が、掘り方の調査で中央部から高环(2)が出土した。重複: 北半が1面8号溝によって壊され、南西コーナー部も1面16号

溝との重複で失われている。 所見: Ⅷ層土中での確認のため残存状況は不良である。床面は平坦であるが土質によるものか全体に脆弱であった。床面中央の西壁際に検出した焼土部分についても炉であった可能性がある。また、南東コーナー部に0.49×0.38m、深さ0.63mほどの方形を呈する貯蔵穴を検出したが、上層から中層にかけて焼土粒と炭化物粒を含んでいた。掘り方は、北寄りの部分に検出したが、形状等は判然としない。 時期: 4世紀前半



第783図 13号住居・出土遺物(1)

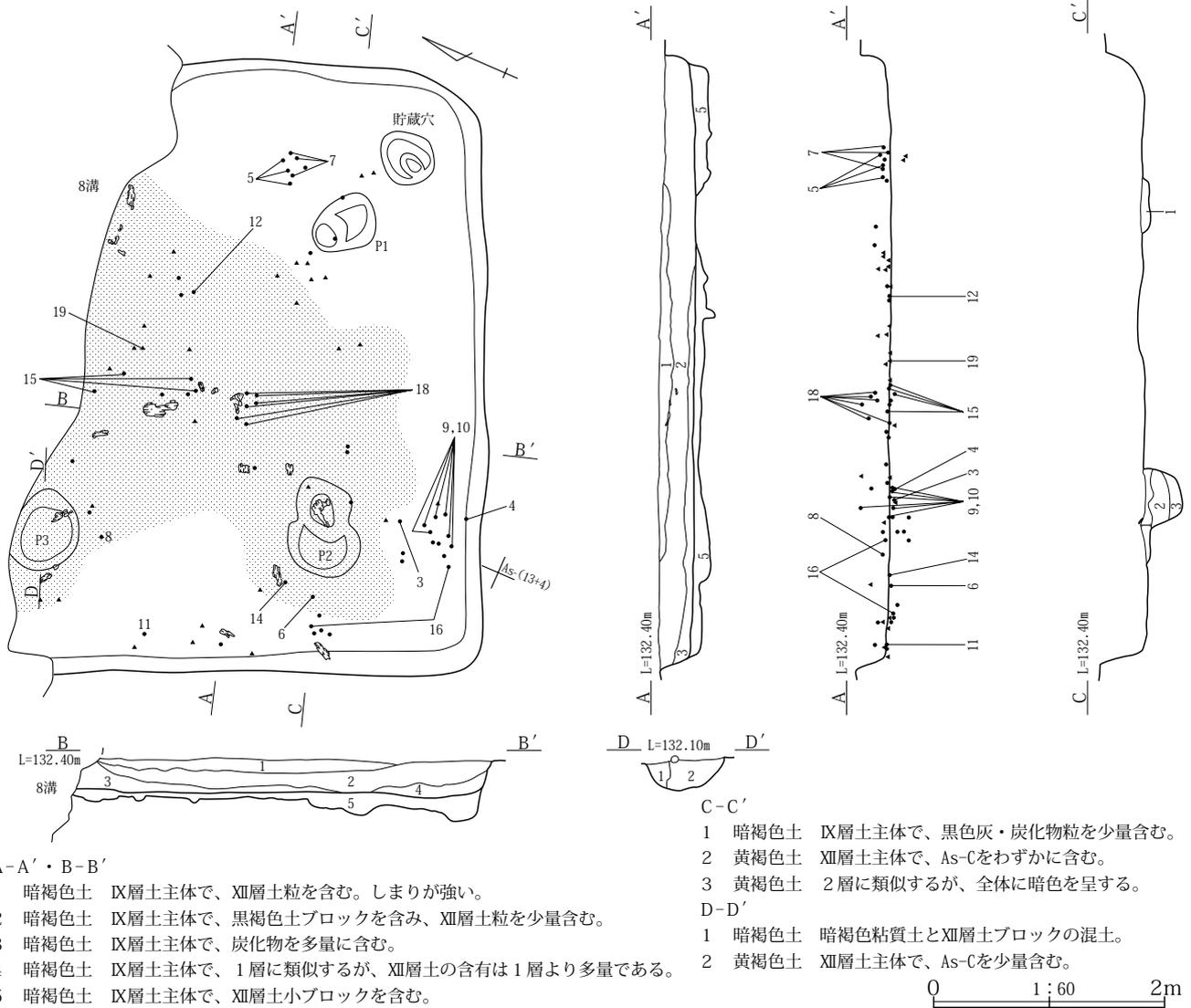


第784図 13号住居出土遺物(2)

14号住居(第785～787図 P L.178・179・291)

位置：Ar・As-13・14グリッド 形状：隅丸方形？ 規模：5.32m×(4.12)m 残存深度：0.29m 主軸方位：E-25°-N 埋没土：IX層土主体で、XII層土粒を含む層。 柱穴：8号溝の削平によって失われた1カ所を除

き、P 1 (径0.31m、深さ0.39m、円形)、P 2 (径0.48、深さ0.49m、不整円形)、P 3 (0.71×0.55m、深さ0.26m、楕円形)の3カ所を検出した。P 1とP 2には抜き取りの痕跡と思われる浅い掘り込みが付属している。P 1-P 2間、P 2-P 3間ともにほぼ2.40mの間隔である。



- A-A'・B-B'
- 1 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土粒を含む。しまりが強い。
 - 2 暗褐色土 IX層土主体で、黒褐色土ブロックを含み、XII層土粒を少量含む。
 - 3 暗褐色土 IX層土主体で、炭化物を多量に含む。
 - 4 暗褐色土 IX層土主体で、1層に類似するが、XII層土の含有は1層より多量である。
 - 5 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土小ブロックを含む。

- C-C'
- 1 暗褐色土 IX層土主体で、黒色灰・炭化物粒を少量含む。
 - 2 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cをわずかに含む。
- D-D'
- 1 暗褐色土 暗褐色粘質土とXII層土ブロックの混土。
 - 2 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cを少量含む。

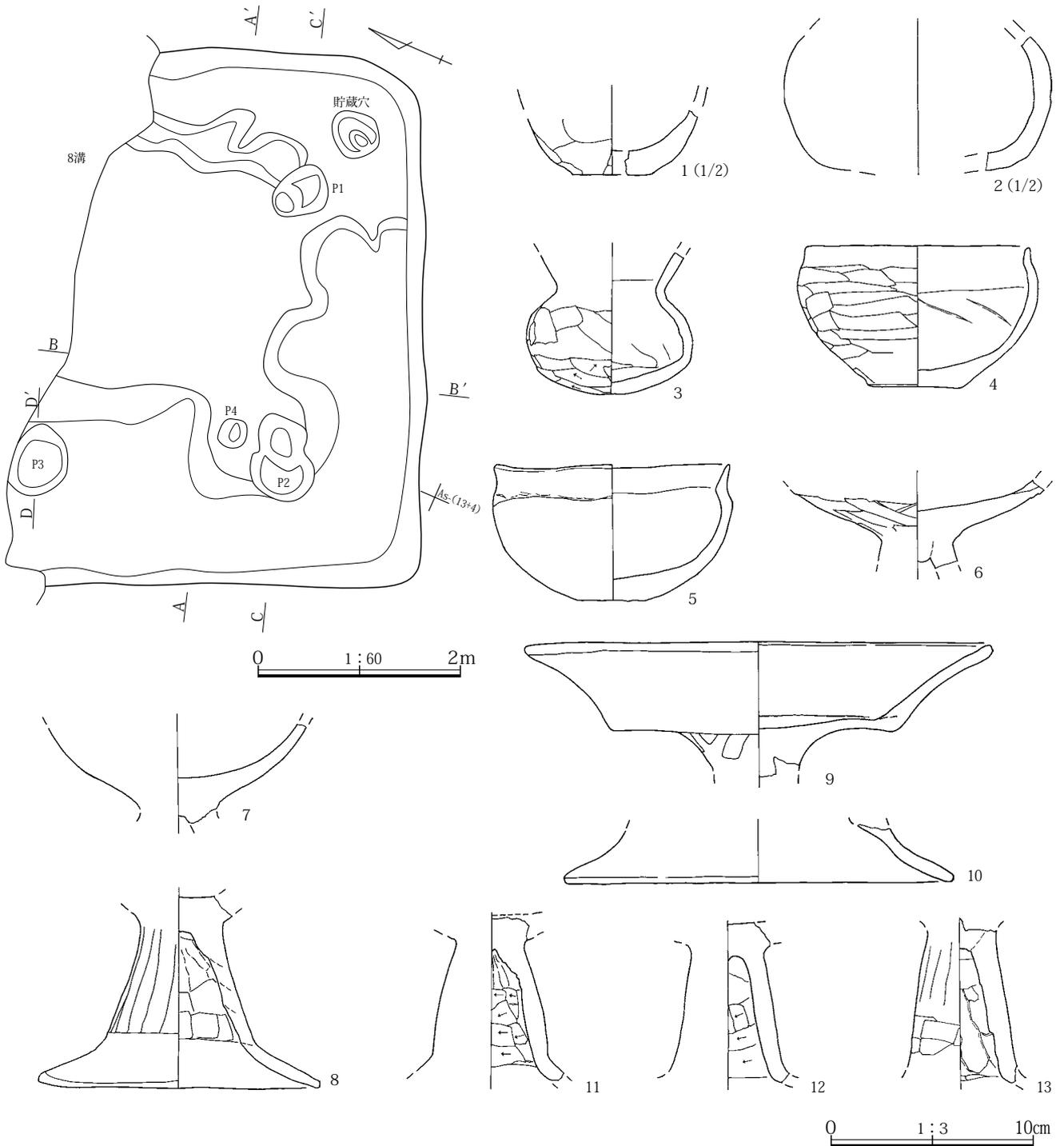
第785図 14号住居

炉：未検出 遺物：床面のほぼ全域から礫・炭化材に混じって出土したもので、南西コーナー部近くから高坏（9）・鉢（4）・埴（3）・壺（14）、中央部から台付甕（18）、東寄りの位置から高坏（7）・鉢（5）などが出土した。

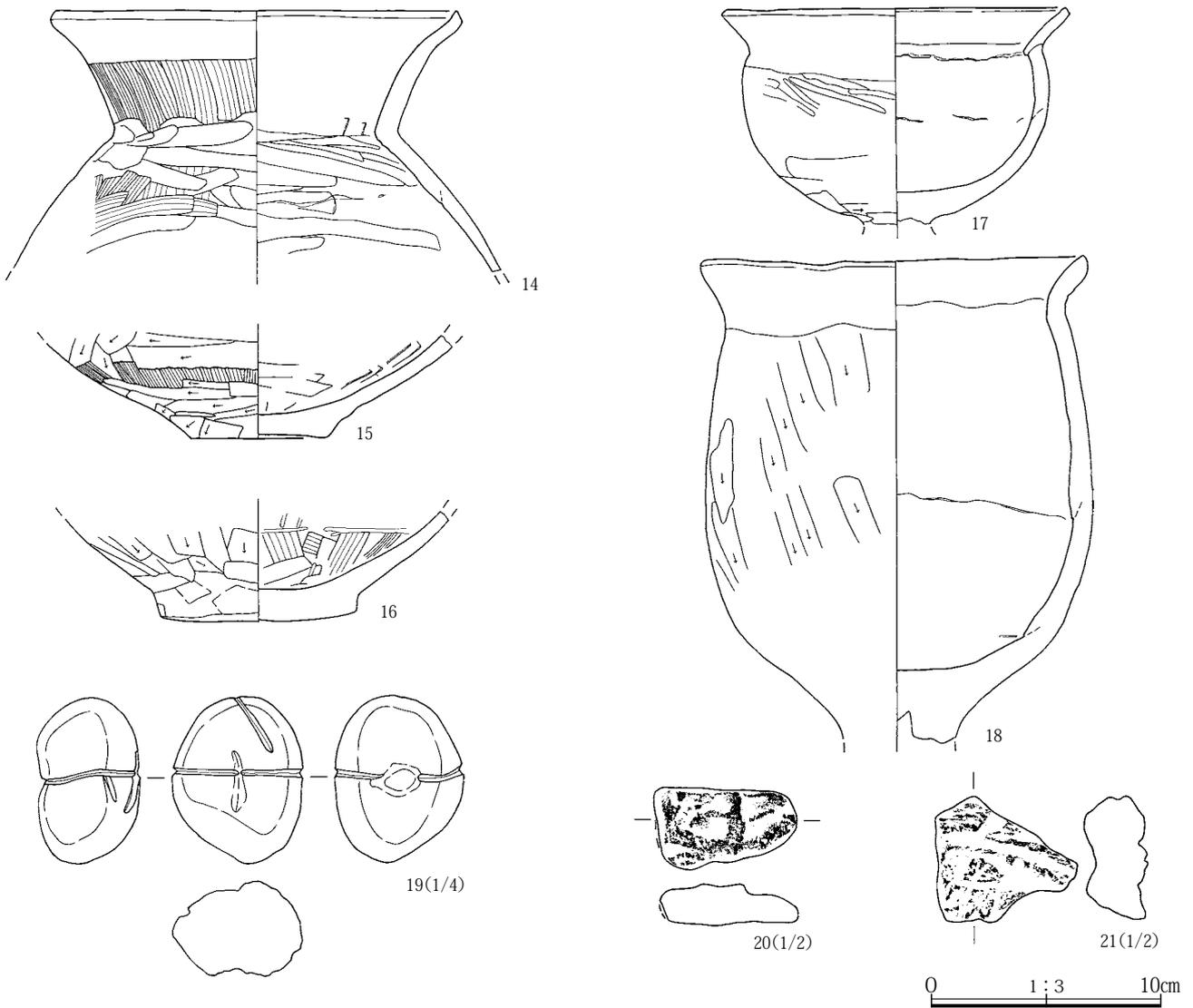
重複：北側1/3ほどが1面8号溝によって壊されている。

所見：比較的残存状態の良い遺構であり、床面も中央部が硬化していたことから明確に捉えることができた。床面で確認できた3本のピットを柱穴と判断したが、柱穴

とするには浅すぎとも思える。南東コーナー近くに検出した、径0.45m、深さ0.26mの円形の掘り込みが、やや小規模ではあるが貯蔵穴の可能性があろう。床面付近からは、礫や土器に混じって比較的多くの炭化物が出土しており、焼失している可能性が高い。掘り方はあまり明確ではないが、中央部を除いて周辺を掘り下げるタイプと見られ、P2の北側至近の位置にP4（径0.27m、深さ0.13m、不整形円形）を検出した。 時期：5世紀前半



第786図 14号住居掘り方・出土遺物(1)

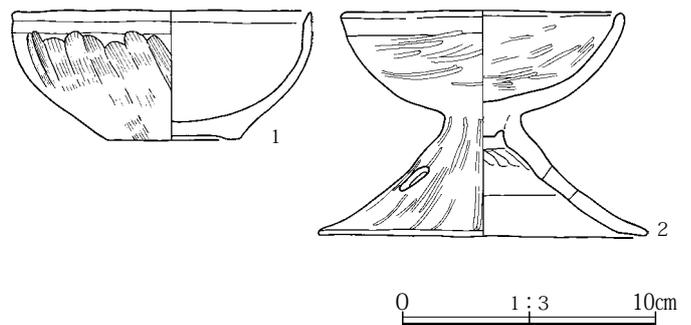


第787図 14号住居出土遺物(2)

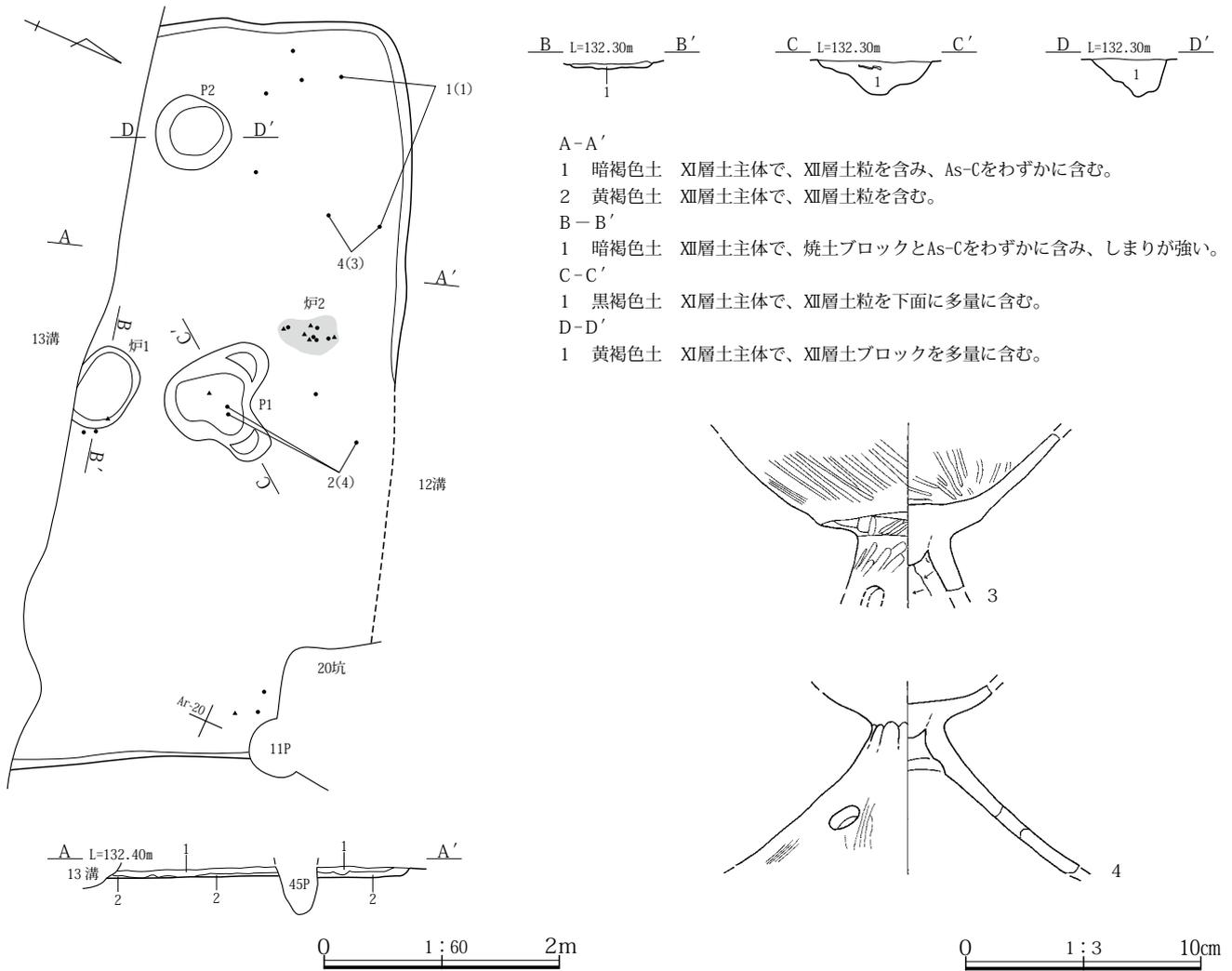
15号住居(第788・789図 P L.179・291)

位置：Ap～Ar-19・20グリッド 形状：隅丸長方形？
 規模：6.32m×(2.38)m 残存深度：0.07m 主軸方位：
 E-25°-N 埋没土：As-Cを含むⅫ層土主体。柱穴：
 未検出 炉：床面中央に0.73×0.52m、深さ0.05mほど
 の楕円形の掘り込みが検出され、この中に焼土ブロック
 が多く入っていたことから炉と判断した。また、北壁近
 くの床面に焼土化下部分があったことから、この部分も
 炉と判断した。遺物：遺物出土はわずかで、高坏(2)
 は北壁寄りの中央から、鉢(1)は北西コーナー部近くか
 ら出土した。重複：南側を1面13号溝で壊されている。
 所見：13号溝を挟んで南側に24号住居が位置しているが、
 調査時点では西壁が一致していなかったことから、別遺
 構として認識した。しかし、東壁はほぼ一致している上

に床面の位置も大差ないことから、同一遺構である可能
 性がある。床面の調査でP 1(0.99×1.00、深さ0.28m、
 不整形)、P 2(径0.63m、深さ0.36m、円形)を検出し
 たが、配置から柱穴とは認識しなかった。掘り方はまっ
 たく行われていない。時期：4世紀前半



第788図 15号住居出土遺物(1)

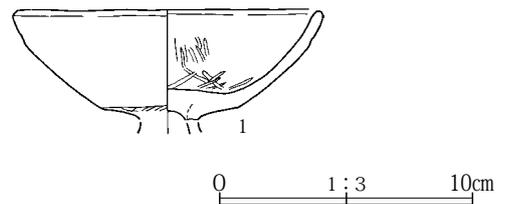


第789図 15号住居・出土遺物(2)

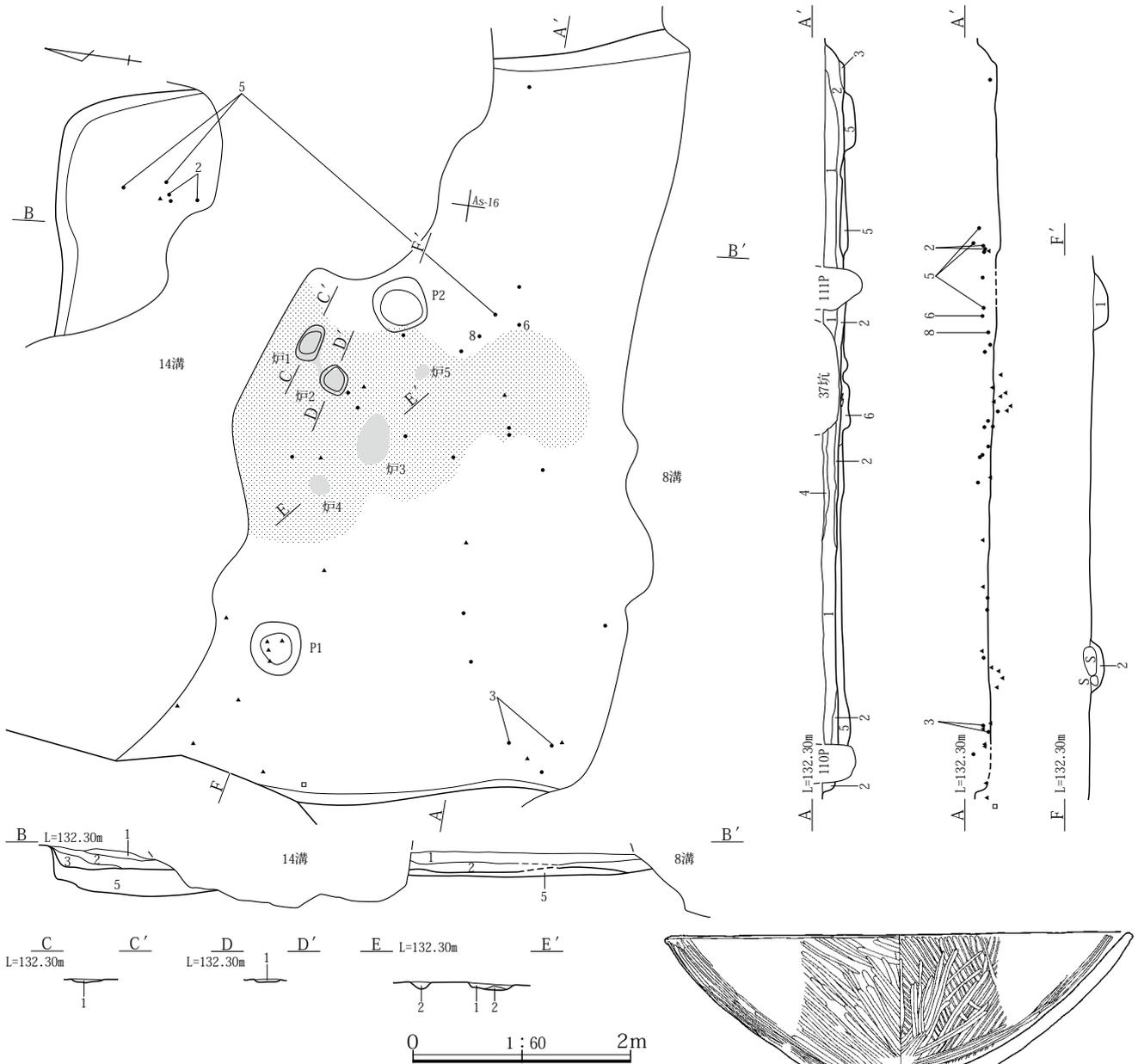
18号住居(第790～792図 P L.179・291)

位置: Aq～As-15・16グリッド **形状:** 隅丸方形 **規模:** 6.76m×(5.75)m **残存深度:** 0.18m **主軸方位:** E-15°-N **埋没土:** As-Cを含むXII層土主体で、VIII層土をブロックで含む。 **柱穴:** P1(径0.48m、深さ0.12m、円形)は位置から見て柱穴と判断したが、他の3カ所は8・14号溝によって削平されたものと考えられる。 **炉:** 床面中央付近に5カ所の焼土を検出したが、この部分が炉と考えられる。 **遺物:** 北東コーナー部から高坏(2)・甕(5)、西壁際から壺(3)が出土した。 **重複:** 1面の8号溝や14号溝によって削平を受けている。 **所見:** 1面の調査で水田が検出された部分の下層で調査したもので、確認はXII層土上面まで下げて行っているため残存状況は良くない。南壁が8号溝との重複によって失われているため、南北規模が直接計測できないが、ほぼ東西方向の規模と同程度かまたはやや大きくなると見て

よいであろう。床面は平坦で炉の検出された周辺には硬化面が確認された。この硬化面に接するような位置にP2(径0.47m、深さ0.13m、不整形円形)を検出したが、位置から柱穴とは考えなかった。掘り方はあまり明瞭ではないが、壁際がやや深く掘り込まれており、中央の平坦部に土坑1(1.50×0.92m、深さ0.05m、不整形)を検出した他、土坑1の北側にP3(0.42×0.34m、深さ0.06m、楕円形)、北東コーナー近くにP4(径0.34m、深さ0.16m、不整形円形)を検出した。 **時期:** 4世紀前半



第790図 18号住居出土遺物(1)



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土粒・ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 1層よりAs-Cは少量で、黑色灰・炭化物を含む。粘性が強い。
- 3 黄褐色土 XII層土主体で、暗褐色土ブロック・As-Cをわずかに含む。
- 4 黄褐色土 As-Cを含み、XI層土をわずかに含む。
- 5 黄褐色土 XII層土主体で、暗褐色土粒を含む。
- 6 暗褐色土 XII層土と暗褐色土ブロックの混土で、黑色灰を少量含む。

C-C'

- 1 暗褐色土 IX層土主体で、黑色灰・焼土粒を含む。

D-D'

- 1 黄褐色土 XII層土と焼土粒の混土。

E-E'

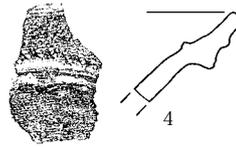
- 1 暗褐色土 暗褐色土と黑色灰の混土。

- 2 赤褐色焼土 XII層土が焼土化。

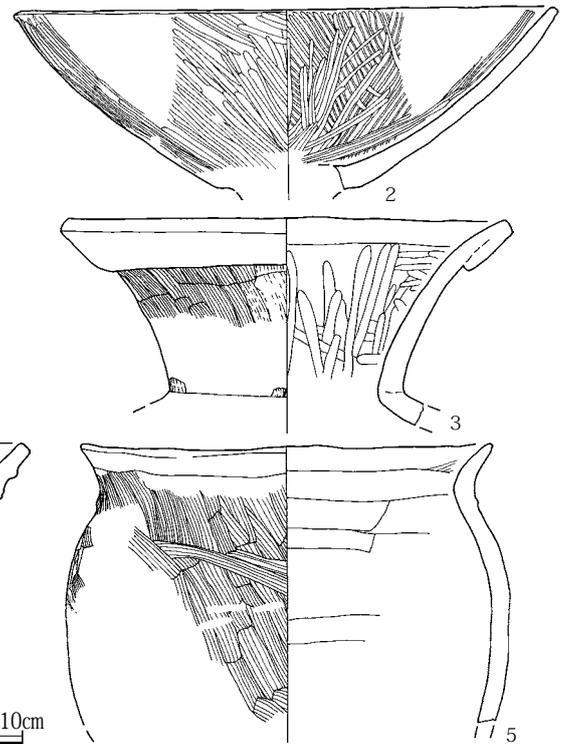
F-F'

- 1 黄褐色土 XII層土主体で、XI層土粒・As-Cを少量含む。

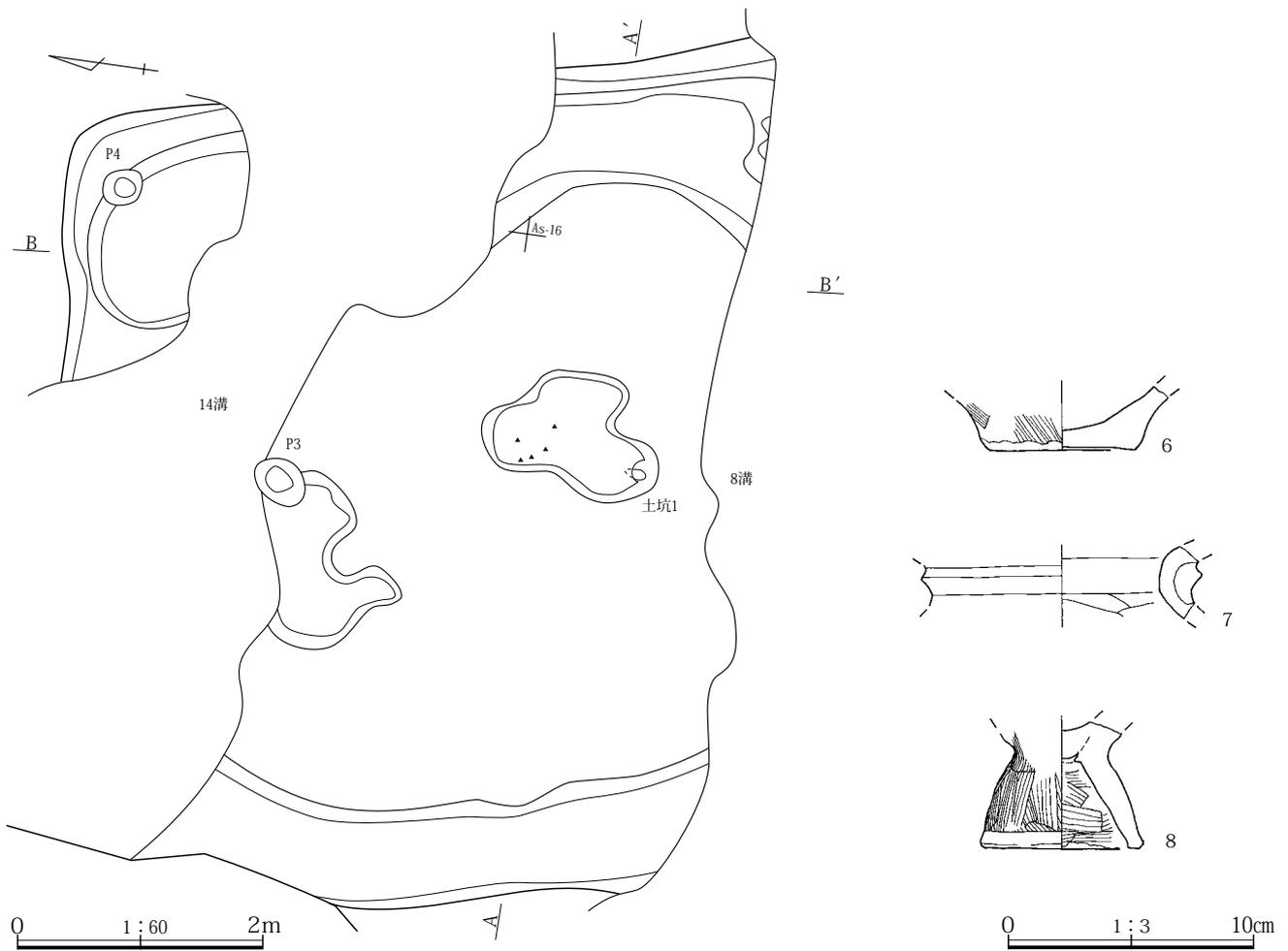
- 2 暗褐色土 IX層土主体。粘性やや強い。



0 1:3 10cm



第791図 18号住居・出土遺物(2)

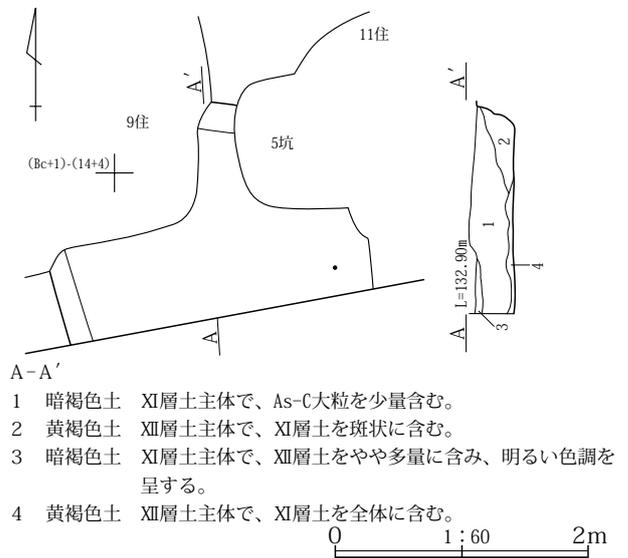


第792図 18号住居掘り方・出土遺物(3)

21号住居(第793図 P L.180)

位置: Bc-14グリッド **形状:** 不明 **規模:** (2.49)m × (1.71)m **残存深度:** 0.32m **主軸方位:** 不明 **埋没土:** As-Cを含むⅪ層土主体で、典型的な自然堆積の状況が看取された。 **柱穴:** 未検出 **炉:** 未検出 **遺物:** 床面近くから破片がわずかに出土した。 **重複:** 東側を2面の11号住居および5号土坑、西側は3面の9号住居、南側は2面の61・65号住居との重複によって失われている。

所見: 西壁と北壁の一部を検出したもので、南側は、V区の調査で検出を試みたが、前述のように2面の遺構が重複していたために捉えることができなかった。 **時期:** 4世紀代か



- 1 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、As-C大粒を少量含む。
- 2 黄褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅺ層土を斑状に含む。
- 3 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅺ層土をやや多量に含み、明るい色調を呈する。
- 4 黄褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅺ層土を全体に含む。

第793図 21号住居

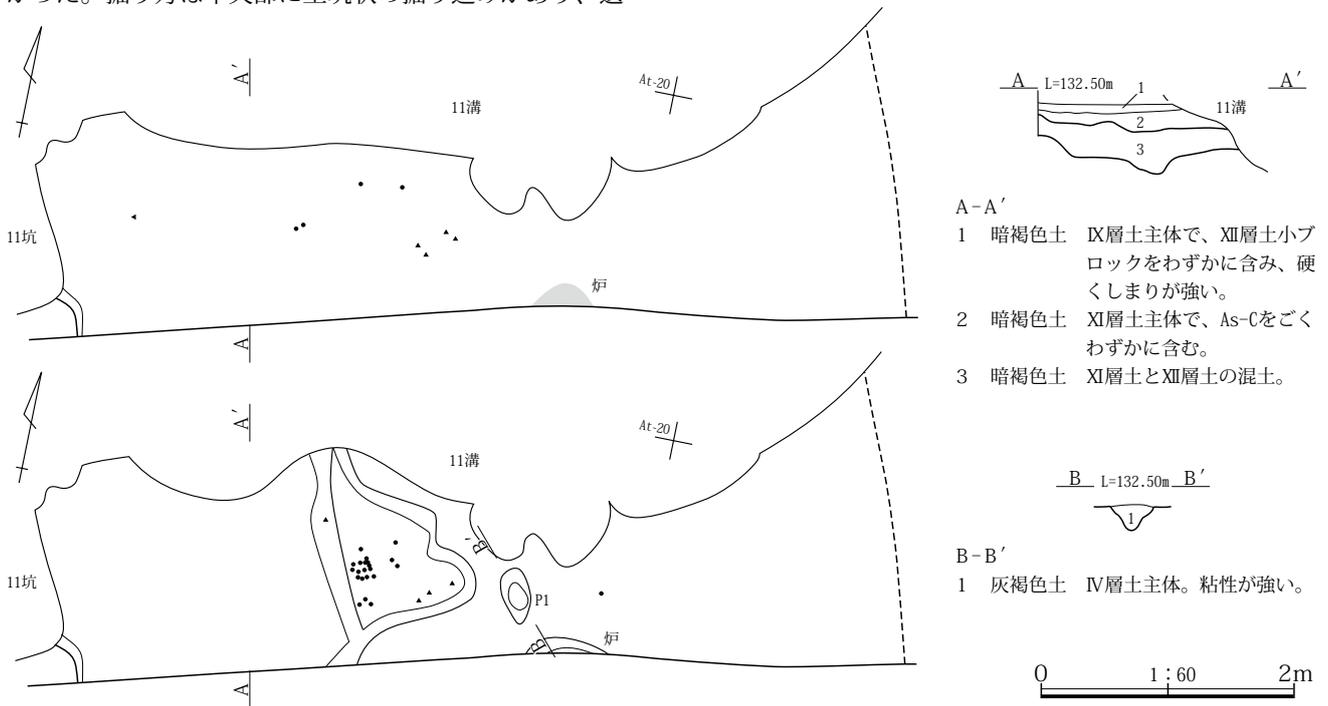
23号住居(第794図 P L.180)

位置: As・At-19・20グリッド **形状:** 隅丸方形? **規模:** 不明 **残存深度:** 0.22m **主軸方位:** 不明 **埋没土:** 微量のAs-Cを含むⅪ層土主体。 **柱穴:** 未検出 **炉:** 住居中央と思われる床面に検出した焼土が炉と思われる。

遺物: 床面付近でわずかに破片が出土した。 **重複:** 北側は1面の11号溝との重複で失われている。西側で27号住と重複するが、検出状況から27号住居→23号住居と考えられる。 **所見:** 住居の南側は東西方向の道路の下となるため調査はできなかった。また、北側は11号溝によ

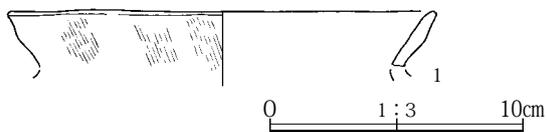
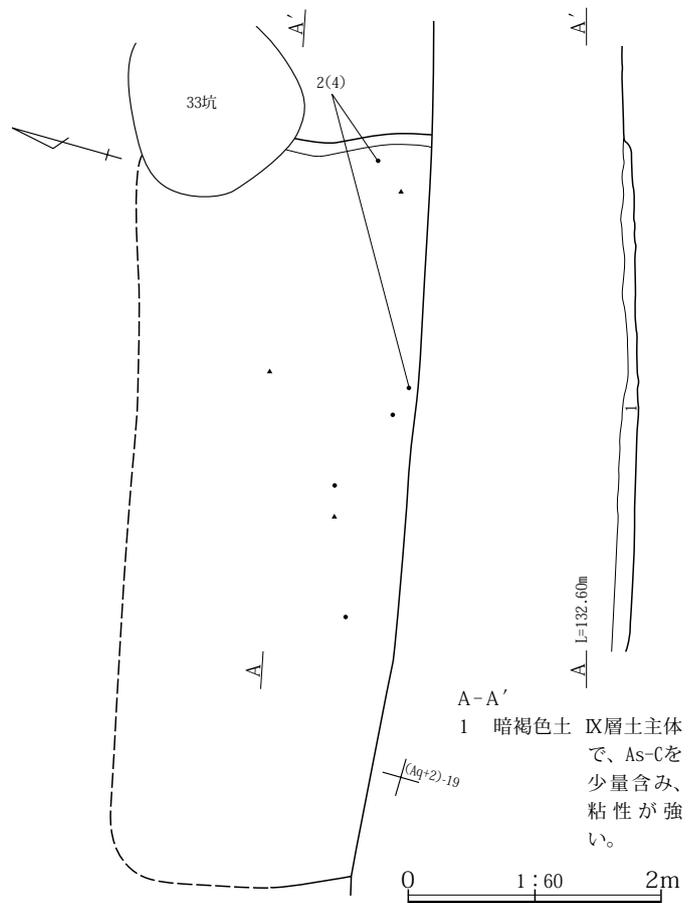
て削平されているため、検出できたのは住居北側の1/2ほどの範囲と考えられる。床面は炉と考えた焼土の検出された面として捉えたが、硬化面はまったく認められなかった。掘り方は中央部に土坑状の掘り込みがあり、遺

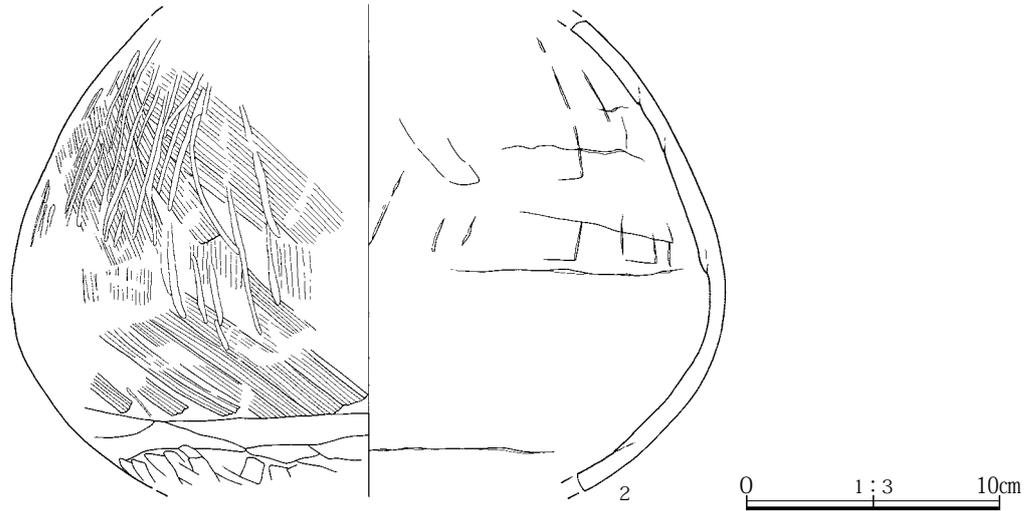
物が比較的まとまって出土した。炉の近くから P 1 (0.45 × 0.23m、0.13m、楕円形)を検出したが、位置から柱穴とはしなかった。 **時期**：4世紀代か



24号住居(第795・796図 P L.180・291)

位置：Aq・Ar-19グリッド **形状**：不明 **規模**：6.03m × -m **残存深度**：0.15m **主軸方位**：不明 **埋没土**：微量のAs-Cを含むXII層土主体。 **柱穴**：未検出 **炉**：未検出 **遺物**：遺物出土はごくわずかで、壺(2)が東壁際及び中央付近から出土した。 **重複**：北側で15号住居と重複しているが、重複部分が1面の13号溝によって削平されているため、新旧関係は不明。 **所見**：深い位置まで近世以降の攪乱を受けており、面をXII層上面まで下げて遺構確認を行ったため必然的に残存状態が悪くなった。15号住居との関係については、検出の状況から別遺構として扱ったが、東壁が連続するかなのような位置関係にあることや、床面レベルの低いはずの15号住居の平面形が24号住居ではまったく確認されないことなどから、同一遺構とした方が理解しやすい部分もある。 **時期**：4世紀前半



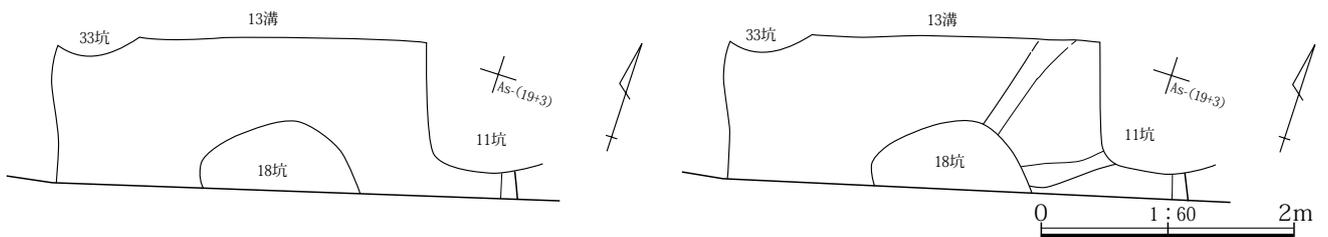


第796図 24号住居出土遺物(2)

27号住居(第797図 P L.180)

位置: Ar・As-19グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 不明 主軸方位: 不明 埋没土: IX層土主体。
 柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 埋没土中から破片が
 わずかに出土した。 重複: 東側で23号住居、西側で24

号住居と重複するが、検出状況から27号住居→23・24号
 住居と考えられる。 所見: 北側を1面の13号溝によっ
 て削平され、東西で他の住居と重複するため、残された
 床面だけを検出した。 時期: 不明

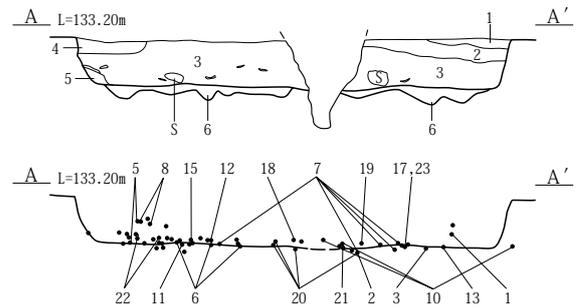
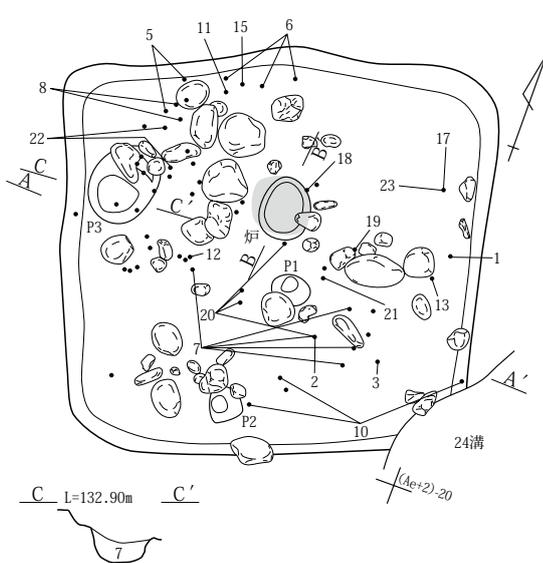


第797図 27号住居

28号住居(第798～800図 P L.180・181・292)

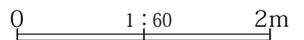
位置: Ad・Ae-19・20グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 3.23

m×3.42m 残存深度: 0.39m 主軸方位: N-18°-
 W 埋没土: As-Cを含むXII層土主体。 柱穴: 未検出



A-A'・C-C'

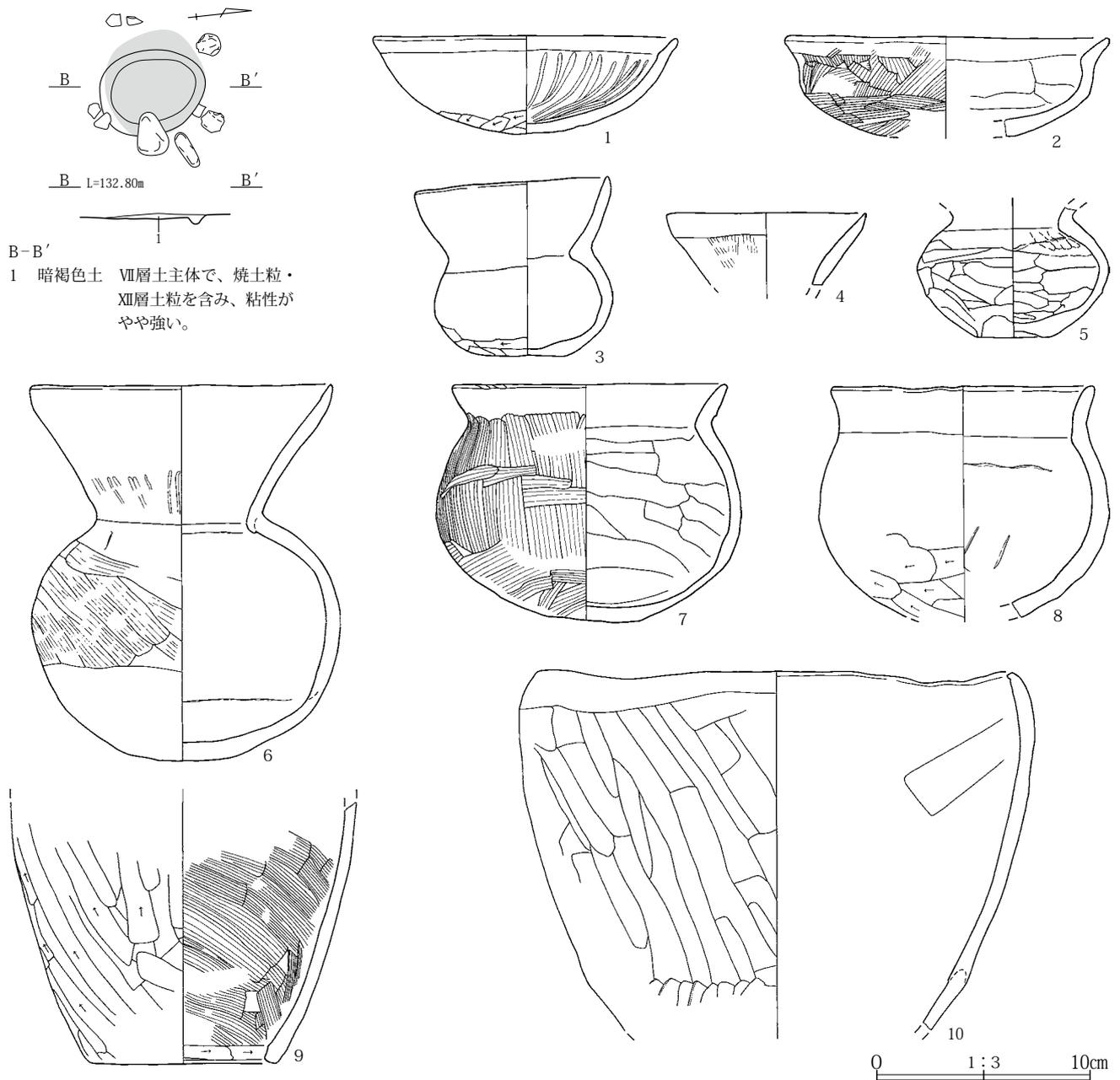
- 1 暗褐色土 Hr-FAと二ツ岳系軽石の混土で、軽石を多量に含む。
- 2 黒褐色土 IX層土主体で、全体に暗色を呈し、粘性・しまりが強い。
- 3 黒褐色土 IX層土主体。しまりが弱い。
- 4 黒褐色土 暗褐色土とAs-Bの混土。
- 5 暗褐色土 IX層土とXII層土の混土。
- 6 暗褐色土 XII層土と黒褐色土の混土。
- 7 暗褐色土 XII層土と黒褐色土の混土。



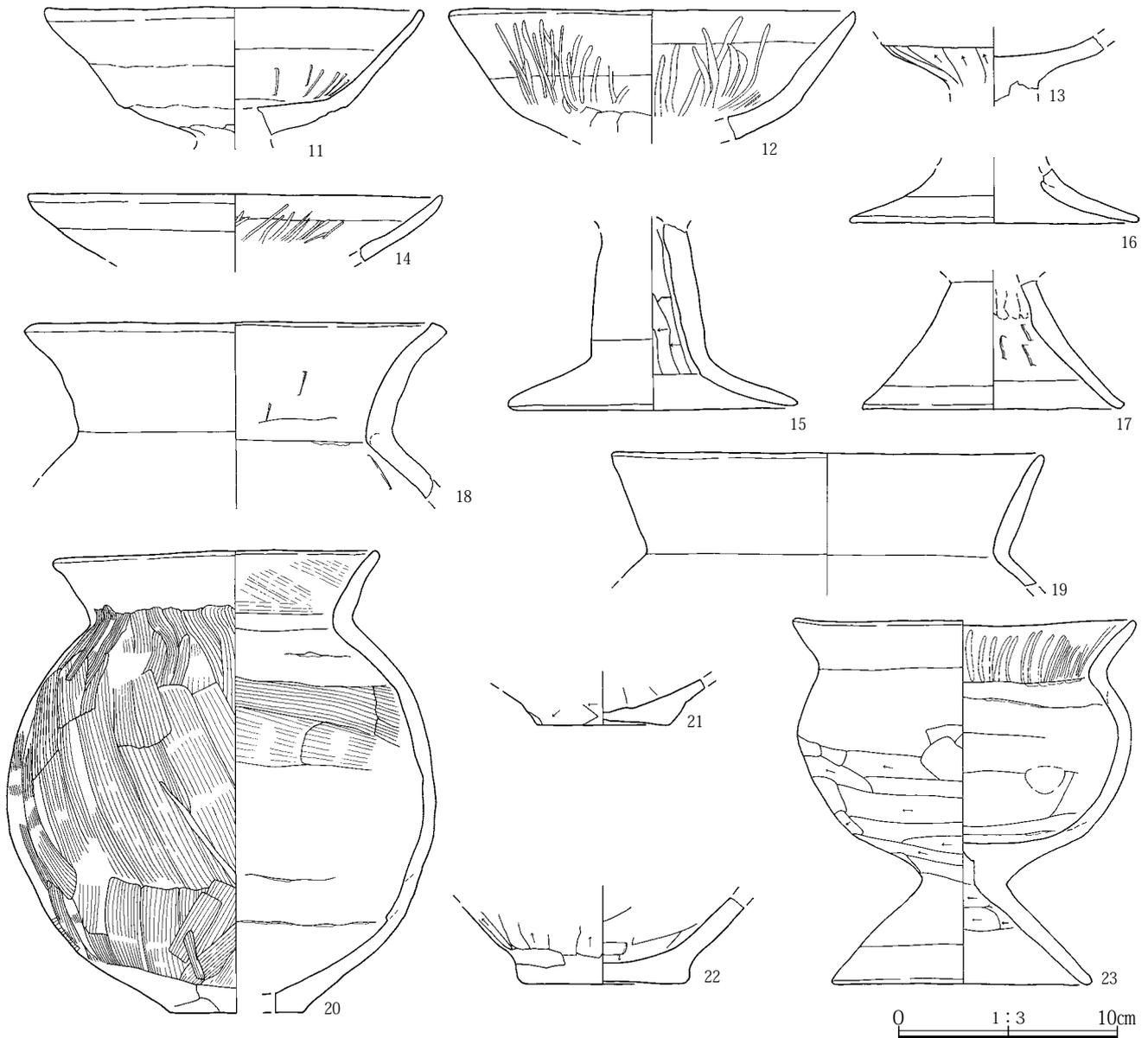
第798図 28号住居

炉：中央のやや北寄りの位置に1カ所焼土面として検出した。遺物：大小さまざまな礫が埋没土下層に集中しており、これらの間から土器が出土した。埴(6)が北壁際、台付甕(23)・坏(1)が東壁北寄りから、甑(10)・埴(3)が南壁寄り、甕(7・20)が中央部からそれぞれ出土した。重複：南東コーナー部が24号溝によって削平されており、西側で2面の31号住居と重複しているが、31号住居の掘り込みが浅かったため、検出面より下部については影響がほとんど及んでいなかった。所見：遺物の項目に記述したとおり、下層からの礫の出土が顕著であったが、住居で使用されたものとは考えられない。当

住居の検出された付近は、礫層が比較的浅い位置で露出する場所であり、当住居の廃棄時点で周辺にあった礫が投棄されたものと思われる。これは、礫に混じって出土している土器片も細片化したものが多いことから想定されることである。床面の精査時点でP 1 (0.31×0.24m、深さ0.21m、楕円形)、P 2 (径0.40m、深さ0.23m、不整形円形)、P 3 (0.63×0.50m、深さ0.28m、楕円形)を検出したが、配置に規則性は捉えられないことから、柱穴とは考えなかった。また、床面として捉えた面はⅪ層土であるため、掘り方はないものと判断した。時期：5世紀前半



第799図 28号住居炉・出土遺物(1)



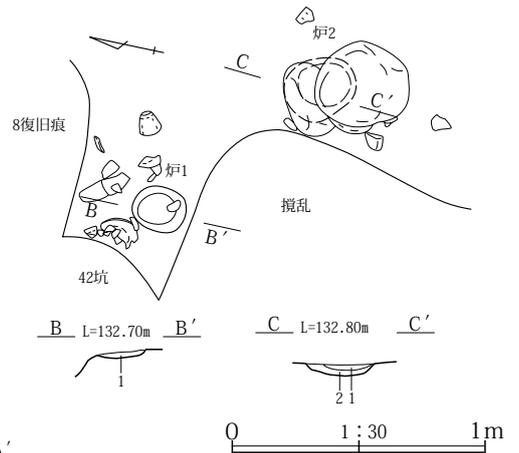
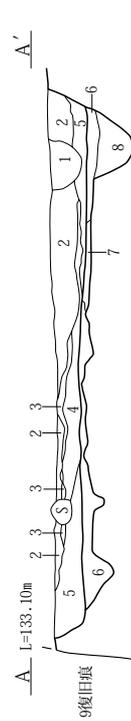
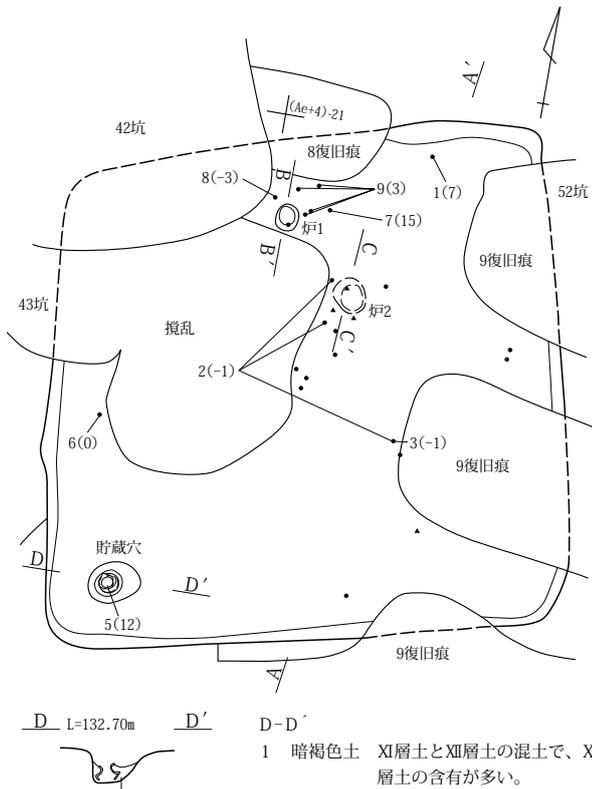
第800図 28号住居出土遺物(2)

32号住居(第801図 P L.181・292)

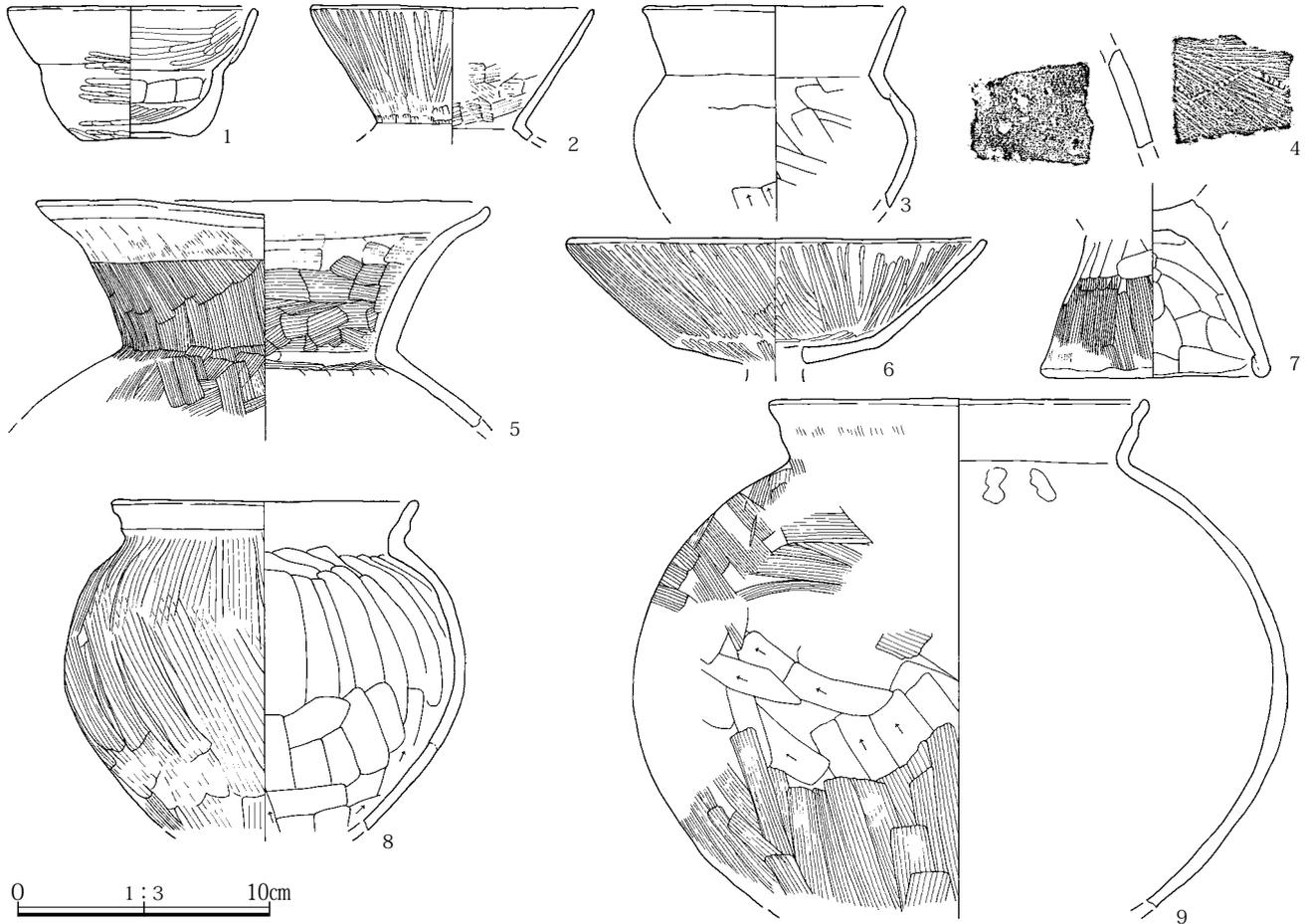
位置：Ae・Af-20・21グリッド 形状：隅丸方形 規模：4.01m×4.07m 残存深度：0.31m 主軸方位：N-14°-W 埋没土：Ⅸ層土を主体とする土層で、西側から埋没した様子を窺うことができる。柱穴：未検出 炉：中央北寄りの位置で2カ所の焼土面を検出した。炉上部からは3個の大礫が出土しているが、作為的に置かれた可能性がある。遺物：炉の周辺にやや集中する傾向があり、炉1付近から台付甕(8)・甕(9)、炉2付近から埴(2)が出土した他、西壁寄りの位置から高坏(6)、北東コーナー部近くから埴(1)が出土した。また、南西コーナー部近くから検出した貯蔵穴と思われる掘り込み中に胴部下半を欠損した壺(5)が口縁部を上向き状態で出土

したことが特筆される。重複：近接した時期の遺構との重複は見られず、1面の復旧痕や土坑によって削平を受けている。所見：1面の遺構による削平を受けているが、北西コーナーを除いた3カ所のコーナー部が残存していたために、平面形や規模を捉えることができた。貯蔵穴は南西コーナー部に検出した0.42×0.32m、深さ0.27mほどの楕円形を呈する土坑状掘り込みと判断したが、内部に口縁部と胴部下半を欠損した壺が正位の状態で埋設されていた。床面は遺物の出土面として捉えたが、基本的にはⅨ層土相当の層中に形成されており、これより下層には掘り込まれた痕跡がなかったことから掘り方はないものと判断した。時期：4世紀後半

第1節 第I期 (As-C 降下以降)



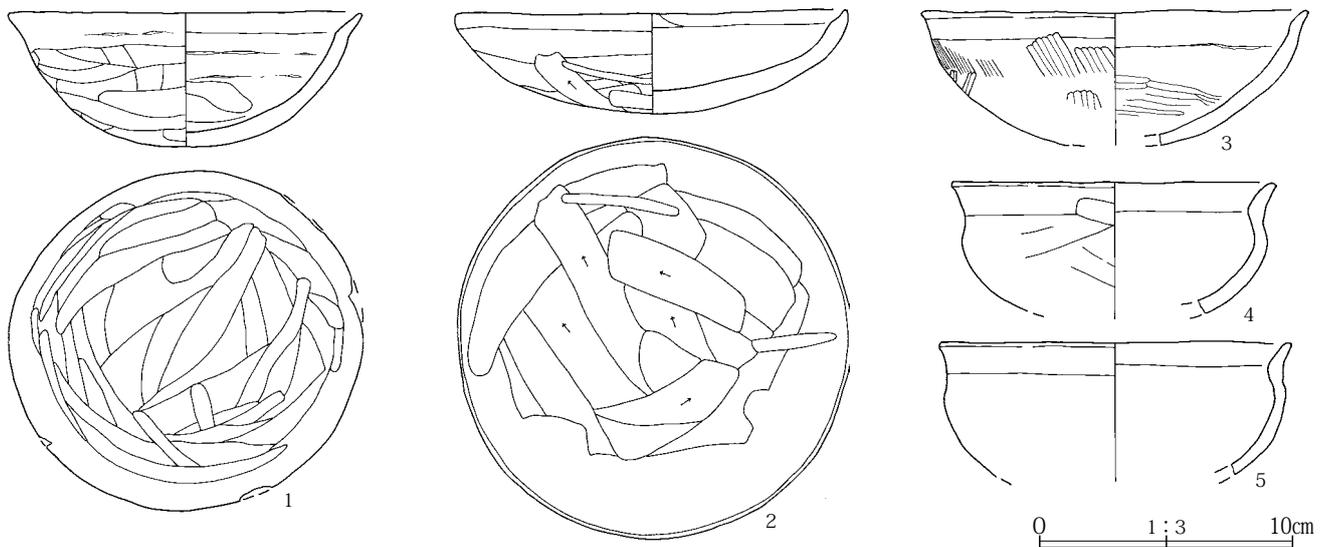
- A-A'
- 1 黒褐色土 Va層土主体で、茶褐色土ブロックを含む。
 - 2 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土粒を少量含み、全体に明るい色調を呈する。
 - 3 暗褐色土 暗灰色粘質土主体で、IX層土を少量含み、粘性・しまりが強い。
 - 4 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土粒を少量含む。
 - 5 暗褐色土 IX層土主体で、暗褐色粘質土ブロック・XII層土粒を多量に含む。
 - 6 暗褐色土 XII層土を含む。
 - 7 黄褐色土 XII層土主体。
 - 8 暗褐色土 XI層土とXII層土の混土。
- B-B'
- 1 赤褐色焼土 焼土とXII層土・暗褐色土の混土。
- C-C'
- 1 赤褐色焼土 焼土とXI層土・XII層土の混土。
 - 2 赤褐色焼土 XI層土とXII層土の混土。



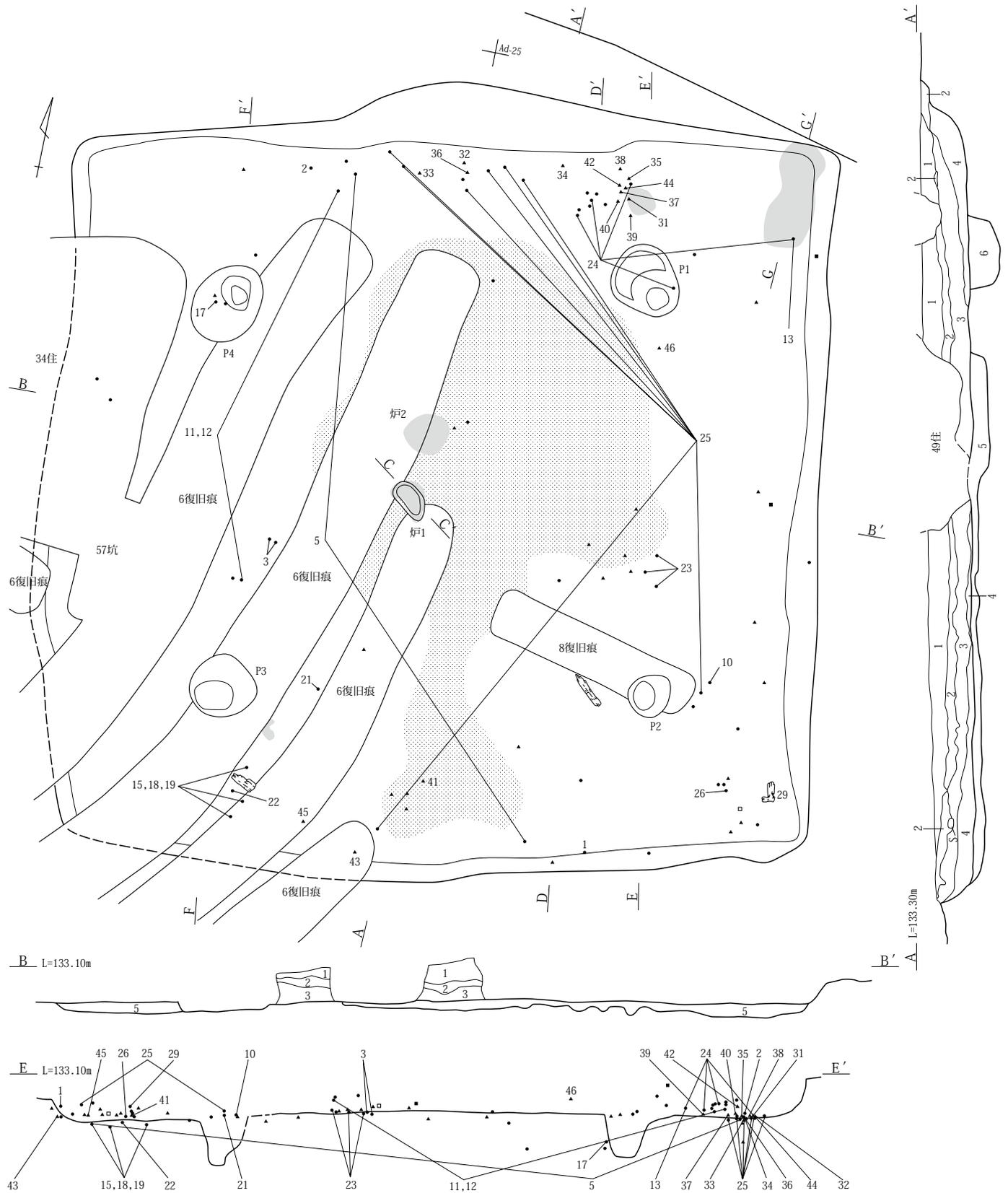
第801図 32号住居・出土遺物

33号住居(第802～807図 P.L.182～184・292・293)
位置:Ac～Ae-23・24グリッド **形状**:方形 **規模**:8.13m×8.30m **残存深度**:0.50m **主軸方位**:N-9°-W
埋没土:下層はIX層土主体の土層であるが、上層にHr-FA泥流類似の層が認められる。
柱穴:床面の調査時点で方形に検出したP 1(径0.55m、深さ0.48m、楕円形)、P 2(径0.46m、深さ0.56m、不整円形)、P 3(径0.68m、深さ0.54m、不整円形)、P 4(0.91×0.72m、深さ0.52m、楕円形)の4カ所を柱穴と判断した。柱穴間の距離は、P 1-P 2間、P 3-P 4間では4.45mと揃っているが、P 4-P 1間が4.55m、P 2-P 3間が4.70mとわずかではあるが、南側が広がっている。また、掘り方調査で、P 1の西側に重複してP 5(径0.98m、深さ0.13m、円形)・P 6(径0.78m、深さ0.15m、不整円形)、P 2の西側にP 7(径0.32m、深さ0.17m、円形)、P 3の南側に重複してP 8(1.26×0.95m、深さ0.35m、楕円形)、P 4の北側に重複してP 9(径0.76m、深さ0.11m、円形)をそれぞれ検出した。
炉:炉として認識したのは、中央部に検出した焼土面2カ所であるが、他にも北東コーナー近くで2カ所、南西コーナー近くで1カ所の焼土面を検出した。
遺物:埋没土中からの出土も多かったが、床面付近で炭化材に混じって完形の坏(2)や壺(25)が潰れた状態で出土し、P 4内からは有孔鉢(17)が、南壁際からは坏(1)などが出土した。また、北東の柱穴際から剣形石製模造品(46)が出土した他、南東コーナー部から鉄滓が出土し、東壁際から赤色顔料

の塊が出土したことが特筆される。
重複:西側を1面の6号復旧痕および2面の34号住居によって削平されている。また、44号住居と重複しているが、検出の状況から44号住居→33号住居と考えられる。
所見:33号住居は、田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡の調査で検出された住居の中では時期を問わず最大の規模を有する住居である。西側の壁が屈曲しているが、後世の遺構との重複部分であったために若干掘り過ぎてしまっており、本来はほぼ正方形に近い平面形であったものと考えられる。床面はやや粗い砂質であり全体に脆弱であったが、炉の周辺には硬化面が捉えられた。わずかではあるが炭化材が出土していることから、焼失している可能性がある。4本検出した柱穴には、それぞれ重複または至近の位置から古い段階のピットが検出されており、これらのピットが柱穴の掘り直しの痕跡である可能性があり、建て替えが行われたものと考えられる。東壁際など5カ所から検出された赤色顔料は、分析の結果ベンガラであることが判明しているが、朱色に近い色調を有するものであり、偶然に混入したものとは考えられない。北東コーナー部に検出された焼土と灰は、壁側から屋内へと傾斜した堆積が認められることから、住居の焼失時に形成されたものである可能性がある。掘り方は、全体をわずかに掘り下げた時点で44号住居の平面形が確認できたことから、外周を掘り下げるといった定型的な掘り方はなかったものと思われる。
時期:5世紀前半



第802図 33号住居出土遺物(1)

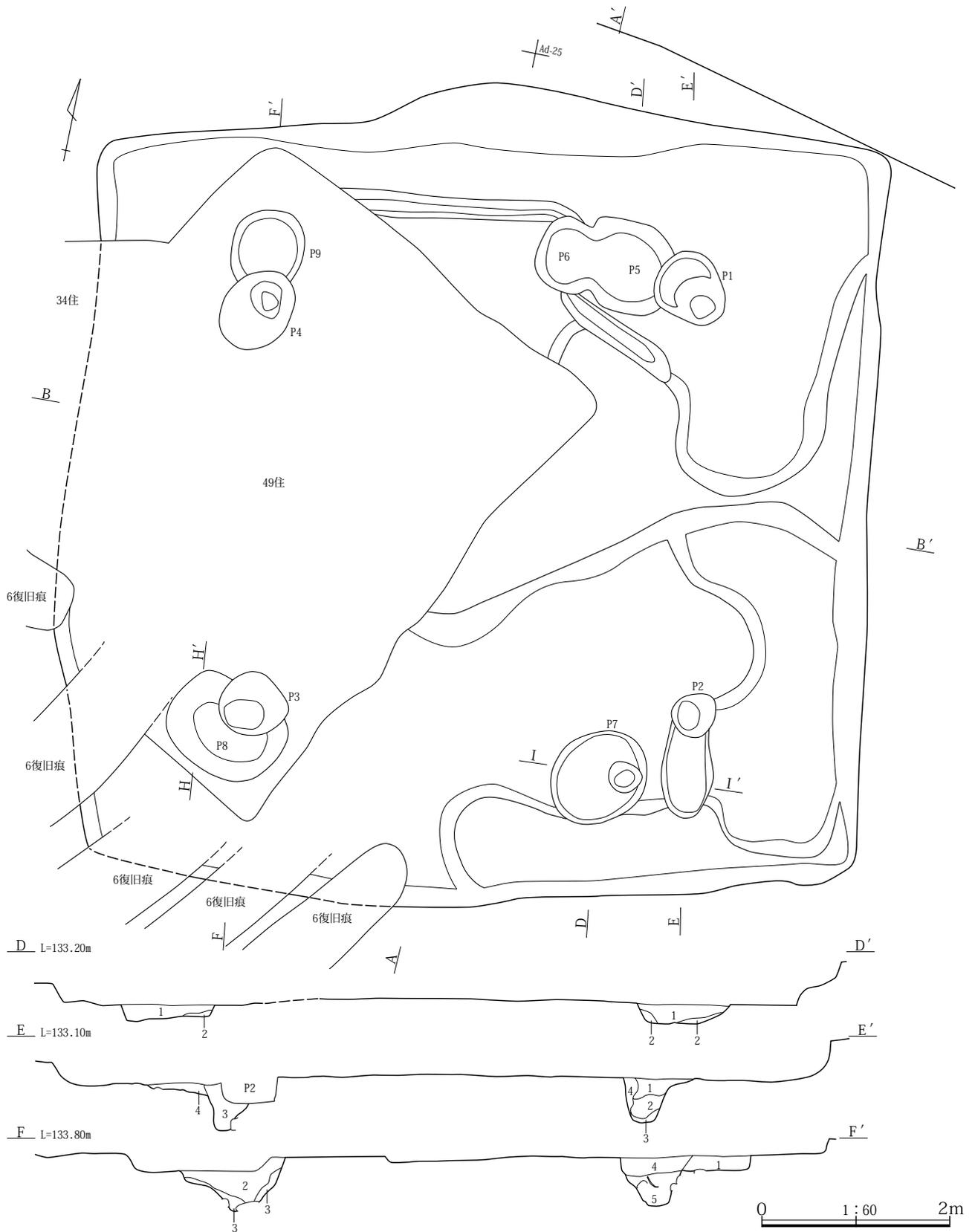


A-A' · B-B'

- | | |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| 1 黄褐色土 XII層土類似の砂層。(洪水層) | 4 暗褐色土 XI層土とXII層土の混土で、IX層土を少量含む。 |
| 2 黄褐色土 ニヶ岳系軽石類似の小軽石とXII層土の混土。 | 5 暗褐色土 IX層土とXII層土の混土。 |
| 3 暗褐色土 IX層土主体で、As-Cの含有は少量で、粘性・しまりが強い。 | 6 暗褐色土 IX層土とXI層土・XII層土ブロックの混土。 |

0 1:60 2m

第803図 33号住居



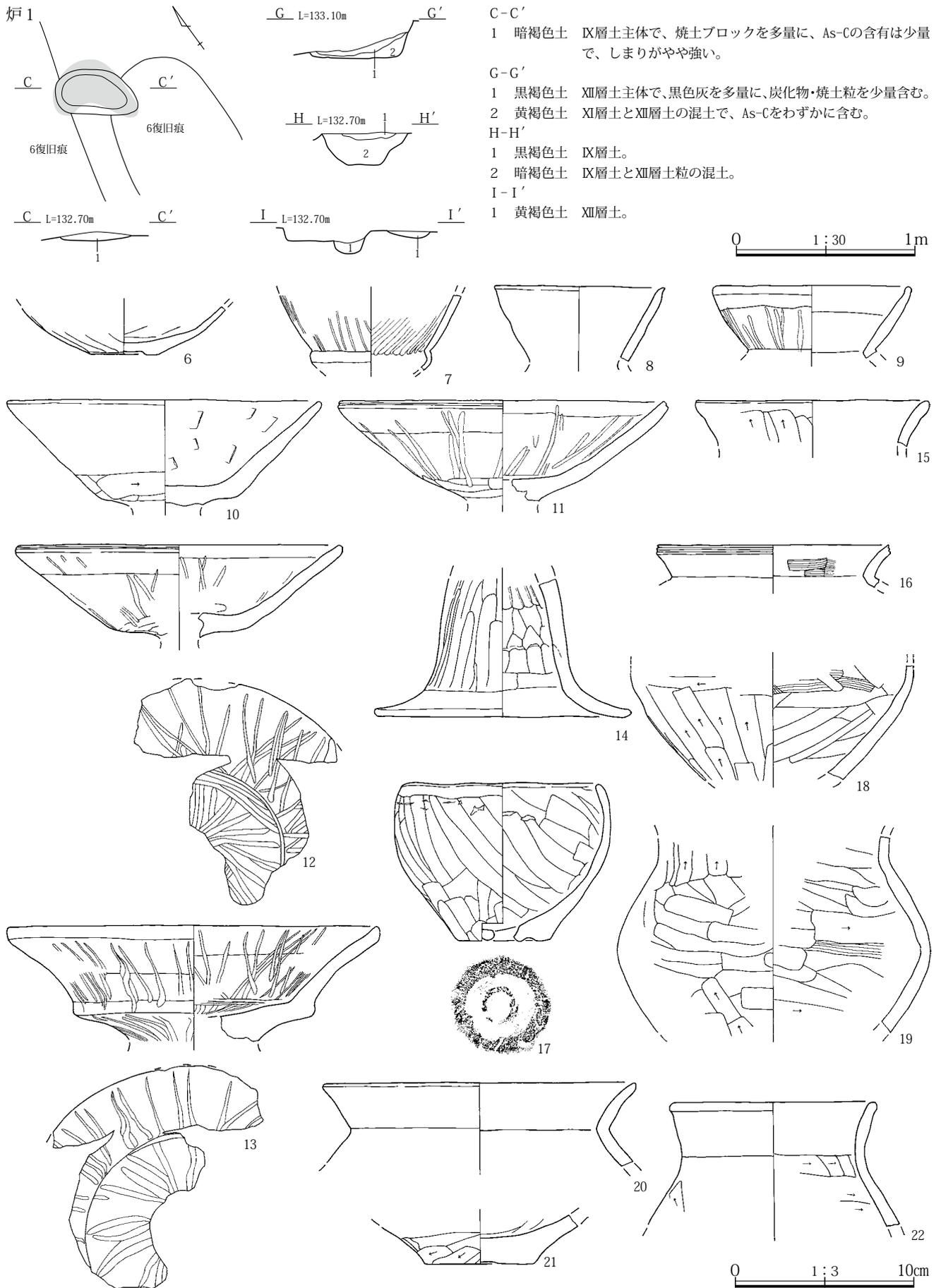
D-D' ・ E-E'

- 1 茶褐色土 XI層土とXII層土小ブロックの混土。
- 2 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土小ブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土 XII層土主体で、XI層土ブロックを含む。
- 4 黄褐色土 XII層土主体で、XI層土粒をわずかに含む。

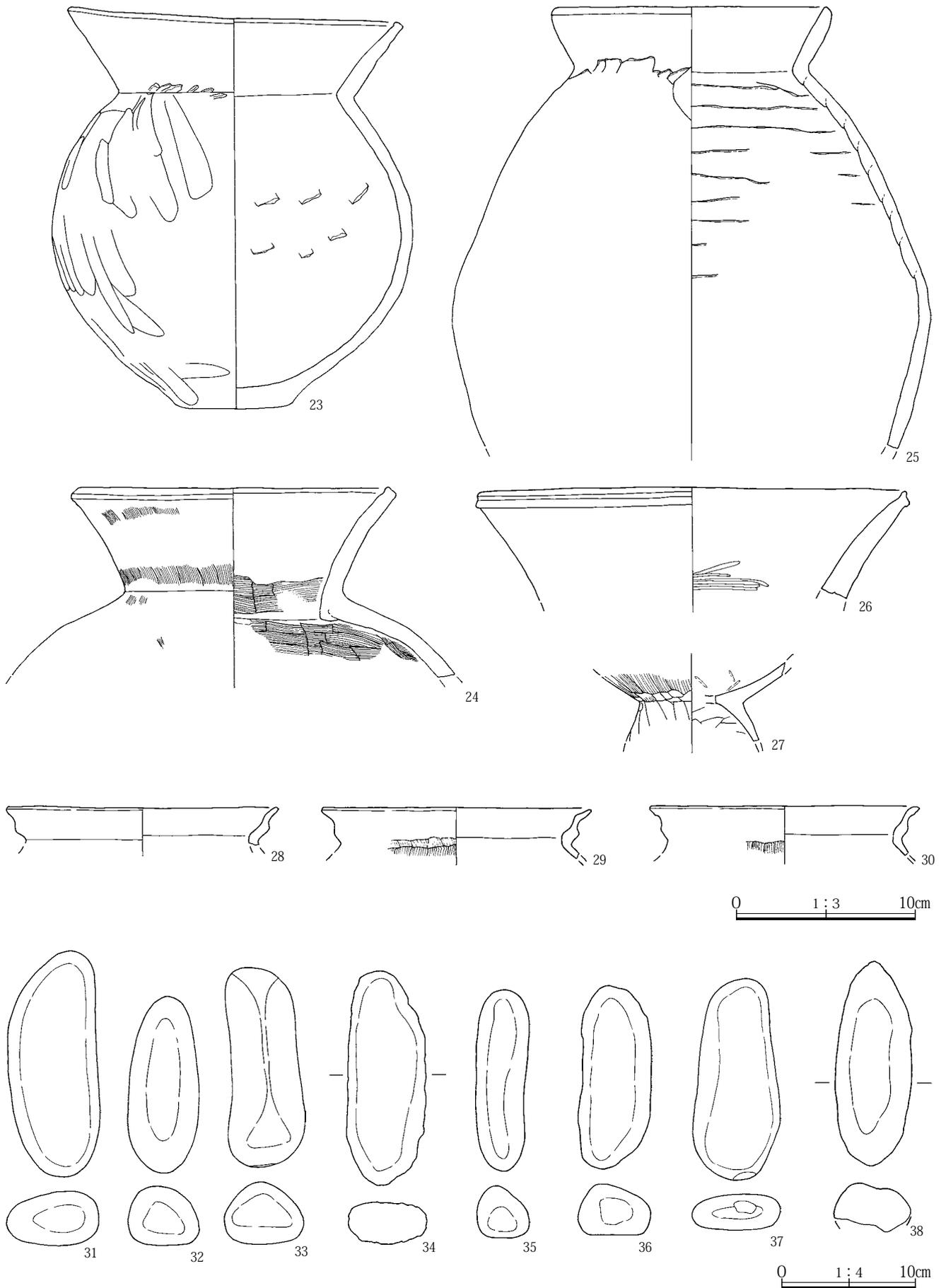
F-F'

- 1 暗褐色土 XI層土にAs-Cを少量含む粘質土で、XII層土粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 IX層土主体。
- 3 黒褐色土 IX層土主体で、XII層土小ブロックを多量に含む。
- 4 黒褐色土 IX層土主体で、As-Cの含有は多量である。
- 5 黒褐色土 IX層土で、As-Cの含有は少量で、しまりが弱い。

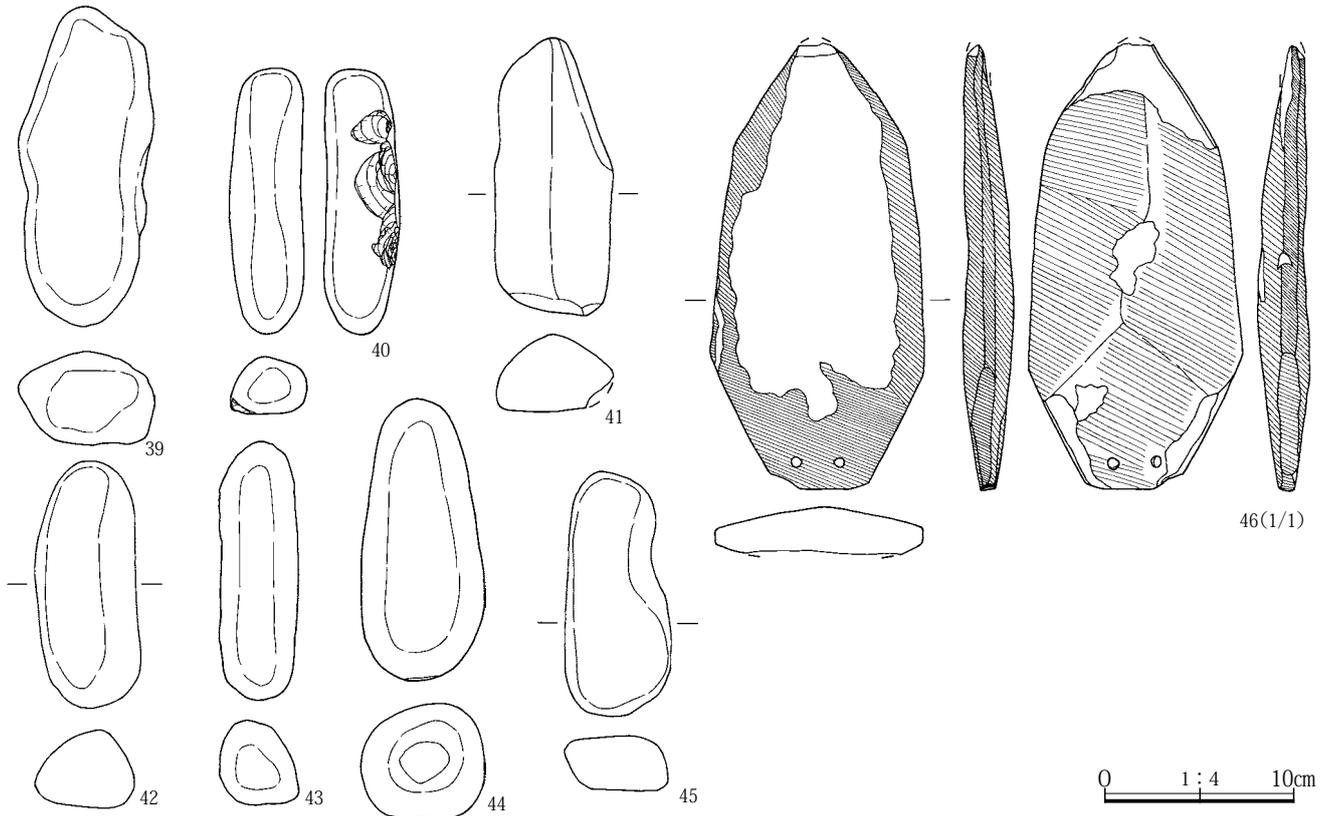
第804図 33号住居掘り方



第805図 33号住居炉・ピット土層断面図・出土遺物(2)



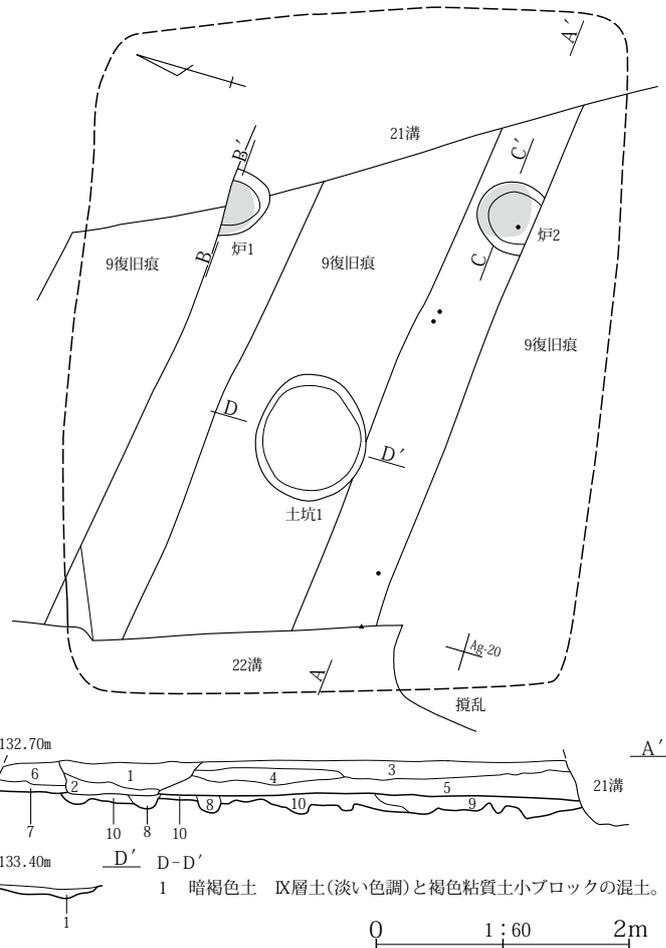
第806図 33号住居出土遺物(3)



第807図 33号住居出土遺物(4)

35号住居(第808・809図 P L.184)

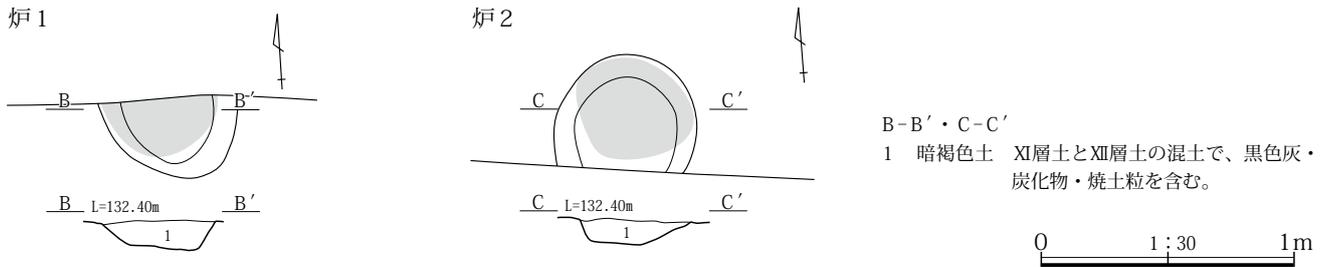
位置：Af～Ah-19・20グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0.33m 主軸方位：不明 埋没土：As-Cを含むⅫ層土主体。柱穴：未検出 炉：中央北寄りに2カ所南北に並んで円形の掘り込みを検出し、埋没土中に焼土粒や灰、炭化物が含まれていたことから炉と判断した。遺物：残存した床面付近からわずかに破片が出土した。重複：1面の9号復旧痕によって大半が削平され、東側で38・39号住居と重複するが、新旧関係は不明。所見：復旧痕の削平によって床面が带状に残存したもので、壁は北壁のごく一部を検出した。中央部に径0.86m、深さ0.07mほどの円形の土坑1を検出したが、住居の埋没土に類似する土層であったために、35号住居に伴う土坑と判断した。時期：古墳前期



A-A'

- 1 暗褐色土 Va層土主体で、鉄滓を含む。
- 2 暗褐色土 Va層土とⅫ層土ブロックの混土。
- 3 暗褐色土 Va層土主体で、Ⅻ層土粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、炭化物を少量含む。
- 5 暗褐色土 Ⅶ層土とⅫ層土ブロックの混土で、灰褐色粘質土ブロックを含む。
- 6 暗褐色土 Ⅸ層土主体で、全体に明るい色調を呈し、しまりが弱い。
- 7 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、Ⅸ層土小ブロックを少量含む。
- 8 暗褐色土 Ⅻ層土主体で、As-Cをわずかに含み、しまりが弱い。
- 9 暗褐色土 Ⅻ層土ブロックと暗褐色土の混土で、As-Cをわずかに含む。
- 10 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、暗褐色土ブロックをわずかに含む。

第808図 35号住居

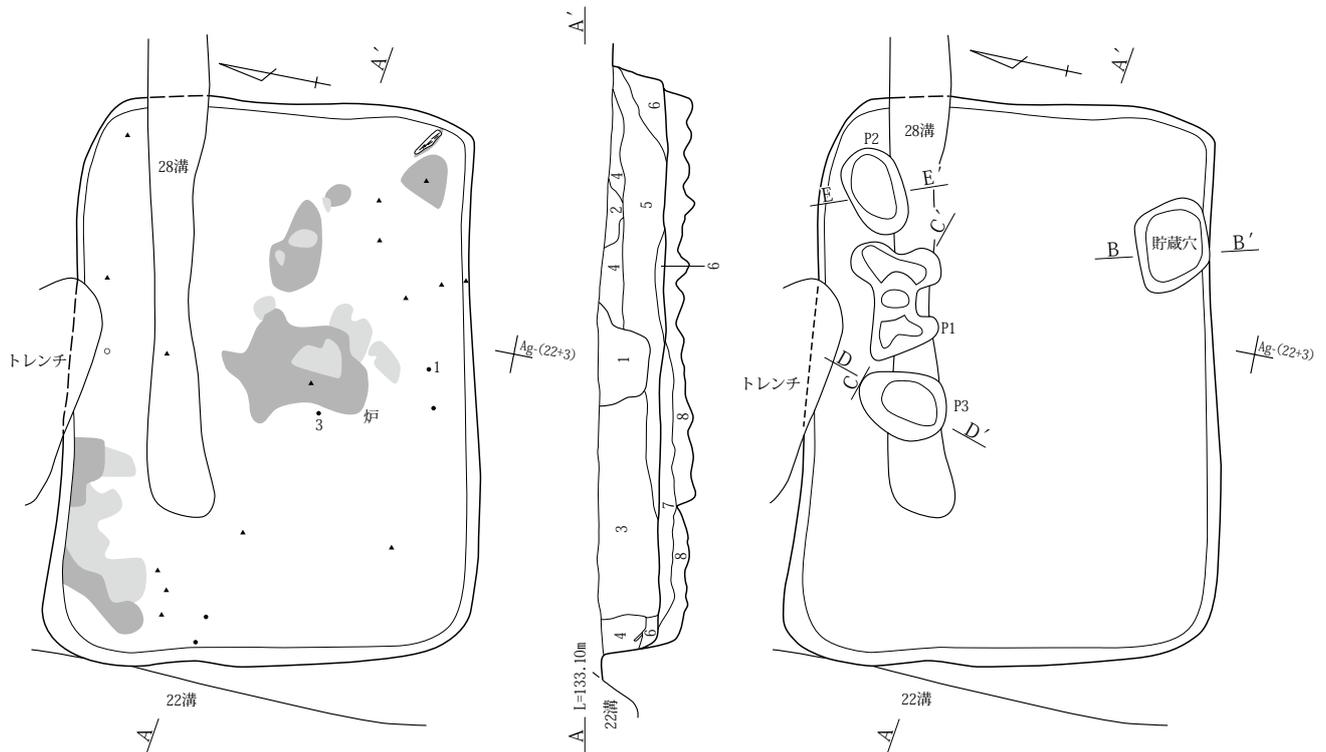


第809図 35号住居炉

36号住居(第810・811図 P L.184)

位置: Af・Ag-22・23グリッド **形状:** 隅丸長方形 **規模:** 4.45m×3.30m **残存深度:** 0.44m **主軸方位:** E-12°-N **埋没土:** As-Cを含むXII層土主体で、VIII層土粒を含むため、明るい色調を呈する。 **柱穴:** 未検出 **炉:** 中央やや北寄りに検出した焼土面を炉と判断した。 **遺物:** 扁平な礫の出土が目立っており、土器片はわずかである。 **重複:** 1面の28号溝が北側の一部を壊している。 **所見:** VIII層上面で確認したが、掘り込みが深く残存状態は良好であった。東西方向の土層断面では36号住居の埋

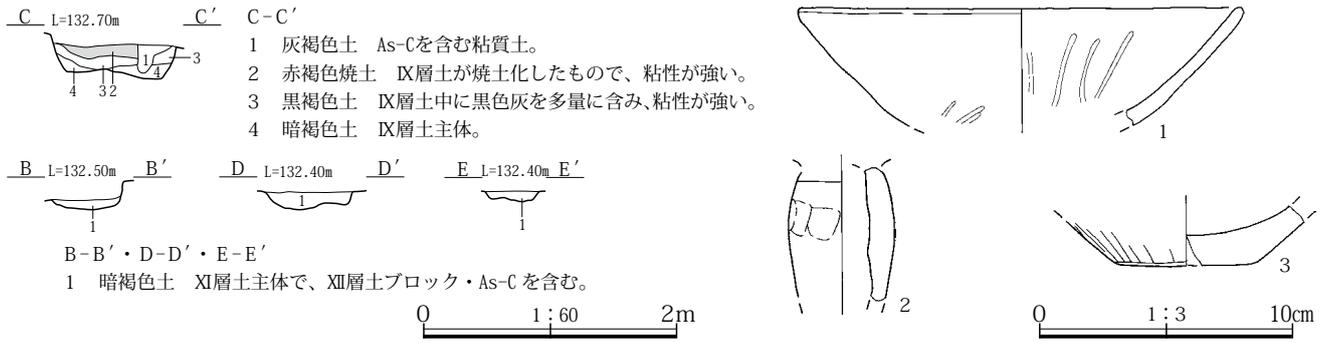
没土が縦に断ち切られるような堆積状況が窺えることから、古代の遺構が重複していた可能性が高いのであるが、平面的にはまったく認識することができなかった。床面には炉と判断した部分も含めて8ヵ所ほどの焼土が検出されているが、炭化物の広がりも認められることから、中央部以外の焼土と炭化物層は住居の焼失に伴って形成されたものである可能性が高い。南壁に接するように検出した0.57×0.65m、深さ0.08mほどの浅い方形掘り込みが位置から貯蔵穴と考えられる。 **時期:** 5世紀前半か



A-A'

- 1 暗褐色土 Va層土主体で、As-Cを多量に含み、粘性は弱く、硬くしまりが強い。
- 2 暗褐色土 VII層土主体。粘性・しまりなし。
- 3 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土小ブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 VII層土主体で、3層より全体に明るい色調を呈する。
- 5 暗褐色土 Va層土主体で、XII層土粒を多量に含み、明るい色調を呈し、粘性・しまりが強い。
- 6 暗褐色土 Va層土とXII層土の混士で、5層より明るい色調を呈する。
- 7 黒褐色土 Va層土主体で、黒色灰・焼土大粒を多量に、XII層土大粒を少量含み、粘性が強い。
- 8 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土ブロックとAs-Cを少量含む。

第810図 36号住居

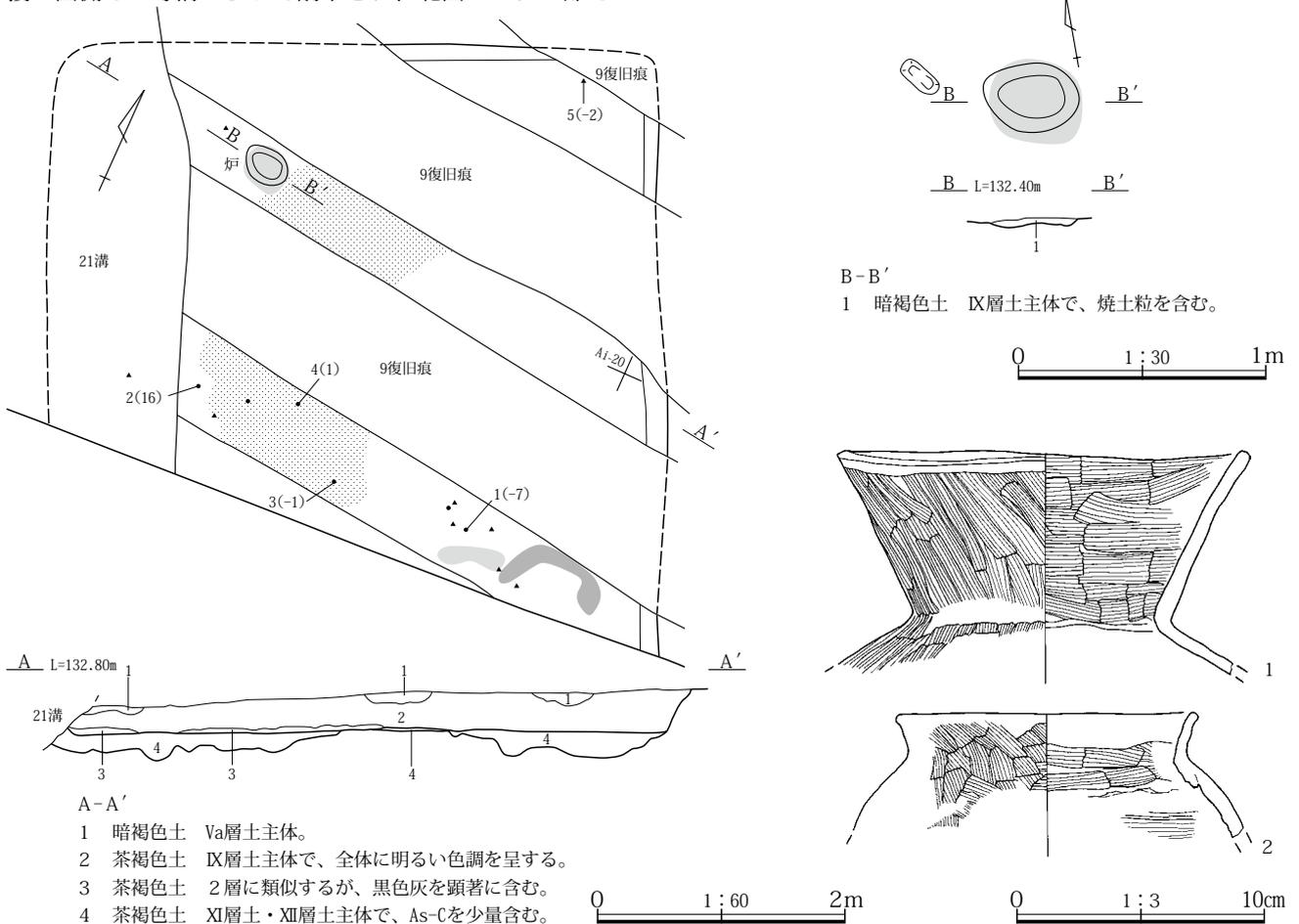


第811図 36号住居貯蔵穴・ピット土層断面図・出土遺物

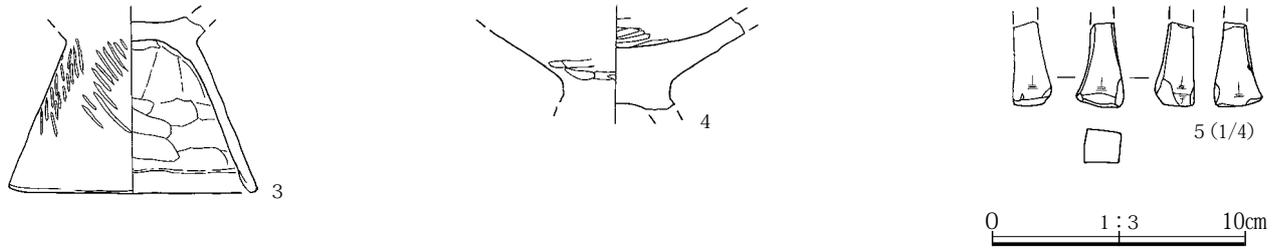
38号住居(第812・813図 P L.184・293)

位置：Ag ~ Ai-19・20グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0.35m 主軸方位：N-24°-W 埋没土：As-Cを含むⅫ層土主体で、全体に明るい色調を呈する。柱穴：未検出 炉：北壁寄りに検出した焼土面を炉と判断した。遺物：硬化した床面から台付甕の脚部(3)が出土した他、南東コーナー部付近の焼土と灰が検出された部分から壺(1)が出土した。また、北東コーナー部近くから砥石(5)が出土したことが特筆される。重複：西側は21号溝によって削平され、北西コーナー部で

35号住居と重複しているものと考えられるが、復旧痕の攪乱によって新旧関係は明らかにできなかった。所見：1面の9号復旧痕によって削平を受けているため、帯状に残存した床面と壁の調査となった。南東部の礫と遺物の出土地点には焼土と炭化物の広がりが見られたが、帯状の分布をしていたことから炉とは考えなかった。床面はⅧ層土中であり、脆弱な土質にもかかわらず中央部には硬化面の広がり確認できた。貯蔵穴は痕跡も検出されていない。時期：4世紀前半



第812図 38号住居・出土遺物(1)

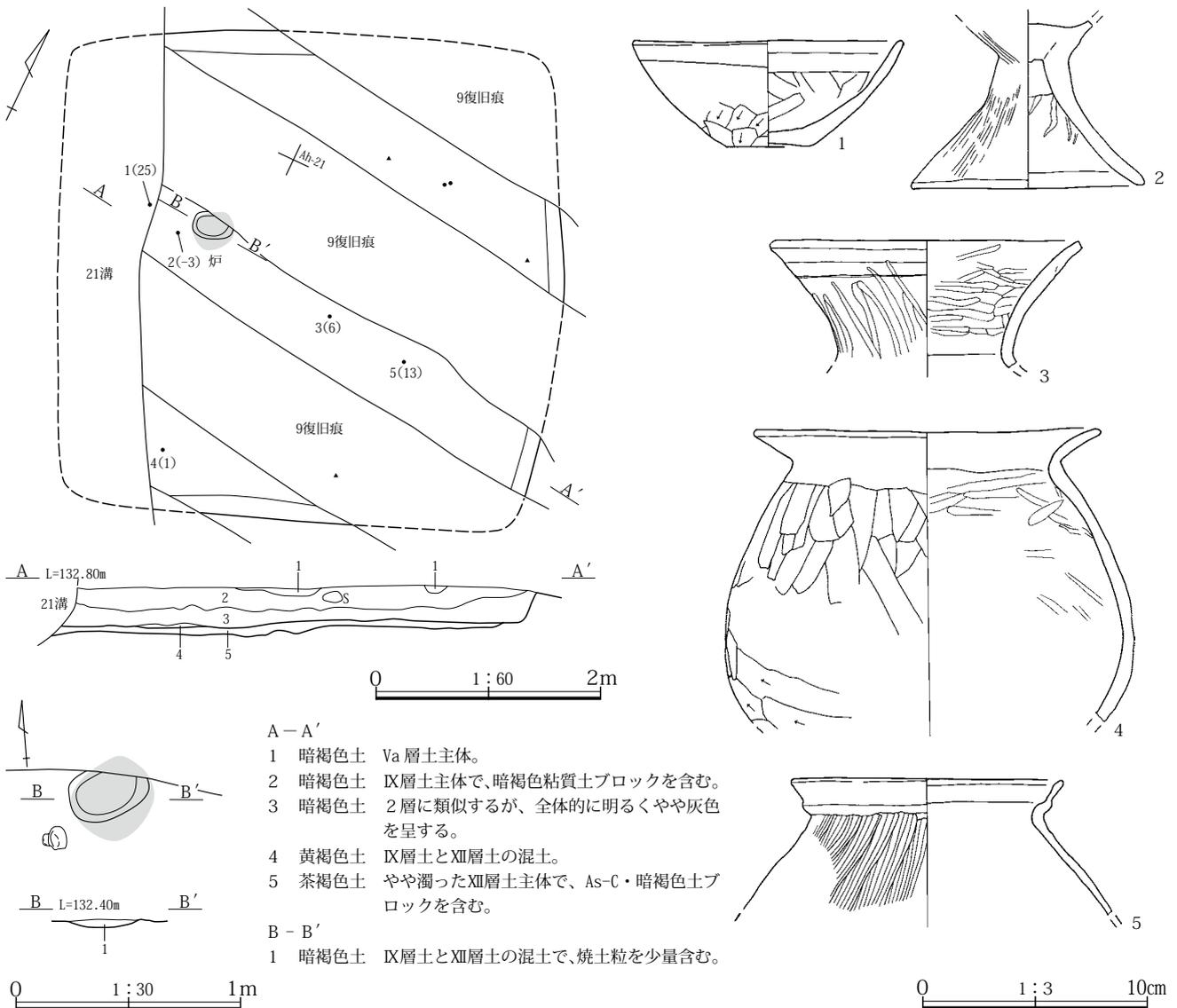


第813図 38号住居出土遺物(2)

39号住居(第814図 P L.185・293)

位置: Ag・Ah-20・21グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0.32m 主軸方位: N-20°-W 埋没土: As-Cを含むⅫ層土主体で、全体に明るい色調を呈する。
 柱穴: 未検出 炉: 中央の西寄りと見られる位置で検出された焼土面が炉と考えられる。 遺物: 帯状に残存した床面の中央部から鉢(1)・台付甕(5)、南寄りの位置

で甕(4)が出土した。 重複: 西側で35号住居と重複している可能性が高いが、21号溝に削平されているため新旧関係は不明。 所見: 9号復旧痕によって大半の部分が削平されているため、検出できたのは帯状に残った床面と壁の一部だけであった。床面はⅧ層中に構築されているが、硬化面は形成されていなかった。貯蔵穴は痕跡も検出されていない。 時期: 4世紀後半



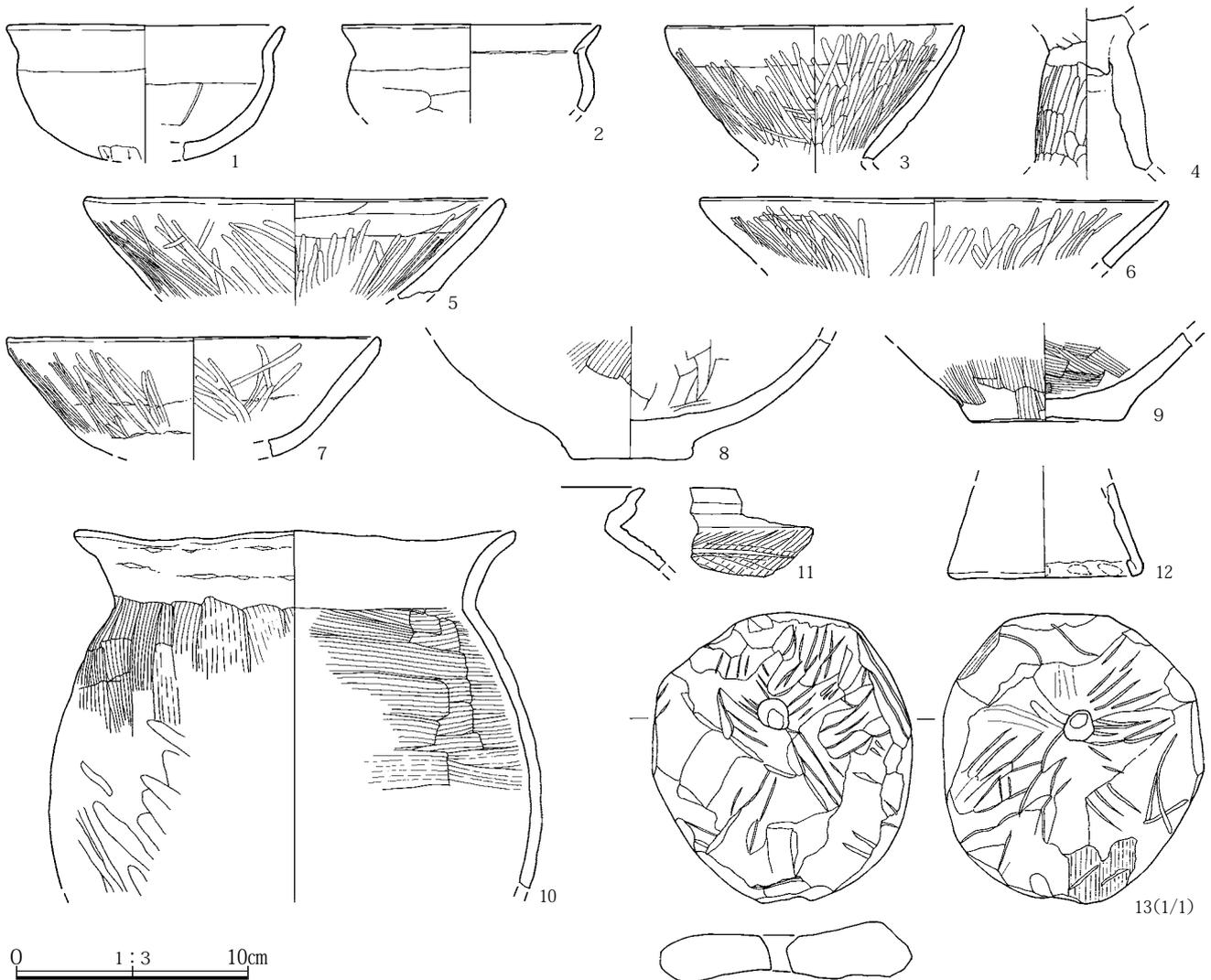
- A-A'
- 1 暗褐色土 Va層土主体。
 - 2 暗褐色土 IX層土主体で、暗褐色粘質土ブロックを含む。
 - 3 暗褐色土 2層に類似するが、全体的に明るくやや灰色を呈する。
 - 4 黄褐色土 IX層土とⅫ層土の混土。
 - 5 茶褐色土 やや濁ったⅫ層土主体で、As-C・暗褐色土ブロックを含む。
- B-B'
- 1 暗褐色土 IX層土とⅫ層土の混土で、焼土粒を少量含む。

第814図 39号住居・出土遺物

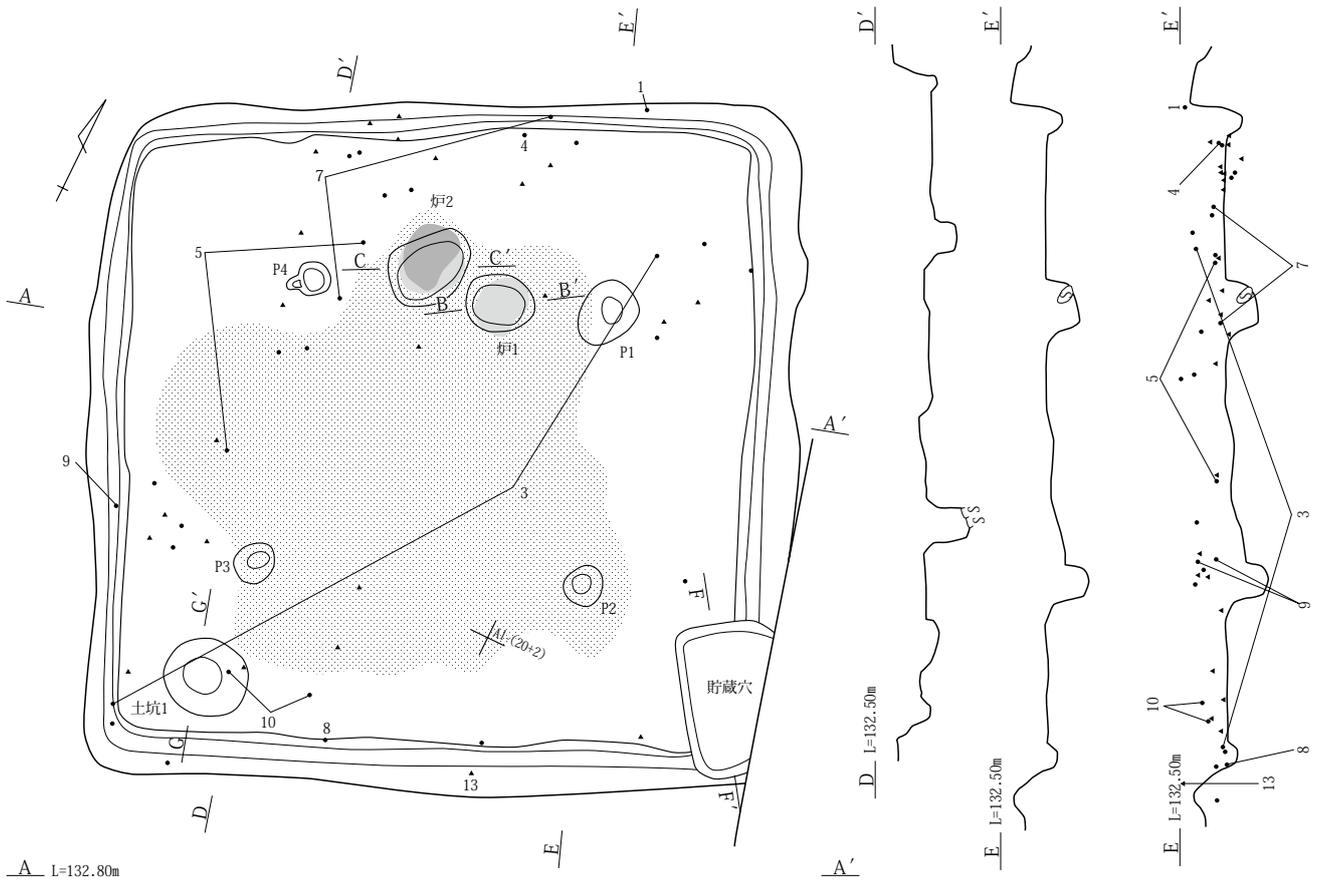
40号住居(第815～817図 P L.185・293)

位置: Ak・A1-19～21グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 5.49m×5.62m 残存深度: 0.43m 主軸方位: N-25°-W 埋没土: As-Cを含むⅫ層土主体で、西側から東方向に埋没していったものと思われる。柱穴: 床面の精査を行った時点で、4カ所のピットを検出したが、方形に配置されたP 1(0.54×0.43m、深さ0.26m、楕円形)、P 2(径0.30m、深さ0.35m、円形)、P 3(径0.31m、深さ0.35m、円形)、P 4(径0.27m、深さ0.25m、円形)の4本を柱穴と判断した。柱穴間の距離は、P 1-P 2間、P 3-P 4間は2.2mほどであるが、P 4-P 1間が2.35m、P 2-P 3間が2.55mと南側を底辺とした台形状の配置となっている。柱穴の掘り込みは比較的浅いが、すべて礫層まで達している。炉: 北側柱穴間に焼土面を2カ所検出した。遺物: 土坑1内から甕(10)、北寄りの床面から壺(5)、南壁に接して石製の有孔円板(13)が

出土した他、壁際から扁平な大型礫が出土した。また、北東コーナー部の壁に接するように赤色顔料がわずかに検出されたことが特筆される。重複: なし 所見: 南東コーナー部がわずかに調査できなかったものの、ほぼ全体を明らかにできた遺構で、掘り込みが深かったために残存状態も良好である。壁際には、幅0.20m、深さ0.08mほどの壁溝が全周している。床面はⅫ層土ブロックとAs-Cを含むⅫ層土の混土で平坦に形成され、柱穴に囲まれた範囲に硬化面が検出された。床面を精査した時点で、柱穴の他に南西コーナー部に土坑1(径0.61m、深さ0.32m、円形)、南東コーナー部に1.22×(0.78)m、深さ0.23mの長方形を呈する貯蔵穴を検出した。貯蔵穴内部からの遺物出土は認められなかった。掘り方は、壁際にわずかに深く掘り込まれていた他、ピットが15カ所ほど検出されたが、配置に規則性は捉えられなかった。時期: 5世紀前半



第815図 40号住居出土遺物



A - A'

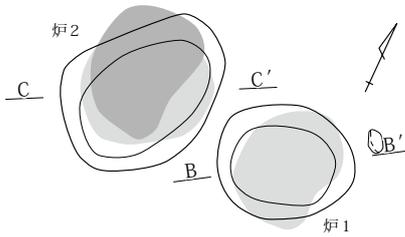
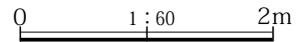
- 1 暗褐色土 IX層土主体で、As-C・灰褐色土粘質土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 IX層土主体で、灰褐色粘質土（シルト質）ブロックを多量に、As-Cを少量含む。
- 3 暗褐色土 IX層土主体で、灰褐色粘質土（シルト質）ブロック・黒色灰を少量含む。
- 4 黒褐色土 IX層土主体で、黒色灰を多量に含み、粘性・しまりが強い。
- 5 暗褐色土 XII層土類似の粘質土主体で、IX層土ブロックを含む。
- 6 暗褐色土 XII層土主体で、全体にやや暗色でAs-Cをごくわずかに含む。
- 7 黄褐色土 IX層土とXII層土ブロックの混土。

F - F'

- 1 暗褐色土 XI層土主体。粒子粗い。
- 2 暗褐色土 XII層土を少量含み、1層より粘性が強い。

G - G'

- 1 暗褐色土 IX層土とXII層土ブロックの混土で、炭化物をわずかに含む。



B - B'



B - B'

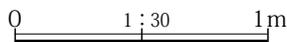
- 1 暗褐色土 IX層土中に焼土大粒を多量に含む。
- 2 黒褐色土 IX層土中に黒色灰を多量に含む。

C - C'



C - C'

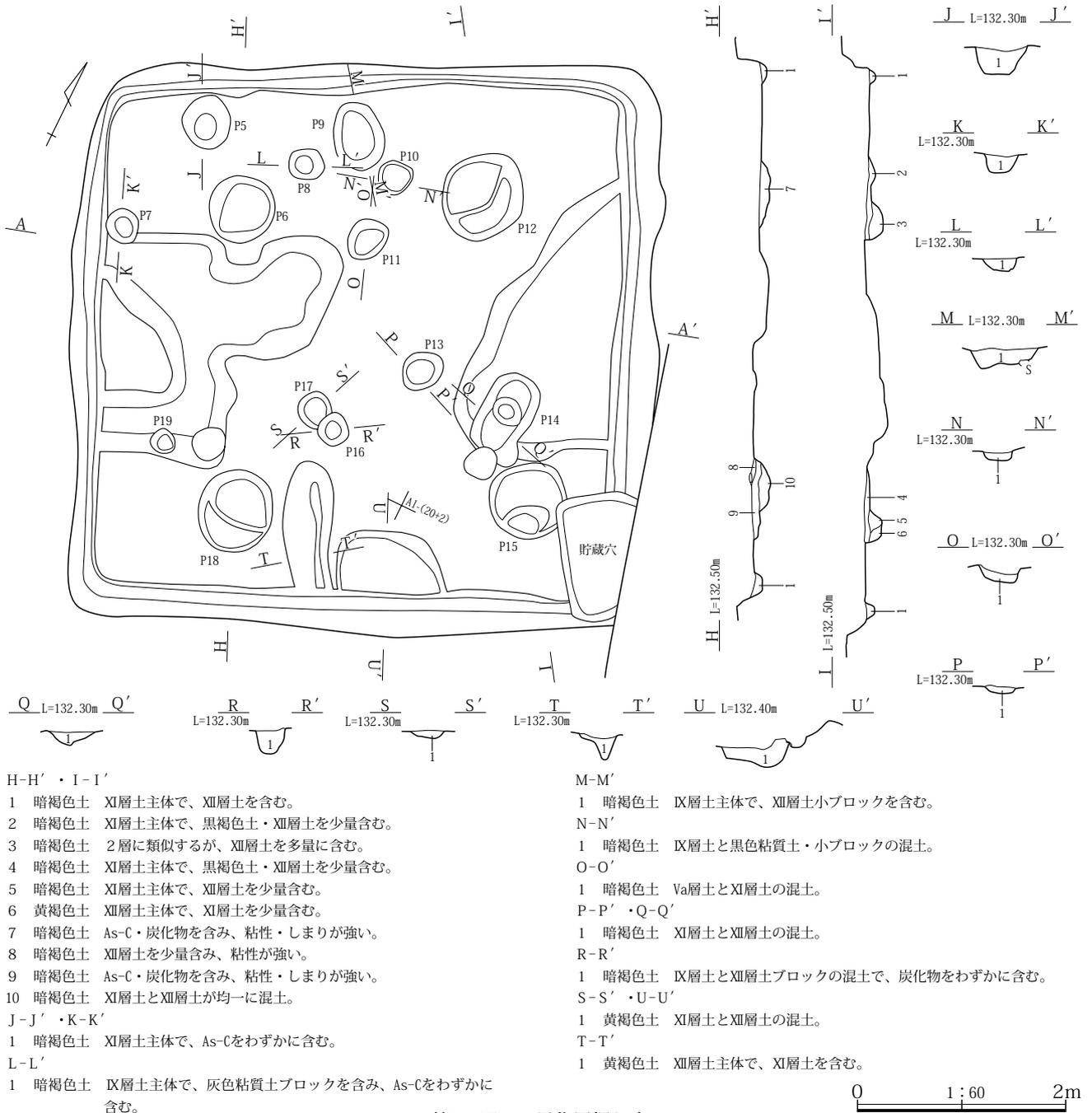
- 1 赤褐色焼土 XII層土が焼土化。
- 2 暗褐色土 焼土粒を少量含む。



第20表 40号住居 ピット計測表

番号	規模	深さ	形状
P 5	0.50	0.28	円形
P 6	0.62	0.18	円形
P 7	0.34	0.17	円形
P 8	0.35	0.25	円形
P 9	0.67×0.48	0.17	楕円形
P 10	0.32	0.25	円形
P 11	0.40	0.23	円形
P 12	0.80	0.12	円形
P 13	0.35	0.10	円形
P 14	0.82×0.50	0.17	楕円形
P 15	0.75	0.11	円形
P 16	0.30	0.23	円形
P 17	0.32	0.13	円形
P 18	0.62	0.17	円形
P 19	0.24	0.24	円形

第816図 40号住居



H-H'・I-I'

- 1 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土を含む。
- 2 暗褐色土 XI層土主体で、黒褐色土・XII層土を少量含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、XII層土を多量に含む。
- 4 暗褐色土 XI層土主体で、黒褐色土・XII層土を少量含む。
- 5 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土を少量含む。
- 6 黄褐色土 XII層土主体で、XI層土を少量含む。
- 7 暗褐色土 As-C・炭化物を含み、粘性・しまりが強い。
- 8 暗褐色土 XII層土を少量含み、粘性が強い。
- 9 暗褐色土 As-C・炭化物を含み、粘性・しまりが強い。
- 10 暗褐色土 XI層土とXII層土が均一に混土。

J-J'・K-K'

- 1 暗褐色土 XI層土主体で、As-Cをわずかに含む。

L-L'

- 1 暗褐色土 IX層土主体で、灰色粘質土ブロックを含み、As-Cをわずかに含む。

M-M'

- 1 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土小ブロックを含む。

N-N'

- 1 暗褐色土 IX層土と黒色粘質土・小ブロックの混土。

O-O'

- 1 暗褐色土 Va層土とXI層土の混土。

P-P'・Q-Q'

- 1 暗褐色土 XI層土とXII層土の混土。

R-R'

- 1 暗褐色土 IX層土とXII層土ブロックの混土で、炭化物をわずかに含む。

S-S'・U-U'

- 1 黄褐色土 XI層土とXII層土の混土。

T-T'

- 1 黄褐色土 XII層土主体で、XI層土を含む。

43号住居(第818～821図 P L.185・186・293・294)

位置: Ai・Aj-20・21グリッド 形状: 隅丸長方形 規模:

7.24m×5.17m 残存深度: 0.15m 主軸方位: E-25

°-N 埋没土: やや灰色に変質したIX層土主体。柱

穴: 未検出 炉: 中央やや北寄りに焼土面を検出した。

遺物: 遺物と礫が北から東側にかけて床面直上から集中

して出土した。特に北壁寄りの中央部からは高環(7・8・

10・11)・埴(1)・鉢(4)・甕(3)が、東壁寄りからは

甕(6・15・22)・大型鉢(24)、中央北寄りからは甕(16)

などが出土した。重複: 南側で44号住居と重複してお

り、埋没土の堆積状況から44号住居→43号住居と考えら

れる。所見: 9号復旧痕と10号復旧痕との間は比較的

残存状態が良く、大型の土器片が床面に潰れたような状

態で出土しており、間層をほとんど挟まないことから住

居の廃棄時期に近い遺物と考えられる。南東コーナー部

に検出した一辺0.80m、深さ0.10mの方形土坑を貯蔵穴

と考えたが、44号住居との重複部分に検出した、44号住

居土坑1が貯蔵穴であった可能性もある。また、東寄り

の床面中央部に検出した1.42×1.27m、深さ0.22mの不

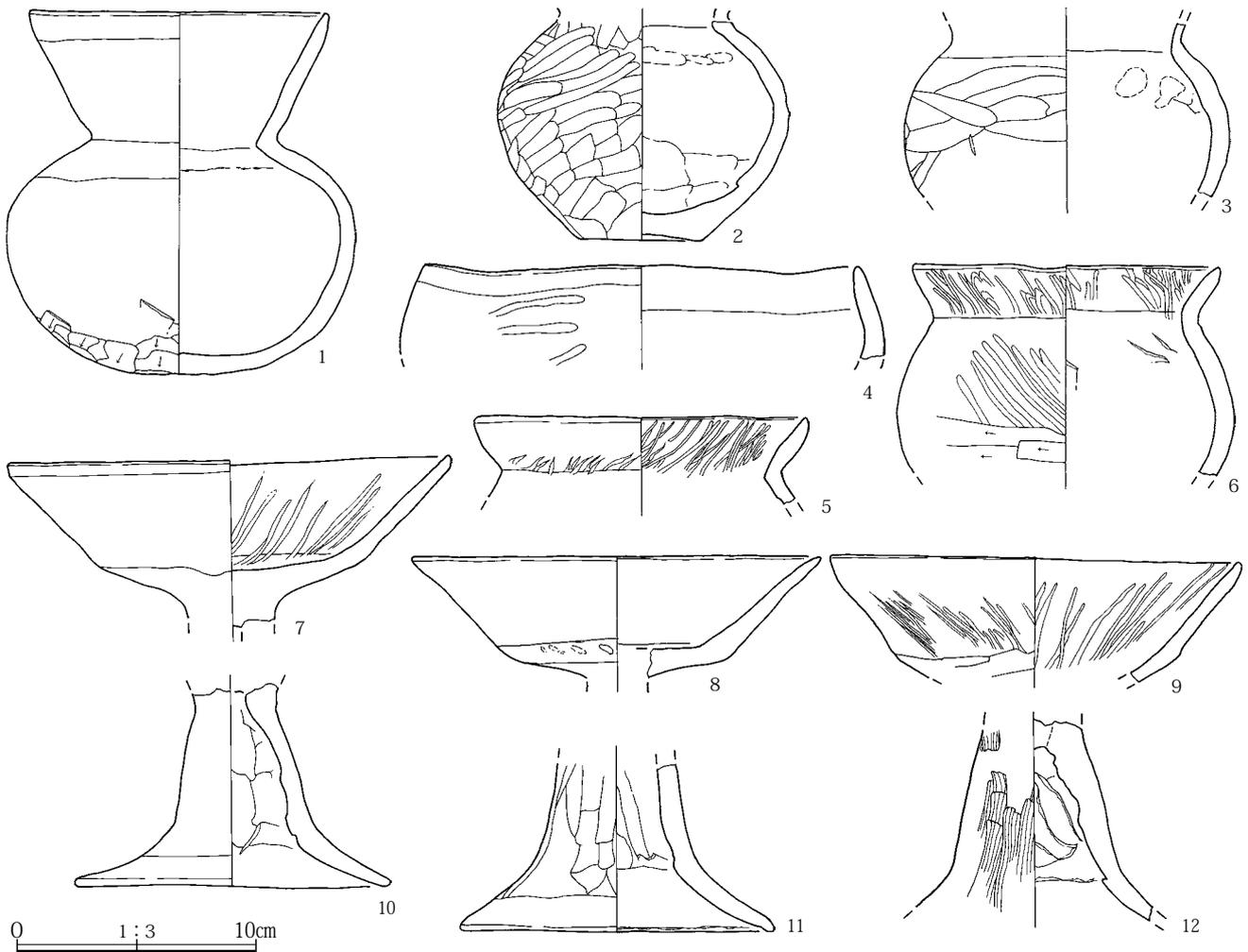
整楕円形の土坑1は、床面精査の時点で検出したもので

あり、埋没土の状況からも43号住居に伴う土坑と考えられる。また、44号住居の北壁に接してP 1（径0.41m、深さ0.21m、円形）を検出したが、1カ所だけであり柱穴とは考えられない。 時期：5世紀前半

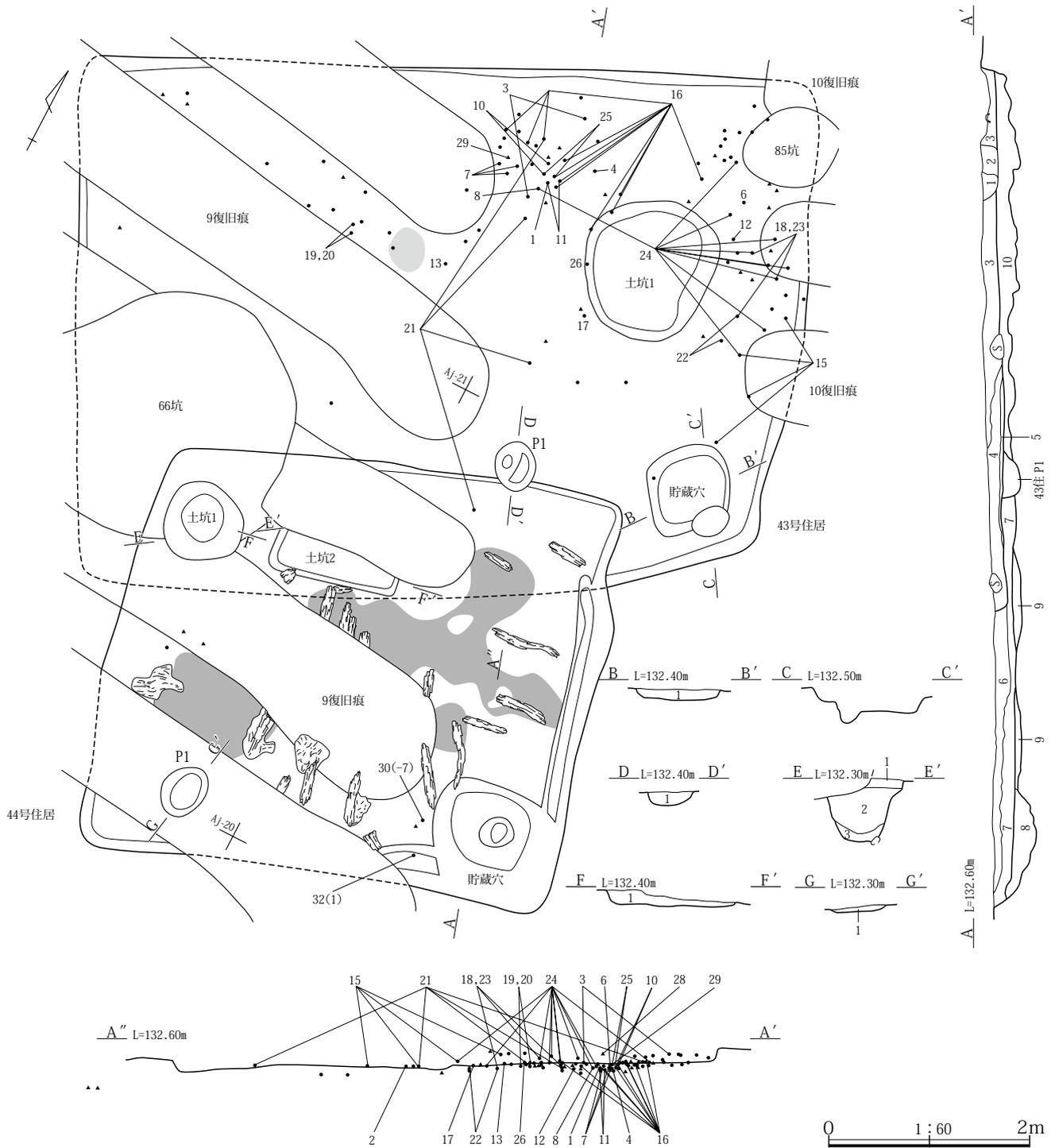
44号住居（第819・821図 P L.186・294）

位置：Ai・Aj-19・20グリッド 形状：隅丸長方形 規模：4.78m×4.16m 残存深度：0.21m 主軸方位：E-15°-N 埋没土：As-Cを含むⅫ層土主体の層。柱穴：未検出 炉：壁寄りに3カ所の焼土面を検出したが、住居の焼失に伴って形成されたものと考えられ、復旧痕によって削平された住居中央部にあったものと思われる。 遺物：床面近くには炭化材の痕跡が顕著で、遺物の出土はごくわずかであった。掲載した坏(30)・壺(32)は南東コーナー部の貯蔵穴際から出土した。 重複：北側で43号住居と重複しており、埋没土の堆積状況から44号住居→43号住居と考えられる。 所見：西側は9号復旧痕の攪乱によって大半が失われているが、残存した部

分の床面には、形を明瞭に留めないものの全体に炭化材の痕跡が検出された。東壁寄りの部分では東西方向の炭化材があり、南壁寄りには南北方向の炭化材が認められることから、垂木が炭化して残ったものと見られる。したがって、44号住居は上屋が掛かった状態で焼失したものと考えられる。南東コーナー部には、深さ0.22mほどの鍋底状の底面を有する土坑が検出されているが、この部分が貯蔵穴と考えられる。この貯蔵穴から西壁、南壁に沿って壁溝状の掘り込みを検出したが、全周してはいなかった。北西コーナー部に検出した土坑1（径0.78m、深さ0.46m、円形）は前述のように43号住居との重複部分にあり、どちらに帰属するものなのか判然としない。他に土坑1の東側に一辺が1.30m、深さ0.16mの長方形を呈すると思われる土坑2と南西コーナー付近からP 1（0.53×0.42m、深さ0.13m、楕円形）を検出した。 時期：4世紀後半以前



第818図 43号住居出土遺物(1)



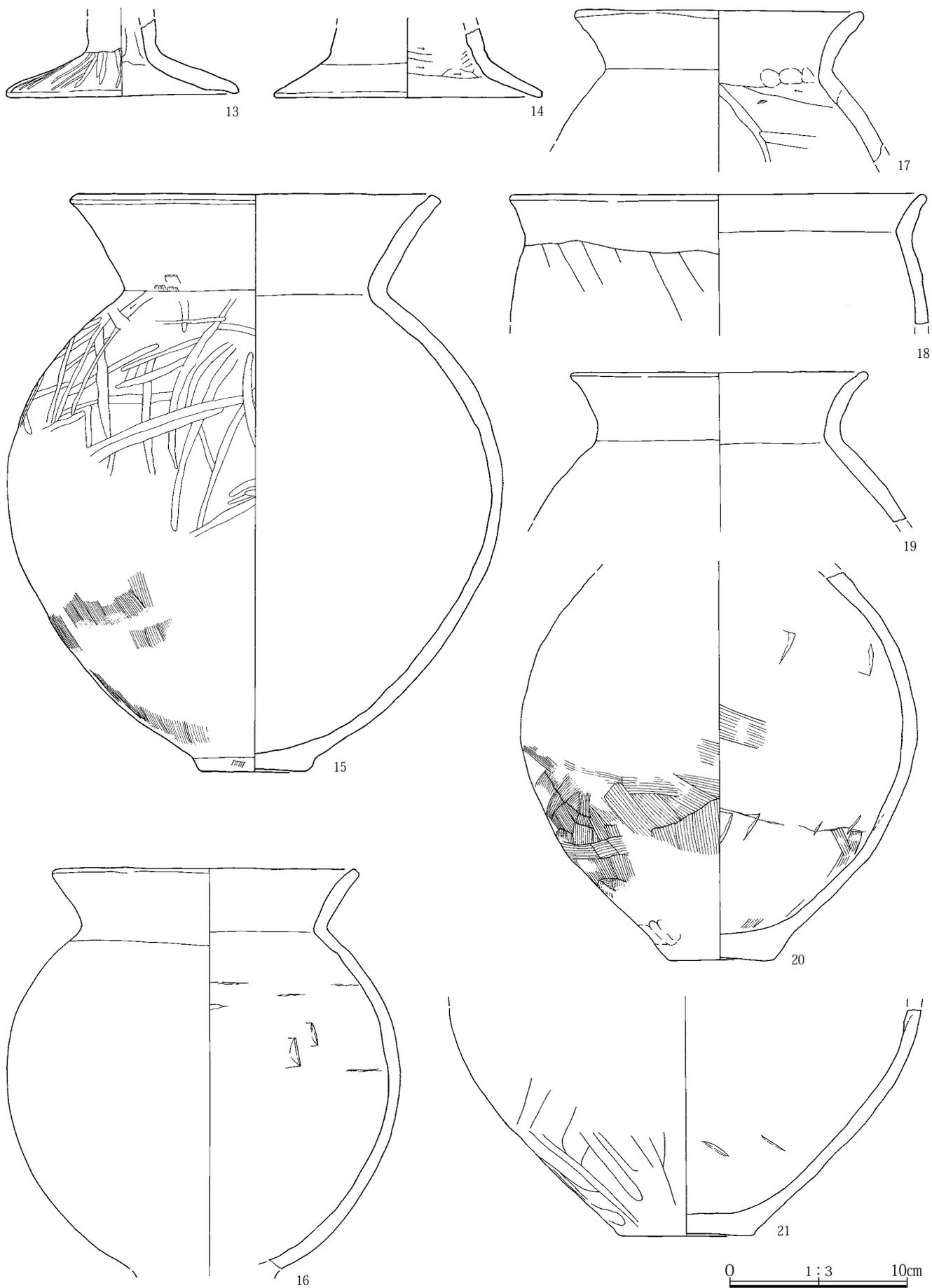
A-A'

- 1 灰褐色土 Va層土主体で、全体に灰色を呈し、しまりが弱い。
- 2 灰褐色土 Va層土主体で、全体に灰色を呈し、硬くしまりが強い。
- 3 灰褐色土 As-Cを含む灰褐色土で、硬くしまりが強い。
- 4 暗褐色土 IX層土類似で、炭化物を少量含み、硬くしまりが強い。
- 5 暗褐色土 IX層土とXII層土ブロックの混土で、炭化物を少量含み、粘性・しまりが強い。
- 6 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土粒・炭化物を少量含み、しまりが強い。
- 7 暗褐色土 IX層土とXII層土の混土。粘性・しまりあり。
- 8 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cを均一に少量含み、粘性がやや強い。
- 9 黄褐色土 XII層土主体で黒色灰・炭化物を多量に、XI層土ブロック・As-Cを少量含み、粘性がやや強い。
- 10 暗褐色土 IX層土とXII層土の混土で、炭化物をわずかに含む。

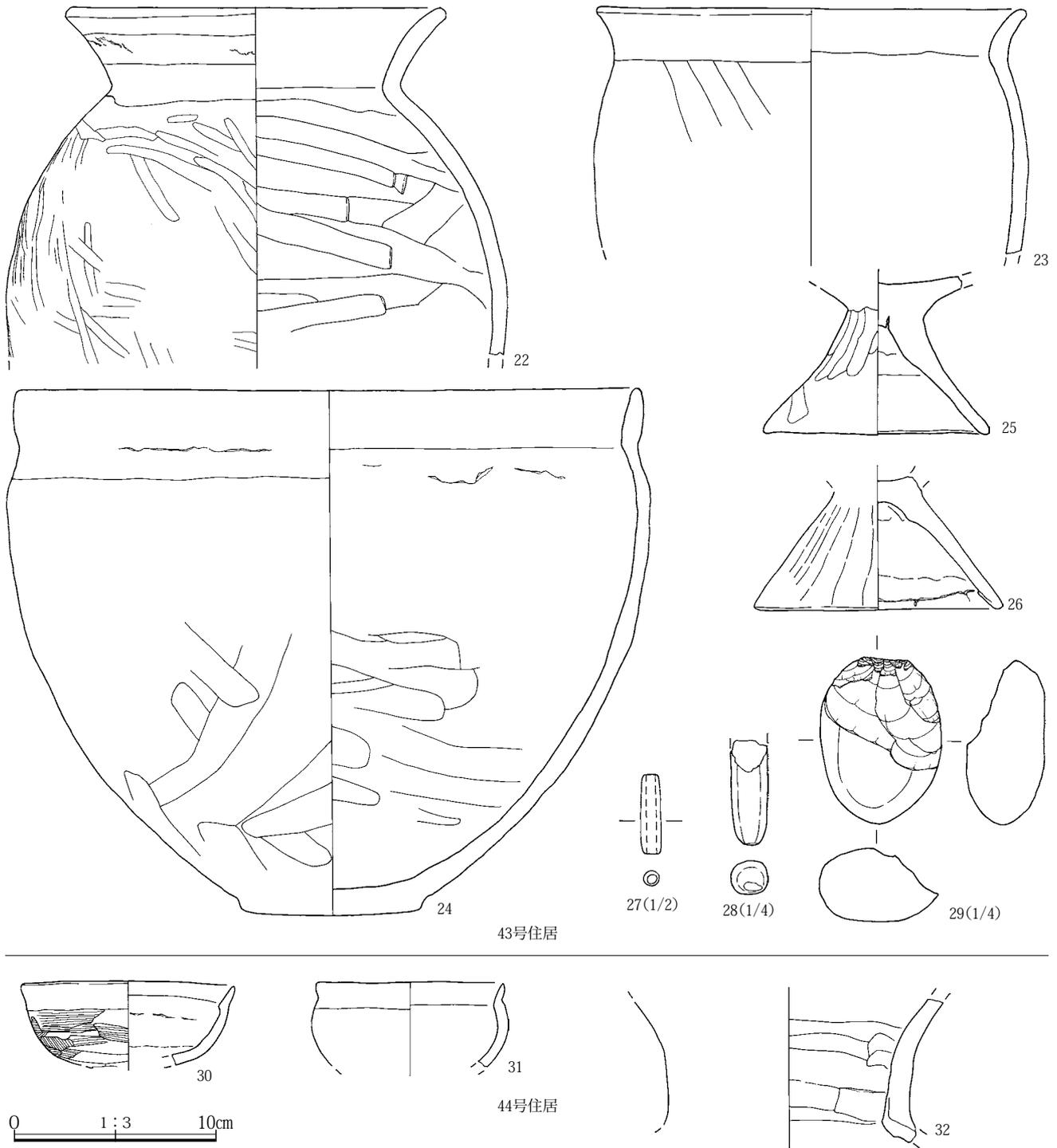
B-B'

- 1 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土（粘質土）ブロックを少量含む。
- D-D'
- 1 暗褐色土 IX層土主体で、XII層土粒を含み、As-Cを少量含む。
- E-E'
- 1 暗褐色土 IX層土主体で、炭化物大粒を少量含み、しまりが強い。
- 2 暗褐色土 IX層土主体で、炭化物粒を少量含み、しまりが弱い。
- 3 暗褐色土 IX層土とXII層土ブロックの混土で、炭化物を带状に含む。
- F-F'
- 1 暗褐色土 IX層土主体で、炭化物大粒を多量に含み、しまりが強い。
- G-G'
- 1 暗褐色土 IX層土と灰色粘質土ブロックの混土で、炭化物粒を少量含む。

第819図 43・44号住居



第820図 43号住居出土遺物(2)



43号住居

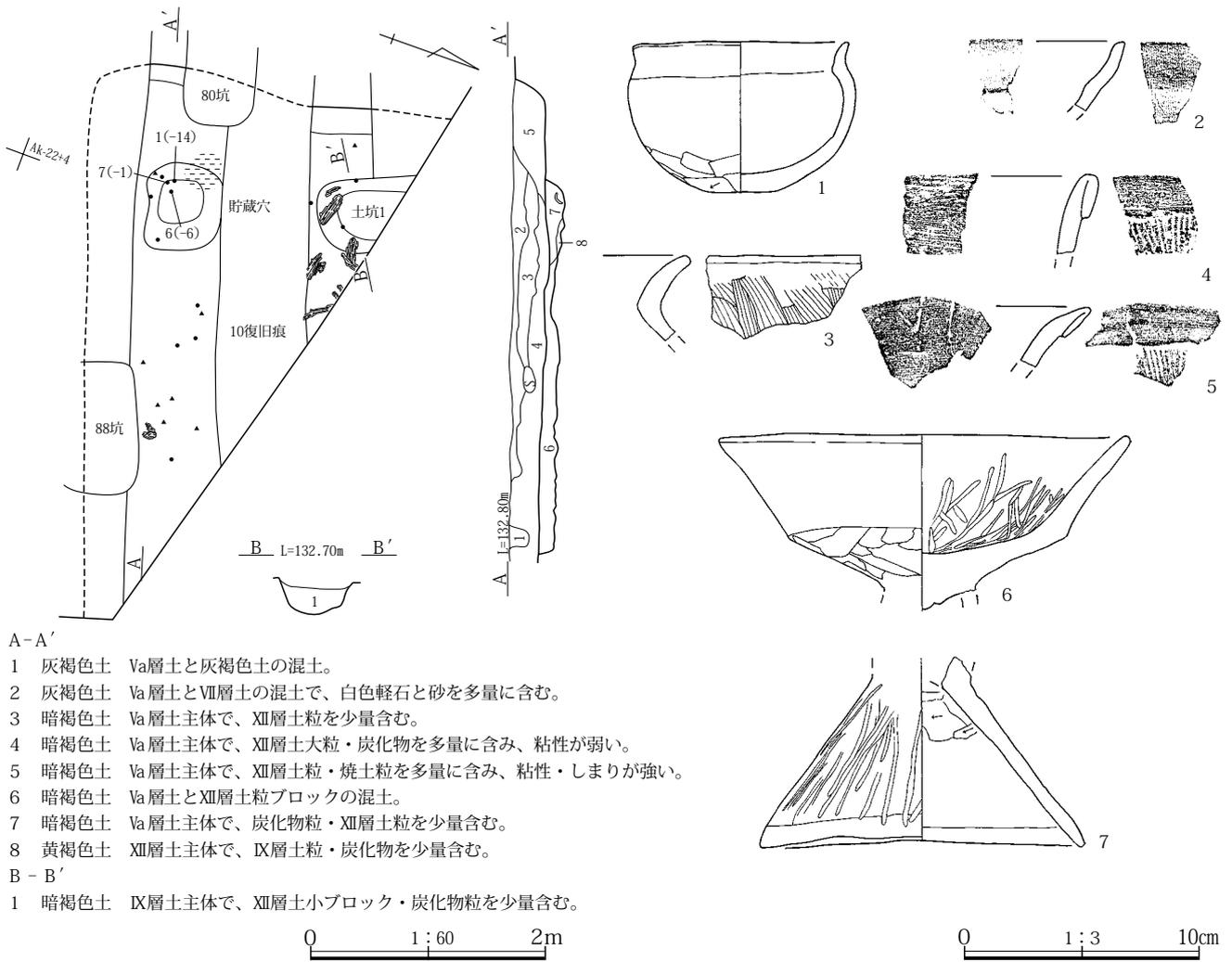
44号住居

第821図 43・44号住居出土遺物

45号住居(第822図 P L.186・294)

位置：Aj・Ak-22・23グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0.27m 主軸方位：不明 埋没土：As-Cを含むⅫ層土主体の層。 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：床面付近に土器片や礫と共に炭化材が出土しており、貯蔵穴底面から鉢(1)・高坏(6・7)が出土した。 重複：1面の遺構以外の重複はなし。 所見：45号住居は、調査区北端で検出されたもので、全体の1/3程度を調査

したものと考えられるが、復旧痕による攪乱が深くに及んでいたため、床面、壁共に帯状の検出に止まった。床面精査の時点で、西寄りに0.76×0.62、深さ0.31mの隅丸長方形を呈する貯蔵穴と、土坑1(短軸0.62m、深さ0.29m、楕円形)を検出した。北寄りの床面には炭化材が残存しており、焼土の形成は確認されていないが、焼失した可能性が高い。 時期：5世紀前半



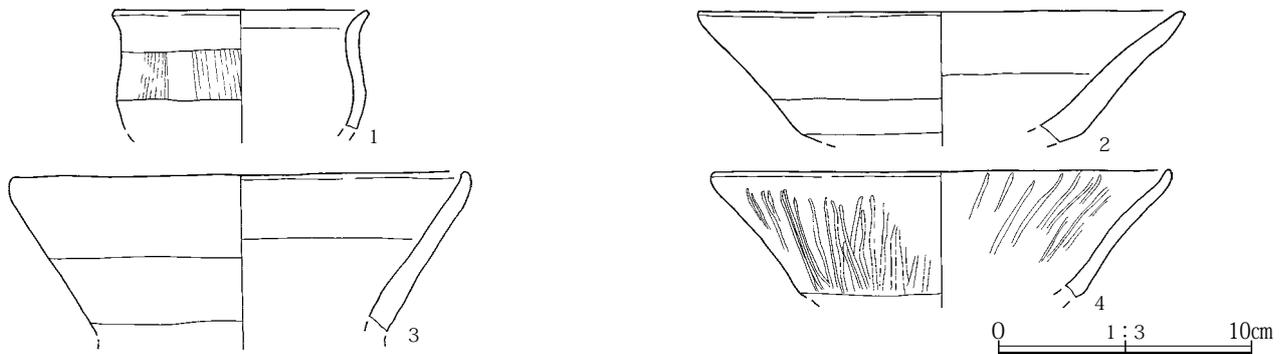
第822図 45号住居・出土遺物

47号住居(第823・824図 P L.186・187・294)

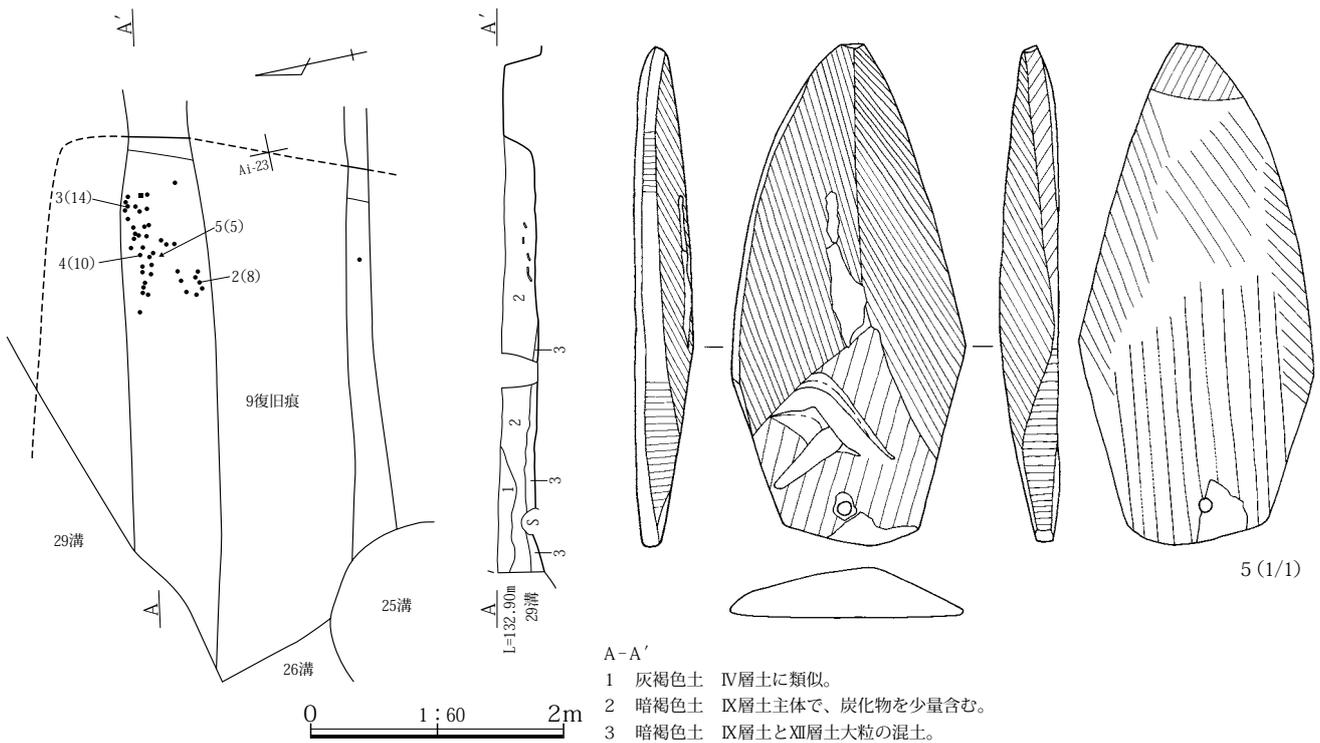
位置: Ah・Ai-22・23グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0.25m 主軸方位: 不明 埋没土: やや
 淡い色調のIX層土主体で、微量の炭化物を含有する。

柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: わずかに残存した東
 寄りの床面に小礫と土器片が集中しており、高坏(2・
 4)・直口壺(3)が出土した他、集中部の中央から剣形

石製模造品(5)が出土したことが特筆される。重複:
 1面の9号復旧痕によって大半が削平されている。所
 見: 1面9号復旧痕によって削平を受けており、南北幅
 が0.3~0.7mほどの帯状に床面が検出されたものであ
 る。床面は全体に軟質で、部分的にも硬化した面は認め
 られない。また、床面はXII層土中に構築されており掘り
 方は認められない。 時期: 5世紀前半



第823図 47号住居出土遺物(1)

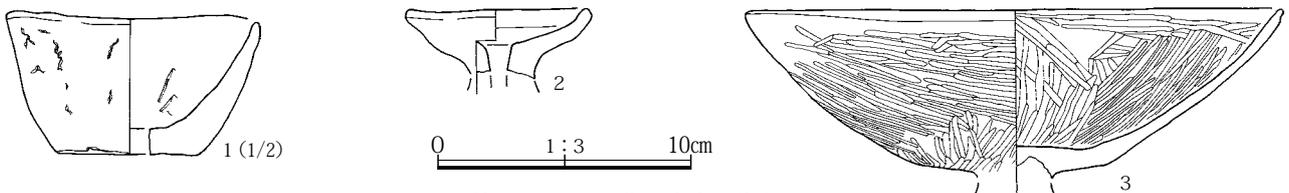


第824図 47号住居・出土遺物(2)

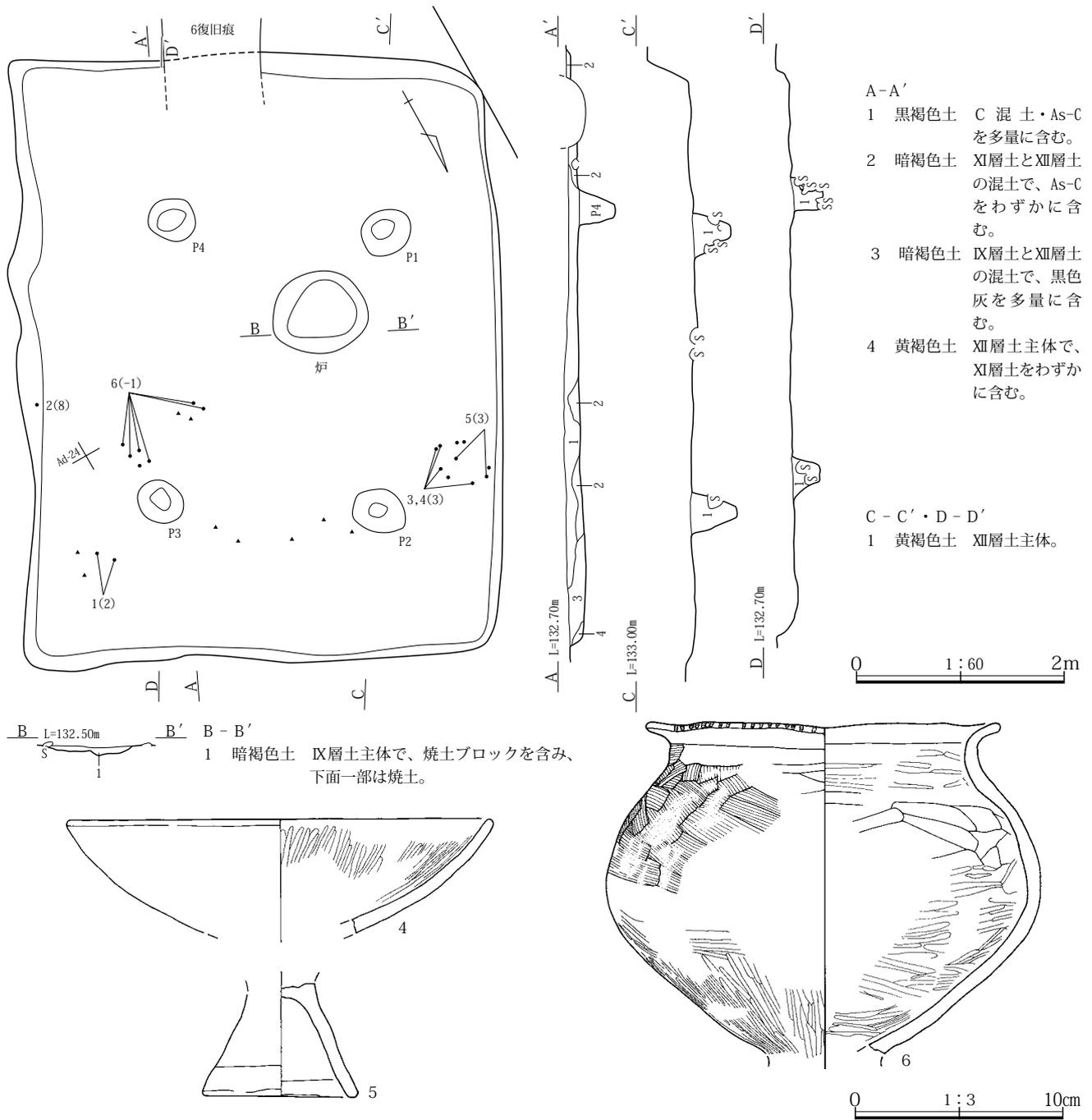
49号住居(第825・826図 P L.187・294)

位置:Ac・Ad-23・24グリッド **形状:**隅丸長方形 **規模:**5.88m×4.52m **残存深度:**0.41m **主軸方位:**N-28°-E **埋没土:**Ⅸ層土主体の土層で、下層ほどAs-C含有量が少ない。**柱穴:**床面精査の時点で検出されたP 1 (0.50×0.43m、深さ0.37m、楕円形)、P 2 (0.54×0.42m、0.45m、楕円形)、P 3 (0.45×0.40m、深さ0.27m、楕円形)、P 4 (径0.45m、深さ0.34m、円形)の4カ所のピットが柱穴と判断した。柱穴間の距離は、P 1-P 2間、P 3-P 4間が2.70m、P 2-P 3間、P 4-P 1間が2.10mである。柱穴はいずれもわずかに礫層を掘り込んでいた。**炉:**P 1 近くに検出した0.93×0.81m、深さ0.07mの楕円形を呈する浅い掘り込み内に焼土ブロックが入っており、底面の一部が焼土化していたことから、この位置を炉と判断した。**遺物:**土器の出土はわずかで、西壁寄りの位置で高坏(3・4)・台付甕(5)、中央部で台付甕(6)、北東コーナー部近くで有孔鉢(1)

が出土した他、北寄りの床面から9点の棒状礫が出土している。一カ所に集中したわけではないが、いわゆる「菰編み石」の可能性があろう。**重複:**33号住居と重複し、検出状況から49号住居→33号住居と考えられる。**所見:**当住居は、33号住居との重複のため3面の遺構確認時点では平面形がまったく認識されなかった住居である。33号住居の調査が床面下の調査に移行した段階で、住居埋没土である黒褐色のⅨ層土が長方形に認識され、遺構の存在が判明した。33号住居による削平によって、壁の大半が10cm前後しか残存していなかったが、南西コーナー部付近だけは33号住居と重複していないため、やや傾斜する壁面の状況が観察できた。掘り方は無く、床面はⅫ層土を床面として構築されていたものと見られるが、硬化面はまったく確認されなかった。遺物の取り上げ後に床面の精査を行ったが、貯蔵穴に当たるような土坑の検出はできなかった。**時期:**3世紀後半



第825図 49号住居出土遺物(1)



第826図 49号住居・出土遺物(2)

51号住居(第828・829図 P L.187・188)

位置：Ag・Ah-13・14グリッド 形状：隅丸方形 規模：5.08m×4.94m 残存深度：0.18m 主軸方位：N-7°-W 埋没土：IX層土とやや淡い色調のIX層類似土の混土主体。柱穴：住居範囲内で14カ所のピットを検出したが、位置から判断してP1(径0.32m、深さ0.25m、円形)、P2(径0.37m、深さ0.27m、円形)、P3(0.53×0.33m、深さ0.23m、不整楕円形)、P4(0.44×0.35m、深さ0.15m、不整楕円形)の4カ所が柱穴と考えられる。P2-P3間及びP4-P1間はほぼ3.00m、P1-P2

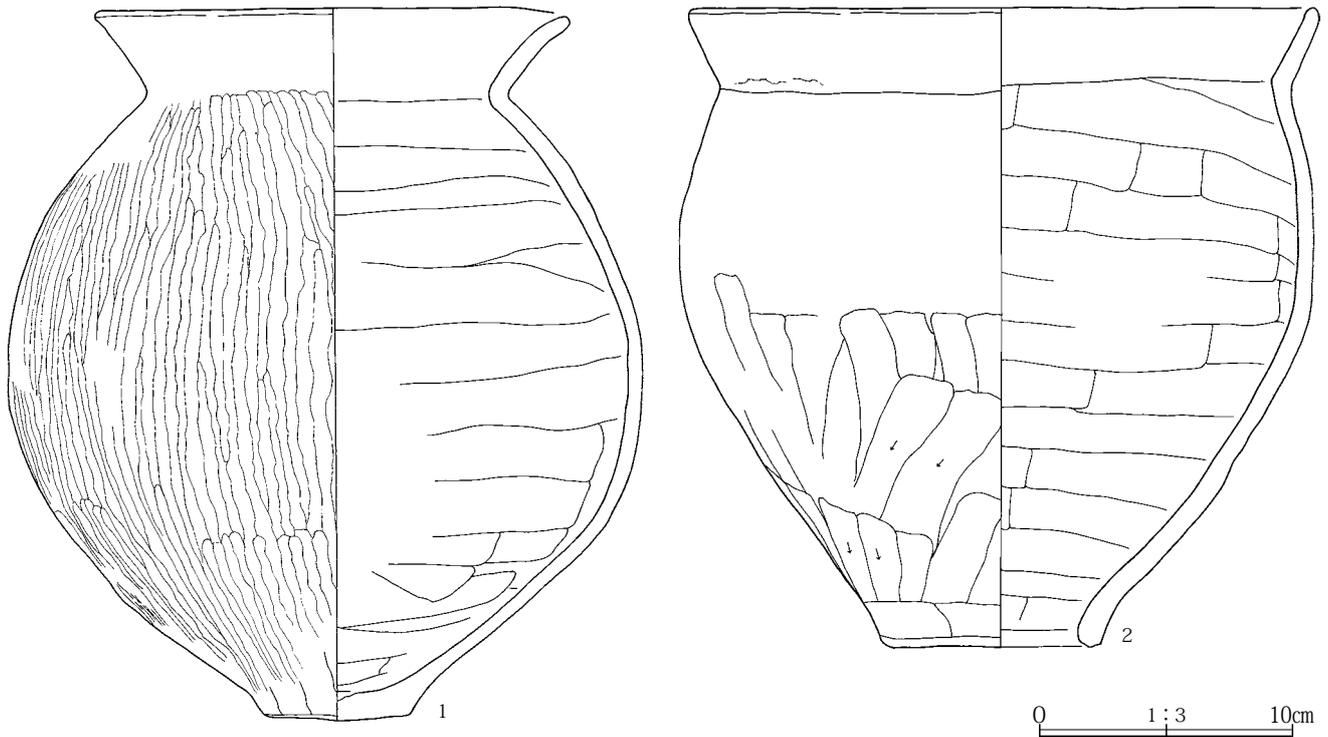
間が2.20m、P3-P4間が2.40mである。いずれの柱穴も浅く、底および壁面に礫が出土しているが、作為的に入れられたものではなく、基盤の礫層が浅い位置にあるため柱穴掘削を礫層で止めたことによるものと思われる。炉：未検出 遺物：中央北寄りの位置に潰れた状態で遺物が集中していたため、調査時点では51号住居の遺物として扱っていたが、土層断面観察によれば、55号住居が新しく、ちょうど55号住居の床面と見られる位置であることから、集中していた遺物のすべてを55号住居に所属するものと判断した。重複：55号住居と重複し、

51号住居→55号住居と考えられる。南側の一部は1面8号溝に削平され失われている。 所見：当住居は12号復旧痕の調査過程で、底面下に遺物が含まれていることから住居の存在が認識された。当初は重複する55号住居の存在に気づかずに進めたため、前述のように面的に出土した遺物を当住居に帰属するものと判断していた。しかし、南北方向の土層断面において明確な重複関係を把握できたため、出土遺物のほとんどが55号住居の帰属であることがわかった。55号住居の掘り込みは、51号住居の床面より下まで及んでいたものと思われ、炉は検出されなかった。貯蔵穴は、確証が得られたわけではないが、位置から見て北西コーナー近くに検出した径0.44m、深さ0.16m、円形を呈するピット状の掘り込みを想定した。掘り方は、あまり明瞭な違いではないが、周辺部を浅く掘り窪める当遺跡において類例の多い掘り方と見て良いであろう。 時期：4世紀代

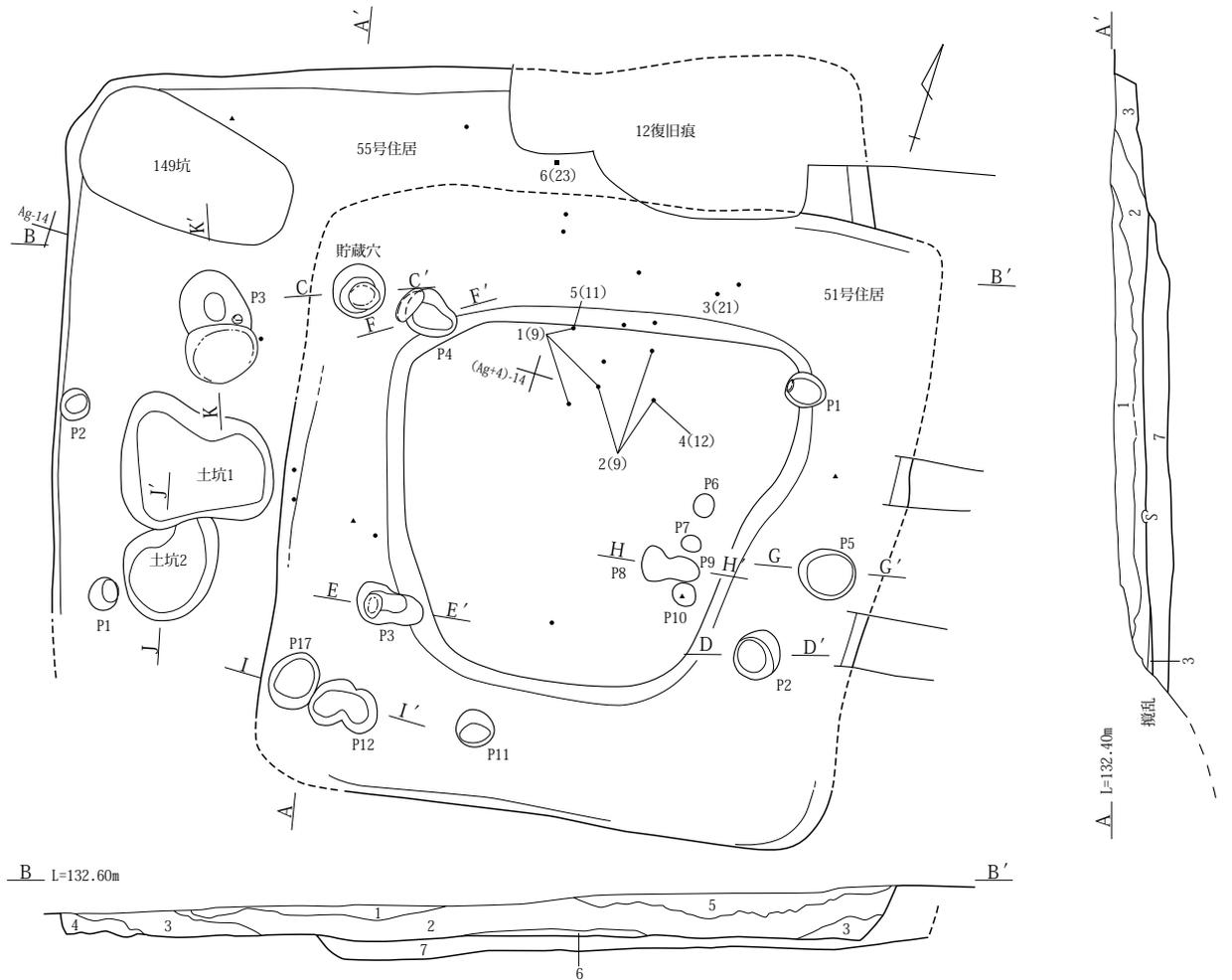
55号住居(第827～829図 P L.188・295)

位置：Ag・Ah-13・14グリッド 形状：隅丸方形？ 規模：(4.34)m×6.37m 残存深度：0.42m 主軸方位：N-17°-W 埋没土：IX層土主体であるが、下層ほど色調が明るい傾向がある。 柱穴：55号住居の範囲では3カ所のピットが検出されているが、柱穴と判断できる

ような位置にはピットはなかった。 炉：焼土面は確認できなかったが、遺物が集中していた北側の土層断面で、床面付近に黒色灰を含む層が1.5mほどの範囲で確認されていることから、至近の位置に炉があった可能性がある。 遺物：前述のように51号住居の遺物として取り上げた遺物のほとんどが当住居に帰属するものとした。中央部の床面から甕(1・4・5)・甔(2)が潰れた状態で、その北側から鉢(3)と不明の鉄製品(6)が出土した。 重複：51号住居と重複し、土層観察から51号住居→55号住居と考えられる。また、12号復旧痕によって上部の多くが攪乱され、南側は1面8号溝によって削平されている。 所見：51号住居との重複部分は、51号住居が新しいとの思い込みがあったために、床面下まで掘り下げてしまった。重複していない部分の床面はXII層中に構築されており、硬化面はまったく確認されなかった。西壁近くの床面で土坑1(1.21×1.10m、深さ0.15m、不整形)、土坑2(0.94×0.73m、深さ0.19m、不整形楕円形)を検出したが、不整形である上に浅いことから、貯蔵穴とは考えなかった。また、土坑の周囲からP1(径0.25m、深さ0.18m、円形)、P2(径0.25m、深さ0.13m、円形)、P3(0.65×0.51m、深さ0.28m、楕円形)を検出した。 時期：5世紀前半



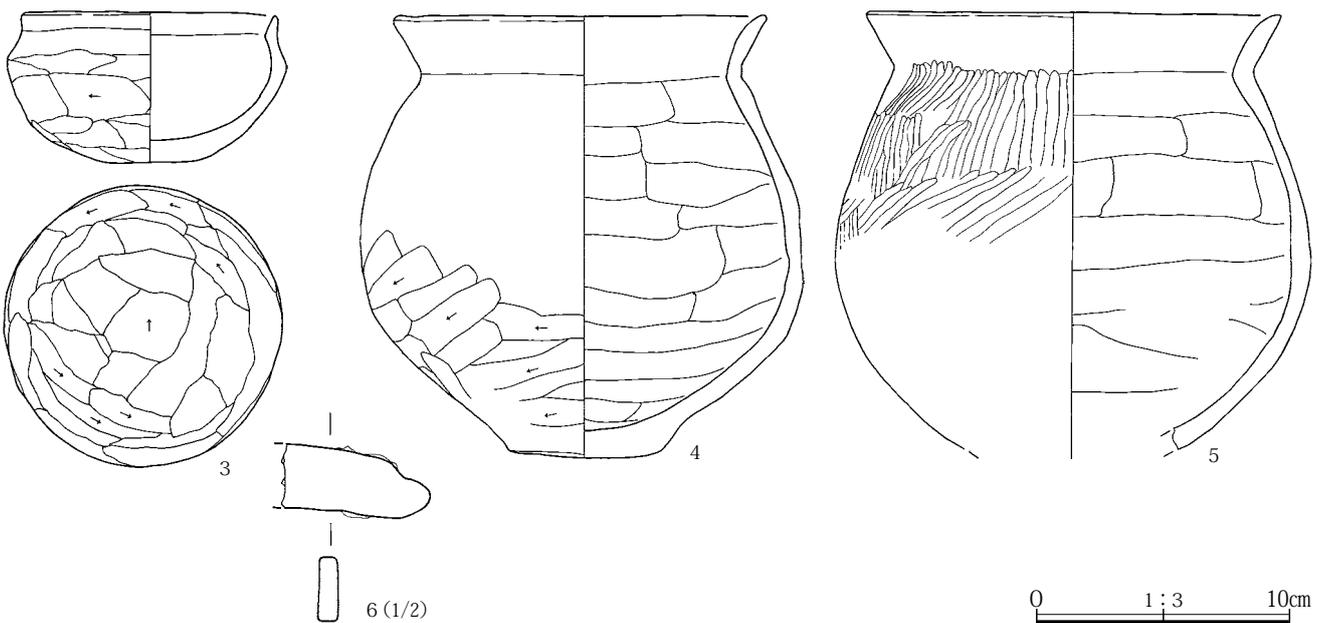
第827図 55号住居出土遺物(1)



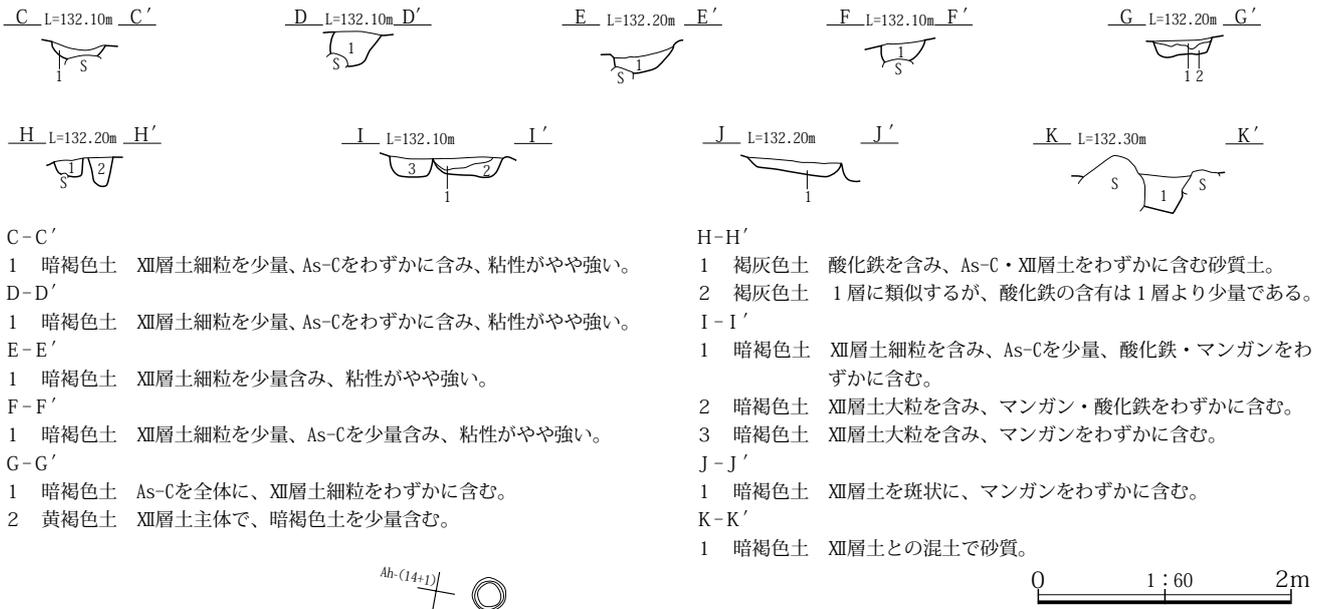
A-A'・B-B'

- | | |
|----------------------------------|--------------------------------------|
| 1 茶褐色土 XII層土ブロックとAs-Cを含む暗褐色土の混土。 | 4 暗褐色土 3層に類似するが、やや明るい色調を呈する。 |
| 2 暗褐色土 As-Cを含む黒褐色土と暗褐色土の混土。 | 5 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体で、XII層土小ブロックを含む。 |
| 3 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土主体。 | 6 黒褐色土 As-Cを含む暗褐色土と黒色灰の混土。 |
| | 7 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土と黒色灰とXII層土の混土。 |

0 1:60 2m



第828図 51・55号住居・55号住居出土遺物(2)



- C-C' 1 暗褐色土 XII層土細粒を少量、As-Cをわずかに含み、粘性がやや強い。
- D-D' 1 暗褐色土 XII層土細粒を少量、As-Cをわずかに含み、粘性がやや強い。
- E-E' 1 暗褐色土 XII層土細粒を少量含み、粘性がやや強い。
- F-F' 1 暗褐色土 XII層土細粒を少量、As-Cを少量含み、粘性がやや強い。
- G-G' 1 暗褐色土 As-Cを全体に、XII層土細粒をわずかに含む。
2 黄褐色土 XII層土主体で、暗褐色土を少量含む。
- H-H' 1 褐灰色土 酸化鉄を含み、As-C・XII層土をわずかに含む砂質土。
- I-I' 1 暗褐色土 XII層土細粒を含み、As-Cを少量、酸化鉄・マンガンをわずかに含む。
2 暗褐色土 XII層土大粒を含み、マンガン・酸化鉄をわずかに含む。
3 暗褐色土 XII層土大粒を含み、マンガンをわずかに含む。
- J-J' 1 暗褐色土 XII層土を斑状に、マンガンをわずかに含む。
- K-K' 1 暗褐色土 XII層土との混土で砂質。

第21表 51号住居ピット 計測表

番号	規模	深さ	形状
P 5	0.47	0.15	円形
P 6	0.17	0.31	円形
P 7	0.15	0.07	円形
P 8	0.29×0.22	0.11	不整楕円形
P 9	0.21×0.18	0.18	楕円形
P 10	0.18	0.23	円形
P 11	0.30	0.16	円形
P 12	—	0.12	不整形
P 13	0.38	0.23	円形
P 14	0.53×0.25	0.14	不整楕円形

第829図 51・55号住居遺物出土状態・ピット土層断面図

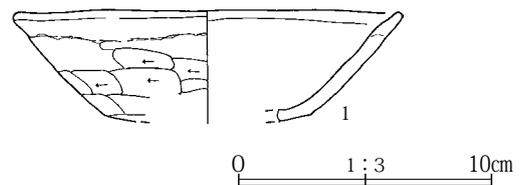
54号住居(第830・831図 P L.188・189・295)

位置: Ai・Aj-13・14グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: (3.19)m×(3.95)m 残存深度: 0.25m 主軸方位: N-15°-W 埋没土: やや明るい色調のIX層土主体。

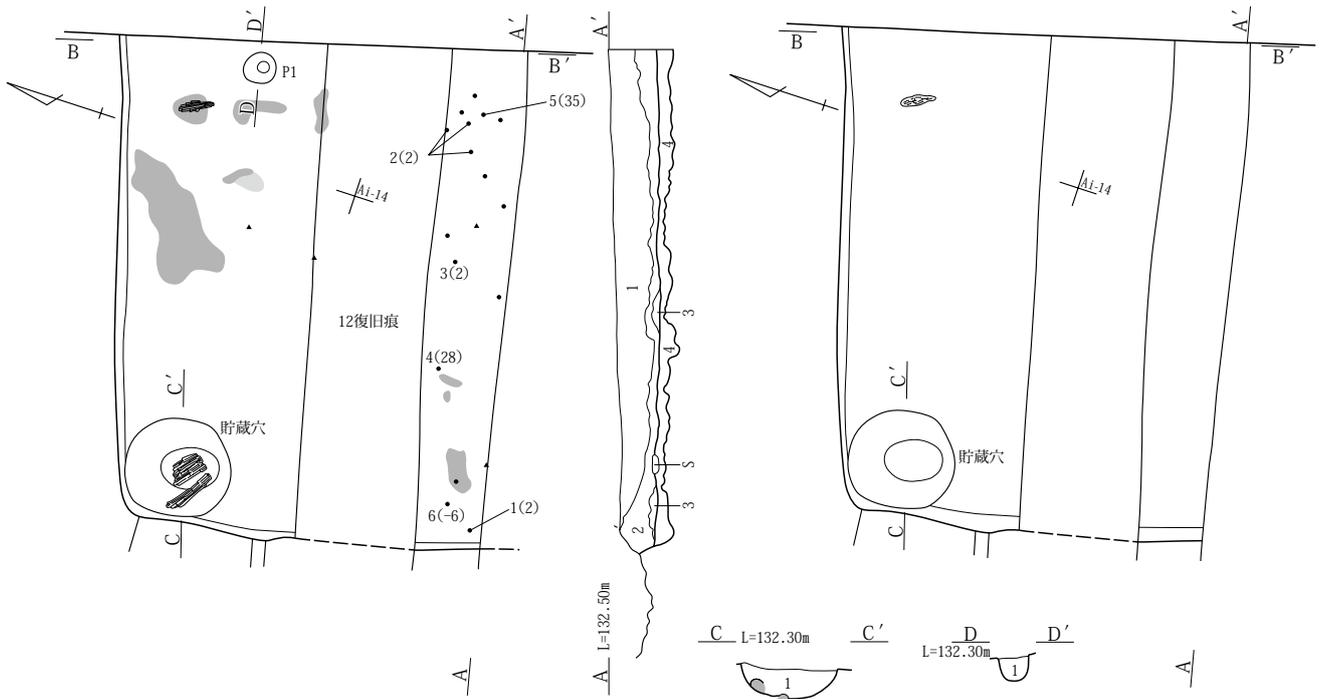
柱穴: 未検出 炉: 北壁寄りの2カ所で焼土と炭化物を検出したが、焼失に伴い形成された焼土と判断した。炉は調査された範囲よりも南側に位置していたものと考えられ、復旧痕による削平で失われたものと考えられる。

遺物: 復旧痕間の帯状に残された位置から破片を主体に出土した。中央部の東西にやや離れた位置から鉢(2)・甕(4)が出土し、西壁際から横位で出土した甕(6)は、ほぼ完形に復元された。重複: 復旧痕との重複が激しい上に、中央部は164号土坑によっても掘削を受けている。所見: IV区の調査では、住居東側が捉えきれなかったためVI区の調査において明らかになるものと期待した。しかし、IV区の調査終了後橋梁基礎工事が行われ、IV区との境際まで構造体が建設されたために、東壁

が検出されるべき位置まで掘削ができず、1mほど間を開けた調査となった。VI区の調査では結果的に54号住居の東壁が検出できなかったことから、54号住居の東西規模はIV区で検出した3.95m+1m以下ということが判明した。床面の精査時点で、東寄りの位置でP1(径0.25m、深さ0.24m、円形)を、北西コーナー部に径0.77m、深さ0.25mの円形を呈する貯蔵穴を検出した。この貯蔵穴内からは炭化材が出土しており、前述の甕の出土位置周辺、および北壁寄りの位置からも炭化物が検出されていることから、焼失した可能性が高い。時期: 5世紀前半



第830図 54号住居出土遺物(1)



A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土主体で、XII層ブロックを含む。
- 2 褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土とXII層土の混土で、炭化物粒を含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土主体で、炭化物を多量に含む。
- 4 褐色土 XII層土主体で、XII層土粒・ブロックを多量に含む。

B-B'

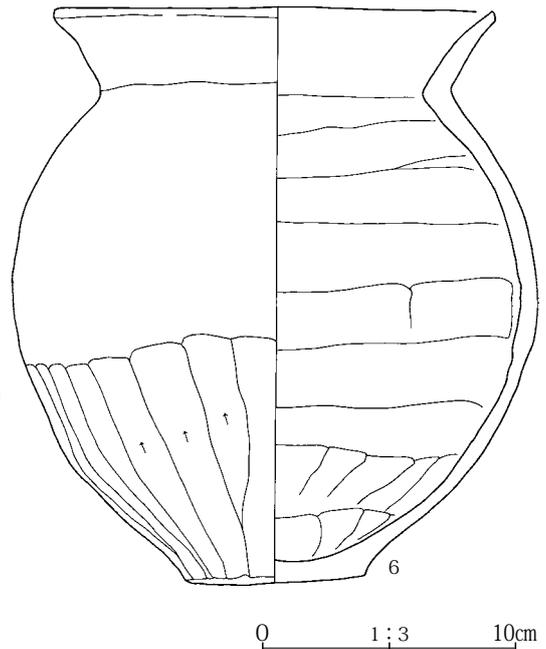
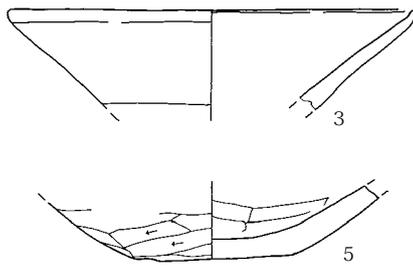
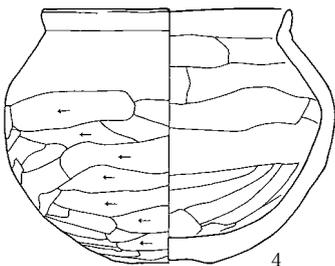
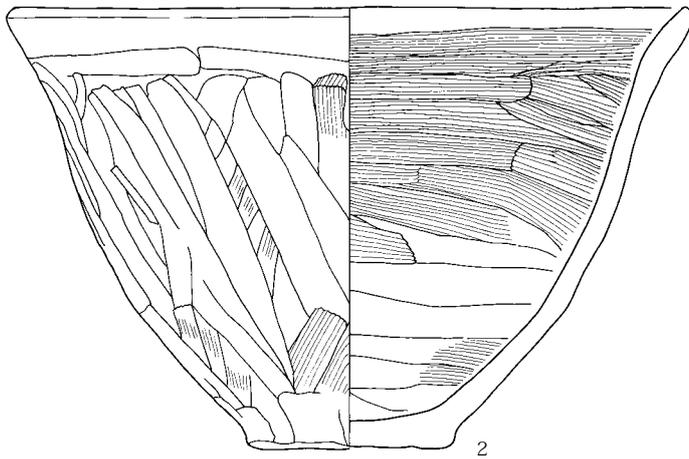
- 1 灰褐色土 As-C・XII層土大粒を多量に含む灰褐色土主体で、粘性・しまりが弱い。(近世土)
- 2 灰褐色土 As-Cを含む灰褐色土で、しまりが強い。(近世土)
- 3 暗褐色土 As-C・白色細粒を含む暗褐色土で、粘性が弱い。
- 4 暗褐色土 As-Cを多量に含むXII層土。
- 5 黄褐色土 As-Cをわずかに含むXII層土主体。
- 6 褐色土 XII層土主体で、XII層土粒・ブロックを多量に含む。

C-C'

- 1 暗褐色土 XII層土主体で、炭化物を含み、As-Cは含まない。

D-D'

- 1 暗褐色土 XII層土主体で、As-Cをわずかに含む。

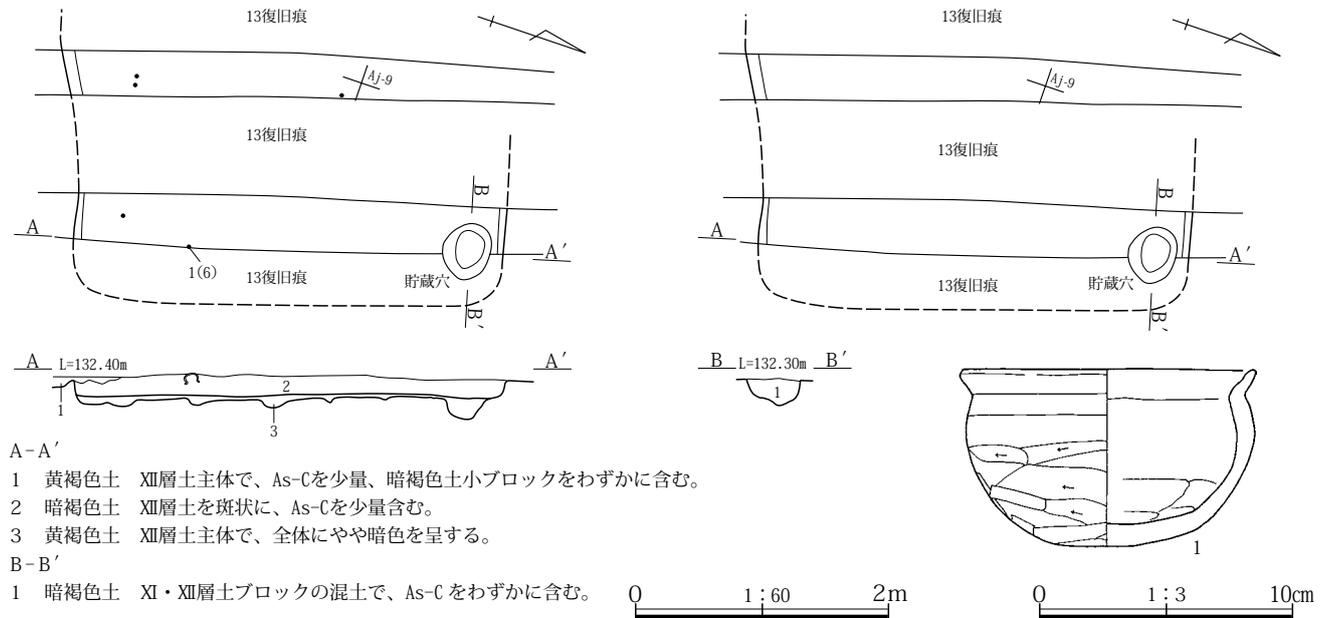


第831図 54号住居・出土遺物(2)

57号住居(第832図 P L.189)

位置: Ai・Aj- 8・9グリッド 形状: 不明 規模: 3.40 m×(1.77)m 残存深度: 0.15m 主軸方位: 不明 埋没土: As-Cの含有が微量な明るい色調のIX層土主体で、XII層土小ブロックを斑状に含んでいる。柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 帯状に残存した床面の南寄りの位置から埴(1)が出土した。重複: 復旧痕との重複以外に

なし。 所見: 13号復旧痕によって削平を受け、西側は旧桃ノ木川による開析により失われている。したがって、検出したのは幅0.5mにも満たない帯状の床面および壁だけである。北東コーナー部と考えられる位置で検出したP 1 (0.47×0.37m、深さ0.21m、楕円形)が貯蔵穴である可能性が高い。 時期: 5世紀前半



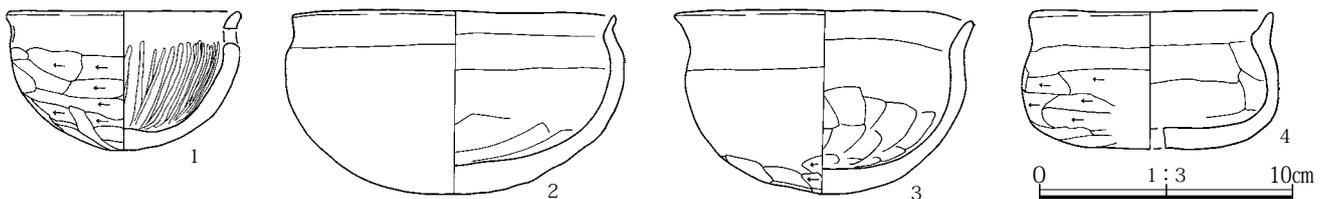
- A-A'
- 1 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cを少量、暗褐色土小ブロックをわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 XII層土を斑状に、As-Cを少量含む。
 - 3 黄褐色土 XII層土主体で、全体にやや暗色を呈する。
- B-B'
- 1 暗褐色土 XI・XII層土ブロックの混土で、As-Cをわずかに含む。

第832図 57号住居・出土遺物

58号住居(第833～835図 P L.189・295・296)

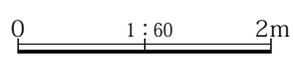
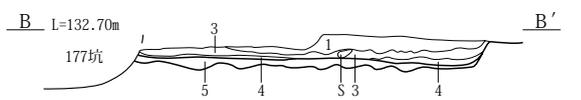
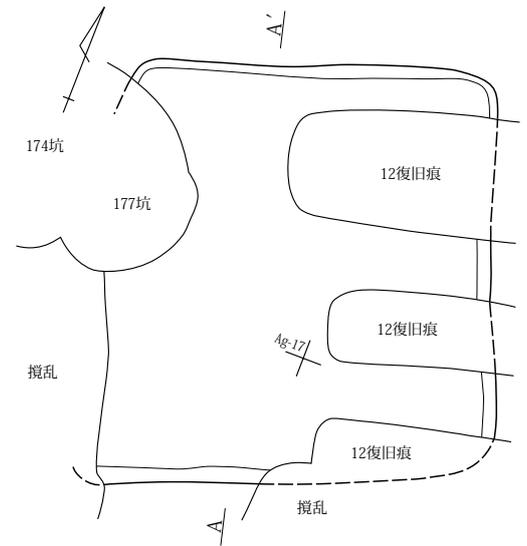
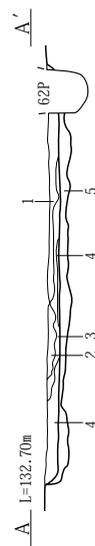
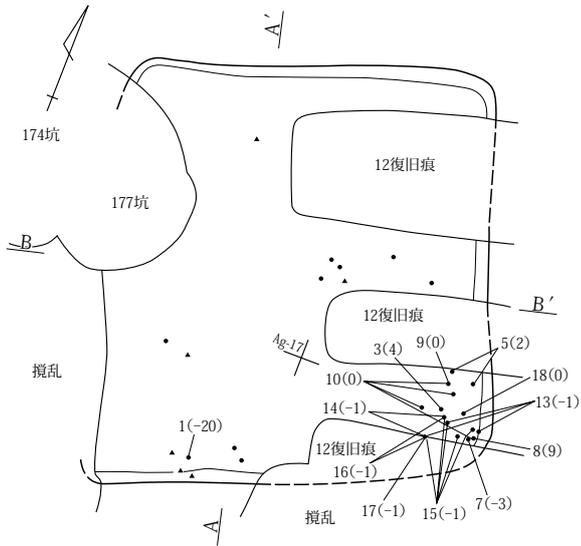
位置: Af・Ag-16・17グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: 3.35m×(3.22)m 残存深度: 0.21m 主軸方位: N-20°-W 埋没土: As-Cの含有が微量な明るい色調のIX層土主体で、床面近くの層中には炭化物の含有量が比較的多い。柱穴: 未検出 炉: 調査できた範囲においては、焼土面の検出はなかった。遺物: 南東コーナー部に高坏(8～10、13～16)・埴(3)・鉢(7)・埴(5)・壺(18)などが集中して出土したが、南北が12号復旧痕によって削平を受けているため、本来はより多数の遺物集中があった可能性がある。また、埴(1)は南壁際から礫とともに出土した。重複: 近い時期の遺構との重複は

なく、東側は12号復旧痕、西側は近世の土坑などによって削平を受けている。 所見: 12号復旧痕の壁面に遺物が食い込んで出土したことから検出された。上部には1面1号建物の土間が構築されていたために、平面的には確認しにくかった。調査時点では平面図に表したように北西部の土坑との重複部分あたりに南西コーナーがある比較的小規模な住居平面を想定したが、南壁の調査ではこれに対応するようなコーナー部は確認できなかった。調査された範囲においては焼土面や炭化物・灰の集中部分は確認されていないため、炉の特定はできなかった。また、貯蔵穴とおもわれるような掘り込みも検出されていない。 時期: 5世紀前半



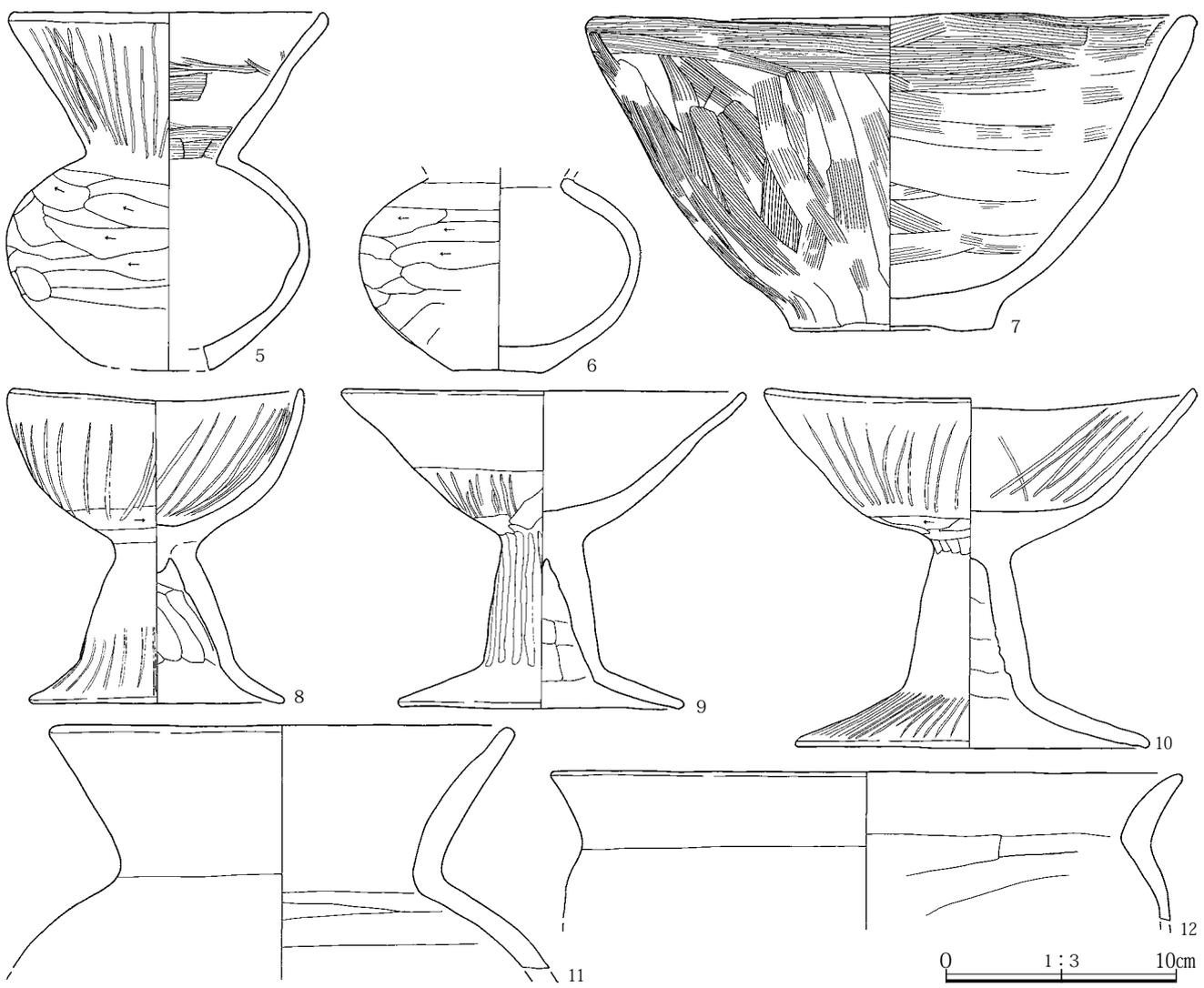
第833図 58号住居出土遺物(1)

第6章 3面の調査 (古墳時代中期～前期)

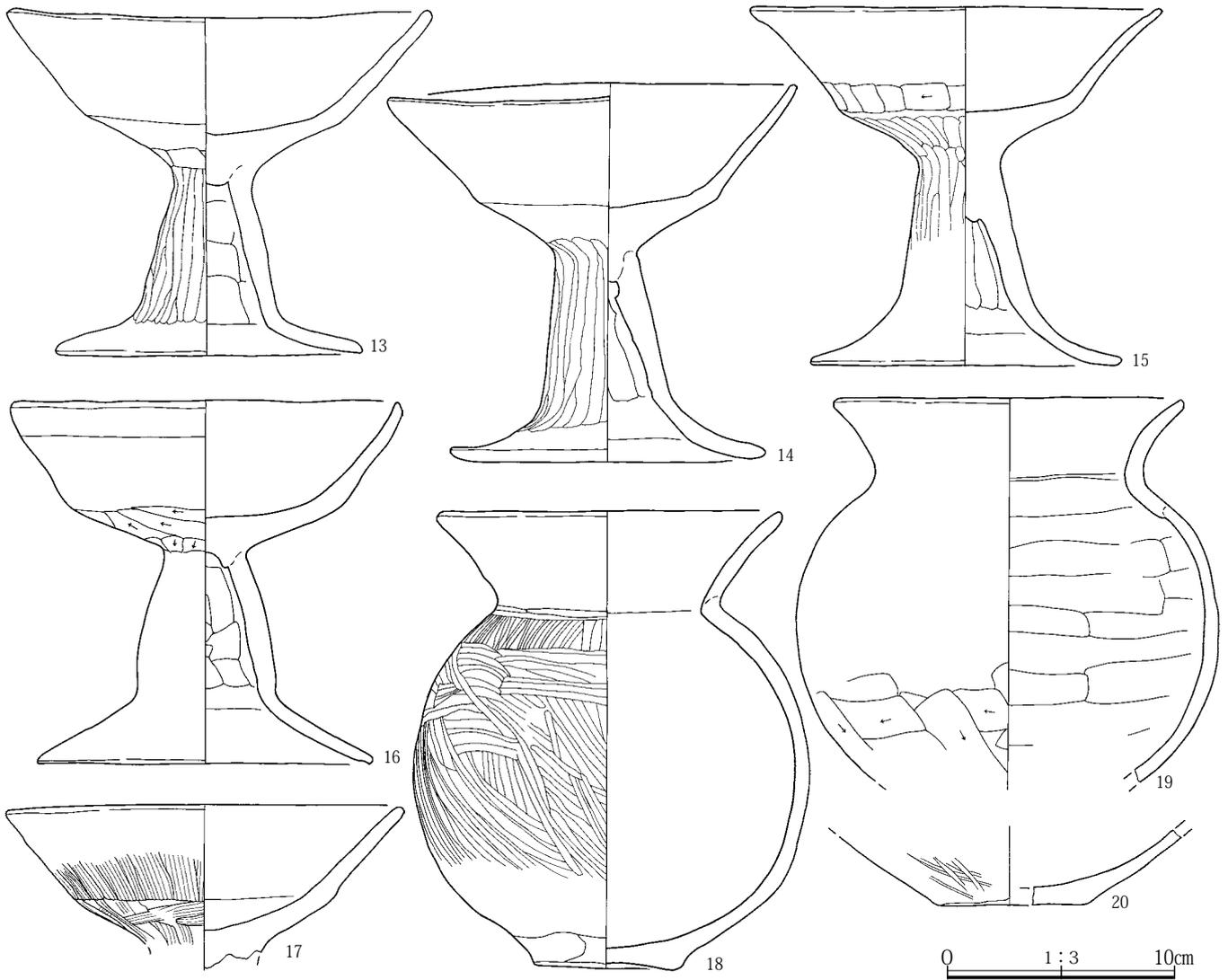


A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 As-Cを少量、Ⅻ層土細粒・炭化物細粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅻ層土大粒を含み、As-Cをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 炭化物細・大粒を多量に、As-C・Ⅻ層土細粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 Ⅻ層土細粒を少量、As-Cをわずかに含む。
- 5 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、やや暗色を呈する。



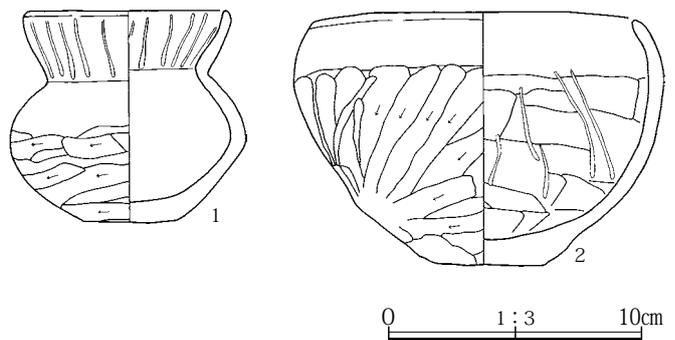
第834図 58号住居・出土遺物(2)



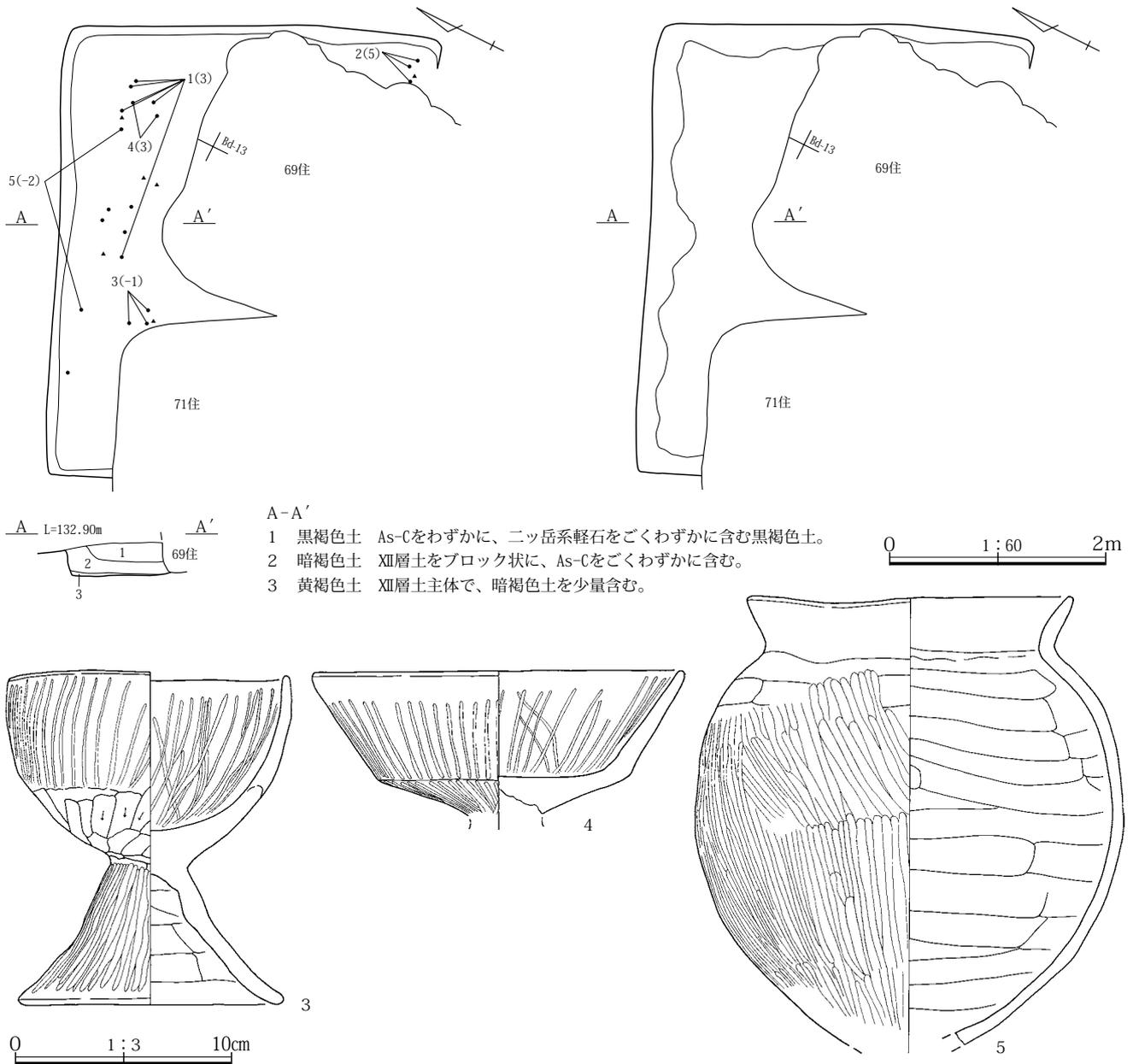
第835図 58号住居出土遺物(3)

81号住居(第836・837図 P L.189・190・296・297)
位置: Bc・Bd-12・13グリッド **形状:** 長方形 **規模:** 4.20m×3.45m **残存深度:** 0.30m **主軸方位:** E-25°-N **埋没土:** IX層土が主体であるが、最下層はXII層土粒の含有量が多く明るい色調を呈している。 **柱穴:** 未検出 **炉:** 69・71号住居との重複によって失われたものと考えられる。 **遺物:** 残存した床面付近から大形破片および礫が出土した。鉢(2)は南東コーナー部、埴(1)・高坏(4)は北東コーナー部近くから、台付鉢(3)・甕(5)は北壁寄りの床面から出土したものである。 **重複:** 69・71号住居と重複しており、検出状況等から81号住居→71号住居→69号住居と考えられる。 **所見:** 69・71号住居との重複によって大半が失われており、検出したのは北側約1/3と南東コーナー部付近である。北壁から西壁の一部の残存は良好であり、直線的に検出され

コーナーも丸みが弱く直角に近い。北東コーナー部と南東コーナー部についても丸みが弱い傾向が窺え、同時期の住居平面が隅丸方形または隅丸長方形が一般的であるのと違った様相を呈している。床面はXII層土中に形成されており、掘り方はほとんど認められない。 **時期:** 5世紀前半



第836図 81号住居出土遺物(1)



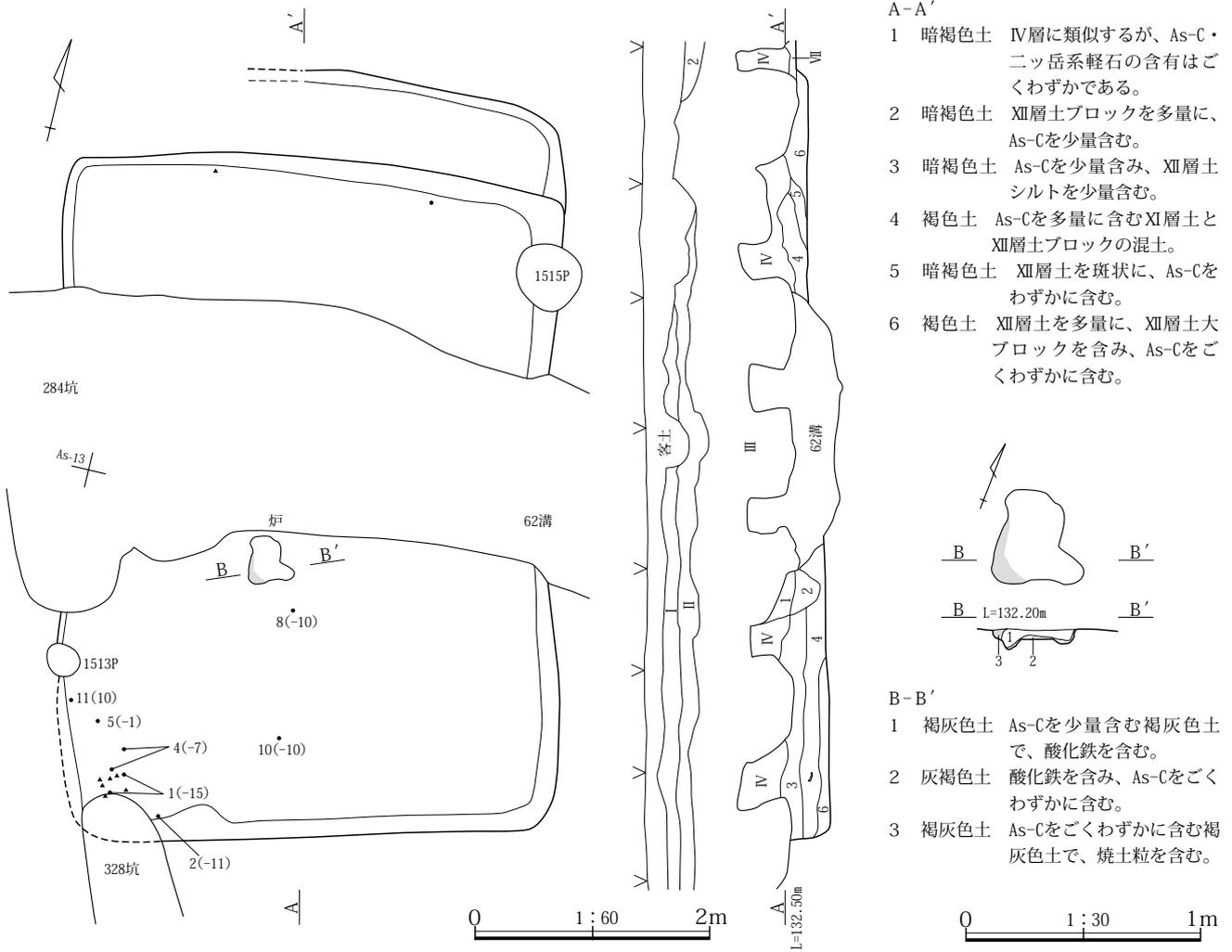
第837図 81号住居・出土遺物(2)

89号住居(第838図 P L.190・297)

位置:Ar・As-12・13グリッド 形状:隅丸長方形 規模:5.82m×4.29m 残存深度:0.18m 主軸方位:N-13°-W 埋没土:IX層土が主体でXII層土粒・ブロックを含有することから、全体に明るくAs-C含有量が少ない。柱穴:未検出 炉:中央やや南寄りに検出した0.4×0.4mほどの範囲が焼土化した部分を炉とした。遺物:南西コーナー部にあたる部分から鉢(1)・埴(2・4)などが出土した他、棒状礫がまとめて出土した。また、中央の炉付近から壺(8)が出土した。重複:62号溝によって中央部が東西に削平されている。所見:V区とVI区の調査区境に位置したため、東西2次の調査で全体を明

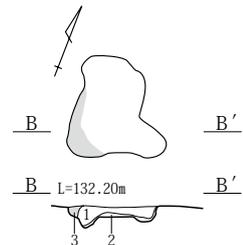
らかにした。東側の先行調査時点では、北壁をはっきりと捉えることができず、南北2カ所に壁の線を見出した。しかし、西側の調査では北側の壁に対応するような壁は確認されず、南側に捉えたものが本来89号住居の北壁と見られる。床面は炉の検出面として捉え平坦に検出したが、精査した結果、柱穴や貯蔵穴になりうるような掘り込みはまったく検出できなかった。掘り方は全面に行われていたものと想定したが、掘り方の埋没土としたのはXII層土中にごくわずかにAs-Cを含むものであり、これが色調の明るいIX層相当の土であるとする掘り方は行われていなかった可能性もある。時期:4世紀後半

第1節 第I期 (As-C 降下以降)



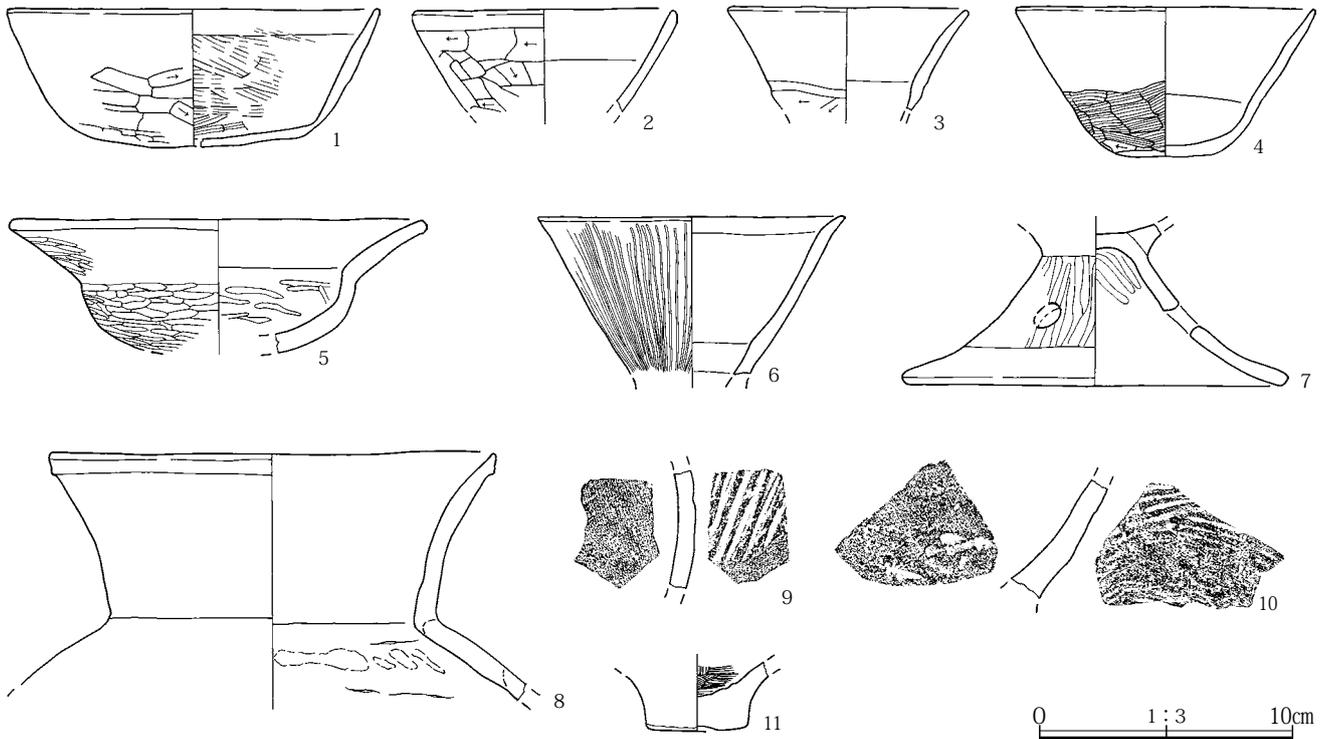
A-A'

- 1 暗褐色土 IV層に類似するが、As-C・ニッ岳系軽石の含有はごくわずかである。
- 2 暗褐色土 XII層土ブロックを多量に、As-Cを少量含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを少量含む、XII層土シルトを少量含む。
- 4 褐色土 As-Cを多量に含むXI層土とXII層土ブロックの混土。
- 5 暗褐色土 XII層土を斑状に、As-Cをわずかに含む。
- 6 褐色土 XII層土を多量に、XII層土大ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含む。



B-B'

- 1 褐灰色土 As-Cを少量含む褐灰色土で、酸化鉄を含む。
- 2 灰褐色土 酸化鉄を含み、As-Cをごくわずかに含む。
- 3 褐灰色土 As-Cをごくわずかに含む褐灰色土で、焼土粒を含む。



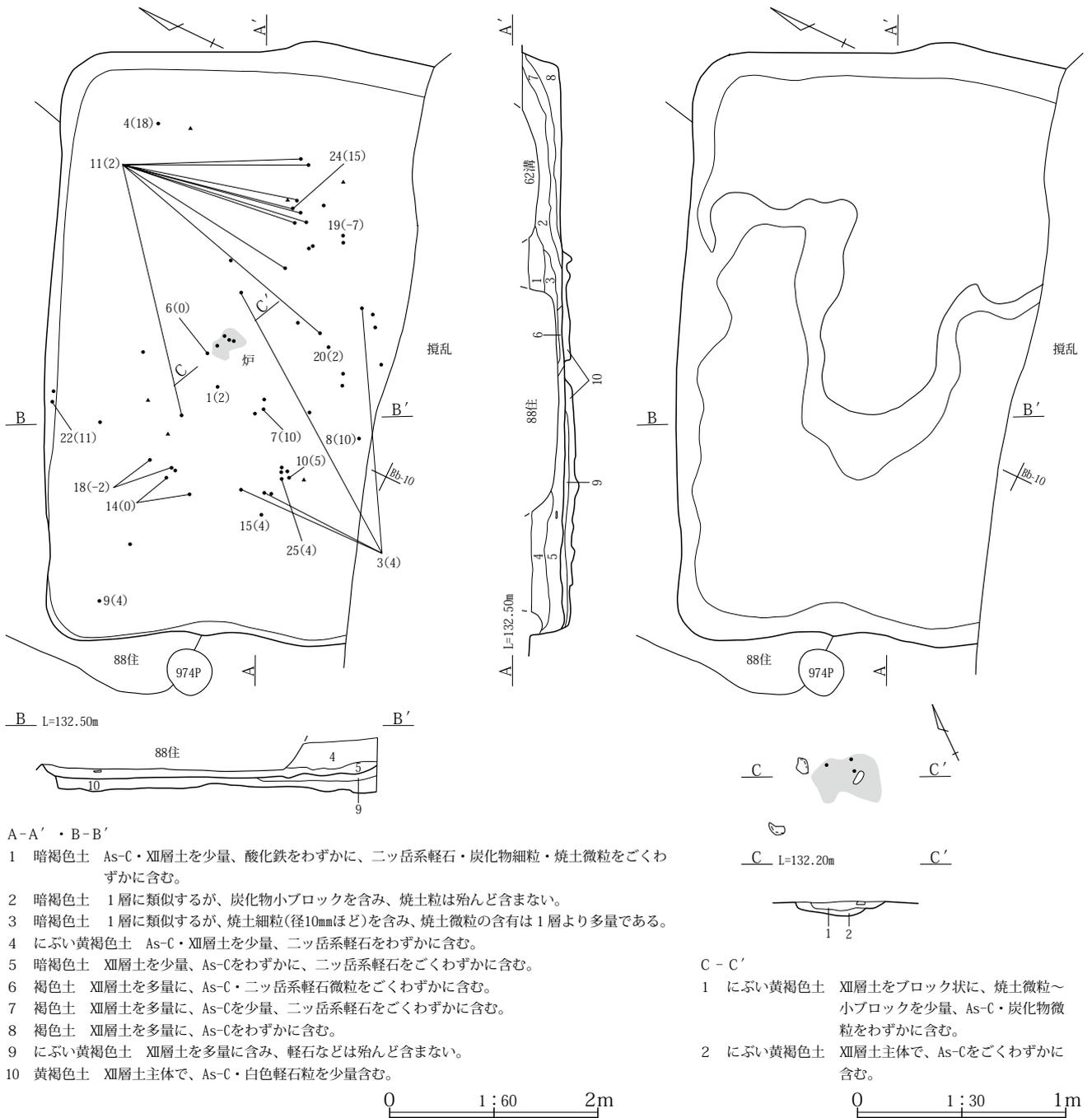
0 1:3 10cm

第838図 89号住居・出土遺物

91号住居(第839～841図 P.L.190・191・297)

位置: Ba・Bb-9・10グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 5.80m×(3.46)m 残存深度: 0.37m 主軸方位: E-23°-N 埋没土: IX層土主体 柱穴: 未検出 炉: 中央のやや北寄りの床面に検出した、0.35×0.25mほどの不整形の焼土範囲を炉とした。遺物: 床面近くに破片が散在するよう出土状態であったが、台付甕(19)が、炉の東寄りの位置に横転して床面に埋もれたような状態で出土した他、壺(11)は中央部に破片が散って出土し、埴(1)と高坏(3)は炉の近くから出土した。重複: 88

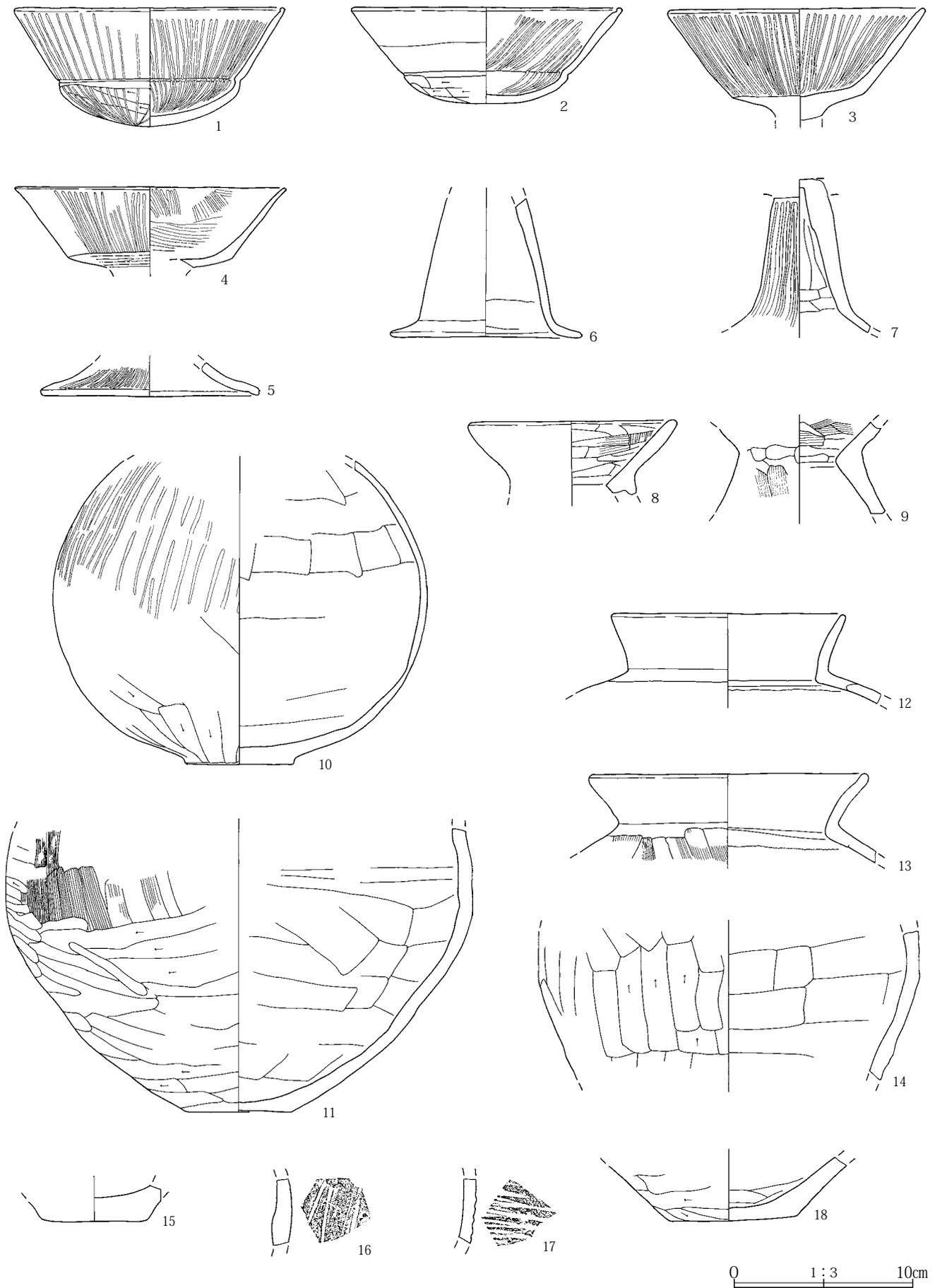
号住居と重複し、検出状況から91号住居→88号住居である。所見: 南壁は病院の建物によって削平され、北壁は88号住居との重複によってほとんどが失われていた。西壁と東壁は比較的残存が良好であった。床面は炉の検出面として捉えた結果、東側はXII層土が床面となっていたが西側では同面でXII層土は現れず、VII層土相当の土が検出されたことから、西側に掘り方があることが判明した。掘り方の調査においても柱穴・貯蔵穴に相当する掘り込みは1カ所も検出することができなかった。時期: 4世紀後半



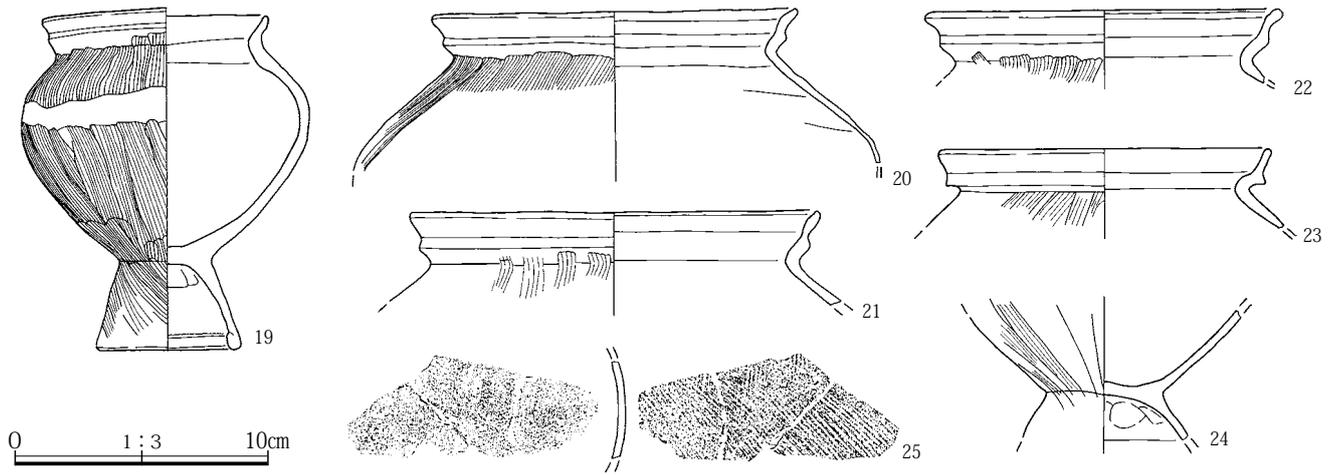
- A-A'・B-B'
- 1 暗褐色土 As-C・XII層土を少量、酸化鉄をわずかに、ニッ岳系軽石・炭化物細粒・焼土微粒をごくわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物小ブロックを含み、焼土粒は殆んど含まない。
 - 3 暗褐色土 1層に類似するが、焼土細粒(径10mmほど)を含み、焼土微粒の含有は1層より多量である。
 - 4 にぶい黄褐色土 As-C・XII層土を少量、ニッ岳系軽石をわずかに含む。
 - 5 暗褐色土 XII層土を少量、As-Cをわずかに、ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。
 - 6 褐色土 XII層土を多量に、As-C・ニッ岳系軽石微粒をごくわずかに含む。
 - 7 褐色土 XII層土を多量に、As-Cを少量、ニッ岳系軽石をごくわずかに含む。
 - 8 褐色土 XII層土を多量に、As-Cをわずかに含む。
 - 9 にぶい黄褐色土 XII層土を多量に含み、軽石などは殆んど含まない。
 - 10 黄褐色土 XII層土主体で、As-C・白色軽石粒を少量含む。

- C-C'
- 1 にぶい黄褐色土 XII層土をブロック状に、焼土微粒～小ブロックを少量、As-C・炭化物微粒をわずかに含む。
 - 2 にぶい黄褐色土 XII層土主体で、As-Cをごくわずかに含む。

第839図 91号住居



第840図 91号住居出土遺物(1)

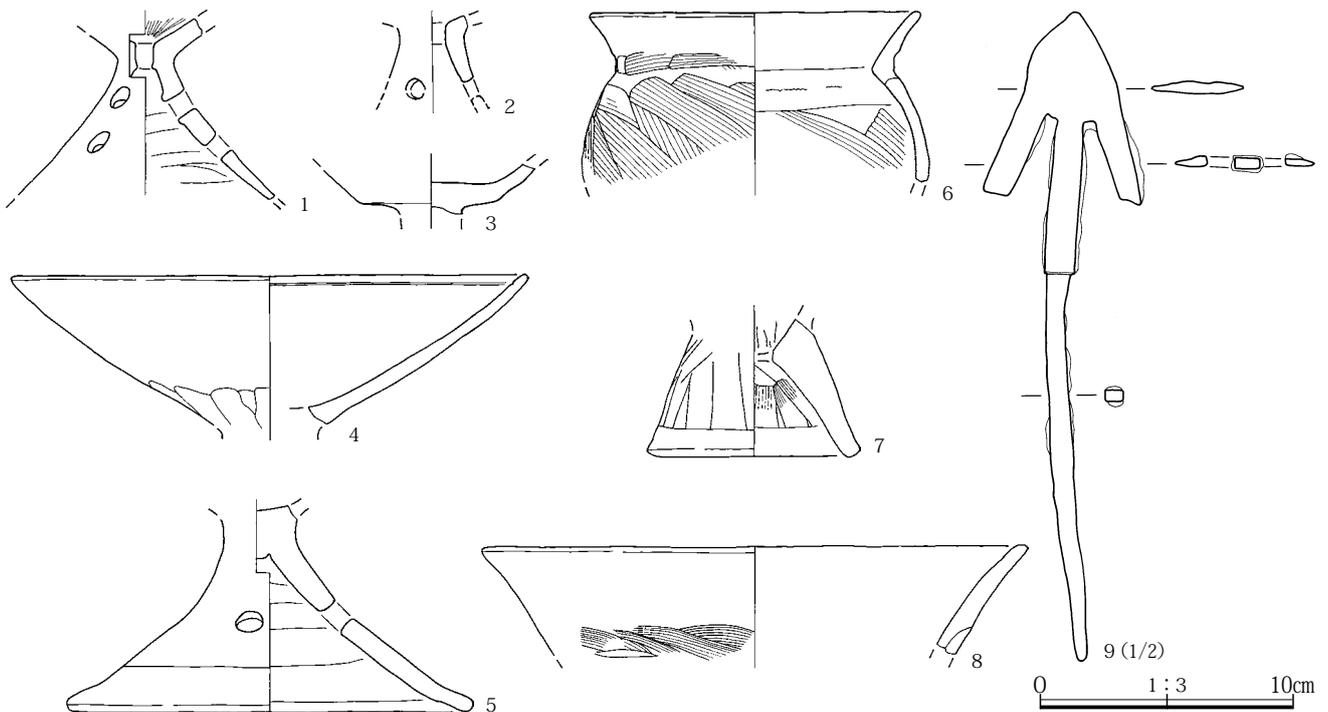


第841図 91号住居出土遺物(2)

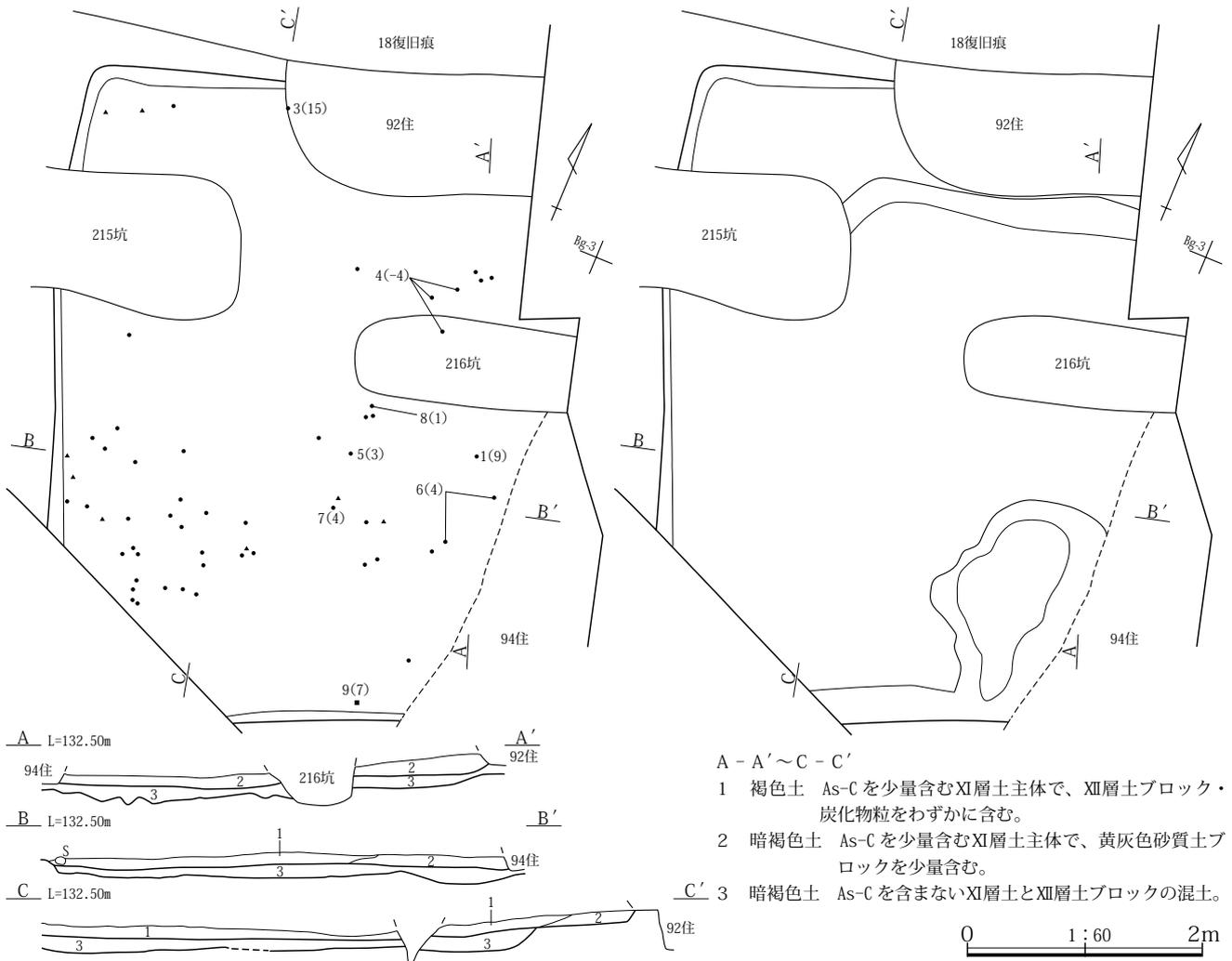
93号住居(第842・843図 P L.191・297)

位置：Bf・Bg- 2・3グリッド 形状：隅丸長方形？
 規模：5.50m×(4.48)m 残存深度：0.14m 主軸方位：
 N-23°-W 埋没土：As-C含有の少ないⅨ層土主体でⅫ層土粒とブロックを含有するため全体に明るい色調を呈している。柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：床面からやや浮いて南側にやや多い出土傾向がある。高坏(4)・甕(6)・器台(1)などは中央部から出土したものである。また、南壁際から鉄鏃(9)が出土したことが特筆される。重複：92・94号住居と重複しており、検出状況から93号住居→92・94号住居と考えられる。所見：調査区の南端に検出された。深くまで復旧痕が掘り込ま

れていた場所であり、Ⅻ層土中で遺構確認をおこなったために住居の残存は不良である。また、他遺構との重複および東側は道路下にかかるため全体像は捉えられなかった。壁は北西コーナー部から南壁の一部が検出できた。床面は遺物出土が比較的めだった部分の下部に検出したⅨ層土中にⅫ層土ブロックが斑状に入った面を床面として捉えた。床面の精査で硬化面は確認されず、柱穴、貯蔵穴も検出されなかった。掘り方は北寄りの一部を除き全体に及んでいたものと考えられ、南寄りに不整形の浅い窪みが検出され、その南壁際から鉄鏃(9)が出土した。 時期：4世紀前半



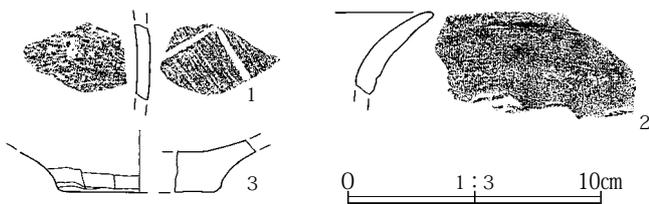
第842図 93号住居出土遺物



第843図 93号住居

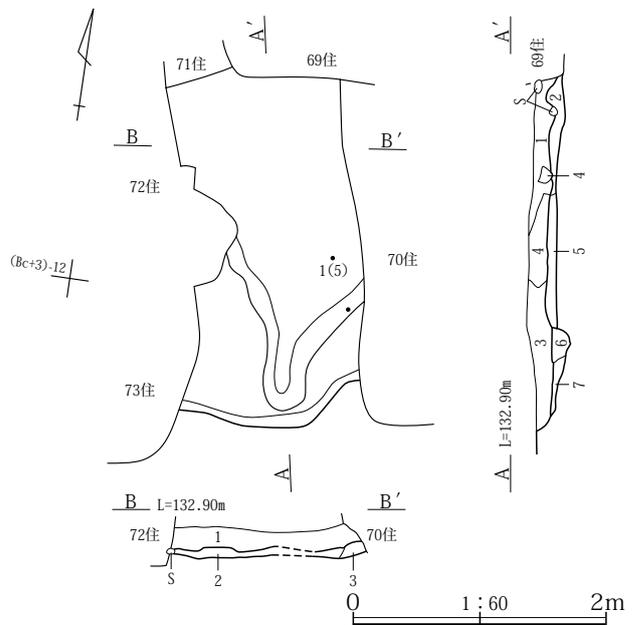
96号住居(第844図 P L.82)

位置：Bc・Bd-11・12グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0.25m 主軸方位：不明 埋没土：Ⅶ層土主体でAs-C含有が少ない。柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：破片がわずかに出土した。重複：69～73号住居と重複し、残存状況から96号住居→69～73号住居と考えられる。所見：重複によって大半が失われ南壁の一部を検出したもので、南壁の残存も悪いため詳細は不明である。時期：3世紀前半以前



A - A'・B - B'

- 1 黒褐色土 As-Cを全体に多量に、XII層土をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 XII層土を少量、As-Cをわずかに含む。
- 3 褐色土 XII層土を多量に含み、軽石は含まない。

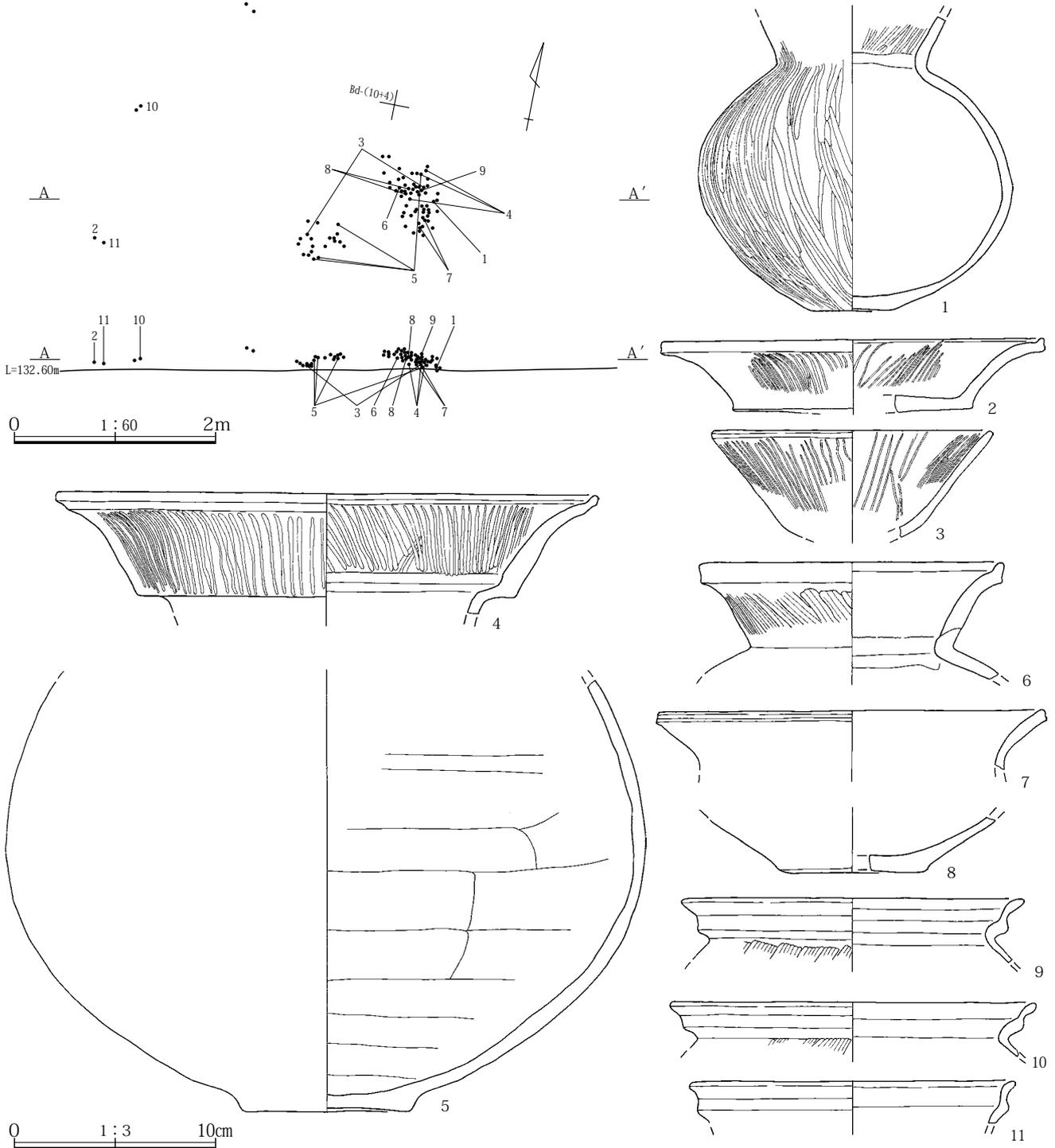


第844図 96号住居・出土遺物

100号住居(第845図 P L.191・297・298)

位置: Bc・Bd-10グリッド 形状: 不明 規模: 不明
 残存深度: 0m 主軸方位: 不明 埋没土: 不明 柱穴:
 未検出 炉: 未検出 遺物: 2ヵ所に遺物集中が検出され
 たており、面的な出土であることから床面と考えられ
 る。東側の集中部からは埴(1)・壺(4・6)・台付甕(9)
 などが、西側からは壺(5)・高坏(3)が出土した。重
 複: 不明 所見: 近世の1号道路の調査時点で、同一平

面に遺物が潰れたような状態で出土したことから、この
 出土面を床面と考え住居の存在を認識した。遺物の集中
 部分は2ヵ所であったが、北西側の3ヵ所に破片が出土
 しており、これらも同一住居の遺物として捉えた。集中
 していた遺物の直下はⅡ層土であることから、掘り方は
 ないものと判断した。また、炉にあたる焼土は検出でき
 ず、貯蔵穴、柱穴になるような掘り込みも確認できなかつ
 た。 時期: 4世紀後半



第845図 100号住居・出土遺物

106号住居(第846・847図 P.L.191・192・298)

位置: Ba・Bb- 7・8 グリッド 形状: 隅丸長方形?

規模: (3.06)m×3.10m 残存深度: 0.19m 主軸方位:

E-18°-N 埋没土: As-Cを比較的多く含むⅫ層土類

似の土層とやや淡い色調のⅨ層土の混土で埋没し、下層

に炭化物を含んでいた。柱穴: 未検出 炉: 未検出

遺物: 中央部床面に炭化材の出土が多く、南東コーナ

一部から罎(2)・鉢(1)・高坏(3)・壺(5・6)が集中し

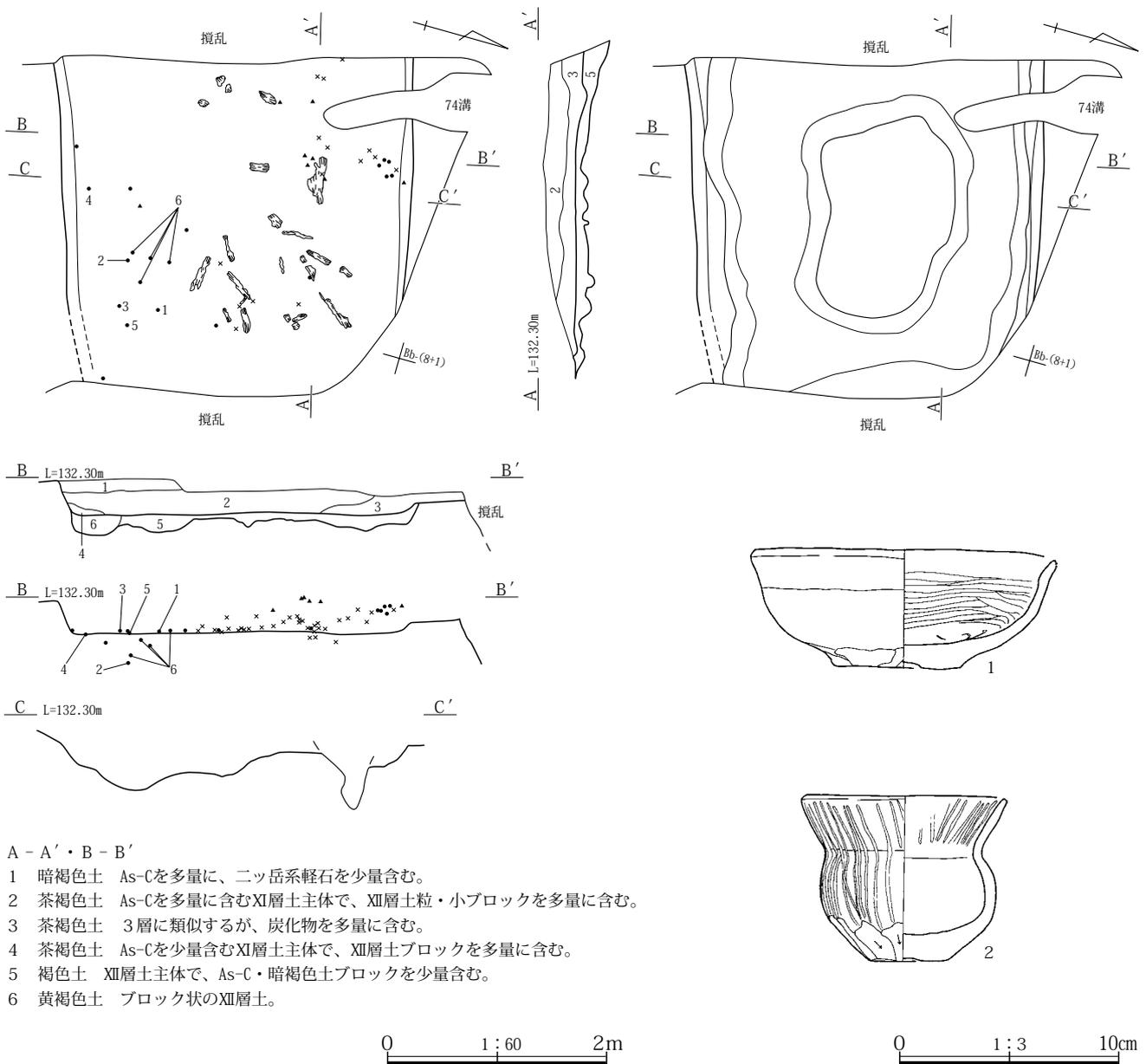
て出土した他、細板状の鉄製品が1点出土したが、状態

が悪く掲載していない。重複: 105・107号住居と重複し、

検出状況および遺物から、107号住居→106号住居→105

号住居と考えられる。所見: 病院の建物によって攪乱

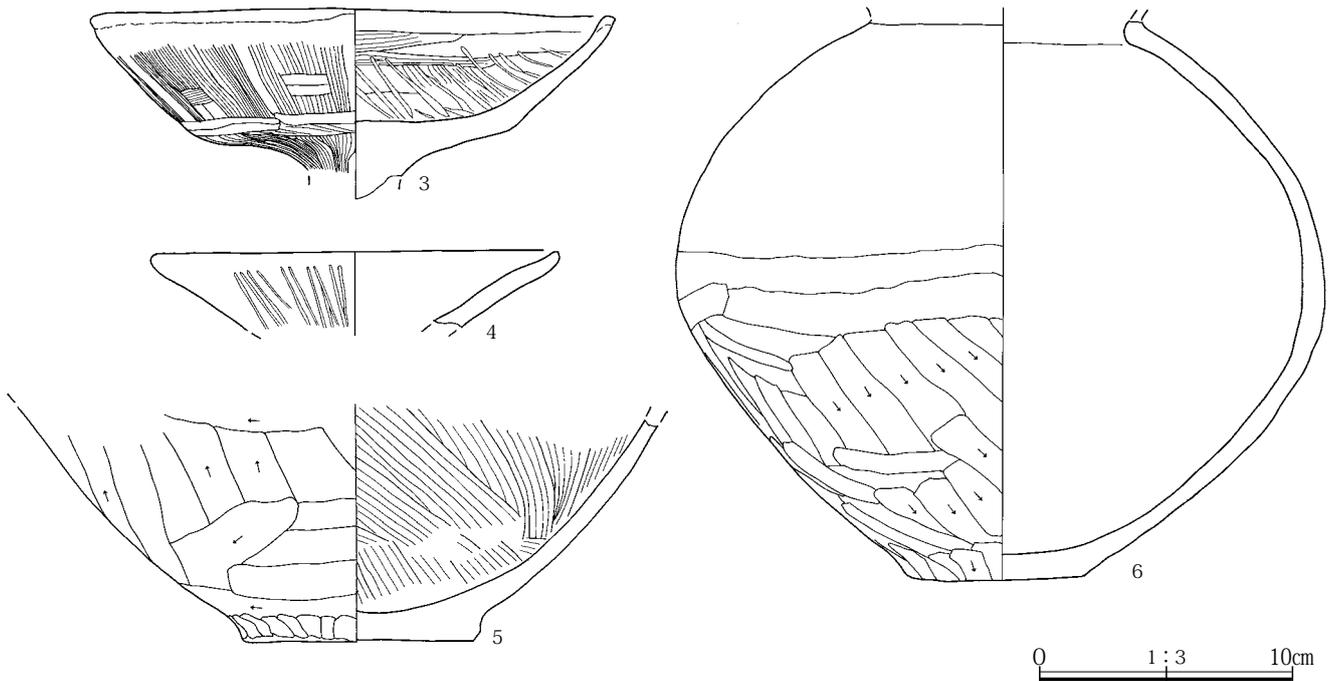
を受けた場所に島状に残った部分に、Ⅻ層土面で平面を
確認した。残存状態は良好ではなかったが、炭化材が比
較的多く出土しており、焼失したものと考えられる。こ
の炭化材と土器破片はほぼ同標高から出土しており、こ
れらの出土面を床面として捉えた。床面は埋没土と比較
して、As-Cを含むⅫ層土相当の明るい色調のブロック含
有量が多く、これらの埋没土を取り去ったところ、壁に
沿って一定幅で掘り下げ中央部を掘り残す、当該期に特
徴的な掘り方が行われていることがわかった。2の罎が
出土した場所には土坑状の掘り込みがあったものと考え
られ、貯蔵穴であった可能性がある。 時期: 4世紀後
半



A - A'・B - B'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、ニッ岳系軽石を少量含む。
- 2 茶褐色土 As-Cを多量に含むⅪ層土主体で、Ⅻ層土粒・小ブロックを多量に含む。
- 3 茶褐色土 3層に類似するが、炭化物を多量に含む。
- 4 茶褐色土 As-Cを少量含むⅪ層土主体で、Ⅻ層土ブロックを多量に含む。
- 5 褐色土 Ⅻ層土主体で、As-C・暗褐色土ブロックを少量含む。
- 6 黄褐色土 ブロック状のⅫ層土。

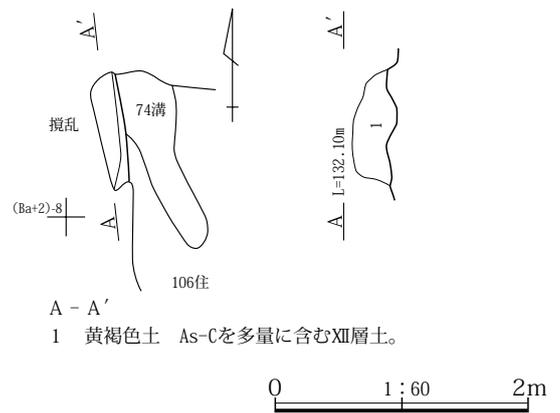
第846図 106号住居・出土遺物(1)



第847図 106号住居出土遺物(2)

107号住居(第848図 P L.192)

位置：Ba- 8グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0.35m 主軸方位：不明 埋没土：As-Cを多量に含むⅫ層土が主体 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：破片がわずかに出土した。重複：106号住居と重複しているものと考えられ、106号住居→107号住居の可能性が高い。所見：病院の建物によって攪乱を受けた場所に検出されたもので、東壁のごく一部が残存していた。時期：5世紀後半か



第848図 107号住居

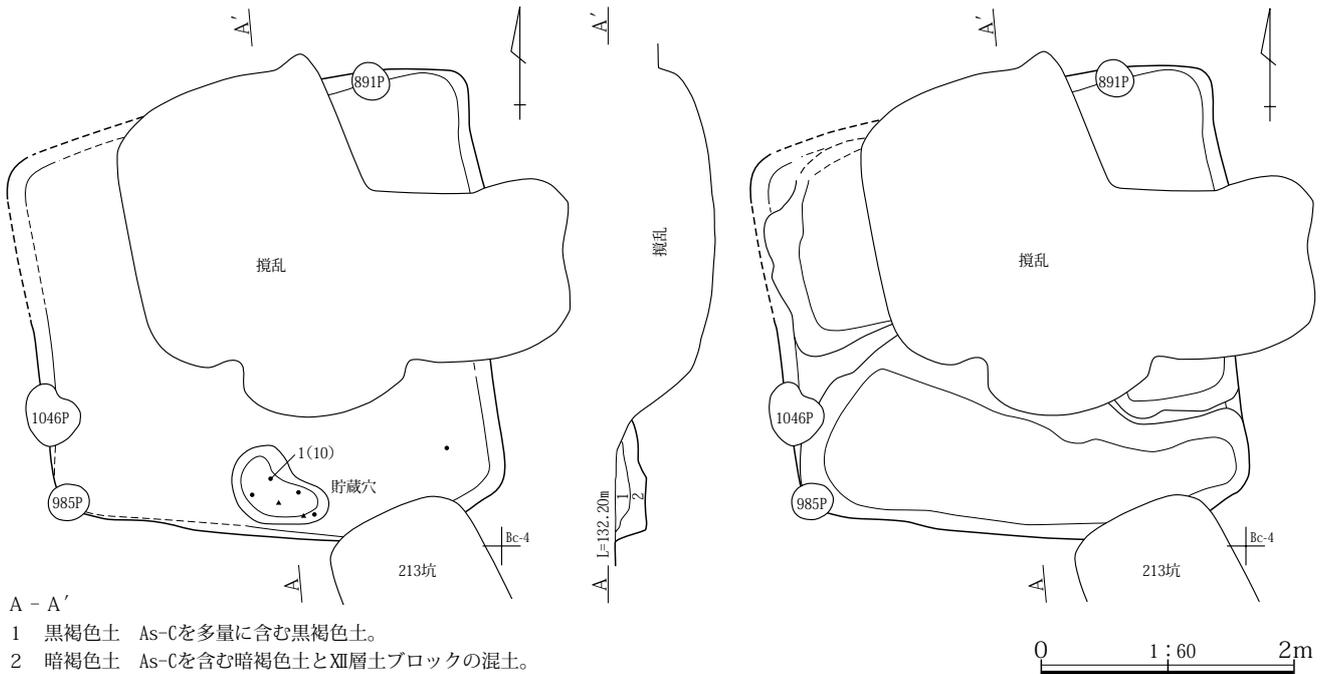
108号住居(第849・850図 P L.192)

位置：Bb- 4グリッド 形状：隅丸台形 規模：3.70m × 2.38 ~ 3.56m 残存深度：0.13m 主軸方位：E - 6° - N 埋没土：Ⅸ層土主体で、As-C含有量が多い。柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：南壁中央の貯蔵穴とした掘り込みから、台付甕(1)が出土した。重複：近い時期の遺構との重複はない。所見：Ⅺ層土中で検出したもので、中央部から東壁中央にかけて攪乱が入って

いる。床面は、遺物出土が皆無である上に炉も検出されなかったために、埋没土としたAs-C含有量が多い黒褐色土がなくなり、Ⅻ層土ブロックが顕著になった面として捉えた。残存した床面に硬化面はなく、柱穴と見られるような掘り込みもなかった。南壁中央に接して検出した0.82×0.54m、深さ0.08mの浅い不整楕円形の掘り込みは、位置は異例であるものの貯蔵穴であった可能性がある。時期：4世紀前半



第849図 108号住居出土遺物



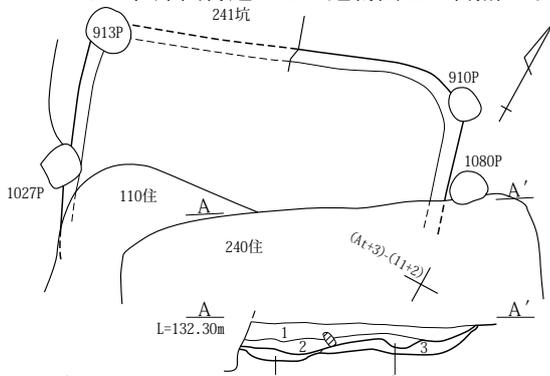
A - A'

- 1 黒褐色土 As-Cを多量に含む黒褐色土。
- 2 暗褐色土 As-Cを含む暗褐色土とⅫ層土ブロックの混土。

第850図 108号住居

111号住居(第851図 P L.192)

位置: As・At-11グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (1.54)m×3.02m 残存深度: 0.25m 主軸方位: N-20°-W 埋没土: 明るい色調のⅨ層土主体。柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 埋没土中からわずかに出土しただけで、床面付近からの遺物出土は皆無であった。



A - A'

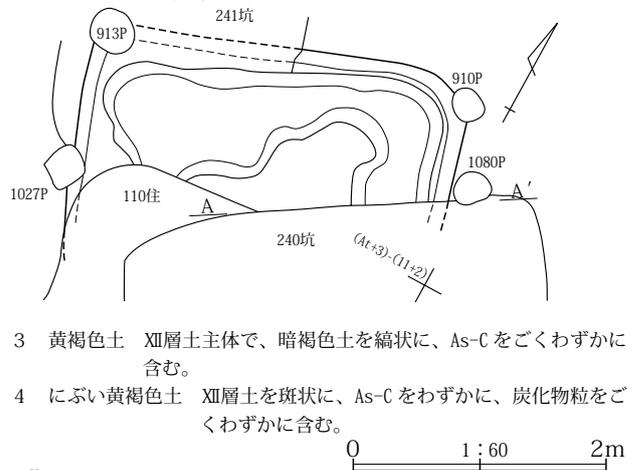
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に、Ⅻ層土を少量含む。
- 2 暗褐色土 As-Cを少量、炭化物微粒をごくわずかに含む。

第851図 111号住居

114号住居(第852図 P L.192)

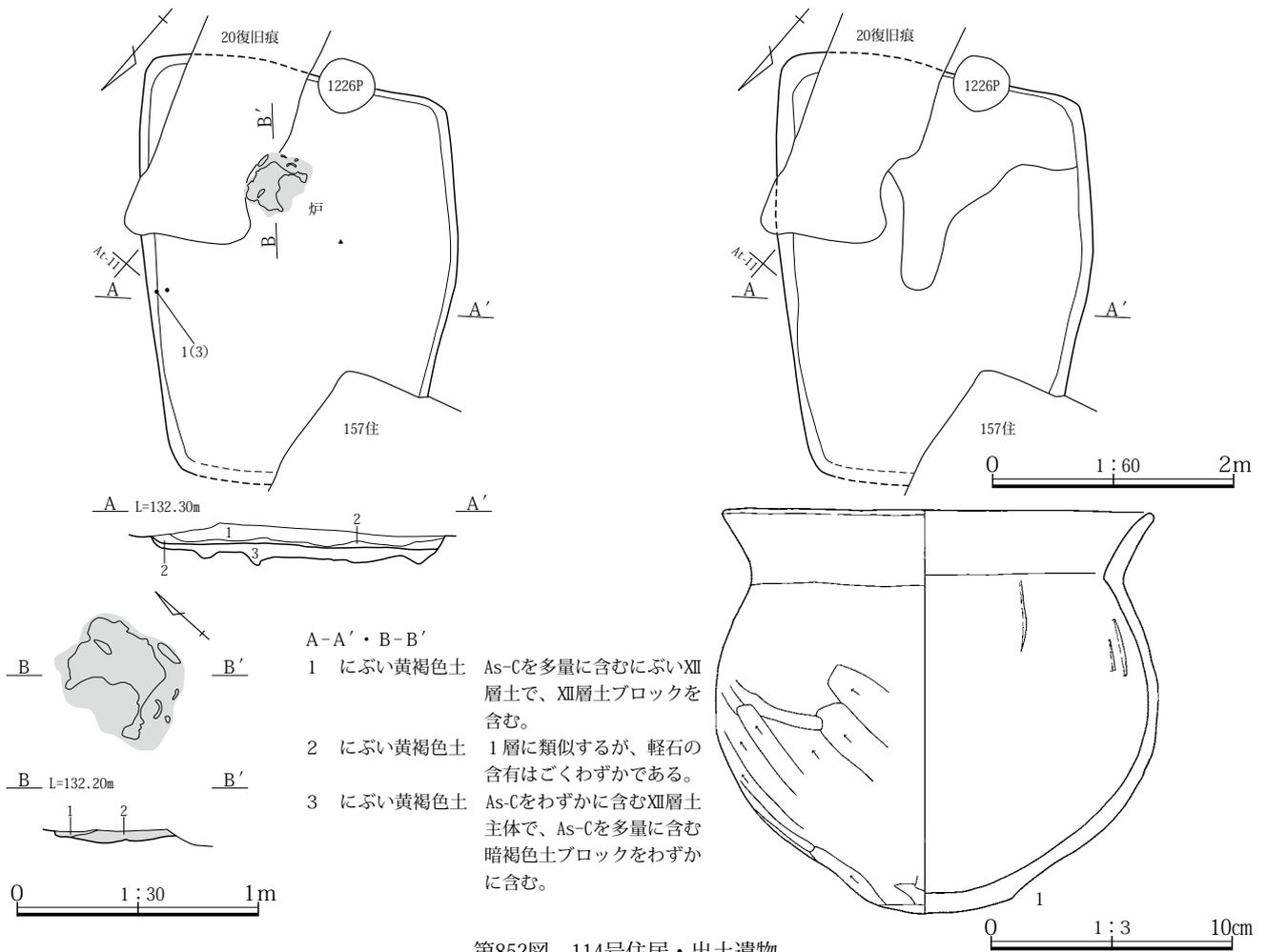
位置: As・At-10・11グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: (3.50)m×2.57m 残存深度: 0.17m 主軸方位: N-43°-W 埋没土: 明るい色調のⅨ層土主体。柱穴: 未検出 炉: 床面の南東より不整形の焼土面として検出した。遺物: 東壁の中央付近から甕(1)が出土した他、中央部に扁平な礫が出土した。重複: 北西コーナー部で157号住居と重複し、検出状況から114号住居→157

重複: 110号住居し重複し、残存状況から111号住居→110号住居と考えられる。 所見: 時期を特定できるような遺物出土がなかったが、埋没土中に二ツ岳系軽石が確認できず、掘り方が壁に沿って行われている特徴が3面とした住居に特徴的なものであったため、3面として扱った。 時期: 古墳前期



- 3 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、暗褐色土を縞状に、As-Cをごくわずかに含む。
- 4 にぶい黄褐色土 Ⅻ層土を斑状に、As-Cをわずかに、炭化物微粒をごくわずかに含む。

号住居と考えられる。 所見: Ⅺ層土中で検出されたもので、壁は南西コーナー付近と南東コーナー部は比較的良好に残存したが、北東コーナー部は判然としなかった。床面は炉の検出面として捉えたが、硬化面は検出されず全体にしまりのないものであった。検出した部分には掘り方調査によっても柱穴、貯蔵穴に相当するような掘り込みは検出されていない。 時期: 4世紀後半

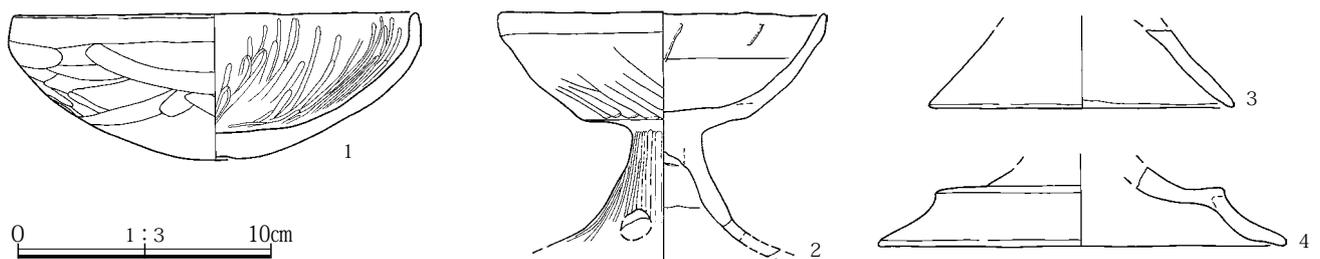


第852図 114号住居・出土遺物

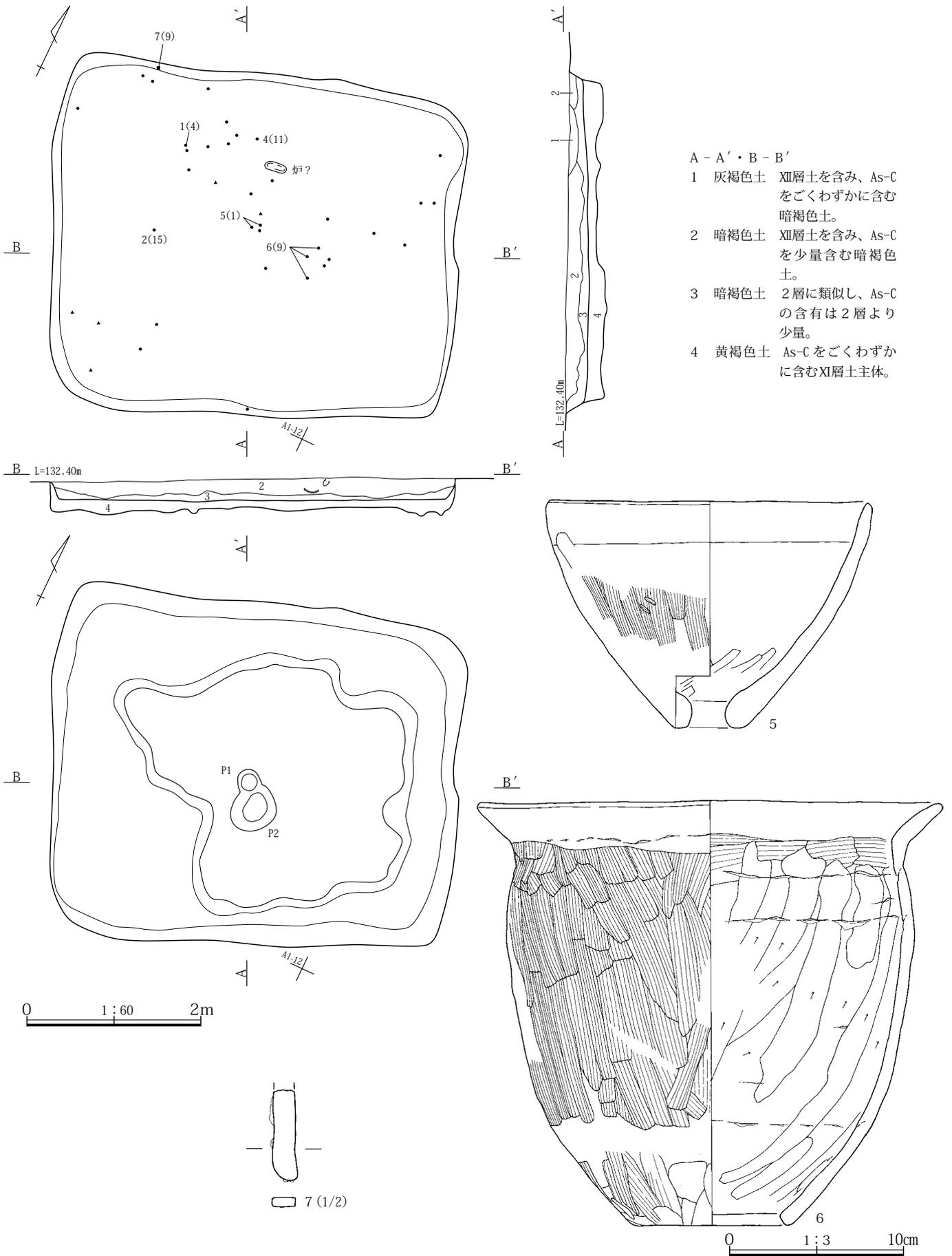
122号住居(第853・854図 P L.192・193・298)

位置: Ak・A1-11・12グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 4.65m×4.01m 残存深度: 0.26m 主軸方位: E-25°-N 埋没土: 色調の明るいⅨ層土主体で、As-C含有が少ない。柱穴: 未検出 炉: 明瞭な焼土の検出はできなかったが、住居中央やや北側の床面に埋め込まれたように出土した棒状礫付近に、焼土とするほどに明瞭なものではなかったが変質が窺えるので、この位置にあった可能性が高い。遺物: 環(1)・高坏(2)・有孔鉢(5)・甗(6)は中央部からの出土で、南西コーナー部に礫が出土した他、北西コーナー部近くから断面長方形の棒状の

不明鉄製品が1点(7)出土した。重複: なし 所見: Ⅺ層土中で確認をしたもので、As-Cの有無によって明瞭に平面を捉えることができた。床面は、埋没土とは様相が異なるⅫ層土ブロックが斑状に検出された面として捉えたもので、硬化面や貯蔵穴などは検出されなかった。掘り方は床面全体に認められたが、壁側が若干深く掘削されており、当該期の住居に特徴的な掘り方が行われている。中央の平坦部分に重複してP 1(径0.26m、深さ0.30m、円形)、P 2(径0.50m、深さ0.32m、不整円形)を検出した。時期: 5世紀前半



第853図 122号住居出土遺物(1)

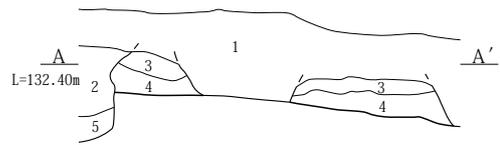
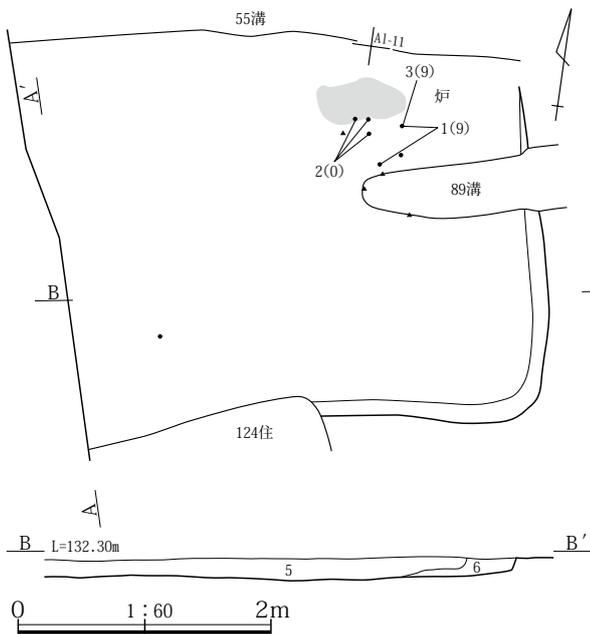


第854図 122号住居・出土遺物(2)

123号住居(第855図 P.L.193・298・299)

位置: Ak・A1-10グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: (3.90)m×(3.06)m 残存深度: 0.30m 主軸方位: E-12°-N 埋没土: As-Cを含むXII層土主体。柱穴: 未検出 炉: 東壁寄りの床面に検出した0.70×0.30mの楕円形の焼土部分を炉と判断した。床面が直接焼土化したもので、掘り方は認められない。遺物: 炉脇からは甕2点(2・3)・鉢(1)潰れたような状況で出土した以外に、目立った遺物出土は認められなかった。重複: 124号住居と重複し、検出状況から123号住居→124号住居と考えられる。また、中央部分及び北側部分が2面の

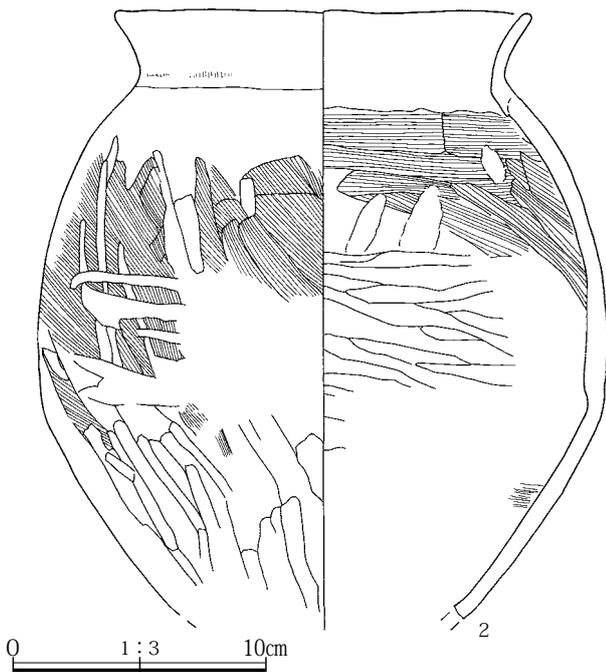
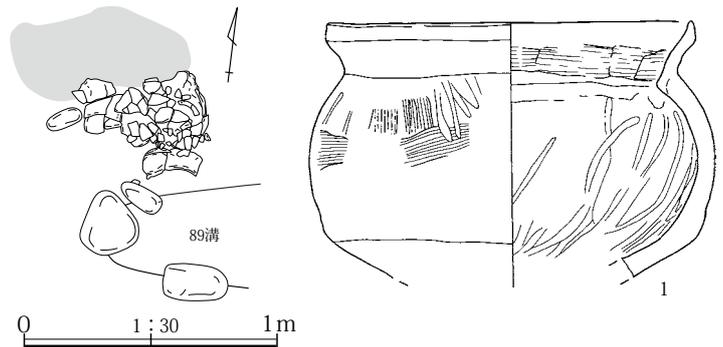
55号溝と89号溝の削平によって失われている。所見: 調査区境に位置していたが、西側の調査区(IV区)では123号住居の西側部分は検出されていない。VI区とIV区との間には橋台工事との関係で2mほどの未調査部分が生じており、この未調査部分に西壁があった可能性が高く、東西規模を最大に見ても6.5mを超えることは考えられない。床面は遺物出土面と炉の検出面として捉えたが、XII層土を直接に床面としたもので掘り方は行われておらず、精査によって柱穴・貯蔵穴などは検出されず、硬化面も認められなかった。時期: 4世紀後半



A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 XII層土を含み、As-C・二ツ岳系軽石を少量含むXI層土。
- 2 にぶい黄褐色土 XII層土を多量に、As-C・炭化物微粒をわずかに含むにぶいXII層土。
- 3 褐色土 XII層土を多量に、As-Cをわずかに含むXI層土。
- 4 黄褐色土 As-Cをごくわずかに含むXII層土主体。
- 5 にぶい黄褐色土 2層に類似するが、As-C・炭化物の含有はごくわずかである。
- 6 にぶい黄褐色土 4層に類似するが、軽石の含有は4層より少量。

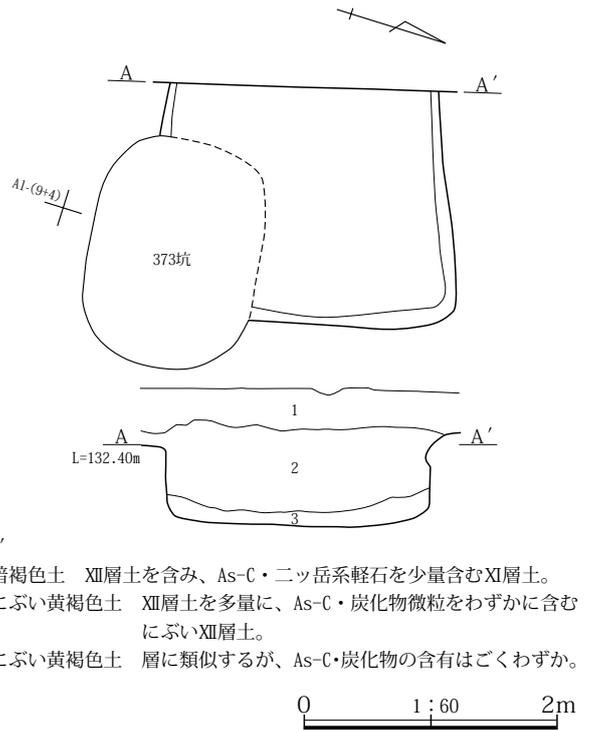
B'



第855図 123号住居・出土遺物

124号住居(第856図 P L.193)

位置: Ak・A1- 9・10グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: (1.88)m×2.22m 残存深度: 0.59m 主軸方位: E-20°-N 埋没土: As-Cと炭化物を微量に含むⅫ層土主体。柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 埋没土中から小破片がわずかに出土した。重複: 123号住居と重複し、検出状況から123号住居→124号住居と考えられる。所見: 調査区の境に検出された住居であるが、123号住居と同様に西側調査区との間に生じた未調査部分のために全体を明らかにすることはできなかった。平面的にはⅫ層土で確認を行ったが、残存状態は良好で壁は垂直に近い状態で残されていた。しかし、床面とした面は中央に向かってわずかに傾斜し、床面付近からの遺物出土が皆無であるばかりでなく、炉や貯蔵穴などの施設も検出されていない。また、当該期の住居としては小規模に過ぎるようにも思えることから、住居ではない可能性もある。時期: 5世紀代

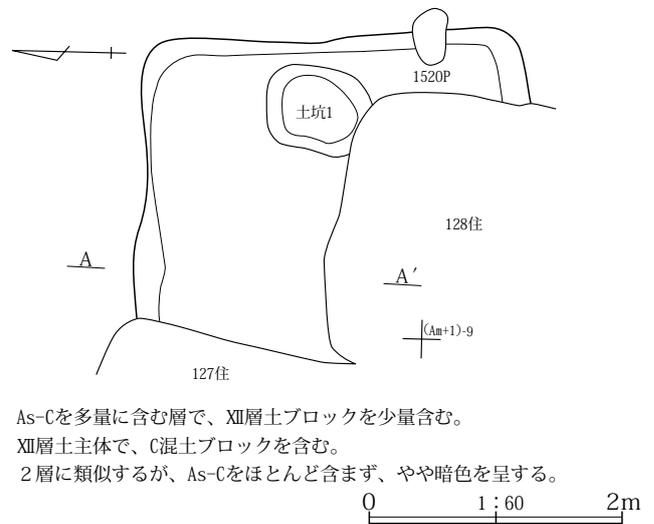
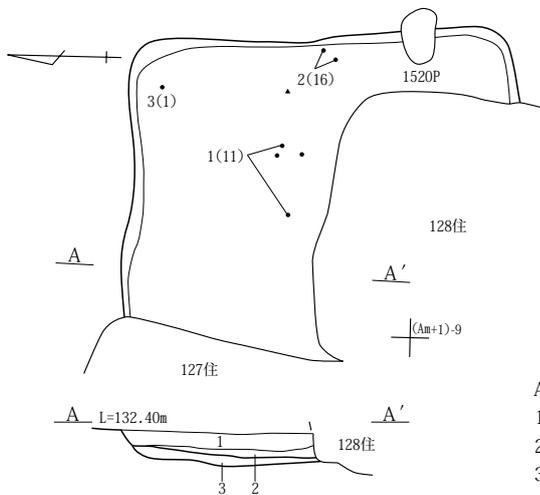


第856図 124号住居

129号住居(第857・858図 P L.193・194・299)

位置: Am- 8・9グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (2.57)m×3.05m 残存深度: 0.18m 主軸方位: E-4°-N 埋没土: Ⅻ層土ブロックを含むⅨ層土主体。柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 高坏(1)が中央の床面から若干浮いた位置から、埴(2)が東壁際中央から出土した他、北東コーナー部の床面に完形の甕(3)が口縁部を下にして出土したことが特筆される。重複: 126・127・128号住居と重複し、検出状況から129号住居→126・127号住居→128号住居と考えられる。所見:

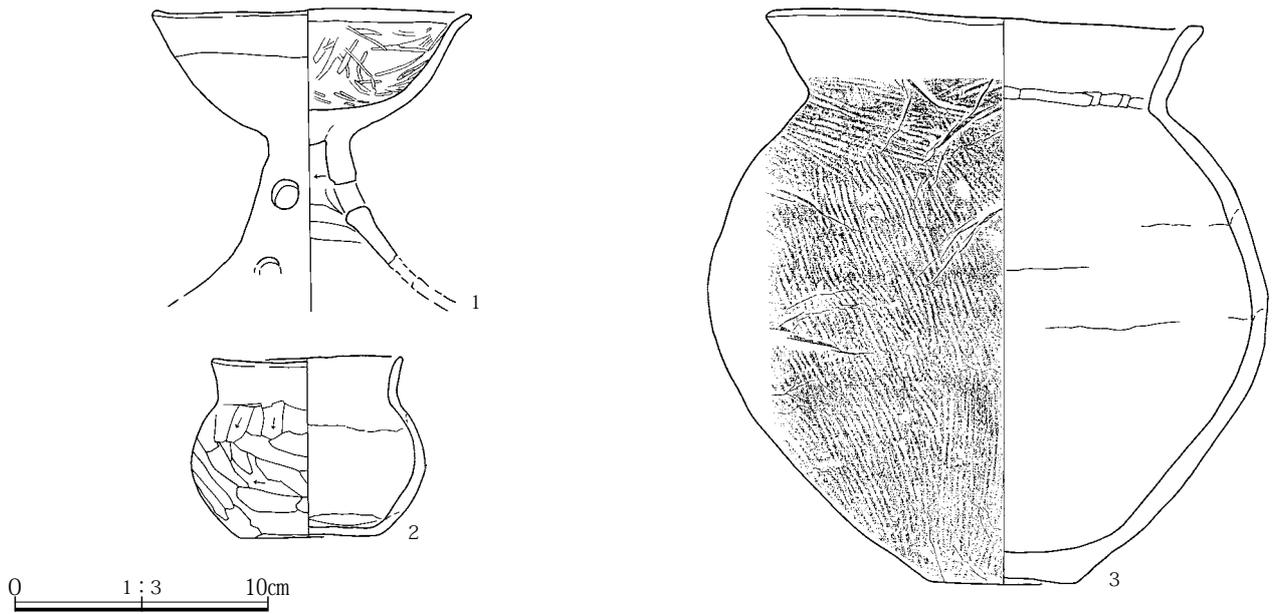
127・128号住居との重複によって削平を受け、全体の1/4程度が残存したものと考えられる。床面は3の伏せられていた面として捉えたが、Ⅻ層土ブロックが斑状に目立っており、埋没土とは明らかに異なる土層であった。掘り方は全体に行われており、As-Cをほとんど含有しない暗色の土で埋没していた。掘り方の調査で東壁中央に接する位置から0.82×0.66m、深さ0.24mの楕円形を呈する土坑1を検出したが、貯蔵穴とすべきか判断はできなかった。時期: 4世紀前半



A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に含む層で、Ⅻ層土ブロックを少量含む。
- 2 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、C混土ブロックを含む。
- 3 黄褐色土 2層に類似するが、As-Cをほとんど含まず、やや暗色を呈する。

第857図 129号住居

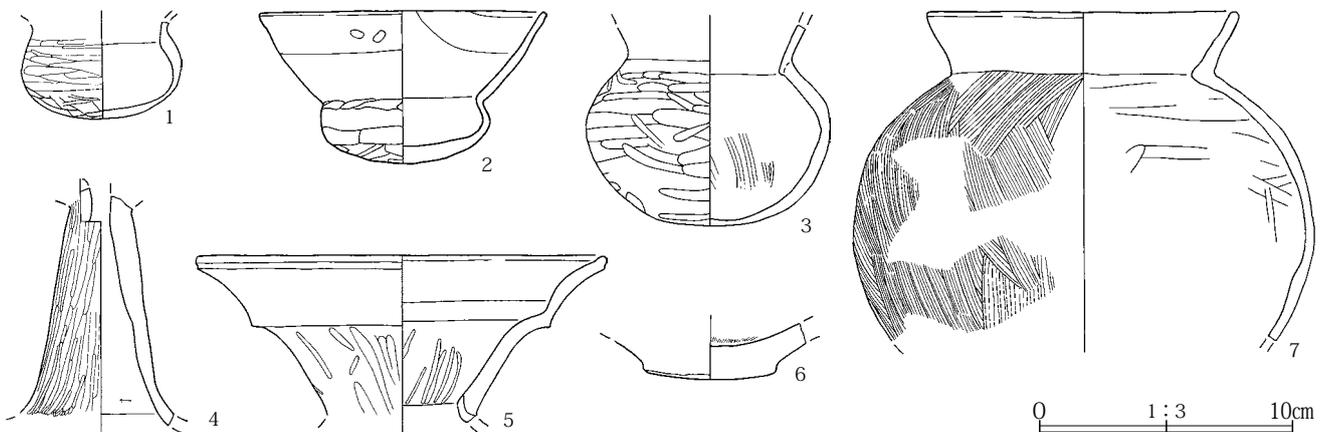


第858図 129号住居出土遺物

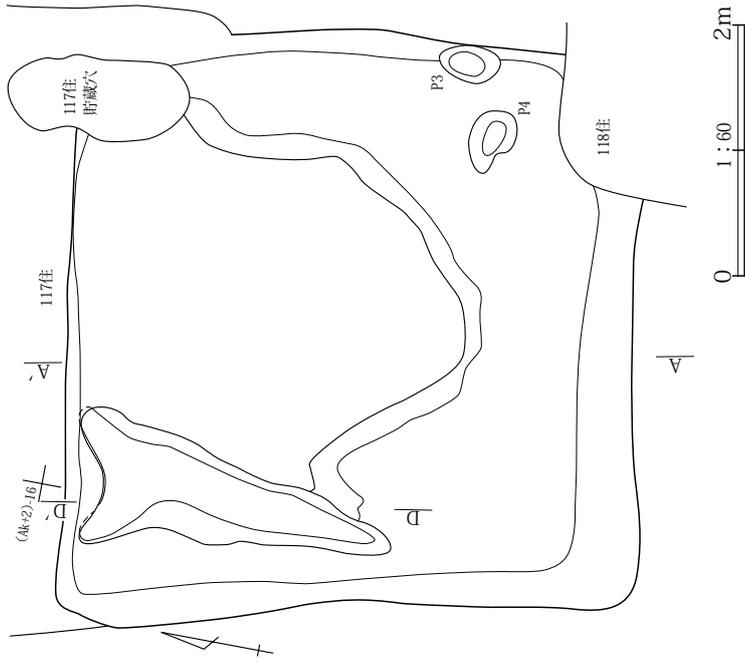
133号住居(第859～861図 P L.194・195・299)

位置: Ak・A1-15・16グリッド 形状: 隅丸方形 規模: 4.47m×4.46m 残存深度: 0.52m 主軸方位: N-8°-W
 埋没土: IX層土主体であるが、下層ほどAs-C含有量が多い。
 柱穴: 未検出 炉: 住居中央やや北寄りに不整形の焼土2カ所、北壁際のやや西寄りに不整楕円形の焼土を2カ所それぞれ検出したが、焼土の状況と位置から中央付近の2カ所を炉と判断した。遺物: 南壁際の中央に甕(8)が口縁部を南西方向に傾け完形で出土し、北壁中央の壁際から小形丸底埴(2)が伏せた状態で出土し、さらに西壁中央の壁際から口縁部の欠損した直口壺(3)が出土した。また、炉脇の礫上部から剣形石製模造品(9)が出土したことが特筆される。重複: 117・118号住居と重複し、検出状況から133号住居→117・118号住居である。所見:

117・118号住居と重複していない部分の壁の残存状況は良好で、東壁には検出面から0.3mほど下がった位置に幅0.2mのテラス状の平坦面がある。床面は炉と遺物の出土面として捉えたが、同一面で炭化材とその下部から焼土が検出され、同様に壁際にも炭化材と焼土が見られることから、133号住居は焼失しているものと思われる。床面と掘り方の調査で、P 1 (0.36×0.28m、深さ0.42m、楕円形)、P 2 (径0.30m、深さ0.06m、円形)、P 3 (0.47×0.29m、深さ0.09m、楕円形)、P 4 (0.52×0.34m、深さ0.12m、不整楕円形)の4カ所のピット状掘り込みを検出したが、規則的な配置は認められないことから柱穴とは考えられず、北西コーナー近くに検出された径0.6m、深さ0.33mの円形を呈する掘り込みが貯蔵穴の可能性はある。 時期: 4世紀後半

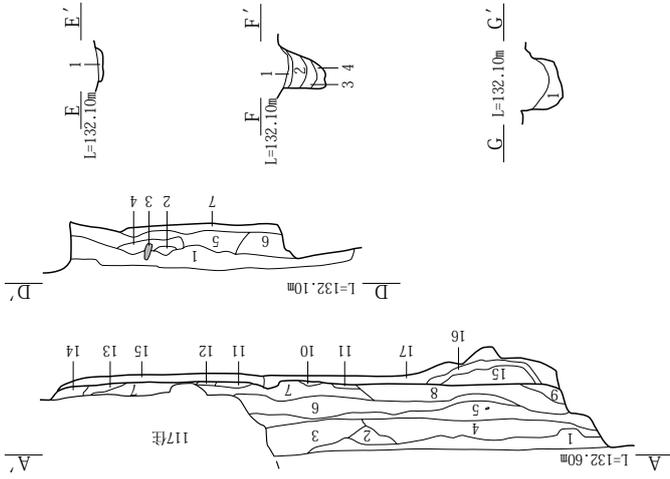


第859図 133号住居出土遺物(1)



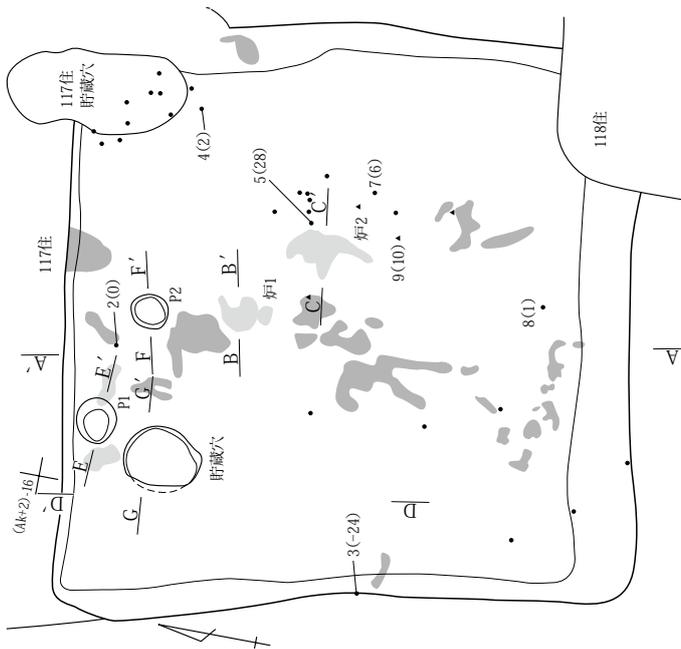
D-D'

- 1 褐色土 XI層土主体で、As-C・炭化物微粒をごくわずかに含む。
 - 2 にぶい黄褐色土 XI層土を多量に含む。
 - 3 黒色灰層
 - 4 黒褐色土 XI層土を少量含むXI層土で、炭化物微粒をごくわずかに含む。
 - 5 にぶい黄褐色土 2層に類似するが、炭化物微粒をごくわずかに含む。
 - 6 明黄褐色土 XI層土主体で、炭化物微粒をごくわずかに含む。
 - 7 明黄褐色土 XI層土を主体とする層で、掘りすぎか。
- E-E'
- 1 黒褐色土 黒色土主体で、XI層土を少量含むほか上面に赤褐色に変色した焼土を含み、粒子が細かい。
- F-F'
- 1 暗褐色土 As-C・炭化物ブロック・XI層土を含むXI層土。
 - 2 暗褐色土 1層に類似するが、As-C・炭化物は含まない。
 - 3 黒褐色土 炭化物を含む黒褐色土で、XI層土粒・ブロックを含む。
 - 4 黄褐色土 XI層土主体で、XI層土ブロックを含む。
- G-G'
- 1 暗褐色土 炭化物粒・ブロックを含むXI層土で、XI層土ブロックを含む。

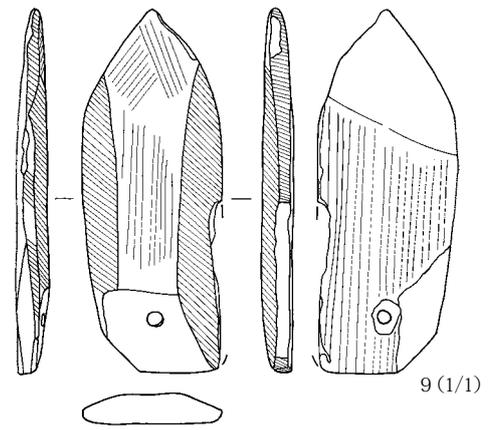
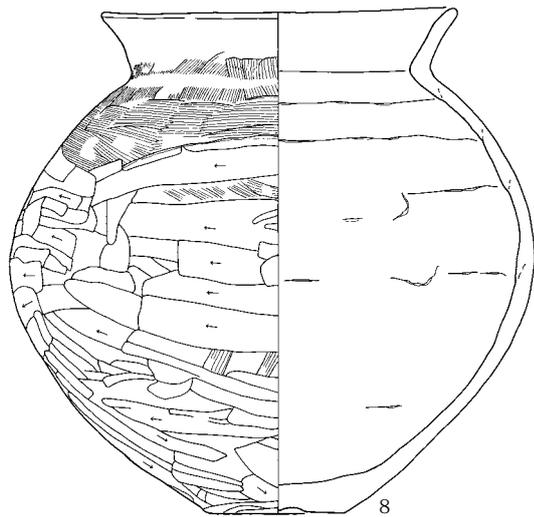


A-A'

- 1 にぶい黄褐色土 XI層土を斑状に、As-Cを少量含む。
- 2 褐灰色土 As-Cを多量に、XI層土を含む。
- 3 にぶい黄褐色土 XI層土を全体に斑状に、As-Cを多量に含む。
- 4 褐色土 XI層土主体で、As-Cをごくわずかに含む。
- 5 にぶい黄褐色土 XI層土を全体に斑状に、As-Cを少量含む。
- 6 にぶい黄褐色土 XI層土を斑状に、As-Cを多量に、炭化物微・細粒を含む。
- 7 褐色土 XI層土を斑状に、As-C・炭化物微・細粒をわずかに含む。
- 8 褐色土 7層に類似するが、軽石・炭化物の含有はごくわずかである。
- 9 褐色土 7層に類似するが、炭化物ブロックを含み、軽石は含まない。
- 10 灰褐色土 XI層土ブロック・焼土粒・ブロックを含む。
- 11 暗褐色土 黒色灰を含む暗褐色土で、XI層土ブロックを含む。
- 12 黒褐色土 黒褐色灰を全体を含む。
- 13 灰褐色土 10層に類似するが、炭化物ブロックを含む。
- 14 褐色土 炭化物微・細粒、XI層土ブロックを含む。
- 15 にぶい黄褐色土 XI層土を多量に、As-Cをごくわずかに含む。
- 16 にぶい黄褐色土 XI層土を多量に、As-C・炭化物微粒をごくわずかに含む。
- 17 褐色土 XI層土主体で、XI層土ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含む。



第860図 133号住居



0 1:3 10cm

第861図 133号住居出土遺物(2)

138号住居(第862図 P L.195)

位置：Ao・Ap-5・6グリッド 形状：隅丸方形？ 規模：(4.24)m×(3.92)m 残存深度：0.12m 主軸方位：N-30°-W 埋没土：As-Cを比較的多量に含むⅩ層土。 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：なし 重複：135・147号住居と重複し、検出状況から138号住居→135・147号住居である。 所見：83・91号溝によって削平を受けており、検出できたのは南コーナー部を含む部分だけである。Ⅹ層土中で平面の確認を行っており、この時点で輪郭は明瞭に捉えることができたものの、埋没土の残存はわずかで壁の残存状況は不良である。床面はⅩ層土の面として捉えたが、硬化面や炉、貯蔵穴の検出はなかった。 時期：古墳前期



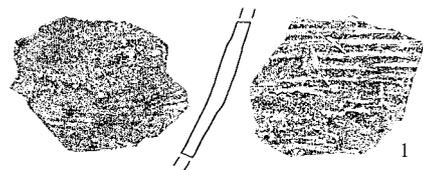
A-A'
1 暗褐色土 As-Cを多量に含むⅩ層土で、Ⅹ層土ブロックを含み、炭化物微粒をわずかに含む。

第862図 138号住居

140号住居(第863・864図 P L.195)

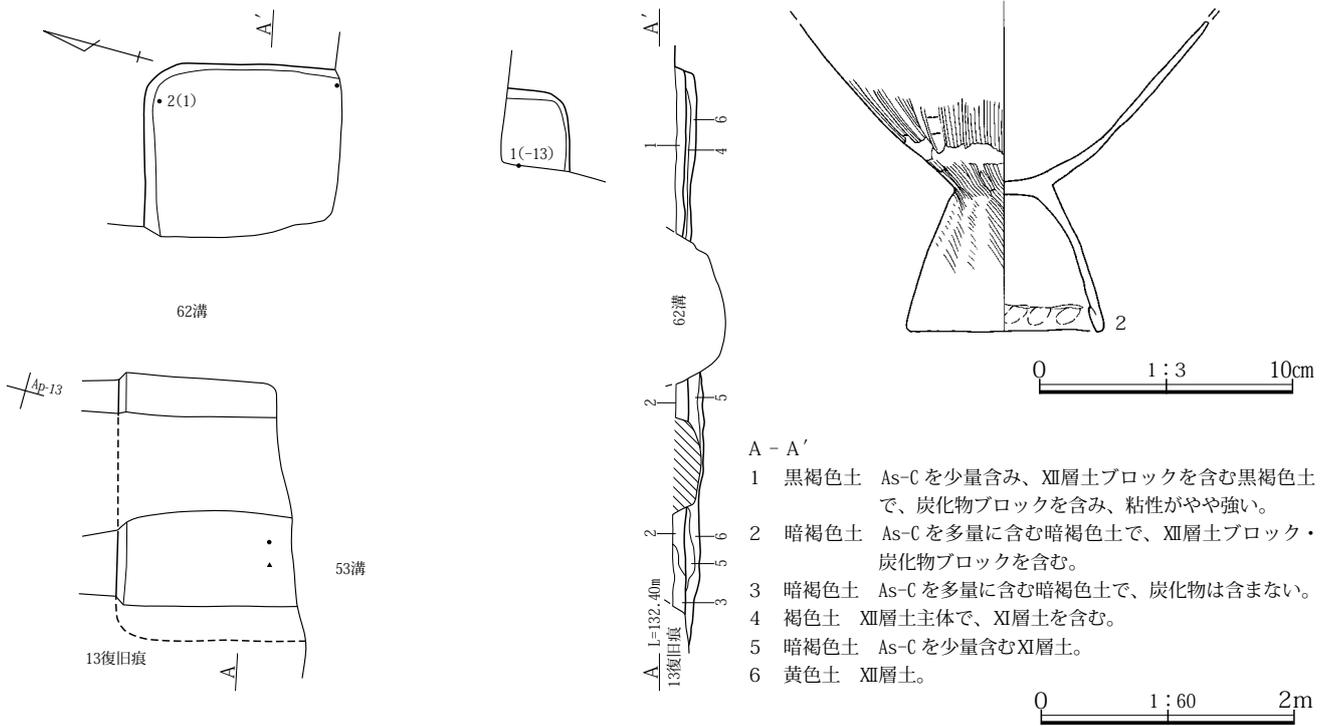
位置：Ao・Ap-12グリッド 形状：隅丸長方形 規模：(4.54)m×3.46m 残存深度：0.07m 主軸方位：E-19°-N 埋没土：Ⅹ層土ブロックとⅩ層土の混土。 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：北東コーナー部で台付甕(2)の下半が横転した状態で出土した。 重複：53・62号溝に削平されている以外に近い時期の遺構との重複はない。 所見：Ⅹ層土中で平面の確認をしたもので、53・62号溝との重複によって主要部分は削平されてしまい、検出できたのは北東及び南東コーナー部と北西部床面の一部である。床面は遺物の出土した面、及びⅩ層土ブロックが斑状に多く確認された面として捉え、検

出部分について精査を行ったが炉となるような焼土や貯蔵穴などはまったく確認することができなかった。掘り方は全体に5～12cmほど掘り下げられていた。 時期：4世紀前半



0 1:3 10cm

第863図 140号住居出土遺物(1)

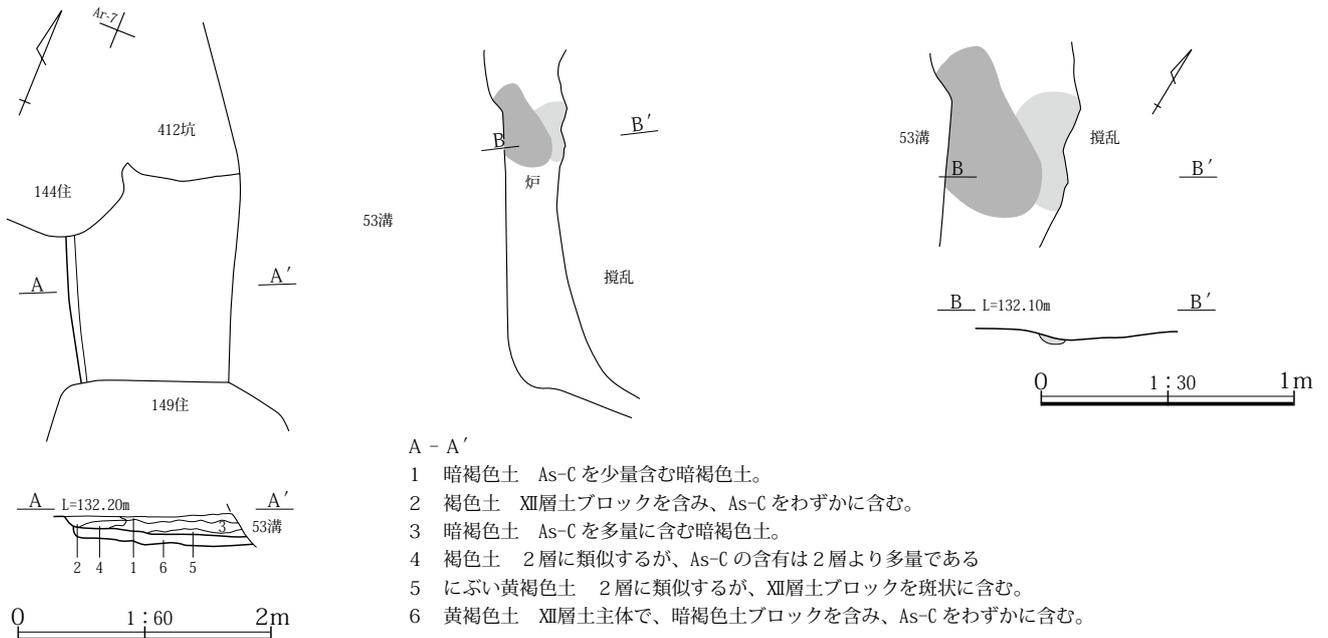


第864図 140号住居・出土遺物(2)

146号住居(第865図 P L.195)

位置：Ar- 6・7グリッド 形状：不明 規模：(3.90)m×(1.63)m 残存深度：0.17m 主軸方位：E-28°-N 埋没土：As-C含有量の少ないIX層土主体。 柱穴：未検出 炉：住居内における位置は特定できないが、床面が焼土化し脇に炭化物粒が集中する部分が1カ所検出されたため、炉と判断した。 遺物：埋没土中にごくわずかの土器片が出土しただけであった。 重複：143・

144・149号住居と重複し、検出状況や遺物から146号住居→149号住居→144号住居→143号住居と考えられる。 所見：前述の住居との重複の他に、東側は後世の攪乱を受け、中央部には南北方向に53号溝が重複しているため、検出されたのは西壁付近と炉周辺の床面のわずかな範囲であり、埋没土の状況や炉の存在から、3面の遺構であることは確実であるがその他詳細は判然としない。 時期：4世紀代



第865図 146号住居

148号住居(第866図 P L.196)

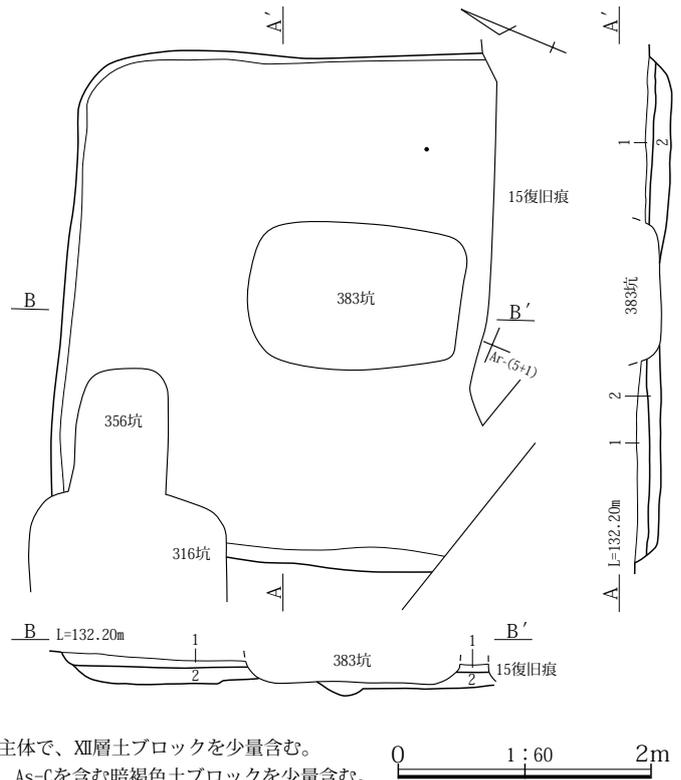
位置: Aq・Ar- 5グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: (3.35)m×4.11m 残存深度: 0.10m 主軸方位: N-18°-W 埋没土: 明るい色調のIX層土主体。柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 埋没土中からわずかな土器片が出土した。重複: 69号溝、316・356・383号土坑との重複によって壁の一部や床面が失われている。所見: 埋没土がXII層土に近い色調であったが、As-Cの含有が比較的顕著であったために、平面形は比較的容易に確認することができた。床面は、As-Cをわずかに含むXII層土が主体で、暗褐色土ブロックが斑状に検出された面として捉えたもので、硬化面や炉と見られる焼土や灰面は検出されず、全体に及んでいた掘り方の調査においても柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。床面からの遺物出土も土器小片が1点出土した以外に皆無であり、極めて生活感の薄い住居である。

時期: 古墳前期

A-A'・B-B'

1 褐色土 C混土のXI層土主体で、XII層土ブロックを少量含む。

2 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cを含む暗褐色土ブロックを少量含む。

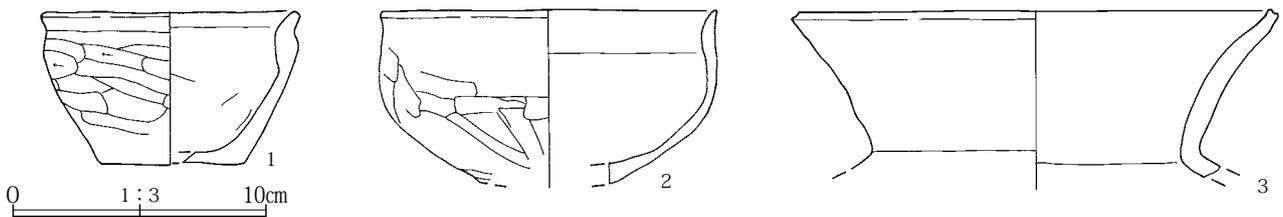


第866図 148号住居

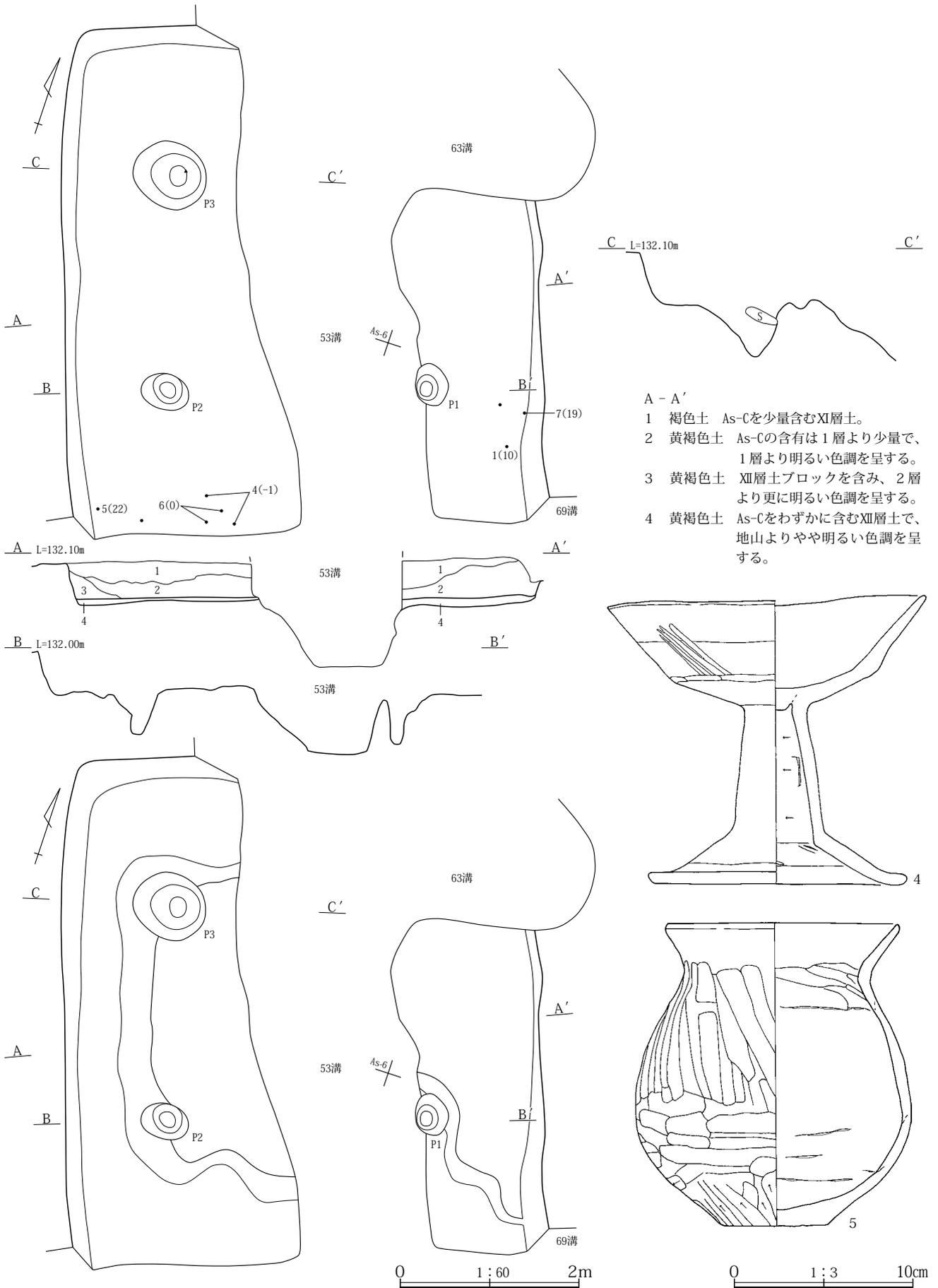
149号住居(第867・869図 P L.196・299)

位置: Ar・As- 5・6グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: (5.71)m×5.30m 残存深度: 0.41m 主軸方位: N-19°-W 埋没土: As-C含有の少ないIX層土主体で、東側からの埋没を示すような堆積状況が窺える。柱穴: 床面では確認することができなかったが、掘り方の調査でP 1 (0.48×0.31m、深さ0.59m、楕円形)、P 2 (0.38×0.53m、深さ0.51m、楕円形)、P 3 (0.73×0.83m、深さ0.60m、楕円形)の3カ所が柱穴であり、P 3の上層中に扁平な礫が1点出土した。P 1-P 2間の距離は2.90m、P 2-P 3間は2.40mであり、残り1カ所の柱穴は63号溝との重複によって失われたものと考えられる。炉: 床面中央付近にあったものと思われるが、中央部が53号溝との重複で深く削平されているため失われたものと考えられる。遺物: 南寄りの西壁際から甕(5)が横位の状態で出土し、その東寄りの床面から高坏

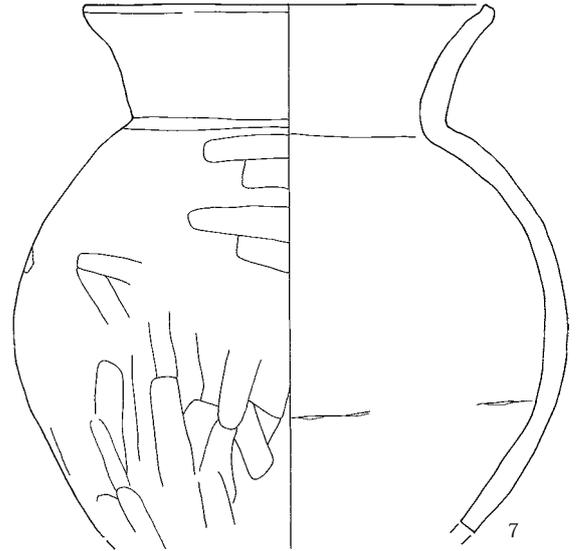
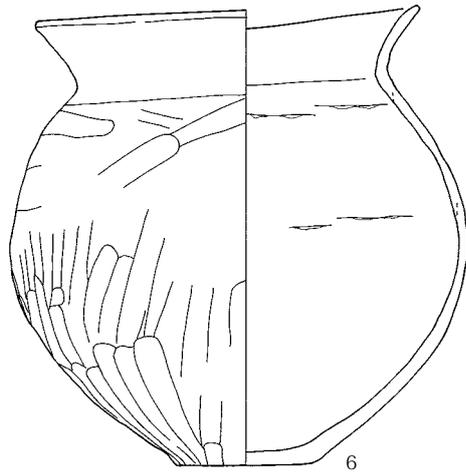
(4)と甕(6)が、さらに東壁際に甕の破片がまとまって出土した。重複: 53・69号溝との重複によって南壁及び中央部床面が失われている。所見: XII層土中で平面確認を行ったが、掘り込みが深かったため壁の残存は良好であった。床面は遺物の出土面として捉えたもので、埋没土と比較してAs-Cの含有が少なく、XII層土よりもわずかに暗い色調を呈していた。掘り方は全体に見られたが、特に壁に沿ってやや深く掘削されていた。掘り方の調査においては、貯蔵穴と見られるような掘り込みは検出されず、溝との重複部分にあったものと考えられる。西側に隣接する148号住居は、時期を特定し得るような遺物出土がなく時期の判断ができなかったものであるが、149号住居と主軸方位がほぼ一致しており、すぐ隣に位置するにもかかわらず重複していないことなど、ごく近い時期に構築されたものである可能性が高い。時期: 5世紀前半



第867図 149号住居出土遺物(1)



第868図 149号住居・出土遺物(2)



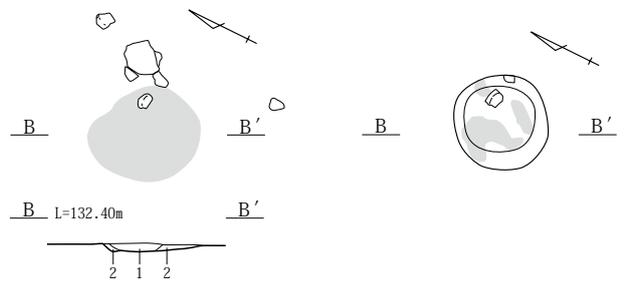
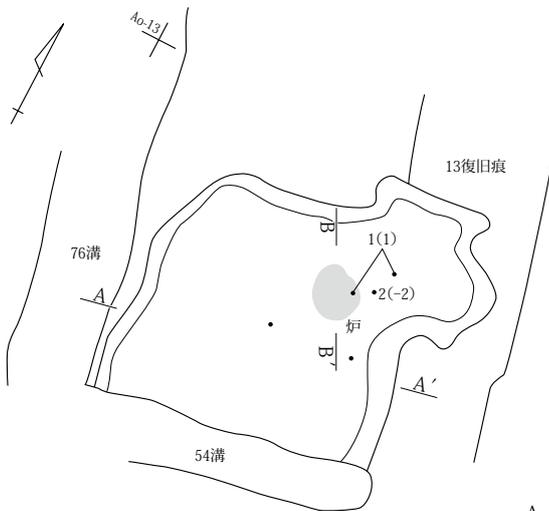
0 1:3 10cm

第869図 149号住居出土遺物(3)

151号住居(第870図 P L.197・299)

位置：Ao-12グリッド 形状：不明 規模：不明 残存
 深度：0m 主軸方位：不明 埋没土：不明 柱穴：未
 検出 炉：焼土粒と炭化物粒の密集する部分が1カ所検
 出され、下部のⅫ層土がわずかに焼土化していたことか

ら炉と判断した。 遺物：炉脇に甕の破片が出土した。
 重複：53・54・76号溝などによって削平されている。
 所見：検出時点で炉が確認されたことから、既に床面に
 達していたものと思われる。したがって壁はまったく残
 存せず住居範囲は不明である。 時期：4世紀後半か

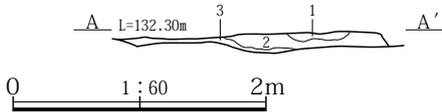


B-B'
 1 にぶい黄褐色土 Ⅻ層土を多量に、炭化物粒・焼土粒を含む。
 2 にぶい黄褐色土 1層に類似するが、Ⅻ層土ブロックを含み、炭化物・
 焼土粒の含有はごくわずかである。

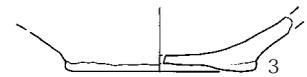
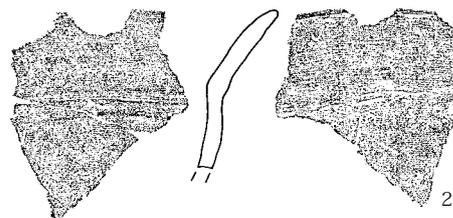
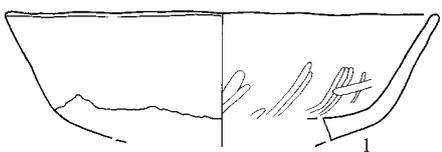
0 1:30 1m

A-A'

1 暗褐色土 As-Cを多量に含むⅪ層土で、しまりが強い。
 2 褐色土 As-Cをわずかに含むⅪ層土。
 3 黄褐色土 Ⅻ層土主体。



0 1:60 2m



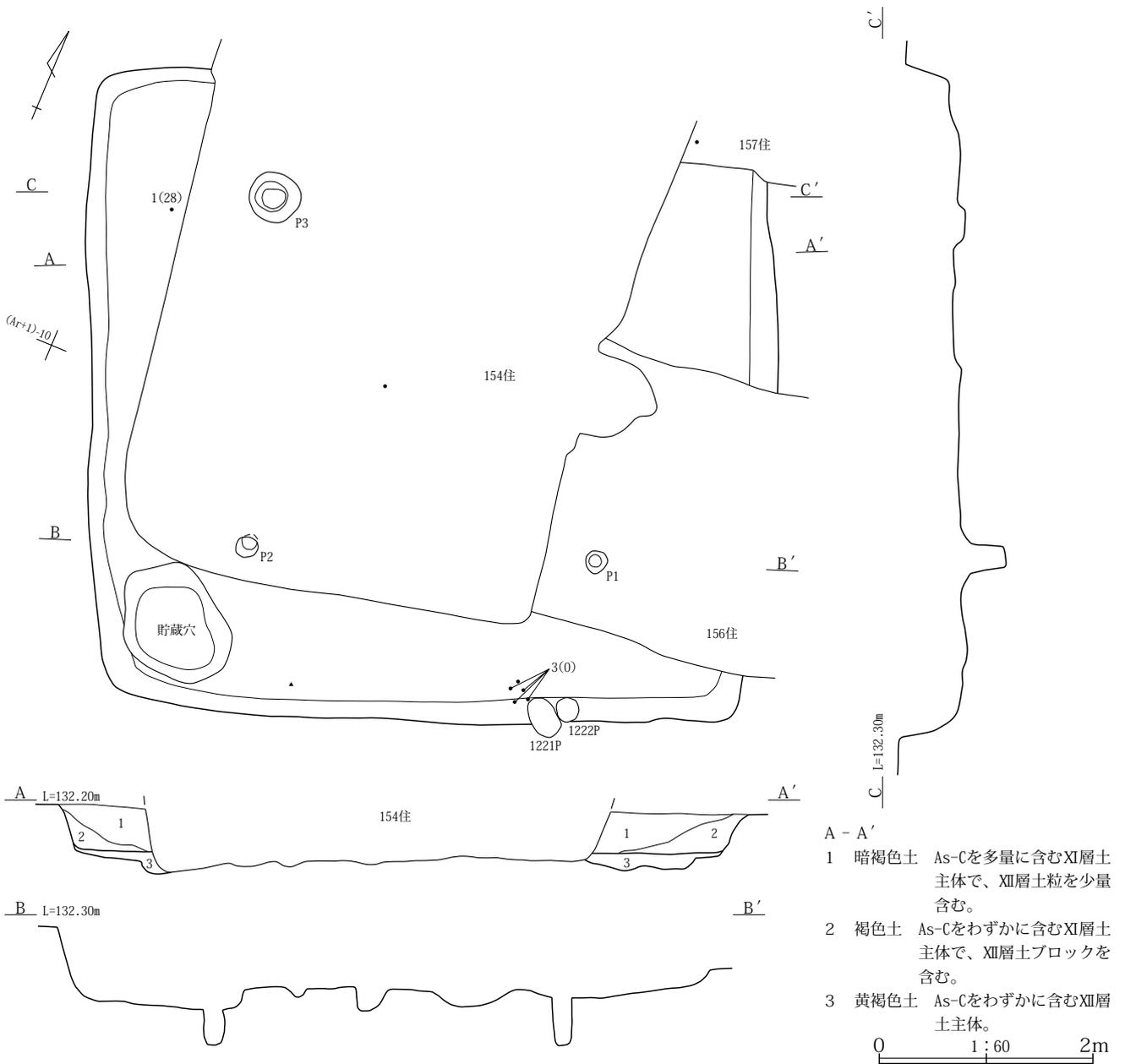
0 1:3 10cm

第870図 151号住居・出土遺物

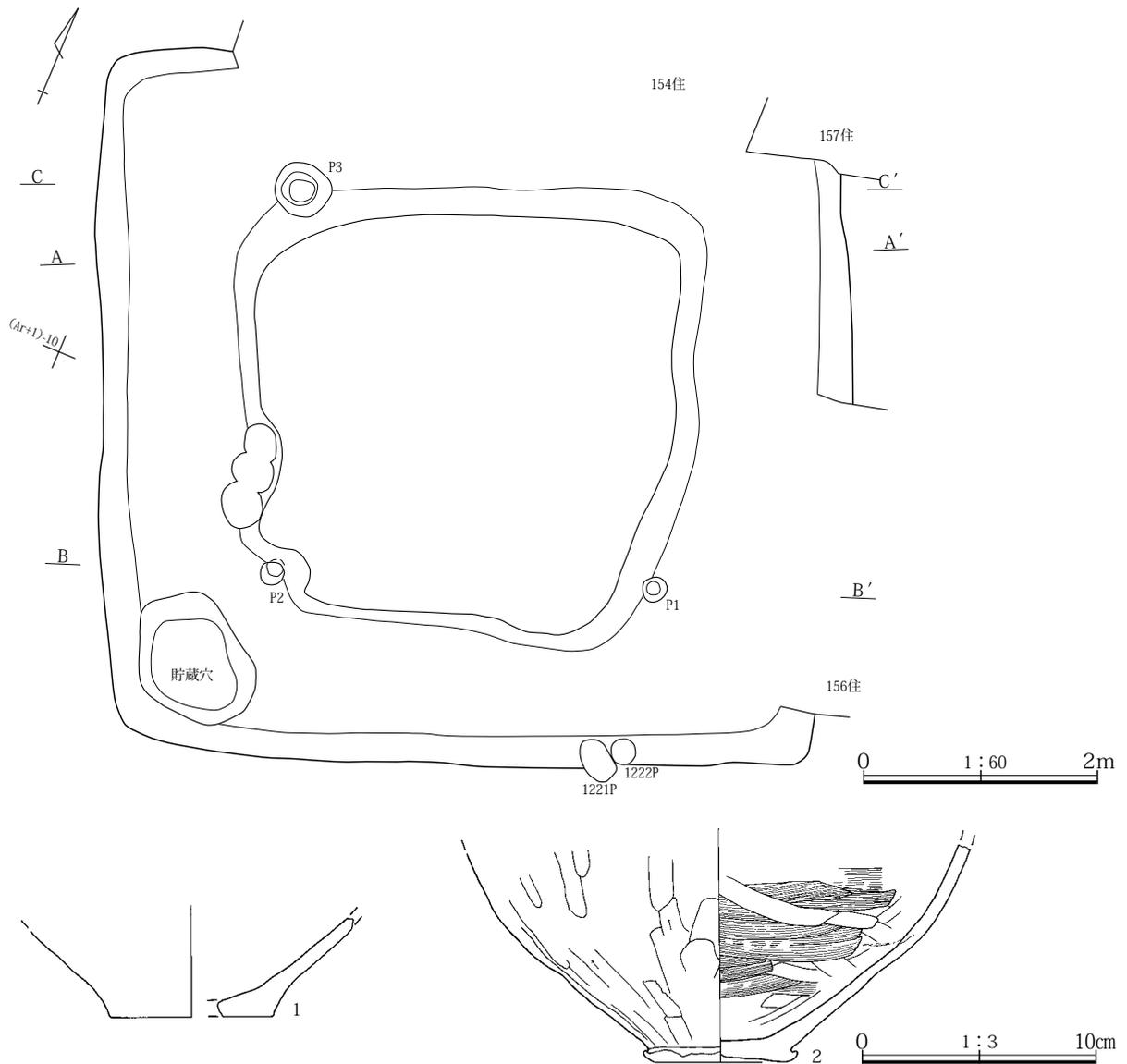
155号住居(第871・872図 P L.197・299)

位置：Ar・As- 9・10グリッド 形状：隅丸方形 規模：6.38m×6.06m 残存深度：0.43m 主軸方位：E-23°-N 埋没土：As-C含有の多いⅩ層土主体。柱穴：掘り方の調査で検出したP 1(径0.23m、深さ0.45m、円形)、P 2(径0.21m、深さ0.30m、円形)、P 3(径0.45m、深さ0.46m、円形)の3本を柱穴と判断し、もう1本については検出することができなかった。P 1-P 2間及びP 2-P 3間とはともに3.25mと等距離である。炉：住居中央にあったものが、154号住居との重複によって失われたものと考えられる。遺物：南壁際に土器片がわずかに出土した。重複：154・156・157号住居と

重複し、検出状況、出土遺物から155号住居→156・157号住居→154号住居である。所見：Ⅹ層土中で154号住居と同時に検出したもので、As-C含有が目立っていたことから平面形は比較的容易に確認できた。床面はAs-Cをごくわずかに含むⅩ層土主体の土で構築されていたため、埋没土との相違が大きく容易に捉えることができた。しかし、156・157号住居との重複によって大半が失われていた。南西コーナー部には、1.22×0.90m、深さ0.35mの不整楕円形の掘り込みが検出され、位置から貯蔵穴と考えられる。掘り方は、壁寄りの部分が1mほどの幅でわずかに深く掘削される当該時期に特徴的なものである。時期：4世紀後半か



第871図 155号住居

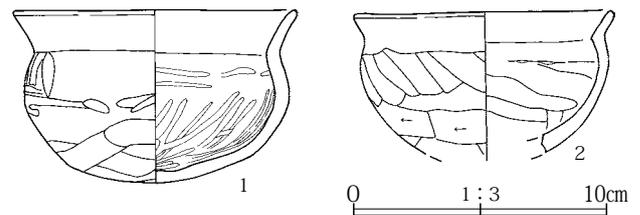


第872図 155号住居掘り方・出土遺物

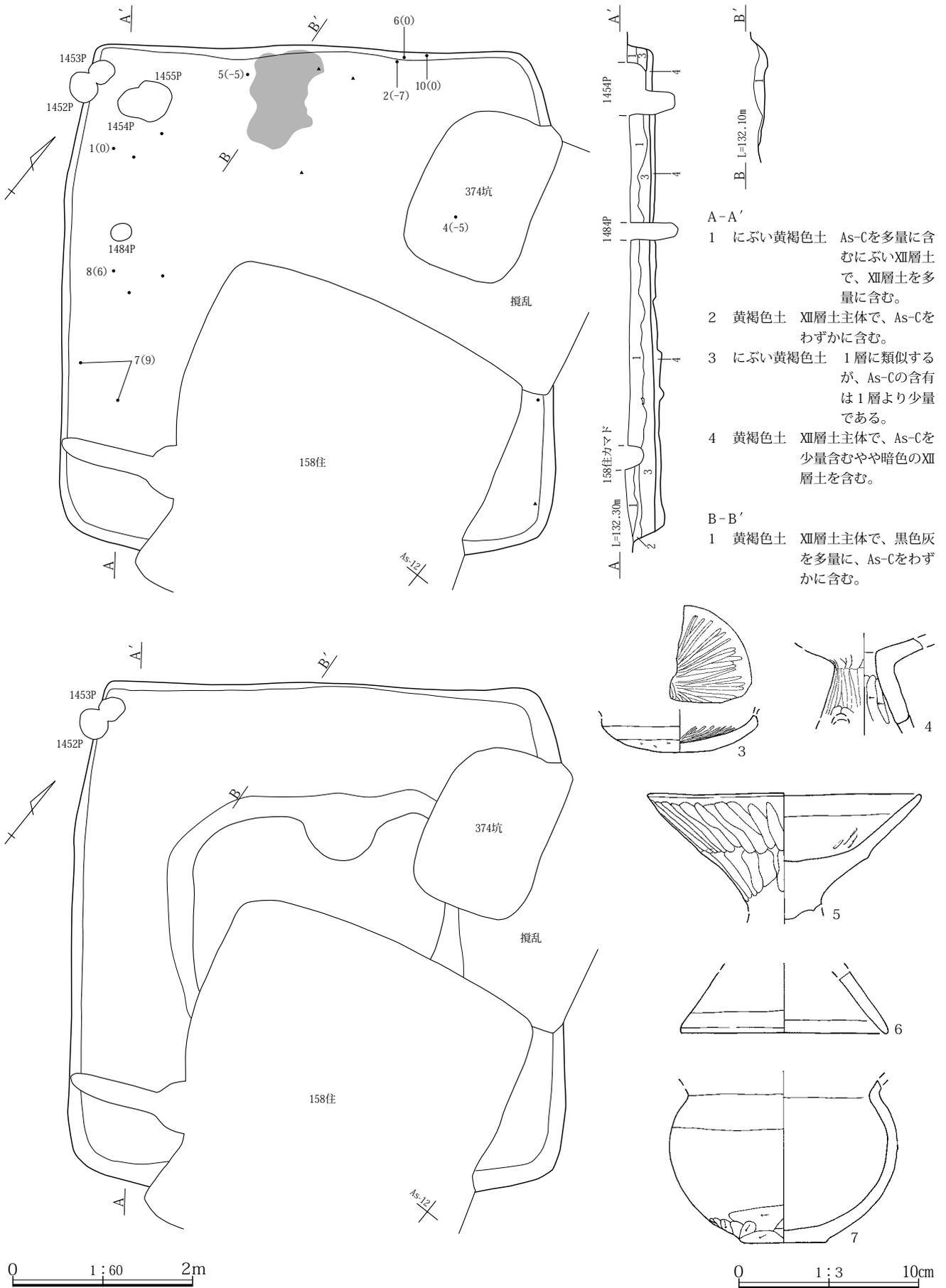
159号住居 (第873～875図 P L.197・300)

位置: Aq～As-11～13グリッド **形状:** 隅丸方形 **規模:** 5.62m×5.50m **残存深度:** 0.23m **主軸方位:** N-37°-W **埋没土:** As-C含有の比較的多いIX層土主体であり、本来のIX層土よりも色調が明るい。 **柱穴:** 未検出 **炉:** 北壁際の中央に黒色灰面を検出し、その南側に棒状礫が床面に埋め込まれたような状況で検出された位置が炉の可能性はあるが、焼土は検出されず判然しない。 **遺物:** 北西コーナー部付近の床面から1の鉢が1点出土した他は、床面及び埋没土中から破片と礫がわずかに出土した。 **重複:** 158号住居と重複し、検出状況及び出土遺物から159号住居→158号住居である。 **所見:** XII層土中で確認を行い、158号住居と同様にAs-Cの含有が指標となり比較的多く明瞭に平面の確認ができた。北側を62号

溝によって削平されていたが、溝底面よりも住居掘り込みが深かったため、コーナー部もかろうじて捉えることができた。床面は、黒色灰の検出面、及び遺物出土面として捉え、全体に平坦に検出した。床面精査において数本のピットを検出したが、いずれもAs-B混土で埋没したものであり、住居に伴うものは検出されなかった。掘り方は、住居中央がやや浅く、壁側を深く掘削する当該時期の住居に特徴的なものである。 **時期:** 5世紀前半

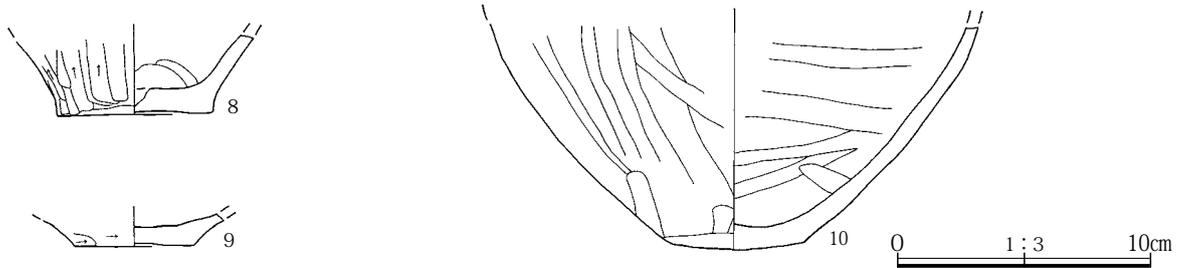


第873図 159号住居出土遺物(1)



- A-A'**
- 1 にぶい黄褐色土 As-Cを多量に含むにぶいⅫ層土で、Ⅻ層土を多量に含む。
 - 2 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、As-Cをわずかに含む。
 - 3 にぶい黄褐色土 1層に類似するが、As-Cの含有は1層より少量である。
 - 4 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、As-Cを少量含むやや暗色のⅫ層土を含む。
- B-B'**
- 1 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、黒色灰を多量に、As-Cをわずかに含む。

第874図 159号住居・出土遺物(2)

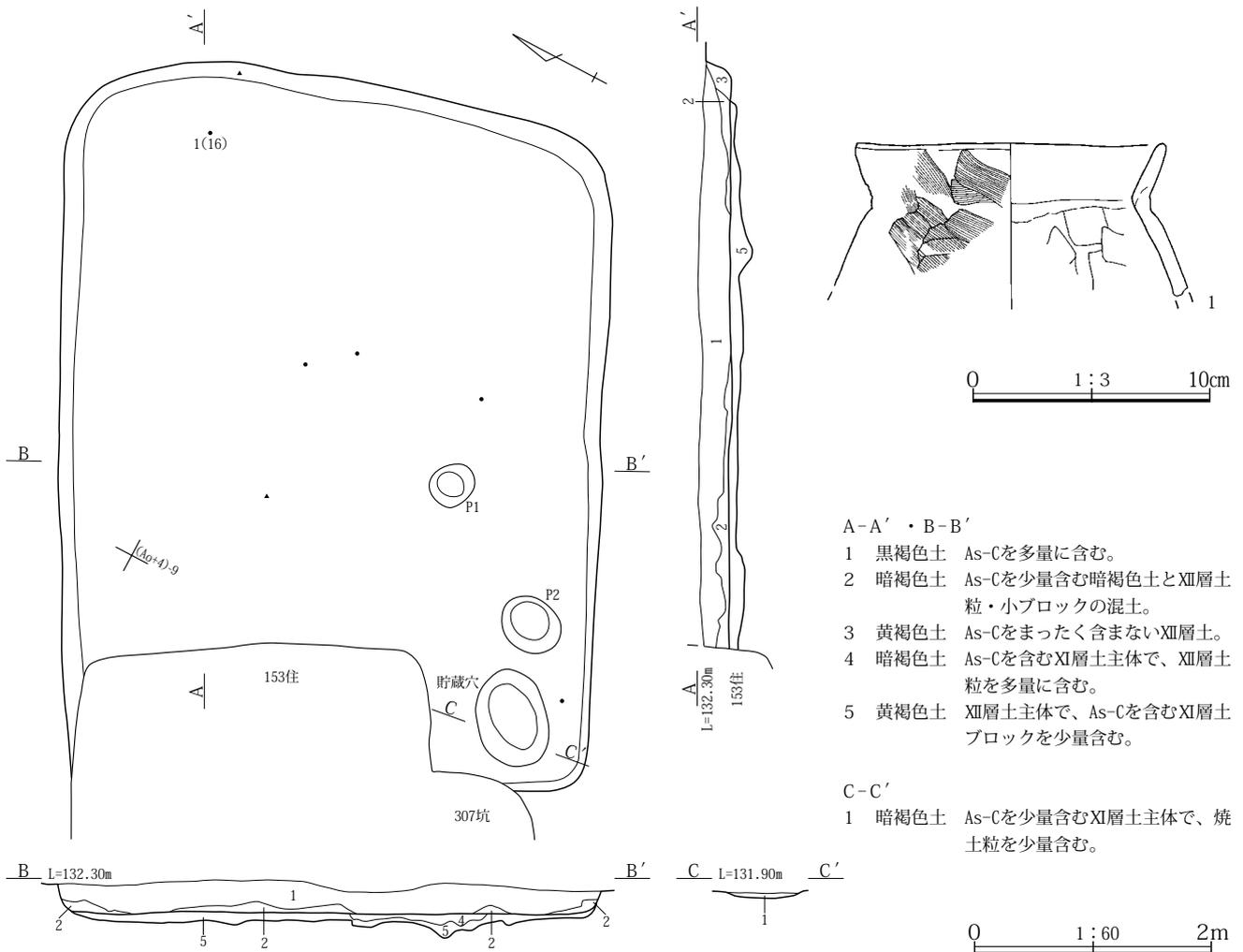


第875図 159号住居出土遺物(3)

163号住居(第876図 P L.197・198)

位置: Ao・Ap- 8・9 グリッド 形状: 隅丸長方形 規模: 5.70m×4.60m 残存深度: 0.24m 主軸方位: E-28°-N 埋没土: IX層土主体 柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 埋没土中から破片がわずかに出土した。重複: 153号住居と重複し、検出状況から163号住居→153号住居である。所見: 当初は153号住居と分離ができなかったために同時に調査を進めていたが、調査途中で新旧関係が把握できたために、153号住居を先行して調査を進めた。床面は、As-Cをわずかに含むXII層土主体の

土であり、埋没土との差が歴然としていたために、容易に捉えることができた。床面の精査によってP 1(径0.35m、深さ0.21m、円形)、P 2(径0.45m、深さ0.13m、円形)の2カ所のピットと、やや規模の大きな土坑状掘り込みを1カ所検出したが、P 1、P 2については配置に規則性がなく柱穴とは考えられない。また、土坑状掘り込みは、0.83×0.61m、深さ0.21mの楕円形を呈しており、南西コーナー部に位置していることから貯蔵穴である可能性が高い。炉は床面及び掘り方の調査においても検出できなかった。 時期: 4世紀前半



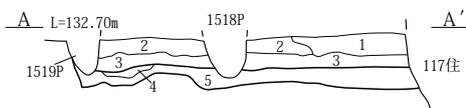
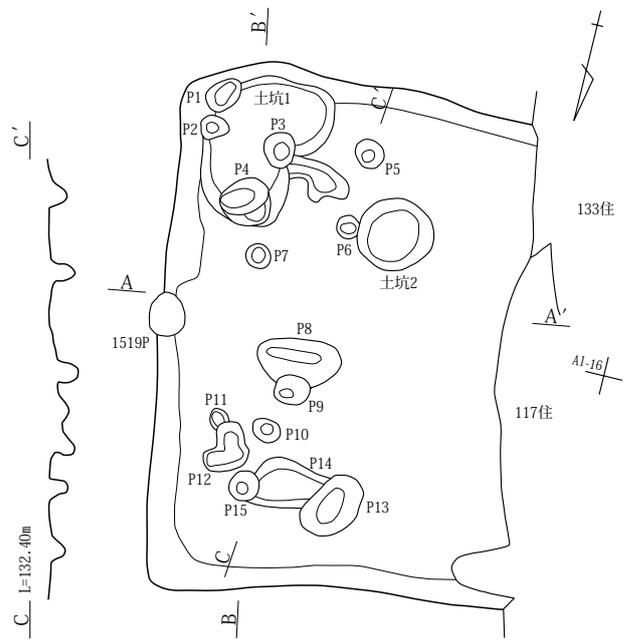
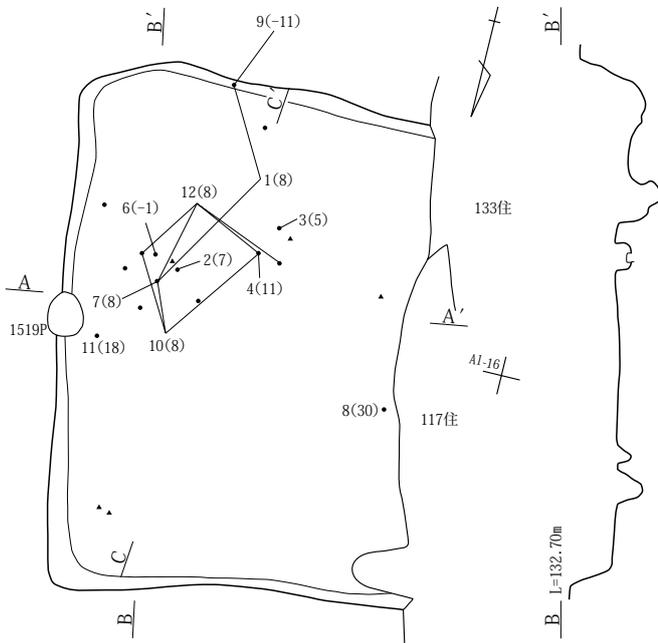
- A-A'・B-B'
- 1 黒褐色土 As-Cを多量に含む。
 - 2 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土とXII層土粒・小ブロックの混土。
 - 3 黄褐色土 As-Cをまったく含まないXII層土。
 - 4 暗褐色土 As-Cを含むXI層土主体で、XII層土粒を多量に含む。
 - 5 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cを含むXI層土ブロックを少量含む。
- C-C'
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含むXI層土主体で、焼土粒を少量含む。

第876図 163号住居・出土遺物

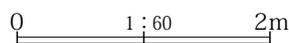
165号住居(第877・878図 P L.198・300)

位置：A1-15・16グリッド 形状：隅丸長方形？ 規模：(2.86)m×4.18m 残存深度：0.27m 主軸方位：E-10°-N 埋没土：Ⅸ層土主体で、下層にⅫ層土粒とブロック含有が多い。柱穴：掘り方の調査でピット状の掘り込みを複数検出し、5本のピット状掘り込みが南北方向に直線的に並ぶ部分も見られたが、壁の方向とは一致せず東西方向には見られないことから柱穴とは考えなかった。その他は規模・配置ともに一定せず、柱穴とするべきものはない。炉：検出部分においては確認されなかった。遺物：東壁寄りの中央部に遺物出土が多く、坏(1・2)・鉢(3)・甕(11・12)などが出土した他、北

東コーナー部に礫が出土した。重複：117・133号住居と重複し、検出状況から165号住居→133号住居→117号住居と考えられる。所見：117・133号住居の東壁断面に縦方向の土層の違いが捉えられ、しかも遺物が出土したことから住居の存在が想定され、確認面を下げたところⅫ層土に至って平面形を捉えることができた。床面はⅫ層土中に平坦に検出されたが、焼土、灰などの残存は見られず、硬化面も検出されなかった。掘り方調査で、南東コーナー部に土坑1(1.27×1.00、深さ0.22m、不整形)を、その西側に土坑2(径0.58m、深さ0.18m、円形)を検出した他、ピット状の掘り込みを大小合わせて15カ所検出した。時期：5世紀後半

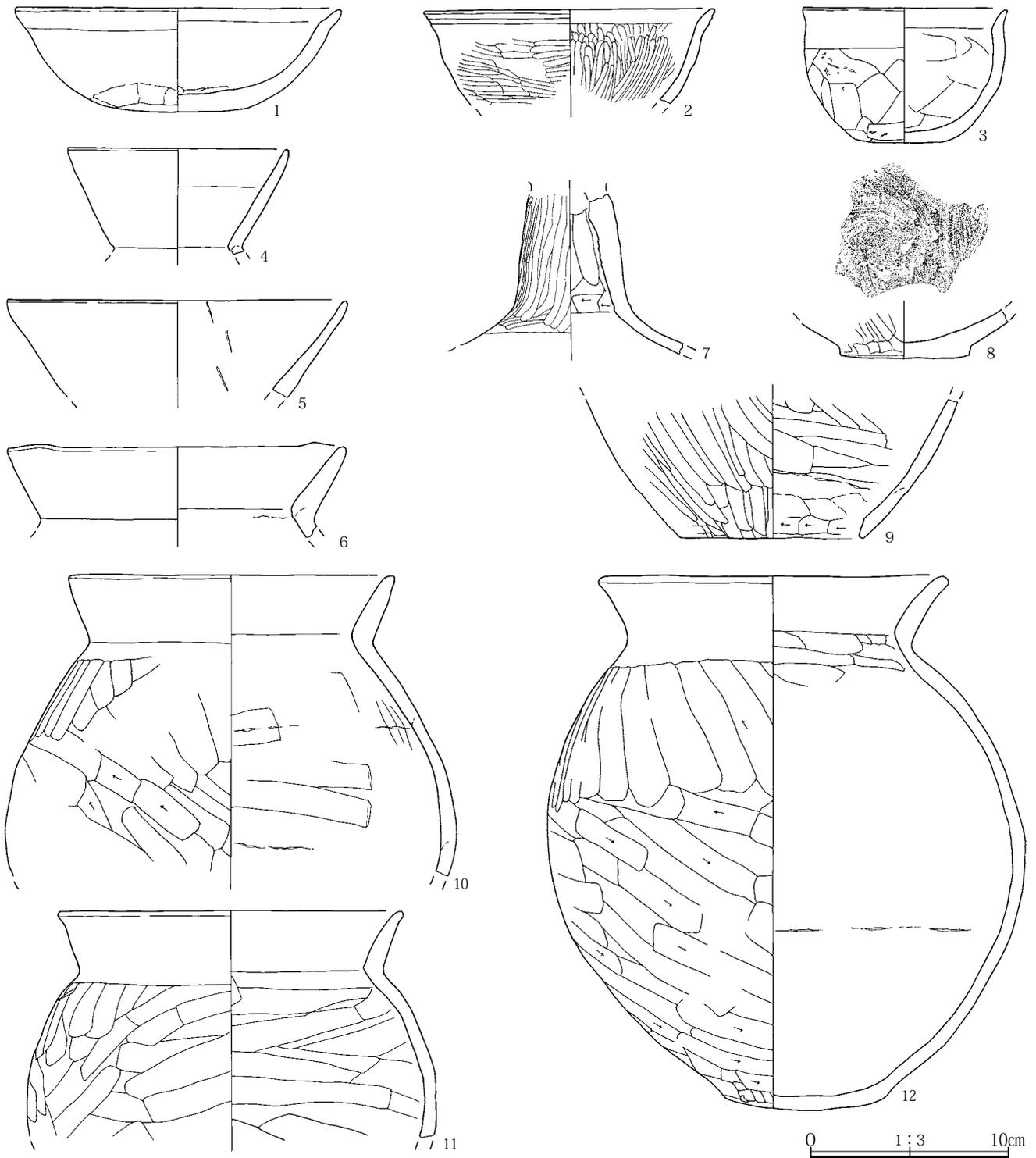


- A-A'
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に含むⅪ層土で、Ⅻ層土ブロックを含み、炭化物微粒をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 1層に類似するが、As-Cの含有は1層より少量である。
 - 3 褐色土 As-C・炭化物微粒をわずかに含むⅪ層土で、Ⅻ層土ブロックを含む。
 - 4 暗褐色土 As-Cをごくわずかに含む暗褐色土で、Ⅻ層土ブロックを含む。
 - 5 褐色土 Ⅺ層土を全体に含むⅪ層土で、As-Cをごくわずかに含む。



第22表 165号住居 ピット計測表

番号	規模	深さ	形状
P 1	0.32×0.21	0.38	楕円形
P 2	0.21	0.26	不整形
P 3	0.28	0.42	円形
P 4	0.40×0.26	0.43	楕円形
P 5	0.24	0.13	円形
P 6	0.20	0.24	円形
P 7	0.02	0.13	円形
P 8	0.67×0.37	0.25	不整形楕円形
P 9	0.26	0.29	不整形
P 10	0.23×0.18	0.25	楕円形
P 11	0.15	—	円形
P 12	—	0.24	不整形
P 13	0.54×0.37	0.08	不整形楕円形
P 14	(0.50)×0.38	0.12	不整形楕円形
P 15	0.25	0.22	円形

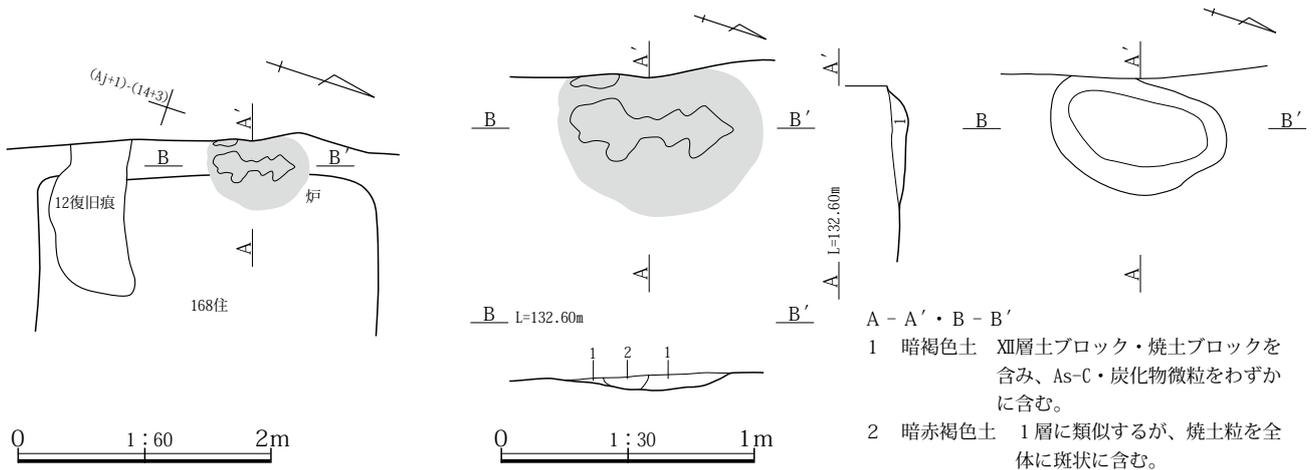


第878図 165号住居出土遺物

169号住居(第879図 P L.198)

位置: Aj-14グリッド 形状: 不明 規模: 不明 残存
 深度: 0m 主軸方位: 不明 埋没土: 不明 柱穴: 未
 検出 炉: 焼土面を1カ所検出した。遺物: なし 重複:
 54・168・170号住居と重複するものと思われ、169号住
 居→168・170号住居と考えられるが、54号住居との関係
 は不明。 所見: 168号住居の調査終了後にⅨ層土相当

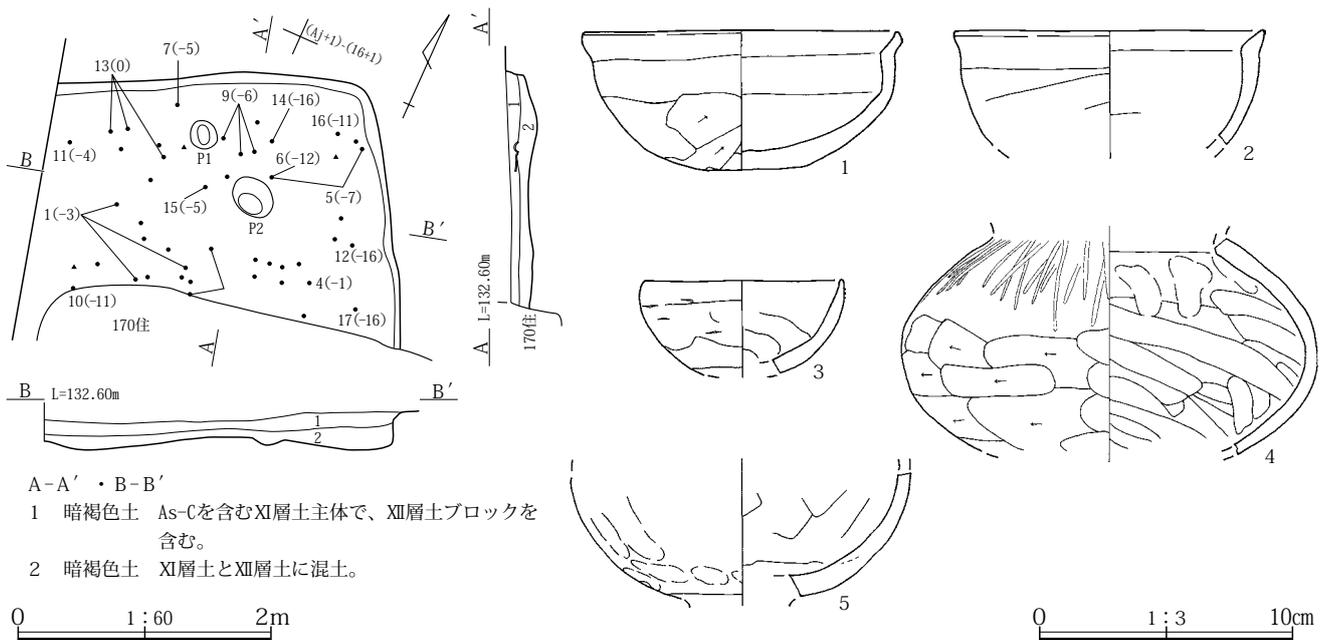
の面に焼土を検出したが、この焼土のあり方が古墳時代
 前期住居の炉の雰囲気と酷似していたため、住居が存在
 するものとして番号を付し調査を行った。しかし、この
 時点ですでに床面に達していた上に、周辺に遺構が複雑
 に重複していることから結果的に壁を確認することがで
 きず、平面形、規模など住居の詳細は不明なままに調査
 を終了した。 時期: 古墳前期



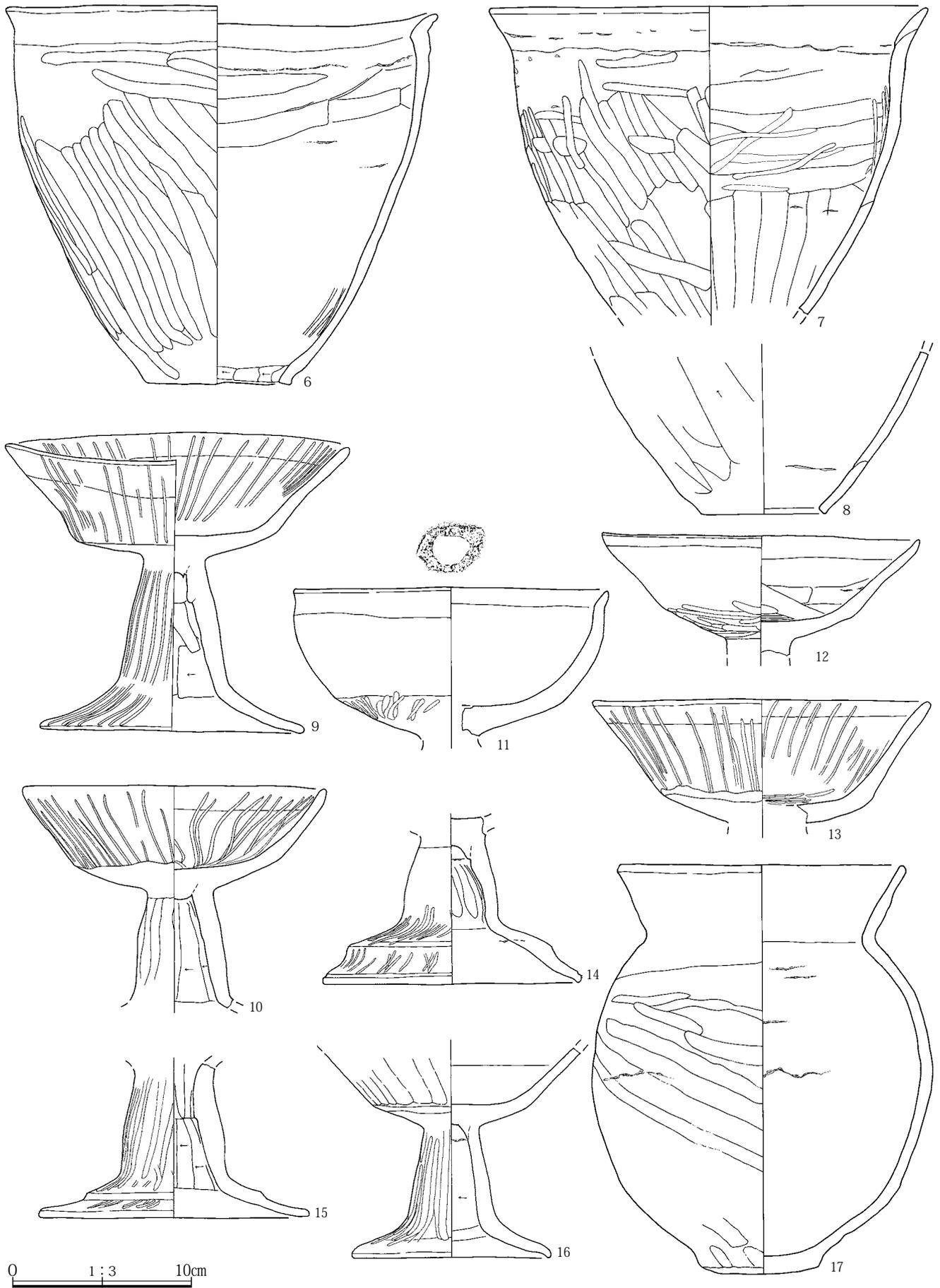
第879図 169号住居

171号住居(第880・881図 P L.198・199・300・301)
位置:Ai・Aj-15・16グリッド **形状:**隅丸長方形? **規模:**(2.15)m×(3.04)m **残存深度:**0.11m **主軸方位:**N-26°-W **埋没土:**Ⅸ層土主体で、Ⅻ層土ブロックを含む土層。 **柱穴:**未検出 **炉:**未検出 **遺物:**壺の大形破片や12・13などの高坏の坏部が床面に集中しており、住居廃絶後時間的経過のない時点で遺物廃棄があったものと思われる。 **重複:**170号住居と重複し、検出状況から171号住居→170号住居である。 **所見:**170号住居と同時に平面確認し、並行して調査を行った。その結果、土層観察及び出土遺物の比較からも前述の重複関係が確認された。西側は先行調査したⅣ区では確認されおらず、Ⅳ区とⅥ区との間の未調査部分に北西コーナーが

あったものと考えられることから、東西規模は4mを超えることはないものと考えられる。170号住居の掘り方で検出した径0.56m、深さ0.31mの円形の土坑状の掘り込みは、171号住居の南東コーナー部に設置された貯蔵穴であった可能性がある。この仮定が成り立つとすると住居の南北規模は4.2m前後であったことになり、東西が4mを超えない規模が想定されることから、171号住居は南北方向に長辺を有する隅丸長方形の平面形であったものと考えられる。床面精査の段階で、北寄りの位置でP1(径0.20m、深さ0.37m、円形)、P2(0.35×0.27m、深さ0.46m、楕円形)を検出した他に、土坑、ピットは検出されなかった。 **時期:**5世紀前半



第880図 171号住居・出土遺物(1)

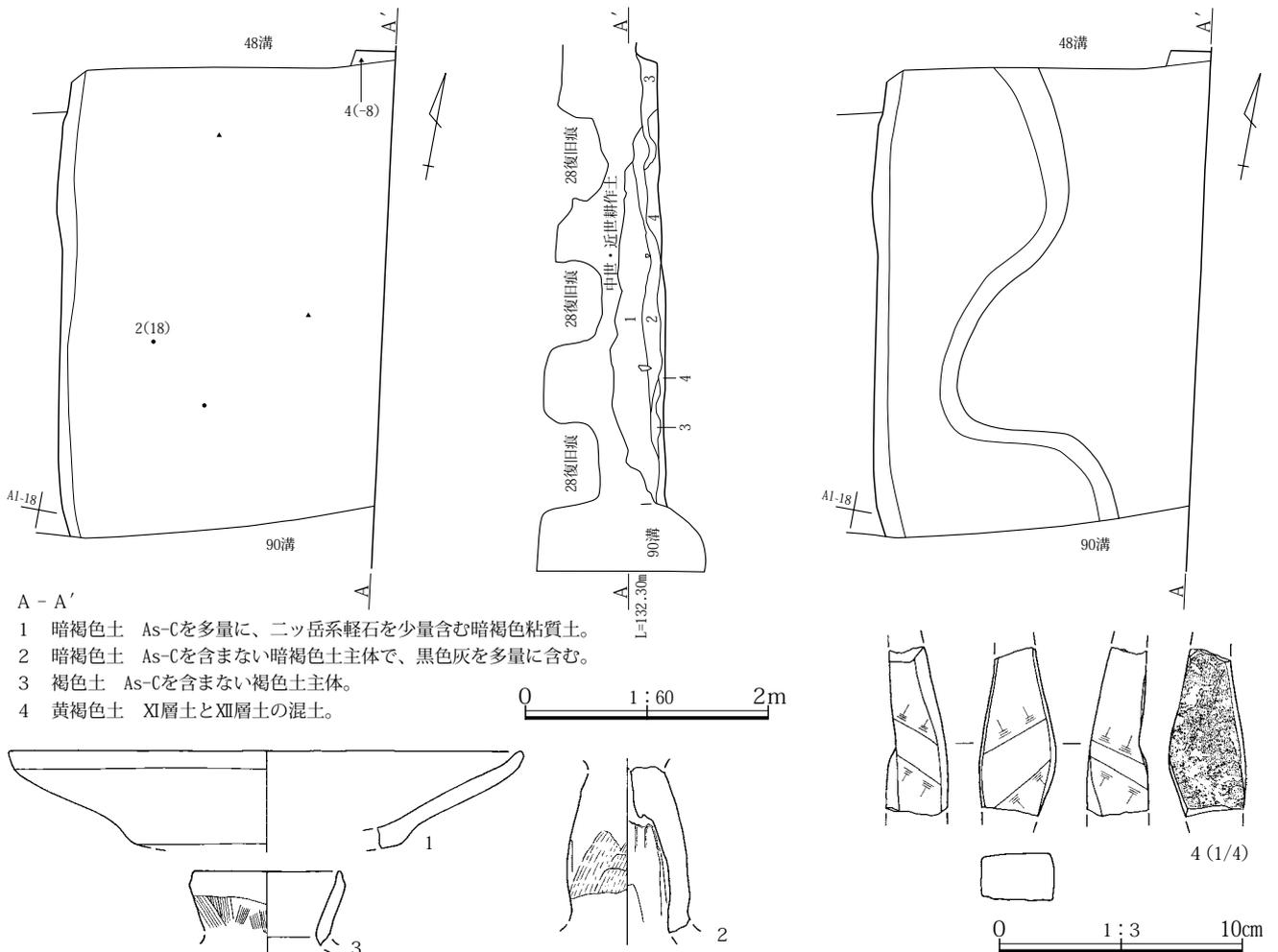


第881図 171号住居出土遺物(2)

173号住居(第882図 P L.199)

位置: Ak・A1-18グリッド 形状: 不明 規模: (3.70)m×(2.64)m 残存深度: 0.18m 主軸方位: N-9°-W 埋没土: 覆土にはⅦ層土類似の土層堆積が認められるが、住居埋没土中には二ッ岳系軽石は含まない。柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 床面付近から破片が4点出土した他、48号溝の際から砥石(4)が1点出土した。重複: 近い時期の遺構との重複は不明であるが、北側は48号溝、南側は90溝号との重複によって失われている。所見: 溝との重複によって南北部分が失われ、

東側は道路下に当たり調査ができなかったために、西壁と床面の一部だけを検出したものである。東側土層断面を見ると、住居はⅦ層土類似の土層で覆われているが、住居掘り込みに堆積している土層には二ッ岳系軽石の含有が確認できず、また、出土遺物においても3面相当の土器片の出土があったことから3面第I期の遺構として扱った。検出された床面において、貯蔵穴、柱穴に当たるような掘り込みは確認されず、掘り方も検出されなかった。時期: 5世紀前半か

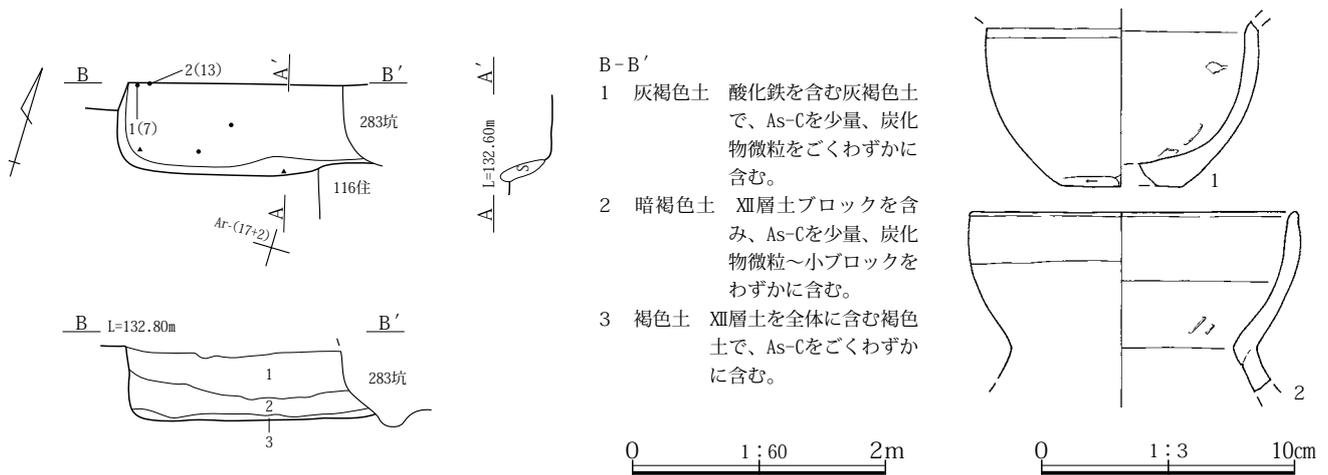


第882図 173号住居・出土遺物

174号住居(第883図 P L.199)

位置: Aq・Ar-17グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (0.72)m×(1.99)m 残存深度: 0.58m 主軸方位: N-19°-W 埋没土: やや色調の明るいⅨ層土主体。柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 埋没土中からわずかに破片が出土した。重複: 115・116号住居・283号土坑(墓坑)と重複し、検出状況から174号住居→116号住居→115号住居→283号土坑である。所見: Ⅸ層土中で確

認したもので、南西コーナー部だけが検出された。2面第Ⅱ期として報告した115号住居と同一遺構の可能性も検討したが、埋没土の状況及び出土遺物に時期差があるため、別遺構として報告した。南壁西寄りに壁面に埋め込まれたように扁平な礫が出土しており、壁上からの転落ではなく使用状況を示しているものと考えられるが、具体的な機能については不明である。時期: 4世紀前半

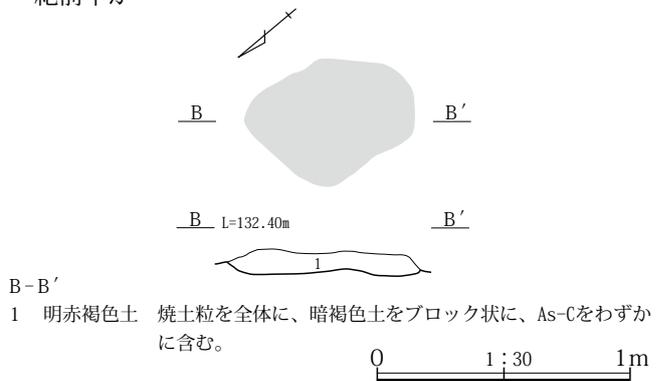
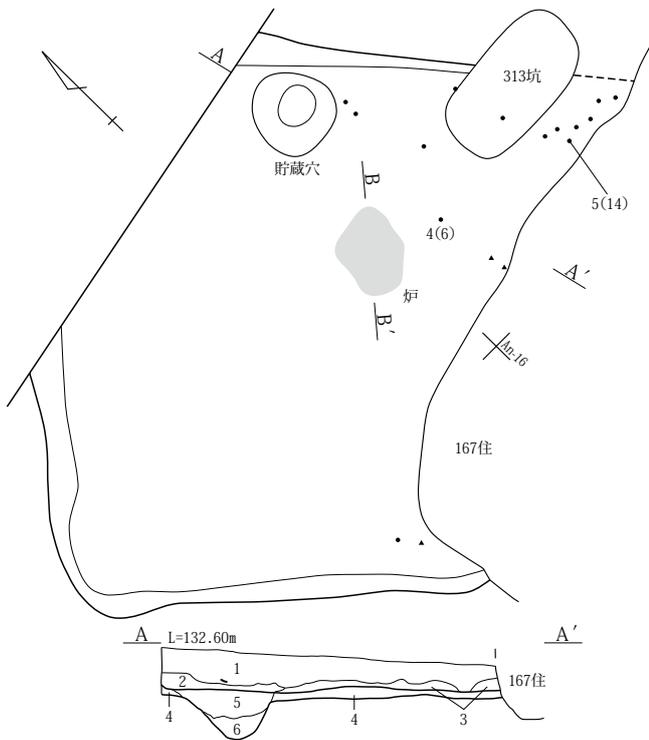


第883図 174号住居・出土遺物

177号住居(第884・885図 P L.199・301)

位置：Am・An-15・16グリッド 形状：隅丸長方形 規模：(4.61)m×(4.38)m 残存深度：0.17m 主軸方位：W-41°-N 埋没土：As-Cを微量に含むⅫ層土類似のシルト質土主体。柱穴：未検出 炉：中央東寄りの床面に検出された0.71×0.55mの範囲の焼土部分を炉と判断した。焼土大粒を多量に含む土層が8cmほどの厚さに堆積しており、この下面の焼土化が顕著だった。遺物：東壁寄りの遺物出土が多く、5の口縁部を欠損した甕が、検出部分の南端の床面から14cmほど浮いた位置から出土した。重複：119・167号住居と重複し、検出状況から

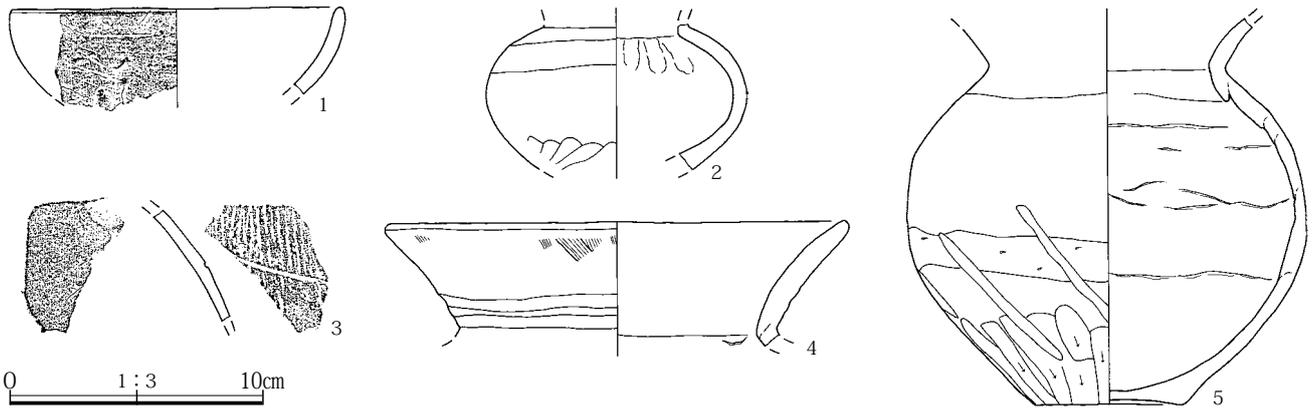
177号住居→167号住居→119号住居と考えられる。 所見：埋没土がⅫ層土に類似するため、当初は住居の存在が認識できなかったが、119号住居と167号住居の壁の観察から、遺構の存在が想定されたため、精査したところ微量のAs-Cが指標となって平面形を捉えることができた。床面は埋没土と類似しているため判然としなかったが、炉の焼土が検出された面として捉えた。床面の調査では東壁に接して北寄りの位置から径0.65m、深さ0.38mの不整円形を呈する掘り込みが検出され、積極的な根拠があるわけではないが貯蔵穴と考えた。 時期：5世紀前半か



B-B' 1 明赤褐色土 焼土粒を全体に、暗褐色土をブロック状に、As-Cをわずかに含む。

A-A' 1 暗褐色土 As-Cを多量に、二ッ岳系軽石を少量含む暗褐色土で、Ⅻ層土粒を含み、炭化物微粒をわずかに含む。
2 暗褐色土 Ⅻ層土粒・ブロックを斑状に、As-Cをわずかに含む。
3 にぶい黄褐色土 Ⅻ層土ブロックを全体に斑状に、As-C・二ッ岳系軽石をわずかに含む。
4 褐色土 XI層土を含むⅫ層土主体で、As-Cをごくわずかに含む。
5 暗褐色土 Ⅻ層土粒・ブロックを含み、As-C・炭化物粒を少量含む。
6 暗褐色土 1層に類似するが、炭化物は含まず、As-Cの含有はごくわずかである。

第884図 177号住居

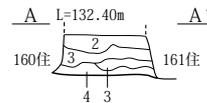
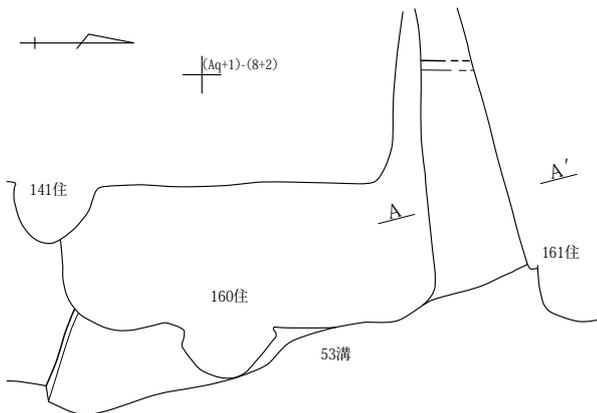


第885図 177号住居出土遺物

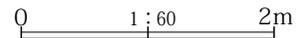
178号住居(第886図)

位置：Aq- 8グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0.31m 主軸方位：不明 埋没土：上層にAs-Cの含有が多い。柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：埋没土中から細片がわずかに出土した。重複：141・160・161号住居と重複し、検出状況及び出土遺物の比較から178号住居→161号住居→160号住居→141号住居と考えら

れる。また、東側は53号溝との重複によって削平され失われている。所見：他の住居との重複が激しかったために、西壁と南壁のごく一部と床面を検出した。わずかに残された埋没土中にはニッ岳系軽石の含有が確認できず、重複する161号住居よりも古いと考えられることから、遺物からの検証ができなかったが3面の遺構とした。時期：4世紀代か



- A - A'
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に含み、ニッ岳系軽石は含まない。
 - 2 暗褐色土 2層に類似するが、Ⅻ層土小ブロックを少量含む。
 - 3 暗褐色土 3層に類似するが、As-Cの含有はわずかである。
 - 4 褐色土 As-Cをごくわずかに含むⅪ層土。



第886図 178号住居

(2) 溝

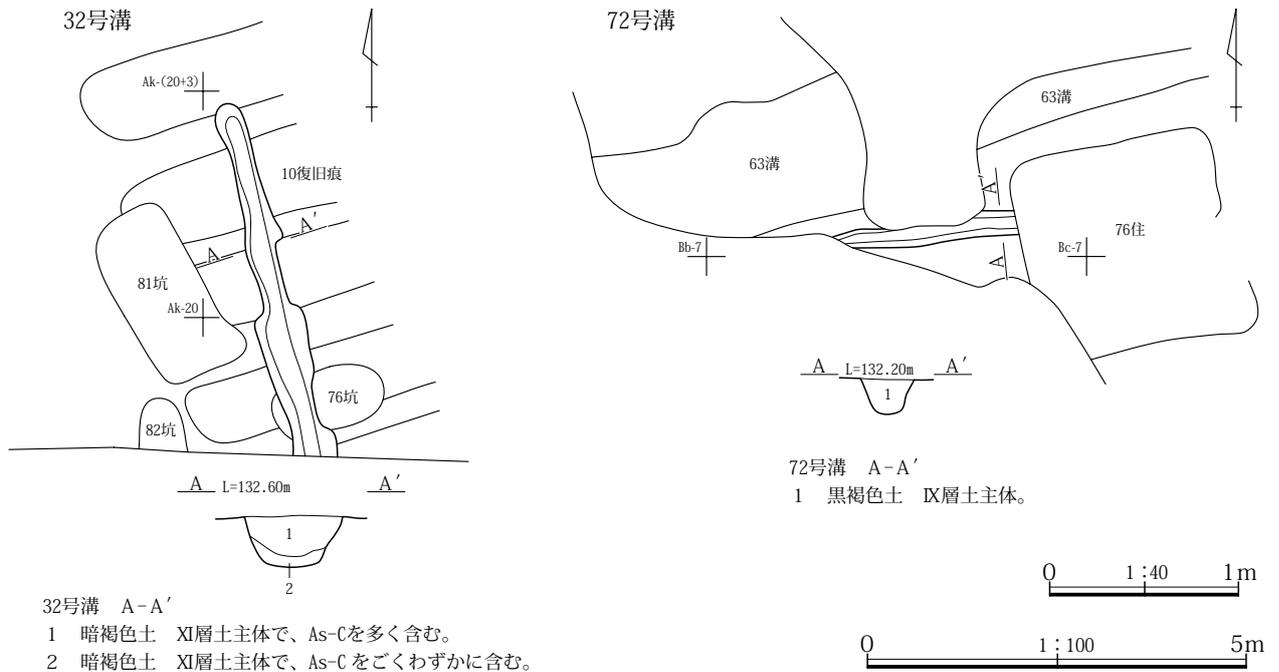
32号溝(第887図 P L.200)

位置：Ak-19・20グリッド 規模：(4.85)m×0.62m 残存深度：0.27m 走行方位：N-14°-W 遺物：なし 所見：Ⅻ層土中で検出したもので、10号復旧痕が掘削されていた場所であるため、残存状況は不良である。断面形は半円状で、As-Cを少量含む粘質土で埋没していた。この一帯はⅫ層土自体粘性が強く、埋没土の主体はⅫ層土と見てよいであろう。古墳時代前期を示すような遺物出土があったわけではないが、当該時期の住居埋没土と近似している点と、ニッ岳系軽石の含有がなかったことから3面として扱った。埋没土の状況から水が流れ

た痕跡はなく、基本的に区画を目的として掘削された可能性が高いが、北側で立ち上がっており、先に連続するような溝は検出されていない。また、南側のⅥ区の調査では対応するような溝を検出することはできなかった。

72号溝(第887図 P L.200)

位置：Bb- 7グリッド 規模：2.48m×0.29m 残存深度：0.18m 走行方位：E-7°-N 遺物：なし 所見：病院の建物による攪乱を受けなかったごく狭い範囲で検出した溝で、西側は攪乱によって失われ、東側も76号住居と重複しているが、76号住居よりも東側には延びていない。小規模であるが逆台形状の断面形状で、As-C混土を主体とする黒褐色土で埋没していた。



第887図 32・72号溝

(3) 畑

21号畑(第888図 P L.200)

位置：Ah・Ai-16グリッド 検出サク数：2条 規模：(0.57)m×0.35～0.56m 残存深度：1.00m サク間幅：1.0m サク方位：E-0°-N 埋没土：IX層土主体。遺物：なし 重複：1面2号建物及び12号復旧痕によって削平されている。所見：2号建物が検出された場所の下位で検出したものであるが、後世の攪乱が激しく検出面であるXII層土上面の段階では、検出できたのはごく短いサク2条であり、どの程度の広がりがあったものか判然としない。

22号畑(第888図 P L.200)

位置：Aj-11・12グリッド 検出サク数：1条 規模：(0.96)m×0.38m 残存深度：0.13m サク間幅：-m サク方位：E-23°-N 埋没土：IX層土主体。遺物：なし 重複：13号復旧痕に削平されている。所見：13号復旧痕が広範囲にわたって掘削されている場所で検出したもので、XII層土上面まで下げた時点では1条しか検出できなかったため、畑であるとの確証が得られたわけではないが、削平による残存状況が悪いことを勘案して畑として扱った。

23号畑(第889図)

位置：Aj・Ak-7～9グリッド 検出サク数：5条 規模：

(1.59～2.75)m×0.25～0.80m 残存深度：0.20m

サク間幅：0.78～1.32m サク方位：E-18°-N

埋没土：IX層土主体。遺物：なし 重複：13号復旧痕によって削平されている。所見：調査区南西端に検出したものであるが、13号復旧痕が広範囲に掘削されており、残存部分をXII層土上面まで下げた時点で断片的に検出することができた。23号畑のすぐ東側にも断片的な残存ではあるが、類似する埋没土を持つ32号畑が検出されていることから、この一帯に畑が展開していたことは確実である。

33a号畑(第889図 P L.200)

位置：Al・Am-15・16グリッド 検出サク数：6条 規模：2.70～(7.28)m×0.22～0.98m 残存深度：0.03～0.13m サク間幅：1.17～1.45m サク方位：E-22°-N 埋没土：IX層土主体。遺物：なし 重複：165・167・177号住居により削平され、33b・37号畑と重複し、埋没土及び検出状況から37・33b号畑→33a畑と考えられる。所見：調査区北端のXII層土中で、IX層土が带状に検出されたことで畑のサクと判断した。サクの掘削は一定していないが、概ね同一方位と考えられることから一連の畑とした。サクの埋没土は前述のとおりIX層土相当であることから、As-C降下後の畑である。畑を南北に断ち割り土層観察したところ、下面に33a畑とは微

妙にずれた掘り込みが検出されたために畝替えがされたものと考えたが、埋没土中にAs-Cがまったく混入しておらず、As-C降下以前の畑と判断されたことから、33b号畑としてII期で記述を行った。

36号畑(第889図 P L.200)

位置: Aq ~ As-10 ~ 12グリッド **検出サク数:** 4条
規模: (0.38) ~ 6.68m × 0.32m **残存深度:** 0.02 ~ 0.18m
サク間幅: 1.28 ~ 1.34m **サク方位:** N-24°-W
埋没土: IX層土主体。 **遺物:** なし **重複:** 158・159号住居との重複で削平されている。 **所見:** XII層土上面でIX層土が複数の帯状に検出されたことから畑と判断した。しかし、サクの長さは一定せず、一連と思われるサクも途切れた状況で検出されていることから、サクの最深部分だけが断片的に検出されたものと考えられる。したがって、どの程度の広がり畑であったかは判断としない。

38a号畑(第890図 P L.221)

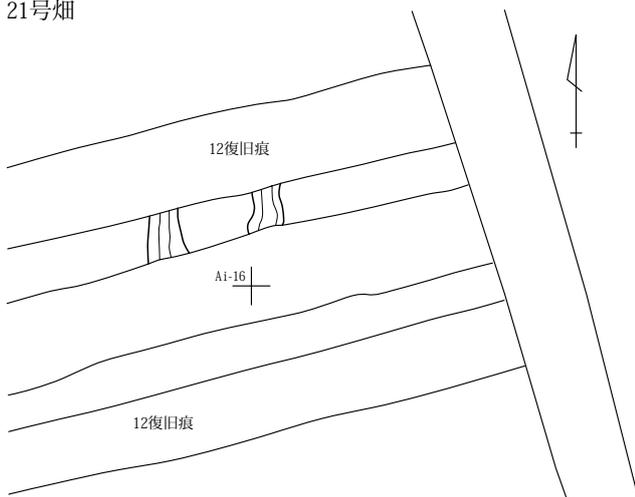
位置: Ao ~ Ap-7・8グリッド **検出サク数:** 2条 **規模:** (5.28)m × 0.48 ~ 0.77m **残存深度:** 0.02 ~ 0.10m
サク間幅: 2.17m **サク方位:** E-17°-N **埋没土:** As-C含有の少ないIX層土主体。 **遺物:** なし **重複:** 136・141号住居によって削平されている。また、38b号畑と重複し、埋没土の状況から38b号畑→38a号畑と考え

られる。 **所見:** 136・141・163号住居などの調査後、間に残されたXII層土面の精査を行ったところ、As-Cをわずかに含む暗褐色土及びAs-Cをまったく含まない暗褐色土が直行して帯状に検出されたことから、畑と判断した。調査時点では38号畑として一括して扱ったが、埋没土及び走行方向が相違することから、埋没土にAs-Cを含むものを38a号畑としてI期で扱い、他方をAs-C降下以前の畑と考え38b号畑としてII期で記述した。38a号畑は、周辺が後世の遺構によって削平されているため、畑の広がり捉えることはできなかった。

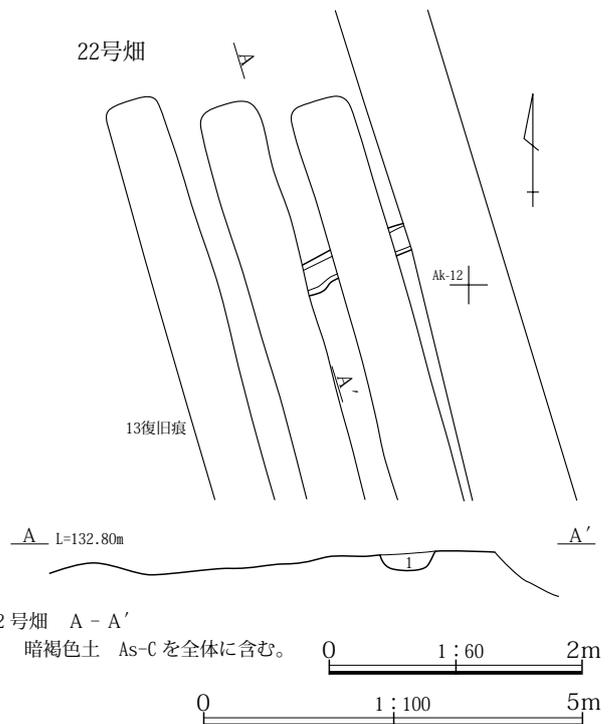
39号畑(第889図)

位置: An・Ao-12・13グリッド **検出サク数:** 3条 **規模:** 2.04 ~ 4.02m × 0.25 ~ 0.40m **残存深度:** 0.14m
サク間幅: 1.90 ~ 2.00m **サク方位:** N-12°-W
埋没土: As-Cを微量に含むXI・XII層土の混土。 **遺物:** なし **重複:** なし **所見:** 調査の最終段階で基盤となる黄褐色シルト層(XII層)中で検出したもので、当初は84・85・88号溝として調査したものであるが、整理時点でほぼ同規模の溝3条が等間隔で平行することから畑と判断し、溝番号を欠番として新たに畑の遺構番号を付して報告したものである。上述のように堆積していた土層は、As-C混土とは異質なものであり、3面として扱ってよいものか確認が得られているわけではない。

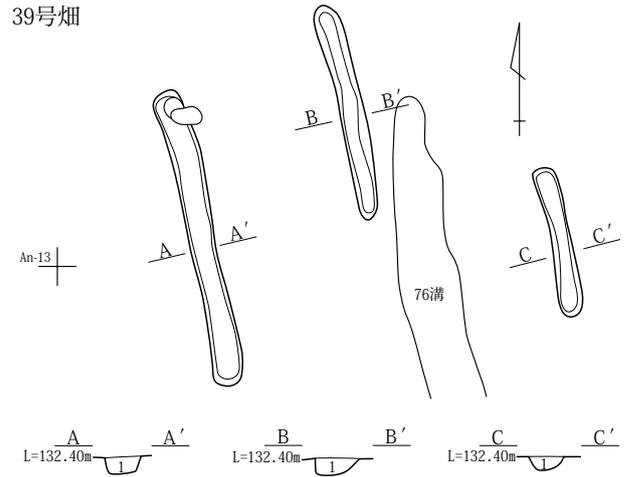
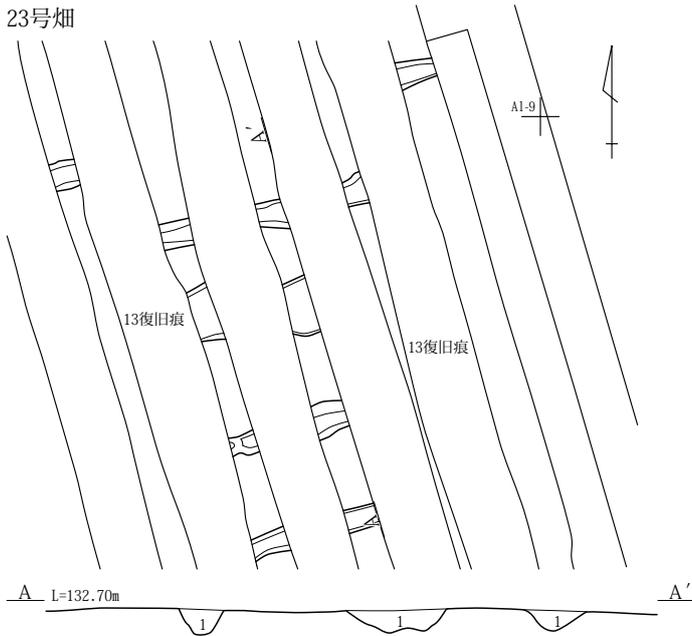
21号畑



22号畑



第888図 21・22号畑

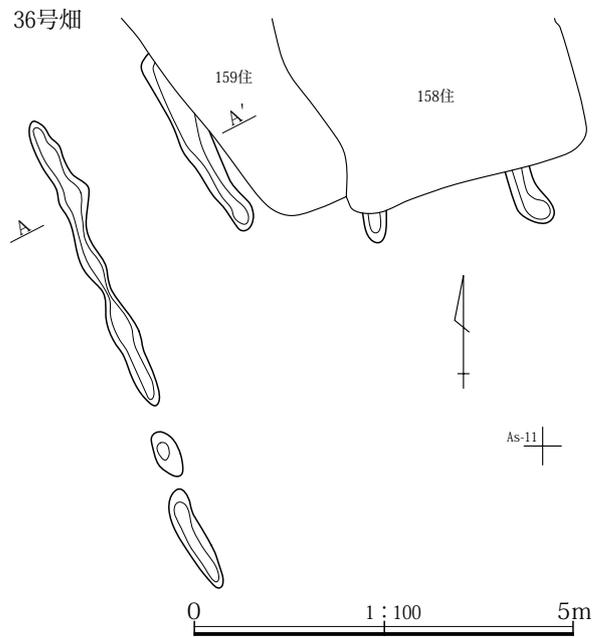
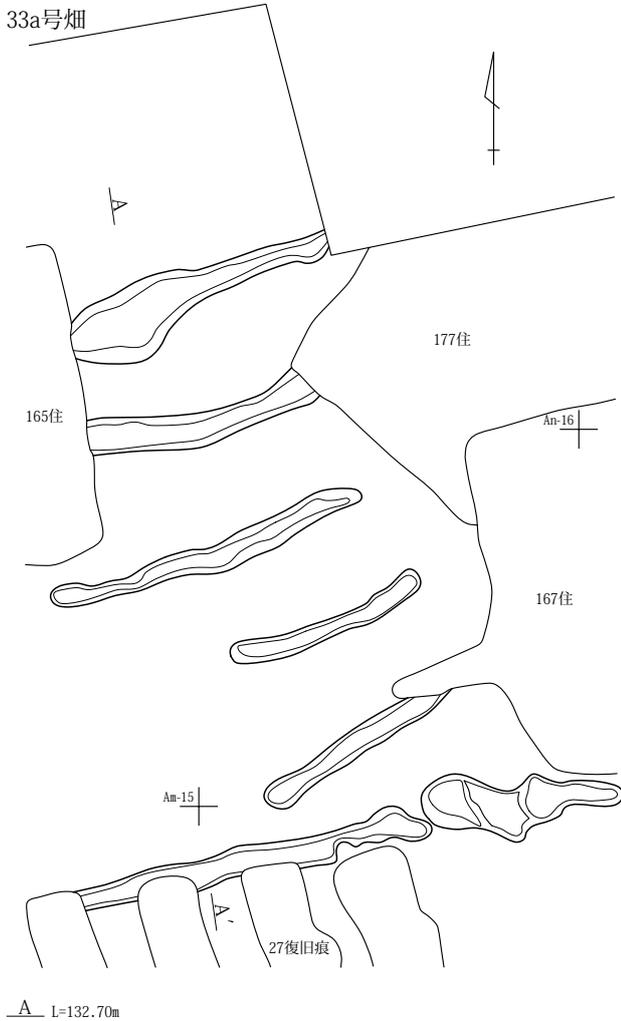


23号畑 A-A'

1 黒褐色土 As-Cを全体に含む。

39号畑 A-A' ~ C-C'

1 褐色土 XII層土とAs-Cをわずかに含む。XI層土の混土。



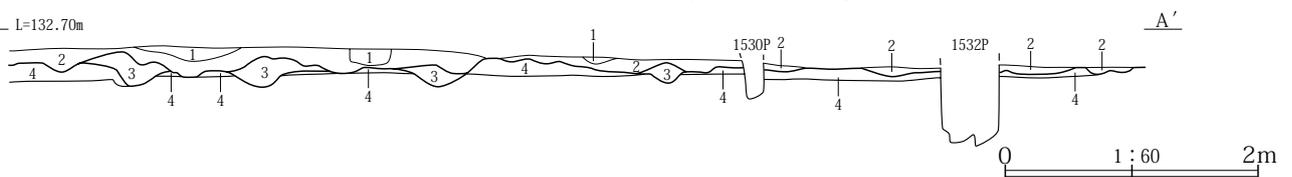
33号畑 A-A'

1 暗褐色土 As-Cを多く含むややしまりの強い層。

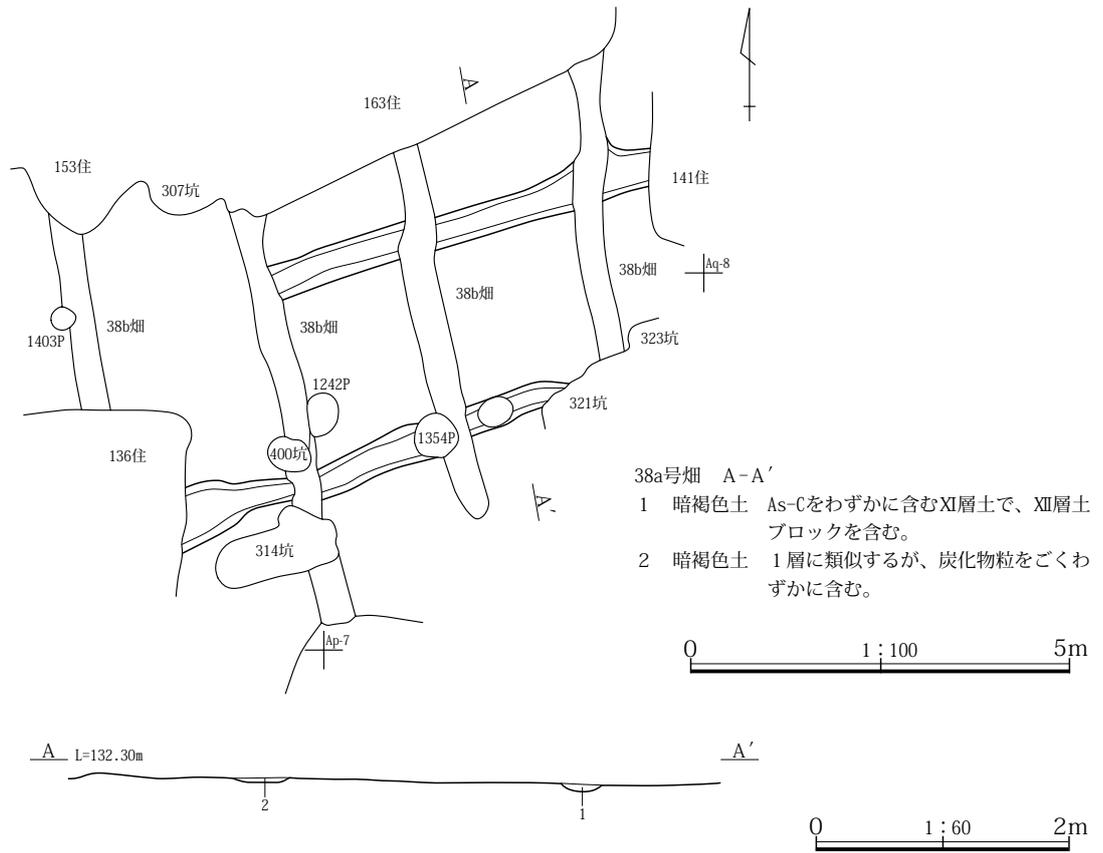
2 暗褐色土 As-Cを少量含む暗褐色シルトで、XII層土小ブロックを含む。

3 暗褐色土 暗褐色シルト。

4 黄褐色土 XII層土。



第889図 23・33a・36・39号畑



第890図 38a号畑

(4) 土坑

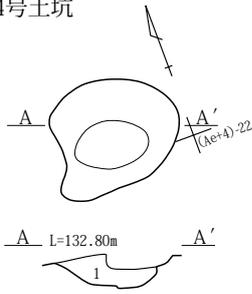
3面で検出した土坑はわずかであるが、個別の記載はせずに計測値等の基本的な項目の一覧を提示した。

第23表 田口上田尻遺跡 I期土坑一覧表

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考
134	土坑	891	Ae-21・22	不整楕円形	1.13×0.90×0.31				
196	土坑	200	Ai-16	不整形	(2.27)×(0.66)×0.27				
197	土坑	200	Ai-16	楕円形	0.80×0.70×0.31	E-12°-N			
273	土坑		Bb・Bc-7	隅丸長方形?	(3.00)×(0.59)×0.34	E-17°-N			
274	土坑		Ba-11	楕円形	0.55×0.30×0.08	E-34°-S			
278	土坑	891	At-12	楕円形	0.66×0.40×0.23	E-28°-N			
303	土坑		An-8	不整形	0.80×(0.40)×0.30				
399	土坑		Ap-8	不整形	(0.46)×0.56×0.25				
406	土坑	891	As-11・12	楕円形	(0.37)×0.37×0.20	E-30°-N			
424	土坑	891	Ap-14	隅丸長方形	1.68×1.22×0.65	E-0°-N	土師器鉢・高坏		
426	土坑	891	Ao・Ap-14	楕円形	0.78×0.55×0.44	N-12°-W	土師器高坏		

第6章 3面の調査（古墳時代中期～前期）

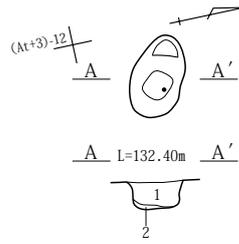
134号土坑



134号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 XII層土主体で、XII層土ブロックを含む。しまり強い。

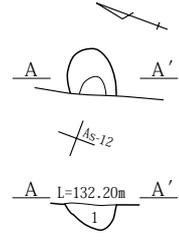
278号土坑



278号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを多く含み、XII層土を含む。
- 2 褐色土 XII層土を多く含み、暗褐色土を縞状に含む。

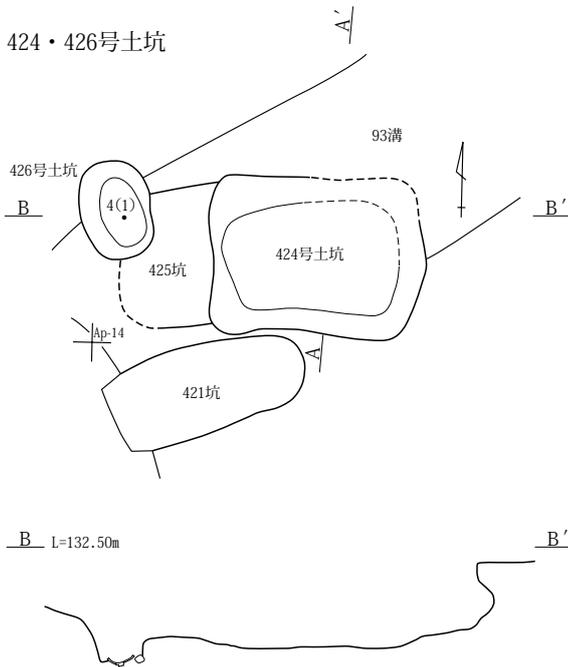
406号土坑



406号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-C黒主体で、地山のブロックを含む。

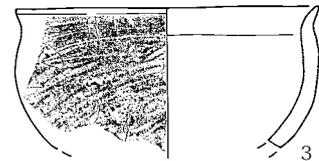
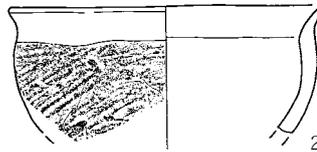
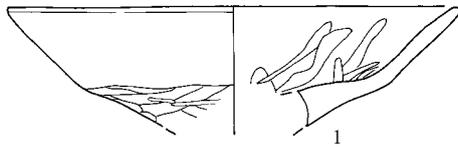
424・426号土坑



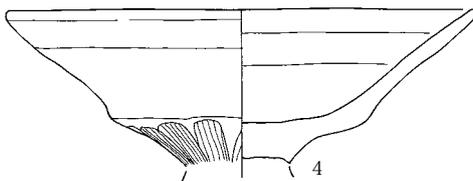
424号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 暗褐色砂質土。As-Cを多く含む。
- 2 黒褐色土 黒褐色粗粒砂。
- 3 灰褐色土 灰褐色砂質土。粗粒砂含む。
- 4 灰褐色土 灰褐色砂質土。白色粒を均一に含み、しまりの弱い層。
- 5 黄褐色土 XII層土に類似する層。
- 6 暗褐色土 As-Cを多く、ニッ岳系軽石を少量含む。
- 7 褐色土 XII層土主体で、As-Cを含む暗褐色土をブロック状に含む。
- 8 暗褐色土 As-C（大粒）を多量に含む

0 1:60 2m



424号土坑



426号土坑

0 1:3 10cm

第891図 134・278・406・424・426号土坑・出土遺物

第2項 田口下田尻遺跡

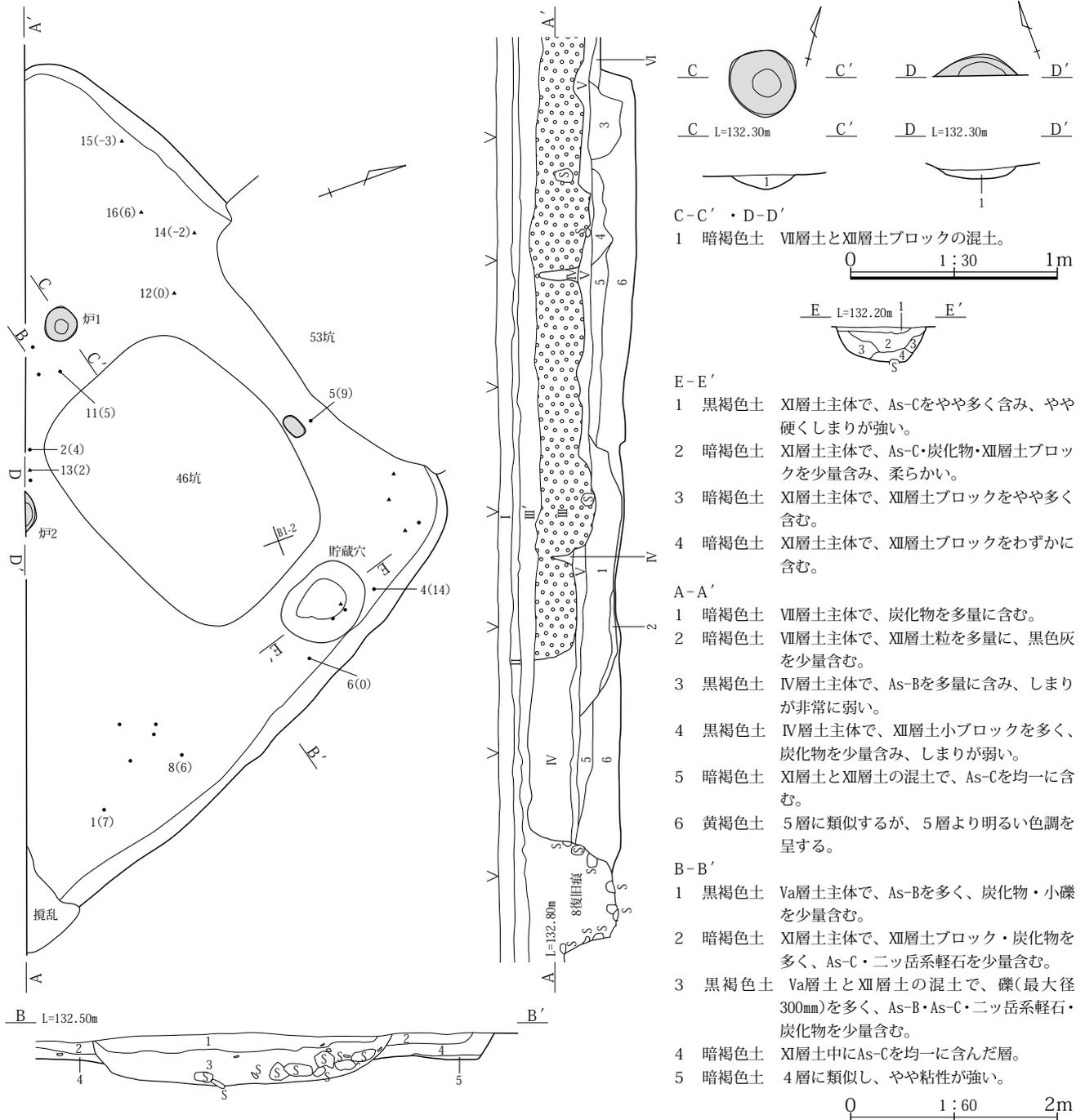
(1) 竪穴住居

6号住居(第892・893図 P L.201・301)

位置: Bk・Bl-1・2グリッド 形状: 隅丸方形 規模: (5.35)m×6.11m 残存深度: 0.34m 主軸方位: N-23°-W 埋没土: 明るい色調のIX層土主体で、下層はさらに明るい。 柱穴: 未検出 炉: 中央付近に2カ所、北壁際に1カ所の3地点で床面に焼土を検出したが、北壁際の部分については、床面から浮いた位置でしかも傾

斜していたことから炉とは考えられず、中央及びやや北西に偏った位置の2カ所の焼土部分が炉と考えられる。

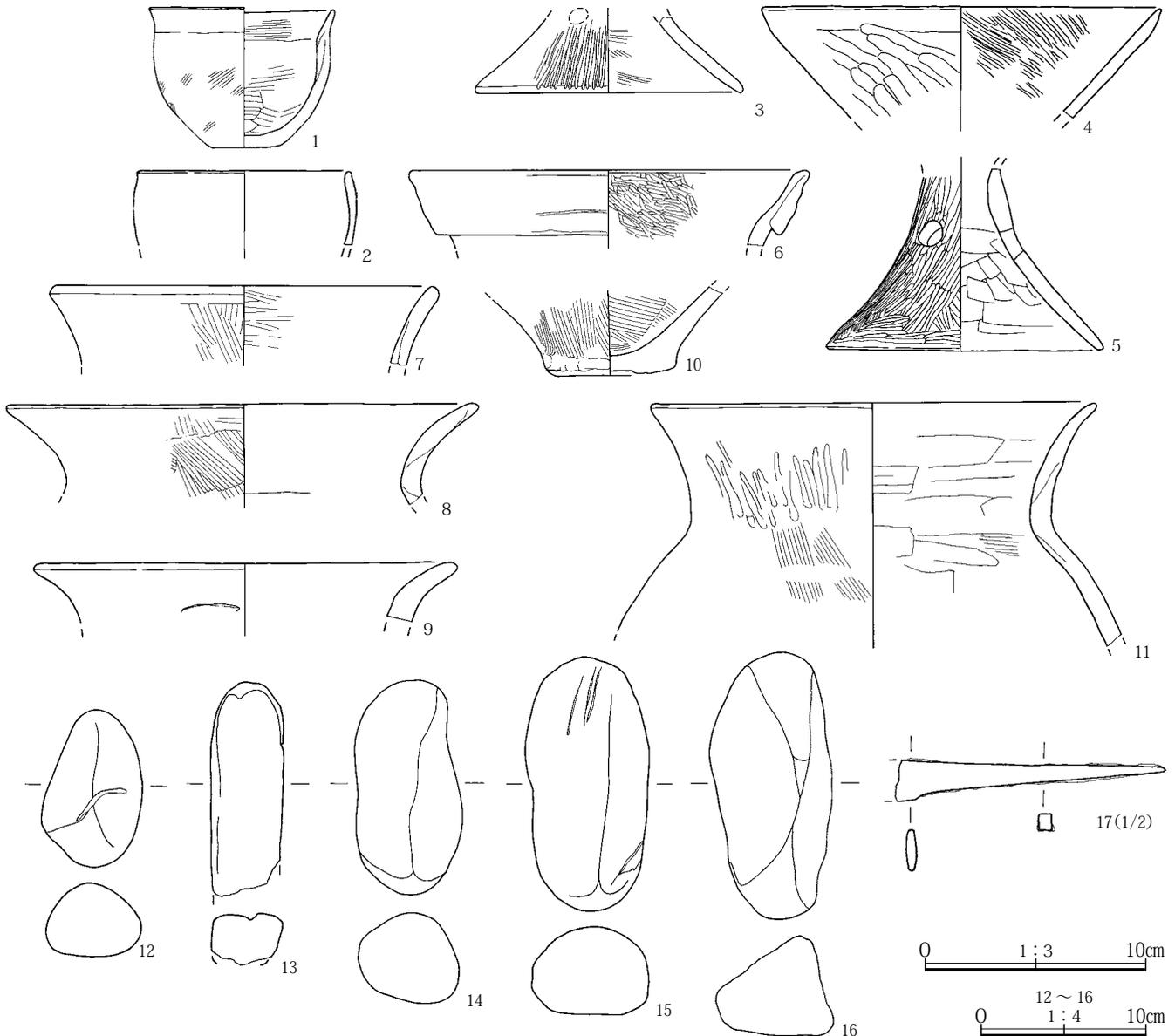
遺物: 北壁際の焼土近くから高坏の脚部(5)が出土し、北東コーナー部から北壁際に礫の出土が目立った他、土器の破片が床面近くに散在した。遺物の多くは破片で全体像が窺い得たのは1の小型鉢だけである。他に、刀子(17)がピット状の掘り込み内から出土している。灰釉陶器壺が1点出土しているが、明らかに時期の異なるものであり、認識できなかった土坑等に帰属するものである。重複: 46・53号土坑との重複で、北寄りの床面及



第892図 6号住居

び北壁中央が失われている。 所見：調査区南端に検出されたもので、北側の1/2ほどが調査された。床面はⅫ層土中に平坦に構築されていたが、硬化した面は認められず、掘り方は行われていない。床面で唯一検出された

北東コーナー部からやや南寄りの位置の0.85×0.67m、深さ0.34mの楕円形を呈する掘り込みが貯蔵穴と思われる。 時期：4世紀前半



第893図 6号住居出土遺物

21号住居(第894・895図 P L.201・202・301)

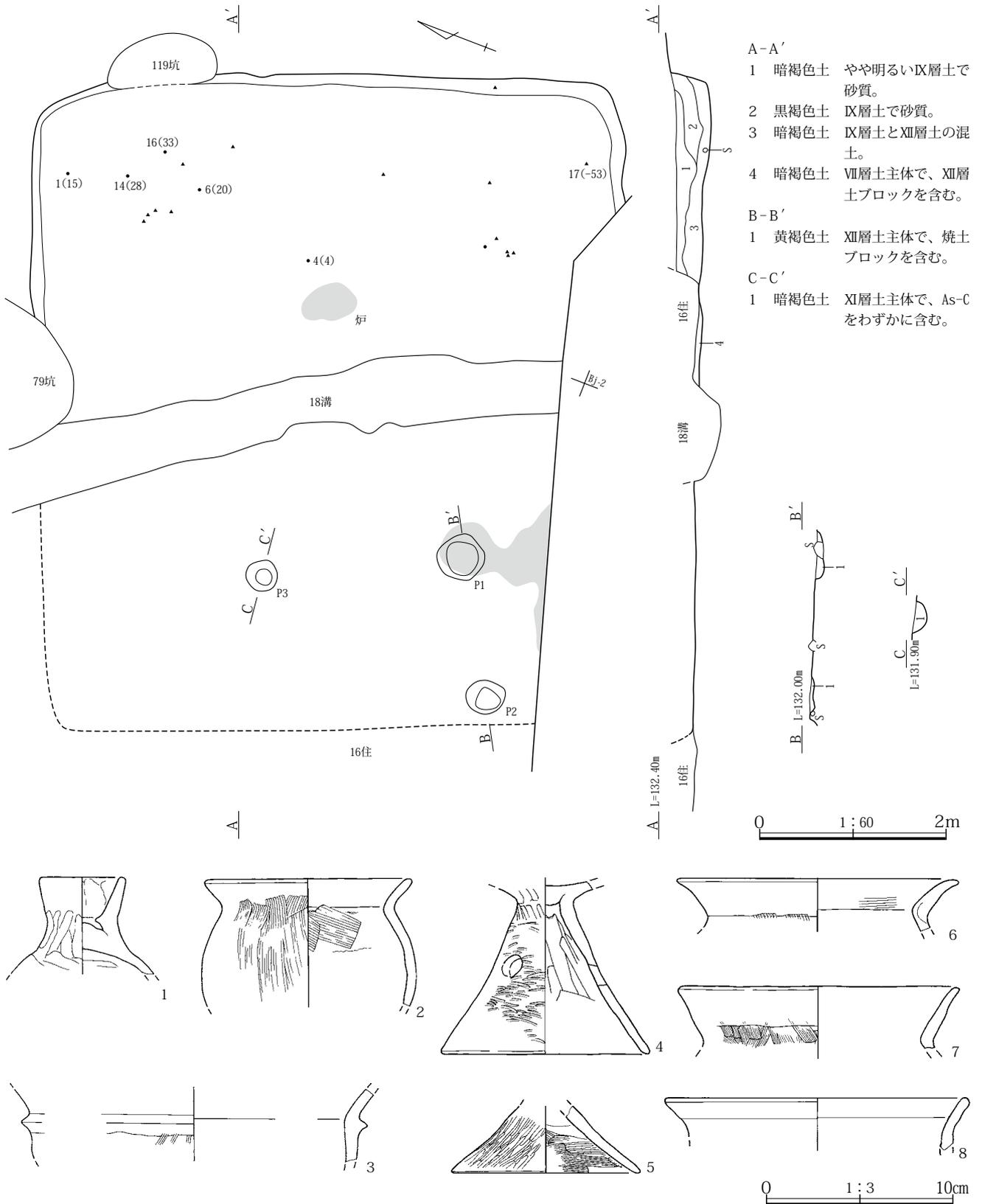
位置：Bh～Bj- 1～3グリッド 形状：隅丸長方形？
規模：(7.04)m×6.32m 残存深度：0.43m 主軸方位：
E-22°-N 埋没土：Ⅻ層土主体 柱穴：未検出 炉：
中央東寄りの位置に検出した0.61×0.41mの楕円形を呈
する焼土部分を炉と判断した。他に南西部にも焼土の検
出された部分があるが、形が一定せず南壁際までの広が
りが予測されることから炉ではない可能性が高い。 遺
物：16号住居と重複していなかった東側の床面付近から、

甕(6)・高坏(4)・砥石(17)などが出土した。 重複：
16号住居と重複し、検出状況及び出土遺物の時期から21
号住居→16号住居である。 所見：16号住居との重複で
北壁の一部及び西壁が壊されているため、住居の西側の
範囲が確定できなかった。西側で検出したP 2(径0.38
m、深さ0.05m、円形)が東側のP 1(径0.47m、深さ0.08
m、円形)と同様に焼土ブロック混じりの土で埋没して
いたことから、この2カ所の掘り込みは16号住居に伴う
ものと考え、少なくともP 2の位置までは16号住居範囲

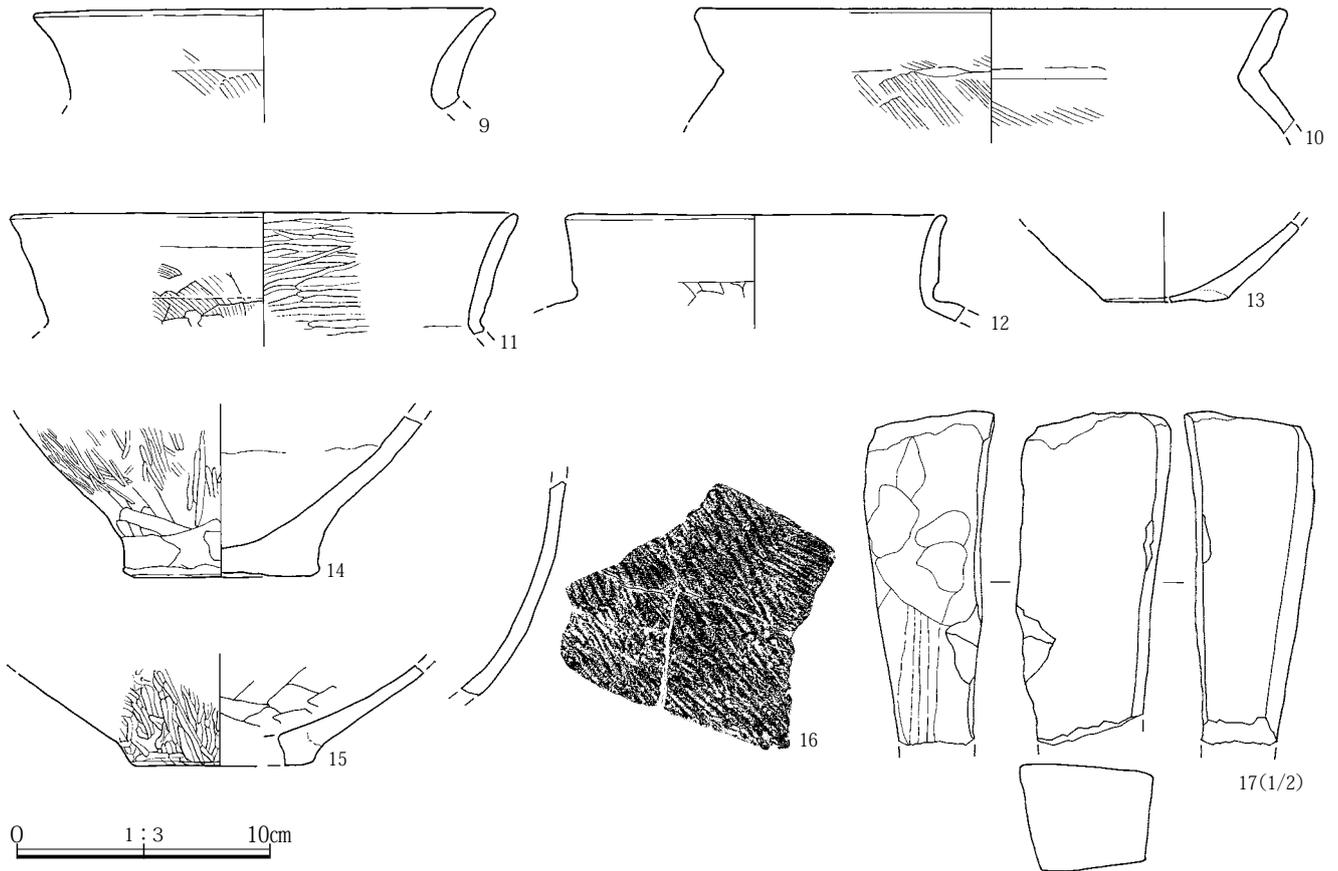
として想定線を入れた。また、P3 (径0.32m、深さ0.06m、円形)についても16号住居に伴うピットであった可能性が高い。18号溝との重複部分よりも東側はかろうじて床面が残されていたが、西側は残存していなかった。

貯蔵穴は調査された範囲では痕跡も検出されておらず、調査区外となる南西コーナー部にある可能性が高い。

時期：3世紀後半



第894図 21号住居・出土遺物(1)

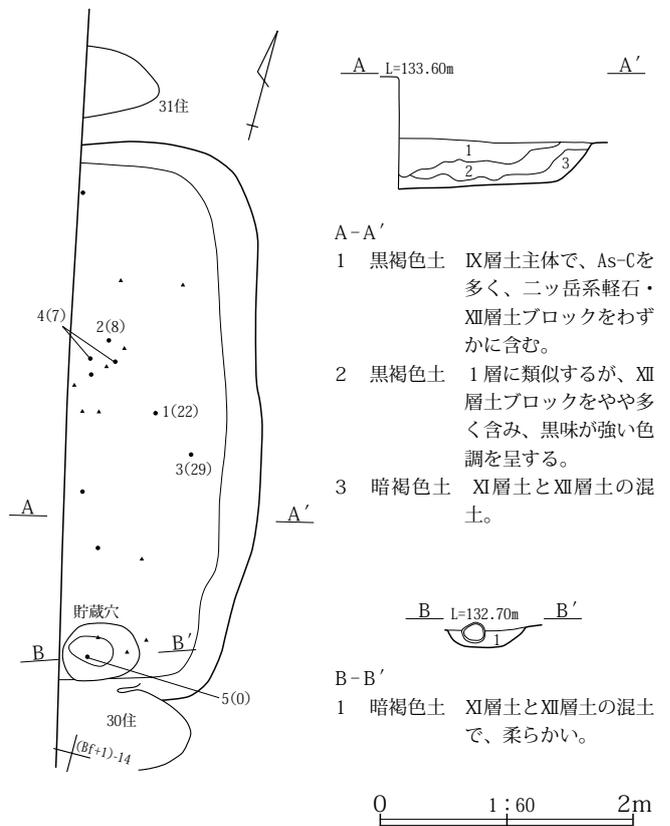


第895図 21号住居出土遺物(2)

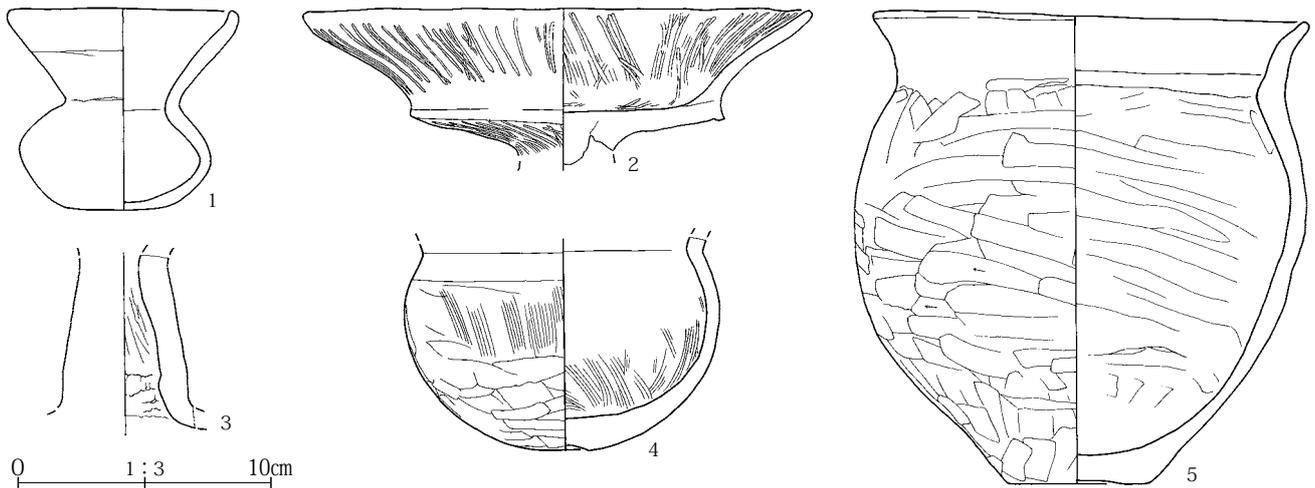
32号住居(第896・897図 P L.202・301)

位置: Be・Bf-14グリッド 形状: 隅丸長方形? 規模: (1.54)m×4.44m 残存深度: 0.40m 主軸方位: N-15°-W 埋没土: IX層土主体で、下層にXII層土ブロック含有量が多い。柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 遺物出土は多くないが、北寄りの床面から罎(1)・小型甕(4)・高坏(2)が、南東コーナー部近くの貯蔵穴から甕(5)が出土した。重複: 30・31号住居と重複しており、遺物の比較から32号住居→30・31号住居である。

所見: 調査区の西端に検出したもので、全体の1/4程度が調査されたものと考えられる。床面はXII層土中に平坦に構築されており、調査部分において焼土などの残存は見られなかった。南東コーナー部のやや西寄りの位置に、0.62×0.45m、深さ0.15mの楕円形を呈する貯蔵穴と見られる掘り込みがあり、中から5の完形の甕が横位で出土した。この甕は、器形から北陸の「千種型」系譜の甕と考えられる。 時期: 5世紀前半



第896図 32号住居

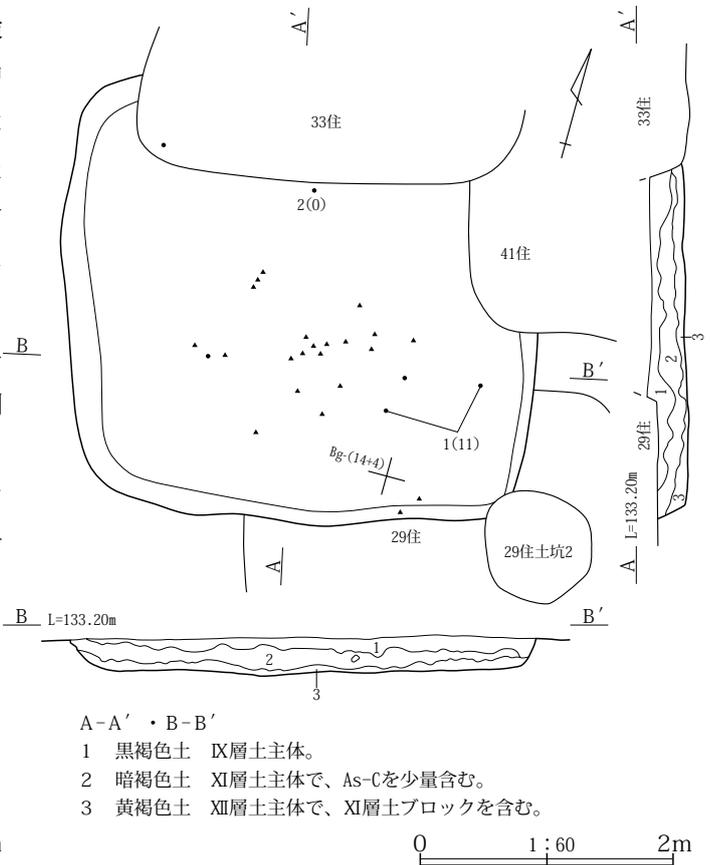
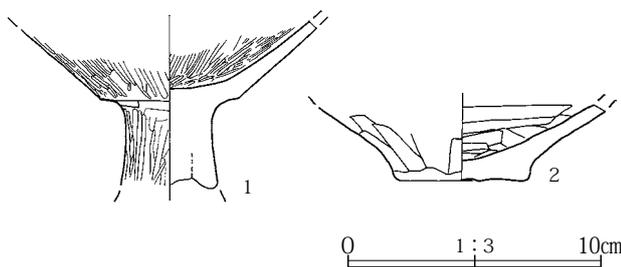


第897図 32号住居出土遺物

42号住居(第898図 P L.202)

位置：Bf・BG-14・15グリッド 形状：隅丸方形 規模：3.38m×3.71m 残存深度：0.30m 主軸方位：N-17°-W 埋没土：Ⅸ層土主体 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：中央部床面付近に礫を主体とした遺物が集中したが、掲載に耐え得る遺物はごく少ない。1の高坏は南東コーナー部付近から出土した2点の破片が接合したものであり、2の壺底部は33号住居との重複部分に接するように出土した。重複：29・33・41号住居と重複しており、検出状況及び残存状況などから42号住居→29・33・41号住居と考えられる。所見：北壁から北東コーナー部付近は、33・41号住居との重複により床下まで削平を受け失われていた。南側は29号住居と重複しているが、29号住居の掘り込みが浅かったために壁は残存していた。床面はⅫ層土中に平坦に掘削されており、掘り方

は検出されていない。貯蔵穴、炉を検出するために床面の精査を行ったが、痕跡も検出することはできなかった。時期：4世紀後半



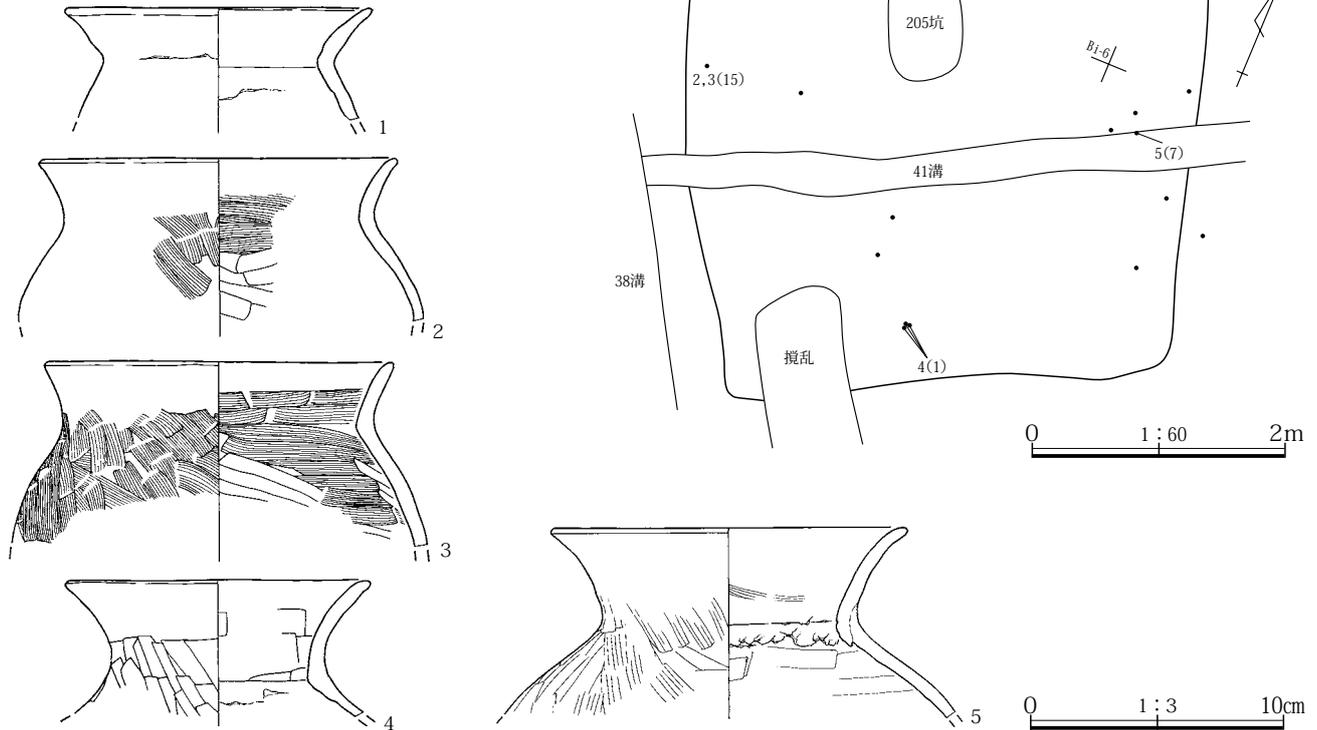
第898図 42号住居・出土遺物

65号住居(第899図 P L.302)

位置：Bh・Bi-5・6グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0m 主軸方位：不明 埋没土：不明 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：わずかな破片が一面的に出土した。重複：一 所見：泥流復旧痕が深くま

で及んでいた場所で、遺構確認のために精査を行ったところ、わずかではあるが同一面に遺物が出土したことから住居と判断した。したがって、平面形として提示した線は遺物分布から想定したものであり、それ以上の根拠があって示したものではない。遺物出土が一面的であっ

たことからほぼ床面を捉えたものと思われるが、貯蔵穴や柱穴になるような掘り込みはまったく検出されなかった。**時期**：4世紀前半

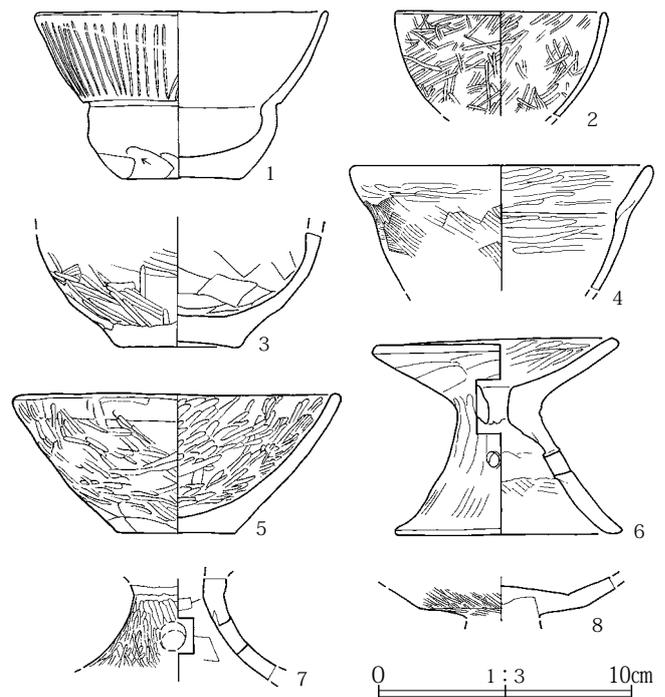


第899図 65号住居・出土遺物

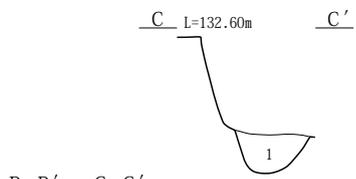
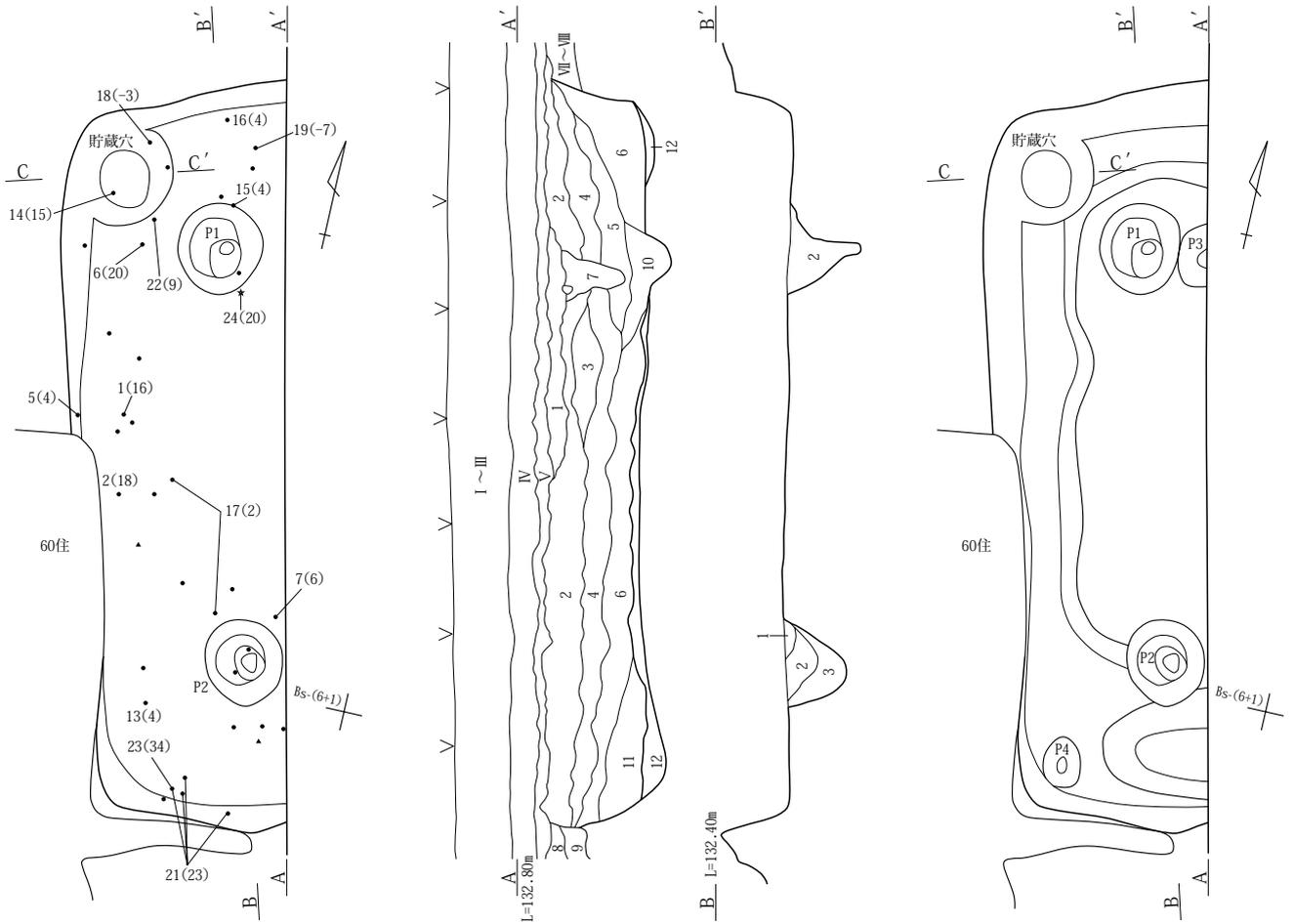
66号住居(第900～902図 P L.203・204・302)

位置：Br- 5～7グリッド **形状**：隅丸長方形？ **規模**：6.03m×(1.82)m **残存深度**：0.57m **主軸方位**：N-17°-W **埋没土**：Ⅸ層土主体 **柱穴**：西壁から1.0mほど離れて平行して検出したP 1(径0.69m、深さ0.58m、円形)、P 2(径0.63m、深さ0.48m、円形)の2カ所を柱穴と判断した。P 1-P 2間は3.35mである。**炉**：未検出 **遺物**：北西コーナー部の貯蔵穴周辺から単口縁の甕(16)・S字状口縁の台付甕(19・22)・器台(6)が、貯蔵穴内から単口縁の甕(14)が出土している。また、1の坩は西壁寄りの中央部から、S字状口縁の台付甕(21・23)は南西コーナー部からそれぞれ出土した。特筆されるのは、土玉が1点(24)P 1の南側から出土したことである。**重複**：60・69号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から66号住居→69号住居→60号住居と考えられる。**所見**：東側調査区際で検出したもので、全体の1/3ほどを検出したものと考えられ、東側2/3は国道17号下になり調査ができなかった。床面は、平坦で硬化面は検出されなかった。貯蔵穴は北西コーナー部に掘削されており、径0.59m、深さ0.32mの円形を呈する。掘り

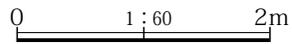
方は、壁に沿って0.70～0.80m幅で浅く掘削されていた他、P 1の東側にP 3(径0.50m、深さ0.17m、円形)、南西コーナー部にP 4(径0.29m、深さ0.23m、円形)を検出した。**時期**：4世紀前半



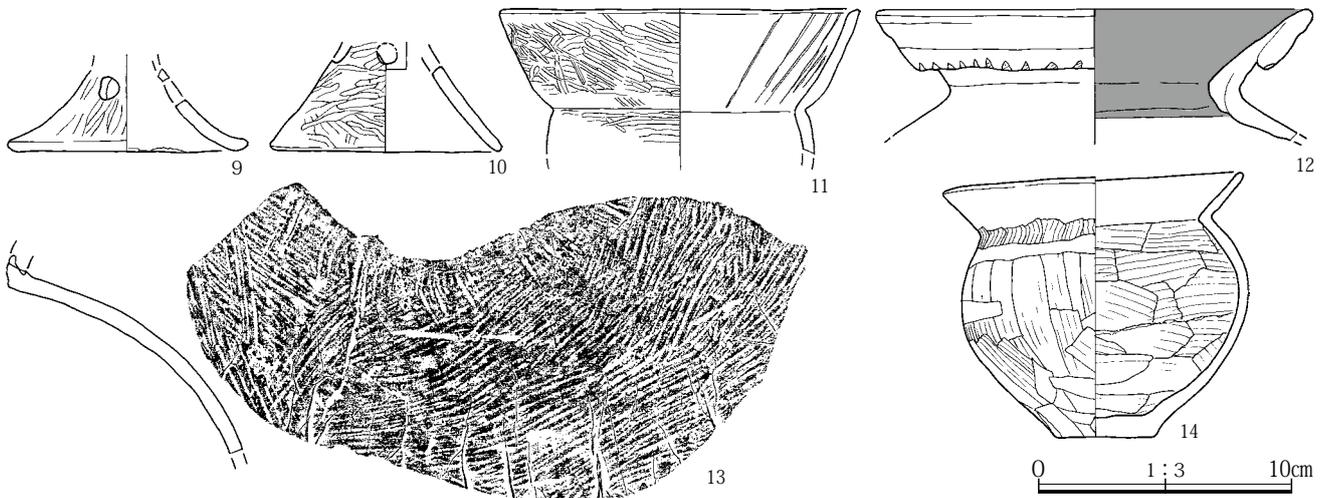
第900図 66号住居出土遺物(1)



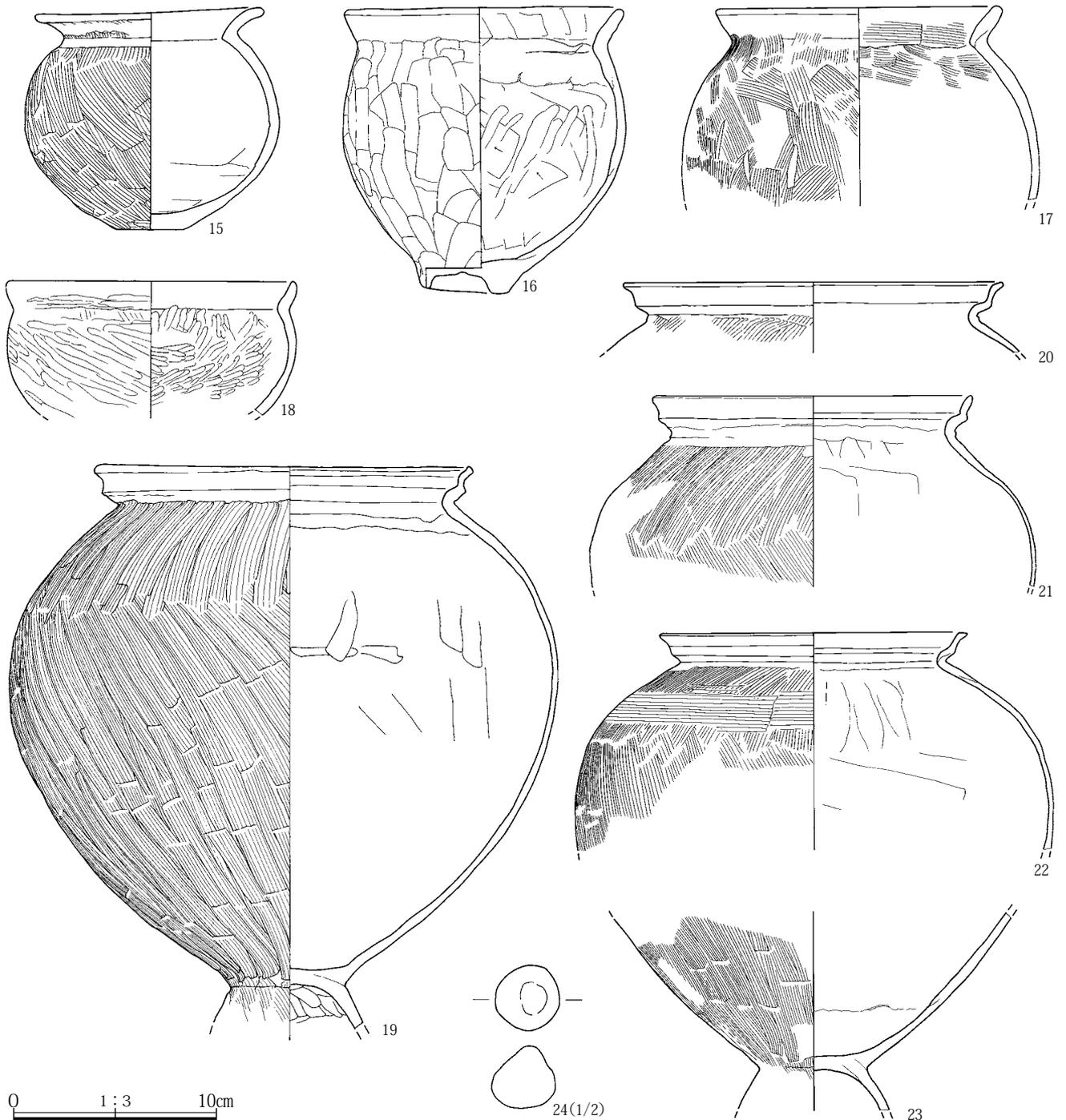
- B-B'・C-C'
- 1 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cは含まない。
 - 2 暗褐色土 XI層土主体で、As-Cをわずかに含む。
 - 3 黄褐色土 1層に類似。



- A-A'
- 1 黒褐色土 VII層土主体で、ニッ岳系軽石を多量に含み、全体に黒味が強い色調を呈する。
 - 2 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土と同質の砂ブロックを多量に含む。
 - 3 黄褐色土 XII層土主体で、暗褐色土ブロックを含む。
 - 4 黒褐色土 IX層土・As-Cを多く含み、柔らかい。
 - 5 黄褐色土 XI・XII層土の混土で、As-Cをわずかに含む。
 - 6 暗褐色土 VII層土主体で、As-Cを均一に少量含む。
 - 7 暗褐色土 VII層土主体で、As-C・ニッ岳系軽石を少量含む。
 - 8 暗褐色土 4層土に類似するが、全体にAs-Cの含有は多量である。
 - 9 暗褐色土 VII層土主体で、XII層土粒を多く、As-Cを少量含む。
 - 10 暗褐色土 XI層土主体で、As-Cをごくわずかに含む。
 - 11 暗褐色土 XII層土主体で、As-Cをごくわずかに含み、全体にやや暗色を呈する。
 - 12 黄褐色土 XII層土主体で、As-Cを含まないで、全体にやや暗色を呈する。



第901図 66号住居・出土遺物(2)



第902図 66号住居出土遺物(3)

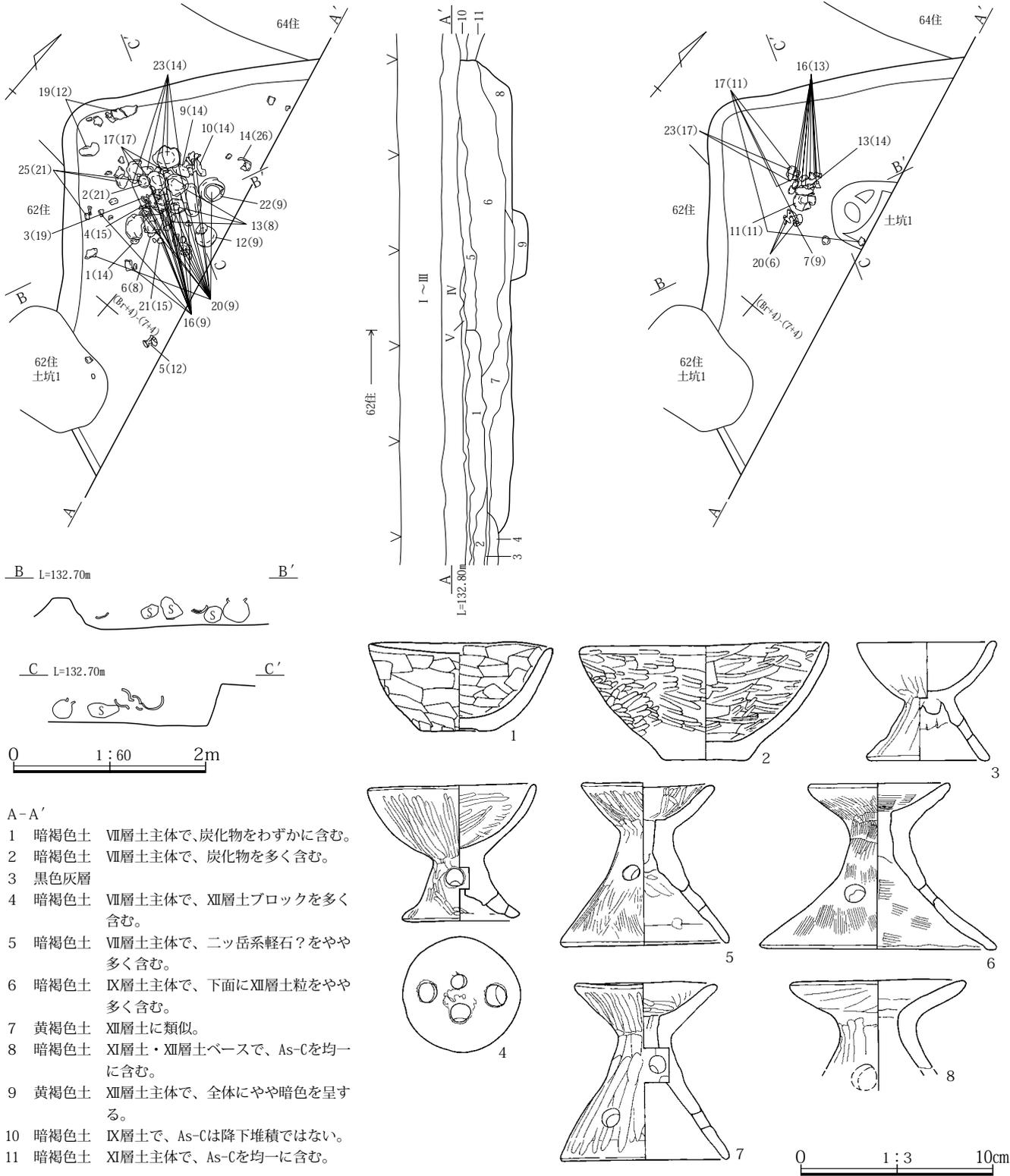
67号住居(第903～906図 P L.204・205・302・303)
位置: Br- 7・8グリッド **形状:** 隅丸長方形? **規模:**
 (3.90)m×(2.75)m **残存深度:** 0.45m **主軸方位:** W
 -40°-N **埋没土:** As-Cを均一に含むXI・XII層土。
柱穴: 未検出 **炉:** 未検出 **遺物:** 北西コーナー部付近
 の床面からわずかに浮いた位置に礫とともに集中して
 出土した。器台(3～7)・高坏(9・10)・壺(12～14・
 16)・甕(20～23)・S字状口縁の台付甕(26)と器種のバ

ラエティーが多く、しかも各器種に複数の器形・技法の
 ものがあり、他住居出土遺物と比較して復元率が高い。
 また、12の壺胴部下半には1カ所焼成後穿孔が行われて
 いた。 **重複:** 62・64号住居と重複し、検出状況などか
 ら64号住居→67号住居→62号住居と考えられる。 **所見:**
 北西コーナー部付近だけを検出したもので、貯蔵穴、柱
 穴、炉については調査部分においては検出されなかった。
 西壁の南寄りが屈曲しているのは、62号住居との重複部

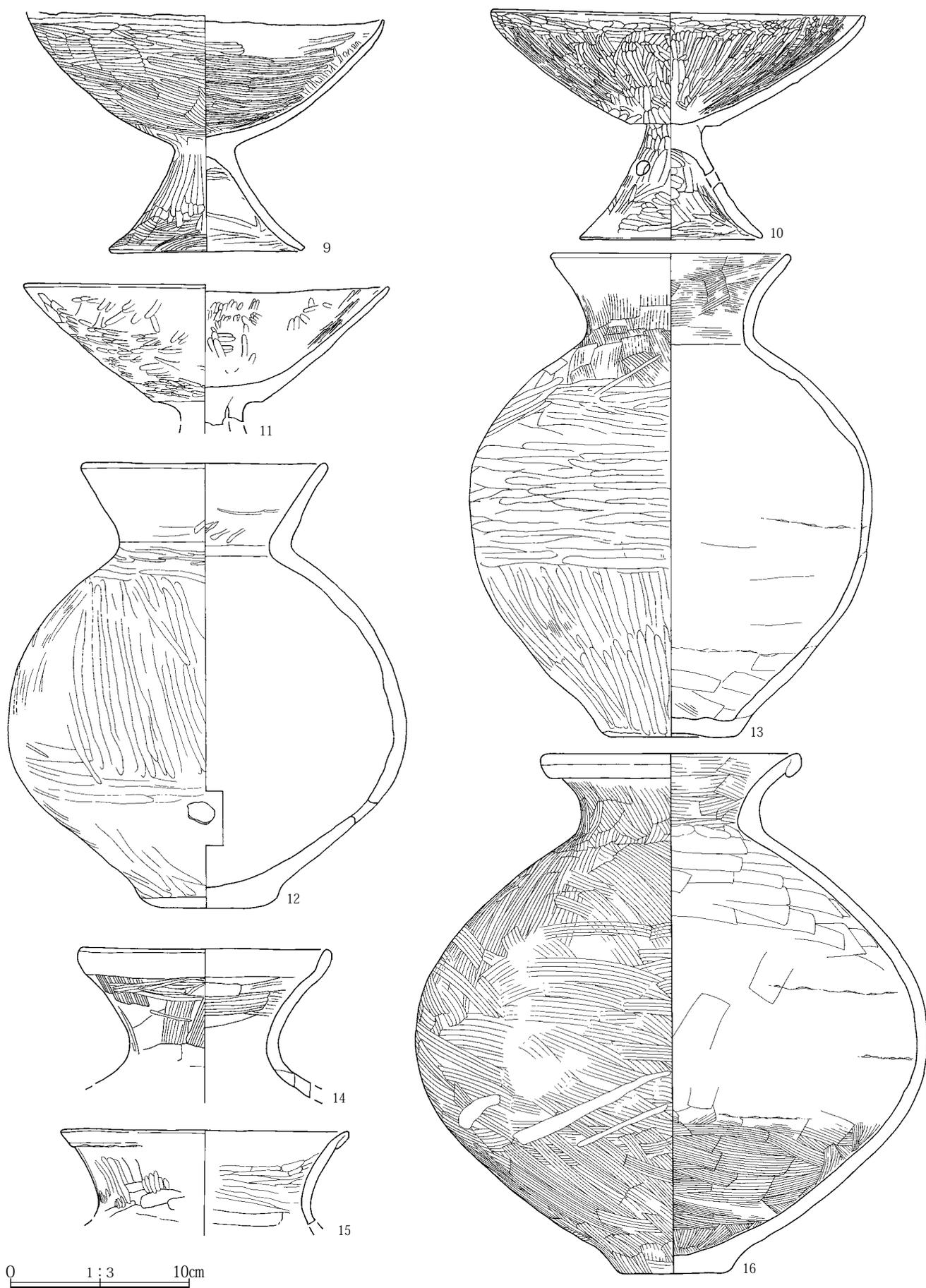
分であるため掘り過ぎた可能性が高い。床面はⅧ層土中に構築されており、全体に及ぶような掘り方は認められず、中央部に短軸0.70m、深さ0.15mの楕円形と思われる土坑1が検出された。特筆されるのは遺物の項目でも述べたように遺物の集中出土である。北西コーナー部寄りの一角に礫とともに完形に近い多器種の土器が折り重

なるように出土したものであるが、床面からは15cmほど浮いた位置からの出土であり、住居廃絶後に一括廃棄されたものである可能性が高い。南寄りの場所からはほとんど遺物出土が認められないことから、こうした遺物の集中廃棄が住居全体に及んだものではないと思われる。

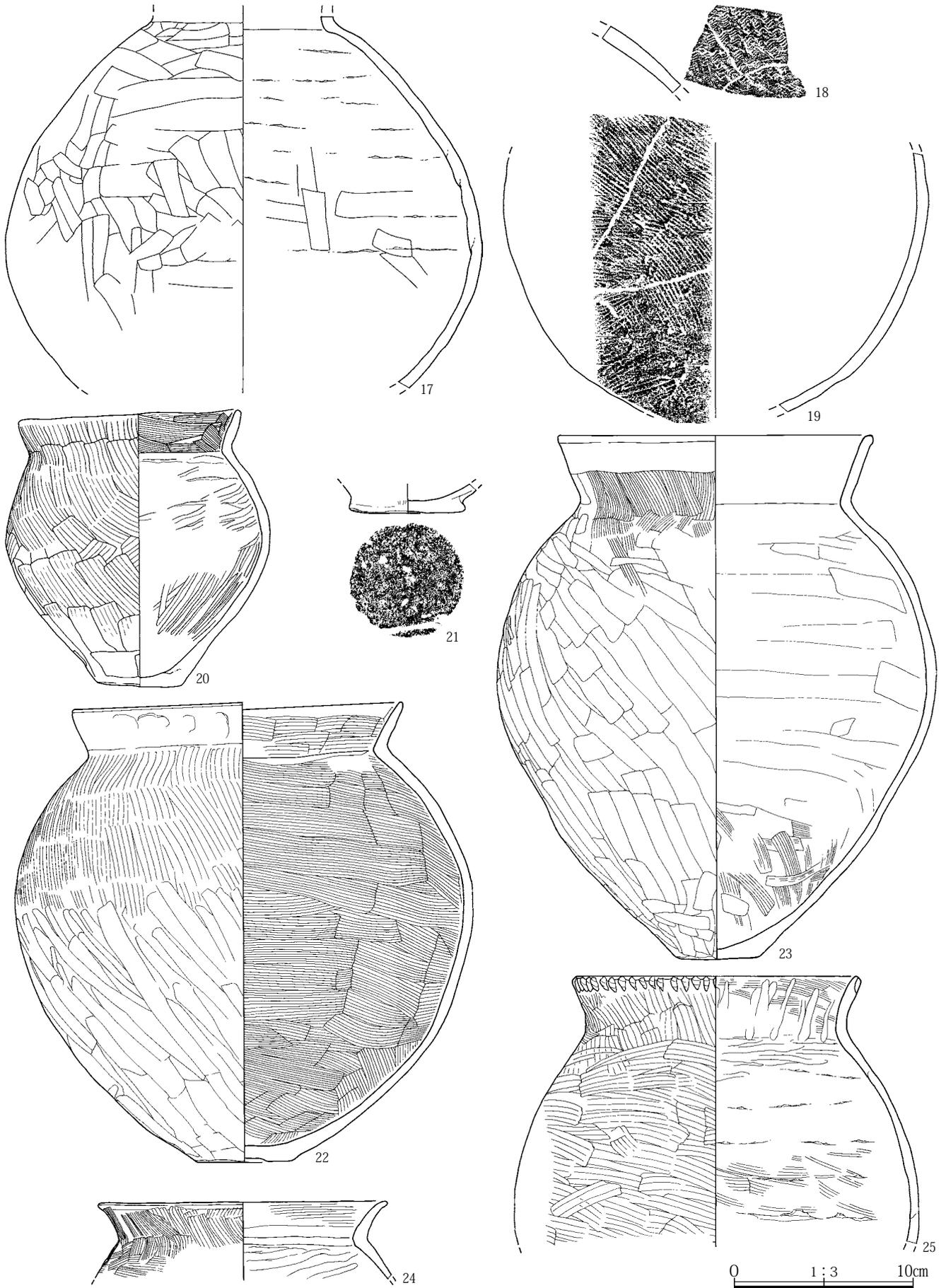
時期：4世紀前半



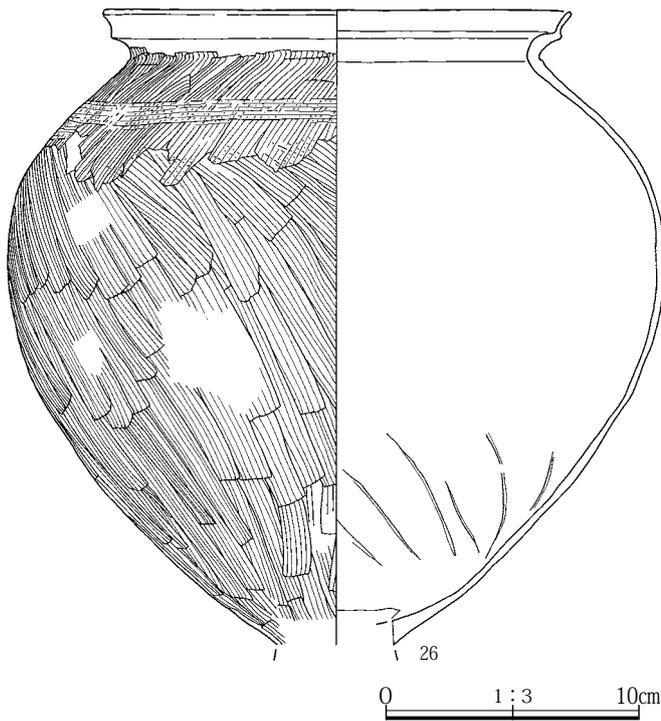
第903図 67号住居・出土遺物(1)



第904図 67号住居出土遺物(2)



第905図 67号住居出土遺物(3)

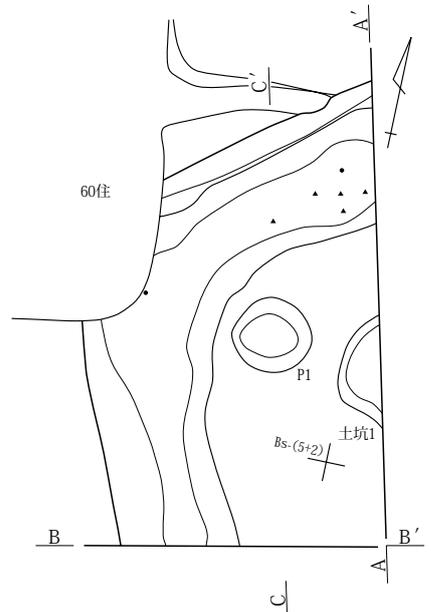
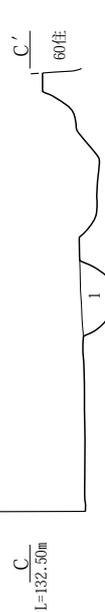
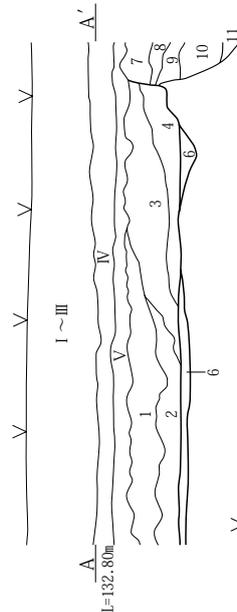
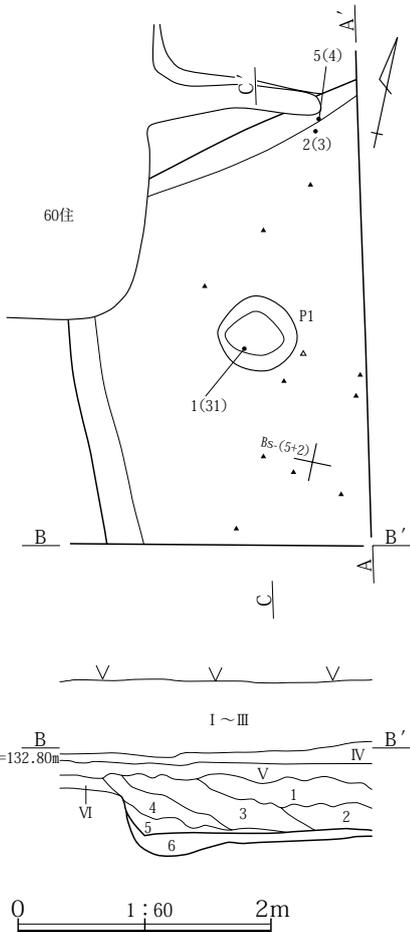


第906図 67号住居出土遺物(4)

規模：(3.49)m×(2.67)m 残存深度：0.45m 主軸方位：N-24°-W 埋没土：Ⅸ層土主体。柱穴：西壁から0.95mほど離れた位置に検出したP1(径0.60m、深さ0.24m、円形)が柱穴の一つと考えられる。炉：未検出 遺物：出土遺物は少なく、礫の出土が目立った。2・5の甕は北壁際から、1の高坏の脚部はP1の上部から出土したものである。重複：60・66号住居と重複し、検出状況及び出土遺物の比較から66号住居→69号住居→60号住居と考えられる。所見：調査区の東端に位置しており、南側に調査できない部分があったために北西コーナー部付近だけを検出したにとどまった。床面は平坦で、掘り方は壁寄りを帯状にやや深く掘り込んでおり、わずかに濁ったⅫ層土主体の土を埋め込んで構築されていた。また、中央寄りに円形を呈すると思われる窪み(土坑1)が検出されたが、極めて浅いことから意図的に掘削されたものではない可能性がある。調査された範囲では貯蔵穴に相当する掘り込み、及び炉になり得るような焼土面はまったく検出されなかった。時期：4世紀後半

69号住居(第907・908図 P L.205・304)

位置：Br・Bs-5・6グリッド 形状：隅丸長方形?



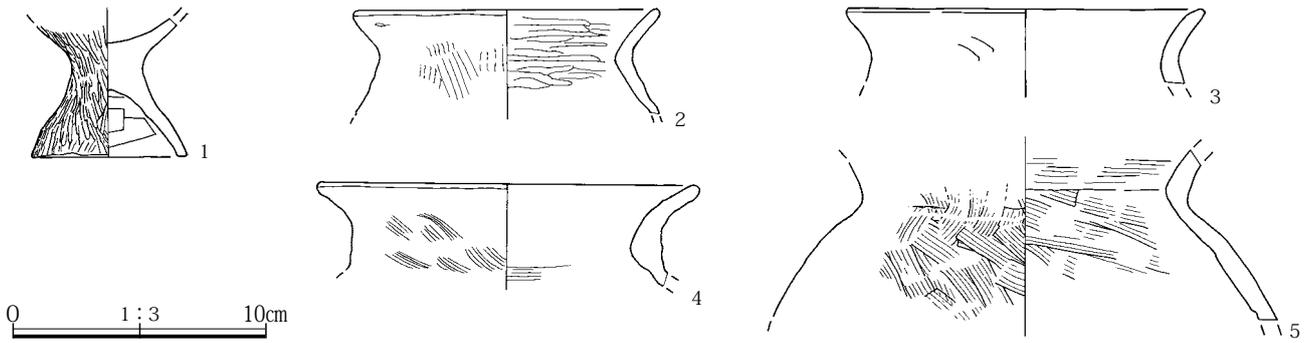
A-A'・B-B'

- 1 黄褐色土 Ⅻ層土に類似。
- 2 黒褐色土 Ⅸ層土主体で、As-Cをわずかに含む。
- 3 暗褐色土 2層土に類似するが、全体にAs-Cの含有は多量である。
- 4 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅻ層土粒を多く、As-Cを少量含む。
- 5 暗褐色土 Ⅺ層土とⅫ層土の混土で、壁からの崩落土。
- 6 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、As-Cは含まず、やや暗色を呈する。
- 7 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、Ⅻ層土と同質の砂ブロックを多量に含む。
- 8 黒褐色土 Ⅸ層土・As-Cを多く含み、柔らかい。
- 9 暗褐色土 Ⅶ層土主体で、As-Cを均一に少量含む。
- 10 暗褐色土 Ⅻ層土主体で、As-Cをごくわずかに含み、全体にやや暗色を呈する。
- 11 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、As-Cを含まないで、全体にやや暗色を呈する。

C-C'

- 1 黄褐色土 Ⅻ層土主体で、As-Cを含まず、やや暗色を呈する。

第907図 69号住居

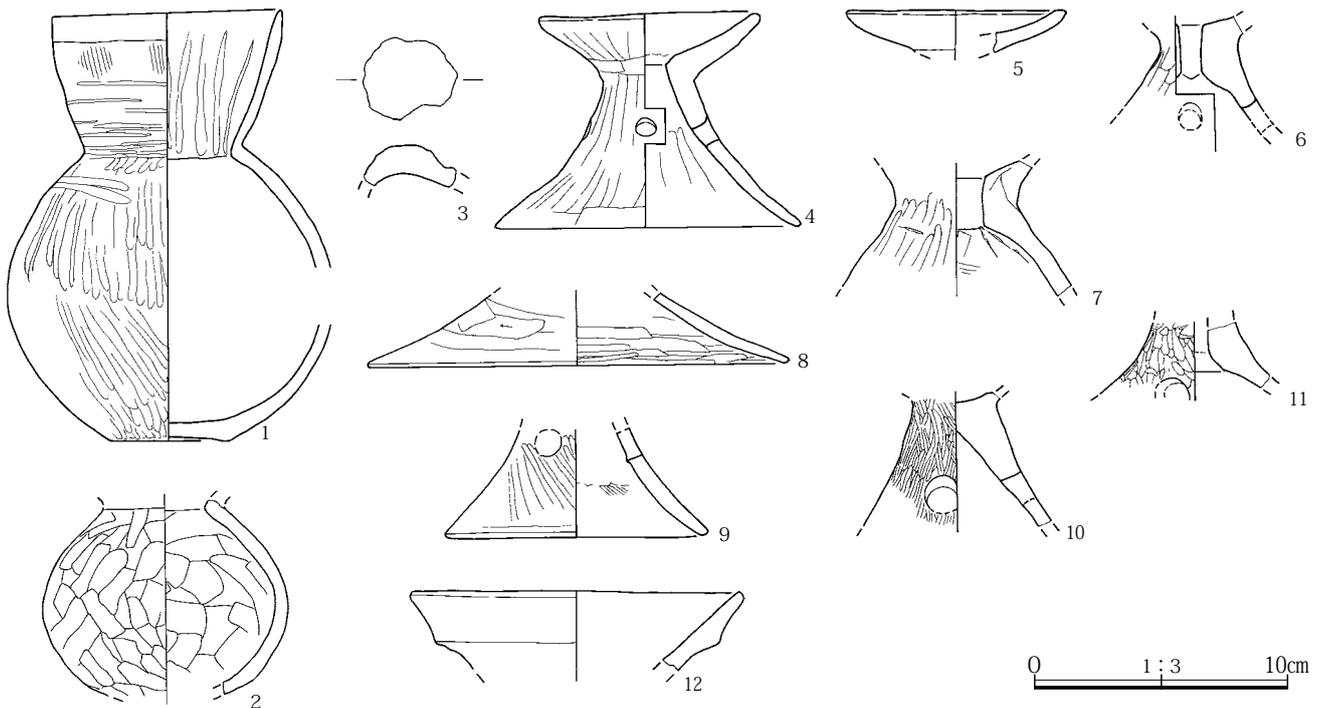


第908図 69号住居出土遺物

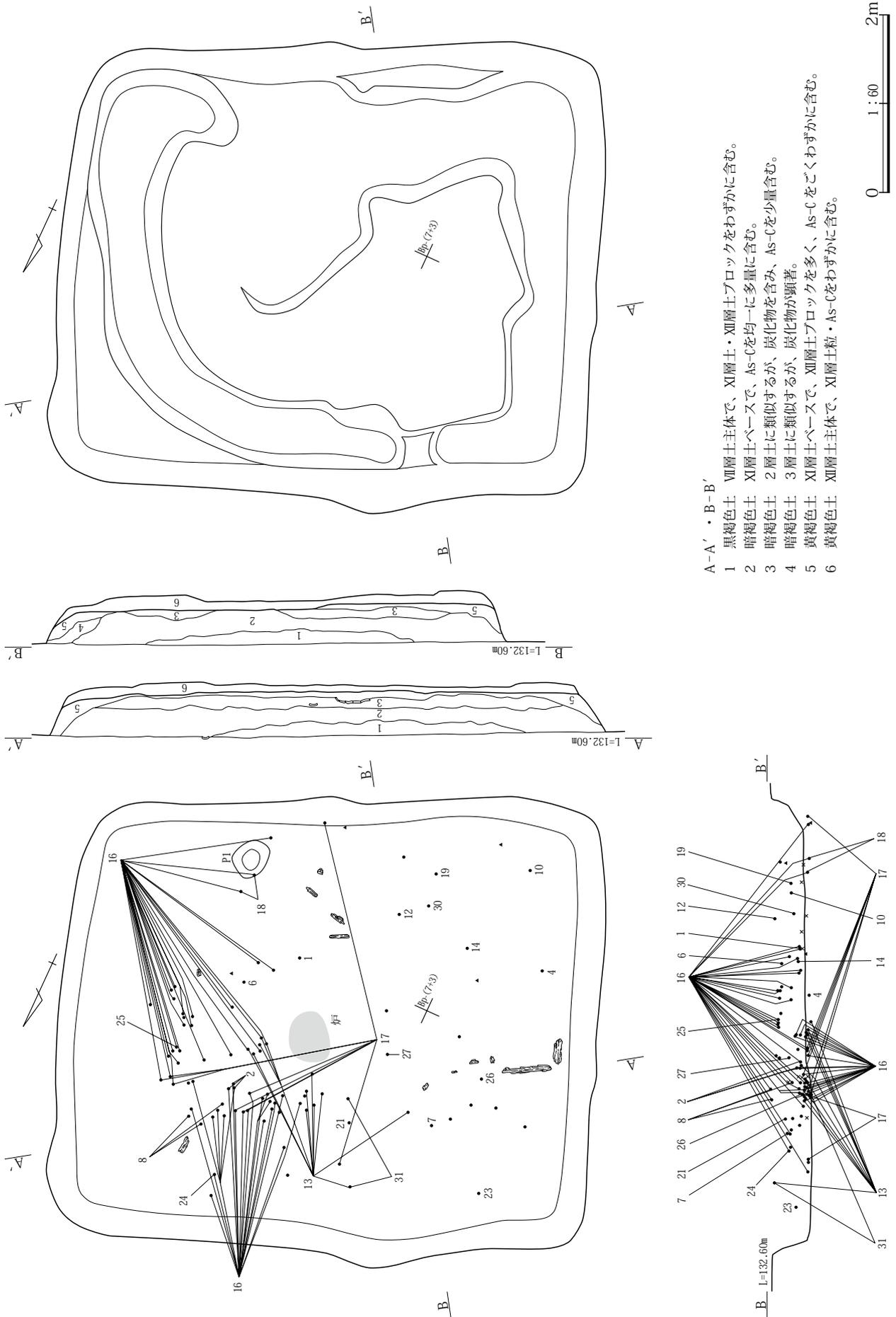
71号住居(第909～912図 P L.206・207・304)

位置：Bo・Bp- 7・8 グリッド 形状：隅丸長方形 規模：6.00m×5.09m 残存深度：0.43m 主軸方位：E-21°-N 埋没土：Ⅸ層土主体 柱穴：未検出 炉：床面の中央部に検出した0.58×0.45mの楕円形を呈する焼土部分を炉と判断した。この焼土面にはまったく窪み等は検出されておらず、床面で直接に火を焚いたものと考えられる。 遺物：住居北東部に破片の集中が見られるが、床面に接して出土した遺物は、S字状口縁の台付甕(31)だけであり、壺(13・16)・器台(6)はわずかに浮いた位置からの出土である。また、南西部からは壺(14)・器台(4)・高坏(10)が、南東部からは直口壺(1)・甕(18)などがやや浮いた位置から出土した。 重複：73号住居及び5号畑と重複しており、検出状況から73号住居・5号畑→71号住居と考えられる。 所見：調査区中央に南

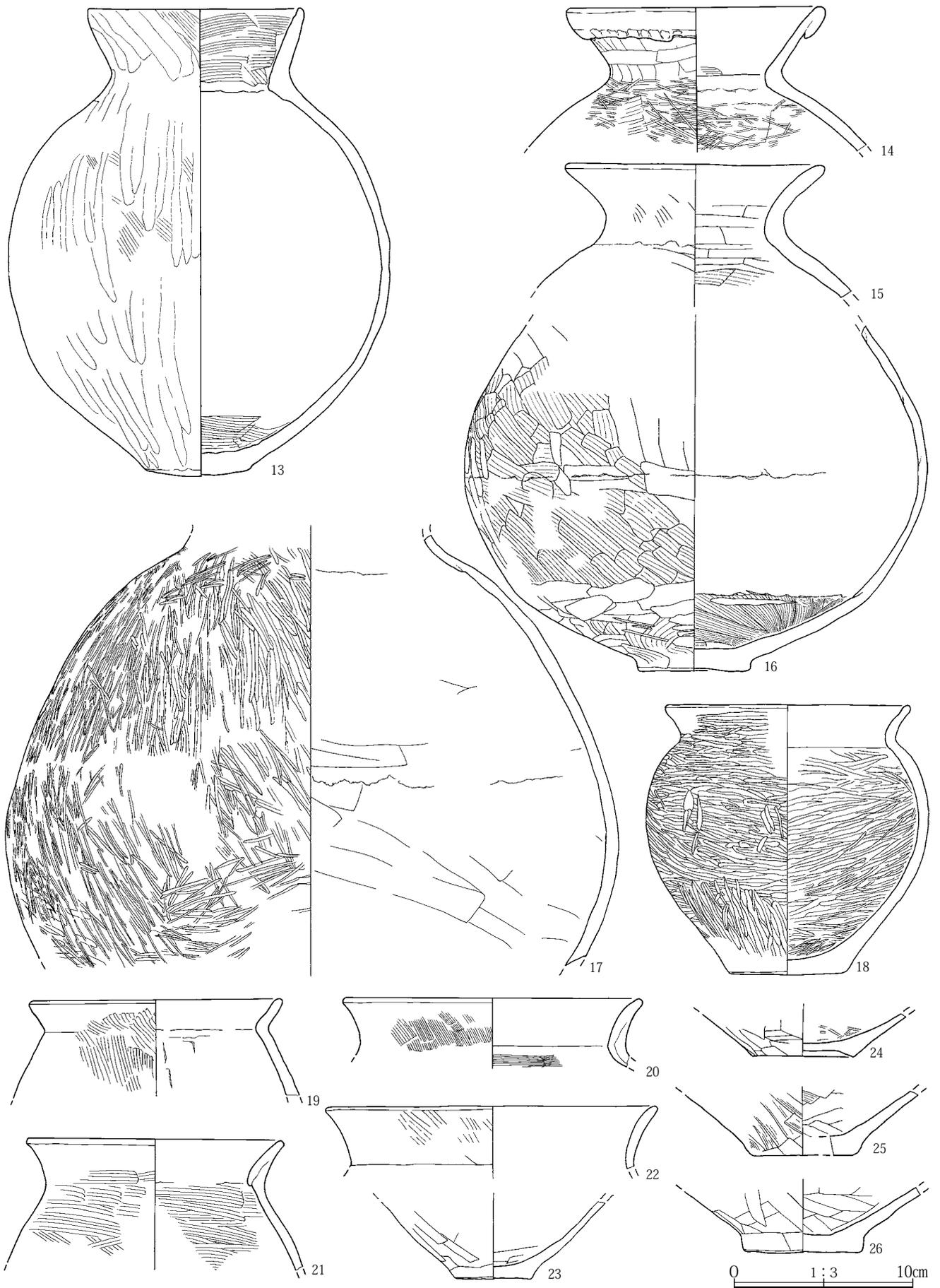
北方向に検出された低地部への落ち際に、Ⅻ層土まで下げた時点で検出したもので、全体を明らかにできた数少ない事例である。壁はやや傾斜が緩く、北壁の西寄りの部分に崩落によるものか変形が見られる。床面は、壁に沿ってやや深めに掘削された掘り方に、Ⅻ層土と明るい色調のⅨ層土の混じった土が充填されて構築されており、平坦ではあるが硬化面は確認されなかった。床面の精査及び掘り方調査の時点でも、南壁際に検出したP 1 (0.44×0.35m、深さ0.27m、楕円形)の他に貯蔵穴、柱穴になると思われるような掘り込みはまったく検出されなかった。西壁際の中央部及び南壁寄りの位置から炭化材がわずかに出土しており、焼土の形成などは認められないものの焼失住居である可能性が高い。 時期：4世紀前半



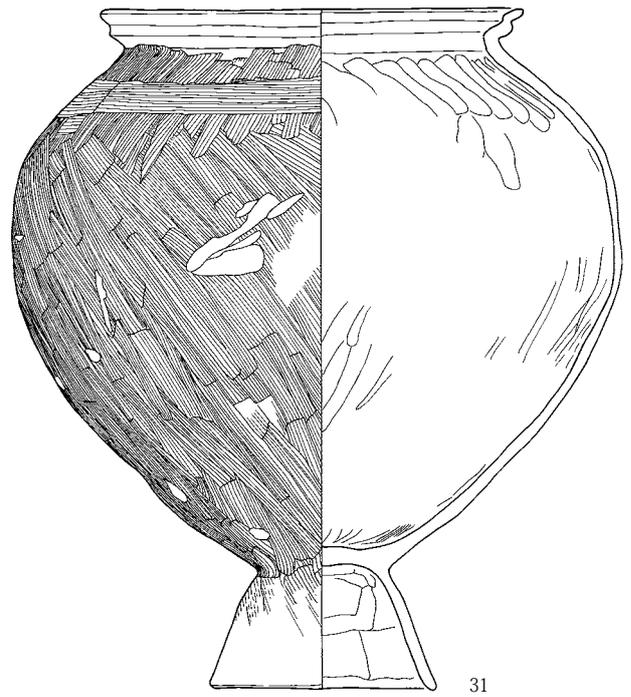
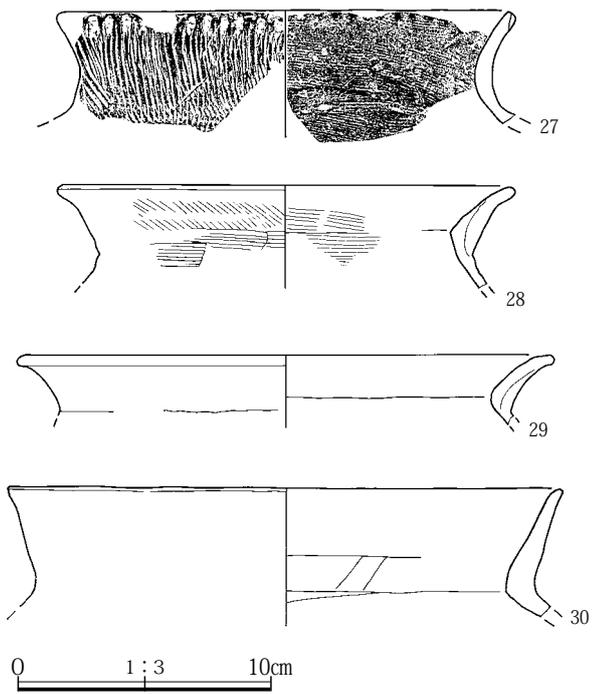
第909図 71号住居出土遺物(1)



第910図 71号住居



第911図 71号住居出土遺物(2)

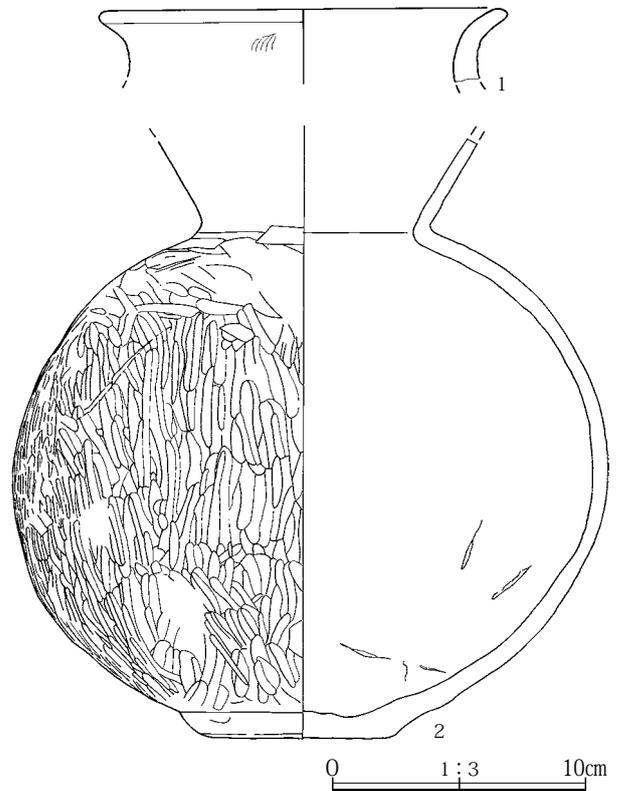
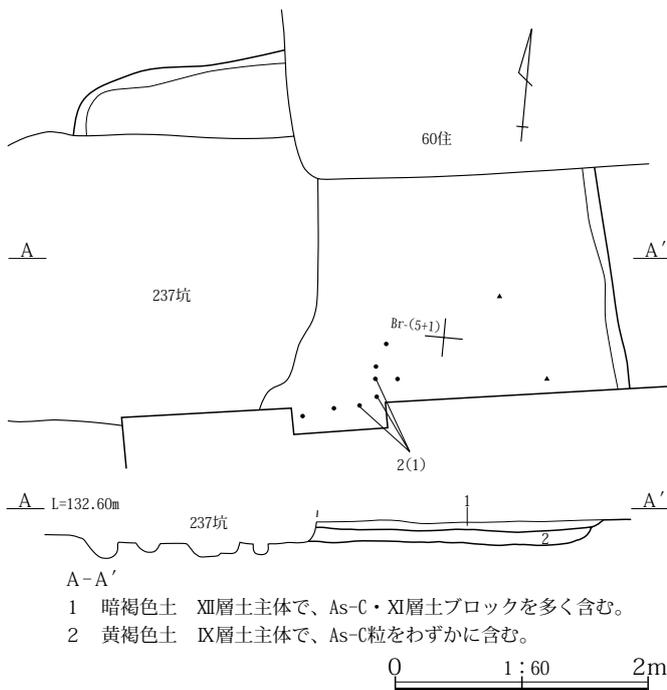


第912図 71号住居出土遺物(3)

72号住居(第913図 P L.207・304)

位置：Bq・Br- 5グリッド 形状：隅丸長方形？ 規模：
 (3.05)m×4.00m 残存深度：0.20m 主軸方位：N-
 15°-W 埋没土：Ⅻ層土とⅪ層土ブロックの混土で、
 As-Cを微量に含む土層。 柱穴：未検出 炉：未検出
 遺物：中央部の床面から壺(2)が潰れた状態で出土した。
 重複：60号住居・237号土坑と重複し、検出状況から72
 号住居→60号住居・237号土坑である。 所見：確認面

をⅫ層土まで下げた時点で検出されたもので、南側は工
 程上調査ができなかったために未検出である。壁の残存
 はごくわずかであり、床面は平坦であるが硬化面の検出
 はなかった。検出部分においては柱穴、貯蔵穴になり得
 るような掘り込みは見られなかった。 時期：4世紀前
 半か

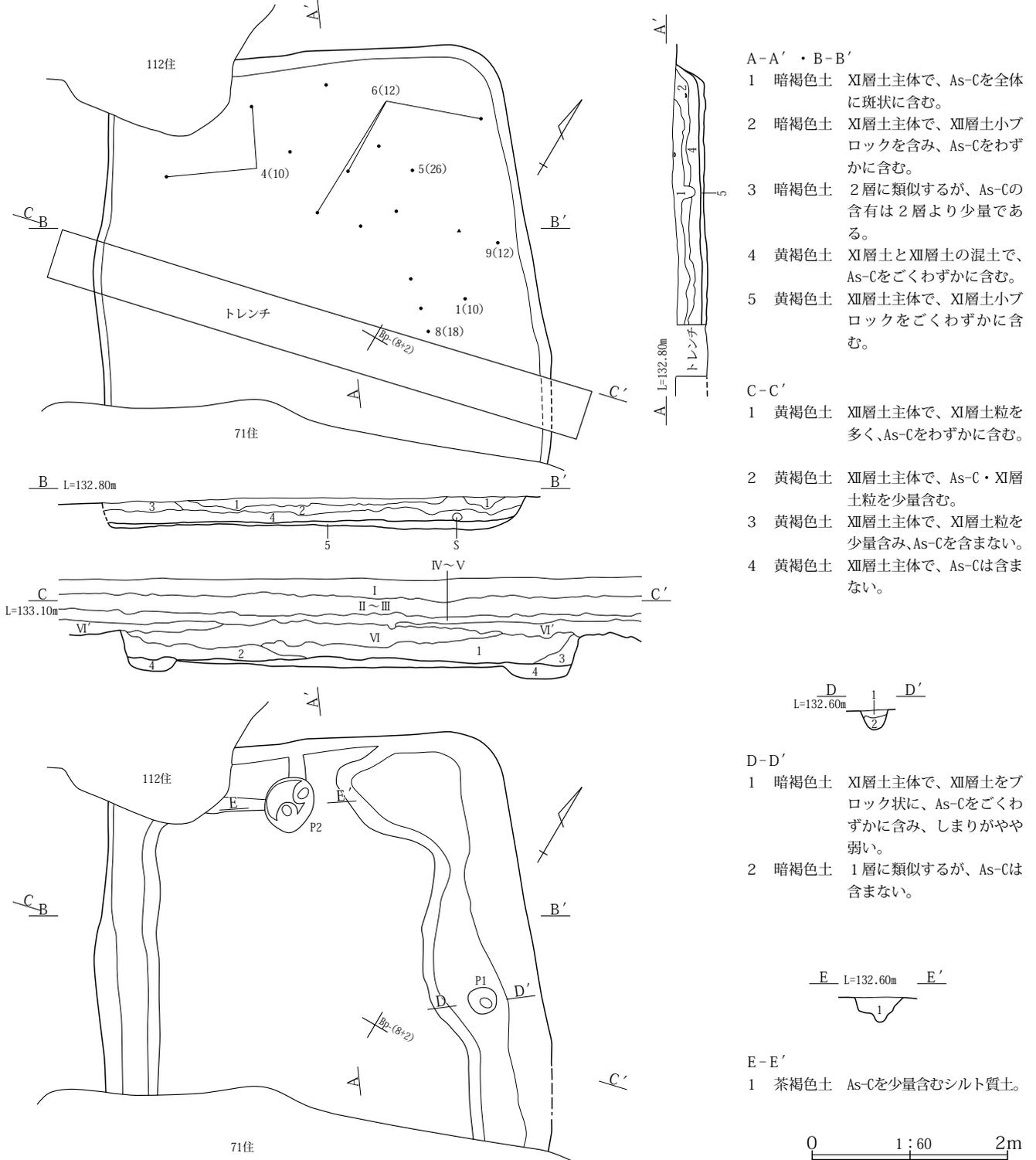


第913図 72号住居・出土遺物

73号住居(第914・915図 P L.207・208・304)

位置:Bo・Bp- 8・9 グリッド 形状:隅丸長方形 規模:
(4.35)m×4.50m 残存深度:0.30m 主軸方位:W-
36°-N 埋没土:微量のAs-Cを含むXI・XII層土主体。
柱穴:未検出 炉:未検出 遺物:遺物はいずれも床面
から浮いた位置にあり、埋没過程に廃棄されたものと考えられる。4の壺は北西コーナー部近くから、5の甕は

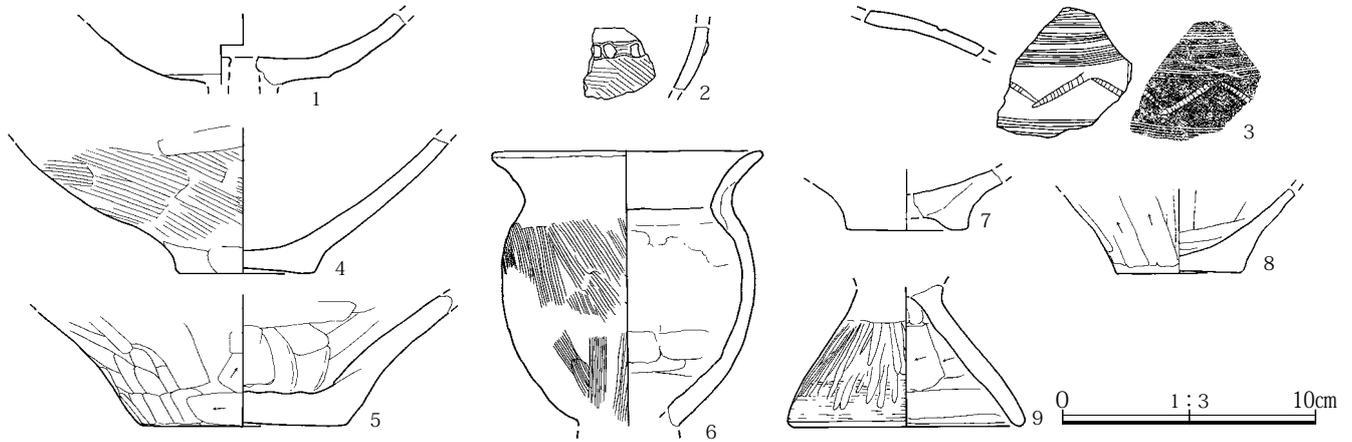
北東コーナー部寄りから出土し、台付甕(6)は中央部と北東コーナー部から出土した破片が接合した。また、高坏(1)は東壁寄りから出土した。重複:71・112号住居と重複しており、検出状況から73号住居→71・112号住居である。所見:調査区の境に位置しており、二次の調査で全体を明らかにしたが、I区調査で73号住居としていたにもかかわらず、III区調査で新たに113号住居



第914図 73号住居

としてしまったために、名称を73号住居に統一し113号住居を欠番とした。床面の精査において東壁際でP 1（径0.28m、深さ0.21m、円形）、北壁際でP 2（径0.48m、深さ0.26m、円形）を検出したが、位置から見て柱穴、貯蔵穴とは考えにくい。掘り方は壁に沿って帯状にやや深く掘削されており、やや濁ったⅫ層土類似の土を

充填し床面を構築していた。柱穴についてはその有無について確かめるために、Ⅲ区調査において柱穴の検出される可能性のある位置にトレンチを掘削して土層観察を行ったが、掘り込みの痕跡を確認することはできなかった。 時期：3世紀後半

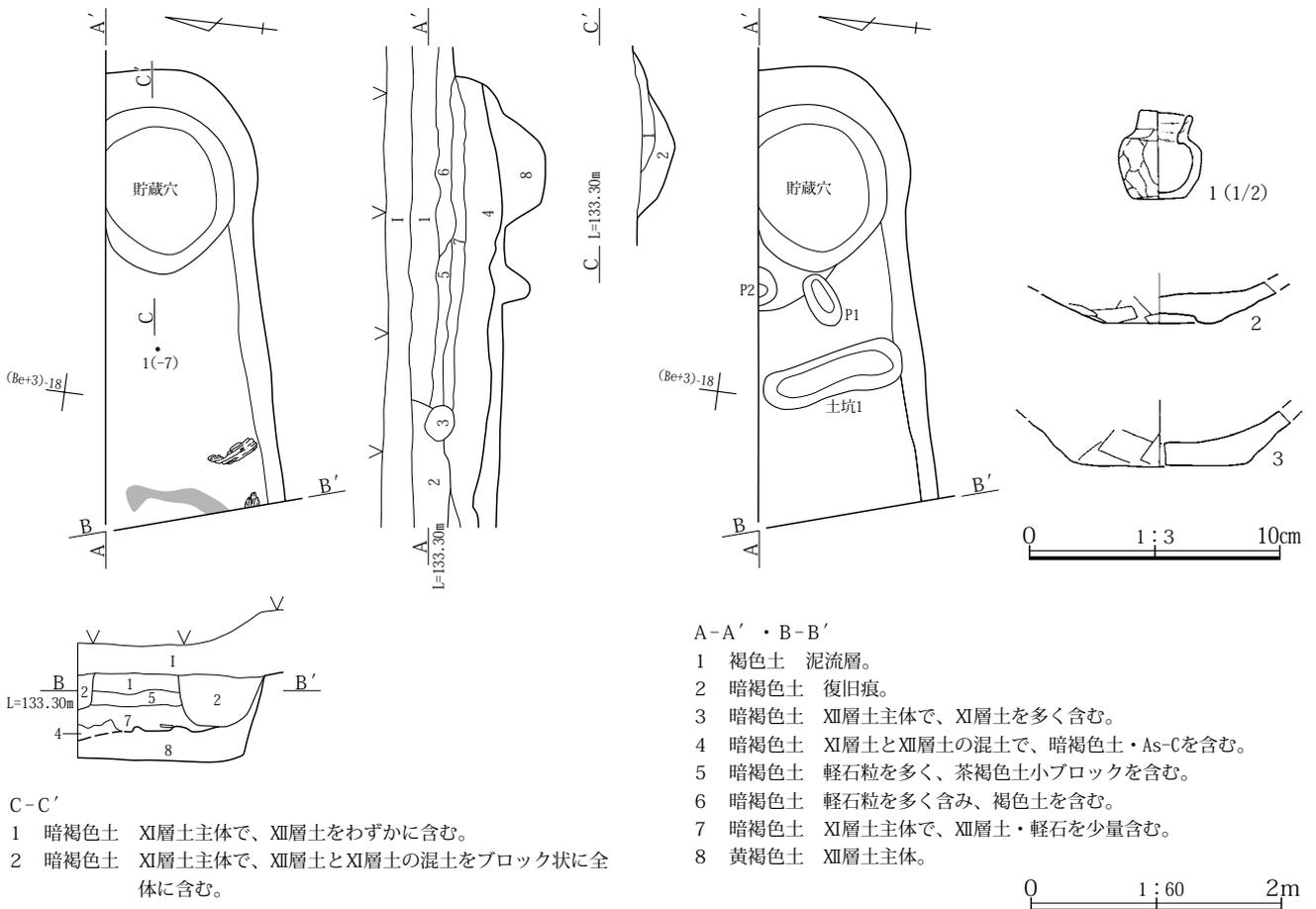


第915図 73号住居出土遺物

76号住居(第916図 P L.208・304)

位置：Be・Bf-17グリッド 形状：隅丸長方形？ 規模：

(3.60)m×(1.43)m 残存深度：0.38m 主軸方位：E-16°-N 埋没土：As-Cと暗褐色土を含むⅪ・Ⅻ層土



A-A'・B-B'

- 1 褐色土 泥流層。
- 2 暗褐色土 復旧痕。
- 3 暗褐色土 Ⅻ層土主体で、Ⅺ層土を多く含む。
- 4 暗褐色土 Ⅺ層土とⅫ層土の混土で、暗褐色土・As-Cを含む。
- 5 暗褐色土 軽石粒を多く、茶褐色土小ブロックを含む。
- 6 暗褐色土 軽石粒を多く含み、褐色土を含む。
- 7 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅻ層土・軽石を少量含む。
- 8 黄褐色土 Ⅻ層土主体。

C-C'

- 1 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅻ層土をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 Ⅺ層土主体で、Ⅻ層土とⅪ層土の混土をブロック状に全体に含む。

0 1:60 2m

第916図 76号住居・出土遺物

の混土。柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：検出部中央の床面から40cmほど上位から1のミニチュア土器壺が1点出土した。他に掲載可能な遺物は壺底部の破片2点だけである。重複：74号住居と重複しており、検出状況から76号住居→74号住居である。所見：調査区北端に位置しており、調査できたのは南東コーナー部付近に限られた場所である。床面とした面は、土層の変化する部分を捉えたものであるが、比較的顕著な凹凸があり、平坦な面として捉えることはできなかった。掘り方の底面として捉えた面は平坦であり、この面が床面であったものと考えられる。北東コーナー部に検出した径1.31m、深さ0.30mの円形を呈する掘り込みが貯蔵穴と考えられる。南側にP1(0.45×0.23m、深さ0.10m、楕円形)とP2(径0.30m、深さ0.22m、円形)を検出し、位置からP2は柱穴の可能性もあるが、西側の調査ができなかったため柱穴とは結論づけなかった。また、P1の南側に南壁から中央に向かって間仕切り溝状の土坑1(1.13×0.39m、深さ0.22m)を検出した。検出部の西端の一角に炭化物が細い帯状に検出されており、本来は炭化材であった可能性が高く、焼失住居であったものと思われる。

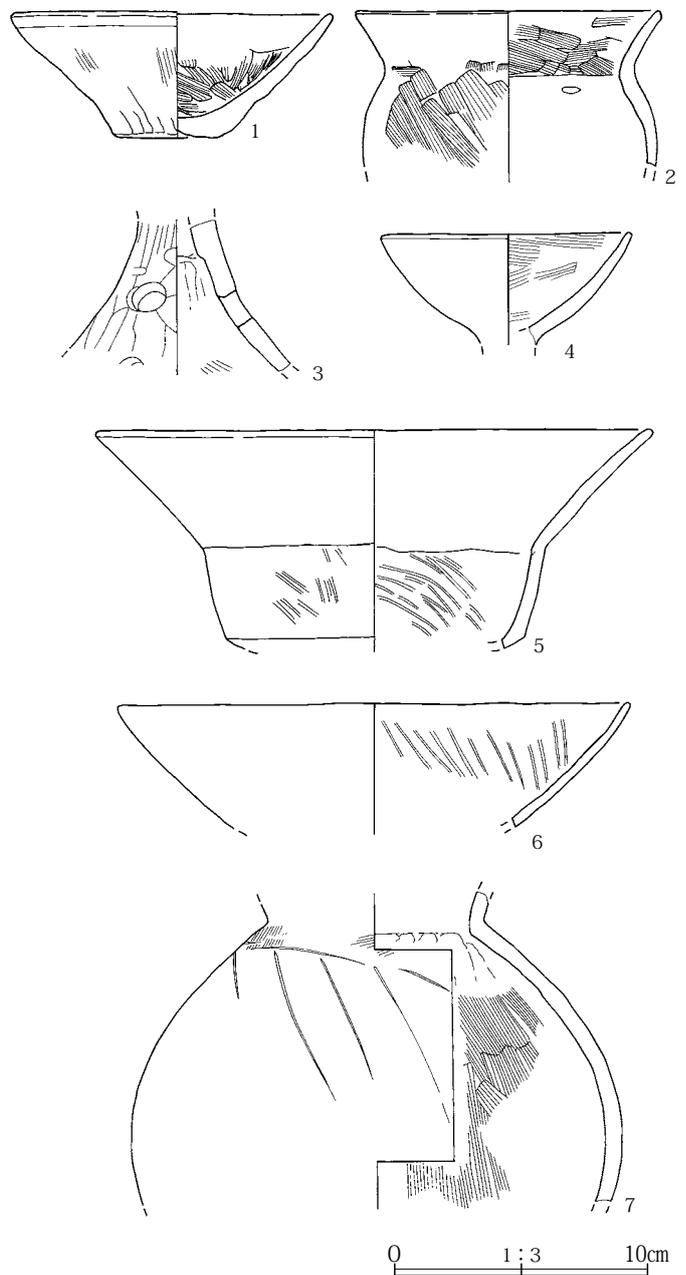
時期：4世紀代

105号住居(第917～919図 P L.208・305)

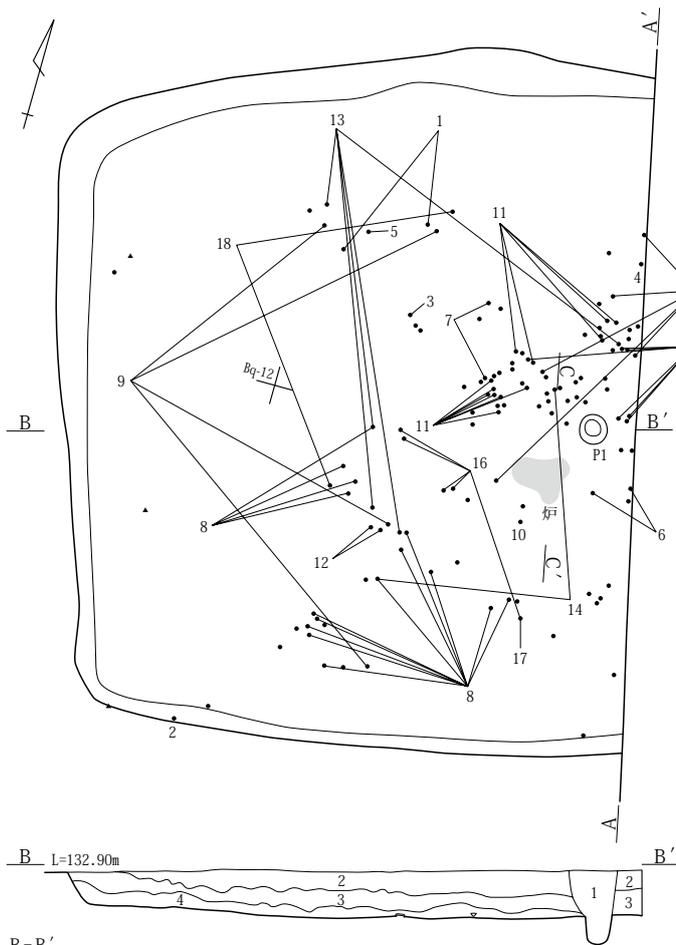
位置：Bp・Bq-11・12グリッド 形状：隅丸方形? 規模：(4.62)m×5.53m 残存深度：0.43m 主軸方位：E-16°-N 埋没土：下層はAs-Cを微量に含むⅫ層土主体、中層は黒褐色を呈するⅨ層土主体、上層はⅨ層土とⅫ層土ブロックの混土と明確に分層ができた。柱穴：未検出 炉：中央やや東寄りに焼土ブロックの集中する部分を1カ所検出したが、面として焼土化していたものではない。遺物：中央部に集中する出土状況を示しており、床面からは浮いた位置の遺物が多く、基本的には埋没過程で廃棄されたものと考えられる。壺(8)が南寄り、中央、北寄りのそれぞれ離れた位置の破片が接合した。鉢(1)・高坏(5)は中央北寄り、高坏(6)・壺(7・10・11)・器台(3)などは中央部の遺物集中部からの出土である。重複：116・124号住居重複しており、検出状況から116・124号住居→105号住居と考えられる。

所見：調査区の東端に位置しており、東側1/4程度が国道下にかかるため未調査である。平面確認はⅪ層土中で行ったもので、Ⅸ層土とⅫ層土ブロックで構成された土

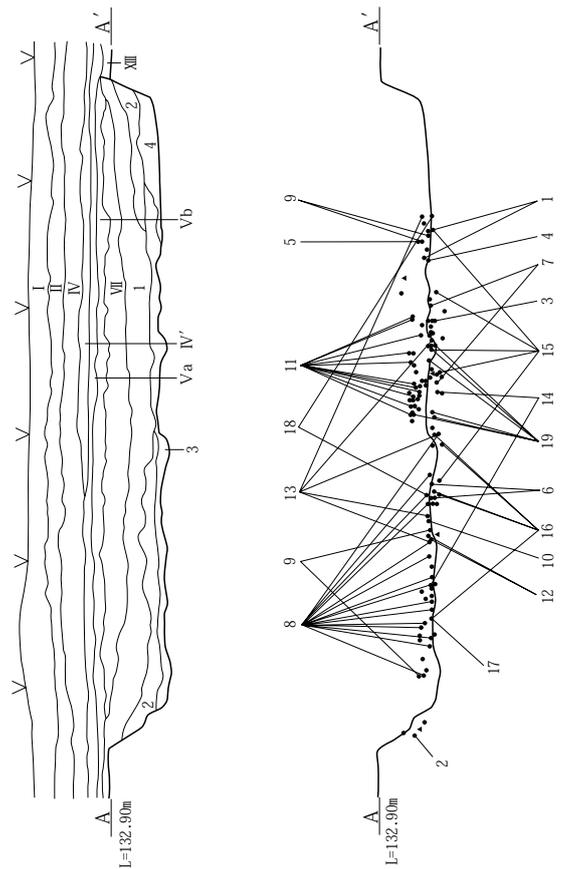
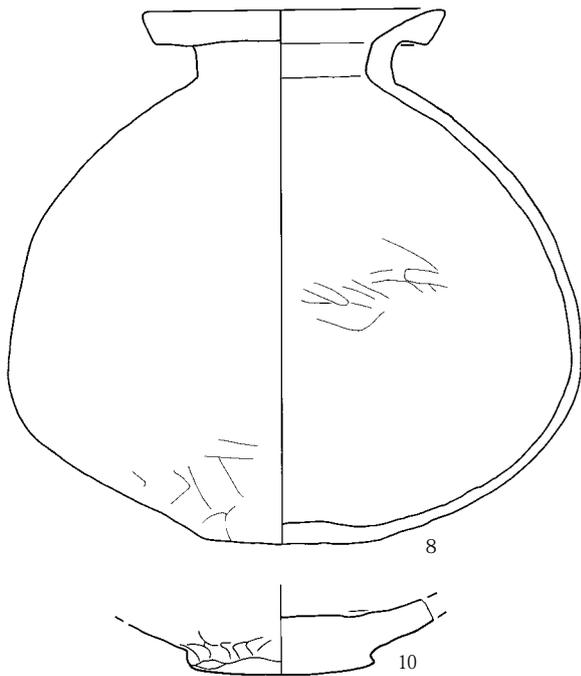
が方形に検出されこの外側に黒褐色を呈するⅨ層土主体の土が「コ」の字状に囲んで検出されたため、当初は方形周溝墓と誤認した。結果的には、方形の住居に自然堆積した色調の異なる上層と中層を平面的に検出したことによる誤認であることがわかった。壁は、やや傾斜するものの崩落の痕跡はなく良好に検出できた。床面は炉検出面を広げていくことで捉えることができた。床面の精査を行ったが、柱穴、貯蔵穴と見られるような掘り込みは検出されなかった。柱穴については、予測される位置にトレンチを設定してⅫ層土を掘り下げてみたが、検出には至らなかった。 時期：4世紀前半



第917図 105号住居出土遺物(1)

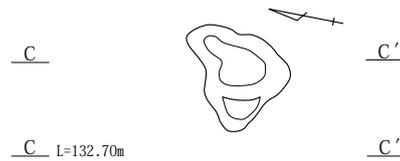


- B-B'
- 1 暗褐色土 As-Cを多く、灰色軽石大粒を含む暗褐色土。
 - 2 黄灰色土 As-Cと灰色軽石細粒を少量含む。シルト質土。
 - 3 暗褐色土 As-Cを多量に、二ッ岳系軽石？（白色軽石）を含む暗褐色土主体で、XII層土粒を多く含む。
 - 4 黄褐色土 As-Cを少量含むXII層土主体。



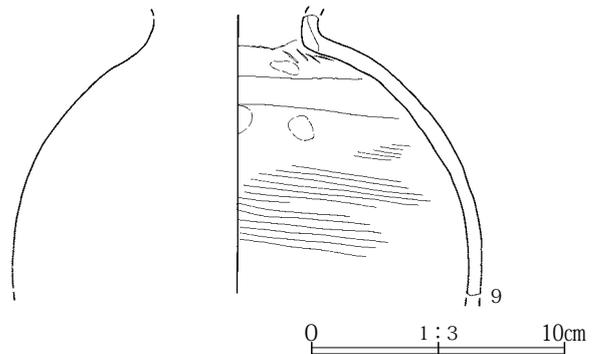
- A-A'
- IV' 灰褐色土 IV層土に類似し、As-Bを含む。
 - 1 暗褐色土 VII層土に類似し、二ッ岳軽石の含有がやや多い。
 - 2 暗褐色土 XII層土大ブロックを斑状に、As-Cを少量含む。
 - 3 暗褐色土 XII層土との混土で、As-Cをわずかに含む。
 - 4 黄褐色土 As-Cをわずかに含むシルト質土。

0 1:60 2m

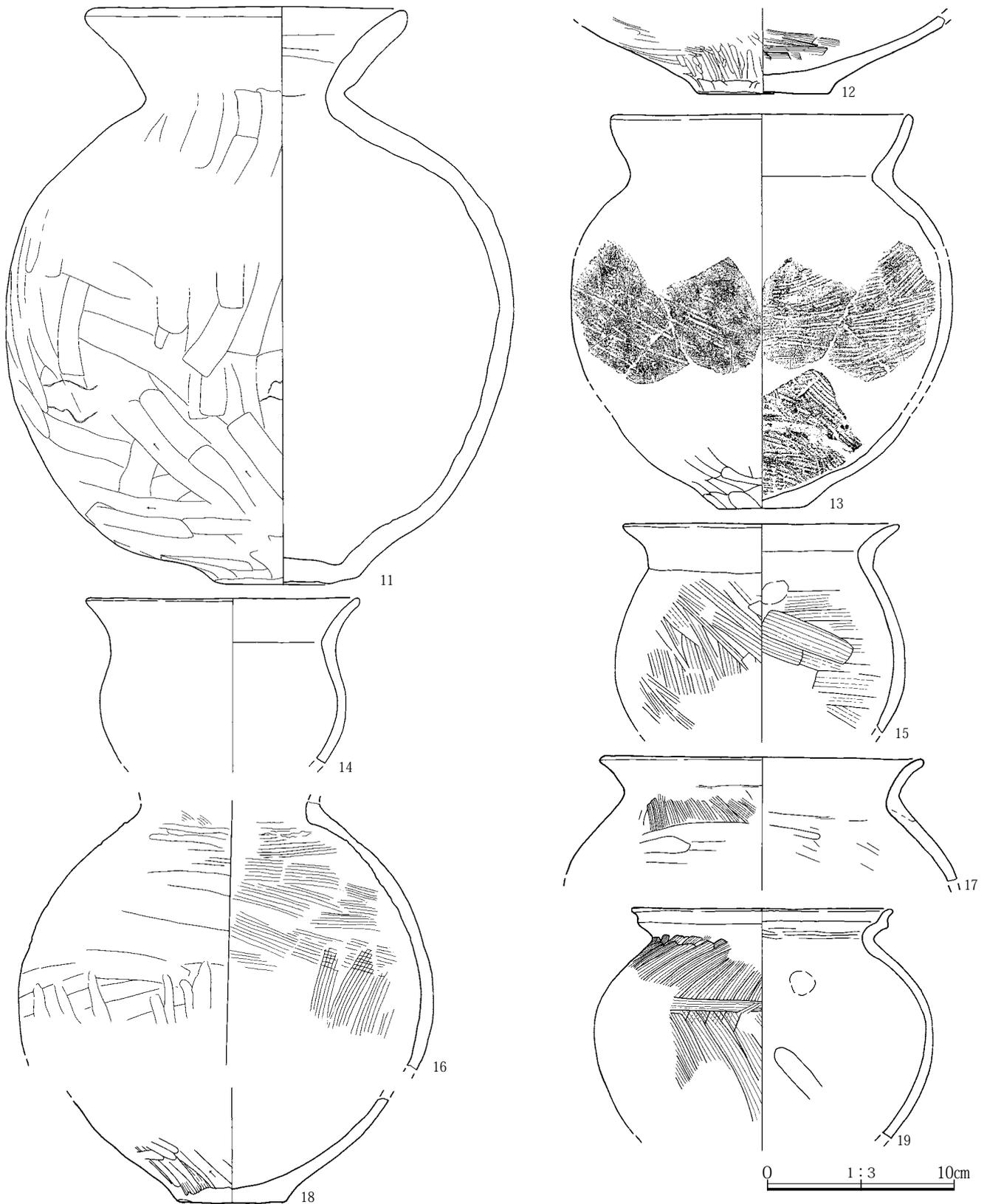


- C-C'
- 1 赤褐色焼土
 - 2 黄褐色土 As-C・焼土ブロックをわずかに含むシルト質土。

0 1:30 1m



第918図 105号住居・出土遺物(2)



第919図 105号住居出土遺物(3)

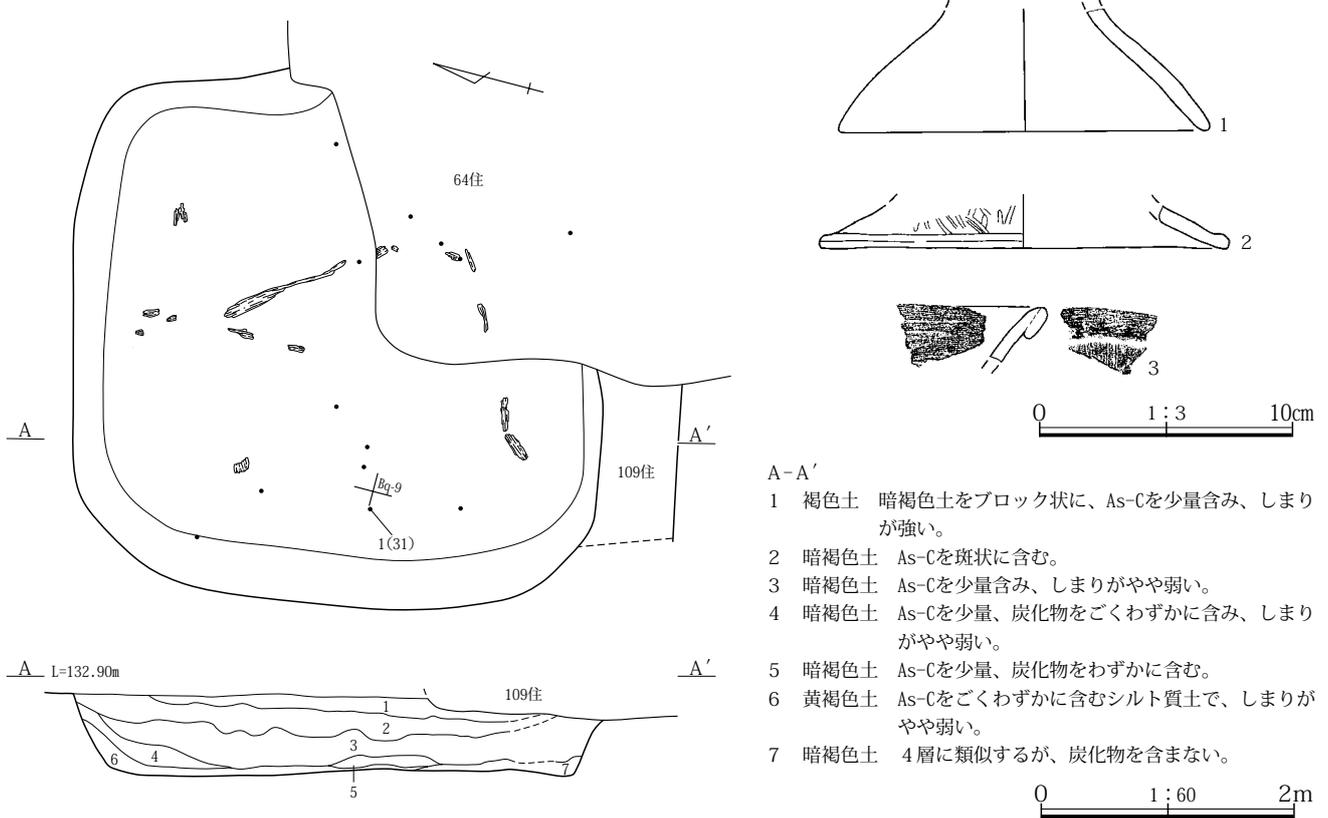
107号住居(第920図 P L.208・209)

位置: Bp・Bq- 8・9グリッド 形状: 隅丸方形 規模:
4.23m×4.03m 残存深度: 0.64m 主軸方位: E-10
°-N 埋没土: 微量の炭化物粒を含むⅨ層土主体。

柱穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 遺物出土は極めて少
量で、高坏の脚部(1)は西壁際の床面から30cmほど上位
から出土した。重複: 64・109号住居と重複しており、
検出状況及び土層断面の観察から64号住居→107号住居

→109号住居である。 所見：64号住居と同時に平面確認を行い、平面的には新旧関係が捉えられなかったために、セクションベルトを設定して同時に調査を進めた。その結果、64号住居の埋没土中位に堆積した純層を107号住居が切っていることが確認され、107号住居の埋没土最下層までAs-Cが含有されていることから新旧関係が明らかになった。この時点で64号住居の床面まで下げて

いたために、107号住居の南東コーナー部が残らなかった。床面はⅫ層土中に構築されており、精査したが柱穴や貯蔵穴と思われる掘り込みを検出することはできなかった。床面から10cmほど上位ではあったが、炭化材が数カ所で出土しており、焼失した可能性が高い。 時期：4世紀前半



第920図 107号住居・出土遺物

115号住居(第921図)

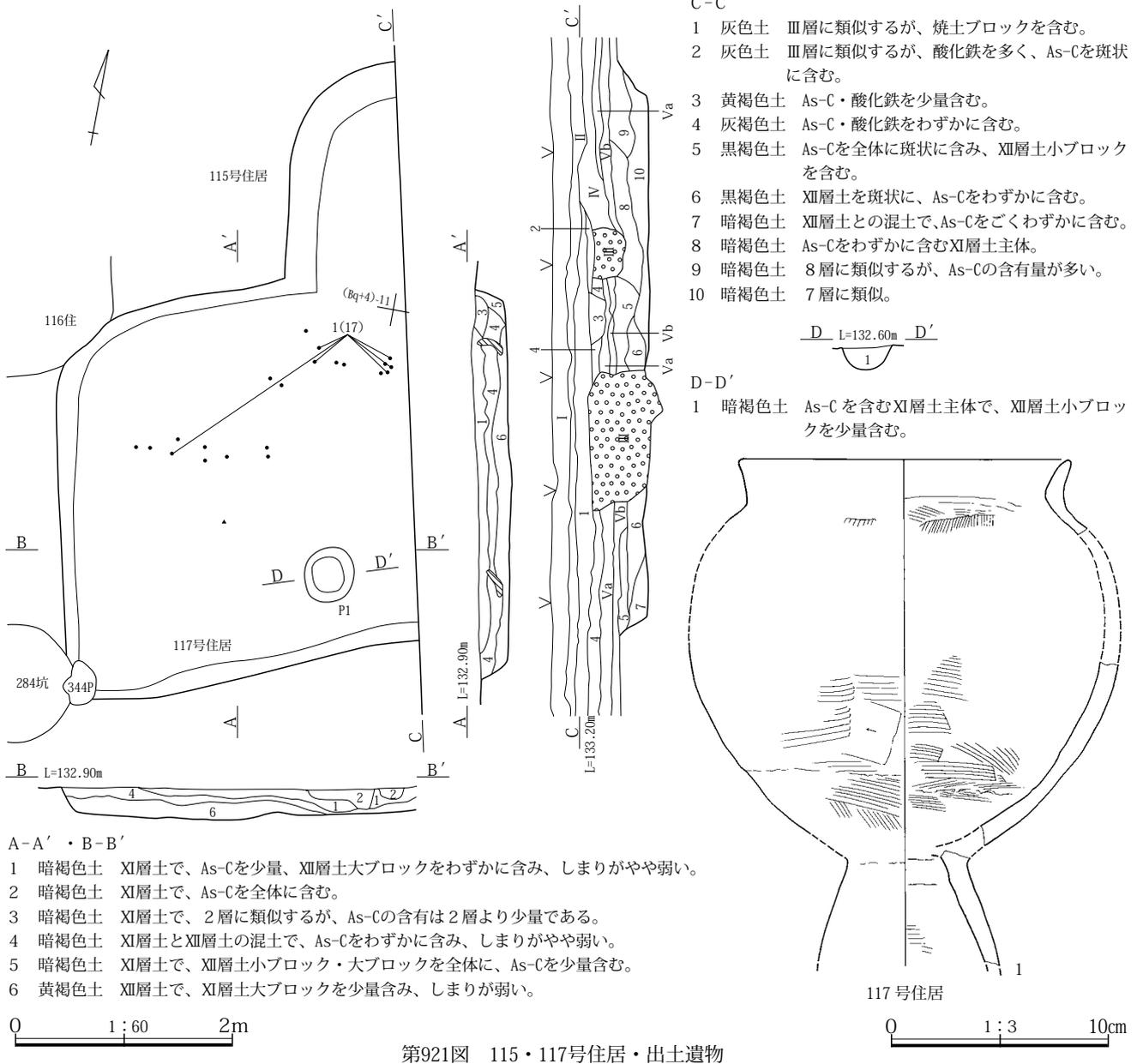
位置：Bq-10・11グリッド 形状：不明 規模：(1.07)m×(2.00)m 残存深度：0.30m 主軸方位：E-8°-N 埋没土：Ⅻ層土主体で、微量のAs-Cを含む層。 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：なし 重複：117号住居と重複しており、土層断面での観察から115号住居→117号住居と考えられる。 所見：調査区東端で、北西コーナー部だけが検出された。時期を特定できるような遺物出土はなかったが、4世紀前半代と見られる117号住居よりも古く、Ⅻ層土を主体とする4世紀代に特有の埋没土であったことからここで扱った。北壁の状況は、緩傾斜しているが、埋没土中に壁崩落に起因するような堆積は認められないことから、当初から傾斜を有して掘削されたものと考えられる。 時期：3世紀後半か

117号住居(第921図 P L.210)

位置：Bq-10グリッド 形状：隅丸長方形? 規模：(3.27)m×3.53m 残存深度：0.27m 主軸方位：E-23°-N 埋没土：Ⅻ層土中にAs-Cをわずかに含む土主体。 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：遺物の多くは小破片で床面よりも上位から出土したもののばかりである。1の単口縁の台付甕は北寄りから出土した。 重複：115・116号住居と重複しており、土層断面の観察及び検出状況から115号住居→117号住居と考えられるが、116号住居との関係は不明である。 所見：調査区東端に位置しており、115号住居と同時に調査を進めた。平面確認の時点では115号住居との新旧関係を捉えることはできなかったが、調査区東壁の土層断面で判断をした。壁はわずかに傾斜しているが、115号住居ほどではない。床面は、

埋没土との色調の違いをもとに精査した結果、Ⅻ層土面として平坦に捉えることができたが、硬化面、炉などは検出されなかった。床面の精査で南壁寄りにP 1 (径0.50

m、深さ0.21m、円形)を検出したが、柱穴、貯蔵穴とは考えられない。 時期：4世紀前半か



第921図 115・117号住居・出土遺物

116号住居(第922・923図 P L.209・210・305)

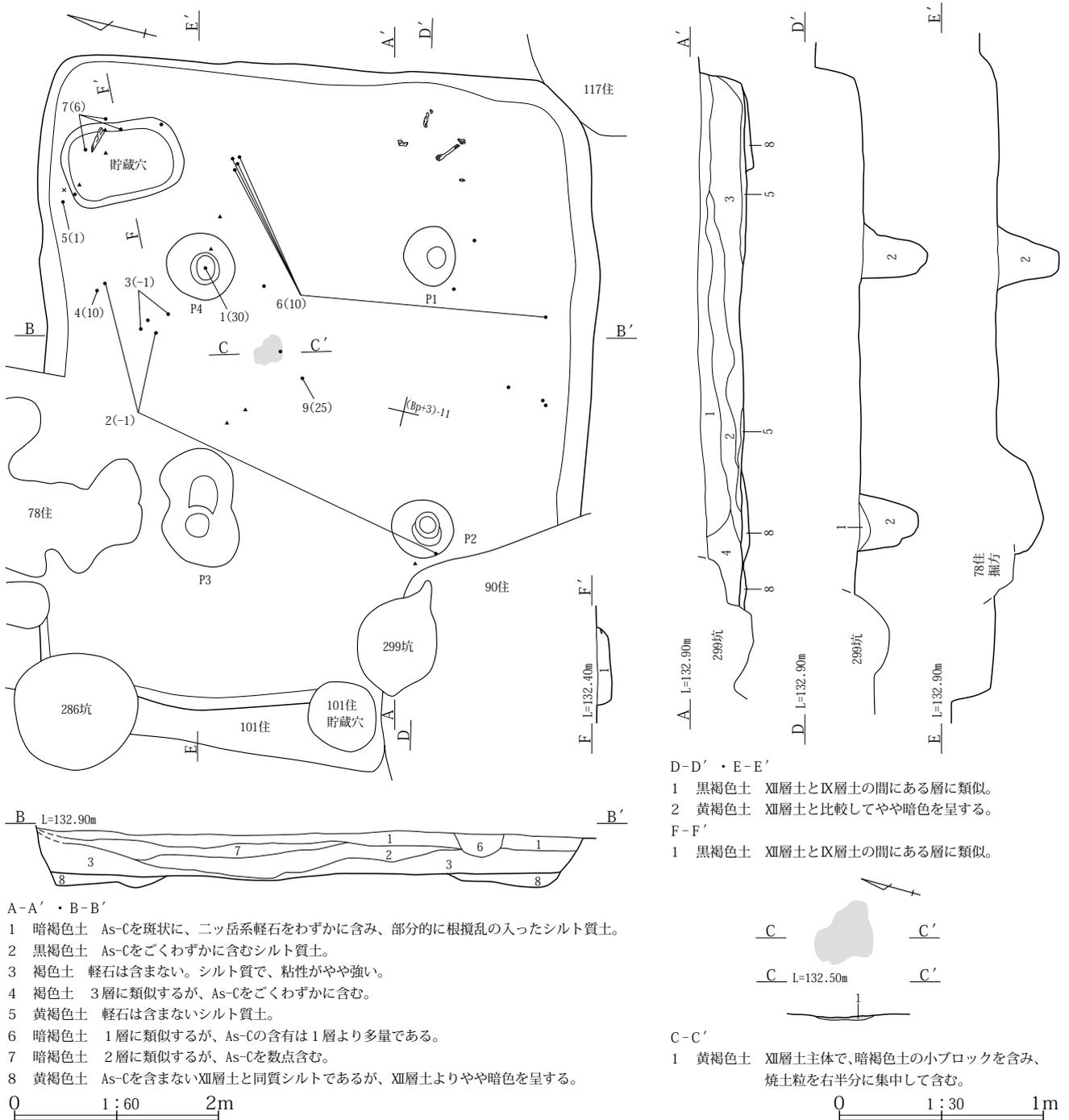
位置：Bo ~ Bq-10・11グリッド 形状：隅丸長方形 規模：6.30m×5.37m 残存深度：0.45m 主軸方位：E-10°-N 埋没土：微量のAs-Cを含むⅪ層土類似の土で埋没しており、北西方向へ傾斜した堆積状況が認められることから、南東方向からの埋没が主体的であった可能性が高い。 柱穴：P 1 (径0.50m、深さ0.67m、円形)、P 2 (径0.57m、深さ0.56m、円形)、P 3 (0.77×0.66m、深さ0.49m、楕円形)、P 4 (径0.63m、深さ0.64m、円形)の4カ所を柱穴と判断した。P 1-P 2間2.85m、P

3-P 4間2.60m、P 4-P 1間及びP 2-P 3間は2.30mである。 炉：床面中央のわずかに北東寄りに焼土化した面を検出した。薄い橙色を呈しており、掘り込みは認められない。 遺物：7の甕は、貯蔵穴北東部から、5の高坏の脚部は貯蔵穴と北壁との間の床面から出土したもので、これ以外は埋没土中からの出土である。 重複：78・90・101・105・117・124号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から124号住居→116号住居→78・90・101・105号住居と考えられ、117号住居との関係は不明である。 所見：Ⅻ層土中で平面確認を行い、As-C

の含有はわずかであったものの埋没土が暗色であったことから平面形を捉えるのは容易であった。炉、柱穴、貯蔵穴などの検出された面を床面として捉えたもので、柱穴に囲まれた中央部はⅫ層土が床面となっており、その周辺はやや濁ったⅫ層土類似の土が床面となっていた。貯蔵穴は、北東コーナー部に検出された1.17×0.78m、深さ0.14mの隅丸長方形を呈する土坑状の掘り込みと考えられ、黒褐色のⅫ層土類似の土が堆積していた。確認時点で貯蔵穴の北東部に7の甕が口縁部を下にして出土

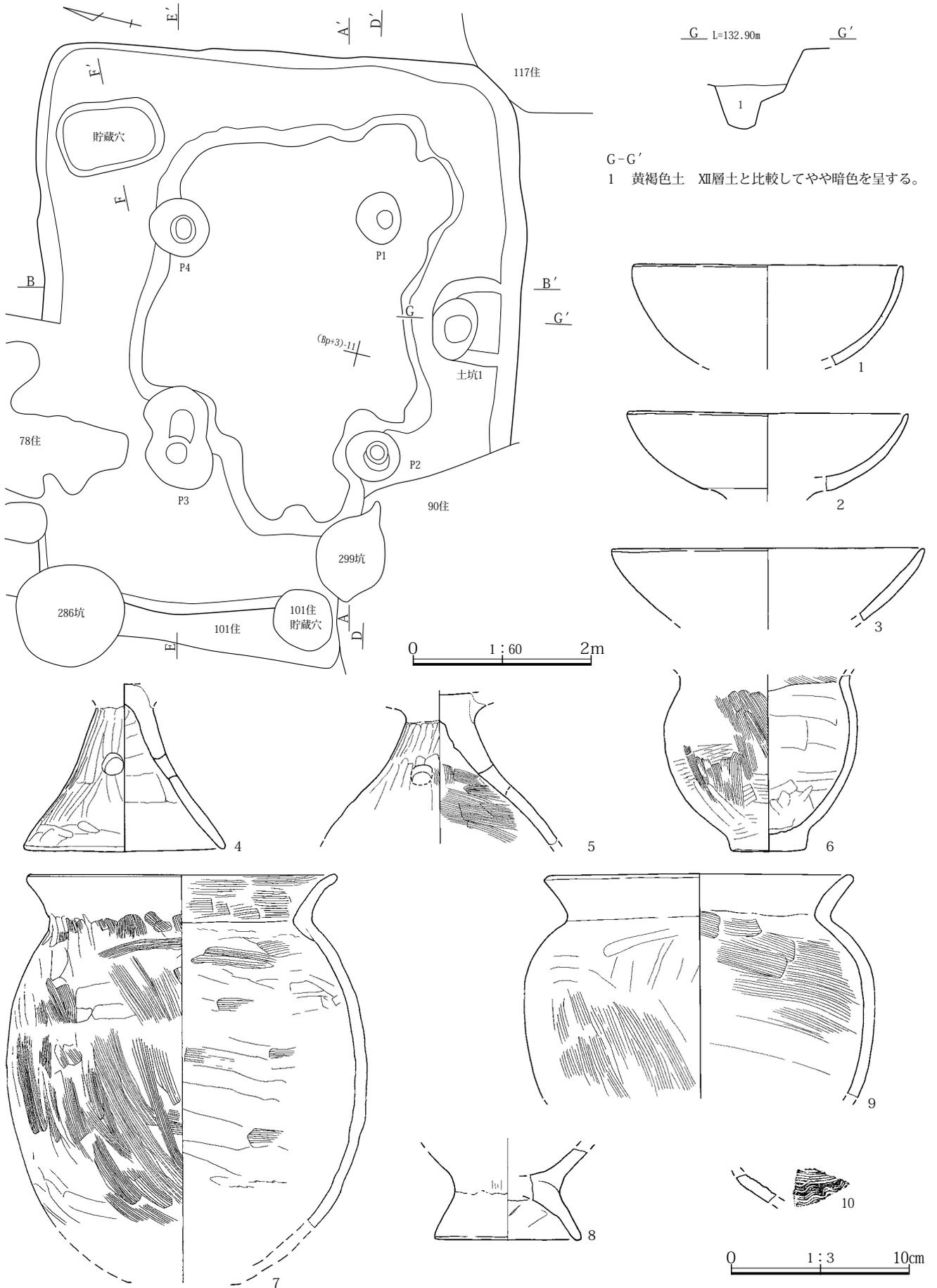
した。掘り方は壁に沿って帯状にわずかに掘り下げる当該時期の住居に特徴的なものであり、南壁中央に接して土坑1（径1.00m、深さ0.12m、不整円形）が掘削されており、その北寄り部分は0.70×0.50m、深さ0.48mの楕円形に深掘りされていた。埋没土中に炭化物の混入は見られなかったが、南東コーナー部近くの床面から炭化材がわずかに出土しており、焼失している可能性が高い。

時期：3世紀後半



第922図 116号住居

第2節 第Ⅱ期 (As-C 降下以前)



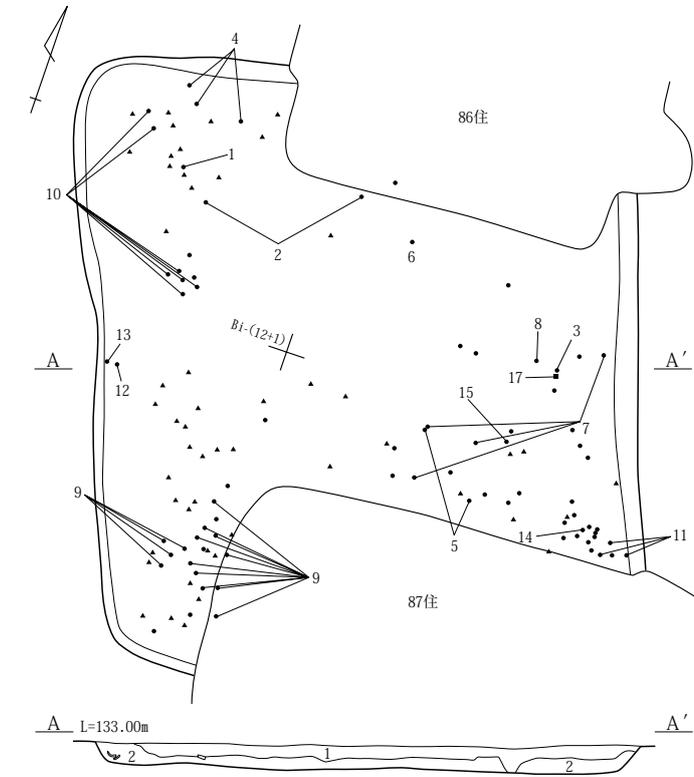
G-G'
1 黄褐色土 XII層土と比較してやや暗色を呈する。

第923図 116号住居掘り方・出土遺物

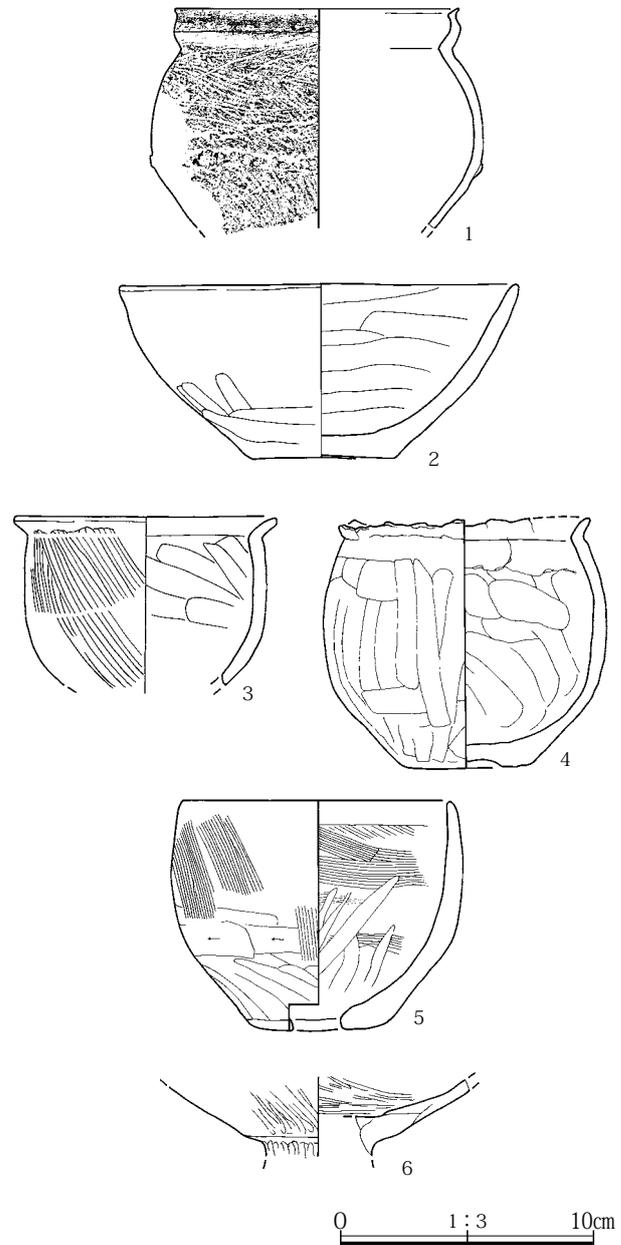
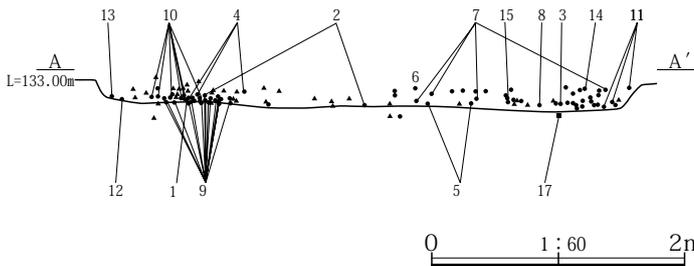
119号住居(第924・925図 P L.210・211・305・306)

位置：Bh・Bi-11・12グリッド 形状：隅丸長方形 規模：4.90m×4.33m 残存深度：0.23m 主軸方位：N-20°-W 埋没土：As-Cを均一に含むXI層土主体で、XII層土ブロックの有無で上下2層に分層できた。柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：残存した各コーナー寄りに遺物が集中する傾向があり、礫の出土も目立っているが、多くは床面よりもかなり上位から出土したものであり、基本的には埋没過程において廃棄された状況を示している。壺(9)は南西コーナー部付近にまとまって出土した破片が接合したもので、甕(4・10)・鉢(2)は北西コーナー部、有孔鉢(5)・鉢(3)・壺(7)・鉄製品釘(17)は南東コーナー部近くから出土した。特筆されるのは、北

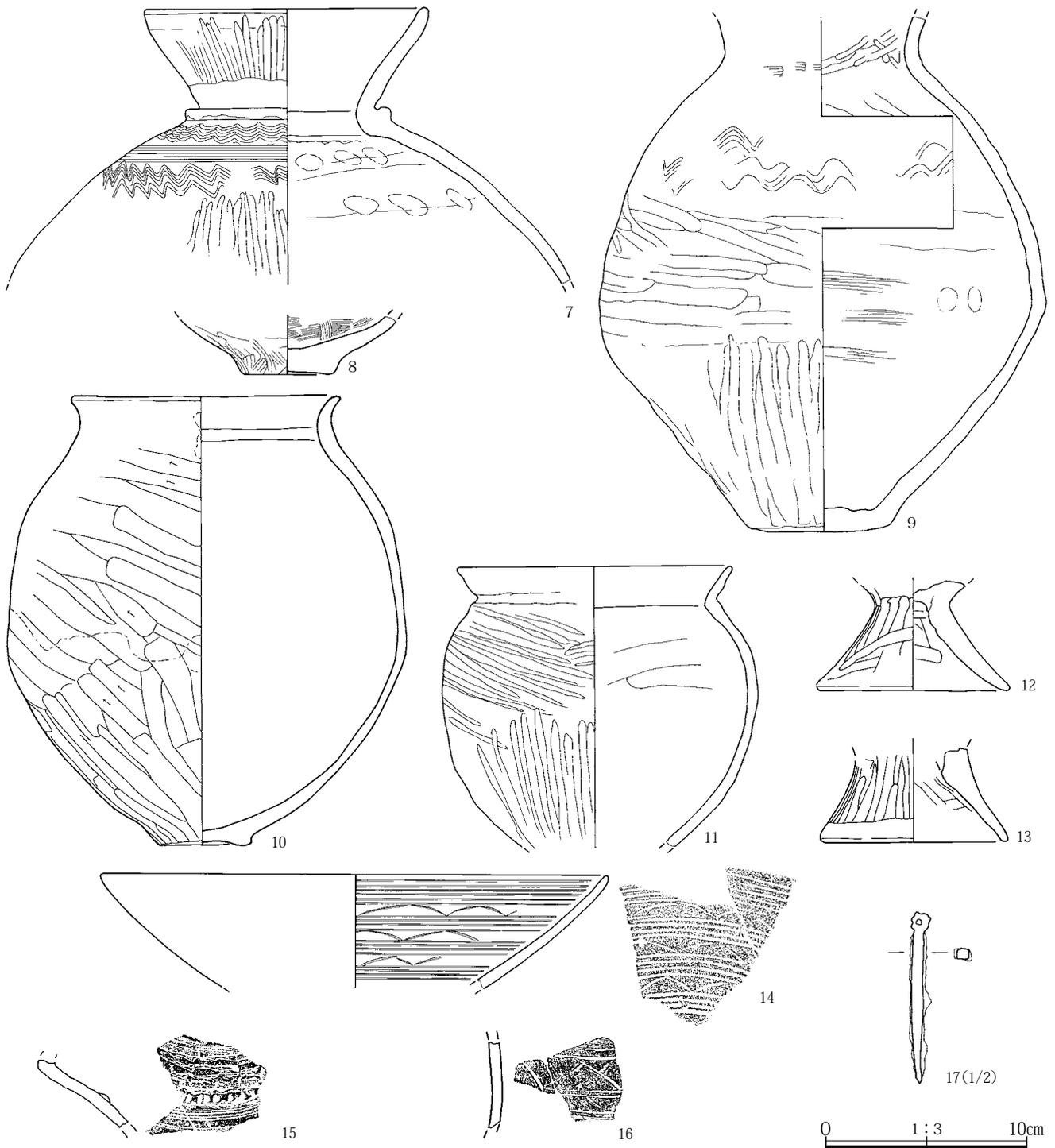
西コーナー部近くの床面から4cmほど上位から1の手焙り形土器の破片が出土したことであり、今回の調査では唯一の出土である。重複：86・87号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から119号住居→86・87号住居である。所見：XII層土中で平面確認を行い、As-Cの有無を目安にして比較的容易に平面形が捉えられた。床面はXII層土中に構築されており、掘り方は行われていない。床面の精査を行ったが、炉、柱穴、貯蔵穴になり得るような痕跡は検出することができなかった。柱穴については、予想される位置に井桁状にトレンチを掘削して断面で確認をしようとしたが、結果的に検出されなかった。 時期：3世紀後半



- A-A'
- 1 暗褐色土 As-Cを均一に含むXI層土で、しまりが強い。
 - 2 暗褐色土 As-Cを少量含むXI層土主体で、XII層土粒・小ブロックを少量含む。



第924図 119号住居・出土遺物(1)



第925図 119号住居出土遺物(2)

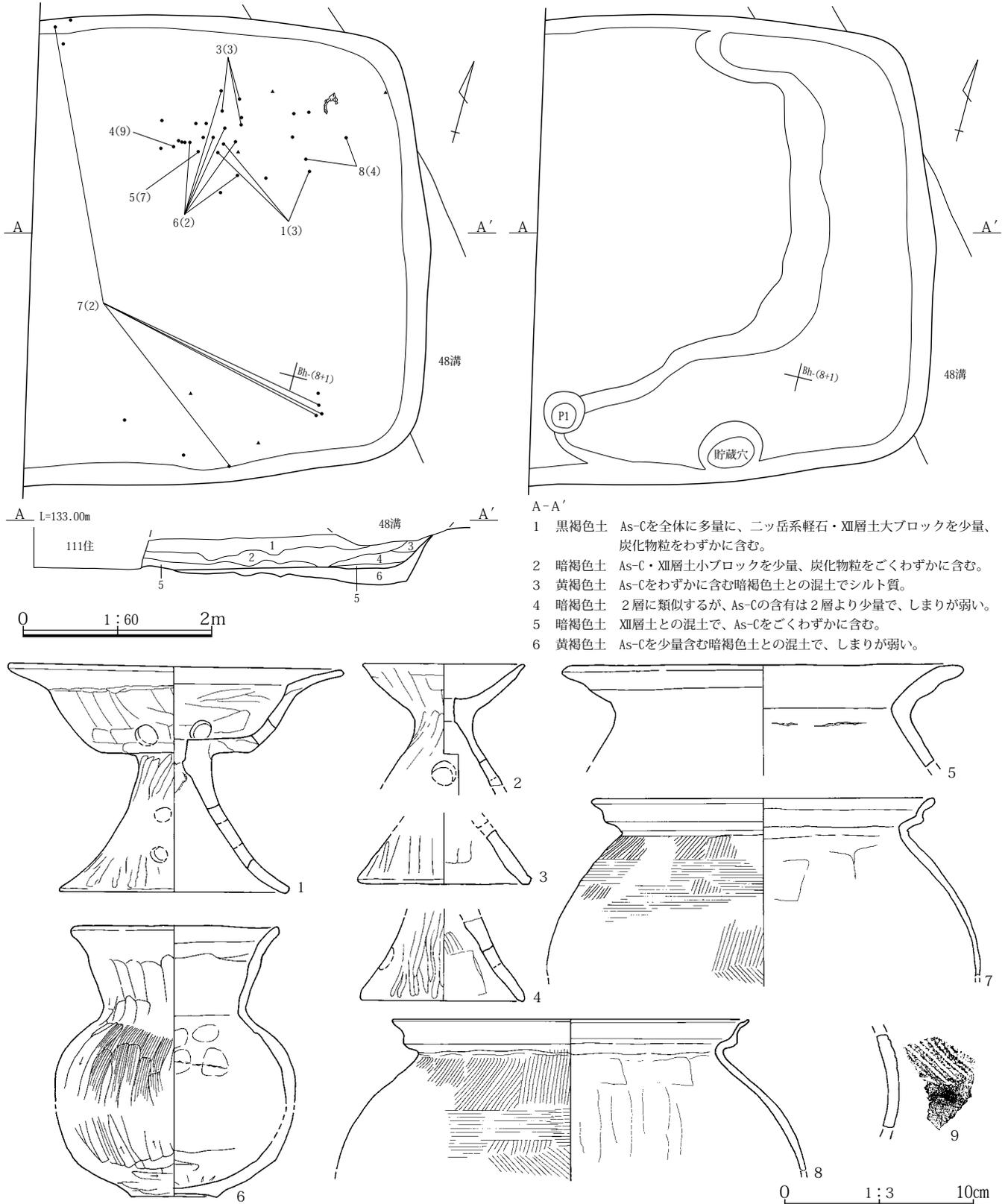
121号住居(第926図 P L.211・306)

位置：Bg・Bh- 7・8 グリッド 形状：隅丸長方形？
 規模：(4.22)m×4.95m 残存深度：0.34m 主軸方位：
 E-16°-N 埋没土：As-Cを微量に含むXI層土主体で、
 最上層には二ツ岳系軽石をごく微量に含む。 柱穴：未
 検出 炉：未検出 遺物：器台(4)・結合器台(1)・直
 口壺(6)・甕(5)・S字状口縁の台付甕(8)が北東コー
 ナー部分付近に集中して出土しているが、ほとんど細片化

したものである。他に、7のS字状口縁台付甕は、南東
 コーナー部分付近及び対角の位置にある北壁中央から出土
 した破片が接合した。西寄りについても遺物があった可
 能性は高いが、111号住居が礫層まで掘り込まれていた
 ため、この削平によって遺物は失われたものと思われる。
 重複：111号住居と重複しており、検出状況から121号住
 居→111号住居である。 所見：調査区の西端に検出し
 たもので、東側のほぼ1/2を調査したものと考えられる。

床面は平坦に検出されたが硬化面はなく、全体に掘り方が認められた。掘り方調査で南壁に接して東寄りの位置に0.70×0.55m、深さ0.26mの楕円形の貯蔵穴と思われる掘り込みを検出した。また、西寄りの位置にP1（径0.42m、深さ0.47m、円形）を検出したが、他にピット

は検出されていないことから柱穴とは考えられない。北東コーナー部近くの埋没土中層から、中央に向かって傾いた状態で炭化材が出土しており、住居廃絶後に焼失している可能性がある。 時期：4世紀前半



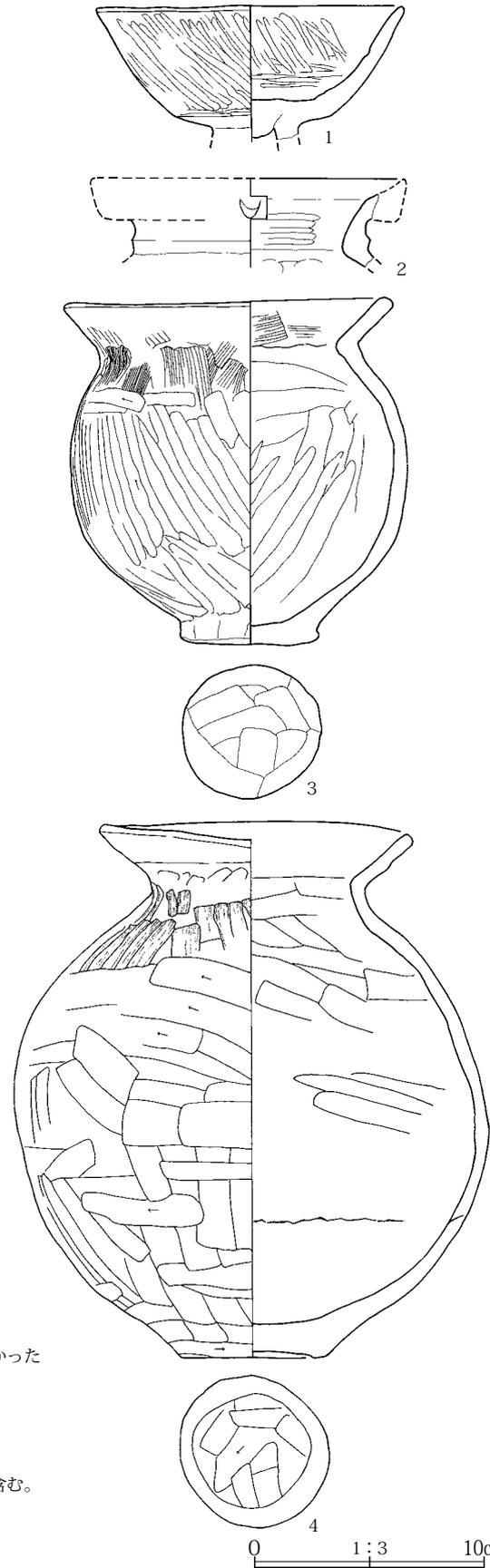
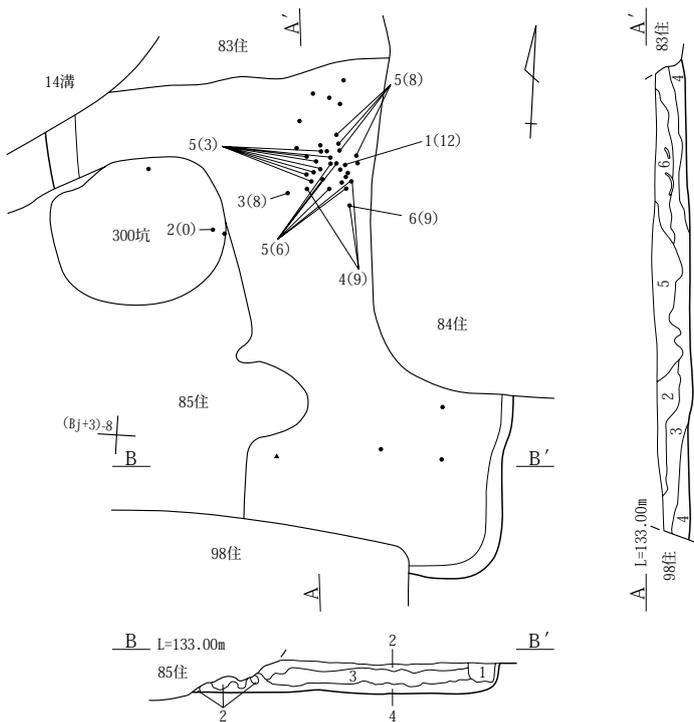
- A-A'
- 1 黒褐色土 As-Cを全体に多量に、二ツ岳系軽石・Ⅺ層土大ブロックを少量、炭化物粒をわずかに含む。
 - 2 暗褐色土 As-C・Ⅺ層土小ブロックを少量、炭化物粒をごくわずかに含む。
 - 3 黄褐色土 As-Cをわずかに含む暗褐色土との混土でシルト質。
 - 4 暗褐色土 2層に類似するが、As-Cの含有は2層より少量で、しまりが弱い。
 - 5 暗褐色土 Ⅺ層土との混土で、As-Cをごくわずかに含む。
 - 6 黄褐色土 As-Cを少量含む暗褐色土との混土で、しまりが弱い。

第926図 121号住居・出土遺物

122号住居(第927・928図 P L.211・306)

位置：Bj・Bk- 7・8グリッド 形状：隅丸長方形？
 規模：(4.10)m×(3.83)m 残存深度：0.24m 主軸方位：N-2°-E 埋没土：上層はAs-C含有の少ないⅩⅠ層土主体であり、下層はⅩⅡ層土主体。柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：北寄りの一角の床面から15cmほど上位に高坏(1)・甕(3)・壺(4)・単口縁の台付甕2点(5・6)が集中して出土した。床面に近い位置で出土した遺物は2の壺口縁部であるが、これも300号土坑の掘削されていた位置であり、攪乱されている可能性がある。重複：83・84・85a・85b・98号住居及び14号溝と重複しており、検出状況及び出土遺物から122号住居→83・84・85a・85b・98号住居・14号溝である。所見：ⅩⅡ層土中で平面確認し、重複する遺構が多いため壁の大半は失われており、南東コーナー部及び西壁のごく一部を検出した。床面はⅩⅡ層土を直接に床面として掘り残しており、検出部分において掘り方は認められない。床面精査を行った

が、炉、柱穴、貯蔵穴の痕跡も検出することはできなかった。 時期：5世紀前半

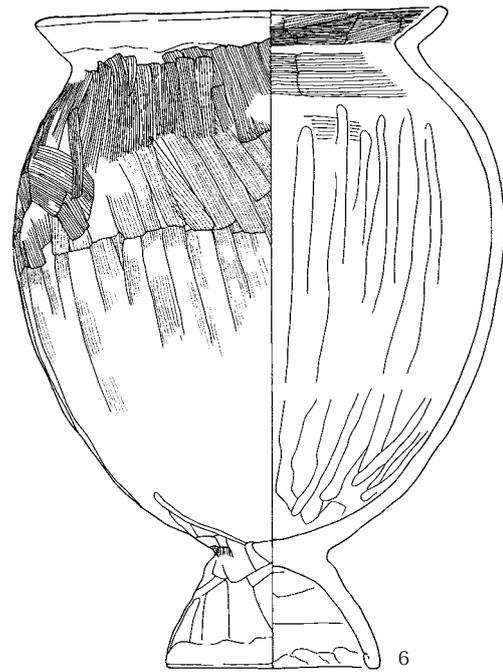
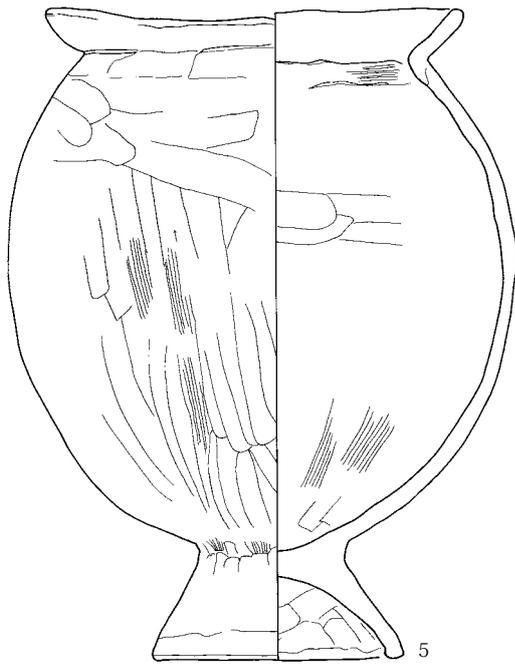


- A-A'・B-B'
- 1 暗褐色土 暗褐色土で、ⅩⅡ層土小ブロックを斑状に、As-Cを少量含み、やや黒味がかかった色調を呈する。
 - 2 暗褐色土 As-Cを多量に、ⅩⅡ層土小ブロックを少量含む。シルト質土。
 - 3 黄褐色土 ⅩⅡ層土と暗褐色土の混土で、As-Cを少量含む。
 - 4 黄褐色土 ⅩⅡ層土主体で、暗褐色土の小ブロックを含み、As-Cをごくわずかに含む。
 - 5 黒褐色土 ⅩⅡ層土大ブロックを含み、As-Cを全体に斑状に、ニッ岳系軽石をわずかに含む。
 - 6 黒褐色土 ⅩⅡ層土大ブロックを含み、As-C・ニッ岳系軽石をわずかに含む。

0 1:60 2m

0 1:3 10cm

第927図 122号住居・出土遺物(1)



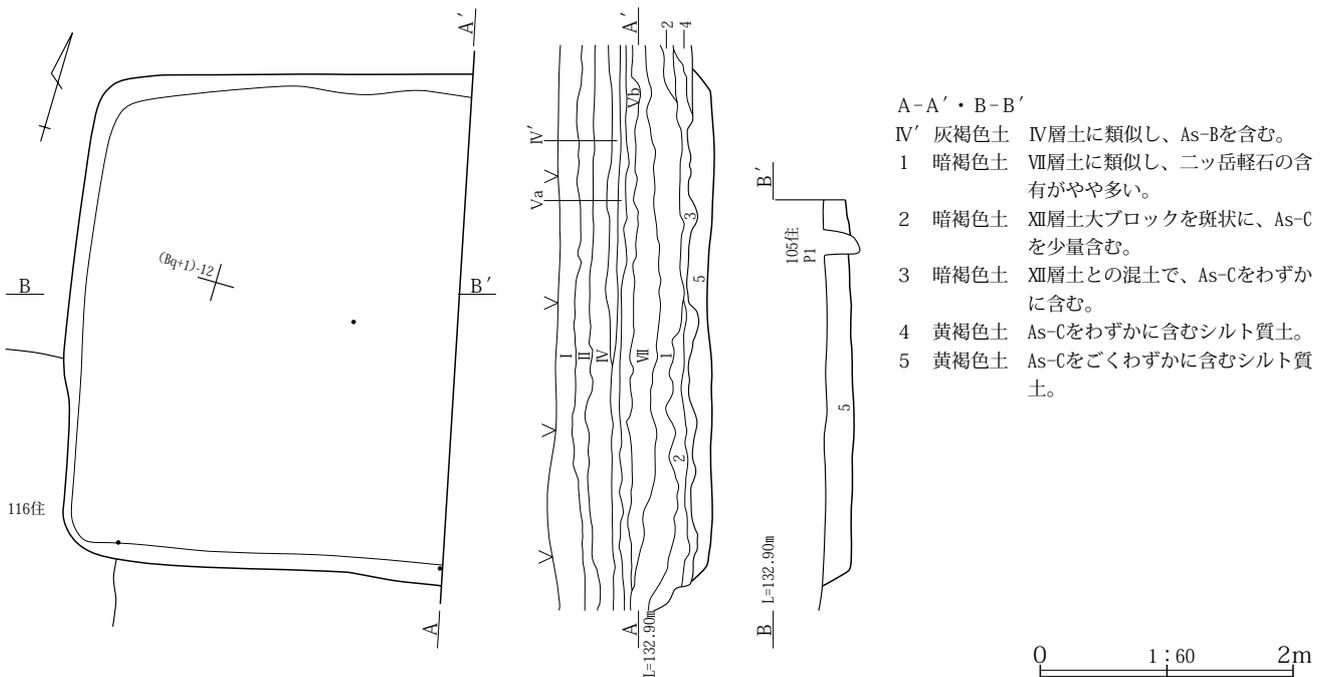
0 1:3 10cm

第928図 122号住居出土遺物(2)

124号住居(第929図 P L.211)

位置: Bp・Bq-11・12グリッド 形状: 隅丸長方形?
 規模: (3.00)m×4.07m 残存深度: 0.20m 主軸方位:
 E-17°-N 埋没土: As-Cを微量に含むⅫ層土。 柱
 穴: 未検出 炉: 未検出 遺物: 床面から17cmほど上位
 から3点の土器小片が出土した。 重複: 105・116号住
 居と重複しており、検出状況及び残存状況から124号住

居→105・116号住居と考えられる。 所見: 105号住居
 の調査で床面にわずかにくすんだ色調の平面形が捉えら
 れ、105号住居の掘り方とは考えられなかったことから
 住居として扱った。また、埋没土中にわずかにAs-Cが確
 認できたことからI期として報告した。壁と床面はⅫ層
 土中に構築されており比較的良好に捉えることができた
 が、炉、柱穴、貯蔵穴は検出されず、遺物出土も他の住



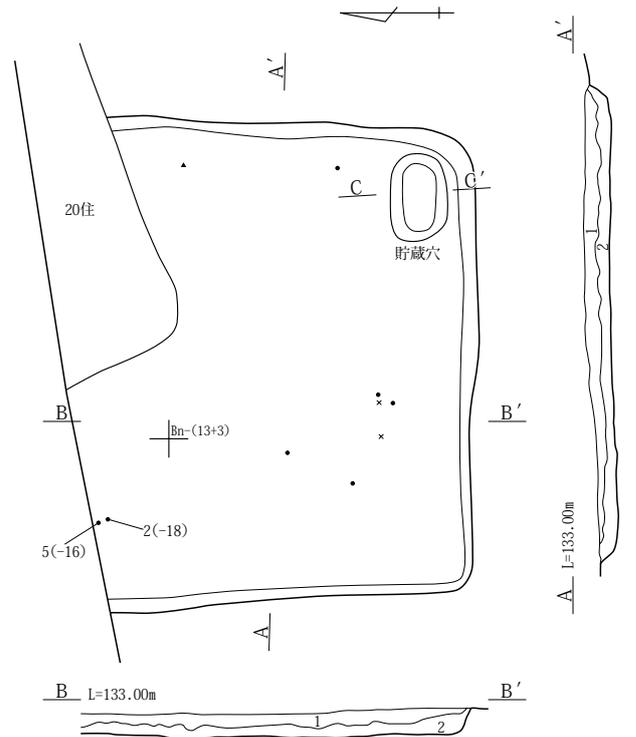
- A-A'・B-B'
- IV' 灰褐色土 IV層土に類似し、As-Bを含む。
 - 1 暗褐色土 VII層土に類似し、二ツ岳軽石の含有がやや多い。
 - 2 暗褐色土 Ⅻ層土大ブロックを斑状に、As-Cを少量含む。
 - 3 暗褐色土 Ⅻ層土との混土で、As-Cをわずかに含む。
 - 4 黄褐色土 As-Cをわずかに含むシルト質土。
 - 5 黄褐色土 As-Cをごくわずかに含むシルト質土。

第929図 124号住居

居と比較して極端に少なかった。柱穴については、105号住居とともにトレンチで断面確認をしたが、結果的に痕跡も検出することはできなかった。 時期：3世紀後半以前

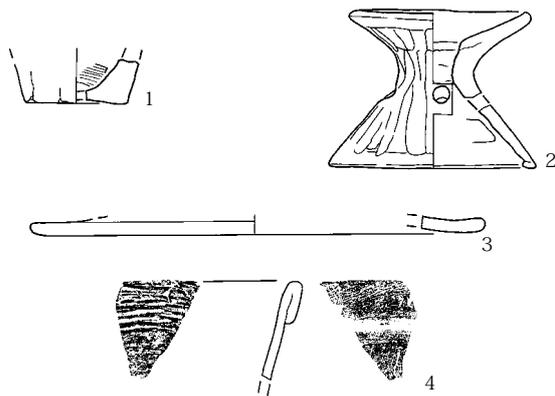
125号住居(第930図 P L.212・306)

位置：Bm・Bn-13グリッド 形状：隅丸方形？ 規模：3.80m×(3.21)m 残存深度：0.18m 主軸方位：E-1°-N 埋没土：As-Cをわずかに含むXI層土主体。 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：遺物出土はごく少なかったが、器台(2)・台付甕(5)は床面下から出土したものであり、住居の時期を示していると思われる。 重複：20号住居と重複しており、検出状況から125号住居→20号住居である。 所見：Ⅱ区とⅢ区の調査区境に位置しているが、Ⅱ区調査においては、まったく認識されていなかったことから、調査区の境に北壁が位置していたものであろう。床面はⅫ層土そのものであったため、掘り方は行われていないと判断した。しかし、2と5は床面として捉えた面よりも下位から出土しており、結果的には掘り方があったとしなければならないが、柱穴検出のためのトレンチ断面においても掘り方の及んだ範囲を捉えることはできなかった。貯蔵穴は、0.70×0.45m、深さ0.18mの楕円形の掘り込みとして南東コーナー部に検出した。 時期：4世紀前半



- A-A'・B-B'
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含むXI層土。
 - 2 黄褐色土 Ⅻ層土よりやや暗色を呈する。

- C-C'
- 1 暗褐色土 As-Cを少量含むXI層土。
 - 2 黄褐色土 Ⅻ層土よりやや暗色を呈する。



第930図 125号住居・出土遺物

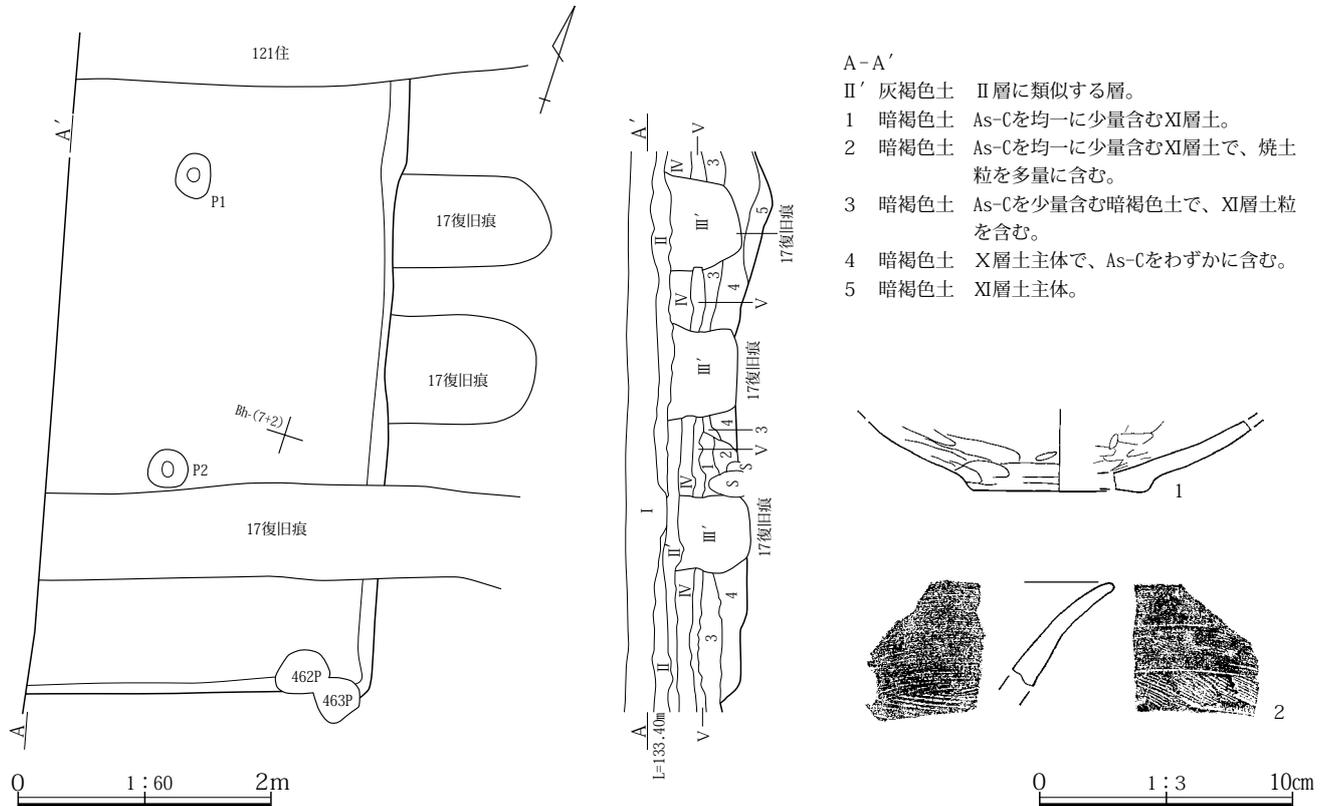
127号住居(第931図 P L.212)

位置：Bg・Bh- 6・7グリッド 形状：長方形？ 規模：(4.81)m×(2.74)m 残存深度：0.25m 主軸方位：N-13°-W 埋没土：As-Cを含む淡い色調のXI層土主体。 柱穴：P 1 (0.35×0.27m、深さ0.19m、楕円形)、P 2 (径0.31m、深さ0.34m、円形)、P 1-P 2間2.50mの

2カ所を柱穴と判断した。 炉：未検出 遺物：埋没土中からわずかに出土したが、実測に耐え得るものは2点だけであった。 重複：121号住居と重複しており、検出状況から127号住居→121号住居である。 所見：Ⅻ層土中で調査区の西端に検出したもので、北側は121号住居によって削平され、西側1/2は現有道路下になり調査

できなかった。また、17号復旧痕によって東西に攪乱されており、あまり良好な残存状態ではなかった。床面はやや濁ったⅫ層土中に構築されており、当初は掘り方があるものと予測したが、すぐ下は礫層であり掘り方は行われていなかったことが判明した。濁ったような土層は礫層の影響で形成された自然堆積層と考えられる。西壁

面の土層観察で、中央南寄りの位置に焼土と礫が検出され、埋没土の状況と礫の存在からカマド燃焼部の断面を検出したものと判断したが、平面形などを図化することもできず、土層断面以外に記録されなかったため遺構番号を付けなかった。 **時期**：3世紀後半～4世紀前半

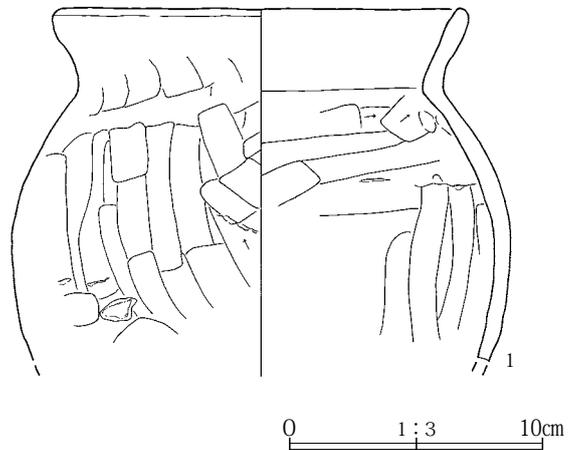


第931図 127号住居・出土遺物

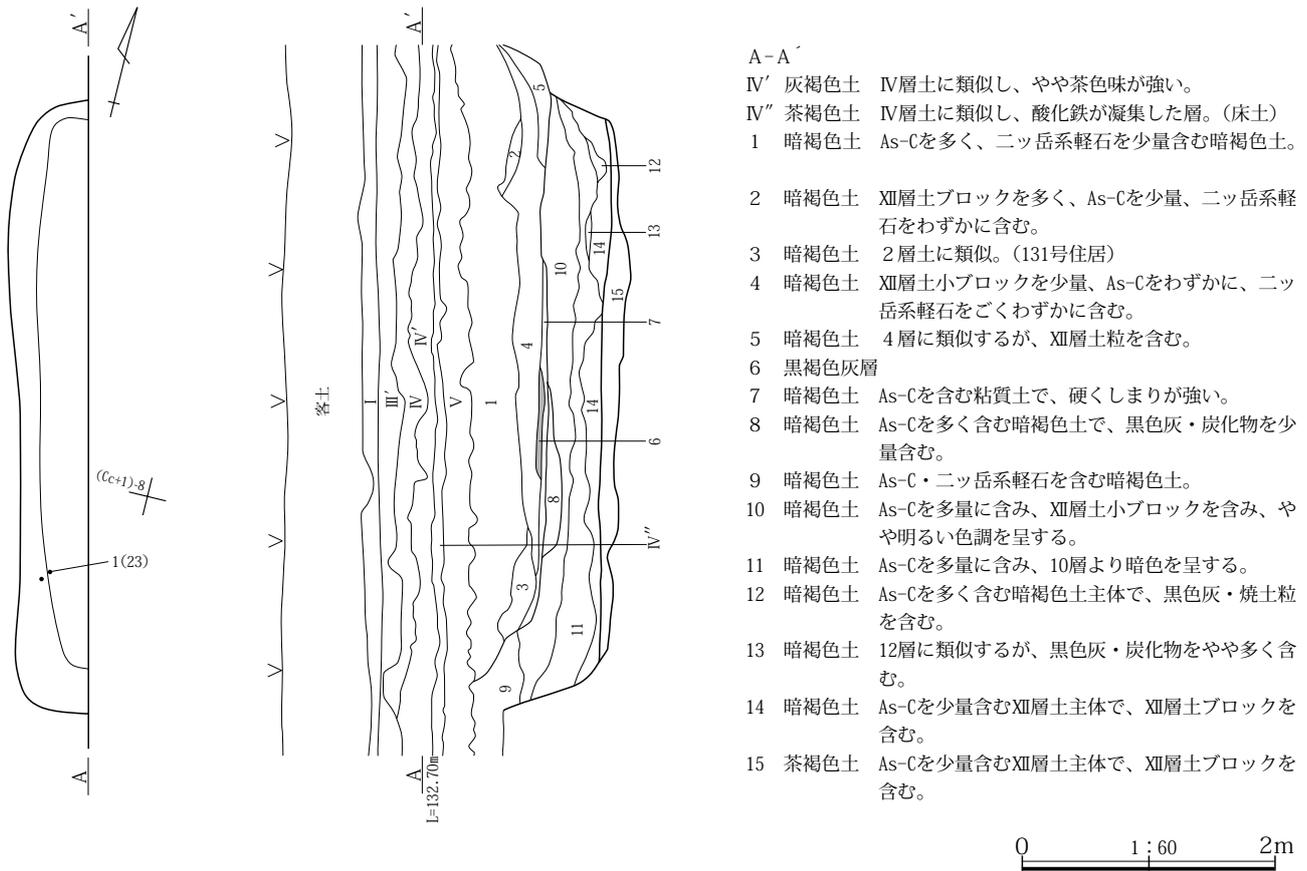
139号住居(第932・933図 P L.306)

位置：Cb・Cc- 7・8グリッド **形状**：隅丸方形？ **規模**：(0.53)m×4.86m **残存深度**：0.75m **主軸方位**：E-15°-N **埋没土**：やや淡い色調のⅨ層土主体で、Ⅻ層土小ブロックを含む。 **柱穴**：未検出 **炉**：未検出 **遺物**：南東コーナー部寄りの床面近くから1の甕が1点出土した。 **重複**：131号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物から139号住居→131号住居である。 **所見**：131号住居の掘り方調査時点で住居の存在を確認した。調査区の際であり、地表から1.7mほどの深さで確認されたものであるため、崩落の危険を考慮して調査区際までの検出を諦めた。したがって検出したのは西壁に沿ったごくわずかの範囲である。壁の残存は良好で、崩落による変形は検出部分においては見られなかった。床面は平坦であり全体に掘り方が行われたものと考えられ、Ⅻ

層土主体の土を充填して床面を構築している。東側の部分については、今後計画されている上武道路の発掘調査において明らかにされるはずである。 **時期**：4世紀前半



第932図 139号住居出土遺物



第933図 139号住居

(2) 溝

23号溝(第934図)

位置: Br・Bs- 0~2グリッド 規模: (12.95)m×0.15~0.33m 残存深度: 0.17m 走行方位: E-22°-N~N-5°-W 遺物: なし 所見: XII層土中で確認したもので、楕円形ピットが列状に連続した状況で検出されたが、溝状に掘削された最下部が残存したものと判断し溝として扱った。23号溝が検出された場所は、XII層土が南に延びる尾根状にやや高くなった場所の東側にあたり、南寄りの位置で鈍角に走行方向を変えている。埋没土下層のAs-C含有量が比較的多いが、純堆積層とは考えられないことからⅡ期とした。

26号溝(第934図)

位置: Br・Bs- 0グリッド 規模: 22.60m×0.30~0.62m 残存深度: 0.10m 走行方位: E-33°-N 遺物: なし 所見: XII層土中で検出したものであるが、検出された範囲がごく一部であり全体が判然としない。

30号溝(第935~938図 P L.213・307)

位置: Bk~Bp- 0~17グリッド 規模: 65.9m×2.82

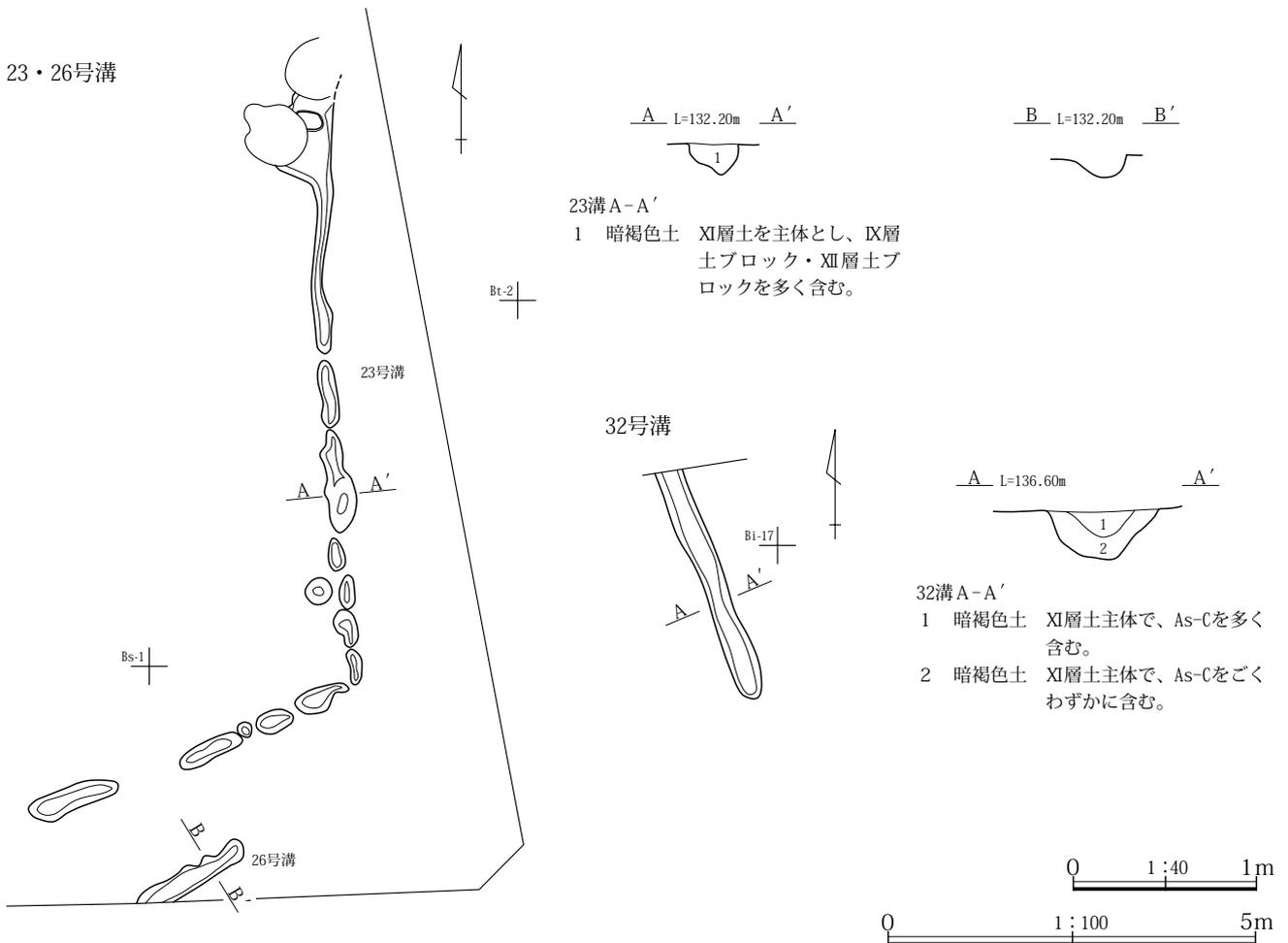
~3.50m 残存深度: 1.00m 走行方位: N-13°-W 遺物: 埋没土中からわずかに出土した。 所見: 幅20mほどの南北方向に形成された谷(1号低地)のほぼ中央に掘削された溝である。走行方位として計測した数値は、直線的な部分について示したもので、緩く蛇行しているもので一定していないが概ね南南東方向に走行しているものと思われる。谷の形成時期について確定することはできないが、XI層土は谷にそって堆積していることから、XII層土が堆積していく中で形成されたものと思われる。いずれにしても30号溝が掘削されていた時点では谷地形が存在していたはずで、その地形を利用して溝を掘削していることは明らかである。平面の確認は、谷の堆積土をXI~XII層土まで下げて行っており、Ⅱ・Ⅲ区では明瞭に検出することができた。北側の調査区で判明したことであるが、Ⅰ区南側の調査では溝の中層に堆積していた上下2層の黄褐色シルト層の上層をXII層土と見誤ったために、溝の存在そのものに気づかないまま調査を終了してしまった。谷は調査区を南北に貫いて検出されており、30号溝もさらに南に延びていることは明らかである。し

たがって、実際に調査したのは65.9mほどであるが、少なくとも90m近くの部分を明らかにすることができたはずである。断面形状は逆台形状を呈しており、底面幅は2m前後であり増減はない。底面の掘り方は平坦であり、壁も直線的に立ち上がっており、全体に丁寧な掘削が行われている。底面付近には緻密で粘性の強い黒褐色土が堆積しており、水的作用を受けて堆積したものと考えられるが、壁面や底面が水流によって抉られたような場所はない。また、ある程度の流速を想定させるような砂層の形成は認められないことから、流速のあまりない滞水していたような状況が想定される。しかし、前述のように中層に遺跡の基盤を形成している黄褐色シルトと見分けがつかないようなシルト層が形成されていることは、埋没過程で黄褐色シルトが流れ込むような洪水に少なくとも2回は見舞われたものと思われる。溝の掘削された時期については、As-Cの純堆積層と見られる層を掘り抜いている部分があることから、As-C降下後と考えられる。谷の底面平坦部に検出した7a号畑は、As-Cでサ

クが埋まった畑であるが、30号溝によって東側が壊されていることから確認することができる。しかし、30号溝の掘削以前に、谷の形成に関与した自然河川または30号溝よりも小規模な溝が存在していた可能性を考慮する必要がある。

32号溝(第934図)

位置: Bh-16・17グリッド **規模:** (3.34)m×0.40m
残存深度: 0.14m **走行方位:** N-22°-W **遺物:** なし **所見:** 2号畑に重複するように検出したもので、南側で途切れている。埋没土はAs-Cを含むXI層土であり、二ツ岳系軽石の混入がまったく認められないことから3面の遺構と判断した。北側は調査区外にまで及んでいるため、性格について特定することはできないが、水路でなかったことは確実であろう。遺構の規模は南側にある2号畑のサク部分にも類似しており、畑のサクの残存したものと見方も可能であるが、1条だけの検出であることから溝として報告した。



第934図 23・26・32号溝



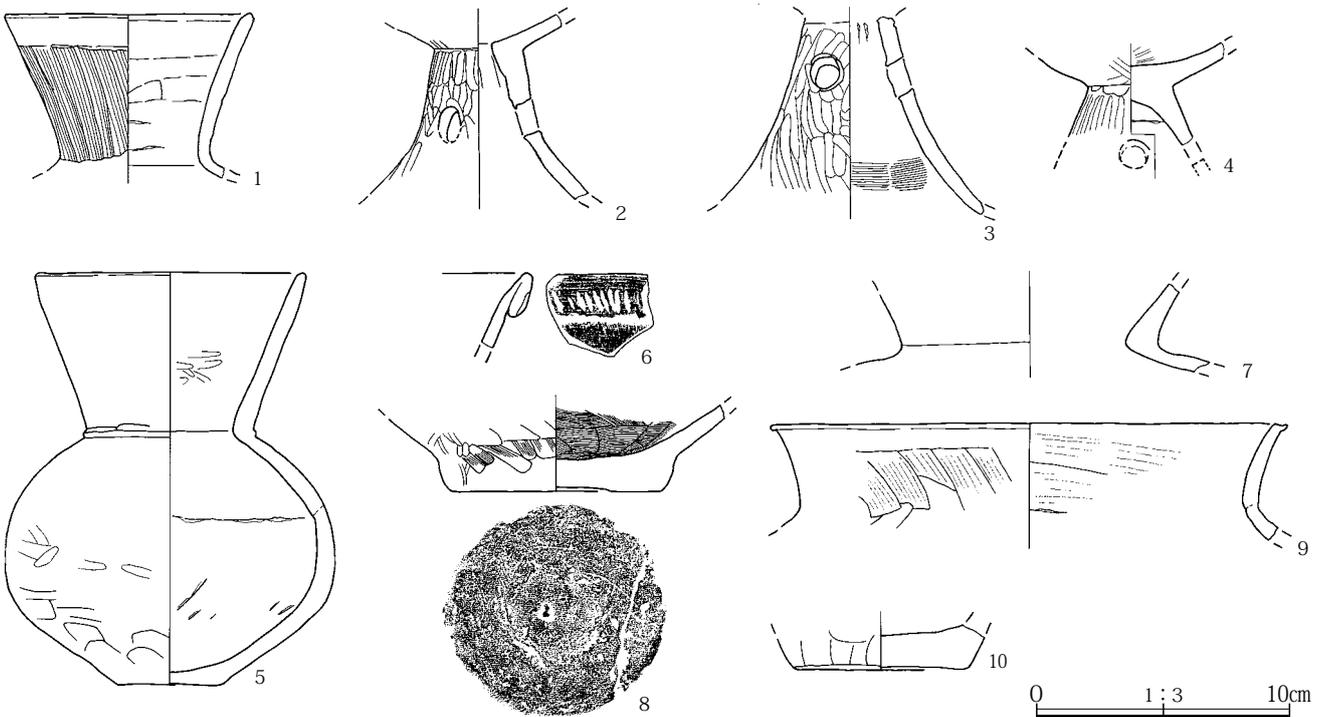
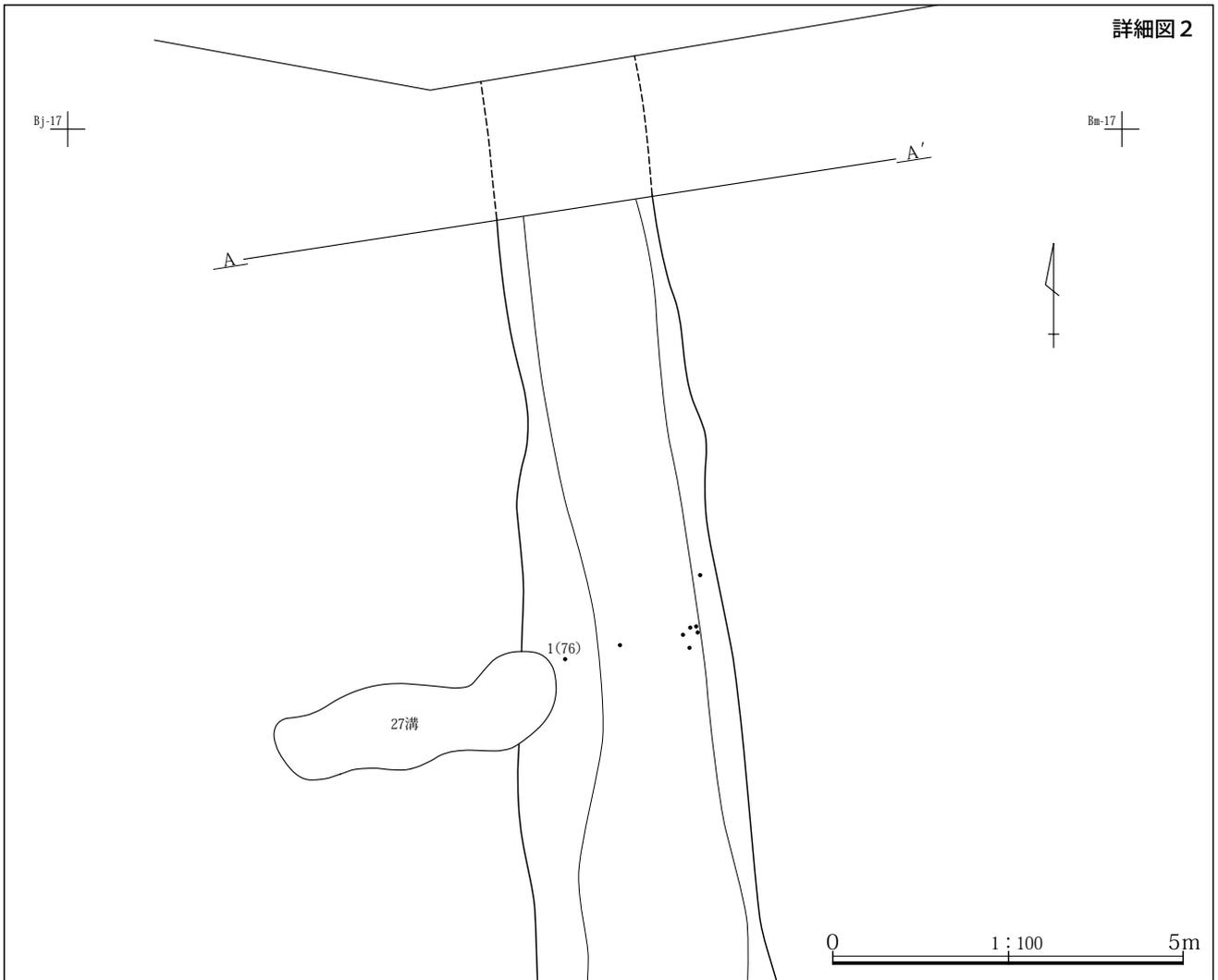
第935図 30号溝全体図

詳細図1

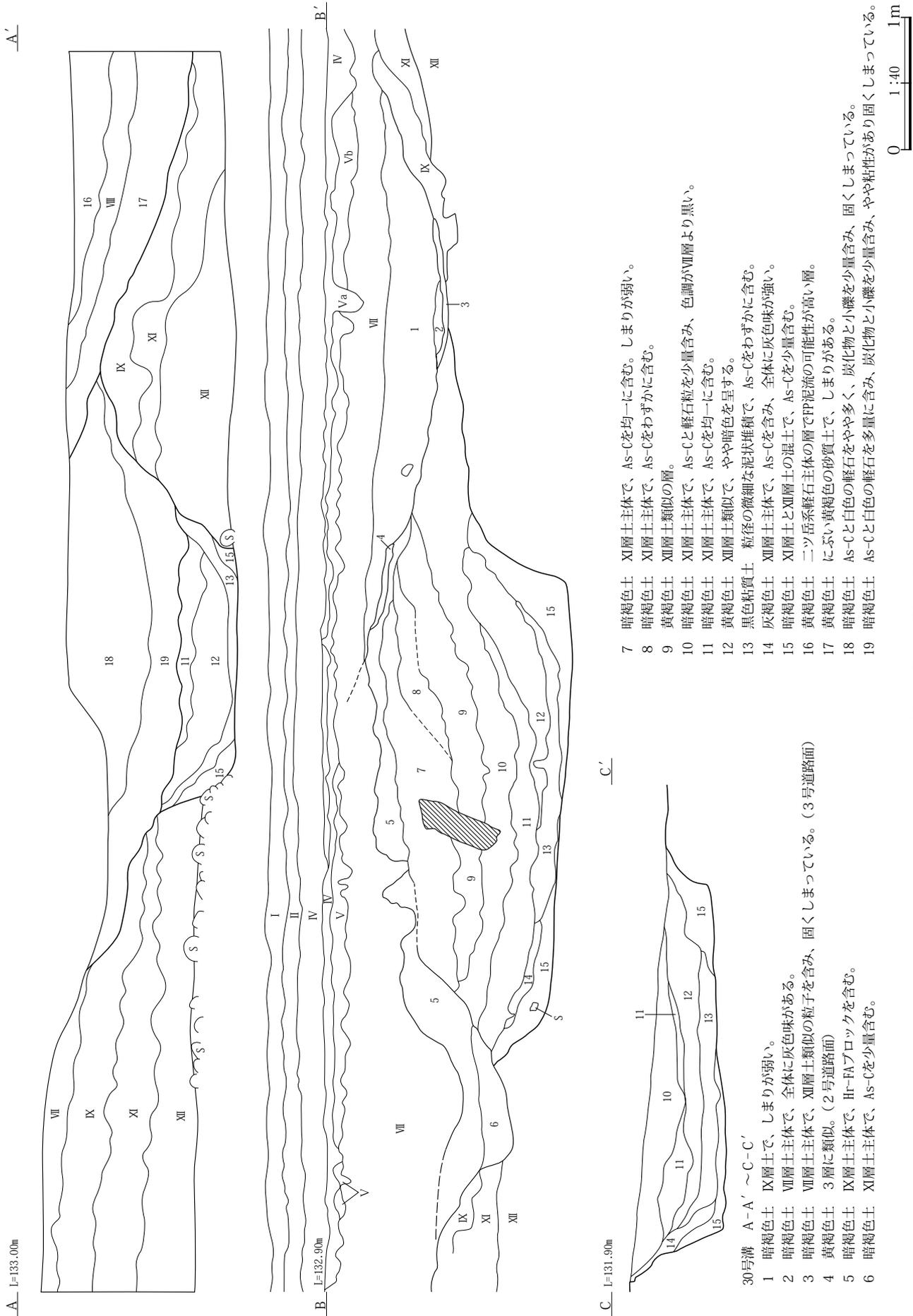


第936図 30号溝詳細図1

詳細図2



第937图 30号溝詳細図2・出土遺物



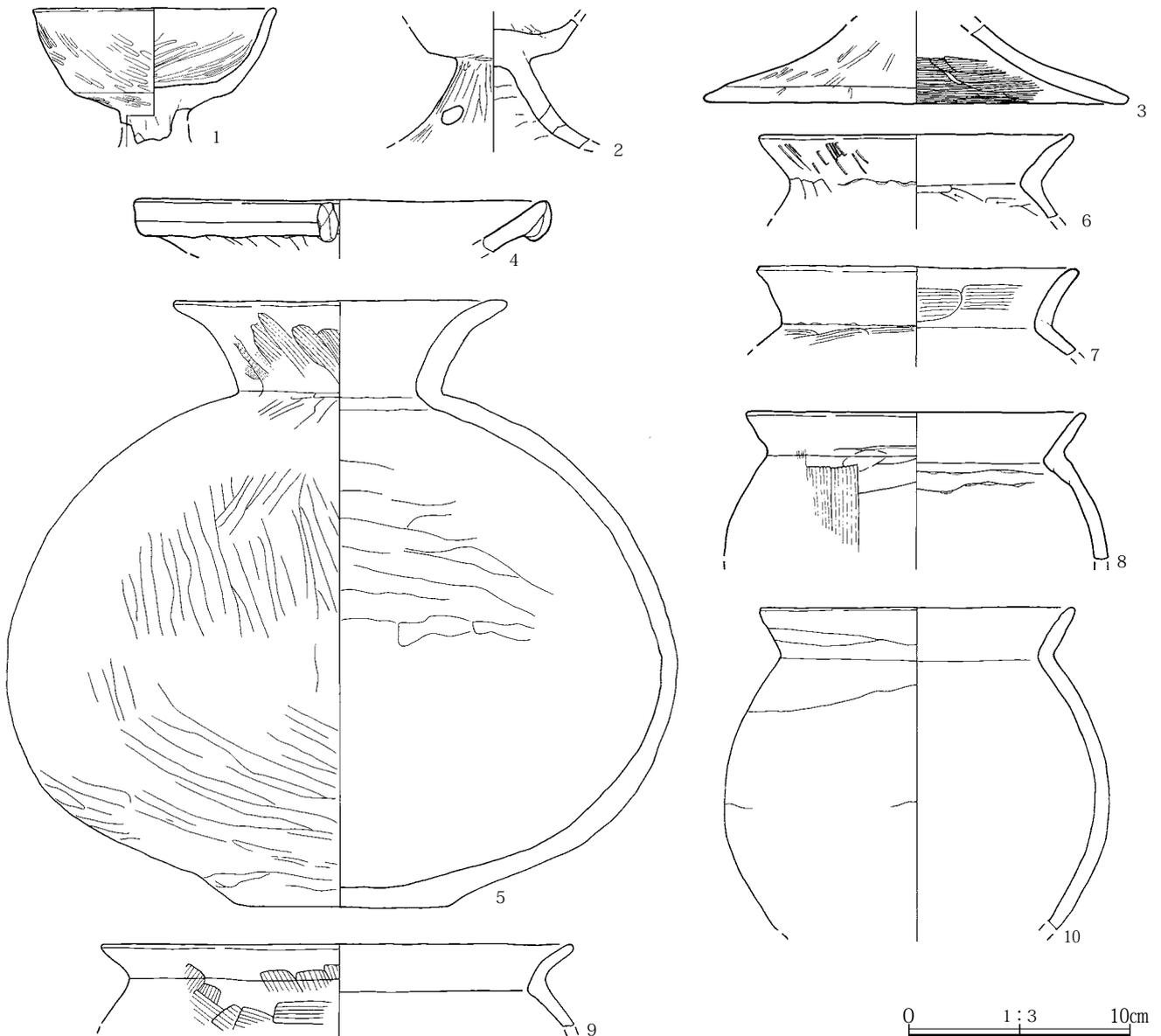
第938図 30号溝土層断面図

(3) 低地

1号低地(第939～941図 P L.307)

位置：Bg～Bs- 0～17グリッド 遺物：I区の調査において上層から、甕(9)・壺(5)・高坏(1)などが出土しているが、低地の埋没過程の中で周囲の住居などからもたらされたものと考えられる。 所見：I～III区を通して調査区を概ねN-17°-Wの方位で貫いている谷地である。中央部には30号溝がほぼ同一の方位で検出されている。谷地の幅は、両側平坦部の際までを計測すると17.50～24.80mほどあり、平坦部と谷地底面との比高は、西側で0.80～1.20m程度、東側は0.90～1.00mほどであり、東側に比べて西側はやや急傾斜である。東西ともに底面付近の緩傾斜部分には畑が検出されている。

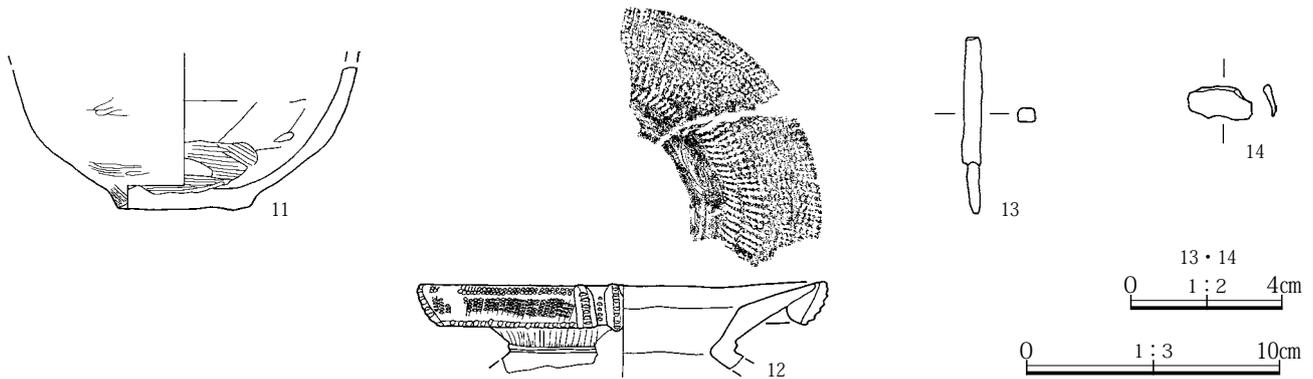
西側がほぼ直線的に検出されているのに対して、東側は調査区南寄りの位置で平坦部が南に向かって傾斜しており、谷地が東側に広がっていた可能性がある。谷地に30号溝が掘削されたのはAs-C降下後と考えられ、この30号溝を介して2度ほどの洪水の流入などで30号溝ともども谷地の埋没が進み、少なくともHr-FA泥流が発生した時点では流入しないほどに埋没していたものと思われる。また、I区の調査において上部から15号住居が検出されており、遅くとも7世紀後半の段階では竪穴住居が構築されるような平坦部となっていたものと考えられる。低地の規模からも想定されるように、人為的に掘削されたものではなく、桃ノ木川から枝分かれした小河川の痕跡であった可能性が高いのではないだろうか。



第 939 図 1号低地出土遺物(1)



第 940 図 1号低地全体図



第941図 1号低地出土遺物(2)

(4) 畑

1号畑(第943図)

位置:Be-Bg-15～17グリッド 検出サク数:5条 規模:
(1.40～4.35)m×0.26～0.55m 残存深度:0.09m
サク間幅:1.82～3.24m サク方位:N-11°-W
埋没土:IX層土主体で、部分的にAs-Cが集中。遺物:
小片が出土。重複:3号復旧痕によって一部削平され
ている。所見:調査区の北西部で検出したものである
が、XI～XII層土まで確認面を下げた段階でしか検出で
きなかったために、サクの残存が悪く、南北に検出したサ
クが連続するものであるのかどうかの判断もつかなか
った。また、サク間幅の異なる東側検出の1条のサクまで
を同じ畑として捉えたことも問題があるかもしれない。
サク内の埋没土は、基本的にはIX層土であるが、As-Cが
集中する部分が認められており、As-C降下後であっても、
あまり時間経過のない段階で埋没した可能性が高い。

2号畑(第942図)

位置:Bh-Bi-16・17グリッド 検出サク数:7条 規模:
1.57～3.92m×0.23～0.48m 残存深度:0.08～0.23
m サク間幅:0.93～1.27m サク方位:N-37°-
W 埋没土:As-Cをブロック状に含む。遺物:なし
重複:なし 所見:調査区北端に検出したもので、3号
低地への落ち際に位置しており、東側に向かって緩く傾
斜した面に畝立てされた畑である。検出状況から判断し
て、これ以上西側への展開はないものと思われるが、東
側は調査区外まで続いている可能性が高い。埋没土は、
As-Cがブロック状に入ったものであり、降下堆積したも
のとは考えにくいものの、あまり時間的経過のない中で
埋没したものと考えられ、1号畑と類似した状況が捉え
られることから近い時期の所産であろう。サク間幅は等

間隔に近く、平均すると1.06mほどになる。

5号畑(第943・946図 P L.213)

位置:Bo-Bp-5～7グリッド 検出サク数:7条 規
模:1.66～(3.75)m×0.26～0.50m 残存深度:0.04
～0.18m サク間幅:0.95～2.00m サク方位:E-
25°-N 埋没土:IX層土主体。遺物:耕作土中から
細片出土。重複:北寄り部分で71号住居と重複して
おり、遺構確認の状況から5号畑→71号住居と判断した。
所見:南北の谷部の東側斜面に、傾斜に平行するよう
な方向で畝立てされた畑である。サク間幅にはばらつき
が認められるが、1.50mほどの間隔の部分が多い。検出
したサクは短いものが多く、本来は東側の斜面上部へと
続いていたものが、後世の攪乱を受けて失われたもの
と考えられる。南側で6号畑と接しているが、サク幅が
狭いことから、容易に区別することができる。

6号畑(第943図 P L.213・214)

位置:Bo-Bp-4・5グリッド 検出サク数:5条 規
模:2.47～3.97m×0.16～0.28m 残存深度:0.08～0.13
m サク間幅:1.20m サク方位:E-24°-N 埋
没土:As-Cを均一に含むやや色調の明るいXI層土主体で、
周辺の色調に類似している。遺物:細片が出土。重複:
24号溝と重複し、検出状況から6号畑→24号溝と考え
られる。所見:I区北の調査で検出したもので、検出
できたサクの数が少ないことから、I区南側の調査部分
にも広がっていた可能性が高く、検出できないまま調査
を終了させてしまったものと考えられる。埋没土で記述
したとおり、検出面の色調と埋没土の色調が比較的近い
色調を呈しており、サクの平面形が捉えにくいものであ
ったが、As-Cの含有量がサク埋没土の方が多かったこと
から、範囲を捉えることができた。検出した5条のサクの

うち3条は、1.20mほどの間隔で平行しているが、北から3番目のサクは、中間に掘削されており、先の4条とは同時期のものではなく、畝替えされた可能性がある。

7b号畑(第944・945図 P L.214・307)

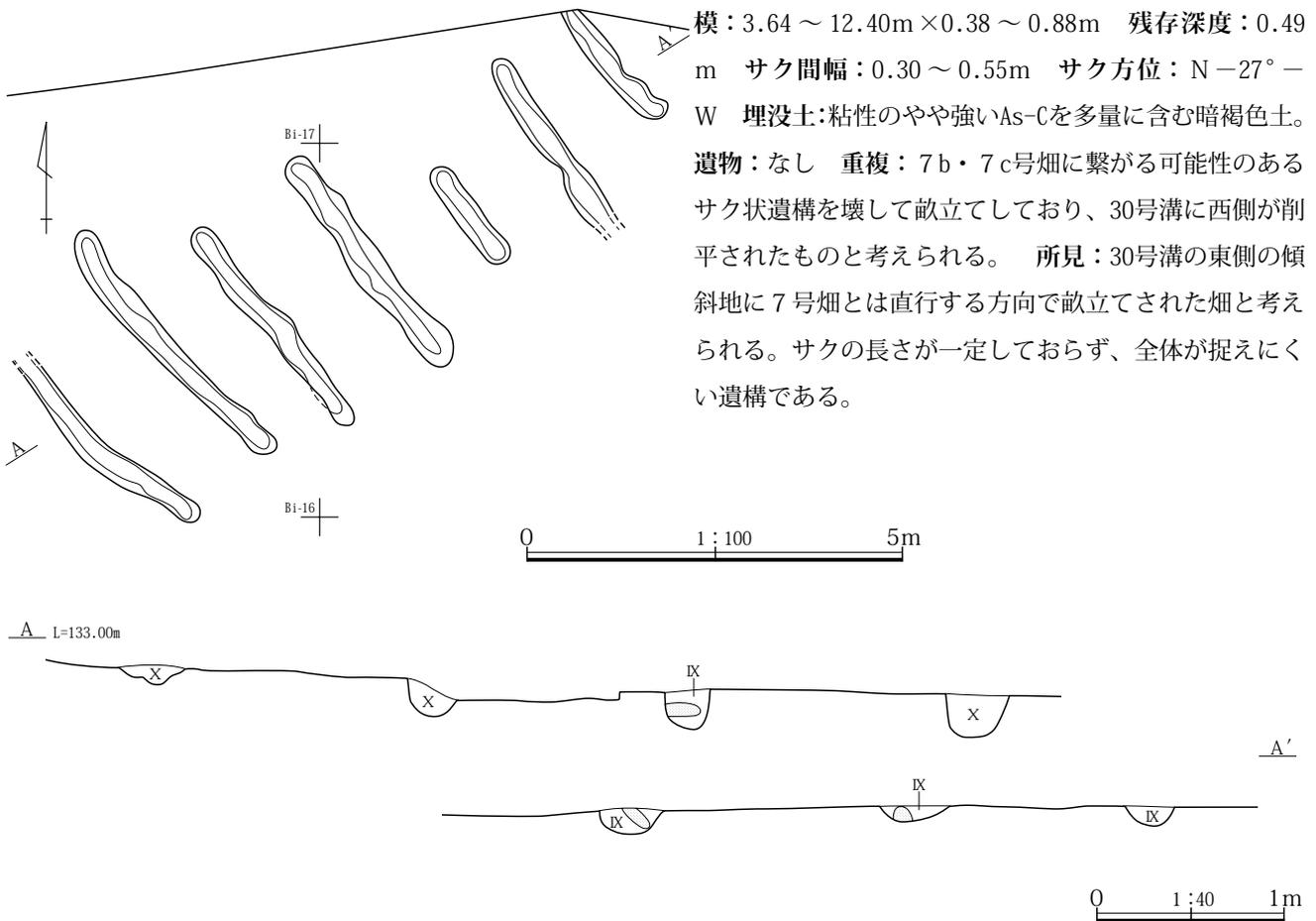
位置: Bk ~ Bm- 7 ~ 10グリッド **検出サク数:** 10条
規模: (2.00 ~ 5.95)m × 0.27 ~ 0.88m **残存深度:** 0.21 ~ 0.32m **サク間幅:** 1.40 ~ 1.80m **サク方位:** E - 19° - N **埋没土:** As-C含有の少ないIX層土類似の土を主体としているが、下部にAs-Cブロックが入るサクもある。
遺物: 耕作土中からわずかに出土。 **重複:** 7a・7c・9号畑、30号溝と重複し、検出状況から9号畑→7a号畑→7b号畑→7c号畑→30号溝と考えられる。 **所見:** 3面II期に記述した7a号畑に後続して耕作されたものと見られ、7a号畑南端のサクを削り込んで南側に畝立てされている。検出部分における畝幅は1.10 ~ 1.40mであり、7a号畑よりもさらに広い傾向がある。南寄りのサクの埋没土下層にブロック状のAs-Cが入っていることから、As-C降下後早い時期に耕作が開始されたものと思われる。

7c号畑(第944・945図 P L.214・307)

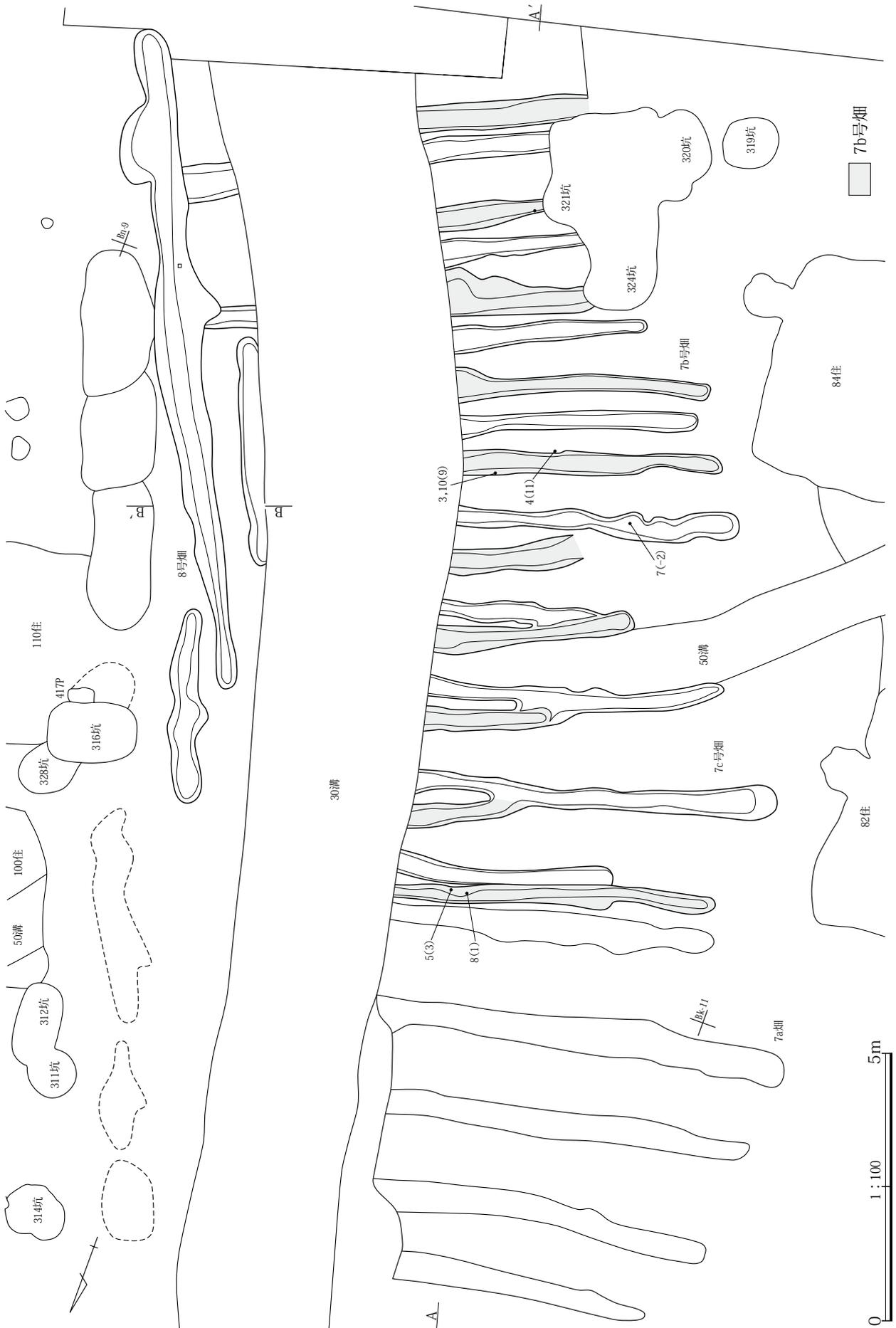
位置: Bk ~ Bm- 8 ~ 10グリッド **検出サク数:** 9条
規模: (2.34 ~ 6.67)m × 0.24 ~ 0.65m **残存深度:** 0.18 ~ 0.35m **サク間幅:** 1.60 ~ 1.90m **サク方位:** E - 17° - N **埋没土:** やや明るい色調のIX層土類似の土を主体としているが、下部にAs-Cをブロック状に含む。
遺物: 耕作土中からわずかに出土。 **重複:** 7a・7b・9号畑、30号溝と重複しており、検出状況及び埋没土の状況から9号畑→7a号畑→7b号畑→7c号畑→30号溝と考えられる。 **所見:** 7b号畑より0.50 ~ 0.60m南にずれる位置に畝立てされたもので、畝幅は、1.20 ~ 1.40mと7b号畑とほぼ同じ間隔である。南寄りのサクの埋没土下層にブロック状のAs-Cが入っており、7b号畑の状況と同様にAs-Cが均一に攪拌される以前の段階で畝立てされたものと思われる。7a号畑でも記述したとおり、サク埋没土上層は7a号畑の埋没土上層に類似することから、一連の畝立てが北にまで及んでいた可能性がある。

8号畑(第944・945図 P L.214)

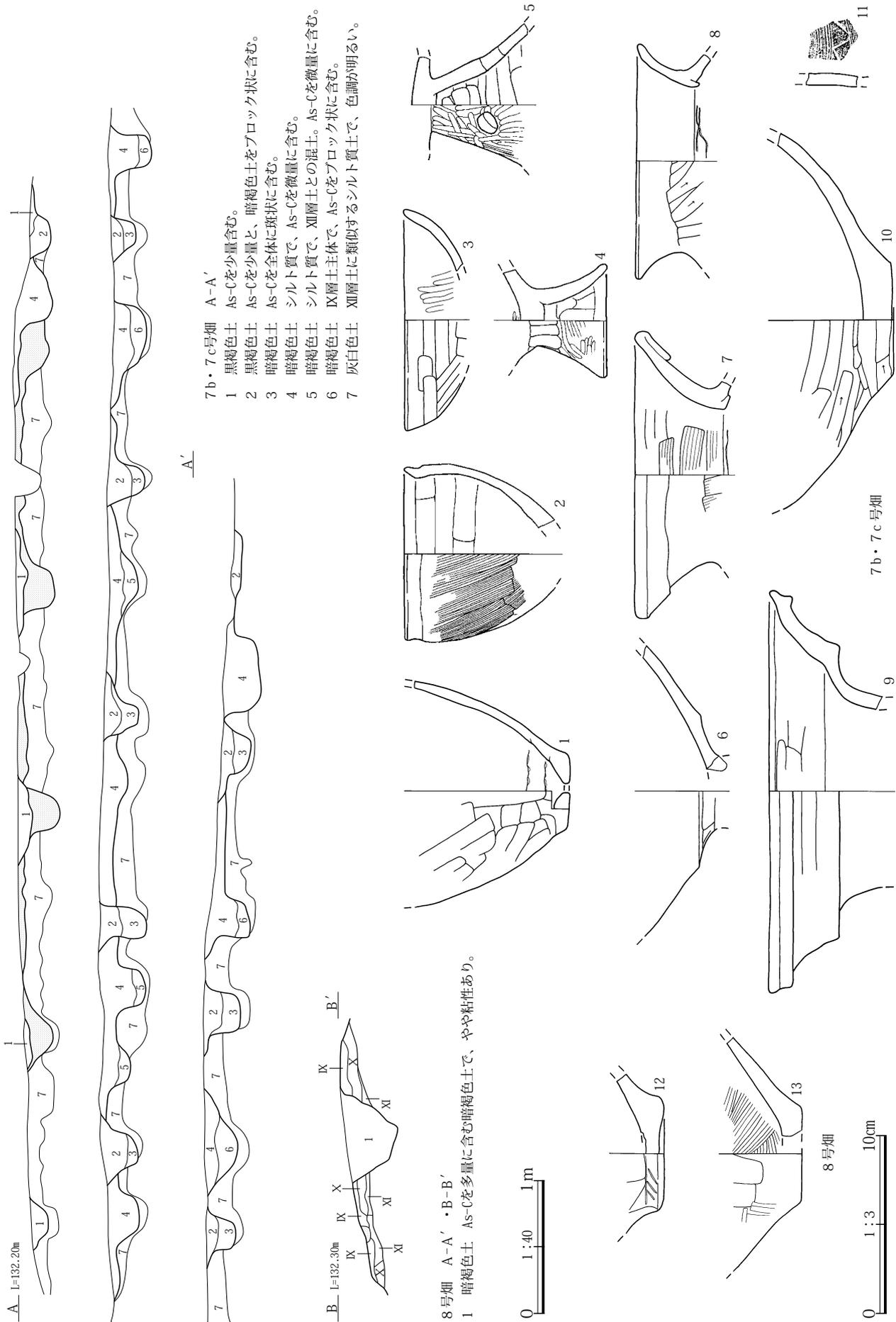
位置: Bm・Bn- 8 ~ 10グリッド **検出サク数:** 3条 **規模:** 3.64 ~ 12.40m × 0.38 ~ 0.88m **残存深度:** 0.49m **サク間幅:** 0.30 ~ 0.55m **サク方位:** N - 27° - W **埋没土:** 粘性のやや強いAs-Cを多量に含む暗褐色土。
遺物: なし **重複:** 7b・7c号畑に繋がる可能性のあるサク状遺構を壊して畝立てしており、30号溝に西側が削平されたものと考えられる。 **所見:** 30号溝の東側の傾斜地に7号畑とは直行する方向で畝立てされた畑と考えられる。サクの長さが一定しておらず、全体が捉えにくい遺構である。



第942図 2号畑



第944図 7b・7c・8号畑

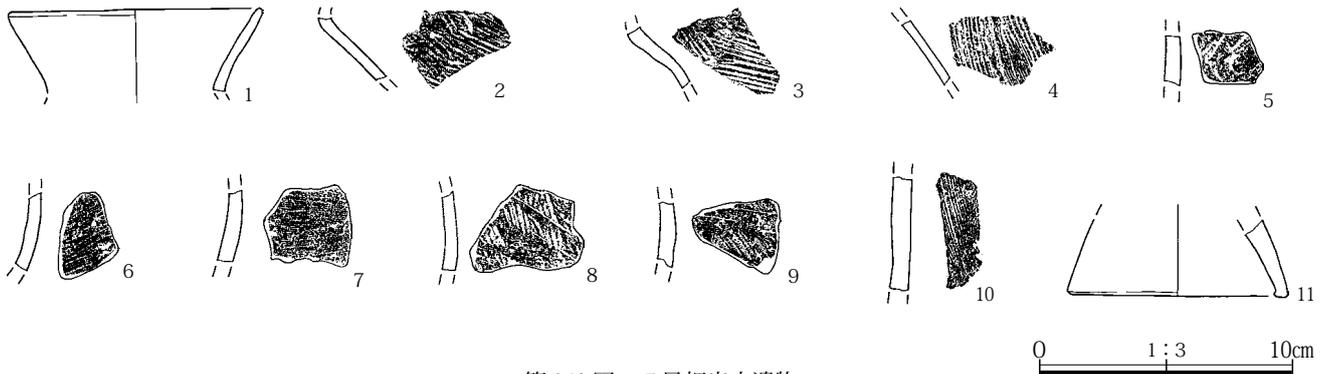


- 7b・7c号畑 A-A'
- 1 黒褐色土 As-Cを少量含む。
 - 2 黒褐色土 As-Cを少量と、暗褐色土をブロック状に含む。
 - 3 暗褐色土 As-Cを全体に斑状に含む。
 - 4 暗褐色土 シルト質で、As-Cを微量に含む。
 - 5 暗褐色土 シルト質との混土。As-Cを微量に含む。
 - 6 暗褐色土 IX層土主体で、As-Cをブロック状に含む。
 - 7 灰白色土 X層土に類似するシルト質土で、色調が明るい。

8号畑 A-A'・B-B'

1 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土で、やや粘性あり。

第945図 7b・7c・8号畑土層断面図・出土遺物



第946図 5号畑出土遺物

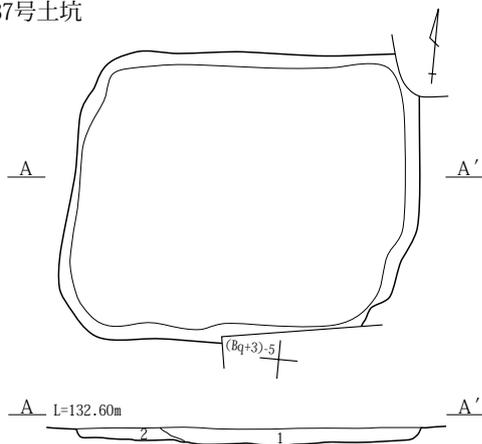
(5) 土坑

3面で検出した土坑はわずかであるが、個別の記載はせずに計測値等の基本的な項目の一覧を提示した。

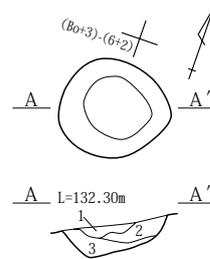
第24表 田口下田尻遺跡 I期土坑一覧表

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考	
193	土坑	948	307	Bj・Bk-15	不整楕円形	4.09×1.14×0.34	E-11°-N	土師器		
225	土坑		214	Bq-8	楕円形	1.20×0.59×0.32	N-22°-E			
230	土坑	949	214・307	Bp・Bq-6・7	隅丸長方形	4.40×4.07×0.36	E-12°-N	土師器		
235	土坑			Be-17	楕円形	0.98×0.98×0.21	N-18°-W			
237	土坑	947	214	Bq-5	隅丸長方形	2.71×2.25×0.13	E-5°-N	土師器		
240	土坑	947	214	Bo-6	円形	0.87×-×0.32				
259	土坑	948	214	Bh-9	不整円形	0.82×-×0.64				
260	土坑	948	214	Bh・Bi-9	不整円形	1.80×-×0.18				
289	土坑	949		Bf・Bg-11・12	円形	1.75×-×0.26				
290	土坑			Bg-11	楕円形	0.58×0.38×0.10	E-0°-N			
314	土坑			Bm-12	楕円形	0.98×0.70×0.75	N-13°-E	土師器壺		
325	土坑	949		Bn-11・12	不整円形	1.31×-×0.39				
327	土坑	949		Bn-12	楕円形	1.22×0.89×0.23	N-30°-W			
330	土坑	947		Bi-9	楕円形	0.85×0.60×0.36	E-15°-N			
376	土坑	949		Cc-4	円形	1.25×1.21×0.32				

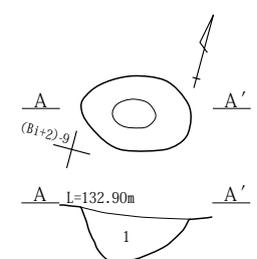
237号土坑



240号土坑



330号土坑



237号土坑 A-A'

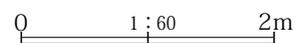
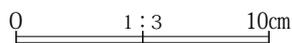
- 1 暗褐色土 VII層土主体で、炭化物をわずかに含み、にぶい黄褐色ブロックを含む。
- 2 にぶい黄褐色土 XII層土主体で、暗褐色ブロック・粒を多く含む。

240号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 IX層土主体。
- 2 暗褐色土 XII層土主体で、混合物は殆んどなし。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが、全体的にやや明るい色調を呈する。

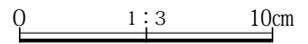
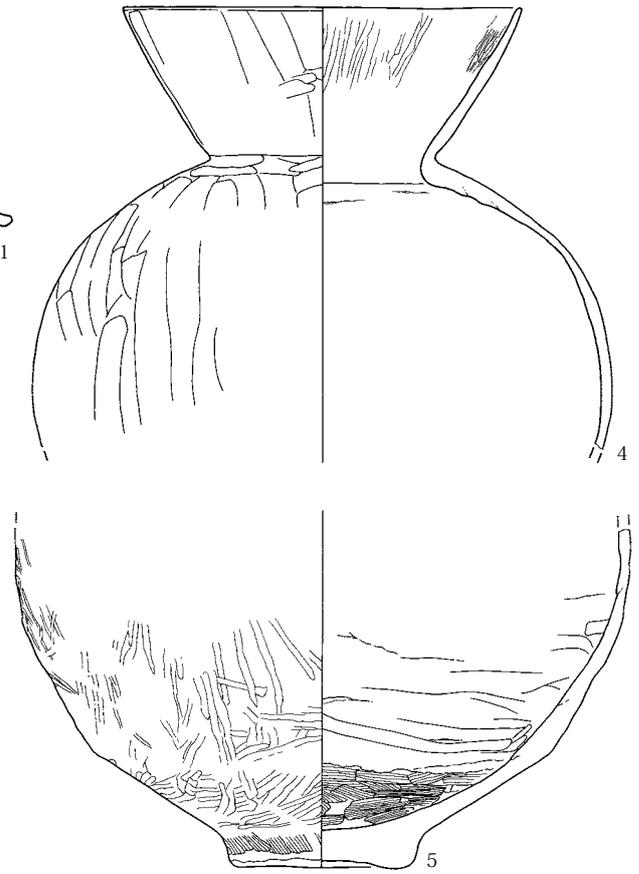
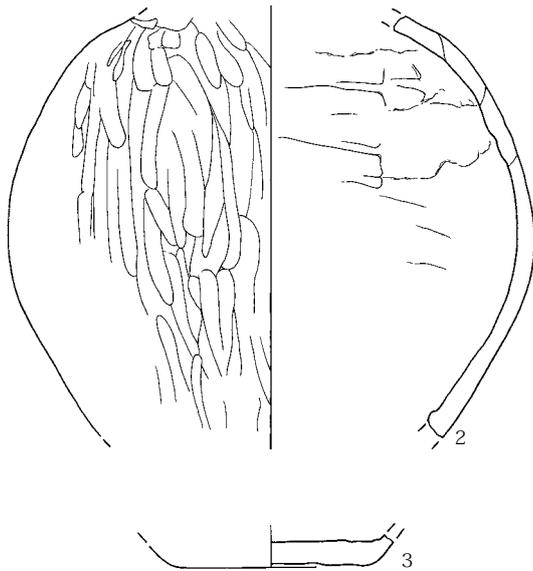
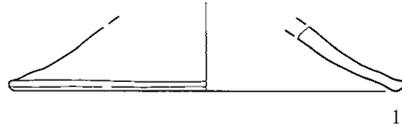
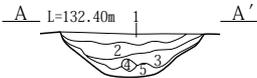
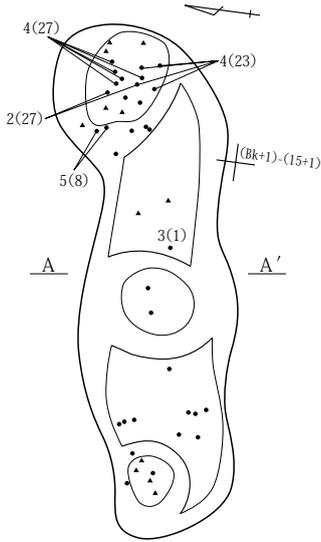
330号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土 シルト質で、XII層土との混土。As-Cを少量含む。しまり弱い。



第947図 237・240・330号土坑・出土遺物

193号土坑



193号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 IX層土。
- 2 暗褐色土 XI層土主体で、As-Cを多く、IX層土ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 XI層土主体で、As-Cを多く、IX層土ブロックを含む。
- 4 黒褐色土 IX層土ブロック。
- 5 黄褐色土 XII層土。

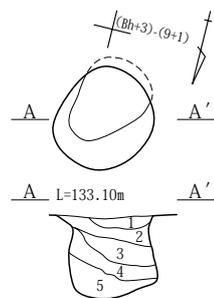
259号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土 シルト質で、XII層土の大ブロックを含み、褐色の粒子をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 シルト質で、XII層土の小ブロックを含み、炭化物の小ブロックをわずかに含む。
- 3 黒褐色土 シルト質で、XII層土の大ブロックを含み、炭化物の微粒・小粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 シルト質で、XII層土の小ブロック・大ブロックを含み、炭化物の微粒をわずかに含む。
- 5 暗褐色土 4層に類似するが、炭化物は含まない。

260号土坑 A-A'

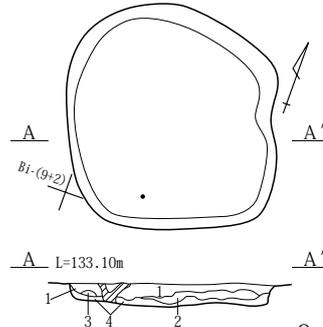
- 1 暗褐色土 XI層土を主体とし、XII層土の小ブロック・大ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 XI層土を主体とし、XII層土を斑状に含む。
- 3 暗褐色土 As-Cをごくわずかに含む。
- 4 暗褐色土 暗褐色土とXII層土の混土。

259号土坑

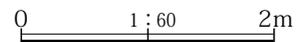


A-A' L=133.10m

260号土坑

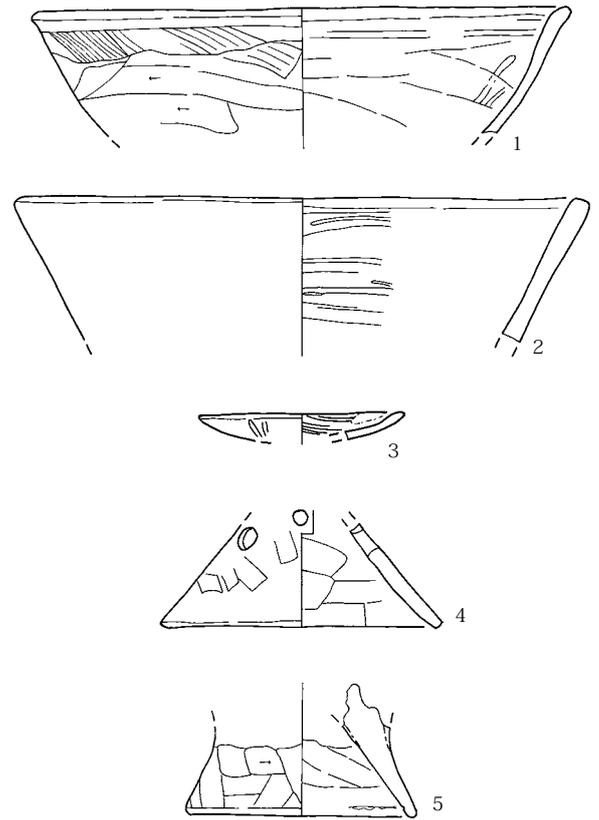
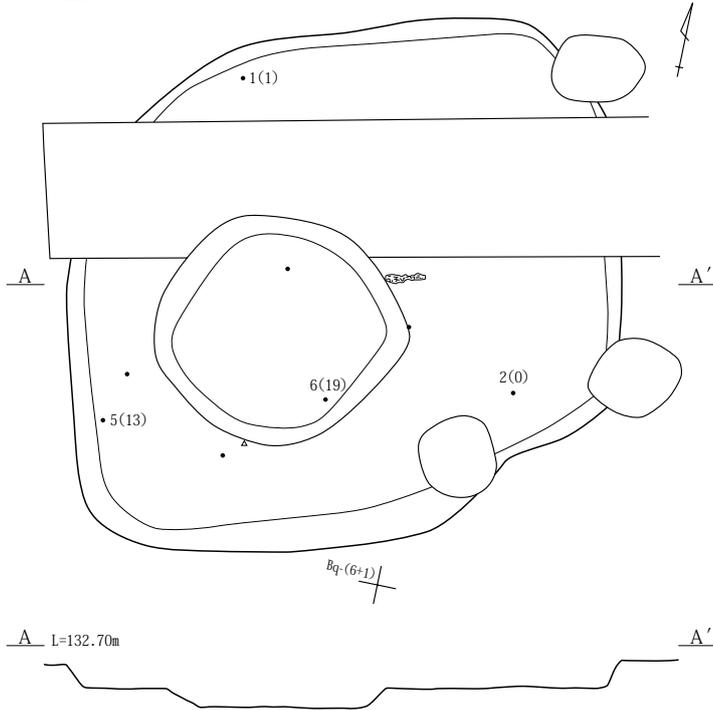


A-A' L=133.10m



第948図 193・259・260号土坑・出土遺物

230号土坑



289号土坑 A-A'

1 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色土。

325号土坑 A-A'

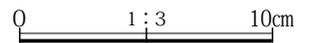
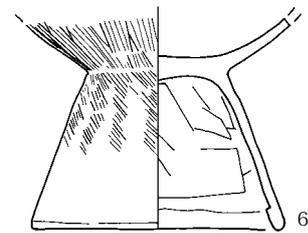
- 1 暗褐色土 シルト質で、As-Cをわずかに含み、XII層土の小ブロックを斑状に含む。
- 2 暗褐色土 シルト質で、XI層土との混土。

327号土坑 A-A'

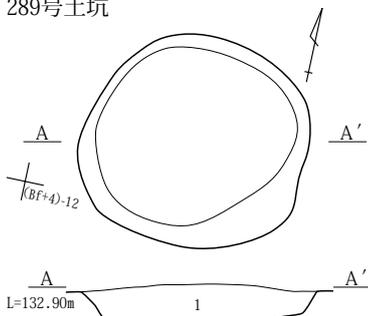
1 黄褐色土 シルト質で、As-Cをわずかに含む。

376号土坑 A-A'

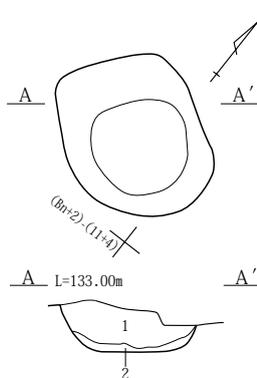
1 暗褐色土 As-Cを多量に含む(C混)暗褐色土主体で、XII層土小ブロックと炭化物を少量含む。



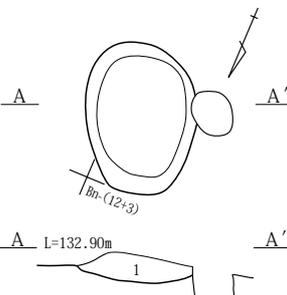
289号土坑



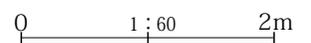
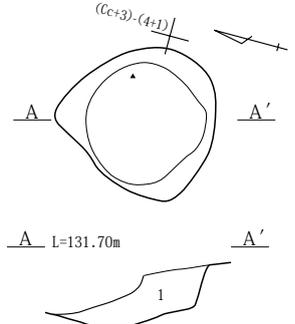
325号土坑



327号土坑



376号土坑



第949図 230・289・325・327・376号土坑・出土遺物

第2節 第Ⅱ期 (As-C 降下以前)

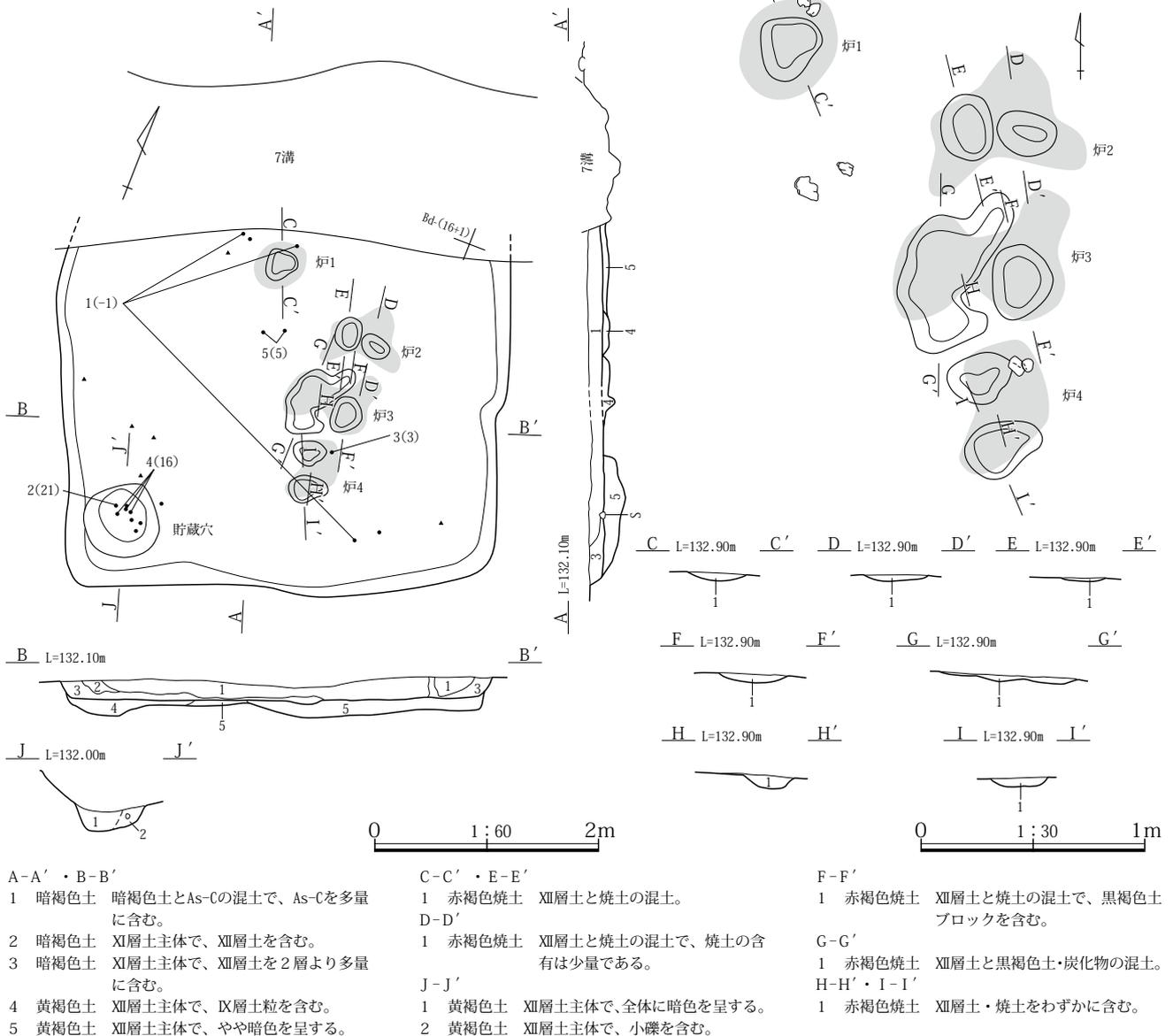
第1項 田口上田尻遺跡

(1) 竪穴住居

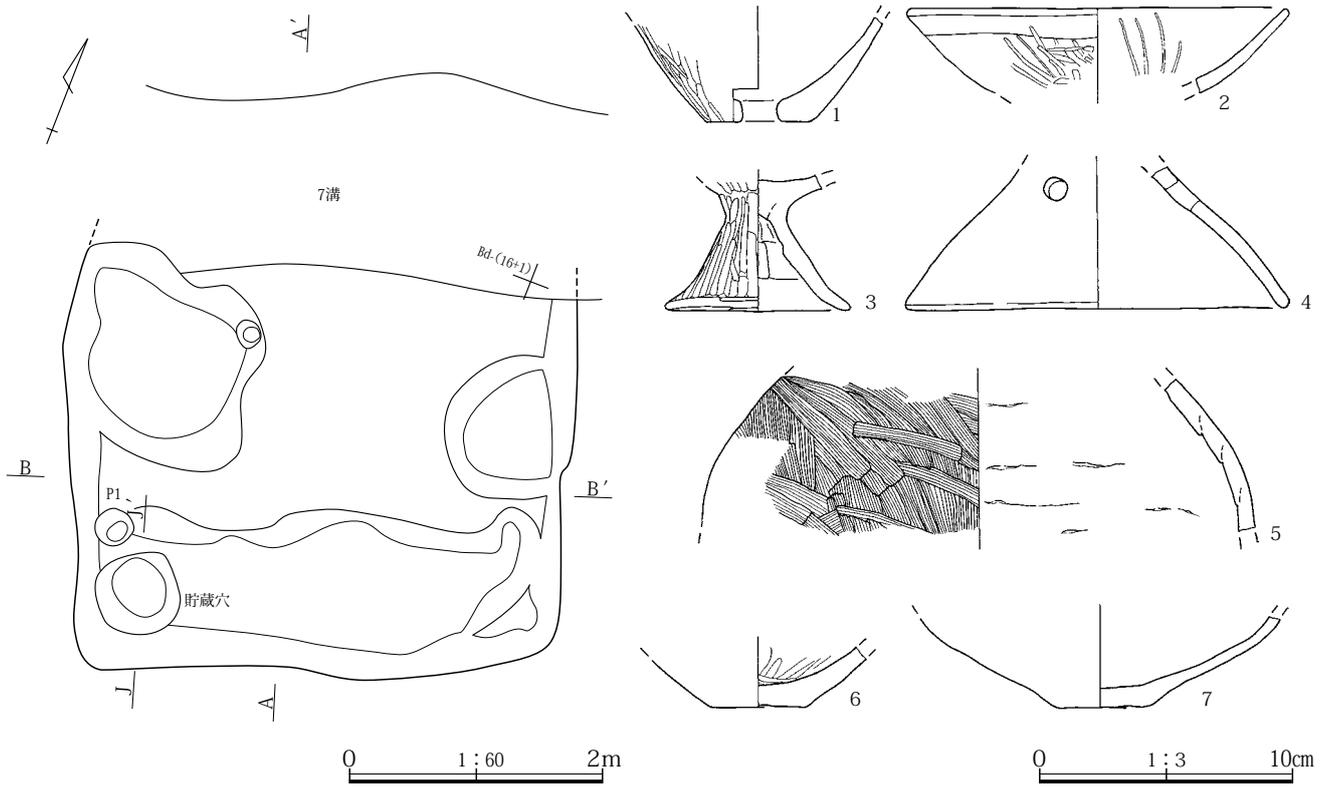
1号住居(第950・951図 P L.215・308)

位置: Bc・Bd-15・16グリッド **形状:** 方形 **規模:** (3.30)m×4.02m **残存深度:** 0.19m **主軸方位:** N-22°-W **埋没土:** 床面からわずかの間層を挟んでAs-Cの純層が堆積しており、これより上層についてもAs-Cの含有量が多い。**柱穴:** 掘り方の調査においても検出されていない。**炉:** 床面中央付近に南北に並んで4カ所黄褐色シルト質土が焼土化した面として検出した。**遺物:** 貯蔵穴上面から高杯(4)が出土した他、炉の周辺から壺

(5)・甕(1)などが出土した。**重複:** 北側が7号溝との重複で失われている。**所見:** 地形的にやや高い部分に位置しており、後世の削平を受けたものと見られ残存状況が良くない。床面は平坦であり、南西コーナー部に径0.54m、深さ0.25mほどの貯蔵穴と考えられる土坑を検出した。やや濁ったシルト質土が充填しており、この充填土中にAs-Cは全く認められない。掘り方の調査では、南壁際が1.3mほどの幅で掘り下げられていた他、東西壁に接して浅い窪み状の掘り方が行われており、貯蔵穴の北側にはP1(径0.30m、深さ0.14、円形)を検出した。**時期:** 3世紀後半



第950図 1号住居



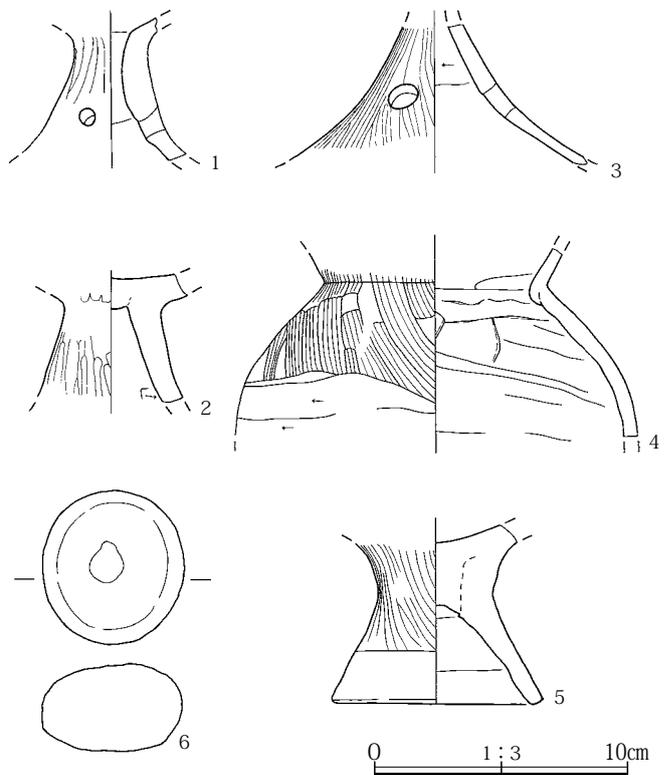
第951図 1号住居掘り方・出土遺物

7号住居(第952・953図 P L.215・308)

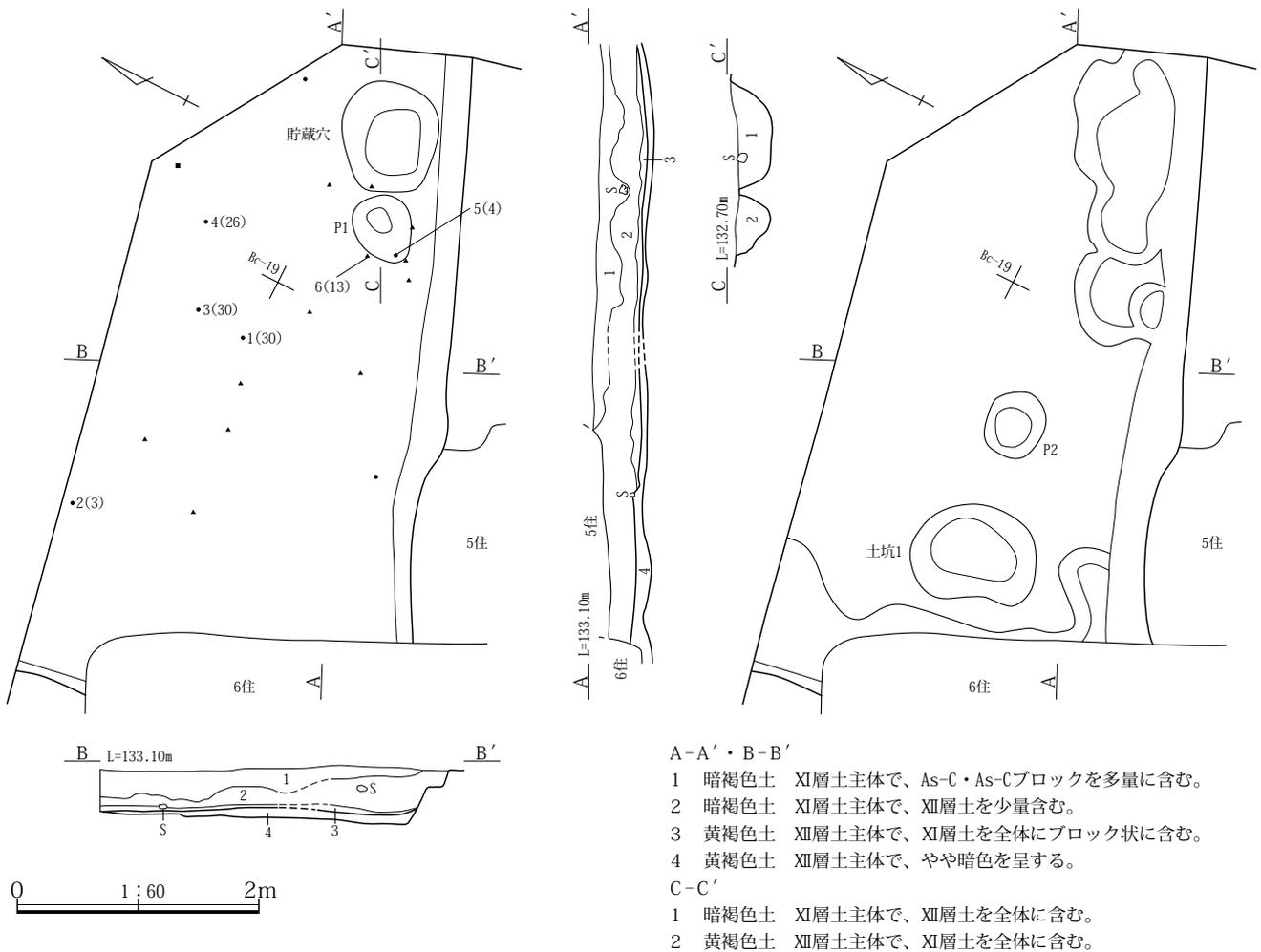
位置：Bb・Bc-18・19グリッド 形状：不明 規模：不明 残存深度：0.40m 主軸方位：不明 埋没土：Ⅱ層土主体 柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：遺物は小片でわずかに出土した。P 1 際で台付甕(5)、中央付近から器台(1)・高坏(2)・甕(4)などが出土した。重複：南西コーナー部で6号住居と重複し、新旧関係は遺構の残存状況から7号住居→6号住居と考えられる。

所見：調査区の北東コーナー部で検出されたもので、住居の1/3程度を調査したものと考えられる。覆土下層のAs-C含有が明瞭でなく、純層は確認できなかったが、上層にAs-Cをブロック状に含んでいることから、Ⅱ期として扱った。床面は平坦であるが、硬化面は確認できず炉と思われる焼土や炭化物集中部分も調査範囲には認められない。床面精査時点で、南壁際の東寄りに検出した0.90×0.79m、深さ0.29mの不整楕円形を呈する掘り込みが貯蔵穴と考えられ、この貯蔵穴のすぐ東側に南東コーナー部があるものと思われる。また、貯蔵穴の西側にP 1 (径0.47m、深さ0.33m、円形)を検出したが、対応するようなピットの検出がなく、柱穴とは考えられない。掘り方は浅いものの全体に行われており、西寄りの位置

から土坑 1 (1.06×0.75m、深さ0.14m、不整楕円形)と P 2 (径0.50m、深さ0.08m、不整円形)を検出した。
時期：3世紀後半か



第952図 7号住居出土遺物

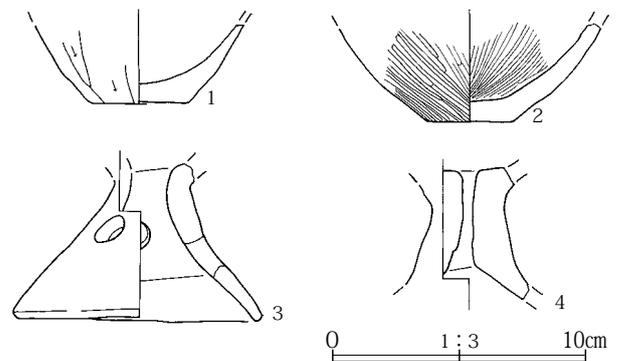


第953図 7号住居

10号住居(第954・955図 P L.216・308)

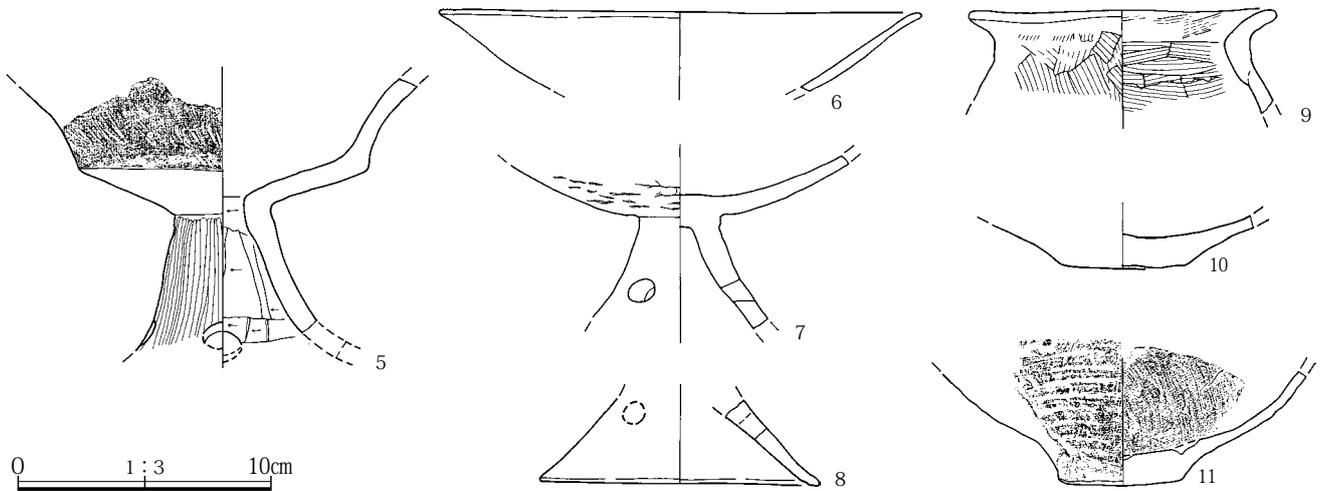
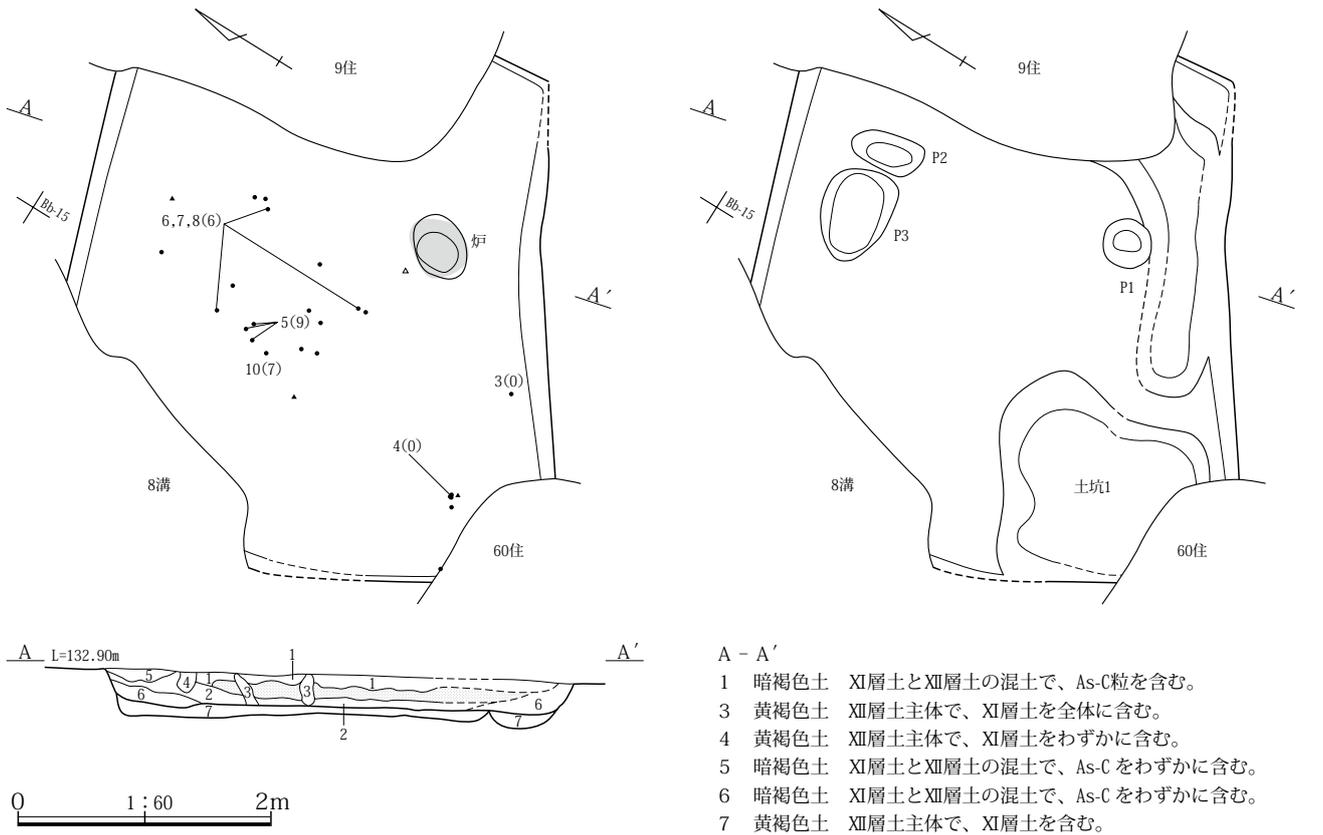
位置: Ba・Bb-14グリッド **形状:** 隅丸台形 **規模:** (4.23) m×(3.86) m **残存深度:** 0.29m **主軸方位:** E-25°-N **埋没土:** 中層にAs-C純層を挟み、下層はXI・XII層土主体。 **柱穴:** なし **炉:** 中央の南壁寄りに1カ所検出した、径0.45mほどの焼土化した部分を炉と判断した。 **遺物:** 中央の床面付近に高杯(6~8)・器台(5)・壺(10)が破片の状態で散在していた。また、炉近くから炭化種実が1点出土した。 **重複:** 9・60号住居と重複している他、北西コーナー付近は1面の8号溝に関連する石積みによって壊されていた。住居との重複関係は、10号住居→9号住居→60号住居(II期)である。 **所見:** 他遺構との重複が多く、全体像が捉えにくい住居である。覆土中層にAs-C純層があり、当遺跡でも最も古い段階の遺構の一つである。床面は平坦に検出したが、貯蔵穴や柱穴は検出できず、床面の広い範囲がわずかに焼土化していた。炭化材や灰などの検出はなかったが、焼失している

可能性が高い。掘り方は、全体に床面から10cmほど掘り下げられており、特に南東コーナー部付近は溝状に掘られていた。また、南西コーナー部に土坑1(1.62×1.68m、深さ0.22m、不整形)、南壁寄り掘り方に接してP1(径0.40m、深さ0.06m、円形)、北壁寄りの位置にP2(0.58×0.30m、深さ0.08m、楕円形)、P3(0.75×0.55m、深さ0.09m、楕円形)をそれぞれ検出した。 **時期:** 3世紀後半



第954図 10号住居出土遺物(1)

第6章 3面の調査（古墳時代中期～前期）

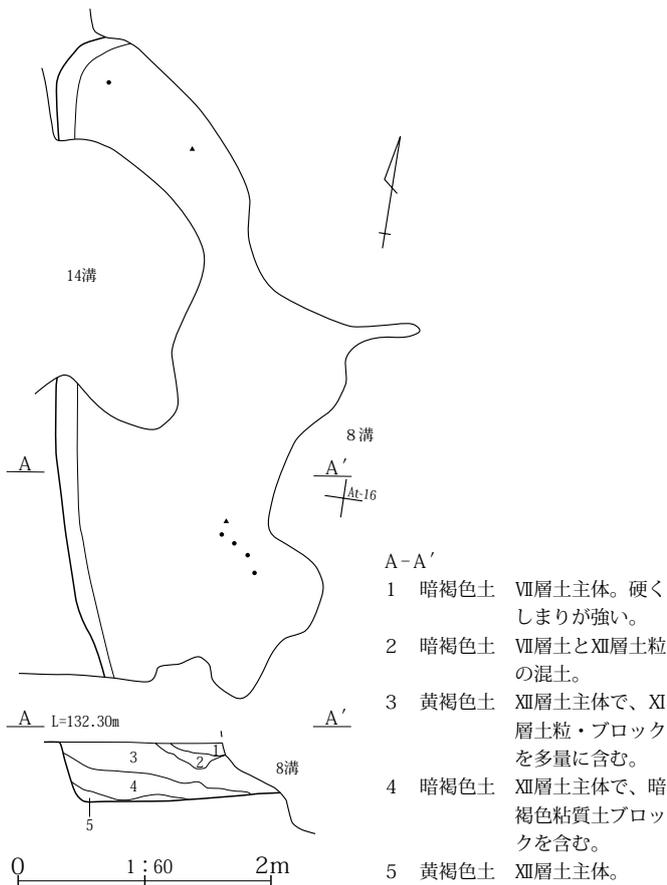


第955図 10号住居・出土遺物(2)

26号住居(第956図 P L.216)

位置：As-15・16グリッド 形状：不明 規模：(5.11) m×(2.80)m 残存深度：0.48m 主軸方位：N-12°-W 埋没土：XII層土類似の覆土でAs-Cが認められない。柱穴：未検出 炉：未検出 遺物：床面付近からわずかに出土した。重複：東側と南側の大半を1面8号溝によって削平されている。所見：VIII層土上面で確認したが、掘り込みが深く、壁の残存状態は比較的良好であっ

た。埋没土中にAs-C純層は認められなかったが、上層まで含めてAs-Cの含有がまったく認められず、XI・XII層土を主体とする土層であったことから、As-C降下以前の遺構と判断した。全体の1/6程度の残存と見られるが、北西コーナー部の状況から隅丸方形または長方形の平面形と考えられる。床面は遺物の出土した面として捉えたもので、硬化面は確認されていない。時期：3世紀後半か

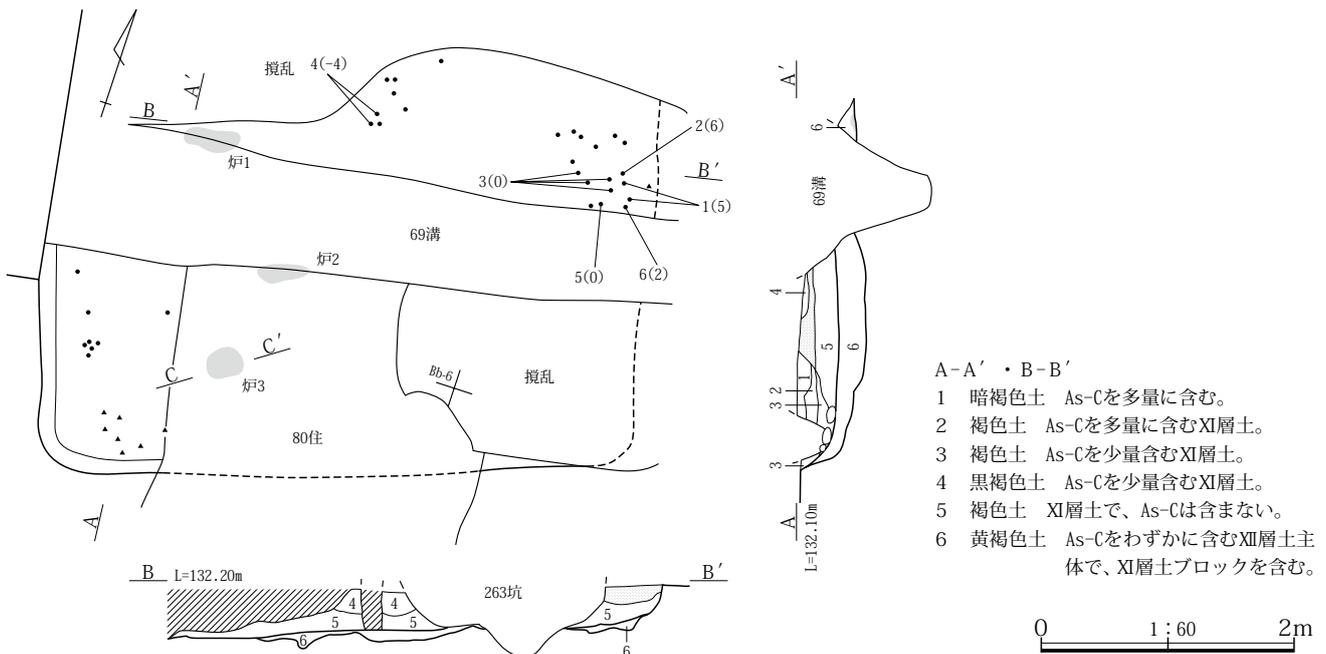


第956図 26号住居

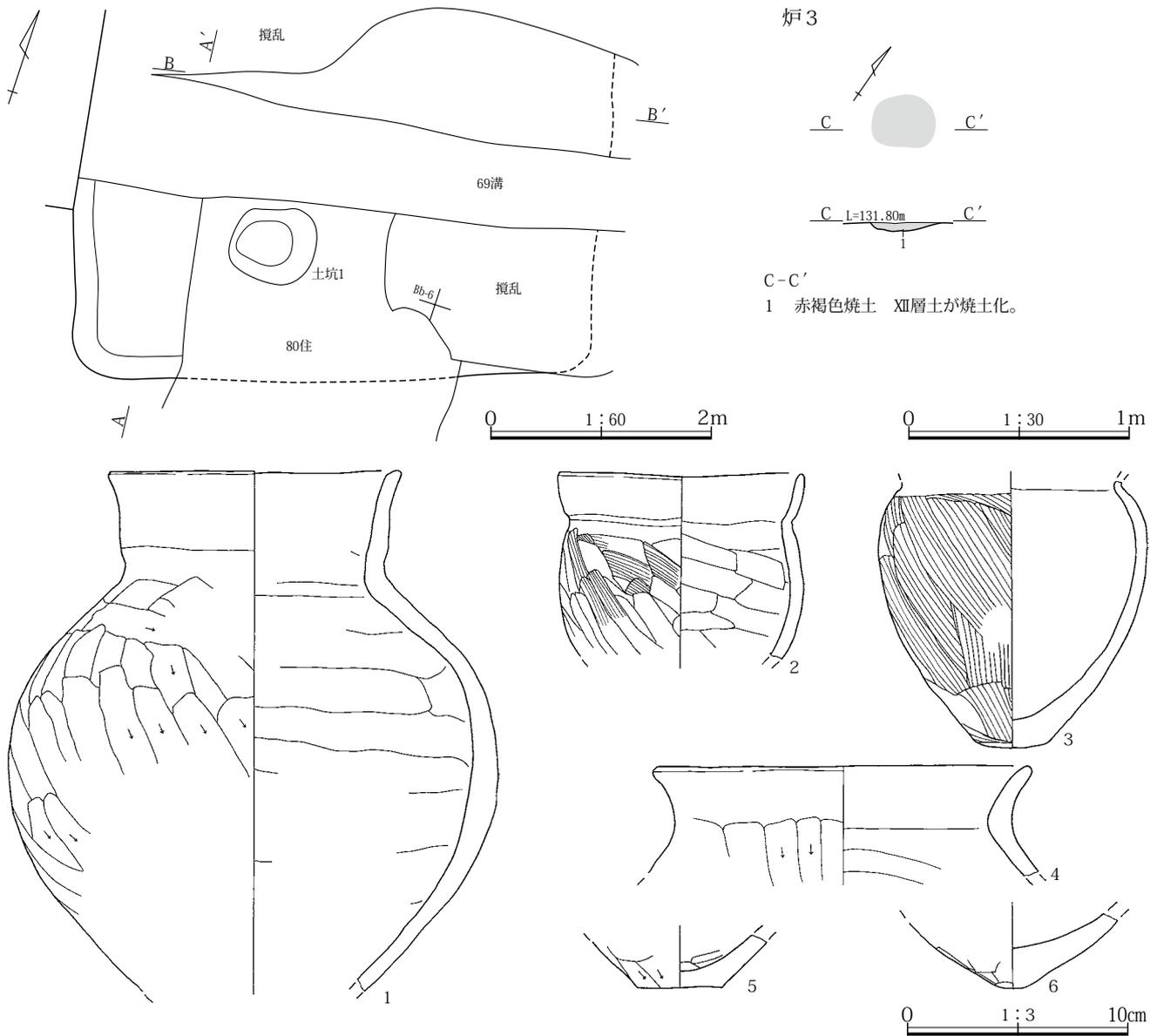
104号住居(第957・958図 P L.216・217・308)

位置: Ba・Bb- 5・6 グリッド 形状: 隅丸方形? 規模: (4.91)m×(3.36)m 残存深度: 0.20m 主軸方位: E-19°-N 埋没土: 残存した埋没土上層にAs-C純層が

13cmほどの厚さで堆積し、それより下層にはAs-Cはまったく含まれていない。 柱穴: 未検出 炉: 床面中央の西寄りの位置に3カ所、炉と見られるXII層土が焼土化した部分を検出した。 遺物: 带状に検出した床面の東寄りから甕(2・3)・壺(1)などが出土し、南西コーナー部に棒状礫が6点並んで出土した。 重複: 南側で80号住居と重複し、検出状況から104号住居→80号住居である。 所見: 69号溝が住居中央を東西に重複し、北側および南東コーナー付近には攪乱が入っているため、検出した部分は南西コーナー付近と69号溝の北側の床面の一部である。As-Cの純層は、住居の全体で確認されたものではないが、東西方向に設定した土層断面で明瞭に捉えられ、純層と床面との間を覆っていた土層中にはAs-Cがまったく含まれていないことから、As-C降下以前の住居であることは明らかである。遺物の出土面として捉えた床面は、XII層土類似の土層であり、全体に濁った印象を受けたことから掘り方があるものとして掘り下げた。しかし、色調の変化は漸移的であり、掘り方の底面を確かなものとしては捉えられなかった。一応、色調が明るくなった部分でやめて土層断面図に加えたが、本来掘り方はなかった可能性が高い。床面の精査で、中央の南西コーナー寄りの位置から0.75×0.72m、深さ0.16mの隅丸方形の土坑1を検出したが、位置から柱穴、貯蔵穴ではなく用途不明の土坑である。 時期: 3世紀後半



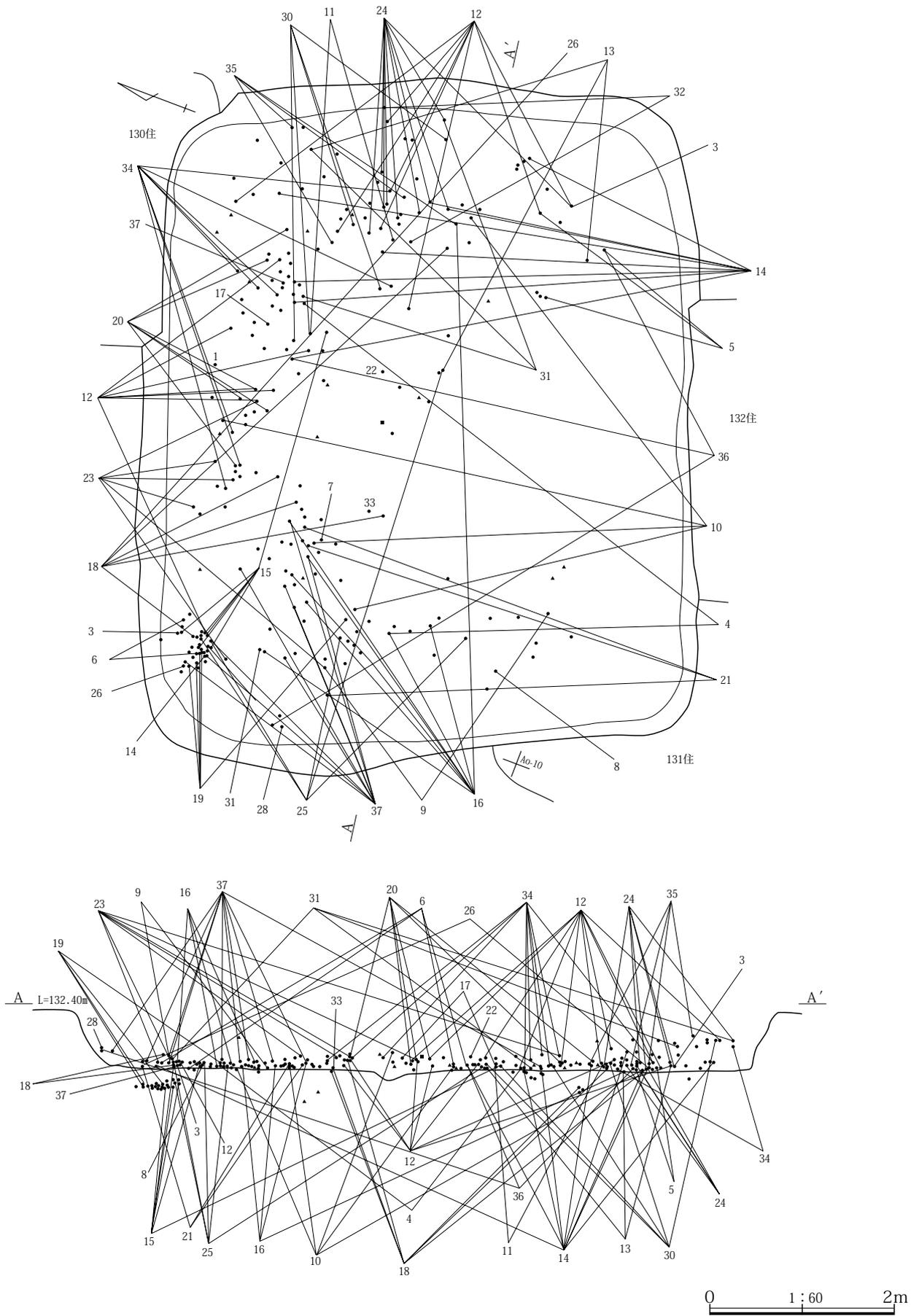
第957図 104号住居



第958図 104号住居掘り方・出土遺物

134号住居(第959～964図 P L.217～219・308・309)
位置: An～Ap-9～11グリッド **形状:** 隅丸長方形
規模: 7.35m×6.04m **残存深度:** 0.66m **主軸方位:** E-20°-N
埋没土: 上層はIX層土で、中層にAs-C純層を挟みこれより下層はXI層土類似の土層で、As-Cの含有は皆無である。
柱穴: 床面精査によってP1(径0.58m、深さ0.40m、不整円形)、P2(径0.67m、深さ0.35m、円形)、P3(径0.50m、深さ0.25m、円形)P4(0.64×0.50m、深さ0.38m、楕円形)の4本を検出した。P1-P4及びP2-P3間は2.80m、P1-P2間が2.90m及びP3-P4間が2.95mである。
炉: 床面中央に1カ所検出した0.78×0.49mの焼土と黒色灰の部分で炉と判断した。
遺物: 住居中央付近では床面との間層が

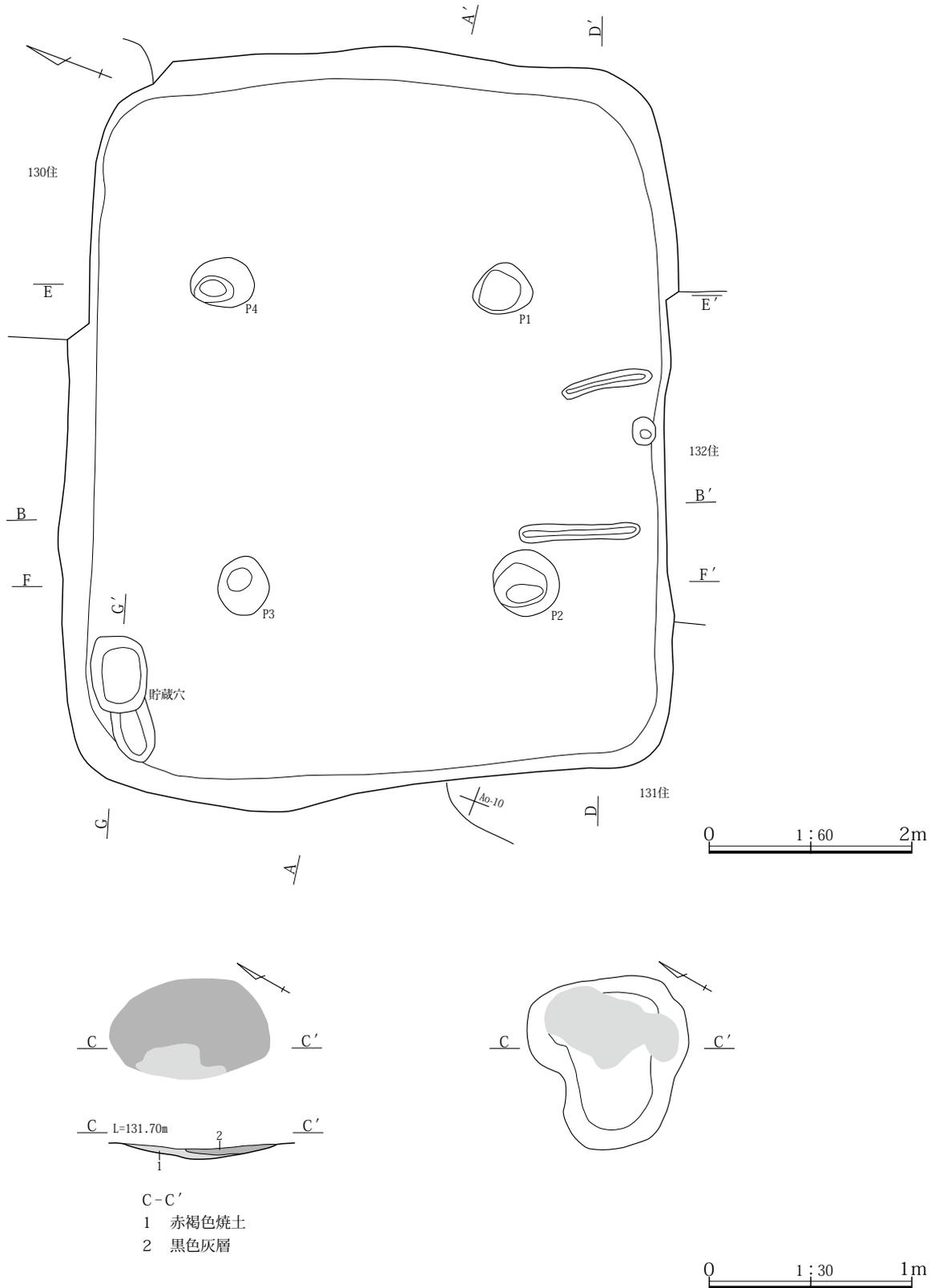
わずかな位置からの土器片の出土が多く、北側では床面付近からの遺物出土はほとんど見られない代わりに浮いた位置からの出土が多い傾向がある。また、南壁近くでは床面付近からの遺物出土も見られない。以上のことから134号住居の出土遺物の多くが、壁際の埋没が始まって以降、As-Cの降下以前の間北側から廃棄されたものである可能性が高い。134号住居に伴うと考えられる遺物は、貯蔵穴内から出土した壺(14)・甕(18)などである。
重複: 130・131・132号住居と重複し、検出状況や出土遺物の比較から134号住居→130・132号住居→131号住居である。
所見: 北東コーナー部及び南西コーナー部で他の住居と重複しているが、掘り込みが深く壁は全周検出することができた。炉の検出面として捉えた床面はXII



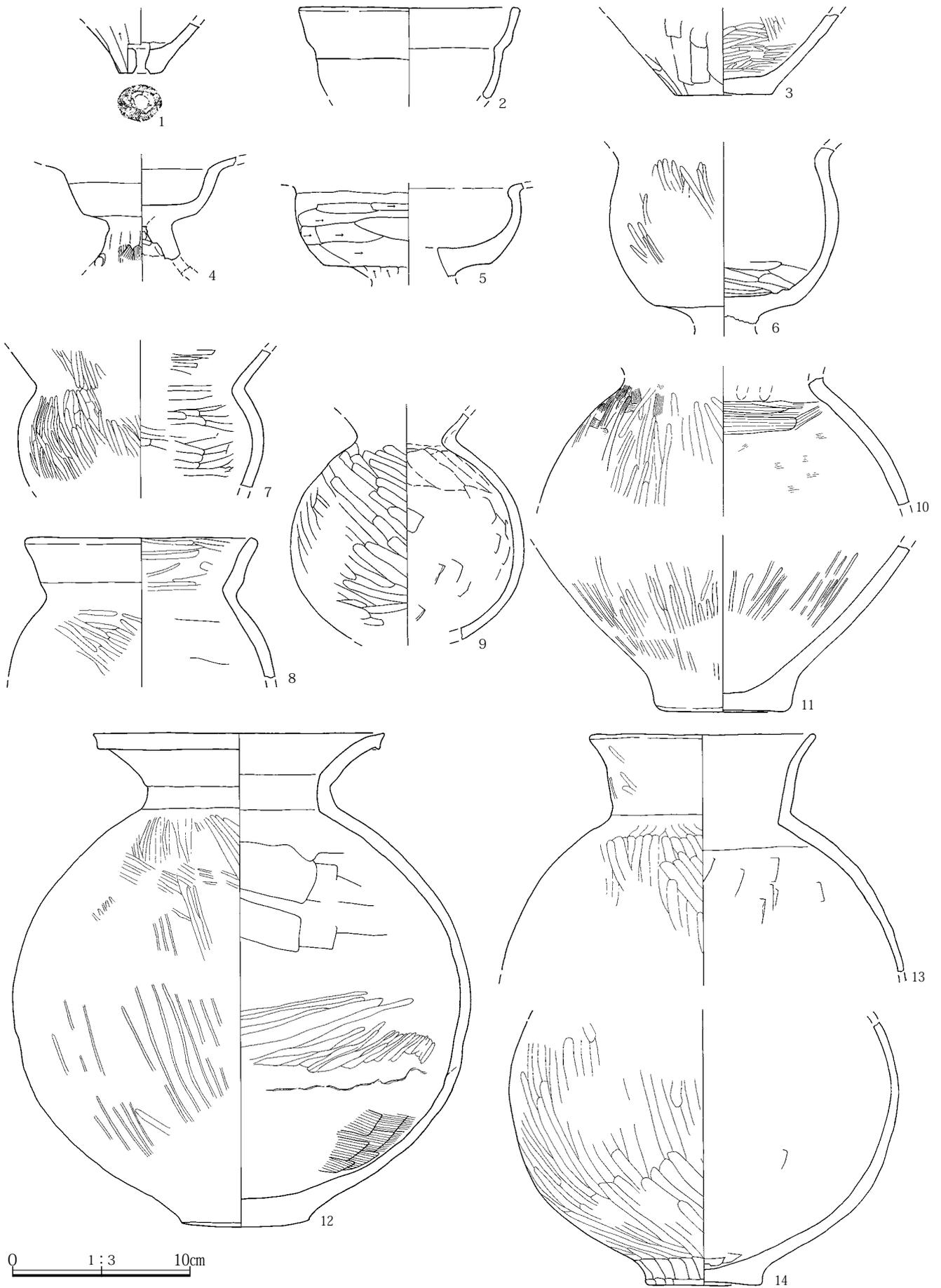
第960図 134号住居遺物出土状況

層土であることから掘り方は行われていないものと考えられる。この床面精査において北西コーナー部に0.55×0.77m、深さ0.25mの隅丸長方形を呈する貯蔵穴を検出した。また、南壁際から中央に向かって幅0.18m、長さ

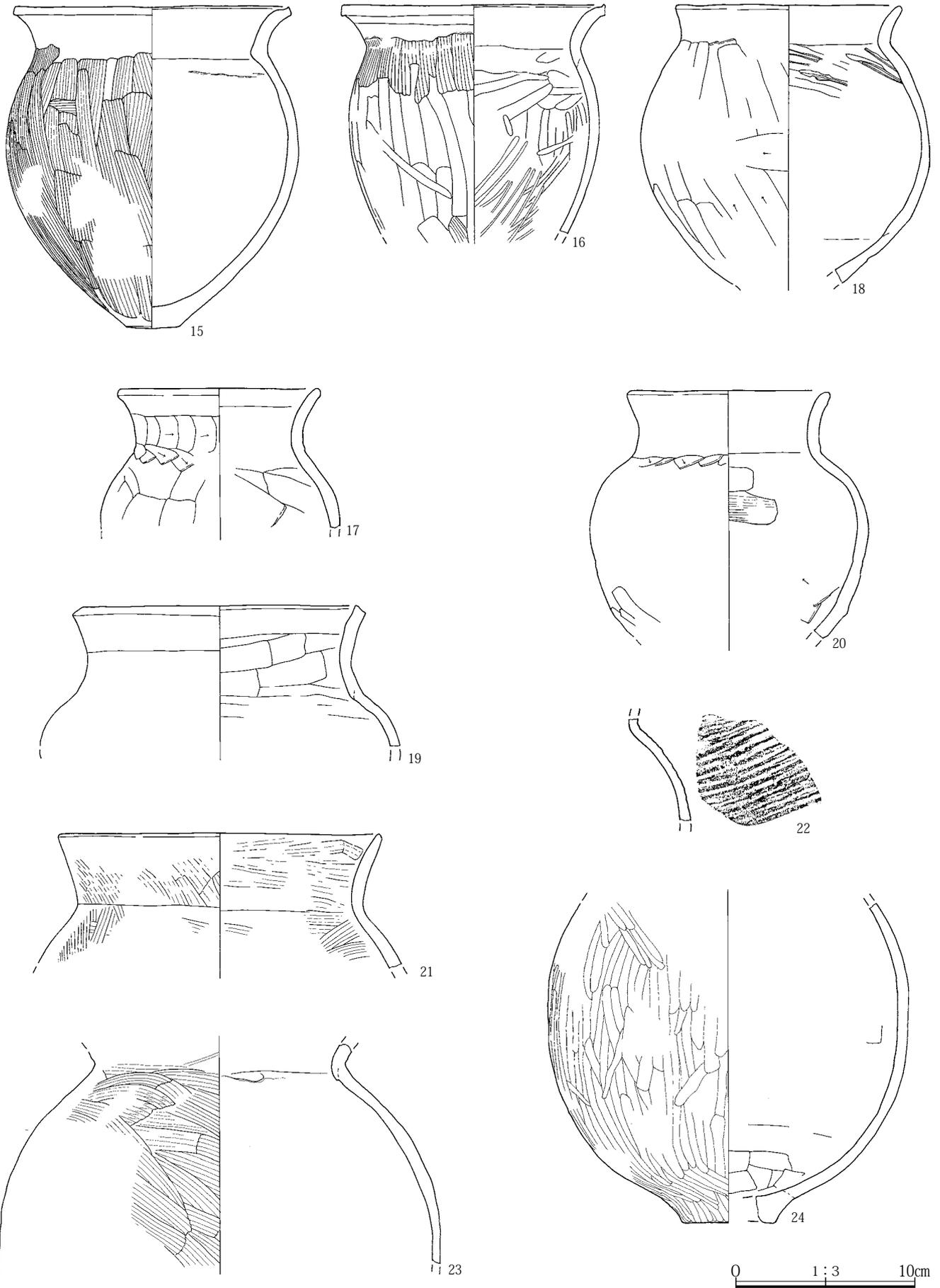
0.93m及び長さ1.20mの間仕切り状の浅い溝を検出した。さらに部分的ではあるが床面からは炭化物と焼土が複数カ所で検出されており、焼失住居である可能性が高い。 時期：3世紀後半



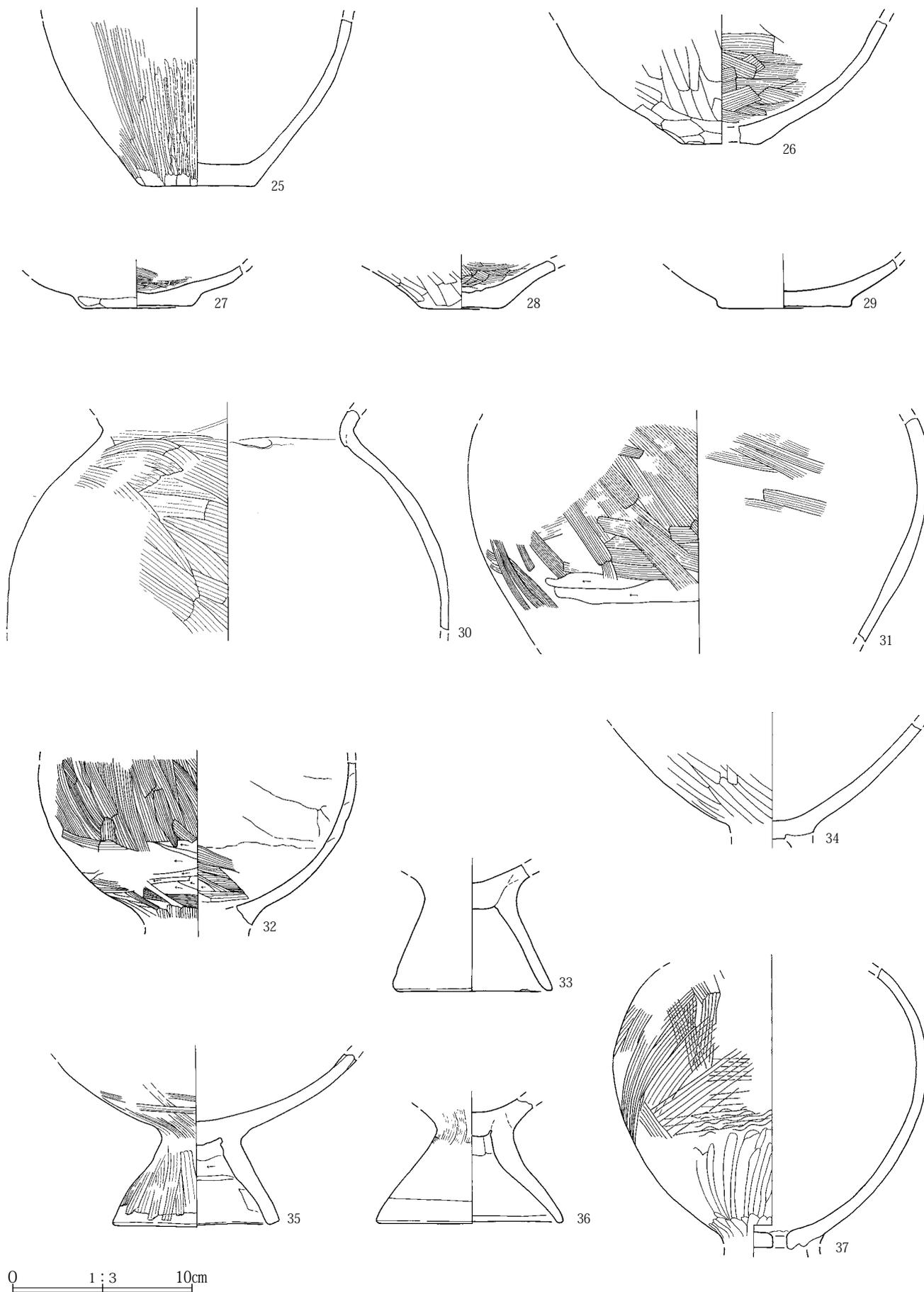
第961図 134号住居掘り方



第962図 134号住居出土遺物(1)



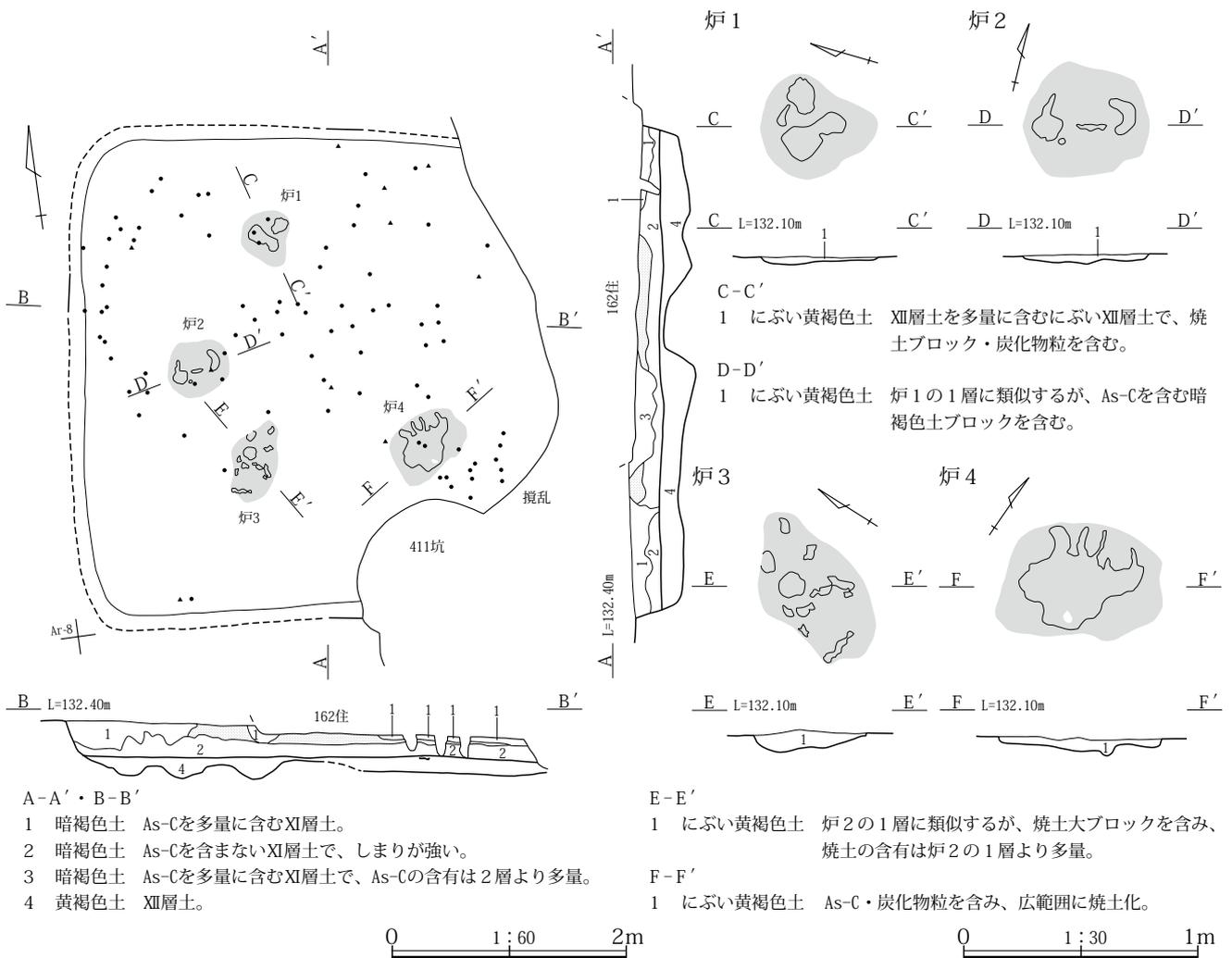
第963图 134号住居出土遺物(2)



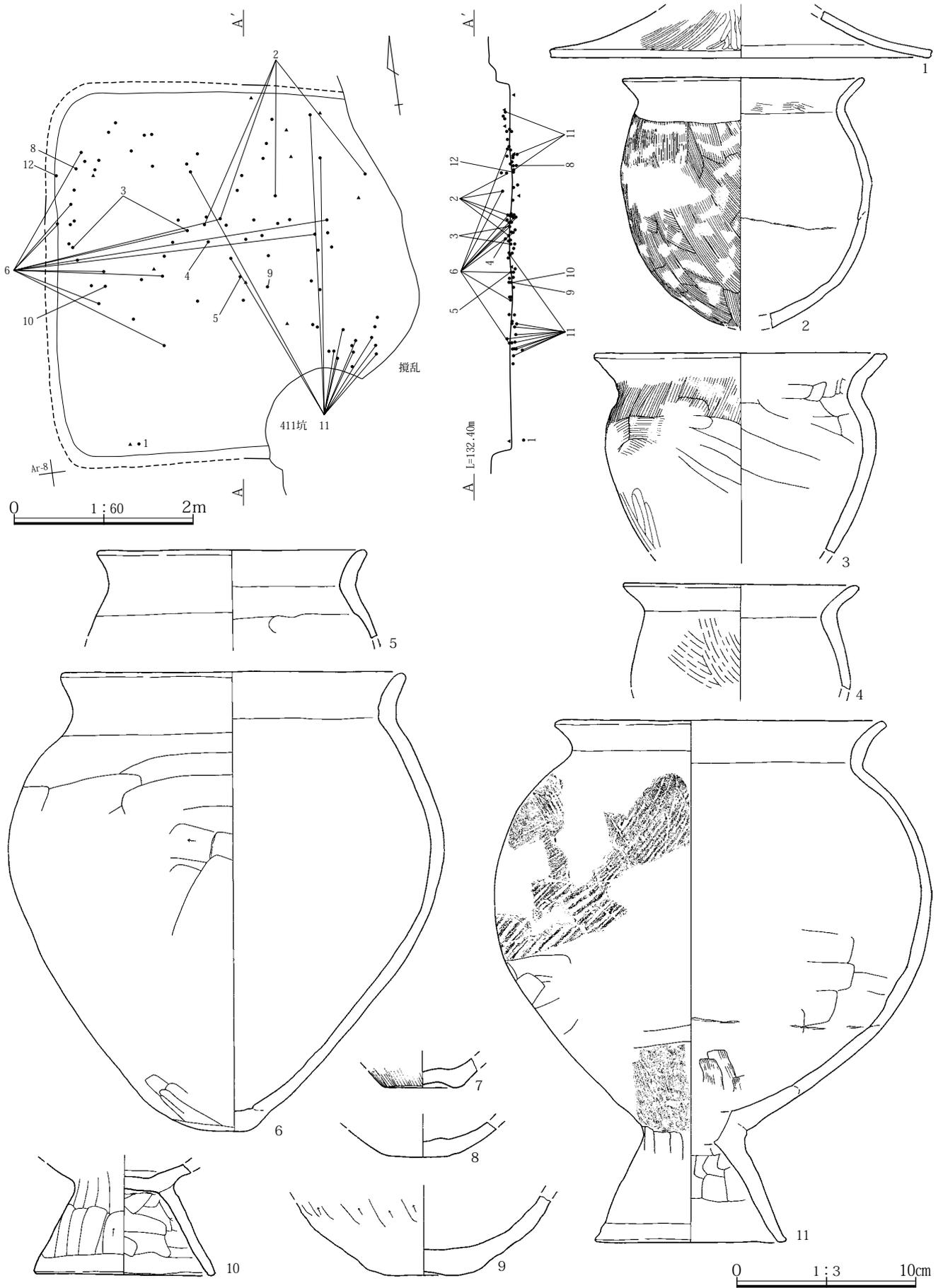
第964図 134号住居出土遺物(3)

164号住居(第195～197図 P.L.219・309)

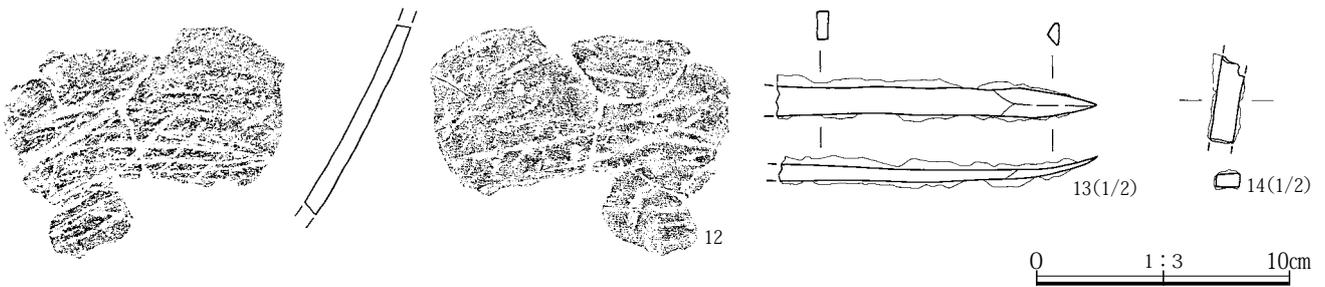
位置：Ar- 8 グリッド 形状：隅丸長方形？ 規模：(4.16)m×4.19m 残存深度：0.25m 主軸方位：不明
 埋没土：床面から0.1m程度上位にAs-C純層が堆積しており、これと床面との間層中にはAs-Cはまったく含まれていない。 柱穴：未検出 炉：中央床面に1mほどの間隔を置いて半円状に4カ所の焼土面を検出した。中でも南東に位置する部分が最も焼土化が顕著であった。
 遺物：遺物のほとんどはAs-C下であり、特に床面付近から破片の状態出土したものが多し。甕(2・3)は中央部、甕(6)は北西コーナー部付近から、台付甕(11)は南東側と北側の2カ所に分かれて出土した。また、出土位置が特定できないのであるが、槍鉋(13)と断面四角の鉄製品が出土したことが特筆される。 重複：162号住居と重複し、検出状況から164号住居→162号住居である。 所見：当初は住居との認識はなく、As-Cが濃密に分布している場所であったために十字にセクションベルトを設定して掘り下げを行った。その結果、As-Cのまったく混入しない粘質土層中から遺物が面的に出土し、同一面において焼土面を検出したことから住居であると判断した。As-Cは床面とは10cm程度の間層を挟んで堆積しており、一定の厚さで全体に堆積していることから周辺からの流れ込みのような二次堆積とは考えられないことから、164号住居はAs-C降下以前の時期とした。As-C下の埋没土は暗褐色シルト質土であり、XI層土との区別が付けにくいものであったため、全体的な掘り下げに際しても平面形を確認することができず、結果として壁はセクションベルトの部分だけしか捉えることができなかった。床面は前述のように遺物出土面及び炉の検出面として捉えたもので、平坦で締りが強いが、硬化面と言えるほどではなかった。床面及び掘り方の調査においても柱穴、貯蔵穴に当たるような掘り込みは1カ所も検出されなかった。 時期：4世紀前半



第965図 164号住居



第966図 164号住居遺物出土状況・出土遺物(1)

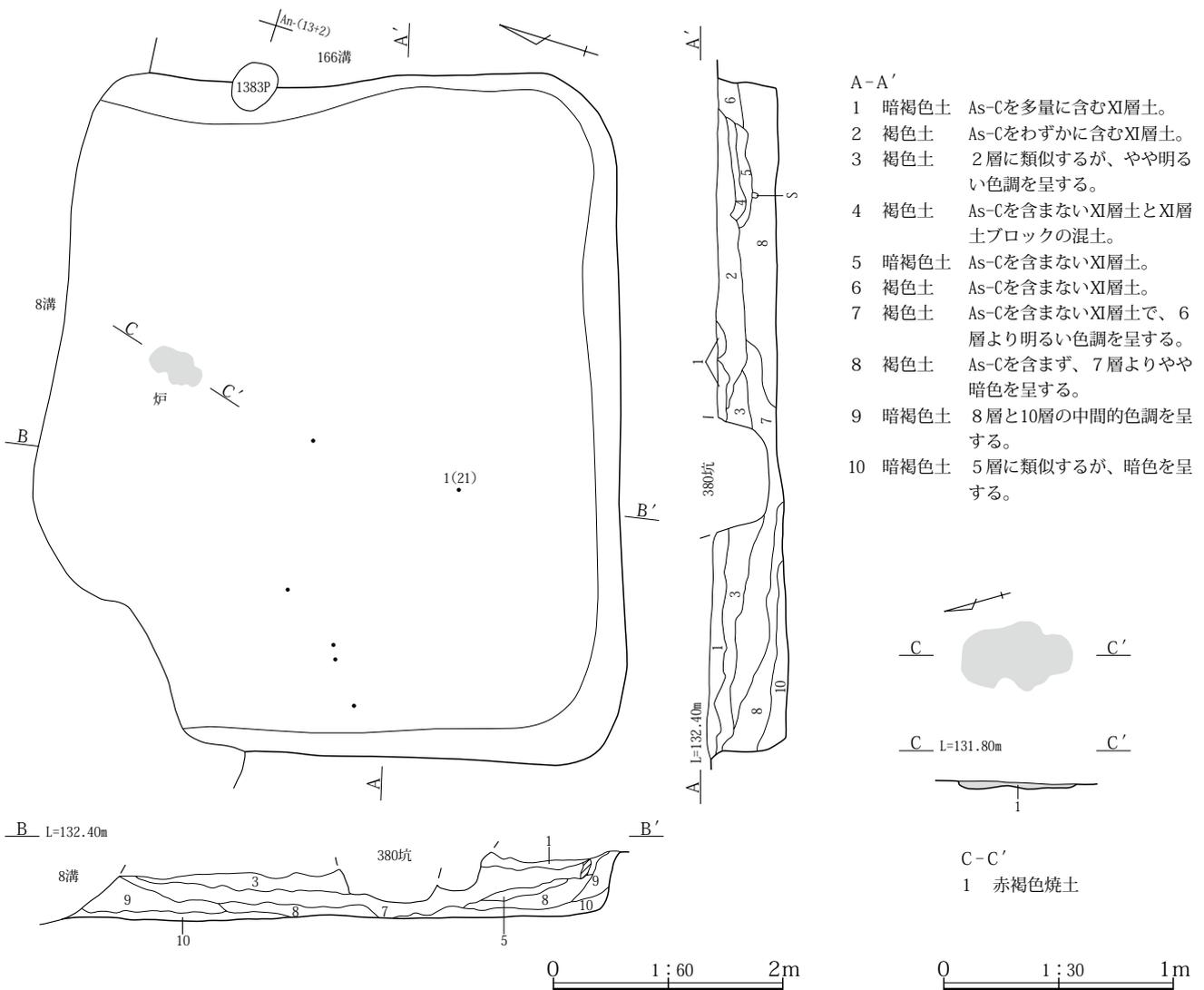


第967図 164号住居出土遺物(2)

166号住居(第968・969図 P L.219・220)

位置:A1~An-12・13グリッド 形状:隅丸長方形? 規模:
(5.12)m×6.00m 残存深度:0.65m 主軸方位:N-
19°-W 埋没土:XI・XII層土主体で、最上層のAs-C含
有は多く、下層にはAs-Cを含まない。柱穴:未検出
炉:中央床面に検出した0.50×0.37mの不整形の焼土部
分を炉と判断した。遺物:埋没土中から甕などの破片

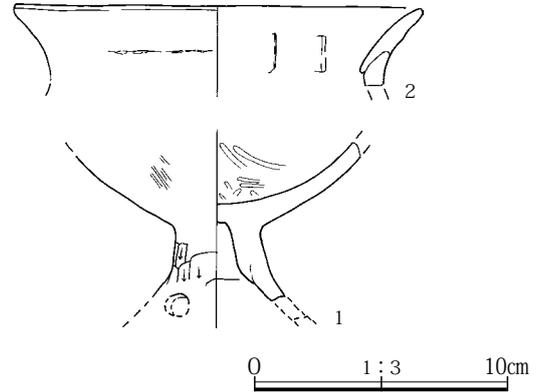
がわずかに出土したもので、中央西寄りから高杯(1)が
出土した。重複:121号住居及び31号畑と重複しており、
検出状況及び埋没土の状況から166号住居→31号畑→121
号住居と考えられる。また、北側は1面8号溝によって
削平され、北壁は失われている。所見:XII層土中で平
面確認を行い、As-Cが比較的濃密に分布する場所として
遺構の存在を認識した。また、8号溝の壁面において壁



第968図 166号住居

の立ち上がりと見られる土層の違いが認められたことから住居との想定のもとに調査を行った。上面にAs-C含有の多い層があるが、これより下層にはAs-Cがまったく含まれていない。間にAs-Cの純堆積層は認められなかったが、下層にAs-Cが入らないことを重視し、また、As-Cで埋没した31号畑としてサクが上面で検出されていることから、住居自体はAs-C降下以前にすでに埋没していたものと判断した。XII層土を直接床面としていたものと考えられるが、埋没土とXII層土の区別が付けにくく、床面を捉えるのは困難であったが、埋没土掘削の進捗に伴い畑が検出できたために、同一面で広げることによって床面を捉えることができた。その結果平坦な面としては認識できた

ものの、硬化した面は認められず、貯蔵穴、柱穴と見られるような掘り込みはまったく確認することができなかった。 時期：3世紀後半

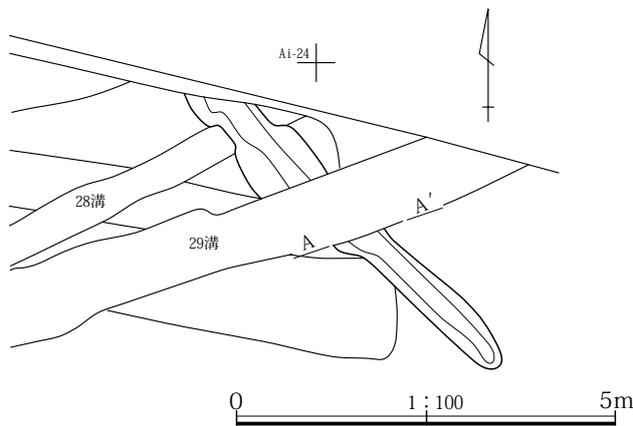


第969図 166号住居出土遺物

(2) 溝

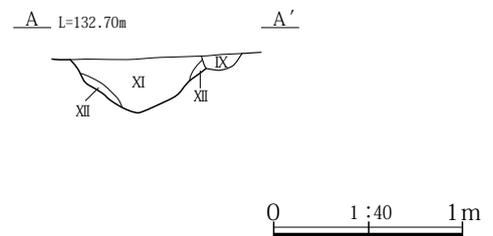
45号溝(第970図 P L.220)

位置：Ah・Ai-23グリッド 規模：5.42m×0.93m 残存深度：0.33m 走行方位：N-45°-W 遺物：なし



第970図 45号溝

所見：調査区の北端に検出したもので、XII層土中で平面を確認した。埋没土はXI層土でAs-Cの含有はなく、IX層土相当の土で埋没した不明遺構に切られていることが確認できることから、3面II期として扱った。埋没土中に砂層などの通水された痕跡がないことから区画のための溝と見られるが、急激に立ち上がって終わっており、先に連続するような溝は検出されていない。



(3) 畑

4号畑(第971図 P L.220)

位置：Ad・Ae-22・23グリッド 検出サク数：5条 規模：1.32～(4.50)m×0.23～0.36m 残存深度：0.07～0.13m サク間幅：0.30～1.45m サク方位：N-10°-W 埋没土：XI・XII層土の混土。 遺物：なし 重複：33号住居との重複で北側が削平されている。

所見：XI層土中で確認をしたものであるが、検出されたサクには長短が著しいことから、サクの最深部だけが残存したものと考えられる。北側は33号住居に、西側は

6号復旧痕によって削平されているため、どの程度の広がりがあったものか判断できなかった。サク埋没土の一部にはIX層土が入ったものもあり、As-C降下後の畑が重複していることが想定されるが、検出したサクの大半はXI・XII層土の混土であり、As-Cの含有がまったく認められないことからII期の遺構として扱った。

5号畑(第971図 P L.220・221)

位置：Ad・Ae-22・23グリッド 検出サク数：3条 規模：0.95～5.20m×0.21～0.49m 残存深度：0.08～0.23m サク間幅：0.90m サク方位：E-13°-N 埋

没土: XI・XII層土の混土。 **遺物:** なし **重複:** なし
所見: 北西に位置する4号畑とは直行するサクを有する畑で、XI層土中で確認をした。検出したサクはわずかで、同一のサクと見られるものでも途切れており、4号畑と同様にサク最深部分だけが検出されたものと考えられることから、畑の範囲を特定することはできなかつた。サクの埋没土中にAs-Cの含有はまったく確認できないことからII期の畑と判断したが、埋没土の類似し隣接する4号畑との新旧関係は不明である。

7号畑(第972図 P L.221)

位置: Ag ~ Aj-20 ~ 24グリッド **検出サク数:** 12条
規模: (0.70 ~ 19.56)m × 0.18 ~ 0.43m **残存深度:** 0.05 m **サク間幅:** 0.82 ~ 1.60m **サク方位:** E - 18° - N **埋没土:** X層土(As-C) **遺物:** なし **重複:** 9号復旧痕によって広範に削平されている。また、43号住居と重複しており、検出状況、残存状況から7号畑→43号住居(3面II期)である。 **所見:** 広範にわたって断片的に検出したものであり、複数の畑である可能性がある。しかし、サク筋がほぼ一致しており、明確に分離することができないため、7号畑として一括した。サクの埋没土はAs-C純層と見られるものであり、As-C降下時点で畝立てされていたものと見てよいであろう。東側は43号住居の東壁付近でサクの立ち上がりを確認できることから、これより東側へ延びることはないものと考えられる。西側は明確な立ち上がりを確認できないことから判然としないが、いずれにしてもこの付近にはAs-C降下前の時点で畑が広く展開していたことは確実である。

31号畑(第973図 P L.221)

位置: Al ~ An-12・13グリッド **検出サク数:** 3条 **規模:** 0.45 ~ 7.23m × 0.25 ~ 0.88m **残存深度:** 0.04 ~ 0.36 m **サク間幅:** 0.87 ~ 1.55m **サク方位:** E - 17° - N **埋没土:** As-C **遺物:** 小片出土。 **重複:** 121・166号住居と重複し、検出及び埋没土の状況から、166号住居→31号畑→121号住居と考えられる。 **所見:** 121号住居の掘り方調査及び周辺のXII層土上面の精査で、As-Cが帯状に検出されたことから、畑のサクと認識した。当初は明瞭なサク1条の検出であったが、南側に1カ所ごくわずかではあるがAs-Cの集中する部分があり、また、北側にもサク状を呈する部分とこれに連続してAs-Cの濃密に集中する方形状の掘り込みが検出されたことから、

As-Cで埋没した畑と判断した。堆積したAs-Cが純層であるかの検証は行っていないが、軽石間にXI層土などの混入がまったく見られず、攪拌された状況が認められないことから、As-C降下以前の畑と考えた。前述のように南側の残存状況が悪く、北側は8号溝によって削平され残存していないため、どの程度の広がりをもった畑であったのかについては判然としない。下面からはAs-C降下以前に埋没した166号住居が検出されており、住居が構築されていた場所が次の段階では畑として利用されたことが確認されており、土地利用を考える上で興味ある資料である。

32号畑(第974図 P L.221)

位置: Al ~ An- 9・10グリッド **検出サク数:** 4条
規模: (0.82 ~ 4.25)m × 0.32 ~ 0.61m **残存深度:** 0.20 m **サク間幅:** 1.17 ~ 1.28m **サク方位:** E - 22° - N **埋没土:** As-C **遺物:** なし **重複:** 87号溝・402号土坑との重複及び現代の攪乱によって一部が失われている。 **所見:** XI層土中で、As-Cの集中部分が帯状に検出されたことから畑のサクと判断した。比較的残存状況の良かった北側の3条についても端部は揃っておらず、サクの最深部分が検出されたものと思われ、実際の畑の範囲を知ることはできない。埋没土はXI層土などがまったく混入しないAs-Cであり、降下以前に畝立てされていた畑と考えられる。

33b号畑(第974図 P L.221)

位置: Al・Am-15 ~ 17グリッド **検出サク数:** 7条
規模: (1.67 ~ 3.67)m × 0.28 ~ 0.52m **残存深度:** 0.03 ~ 0.13m **サク間幅:** 0.50 ~ 2.59m **サク方位:** E - 10° - N **埋没土:** XI層土主体。 **遺物:** なし **重複:** 165・177号住居との重複で、東西両側が削平され、33a・37号畑と重複しており、検出状況から37号畑→33b畑→33a号畑と思われる。 **所見:** 当初33a号畑の前段階のサクと考えたが、埋没土中にAs-Cがまったく混入しておらず、As-Cを混入する33a号畑とは連続する耕作とは考えにくく、また、サクの方位にも違いが認められることから33b号畑として扱った。サクの間隔は一定せず、北寄りでは間隔が大きくなることから検出できなかったサクがあったものと思われる。サクの東西方向の長さはまちまちであり全体像が捉えられたとは考えにくく、どの程度の広がりがあったものか判然としない。また、南

北方向についても調査区外に延びる可能性が高いため確定することができない。

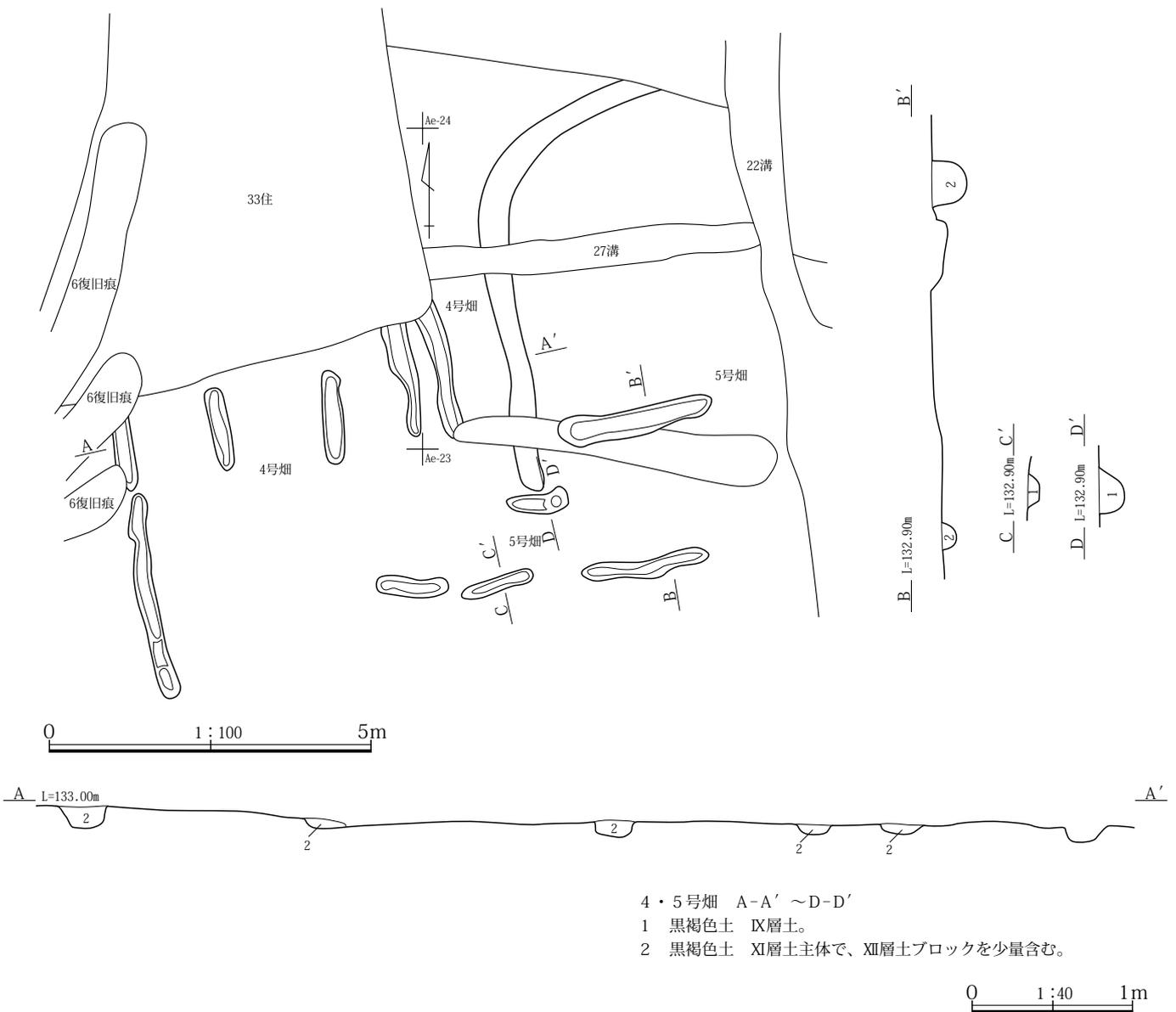
34号畑 (第975図 P L.221)

位置：Ak・A1-16・17グリッド 検出サク数：6条
 規模：(0.58～1.98)m×0.43～0.83m 残存深度：0.05～0.18m サク間幅：0.27～1.23m サク方位：N-0°～12°-W 埋没土：As-C 遺物：なし 重複：117号住居、90号溝及び現代の攪乱で削平されている。 所見：遺構間にわずかに残されたXI層土中で検出したもので、As-C純層で埋没したものと判断した。サクには長短あり、方位にもややばらつきが認められることから、サク全体が残存したものではなく、深く掘削された部分だけが検出されたものと思われる。東側の調査区際の土層

断面には、34号畑の一部と見られるAs-C層が確認されていることから、畑は東側へとさらに展開していたものと考えられる。

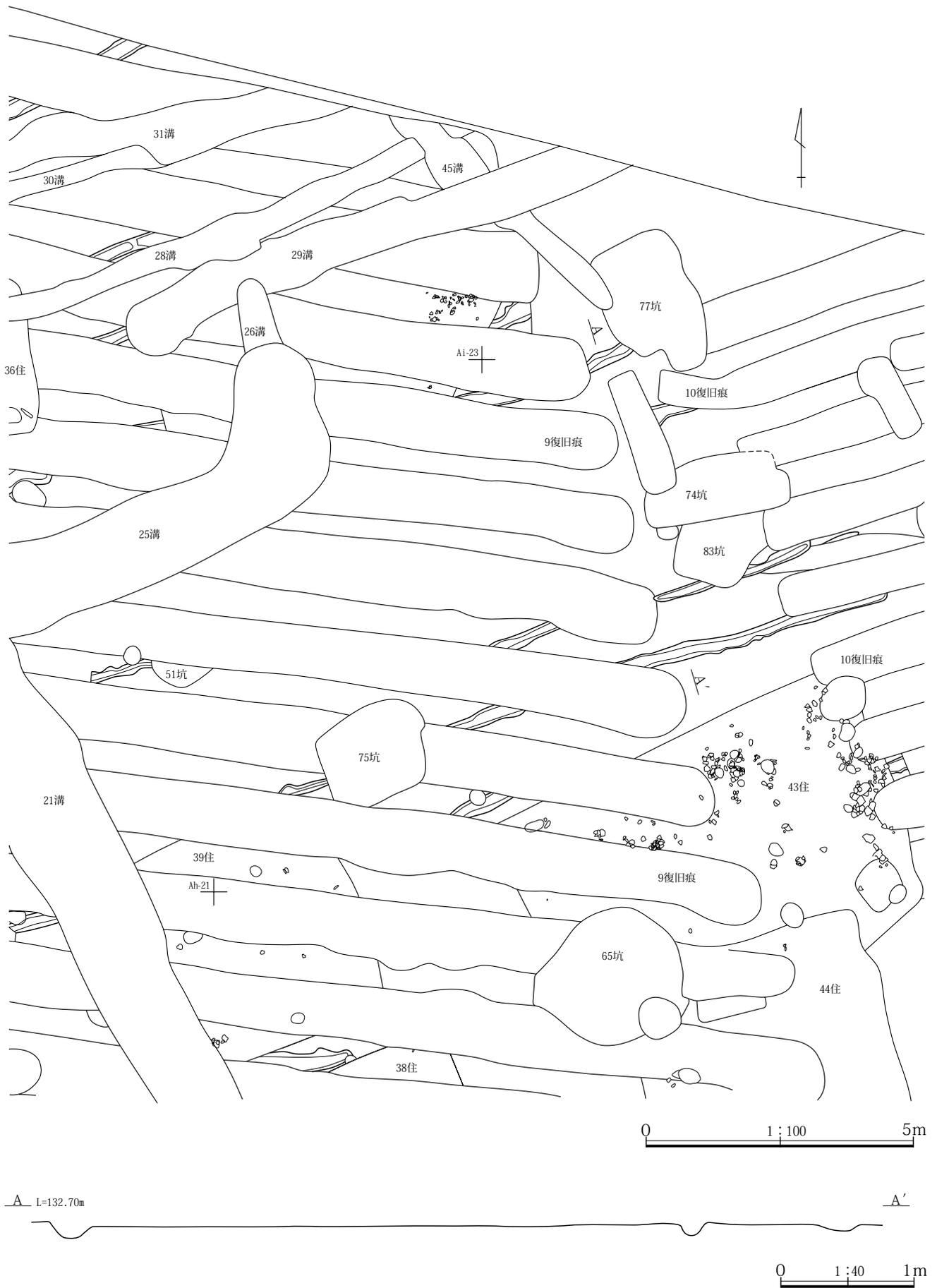
35号畑 (第973図 P L.221)

位置：As・At-9・10グリッド 検出サク数：1条 規模：2.19m×0.58m 残存深度：0.20m サク間幅：-m サク方位：N-15°-W 埋没土：As-C 遺物：なし 重複：なし 所見：XI層土中においてわずかに1条を検出したもので、これだけで畑と断定することはできないのであるが、埋没していたAs-Cの状況などを周辺遺構と比較し、畑のサクの残存である可能性が高いと判断し、畑として報告した。



- 4・5号畑 A-A'～D-D'
- 1 黒褐色土 IX層土。
- 2 黒褐色土 XI層土主体で、XII層土ブロックを少量含む。

第971図 4・5号畑



第972図 7号畑

37号畑(第974図 P L.221)

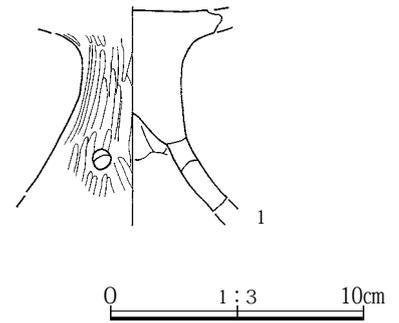
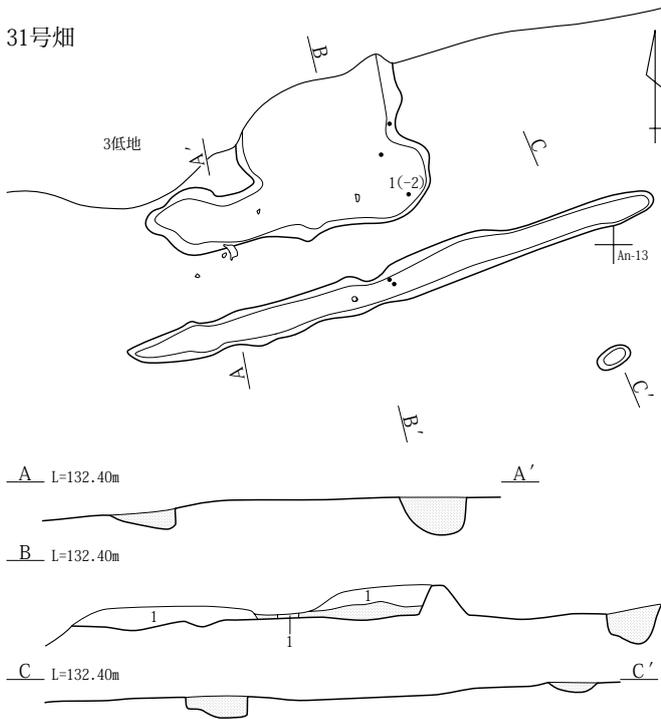
位置:A1・Am-14～17グリッド 検出サク数:2条 規模:(11.38)m×0.26～0.67m 残存深度:0.07～0.15m
 サク間幅:2.90m サク方位:N-12°-W 埋没土:XI層土主体。遺物:なし 重複:165・177号住居によって一部削平され、33a・33b号畑と重複しており、検出状況及びサク埋没土から37号畑→33b号畑→33a号畑と考えられる。 所見:平行する2条の溝である可能性もあるが、掘り方が畑のサクに類似していることから畑と判断した。北端の土層断面では、上面にAs-Cを濃密に含む層が確認されており、サクの埋没土中にはAs-Cがまったく混入していないことから、As-C降下以前の畑である可能性が高い。

38b号畑(第975図 P L.221)

位置:Ao・Ap-7・8グリッド 検出サク数:4条 規

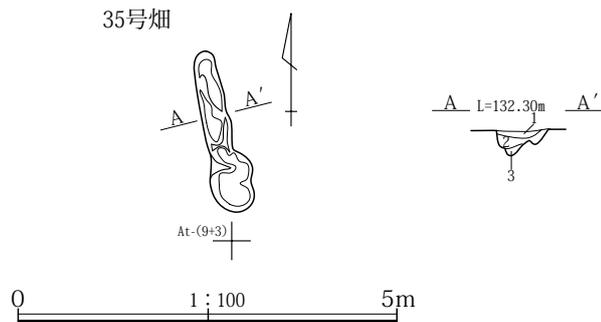
模:(2.65～5.66)m×0.37～0.45m 残存深度:0.06～0.11m サク間幅:1.60～2.08m サク方位:N-13°-W 埋没土:色調の明るいXI層土主体。遺物:なし 重複:131・136・163号住居などによって削平され、38a号畑と重複しており、埋没土の状況から38b号畑→38a号畑と考えられる。 所見:38a号畑と同一確認面で検出したものであるが、走行方向が直行し埋没土中にAs-Cが確認できないことから、II期として報告した。1条だけ南端を検出したが、両側のサクの状況からすれば、さらに南に延びていた可能性が高い。他の畑でも多くの場合そうであったように、サクの最深部が残ったものと考えられ、検出状況から畑の範囲を捉えることは困難である。38a号畑と38b号畑ではAs-C降下を挟んで時間的経過が想定されることから、連続的耕作がされていたものとは考えにくい。

31号畑



31号畑 B-B'
 1 暗褐色土 As-Cを多量に含む。

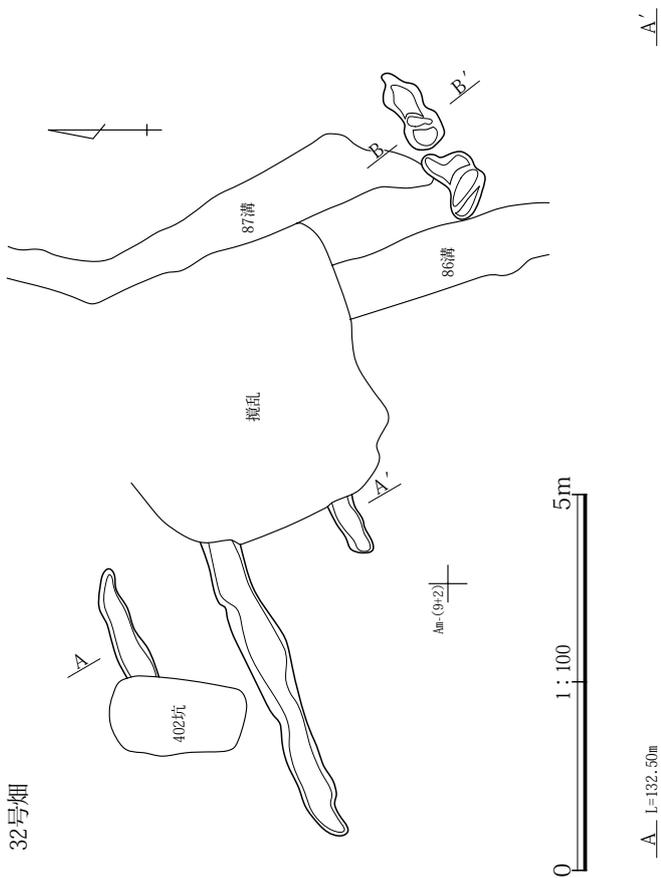
35号畑



35号畑 A-A'
 1 暗褐色土 As-Cを濃密に含む。
 2 褐色土 XI層土。
 3 褐色土 As-Cをわずかに含むXI層土。

第973図 31・35号畑・出土遺物

32号畑



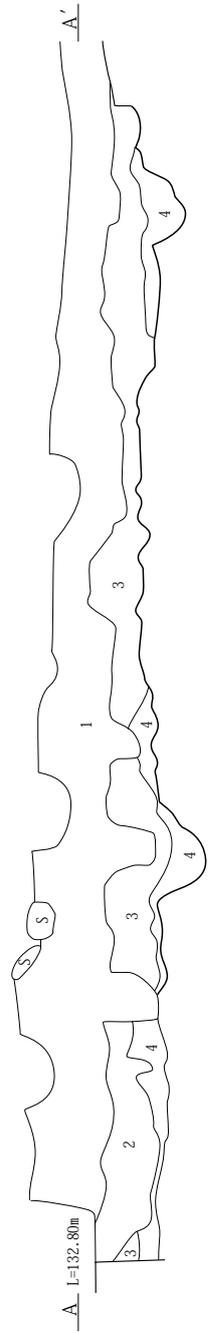
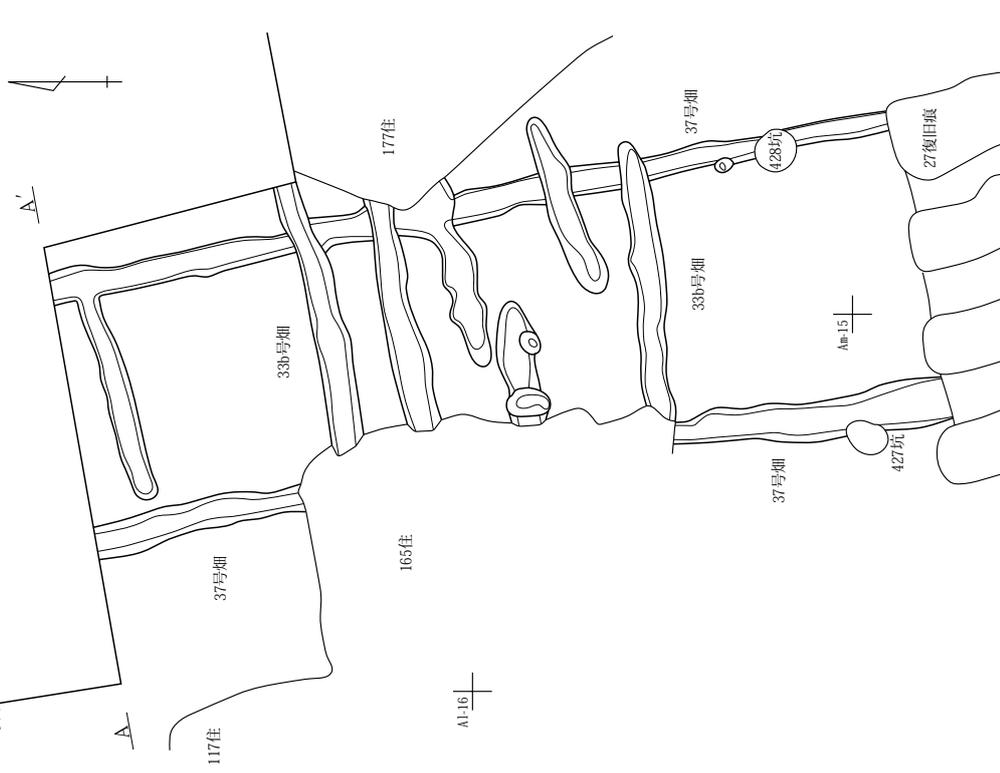
32号畑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-Cを主体とする層。
- 2 暗褐色土 As-Cを少量含む。

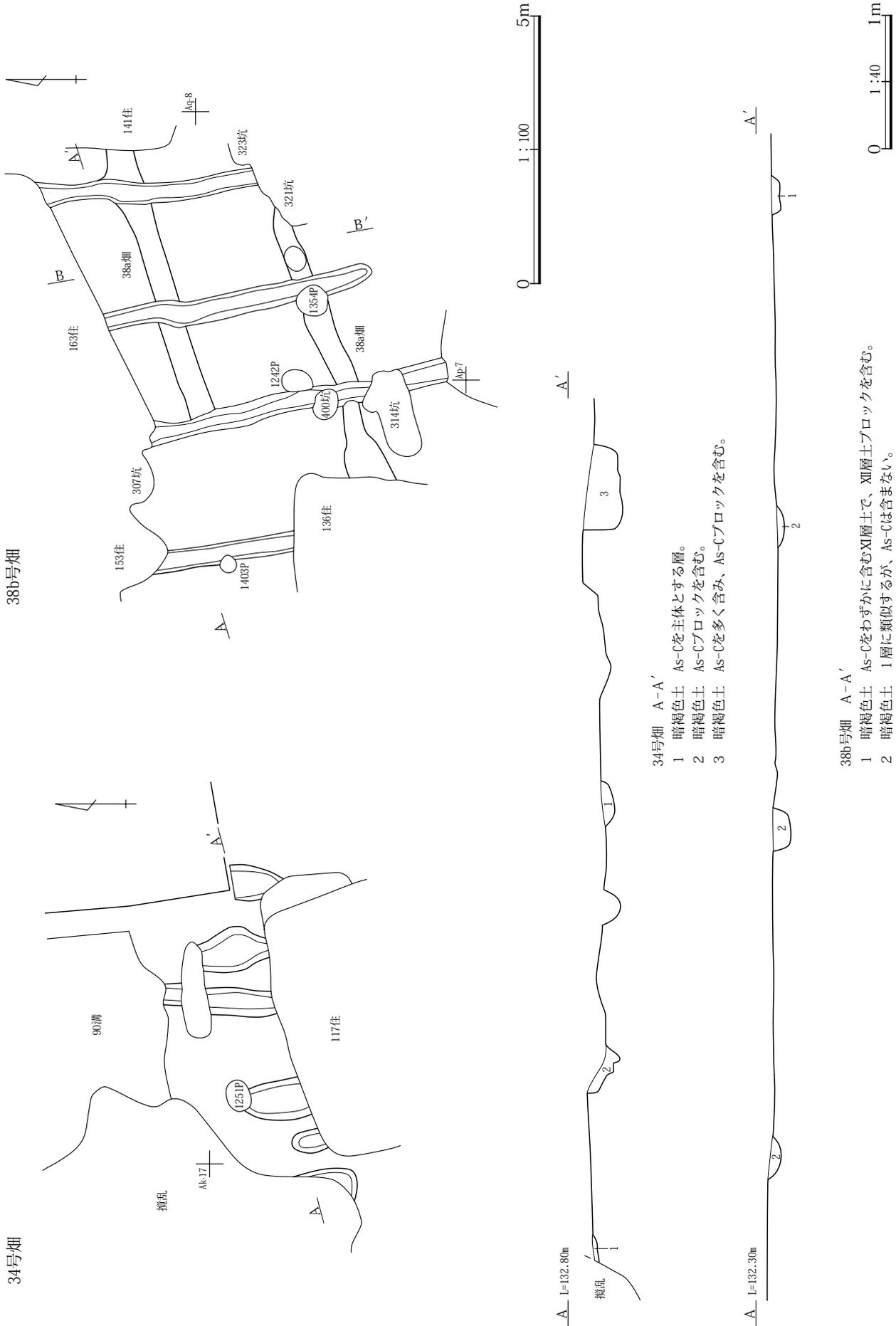
37号畑 A-A'

- 1 暗褐色土 As-C・二ツ岳系軽石・As-Bを含む暗褐色土で、粘性なし。(中～近世土)
- 2 暗褐色土 As-Cを濃密に含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを多量に含む暗褐色シルト。
- 4 暗褐色土 As-Cを含まない暗褐色シルト。

33b・37号畑



第974図 32・33b・37号畑



第975図 34・38b号畑

第2項 田口下田尻遺跡

(1) 竪穴住居

13号住居(第976・977図 P L.222・223・309)

位置：B1～Bn-0・1グリッド 形状：隅丸長方形？

規模：(5.54)m×5.26m 残存深度：0.69m 主軸方位：

E-18°-N 埋没土：上層にAs-C純層が堆積し、下層

はXI層土類似の土が主体。柱穴：未検出 炉：床面中

央の東に偏った位置に、0.75×0.40mの東西に長軸を有

する楕円形の浅い掘り込みとして検出した。炉内には炭

化物と焼土ブロックを少量含むXI層土が充填しており、

東寄りの炉底にスポット的に焼土が形成されていた。ま

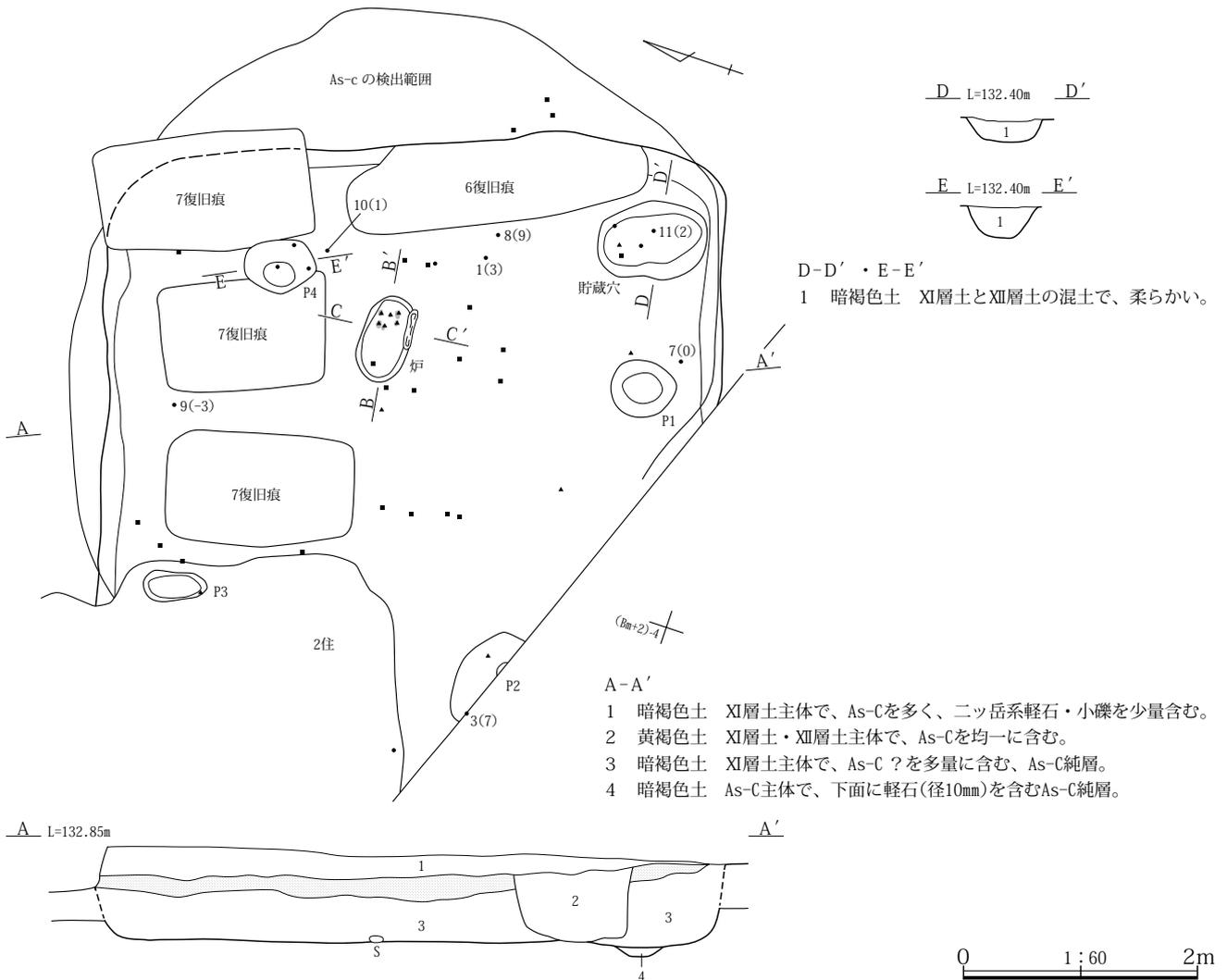
た、楕円形平面の南東側に長さ35cm、幅20cmほどの扁平

な楕円礫を炉の長軸に合わせて東西方向に埋め込んでい

た。いわゆる「枕石」と呼ばれている施設と考えられる。

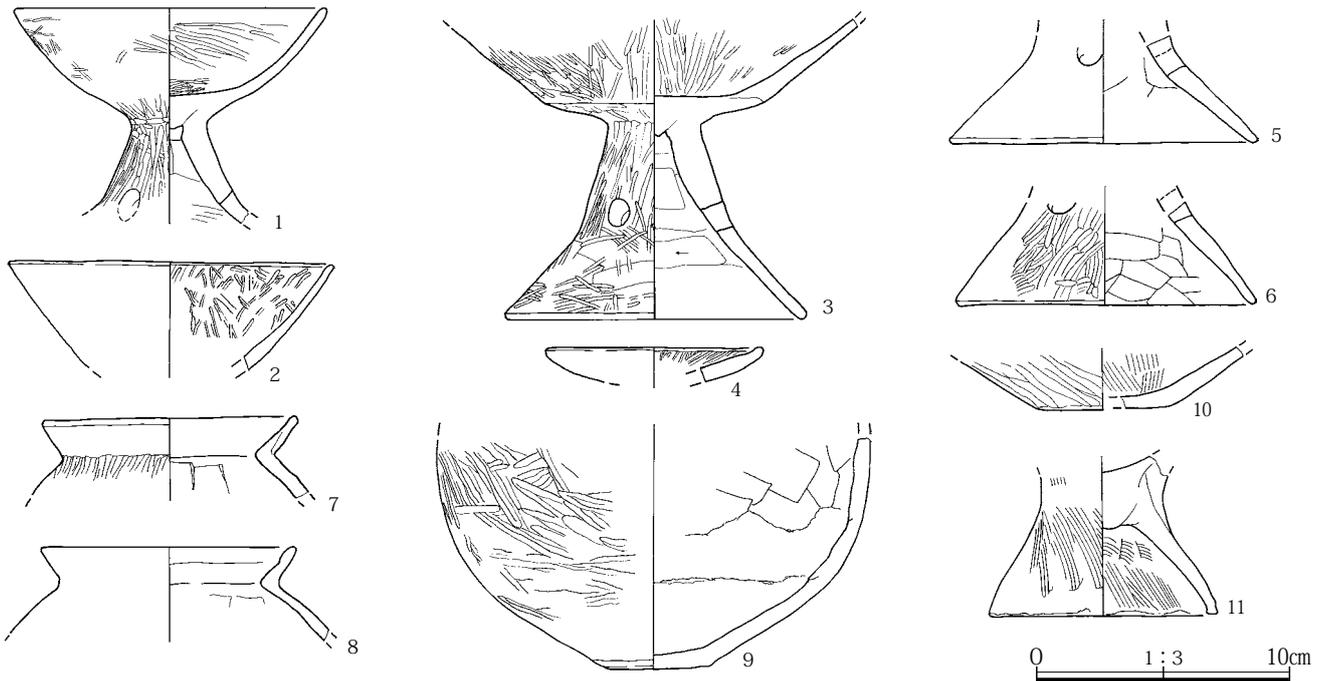
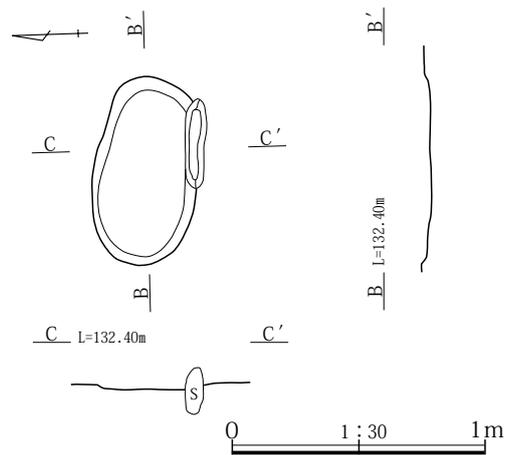
遺物：床面付近から高坏(1)・壺(9)が、貯蔵穴底部か

ら11の台付甕が出土した。重複：北西コーナー部で2号住居と重複しており、検出状況から13号住居→2号住居である。また、31号土坑や復旧痕との重複によって東壁の一部や床面が削平されている。所見：1面調査において復旧痕の壁面にAs-C純層の堆積が確認され、その堆積範囲が径6mほどの円形となるものと考え、当初17号土坑として調査を開始した。南北方向にセクションベルトを設定してAs-Cを取り去ったところ浅い窪地状にしかならず、一見すると自然地形のようであった。その後、セクションベルトを残しながらさらに掘り下げXI層土中で平面確認を進めた時点で、XI層土主体の土によって埋没した隅丸長方形を呈する住居平面を確認することができた。住居床面からAs-C純層底面までは、もっとも浅い場所で0.35mほどあり、住居がほとんど埋没して窪地化した時点でAs-Cが堆積したものと考えられる。床面はXI層土中に平坦に構築されているためシルト質であり硬化



第976図 13号住居

した面はまったく見られない。貯蔵穴は、南東コーナー部に検出した0.95×0.69m、深さ0.20mの楕円形を呈する掘り込みと見られ、底面近くから甕の破片が出土した。ピット状の掘り込みはP 1(径0.52m、深さ0.18m、円形)、P 2(0.95×(0.30)m、楕円形)、P 3(0.55×0.25m、深さ0.27m、楕円形)、P 4(0.60×0.46m、深さ0.30m、楕円形)の4カ所を検出したが、配置が住居平面と合っていないため、柱穴とは判断しなかった。 時期：3世紀後半



第977図 13号住居炉・出土遺物

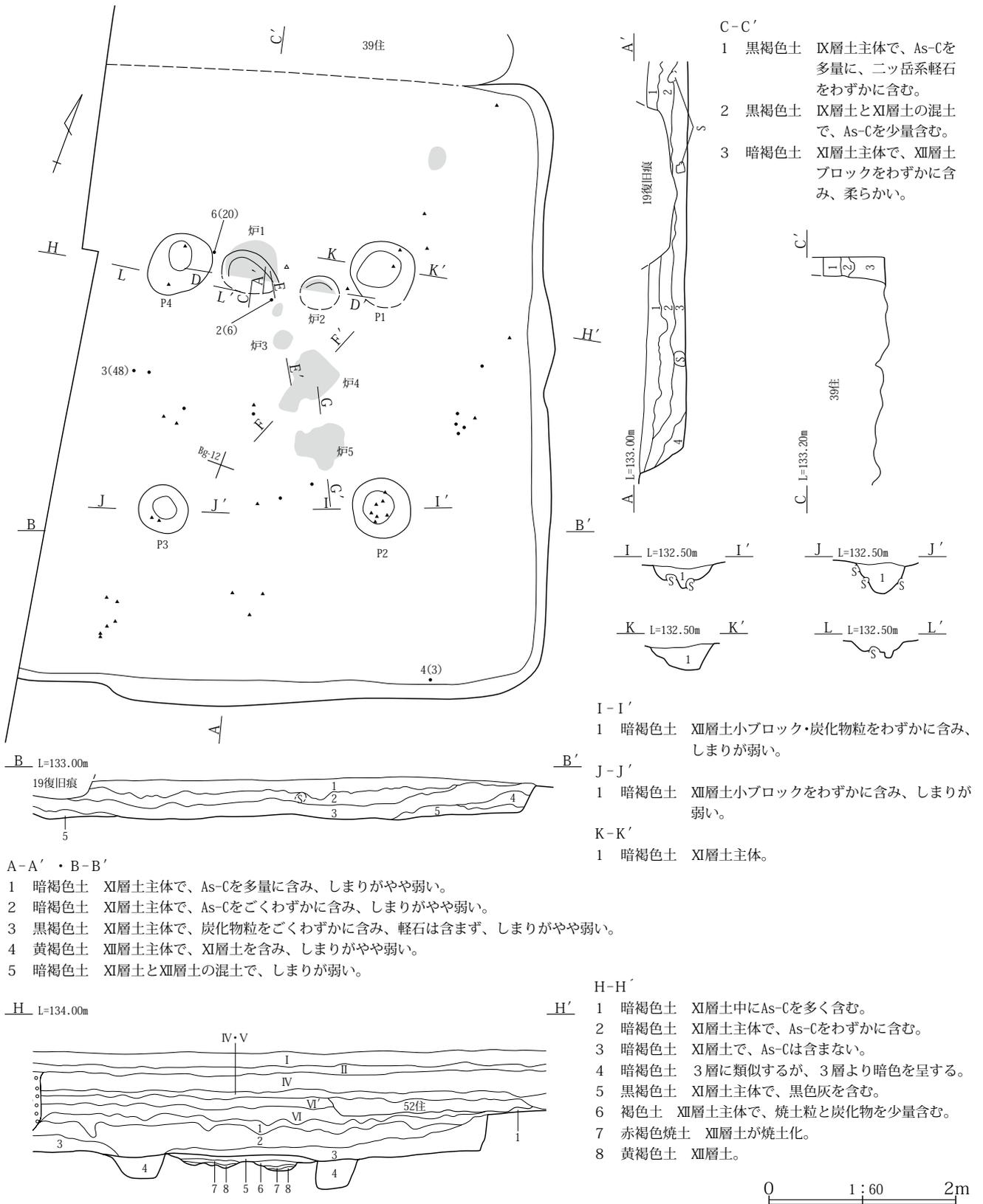
51号住居(第978・979図 P L.223・309)

位置：Bf・Bg-11・12グリッド 形状：隅丸長方形？
 規模：6.61m×(5.56)m 残存深度：0.45m 主軸方位：N-22°-W 埋没土：上層はIX層土主体で、下層はXI層土主体でAs-Cをまったく含まない。 柱穴：床面の精査でXI層土中に掘り込まれたP 1(径0.69m、深さ0.29m、円形)、P 2(径0.61m、深さ0.28m、円形)、P 3(径0.54m、深さ0.36m)、P 4(0.76×0.61m、深さ0.30m、楕円形)の4カ所が柱穴と考えられ、P 1-P 2間は2.60m及びP 3-P 4間は2.76m、P 4-P 1間は2.10m及びP 2-P 3間は2.30mである。 炉：柱穴で囲まれた範囲内に大小6カ所の焼土面を検出し、いずれも炉と考えた。中でもP 1-P 4間に検出した炉1、炉2及び中央の炉4の焼土形成が比較的顕著であった。 遺物：埋没

土中を含めて遺物出土は極めて少なく、実測可能な遺物は掲載したもののだけである。南東コーナー部近くの壁際から出土した4の壺胴部破片は、胴部状半に格子を沈線施文されており、めずらしい遺物である。 重複：38・39・52号住居と重複しており、検出状況及び出土遺物などから51号住居→39号住居→38・52号住居と考えられる。 所見：調査区の境に位置していたため、二次の調査で全体を明らかにしたが、結果的に西壁部分は現道下にあるため調査することができなかった。先行調査した北側で51号住居と命名し、南側調査では同遺構名を踏襲しなければならなかったが、114号住居と新たな遺構名で調査を進めてしまったため、整理段階で114号住居を欠番とし、51号住居に統一した。埋没土上層はAs-C密度の高く、ブロック状ではあるがAs-C主体の部分も観察され、下層

にはまったくAs-Cが含まれていない。埋没土中に明らか
なAs-C純層が確認できたわけではないが、下層の状況か
らAs-C降下以前の段階で住居埋没が始まっていたことは
明らかであることから、第Ⅱ期として扱った。床面はⅫ

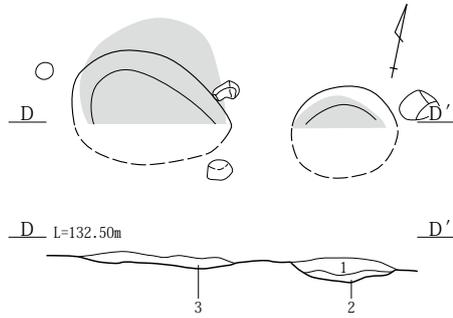
層土中に平坦に構築されており、床面下はすぐに小礫土
体の礫層面となっており、掘り方はまったく行われてい
ない。 時期：5世紀前半か



第978図 51号住居

第6章 3面の調査 (古墳時代中期～前期)

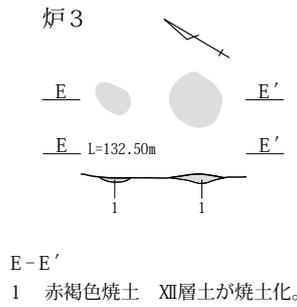
炉1・2



D-D'

- 1 暗褐色土 XI層土とXII層土の混土で、焼土粒を少量含む。
- 2 赤褐色焼土 XII層土が被熱。XI層土ブロックをわずかに含む。
- 3 褐色土 XII層土主体で、XI層土ブロック・焼土粒をやや多く含む。

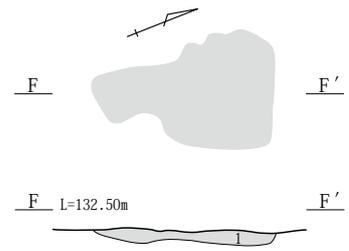
炉3



E-E'

- 1 赤褐色焼土 XII層土が焼土化。

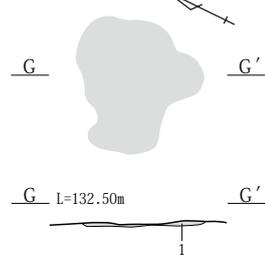
炉4



F-F'

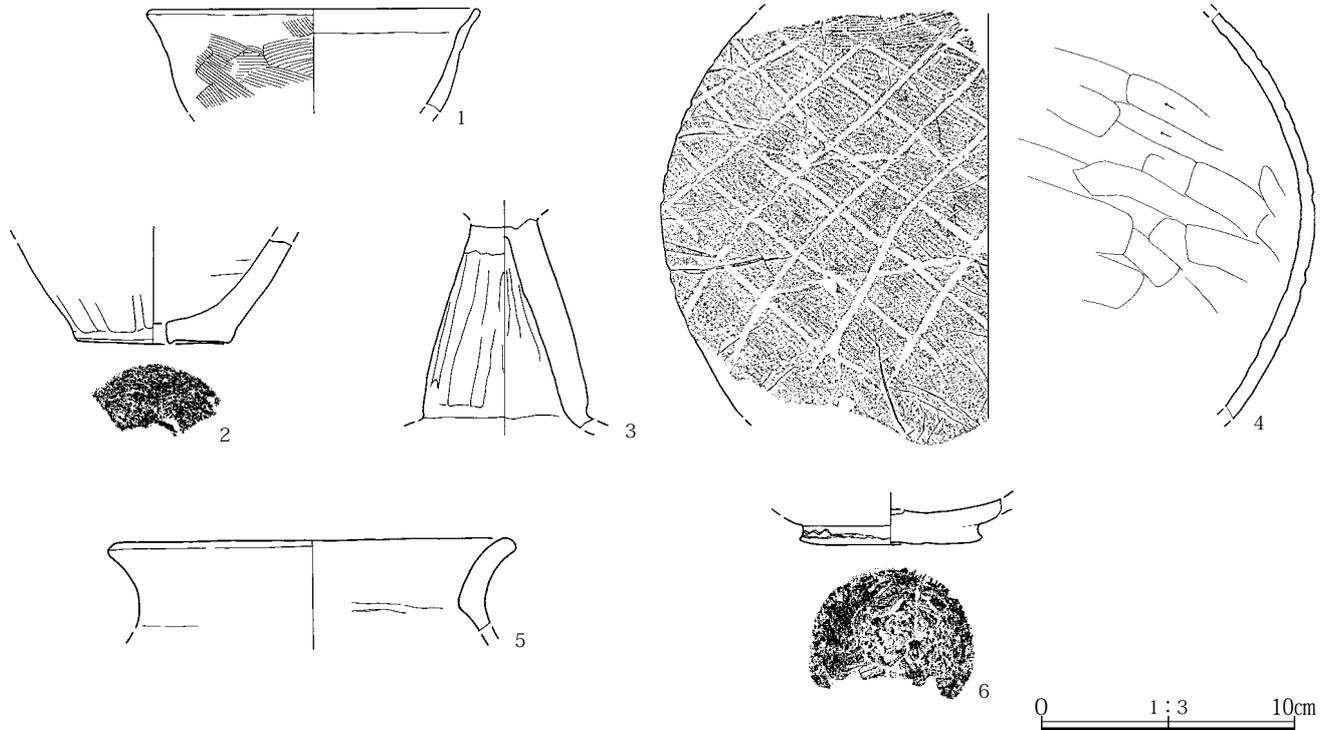
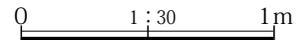
- 1 赤褐色焼土 XII層土の焼土化で、XI層土ブロックを含むが、根などによるものと思われる。

炉5



G-G'

- 1 赤褐色焼土 XII層土の焼土化で、XI層土ブロックを含むが、根などによるものと思われる。



第979図 51号住居炉・出土遺物

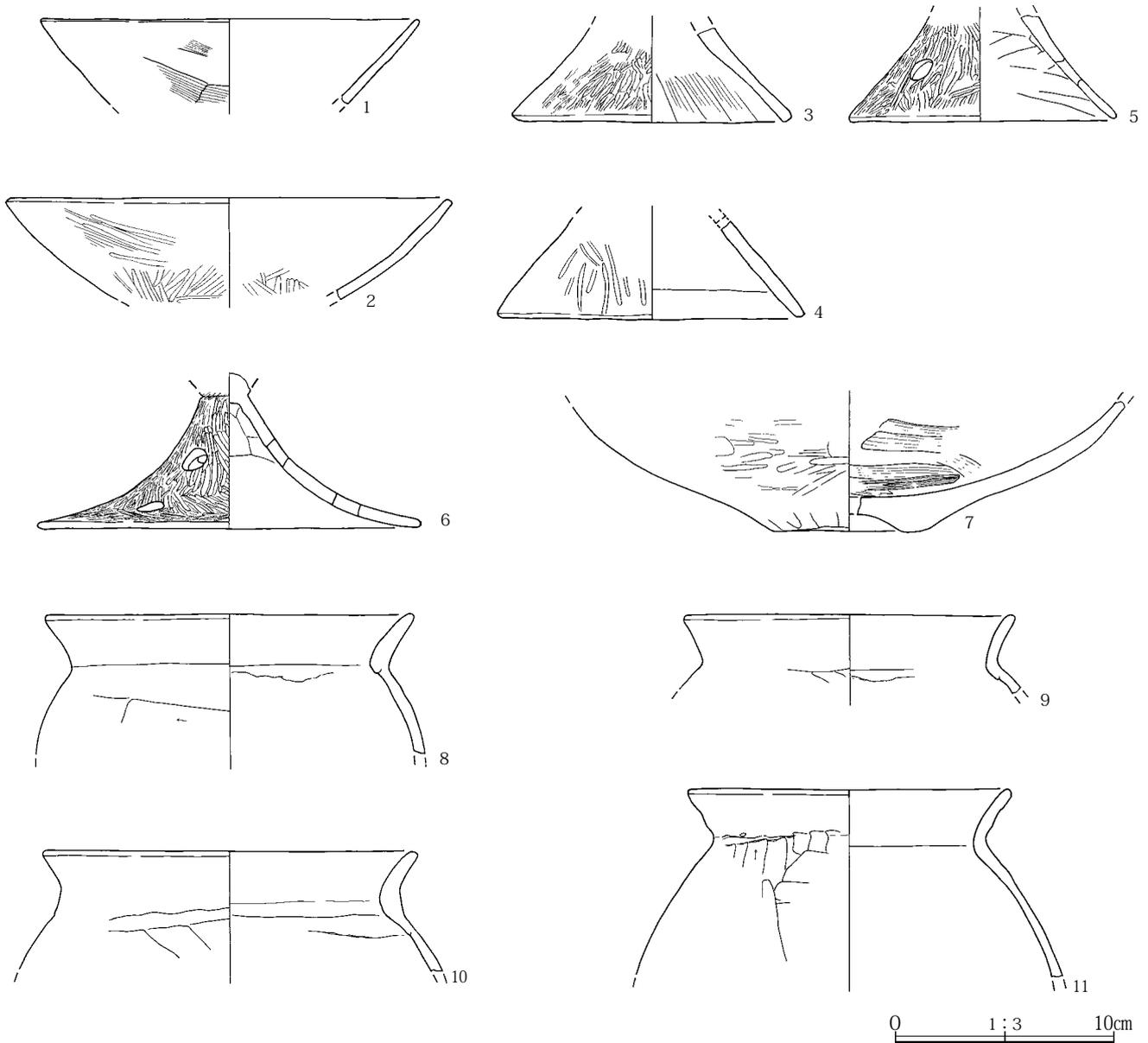
64号住居(第980～982図 P L.224・310)

位置：Bq・Br- 8・9グリッド 形状：隅丸長方形 規模：(5.42)m×5.13m 残存深度：0.70m 主軸方位：E-21°-N 埋没土：床面上0.40mほどの位置にAs-Cの純層が堆積しており、下層はXI・XII層土類似の土層が堆積していた。柱穴：床面となっていたXII層土よりもやや濁った色調で、炭化物粒をわずかに含む土が堆積していたP 1(0.63×0.55m、深さ0.50m、不整楕円形)、

P 2(0.61×0.50m、深さ0.46m、不整楕円形)、P 3(径0.52m、深さ0.58m、円形)、P 4(径0.50m、深さ0.40m、円形)の4カ所を検出した。P 1-P 2間2.50m、P 3-P 4間2.40m、P 4-P 1間1.85m、P 2-P 3間1.95mである。 炉：柱穴(P 1)の際で径0.40m及び0.32mの円形を呈する2カ所の焼土部分が検出され、浅い窪み状となっておりわずかではあるが灰の残存も確認されたことから炉と判断した。 遺物：遺物の多くは床面から

わずかに上位から出土したものであり、13～21の棒状礫が北壁寄りの中央部床面から出土したものである。高坏の脚部2点(5・6)は南西部から、2の高坏坏部はP 4の上部、7の壺底部はP 1とP 4間から出土したもので、出土位置はAs-C層下部よりも下位からの出土である。北東部から出土した甕2点(9・11)と弥生土器の壺(12)は、As-C堆積後の埋没土中からの出土である。109号住居と重複しており、検出状況及び土層断面観察から64号住居→107号住居→109号住居である。 所見：調査区境に位置しており二次の調査を行ったが、東壁部は国道17号下にかかるため検出することができなかった。南側調査区(I区)で64号住居として調査を行った住居に北側調

査(Ⅲ区)で新たに106号住居の番号を付してしまったため、整理時点で106号住居を欠番として64号住居に統合した。埋没土の項目で述べたように、埋没土中層にAs-C純層の堆積が確認され、これより下層にはAs-Cの含有がないことから、As-C降下時には廃棄され埋没が進んでいたことがわかる。南西コーナー部に検出した1.15×0.85m、深さ0.30mの楕円形の掘り込みが貯蔵穴になるものと考えられる。また、P 1-P 2の中間のやや南寄りにP 5(径0.35m、深さ0.09m、不整円形)を検出した。屋内に炭化材の出土は見られなかったが、南東部の壁寄りの位置に炭化物の広がりが見出されていることから焼失している可能性がある。 時期：3世紀後半

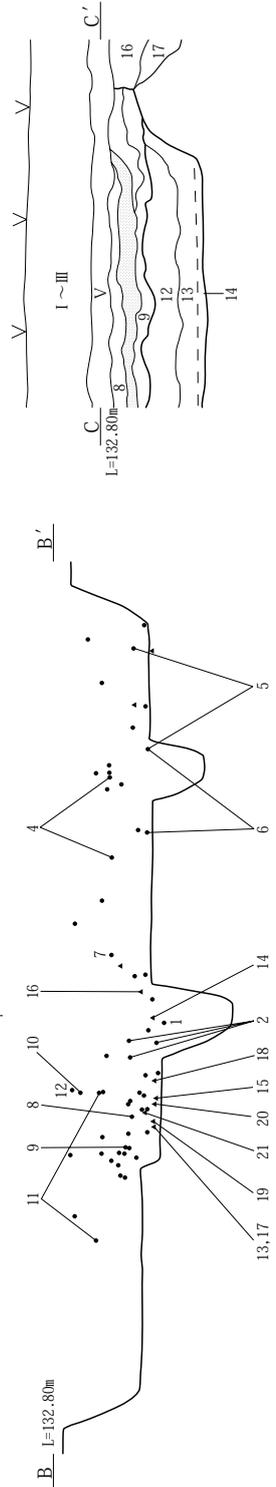
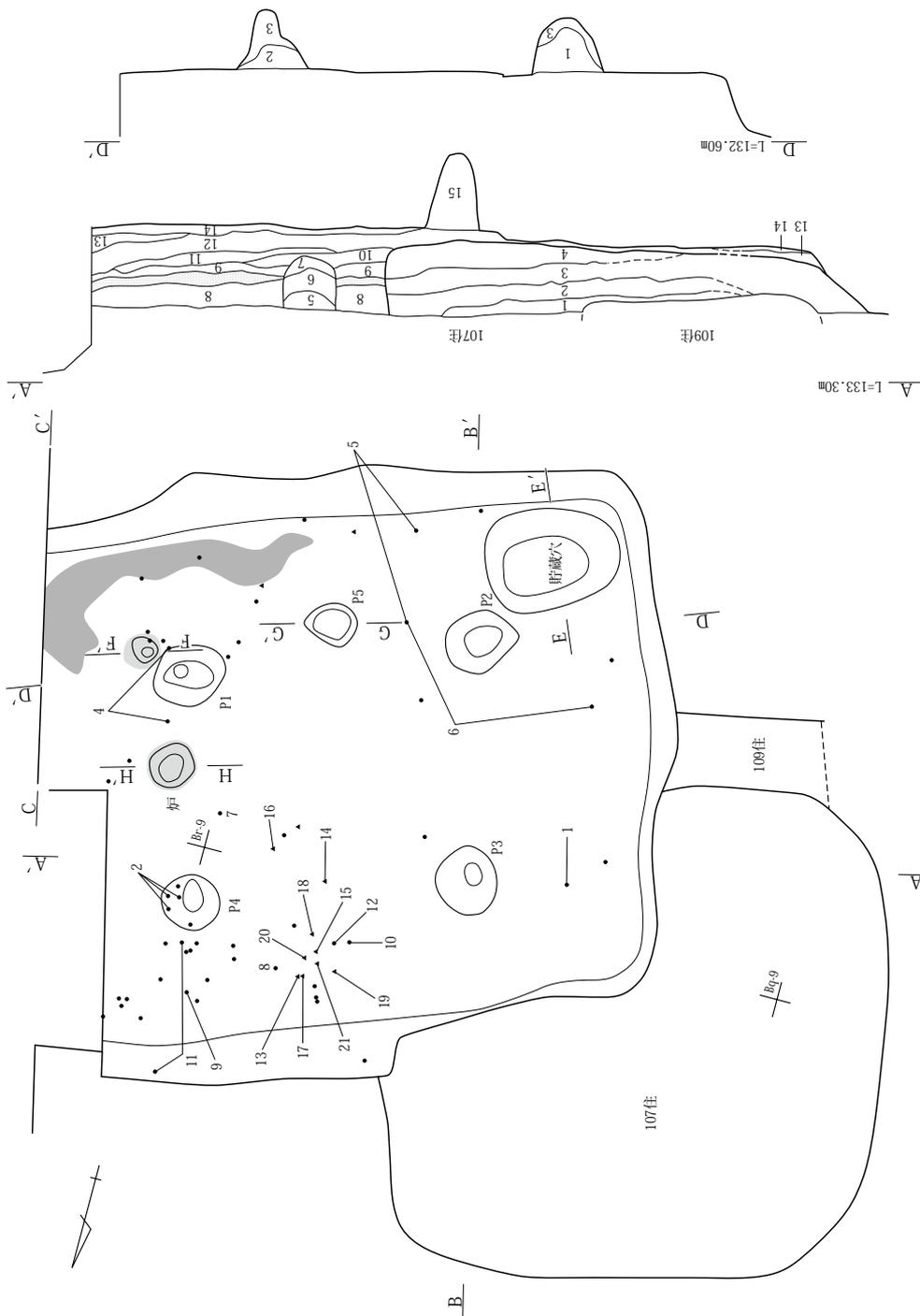


第980図 64号住居出土遺物(1)

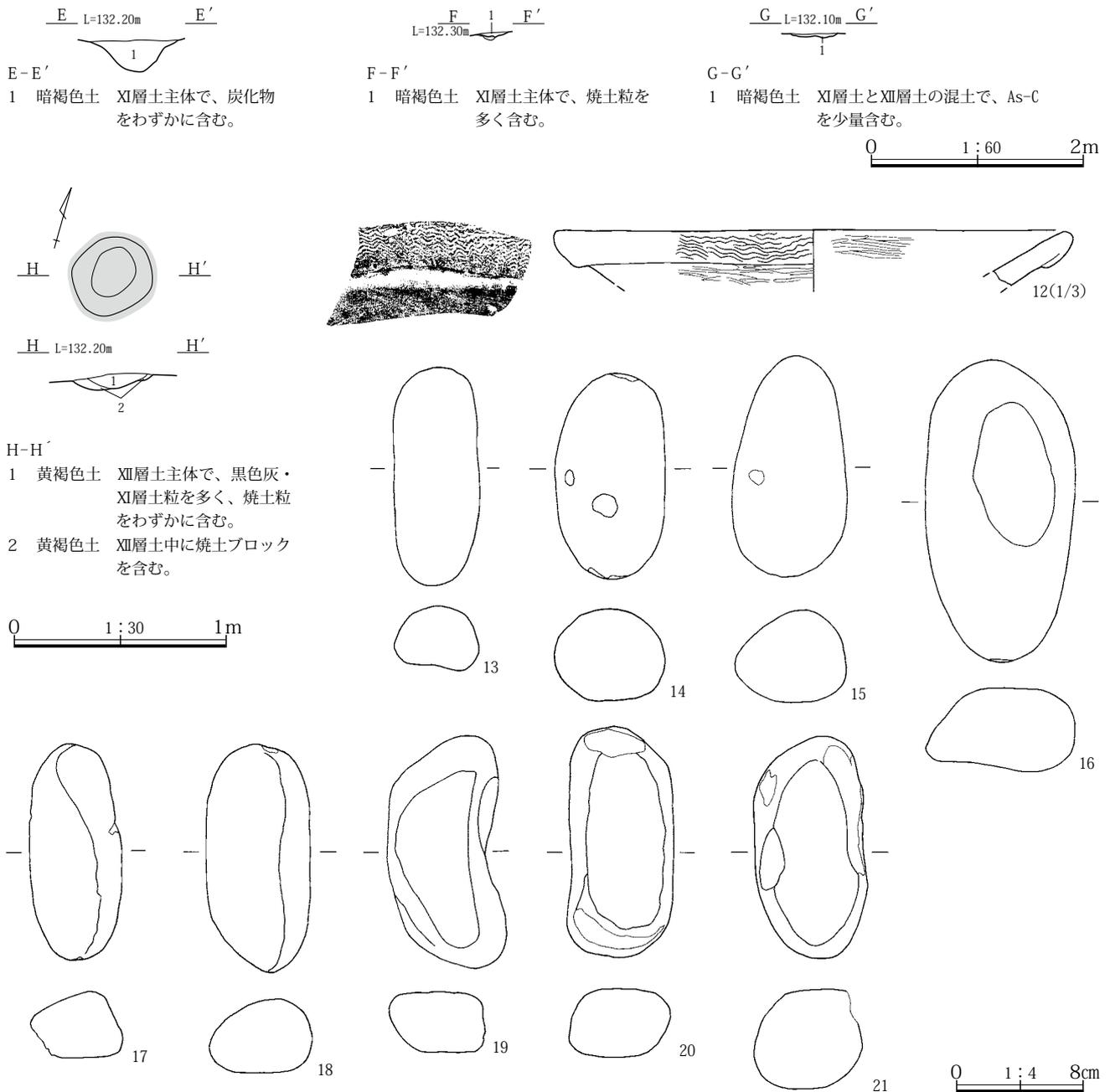
第6章 3面の調査 (古墳時代中期～前期)

- A-A'・C-C'
- 1 褐色土 暗褐色土をブロック状に、As-Cを少量含み、しまりが強い。
 - 2 暗褐色土 As-Cを斑状に含む。
 - 3 暗褐色土 As-Cを少量含み、しまりがやや弱い。
 - 4 暗褐色土 As-Cを少量、炭化物をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。
 - 5 暗褐色土 As-Cを多量に含む。
 - 6 暗褐色土 As-Cを多量に含む。
 - 7 にぶい黄褐色土 6層より少ないが、As-Cを多く含むシルト質土。
 - 8 暗褐色土 As-Cを多量に含む。
 - 9 暗褐色土 As-Cをごくわずかに含むシルト質土。
 - 10 暗褐色土 含有物を含まないシルト質土。
 - 11 褐色土 炭化物をわずかに含むシルト質土。
 - 12 暗褐色土 XI層土主体で、一部にXI層土ブロックを含む。
 - 13 暗褐色土 12層と類似するが、炭化物をわずかに含む。
 - 14 褐色土 XI層土。
 - 15 褐色土 XI層土ブロックとXI層土ブロックの混土で、As-Cは含まない。
 - 16 暗褐色土 VII層土主体で、下面にXI層土粒を多く含む。
 - 17 暗褐色土 XI層土・XI層土ベースで、As-Cを均一に含む。

- D-D'
- 1 暗褐色土 XI層土に類似するが、炭化物をわずかに含み、As-Cは含まない。
 - 2 黄褐色土 XI層土・XI層土ブロックの混土。
 - 3 黄褐色土 XI層土主体。



第981図 64号住居



第982図 64号住居ピット・炉・出土遺物(2)

104号住居(第983～985図 P L.225・310)

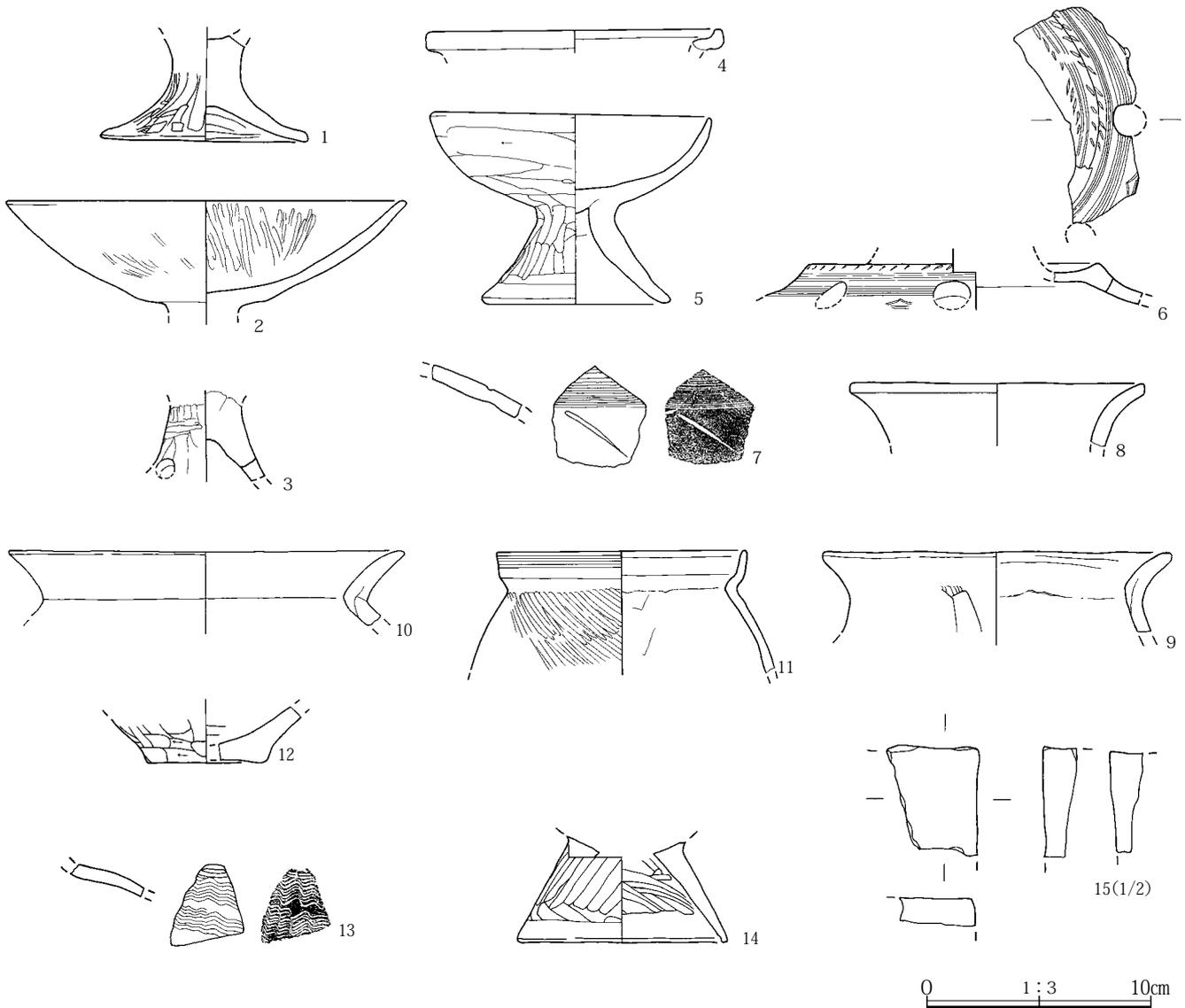
位置：Bn～Bp-11・12グリッド 形状：隅丸方形 規模：5.27m×5.15m 残存深度：0.37m 主軸方位：E-18°-N 埋没土：As-Cを多量に含むⅫ層土主体。

柱穴：P 1(径0.39m、深さ0.07m、円形)、P 2(径0.40m、深さ0.25m、円形)、P 3(径0.39m、深さ0.28m、円形)、P 4(径0.38m、深さ0.11m、円形)、P 1-P 2間及びP 3-P 4間が2.40m、P 4-P 1間及びP 2-P 3間が2.35mとなる4カ所を柱穴と判断した。どの柱穴もⅫ層土類似でやや暗色を呈する土で埋没していた。

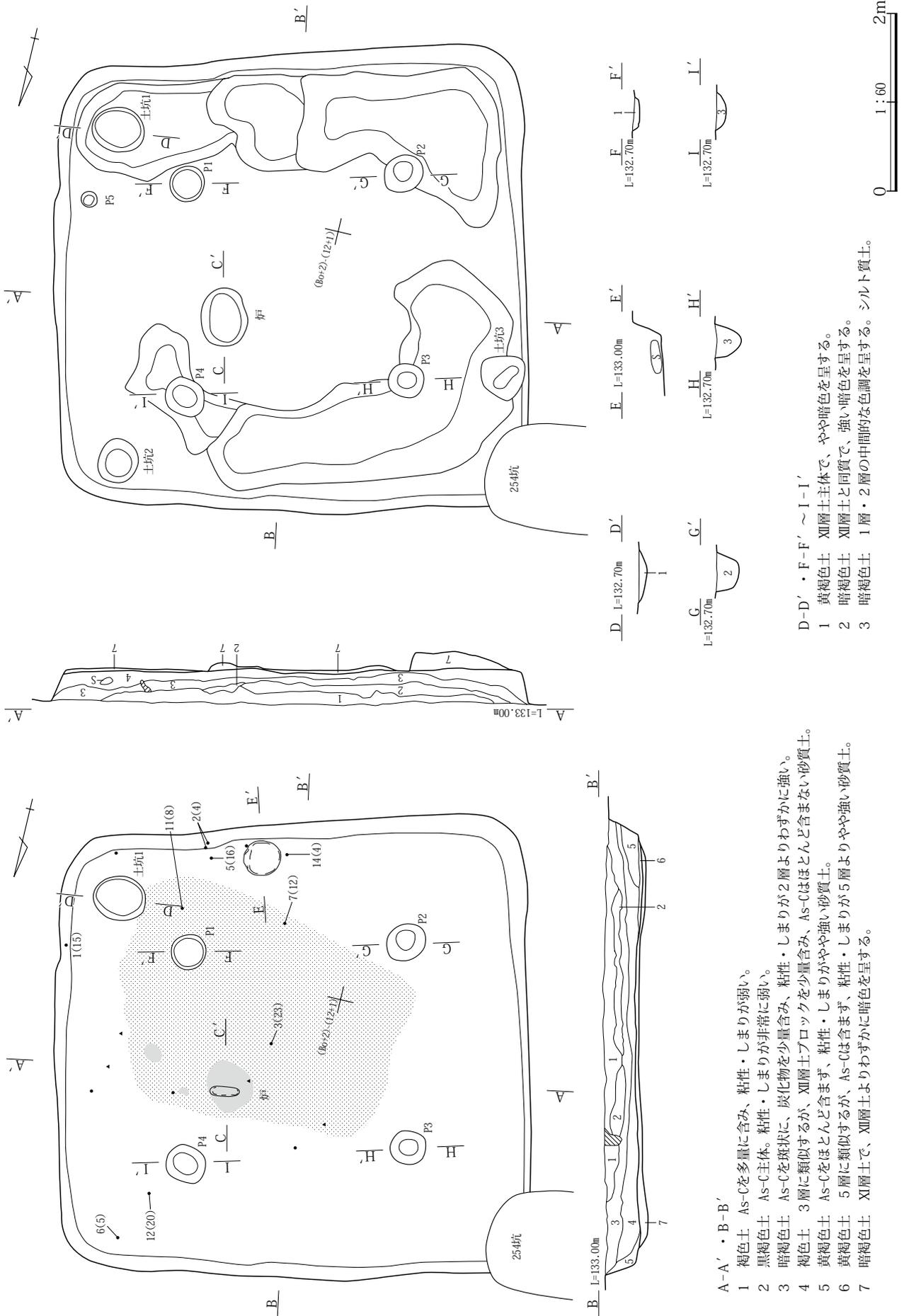
4カ所ともに深さが柱穴として機能し得るのが問題となるものと考えたため、柱穴位置にトレンチを設定して断面を観察したが、下部に掘削が及んでいることは確認されなかった。 炉：住居中央のP 4寄りに検出した。径0.50mほどの不整円形となる不明瞭な焼土面が形成されており、中央に枕石と見られる長軸が30cmほどの礫が据えられていた。礫の一部は被熱による変色とわずかに炭化物の付着が見られた。また、炉の西側に2カ所ごくわずかの範囲ではあるが、焼土が形成されていた。 遺物：遺物出土は少なく、床面からわずかに上位から出土

している。高坏2点(2・5)と単口縁となつて思われる台付甕(14)は南壁際から、1の高坏は東壁際から、高坏(3)は中央部から、それぞれ出土したものである。重複：254号土坑に北西コーナー部を削平されている以外に住居との重複は認められない。所見：Ⅻ層土中で平面確認したもので、As-Cを多量に含むⅨ層土の範囲として容易に検出することができた。床面と15cmほどのAs-Cを含まないⅪ・Ⅻ層土を主体とする間層があり、最大で15cmほどの層厚のAs-C純層が堆積していた。床面はⅫ層土であり、炉の検出と合わせて中央部に硬化面が形成されていたことで、比較的容易に捉えることができた。床面の精査で、南東コーナー部に、土坑1(0.58×0.50m、深さ0.08m、楕円形)、北東コーナー部に土坑2(0.43m、深さ0.10m、円形)を検出したが、どちらが貯蔵穴なの

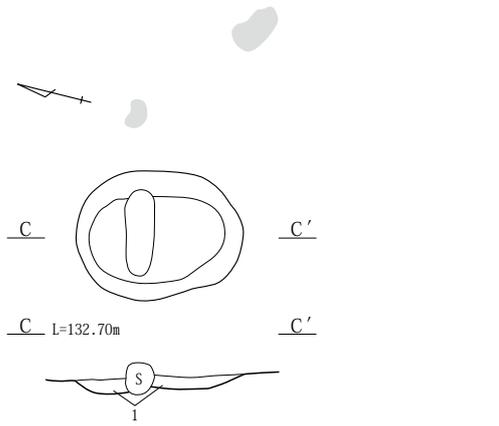
か判断はできなかった。壁は緩い傾斜を有しているが、土層断面に崩落土は観察されておらず、崩落などによる変形は受けていないものと考えられる。掘り方は、途切れてはいるが基本的に壁寄りの部分だけを帯状に掘削するタイプと考えられ、西壁北寄りに接して土坑3(径0.50m、深さ0.09m、不整円形)、東壁際にP5(径0.18m、深さ0.14m、円形)を検出した。壁際の掘り方も含めて、Ⅻ層土よりも微妙に暗色を呈する土で埋没していた。特筆されるのは、南壁中央の壁際から扁平な礫が水平の状態出土したことである。時期を問わなければ扁平な礫を多量に出土する住居の類例があるが、104号住居の例は、他住居と違って1点だけが壁に接する位置に水平に出土したものであり、出入口の施設として置かれたものと思われる。 時期：3世紀後半



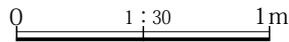
第983図 104号住居出土遺物



第984図 104号住居



C-C'
1 暗褐色土 XI層土主体で、XII層土をブロック状に、焼土小ブロックをごくわずかに含む。

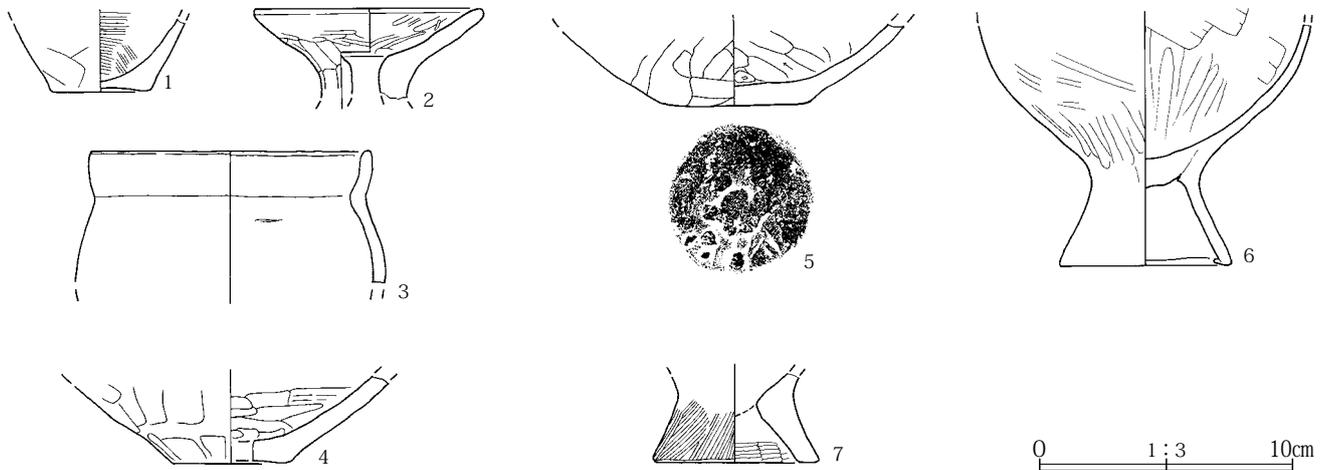


第985図 104号住居炉

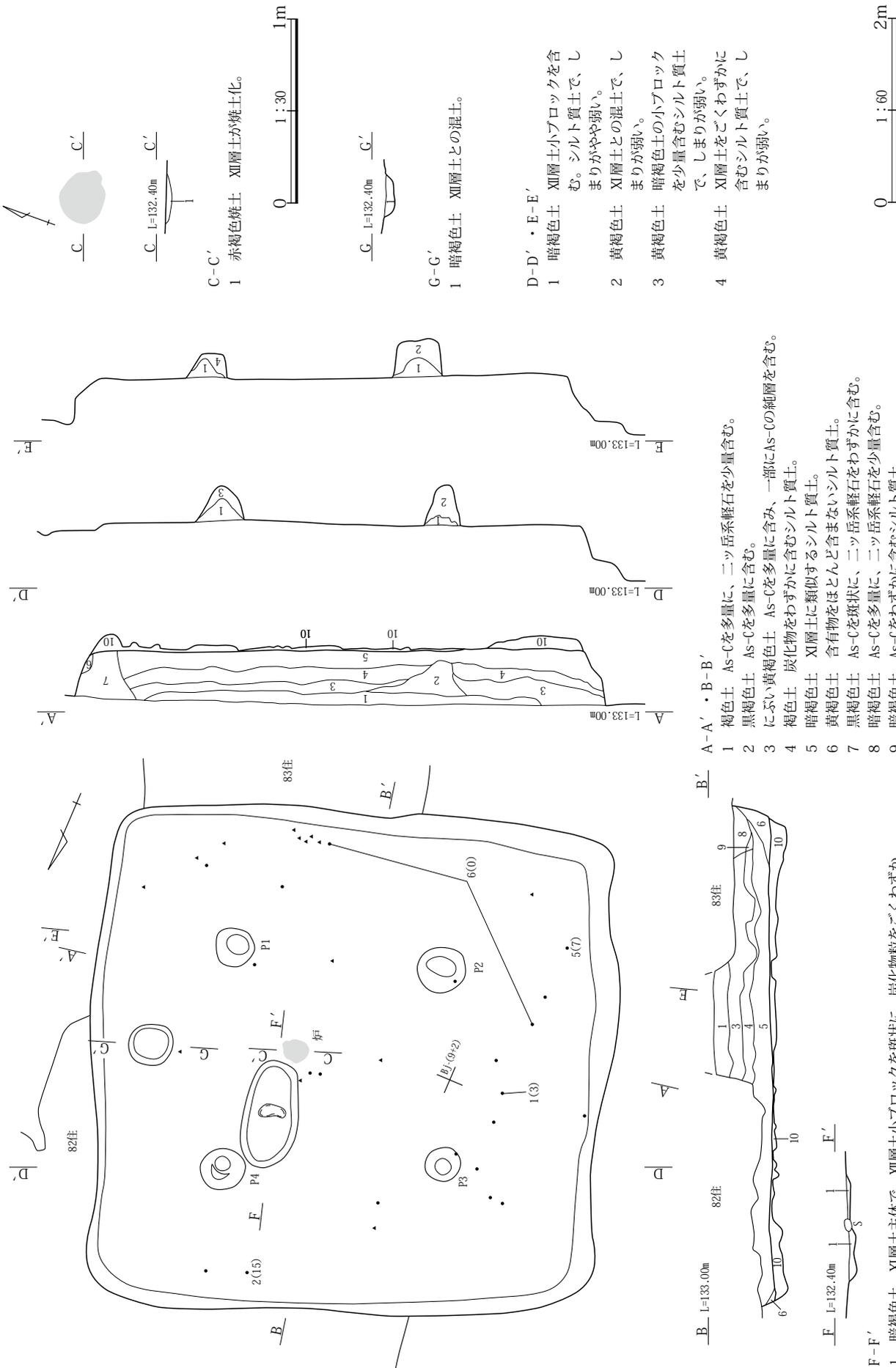
120号住居(第986・988図 P L.225・226・310)

位置：Bi・Bj- 8～10グリッド 形状：隅丸方形 規模：5.70m×5.47m 残存深度：0.61m 主軸方位：E-23°-N 埋没土：上層にAs-C主体の層があり、下層にはAs-Cの含有が認められない。柱穴：P 1(径0.42m、深さ0.23m、円形)、P 2(径0.51m、深さ0.42m、円形)、P 3(径0.35m、深さ0.41m、円形)、P 4(径0.45m、深さ0.40m、円形)の4カ所を柱穴と考えた。P 1-P 2間2.23m、P 3-P 4間2.40m、P 4-P 1間2.47m、P 2-P 3間2.18mで、XI・XII層土の混土で埋没していた。炉：中央やや東寄りに径0.25mほどの範囲の焼土が検出されており、ここを炉と判断した。また、この炉のすぐ北側に1.17×0.58m、深さ5cmほどの楕円形を呈するXI

層土に類似する暗色の土で埋没した土坑状の掘り込みがあり、その中央に長さ30cmほどの礫が水平に埋め込まれた状態で検出された。礫周辺に焼土の検出はなかったが、13号住居などに類例のある炉の枕石のあり方に酷似しており、炉であった可能性が高いものと考えている。遺物：壺(5)は南西コーナー部近くの比較的床面に近い位置から出土し、器台(2)は北東コーナー部近くの床面からやや上位から出土した。6の台付甕は、西寄りの上位から出土した破片と南東コーナー部近くの貯蔵穴上面の床面とほぼ同じ高さで出土した破片が接合したものである。重複：82・83号住居・14号溝と重複しており、検出状況及び出土遺物から120号住居→82・83号住居・14号溝である。所見：IX～XI層土中で平面確認をしたもので、埋没土上層にAs-C含有が多かったことから、容易に平面形を捉えることができた。埋没土上層に確実なAs-C層を確認したわけではないが、濃密にAs-Cを含む層の存在と、この層より下層にはAs-Cが含まれていないことから、住居の埋没がAs-C降下以前に始まっていたものと判断し第Ⅱ期として報告した。82・83号住居などとの重複によって東側は削平を受けているが、掘り込みが深かったために壁は全周残存していた。床面は、炉などの検出面として捉えたもので、平坦に構築されていたが硬化面の検出はなかった。貯蔵穴は南壁に接して東寄りの位置で検出された1.87×0.91m、深さ0.34mの楕円形を呈する掘り込みと考えられ、礫と土器破片がわずかに出土している。掘り方は、壁に沿って一定幅に掘り窪めており、ほぼ柱穴で囲まれた範囲は掘り残されていた。時期：3世紀後半



第986図 120号住居出土遺物(1)



C-C'
1 赤褐色焼土 XI層土が焼土化。

G-G'
1 暗褐色土 XI層土との混土。

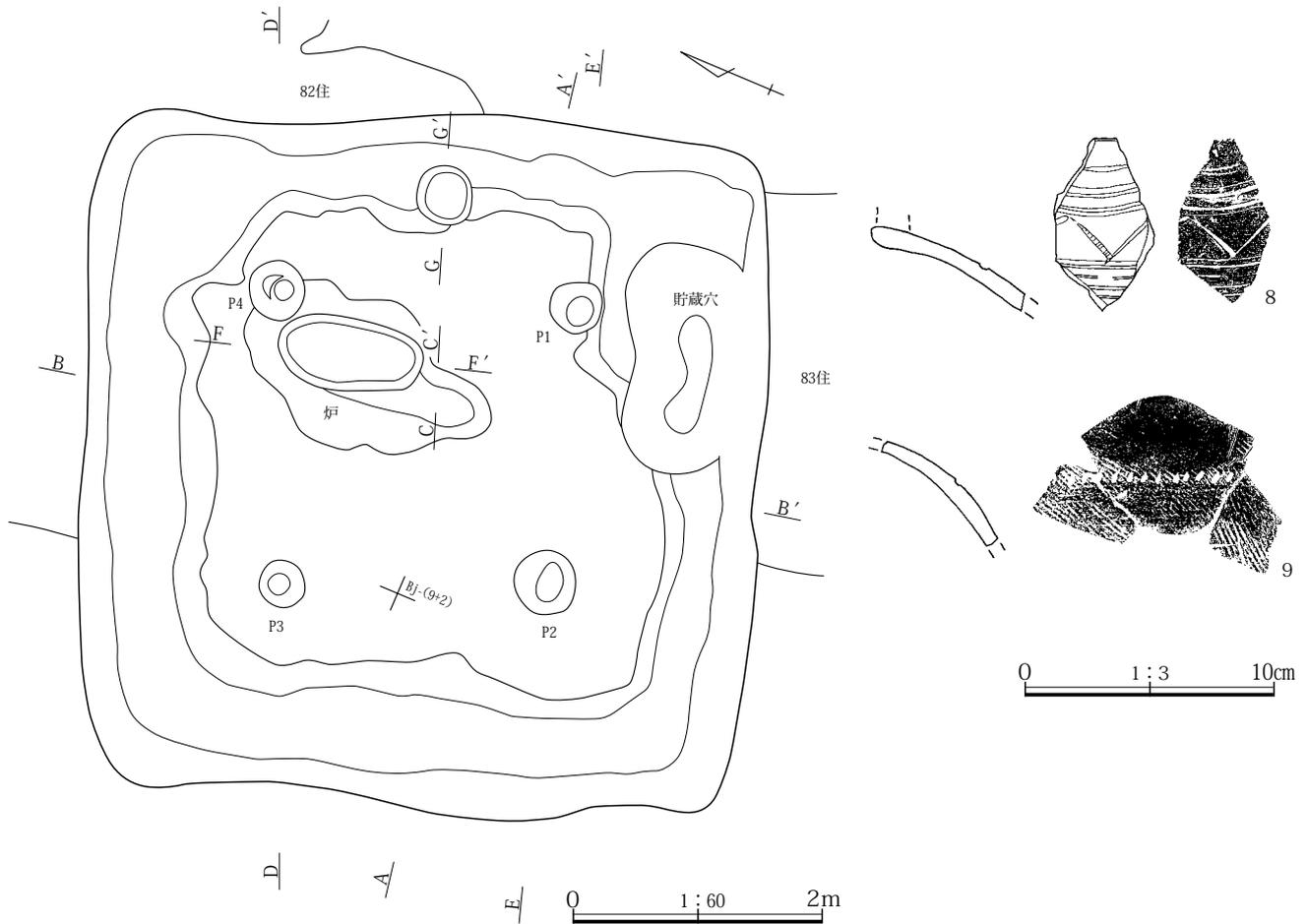
D-D'・E-E'
1 暗褐色土 XI層土小ブロックを含む。シルト質土で、しまりがやや弱い。
2 黄褐色土 XI層土との混土で、しまりが弱い。
3 黄褐色土 暗褐色土の小ブロックを少量含むシルト質土で、しまりが弱い。
4 黄褐色土 XI層土をごくわずかに含むシルト質土で、しまりが弱い。

A-A'・B-B'

1 褐色土 As-Cを多量に、二ツ岳系軽石を少量含む。
2 黒褐色土 As-Cを多量に含む。
3 にぶい黄褐色土 As-Cを多量に含み、一部にAs-Cの純層を含む。
4 褐色土 炭化物をわずかに含むシルト質土。
5 暗褐色土 XI層土に類似するシルト質土。
6 黄褐色土 含有物をほとんど含まないシルト質土。
7 黒褐色土 As-Cを多量に、二ツ岳系軽石をわずかに含む。
8 暗褐色土 As-Cを多量に、二ツ岳系軽石を少量含む。
9 暗褐色土 As-Cをわずかに含むシルト質土。
10 黄褐色土 As-Cを含まないXI層土で、XI層土に類似するが、わずかに暗色を呈する。

F-F'
1 暗褐色土 XI層土主体で、XI層土小ブロックを斑状に、炭化物粒をごくわずかに含み、しまりがやや弱い。

第987図 120号住居



第988図 120号住居掘り方・出土遺物(2)

(2) 畑

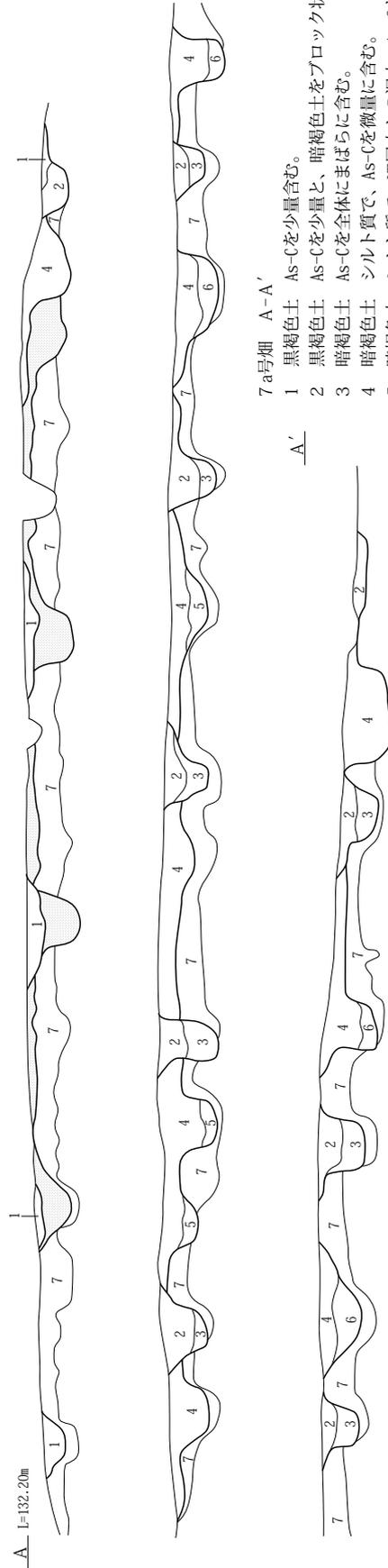
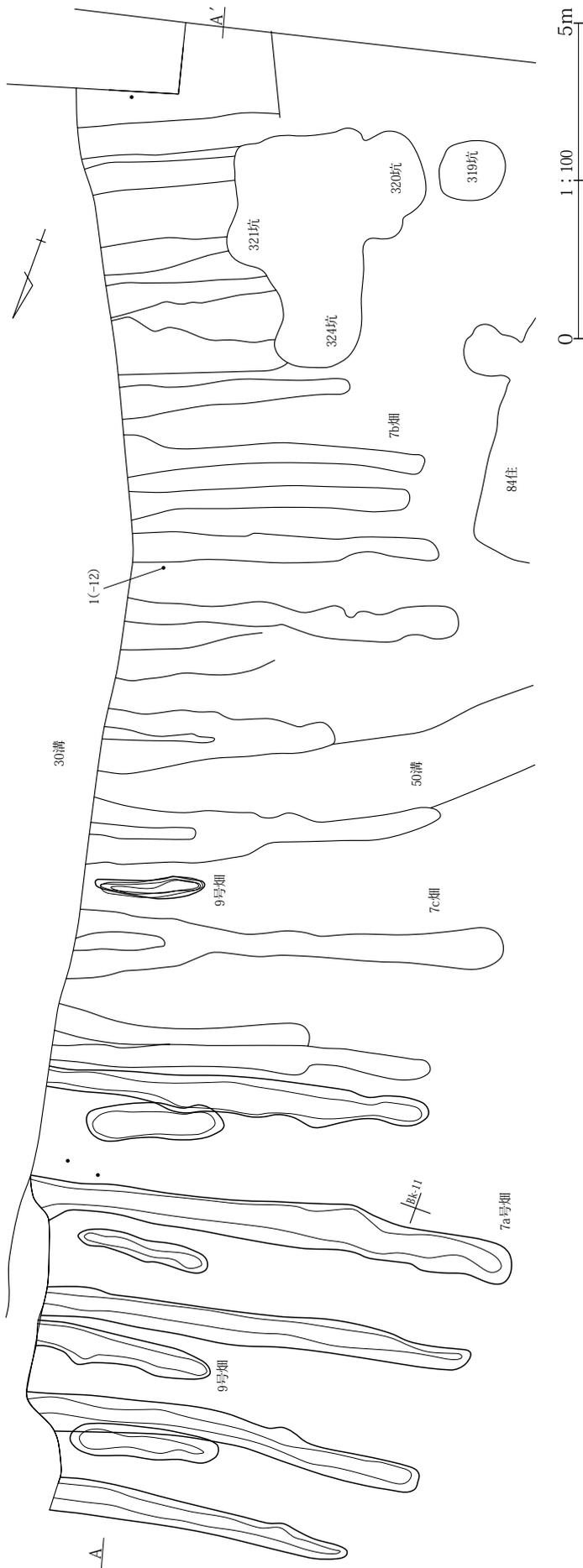
7a号畑(第989図 P L.226・227)

位置：Bj～Bl-10～12グリッド 検出サク数：5条
 規模：(4.70)～(7.64)m×0.38～0.72m 残存深度：0.12～0.23m
 サク間幅：1.40～1.70m サク方位：E-12°-N
 埋没土：As-C純層 遺物：なし 重複：7b・7c・9号畑と重複し、30号溝によって東側端部が削平されている。
 所見：調査区を南北に貫く谷の斜面の終わるあたりから平坦部にかけて、30号溝に直行する方向の25条のサクを検出した。一連の耕作である可能性が高いのであるが、サク間隔と方位、サク内の埋没土の状況を検討した結果少なくとも3回の畝立てが捉えられることから、古いものから7a～7cとして区別した。7b・7c畑は、埋没土中にAs-Cをブロック状に含むことから、As-C降下以降の耕作とみられるので、3面第I期に記述した。7a畑は、検出した畑の中では北寄りに位置するものである。As-Cの純層で埋没していることから、

As-C降下時点で畝立てされていたものと見られる。基盤層はⅫ層土であるが、下部にはⅫ層土とは明らかに色調が異なる厚さ0.05～0.15mほどの灰白色気味のシルト層が形成されており、これが耕作土であろう。畝の上部は平坦で、As-Cがブロック状に混じった黒褐色土が載っており、畝幅は0.90～1.00mほどである。サク埋没土上層は、7c号畑の埋没土に類似するものであることから、重なる位置に7c号畑と同時期の畑が作られていた可能性があり、畝上部はこの段階で耕作されたために平坦化しているものと思われる。

9号畑(第989図)

位置：Bk・Bl-9～12グリッド 検出サク数：5条 規模：1.60～(2.82)m×0.28～0.55m 残存深度：0.26m
 サク間幅：1.40～3.70m サク方位：E-7°-N
 埋没土：Ⅻ層土類似のシルト質土でやや色調が明るい。
 遺物：小片出土。 重複：7a～7c号畑の畝下に重複している。 所見：7a～7c号畑の調査後、全体に下



7a号畑 A-A'

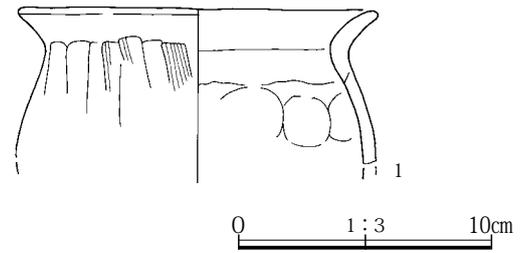
- 1 黒褐色土 As-Cを少量含む。
- 2 黒褐色土 As-Cを少量と、暗褐色土をブロック状に含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを全体にまばらに含む。
- 4 暗褐色土 シルト質で、As-Cを微量に含む。
- 5 暗褐色土 シルト質で、刈層土との混土。As-Cを微量に含む。
- 6 暗褐色土 刈層土主体で、As-Cをブロック状に含む。
- 7 灰白色土 刈層土に類似するシルト質土で、色調が明るい。

A'-A'

第989図 7a・9号畑

第6章 3面の調査（古墳時代中期～前期）

げた時点で7a～7c号畑の畝下にあたる位置に検出したもので、埋没土中にAs-Cがまったく含まれていないことから、降下以前に埋没していたものと考えられる。検出位置が重複していることから、7a～7c号畑と一連の耕作によるものと思われ、9号畑→7a畑→7b畑→7c号畑の順序で耕作されたものと思われる。



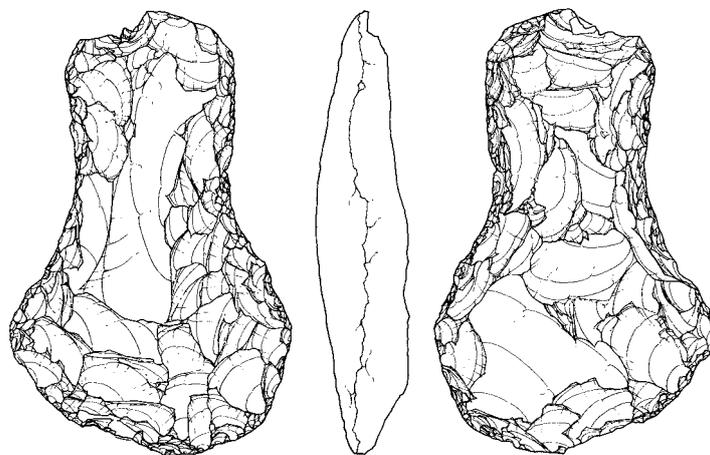
第990図 9号畑出土遺物

(3) 土坑

第25表 田口下田尻遺跡 II期土坑一覧表

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模 (m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考
241	土坑	227	Bo-7	楕円形	1.34×0.73×0.28	N-27°-W		上面にAs-C	未掲載

第7章 時期不明遺構と遺構外出土遺物



第7章 時期不明遺構と遺構外出土遺物

第1節 時期不明遺構

(1) 土坑

出土遺物や埋没土の状況からでき得る限り時期の特定をしたが、判断できなかった土坑について一覧を掲載した。

(2) ピット

ピットについては、第5章第1節においても触れたように、2面I期と見られるものが多い。しかし、建物を

構成できるような検出状況ではなかったため、配置は付図6・7に提示し、以下に計測値等の一覧を掲載した。

2節 遺構外出土遺物

遺構外とした遺物の中で、特に重要と判断した遺物について遺構外出土遺物として一括掲載した。特に石鍬や埴輪など、当遺跡では直接に対応するような遺構の検出されていないものも見られる。

時期不明土坑

第26表 田口上田尻遺跡 時期不明土坑一覧表

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考
21	土坑		As・At-19・20	楕円形	1.25×0.97×0.35	E-42°-N			
22	土坑		At-19	不整形	0.98×(0.58)×0.12				
27	土坑		Bb-18	楕円形	1.28×(0.91)×0.10				
45	土坑		Ad-20	不整形	0.95×0.94×0.11				
47	土坑		Ae・Af-19	不整形	(1.70)×1.01×0.22				
48	土坑		Af・Ag-19	不整形	(3.88)×(0.43)×0.23				
61	土坑		Af-21	不整形	(1.63)×(1.46)×0.47				
127	土坑		Ak-22	不整形	1.10×(0.48)×0.33				
145	土坑		Ah-18	楕円形	1.18×0.56×0.15	E-5°-N			
151	土坑		Af-16	楕円形	0.62×0.54×0.65	N-0°-E			
158	土坑		Ag-15	不整形	(0.75)×0.82×0.15				
162	土坑		Ag-15	不整形	2.12×(0.66)×0.23				
163	土坑		Ag-15	長方形	1.34×0.43×0.10	N-33°-W			
187	土坑		Ag-15	不整形	(0.44)×0.70×0.42				
194	土坑		Ah~Aj-13・14	不整形	(8.73)×(0.30)×-				
195	土坑		Af・Ag-14	楕円形	0.60×0.47×0.10	N-35°-E			
201	土坑		Aj-14	楕円形	0.45×(0.30)×0.10	N-16°-W			
203	土坑		Ai-15	不整形	(2.90)×1.40×0.65				
205	土坑		Af-16	不整形	(1.22)×(0.70)×0.40				
252	土坑		Bd-6	不整形	0.79×0.52×0.12				
267	土坑		Bd-5	不整形	1.21×-×0.45				
270	土坑		Ba-4	隅丸長方形?	1.96×0.86×0.43	N-11°-W			
271	土坑		As-11	楕円形	1.15×(0.90)×0.23	N-7°-W			
272	土坑		Ba・Bb-7	不整形	1.82×1.02×0.45		土師器		
279	土坑		Ap・Aq-9	隅丸長方形?	2.10×(1.76)×0.39	E-20°-N			
320	土坑		Ak・Al-12	不整形	1.82×0.75×0.09				
325	土坑		As-10	楕円形	0.48×0.44×0.50	E-0°-N			
378	土坑		Aq-11・12	不整形	3.12×1.52×0.07				
385	土坑		Ar-9	隅丸長方形?	1.00×0.65×0.10	N-14°-W			
389	土坑		Aq-9	楕円形	1.15×0.84×0.33	E-16°-N			
391	土坑		As-5	楕円形	0.91×0.72×0.12	N-24°-W			
395	土坑		At-4	円形	1.01×-×0.12				
401	土坑		Ao-6・7	楕円形	0.57×0.49×0.18	E-0°-N			
432	土坑		Al・Am-10	不整形	(2.45)×(0.14)×0.28				

第27表 田口下田尻遺跡 時期不明土坑一覧表

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考
47	土坑		Bn-2	楕円形	0.78×0.52×0.50	E-12°-S			
48	土坑		B1・Bm-1	楕円形	2.20×1.28×-	E-37°-N	石白		
77	土坑		Bj-3	楕円形	1.94×1.24×0.35	E-5°-N	灰釉陶器		
149	土坑		Bk-2	楕円形	0.78×0.59×0.25	N-4°-W			
150	土坑		Bk-3	楕円形	0.70×0.67×0.28	E-22°-S			
181	土坑		Be・Bf-14・15	不整形	1.58×(0.20)×0.25				

第2節 遺構外出土遺物

番号	挿図	PL	グリッド	平面形	規模(m)	主軸方位	出土遺物	埋没土	備考
195	土坑		Bo-19	不整形	0.74×(0.30)×0.29				
201	土坑		Bj-5	楕円形	1.15×0.43×0.14	N-20°-W			
226	土坑		Bj-5	円形	0.76×-×0.20				
228	土坑		Bj・Bk-3・4	楕円形	0.86×0.77×0.14	E-0°-N			
233	土坑		B1-4	不整形	(0.85)×(0.67)×0.10				
239	土坑		Bm-4	楕円形	1.60×1.32×0.41	N-12°-W			
242	土坑		Bo・Bp-5	円形	0.98×-×0.15				
245	土坑		Bj-3・4	楕円形	1.59×0.35×0.36	E-17°-S			
249	土坑		Bf-17	円形	0.82×-×0.10				
250	土坑		Bg-17	不整形	0.84×(0.74)×0.29				
274	土坑		Bh・Bi-8	不整形	0.84×0.60×0.18				
291	土坑		Bf-10・11	不整形	(0.80)×(0.45)×0.38				
292	土坑		Bf-10	不整形	0.40×(0.20)×0.54				
293	土坑		Bf・Bg-10・11	不整形	2.00×(0.55)×(0.33)				
297	土坑		Bi-12	不整形	0.73×0.34×0.17				
300	土坑		Bj-8	楕円形	1.30×1.15×0.19	E-10°-N			
301	土坑		Bj-7	楕円形	0.87×0.50×0.40	N-0°-E			
304	土坑		Bh-7・8	楕円形	0.90×0.63×0.15	N-29°-W			
326	土坑		Bn-13	楕円形	1.50×1.21×0.42	N-7°-W			
341	土坑		Bt-12	楕円形	1.01×0.74×0.21	E-2°-N			
352	土坑		Ca-7	不整形	0.76×(0.62)×0.18				
375	土坑		Cb-6	方形	1.05×0.78×0.26	N-10°-E			

ピット

第28表 田口上田尻遺跡 ピット一覧表

番号	グリッド	平面形	規模(m)	深さ(m)	備考	出土遺物
1	Bc-14	隅丸方形	0.51	0.11		
2	Ba-18	楕円形	0.68×0.50	0.50		
3	Aq・Ar-20	楕円形	0.57×0.48	0.45	VII層土	
4	Ar-19	円形	0.65	0.49	二ツ岳軽石	石製品
5	Ar-19	楕円形	0.58×0.41	0.27	XI層土	
6	As-19	楕円形	0.60×0.33	0.25		
7	As-19	不整形	—	0.26		
8	Ar-21	円形	0.26	0.39	XII層土	
9	Ar-20	不整形	—	0.20	XI層土	
10	Ar-20	円形	0.33	0.10	XI層土	
11	Ap・Ar-20	円形	0.48	0.63	XII層土	
12	As-19	楕円形	0.49×0.43	0.29	XI層土	
13	At-20	隅丸方形	0.20	0.26	XI層土	
14	As・At-20	楕円形	0.29×0.20	0.26	XI層土	
15	At-19	楕円形	0.35×0.24	0.26	XI層土	
16	At-20	不整形	0.40	0.17	XI層土	
17	At-20	不整形	0.35	0.23	XI層土	
18	At-20	楕円形	0.37×0.32	0.18	XI層土	
19	At-20	隅丸方形	0.24	0.11	XI層土	
20	At-20	不整形	0.35	0.29	XI層土	
21	Ar-21	不整形	0.34	0.31	XI層土	
22	At-19	隅丸長方形	0.43×0.36	0.47	暗褐色土・XII層土	
23	At-20	楕円形	0.58×0.38	0.34	暗褐色土・XII層土	
24	Ar-13	楕円形	0.53×0.43	0.20	XI層土	
25	Aq-14	不整形	0.31	0.15	XI層土	
26	Aq-14	不整形	0.34	0.23	XI層土	
27	Aq-13	円形	0.35	0.62	XI層土	
28	Ap・Aq-13	楕円形	0.47×0.40	0.45	XI層土	
29	Aq-13	隅丸方形	0.32	0.61	XI層土	
30	Ar-13	円形	0.40	0.27	XI層土	
31	Ar-13	不整形	0.28	0.18	IX層土	
32	Ar-13	楕円形	(0.23)×0.37	0.17	IX層土	
33	Ba-17	円形	0.59	0.32	IX層土	
34	Ba・Bb-17	楕円形	0.64×0.48	0.22	XI層土	
35	Bb-16	楕円形	0.66×0.58	0.49	IX層土	
36	Ba-17	円形	0.57	0.31	IX層土	
37	Bb-17	隅丸方形	0.42	0.12	XI層土	
38	Bb-17	不整形	0.61	0.18	XI層土	
39	Bb-16	楕円形	0.59×0.45	0.16	XI層土	
40	Bb-16	円形	0.38	0.18	IX層土	
41	Bb-16	楕円形	0.53×0.48	0.23	IX層土	
42	Bb-16	楕円形	0.30×0.22	0.13	XI層土	
43	Bc-15	楕円形	0.39×0.28	0.18	VII層土	
44	Bc-15	円形	0.43	0.14	IX層土	
45	Bd-15	楕円形	0.50×0.43	0.21	IX層土	
46	Bc-15	円形	0.41	0.15	IX層土	
47	Bc・Bd-14・15	隅丸方形	0.51	0.40	XII層土	
48	Bc-16	円形	0.32	0.27	VII層土	
49	Bc-16	隅丸方形	0.26	0.41	VII層土	
50	Bc-16	円形	0.26	0.27	VII層土	
51	Aq-20	隅丸方形	0.35	0.37	暗褐色土・XII層土	
52	Aq-20	不整形	0.35	0.43	暗褐色土・XII層土	金属製品
53	Aq-20	円形	0.20	0.16	暗褐色土・XII層土	
54	Aq-20	円形	0.24	0.31	暗褐色土・XII層土	
55	Aq-20	円形	0.30	0.57	暗褐色土・XII層土	
56	Aq-20	楕円形	0.33×0.25	0.57	暗褐色土・XII層土	
57	Aq-20	不整形	0.30	0.64	暗褐色土・XII層土	
58	Aq-20	円形	0.33	0.45	暗褐色土・XII層土	
59	Aq・Ar-20	不整形	0.34	0.51	暗褐色土・XII層土	
60	Aq-20	円形	0.25	0.40	暗褐色土・XII層土	
61	Ar-20	円形	0.24	0.39	暗褐色土・XII層土	
62	Aq・Ar-20	楕円形	0.52×0.35	0.40	暗褐色土・XII層土	
63	Ar-20	楕円形	0.32×0.25	0.40	暗褐色土・XII層土	
64	Ar-20	円形	0.29	0.27	暗褐色土・XII層土	
65	Ar-20	不整形	0.25	0.32	暗褐色土・XII層土	
66	Ar-20	円形	0.20	0.25	暗褐色土・XII層土	
67	Ar-20	楕円形	(0.20)×0.25	0.22	暗褐色土・XII層土	
68	Aq-20・21	隅丸長方形	0.65×0.45	0.26	暗褐色土	
69	Aq-20・21	不整形	—	0.13	暗褐色土	
70	Aq-21	楕円形	0.64×0.32	0.56	暗褐色土・XII層土	
71	Aq-21	円形	0.29	0.14	暗褐色土	
72	Aq-21	楕円形	0.33×0.29	0.45	暗褐色土・XII層土	
73	Aq-21	円形	0.26	0.31	暗褐色土・XII層土	
74	Aq-21	楕円形	0.26×0.22	0.37	暗褐色土・XII層土	
75	Aq-21	円形	0.30	0.43	暗褐色土・XII層土	
76	Ar-20	円形	0.24	0.28	暗褐色土・XII層土	
77	Ar-19	楕円形	0.28×0.24	0.48	暗褐色土・XII層土	
78	Ar-19	楕円形	0.43×0.32	0.49	暗褐色土・XII層土	
79	As-20	不整形	0.28	0.19	灰色粗粒砂・暗褐色土	
80	As-19・20	不整形	0.25	0.16	灰色粗粒砂・暗褐色土	
81	Ar-20	不整形	0.24	0.39	暗褐色土・XII層土	
82	Ar-20	円形	0.25	0.23	暗褐色土・XII層土	
83	Ar-20・21	円形	0.26	0.12	暗褐色土・XII層土	
84	Ap-20	円形	0.32	0.67	暗褐色土・XII層土	
85	Ar-21	円形	0.28	0.53	暗褐色土・XII層土	
86	Ar-21	円形	0.43	0.63	暗褐色土・XII層土	
87	Bb-16	楕円形	0.42×0.26	0.28	IX層土	
88	Bb・Bc-15	円形	0.37	0.21	XI層土	
89	Bb-15	不整形	0.25	0.32	XI層土	
90	Bb-15・16	楕円形	0.29×0.20	0.15	XI層土	
91	Bb-15・16	隅丸方形	0.35	0.41	IX層土	
92	Bb-15	不整形	0.33	0.21	VII層土	
93	Bb-15	楕円形	0.29×0.24	0.27	IX層土	
94	Bb・Bc-16	楕円形	0.55×0.45	0.16	VII層土	
95	Bb-15・16	楕円形	0.36×0.24	0.12	IX層土	
96	Bb-15	楕円形	0.33×0.27	0.06	XI層土	
97	Bc-15	不整形	0.23	0.19	暗褐色土・XII層土	
98	Bc-16	楕円形	0.24×0.18	0.18	XII層土	
99	Bb-17	楕円形	0.64×0.48	0.22	IX層土	
100	Ba-17	隅丸長方形	0.28×0.22	0.29	VII層土	
101	Ba-17	不整形	0.45	0.40	VII層土	
102	Ba-17	円形	0.23	0.21	IX層土	
103	Bb-17	円形	0.42	0.56	XII層土	
104	Ba・Bb-16	円形	0.47	0.28	IX層土	
105	Ba-18	不整形	0.22	0.31	暗褐色土・IX層土	
106	Bb-15	円形	0.42	0.17	XI層土	
107	Bc-15	楕円形	0.43×0.40	0.30	IX層土	
108	Bc-18	楕円形	(0.22)×0.45	0.16	V層土	
109	Bc-18	楕円形	(0.28)×0.40	0.32	IX層土	
110	Aq・Ar-15	隅丸方形	0.36	0.35	XII層土	
111	Ar-15	隅丸方形	0.49	0.31	XII層土	
112	As-15	楕円形	0.42×0.37	0.08	VII層土	
113	Bc-18	隅丸方形	0.30	0.13	IX層土	
114	Ae-20	不整形	0.39	0.23	V層土	
115	Af-20	円形	0.32	0.37	XII層土	
116	Ae-19	楕円形	0.42×0.31	0.26	V層土	
117	Ae-19	楕円形	0.69×0.55	0.23	V層土	
118	Ae-19	楕円形	0.44×0.30	0.23	V層土	
119	Ae-19	不整形	0.28	0.22	V層土	
120	Ae-19	不整形	—	0.23	V層土	
121	Ad-19	円形	0.31	0.36	V層土	
122	Ad-19	楕円形	0.35×0.29	0.36	V層土	
123	Ae-19	楕円形	0.35×0.23	0.35	V層土	
124	Ad・Ac-19	楕円形	0.69×0.40	0.28	XI層土	
125	Ad-19	楕円形	0.60×0.43	0.30	XI層土	
126	Ae-20	隅丸方形	0.72	0.15	IX層土	
127	Ae-20	楕円形	0.49×0.27	0.31	V層土	
128	Ae-20	楕円形	0.29×0.24	0.16	V層土	
129	Ad-20	円形	0.32	0.37	V層土	
130	Ae-22	不整形	—	0.21	V層土	
131	Ae-21・22	楕円形	0.65×0.53	0.19	VII層土	
132	Ad-21	円形	0.43	0.26	V層土	
133	Ae-21・22	楕円形	1.52×0.79	0.25	XI層土	
134	Ad・Ae-22	楕円形	0.76×0.49	0.24	XI層土	

第7章 時期不明遺構と遺構外出土遺物

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
135	Ad・Ae-22	楕円形	(0.70)×0.56	0.12	XII層土	
136	Ae-22	隅丸方形	0.31	0.10	VII層土	
137	Ad-22	隅丸長方形	0.42×0.33	0.27	VII層土	銭貨
138	Ad-21	楕円形	0.47×0.41	0.25	VII層土	
139	Ae-22	円形	0.36	0.21	IX層土	
140	Ad-23	楕円形	0.40×0.31	0.25	V層土	
141	Ad-22	隅丸長方形	0.31×0.25	0.43	V層土	
142	Ad-23	楕円形	0.40×0.31	0.25	IX層土	
143	Ah-23	楕円形	0.38×0.28	0.42	V層土	
144	Ac-23	円形	0.29	0.14	V層土	
145	Ac-23	不整形	0.32	0.22	V層土	
146	Ae・Af-19	円形	0.36	0.36	V層土	
147	Af-19	楕円形	(0.38)×0.35	0.33	V層土	
148	Af-19	楕円形	(0.26)×0.38	0.26	V層土	
149	Af-19	楕円形	(0.24)×0.37	0.37	V層土	
150	Af-20	楕円形	(0.49)×0.48	0.36	V層土	銭貨
151	Af-20	不整形	0.44	0.20	V層土	
152	Af-20	楕円形	(0.24)×0.47	0.25	V層土	
153	Aj-21	楕円形	0.38×0.32	0.36	V層土	
154	Aj-21	円形	0.31	0.27	V層土	
155	Aj-20・21	円形	0.34	0.19	V層土	
156	Af-20	楕円形	0.43×0.28	0.19	IX層土	
157	Af-20・21	不整形	0.30	0.22	V層土	
158	Af-21	円形	0.35	0.41	V層土	
159	Ag-20	楕円形	0.49×0.30	0.15	暗褐色土	
160	Ag-21	楕円形	(0.30)×0.39	0.37	V層土	
161	Ag-21	楕円形	(0.35)×0.31	0.32	V層土	
162	Ag-21	楕円形	0.19×0.14	0.13	V層土	
163	Ag-21	円形	0.35	0.41	V層土	
164	Ag-21	不整形	0.15	0.10	V層土	
165	Ag・Ah-21	隅丸方形	0.23	0.19	V層土	
166	Ah-21	楕円形	0.32×0.27	0.17	V層土	
167	Ag-20	楕円形	0.40×0.25	0.42	V層土	
168	Ah-21	円形	0.43	0.56	V層土	
169	Ah-21	楕円形	0.28×(0.11)	0.29	V層土	
170	Ah-21	円形	0.20	0.23	V層土	
171	Ac-24	円形	0.25	0.10	V層土	
172	Ag-21	円形	0.38	0.15	V層土	
173	Ag-21	隅丸方形	0.28	0.26	V層土	
174	Ag-21	不整形	0.16	0.14	V層土	
175	Ah-21	不整形	0.31	0.24	V層土	
176	Ah-21	楕円形	(0.28)×0.41	0.21	V層土	
177	Ag-21	円形	0.32	0.37	V層土	
178	Ah-21	楕円形	(0.32)×0.38	0.44	V層土	
179	Ag-22	楕円形	0.64×0.50	0.53	V層土	
180	Ag-22	不整形	0.22	0.11	V層土	
181	Ag-23	円形	0.30	0.50	V層土	
182	Af-22	楕円形	0.24×0.20	0.39	V層土	
183	Ah-21	円形	0.25	0.17	V層土	
184	Ag-22	円形	0.33	0.17	V層土	
185	Ag-22	楕円形	0.71×(0.37)	0.31	V層土	
186	Ah-21	円形	0.16	0.47	V層土	
187	Ah-21	楕円形	0.34×0.24	0.45	V層土	
188	Ah-21	円形	0.24	0.57	V層土	
189	Ai-21	円形	0.34	0.41	V層土	銭貨
190	Ah-22	楕円形	0.39×0.26	0.08	V層土	
191	Ag-20	楕円形	(0.21)×0.26	0.19	V層土	
192	Ag-20	隅丸長方形	(0.28)×0.36	0.22	V層土	
193	Ag-20	不整形	0.42	0.31	V層土	
194	Ah・Ai-22	不整形	0.41	0.52	V層土	土師器 壺
195	Ai-22	円形	0.40	0.23	VII層土	
196	Ai-22	円形	0.36	0.36	V層土	
197	Ai-20	楕円形	(0.26)×0.37	0.37	V層土	
198	Ah-20	楕円形	(0.14)×0.22	0.32	V層土	
199	Ah-20	楕円形	(0.30)×0.24	0.16	V層土	
200	Ah-20	楕円形	(0.19)×0.28	0.17	V層土	
201	Ah・Ai-20	不整形	0.27	0.16	V層土	
202	Ah-20	楕円形	0.29×0.28	0.23	V層土	
203	Ah-20・21	楕円形	0.48×0.26	0.07	V層土	
204	不明	—	—	0.15	V層土	
205	不明	—	—	0.18	V層土	
206	Ah-21	楕円形	(0.25)×0.48	0.16	V層土	
207	Ah・Ai-21	円形	0.30	0.33	V層土	
208	Ah-21	楕円形	0.28×0.23	0.13	V層土	
209	Ah-21	不整形	0.42	0.19	V層土	
210	Ah-21	楕円形	(0.15)×0.23	0.17	V層土	
211	Ah-21	楕円形	(0.50)×(0.20)	0.30	V層土	
212	Ah-21	楕円形	(0.52)×0.64	0.31	V層土	
213	Ah-20・21	楕円形	(0.68)×(0.23)	0.22	XII層土	
214	Ah-21	円形	0.23	0.57	V層土	
215	Ah-21	楕円形	(0.23)×0.34	0.08	V層土	
216	Ah-21	円形	0.26	0.13	V層土	
217	Ah-21	円形	0.16	0.22	V層土	
218	Ah-21	円形	0.31	0.52	V層土	
219	Ag-21	楕円形	1.45×(0.39)	0.33	XII層土	
220	Ah-20・21	隅丸方形	0.32	0.05	V層土	
221	Ah-21	楕円形	0.34×(0.25)	0.34	V層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
222	Ai-21	不整形	—	0.57	V層土	
223	Ah-20	円形	0.26	0.21	V層土	
224	Ai-21	楕円形	(0.43)×0.34	0.62	V層土	
225	Ai-21	楕円形	(0.23)×0.41	0.25	V層土	
226	Ai-21	楕円形	0.30×0.24	0.33	V層土	
227	Ah・Ai-21	楕円形	0.17×0.27	0.25	V層土	
228	Ag・Ah-22	隅丸方形	0.22	0.15	V層土	
229	Ah-22	円形	0.35	0.22	V層土	
230	Ah-21・22	円形	0.38	0.26	V層土	
231	Ai-21	円形	0.20	0.16	V層土	
232	Ah-22	楕円形	0.30×0.22	0.47	V層土	
233	Ah-22	円形	0.39	0.24	V層土	
234	Ai-22	楕円形	0.30×0.20	0.10	V層土	
235	Ah-23	円形	0.25	0.13	V層土	
236	Ah-23	楕円形	0.23×0.17	0.21	V層土	
237	Ah-23	円形	0.37	0.22	V層土	
238	Ah-23	楕円形	0.50×0.40	0.13	V層土	
239	Ah-21	円形	0.23	0.09	V層土	
240	Ah-21	不整形	0.31	0.44	V層土	
241	Ah-21	不整形	0.36	0.41	V層土	
242	Ai-22	隅丸方形	0.32	0.29	V層土	
243	Ai-23	円形	0.36	0.25	XII層土	
244	Ai-23	円形	0.32	0.05	V層土	
245	Ah-22・23	楕円形	0.44×0.38	0.37	IX層土	土師器 環・壺
246	Ai-22	楕円形	0.38×0.29	0.34	V層土	
247	Ai-22	円形	0.26	0.03	V層土	
248	Ai-23	不整形	0.26	0.49	V層土	
249	Ai-23	円形	0.29	0.35	V層土	
250	Ai・Aj-23	楕円形	0.48×0.35	0.41	V層土	
251	Ai-23	円形	0.41	0.38	V層土	
252	Ai-23	円形	0.28	0.24	V層土	
253	Ai-22	隅丸方形	0.21	0.14	V層土	
254	Ai-22	楕円形	0.42×0.34	0.21	V層土	
255	Ah・Ai-22	楕円形	0.64×0.54	0.12	V層土	
256	Ai-22	隅丸方形	0.50	0.23	V層土	
257	Ai-22	楕円形	0.63×0.34	0.29	V層土	
258	Ai-22	円形	0.28	0.28	V層土	
259	Ah-22	楕円形	0.28×0.21	0.20	V層土	
260	Am-21	円形	0.36	0.16	暗褐色土・ XII層土	
261	Am・An-21	楕円形	0.29×0.21	0.02	V層土	
262	Am-20	楕円形	0.25×0.20	0.06	暗褐色土・ XII層土	
263	Am-21	円形	0.27	0.32	V層土	
264	Am-21	円形	0.22	0.23	V層土	
265	Am-21	円形	0.20	0.20	V層土	
266	An-20	不整形	0.15	0.11	V層土	
267	An-20	不整形	0.32	0.17	V層土	
268	An-20・21	円形	0.39	0.25	V層土	
269	Am-21	楕円形	0.28×0.33	0.30	V層土	
270	Am-21	円形	0.16	0.21	V層土	
271	Am-21	円形	0.22	0.20	V層土	
272	An-21	楕円形	0.22×0.18	0.07	XII層土	
273	An-21	円形	0.16	0.09	XII層土	
274	An-21	楕円形	0.36×0.30	0.17	V層土	
275	An-21	円形	0.29	0.15	V層土	
276	An-21	楕円形	0.29×0.18	0.12	V層土	
277	An-21	隅丸方形	0.27	0.19	V層土	
278	An-21	隅丸方形	0.21	0.06	V層土	
279	Am-21	円形	0.27	0.16	V層土	
280	An-21	円形	0.22	0.08	V層土	
281	An-21	隅丸長方形	0.28×0.21	0.10	V層土	
282	Am-21	楕円形	0.22×0.19	0.26	V層土	
283	Am-21・22	円形	0.25	0.18	V層土	
284	Am-21	円形	0.24	0.11	V層土	
285	Am-21	円形	0.21	0.12	V層土	
286	Am-21	楕円形	0.19×0.14	0.11	V層土	
287	Am-21	楕円形	0.19×0.12	0.21	V層土	
288	An-21	楕円形	0.38×0.30	0.18	V層土	
289	An-21	楕円形	0.23×0.18	0.23	V層土	土師器 高環
290	An-21	円形	0.24	0.16	V層土	
291	An・Ao-21	円形	0.24	0.12	暗褐色土・ XII層土	
292	Ao-21	楕円形	0.30×0.23	0.12	暗褐色土・ XII層土	
293	Aj-23	円形	0.44	0.22	V層土	
294	Aj・Ak-22	円形	0.26	0.12	V層土	
295	An-22	円形	0.17	0.17	V層土	
296	An-20	楕円形	(7.8)×3.8	0.11	V層土	
297	An-20	楕円形	0.53×0.36	0.01	V層土	
298	Am・An-20	円形	0.21	0.16	V層土	
299	An-19	隅丸方形	0.26	0.16	V層土	
300	An-19	楕円形	0.33×0.27	0.09	V層土	
301	Ak-19	楕円形	0.26×0.19	0.04	V層土	
302	Aj・Ak-19	楕円形	0.35×0.31	0.13	V層土	
303	Ak-20	楕円形	0.37×0.24	0.23	V層土	
304	Aj-19	楕円形	0.83×0.57	0.14	IX層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
305	Aj-20	円形	0.28	0.11	V層土	
306	Ah-22	円形	0.35	0.12	V層土	
307	Ah-22	円形	0.25	0.23	V層土	
308	Aj-23	隅丸方形	0.39	0.26	V層土	
309	Aj-23	円形	0.21	0.18	V層土	
310	Aj-22・23	楕円形	0.28×0.22	0.14	V層土	
311	Ah-21・22	楕円形	0.75×0.44	0.24	V層土	
312	あh-21	楕円形	0.38×(0.26)	0.18	V層土	
313	Am-22	楕円形	0.43×0.36	0.27	V層土	
314	Am-22	不整形	0.25	0.26	V層土	
315	Am-22	不整形	0.29	0.13	XII層土	
316	Am-22	楕円形	0.44×0.39	0.25	V層土	
317	Am-22	円形	0.21	0.11	V層土	
318	Am-22	楕円形	0.29×0.25	0.27	V層土	
319	Am-22	不整形	0.28	0.17	XII層土	
320	Am-22	楕円形	0.34×0.29	0.17	V層土	
321	An-21	楕円形	0.52×0.42	0.31	V層土	
322	An-19・20	楕円形	(0.22)×0.26	0.15	V層土	
323	An-19	円形	0.33	0.25	V層土	
324	An-19	楕円形	0.30×0.16	0.15	XII層土	
325	An-19	円形	0.25	0.09	V層土	
326	An-19・20	不整形	—	0.13	V層土	
327	An-20	円形	0.18	0.08		

第2節 遺構外出土遺物

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
389	Ai-22	不整形	0.18	0.13	Ⅸ層土	
390	Ai-22	楕円形	(0.15)×0.19	0.08	Ⅸ層土	
391	Ai-22	円形	0.26	0.15	Ⅸ層土	
392	Ai-22	楕円形	0.20×(0.17)	0.07	Ⅸ層土	
393	Ai-22	不整形	0.21	0.11	Ⅸ層土	
394	Ai-22	不整形	0.22	0.20	V層土	
395	Ai-22	円形	0.34	0.51	V層土	
396	An-21	隅丸方形	0.24	0.11	V層土	
397	An-21	楕円形	0.42×0.22	0.20	V層土	
398	Am-21	楕円形	0.43×0.28	0.52	V層土	
399	Am-21	円形	0.34	0.39	V層土	
400	Ap-21	不整形	0.21	0.17	V層土	
401	Ap・Aq-20	不整形	0.21	0.24	V層土	
402	Ap・Aq-20	楕円形	0.33×0.29	0.25	V層土	
403	Ap-20	楕円形	0.23×0.18	0.16	V層土	
404	Ap-20	円形	0.32	0.22	V層土	
405	Ao・Ap-20	不整形	0.20	0.09	V層土	
406	Ao-20	楕円形	0.28×0.23	0.29	V層土	
407	Ao-20	円形	0.51	0.11	V層土	
408	Ao-19・20	円形	0.21	0.21	V層土	
409	Ao-19	不整形	0.43	0.26	V層土	
410	Ao-19	隅丸長方形	0.24×0.18	0.05	V層土	
411	An-20	楕円形	(0.45)×0.83	0.19	V層土	
412	An-19・20	楕円形	(0.13)×0.18	0.17	V層土	
413	Ap-19	円形	0.19	0.11	V層土	
414	Ap-19	円形	0.23	0.31	V層土	
415	Ap-19	楕円形	0.37×0.28	0.32	V層土	
416	Aj-20	楕円形	(0.27)×0.23	0.22	V層土	
417	Aj-20	楕円形	0.65×0.48	0.06	Ⅸ層土	
418	Ao-19	楕円形	0.42×0.35	0.20	V層土	
419	Aq-21	円形	0.41	0.11	V層土	
420	Ad・Ae-24	楕円形	0.52×0.43	0.32	V層土	
421	Ad-24	楕円形	0.52×0.43	0.24	V層土	
422	Ae-23	円形	0.23	0.14	V層土	
423	Ae-23	円形	0.18	0.10	V層土	
424	Ae-23	円形	0.30	0.24	V層土	
425	Ap-20.21	円形	0.37	0.09	Ⅸ層土	
426	Aj-23	不整形	0.38	0.37	V層土	
427	Aj-22	楕円形	0.28×0.22	0.11	V層土	
428	Aj-21	楕円形	0.28×0.22	0.44	V層土	
429	Aj-21	円形	0.24	0.22	V層土	
430	Aj-21	楕円形	(0.16)×0.17	0.09	V層土	
431	Aj-21	円形	0.21	0.08	V層土	
432	Ak-21	楕円形	0.22×0.18	0.31	V層土	
433	Aj-20	楕円形	0.33×0.29	0.48	V層土	
434	Ak-22	楕円形	0.48×0.37	0.37	V層土	
435	Aq-21	楕円形	0.68×0.46	0.11	V層土	
436	Aq-20	不整形	0.42	0.11	V層土	
437	Ap-19	円形	0.28	0.35	V層土	
438	Af-22	円形	0.44	0.20	V層土	
439	Af-22	楕円形	0.49×0.33	0.24	V層土	
440	Af-22	楕円形	0.22	0.16	V層土	
441	Af-22	楕円形	0.34×0.18	0.11	V層土	
442	Af-22	円形	0.62	0.16	V層土	
443	Af-22	隅丸長方形	0.41×0.24	0.22	V層土	
444	Ae-22	不整形	—	0.09	Ⅸ層土	
445	Af-23・24	楕円形	0.46×0.30	0.27	V層土	
446	Af-24	楕円形	0.22×0.16	0.10	V層土	
447	Af-24	円形	0.17	0.12	V層土	
448	Aj-22	隅丸方形	0.22	0.20	V層土	
449	Aj-22	円形	0.22	0.26	V層土	
450	Ah-21	円形	0.16	0.06	V層土	
451	Ah-21	楕円形	0.30×0.18	0.18	V層土	
452	Aq-20	隅丸方形	0.26	0.26	V層土	
453	Aq-20	隅丸方形	0.28	0.12	V層土	
454	Aq-20	円形	0.32	0.24	V層土	
455	Aj-20	不整形	0.28	0.31	V層土	
456	Aj-20	円形	0.23	0.18	V層土	
457	Ak-21・22	楕円形	0.49×0.40	0.41	V層土	
458	Ac-23	楕円形	(0.31)×0.31	0.09	V層土	
459	Ac-22	円形	0.24	0.25	V層土	
460	Ac-22	楕円形	0.33×0.21	0.18	V層土	
461	Af-24	円形	0.40	0.51	V層土	
462	Af-24	隅丸方形	0.31	0.06	V層土	
463	Ak-21	楕円形	0.44×0.30	0.40	V層土	
464	Ak-22	不整形	0.20	0.42	V層土	
465	Ak-21	楕円形	0.38×0.25	0.42	V層土	
466	Ak-21	円形	0.28	0.12	V層土	
467	Ad-24	円形	0.23	0.06	V層土	
468	Af-24	円形	0.40	0.24	V層土	
469	Ag・Ah-23	不整形	—	0.03	V層土	
470	Ah-23	不整形	0.30	0.25	V層土	
471	Ah-23	円形	0.25	0.15	V層土	
472	Ah-23	不整形	0.20	0.16	V層土	
473	Ah-23	楕円形	0.43×0.36	0.40	V層土	
474	Ah-23	円形	0.31	0.18	V層土	
475	Ah-23	円形	0.25	0.55	V層土	
476	Ad-24	円形	0.22	0.27	V層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
477	Ad-24	楕円形	0.43×0.28	0.20	V層土	
478	Ad-24	楕円形	(0.43)×0.28	0.35	V層土	
479	Ad-24	楕円形	0.30×0.25	0.38	V層土	
480	Ad-25	不整形	—	0.39	V層土	
481	Ad-24	不整形	0.25	0.25	V層土	
482	Ag-22	楕円形	0.34×0.29	0.25	V層土	
483	Ak-21	楕円形	0.26×0.19	0.20	V層土	
484	Af-19	円形	0.45	0.47	V層土	
485	Af-19	楕円形	0.34×0.13	0.18	V層土	
486	Ag-20	円形	0.41	0.20	V層土	
487	Ag-20	円形	0.44	0.18	V層土	
488	Ae-19	円形	0.25	0.28	V層土	
489	Ae-19	円形	0.23	0.24	V層土	
490	Af-19	楕円形	(0.18)×0.28	0.18	V層土	
491	Ag-20	楕円形	0.40×0.33	0.19	V層土	
492	Af-19	円形	0.31	0.10	V層土	
493	Af-19	隅丸方形	0.24	0.18	Ⅸ層土	
494	Ae-19	楕円形	0.27×0.22	0.24	V層土	
495	Ae-19	不整形	0.17	0.22	V層土	
496	Af-21	隅丸方形	0.30	0.10	V層土	
497	Af-21	楕円形	0.48×0.33	0.15	V層土	
498	Ag-21	楕円形	0.38×0.32	0.23	V層土	
499	Af-21	楕円形	0.48×0.39	0.11	Ⅸ層土	
500	Ae-21	楕円形	0.35×0.26	0.36	V層土	
501	Ae-21	楕円形	(0.19)×0.20	0.21	V層土	
502	Ae-21	不整形	0.25	0.33	V層土	
503	Ae-20	円形	0.28	0.61	V層土	
504	Ad-21	円形	0.35	0.21	V層土	
505	Ad-20・21	円形	0.24	0.12	V層土	
506	Ad-20	楕円形	0.28×0.22	0.38	V層土	
507	Ae-22	楕円形	0.41×0.35	0.32	Ⅸ層土	
508	Ae-21	楕円形	0.43×0.33	0.19	V層土	
509	Ad・Ae-21	楕円形	0.41	0.36	V層土	
510	Ae-21	楕円形	(0.50)×0.59	0.48	V層土	
511	Af-21	不整形	0.44	0.27	V層土	
512	Af-23	楕円形	0.46×0.31	0.27	V層土	
513	Af・Ag-23	楕円形	(0.30)×0.46	0.30	V層土	
514	Ag-22	楕円形	(0.23)×0.36	0.08	V層土	
515	Af-22	円形	0.38	0.25	V層土	
516	Ae-21	円形	0.30	0.23	V層土	
517	Ae-21	楕円形	0.35×0.28	0.31	V層土	
518	Ae-21	楕円形	0.30×0.24	0.17	V層土	
519	Ae-21	円形	0.21	0.04	V層土	
520	Ae-21	楕円形	0.31×0.25	0.25	V層土	
521	Ae-21	円形	0.35	0.32	V層土	銭貨
522	Ae-23	楕円形	0.25×0.21	0.16	V層土	
523	Ai-22	円形	0.44	0.21	V層土	
524	Ai-21	楕円形	0.38×0.29	0.19	V層土	
525	Ae-19	円形	0.21	0.32	V層土	
526	Ah-19	楕円形	0.49×0.31	0.13	V層土	
527	Aj-21・22	楕円形	0.25×0.19	0.73	V層土	
528	Aq-20	楕円形	(0.38)×0.35	0.36	V層土	
529	Aq-20	円形	0.39	0.44	V層土	
530	Ao-19	楕円形	0.30×0.25	0.14	V層土	
531	An-20	円形	0.26	0.12	V層土	
532	Ao-20	楕円形	0.26×0.21	0.14	V層土	
533	An-19	楕円形	0.30×0.26	0.20	V層土	
534	Ao-19	円形	0.24	0.12	V層土	
535	Ag-24	楕円形	0.46×0.40	0.08	Ⅸ層土	
536	Ag-24	楕円形	(0.23)×0.36	0.19	Ⅸ層土	
537	Ak-20	楕円形	0.42×0.33	0.34	Ⅸ層土	
538	Ak-21	楕円形	(0.22)×0.42	0.23	Ⅸ層土	
539	Ai-20	楕円形	0.43×0.33	0.41	V層土	
540	Ai-19	円形	0.19	0.03	V層土	
541	Ah-20	円形	0.24	0.05	V層土	
542	Ai-20	円形	0.24	0.19	V層土	
543	Ak-22	楕円形	(0.43)×0.40	0.37	V層土	
544	Ak-22	楕円形	0.37×0.30	0.18	V層土	
545	Ak-22	楕円形	0.22×0.17	0.20	V層土	
546	Ak-22	円形	0.26	0.29	V層土	
547	Aj-20	楕円形	0.32×(0.27)	0.15	V層土	
548	Ae-20	円形	0.37	0.30	V層土	
549	Ao-20	円形	0.23	0.11	V層土	
550	Ao-20	円形	0.41	0.30	V層土	
551	Ak-22	楕円形	0.47×0.39	0.47	V層土	
552	Ag-20	楕円形	0.46×0.26	0.22	V層土	
553	Ad-24	楕円形	0.51×0.42	0.11	V層土	
554	Ak-22	円形	0.17	0.14	V層土	
555	Ad-22	隅丸方形	0.26	0.61	V層土	
556	Am-22	楕円形	0.30×0.24	0.19	V層土	
557	Ag-24	隅丸方形	0.32	0.14	V層土	
558	Aj-22	楕円形	0.29×(0.21)	0.08	V層土	
559	Ad-20	楕円形	0.44×0.31	0.82	V層土	
560	Ab-23	楕円形	0.64×0.50	0.30	V層土	
561	Aj-23	円形	0.47	0.32	Ⅸ層土	
562	Aj-23	楕円形	0.36×0.27	0.18	Ⅸ層土	
563	Aj-23	楕円形	0.4×0.33	0.28	Ⅸ層土	
564	Aj-23	楕円形	(0.25)×0.24	0.24	Ⅸ層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
565	Aj-23	円形	0.30	0.27	Ⅸ層土	
566	Ao-20・21	楕円形	0.67×0.48	0.37	V層土	
567	Ai-20	隅丸方形	0.28	0.23	V層土	
568	Aj-20	隅丸方形	0.22	0.14	V層土	
569	Ak-22	円形	0.23	0.19	V層土	
570	Ak-22	不整形	0.29	0.19	V層土	
571	Ak-22	楕円形	0.42×0.31	0.26	V層土	
572	Ai-21	円形	0.30	0.55	V層土	
573	Ap-19・20	円形	0.27	0.52	V層土	
574	Ap・Ar-20	楕円形	0.28×0.27	0.24	V層土	
575	Ap-20	円形	0.27	0.48	V層土	
576	Ap・Ar-19	楕円形	0.63×0.56	0.18	Ⅸ層土	
577	Ai-21・22	円形	0.36	0.37	V層土	
578	Ai-21	楕円形	0.66×0.28	0.16	V層土	
579	Ai-22	不整形	—	0.06	V層土	
580	Aj-22	楕円形	0.65×0.51	0.15	V層土	灰釉 陶器瓶
581	Aj-22	円形	0.37	0.18	V層土	
582						

第7章 時期不明遺構と遺構外出土遺物

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
650	Ak-7	不整形	0.38	0.23	IX層土	
651	Ak-7	円形	0.41	0.20	IX層土	
652	Ak-7	円形	0.28	0.19	IX層土	
653	Ak-7	楕円形	0.22×0.17	0.13	IX層土	
654	Ak-8	円形	0.26	0.34	IX層土	
655	Ak-7	楕円形	(0.43)×(0.14)	0.19	IX層土	
656	Ak-8	楕円形	0.40×0.26	0.13	IX層土	
657	Ak-8	楕円形	0.39×0.25	0.29	暗褐色土・IX層土	
658	Aj-8	円形	0.32	0.31	暗褐色土・IX層土	
659	Ak-8	円形	0.26	0.15	暗褐色土・IX層土	
660	Aj-8	楕円形	0.56×0.35	0.47	IX層土	
661	Ak-6	楕円形	(0.30)×0.32	0.26	暗褐色土・IX層土	
662	Aj・Ak-6・7	楕円形	0.64×0.52	0.17	暗褐色土・IX層土	
663	Ak-8	楕円形	0.32×0.23	0.42	IX層土	
664	Aj-9	円形	0.31	0.20	暗褐色土・IX層土	
665	Ak-9	楕円形	0.35×(0.25)	0.26	暗褐色土・IX層土	
666	Aj-9	楕円形	0.32×(0.20)	0.17	暗褐色土・IX層土	
667	Ak-9	楕円形	0.26×0.20	0.13	暗褐色土・IX層土	
668	Ak-8	隅丸方形	0.28	0.30	暗褐色土・IX層土	
669	Ak-8	楕円形	0.26×0.22	0.24	暗褐色土・IX層土	
670	Ak-8	隅丸方形	0.23	0.27	暗褐色土・IX層土	
671	Ak-8	楕円形	0.69×0.59	0.44	暗褐色土・IX層土	
672	Ak-8	不整形	0.36	0.27	暗褐色土・IX層土	
673	Ak-8	楕円形	1.05×0.50	0.45	暗褐色土・IX層土	
674	Ak-7	楕円形	0.36×0.27	0.17	IX層土	
675	Aj-8	円形	0.21	0.18	暗褐色土・IX層土	
676	Ak-10	円形	0.39	0.21	暗褐色土・IX層土	
677	Ak-7	隅丸長方形	0.31×0.26	0.27	暗褐色土・IX層土	
678	Aj-7	楕円形	0.60×(0.28)	0.14	暗褐色土・IX層土	
679	Ak-8	円形	0.41	0.10	暗褐色土・IX層土	
680	Ak-8	楕円形	0.24×0.16	0.12	暗褐色土・IX層土	
681	Ak-9	楕円形	0.34×0.29	0.16	暗褐色土・IX層土	
682	Ak-9	隅丸方形	0.17	0.19	暗褐色土・IX層土	
683	Ak-9	楕円形	0.26×0.22	0.27	暗褐色土・IX層土	
684	Ak-9	円形	0.27	0.26	暗褐色土・IX層土	
685	Ak-9	楕円形	(0.24)×0.32	0.12	暗褐色土・IX層土	
686	Ak-9	楕円形	0.26×0.21	0.21	暗褐色土・IX層土	
687	Ak-9	楕円形	0.48×0.39	0.41	暗褐色土・IX層土	
688	Ak-7	円形	0.22	0.15	暗褐色土・IX層土	
689	Ak-9	不整形	—	0.28	暗褐色土・IX層土	
690	Aj-6	楕円形	0.42×0.28	0.03	暗褐色土・IX層土	
691	Aj-6	不整形	0.30	0.22	暗褐色土・IX層土	
692	Aj-6	円形	0.31	0.36	暗褐色土・IX層土	
693	Aj-7	楕円形	0.30×0.16	0.18	暗褐色土・IX層土	
694	Aj-7	隅丸方形	0.24	0.18	IX層土	
695	Ak-8	楕円形	0.36×0.26	0.23	暗褐色土・IX層土	
696	Af・Ag-14	楕円形	(0.27)×0.35	0.19	暗褐色土・IX層土	
697	Ad-18	円形	0.30	0.28	暗褐色土・IX層土	
698	Ad-18	円形	0.28	0.29	暗褐色土・IX層土	
699	Ad-18	不整形	—	0.41	暗褐色土・IX層土	
700	Ae-18	楕円形	0.38×0.28	0.33	IX層土	
701	Ah・Ai-17	不整形	0.37	0.20	暗褐色土・IX層土	
702	Ah・Ai-17	円形	0.30	0.24	V層土	
703	Ak-8	円形	0.28	0.33	暗褐色土・IX層土	
704	Af-18	楕円形	0.50×0.37	0.25	暗褐色土・IX層土	
705	Af-18	円形	0.29	0.26	暗褐色土・IX層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
706	Ag-18	円形	0.40	0.31	暗褐色土・IX層土	
707	Ag-18	隅丸方形	0.33	0.19	暗褐色土・IX層土	
708	Ag-18	不整形	0.36	0.23	暗褐色土・IX層土	
709	Ah-18	隅丸長方形	0.32×0.24	0.21	VII層土	
710	Af-18	円形	0.27	0.17	暗褐色土・IX層土	
711	Af-18	円形	0.25	0.22	暗褐色土・IX層土	
712	Ag-18	楕円形	0.31×0.24	0.32	暗褐色土・IX層土	土師器
713	Ag-18	楕円形	0.36×0.28	0.28	暗褐色土・IX層土	
714	Af-15	楕円形	0.46×0.38	0.38	暗褐色土・IX層土	
715	Ag-17	楕円形	(0.24)×0.35	0.19	暗褐色土・IX層土	
716	Ag-16	円形	0.21	0.11	VII層土	
717	Ag・Ah-16	楕円形	0.36×0.30	0.30	IX層土	
718	Ah-17	隅丸方形	0.38	0.32	VII層土	
719	Ai-13	楕円形	(0.26)×0.30	0.16	IX層土	
720	Ai-13	隅丸方形	0.22	0.31	IX層土	
721	Ae-15・16	楕円形	0.51×0.27	0.17	暗褐色土・IX層土	
722	Af-16	楕円形	0.25×0.30	0.30	IX層土	
723	—	—	—	0.20	IX層土	
724	Bb-5	円形	0.48	0.09	IX層土	
725	Ba-4	楕円形	0.34×0.26	0.05	V層土	
726	Ba-4・5	不整形	0.40	0.20	V層土	
727	Ba-4・5	不整形	0.43	0.32	V層土	
728	Ba-4・5	隅丸方形	0.27	0.20	V層土	
729	Ba-5	楕円形	0.65×0.54	0.37	V層土	
730	Bb-5	楕円形	0.50×0.42	0.14	V層土	
731	Bb-5	円形	0.22	0.09	V層土	
732	Bb-5	円形	0.19	0.17	V層土	
733	Bb-5	隅丸長方形	0.36×0.30	0.43	V層土	
734	Bc-5	楕円形	0.50×0.42	0.49	V層土	
735	Bb-5	楕円形	0.78×0.45	0.57	V層土	
736	Bb-5	楕円形	0.33×0.22	0.64	V層土	
737	Bb-5	楕円形	0.35	0.35 0.29	V層土	
738	Bb・Bc-5	楕円形	0.46×0.38	0.17	V層土	
739	Bc-5	円形	0.42	0.26	V層土	
740	Bb-5	円形	0.48	0.39	V層土	
741	Bb-5	円形	0.43	0.35	V層土	
742	Bb-5	楕円形	0.48×0.38	0.44	V層土	
743	Bb-5	楕円形	0.35×0.28	0.15	VII層土	
744	Bc-5	円形	0.24	0.15	V層土	
745	Bc-5	円形	0.34	0.52	V層土	
746	Bc-5	不整形	0.33	0.30	V層土	
747	Bc-5	楕円形	0.44×0.39	0.74	IX層土	
748	Bc-6	楕円形	0.38×0.30	0.32	VII層土	緑釉陶器皿
749	Bc-6	不整形	0.14	0.08	V層土	
750	Bb-4	楕円形	0.45×0.37	0.25	V層土	
751	Bb-5	円形	0.47	0.14	VII層土	
752	Bf-4	楕円形	0.60×0.46	0.27	V層土	
753	Bf-5	楕円形	0.37×0.30	0.36	V層土	
754	Bf-5	隅丸長方形	0.40×0.34	0.43	V層土	
755	Be・Bf-5	楕円形	0.30×0.24	0.23	V層土	
756	Be-5	円形	0.36	0.05	V層土	
757	Be-5	不整形	0.38	0.24	V層土	
758	Bd-5	不整形	0.34	0.29	V層土	
759	Bd-5	円形	0.37	0.39	V層土	
760	Bd-5	不整形	0.44	0.45	V層土	灰釉陶器皿・塊
761	Bd-5	不整形	0.32	0.17	V層土	
762	Bf-5	円形	0.36	0.21	V層土	
763	Be-5	楕円形	0.32×0.24	0.22	V層土	
764	Be-5	円形	0.25	0.24	V層土	
765	Be-5	楕円形	0.35×0.29	0.22	V層土	
766	Bc-5	円形	0.32	0.51	IX層土	
767	Bc-5	楕円形	0.25×0.19	0.17	VII層土	
768	Bc-5	円形	0.45	0.19	VII層土	
769	Bc-5	楕円形	0.32×0.26	0.34	V層土	
770	Bc・Bd-6	楕円形	0.37×0.26	0.45	V層土	
771	Bd-5	円形	0.41	0.30	V層土	
772	Bd・Be-5	楕円形	0.49×0.34	0.26	VII層土	
773	Be-5	円形	0.43	0.33	VII層土	
774	Bd・Be-5	楕円形	0.40×0.31	0.18	V層土	
775	Bd・Be-5	不整形	0.45	0.34	V層土	
776	Bd・Be-5	楕円形	0.36×0.28	0.47	V層土	
777	Be-5	楕円形	0.27×0.20	0.22	V層土	
778	Be-5	円形	0.27	0.28	V層土	
779	Be-6	円形	0.46	0.34	V層土	
780	Be-5・6	楕円形	(0.59)×0.49	0.16	暗褐色土・IX層土	
781	Be-5	楕円形	0.30×0.23	0.17	V層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
782	Be-5	楕円形	0.32×0.23	0.29	V層土	
783	Be-5	円形	0.27	0.27	V層土	
784	Be-5	楕円形	0.45×0.36	0.23	V層土	
785	Be-5	不整形	0.38	0.31	V層土	
786	Be-5	不整形	0.31	0.14	V層土	
787	Be-5	楕円形	0.45×0.37	0.39	V層土	
788	Be-4	円形	0.32	0.15	V層土	
789	Be-4	楕円形	0.36×0.29	0.19	V層土	
790	Be-4	楕円形	0.23×0.18	0.15	V層土	
791	Be-4	楕円形	0.27×0.22	0.24	V層土	
792	Bd-4	円形	0.38	0.23	V層土	
793	Bd-4	円形	0.32	0.24	V層土	
794	Bd-4	楕円形	0.36×0.26	0.34	V層土	
795	Bd-4	楕円形	0.49×0.37	0.35	V層土	
796	Bd-4	楕円形	0.39×0.32	0.22	V層土	
797	Be-5	楕円形	0.28×0.18	0.16	V層土	
798	Be-5	円形	0.19	0.23	V層土	
799	Be-5・6	楕円形	0.33×0.23	0.20	IX層土	
800	Bd-4	円形	0.20	0.13	IX層土	
801	Bd-4	不整形	0.29	0.17	IX層土	
802	Bd-4	不整形	0.30	0.02	IX層土	
803	Bd-4	不整形	0.23	0.15	XI・XII層土	
804	Bd-4	楕円形	0.37×0.32	0.09	暗褐色土	
805	Be-3	円形	0.27	0.28	V層土	
806	Bf-3	楕円形	0.53×0.43	0.18	暗褐色土・IX層土	
807	Bf-2	円形	0.30	0.24	VII層土	
808	Bf-5	円形	0.29	0.30	V層土	
809	Bf-4	円形	0.30	0.24	V層土	
810	Be-6	楕円形	(0.37)×0.45	0.40	暗褐色土・IX層土	
811	Bd-6	楕円形	0.38×0.31	0.36	V層土	
812	Bd-6	不整形	0.35	0.29	V層土	
813	Bd・Be-5	楕円形	(0.35)×0.45	0.36	V層土	
814	Bb-10	楕円形	0.52×0.37	0.25	IX層土	
815	Ba-10	楕円形	0.45×0.37	0.19	VII層土	
816	Bb-11	円形	0.44	0.17	IX層土	
817	Bc-11	楕円形	0.57×0.48	0.27	IX層土	
818	Ba-10	楕円形	0.38×0.25	0.14	IX層土	
819	At-10・11	楕円形	0.67×0.54	0.25	V層土	
820	At-10	円形	0.48	0.35	V層土	
821	At-13	不整形	0.41	0.11	V層土	
822	Bc-5	楕円形	0.37×0.28	0.16	V層土	
823	Bc-5	不整形	0.28	0.10	V層土	
824	Bc-5	楕円形	0.36×0.30	0.32	V層土	
825	Bc・Bd-5	楕円形	0.30×0.22	0.25	V層土	
826	Bd-5	楕円形	0.25×0.19	0.18	VII層土	
827	Bc・Bd-4	不整形	0.25	0.30	V層土	
828	Bd-4	楕円形	0.43×0.37	0.14	VII層土	
829	Bd-3・4	楕円形	0.45×0.38	0.23	VII層土	
830	Bd-4	円形	0.35	0.10	V層土	
831	Bc-4	楕円形	0.38×0.31	0.37	V層土	
832	Bc-3・4	楕円形	0.48×0.38	0.26	V層土	
833	Bc-3	楕円形	0.42×0.32	0.18	IX層土	
834	Bc-3	楕円形	0.38×0.31	0.35	IX層土	
835	Bb-4	楕円形	0.25×0.18	0.12	V層土	
836	Bb-4	円形	0.31	0.41	IX層土	
837	Ba・Bb-4	円形	0.30	0.10	IX層土	
838	Bb-5	円形	0.22	0.10	VII層土	
839	Bc-3	隅丸方形	0.39×0.29	0.26	V層土	

第2節 遺構外出土遺物

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
868	At-10	楕円形	0.51×0.41	0.33	IX層土	
869	At-10	不整形円形	0.38	0.21	VII層土	
870	Ba-10	不整形円形	0.33	0.27		
871	At-10	楕円形	0.46×0.35	0.50	IX層土	
872	At・Ba-10	円形	0.42	0.47		
873	At-12	不整形円形	0.32	0.28		
874	At-10	楕円形	0.27×0.21	0.21	IX層土	
875	At-10	楕円形	0.40×0.31	0.37	IX層土	
876	Bb-13	隅丸方形	0.39	0.08	IX層土	
877	Bc-13	隅丸方形	0.38	0.15	IX層土	
878	Bc-13	円形	0.20	0.15	IX層土	
879	Bd-13	円形	0.21	0.30	IX層土	
880	Bc-13	円形	0.31	0.29	IX層土	
881	Bd-5	楕円形	0.38×0.32	0.44	VII層土	
882	Bc-5	楕円形	0.34×0.29	0.41	VII層土	
883	不明	—	—	0.26	VII層土	
884	不明	—	—	0.11	VII層土	
885	不明	—	—	0.14	XI・XII層土	
886	不明	—	—	0.17	XI・XII層土	
887	Bb・Bc-4	不整形円形	0.33	0.22	IX層土	
888	不明	—	—	0.13	V層土	
889	不明	—	—	0.27	XI・XII層土	
890	不明	—	—	0.24	XI・XII層土	
891	Bb-4	円形	0.28	0.21	VII層土	
892	不明	—	—	0.23	VII層土	
893	不明	—	—	0.06	XI・XII層土	
894	不明	—	—	0.21	VII層土	
895	不明	—	—	0.35	VII層土	灰軸 陶器塊
896	Bc-3	楕円形	0.46×0.38	0.71	VII層土	
897	Bb-4	不整形円形	0.21	0.18	VII層土	
898	Bb-4	円形	0.24	0.13	VII層土	
899	Bb-4	不整形円形	0.25	0.30	VII層土	
900	Bc-4	楕円形	0.32×0.25	0.33	IX層土	
901	Bc-4	楕円形	0.35×0.26	0.16	IX層土	
902	Bc-4	楕円形	0.28×0.22	0.11	IX層土	
903	Bc-3	円形	0.28	0.18	VII層土	
904	As-12	楕円形	0.45×0.34	0.28	VII層土	
905	As-12	円形	0.38	0.17	IX層土	
906	At-12	楕円形	0.40×0.32	0.22	IX層土	
907	不明	—	—	—	IX層土	
908	At-12	不整形円形	0.26	0.24	IX層土	
909	At-11・12	円形	0.40	0.40	IX層土	
910	At-11	不整形円形	0.23	0.41	IX層土	
911	At-11	不整形円形	0.26	0.36	IX層土	
912	As・At-11	楕円形	0.53×0.39	0.43	VII層土	
913	As・At-11	円形	0.35	0.25	V層土	
914	At-10	楕円形	(0.23)×0.26	0.22	VII層土	
915	At-10	不整形円形	0.30	0.40	VII層土	
916	At-10	不整形円形	0.28	0.46	VII層土	
917	Ba-10・11	楕円形	0.47×0.29	0.08		
918	At-11	円形	(0.38)	0.01	IX	
919	At-11	円形	(0.20)	0.03		
920	Bc-11	不整形円形	0.47	0.28	VII層土	
921	Ba-12	楕円形	0.43×0.37	0.20	VII層土	
922	Bc-4	楕円形	0.46×0.29	0.53	VII層土	
923	Bc-4	楕円形	0.40×0.33	0.28	VII層土	
924	Bc-4	楕円形	0.35×0.25	0.11	VII層土	
925	Bd-4	楕円形	0.34×0.28	0.25	V層土	
926	Bc-4	楕円形	0.43×0.31	0.13	V層土	
927	Bc-4	楕円形	0.39×0.34	0.19	VII層土	
928	Bc-4	楕円形	(0.19)×0.19	0.08	V層土	
929	Bc-4	円形	0.22	0.06	VII層土	
930	Bc-4	楕円形	0.54×0.40	0.49	VII層土	
931	Bc-4・5	円形	0.42	0.42	VII層土	
932	Bc-5	楕円形	0.55×(0.40)	0.29	VII層土	
933	不明	—	—	—	VII層土	灰軸 陶器塊
934	Bc-5	円形	0.25	0.21	VII層土	
935	Bb・Bc-5	楕円形	0.45×0.35	0.24	IX層土	
936	Bb-5	楕円形	0.35×0.25	0.35	VII層土	
937	Bb-5	円形	0.22	0.14	VII層土	
938	Bb-5	楕円形	0.32×0.25	0.45	VII層土	
939	Bb-4・5	楕円形	0.30×0.22	0.39	VII層土	
940	Bc-5	円形	0.25	0.27	VII層土	
941	Bc-5	円形	0.21	0.21	VII層土	
942	Bb・Bc-5	楕円形	0.44×0.35	0.35	VII層土	
943	Bb・Bc-5	不整形円形	0.40	0.10	VII層土	
944	Bc-5	楕円形	0.61×0.50	0.49	VII層土	
945	Bc-6	不整形円形	0.28	0.25	VII層土	
946	Bc-6	円形	0.27	0.15	VII層土	
947	Bc-6	不整形円形	0.35	0.27	XII層土	
948	Bd-6	円形	0.31	0.33	VII層土	
949	Bd-6	円形	0.34	0.15	VII層土	
950	Bc-5	楕円形	0.47×0.30	0.25	VII層土	
951	Bc-5	不整形円形	0.39	0.41	VII層土	
952	Bb-6	隅丸長方形	0.29×0.23	0.12	VII層土	
953	Bb-6	楕円形	0.25×0.20	0.09	VII層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
954	Bb-5	楕円形	0.28×0.19	0.44	IX層土	
955	Bb-4	不整形円形	0.45	0.44	VII層土	
956	Bb-4・5	円形	0.35	0.25	VII層土	
957	Bb-4	楕円形	0.52×0.43	0.24	VII層土	
958	Ba・Bb-4	不整形円形	0.37	0.45	VII層土	
959	Bb-4	円形	0.39	0.13	VII層土	
960	Ba-4	円形	0.35	0.19	VII層土	
961	Ba-5	楕円形	0.41×0.28	0.19	VII層土	
962	Ba-5	楕円形	0.42×0.29	0.32	VII層土	
963	Ba-5	円形	0.24	0.16	IX層土	
964	Ba-5	円形	0.25	0.19	VII層土	
965	Bb-4	円形	0.14	0.33	VII層土	
966	Bb-5	不整形円形	0.33	0.55	VII層土	
967	At-10	円形	0.28	0.53	VII層土	
968	At-10	不整形円形	0.34	0.35	VII層土	
969	At-10	楕円形	0.39×0.28	0.32		
970	At-10	楕円形	0.35×0.28	0.33	VII層土	
971	Ba-11	円形	0.25	0.34	IX層土	
972	Ba-10	楕円形	0.36×0.30	0.45	IX層土	
973	Ba-10	楕円形	0.32×0.27	0.24	VII層土	
974	Ba-10	不整形円形	0.42	0.26	VII層土	
975	Ba-10	円形	0.29	0.23	IX層土	
976	At-10	円形	0.34	0.35	VII層土	
977	At・Ba-10・11	楕円形	0.56×0.49	0.37	VII層土	
978	Ba-9	楕円形	0.34×0.27	0.14	IX層土	
979	Ba-10	不整形円形	0.32	0.53	VII層土	
980	At・Ba-10	円形	0.49	0.71	VII層土	
981	Bd-13	不整形円形	0.37	0.28	VII層土	
982	Bb-10	楕円形	0.47×0.40	0.39	VII層土	
983	欠番	—	—	—	—	
984	Bb-10	不整形円形	0.21	0.26	As-C	
985	Bb-4	円形	0.32	0.28	VII層土	
986	Ba-9・10	楕円形	0.44×(0.12)	0.39	VII層土	
987	Bc-11	円形	0.39	0.15	IX層土	
988	不明	—	—	—	—	
989	Bb-5・6	円形	0.36	0.51		
990	不明	—	—	—	—	
991	Bc-4・5	楕円形	0.35×0.22	0.35	VII層土	
992	Bc-5	不整形円形	0.33	0.15	VII層土	
993	Bc-4	隅丸方形	0.25	0.39	VII層土	
994	Ba-6	円形	0.20	0.15	IX層土	
995	Bb-5	円形	0.19	0.21	VII層土	
996	Bb・Bc-5	楕円形	0.49×0.40	0.52	VII層土	
997	Bb-5	楕円形	(0.33)×0.36	0.48	VII層土	
998	Bb-5	円形	0.28	0.36	VII層土	
999	Bb-4	円形	0.34	0.60	VII層土	
1000	Be-6	円形	0.47	0.38		
1001	Ba-5	円形	0.23	0.56		
1002	Ba-5	楕円形	0.21×0.16	0.35	V層土	
1003	Ba-5	円形	0.21	0.34	V層土	
1004	Bd-6	楕円形	0.25×0.17	0.47	IX層土	
1005	Bd-6	楕円形	0.44×0.33	0.47	IX層土	
1006	Bc-6	楕円形	0.44×0.30	0.10	V層土	
1007	Bc-4	楕円形	(0.41)×0.45	0.22	V層土	
1008	不明	—	—	0.08	IX層土	
1009	Bc-4	楕円形	0.48×0.27	0.54	IX層土	
1010	Bc-4	円形	0.24	0.25	IX層土	
1011	Bc-4	隅丸長方形	0.29	0.47	IX層土	
1012	At-12	楕円形	0.47×0.40	0.23	VII層土	
1013	At-12	円形	0.47	0.16	VII層土	
1014	At-12	隅丸長方形	0.53×0.46	0.25	IX層土	
1015	As・At-12	不整形円形	0.44	0.46	VII層土	
1016	Bd-11	楕円形	0.37×0.31	0.22	VII層土	
1017	Bd-11	円形	0.30	0.04	IX層土	
1018	Bb-5	円形	0.33	0.53	IX層土	
1019	Bb-5	楕円形	0.38×0.30	0.27	IX層土	
1020	Bc-5	楕円形	0.43×0.30	0.26	IX層土	
1021	Bb-5	不整形円形	—	0.31	IX層土	
1022	Ba-6	隅丸長方形	0.32×0.24	0.40	V層土	
1023	Ba-6	円形	0.22	0.15	V層土	
1024	As・At-11	楕円形	0.42×0.36	0.46	IX層土	
1025	As・At-11	楕円形	0.296×0.23	0.30	VII層土	
1026	As-11	楕円形	0.29×0.22	0.26	IX層土	
1027	As・At-11	隅丸長方形	0.28	0.45	IX層土	
1028	At-12	楕円形	(0.37)×0.28	0.21	IX層土	
1029	Bc-11	楕円形	0.41×0.35	0.19	VII層土	
1030	As-11	円形	0.24	0.27	IX層土	
1031	At-10	楕円形	0.35×0.40	0.23	IX層土	
1032	Bc-11	不整形円形	0.43	0.25	VII層土	
1033	Bc-3	円形	0.27	0.17	V層土	
1034	Bc-3	円形	0.23	0.21	IX層土	
1035	Bb-3	円形	0.26	0.14	IX層土	
1036	Bb-3	不整形円形	0.33	0.04	IX層土	
1037	Bb-3	楕円形	0.30×0.24	0.53	V層土	
1038	Bc-3	楕円形	0.32×0.25	0.40	V層土	
1039	Bc-3・4	隅丸長方形	0.41	0.17	V層土	
1040	Bc-3	円形	0.28	0.40	V層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
1041	Bc-4	円形	0.29	0.18	V層土	
1042	Bb-3	円形	0.16	0.12	V層土	
1043	Bb-3	楕円形	0.30×0.24	0.25	V層土	
1044	Bb-3・4	楕円形	0.26×0.19	0.05	IX層土	
1045	Bb-3・4	楕円形	0.53×0.40	0.25	IX層土	
1046	Bb-4	楕円形	0.50×0.40	0.32	V層土	
1047	Ba-4	楕円形	0.23×0.17	0.28	V層土	
1048	Ba-4・Bb-4	楕円形	0.56×0.47	0.20	IX層土	
1049	Ba-4	円形	0.24	0.12	V層土	
1050	Bb-4	楕円形	(0.60)×0.63	0.13	V層土	
1051	Bb-4	楕円形	0.76×0.58	0.29	IX層土	
1052	Ba・Bb-4・5	楕円形	0.53×0.34	0.10	IX層土	
1053	Ba・Bb-4	楕円形	0.83×0.54	0.29	IX層土	土師器 高環
1054	Bb-4	楕円形	0.26×0.21	0.19	IX層土	
1055	Bb-4	楕円形	0.50×0.36	0.55	V層土	
1056	Bb-5	楕円形	0.48×(0.29)	0.38	V層土	
1057	Bb-5	楕円形	0.41×0.38	0.04	V層土	
1058	Bb-5	楕円形	0.60×(0.28)	0.21	V層土	
1059	Bb・Bc-5	楕円形	0.76×0.69	0.24	IX層土	
1060	Bc-5	楕円形	(0.46)×0.38	0.30	IX層土	
1061	Bc-5	楕円形	0.41×0.35	0		

第7章 時期不明遺構と遺構外出土遺物

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
1127	Am-10	円形	0.42	0.28		砥石
1128	An-10	不整形円形	0.47	0.26		
1129	An-10	円形	0.22	0.22		
1130	An-10	円形	0.25	0.74		
1131	Ak-9	円形	0.32	0.30		
1132	Ak-9	楕円形	(0.23)×0.23	0.21		
1133	Al-9	円形	0.22	0.49		
1134	Am-9	円形	0.28	0.09		
1135	Am-9	楕円形	0.45×0.35	0.23		
1136	An-9	不整形円形	0.23	0.13		
1137	An-9	楕円形	0.40×0.34	0.32		
1138	An-8・9	不整形円形	0.50	0.24		
1139	An-8	楕円形	0.35×0.30	0.20		
1140	An-8	楕円形	0.41×0.31	0.39		
1141	An-9	楕円形	0.35×0.30	0.33		
1142	Al-8	楕円形	0.35×0.28	0.43		
1143	Al-8	楕円形	0.42×(0.24)	0.46		
1144	Al-8	不整形円形	0.35	0.48		
1145	Al-8	不整形円形	0.26	0.08		
1146	Al-8	楕円形	0.46×0.26	0.30		
1147	Al-8	楕円形	0.23×0.18	0.14		
1148	Al-8	円形	0.20	0.23		
1149	Al-8	円形	0.31	0.18		
1150	Al-8	楕円形	0.50×0.29	0.40		
1151	Al-8	楕円形	0.20×0.13	0.14		
1152	Al-8	楕円形	0.29×0.23	0.24		
1153	Al-8	楕円形	0.47×0.32	0.07		
1154	Al-8	円形	0.28	0.33		
1155	Al-8	楕円形	0.31×0.26	0.36		
1156	Am-8	円形	0.24	0.46		
1157	Am-8	楕円形	(0.30)×0.27	0.19		
1158	Am-8	隅丸方形	0.32	0.34		
1159	Al-8	楕円形	0.47×0.38	0.50		
1160	Al-8	楕円形	(0.18)×0.23	0.24		
1161	Al-8	楕円形	0.35×0.29	0.37		
1162	Al-8	楕円形	0.42×0.26	0.24		
1163	Al-7	円形	0.26	0.17		
1164	Al-7	楕円形	0.25×0.20	0.15		
1165	Al-7	円形	0.34	0.15		
1166	Al-7・8	楕円形	0.24×0.19	0.20		
1167	Am-8	円形	0.33	0.32		
1168	Am-8	円形	0.30	0.43		
1169	Am-8	楕円形	0.35×0.25	0.30		
1170	Am-8	楕円形	(0.27)×0.30	0.28		
1171	Al-8	楕円形	(0.12)×0.21	0.20		
1172	Al-7	不整形円形	0.32	0.72		
1173	Al-7	楕円形	0.36×0.29	0.35		
1174	Al-7	不整形円形	0.28	0.19		
1175	Al-7	楕円形	0.59×0.42	0.33		
1176	Am-8	不整形円形	0.35	0.63		
1177	Am-8	円形	0.23	0.34		
1178	Am-7・8	楕円形	0.23×0.18	0.08		
1179	Am-7	楕円形	0.43×0.32	0.29		
1180	Am-7	楕円形	0.29×0.24	0.44		
1181	Al・Am-7	楕円形	0.38×0.32	0.17		
1182	Am・An-7・8	隅丸方形	0.30	0.18		
1183	Am-8	不整形円形	0.29	0.80		
1184	An-8・9	楕円形	0.67×0.53	0.27		
1185	Am-8	楕円形	0.31×0.25	0.22		
1186	Am-8	楕円形	0.35×0.30	0.37		
1187	An-9	楕円形	0.53×0.48	0.41		
1188	An-9	楕円形	0.41×0.27	0.12		
1189	An-9	円形	0.26	0.28		
1190	An-10	楕円形	0.52×0.45	0.90	V層土	
1191	Al-8・9	円形	0.31	0.29		
1192	Al-8	円形	0.49	0.16		
1193	Al-8	円形	0.23	0.17		
1194	Al-8	楕円形	0.45×0.35	0.44		
1195	Al-8	楕円形	0.43×0.28	0.16		
1196	Al-8	楕円形	0.42×0.37	0.39		
1197	Am-7・8	円形	0.20	0.34		
1198	Am-8	楕円形	0.51×0.39	0.20		
1199	Am-8	楕円形	(0.14)×(0.31)	0.10		
1200	Am-8	隅丸方形	0.36	0.23		
1201	An・Ao-9	楕円形	0.40×0.27	0.10		
1202	Am・Ao-9	円形	0.45	0.13		
1203	Ao-8	楕円形	0.26×(0.18)	0.08		
1204	Ao-8	楕円形	0.51×0.45	0.26		
1205	Am-8	隅丸方形	0.29	0.15		
1206	An-7・8	不整形円形	0.26	0.28		
1207	An-7	楕円形	0.42×0.31	0.22		
1208	An-7	楕円形	0.32×0.25	0.08		
1209	An-7	楕円形	0.55×0.37	0.35		
1210	An-6・7	不整形円形	0.32	0.22		
1211	As-10	円形	0.28	0.14		
1212	As-10	不整形円形	0.25	0.17		
1213	As-10	円形	0.26	0.14		

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
1214	As-10	楕円形	0.32×0.23	0.17		
1215	As-9・10	楕円形	0.26×0.22	0.22		
1216	As-9	楕円形	(0.22)×0.28	0.24		
1217	As-10	楕円形	0.38×0.32	0.12		
1218	As-9	楕円形	0.28×0.22	0.17		
1219	As-9・10	円形	0.43	0.26		
1220	As-9	不整形円形	0.23	0.13		
1221	As-9	楕円形	0.39×0.24	0.28		
1222	As-9	円形	0.22	不明		
1223	As-9	楕円形	0.22×0.16	0.32		
1224	As-9	円形	0.21	0.13		
1225	As-9	楕円形	0.28×0.23	0.14		
1226	As-10	不整形円形	0.45	0.38		
1227	As-10	楕円形	0.38×0.25	0.23		
1228	As・At-10	楕円形	0.22×0.17	0.16		
1229	As・At-10	隅丸方形	0.30	0.22		
1230	As-10	楕円形	0.25×0.20	0.14		
1231	Al-7	楕円形	0.36×0.28	0.46		
1232	Al-7	円形	0.30	0.14		
1233	Al-7	円形	0.31	0.23		
1234	Al-7	不整形円形	0.30	0.29		
1235	Al-7	楕円形	0.29×0.23	0.15		
1236	An-6・7	円形	0.23	0.14		
1237	Am-7	楕円形	0.22×0.17	0.13		
1238	Ao-8	円形	0.45	0.26		
1239	An-7・8	楕円形	0.54×0.43	0.27		
1240	Ao-8	楕円形	0.34×0.28	0.25		
1241	Ao-7	隅丸方形	0.28	0.17	IX層土	
1242	Ao・Ap-7	楕円形	0.42×0.36	0.24		
1243	Ao-9	楕円形	0.71×0.57	0.33		
1244	Ao-9	楕円形	0.40×0.19	0.07		
1245	Ao-9	楕円形	0.48×0.33	0.17		
1246	As-10	楕円形	0.35×0.27	0.21		
1247	As-10	楕円形	(0.24)×0.34	0.26		
1248	As-10	楕円形	(0.20)×0.30	0.31		
1249	As-11	楕円形	0.43×0.30	0.17		
1250	As-11	円形	0.30	0.23		
1251	Ak-16	楕円形	(0.27)×0.28	0.19		
1252	Al-7	楕円形	0.37×0.32	0.35		
1253	Al-7	円形	0.29	0.21		
1254	Al-7	楕円形	0.37×0.31	0.27		
1255	Al-7	楕円形	0.23×0.16	0.08		
1256	Al-7	楕円形	(0.23)×0.32	0.14		
1257	Al-7	不整形円形	0.25	0.26		
1258	Al-7	円形	0.38	0.25		
1259	Al-7	円形	0.28	0.27		
1260	Al-7	楕円形	0.31×0.25	0.37		
1261	Al-7	円形	0.28	0.15		
1262	Al-7	不整形円形	0.25	0.31		
1263	Al-7	楕円形	(0.22)×0.20	0.17		
1264	Al-7	不整形円形	0.21	0.24		
1265	Al-7	不整形円形	0.24	0.23		
1266	Al-7	不整形円形	0.30	0.39		
1267	Al-7	楕円形	0.34×0.28	0.31		
1268	Al-7	楕円形	0.26×0.20	0.37		
1269	Al-7	不整形円形	0.25	0.34		
1270	Al-7	円形	0.34	0.30		
1271	Al-7	楕円形	0.25×0.19	0.21		
1272	Al-7	不整形円形	0.32	0.28		
1273	Al-7	楕円形	(0.23)×0.24	0.14		
1274	Am-7	楕円形	0.33×0.24	0.39		
1275	Am-7	隅丸長方形	0.28×0.23	0.35		
1276	Am-7	円形	0.17	0.10		
1277	Am-7	円形	0.29	0.28		
1278	Am-7	不整形円形	0.25	0.27		
1279	Am-7	楕円形	0.37×0.30	0.59		
1280	Am-7	円形	0.24	0.18		
1281	Am-7	円形	0.26	0.41		
1282	Am-7	楕円形	0.27×0.21	0.48		
1283	Am-7	楕円形	0.33×0.26	0.24		
1284	Am-7	円形	0.29	0.24		
1285	Am-7	楕円形	0.31×0.25	0.27		
1286	Am-7	不整形円形	0.23	0.11		
1287	Am-7	楕円形	0.37×0.30	0.31		
1288	Am-7	楕円形	0.38×0.25	0.22		
1289	Am-7	円形	0.18	0.13		
1290	Am-7	不整形円形	0.23	0.32		
1291	Am-7	楕円形	0.33×0.26	0.39		
1292	Am-7	楕円形	0.25×0.19	0.22		
1293	Am-7	楕円形	(0.23)×0.16	0.07		
1294	Am-7	円形	0.25	0.36		
1295	Am-7	円形	0.31	0.15		
1296	An-7	楕円形	0.37×0.29	0.28		
1297	An-7	楕円形	0.31×0.23	0.41		
1298	An-7	不整形円形	0.30	0.27		
1299	An-7	不整形円形	0.28	0.16		
1300	An-7	不整形円形	0.23	0.22		
1301	An-7	楕円形	0.29×0.23	0.36		

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
1302	Am・An-7	円形	0.35	0.23		
1303	Al-6	楕円形	0.43×0.35	0.14		
1304	Al-6	不整形円形	0.25	0.25		
1305	Al・Am-6	円形	0.18	0.05		
1306	Am-6	円形	0.33	0.28		
1307	Am-7	円形	0.23	0.19		
1308	Al-6	不整形円形	0.21	0.13		
1309	Al-6	楕円形	0.53×0.33	0.48		
1310	Am-6	不整形円形	0.26	0.22		
1311	Am-7	隅丸方形	0.25	0.42		
1312	Am-6	楕円形	0.37×0.26	0.35		
1313	Am-6	楕円形	0.27×0.19	0.21		
1314	Al・Am-6	楕円形	0.37×0.30	0.09		
1315	Am-6	不整形円形	0.32	0.18		
1316	Am-6	円形	0.27	0.37		
1317	Am-6	円形	0.29	0.30		
1318	Am-6	楕円形	0.36×0.30	0.22		
1319	Am-6	楕円形	0.33×0.27	0.04		
1320	Am-6	楕円形	0.28×0.23	0.09		
1321	Ar-9	不整形円形	0.23	0.25		
1322	Aq-11・12	楕円形	0.33×0.23	0.33		
1323	Am-6	楕円形	0.30×0.24	0.48		
1324	Am-6	不整形円形	0.25	0.13		
1325	Am-6	楕円形	0.45×0.25	0.20		
1326	Am-6	楕円形	0.20×0.14	0.50		
1327	Am-6	不整形円形	0.27	0.53		

第2節 遺構外出土遺物

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
1390	Ba-4	楕円形	(0.15)×0.30	0.14	IX層土	
1391	At-4・5	楕円形	0.27×0.22	0.35		
1392	At-4	円形	0.23	0.28		
1393	Ba-4	楕円形	0.44×0.37	0.30		
1394	Ba-4	隅丸方形	0.21	0.17		
1395	Ba-5	不整形円形	0.17	0.23		
1396	Am-8	楕円形	0.48×(0.34)	0.46		
1397	Am-8	楕円形	0.24×0.18	0.32		
1398	Am-7	隅丸方形	0.30	0.30	VII層土	
1399	Am-7	楕円形	0.22×0.17	0.26		
1400	Am-7	円形	0.18	0.16		
1401	Am-8	楕円形	0.43×0.31	0.30		
1402	An-8	楕円形	0.18×(0.34)	0.10		灰釉陶器瓶
1403	Ao-7	円形	0.25	0.35		
1404	Am-8	楕円形	(0.12)×0.35	0.42		
1405	Am-8	円形	0.24	0.27		
1406	Ba-4	円形	0.30	0.23	V層土	
1407	A1-18	円形	0.27	0.26		
1408	AK-18	楕円形	0.25×0.19	0.18		
1409	AK-18	円形	0.23	0.25		
1410	AK-17・18	円形	0.20	0.31		
1411	AK-18	円形	0.24	0.14		
1412	AK-18	楕円形	0.25×0.19	0.39		
1413	A1-8	楕円形	(0.27)×0.25	0.21		
1414	Am-8	円形	0.23	0.24		
1415	An-7	楕円形	0.31×0.20	0.15		
1416	Ao・Ap-5	円形	0.34	0.21		
1417	Ao-5・6	楕円形	0.34×0.26	0.26		
1418	Ao-5・6	楕円形	0.46×0.30	0.30		
1419	Ao-7	円形	0.23	0.32		
1420	Ao-7	不整形円形	0.25	0.24		
1421	At-4	楕円形	0.28×0.24	0.39		
1422	Ba-4	楕円形	0.25×0.20	0.24		
1423	Ba-4	楕円形	0.37×0.30	0.31		
1424	As-5	楕円形	(0.12)×0.25	0.14		
1425	As-5	楕円形	0.20×0.16	0.37		
1426	Aj-17	不整形円形	0.26	0.36		
1427	AK-17	不整形円形	0.30	0.15		
1428	Am-8	楕円形	0.43×(0.22)	0.32		
1429	Am-7	楕円形	0.33×0.26	0.12		
1430	Ba-4	楕円形	0.40×0.31	0.16		
1431	Ba-4	楕円形	0.35×0.22	0.19		
1432	Ba-4	隅丸方形	0.20	0.05		
1433	An-7	楕円形	0.21×0.15	不明		
1434	An-7	円形	0.20	不明		
1435	An-13	楕円形	0.17×0.25	0.31		
1436	An-13	楕円形	0.38×0.22	0.56		
1437	As-11	円形	0.26	0.51		
1438	As-11・12	隅丸方形	0.23	0.45		
1439	As-9	円形	0.15	0.09		
1440	As-10	楕円形	0.40×0.28	0.48		
1441	Ar-10	不整形円形	0.24	0.15		
1442	Aq-10	楕円形	0.28×0.22	0.23		
1443	A1-7・8	楕円形	0.66×0.40	0.39		
1444	Am-8	楕円形	0.37×0.32	0.46	—	
1445	An-10	楕円形	0.28×0.22	0.41		

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
1446	An-11	楕円形	0.32×0.27	0.29		
1447	An-11	楕円形	0.46×0.30	0.30		
1448	Am-11	円形	0.29	0.28		
1449	Am-11	不整形円形	0.20	0.25		
1450	Aq-9	円形	0.29	0.12		
1451	Aq-12	楕円形	0.35×0.28	0.39		
1452	Aq-12	楕円形	0.35×0.30	0.44		
1453	Aq-12	楕円形	0.38×0.25	0.47		
1454	Aq-12	楕円形	(0.32)×0.32	0.31		
1455	Aq-12	楕円形	0.45×0.38	0.44		
1456	AK-10	円形	0.34	0.20		
1457	Am-8	楕円形	0.23×0.17	0.17		
1458	Aq-6	楕円形	0.23×0.30	0.09		
1459	Aq-6	楕円形	0.25×0.16	0.18		
1460	A1-8	円形	0.24	0.26		
1461	Aq-12	楕円形	0.28×0.22	0.38		
1462	Aq-12	不整形円形	0.20	0.25		
1463	Ar-9	楕円形	0.36×0.28	0.22		
1464	As-10	楕円形	0.29×0.23	0.62		
1465	不明	—	—	—	V層土	
1466	不明	—	—	—	V層土	
1467	Aq-13	楕円形	0.45×0.29	0.26		
1468	A1-8	隅丸方形	0.28	0.48		
1469	A1-8	不整形円形	0.25	0.39	V層土	
1470	An-13	楕円形	0.31×0.23	0.58		
1471	Am-9	楕円形	0.45×(0.32)	0.27		
1472	Am-9	楕円形	(0.12)×0.30	0.25		
1473	As-5	楕円形	(0.43)×0.40	0.44		
1474	As-5	楕円形	(0.35)×0.38	0.37		
1475	As-10	楕円形	(0.19)×0.28	0.20		
1476	As-9	楕円形	0.29×0.24	0.38		
1477	As-9	不整形円形	0.36	0.37		
1478	As-9	円形	0.24	0.26		
1479	As-9	楕円形	0.20×0.14	0.08		
1480	As-9	円形	0.31	0.24		
1481	As-9	隅丸方形	0.23	0.32		
1482	As-10	楕円形	0.29×0.20	0.17		
1483	Aq-5	楕円形	(0.10)×0.22	0.12		
1484	Aq・Ar-12	楕円形	0.23×0.18	0.28		
1485	Ar-9	隅丸方形	0.33	0.30		
1486	Ar-9	円形	0.24	0.19		
1487	Ar-9	円形	0.21	0.20		
1488	Ar-9	楕円形	0.34×0.27	0.24		
1489	Ar-9	不整形円形	0.35	0.52		
1490	Ap-9	楕円形	(0.25)×0.29	0.29		
1491	Ap-9	円形	0.31	0.18		
1492	Aq-5	不整形円形	0.16	0.12		
1493	Ao-6・7	円形	0.35	0.10	XI層土	
1494	Ap-9	楕円形	0.30×0.21	0.16		
1495	A1-9	楕円形	0.33×0.26	0.08		
1496	A1-9	楕円形	0.34×0.25	0.13		
1497	Am-9	楕円形	0.59×0.42	0.28		
1498	Am-8・9	楕円形	0.37×0.29	0.21		
1499	An-7	楕円形	(0.22)×0.21	0.35		
1500	An-7	円形	0.25	0.40		
1501	An-9	円形	0.23	0.15		
1502	An-7	円形	0.20	0.15		

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
1503	Am-7	楕円形	0.43×0.34	0.38		
1504	Am-6	楕円形	0.29×0.23	0.22		
1505	Am-6	楕円形	0.22×0.16	0.16		
1506	Am-6	楕円形	(0.22)×0.20	0.07		
1507	A1-6	楕円形	0.29×0.24	0.43		
1508	Am-7	楕円形	0.35×0.25	0.29		
1509	Am-7	円形	0.18	0.17		
1510	Am-7	楕円形	0.25×0.20	0.17		
1511	An-10	円形	0.18	0.43		
1512	As-12	楕円形	0.25×0.20	0.29		
1513	As-12	楕円形	0.30×0.25	0.52		
1514	Ao-12	隅丸方形	0.25	0.11		
1515	As-13	楕円形	0.59×0.50	0.74		
1516	An-11	楕円形	0.38×0.30	0.53		
1517	Am-10	楕円形	(0.38)×0.28	0.24		
1518	A1-16	不整形円形	0.25	0.25	VII層土	
1519	A1-16	楕円形	0.35×0.28	0.30	VII層土	
1520	Am-8・9	楕円形	0.45×0.25	0.33		
1521	Am-8	楕円形	0.42×0.32	0.26		
1522	Am-9	楕円形	0.66×0.46	0.21		
1523	Am-8	—	(0.18)×0.25	0.12		
1524	Am-9	楕円形	0.42×0.28	0.47		
1525	Am-9	円形	0.37	0.63		
1526	Am-9	楕円形	0.29×0.23	0.50		
1527	Am-9	円形	0.21	0.23		
1528	An-9	楕円形	(0.15)×0.19	0.06		
1529	An-9	楕円形	0.31×0.24	0.14		
1530	A1-15	楕円形	0.40×0.35	0.32		
1531	A1-15	楕円形	0.45×0.30	0.33		
1532	A1・Am-14・15	楕円形	0.47×(0.28)	0.60		
1533	A1・Am-14・15	楕円形	0.43×0.34	0.61		
1534	Ao・Ap-6	楕円形	0.33×0.25	0.17	VII層土	
1535	不明	—	—	—		
1536	不明	—	—	—		
1537	A1-15	隅丸方形	0.28	0.30		
1538	A1-15	楕円形	(0.14)×0.30	0.24		
1539	A1-15	不整形円形	0.30	0.15		
1540	Ap・Aq-6	楕円形	0.30×0.24	0.19	IX層土	
1541	Ap-6	円形	0.40	0.08	IX層土	
1542	A1・Am-15	円形	0.33	0.32		
1543	A1-16	円形	0.23	0.20		
1544	A1・Am-16	円形	0.28	0.55		
1545	A1-16	円形	0.22	0.12		
1546	An-21	楕円形	0.24×0.18	0.23		
1547	An-21	楕円形	0.25×0.20	0.14		
1548	An-21	円形	0.21	0.20		
1549	An-21	隅丸方形	0.20	0.20		
1550	An-21	楕円形	0.40×0.32	0.15		
1551	An-21	楕円形	0.33×0.24	0.21		
1552	An-20	楕円形	0.44×0.26	0.24		
1553	Ba・Bb-17	隅丸方形	0.33	0.16		
1554	Af-20・21	楕円形	0.32×0.26	0.31		
1555	Ai-22	楕円形	0.21×0.17	0.16		
1556	AK-22	楕円形	0.30×0.20	0.21		
1557	Bb-4	楕円形	(0.43)×0.41	0.17		
1558	A1-8	楕円形	0.32×0.27	0.39		

第29表 田口下田尻遺跡 ピット一覧表

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
1	Bg-15	不整形	—	0.30	XI層土	
2	Bg-15	楕円形	0.90×0.64	0.09	XI層土	
3	Bg-15	円形	0.31	0.11	XI層土	
4	Bg-15	円形	0.53	0.02	XI層土	
5	Bg-15	楕円形	0.50×0.25	0.07	XI層土	
6	Bk-3	楕円形	0.35×0.28	0.45		
7	Bk-3	楕円形	0.73×0.52	不明		土師器 土師器
8	Bm-2	楕円形	(0.56)×0.43	0.10		
9	Bm-3	楕円形	0.50×0.42	0.27		
10	Bm-3	楕円形	(0.70)×0.60	0.42		
11	Bm-3	楕円形	(0.33)×0.45	0.12		鉄製 紡錘車
12	Bm-3	楕円形	1.07×0.70	0.65		灰釉陶器 塊・鉄滓
13	Bm-3	楕円形	0.31×0.26	0.10		
14	Bm-3	楕円形	0.44×0.40	0.52	XI層土	
15	Bk-1	楕円形	0.65×(0.36)	0.23	V層土	
16	Bh・Bi-3	楕円形	0.61×0.57	0.11	VII層土	灰釉陶器 塊
17	Bl-2	楕円形	0.50×0.40	0.53	IX層土	
18	Bk-3	楕円形	0.55×0.45	0.31	VII層土	
19	Bj・Bk-3	楕円形	0.50×0.34	0.18	XI層土	
20	Bj-2	楕円形	(0.30)×0.31	0.43		
21	Bm・Bn-14	楕円形	0.71×0.64	0.22	VII層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
22	Bn-14	楕円形	0.52×0.47	0.15	IX層土	
23	Bn-14	楕円形	0.47×0.42	0.16	IX層土	
24	Bn-14	楕円形	0.45×0.40	0.08	IX層土	

第7章 時期不明遺構と遺構外出土遺物

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
65	Bk-2	楕円形	(0.31)×0.30	0.39	XI層土	
66	Bj-3	楕円形	0.28×0.20	0.68	XI層土	
67	Bo-2	楕円形	0.87×0.53	0.43		
68	Bm-1	隅丸長方形	0.50×0.25	0.28		
69	Bm-1	隅丸長方形	0.27×0.20	0.14		
70	Bm-1	隅丸長方形	(0.13)×0.17	0.09		
71	Bm-2	楕円形	0.27×0.23	0.25		鉄滓
72	Bm-2	円形	0.36	0.53		
73	Bm-3	楕円形	0.19×0.15	0.11		
74	Bm-3	隅丸長方形	0.36×0.27	0.25		
75	Bm-3	隅丸長方形	0.21×0.16	0.09		
76	Bm-2	隅丸長方形	0.33×0.27	0.70		
77	Bl-2	楕円形	0.23×0.15	0.54		
78	Bl-2	楕円形	0.30×0.22	0.25		
79	Bl-2	隅丸長方形	0.46×0.30	0.46		
80	Bl-2	隅丸長方形	0.30	0.27		灰軸陶器塊
81	Bl-2	楕円形	0.55×0.44	0.44		灰軸陶器瓶
82	Bl-2	隅丸長方形	0.44×0.26	0.18		
83	Bk-2	隅丸長方形	0.38×0.28	0.33		
84	Bl-3	隅丸長方形	0.24	0.19		
85	Bk-2	隅丸長方形	0.31×0.25	0.29		
86	Bk-2	隅丸長方形	0.28×0.25	0.32		灰軸陶器塊
87	Bk-2	隅丸長方形	0.23×0.15	0.08		
88	Bj-2	楕円形	0.50×0.45	0.62		
89	Bj-3	隅丸長方形	0.37	0.08		
90	Bj-3	楕円形	0.37×0.32	0.34		
91	Bj-3	隅丸長方形	0.27×0.20	0.34		
92	Bj-3	楕円形	0.39×0.34	0.29		
93	Bk-3	楕円形	0.47×0.43	0.51		
94	Bj-2	隅丸長方形	0.31×0.25	0.40		
95	Bl-1	楕円形	0.32×0.24	0.26		
96	Bl-1	隅丸長方形	0.54×0.40	0.52		
97	Bj-2	隅丸長方形	0.52×0.40	0.23		在地産土器内耳鍋
98	Bm-3	隅丸長方形	0.27×0.22	0.38		
99	Bl-1・2	楕円形	0.54×0.45	0.31		灰軸陶器塊・土師器環
100	Bl-1・2	楕円形	0.47×0.40	0.32		
101	Bm-3	隅丸長方形	0.30	0.26		
102	Bl-3	楕円形	0.78×0.60	0.79	XI層土	
103	Bm-3	楕円形	0.77×0.70	0.74	XI層土	
104	Bl-3	楕円形	0.61×0.53	0.38	XI層土	
105	Bl-3	楕円形	0.48×0.45	0.58		
106	Bl-3	楕円形	0.54×0.28	0.66		
107	Bl-3	隅丸長方形	0.27×0.22	0.31		
108	Bl-3	楕円形	0.50×0.40	0.31		
109	Bm-3	楕円形	0.40×0.36	0.30		
110	Bm-3	楕円形	0.65×(0.25)	0.15		
111	Bm-3	隅丸長方形	0.38×0.28	0.41		鉄滓
112	Bo-18	楕円形	(0.56)×0.48	0.20	XI層土	
113	Bl-3	楕円形	(0.22)×0.13	0.58		
114	Bl-3	隅丸長方形	0.25	0.59		
115	Bk・Bl-3	隅丸長方形	0.29	0.07		
116	Bl-2・3	楕円形	1.05×(0.17)	0.38		
117	Bj-14	楕円形	0.54×0.45	0.27	XI・VII層土	
118	Bo-0	楕円形	0.40×0.30	0.11		
119	Bl-2	楕円形	0.26×0.22	0.40		土師器壺
120	Bl・Bm-1	楕円形	0.40×0.33	0.54		
121	Bl-1	長方形	0.95×(0.32)	0.38		
122	Bl-3	隅丸長方形	0.28×0.25	0.29		
123	Bk-2	隅丸長方形	0.25×0.19	0.14		
124	Bk-2	隅丸長方形	0.19	0.19		
125	Bk-3	隅丸長方形	0.24	0.23		
126	Bk-3	隅丸長方形	0.24	0.25		
127	Bl-3	楕円形	(0.45)×0.22	0.37		
128	Bh-2・3	楕円形	0.72×(0.38)	0.06		
129	不明	—	—	—		土師器環
130	Bk-14	楕円形	(0.35)×0.32	0.16	XI・VII層土	
131	Bl-13	楕円形	0.34×0.30	0.19		
132	Bl・Bm	楕円形	0.73×0.65	0.51	XI・VII層土	
133	Bm-15	楕円形	0.62×(0.43)	0.49	XI・VII層土	
134	Bm-16	楕円形	0.65×0.55	0.21	XI・VII層土	
135	Bm-17	円形	0.35	0.49	XI・VII層土	
136	Bk-15	円形	0.31	0.18	XI・VII層土	
137	Bk-14	楕円形	0.40×0.35	0.16	XI・VII層土	
138	Bk-14	楕円形	0.38×0.33	0.16	XI・VII層土	
139	Bk-14	円形	0.32	0.19	XI・VII層土	
140	Bk-14	楕円形	0.80×0.41	0.37	XI・VII層土	
141	Bk・Bl-14	楕円形	0.75×0.58	0.35	XI・VII層土	
142	Bf・Bg-13	楕円形	0.48×0.40	0.05	XI・VII層土	
143	Bg-13	円形	0.50	0.36	XI・VII層土	
144	Bg-13・14	楕円形	0.64×0.60	0.40	XI・VII層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
145	Bg-14	円形	0.44	0.10	XI・VII層土	
146	Bg・Bh-14	楕円形	0.63×0.59	0.40	XI・VII層土	
147	Bh-14	楕円形	0.64×0.54	0.48	XI・VII層土	
148	Bg-14	楕円形	0.38×0.33	0.21		
149	Bg-14	楕円形	0.53×0.48	0.27		
150	Bg-14	楕円形	0.62×0.59	0.10		
151	Bg-14	楕円形	0.62×0.53	0.14		
152	Bg-13	楕円形	0.50×0.35	0.06		
153	Bg-13・14	楕円形	0.65×0.37	0.07		
154	Bg-13	楕円形	0.45×(0.14)	0.19	XI・XII層土	
155	Bg-13	楕円形	0.57×0.48	0.21	XI・VII層土	
156	Bg-14	楕円形	0.63×0.59	0.10	XI・VII層土	
157	Bg-14	楕円形	0.81×0.65	0.11	XI・VII層土	
158	Bf・Bg-13	楕円形	0.47×0.41	0.28		
159	Bf-13	楕円形	(0.64)×0.45	0.19		
160	Bh-14	楕円形	0.30×0.25	0.33		
161	Bf-13	楕円形	0.30×0.20	0.15		
162	Bf-13	楕円形	0.75×0.40	0.17	XI・XII層土	
163	Bf-13	楕円形	0.73×0.38	0.26	XII層土	
164	Bg-14	楕円形	0.55×0.52	0.36		IX・VII層土
165	Bf-13	楕円形	(0.35)×0.30	0.29		
166	Bl-13	円形	0.30	0.16	IX・VII層土	
167	Bf-15	楕円形	0.68×0.58	0.38	IX・VII層土	
168	Bf-16	楕円形	0.80×0.72	0.51	IX・VII層土	
169	Bf-16	円形	0.53	0.44	IX・VII層土	
170	Bf-16	楕円形	0.80×0.70	0.38	IX・VII層土	
171	Bm-16	楕円形	0.48×0.40	0.24	IX・VII層土	
172	Bo-18	楕円形	0.42×0.36	0.52	VII層土	
173	Bm-13	円形	0.24	0.10	IX層土	
174	Bp-14	楕円形	0.30×0.27	0.37	IX層土	
175	Bp-14	円形	0.28	0.46	VII層土	
176	Bq-7	不整形	—	0.11	V層土	
177	Bj-4	楕円形	0.60×0.43	0.13	V層土	
178	Bj-5	楕円形	0.42×0.35	0.21	XI層土	
179	Bj-5	楕円形	0.74×0.60	0.22	XI層土	
180	Bj-5	楕円形	0.90×0.70	0.39	XI層土	
181	Bj-5	楕円形	0.63×0.45	0.15	XI層土	
182	Bh-5	隅丸長方形	0.40×0.32	0.38		
183	Bl-4	円形	0.50	0.38	XI層土	
184	Bk-4	楕円形	0.53×0.44	0.50	XI層土	
185	Bl-4・5	楕円形	0.60×0.53	0.35	XI層土	
186	Bk-4	楕円形	0.53×0.44	0.50	XI層土	
187	Br-8	円形	0.40	0.25	V層土	
188	Bp-8	楕円形	0.54×0.46	0.43		
189	Bq-8	円形	0.47	0.29	V層土	
190	Bp-7	円形	0.81	0.65	VII層土	土師器環
191	Bp・Bq-7・8	楕円形	0.54×0.50	0.42	VII層土	
192	Bq-8	円形	0.30	0.24	V層土	
193	Bq・Br-8	円形	0.35	0.34	V層土	
194	Bq-7	不整形	—	0.10	VII層土	
195	Bp-8	不整形	—	0.21	XI層土	
196	Br-5	楕円形	0.74×0.50	0.22	IX層土	
197	Br・Bs-5	楕円形	0.55×0.50	0.33	IX層土	
198	Bq-7・8	楕円形	0.40×0.30	0.60	VII層土	
199	Bq-8	楕円形	0.40×0.34	0.38	VII層土	
200	Bq-8	楕円形	0.31×0.27	0.07	VII層土	
201	Bq-7	楕円形	0.40×0.35	0.49	VII層土	鉄滓
202	Bq-7	楕円形	0.45×0.40	0.29	VII層土	
203	Bq-8	円形	0.30	0.27	VII層土	
204	Bq-8	円形	0.22	0.17	V層土	
205	Bq-7	楕円形	0.60×0.44	0.60	VII層土	
206	Bq-7	楕円形	0.25×0.20	0.12	VII層土	
207	Bq-7	楕円形	0.23×0.16	0.20	VII層土	
208	Bq-7	隅丸長方形	0.40×0.32	0.35	VII層土	
209	Bq-7	楕円形	0.72×0.53	0.38	VII層土	
210	Bo・Bp-7	円形	0.45	0.33	VII層土	鉄滓
211	Bp-7	円形	0.35	0.67	VII層土	
212	Bq-8	円形	0.62	0.19	IX層土	
213	Bl-4	隅丸長方形	0.40×0.35	0.23	IX層土	
214	Bj-6	楕円形	0.67×0.59	0.42	IX層土	
215	Bj-5	不整形	—	0.42	XII層土	
216	Bk-4・5	隅丸長方形	0.76×0.48	0.41	XII層土	
217	Bl-5	楕円形	0.68×0.50	0.29	XII層土	
218	Bl-5	楕円形	0.77×0.63	0.82	XI・XII層土	
219	Bp・Bq-4・5	円形	0.50	0.32	IX層土	
220	Bp・Bq-5	楕円形	0.46×0.41	0.41	VII層土	
221	Bp・Bq-5	楕円形	0.40×0.35	0.44	XII層土	
222	Bp-5	楕円形	0.40×0.30	0.41	IX層土	
223	Bp-5	楕円形	0.45×0.40	0.25	VII層土	
224	Bp・Bq-5・6	楕円形	0.65×0.60	0.33	VII層土	
225	Bp-6	楕円形	0.47×0.41	0.41	VII層土	
226	Bq-5	楕円形	0.62×0.50	0.36	VII層土	
227	Bq-5・6	楕円形	0.70×0.62	0.43	VII層土	
228	Bq-6	楕円形	0.65×0.60	0.21	VII層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
229	Bq-6	楕円形	0.75×0.60	0.21	VII層土	
230	Bq-6	楕円形	0.57×0.44	0.43	VII層土	
231	Bl-4	楕円形	0.52×0.41	0.19	IX層土	鉄製品
232	Bk-4	楕円形	0.50×0.44	0.24	VII層土	
233	Bk-Bl-4	楕円形	0.40×0.35	0.14	VII層土	
234	Bl-4	楕円形	0.46×0.31	0.66	VII層土	
235	Bl-4	楕円形	0.38×0.32	0.17	IX層土	
236	Bl-4	楕円形	0.45×0.25	0.31	IX層土	
237	Bl-4	楕円形	0.46×0.40	0.28	IX層土	
238	Bl-4	隅丸長方形	0.30×0.25	0.21	IX層土	
239	Bl-4	楕円形	0.37×0.32	0.40	IX層土	鉄滓
240	Bq-4・5	隅丸長方形	0.30	0.43	VII層土	
241	Bq-5	楕円形	0.50×0.38	0.32	VII層土	
242	Bq-5	楕円形	0.45×0.37	0.27	V層土	
243	Bl-4	楕円形	0.35×0.26	0.15	V層土	
244	Bl-4	楕円形	(0.52)×0.28	0.41	V層土	
245	Bj-4	楕円形	0.55×0.50	0.13	VII層土	
246	Bl-4	楕円形	0.28×0.25	0.12	IX層土	
247	Bl-3	隅丸長方形	0.31	0.28	IX層土	
248	Bl-3	円形	0.16	0.16	IX層土	
249	Bp-4・5	楕円形	0.86×0.47	0.28	VII層土	
250	Bq-6	楕円形	0.60×(0.41)	0.45	VII層土	
251	Bq-6	円形	0.36	0.40	VII層土	
252	Bq-6	楕円形	0.50×0.40	0.19	IX層土	
253	Bj-4	楕円形	0.40×0.29	0.34		
254	Bk-4	不整形	—	0.30		

第2節 遺構外出土遺物

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
315	Bi-10	楕円形	0.61×0.22	0.14	V層土	
316	Bi-10	楕円形	0.64×0.53	0.30	IX層土	
317	Bp-10	隅丸方形	0.24	0.19	VII層土	
318	Bq-10	円形	0.31	0.27	VII層土	
319	Bh-7・8	円形	0.34	0.15		
320	Bh-8	楕円形	0.62×0.50	0.14	IX層土	
321	Bh-7・8	楕円形	0.59×0.46	0.36		須恵器環
322	Bh-7・8	楕円形	0.46×0.40	0.17		
323	Bi-8	楕円形	0.34×0.30	0.26	VII層土	
324	Bi-8	楕円形	0.46×0.40	0.26	VII層土	
325	Bi-8	楕円形	0.50×(0.43)	0.17	VII層土	
326	Bi-8	楕円形	0.60×0.40	0.42	VII層土	
327	Bi-8	楕円形	0.71×0.51	0.12	VII層土	
328	Bi-8	円形	0.40	0.12	IX層土	
329	Bi-8	円形	0.44	0.14	VII層土	
330	Bi-8	楕円形	(0.64)×(0.57)	0.09	VII層土	
331	Bi-8	円形	0.52	0.24	VII層土	
332	Bi-7・8	楕円形	0.61×0.46	0.16	VII層土	
333	Bi-8	楕円形	0.76×0.60	0.49	VII層土	
334	Bi-8	楕円形	0.45×0.32	0.36	VII層土	
335	Bi-8	円形	0.30	0.33	VII層土	
336	Bi-8	楕円形	0.36×0.19	0.18	VII層土	
337	Bi-8	楕円形	0.44×0.35	0.41	XII層土	
338	Bi-8	楕円形	0.47×(0.33)	0.40	IX層土	
339	Bq-7	楕円形	(0.54)×0.53	0.31		
340	Bi-11	楕円形	0.35×0.30	0.48	VII層土	
341	Bi・Bj-7	楕円形	0.45×0.35	0.16	IX層土	
342	Bi・Bj-7	楕円形	0.60×0.40	0.50	IX層土	
343	Bp-10	円形	0.38	0.13		
344	Bq-10	円形	0.35	0.32	VII層土	
345	Bq-12	楕円形	0.52×0.39	0.27	IX層土	土師器環
346	Bq-9	隅丸方形	0.45	0.51	VII層土	
347	Bp-8・9	楕円形	0.65×0.61	0.62	VII層土	
348	Bn-9	楕円形	0.45×0.40	0.29	VII層土	
349	Bj-8	楕円形	0.54×0.46	0.31	IX層土	
350	Bi-12	楕円形	0.38×0.30	0.47	VII層土	
351	Bi-12	円形	0.29	0.55	VII層土	
352	Bi-12	円形	0.35	0.13	IX層土	
353	Bi-12	円形	0.30	0.43	IX層土	
354	Bi-12	楕円形	(0.22)×0.22	0.24	IX層土	
355	Bi-12	楕円形	0.25×0.20	0.31	IX層土	
356	Bi-12	楕円形	0.29×0.25	0.29	IX層土	
357	Bi-12	楕円形	0.44×0.39	0.31	IX層土	
358	Bi-12	円形	0.18	0.19	IX層土	
359	Bh-12	円形	0.20	0.28	IX層土	
360	Bh・Bi-12	楕円形	(0.26)×0.27	0.13	VII層土	
361	Bh・Bi-12	円形	0.41	0.15	VII層土	
362	Bi-12	楕円形	0.32×0.24	0.46	VII層土	
363	Bi-11	楕円形	0.30×0.25	0.20	VII層土	
364	Bi-11・12	円形	0.55	0.13	VII層土	
365	Bj-10	楕円形	0.52×0.47	0.12	VII層土	
366	Bj-11・12	楕円形	0.34×0.24	0.48	VII層土	
367	Bm-12	楕円形	0.39×0.30	0.31	IX層土	
368	Bm-12	楕円形	0.44×0.32	0.22	IX層土	
369	Bm-12	楕円形	0.33×0.27	0.07	IX層土	
370	Bm-11・12	隅丸方形	0.27	0.18		
371	Bn-9	楕円形	0.44×0.32	0.34		
372	Bn-9	楕円形	0.42×0.38	0.45	IX層土	
373	Bm-9・10	不整形	—	0.50	IX層土	
374	Bj-12	楕円形	(0.30)×0.28	0.20	IX層土	
375	Bj-12	楕円形	(0.35)×0.27	0.21	IX層土	
376	Bj-12	楕円形	0.44×0.35	0.28	IX層土	
377	Bj-12	楕円形	0.34×0.30	0.31	IX層土	
378	Bj-12	楕円形	0.41×0.23	0.34	IX層土	
379	Bj-12	楕円形	0.33×0.29	0.30	IX層土	
380	Bj-12	円形	0.30	0.37	IX層土	
381	Bj-11	楕円形	0.25×0.20	1.02	IX層土	
382	Bk-11	楕円形	0.38×0.34	0.10	V層土	
383	Bk-11	楕円形	0.25×0.17	0.10	V層土	
384	Bk-11	楕円形	0.22×0.17	0.18	V層土	
385	Bk-11	円形	0.30	0.15	V層土	
386	Bk-11	楕円形	0.71×0.37	0.27	V層土	
387	不明	—	—	—	V層土	
388	Bk-11	円形	0.23	0.10	V層土	
389	Bk-11	楕円形	0.30×0.25	0.17	V層土	
390	Bk-11	楕円形	0.27×0.22	0.13	VII層土	
391	Bk-11	円形	0.33	0.31	VII層土	
392	Bk-11	楕円形	0.33×0.29	0.21	VII層土	
393	Bk-10・11	円形	0.32	0.35	VII層土	
394	Bk-10	楕円形	0.52×0.36	0.41	IX層土	
395	Bk-10	楕円形	(0.37)×0.38	0.27	V層土	
396	Bk-10	楕円形	0.48×0.40	0.32	V層土	
397	Bj・Bk-9	楕円形	0.28×0.20	0.56	IX層土	
398	Bk-9	楕円形	0.61×0.28	0.37	IX層土	
399	Bj・Bk-9	楕円形	0.57×0.29	0.80	IX層土	
400	Bj-9	楕円形	0.41×0.20	0.51	IX層土	

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
401	Bj-9	楕円形	0.35×0.28	0.45	IX層土	
402	Bj-9	楕円形	0.40×0.30	0.56	IX層土	
403	Bl-9	円形	0.35	0.19	IX層土	
404	Bn-9	円形	0.15	0.19	V層土	
405	Bn-9	楕円形	0.51×0.40	0.57		
406	Bl-11	円形	0.25	0.15	IX層土	
407	Bl-11	楕円形	0.39×0.32	0.24	IX層土	
408	Bl-11	楕円形	0.23×0.20	0.24	IX層土	
409	Bl-12	楕円形	0.25×0.18	0.23	IX層土	
410	Bl-12	円形	0.30	0.21	IX層土	
411	Bj-12	楕円形	0.32×0.22	0.08	IX層土	
412	Bj・Bk-9	楕円形	0.42×0.31	0.41	IX層土	
413	Bj-9	円形	0.18	0.29	IX層土	
414	Bj-9	楕円形	0.28×0.16	0.27	IX層土	
415	Bj-9	楕円形	0.38×0.24	0.42	IX層土	
416	Bn-8	不整形	0.39	0.46		
417	Bm-10	楕円形	0.49×(0.28)	0.65		
418	Bj-9	楕円形	0.35×0.29	0.55	IX層土	
419	Bj-9	楕円形	(0.40)×(0.33)	0.48		
420	Bj-9	楕円形	0.38×0.21	0.34		
421	Bn-8・9	楕円形	0.35×0.23	0.36	IX層土	
422	Bn-8・9	隅丸長方形	0.33×0.24	0.05	IX層土	
423	Bn-9	楕円形	0.40×0.28	0.45	IX層土	
424	Bm-11	円形	0.21	0.29	VII層土	
425	Bm・Bn-10・11	円形	0.21	0.28	VII層土	
426	Bm・Bn-11	楕円形	0.19×0.16	0.48	IX層土	
427	Bn-11	楕円形	0.31×0.22	0.31	IX層土	
428	Bn-11	楕円形	0.23×0.20	0.11	IX層土	
429	Bn-11	円形	0.19	0.14	IX層土	
430	Bn-11	楕円形	0.43×0.36	0.37	IX層土	
431	Bn-11	楕円形	0.50×0.41	0.69	VII層土	
432	Bn-11	楕円形	0.42×0.39	0.17	IX層土	
433	Bm-10・11	楕円形	0.32×0.26	0.08	IX層土	
434	Bj-8	楕円形	0.50×0.44	0.39	VII層土	
435	Bj-8	円形	0.30	0.23	VII層土	
436	Bj-8	楕円形	0.32×0.28	0.22	VII層土	
437	Bi-8	楕円形	(0.35)×0.20	0.42	VII層土	
438	Bi・Bj-8	円形	0.20	0.27	VII層土	
439	Bi-8	楕円形	0.34×0.30	0.37	VII層土	
440	Bi-7	楕円形	0.48×0.35	0.26	IX層土	
441	Bi-7	楕円形	0.47×0.40	0.32	VII層土	
442	Bi-8	円形	0.42	0.19	IX層土	
443	Bi-8	楕円形	(0.43)×0.28	0.22	IX層土	
444	Bi-8・9	楕円形	0.48×0.40	0.31	IX層土	
445	Bi-9	円形	0.27	0.22	IX層土	
446	Bi-9	楕円形	0.38×0.27	0.19	IX層土	
447	Bi-9	円形	0.45	0.28	IX層土	
448	Bi-9	円形	0.30	0.16	VII層土	
449	Bp-8	円形	0.40×(0.17)	0.25	VII層土	
450	Bi-8	円形	0.34	0.16	IX層土	
451	Bi-8	不整形	—	0.11		
452	Bh-11	楕円形	0.34×0.23	0.27	VII層土	
453	Bk-10・11	楕円形	0.47×0.40	0.75	IX層土	
454	Bh-8	楕円形	0.52×0.36	0.29		
455	Bp-13・14	円形	0.28	0.23	VII層土	
456	Bp-14	楕円形	0.28	0.44	VII層土	
457	Bq-7	円形	0.23	0.22	IX層土	
458	Bq-7	円形	0.21	0.29	IX層土	
459	Bq-7	円形	0.26	0.21	IX層土	
460	Bh-7	楕円形	0.32×0.25	0.20	IX層土	
461	Bh-7	楕円形	0.48×0.38	0.30	IX層土	
462	Bh-7	楕円形	0.43×0.35	0.45	IX層土	
463	Bh-6・7	楕円形	0.36×0.32	0.66	IX層土	
464	Bj-12	円形	0.20	0.26	IX層土	
465	Bh-7	楕円形	0.30×0.21	0.23		
466	Bk-8	楕円形	0.44×(0.33)	0.22	VII層土	須恵器塊
467	Bn-8	楕円形	0.38×(0.15)	0.24	IX層土	
468	Bn-8	円形	0.33	0.34	VII層土	
469	Bk-8	円形	0.20	0.23		
470	Bn-8	円形	0.24	0.15	VII層土	
471	Bn-8	楕円形	0.38×0.28	0.36	VII層土	
472	Bn-8	円形	0.25	0.38	IX層土	
473	Bn-8	円形	0.31	0.41	VII層土	
474	Bn-9	楕円形	0.44×0.32	0.26	VII層土	土師器器台
475	Bn-9	円形	0.21	0.22	IX層土	
476	Bo-9	楕円形	0.31×0.24	0.23	IX層土	
477	Bo-10	円形	0.28	0.12	IX層土	
478	Bn-9	楕円形	0.23×0.20	0.18	IX層土	
479	Bn-10	楕円形	0.32×0.20	0.66	IX層土	
480	Bn-10	楕円形	0.274×0.21	0.25	IX層土	
481	Bm-10	楕円形	0.30×0.23	0.36	IX層土	
482	Bm-11	円形	0.24	0.08	IX層土	
483	Bm-12	円形	0.21	0.45	IX層土	
484	Bm-12	楕円形	0.29×0.20	0.15	IX層土	
485	Bl-12	円形	0.26	0.09	As-C	

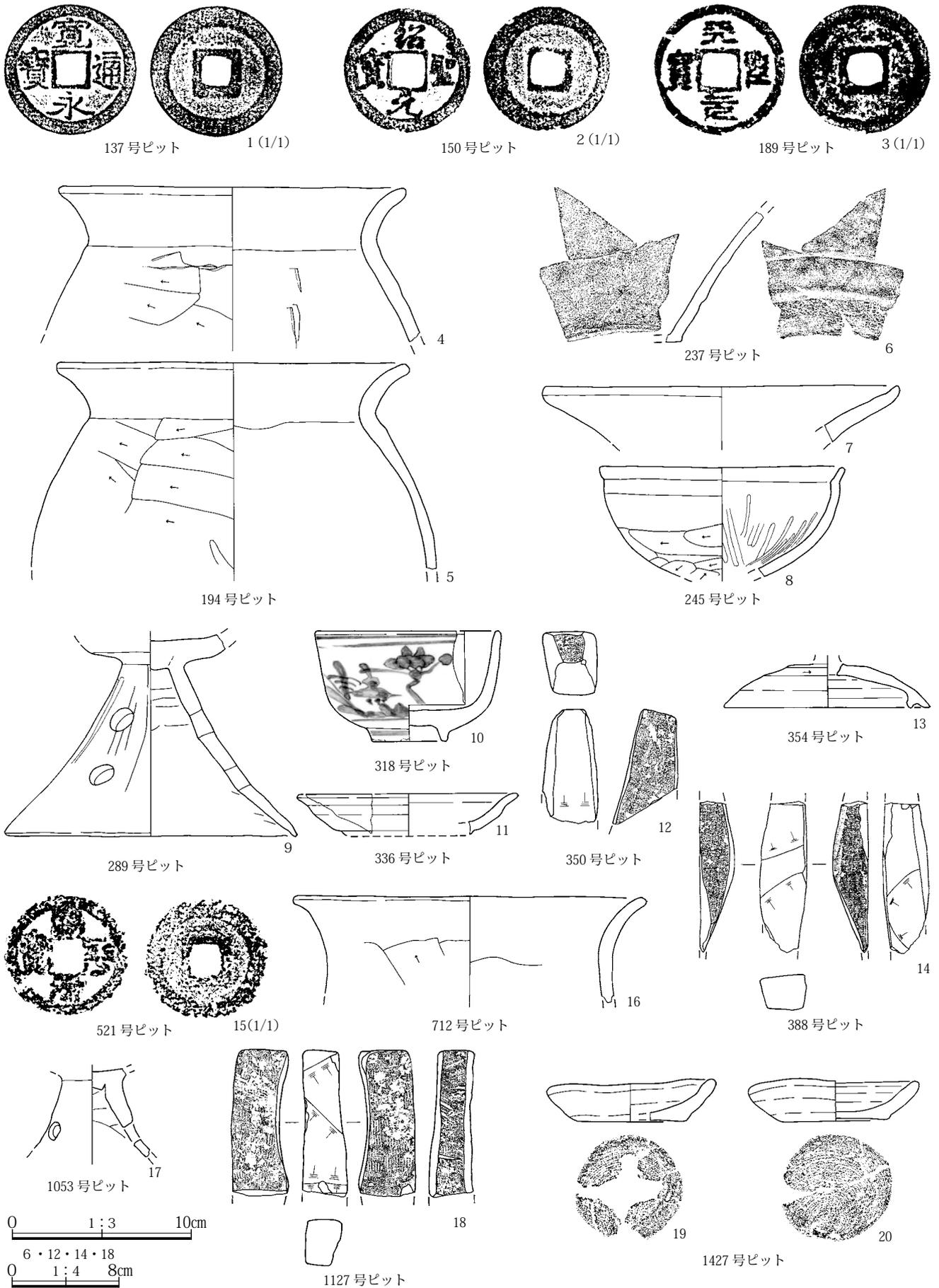
番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土遺物
486	Bk-9	楕円形	0.36×0.30	0.37	VII層土	灰釉陶器塊
487	Bk-9	円形	0.27	0.37	VII層土	須恵器甕
488	Bm-11	楕円形	0.35×0.25	0.23	IX層土	
489	Bo-8・9	円形	0.40	0.56	VII層土	土師器臺
490	Ca-10	楕円形	0.61×0.54	0.23	IX層土	
491	Ca-9・10	楕円形	0.43×0.37	0.21	IX層土	
492	Ca-10	楕円形	0.47×0.42	0.09	IX層土	
493	Ca-10	円形	0.22	0.18	IX層土	
494	Ca-10	楕円形	0.68×0.52	0.12	IX層土	
495	Ca-10	楕円形	(0.63)×0.47	0.25	IX層土	
496	Ca-10	楕円形	0.77×0.69	0.37	IX層土	
497	Ca-9	円形	0.39	0.20	IX層土	
498	Ca-9	楕円形	0.37×0.32	0.15	IX層土	
499	Ca-9	円形	0.20	0.12	IX層土	
500	Ca-9	楕円形	0.66×0.46	0.18	IX層土	
501	Ca-9	円形	0.35	0.24	IX層土	
502	Ca-9	楕円形	0.48×0.43	0.12	IX層土	
503	Ca・Cb-9・10	楕円形	0.41×0.31	0.09	IX層土	
504						

第7章 時期不明遺構と遺構外出土遺物

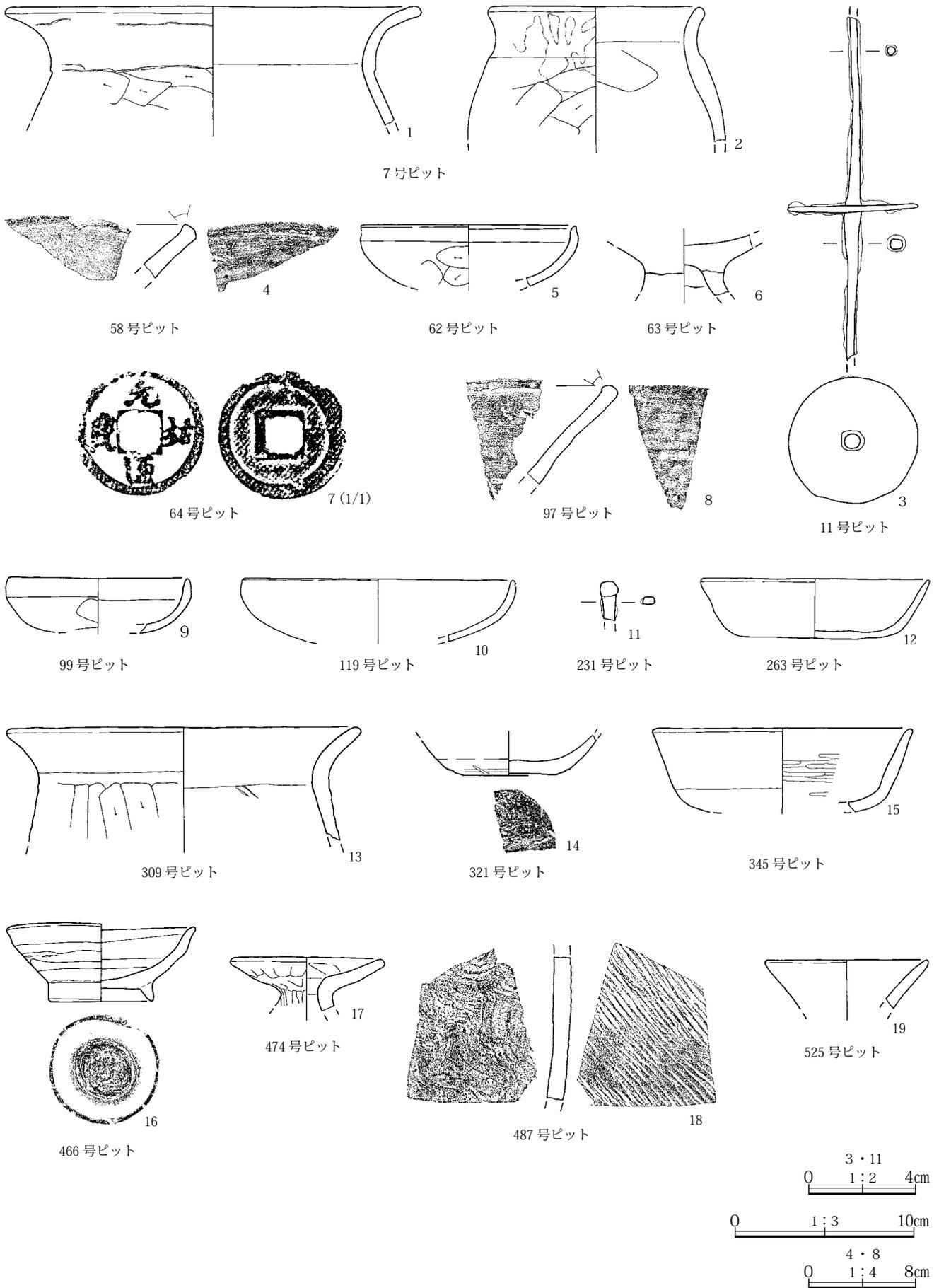
番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
570	Ca-10	楕円形	0.77×0.60	0.31	Ⅹ層土	
571	Ca-10	楕円形	0.40×0.34	0.25	Ⅹ層土	
572	Ca-10	楕円形	0.92×0.57	0.40	Ⅹ層土	
573	Bh-3	楕円形	0.24×0.20	0.05		
574	Bh-3	楕円形	0.24×0.20	0.03		
575	Bh-2・3	楕円形	0.70×0.59	0.12		
576	Bl-3	楕円形	(0.42)×0.33	0.18		
577	Bl-3	楕円形	(0.35)×(0.30)	0.18		
578	Bj-3	楕円形	0.28×0.22	0.29		
579	Bj-3	隅丸長方形	0.18×0.15	0.22		
580	Bj-3	楕円形	0.68×0.45	0.25		
581	Bj-2・3	隅丸方形	0.25	0.19		
582	Bj-2	隅丸長方形	0.26×0.22	0.29		
583	Bj-2	楕円形	0.27×0.20	0.19		
584	Bj-2・3	円形	0.30	0.13		
585	Bj-2	楕円形	0.31×0.25	0.30		
586	Bj-2	楕円形	0.40×0.34	0.31		
587	Bj-3	楕円形	0.40×0.35	0.45		
588	Bj-3	楕円形	0.60×0.55	0.11		
589	Bj-3	楕円形	0.39×0.35	0.32		
590	Bj-3	隅丸方形	0.21	0.17		
591	Bj-3	隅丸方形	0.20	0.04		
592	Bj-3	楕円形	0.35×0.23	0.26		
593	Bk-3	隅丸方形	0.25	0.40		
594	Bk-3	隅丸方形	0.25	0.28		
595	Bj-3	楕円形	(0.24)×(0.30)	0.22		
596	Bj-3	隅丸方形	0.27	0.37		
597	Bk-3	円形	0.25	0.06		
598	Bk-3	楕円形	0.45×0.40	0.39		
599	Bk-3	楕円形	0.46×0.30	0.47		
600	Bk-3	隅丸長方形	0.32×0.23	0.26		
601	Bk-3	隅丸長方形	0.25×0.20	0.29		
602	Bk-3	楕円形	(0.25)×(0.20)	0.18		
603	Bk-3	隅丸長方形	0.22×0.14	0.19		
604	Bj・Bk-3	隅丸長方形	0.35×0.30	0.37		
605	Bk-3	隅丸長方形	0.23×(0.10)	0.17		
606	Bk-2	楕円形	0.29×0.22	0.39		
607	Bk-2	楕円形	0.23×0.17	0.37		
608	Bk-2	隅丸方形	0.19	0.23		
609	Bk-3	隅丸方形	0.21	0.38		
610	Bk-2・3	楕円形	0.44×(0.35)	0.17		
611	Bk-3	円形	0.40	0.41		
612	Bk-3	楕円形	0.24×0.19	0.21		
613	Bk-2	隅丸長方形	0.20×0.16	0.17		
614	Bk-2	楕円形	0.33×0.22	0.22		
615	Bk-3	隅丸長方形	0.27×0.21	0.13		
616	Bk-3	隅丸長方形	0.26×0.17	0.11		
617	Bk-3	楕円形	0.40×0.33	0.08		
618	Bk-3	隅丸長方形	0.45×0.25	0.57		
619	Bk・Bl-3	隅丸長方形	0.25×0.18	0.03		
620	Bl-3	隅丸長方形	0.28×0.23	0.39		
621	Bk-3	楕円形	(0.27)×(0.23)	0.20		
622	Bk-3	楕円形	0.31×(0.25)	0.44		
623	Bk-3	円形	0.18	0.36		
624	Bl-2	円形	0.26	0.12		
625	Bk-2	楕円形	0.28×0.21	0.22		
626	Bj-2	隅丸長方形	(0.22)×0.22	0.12		
627	Bj-2	隅丸長方形	0.31×0.26	0.50		
628	Bj-2	円形	0.23	0.22		
629	Bj-2	楕円形	0.38×0.30	0.31		
630	Bj-2	楕円形	0.30×0.18	0.37		
631	Bk-2	楕円形	0.25×0.19	0.14		
632	Bk-2	楕円形	0.35×0.23	0.29		
633	Bk-2	隅丸方形	0.25	0.14		
634	Bk-2	楕円形	0.27×0.18	0.43		
635	Bk-2	楕円形	0.55×0.38	0.13		
636	Bk-2	楕円形	0.38×0.31	0.44		
637	Bk-2	隅丸方形	0.33	0.32		
638	Bk-2	隅丸方形	0.23	0.32		
639	Bk-2	隅丸長方形	0.30×0.22	0.16		
640	Bk-2	楕円形	0.25×0.17	0.15		
641	Bk-2	楕円形	0.24×0.17	0.03		
642	Bk-2	隅丸長方形	0.23×0.15	0.05		
643	Bk-2	隅丸長方形	0.35×0.26	0.20		
644	Bl-2	楕円形	0.31×0.26	0.18		
645	Bl-2	円形	0.22	0.18		
646	Bk・Bl-2	隅丸方形	0.20	0.18		
647	Bk-2	隅丸方形	0.28	0.21		
648	Bk-2	隅丸方形	0.20	0.15		
649	Bk-2	楕円形	0.41×0.35	0.38		
650	Bk-1・2	隅丸長方形	0.34×0.30	0.20		
651	Bk-1・2	楕円形	0.25×0.20	0.08		
652	Bk-1・2	隅丸長方形	0.25×0.16	0.08		
653	Bk-1	隅丸方形	0.15	0.27		
654	Bk-1	隅丸長方形	0.18×0.14	0.19		
655	Bk-1	楕円形	0.23×0.17	0.14		
656	Bk-1	隅丸長方形	0.40×0.22	0.15		
657	Bk-1	隅丸方形	0.30	0.10		

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
658	Bl-1	隅丸方形	0.35	0.07		
659	Bk-1	隅丸長方形	0.23×0.19	0.04		
660	Bl-1	円形	0.16	0.08		
661	Bk-2	楕円形	0.30×0.22	0.16		
662	Bk-2	楕円形	0.28×0.25	0.24		
663	Bk-2	楕円形	0.28×0.19	0.19		
664	Bj-2	楕円形	0.28×0.22	0.18		
665	Bj-2	楕円形	0.45×0.38	0.03		
666	Bl-3	楕円形	0.40×0.35	0.16		
667	Bl-3	隅丸長方形	0.29×0.21	0.14		
668	Bl-3	楕円形	0.45×0.33	0.39		
669	Bl-3	隅丸方形	0.25	0.43		
670	Bl-3	隅丸方形	0.19	0.26		
671	Bl-4	円形	0.45	0.24		
672	Bl-3	隅丸方形	0.24	0.11		
673	Bl-3	隅丸方形	0.25	0.14		
674	Bl-2・3	隅丸方形	0.19	0.12		
675	Bl-2	隅丸長方形	0.30×0.24	0.14		
676	Bl-2	隅丸方形	0.26	0.16		
677	Bl-2	楕円形	0.15×(0.12)	0.04		
678	Bl-2	楕円形	0.26×0.22	0.14		
679	Bl-2	隅丸方形	0.20	0.05		
680	Bl-2・3	隅丸方形	0.20	0.17		
681	Bl・Bm-2	楕円形	0.47×0.35	0.64		
682	Bm-2	隅丸方形	0.22	0.21		
683	Bm-2・3	隅丸方形	0.19	0.26		
684	Bm-3	楕円形	0.28×0.22	0.20		
685	Bm-3・4	隅丸長方形	0.48×0.40	0.44		
686	Bm-4	楕円形	0.48×0.42	0.16		
687	Bm-3	隅丸方形	0.25	0.20		
688	Bn-3	隅丸長方形	0.35×0.29	0.24		
689	Bn-3	楕円形	0.30×0.20	0.22		
690	Bm-3	円形	0.18	0.07		
691	Bn-3	隅丸長方形	0.26×0.21	0.20		
692	Bn-2	隅丸長方形	0.27×0.23	0.15		
693	Bm-2	楕円形	0.36×0.30	0.13		
694	Bn-2	隅丸長方形	0.28×0.23	0.33		
695	Bn-2	隅丸長方形	0.26×0.22	0.08		
696	Bm-2	円形	0.20	0.18		
697	Bm-2	隅丸長方形	0.26×0.21	0.24		
698	Bl-2	隅丸方形	0.16	0.07		
699	Bl-2	隅丸方形	0.15	0.04		
700	Bl-2	隅丸方形	0.17	0.03		
701	Bl・Bm-2	隅丸方形	0.16	0.07		
702	Bl-2	隅丸方形	0.24	0.08		
703	Bm-2	楕円形	0.46×0.38	0.53		
704	Bm-1	隅丸長方形	0.25×0.21	0.17		
705	Bm・Bn-2	隅丸長方形	0.24×0.17	0.10		
706	Bn-2	隅丸長方形	0.22×0.17	0.13		
707	Bn-2	楕円形	0.18×0.15	0.16		
708	Bn-1	隅丸方形	0.30	0.12		
709	Bo-0	隅丸長方形	0.34×0.23	0.20		
710	Bo-0	隅丸長方形	0.35×0.28	0.25		
711	Bg-3	楕円形	0.30×0.22	0.14		
712	Br-3	楕円形	0.30×0.25	0.21		
713	Br-3	楕円形	0.24×0.19	0.21		
714	Bg・Br-2	円形	0.25	0.16		
715	Br-2	楕円形	0.40×0.35	0.21		
716	Br-3	楕円形	0.22×0.18	0.19		
717	Br-3	楕円形	0.32×0.28	0.31		
718	Br-2	楕円形	0.44×0.38	0.42		
719	Br-2	楕円形	0.39×0.35	0.37		
720	Br-3	楕円形	0.25×0.18	0.34		
721	Br-3	隅丸方形	0.25	0.39		
722	Br-3	隅丸方形	0.18	0.08		
723	Br-3	楕円形	0.21×0.18	0.14		
724	Br・Bs-2	楕円形	0.41×0.35	0.23		
725	Bs-2・3	楕円形	0.40×0.19	0.12		
726	Bs-2	楕円形	0.33×0.25	0.27		
727	Br-2	楕円形	0.22×0.17	0.23		
728	Br-2	楕円形	0.30×0.25	0.30		
729	Bs-2	楕円形	0.30×0.20	0.13		
730	Br-4	楕円形	(0.15)×(0.25)	0.27		
731	Br-2	楕円形	0.48×0.36	0.25		
732	Br・Bs-2	楕円形	0.25×0.21	0.21		
733	Bs-2	楕円形	0.16×0.13	0.05		
734	Br-2	楕円形	(0.50)×0.48	0.15		
735	Br-2	楕円形	0.20×0.16	0.13		
736	Br-2	楕円形	0.54×0.41	0.13		
737	Br-2	楕円形	0.68×0.48	0.32		
738	Br-1・2	楕円形	0.50×0.45	0.23		
739	Br-1	楕円形	0.38×0.35	0.31		
740	Br-1	楕円形	0.34×0.30	0.21		
741	Br-1	楕円形	0.32×0.28	0.29		
742	Bs-1	楕円形	0.50×0.45	0.29		
743	Bs-2	円形	0.35	0.17		
744	Bs-1・2	楕円形	0.30×0.25	0.16		
745	Bs-1	楕円形	0.32×0.27	0.21		

番号	グリッド	平面形	規模 (m)	深さ (m)	備考	出土 遺物
746	Bs-1	楕円形	0.26×0.20	0.23		
747	Bs-1	楕円形	0.40×0.30	0.22		
748	Bs-0・1	楕円形	0.48×0.38	0.14		
749	Bs-0	隅丸方形	0.25	0.29		
750	Bs-0	楕円形	0.35×0.25	0.26		
751	Bm-2	楕円形	0.36×0.27	0.24		
752	Bn-2	隅丸長方形	0.28×(0.14)	0.11		
753	Bg-15	隅丸方形	0.21	0.05		
754	Bg-15	円形	0.20	0.06		
755	Bg-15	隅丸方形	0.22	0.06		
756	Bf-14	楕円形	0.36×0.25	0.10		
757	Bg-14	隅丸方形	0.28	0.15		
758	Bf-14	円形	0.34	0.16		
759	Bf-14	楕円形	0.26×(0.10)	0.04		
760	Bf-12・13	楕円形	0.15×0.11	0.05		
761	Bf-14	楕円形	0.22×0.18	0.08		
762	Bf-12・13	円形	0.16	0.07		
763	Bf-13	楕円形	0.15×0.12	0.06		
764	Bf-13	楕円形	0.18×0.13	0.04		
765	Bf-14	隅丸長方形	0.28×0.25	0.22		
766	Bf-12・13	隅丸長方形	0.28×0.23	0.27		
767	Bf-13	楕円形	0.44×0.41	0.11		
768	Bf-14	隅丸長方形	0.30×0.25	0.31		
769	Bg-14	隅丸長方形	0.25×0.20	0.20		

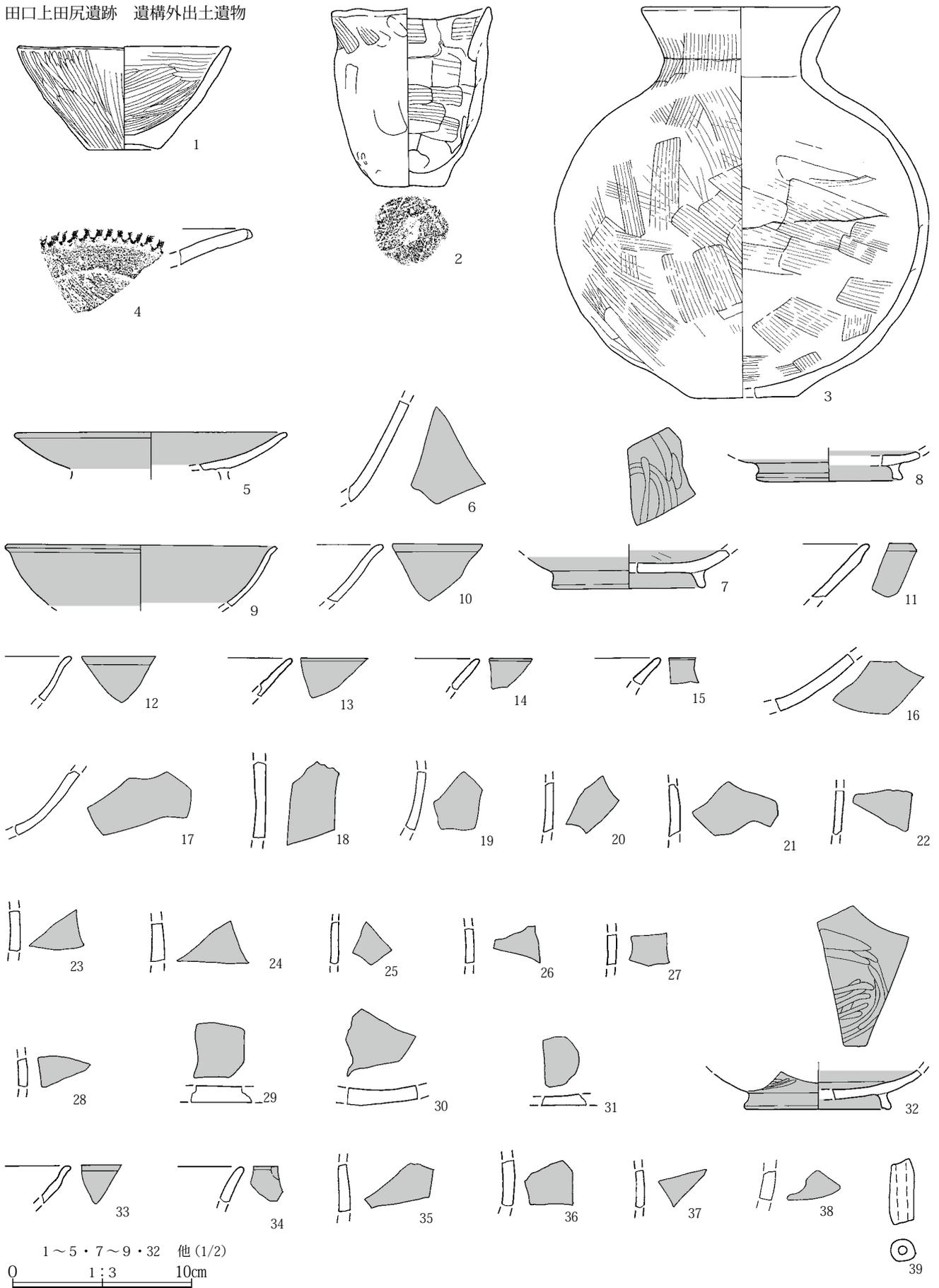


第991図 田口上田尻遺跡 ピット出土遺物

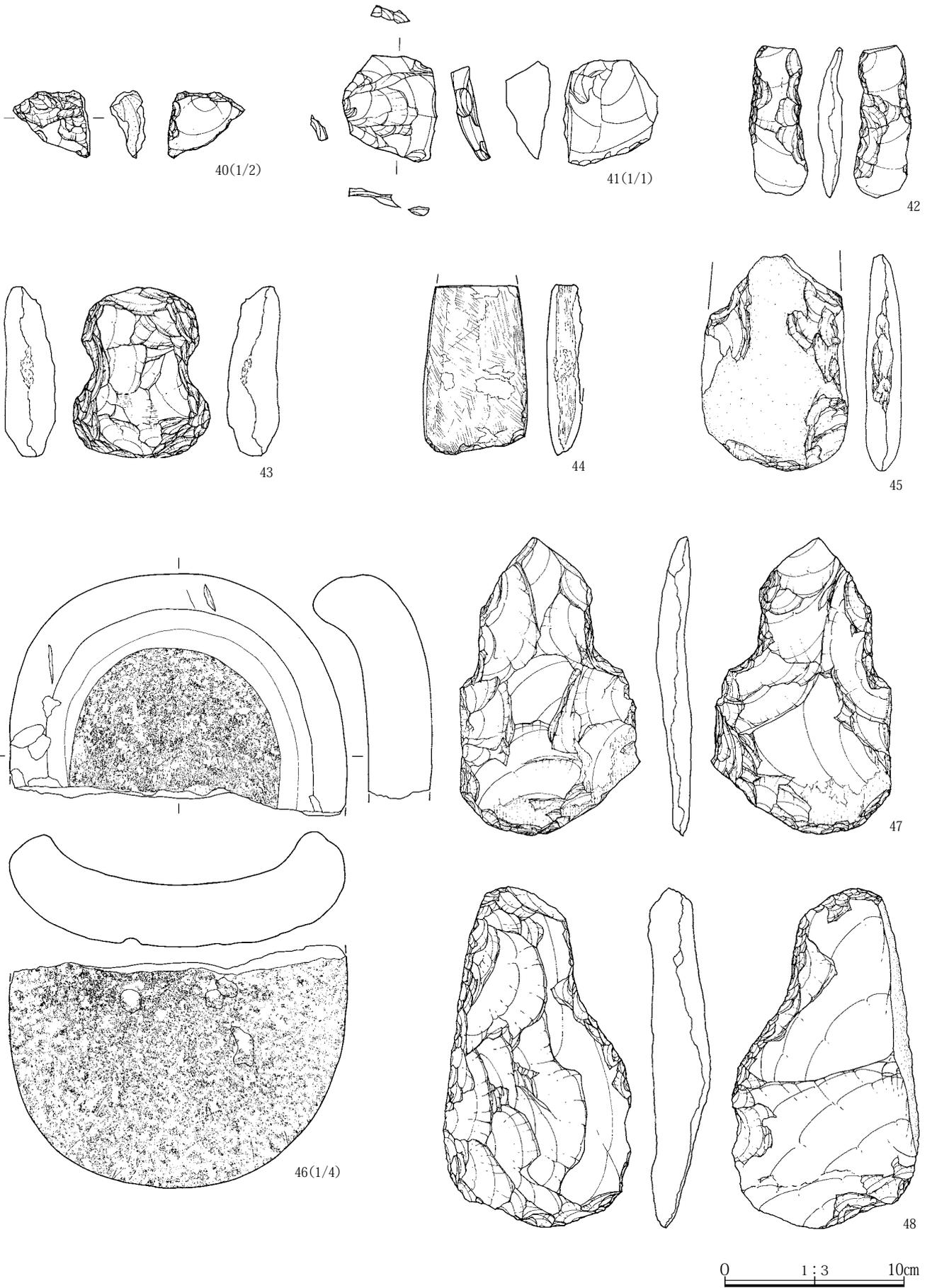


第992図 田口下田尻遺跡 ピット出土遺物

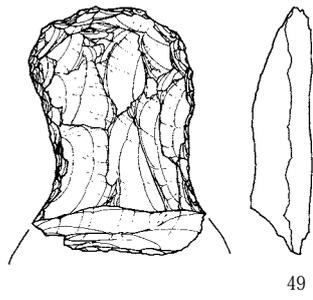
田口上田尻遺跡 遺構外出土遺物



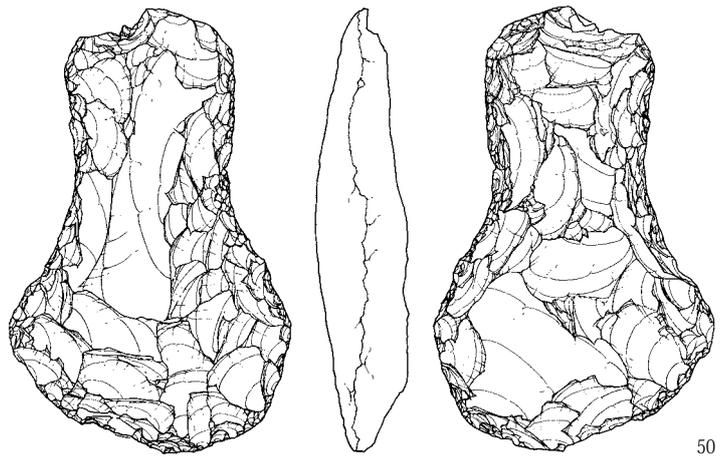
第993図 遺構外出土遺物(1)



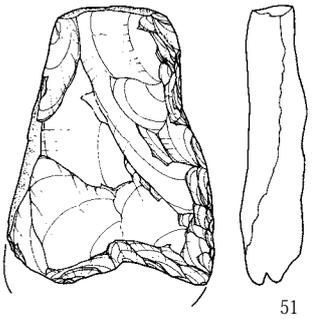
第994図 遺構外出土遺物(2)



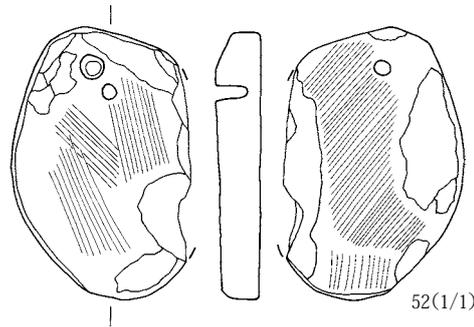
49



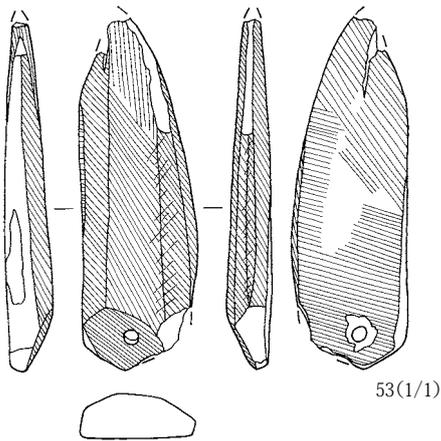
50



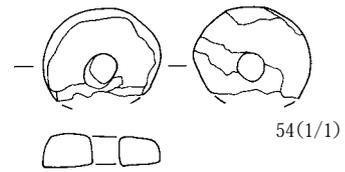
51



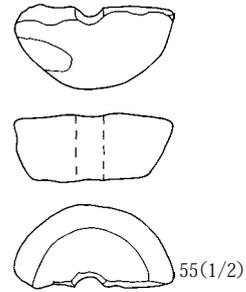
52(1/1)



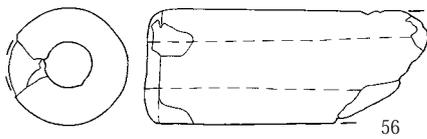
53(1/1)



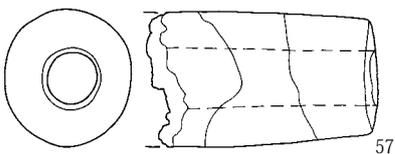
54(1/1)



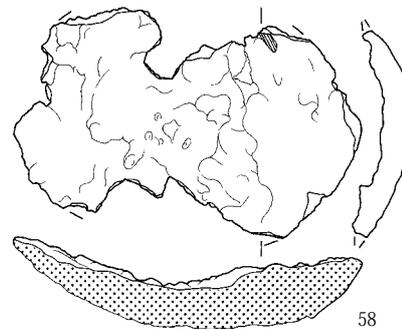
55(1/2)



56



57



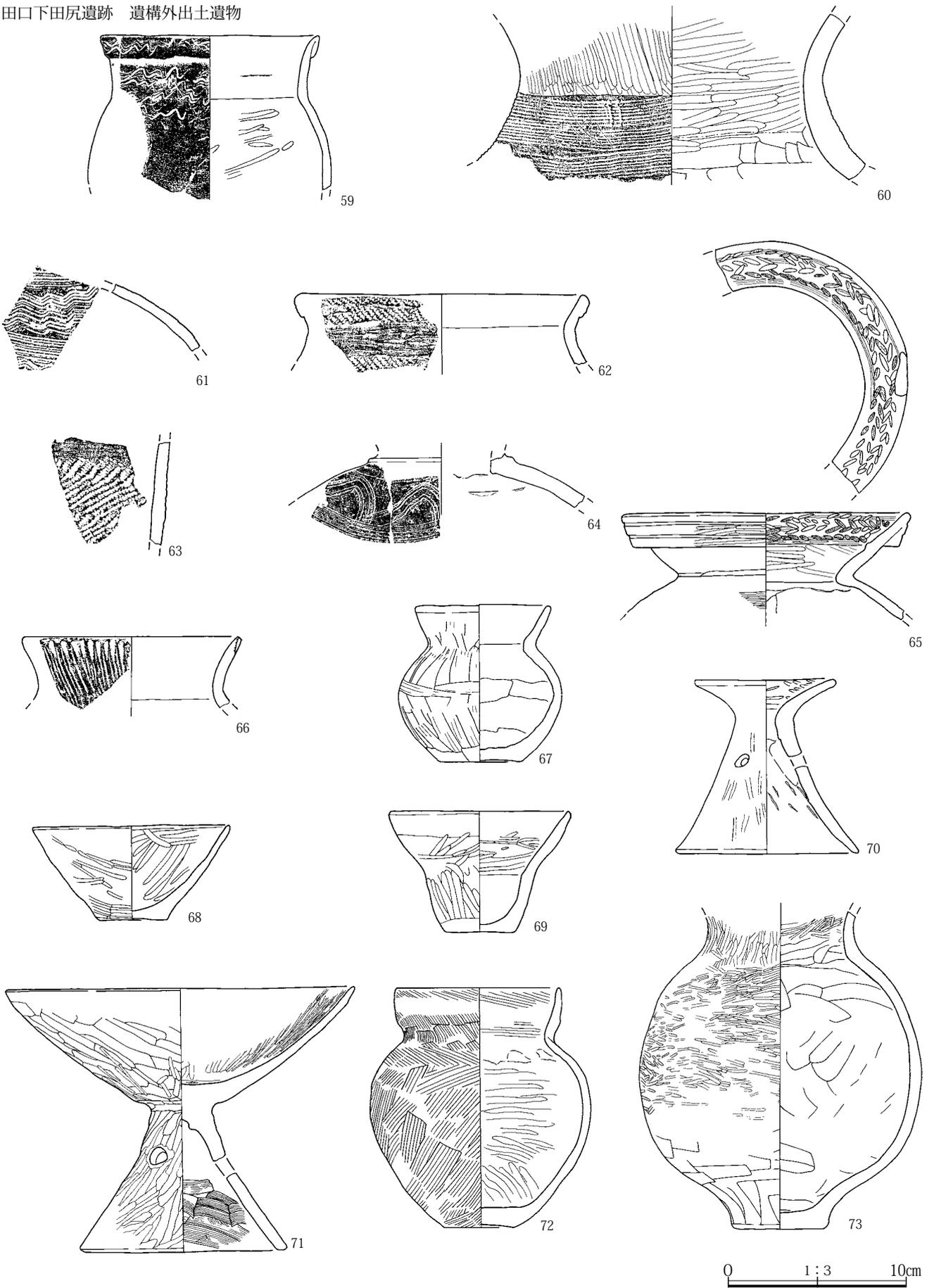
58

0 49 ~ 51 1 : 3 10cm

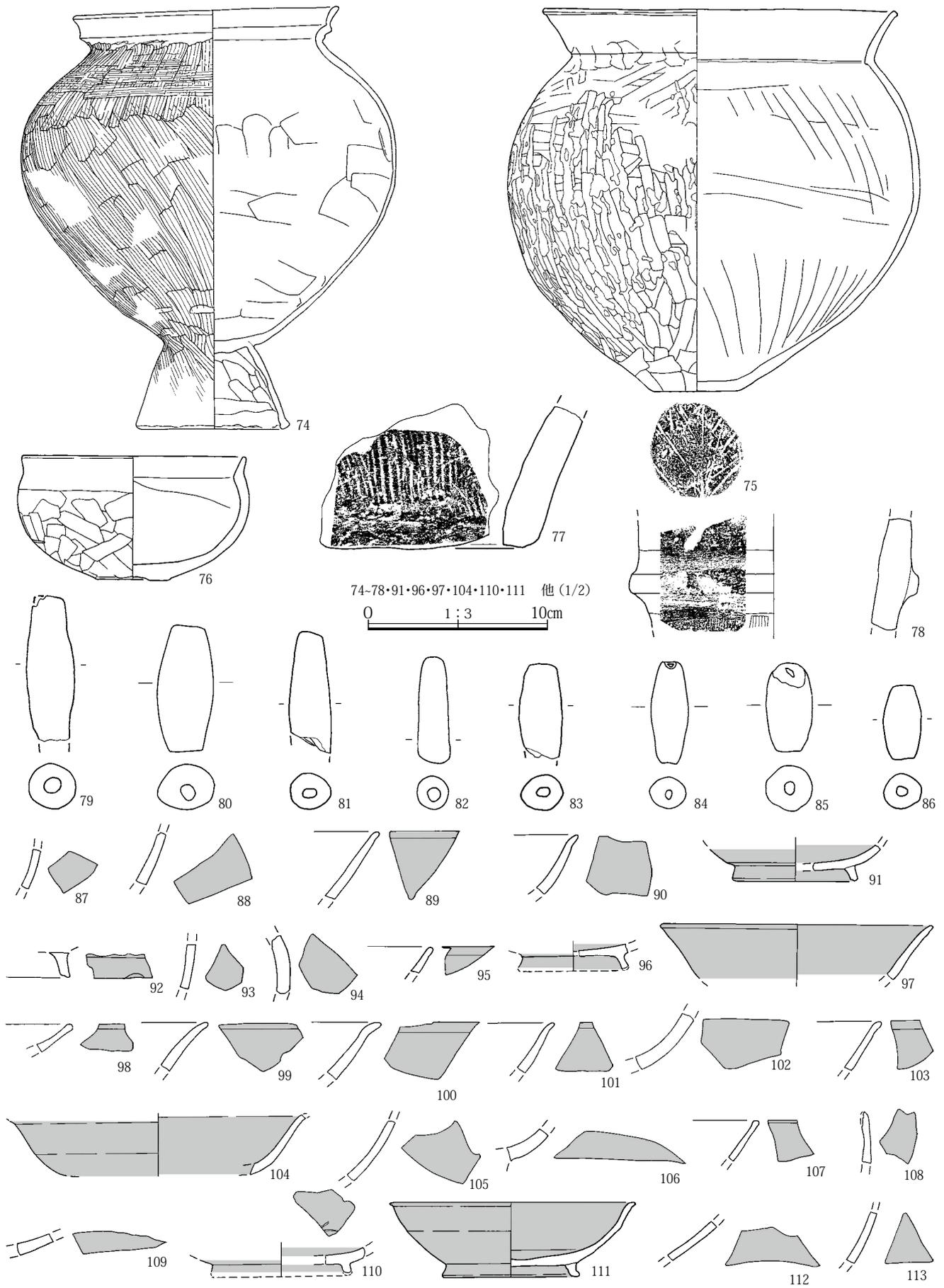
0 56 ~ 58 1 : 4 8cm

第995図 遺構外出土遺物(3)

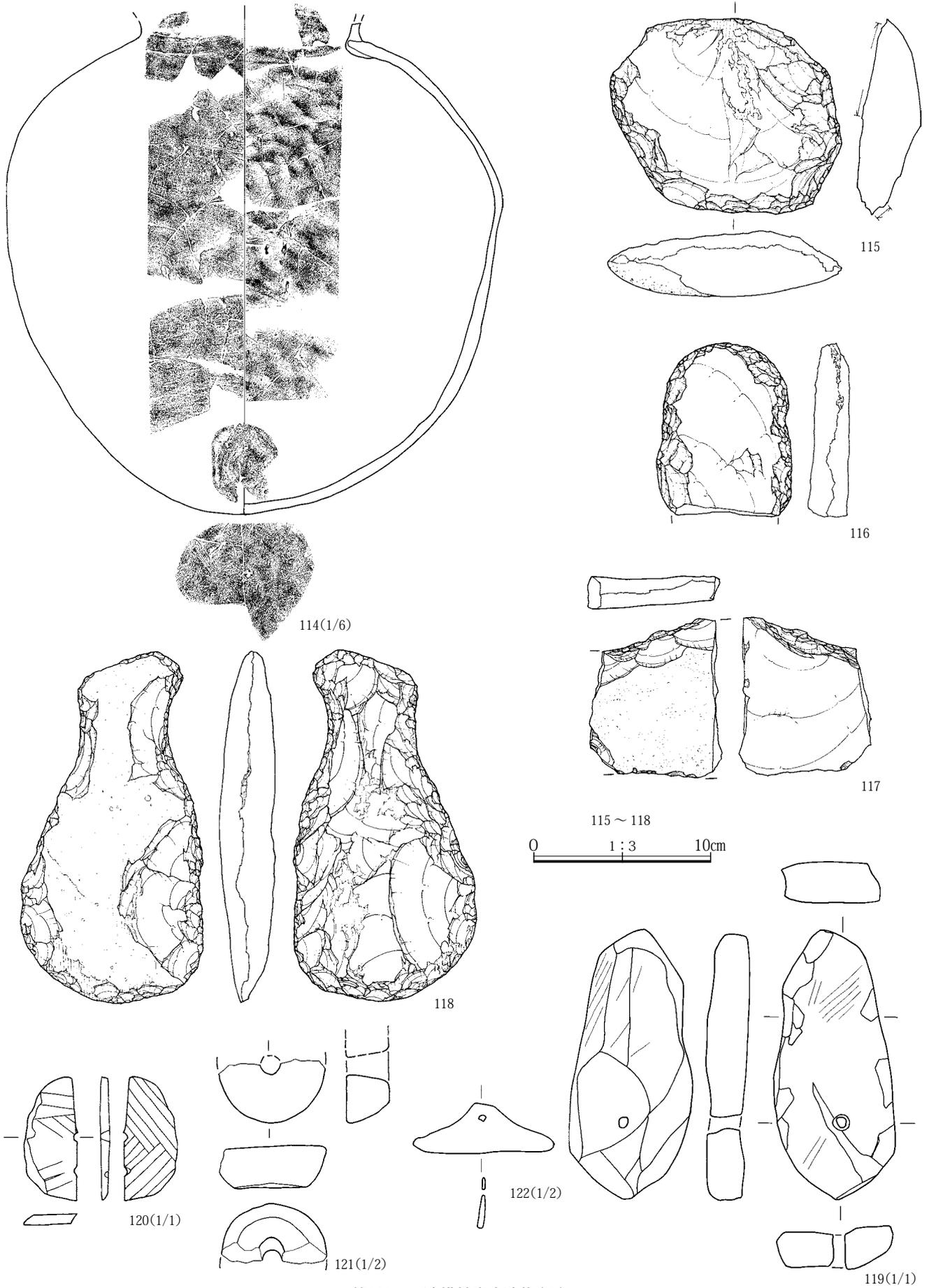
田口下田尻遺跡 遺構外出土遺物



第996図 遺構外出土遺物(4)



第997図 遺構外出土遺物(5)



第998図 遺構外出土遺物(6)

第8章 科学分析



第8章 科学分析

第1節 炭化材および炭化種実の放射性炭素年代測定

田口下田尻遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居覆土中にAs-C（浅間山の示準テフラ）を含むもの、上層までまったく含まないもの、覆土中層にAs-Cの純堆積層を挟むものに大別することができる。これは、当遺跡の集落がAs-C降下の前後で営まれていたことを示すものであり、As-Cの降下年代をより実年代に近づけることによって、集落の開始時期をより正確に捉えることができ、そのことによって田口地域において本格的な地域開発が開始された時期を特定することが可能となる。

As-C降下年代は、現在は3世紀末または4世紀初頭とされ、遺構・遺物の年代を推定するための定点として使用されている。しかし、As-Cそのものに直接的に実年代を知る手がかりは無く、実年代が想定されている他地域の土器と在地土器との供伴から導き出された年代がAs-C降下年代に与えられている。そのため、土器の年代が修正されると、連動してAs-C降下年代も修正の必要が生ずることになることから、実年代をよりの確に把握する必要がある。前述のように当遺跡ではAs-C降下の前後の段階の住居が検出されているが、その中に床面から炭化材を出土した住居があることから、As-C降下前に埋没した田口下田尻遺跡104号住居と、降下後に埋没した同105・107号住居出土炭化材を試料として放射性炭素年代測定を行い、想定されているAs-C降下年代について検証を行うこと、および30,000点を超える炭化種実が出土し、穀類栽培の傾向を明らかにするために貴重な資料となる田口上田尻遺跡223号土坑の所属時期を明らかにすることを目的として炭化材および炭化種実の放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託したが、その結果は下記のとおりである。

はじめに

群馬県前橋市田口町に所在する田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡は、旧利根川の氾濫原である広瀬川低地の北端に位置し、旧利根川が形成したと考えられる微高地に立地する。本遺跡の発掘調査では、古墳時代前期～平安時代の竪穴住居跡のほか、堀跡、中世墓、近世の水田跡等が検出されている。

なお、上記した古墳時代前期の竪穴住居跡覆土の観察から、3世紀末～4世紀頃に降灰したとされる浅間C軽石(As-C;新井,1979)の堆積が異なる状況が確認されている。本報告では、各竪穴住居跡覆土におけるAs-Cの堆積状況と出土炭化材の放射性炭素年代により、その年代の検討に関わる資料を作成する。また、V区より検出された多量の栽培種の種実遺体が確認された土坑の年代の検討を目的として、放射性炭素年代測定を実施する。

1. 試料

試料は、古墳時代前期とされる竪穴住居跡床面から出土した炭化材3点(104号住居 No.15 炭、105号住居 炭化物、107号住居 No.14 炭)と、223号土坑から出土した炭化種実である。上記した竪穴住居跡は、調査所見によれば、104号住居跡がAs-C降灰以前に埋没、105号および107号住居跡がAs-C降灰後に埋没したことが確認されている。

なお、炭化材試料は、いずれも放射組織で割れ、板状を呈しており、本来の形状の推定は困難であった。このことから、各試料から最も大きい炭化材片、あるいは刃材部付近とみられる炭化材片を抽出している。抽出した炭化材試料は、104号住居 No.15 炭が半径4cm(放射面;約4.0cm)以上の破片、105号住居 炭化物が半径1.5cm(放射面;約1.5cm)以上の破片、107号住居 No.14 炭が半径4.5cm(放射面;約4.5cm)以上の破片である。分析試料は、それぞれ観察範囲内の最外年輪部分より採取している。また、分析試料採取後の炭化材については、試料の履歴(由来)に関わる情報を得るため、

それぞれ樹種同定を行っている。

一方、223号土坑の炭化種実、種実同定結果(パリノ・サーヴェイ株式会社,2010MS)から主体を占めることが確認されているコムギ(胚乳)を試料とし、分析に供した。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正は、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値に基づき、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正結果は、測定誤差σ、2σ(σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲)の値を示す。表中の相対比(確率分布)とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果および考察

炭化材および炭化種実の同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、104号住居 No.15 炭が1,850±30yrBP、105号住居 炭化物が1,690±30yrBP、107号住居 No.14 炭が1,780±30yrBP、223号土坑 炭化種実が1,110±30yrBPを示す(第30表)。

これらの補正年代に基づく暦年較正結果(測定誤差σ)は、104号住居 No.15 炭がcalAD129-calAD214、105号住居 炭化物がcalAD264-calAD398、107号住居 No.14 炭がcalAD219-calAD324、223号土坑 炭化種実がcalAD897-calAD978 (第31表)。

第30表 放射性炭素年代測定結果

調査区	試料			樹種/種類	補正年代 (yrBP)	δ ¹³ C (‰)	測定年代 (yrBP)	測定機関 Code No.
	遺構	試料名	性状					
Ⅲ	104号住居	No.15 炭	炭化材	クヌギ節	1,850±30	-26.14±0.66	1,870±20	IAAA-92970
Ⅲ	105号住居	炭化物	炭化材	クヌギ節	1,690±30	-30.83±0.60	1,790±30	IAAA-92971
Ⅲ	107号住居	No.14 炭	炭化材	コナラ節	1,780±30	-28.64±0.59	1,840±30	IAAA-92972
V	223号土坑		炭化種実	コムギ胚乳	1,110±30	-24.60±0.61	1,100±20	IAAA-92973

第8章 科学分析

第31表 暦年較正結果

試料名	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代(cal)												相対比	測定機関 Code No.	
				cal		AD				cal		BP				
104号住居 No.15 炭 炭化材(クヌギ節)	1,849± 26	σ	cal	AD	129	-	cal	AD	181	cal	BP	1,821	-	1,769	0.650	IAAA-92970
			cal	AD	186	-	cal	AD	214	cal	BP	1,764	-	1,736	0.350	
		2σ	cal	AD	85	-	cal	AD	110	cal	BP	1,865	-	1,840	0.086	
			cal	AD	117	-	cal	AD	236	cal	BP	1,833	-	1,714	0.914	
105号住居 炭化物 炭化材(クヌギ節)	1,693± 27	σ	cal	AD	264	-	cal	AD	274	cal	BP	1,686	-	1,676	0.105	IAAA-92971
			cal	AD	334	-	cal	AD	398	cal	BP	1,616	-	1,552	0.895	
		2σ	cal	AD	257	-	cal	AD	300	cal	BP	1,693	-	1,650	0.210	
			cal	AD	317	-	cal	AD	415	cal	BP	1,633	-	1,535	0.790	
107号住居 No.14炭 炭化材(コナラ節)	1,779± 26	σ	cal	AD	219	-	cal	AD	260	cal	BP	1,731	-	1,690	0.568	IAAA-92972
			cal	AD	282	-	cal	AD	324	cal	BP	1,668	-	1,626	0.432	
		2σ	cal	AD	137	-	cal	AD	200	cal	BP	1,813	-	1,750	0.165	
			cal	AD	206	-	cal	AD	265	cal	BP	1,744	-	1,685	0.457	
223号土坑 炭化種実 (コムギ胚乳)	1,105± 25	σ	cal	AD	897	-	cal	AD	922	cal	BP	1,053	-	1,028	0.420	IAAA-92973
			cal	AD	942	-	cal	AD	978	cal	BP	1,008	-	972	0.580	
		2σ	cal	AD	889	-	cal	AD	990	cal	BP	1,061	-	960	1.000	

以上の結果から、104号住居は2世紀前半～3世紀前半頃、105号住居が3世紀中～4世紀末頃、107号住居が3世紀前半～4世紀前半頃に相当する暦年代範囲が推定される。一方、223号土坑については、9世紀末～10世紀後半頃の暦年代範囲が推定される。

なお、As-Cの噴出年代については、新井(1979)や町田・新井(2003)では4世紀中葉とされているが、これは、石川ほか編(1979)による、群馬県下のAs-Cの堆積層に直接関わる古墳や方形周溝墓および住居跡などから出土した土器型式の年代観から推定されたものである。近年では、その年代観よりも若干古い3世紀末や3世紀後半といった年代がAs-Cの噴出年代とされる傾向もあるが、現時点では特定されるに至っていない。今回の各住居跡覆土におけるAs-Cの検出と得られた暦年代からみれば、従来のAs-Cの年代観と矛盾はなく、上述した3世紀末や4世紀中葉のいずれの年代観も含むと推定される。今回の結果は、As-Cの噴出年代に関わる重要な資料の一つになり得ると言える。

また、試料の履歴(由来)の検討を目的として行った炭化材の樹種同定結果では、104号住居 No.15 炭および105号住居炭化物がコナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*)、107号住居 No.14 炭がコナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*)に同定された。クヌギ節やコナラ節の木材は重硬で強度が高いことから、住居構築材として適材と言える。また、クヌギ節やコナラ節は、二次林(雑木林)や河畔林の主構成種であり、本遺跡の立地等から周辺に生育したと推定される。住居構築材として適材と考えられるこれらの樹木が、選択・利用されたと考えられる。

引用文献

新井房夫, 1979, 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル, 157, 41-52.
 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一(編), 1979, 火山堆積物と遺跡I. 考古学ジャーナル, 159, 3-40.
 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.

第2節 田口上田尻遺跡223号土坑出土炭化種実同定

223号土坑では、30,000点を超えると思われる炭化種実が出土している。これらの炭化種実は、概観してみるとムギ類を主体として数種類で構成されている可能性があったため、その具体的構成を明らかにするために、種実同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託したが、その結果は以下のとおりである。

はじめに

群馬県前橋市田口町に所在する田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡は、旧利根川の氾濫原である広瀬川低地の北端に位置し、旧利根川が形成したと考えられる微高地に立地する。本遺跡では、発掘調査の結果、古墳時代前期～平安時代の竪穴住居跡のほか、堀跡、中世墓、近世の水田跡等が検出されている。

本報告では、田口上田尻遺跡の223号土坑より出土した多量の炭化種実を対象として、分類と一部の同定を実施し、当時の植物利用に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、田口上田尻遺跡の223号土坑より採取された炭化種実である。炭化種実は、タッパ容器4箱に保管された状態にあり、多量のムギ(オオムギやコムギ)を主体とする栽培種のほか、炭化材等が確認された。なお、タッパ容器については、試料の混同を避けるため仮名称(仮No.1～4)を付している。

今回の分析では、上述した炭化種実の状況から担当者と協議を行い、一定数量中における栽培種の種類組成の検討を主目的とした。なお、分析段階において、ムギ以外の種実の検出が少量であったことから、ムギ以外は全ての抽出・同定を行っている。また、多量確認されたムギは、状態良好なオオムギとコムギの抽出・同定(上限約10,000個)と、その他のムギ類について計数を行っている。

2. 分析方法

試料を粒径4mm、2mm、1.4mm、1mm、0.5mmの順に篩別する。粒径1mm、0.5mm篩内の試料をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、アワ、ヒエ、キビなどの微小な雑穀粒の有無を確認する。次に、粒径4mm、2mm、1.4mm篩内の試料をシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いてムギ以外の種実全てと状態良好なオオムギ、コムギを選択抽出する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数、重量、容量を表示する。

分析後は、放射性炭素年代測定対象(パリノ・サーヴェイ株式会社,2010MS)としたコムギ(10個;図版1-3)を除く種実を種類毎に容器に保管する。

3. 結果

結果を第32表に、炭化種実の組成を第999図に示す。炭化種実の計数の結果、タッパ容器4箱より60,442個(434g、1,500cc)確認された。また、炭化種実以外の微細物および残渣は、最大径3.4cm程度の炭化材125.8g(700cc)、部位・種類不明の炭化物1.01g(1cc)、炭化物主体の残渣72.2g(219cc)、種実11個、葉1個、不明植物片26個や昆虫14個、砂礫や土粒主体の残渣3.68g(11cc)に分類された。

炭化種実は、全体の約99%(60,048個)を栽培種のムギ類(穎・胚乳)が占める。その内訳は、オオムギが7,184個、オオムギ?が95個、コムギが4,071個の計11,360個と、その他の計数したムギ類(オオムギまたはコムギ)48,688個からなる。また、ムギ類以外の栽培種が394個確認され、その内訳はイネの穎16個、穎・胚乳135個、ソバの果実226個、マメ類

の種子17個である。

炭化種実の遺存状態は良好で、胚乳表面に穎が付着する個体が多い。また、イネ、オオムギ、コムギ、ソバには複数個が密着し、オオムギとコムギが密着した状態も確認された。

栽培種以外は、木本のサンショウ属の種子1個、グミ属の葉1個と、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する草本のイヌビエ近似種の果実4個、イネ科の果実3個、ギシギシ属の果実1個、タンポポ属の果実1個、キク科の果実3個が確認された。サンショウ属の種子は元々黒く硬いため、炭化の有無の厳密な判断は困難である。この他の分類群は明らかに未炭化と判断され、後代に由来するなど炭化種実と履歴の異なる試料と判断されることから、考察から除外した。以下に、検出された炭化種実の形態的特徴等を記す。

・オオムギ(*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

穎・胚乳が検出された(図版1-1)。複数個が密着した状態も確認された(図版1-4)。炭化しており黒色、長さ5-7mm、径2-3.5mm程度のやや偏平な紡錘状長楕円体。胚乳の両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、微細な縦筋がある。表面には質の薄い穎が付着する個体が多く確認される。なお、長さ2-4mm、径1-1.5mm程度の小型で細長い個体をオオムギ?としている(未熟個体の可能性がある)。

・コムギ(*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

穎・胚乳が検出された(図版1-2, 3)。複数個が密着した状態も確認された(図版1-5)。炭化しており黒色、長さ3.5-4.5mm、径2.5-3mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面には微細な縦筋がある。質の薄い穎が付着する個体が多く確認される。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎・胚乳が検出された(図版1-7, 8)。穎には複数個が密着した状態も確認された。炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。胚乳は、長さ4-5mm、幅2-3mm、厚さ1-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。表面に穎(果)の破片が付着する個体もみられる。穎は、完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲糊を構成する。穎は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・ソバ(*Fagopyrum esculentum* Moench) タデ科ソバ属

果実が検出された(図版1-6)。複数個が密着した状態も確認された(図版1-9)。炭化しており黒色、長さ5-5.5mm、径3-4mm程度の三稜状広卵体。三稜と頂部は鋭く尖り、面はやや凹む。基部は切形で径1-1.5mm程度の萼が残存する個体が見られる。果皮は薄く、表面は粗面。

・マメ類(Leguminosae) マメ科

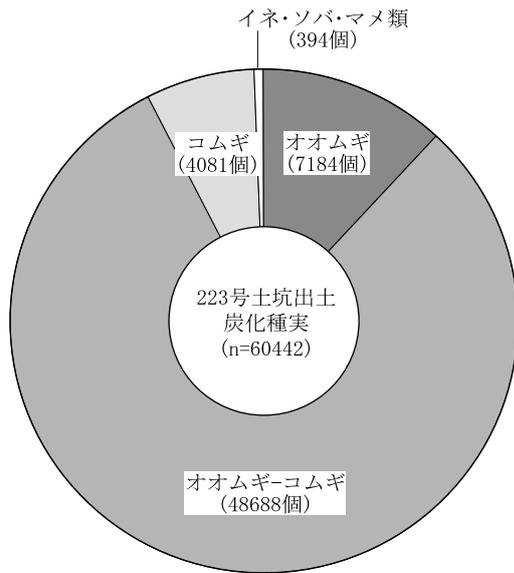
種子が検出された(図版1-10,11)。炭化しており黒色、長さ3.8-6.8mm、2.6-4.8mm、厚さ2.5-4.6mm程度の楕円体。一部の計測値は、長さ5.96mm、幅4.76mm、厚さ3.47mm(図版1-10)。長さ5.34mm、幅4.42mm、厚さ3.59mm(図版1-11)。状態良好な完形個体には、腹面の子葉合わせ目上に長さ約2mm、幅1mm程度の長楕円形を呈す臍が確認される(図版1-10,11)。また、子葉の合わせ目から半分に分かれた破片4個には、子葉内面に北大基準(吉崎,1992)の「アズキグループ(幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する幼根や初生葉の状態が確認される個体を含む(図版1-12)。種皮は薄く、表面は粗面で、焼け膨れ、表面が崩れている個体もある。

4. 考察

田口上田尻遺跡の223号土坑より出土した炭化種実(60,442個)は、すべて栽培種であり、オオムギやコムギが全体の約99%(60,048個)を占め、残る1%(394個)はイネ、ソバ、マメ類という組成を示した。炭化種実の遺存状態は、マ

第32表 種実同定結果

分類群	V区 223号土坑												備考			
	炭				炭				種子 (炭化物)							
	仮No.1		仮No.2		仮No.3		仮No.4		仮No.3		仮No.4					
	数量 (個)	重量 (g)	容量 [cc]	数量 (個)	重量 (g)	容量 [cc]	数量 (個)	重量 (g)	容量 [cc]	数量 (個)	重量 (g)	容量 [cc]				
<炭化>																
オオムギ	類・胚乳	完形	435	3.55	11	109	0.95	3	2,504	23.55	81	3,962	40.57	132	状態良好な個体を抽出	
オオムギ	類・胚乳	完形	12	0.12	<1	6	0.05	<1	40	0.38	2	109	1.11	5	2, 4個1組	
オオムギ?	類・胚乳	完形	12	0.02	<1	-	-	-	59	0.07	<1	24	0.03	<1	細身、未熟個体?	
オオムギまたはコムギ	類・胚乳	完形	-	-	-	2	0.02	<1	-	-	-	4	0.03	<1	2個1組	
オオムギまたはコムギ	類・胚乳	完形	5,139	27.12	90	166	0.72	3	18,646	126.12	440	24,735	175.95	640	-	
コムギ	類・胚乳	完形	-	-	-	2	0.02	<1	-	-	-	12	0.10	<1	各1個1組	
コムギ	類・胚乳	完形	-	-	-	2	0.02	<1	-	-	-	8	0.06	<1	2個1組	
コムギ	類・胚乳	完形	555	3.28	10	50	0.30	1	1,136	7.59	23	2,323	17.84	50	状態良好な個体を抽出	
イネ	類・胚乳	破片	14	0.12	<1	1	<0.01	<1	-	-	-	-	-	-	-	
イネ	類	破片	-	-	-	-	-	-	1	<0.01	<1	-	-	-	-	
イネ	類・胚乳	完形	-	-	-	1	0.02	<1	-	-	-	6	0.05	<1	-	
イネ	類・胚乳	完形	12	0.07	<1	-	-	-	13	0.09	<1	16	0.10	<1	-	
イネ	類・胚乳	破片	3	0.01	<1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ	胚乳	完形	17	0.09	<1	4	0.02	<1	23	0.12	<1	33	0.21	<1	-	
イネ	胚乳	破片	5	0.02	<1	-	-	-	-	-	-	2	<0.01	<1	-	
ソバ	果実	完形	7	0.04	<1	-	-	-	26	0.23	1	2	0.02	<1	2個1組	
ソバ	果実	完形	12	0.02	<1	-	-	-	121	0.87	4	16	0.10	<1	-	
ソバ	種子	完形	2	0.07	<1	1	0.03	<1	31	0.06	<1	11	0.01	<1	-	
ソバ	種子	破片	2	0.02	<1	-	-	-	5	0.12	<1	2	0.03	<1	-	
マメ類	種子	破片	2	0.02	<1	-	-	-	-	-	-	5	0.06	<1	1個初生葉明瞭	
マメ類	種子	破片	-	-	<1	-	-	-	-	-	-	-	-	<1	-	
<非炭化/不明>																
サンショウ属	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<1	<0.01	<1
グミ属	葉	破片	-	-	-	1	<0.01	<1	-	-	-	-	-	-	-	-
イヌビエ近似種	果実	完形	4	<0.01	<1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	果実	完形	1	<0.01	<1	-	-	-	2	<0.01	<1	-	-	-	-	-
ギンギン属	果実	完形	1	<0.01	<1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タンポポ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	<0.01	<1	-	-	-	-	-
キク科	果実	完形	1	<0.01	<1	-	-	-	1	<0.01	<1	1	<0.01	<1	<1	冠毛残存
不明植物	果実	完形	8	<0.01	<1	8	<0.01	<1	8	<0.01	<1	2	<0.01	<1	<1	<1
<その他>																
炭化材																
径4mm以上			-	22.14	120	-	0.60	180	-	-	-	-	-	-	-	-
径4-2mm			-	12.83	52	-	79.57	310	-	1.37	6	-	0.96	4	-	-
径2-1mm			-	8.33	32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
炭化物主体残渣																
径2-1.4mm			-	21.98	76	-	-	-	-	8.63	25	-	-	-	-	-
径1.4-1mm			-	5.21	19	-	1.57	6	-	3.06	11	-	7.35	24	-	-
径1-0.5mm			-	4.34	14	-	0.78	3	-	3.31	11	-	2.89	5	-	-
径0.5mm以下			-	5.14	10	-	1.73	5	-	5.20	8	-	-	-	-	-
不明炭化物			-	0.41	2	-	0.60	2	-	-	-	-	0.14	<1	-	-
昆虫			3	<0.01	<1	2	<0.01	<1	7	<0.01	<1	2	<0.01	<1	<1	<1
分析残渣 (土粒主体)			-	2.36	5	-	0.33	1	-	0.90	3	-	0.60	2	-	-
分析残渣 (植物片)			-	0.07	<1	-	<0.01	<1	-	<0.01	<1	-	<0.01	<1	<1	<1



第999図 田口上田尻遺跡 223号土坑出土炭化種実の組成

メ類以外は良好で、穎や果皮が付着した状態が多く、また、複数個の同一種や複数種が密着した状態も確認された。これらの状態から多量の果実が密接した状態で被熱を受け、炭化したことが推定される。

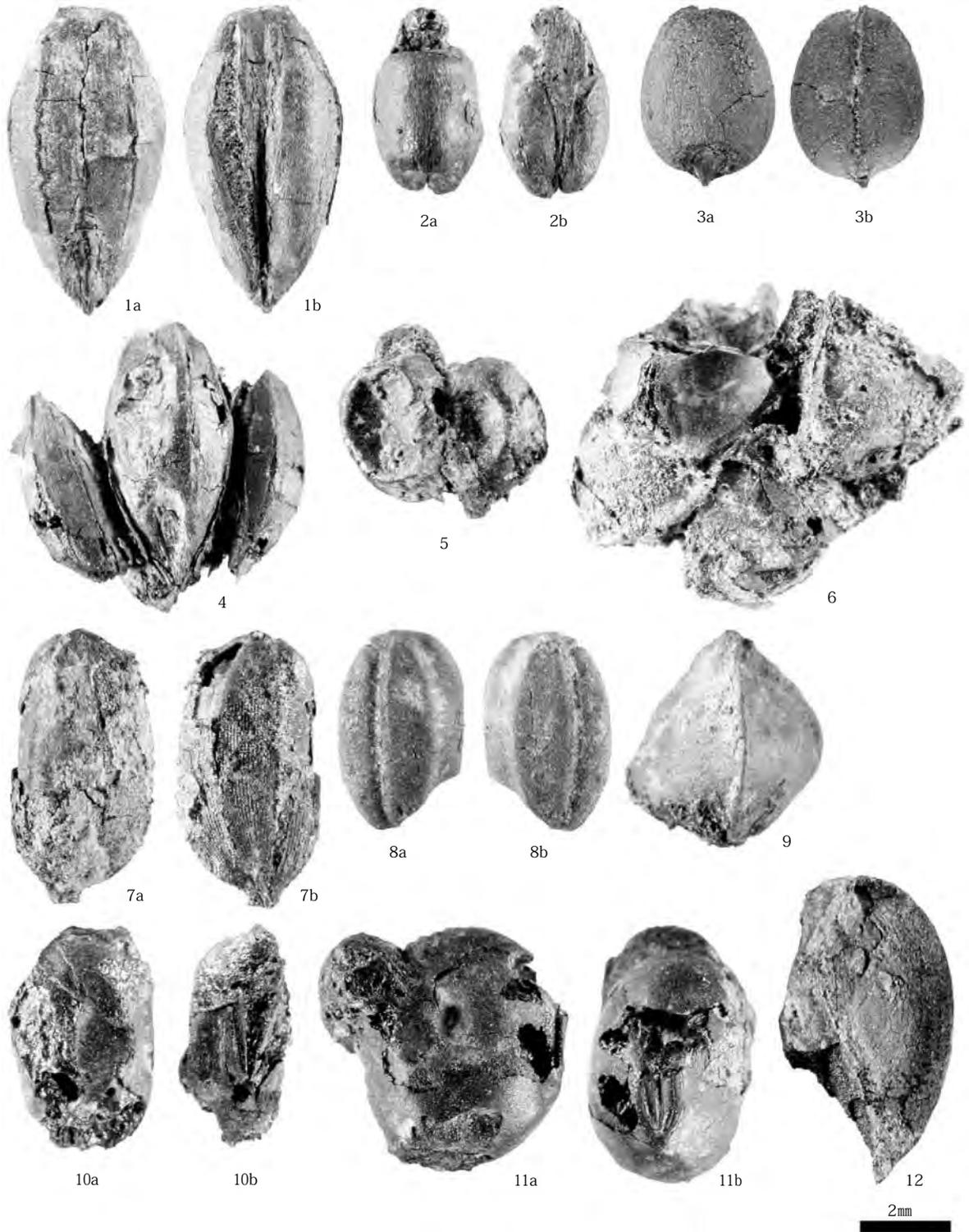
なお、223号土坑より検出された炭化種実のうち、コムギを対象とした放射性炭素年代測定では9世紀末～10世紀後半頃に相当する暦年代範囲が得られている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2010MS)。当該期の本遺跡周辺の調査事例のうち、元総社寺田遺跡(前橋市)では、平安時代(10～11世紀代)とされる最南部の1・2号河道上面の粘質土中に確認された焼けた穀類の層(Ⅲa～Ⅲb層)より、炭化したオオムギの穎果3,000個、コムギの穎果300個、イネの穎果20個、マメ科の種子10個が確認されている(吉川,1996)。また、これらの炭化穀類は、マメ科以外は穎果の状態で貯蔵されていたものが火災などにより炭化し、低地に廃棄されたものと考えられている(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,1996)。

本遺跡と元総社寺田遺跡では種実の検出状況は異なるが、組成の比較では、オオムギやコムギ等のムギ類を主体とすることや、イネを含むがその割合が低いという類似性が指摘され、本地域における植物質食糧の栽培や利用などを反映する資料として注目される。この点については、住居跡の炉やカマド堆積物における炭化種実の組成や、生産域における栽培植物の検討結果等と合せた検証が望まれる。

引用文献

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,1996,元総社寺田遺跡Ⅲ——級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集一本編,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告208集,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,275p.
 吉川純子,1996,元総社寺田遺跡Ⅵ区低地出土の大型植物化石,元総社寺田遺跡Ⅲ——級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集一本編,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告208集,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,251-255,P1103-106.
 吉崎昌一,1992,古代雑穀の検出,月刊考古学ジャーナル, No. 355,2-14.

図版1 種実遺体



- 1. オオムギ 穎・胚乳
- 3. コムギ 胚乳
- 5. コムギ 穎・胚乳
- 7. イネ 穎・胚乳
- 9. ソバ 果実
- 11. マメ類 種子

- 2. コムギ 穎・胚乳
- 4. オオムギ 穎・胚乳
- 6. ソバ 果実
- 8. イネ 胚乳
- 10. マメ類 種子
- 12. マメ類 種子

第3節 田口上田尻遺跡5号住居出土炭化材の樹種同定

田口上田尻遺跡5号住居は、古墳時代前期の住居であり、焼失していたことから建築部材と思われる炭化材の残存状態が比較的良好であった。そこで、古墳時代前期における竪穴住居建築にどのような樹種が利用されていたのかを明らかにするとともに、そうした建築材を供給しえた周辺環境を明らかにすることを目的として樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託したが、その結果は以下のとおりである。

はじめに

群馬県前橋市田口町に所在する田口上田尻遺跡は、旧利根川の氾濫原である広瀬川低地の北端に位置し、旧利根川が形成したと考えられる微高地上に立地している。本遺跡の発掘調査では、古墳時代前期～平安時代の竪穴住居跡をはじめとして、堀跡や中世墓、近世の水田跡、天明3年の浅間山噴火に伴う泥流被害の復旧痕等が検出されている。このうち、10世紀とされる9号住居跡から出土した住居構築材と考えられる炭化材の樹種同定では、落葉広葉樹のコナラ節を主とした組成が確認されている(第4節)。

本報告では、古墳時代の5号住居跡から出土した住居構築材と考えられる炭化材を対象に樹種同定を実施し、炭化材の樹種および木材利用について検討する。

炭化材の樹種

1. 試料

試料は、5号住居跡から出土した炭化材32点(CW 1～31)である。これらの炭化材については、現地にて資料と照合しながら形状・木取を記録し、炭化材端部等から試料を採取している。このうちCW25は、試料採取時に径が若干異なる2点(a・b)が確認されたため、それぞれを分析対象としている。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

結果を第33表に示す。炭化材は、針葉樹2分類群(モミ属・カヤ)、広葉樹7分類群(ヤナギ属・ブナ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・エノキ属・フサザクラ)とイネ科に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属(*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

第33表 樹種同定結果

遺構名	試料名 (CW No.)	形状	径/幅 (cm)	樹種	備考
5号住居跡	1	芯持丸木?	6.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	垂木?
	2	不明	7.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	垂木
	3	芯持丸木	4.0	ブナ属	
	4	不明	4.0	フサザクラ	
	5	割材	3.0	ブナ属	
	6	不明	6.0	フサザクラ	
	7	芯持丸木	7.0	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	8	不明	7.0	ヤナギ属	
	9	芯持丸木	6.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	10	芯持丸木?	6.0	クリ	
	11	芯持丸木	5.0	エノキ属	
	12	不明	6.0	エノキ属	
	13	芯持丸木	4.0	クリ	
	14	芯持丸木	4.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	15	芯持丸木	5.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	16	芯持丸木	3.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	17	不明	7.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	18	芯持丸木	7.0	ヤナギ属	
	19	芯持丸木	3.0	クリ	
	20	板目板	13.0	モミ属	板材
	21	芯持丸木	6.0	クリ	
	22	板目板	10.0	モミ属	板材(CW20と同一部材か)
	23	不明	4.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	24	萱材?	10.0	イネ科タケ亜科	
	25a	芯持丸木	4.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	25b	芯持丸木	4.5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	26	芯持丸木	6.0	エノキ属	
	27	芯持丸木	5.5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	28	芯持丸木	4.0	クリ	
	29	芯持丸木	4.0	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	30	芯持丸木	6.5	カヤ	
31	芯持丸木	2.7	エノキ属		

・カヤ(*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型~ヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヤナギ属(*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

・ブナ属(*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のもの

から複合放射組織までである。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激~やや急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

- ・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

- ・エノキ属(*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。

- ・フサザクラ(*Euptelea polyandra* Sieb. et Zucc.) フサザクラ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った円~楕円形、単独または2-3個が複合して散在する。道管径は年輪中央部で最大になる傾向があり、その後年輪界に向かって漸減する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、1-10細胞幅、1-80細胞高であるが、幅の太いものが多い。

- ・イネ科タケ亜科(*Gramineae subfam. Bambusoideae*)

試料は薄く脆い。横断面では、原生木部に2対の道管がみられ、その外側に師部細胞が確認できる。これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

4. 考察

5号住居跡から出土した炭化材は、芯持丸木状を呈するものが多く、割材や板目板状を呈するものが確認され、クヌギ節を主体として計9種類の木材とイネ科タケ亜科が検出された。

このうち、カヤは暖温帯に分布の中心がある針葉樹であり、群馬県内では平野部を中心に分布する。エノキ属やヤナギ属は河畔から自然堤防上にかけて生育し、クヌギ節もエノキ属などと共に生育する。コナラ節は台地上から山地斜面にかけて二次林を形成する種類であり、谷斜面などではクリも混在する。モミ属とフサザクラは崩壊地や崖地などの不安定な場所によくみられる。ブナ属は山地において落葉広葉樹林を構成する種類であり、現在の遺跡周辺では赤城山の標高1,000m以上に分布が見られる。

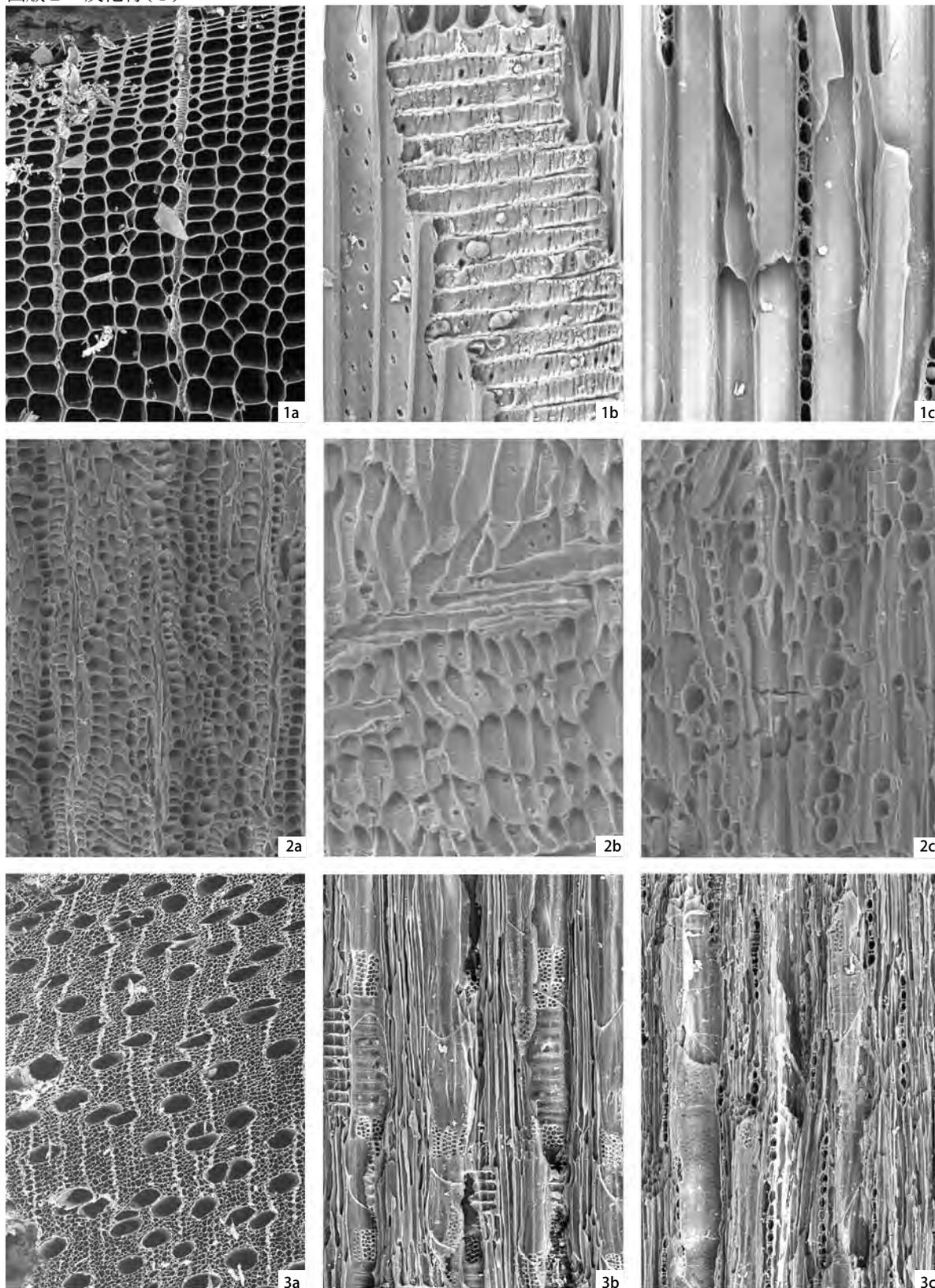
クヌギ節やコナラ節、クリ、エノキ属、ヤナギ属、イネ科等は、現在の遺跡周辺で普通にみられ、当該期においても入手可能であったと考えられる種類が多く確認されたほか、赤城山の上部等で生育が確認されるブナ属、崩壊地に多くみられるモミ属やフサザクラ、暖温帯に分布するカヤが混在する点は本住居跡における樹種構成の特徴と言える。とくに、カヤとブナ属は、現在の植生を考慮すれば、混生することは考え難く、木材が様々な植生帯に由来することが示唆される。

木材の材質では、針葉樹のモミ属は木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが保存性は低い。針葉樹のカヤ、広葉樹のブナ属やクヌギ節、コナラ節、クリは、比較的重硬で強度が高い材質を有する種類であるが、ヤナギ属は一般に強度や保存性が低い種類である。また、エノキ属やフサザクラは、物理的な材質に関する資料が少ないが、強度は中程度とされる。

形状別の樹種構成では、芯持丸木状の炭化材は、直径4～6cm前後のものが多く、クヌギ節を主体として、カヤやヤナギ属、ブナ属、コナラ節、クリ、エノキ属等と雑多な構成であるが、比較的強度の高い木材が多い。芯持丸木状の炭化材には垂木と推定されるものも含まれることから、強度の高い木材を選択していた可能性がある。割材状を呈する炭化材(CW5)はブナ属であり、上記した芯持丸木状の炭化材と同じ樹種が確認された。板目板状の炭化材(CW20・22)は、カマド付近から住居中央方向に向かう同一線上より出土しており、2点ともモミ属であった。出土状況や樹種を考慮すると、本来は同一個体であった可能性がある。また、モミ属の材質や他の炭化材と形状・木取・樹種が異なることから、板への加工が容易な樹種を選択性や、住居構築材の一部、あるいは、何らかに利用された板材の可能性が指摘される。この他の形状不明の炭化材は、フサザクラ、ヤナギ属、クヌギ節、エノキ属が確認されており、フサザクラの検出を除くと芯持丸木状の炭化材の樹種構成と類似する。

現在の利根川左岸地域にあたる本遺跡周辺では、古墳時代の住居構築材の樹種を明らかにした例はないが、利根川右岸では井出村東遺跡や冷水村東遺跡(旧群馬町)、田中遺跡(渋川市)、長久保大畑遺跡等で分析調査が実施されている(山内,1983;高橋ほか,1997;藤根,1998;パリノ・サーヴェイ株式会社,2000)。田中遺跡では、ケヤキやヤマグワを中心に、クリ、クヌギ節、アサダ、イヌシデ節、カエデ属等の河畔林を構成する種類が多い結果が確認されている。長久保大畑遺跡では、クリと共に針葉樹のモミ属やヒノキ属が確認されているが、今回のような板状を呈する炭化材は確認されておらず、いずれも垂木の可能性が考えられている。一方、井出村東遺跡では、落葉広葉樹のナツツバキ属、ナナカマド属、クリ、コナラ節、カバノキ属、クマシデ属と常緑広葉樹のツバキが確認されており、冷温帯で山地に分布する種類(ナツツバキ属・カバノキ属)と暖温帯に分布する種類(ツバキ)が混在する結果が確認されている。冷水村東遺跡でも、クリを中心にケヤキ、カバノキ属、カエデ属、アワブキ属、コクサギが確認されており、種類構成は異なるが、冷温帯の樹種が含まれる点で井出村東遺跡と類似する。山地に生育するカバノキ属やナツツバキ属が利用されることや、暖温帯の樹種が混じる傾向は、今回の分析調査結果においてブナ属やカヤが利用されている結果とも共通する。特に、カバノキ属については、当該期の農具(鋤・鋤)に利用されていること(高橋,1996)とも関連する可能性があるが、山地に生育する木材が混在する背景等については、本地域における古植生等や木材利用にかかわる資料を蓄積し、評価・検討することが望まれる。

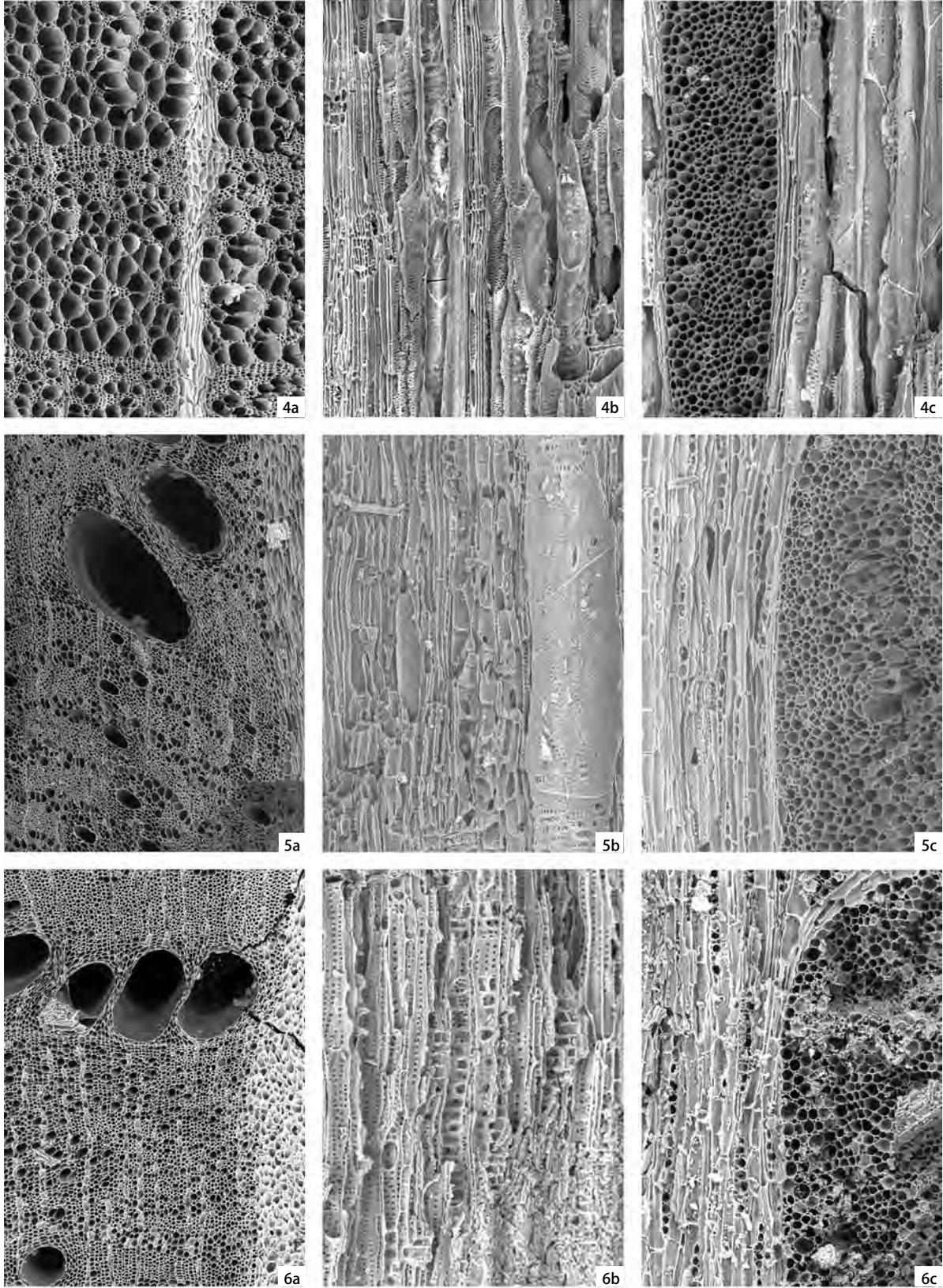
図版2 炭化材(1)



- 1. モミ属 (5号住; No. 22)
- 2. カヤ (5号住; No. 30)
- 3. ヤナギ属 (5号住; No. 8)
- a: 木口、b: 柁目、c: 板目

200 μ m:2-3a
 200 μ m:1a,2-3b,c
 100 μ m:1b,c

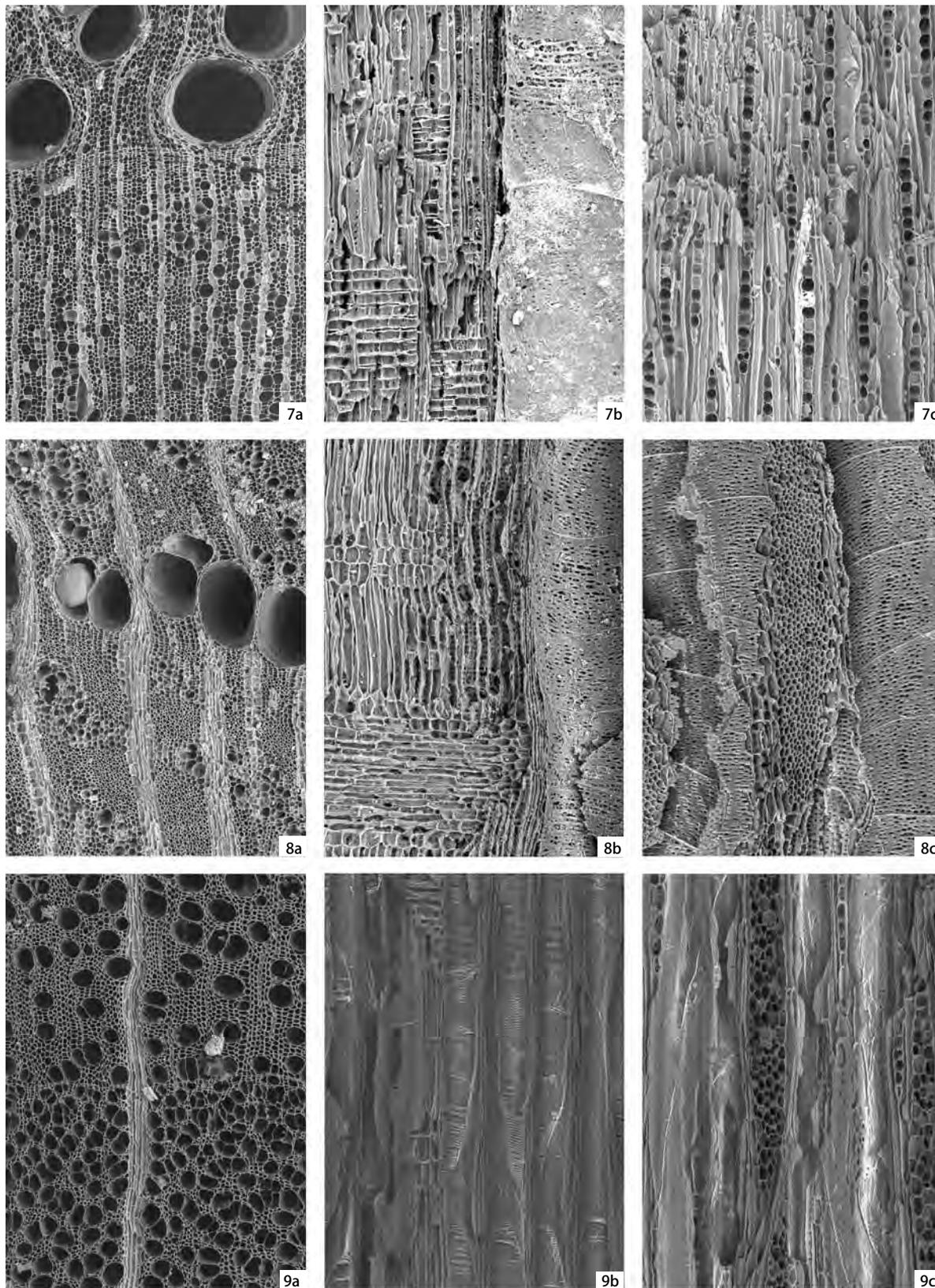
図版3 炭化材(2)



4. ブナ属 (5号住; No. 5)
 2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (5号住; No. 15)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (5号住; No. 7)
 a: 木口、b: 柁目、c: 板目

200 μm:a
 200 μm:b,c

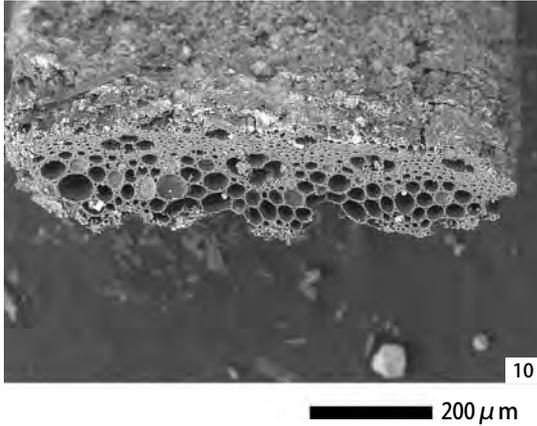
図版4 炭化材(3)



7. クリ (5号住; No. 10)
8. エノキ属 (5号住; No. 26)
9. フサザクラ (5号住; No. 6)
a: 木口、b: 柁目、c: 板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

図版5 炭化材(4)



10. イネ科 (5号住; No. 24) 横断面

第4節 田口上田尻遺跡9号住居出土炭化材の樹種同定

田口上田尻遺跡9号住居は、平安時代(10世紀代)の焼失した住居であるため、建築部材と思われる炭化材と灰が多量に出土した。そこで、平安時代の竪穴住居建築にどのような樹種が利用されていたかを明らかにし、古墳時代前期との比較を行うとともに、分析で得られた建築材を供給しえた周辺環境を明らかにすることを目的として樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託したが、その結果は以下のとおりである。

はじめに

群馬県前橋市田口町に所在する田口上田尻遺跡は、旧利根川の氾濫原である広瀬川低地の北端に位置し、旧利根川が形成したと考えられる微高地上に立地している。本遺跡の発掘調査では、古墳時代前期～平安時代の竪穴住居跡をはじめとして、堀跡、中世墓、近世の水田跡、浅間山の天明3年の噴火に伴う泥流被害の復旧痕等が検出されている。本報告では、10世紀頃に比定される住居跡から出土した構築材と考えられる炭化材を対象に樹種同定を行い、炭化材の樹種及び当時の木材利用について検証する。

1. 試料

試料は、9号住居跡から出土した炭化材10点(CW1-10)である。これらの炭化材は、住居跡床面から出土した炭化材であるが、いずれも小形であったため明確な形状等は不明である。

2. 分析方法

木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3. 結果

結果を第34表に示す。炭化材は、針葉樹1種類(マツ属)、広葉樹1種類(コナラ属コナラ亜属コナラ節)に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属(*Pinus*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急～緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁は保存状態が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

マツ属には、いわゆるニヨウマツ類（複維管束亜属）とゴヨウマツ類（単維管束亜属）とがある。

これらは、放射化道管内壁の鋸歯の有無で判別可能であるが、今回の試料では保存状態が悪く鋸歯の有無が判別できなかったため、両者を区別するには至らなかった。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

第34表 樹種同定結果

遺構名	試料名	樹種
9号住居跡	CW1	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	CW2	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	CW3	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	CW4	マツ属
	CW5	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	CW6	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	CW7	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	CW8	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	CW9	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	CW10	コナラ属コナラ亜属コナラ節

4. 考察

9号住居跡から出土した構築材と考えられる炭化材は、コナラ節(9点)、マツ属(1点)に同定された。このことから、コナラ節を主とした構成であったことが推定される。コナラ節は、本地域では二次林を構成し、重硬で強度が高い材質を有するコナラが最も一般的である。一方、マツ属は、本遺跡周辺では複維管束亜属のアカマツが一般的であり、いずれも周辺で入手可能であったと考えられ、入手可能な樹木の中から強度の高い種類を選択していたことが推定される。群馬県内では、竪穴住居跡より出土した炭化材の調査事例は多数あるが、当該期の住居跡を対象とした事例は少なく、天引向原遺跡(甘楽町)、吉井町天神下遺跡(吉井町)、下東西清水上遺跡(前橋市)等の調査成果が知られている程度である(植田,1997,1998a,1998b)。これらの結果によれば、遺跡毎に利用される樹種が異なることから、遺跡周辺の地形等に起因する植生等を反映している可能性がある。ただし、この点については分析試料数が少ないため、今後の課題である。また、CW4に認められたマツ属については、群馬県内では古代の建築部材に利用された事例は少なく、特に、竪穴住居跡からの出土例は、今井三騎堂遺跡(赤堀町)の主柱穴から出土した柱材(アカマツ)、半田中原・南原遺跡(渋川市)の住居跡床面から出土した炭化材(マツ属、複維管束亜属)に認められるのみである(橋本ほか,1994;植田・松葉,2005)。本試料については、出土状況や構築材の部位等について検討し、マツ属の木材の利用について再評価する必要がある。なお、本遺跡では、今回分析対象とした9号住居跡をはじめとして、同様に炭化材が出土している住居跡が多数確認されている。今後は、これらの炭化材についても調査を行い、当該期及び各時期の木材利用について検討することが重要と考えられる。

引用文献

橋本真紀夫・馬場健司・中根秀二・高橋 敦・田中義文,1994,自然科学分析。「渋川市発掘調査報告書第41集 半田中原・南原遺跡」,群馬県企業局・渋川市教育委員会,731-753。
 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所。
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181。
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176。
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201。
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166。
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216。
 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p。
 植田弥生,1997,竪穴住居跡出土炭化材の樹種分析。「(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第222集 白倉下原・天引向原遺跡Ⅴ(本文編)・(奈良～江戸時代写真図版編) 関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第47集」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,123-130,PL160-166。
 植田弥生,1998a,天神下遺跡の2号住居出土炭化材樹種同定。「天神下遺跡発掘調査報告書」,群馬県勢多郡吉井町教育委員会,25-27,図版p.33。

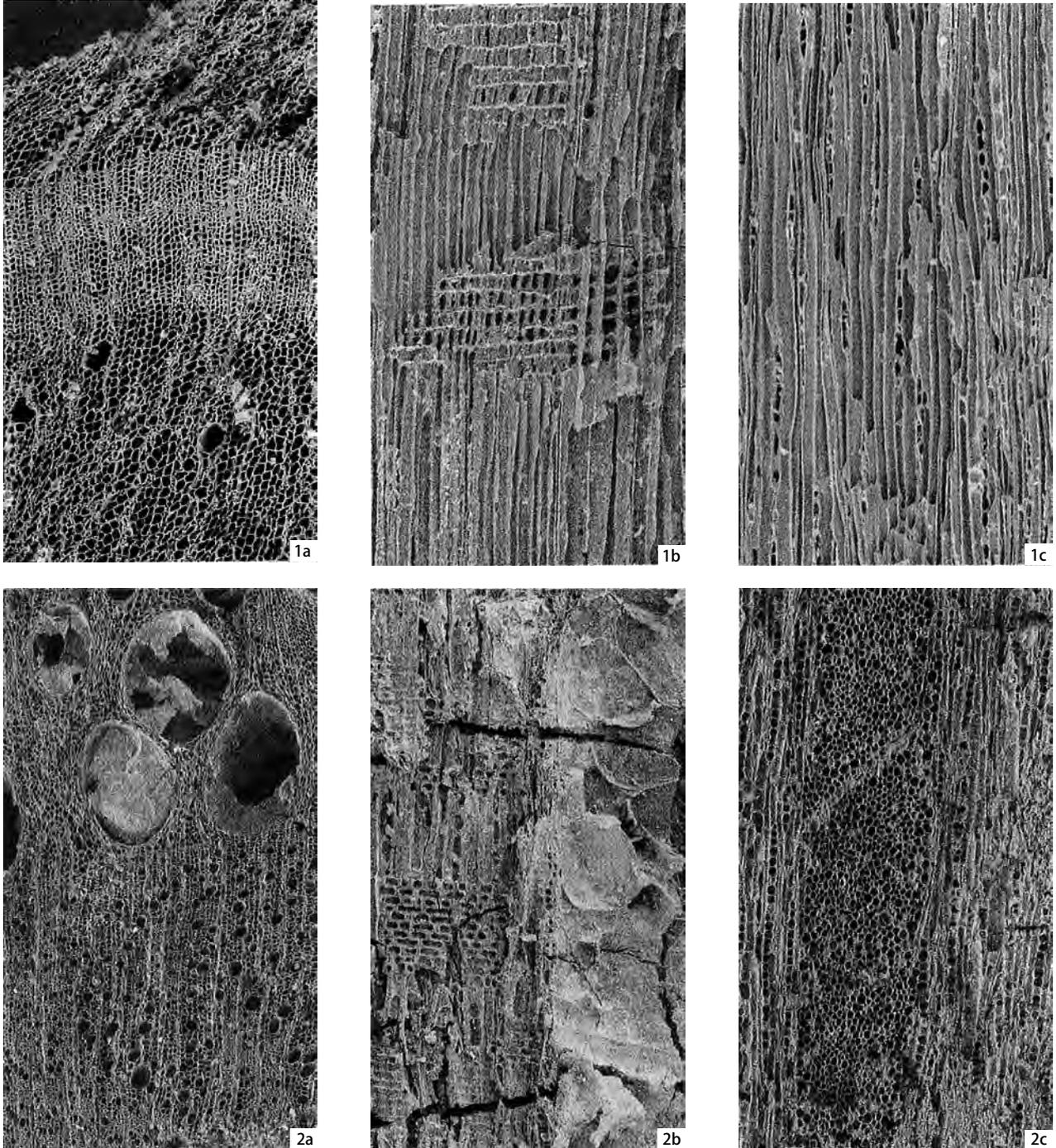
第4節 田口上田尻遺跡9号住居出土炭化材の樹種同定

植田弥生, 1998b, 下東西清水上遺跡の焼失竪穴住居跡の炭化材樹種同定. 「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第239集 下東西清水上遺跡 県立前橋高等養護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 309-312, PL167-170.

植田弥生・松葉礼子, 2005, 今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡出土炭化材の樹種同定. 「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第346集 多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書第4集 今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡 一歴史時代編一」, 群馬県企業局・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団, 261-290.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 I AWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

図版6 炭化材(5)



1. マツ属 (9号住; CW4)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (9号住; CW7)
- a: 木口、b: 柃目、c: 板目

200 μ m: 2a
 200 μ m: 1a・2b,c
 100 μ m: 1b,c

第5節 田口上田尻遺跡33号住居出土赤色物質のX線回折分析

1. 試料

試料は、Ⅲ区3面33号住居から出土した赤色顔料とみられる赤色物質である。分析試料として5試料が採取されており、このうち比較的明瞭な塊状の赤色物質が確認された1点(33号住居・ベンガラ)を分析試料としている。

2. 分析方法

土壤中より赤色物質を抽出し、105℃で乾燥させる。その後、メノウ乳鉢で微粉碎、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc.のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu (K α)	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite湾曲	Receiving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2° /min
Current：40Ma	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：2～45°

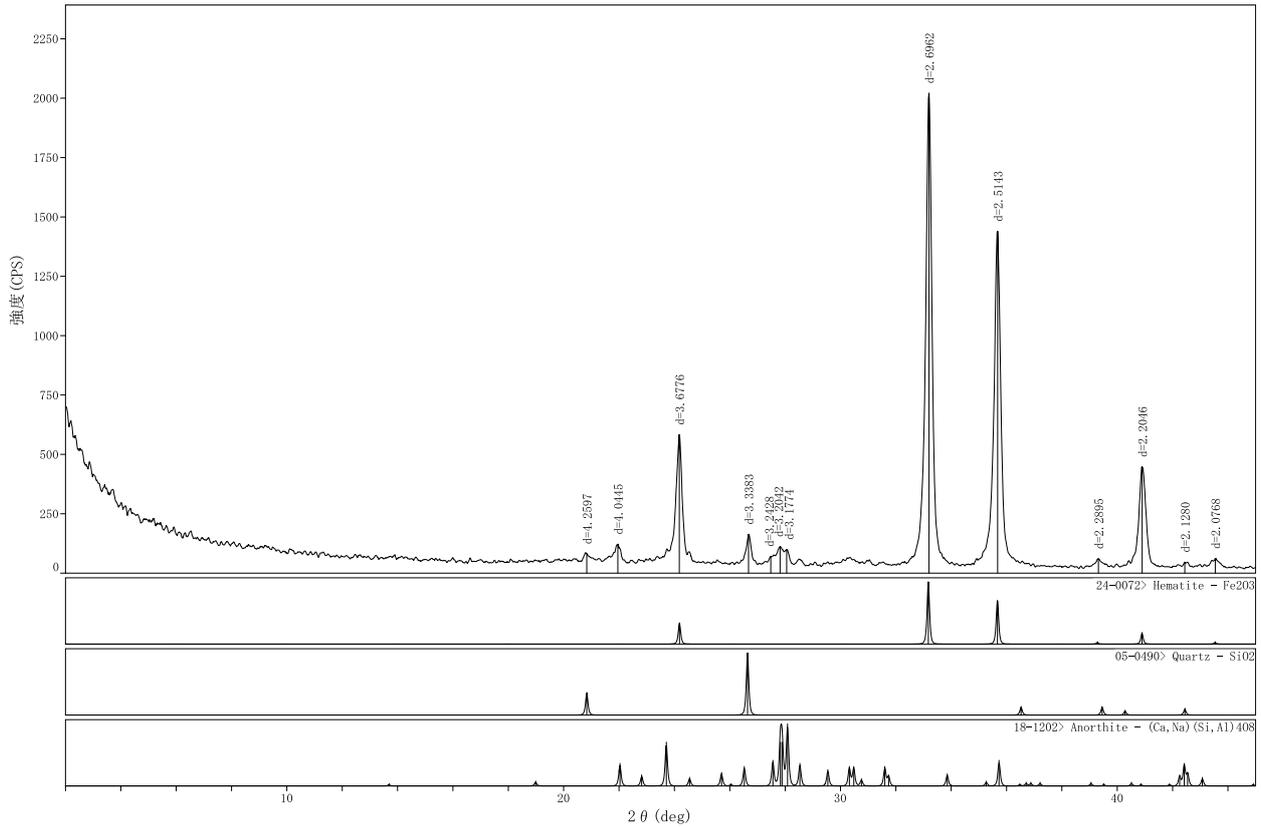
3. 結果

X線回折図を第1000図に示す。検出された顔料鉱物は、赤鉄鉱(hematite)である。この他に、石英(quartz)、灰長石(anorthite)が微量～少量検出されているが、これらは試料抽出時に混入した土壌由来の鉱物と考えられる。

4. 考察

赤色を呈する代表的な顔料鉱物にはベンガラ(赤鉄鉱；hematite[α -Fe₂O₃])をはじめとして、水銀朱(辰砂；cinnabar[HgS])、鉛丹(鉛丹；minium[Pb₃O₄])等があるが、本試料では顔料鉱物として赤鉄鉱(hematite)が検出された。このことから、顔料とみられる赤色物質はベンガラと判断される。

ベンガラには天然の赤鉄鉱を利用する場合や、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合がある。また、赤鉄鉱にはパイプ状構造を為すものと、非パイプ状(塊状、球状、不定形など)構造のものがあり、前者については沼沢地等において鉄バクテリアが生成する含水水酸化鉄(いわゆる高師小僧)が出発物質であることが判明している(岡田,1997;織幡・沢田,1997)。このような背景を考慮すると、ベンガラ材料の産出地は無数に存在することとなり、材料産出地を言及することは困難である。ただし、一遺跡において同一時期に使用されるベンガラはパイプ状もしくは非パイプ状のどちらかが支配的な傾向にある(成瀬,1998)とされることから、電子顕微鏡等によりパイプ状構造の有無を確認することにより、無数に存在する産出地のある程度絞り込みやその傾向を明らかとすることが可能と考えられる。



第1000図 田口上田尻遺跡 33号住居 ベンガラ(X線回折図)

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
 藤根 久,1998,住居跡から出土する炭化材の樹種-冷水村東遺跡-。「冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金古北十三町遺跡 高崎渋川線道路改築(改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集」,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第245集,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,335-337.
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
 成瀬正和,1998,縄文時代の赤色顔料Ⅰ.考古学ジャーナル,438,10-14.
 岡田文男,1997,パイプ状ベンガラ粒子の復元.日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,38-39.
 織幡順子・沢田正昭,1997,酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究.日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集,76-77.
 パリノ・サーヴェイ株式会社,2000,自然科学分析.「長久保大畑遺跡・新田入口遺跡 (主)前橋伊香保線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集(本文編)」,(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第268集,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,477-503.
 Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
 高橋 敦,1996,群馬県から出土した鍬・鋤の用材.群馬考古学手帳,6.群馬土器観会,119-127.
 高橋 敦・辻本裕也・橋本真紀夫,1997,田中遺跡から出土した炭化材の樹種.「田中遺跡」,渋川市遺跡発掘調査報告書第56集,渋川市教育委員会,37-51.
 Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].
 山内 文,1983,検出された炭化材と材木について.「井出村東遺跡 -上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書- 3分冊の1 本文編」,群馬町井出村東遺跡調査会,163.

第6節 田口下田尻遺跡の指標テフラ分析

田口下田尻遺跡の調査において検出されたテフラについて分析を行い、層位関係および遺構構築年代の検証を目的としてテフラ分析を株式会社古環境研究所に委託したが、その結果は下記のとおりである。

1. はじめに

関東地方北西部の前橋台地とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、浅間、榛名など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や九州地方などの火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

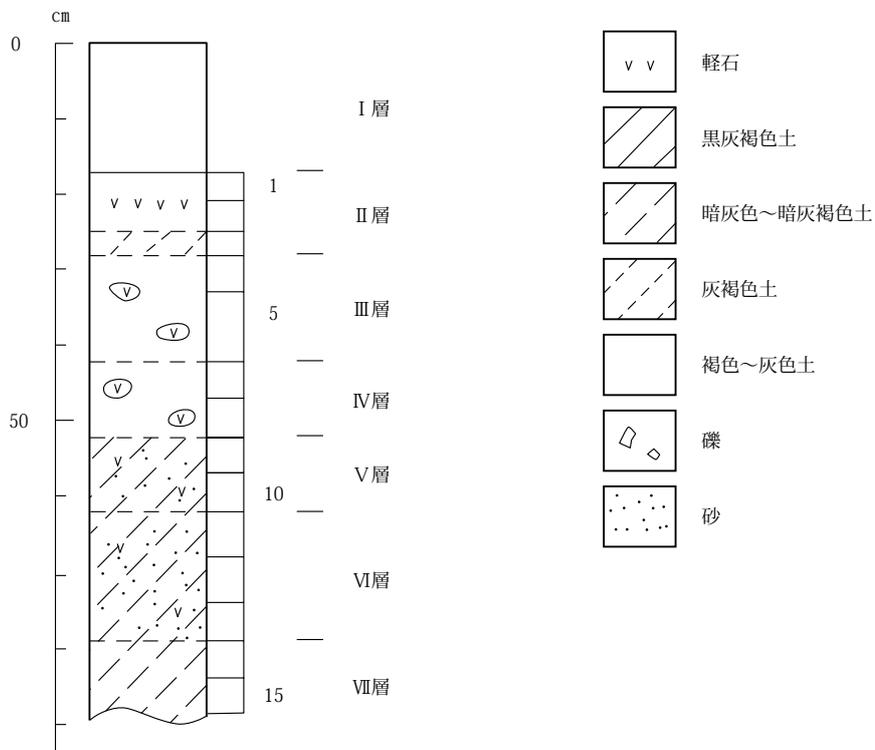
そこで、層位や詳細な年代が不明な土層や軽石などが検出された前橋市田口下田尻遺跡においても、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、採取された軽石試料を対象に重鋳物組成分析と屈折率測定を行って指標テフラの検出同定を行い、遺物包含層や遺構などの層位や年代に関する資料を収集することになった。土層の観察地点は、4号トレンチ、5号復旧痕壁面、6号復旧痕壁面、6号復旧痕覆土断面である。

※試料採取位置は、第5図(基本土層)中に示した。

2. 土層の層序

(1) 4号トレンチ

4号トレンチの土層は、下位より暗灰褐色土(層厚10cm以上, VII層)、白色軽石を少量含む黒灰褐色砂質土(層厚17cm, 軽石の最大径9mm, VI層)、白色軽石を少量含む砂混じり暗灰褐色土(層厚10cm, 軽石の最大径8mm, V層)、白色軽石を少し含む灰色土(層厚10cm, 軽石の最大径11mm, IV層)、白色軽石(試料A・B)を含む灰色土(層厚14cm, 軽石の最大

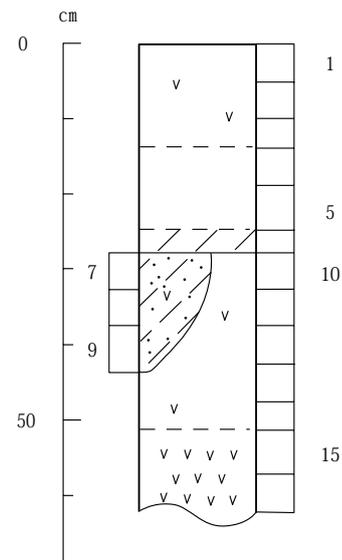


第1001図 田口下田尻遺跡 4号トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

径31mm, III層)、灰褐色土(層厚3cm)、灰色土(層厚8cm, 以上II層)、灰色表土(層厚17cm, I層)からなる(第1001図)。

(2) 5号復旧痕壁面

5号復旧痕壁面では、下位より黄灰色軽石に富む灰色土(層厚11cm, 軽石の最大径13mm)、白色軽石混じり灰色土(層厚24cm, 軽石の最大径9mm)、白色軽石混じり暗灰色砂質土(層厚16cm, 軽石の最大径5mm)、マンガンに富む暗褐色土(層厚3cm)、鉄分に富む黄色土(層厚11cm)、白色軽石混じり灰色土(層厚14cm, 軽石の最大径7mm)が認められる(第1002図)。



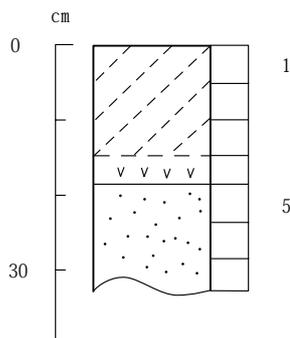
第1002図 田口下田尻遺跡 5号復旧痕壁面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

(3) 6号復旧痕壁面

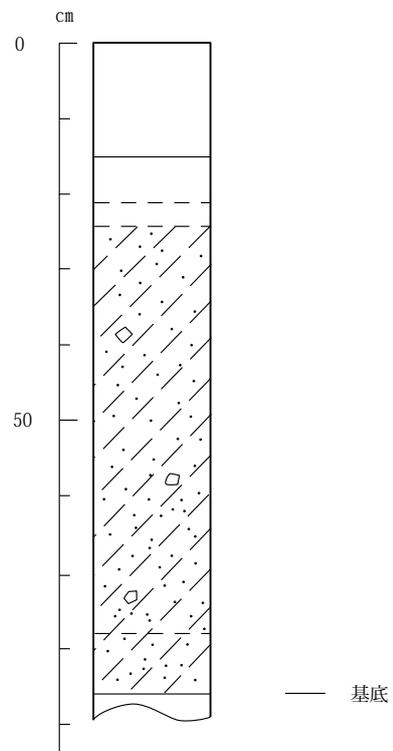
6号復旧痕壁面では、下位より褐色砂質土(層厚14cm以上)、黄色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径17mm)、灰褐色土(層厚15cm以上)が認められる(第1003図)。

(4) 6号復旧痕覆土断面

6号復旧痕覆土断面では、下位より砂混じり灰褐色土(層厚8cm)、亜角礫混じり暗灰色土(層厚54cm, 礫の最大径57mm)、鉄分に富む褐色土(層厚3cm)、鉄分に富む黄灰褐色土(層厚6cm)、灰色表土(層厚15cm)が認められる(第1004図)。



第1003図 田口下田尻遺跡 6号復旧痕壁面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第1004図 田口下田尻遺跡 6号復旧痕覆土の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

3. 重鉱物組成分析

(1) 分析試料と分析方法

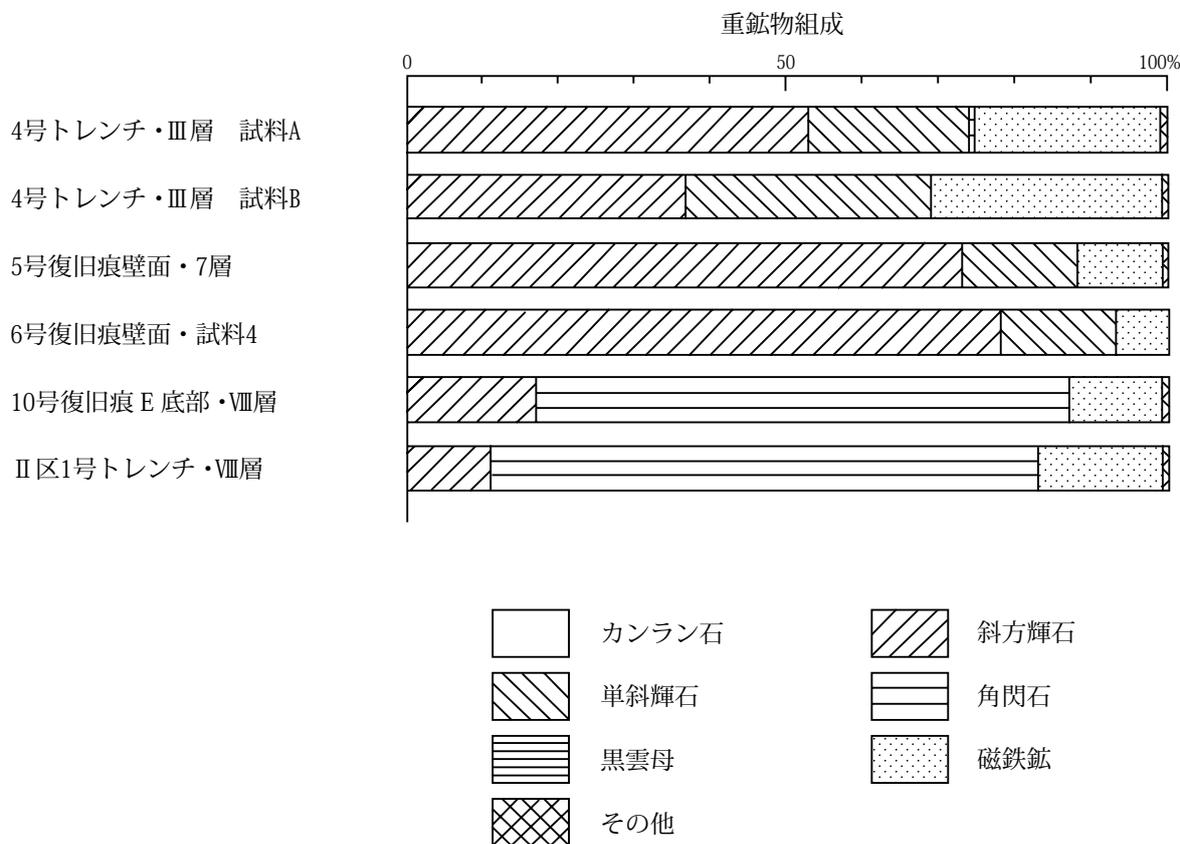
4号トレンチⅢ層中の軽石2点(試料Aと試料B)、5号復旧痕壁面の7層中の黄色軽石、6号復旧痕壁面の黄色軽石層(試料4)中の軽石、10号復旧痕E底部Ⅷ層中の白色軽石、Ⅱ区1号トレンチⅧ層中の白色軽石の6試料について、軽石に含まれる重鉱物の組成を明らかにした。分析の手順は次の通りである。

- 1) 軽石試料を粉砕。
- 2) 超音波洗浄装置により風化物や細粒物を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察。

(2) 分析結果

重鉱物組成分析の結果をダイアグラムにして第1005図に、その内訳を第35表に示す。4号トレンチⅢ層の試料Aには、斜方輝石が多く(52.8%)、また単斜輝石も比較的多く(21.2%)含まれている。ごくわずかに角閃石も認められる(0.4%)。なおこの軽石は良く発泡しており、ガラス部は淡褐色を呈する。試料Bにも、斜方輝石(36.8%)や単斜輝石(32.0%)が多く含まれているが、その比率は比較的良く似ている。角閃石は認められない。この軽石のガラス部は無色透明である。

同じように、斜方輝石と単斜輝石が多く含まれている5号復旧痕壁面の7層中の黄色軽石と、6号復旧痕壁面の黄色軽石層(試料4)中の軽石では、とくに斜方輝石の占める割合が高いという類似点が認められる(73.2%, 78.4%)。一方、10号復旧痕E底部Ⅷ層中の白色軽石と、Ⅱ区1号トレンチⅧ層中の白色軽石のでは、角閃石の比率がとくに高く(68.8%, 72.0%)、斜方輝石が比較的多く認められ(17.6%, 10.8%)、また単斜輝石が含まれていない点で共通点が認められた。



第1005図 軽石に含まれる重鉱物の組成ダイアグラム

第35表 重鉱物組成分析結果

地点	試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
4号トレンチ・Ⅲ層	A	0	132	53	1	0	62	2	250
	B	0	92	80	0	0	75	3	250
5号復旧痕壁面・7層	黄色軽石	0	183	39	0	0	27	1	250
6号復旧痕壁面	4	0	196	38	0	0	16	0	250
10号復旧痕E底部・Ⅷ層	白色軽石	0	44	0	172	0	33	1	250
Ⅱ区1号トレンチ・Ⅷ層	白色軽石	0	27	0	180	0	42	1	250

数字は粒子数。ol：カンラン石、opx：斜方輝石、cpx：単斜輝石、ho：角閃石、bi：黒雲母、mt：磁鉄鉱、

第36表 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)
4号トレンチ・Ⅲ層	A	—	1.705-1.712
	B	—	1.705-1.709
5号復旧痕壁面・7層	黄色軽石	—	1.705-1.712
6号復旧痕壁面	4	1.515-1.521	—
10号復旧痕E底部・Ⅷ層	白色軽石	—	1.708-1.712
Ⅱ区1号トレンチ・Ⅷ層	白色軽石	—	1.707-1.711

屈折率測定は、温度変化型屈折率測定装置(RIMS86)による。

4. 屈折率測定

(1)測定試料

重鉱物組成分析の対象となった6試料に含まれる斜方輝石を対象に、火山ガラス(n)または斜方輝石(γ)の屈折率の測定を行った。屈折率測定は、温度一定型屈折率測定装置(RIMS86)による。

(2)測定結果

測定結果を第36表に示す。4号トレンチⅢ層中の試料Aに含まれる斜方輝石の屈折率(γ)は、1.705-1.712である。また試料Bに含まれる斜方輝石の屈折率(γ)は、1.705-1.709である。同じような重鉱物組成上の特徴をもつ5号復旧痕壁面の7層中の黄色軽石の斜方輝石の屈折率(γ)は、1.705-1.712である。また、6号復旧痕壁面の軽石(試料4)の火山ガラスの屈折率(n)は、1.515-1.521である。やはり重鉱物組成上の特徴が似ている10号復旧痕E底部のⅧ層と、Ⅱ区1号トレンチのⅧ層中の白色軽石に含まれる斜方輝石の屈折率(γ)は、順に1.708-1.712と1.707-1.711である。

5. 考察

4号トレンチⅢ層中の試料Bの軽石については、重鉱物の組み合わせや斜方輝石の屈折率を後期更新世以降の本地域の指標テフラと比較すると、約1.6～1.7万年前*1に浅間火山から噴出した浅間大窪沢テフラ群(As-0k Group, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996など)に似ている。軽石の岩相や重鉱物の組み合わせがよく似ている5号復旧痕壁面の7層中の黄色軽石と6号復旧痕壁面の軽石(試料4)については、その特徴からいずれも4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000)に由来すると考えられる。同じように岩相や重鉱物組成上の特徴が似ている10号復旧痕E底部のⅧ層と、Ⅱ区1号トレンチのⅧ層中の白色軽石については、その特徴から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)、または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

なお、4号トレンチⅢ層中の試料Aの軽石の起源については、斜方輝石の屈折率から赤城追貝テフラ(Ag-0k, 新井, 1962, 町田・新井, 2003)、赤城行川2テフラ(Ag-Nm2, 新井, 1962, 鈴木, 1990, 町田・新井, 2003)約2.0～2.5万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 2003)の上部などに比較的似ている。より正確な同定については、新鮮な状態での指標テフラに含まれる軽石の特徴記載が待たれる。

6. まとめ

田口下田尻遺跡において地質調査を行って土層の層序記載を行うとともに、重鉱物組成分析と屈折率測定により軽石の起源を調べた。その結果、浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)や、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)または榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)に由来する軽石が検出された。さらに、浅間火山や赤城火山に由来する後期更新世のテフラに由来する可能性のある軽石も検出することができた。

* 1 : 放射性炭素(¹⁴C)年代。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65p.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山, 黒斑～前掛期のテフラ層序. 第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉(1995)テフラからさぐる浅間山の活動史. 御代田町誌自然編, p.22-43.
 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴～とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて～. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
 鈴木毅彦(1990)テフロクロロジーからみた赤城火山最近20万年間の噴火史. 地学雑, 99, p.60-75.
 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く～古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

第7節 人骨・獣歯骨の分析

田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡では、古代から近世の墓坑と思われる土坑が20基ほど検出され、人骨や歯が出土した他、溝などからは獣歯骨が多数出土した。それらの資料について、人骨の部位や獣歯骨の同定を宮崎重雄氏に委託した結果は以下のとおりである。

第1項 人骨分析

本調査では、歯、骨とも可能なものはそれぞれ計測を行い、主だった形態的特徴と齶蝕の認められた歯を記録した。歯についてはさらに咬耗の程度を記録し、年齢推定の主要な手掛かりとした。

歯による年齢および性別の推定では、青山他(1957)、権田(1959)、Matsumura (1995)、上条(2000)などのデータと照合して判断した。歯以外の部位による推定では主に瀬田・吉野(1990)に示されたデータを主として参考にし、Nakahashi& Nagai (1986)、中橋(1988)の古人骨性別判定法も併用した。

(1) 田口上田尻遺跡

上田尻遺跡では、9基の土坑からそれぞれ1個体分すなわち9個体分のヒトの歯および人骨またはそのどちらかが出土している。そのほか、1面8号溝から人骨の可能性のある焼骨片が検出されている。

1. 3号土坑(第37表)

2本の切歯と大白歯細片が残存する。 **年齢**:歯の咬耗度から、老年期と推定する。 **性別**:不明 **古病理**:所見なし。

第37表 田口上田尻遺跡 3号土坑歯計測表

単位はmm

歯種			近遠心径	唇舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度
上顎	左	中切歯	8.5	-	-	-
下顎	左	側切歯	5.8	6.4	7.3	切縁部に带状に象牙質露出。歯冠高はかなり低くなっており、咬耗が進んでいる。

2. 213号土坑

頭蓋骨細片10数片と肢骨細片数片である。頭蓋骨片の縫合線は癒合しきっていない。 **推定年齢**:壮年期～熟年期？ **性別**:不明 **古病理**:所見なし。

3. 215号土坑(第38表)

2本の歯と左?大腿骨と脛骨と思われるきわめて保存不良の肢骨が残存する。大腿骨の中央横径22.0mm、大腿骨中央矢状径27.6mmを計測する。 **年齢**:歯の咬耗度から、壮年期と推定する。 **性別**:不明 **古病理**:所見なし。

第38表 田口上田尻遺跡 215号土坑歯計測表

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度
左下顎第1小白歯	7.7	8.8	5.8	エナメルのみ咬耗
左下顎第2小白歯	7.3	8.5	6.5	頬側咬頭に点状の象牙質

4. 281号土坑(第39表)

歯が2本検出されている。頭蓋部も残存するが、骨表面の粗れがひどく、詳細な観察は不可能である。現状での脳頭蓋最大長は160.0mmである。 **年齢**:脳頭蓋の大きさや、下顎第2乳白歯が存在し、その咬頭部に点状の象牙質が露出していることから、幼年期から少年期と推定した。 **性別**:歯の大きさから男性と思われる。 **古病理**:所見なし。

第39表 田口上田尻遺跡 281号土坑歯計測表

下顎小白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	Blackの分類	齶蝕	咬耗部位・咬耗度
右第2小白歯	7.4	8.4	9.3	Y	なし	頬側咬頭のエナメルにわずかに咬耗あり

下顎乳白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齶蝕	咬耗部位・咬耗度
右第2乳白歯	11.2	9.4	5.6	なし	3つの咬頭頂部に点状に象牙質露出

5. 283号土坑

きわめて保存不良の大腿骨又は脛骨片である。保存全長は160.0mmである。 年齢：不明 性別：不明

6. 338号土坑(第40・41表)

ほぼ全身骨格が出土しているが、頭蓋骨以外の体幹・体肢骨は保存状態がきわめて不良で、有効な計測値が得られたのはごく僅かである。すなわち、右大腿骨骨体中央矢状径が23.2mm、骨体中央横径が23.8mm、左大腿骨では骨体中央矢状径が21.7mm、骨体中央横径が24.7mmである。 年齢：脳頭蓋の縫合線の癒合状態、歯の咬耗度などから壮年期と判断される。 性別：大腿骨中央周は75.0mmを計測し、Nakahashi& Nagai (1986)、中橋(1988)の古人骨性別判定法によれば、女性相当の値である。そのほか、①脳頭蓋が小さい②眉弓の隆起が顕著でない③外後頭隆起や上項線の発達が顕著でない④歯の計測値が小さいことなど女性としての特徴を持ち合わせている。 古病理：左右の第1大臼歯の歯頸部にわずかに帯状の齲蝕がある。

第40表 田口上田尻遺跡 338号土坑歯計測表

切歯 単位はmm

歯種		近遠心径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度	
上顎	左	中切歯	7.6	10.3	線状に細く象牙質
	右	側切歯	5.9	8.3	線状に象牙質
中切歯		5.0	7.8	線状に象牙質	

犬歯

歯種	近遠心径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度	
上顎	右犬歯	?	10.7	?
	左犬歯	7.3	?	先端のみ咬耗
下顎	右犬歯	6.6	10.7	先端のみ咬耗

上顎小白歯

歯種	近遠心径	歯冠高	咬耗部位・咬耗度	
左	第1小白歯	6.6	7.2	頬側咬頭のみ象牙質
	第2小白歯	6.2	6.7	エナメルのみ咬耗

下顎小白歯

歯種	近遠心径	歯冠高	Blackの分類	咬耗部位・咬耗度	
右	第2小白歯	6.7	7.2	H	エナメルのみ咬耗
	第1小白歯	6.9	8.2	/	先端のみ咬耗

下顎大臼歯

歯種	近遠心径	歯冠高	遠心咬頭の退化	裂溝型	齲蝕	咬耗部位・咬耗度	
右	第3大臼歯	9.3	6.4	-	-	?	エナメル質のみ咬耗
	第2大臼歯	10.0	7.0	-	-	?	点状に象牙質
	第1大臼歯	11.0	6.0	5	5	歯頸部に細い帯状の齲蝕あり	点状に象牙質
左	第1大臼歯	10.2	7.0	5	5	歯頸部に細い帯状の齲蝕あり	点状に象牙質

第41表 田口上田尻遺跡 338号土坑骨計測表

計測番号	計測項目	計測値	計測番号	計測項目	計測値	計測番号	計測項目	計測値
1	脳頭蓋最大長	160.2	26 (1)	正中眉間弧長	19.0	50	前眼窩間幅	25.8
1d	ナジオン脳頭蓋長	160.9	26 (2)	正中前頭脳部弧長	98.0	51	眼窩幅	38.2
4a	側頭骨最大長	65.8	27	正中頭頂弧長	105.0	52	眼窩高	31.1
4c	乳突部最大長	29.6	27 (2)	前頭頭頂弧長	103.0	55	鼻高	46.0
5	頭蓋底長	101.7	29	正中前頭弦長	103.4	57	鼻骨最小幅	8.8
8 (1)	脳頭蓋頭頂結節幅	125.0	29d	グラベラ・プレグマ弦長	96.3	57 (1)	鼻孔最大幅	11.0
8a	脳頭蓋側頭幅	118.0	29 (1)	正中眉間弦長	21.4	65	下顎関節突起幅	111.0
8c	脳頭蓋側頭頂幅	124.0	30	正中頭頂弦長	102.0	65 (1)	下顎筋突起幅	85.0
9	最小前頭幅	88.6	30c	プレグマ・アステリオン弦長	131.3	66	下顎角幅	90.0
9 (2)	上前頭横断幅	49.0	30 (1)	側頭頭頂弦長	82.0	67	前下顎幅	53.0
10	最大前頭幅	104.6	30 (2)	前頭頭頂弦長	88.2	68	下顎長	81.0
10a	前頭骨最大幅	104.7	40 (1)	真顔長	106.9	68a	下顎臼歯弦長	25.1
10b	ステファニオン幅	104.0	40 (2)	上顔長	66.8	68 (1)	下顎投影最大長	99.0
11	両耳幅	112.0	41	側顔長	93.6	69	オトガイ高	26.0
11 (1)	外耳道幅	100.0	41a	耳頬骨長	51.0	69 (1)	下顎体高	14.1
11b	ラディクラール幅	111.0	43	上顔幅、外眼窩顔幅	97.0	69 (2)	下顎体高(M2)	13.2
17	バジオン・プレグマ高	120.0	44	両眼窩幅	89.6	70 (3)	下顎切痕深	16.0
20	耳・プレグマ高	105.0	45	頬骨弓幅	99.0	71	下顎枝幅	32.8
20a	耳軸・グラグマ投影高	110.0	47	顔高	103.0	71 (1)	下顎切痕幅	36.3
20 (1)	最大投影耳高	105.0	48	上顔高	63.0	80 (1)	歯列幅	62.0
24 (3)	頭頂横弧長	130.0	48 (1a)	歯槽区域高	18.0	80 (2)	白歯列長	43.0
26	正中前頭弧長	118.0	49	後眼窩間幅	24.4	80 (3)	大臼歯列長	31.0

計測法は馬場(1991)による。単位はmm



図版7 338号土坑出土人骨

0 1:3 10cm

7. 350土坑(第42表)

出土時には上肢骨・下肢骨が存在したが、大腿骨片と脛骨片が確認されるのみである。現状では大腿骨の保存長は300.6mm、骨体中央横径は23.5mmである。

脳頭蓋は土塊としておおよその外形をとどめるが、頭蓋骨そのものは一部残存するのみである。歯は比較的良好な状態で残存する。切歯の咬耗状況を見ると軽度の缺状咬合であったようである。現状で観察・計測できた歯は第42表の通りである。 **性別**：性別の判定は困難である。 **年齢**：壮年期と判断される。 **古病理**：所見なし。

第42表 田口上田尻遺跡 350号土坑歯計測表

切歯		歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	舌面窩の分類	咬耗部位・咬耗度
上顎	右	側切歯	7.2	6.8	8.9		切縁に点状に象牙、咬耗面は切縁から舌側にかけて
		中切歯	8.4	6.6	10.0	2	切縁に点状に象牙、咬耗面は切縁から舌側にかけて
	左	中切歯	8.6	6.8	10.2	2	切縁に線状に象牙
		側切歯	6.6	6.4	10.0	-	切縁に2点象牙
下顎	右	側切歯	5.7	5.8	9.0	-	切縁に2点象牙
		中切歯	5.5	5.4	8.5	-	切縁に線状象牙

単位はmm

犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	棘突起の発達	舌面歯頸隆線	咬耗部位・咬耗度
上顎 右犬歯	8.0	7.8	9.0	なし	隆線	先端のみ象牙質
下顎 右犬歯	6.9	7.3	10.4	なし	隆線	先端のみ象牙質

下顎小白歯

歯種	近遠心径	舌側咬頭の位置	連合隆線の経過	Blackの分類	咬耗部位・咬耗度
右 第2小白歯	6.7	-	-	Y	舌側咬頭に点状に象牙質
右 第1小白歯	6.9	近心	b		舌側咬頭に点状に象牙質

下顎大白歯

歯種	近遠心径	咬耗部位・咬耗度
右 第1大白歯	10.5	頰側2咬頭及び遠心咬頭に点状に象牙質、舌側咬頭不明



8. 396号土坑(第43表)

脳頭蓋骨細片が10数片存在する。歯は上顎小白歯が1本と左上顎第2大白歯片、上下不明の第1大白歯と思われる歯片が残存する。 **性別**：現存する歯の大きさでは性別の判断は困難である。 **年齢**：熟年期相当である。 **古病理**：所見なし。

0 1:3 10cm

図版8 350号土坑出土人骨

第43表 田口上田尻遺跡 396号土坑歯計測表

上顎小白歯					単位はmm
歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	齶蝕	咬耗部位・咬耗度
左第1小白歯	7.1	9.6	7.8	なし	全体的に咬耗が進み、舌側咬頭の遠心側に長径2.2の象牙異質露出

9. 397号土坑

ヒトの大腿骨又は脛骨と思われるきわめて保存不良の骨片が10片ほど残存する。 **性別**:不明 **年令**:不明 **古病理**:所見なし。

10. 8号溝

保存全長25.0mmの人骨の可能性のある小骨片が出土している。

(2) 田口下田尻遺跡

下田尻遺跡では、8基の遺構からそれぞれ1個体分すなわち8個体分のヒトの歯および人骨またはそのどちらかが出土している。

1. 93号土坑

保存きわめて不良のヒトの細骨片である。

2. 202号土坑(第44・45表)

発掘時には全身が残存していたようであるが、現状では保存状態が極めて悪く、小片に分離している。

脳頭蓋も小片化しているが、眉弓の発達が比較的良好、乳様突起も大きめで、ラムダ縫合は外面がほぼ癒合し、内面は消失している、などの特徴が観察される。

他に肩甲骨片、上腕骨片、前腕骨細片、寛骨片、左右の大腿骨片、左右の脛骨片、足根骨片が確認される。この内、上腕骨、大腿骨、脛骨の保存が比較的良好、骨体部の若干の計測値が得られた。 **年令**:上述の縫合線の様子、歯の咬耗度から老年期の個体と推定される。 **性別**:頭蓋骨の眉弓、乳様突起の特長、上腕骨の大結節稜、三角筋粗面が比較的良好発達していること、体肢骨と歯のそれぞれの計測値などから男性と推定される。また、上腕骨の最小周が6.2cmを計測し、Nakahashi & Nagai (1986)、中橋(1988)の古人骨性別判定法によれば、男性の値を示している。 **古病理**:齶歯 歯はほとんどのものが齶蝕され、左下顎犬歯では唇側歯頸部に径6.6×5.5mmの大きな齶窩があり、さらに上顎右第1小白歯、下顎右第1小白歯では歯冠部が崩壊し、歯根だけが残っている。左下顎、右下顎それぞれの第1大白歯が欠損しているのは齶蝕が進んだ結果脱落したものと思われる。

3. 204号土坑

焼骨の細片で、部位は体の各部分にわたる。細骨片になり過ぎていて、得られる情報はごくわずかである。 **年齢**:上顎小白歯?の歯根片と歯冠エナメルを欠く右上顎白歯が検出され、いずれの歯でも根管の狭窄がみられること、および二部脳頭蓋細片で縫合線がまだ癒合してないことが観察されることで、老年期に至っていない成人と判断される。

性別:不明 **特記**:歯冠エナメルを欠く上記の右上顎白歯の近遠心径は7.2mm、頬舌径11.0mmである。第1大白歯か第2大白歯であろう。歪みや亀裂の生じている骨片が目立ち、まだ肉などの有機物質が残っている状態で骨が焼かれたことを示している。

第44表 田口下田尻遺跡 202号土坑骨計測表

骨種	計測番号	計測部位	計測値
下顎骨	48 (1a)	歯槽区域高	25.1
	54	鼻幅	28.0
	67	前下顎幅	47.0
	68 a	下顎臼歯弦長	28.8
	69	オトガイ高	34.8
	69 (1)	下顎体高	34.7
	69 (2)	下顎体高(M2)	28.4
	71 (b)	下顎頭長	21.0
	80 (1)	歯冠頬舌径	59.1
	80 (2)	歯冠高	46.2

単位はmm

骨種	計測番号	計測部位	計測値
	80 (3)	大白歯列長	33.5
上腕骨	39202	三角筋粗面最大径	25.0
	6 a	三角筋粗面最小径	18.6
	6 b	中央横径	19.5
	6 c	中央矢状径	19.0
大腿骨	6	骨体中央矢状径	27.6
	7	骨体中央横径	30.1
脛骨		骨体中央矢状径	30.5
		骨体中央横径	22.0

計測法は馬場(1991)による。



図版9 202号土坑出土人骨

0 1:3 10cm

第45表 田口下田尻遺跡 202号土坑歯計測表

切歯

上顎	歯種		近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度
	右	側切歯	計測不可	-	-	-	?
		中切歯	-	-	-	?	切縁に帯状の象牙質露出
左	中切歯	-	-	-	-	?	切縁に帯状の象牙質露出
	側切歯	-	-	-	-	?	切縁に細い帯状の象牙質露出

犬歯

上顎	歯種		近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度
	左犬歯	8.9	9.0	10.8	遠心隣接綿糸頸部に深めの齲蝕あり、他の歯頸部にもわずかに齲蝕あり	尖頭部に大きく象牙質露出	
下顎	左犬歯	7.7	-	-	唇側歯頸部に静に達する径6.6×5.5の齲蝕あり	-	

上顎小白歯

右	歯種		近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度
	第1小白歯	-	-	-	歯冠部齲蝕により喪失し、歯根のみ残存	-	
左	第1小白歯	8.5	11.5	11.8	遠心歯頸部に齲蝕あり	近心即咬合面に三日月状に象牙質露出	

下顎小白歯

右	歯種		近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度
	第1小白歯	-	-	-	歯冠部齲蝕により喪失し、歯根のみ残存	-	
左	第1小白歯	-	-	-	歯冠部の遠心側半分は齲蝕により喪失	-	

上顎大白歯

右	歯種		近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度
	第2大白歯	-	10.9	-	-	-	
左	第1大白歯	10.5+	12.7	8.3	遠心舌側歯頸部に径5の歯髓に達する齲蝕あり	咬合面のほぼ全面象牙質露出	

下顎大白歯

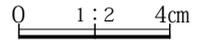
右	歯種		近遠心径	頬舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度
	第1大白歯	欠損	-	-	-	-	出土時にはすでに脱落し、歯槽骨が大きく吸収されている
左	第1大白歯	欠損	-	-	-	-	右第1大白歯と同様な状況
	第2大白歯	11.4	-	-	頬側歯頸部にわずかに齲蝕あり	舌側各咬頭の象牙質は大きく露出し互いに連続している	
	第3大白歯	10.4	-	-	-	-	各咬頭で象牙質露出

4. 205号土坑(第46表)

歯が8本ほど検出されている。年齢：8本の歯のうち3本が乳臼歯である。検出された歯種及びその咬耗度・歯根の完成度などから判断して、幼年期と判断される。性別：歯の大きさは男児であることを示している。古病理：幼児でありながら右第1乳臼歯の近心隣接部にわずかな齲蝕がある。



図版10 205号土坑出土人歯



第46表 田口下田尻遺跡 205号土坑歯計測表

切歯 単位はmm

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	舌面窩の分類	齲蝕	咬耗部位・咬耗度
上顎 右 中切歯	9.1	6.4+	8.6+	1~2	?	未咬耗

犬歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	齲蝕	咬耗部位・咬耗度
上顎 右犬歯	8.7	6.8+	8.6+	?	?

上顎大白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心咬頭退化	カラベリー結節	外形の諸型	齲蝕	咬耗部位・咬耗度など
右	第1乳臼歯	10.1	9.9	6.9	4	有小結節状	-	近心隣接部にわずかに齲蝕 咬耗はあるが象牙質に到っていない
	第1大白歯	11.4	11.6	7.6	4	痕跡	A2	- 未咬耗で歯冠部は完成しているが、歯根は未形成

下顎大白歯

歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠高	遠心咬頭退化	裂溝型	齲蝕	咬耗部位・咬耗度	
右	第2乳臼歯	10.9	9.5	6.4	-	-	-	舌側2咬頭に点状に象牙質
	第1大白歯	12.0	11.3	8.9	5	Y5	-	未咬耗
左	第2乳臼歯	10.9	9.2	6.6	-	-	-	近心頬側咬頭に点状象牙質

5. 206号土坑(第47表)

きわめて保存状態が悪く、小片化しているが、次の各部位の存在が確認される。頭蓋骨、歯、頸椎、椎骨、肋骨、左右上腕骨、前腕骨、寛骨、左右大腿骨、左右脛骨などである。右乳様突起幅は12.9(?)mmを計測する。

年齢：頭頂付近の冠状・頭頂縫合は外側では観察されるが内側では消失している。歯の咬耗度と考え合わせると熟年期と思われる。性別：歯の大きさは男性の可能性を示唆している。古病理：大部分の歯に齲蝕があり、特に右上顎犬歯、右上顎第1小臼歯では大きな齲窩となっている。特記：犬歯の咬耗が激しく、犬歯を酷使する仕事に従事していたのかも知れない。切歯の咬耗状況は鋏状咬合であったことを示す。

第47表 田口下田尻遺跡 206号土坑歯計測表

切歯

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠高	舌面窩の分類	齲蝕	咬耗部位・咬耗度	
上顎 右	側切歯	7.9	6.6	11.0	-	近心歯頸部にわずかあり 切縁に带状の象牙質、咬耗は舌側面の下半部に及ぶ	
	中切歯	9.0	6.5	11.9	2	- 切縁近心側半と近心縁辺隆線状に線状の象牙質の露出	
下顎	右	側切歯	6.7	6.9	8.1	-	遠心歯頸部にあり 切縁に太い带状の象牙質露出
		中切歯	6.0	6.3	6.6	-	近・遠心歯頸部にあり、遠心では歯髓に達する 切縁に太い带状の象牙質露出
	左	中切歯	5.8	6.0+	8.1	-	- 切縁に太い带状の象牙質露出
		側切歯	6.5	6.9	8.9	-	近・遠心歯頸部に齲蝕あり、遠心では大きい 切縁に線状に象牙質露出

犬歯 単位はmm

歯種		近遠心径	唇舌径	歯冠高	齶蝕	咬耗部位・咬耗度
上顎	右犬歯	8.0	9.0	9.5	遠心側半分は齶蝕により大きく空洞化	尖頭部全面大きく象牙質露出
下顎	右犬歯	7.1	8.3	11.0	-	尖頭部に幅広く象牙質露出
	左犬歯	7.1	7.9	6.9	近心歯頸部と遠心歯冠部にあり	?

上顎小白歯

歯種		近遠心径	頬舌径	歯冠高	齶蝕	咬耗部位・咬耗度
右	第1小白歯	7.2	10.3	8.7	近心側歯頸部のは径3.5、遠心歯冠部にもあり	咬合面の1/2に象牙質露出
左	第1小白歯	7.3	10.3	7.8	近・遠心隣接面にエナメル質の齶蝕あり	頬側咬頭に点状の象牙質露出

下顎小白歯

歯種		近遠心径	頬舌径	歯冠高	Black の分類	齶蝕	咬耗部位・咬耗度
右	第1小白歯	7.4	8.2	6.6	-	-	咬合面の1/2に象牙質露出
左	第2小白歯	7.4	8.6	5.3	Y	近・遠心隣接面にエナメル質の齶蝕あり	咬耗は咬合面全面に及ぶが象牙質の露出はなし

下顎大白歯

歯種		近遠心径	頬舌径	歯冠高	齶蝕	咬耗部位・咬耗度
左	第1大白歯	11.3 (+)	10.7	11.2	遠心隣接面歯冠部に象牙質に達するものと遠心から舌側に続く歯頸部に齶蝕あり	?



図版11 206号土坑出土人歯

6. 212号土坑

焼骨の微細骨片で、数10片出土している。ヒトに特有の骨軸に沿ったスジが骨表面に観察されるものもことから人骨と判断される。肢骨片が含まれていることは確認されるが、詳細な部位の決定は不可能である。

7. 346号土坑

ヒトの肢骨などの細片数10片で、焼骨片となっている。亀裂歪みが目立ち死後まだ有機物質が残存している時期に焼かれたものであることを示している。

8. 4号溝

ヒトの大腿骨片で、最大幅25.2mm、保存最大長64.0mmである。他に多数の細片化した肢骨片がある。

参考・引用文献

青山敏男・松本 靖・小林徳之助・松田隆雄(1957) 「日本人個体歯の大きさの性的差異について」『歯科医学』20, 344-353.
 枋原 博(1957) 「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31, 607-656.
 権田和良(1959) 「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』67, 151-163.
 Matsumura, H. (松村博文) (1995) A Microevolutional History of the Japanese People as Viewed from Dental Morphology. National Science Museum Monographs No. 9, National Science Museum, Tokyo.
 上條雍彦(2000) 『日本人永久歯解剖学』アナトーム社
 Nakahashi, T. and Nagai, M. (1986) Sex Assessment of Fragmentary Skeletal Remains. 『人類学雑誌』94 (3) 289-305.
 中橋孝博(1988) 「古人骨の性判定法」『日本民族・文化の生成1-永井昌文教授退官記念論文集』217-233.
 瀬田季茂・吉野峰生(1990) 『白骨死体の鑑定』 令文社
 馬場悠男(1991) 「人体計測-II 人骨計測法」『人類学講座 別巻1』

第2項 獣歯骨

(1) 田口上田尻遺跡(第48表)

1. 48号溝No.103：ウマの左上顎臼歯片で、歯冠高は64.0mmの幼齡馬である。
2. 8号溝：ウマの左下顎臼歯で、第3前臼歯か第4前臼歯である。歯冠高27.9mmを計測し、12～14才の壮令馬である。
3. 64号住居No.22：馬歯と思われるが細片化が著しく種を特定できない。
4. 74号住居No.25：ウマの下顎臼歯片と思われる。
5. VI区1面No.3：左右不明のウマ上顎臼歯。
6. IV区721Pit：ウマの左上顎臼歯片で、歯冠高33.6mmの壮令馬である。
7. 60号溝P-3：ウマの上顎臼歯片で、歯冠高は39.0mmの壮令馬である。
8. 60号溝No.1：ウマの左上顎臼歯で、歯冠高20.2mmの老令馬である。
9. 2号低地P-5：ウマの左上顎第3後臼歯で、歯冠長27.7mmを計測する。

第48表 田口上田尻遺跡 獣歯計測表

ウマ

18. 1号溝 No.1 単位はmm

上顎臼歯	歯冠長	歯冠幅	原錐幅	歯冠高
左第1(?)後臼歯	21.0	21.2	13.2	29.4

ウマ

25. 21号溝 No.9

上顎臼歯	歯冠長	歯冠幅	原錐幅	歯冠高	特記事項
左第3前臼歯	24.0	22.6	13.0	13.8	咬合面のエナメル質は磨耗し尽くされている
左第4前臼歯	22.6	22.6	11.6	15.6	咬合面のエナメル質は磨耗し尽くされている
右第1後臼歯	20.7	23.8	?	12.0	咬合面のエナメル質は磨耗し尽くされている
左第2後臼歯	20.4	21.6	?	13.4	咬合面のエナメル質は磨耗し尽くされている
右第2後臼歯	20.4	22.9	12.8	12.5	咬合面のエナメル質は磨耗し尽くされている
左第3後臼歯	27.3	21.4	15.3	19.0	?
右第3後臼歯	26.8	19.0	14.6	22.0	?

ウマ

25. 21号溝

上顎臼歯	歯冠長	歯冠幅	原錐幅	歯冠高
右第2前臼歯	27.1	21.6	15.0	20.0
右第3前臼歯	24.1	21.1	11.9	14.0
右第4前臼歯	23.7	24.0	12.9	15.0
右第1後臼歯	20.0	23.4	/	12.0
右第2後臼歯	20.4	22.4	/	/
右第3後臼歯	27.2	21.2	/	/

ウマ

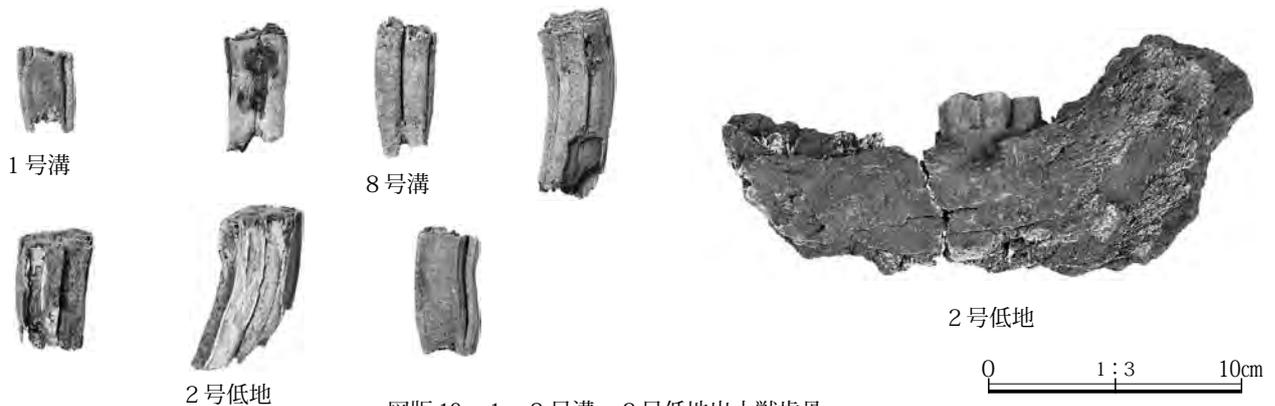
29. 92号土坑

下顎臼歯	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	咬合面の傾斜	下後錐谷長	下内錐谷長	下内錐幅
左第2後臼歯	25.7	11.5	40.0	80°	9.9	9.8	4.2

ウシ

10. 2号低地P-1

下顎臼歯	歯冠長	歯冠幅	歯冠高
第3後臼歯	39.9	17.0	21.0



図版 12 1・8号溝・2号低地出土獣歯骨

10. 2号低地P-1：ウシの下顎第3後臼歯で、成牛である。計測値は第48表
11. 2号低地P-4：右上顎臼歯の馬歯片である。歯冠高27.6mmの老令馬である。
12. 2号低地P-3：左上顎臼歯の馬歯片である。歯冠高26.0mmと低く、老令馬である。
13. 2号低地P-2：馬歯である。歯種判定は困難。歯冠高低く老令馬である。
14. 64号住居No.24：牛歯の可能性はある。ウシだとすれば老齡牛である。
15. 64号住居No.25：馬歯と思われるが細片化が著しく種を特定できない。
16. 64号住居：馬歯と思われるが細片化が著しく種を特定できない。
17. 2号復旧痕：ニワトリの右大腿骨遠位半。遠位最大幅14.6mm。若鶏。
18. 1号溝No.1：左上顎第1(?)後臼歯で、壮令馬。計測値は第48表
19. 34号溝No.12：ウマの上顎臼歯で細片化している。歯冠高は24.0mmの壮～老令馬である。
20. 1号復旧痕No.4：ウマ又はウシの大型の骨片であるが、細片化が著しく部位決定困難である。
21. 8号溝：ウマの右上顎第2切歯である。老令馬である。
22. (1) 37号溝：ウマの上顎臼歯で、歯冠高24.0mmの老令馬である。
(2) 37号溝：ウシの後臼歯で歯冠高32.0±mmの成牛である。
23. 37号溝No.10：牛歯片で、歯冠高は18.2mmの成牛である。
24. 8号溝No.26：牛歯片で、歯冠高は32.0mmの成牛である。
25. (1) 21号溝No.9：ウマの上顎臼歯7本。咬耗著しく老令馬である。計測値は第48表
(2) 21号溝：ウマの右上顎臼歯6本で、咬耗が極度に進んでいる。天命を全うしたと思われる老令馬である。
上記のウマとは別個体である。計測値は第48表
26. 112号土坑：ウマの上腕骨と思われるきわめて保存不良の肢骨片。
27. 23号住居No.9：ウマの右上顎臼歯。歯冠高20mmの老令馬である。
28. 11号復旧痕：現在のブタの可能性はある。
29. 92号土坑：ウマの左下顎第2後臼歯である。中型在来馬相当の10～11才の壮令馬と推定される。計測値は第48表
(2) 田口下田尻遺跡(第49表)
 1. Ⅲ区2面No.1：ウマの左上顎第3前臼歯で、歯冠長27.3mm、歯冠高68.0mmの幼令馬である。
 2. Ⅲ区2面No.4：ウシの臼歯細片数10片。
 3. Ⅲ区2面No.3：ウシの臼歯小片数10片。
 4. 1号道No.4：ウマの下顎臼歯でdoubleKnot長14.0mm、下内錘幅5.5mm、歯冠高48.0mmの壮令馬である。
 5. 212号土坑埋没土：ウマの上顎臼歯で歯冠高52.0+mmで若い個体である。保存きわめて不良。
 6. 204号土坑No.12：ウマの右上顎第1後臼歯で、壮令馬のものである。切歯細片も数10片ある。計測値は第49表
 7. Ⅰ区2面No.32：ウマ又はウシの臼歯細片。
 8. 5号住居No.5：ウシの臼歯細片数片。歯冠高39.0mm。幼令牛？
 9. 204号土坑：ウシの臼歯数片。
 10. 4号溝P-8：ウシまたはウマの臼歯片
 11. Ⅲ区435pitNo.1：ウシの10数片の臼歯片。左右、上下不明。
 12. 50号溝：歯ではあるが、細片で、種の判定は不可。
 13. 50号溝No.16：ウシの後臼歯片。歯冠高50.0mm、幼令牛。
 14. 3号道No.26：ウシの臼歯片数10片。最大歯冠高23.0mm。
 15. 50号溝No.17：ウシの上顎臼歯片で、少なくとも4本分の歯から成っているが、細かく分離していて歯種決定が不可能である。最大歯冠高47.3mm。幼令牛。

16. 50溝No.20：ウシの左下顎第3後臼歯で、咬耗が開始されたばかりの3才前後の幼令牛である。他にも右下顎第3後臼歯片など数本分の臼歯細片がある。計測値は第49表
17. Ⅲ区2面No.28：ウマかうシの歯であるが、それ以上の情報は得られない。
18. 3号道No.11：ウシ下顎臼歯片。
19. 3号道No.13：ウマの右上顎第4前臼歯と左上顎第2後臼歯で、前者は未咬耗、後者は咬耗が始まったばかりで2～3才の幼令馬である。保存が比較的良好で明治以降のもの可能性もある。計測値は第49表
20. 3号道No.12：ウマの右上顎第4前臼歯で、まだ歯根はまだ形成されてなく、未咬耗で3才前後の若駒である。
21. 49号溝No.2：ウマの右上顎第3前臼歯で、5～6才の幼令馬である。
22. 3号道No.7：ウマの右上顎第4臼歯で、歯冠高60.1mmを計測し、成馬になったばかりの若い個体である。
23. 3号道：ウシの臼歯片。歯冠高22.0mm。
24. 3号道No.6：ウマの左上顎臼歯片。歯冠高43.0mm±。壮令馬。
25. 3号道No.4：左右不明のウマの上顎臼歯2本分。歯冠高59.0mmと63.0mm。幼令馬。
26. 3号道：ウシの臼歯片1本分。歯冠高34.4mm。
27. Ⅲ区2面No.27：ウマの右上顎臼歯。歯冠高49.0mm±。壮令馬。
28. 3号道No.5：ウマ右上顎臼歯。歯冠高76.0mm。幼令馬。
29. Ⅲ区2面No.36：ウマかうシの臼歯である。
30. 17号住居No.4：ウシ(?)の未咬耗の臼歯。歯冠高は17.7mm。幼令牛。
31. 17号住居No.5：ウマの歯片か？
32. 17号住居No.1：ウシ又はシカの下顎臼歯で、歯冠高は18.4+mmである。
33. 17号住居No.2：ウシ(?)の歯の細片。
34. 17号住居No.3：ウシの前臼歯片。
35. 17号住居No.6：シカ又はウシの歯細片。
36. 17住居No.71：シカ又はウシの歯細片。
37. Ⅰ区2面No.11：ウマの上顎臼歯片で、歯冠高が60.4mmあり、幼令馬。
38. 4号溝：ウマの臼歯片。破損が著しい。歯冠高35.0+mm。壮令馬。
39. 24号土坑No.9：ウシの上顎後臼歯。歯冠高27.8mm。壮令牛。
40. Ⅰ号低地No.108：ウマの左上顎第2(?)臼歯片。歯冠高53.8+mm。壮令馬。
41. Ⅰ区2面：ウマの下顎切歯片。歯冠高29.0mm。
42. Ⅰ区2面：ウマの歯と思われるが、細片化し同定困難。
43. 4号溝No.3：ウマの左下顎臼歯で、壮令馬。計測値は第49表
44. Ⅰ区2面No.10：ウマの右上顎臼歯で、壮令馬？ 計測値は第49表
45. 4号溝No.2：ウマの臼歯片で、歯冠高39.5mm。壮令馬。
46. 7号復旧痕No.54：ウマと思われる細歯片数10片。
47. 4号溝No.1：ウシ又はウマの後臼歯片。歯冠高37.0mm。
48. Ⅰ区復旧痕：ウマの左上顎第2後臼歯で、幼令馬。計測値は第49表
49. 9号溝No.27：ウマ左上顎臼歯で、壮令馬。計測値は第49表
50. 2号溝No.27：ウマの左上顎歯片で、歯冠高は66.6mmあり、幼令馬。
51. 38号住居No.11：歯の細片数片。シカの可能性もある。
52. 14号溝No.1：ウマの右下顎第1後臼歯、左第2後臼歯の他、未萌出の臼歯2本、乳臼歯片など歯片多数出土。2～3才の幼令馬。明治以降のものである可能性がある。 計測値は第49表

53. 35号住居No.36：ウシの右下顎第3後臼歯(計測値は第47表)。他に最大歯冠高15.3mmの下顎臼歯片がある。牡牝牛。
計測値は第49表
54. 5号住居No.29：ウシの下顎骨片。保存きわめて不良。他に細骨片、細歯片有り。
55. 1号低地1004：ウマの下顎(?)臼歯。歯冠高57.4mm。幼令馬か。他骨片多数。

主な参考文献

西中川 駿編(1991)「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書

野村 晋(1986)『概説馬学』西川書店

金子浩昌・西中川駿・松本光春(1985)「貫井2丁目遺跡44号土坑出土のウシの遺骸」『貫井2丁目遺跡』349-361 練馬区調査会

第49表 田口下田尻遺跡 獣歯計測表

ウマ

単位はmm

6. 204号土坑 No.12

歯種	歯冠長	歯冠幅	原錐幅	歯冠高	中附錐幅
右上顎第1後臼歯	22.4	22.7	10.6	29.0	3.8

ウマ

19. 3号道 NO.13

歯種	歯冠長	歯冠幅	原錐幅	歯冠高	中附錐幅
左上顎第2後臼歯	26.3	24.6	14.6	77.0	3.8
右上顎第4前臼歯	29.2	26.6	13.6	64.0	4.8

ウマ

43. 4号溝 No.3

歯種	歯冠長	歯冠高
左下顎臼歯	26.3	26.3

ウマ

44. I区2面 No.10

歯種	歯冠長	歯冠高
右上顎臼歯	24.3+	52.0

ウマ

48. I区復旧痕

歯種	歯冠長	歯冠幅	原錐幅	歯冠高	中附錐幅
左上顎第2後臼歯	23.0	22.1	12.0	79.0	2.6

ウマ

49. 9号溝 No.27

歯種	歯冠長	歯冠高
左上顎臼歯	26.0	36.0

ウマ

52. 14号溝 No.1

歯種	歯冠長	歯冠幅
右下顎第1後臼歯	24.1	14.0
右下顎第2後臼歯	25.0	13.5

ウシ

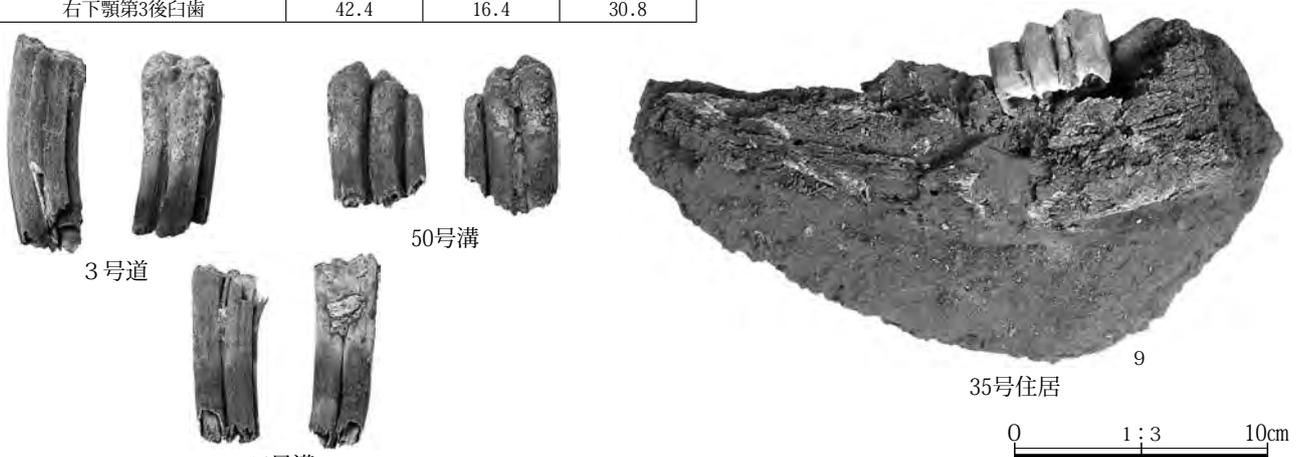
16. 50号溝 No.20

歯種	歯冠長	歯冠幅	歯冠高
左下顎第3後臼歯	36.8	15.8	59.0

ウシ

53. 35号住居 No.36

歯種	歯冠長	歯冠幅	歯冠高
右下顎第3後臼歯	42.4	16.4	30.8



図版 13 3号道・14・50号溝・35号住居出土獣歯骨

第8節 田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡では、8世紀前半、8世紀後半、10世紀前半、10世紀後半、近世の鍛冶遺構または鍛冶関連遺物が出土している。そこで、各時期にどのような鍛冶処理が行われ、鉄器の生産がなされていたのかを解明するために、株式会社九州テクノリサーチTACセンター・大澤正己氏に分析委託した結果は以下のとおりである。

概要

田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡は、8世紀代から近世へかけての鍛冶遺跡である。出土椀形滓18点の分析結果(鉱物組成と化学組成)を通して群馬県地域の鉄事情の時代変遷を辿った。

(1) 8世紀前半の田口下田尻遺跡5号住居から出土した5点の中型椀形滓は、0.57% TiO₂組成から鍛錬鍛冶滓に分けられる。鉱物組成は、①ウスタイト(FeO) + ファヤライト(2FeO・SiO₂)が高温沸し鍛接、②ファヤライト晶出が低温素延べ、③ガラス主成分で鉄酸化物の晶出が殆んどない低温火造りなど鍛錬鍛冶滓は3つに細分化できる。当該期の鍛冶原料鉄は箱形炉製造の可能性をもち、精錬鍛冶は現地で済みます。

(2) 8世紀後半の田口上田尻遺跡84号住居は、3点の大型椀形滓が4.55～1.80% TiO₂、鉱物組成はウスタイト(FeO) + ウルボスピネル(2FeO・TiO₂)から精錬鍛冶滓、別の3点は0.76～0.18% TiO₂で鍛錬鍛冶滓に位置づける。この時期の鉄生産の展開は、菅ノ沢型竪形炉であろう。現地からは鉄塊系遺物の小割り粗鉄の積出しが想定される。鍛冶場では精錬鍛冶から鍛錬鍛冶へ連続工程をとる。

(3) 10世紀後半の田口下田尻遺跡45号住居では、鉄滓中に鉄器片を残す故鉄(スクラップ)再生鍛冶滓、遺存鉄に脱炭ガス抜け孔を残す「下げ」鍛冶滓など認められて鍛冶内容は多様化する。この時期の製錬になると官営製鉄の廃れから小型自立炉操業の動きをみる。鍛冶原料鉄の生産量は低減化しつつも、銑鉄の供給はそれなりに増加する。一方同時期の田口上田尻遺跡118号住居の鍛冶も前述45号住居に準ずる操業が確認できた。

(4) 近世遺構外から出土した椀形滓は、90%の軽質ガラス質成分で、鉱物組成に鉄酸化物の晶出を殆んどみない。木炭消費の少ない低コスト鍛冶で低温火造り条件の鍛錬鍛冶滓である。群馬県地域外のたたら製鉄由来の割鉄(庖丁鉄)が鍛冶原料鉄として大量に流通していた可能性が高い。

1. いきさつ

田口上田尻遺跡と田口下田尻遺跡の両者は、前橋市田口町に所在して字境を介した隣接生産遺跡である。両遺跡は8世紀より近世へかけての鍛冶活動が活発になされて、鍛冶工程が具体的な様相で捉えられ、かつ、時代変遷が辿れる良好な椀形鍛冶滓を大量に出土した。その中より18点の椀形鍛冶滓が抽出され、群馬県地域の製鉄、鍛冶技術の解明に寄与できる貴重な資料としての評価を受け、金属学的調査の運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

第50表に示した椀形鍛冶滓18点である。資料の個々の詳細は依頼者側で準備された観察表を参照して頂きたい。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2) マクロ組織

顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5、10、20倍のいずれかで撮影した。低倍率の観察は、組織の分布状

態、形状、大きさなど顕微鏡検査(×50、100、400)によるよりも広範囲にわたっての情報が得られる利点がある。

(3)顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3μと1μで仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物は、ピクラル(ピクリン酸飽和アルコール液)で、フェライト結晶粒は5%ナイトル(硝酸アルコール液)で、腐食(Etching)している。

(4)ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5)化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)：： 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化燐(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)： ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(6)資料(第50表)の法量、磁着度、メタル度について下記に説明文をつける。

- ・法量 資料の残存する最大長、最大幅、最大厚、重量を計測したものである。
- ・磁着度 鉄滓分類用の「標準磁石」を用いて資料との反応単位を1から順に数字で表現したもので、数値が大きいほど磁性が強い。(歴博報告書第58・59集「日本・韓国の鉄製産技術」資料編国立歴史民俗博物館1994に準じた)
- ・遺存度 資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。
- ・メタル度 特殊金属探知機によって判定された金属鉄の残留度を示すもので、最も金属鉄が依存しないものから遺存するものまで6段階に分け、「なし」、「錆化(△)」、「H (○)」、「M (◎)」、「L (●)」、「特L (☆)」と表示した。
- ・分析 分析実施項目を○印で示す。
- ・所見 分析前の外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔の有無、及び付着物やその他の状況について詳細に記す。
- ・分析個所(実測図の観察表)記す。

3. 調査結果

3-1. 田口下田尻遺跡5号住居出土品(A型8世紀前半)

	肉眼観察	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	化学組成分析
TAG-1 椀形鍛冶滓(中型・含鉄)	平面が不整楕円形で薄手の2段椀形滓である。265gの中型品であるが本遺構最大の椀形鍛冶滓に位置づけられる。		2段椀形滓の上段をTAG-1-1、下段をTAG-1-2と分けて検鏡を行なった。上段側を図版14の②③に示す。鉱物相は白色粒状結晶のウスタイト(wustite: FeO)と淡灰色盤状結晶のファヤライト(fayalite: 2FeO・SiO ₂)である。下段椀形滓は図版14の⑤～⑧に示す。こちらも上段側と同じウスタイト+ファヤライトの晶出であり、これに直径約60μmの明白色金属鉄粒を共伴する。鉄粒は炭素を殆んど含みフェライト(ferrite: α鉄)である。このウスタイト+ファヤライトの鉱物相を晶出する鍛冶滓は、高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類される。この場合の作業温度は、FeO-SiO ₂ 状態図から1180℃以上と推定できる。 ^(注1)	上段側の硬度は白色粒状結晶を対象として図版14の③に示した。硬度値は444Hv、448Hvが得られた。ウスタイトの文献硬度値が450～500Hvであり、 ^(注2) この下限値を若干割るものの、ウスタイトに同定できる。次に椀形滓下段の硬度は図版14の⑧に示した。淡灰色盤状結晶は638Hv、622Hvでありファヤライトに同定される。	下段側の分析結果を第51表に示す。全鉄分(Total Fe)が50.69%と高めで、砂鉄特有元素の二酸化チタン0.24% TiO ₂ 、バナジウム0.01% Vなどは低下する。また砂鉄脈石の酸化マンガン0.03% MnOも低減値を呈する。この成分系は高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類できる。鍛冶原料鉄は不純物をよく除去された精製品の搬入であったと想定される。
TAG-2 椀形鍛冶滓(極小)	平面は不整楕円形状で厚さ2.7cmの椀形滓破片である。		図版15の②③に示す。主要鉱物相は、淡灰色短柱状結晶のファヤライトに極微量のウスタイトを伴う。当鉱物相の晶出は、前述し	図版15の③に淡灰色盤状結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。値は628Hvが得られた。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は35.28%と減少してガラス質成分(SiO ₂ +Al ₂ O ₃ +CaO+MgO+K ₂ O+Na ₂ O)は52.66%と増加

	る。62.3gを測る極小品。断面割れ口は灰褐色光沢質で緻密である。		たTAG-1椀形滓：高温沸し鍛接済(1180℃)の後工程となる低温素延べ鍛冶滓に位置付ける。ファヤライトの晶出温度は、文献を援用すると800～900℃を想定した。(註3) 低温化狙いは、鉄素材の酸化目減り防止を目論んでいる。	ファヤライトの文献硬度値は600～700Hvで、その範囲に収まる。	する。前述高温沸し鍛接済(TAG-1)との鉄分低減は明瞭に表れた。砂鉄特有元素は、二酸化チタン0.34% TiO ₂ 、バナジウム0.01% Vの低下現象は鍛鍊鍛冶滓の位置付けを保持する。更に砂鉄脈石の酸化マンガン0.09% MnOの低値も後押しとなる。
TAG-3 椀形鍛冶滓(大・含鉄)	平面は円形状で椀形滓の約1/4の破片である。5.5cmと厚く、232gを測る。破面は灰褐色光沢質で緻密なのは、前述TAG-2に準ずる質感を呈する。		5.5cmと厚手椀形滓なので、厚み方向を上・中・下の3ヶ所に分けて鉱物相の観察を行った。いずれも主要鉱物相はファヤライトと微量のウスタイトだった。組織写真は中段を代表して⑤に示す。淡灰色不定形ファヤライトは徐冷されて大きく成長をみる。なお、該品は明白色の金属鉄粒を含むので、ナイトル(5%硝酸アルコール液)腐食(etch)後の組織を⑥に提示した。約0.3mm径金属鉄粒の半分近くは錆化するが残り金属鉄である。白いフェライト(ferrite：純鉄、α鉄)地に黒色層状のパーライト(pearlite)の析出組織である。炭素量をパーライトの面積比から割り出すと約0.2%前後になる。鉱物相は低温素延べ鍛鍊鍛冶滓の晶癖をもつ。	図版15の⑦は金属鉄粒の硬度測定圧痕である。白地のフェライトは101Hvで妥当な数値にとれる。⑧は大きく成長した淡灰色盤状結晶の硬度測定値は638Hv、622Hvでファヤライトに同定される。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は39.88%、ガラス質成分46.0%、砂鉄特有元素の二酸化チタン0.34% TiO ₂ 、バナジウム0.01% V、砂鉄脈石の酸化マンガン0.08% MnOなど前述TAG-2の成分系に準ずる。低温素延べ鍛鍊鍛冶滓に分類できる。
TAG-4 椀形鍛冶滓(極小)	平面は不整形円形状で、厚さ2.5cmの薄手・小型の椀形滓。ほぼ完形品で91.2gを測る。比重は低く粘土質溶融物主体で、鉄分を殆んど含まぬ特質をもつ。		図版16の②～⑤に示す。③④が代表組織である。暗黒色ガラス地に局部的にファヤライト結晶近似の鉱物相が島状に点在する。ファヤライトより低溶融側で結晶化するカリ長石+ガラスの可能性をもつ。後述硬度値で検証する。②はパーライト地に片状黒鉛痕跡を残すねずみ錆鉄らしい。ガラス主体の鉱物相は素延べの更に後工程になる火造り工程からの排出滓に想定できるが、これにねずみ錆鉄が共伴するのは理解に苦しむ。	図版16の⑤に淡灰色短柱状結晶でファヤライト近似鉱物相の硬度測定圧痕を示す。値は472Hvとファヤライトの600～700Hvレベルから大きく外れる。ファヤライトは否定されて長石類の方に傾く。X線回折と主要鉱物はガラスと大量の斜長石、カリ長石、石英から構成される。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は9.9%と低値で、ガラス質成分(SiO ₂ +Al ₂ O ₃ +CaO+MgO+K ₂ O+Na ₂ O)が84.50%と大半を占める。また、このうち酸化カルシウム(CaO)を8.0%と高め、これに鉄珪灰石の晶出は充分に考えられる。赤熱鉄素材は酸化防止の粘土汁塗布でスラグ化した排出滓、低温火造り鍛鍊鍛冶滓に分類される。滓の量の少なさにも低温作業としての整合性はとれている。後述TAG-18(近世)椀形滓とも同系。
TAG-5	上面のみが生きた小割り滓。緻密な滓破片である。製鍊炉内滓か椀形鍛冶滓の破片かの識別が分析調査の目的となる。3.9×3.1×2.8cmに小割された55.2gの滓である。		図版16の⑦⑧に示す。鉱物相は白色粒状結晶のウスタイトと淡灰色盤状結晶のファヤライト、これに微細な明白色金属鉄粒が点在する。この晶癖は高温沸し鍛接・鍛鍊鍛冶滓である。製鍊炉内滓の可能性は完全に否定できる。椀形鍛冶滓の小割された理由は、滓中に落ちこぼれた鉄粒回収にあったのだろう。	図版16の⑧に淡灰色盤状結晶の硬度測定圧痕を示す。値は598Hv、602Hvが得られて、ファヤライトに同定される。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は47.75%、ガラス質成分36.47%、砂鉄特有元素の0.26% TiO ₂ 、0.01% Vなどは前述TAG-1高温沸し鍛接・鍛鍊鍛冶滓に準じた成分系である。鉱物相と化学組成と合せて製鍊炉内滓は否定される。

小結：8世紀前半に属する田口下田尻遺跡5号住居のA型鍛冶工房の鍛冶工程は、鉄器製作時排出の鍛鍊鍛冶滓で占められる。鍛鍊鍛冶滓とは、鉱物相にウルボスピネル(Ulvöspinel：2FeO・TiO₂)を内蔵せずに、化学組成は砂鉄特有元素の二酸化チタン：<1.0% TiO₂、バナジウム：<0.1% V、脈石の酸化マンガン：<0.10%程度の範囲を目安とする。また、鍛鍊鍛冶は(i)高温沸し鍛接：鉱物相ウスタイト+ファヤライト(TAG-1、5)、→(ii)低温素延べ：鉱物相ファヤライト+ガラス(TAG-2、3)、(iii)低温火造り：鉱物相ガラス+長石類(TAG-4)の3工程に細分化できる。

砂鉄原料の箱形炉で製鍊された鍛冶原料鉄は、製鉄炉近傍で粗鉄の除滓や成分調整を目的とする精鍊鍛冶を済ませ、搬入された精製品であった。椀形滓が小型化したものが多く出土したのは、製作鉄器が比較的小物(例えば刀子)に集中した為であろう。

3-2. 田口上田尻遺跡84号住居出土品(B型8世紀後半)

	肉眼観察	マクロ組織	顕微鏡組織	ピッカース断面硬度	化学組成分析
TAG-6 椀形鍛冶滓(特大・含鉄)	平面は不整形円形状で、厚さ5.3cm、1200g強の完形大型椀形滓である。滓質は緻密で鉄銹を滲ませた含鉄滓。		1200g強の大型椀形滓なので内部偏析を確認する目的から長軸端部から内側約1/3までを切出して供試材とした。これを2分割(6-1、6-2)とした埋込み試料からの観察である。図版17の①～⑧に示す。6-1(端部寄り)の主要鉱物相は②にみられる淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネル(Ulvöspinel：2FeO・TiO ₂)と少量の白色粒状結晶のウスタイト、これに不定形明白色の金属鉄粒などで構成される。また、6-2の代表鉱物相は⑦に示したウスタイト(粒内Fe-Ti析出物)と、共伴して、ウルボスピネル結晶を晶出し、砂鉄特有元素由来のチタン鉱物を内蔵する。④はこのウルボスピネルとウスタイト結晶をナイトル腐食(etch)して、その挙動をみた処、前者は酸に侵され	図版17の⑤に淡茶褐色多角形結晶の硬度測定圧痕を示す。値は803Hvと非常に硬質で、酸(エッチング液)にも侵されない強韌さを保つ結晶であることを証明した。次に⑧の左側は白色粒状結晶で粒内微細析出物をもつ粒子の硬度測定結果は555Hv、右側の淡茶褐色多角形結晶は782Hvを得た。前者はウスタイト、後者はウルボスピネルと同定して大過なろう。但し、ウスタイトの文献硬度値の450	第51表に示す。ここで精鍊鍛冶滓の成分系が確実に押えられた。鍛冶滓であり、全鉄分(Total Fe)は50%台に届く高値である。注目すべきは砂鉄特有成分は高く、4.55% TiO ₂ 、0.20% V、これに砂鉄脈石の0.31% MnOなど鍛鍊鍛冶滓の数値とは1桁上回る。群馬県下の砂鉄製鍊滓の二酸化チタン(TiO ₂)レベルの約1/3以下の落下が精鍊鍛冶滓の位置付けとなる。

			ず、後者のウスタイトのみ結晶に変化を来たず。ウルボスピネル(2FeO・TiO ₂)結晶の強靱さが窺われた。次に明白色の金属鉄粒はエッチングにより③にみられる白地フェライト(ferrite: 純鉄、α鉄)と判明した。	～500Hvの上限を大幅に超えるのは、粒内微細Fe-Ti析出物を含むが故の値と理解している。	
TAG-7 椀形鍛冶滓(大・含鉄)	平面が不整楕円形状で厚さ4.6cm、842g弱を測り、2段気味の椀形鍛冶滓のほぼ完形品である。滓質は緻密で比重は高く、鉄錆を滲み出す。	図版18の②③に示す。4.6cmの厚みがあるので、上・中・下の3視野の組織を撮影したが、あまり差異がなかった为上段を代表組織として提示した。鉱物相は淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルが、白色粒状結晶のウスタイト(粒内Fe-Ti析出物)と共存する。精錬鍛冶滓の晶癖である。	図版18の③とウルボスピネル結晶の硬度測定の際の圧痕を示す。値は718Hvと硬質で、ウルボスピネルに同定される。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)49.40%、ガラス質成分28.40%、砂鉄特有元素3.08% TiO ₂ 、0.19% Vを含み、酸化マンガン0.2% MnO組成からこちらも精錬鍛冶滓に分類される。前述TAG-6椀形滓よりも砂鉄脈石成分が低下するのは、粗鉄の表皮スラグ付着量のバラツキに起因する。	
TAG-8 椀形鍛冶滓(中・含鉄)	平面が不整楕円形状で、厚さ3.0cmと若干薄くなる中型椀形鍛冶滓のほぼ完形品。色調は黒褐色で、質感は緻密質、比重は高い。鉄錆の滲み出しは前述滓のTAG-6、7に準ずる。	図版18の⑤～⑧に示す。主要鉱物相を⑤⑥に示す。白色粒状結晶のウスタイトと淡灰色短柱状結晶のファヤライト、これに明白色の金属鉄から構成される。但し、ウスタイト粒内には微細な茶褐色Fe-Ti析出物を点在させる。チタン濃度の低下した精錬鍛冶滓の晶癖である。前述TAG-6、7は独立ウルボスピネル多角形結晶を析出した精錬鍛冶前段階の排出滓とすると、該品は後半段階で砂鉄脈石成分は低減された排出滓となる。一方、明白色金属鉄の腐食組織は、⑧で見られる様に、白色フェライト地に少量の黒色層状パーライトを析出した低炭素域(0.15% C)の組織であった。	図版18の⑦⑧に低炭素域金属鉄を対象とした2ヶ所の硬度測定の際の圧痕を示す。値は両方共102Hvに収まった。炭素量からみて妥当な数値であった。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は55.69%に対して、ガラス質成分22.61%を含み、砂鉄特有元素は、二酸化チタン1.8% TiO ₂ 、バナジウム0.15% V、砂鉄脈石の酸化マンガン0.11% MnOと、前述TAG-6、7に比べて漸次低下してゆく。鍛冶滓鉱物相に現われたウルボスピネル独立結晶は、チタン濃度の低減と共に消失し、残留チタンはウスタイト粒内に留まる結果となった。	
TAG-9 椀形鍛冶滓(中・含鉄)	平面は不定形状で厚み5.4cm、330g弱の椀形滓破片。残存金属鉄は多く、鉄錆を滲ませ、メタル度はL(●)を残す。滓質は緻密で、一見炉内滓らしくも見えるので、これを見極める為の供試品となった。	図版25の上段に示す。断面は白色粒状結晶の滓に囲まれて約1.8×1.4cmの明白色金属鉄片を遺存する。鍛錬鍛冶作業中の落下鉄片であろう。	図版19の②に主要鉱物相を示す。白色粒状結晶はウスタイトで、粒内にFe-Ti析出物は認められない。高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓であり、炉内滓(製錬)は否定される。③は金属鉄部のナイトル腐食(etch)後の組織である。白色フェライト地に黒色層状のパーライトが析出し、0.2% C前後の軟鉄と判明した。	図版19の③にフェライト・パーライト組織の硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は138Hv、137Hvの2点のバラツキが少ない結果が得られた。硬度値は炭素量に対応した妥当な数値であった。	第51表に示す。化学組成からも鍛錬鍛冶滓を証明される。すなわち全鉄分(Total Fe)は52.33%と高く、ガラス質成分は21.81%を含む。砂鉄特有元素は低下して、二酸化チタン0.76% TiO ₂ 、バナジウム0.06% Vのレベルは前述TAG-6、7、8の精錬鍛冶から鍛錬鍛冶への移行・継続操業の排出滓として評価できる。
TAG-10 椀形鍛冶滓(小・含鉄)	平面が不整楕円形状を呈する200g弱の小型椀形鍛冶滓のほぼ完形品である。厚さは2.5cmと薄手で、色調は黒褐色、滓質は緻密で比重は高い。鉄錆の滲み出しは少ない。上面右側には炉床土を厚く付着する。この位置から顕微鏡試料は採取している。	図版19の⑤～⑧に示す。厚み方向で偏析をもつ滓である。⑤は上面炉床土側の暗黒色ガラス主体の鉱物相である。この中に楕円形状の錆化鉄粒を残す。鉄粒内部の大部分は錆化消滅し、大きく空洞化する。この鉄粒は輪郭線のみは明瞭で、一部に片状黒鉛らしき痕跡を留めるが定かでない。⑥は淡灰色長柱状結晶のファヤライト域があり、更にその下部に⑦にみられる白色粒状結晶のウスタイト域である。ウスタイト粒内にはFe-Ti析出物は認められない。高温沸し鍛接から低炭素延べへと両方に拘わる排出滓にもみえるが化学組成で結論を出したい。	図版19の⑧に硬度測定の際の圧痕を示す。ウスタイトとファヤライトの境界域で1枚に両者の測定結果を提示した。白色粒状結晶のウスタイトは460Hv、449Hvを呈し、淡灰色盤状結晶のファヤライトは633Hv、663Hvの結果を得た。両者は各鉱物相を実証する値を示している。	第51表に示す。分析試料は上面炉床土付着から外れた位置となる。全鉄分(Total Fe)は57.70%と高めで、ガラス質成分22.83%を含む。砂鉄特有元素の二酸化チタン0.18% TiO ₂ 、バナジウム0.01% Vと低下して、酸化マンガン0.03% MnOと脈石成分は極低値となる。化学組成レベルは高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類される。しかし、鉱物相はウスタイト以外にガラスやファヤライトの低温域鉱物が晶出し、乖離現象をみるところとなった。低温鉱物相側は2次付着物とすると、本来はやはり高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に位置付けられよう。	
TAG-11 椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	平面が不整楕円形状で厚み2.3cm、重量が98gの極小椀形鍛冶滓のほぼ完形品である。色調は黒褐色、滓質は気孔が多発しながら比重は高め傾向にある。内部からの錆の滲み出しがみられる。	図版20の②～⑨に示す。厚みが2.3cmと薄手ながら組織に偏析をもつので上・中・下段に分けて鉱物相の観察を行った。②③は上段組織を示す。ガラス地にファヤライトと超微粒子のウスタイトを晶出する中に灰白色の鉄錆化合物(goethite: α-FeO(OH))が点在する。④⑤は中段の主要鉱物でウスタイト凝集で占められる。粒内Fe-Ti析出物は認められない。⑥⑦は椀形滓底部相当の下段域である。暗黒色ガラス地に不定形ファヤライトの晶出となる。当鉄滓は高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類される。	図版20の⑧は白色粒状結晶のウスタイトの測定圧痕を示す。硬度値は442Hv、446Hvでウスタイト判定に問題はない。⑨は淡灰色長柱状結晶でファヤライトで618Hv、603Hvの数値は妥当である。	第51表に示す。鉱物相に偏析をもつ所が全鉄分(Total Fe)は45.03%と若干低下して、ガラス質成分は33.76%と僅かに増加する。砂鉄特有元素の二酸化チタン0.24% TiO ₂ 、バナジウム0.01% Vは減少し、酸化マンガン0.05% MnOも同調する。砂鉄脈石動向からも高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓の分類で大過なからう。	

小結：8世紀後半に属する田口上田尻遺跡のB型鍛冶工房(84号住居)から出土した6点(TAG-6～11)の大型系椀形滓を調査した。大別すると大(840～1200g)・中上(400g)が徐滓・成分調整目的の精錬鍛冶滓(鉱物相：ウスタイト(粒内Fe-Ti析出物)+ウルボスピネル(Ulvöspinel: 2FeO・TiO₂)+ファヤライト、化学組成: 1.8～4.55% TiO₂、0.15～0.20% V、0.11～0.31% MnO)、中下(320g前後)、小(200g以下)が高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓(鉱物相：ウスタイト(粒内Fe-Ti析出物なし)+ファヤライト、化学組成: <0.70% TiO₂、<0.06% V、<0.05% MnO)に分類できた。

因にこの時期の群馬県地域では菅ノ沢型の堅型炉操業が想定されている。鍛冶原料鉄は先ず製鉄炉近傍で小割されて、これが鍛冶工房へ搬入された可能性をもつ。鍛冶工房ではこの粗鉄の除滓・成分調整を施す精錬鍛冶を経て、鍛錬鍛冶工程へと展開したと考えられる。

3-3. 田口下田尻遺跡45号住居出土品(C-1型10世紀)

	肉眼観察	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	化学組成分析
TAG-12 椀形鍛冶滓(中・含鉄)	平面は不整菱形状を呈し、厚さ3.0cm、277gの中型椀形鍛冶滓の約4/5残存品。色調は青黒色、滓質は緻密で比重は高い。		図版21の②③に示す。鉱物相は厚み方向の上・中・下で差異がなく、代表組織を中段の③に提示した。組織は白色粒状結晶のウスタイトが大きく成長して凝集する。粒内にはFe-Ti析出物は共存しない。また、②の明白色粒は金属鉄にみえたが、ナイタルエッチで変化なく、既に酸化を受けた疑似メタルであった。恐らくフェライト粒であったろう。以上の晶癖は銑鉄の酸化脱炭処理、いわゆる「下げ」滓に判別できる。鍛冶原料鉄は多様化し、銑鉄の流通も活発になった証であろう。背景には自立炉操業があり小口銑の入手は容易になった感がある。	図版21の③に肥大化したウスタイトの硬度測定の際の圧痕を示す。硬度値は484Hv、496Hvとウスタイト文献硬度値の範疇に収まった。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)が63.03%と多くて、ガラス質成分は16.77%と低減される。更に脈石成分も大きく低下して0.12% TiO ₂ 、0.01% V、0.03% MnOは鍛冶原料鉄の高純度が表れる。「下げ」滓に位置づけられる。
TAG-13 椀形鍛冶滓(小・含鉄)	平面が不整三角形状を呈し、厚さ2.7cm、重量が130gを測る小型椀形鍛冶滓の約2/3断片。色調は黒褐色、滓質は気泡を発生し、やや粗であるが比重は比較的高い。		図版21の④-⑧に示す。④は顕微鏡埋込み試料の断面全体像のマクロ組織代替写真である。中央上部に点線で囲った長方形断面(10×6mm)未溶融融器である。故鉄(スクラップ)充当の鍛冶原料鉄残存の可能性をもつ。⑤⑥はこの鉄器片の顕微鏡組織を提示した。金属組織の痕跡は消滅し、ゲーサイト(goethite: α-FeO(OH))からの輪郭である。それでも貴重な情報と評価できる。鉄器を取り囲む鉱物相はウスタイトとファヤライトである。当組織は高温沸し鍛接の温度条件に近い作業が想定できる。	図版21の⑦に白色粒状結晶ウスタイトの硬度測定の際の圧痕を示す。値は440Hvでウスタイトの文献硬度値の下限を僅かに割るがウスタイトに同定できる。⑧は共存鉱物相で、淡灰色長柱状結晶のファヤライトである。こちら588Hv、597Hvとファヤライト文献硬度値を少し下回るがファヤライトで大過なからう。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は55.32%と高めで、ガラス質成分24.83%を含む。砂鉄特有元素の二酸化チタン0.16% TiO ₂ 、バナジウム0.01% V、砂鉄脈石の酸化マンガン0.03%など不純物は少なく、故鉄(スクラップ)処理鍛冶滓として問題のない成分値である。
TAG-14 椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	平面は楕円形状を呈し、1.8cmと薄手の椀形鍛冶滓の約1/2破片で、重量は69gの極小品である。破面は気孔を発生し、滓質は粗で、金属鉄を内蔵する。放射割れが激しく、鉄銹を滲ませる。		図版22の②③に示す。鉱物相は②にみるように白色粒状組織のウスタイトが凝集晶出し、隣合せに金属鉄と接する。金属鉄のナイタル腐食(etch)組織は、黒色層状パーライト地に針状初析セメントサイトを析出した過共析鋼(0.77% C)である。刃鋼素材で刀子当りの心鉄準備の鍛冶であろう。金属鉄には銹化による黒点のガス抜け孔が多発する。銑鉄からの酸化脱炭工程の排出滓の可能性を指摘しておく。	図版22の③に金属鉄の硬度測定の際の圧痕を示す。左側の黒色層状組織は282Hv、右手の白色針状組織は304Hvと幾分硬化する。前者はパーライト地、後者は針状セメントサイトが関与し、組織に見合った値となる。硬度値は組織に見合った結果であった。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は55.0%と高めで、ガラス質成分はやや低めをとる。更に砂鉄特有元素の二酸化チタン0.15% TiO ₂ 、バナジウム(V)0.01% V、砂鉄脈石の酸化マンガン0.03%など極低値となり、「下げ」脱炭処理滓としての整合性がとれる。極小滓の排出量の少なさも、高純度銑が素材であれば理に合った分量である。

小結：10世紀後半代に比定される田口下田尻遺跡C-1型鍛冶工房(45号住居)から出土した3点(TAG-12～14)の中・小・極小(277～69g)の椀形鍛冶滓を調査した。この時期になると菅ノ沢型縦形炉は衰退し、製錬は官営から離れて小型自立炉操業となる。素材不足で故鉄再利用の動向も明瞭となる。例えばTAG-12、14椀形滓は銑鉄(鍋・釜類)の酸化脱炭の「下げ」処理と推定がつく。両者の鉱物相は凝集ウスタイトを晶出し、化学組成も砂鉄特有元素は0.15% TiO₂、0.01% V、砂鉄脈石0.03% MnOなど高純度素材なので極小値を呈する。当然排出量は少量化する。また、TAG-13は廢鉄器片(16×10mm断面)が未溶融のまま取り残されていた。前述した8世紀代の鍛冶原料鉄は製鉄遺跡(精錬を含む)に直結していたのに対し、10世紀代には鉄材は潤滑気味で、廢鉄器再生鍛冶が当然の如く顔を出す。

3-4 田口上田尻遺跡118号住居出土品(C-2型10世紀後半)

	肉眼観察	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	化学組成分析
TAG-15 椀形鍛冶滓(中・含鉄)	平面が不整楕円形状で、厚み3.0cmの椀形鍛冶滓。350gを測る中型完形滓である。色調は黒褐色、滓質はやや粗であるが鉄を内蔵し、比重は高い。上面は平滑で垂れを生ずる高熱作業が窺われる。	図版25の下部に示す。断面は白色粒状結晶に囲まれて、7×4mmの明白色金属鉄を遺存する。金属鉄中央には逆三角形の銹化穴を残すが、その周りのメタル部分は比較してより脱炭反応は進行してガス抜け孔は多くなる。一方、下半分は滓化域で、銑鉄の酸化脱炭反応で	図版22の⑤-⑧に示す。⑤は「下げ」脱炭の特徴ある組織を捉えた。上半分はナイタル腐食(etch)で現れた金属鉄部分である。炭素量は極低炭素域(<0.15% C)まで脱炭された素地に(H ₂)ガス抜け孔を多発する。前述TAG-14椀形滓中金属鉄(過共析域)に比較してより脱炭反応は進行してガス抜け孔は多くなる。一方、下半分は滓化域で、銑鉄の酸化脱炭反応で	"図版22の⑥は金属鉄組織で最も脱炭の進んだフェライト(ferrite:純鉄、α鉄)地の硬度測定の際の圧痕である。白いフェライト地に黒く細い網目状の結晶粒界域は2点の測定値があり、上部は80.2Hv、下右手寄りには84.9Hvを呈した。完全脱炭を受けた純鉄に近く軟質で妥当な値となる。因にフェライト地に残された水素ガス抜け孔は、150μm径が測定される。下げ(左下作業)実験に記載されている「直径φ0.2-2.0mmの針で突いたような穴が点在」(註4)と矛盾するものではない。次に⑦の中央上側は、黒色針状組織の硬度圧痕である。値は128Hvと比較的に軟質で、ベイナイト(bainite:微細なフェライト地に更に小さなセメントサイトが分散している組織)に同定される。また、左下寄りには白く羽毛状のフェライト部分は、140Hvが得られた。⑦領域は低硬度値で、炭素量は0.15%以下程度まで脱炭された「下げ鉄」と評価できる。最後に⑧は白色粒状結晶の硬度測定の際の2点の圧痕を示す。値は470Hvと457Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の450-500Hvの範疇に収まり、ウスタイトが同定される。「下げ」処理の鉱物相として問題のない硬度値である。図版22の⑥は金属鉄組織で最も脱炭の進んだフェライト(ferrite:純鉄、α鉄)地の硬度測定の際の圧痕である。白いフェライト地に黒く細い網目状の結晶粒界域は2点の測定値があり、上部は80.2Hv、下右手寄りには84.9Hvを呈した。完全脱炭を受けた純鉄に近く軟質で妥当な値となる。因にフェライト地に残された水素ガス抜け孔は、150μm径が測定される。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は52.08%と高めである。砂鉄特有元素は二酸化チタン0.40% TiO ₂ 、バナジウム0.02% V、砂鉄脈石酸化マンガン0.05% MnOなど低値で「下げ」滓としての成分傾向を表す。

		「げ」脱炭処理が読み取れる。	、大量の凝集ウスタイトの晶出となる。	下げ(左下作業)実験に記載されている「直径φ0.2～2.0mmの針で突いたような穴が点在」 ^(註4) と矛盾するものではない。		
	肉眼観察	マクロ組織	顕微鏡組織		ピッカース断面硬度	化学組成分析
TAG-16 椀形鍛冶滓(小)	平面が不整五角形を呈し、2.2cm厚みの小型椀形鍛冶滓のほぼ完形品である。色調は黒褐色、滓質は気泡多くやや粗で比重は低めとなり、金属鉄は殆んど含まない。		図版23の②③に示す。白色粒状結晶のウスタイト(粒内析出物なし)と淡灰色柱状結晶のファヤライトの2層分れの不均等な晶出滓である。鍛冶炉内で作業温度のバラツキがみられる。一方、化学組成と合わせてみて鉄分低下傾向からみて、低温素延べ狙いの鍛冶であった可能性をもつ。何れにしる鍛錬鍛冶の晶癖といえる。		図版23の③に2点の硬度測定値を示す。上側の淡灰色盤状結晶は、640Hvからファヤライト、下側の白色粒状結晶は542Hvを呈した。ウスタイト文献硬度値の上限範囲から外れて、マグネタイト(magnetite: Fe ₃ O ₄)の可能性をみせる値となった。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は46.76%と若干低下気味である。砂鉄特有元素の二酸化チタン0.77% TiO ₂ 、バナジウム0.04% V、砂鉄脈石の酸化マンガ0.08% Mnなど幾分上向き傾向を呈する。鍛冶原料鉄はやや徐滓の悪い粗鉄(低品位鉄材)からの鉄器製作が想定される。
TAG-17 椀形鍛冶滓(小・含鉄)	平面が不定形状を呈し、2.3cm厚みの椀形鍛冶滓で、約1/2以下の破片である。滓質は気泡多くやや粗気味で、金属鉄を含むのか内面から鉄錆が滲み出し、比重も高めにある。		図版23の⑤-⑧に示す。鉱物相はウスタイトが局部的に凝集肥大化した部分と、細粒部分の混在である。この粒間に淡灰色盤状結晶のファヤライトが晶出する。また④の埋込み試料全体像にみられる明白な金属が散った状態に点在する。⑧の金属鉄組織はその拡大で、白いフェライト地に僅かに黒く層状のパーライトが析出する。炭素量は0.1%以下の極軟鋼であった。何れにしる作業温度にムラをもつ高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類できる。		図版23の⑥は肥大ウスタイトに2点の硬度測定を行った。硬度値は2点共に474Hvと安定する。また、⑦の並サイズのウスタイトは464Hvに収まった。⑧は金属鉄組織のフェライト地に微量パーライト析出の極軟鋼の硬度圧痕である。値は91.0Hv、94.0Hvと軟らかく、結晶粒は少し歪んで乱れをもつ細粒であり、妥当な数値と判断できる。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は53.16%とやや高めで、ガラス質成分は27.7%を含む。砂鉄特有元素の二酸化チタン0.46% TiO ₂ 、バナジウム0.03% V、砂鉄脈石の酸化マンガ0.05% Mnなどは高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓成分で大過ない。

小結：10世紀後半に比定される田口上田尻遺跡118号住居から出土した3点の中・小型椀形鍛冶滓(350～82g)の分析調査を行った。ここでも中型椀形鍛冶滓(TAG-15)に残存した金属鉄組織には、鉄鉄からの「下げ」脱炭を証明するガス抜け孔が検出できた。他2点(TAG-16、17)の小型滓は、低品位粗鉄からの高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓である。ウスタイト粒サイズの乱れ、ウスタイトとファヤライトの2層分れなどみると、鉄器片の残留は認められないが、廃鉄器処理鍛冶の存在は無視できないと考える。以上の結果は前述田口下田尻遺跡のC-1型鍛冶工房と大差ない鍛冶作業が想定できる。

3-5. 上田尻遺跡屋敷周辺遺構外出土品(近世)

	肉眼観察	マクロ組織	顕微鏡組織	ピッカース断面硬度	化学組成分析
TAG-18 椀形鍛冶滓(中・含鉄)	平面が不整楕円形状2.5cm厚み中型椀形鍛冶滓。332gを測る遺存度2/3の断片である。色調は黒褐色ながら粗で比重の低い粘土質溶融物主体の椀形滓である。近世椀形滓の典型的な形態を留めると発言しても過言ではなからう。		図版24の②～⑨に示す。肉眼観察で粘土質溶融物主体と明記したように、全体が暗黒色ガラス質スラグで占められて、鉄酸化物は極めて微量に留まる。②～④は椀形滓表面の局部に晶出した島状ウスタイトを示す。また⑤～⑦は粘土中に自然混入した砂鉄粒子が被熱されて半還元状態で結晶化する。この様相は当ガラス質スラグが赤熱鉄素材の表面に酸化防止目的から塗布された粘土汁由来であったことを裏付ける。素材目減りを目論んで低温加熱から鉄酸化物の固溶は少ない。粘土汁溶融ガラスが鍛冶炉の炉底に堆積集成されたガラス質椀形滓である。板状や棒状の半製品の鍛冶原料鉄が豊富に流通する背景があつての低温ガラス質滓の存在といえる。高温沸し鍛接の工程省略の利点をもつ。	図版24の⑧にガラス質溶融物中に晶出した、ウスタイト結晶の硬度圧痕を示す。値は499Hvとウスタイト文献硬度値の範囲に収まる。また、⑨は半還元砂鉄粒子の圧痕で、602Hvの値が得られた。磁鉄鉱石の文献硬度値は530～600Hvである。(注5) 上限を僅かに越えるが、砂鉄磁鉄鉱粒子のマグネタイト(magnetite: Fe ₃ O ₄)粒子に同定できる。	第51表に示す。全鉄分(Total Fe)は6%留りで、ガラス質成分(SiO ₂ +Al ₂ O ₃ +CaO+MgO+K ₂ O+Na ₂ O)が90%を占める滓である。肉眼観察、検鏡結果及び化学分析結果はよく整合性がとれる。砂鉄特有元素の二酸化チタン0.62% TiO ₂ 、バナジウム0.02% V、砂鉄脈石酸化マンガ0.12% Mnなども粘土汁混入砂鉄を考慮して矛盾はなからう。成分組成からも低温火造り鍛錬鍛冶滓に分類される。

小結：近世に属する田口上田尻遺跡の屋敷周辺遺構外から出土した椀形鍛冶滓の滓質は、粗で比重の低い粘土質溶融物である。鉱物相は鉄酸化物のウスタイト(FeO)やファヤライト(2FeO・SiO₂)の少ないガラス(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)である。化学組成は当然ガラス質成分が90%を占めて、鉄分(Total Fe)6%留りの組成となる。前述TAG-4極小椀形滓の組成に近似する。この種のガラス分主体の椀形鍛冶滓は鍛冶原料鉄に前工程を必要としない棒や板状半製品が十分に流通していた材料事情に由来する。この時期の鍛冶原料鉄は群馬県地域以外のたたら産割鉄(庖丁鉄)の可能性をもつ。酸化目減り防止を目論んで低温(800℃前後)素延べ火造り時粘土汁が素材表面に塗布されて、溶融ガラス化した排出滓である。この特徴あるガラス質椀形鍛冶滓は、作業内容を如実に表わす。木炭消費の少ない低コスト鍛冶である。

まとめ

田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡の鍛冶工房から出土した、8世紀代から近世までの18点の椀形鍛冶滓についての分

析調査を行った。個々のまとめを第52表に示す。椀形鍛冶滓の鉱物相と化学組成は、鍛冶工程(精錬鍛冶→鍛錬鍛冶(高温沸し鍛接、低温素延、火造)の進行に伴ない、鍛冶原料鉄がもつ砂鉄脈石(TiO_2 、V、MnO)の濃度を漸次薄めてゆく。例えば TiO_2 は製錬滓7.0%、→精錬鍛冶滓1.8～4.6%、→鍛錬鍛冶滓(高温沸し鍛接0.24～0.77%、低温素延0.34%、火造0.57～0.62%、若干の上昇は粘土汁混入砂鉄の影響)と明瞭な傾向を呈する。一方、鉱物相はウルボスピネル(Ulvöspinel： $2FeO \cdot TiO_2$)の挙動が一つの目安となり、製錬滓や精錬鍛冶滓に表れたものが、鍛錬鍛冶滓では晶出しなくなる。この砂鉄脈石の濃度低減化傾向は、各地域の賦存砂鉄成分に律せられる。今度は群馬県地域での鍛冶工房を対象として一つの模式図が図版26に提示できた。当地域の製鉄操業は箱形炉から竪形炉、更には自立炉へと展開された背景が窺える。

最後に注目しておきたいのは、10世紀後半代の鍛冶内容である。官営製鉄離脱からの私的製鉄への転換からか鍛冶原料鉄は多様化現象を招く。勿論8世紀代と同様に製鉄から精錬鍛冶を経たものの原料鉄(鋳状が大量か)はあるものの、これに加えて、銑鉄の「下げ脱炭」や故鉄(スクラップ)再生鍛冶が椀形鍛冶滓の鉱物相から抽出できた。また、近世になると在地铁生産は廃れて、たたら場からの割鉄(庖丁鉄)が流通した節が鉱物相(低温火造)から解き明かされた。江戸時代の特異な軽質ガラス状椀形滓の存在理由は、鍛冶原料鉄が半製品化したところに位置づけられる。

注

(1) 『鉄鋼便覧』第3版 巻1巻(1981) 丸善 P48

(2) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968.

ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン(Ti)を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ(Al)が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

(3) ファヤライトの低温安定に関する実験論文と筆者(大澤)はホーロー焼成実験の体験から割り出した推定温度である。

(3)-1 Womes.D.R.and Gilbert.M.C (1969) The fayalite—magnetite—quartz assemblage between 600° and 800°C American Journal of Science.Schairer Vol.267—A.p.480—488

水熱反応実験で600° のファヤライト生成を示す。

(3)-2 O'Neill. H.Si.C. (1987) Quartz—Fayarite—iron and quartz—fayarite—magnetite equilibria and the frce energy of formation of fayalite (Fe_2SiO_4) and magnetite (Fe_3O_4) . American Mineralogist. Vol.72.p.67—75.

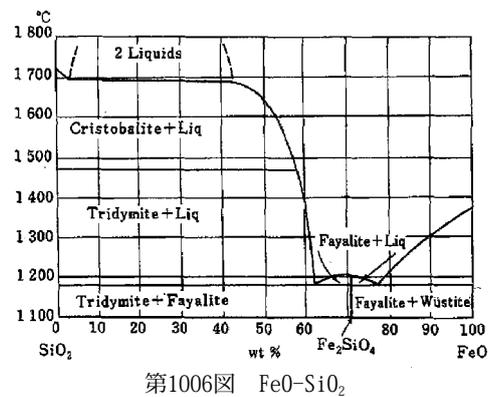
電気化学反応で1000K (700°C)前後のファヤライト生成を確認。

(3)-3 Roedder.E (1952) A reconnaissance of liquidus relations in the system $K_2O \cdot 2SiO_2 - FeO - SiO_2$. Amer.Jour.Science. Bowen Volume. P435—456

金属鉄と平衡する条件で、800°Cまでファヤライト生成が「推定」されている。(カリの存在でファヤライトの生成温度が低下する)

(4) 加藤恵之他「大鍛冶場」工程における脱炭反応に関する二三の考察『鉄と鋼』Vol.9 No.1

(5) 大澤正己・鈴木瑞穂「西野原遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『西野原遺跡(5)(7)』—飛鳥・平安時代編—(群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第489集 2010



第50表 供試材の履歴と調査項目

符号	地区名	遺構名	構成番号	遺物種類	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目					備考	
						大きさ(mm)	重量(g)			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース面硬度	X線回折	EPMA		化学分析
TAG-1	I区	A型鍛冶工房(5号住居)	70	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	8世紀前半	87×87×39	264.7	4	錆化(△)	○						第495図-7
TAG-2	I区	A型鍛冶工房(5号住居)	72	楕形鍛冶滓(極小)	8世紀前半	54×40×27	62.3	1	なし	○						第495図-9
TAG-3	I区	A型の排滓場(1号排滓)	90	楕形鍛冶滓(大、含鉄)	8世紀前半	56×76×55	231.8	1	錆化(△)	○						第741図-36
TAG-4	I区	A型の排滓場(1号排滓)	99	楕形鍛冶滓(極小)	8世紀前半	65×69×25	91.2	3	なし	○						第741図-45
TAG-5	I区	A型の排滓場(1号排滓)	117	小割された滓	8世紀前半	39×31×28	55.2	1	なし	○						第742図-63
TAG-6	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	7	楕形鍛冶滓(特大、含鉄)	8世紀後半	143×151×53	1204.3	3	M(◎)	○						第364図-25
TAG-7	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	11	楕形鍛冶滓(大、含鉄)	8世紀後半	134×109×46	841.8	4	H(○)	○						第364図-29
TAG-8	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	20	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	8世紀後半	112×95×30	398.1	5	H(○)	○						第365図-38
TAG-9	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	21	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	8世紀後半	95×62×54	329.4	5	L(●)	○						第365図-39
TAG-10	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	26	楕形鍛冶滓(小、含鉄)	8世紀後半	83×75×25	198.6	3	錆化(△)	○						第365図-44
TAG-11	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	33	楕形鍛冶滓(極小、含鉄)	8世紀後半	77×60×23	98.1	3	錆化(△)	○						第365図-31
TAG-12	II区	C-1型鍛冶工房(II区45号住居)	177	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	10世紀後半	84×78×30	276.5	4	H(○)	○						第582図-25
TAG-13	II区	C-1型鍛冶工房(II区45号住居)	178	楕形鍛冶滓(小、含鉄)	10世紀後半	70×70×27	140.1	4	H(○)	○						第582図-26
TAG-14	II区	C-1型鍛冶工房(II区45号住居)	180	楕形鍛冶滓(極小、含鉄)	10世紀後半	49×60×18	68.7	3	錆化(△)	○						第582図-28
TAG-15	VI区	C-2型鍛冶工房(VI区118号住居)	52	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	10世紀後半	109×91×30	350.4	4	L(●)	○						第401図-9
TAG-16	VI区	C-2型鍛冶工房(VI区118号住居)	55	楕形鍛冶滓(小)	10世紀後半	59×61×22	81.9	2	なし	○						第401図-12
TAG-17	VI区	C-2型鍛冶工房(VI区118号住居)	56	楕形鍛冶滓(小、含鉄)	10世紀後半	53×63×23	96.2	2	錆化(△)	○						第401図-13
TAG-18	VI区	D型鍛冶工房(IV区遺構外)	69	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	近世	184×121×25	331.9	2	なし	○						第995図-58

第51表 供試材の組成

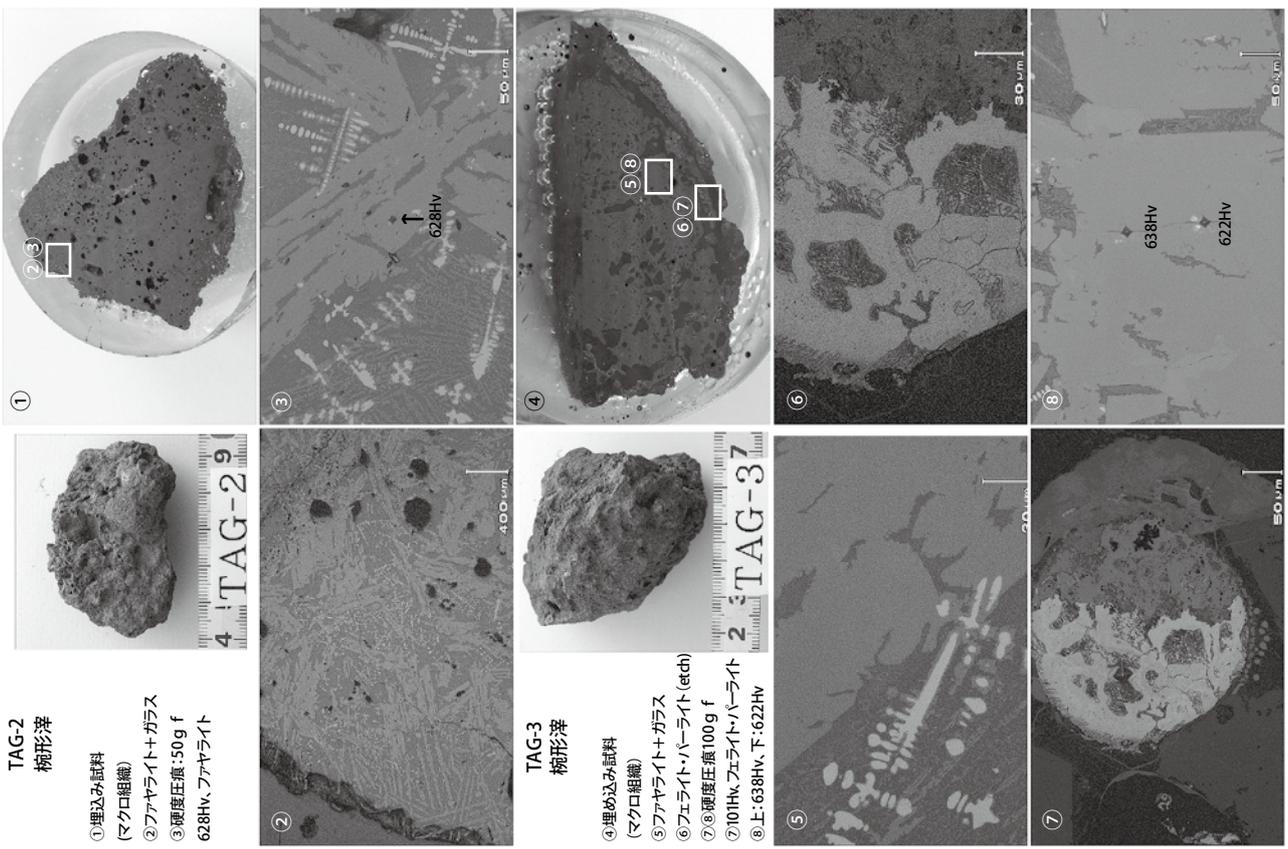
符号	地区名	遺構名	遺物種類	推定年代	全鉄分 Total Fe	金属鉄 Metal I-ic Fe	酸化第1鉄 FeO	酸化第2鉄 Fe ₂ O ₃	二酸化珪素 SiO ₂	酸アルミニウム Al ₂ O ₃	酸カルシウム CaO	酸化マグネシウム MgO	酸化カリウム K ₂ O	酸化ナトリウム Na ₂ O	酸化マンガン MnO	二酸化チタン TiO ₂	酸化クロム Cr ₂ O ₃	硫黄 S	五酸化燐 P ₂ O ₅	炭素 C	ハフニウム V	銅 Cu	一酸化ジルコニウム ZrO ₂	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	注
TAG-1	I区	A型鍛冶工房(5号住居)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	8世紀前半	50.69	0.12	49.51	17.28	19.31	5.48	2.66	0.95	0.85	0.87	0.03	0.24	0.02	0.02	0.20	0.09	0.01	<0.01	<0.01	30.12	0.594	0.005	
TAG-2	I区	A型鍛冶工房(5号住居)	楕形鍛冶滓(極小)	8世紀前半	35.28	0.11	41.96	3.65	31.43	9.13	5.97	2.81	2.08	1.24	0.09	0.34	0.02	0.03	0.20	0.05	0.01	<0.01	<0.01	52.66	1.493	0.010	
TAG-3	I区	A型の排滓場(1号排滓)	楕形鍛冶滓(大、含鉄)	8世紀前半	39.88	0.08	44.84	7.07	29.78	8.59	3.38	1.69	1.52	1.01	0.08	0.34	0.04	0.03	0.12	0.05	0.01	<0.01	<0.01	45.97	1.153	0.009	
TAG-4	I区	A型の排滓場(1号排滓)	楕形鍛冶滓(極小)	8世紀前半	9.90	0.14	3.23	10.37	52.76	15.22	8.00	3.18	3.03	2.31	0.15	0.57	0.01	0.01	0.29	0.06	0.02	<0.01	<0.01	84.50	8.535	0.038	
TAG-5	I区	A型の排滓場(1号排滓)	小割された滓	8世紀後半	47.75	0.51	52.88	8.77	22.43	6.44	3.79	1.39	1.53	0.89	0.05	0.26	0.02	0.05	0.21	0.05	0.01	0.03	<0.01	36.47	0.764	0.005	
TAG-6	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(特大、含鉄)	8世紀後半	49.73	0.65	37.00	29.05	12.98	4.79	2.34	2.26	0.64	0.28	0.31	4.55	0.03	0.05	0.31	0.18	0.20	<0.01	<0.01	23.29	0.468	0.091	
TAG-7	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(大、含鉄)	8世紀後半	49.40	0.20	50.22	14.53	16.84	5.56	2.48	1.92	1.18	0.42	0.20	3.08	0.04	0.09	0.37	0.03	0.19	<0.01	<0.01	28.40	0.575	0.062	
TAG-8	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	8世紀後半	55.69	3.53	49.58	19.48	14.33	4.30	1.61	1.36	0.62	0.39	0.11	1.80	0.05	0.07	0.19	0.09	0.15	<0.01	<0.01	22.61	0.406	0.032	
TAG-9	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	8世紀後半	52.33	1.87	32.91	35.57	13.90	4.29	1.98	0.86	0.42	0.36	0.05	0.76	0.03	0.09	0.32	0.31	0.06	<0.01	<0.01	21.81	0.417	0.015	
TAG-10	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(小、含鉄)	8世紀後半	57.70	0.11	61.94	13.50	15.55	3.20	1.51	0.72	1.40	0.45	0.03	0.18	0.02	0.02	0.16	0.04	0.01	<0.01	<0.01	22.83	0.396	0.003	
TAG-11	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(極小、含鉄)	8世紀後半	45.03	0.25	33.55	26.74	22.44	5.31	2.24	1.27	1.86	0.64	0.05	0.24	0.02	0.08	0.26	0.17	0.01	<0.01	<0.01	33.76	0.750	0.005	
TAG-12	II区	C-1型鍛冶工房(II区45号住居)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	10世紀後半	63.03	0.07	65.53	17.19	10.69	2.64	1.66	0.68	0.73	0.37	0.03	0.12	0.02	0.01	0.13	0.03	0.01	<0.01	<0.01	16.77	0.266	0.002	

TAG-13	II区	C-1型鍛冶工房 (II区45号住居)	遺物種類	10世紀後 半	55.32	0.12	56.04	16.64	15.81	3.59	2.85	0.99	1.15	0.44	0.03	0.16	0.02	0.03	0.23	0.05	0.01	<0.01	<0.01	24.83	0.449	0.003
TAG-14	II区	C-1型鍛冶工房 (II区45号住居)	遺物種類	10世紀後 半	55.00	0.12	48.86	24.17	14.67	3.88	2.08	0.87	0.75	0.46	0.03	0.15	0.02	0.03	0.12	0.18	0.01	<0.01	<0.01	22.71	0.413	0.003
TAG-15	VI区	C-2型鍛冶工房 (VI区118号住居)	遺物種類	10世紀後 半	52.08	1.15	58.56	7.74	19.69	4.85	2.56	1.20	1.49	0.71	0.05	0.40	0.03	0.03	0.19	0.02	0.02	<0.01	<0.01	30.50	0.586	0.008
TAG-16	VI区	C-2型鍛冶工房 (VI区118号住居)	遺物種類	10世紀後 半	46.76	0.21	52.31	8.42	23.61	6.35	3.21	1.34	1.29	0.76	0.08	0.77	0.03	0.03	0.21	0.05	0.04	<0.01	<0.01	36.56	0.782	0.016
TAG-17	VI区	C-2型鍛冶工房 (VI区118号住居)	遺物種類	10世紀後 半	53.16	1.03	55.47	12.89	18.0	4.19	2.56	0.98	1.44	0.53	0.05	0.46	0.02	0.04	0.27	0.06	0.03	<0.01	<0.01	27.70	0.521	0.009
TAG-18	VI区	D型鍛冶工房(IV 区遺構外)	遺物種類	近世	6.05	0.08	1.22	7.18	60.01	16.47	4.84	2.58	3.49	2.39	0.12	0.62	0.02	0.01	0.21	0.05	0.02	<0.01	<0.01	89.78	14.840	0.102

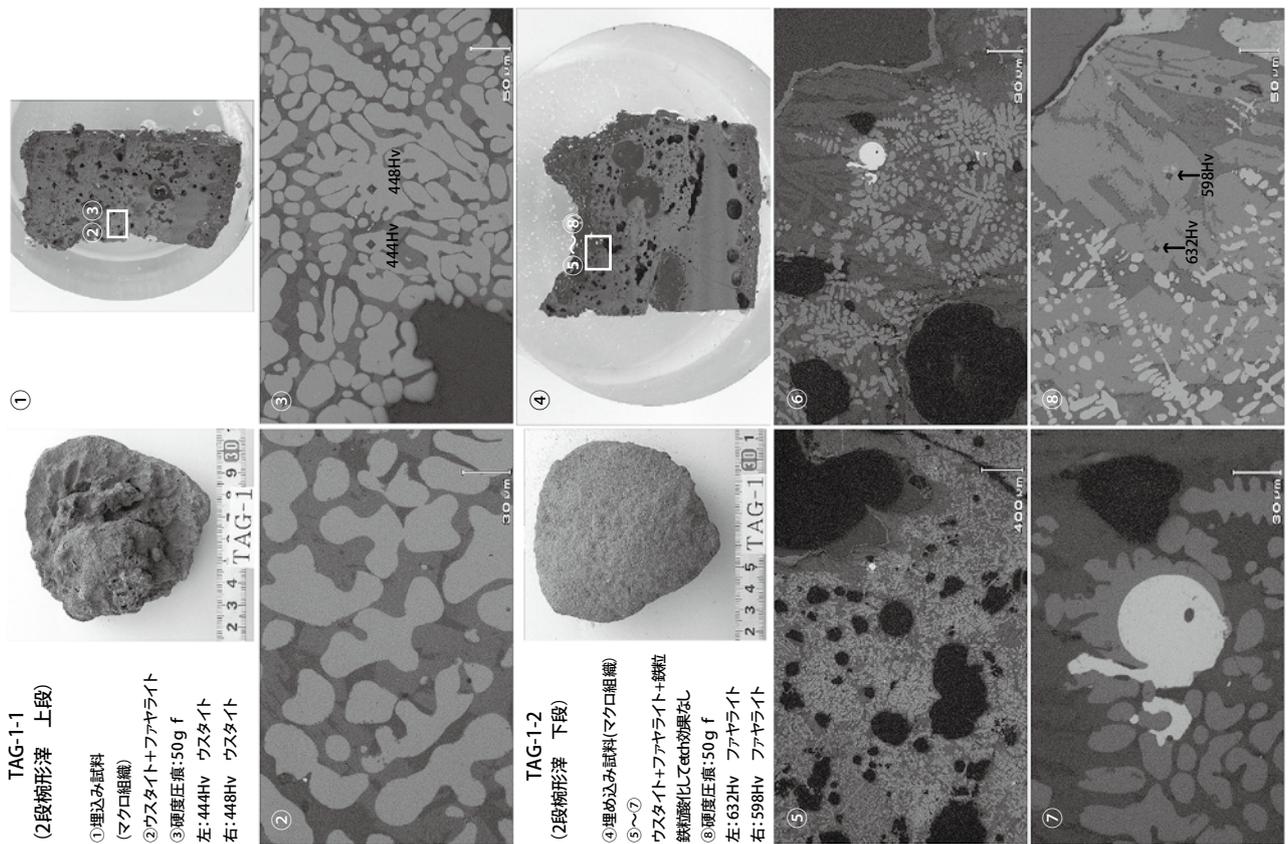
第52表 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	地区名	遺構名	遺物種類	推定年代	顕微鏡組織	化学組成(%)										所見										
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	ガラス成分	Cu													
TAG-1	I区	A型鍛冶工房(5号住居)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	8世紀前半	w+f 微量鉄粒遺存、 cか	50.69	17.28	3.61	0.24	0.01	0.03	30.12	<0.01													
TAG-2	I区	A型鍛冶工房(5号住居)	楕形鍛冶滓(極小)	8世紀前半	f+g	35.28	3.65	8.78	0.34	0.01	0.09	52.66	<0.01													
TAG-3	I区	A型の排滓場(1号排滓)	楕形鍛冶滓(大、含鉄)	8世紀前半	f+g+鉄粒(Fe・pe)亜共析粒	39.88	7.07	5.07	0.34	0.01	0.08	45.97	0.01													
TAG-4	I区	A型の排滓場(1号排滓)	楕形鍛冶滓(極小)	8世紀前半	f+g 付着	9.90	10.37	11.18	0.57	0.02	0.15	84.50	<0.01													
TAG-5	I区	A型の排滓場(1号排滓)	小割された滓	8世紀前半	w+f	47.75	8.77	5.18	0.26	0.01	0.05	36.47	0.03													
TAG-6	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(特大、含鉄)	8世紀後半	u+w(Fe-Ti析出物含む)微量fe	49.73	29.05	4.60	4.55	0.20	0.31	23.29	<0.01													
TAG-7	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(大、含鉄)	8世紀後半	u+w(Fe-Ti析出物含む)微量fe	49.40	14.53	4.40	3.08	0.19	0.20	28.40	<0.01													
TAG-8	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	8世紀後半	w(Fe-Ti析出物)+f、鉄粒(fe+pe)	55.69	19.48	2.97	1.80	0.15	0.11	22.61	<0.01													
TAG-9	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	8世紀後半	w+f、鉄粒(fe+pe)	52.33	35.57	2.84	0.76	0.06	0.05	21.81	<0.01													
TAG-10	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(小、含鉄)	8世紀後半	g(銹化鉄粒含む)、F、W+F主体	57.70	13.50	2.23	0.18	0.01	0.03	22.83	<0.01													
TAG-11	V区	B型鍛冶工房(V区84号住居)	楕形鍛冶滓(極小、含鉄)	8世紀後半	凝集W+F、不定形銹化鉄片を含む	45.03	26.74	3.51	0.24	0.01	0.05	33.76	<0.01													
TAG-12	II区	C-1型鍛冶工房(II区45号住居)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	10世紀後半	凝集W、fe粒点在	63.03	17.19	2.34	0.12	0.01	0.03	16.77	<0.01													
TAG-13	II区	C-1型鍛冶工房(II区45号住居)	楕形鍛冶滓(小、含鉄)	10世紀後半	W+F、10×6mm断面鉄片内臓	55.32	16.64	3.84	0.16	0.01	0.03	24.83	<0.01													
TAG-14	II区	C-1型鍛冶工房(II区45号住居)	楕形鍛冶滓(極小、含鉄)	10世紀後半	W+F、ガス抜け孔遺存鉄片	55.00	24.17	2.95	0.15	0.01	0.03	22.71	<0.01													
TAG-15	VI区	C-2型鍛冶工房(VI区118号住居)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	10世紀後半	W+F、ガス抜け孔遺存鉄片	52.08	7.74	3.76	0.40	0.02	0.05	30.50	<0.01													
TAG-16	VI区	C-2型鍛冶工房(VI区118号住居)	楕形鍛冶滓(小)	10世紀後半	WとF域の2層分れ	46.76	8.42	4.55	0.77	0.04	0.08	36.56	<0.01													
TAG-17	VI区	C-2型鍛冶工房(VI区118号住居)	楕形鍛冶滓(小、含鉄)	10世紀後半	島状凝集W散在	53.16	12.89	3.54	0.46	0.03	0.05	27.70	<0.01													
TAG-18	VI区	D型鍛冶工房(IV区遺構外)	楕形鍛冶滓(中、含鉄)	近世	g主体、局部W、粘土混入砂鉄粒	6.05	7.18	7.42	0.62	0.02	0.12	89.78	<0.01													

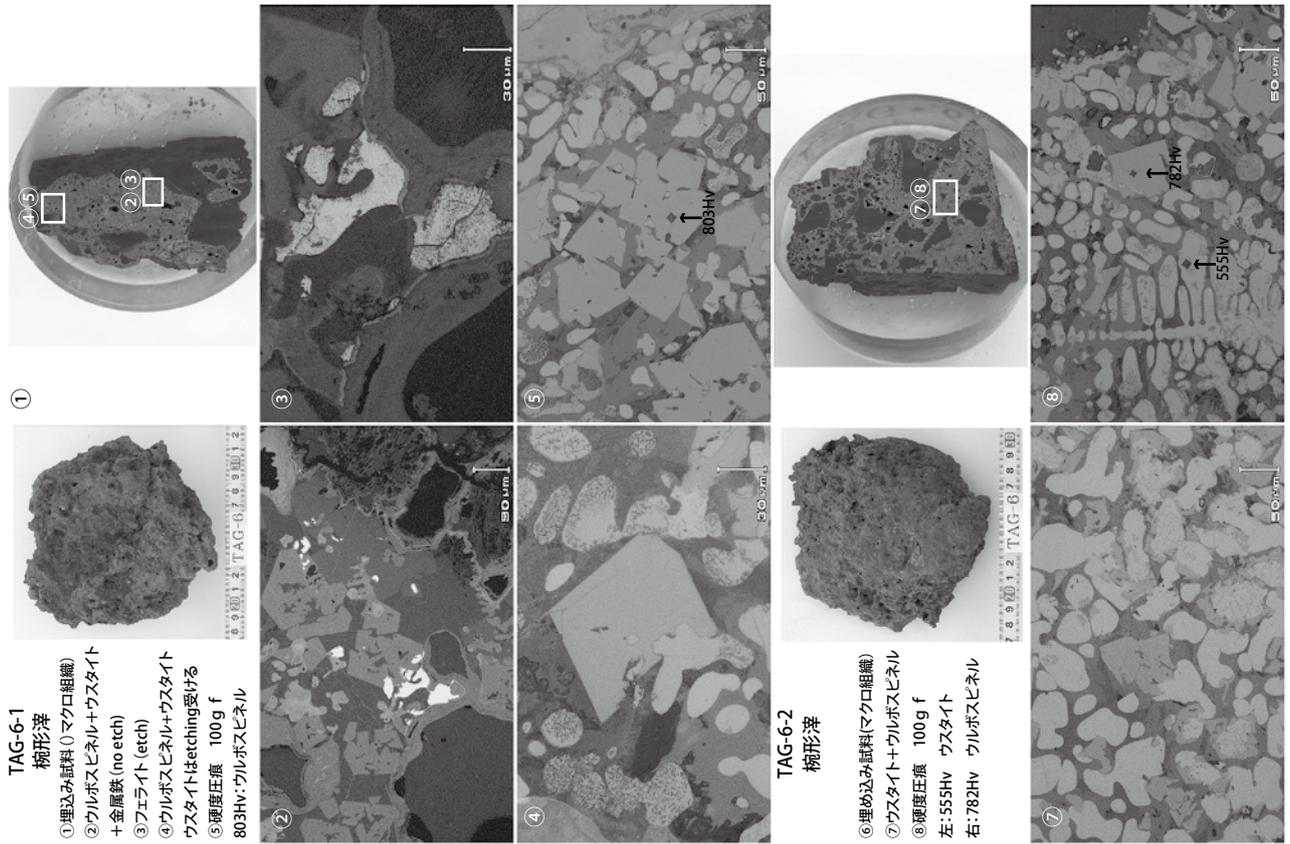
W: wüstite(FeO)、f: fayalite(2FeO·SiO₂)、g: glass(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)、Fe: ferrite(純鉄、α鉄)、f: ferrowollastonite(Ca₂FeSiO₅)
 pe: pearlite (フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織)



図版15 顕微鏡組織(2)



図版14 顕微鏡組織(1)



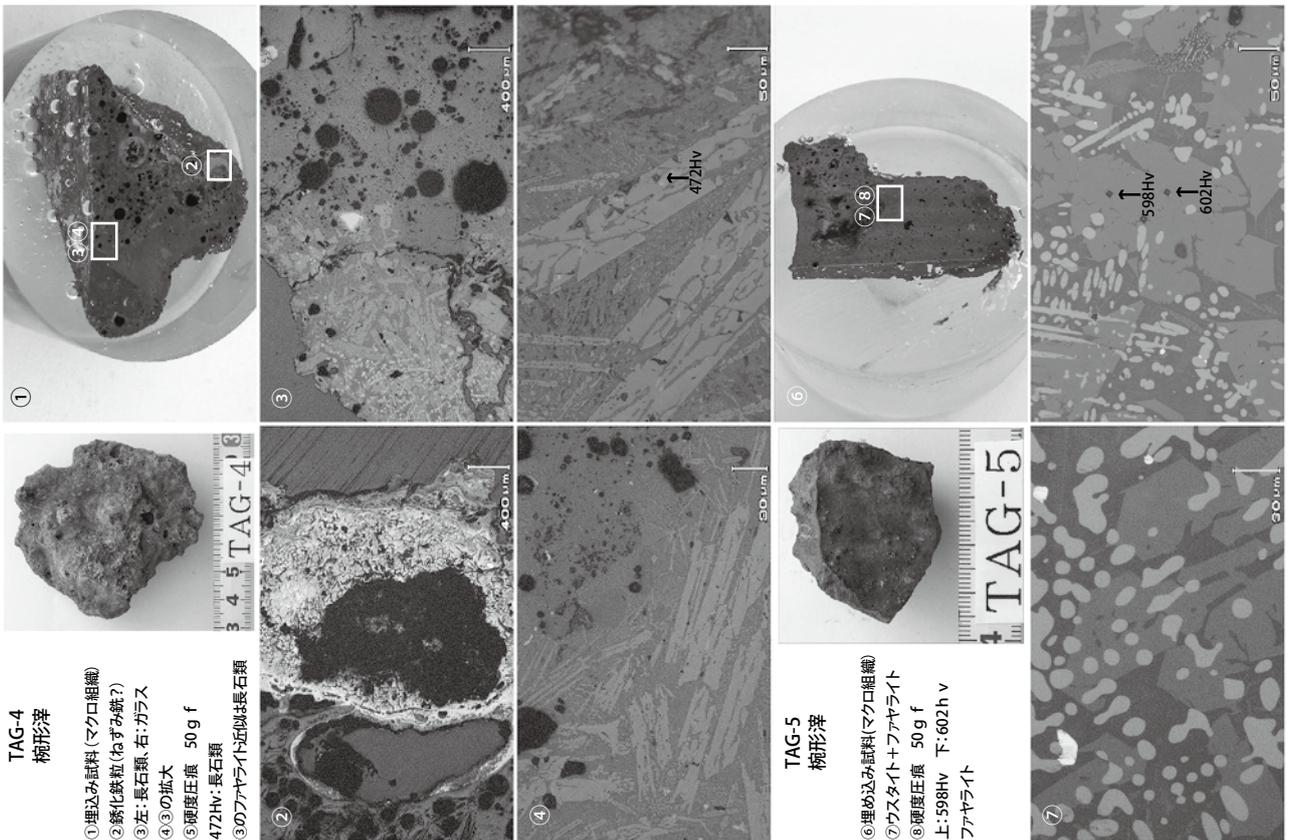
TAG-6-1
椀形滓

- ①埋込み試料(マクロ組織)
- ②カルボスピネル+ウスタイト+金属鉄 (no etch)
- ③フェライト (etch)
- ④カルボスピネル+ウスタイトウスタイトはetching受ける
- ⑤硬度圧痕 100g f
- 803HV: カルボスピネル

TAG-6-2
椀形滓

- ⑥埋込み試料(マクロ組織)
- ⑦ウスタイト+カルボスピネル
- ⑧硬度圧痕 100g f
- 左: 555HV ウスタイト
- 右: 782HV カルボスピネル

図版17 顕微鏡組織(4)



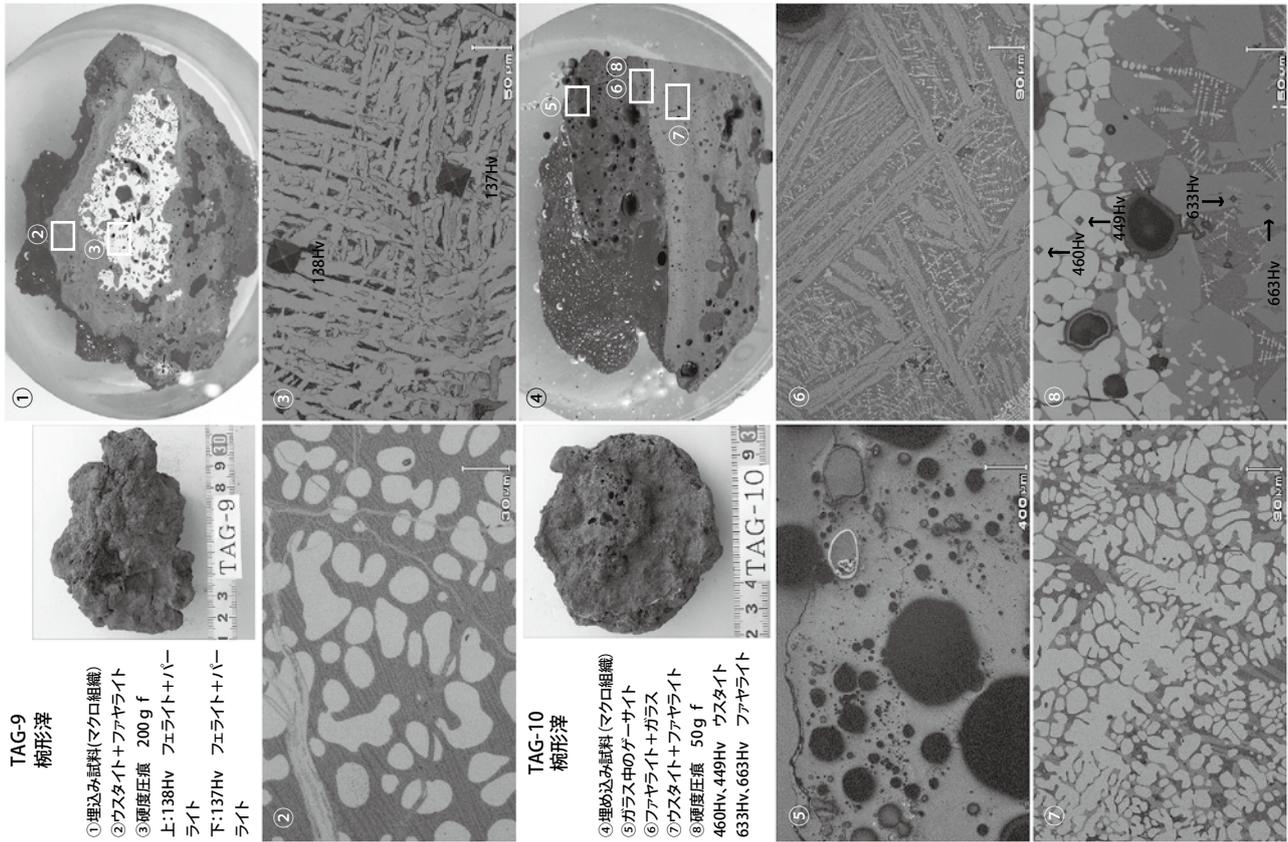
TAG-4
椀形滓

- ①埋込み試料(マクロ組織)
- ②酸化鉄粒(特すみ砥?)
- ③左: 長石類、右: ガラス
- ④③の拡大
- ⑤硬度圧痕 50g f
- 472HV: 長石類
- ③のフェライトに近似は長石類

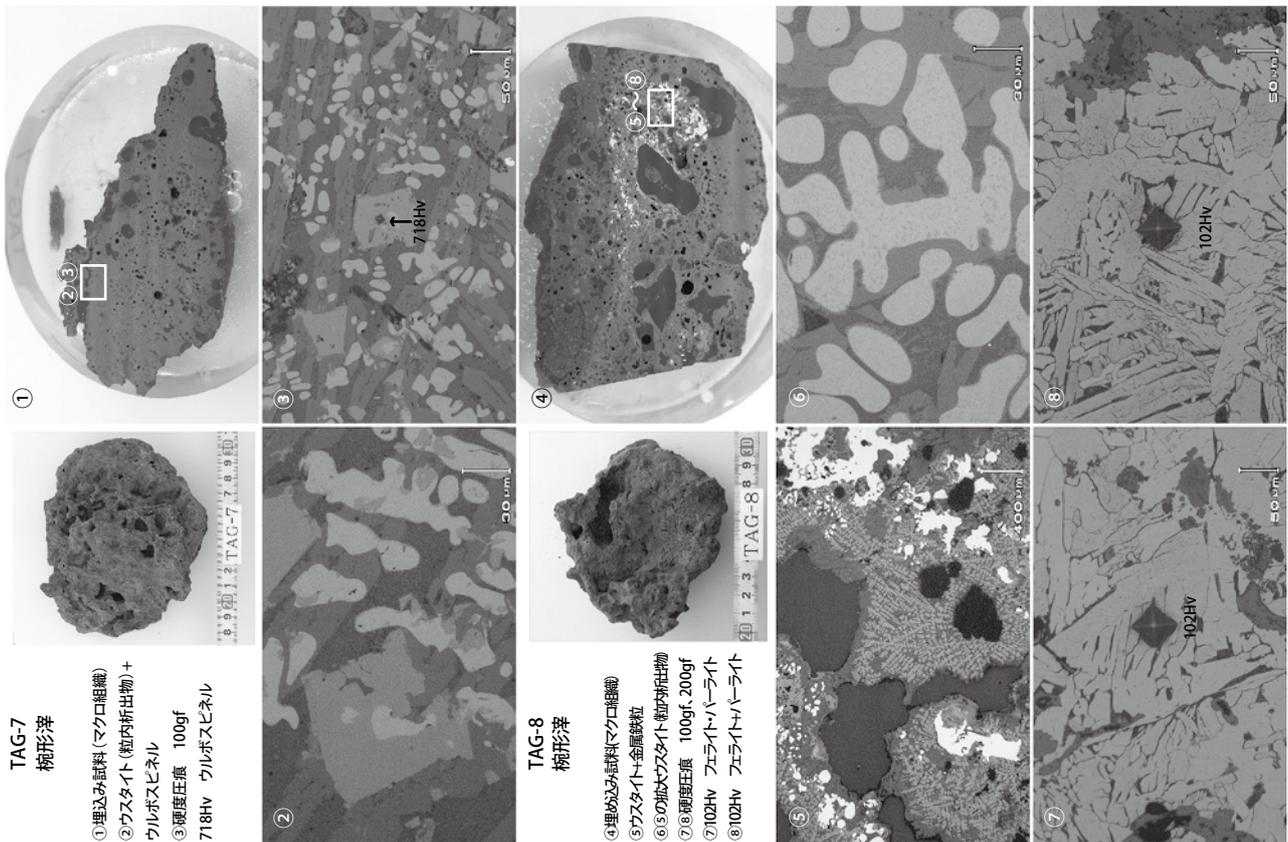
TAG-5
椀形滓

- ⑥埋込み試料(マクロ組織)
- ⑦ウスタイト+フェライト
- ⑧硬度圧痕 50g f
- 上: 598HV 下: 602HV
- フェライト

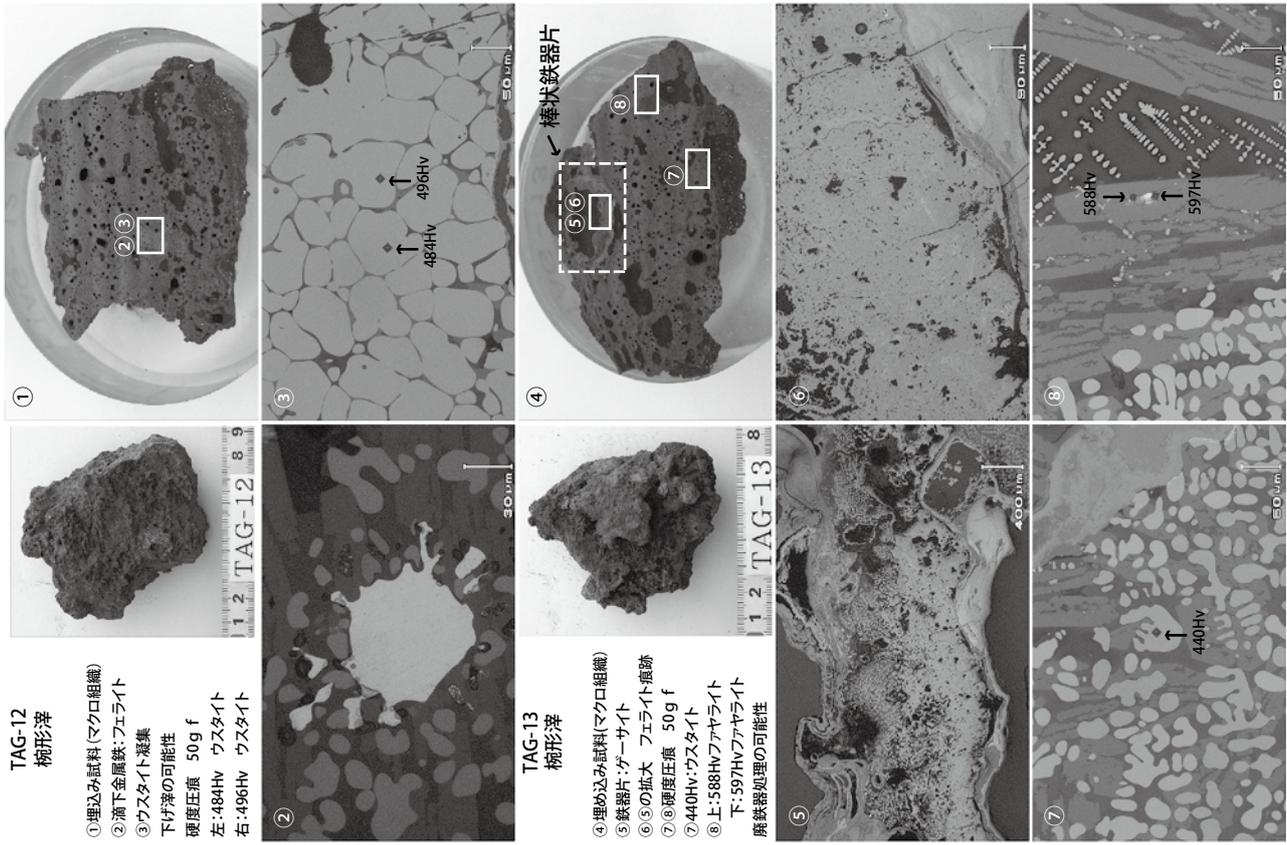
図版16 顕微鏡組織(3)



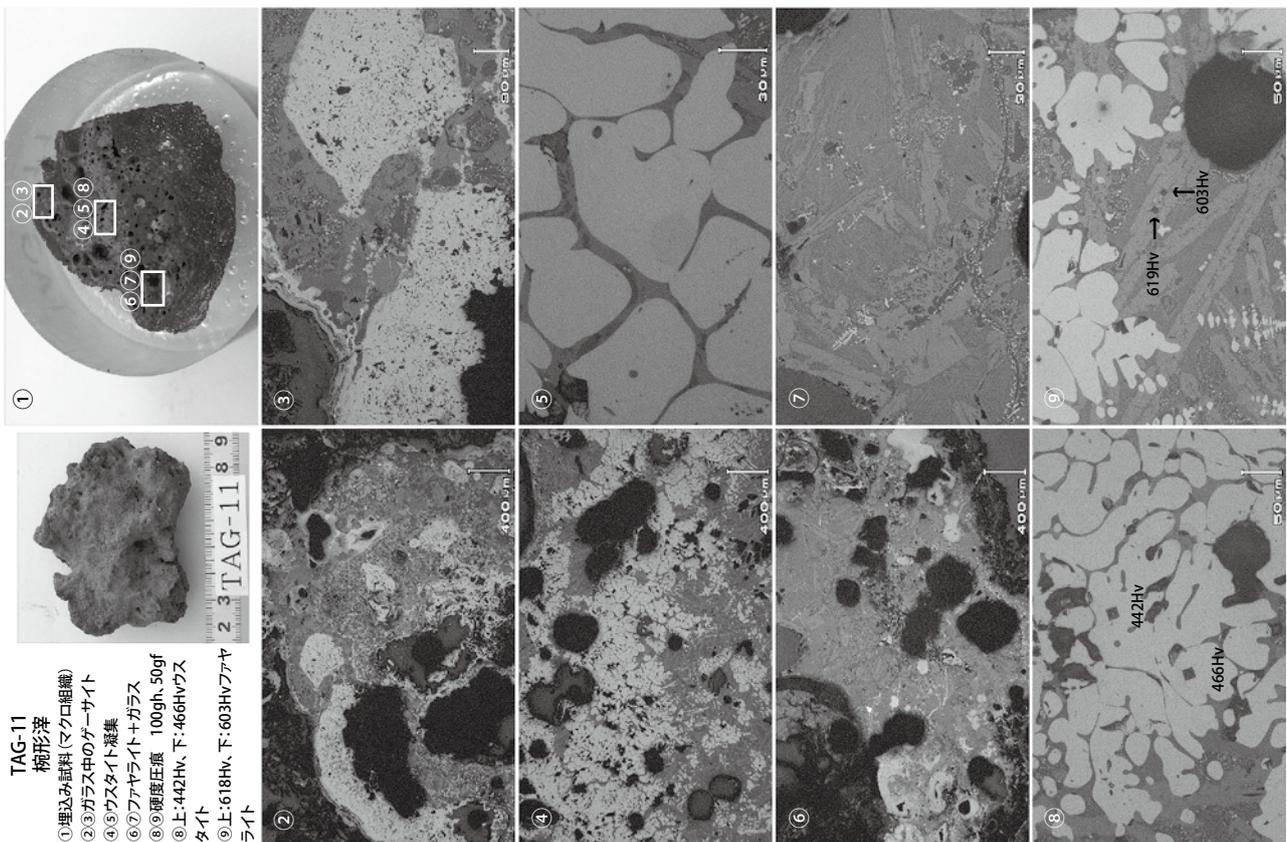
図版19 顕微鏡組織(6)



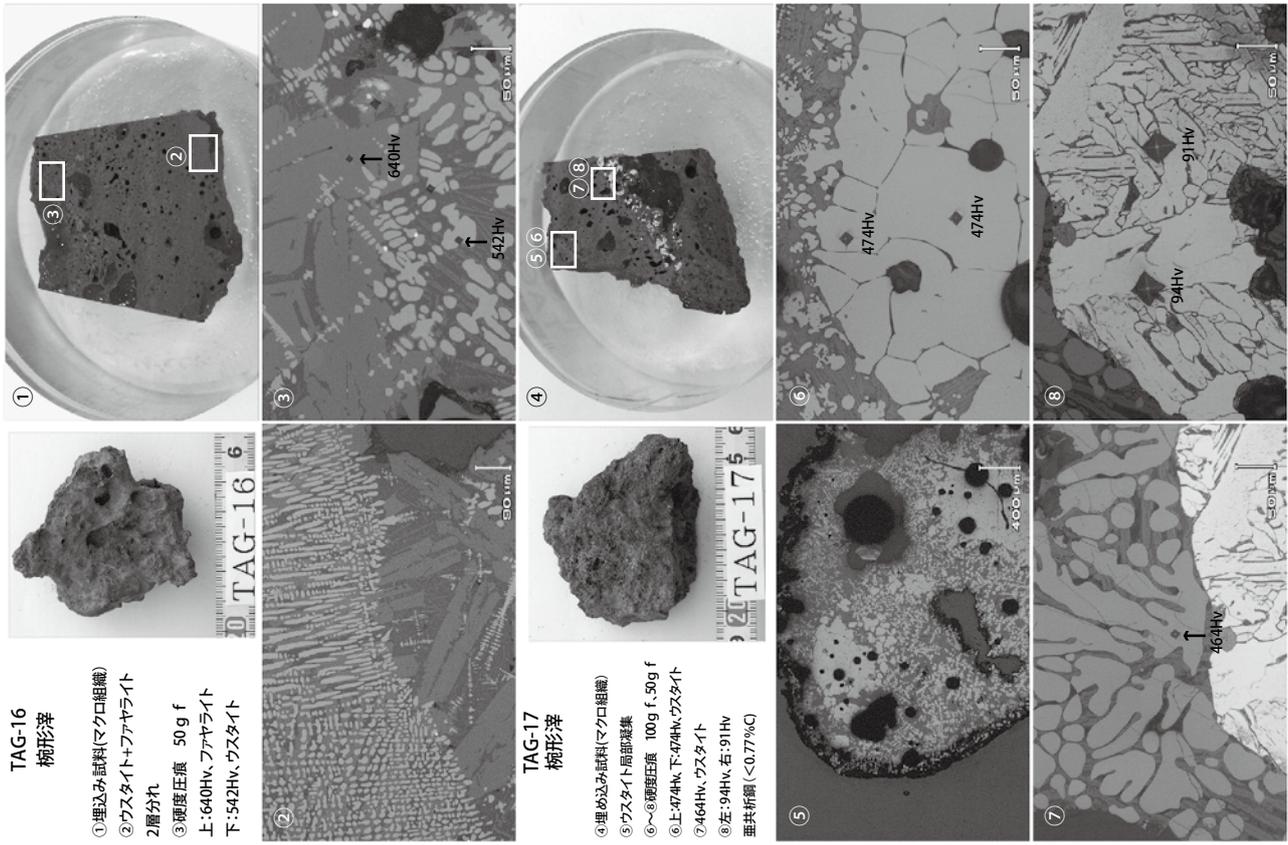
図版18 顕微鏡組織(5)



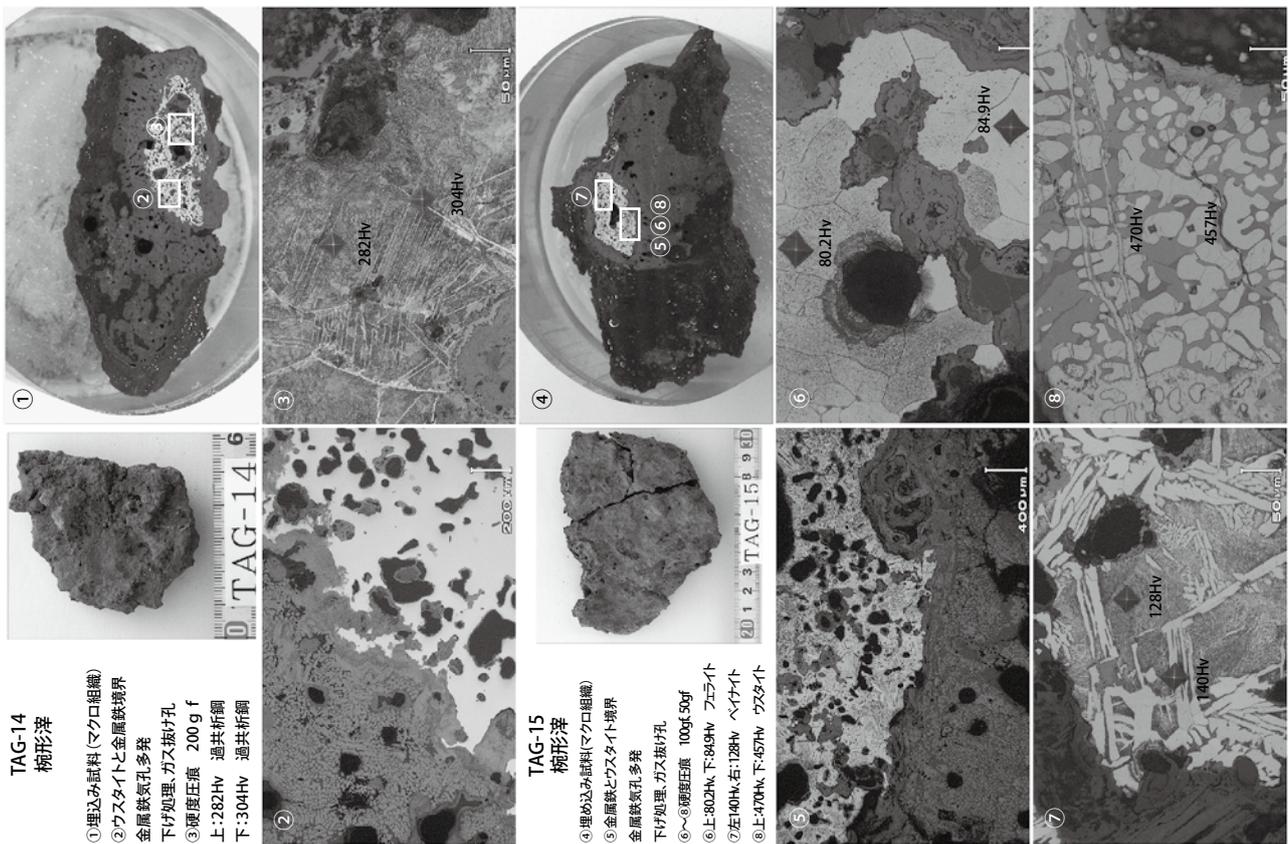
図版21 顕微鏡組織(8)



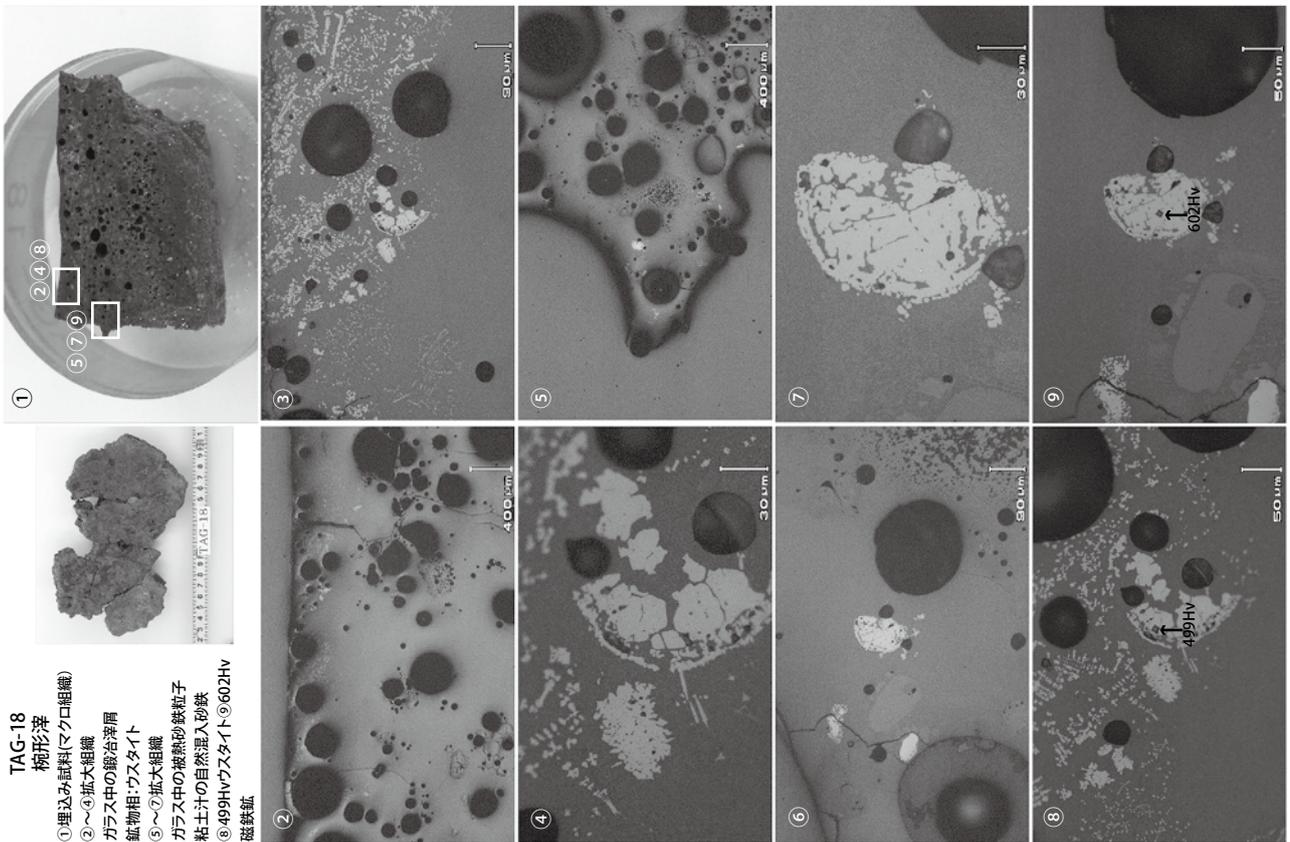
図版20 顕微鏡組織(7)



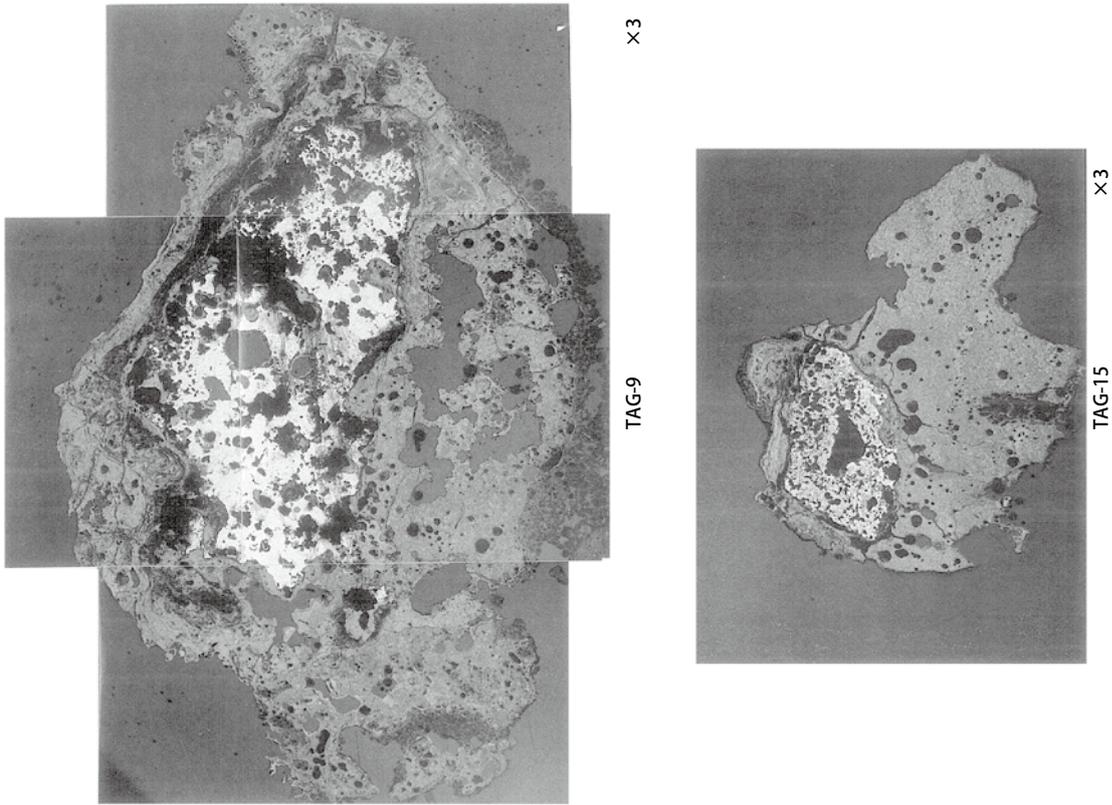
図版23 顕微鏡組織(10)



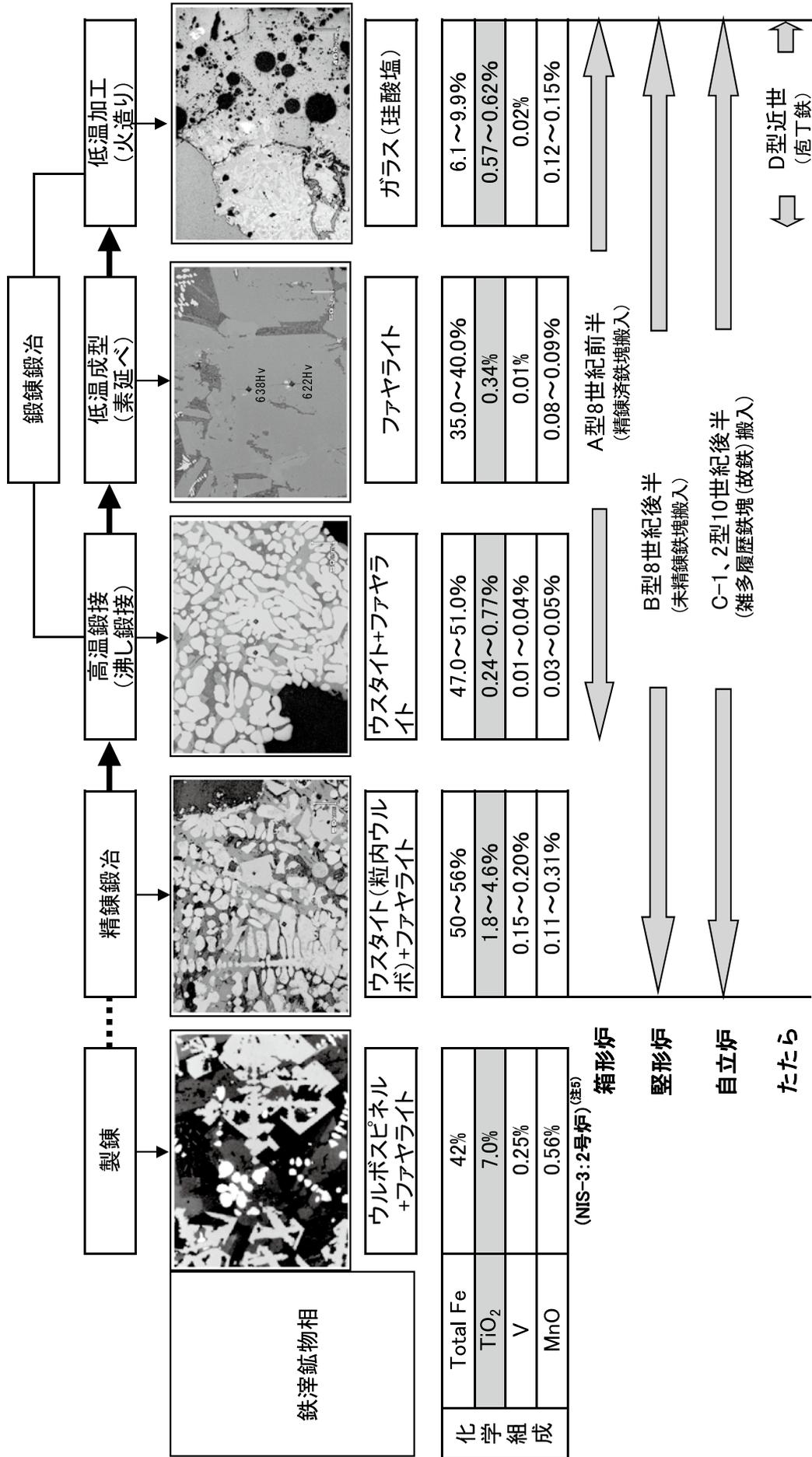
図版22 顕微鏡組織(9)



図版24 顕微鏡組織(11)



図版25 マクロ組織



図版26 田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡出土鍛冶率における鉱物相の特質模式図

追記 田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡出土のガラス質腕形鍛冶滓について、九州大学名誉教授 井澤英二氏のご協力でX線回折を行ったので以下に合わせて報告する。

田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡試料のX線回折結果報告

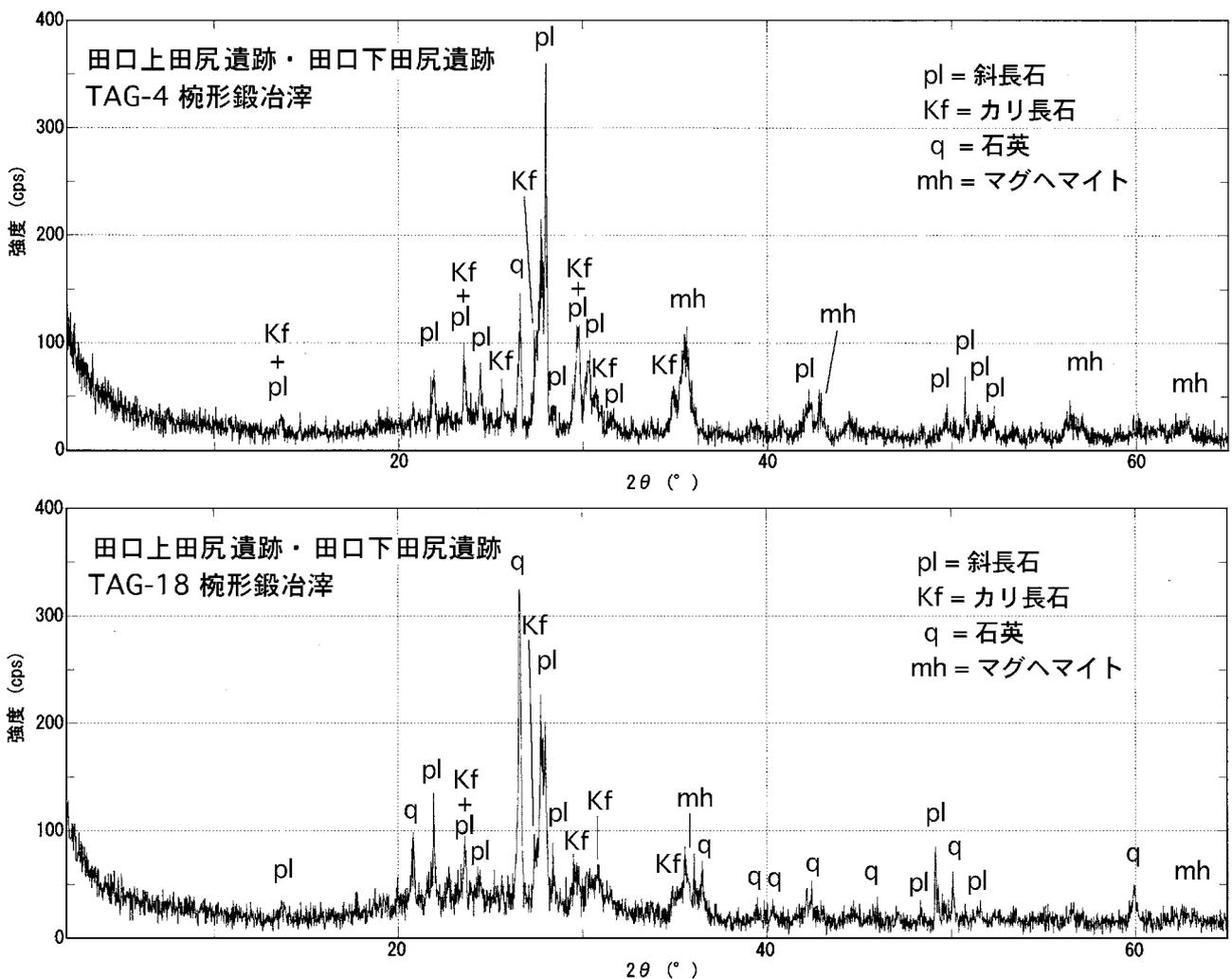
試料:田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡出土のガラス質腕形鍛冶滓TAG-4およびTAG-18の2試料について、X線回折を行った。

分析条件:粉末X線回折には、九州大学地球資源工学部門の理学Ultima IV X線回折装置を使用した。X線はCu K α 1 (40 kV、20 mA)を用い、全自動モノクロメータ、発散スリット 2/3、散乱スリット2/3、受光スリット 0.3 mm、データ取得幅0.02 (2 θ)、走査速度2/minの条件で2-65 (2 θ)を走査範囲とした。

X線回折結果(第1007図):TAG-4はX線回折図の(2 θ) 20-30°にかけてガラスの回折バンドが明瞭である。結晶質の相は、斜長石、カリ長石および少量の石英とマグヘマイト($a_0 = 8.358 \text{ \AA}$)である。

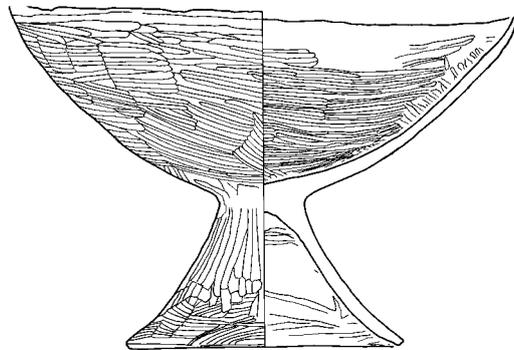
TAG-18もガラスの回折バンドが明瞭である。結晶質の相は、石英、カリ長石斜長石および少量のマグヘマイト($a_0 = 8.371 \text{ \AA}$)である。

両試料に認められる鉄鉱物はマグヘマイトである。ただし、格子定数は純粋のマグヘマイト($a_0 = 8.352 \text{ \AA}$)と磁鉄鉱($a_0 = 8.397 \text{ \AA}$)の間の値で、2価の鉄が存在することを示している。石英、長石類は粘土に含まれていたものであろう。ガラスは、粘土中の粘土鉱物と藁灰(主に珪酸)に由来すると考えられる。



第1007図 TAG-4およびTAG-18のX線回折図

第9章 総括



第9章 総括

第1節 遺物について

第1項 田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡出土の古墳時代前期土器について

1 はじめに

本遺跡の成り立ちは古墳時代の集落から始まる。この古墳時代集落が、いつ、どのような背景のもとに形成され、どのような変遷を重ねていったのかを理解するにあたって、時間軸上の位置づけと、集落形成の担い手となった集団の性格類推のために出土土器の検討を行うものである。とりわけ集落の開始期といえる古墳時代前期初頭に焦点を絞って取り上げることとしたい。

2 型式内容について

本遺跡出土の古墳時代前期土器群は、大部分が外来系および在来系弥生土器の系譜をひく無文土器群で構成される。外来系は東海西部系、北陸北東部系が明確な存在を示し、在来系では樽式の退化型式とみられる土器群が加わる。本遺跡の古相段階である浅間C軽石下住居の土器群を見る限り、北陸北東部系の千種甕・小型鉢、東海西部系の壺・「く」の字口縁台付甕・元屋敷型高杯・小型高杯、ほかに系譜を特定できない直口壺・小型器台が主体をなす。在来系の樽式系土器については、客体的に壺と高杯と鉢が散見されるのみである。かかる様相は、浅間C軽石降下後にも継承されるが、東海西部系のS字甕が目立つようになり、各外来系および在来系の折衷や在地的変容形態ともいえる壺と甕が主体を占める。さらに小型の精製・粗製埴が新たに加わることで、主たる器種組成が成立している。

東海西部系ではパレススタイル系壺(第915図 第988図8・第996図65)、加飾壺(第780図23・24)、広口壺(第925図7)、内彎壺(第893図2・第909図1)、S字甕(第902図19～23・第906図26・第912図31)、くの字口縁台付甕(第952図5・第928図5・6)、元屋敷型高杯(第904図10・第977図3・第996図71)、小型高杯(第790図1・

第853図2)、装飾高杯(第925図14)、さらに近江系の可能性もある鉢(第855図1)があげられる。ここでいう東海西部系とは、濃尾地域から三河、西遠江までを含んでいる。S字甕は一段階遅れて参画するが、遺構ごとに偏在する傾向がうかがえ、集落全体に及ぶ煮炊き形態の主器種にはなっていないようだ。

北陸北東部系では千種甕(第963図15等)、壺(第958図1)、小型鉢(第962図2)、器台(第983図6・第853図4)等がみられる。千種甕は初期段階ではオリジナルに近い形態の田口上田尻遺跡135住例(第963図15)もあるが、短く屈曲する口縁や小さな平底の倒卵形の胴部といった形状が在来系土器にも影響を与えたと考えられ、内面磨き手法で仕上げた平底甕(第905図20)は樽式土器の作り手による千種甕模倣品との可能性を指摘しておきたい。なお、ヘラナゲ手法で仕上げた類似形態(第905図23)や、球胴に小さな凹み底で内面をハケメで仕上げた甕(第905図22)は、古墳時代初頭以降、齊一的に進行していた“短い口縁でくの字状屈曲”化と“胴部の球形”化の流れの中で発生した形態であろうが、器形の類似から同時期の北陸北東部系くの字口縁甕の影響もなしとしない。具体的には、口縁端部が丸みをもつ甕類との関連性を追求するべきと考える^(註1)。信濃における北陸系土器の検討を行った田嶋氏は、この種の甕を「東日本固有形式」と捉えた上で、一系で理解する点を課題としつつ青木一男氏が示した「千葉形五領甕」との関連性(青木1998)を首肯している(田嶋2009)。群馬県における該期の「く」の字屈曲単口縁平底甕のうち、千葉形や吉ヶ谷式といった南関東系とみられるものは、口縁部への刻みや粘土紐積上げ痕を装飾的に残すこと、底部がやや突出きみで安定した大きめの平底であるなどの形態的特徴で類推が可能であるが、本遺跡の第905図22・23に見られる型式的特徴との直接的関連性は薄いと考えるを得ない。

畿内系では叩き整形甕(第955図11・第963図22)と高杯(第917図5)、近江系では受け口甕(第983図11)、手焙り形土器(第924図1)、南関東系では口唇に刻みのある台付甕(第826図6・第905図25・第912図27)が少数ながら存在する。

一方、在来系の樽式系統では有文壺(第925図9・第982図12)、無文壺(第801図5・第904図13等)、短頸壺(第911図18)、高杯(第904図9・第951図3等)、鉢(第900図5等)、有孔鉢(第951図1)、小壺(第893図1)が見られる。箱清水式甕の変容型式である無文の甕G1類(青木1998)は、群馬県内の樽式系統でも見られるのだが、本遺跡では確認できなかった。なお、高杯や鉢は外来型式と類似器形であるが、樽式からの伝統的手法である内面の横位磨き整形と大きく安定した鉢の平底形態から判別したものである。

器種組成では、壺、小型壺、平底甕、台付甕、高杯、小型器台、小型鉢を基調としており、新しい段階ではこれに埴が加わる。また、少数器種として手焙形土器や有孔鉢も伴う。遺構別にみると、東海西部系、北陸北東部系の各系統に属する器種を主体とする偏向性が一部にうかがわれるが、総体的にはこれら各系統の器種が混在するとみてよい。在来樽式系土器は、変容した型式も含めてすべての器種がそろう一括資料が見られないことから主体とは言い難い。特に甕類の欠如は決定的といえる。ただし、樽式系器種や型式の欠如が、ただちに時間的推移による変遷結果と理解するものではない。ここでは、樽式土器とは異なる器制に基づく土器群としてのみ捉えることとする。

3 古墳時代前期の土器変遷

本遺跡の古墳時代土器群は、概ね3世紀後半代から4世紀代、さらに継続して5世紀の前半代までの時間幅をもつ。時間軸検討のための全時期を通して基準とすべき器種は残念ながらない。「く」の字口縁甕とS字甕、および高杯・小型器台をこれに替え、土器の変遷からほぼ4期区分を設定した。

第1期の代表例として田口上田尻遺跡134住一括遺物(第962～964図)をあげたい。新しい台付鉢の混入も2点ほどあるが、主体は北陸系の壺・鉢・平底甕と東海西部系の単口縁台付甕で構成される。北陸系平底甕(15・16)は長胴タイプで口縁端に器厚で平坦面をつくる口縁Ⅱ類、底部は厚くやや突出きみのA類(滝沢2005)にあたる。千種甕の特徴から新潟編年^(註2)の6・7期に相当しよう。共伴する有段口縁鉢(第962図2)は口縁の稜がかなり退化しており、この種の最終段階にあると考えられ

る。浅間C軽石の堆積状況から、これとほぼ同時期と想定される田口下田尻遺跡13住では元屋敷型の有稜高杯(第977図3)が出土しており、共伴した他の高杯(同図1・5・6)も含めて、脚高が高く中位で弱く外折する形状から濃尾編年の廻間Ⅱ式期のなかに収まるものと考えられる。第1期の類例は田口上田尻遺跡10住(第954・955図)、同104住(第958図)、同164住(第966図)などがあげられ、北陸北東部系の千種甕や鉢および元屋敷系高杯のほかに、小型器台と東海西部系の脚高の低い単口縁台付甕が伴うことを特徴として捉えられる。

第2期では、丸縁となる「く」字口縁平底甕と脚裾が外反して開く高杯・小型器台が主体となる。甕の組成にS字甕が登場するのが大きな特徴で、また少量ながら埴(第900図1・901図11)の出現も指標といえよう。代表例は田口下田尻遺跡66住(第900～902図)、同67住(第903～906図)、同71住(第909～912図)である。なお、S字甕の比較によれば、田口編年(田口1981)の4類のみの67住が4類と5類が伴う66住よりも古く位置づけられる。同じ4類同士を比べても、口縁上段が薄く短い67住例(第906図26)のほうが古相と考える。このことから、第2期は新旧に二分でき、畿内系の埴は新しい時期に伴い、旧時期には台形状の在来系小型鉢が小型器台とセットで使用されたと想定される。

第3期はS字甕5・6類、畿内系長脚(布留型)高杯、体部が浅い鉢形の丸底埴の伴出で特徴づけられる。整形技法では壺や平底甕の胴下半部を削り仕上げとするものが主流となる。小型器台は激減するようである。なお当時期には明瞭な北陸系要素はほとんど見られず、体部下半を削る「く」字口縁球胴甕(第852図1)は千種系甕の最終段階と考えたい。田口上田尻遺跡91住(第840・841図)、同106住(第846・847図)、同133住(第859・861図)が代表例である。

第4期は脚柱部の太い高杯、単口縁「く」字屈曲の球胴平底甕が主体となり、新たに「はそう」形の埴や内斜口縁の半球形鉢が組成に加わる。また、大型甕や大型鉢が出現するのも画期的特徴といえる。整形では磨き手法の減退と削りやナデ仕上げの盛行が特徴的である。またこの時期にはS字甕を含む台付甕が激減する。田口上田尻遺跡9住(第779～781図)、同33住(第802・805・806図)、同43住(第818・820・821図)が代表例となる。なお、円

錐脚の高坏(第780図7)、ハケメ整形甕(同図17・20)、折り返し口縁壺(同図18)を組成に含む古段階、脚柱が膨らむナデ仕上げの高坏(第835図16)を指標とする新段階に二分できる見通しも立つが、本遺跡では明確な分別基準を得られなかった。

在来系の樽式は後継する無文型式を含めて第1期から第2期にかけて確実に存在するが、組成上の主体を占めることはない。このことは、第1期の住居跡が樽式に典型的な長方形プランではないことと考え合わせて、本遺跡の初期集落形成に在地の樽式集団が関わっていなかったことを示唆するものだろう。

4 編年的位置づけと浅間C軽石の年代

以上の時期細分を「榛名山東麓・赤城山西麓」の既存編年(深澤1998)に照合すれば、第1期—深澤2段階、第2期—深澤3～4段階、第3期—深澤5段階となる。新潟編年^(註2)では、第1期が新潟6～7期、第2期が新潟8～9期と考えている。暦年代観で示すと、第1期(3世紀後半)、第2期古(4世紀前葉)、第2期新(4世紀中葉)、第3期(4世紀後葉)、第5期(4世紀末～5世紀前半)と推定する。暦年代観推定の根拠として、間接的ながら石川県二口かみあれた遺跡の井戸S X208出土側板材の年輪年代測定結果(志雄町教育委員会1995)を参考とした。これは辺材部から推定して伐採年A D. 258年との数値が得られている。出土した土器は白江2～3式(堀2006)であるが、井戸側材は転用材であり、出土土器は井戸廃棄時のものとの報告者の所見を首肯すれば、この土器の暦年代は258年に一次材使用期間と井戸側材使用期間を加算した年代に相当するはずである。加算年数の根拠は皆無だが、少なくとも白江2～3式がA D. 250年を遡ることはなく、3世紀後半代という大まかな時間幅で想定しておきたい。編年併行関係で見た場合、本遺跡第1期は新潟編年6・7期に相当し、白江2～3式と併行する時期をもつ。このことから第1期を3世紀後半代と想定した訳である。なお、本遺跡の第1期相当の住居は埋土に浅間C軽石の一次堆積物が認められることから、その降下年代は3世紀でも末頃、もしくは4世紀初頭に下る可能性が高い。ところで、高崎市貝沢柳町遺跡では方形周溝墓溝下層の浅間C軽石一次堆積層の直上から廻間Ⅱ式相当のパレススタイル壺の出土していることが知ら

れている(高崎市教育委員会1986)。赤塚次郎氏によれば廻間Ⅱ式期は3世紀前半代に位置づけられ、貝沢柳町例と同類のパレス壺を出土した長野県松本市弘法山古墳を3世紀前半の半ば頃としている(赤塚2006)。これに従えば、浅間C軽石降下とほぼ同時期と想定される貝沢柳町例の年代観から、その降下年代は3世紀前半の半ばとなり、先述の北陸系土器から得た年代観とは50年以上の開きが生じる。浅間C軽石降下は深澤編年の2段階にあるとの指摘(深澤1998)は正しいのだが、その暦年代推定について明白な根拠を欠くのが現状である。現時点では安易な援用による拙速を避け、整合性の高い広域土器編年整備を着実に進めておく必要がある。

5 小 結

本遺跡の土器の大きな特徴として、在来の樽式系を客体とし、北陸系と濃密な関連性を保持しつつ、S字甕を組成の軸とする東海西部系が主体とはならない点をあげたい。本遺跡の北方5km地点に渋川市有馬遺跡、6.5km地点には渋川市(旧北橋村)北町遺跡がある。前者は樽式集落・墓群に北陸系土器群を出土する住居の存在、後者は樽式集落からS字甕を主体とする東海西部系土器の集落に変転したことで知られる。本遺跡との時間的關係では、有馬遺跡が本遺跡第1期と同時か直前に終熄し、北町遺跡とはほぼ同時併存と考えられる。そして、すくなくとも第1期には交流対象となったであろう樽式集団が何処かに併存していたと考える。ここに、狭い地域ながら異なる土器群からなる遺跡が併存するという古墳時代初頭期特有の現象が見えてくる。その背景には当地域に進出した北陸北東部系や東海西部系の外来集団の各々の意図が隠されている。それを読み解くためには、これまで土器の編年的位置づけの対象としてのみ注目された感のある北陸北東部系について、集団の存在を想定した遺跡理解や存在意義の解釈を今後の検討課題とすべきだろう。

註

1. 滝沢氏は口縁端部に平坦面をもたない一群をⅢ類として分別し、北東部では滝沢編年6期頃から増加(滝沢2005)とした。
2. 2005. 7新潟県考古学会「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」シンポジウム発表要旨・紙上発表に基づく。

文献

青木一男1998「第4章 成果と課題」『上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5』(財)長野県埋蔵文化財センター

- 赤塚次郎2006「東海系土器と東日本の墳丘墓」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 志雄町教育委員会1995『二口かみあれた遺跡』
- 高崎市教育委員会1986『貝沢柳町遺跡』
- 滝沢規朗2005「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』4
- 田嶋明人2009「古墳確立期土器の広域編年―東日本を対象とした検討(その3)―」『石川県埋蔵文化財情報』22
- 田口一郎1981「S字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 深澤敦仁1998「上野における土器の交流と画期」庄内式土器研究16
- 堀 大介2006「越前・加賀地域」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター

第2項 土師器系羽釜について

田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡における2面Ⅱ期とした住居の主体は、10世紀代のものが占めている。それらの住居から出土した煮炊き具を見ると、轆轤整形で胴部下半にヘラ削りを施す吉井型羽釜が主体を占めており、10世紀後半になると土釜が登場する。こうした様相は、県中央部の一般的傾向とほぼ一致している。一方、羽釜の中に明らかに吉井型羽釜とは異なる成整形のものがあることに気付いた。それは、田口下田尻遺跡43号住居出土の羽釜(第575図9)に代表されるもので、成整形に轆轤を使用せず、鏝下の胴部を上半横位、下半斜位のヘラ削りを施し、胴部内面中位に上下の接合痕を明瞭に残すことに大きな特徴がある。また、鏝の貼付に際して内面に指先を当てたと思われるような押圧痕が残り、胴部内面整形は横位から斜位のナデを施している。鏝下の胴部外面をヘラ削りするのは、月夜野型羽釜の大きな特徴の一つであり、吉井型羽釜の新しい段階のものにも見られる特徴(1)である。しかし、月夜野型羽釜は、鏝に向かって縦にヘラ削りしており、胴部の張りが弱い砲弾状を呈する器形の違いは顕著である。また、新しい段階の吉井型羽釜は、概して大振り短いピッチでヘラ削りを施した比較的雑な作りのものが多く、胴部内面に接合痕は認められない。以上のように、ここで取り上げた羽釜は、月夜野型羽釜、吉井型羽釜とは系統を異にする羽釜の可能性が高いのである。結論的に言えば、この羽釜は平成9年に刊行した最新情報展展示レポート『出土した古代の土器』において、地域差の例として提示した「東毛型羽釜(仮称)」に相当するものと考えている。同レポート中では「東毛型羽釜(仮称)は、形は吉井型羽釜に似ているが、器面は篋削りで整形している。作りも胎土も土

師器に近い」と、やや曖昧な定義であったため仮称を付しておいた。しかし、今回好資料が抽出できたことで、東毛型羽釜の実体のある程度把握することができたものと考えている。東毛型羽釜の特徴としては、①吉井型羽釜と類似した器形、②轆轤を使用しない成整形、③鏝下胴部外面の斜位～縦位ヘラ削り、④内面横位ヘラナデ、⑤胴部内面下位の接合痕、⑥土師器と共通の胎土・焼成などを上げることができるが、これらの特徴の中で器形以外は武蔵型甕の特徴と一致しているのである。つまり、東毛型羽釜としたものは、基本的に武蔵型甕生産者が製作した羽釜と見られるのである。ただし、月夜野型羽釜や吉井型羽釜のように、10世紀代以降の煮炊き具として一定地域を席卷するかのような、時間的・空間的に安定した分布を捉えることはできない。おそらく東毛地域から中毛地域にかけて、ごく短時間のうちに出現し消滅するものと考えられ、遺跡の中で主体を占めるような生産量もなかった可能性がある。したがって、月夜野型、吉井型と同レベルの名称設定には問題があることは承知であるが、地域を特徴づける羽釜として敢えて「東毛型羽釜」を再設定しておきたい。須恵器生産の盛んな西毛や北毛地域と比較して、東毛地域では9世紀以降の須恵器生産と供給が十分であったとは思えない。これは、利根川を越えた北武蔵から末野の須恵器が搬入され、東毛地域の比較的広い範囲に供給されていることや、須恵器の不足分を補うように、須恵器の器形と同形の土師器坏・碗が10世紀後半まで生産され続けている(2)ことから明らかである。東毛型羽釜出現の背景には、東毛地域におけるこうした須恵器供給と需用のアンバランスが関係しているものと考えられる。つまり、東毛地域、言い換えれば利根川以東の地域においては、9世紀末から10世紀初頭に起こった武蔵型甕から羽釜への器種転換、つまり土師器系から須恵器系煮炊き具への転換に対応した生産体制が確立されず、必然的に西毛地域から供給される羽釜の不足分は、武蔵型甕の生産を継続させるか、吉井型羽釜を模倣した土師器の羽釜を生産することで対応したのと考えられるのである。

引用・参考文献

- (1) 木津博明「吉井型羽釜について」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)』1990 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (2) 『賀茂遺跡』1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

第3項 緑釉陶器と灰釉陶器の素地補修

田口上田尻遺跡と田口下田尻遺跡からは、113点の緑釉陶器が出土している。これらの中で、田口下田尻遺跡25号住居出土壙(第547図9)と同10号住居出土皿(第502図29)は、本体を灰色粘土で作成し、高台のみ白色粘土で作成している点に特徴がある。中でも、25号住居出土壙の高台脇には4ヶ所の亀裂が認められ、内面に貫通する2ヶ所には白色粘土を亀裂内にすり込むように塗りつけている。これらのうち、一ヶ所の外面は亀裂に沿って白色粘土を塗りつけ、内面は亀裂を塞ぐように、軟らかい素地を直交方向に撫でた後に亀裂に沿って白色粘土を塗りつけている。他の一ヶ所は欠損部が多く、内面の素地補修は認められないが、外面には亀裂に沿った白色粘土の塗りつけが明瞭に残る。また、この塗りつけた粘土は高台外面に達しており、高台貼り付け後に体部の素地補修が行われたことがわかる(1)。次に、高台に白色粘土を使用した理由であるが、高台部分の欠損部をみると、灰色の胎土内に白色粘土が「V」字状に入り込んでいる箇所が確認できる。従って、高台も亀裂補修をかねて白色粘土で貼り付け、高台以外の場所については別途白色粘土を用いて補修を行ったものと考えられる。

一方、白色粘土で高台を作成している10号住居出土皿に素地補修は認められない。しかし、欠損部を観察すると、底部外面から高台下に向かう亀裂が存在し、釉薬が入り込んでいる。1/2が欠損するため不明確であるが、先の例を考慮すると、本皿もこの亀裂補修を意図し、白色粘土を用いた高台作成を行った可能性もあろう。

両遺物の胎土中には白色粘土の縞が霜降り状に認められ、本来使用する灰色粘土層中に白色粘土が含まれるか、付近の層位に存在すると推測される。白色粘土を用いた理由は不明であるが、細部に塗り込みやすかったのであろう。

灰釉陶器の補修痕は、図示しなかったが、田口上田尻遺跡69号溝出土瓶(口絵)に認められる。部位は頸部下位で、貫通する亀裂を補修している。外面は同じ粘土を薄く塗りつけ、内面は粘土を貼り付けて補修している。内面は粘土が厚いため、向かって右側が剥がれ、他の箇所も亀裂を生じている。

第4項 陶磁器類について

(1) 陶磁器について

陶磁器類は田口上田尻遺跡を中心として出土している。中世では森田分類の白磁D群の皿類が多く出土している。第39図66、245図2、第248図1は高台に抉りを入れ、第227図14は輪高台の皿で、第227図14は壙の底部で、第270図1は皿の口縁部である。群馬県内でも白磁D群皿の出土は一般的であるが、1遺跡の出土量としては多い。白磁以外では龍泉窯系青磁盤(第154図129)や盤類(第40図81)、皿(第216図1)や古瀬戸製品、在地製品にも並行する時期の遺物が認められる。続く16世紀代では、群馬県の遺跡としては大窯製品が多く認められる。時期的には1段階から4段階まで幅広く認められる。大窯製品は瀬戸・美濃窯製品が主体であるが、すり鉢に志戸呂窯製品が1点(第155図134)認められる。大窯製品中でも第86図8と第153図115の同一個体の可能性がある志野盤は高級品かつ稀少例であるうえに、城郭以外の出土例として注目される。また、志野皿(第152図73)や鉄絵皿(第211図4)も稀少例である。これら、16世紀末頃の志野製品が複数出土することは、地域の上層階層の存在示すと考えられる。

加えて、これに続く17世紀前半から中頃の陶磁器も比較的多く認められることも特筆される。瀬戸・美濃陶器では藤沢編年第1～3小期の志野丸皿(第146図4)や反皿(第146図4)、鉄絵皿(第144図10)、天目碗(第185図2)、すり鉢(第154図130)などかなりの器種、量共に豊富である。また、1660年代以前の肥前磁器でも、青磁碗(第151図31)、色絵碗(第151図36)、白磁碗、鉄釉掛分碗(第151図54)、皿(第165図5)、手塩皿(第152図62)などが認められる。また、景德鎮の磁器皿(第151図50)も1点出土しており、近世城郭以外の出土例としては豊富である。

群馬県では、17世紀前半から中頃の遺物がまとまって出土する例は少ない。加えて、16世紀代から17世紀中頃までの遺物が、年代的に連続した状態で見つかる例は、城郭を除けば皆無に近い状態であった。このような中、田口上田尻遺跡、田口下田尻遺跡で出土した陶磁器は、16世紀末以降、有力者の屋敷がこの地に存在した証であらう。

16世紀以前でも、豊富な中国製白磁D群や古瀬戸製品、

在地系土器が認められ、集落としては14世紀後半から15世紀代にまでさかのぼる可能性がある。また、陶磁器類が農山村部に普及し始める17世紀後半頃以降の遺物も豊富に存在し、集落としては江戸時代から現代まで継続していた様子がうかがえる。

(2) 瀬戸・美濃陶器香炉の使用痕

江戸時代の香炉と呼ばれる陶磁器製品に、火入れや灰吹きとして使用されたものが含まれることは、以前から指摘されていた(2)。田口上田尻遺跡出土の瀬戸・美濃陶器香炉にも同様な例が認められたので報告する。

いずれも口縁端部外面に上方からの敲打による小剥離が重複・連続する(第153図103、第192図5、第147図19、第153図108)。端部外面の敲打痕が残存部外周すべてに認められる2点(第39図58、第153図108)は、端部内面突出部にも上方からの敲打による小剥離や端部の潰れが顕著に認められる。このような使用痕からは、煙管の灰をたたき落とす行為が想定され、火入れと灰吹きの使い分けがどの程度明確だったかは不明であるが、香炉が灰吹きとして使用された可能性を示すものと考えられる。

(3) 焙烙の内耳に認められる擦れ

田口上田尻遺跡出土焙烙の内耳内面上部に紐で吊したと推定される擦れが6例(第86図11、第140図1、第142図4、第157図188・193、第146図7)認められた。部位はいずれも内耳上方寄りの両側内側を主とし、擦れと推測される摩擦で器表が摩滅している。また、摩滅痕の顕著な例(第140図1、第142図4)では弧状に窪み、紐による擦れが想定される。また、窪みの幅が共に1cmあり、直径1cm以上の紐を使用していたと推定される。焙烙は、「内耳」と称される釣り手が3ヶ所存在することから、紐などで吊した使用法が想定されているが、紐の擦れ痕が認められる例は少ない。

第5項 砥石について

田口上田尻遺跡、田口下田尻遺跡の両遺跡から、江戸時代を中心とした砥石が多数出土している。これらのうち、約100点を観察して気付いた点を記し、今後の観察視点及び課題としたい。

第1に使用面であるが、高さがあり、未使用面が3面もしくは、使用面が平坦な砥石(第67図56・58)をみると、幅の狭い側を使用面として選択していることが分かる。その後、使用による摩滅が進行すると第86図20や147図12のように側面形が山形を呈するようになるのであろう。2点目はこの側面形状である。卑近な例で恐縮だが、自身が手持ち砥石で研いだ場合、砥石中央が窪み両端が高くなり、出土砥石と逆な形状となる。出土遺物では中央が高く、両端が低い例が多数を占める。出土砥石のような減り方をする研ぎ方はどのようなものであったのだろうか。また、高さが低くても砥面が平坦な例も存在し、これが、砥面調整によるのか、規格や研ぎ方、研ぐ対象物の相違によるかなどの点については不明である。今後は、砥石の規格や使用法などを視野に入れた観察が必要となろう。

最後に、櫛刃状鑿痕を有する砥石は通常砥沢石であるが、1点のみ(67図58)が変質デイサイトであったことも重要である。これをもって直ちに砥沢以外の砥石産地でも櫛刃状鑿調整が行われたとは考えられないが、江戸後期には砥沢の砥石採掘地がかなり深くなっていたことが『経済要録』(3)に記されており、石材枯渇による周辺石材採掘の可能性を含め、今後検討を要する。

註

- (1) 高橋照彦「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告第60集』国立歴史民俗博物館 平成7年において「陶土補充による素地補修」として注目されている。
- (2) 堀内秀樹「香炉」『図説江戸遺跡研究事典』江戸遺跡研究会 2001
- (3) 佐藤信淵『経済要録』文政10年(1827)成立、安政6年(1859)刊岩波文庫版1928年を使用。

第2節 遺構・遺跡について

第1項 古墳時代前期～平安時代の集落について

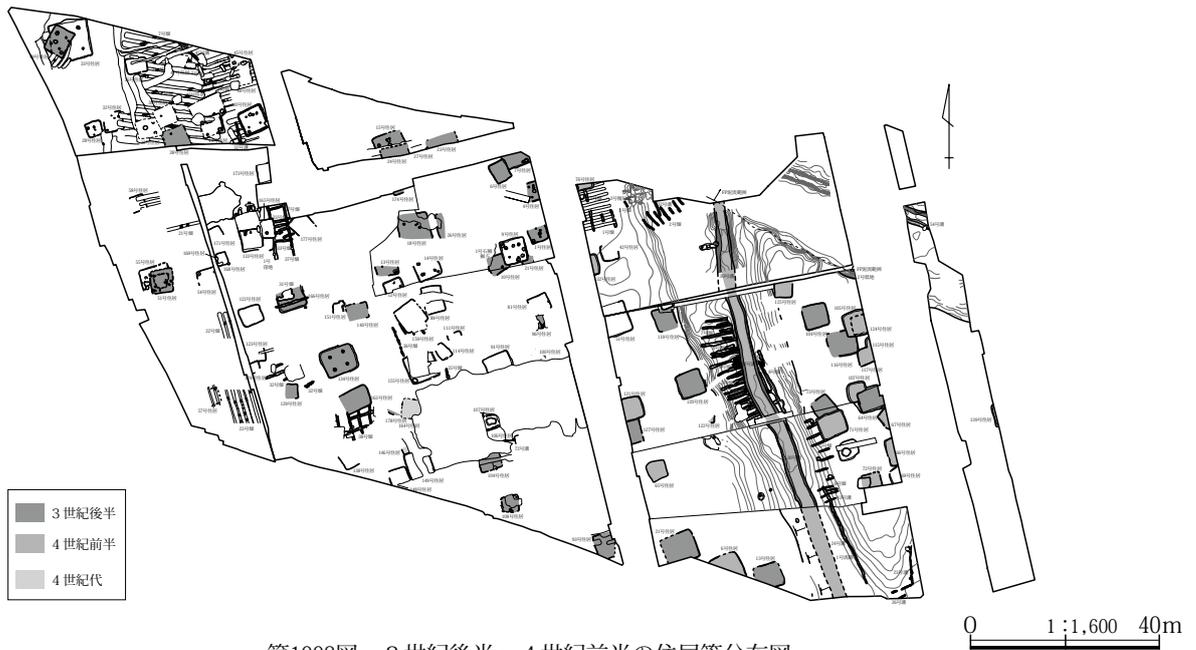
当遺跡で検出された古墳時代前期から平安時代の住居は、311棟に及んでいる。それぞれの住居について出土遺物などをもとに所属時期を想定し、位置付けたのが第1008～1013図である。集落の広がり、桃ノ木川より西側では確認されていないが、国道17号を挟んだ東側に展開していることが田口下田尻遺跡Ⅳ区の調査で確認され、さらに東側の上武道路の調査でも、想定以上の集落の広がりが確認されている。したがって、総括的な集落変遷については、上武道路の調査結果を含めて検討する必要があるため、ここではこれまでに調査された範囲内での変遷について概要を述べるに止めたい。

集落形成が開始されるのは、住居埋没土中のAs-Cの堆積状況から、As-Cの降下以前であることは確実である。この段階の住居出土遺物の年代観から概ね3世紀後半代に集落形成が開始されたと考えられる。この時期の住居は少なくとも18棟が確認されており、続く4世紀前半には34棟と急増している。続く4世紀後半には18棟と減少に転じるが、5世紀前半には24棟とほぼ維持され、5世紀後半の1棟を最後に6世紀代の住居は確認されていない。したがって、3世紀後半から5世紀後半の間に一連の集落の消長があったものとみて良いであろう。住居の分布は、3世紀後半から4世紀前半は、田口下田尻遺跡の1号低地とした谷を挟んで全域に散在しているのに対して、4世紀後半以降は田口上田尻遺跡側に偏った集落展開をしており、5世紀前半には調査区北西端に1辺が8mを越える大型住居が1棟構築されている。

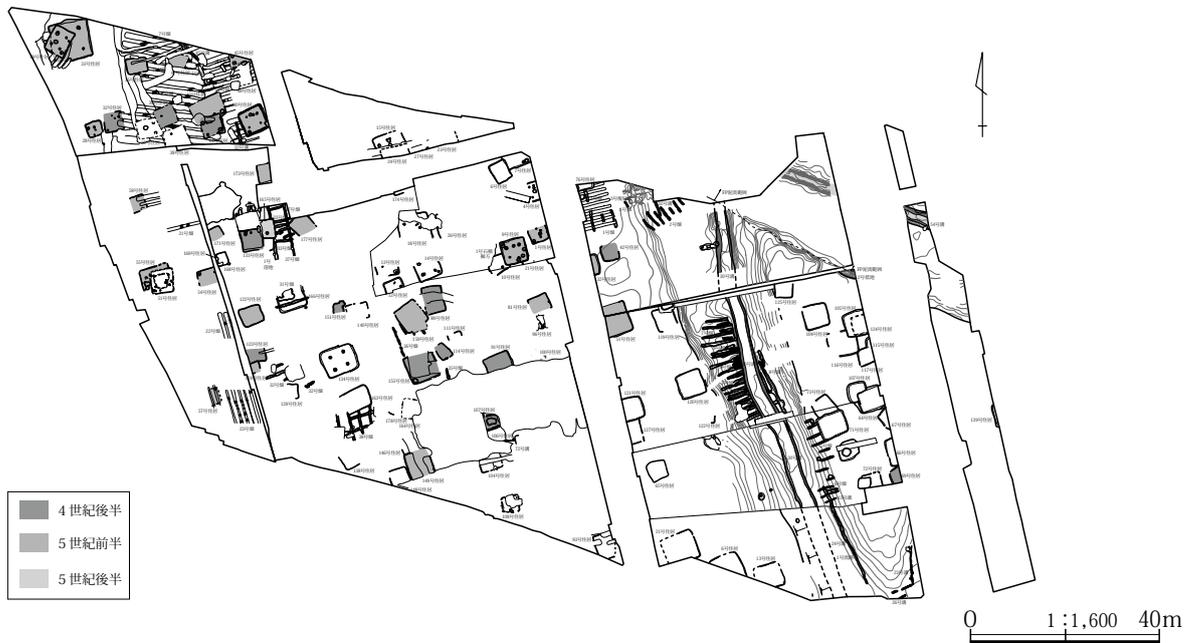
集落形成が開始された3世紀後半から、集落内に畑が作られていたことが確認されているが、弥生時代の定着的な開発痕跡のない場所に、この時期に唐突に集落形成を開始した目的が畑作にあったとは思えない。周辺の状況からみて、本来の目的が遺跡の東側に広がる低地部の水田開発にあったことは容易に想定できることであり、その開発に田口下田尻遺跡30号溝が重要な役割を果たしたと考えられるのである。30号溝は、集落形成がピークを迎えるAs-C降下後に集落内を通過する形で掘削され

ており、通水された痕跡があることから、桃ノ木川から取水した水を低地部へと送水するために計画された用水路と考えられるのである。30号溝の完成時期は特定できないものの、集落が5世紀前半までは比較的安定的に継続していることから、30号溝の完成によって低地部の開発は一定の成果を上げたと考えられるのである。しかし、5世紀後半には住居構築は激減し、6世紀代へと集落は継続していないように見える。30号溝の土層観察によれば、少なくとも2度の洪水と周囲からの土砂の流入などによって、Hr-FA降下以前の時点で用水路としての機能を果たせないほどに埋没が進んでおり、一部には溝の掘り直しの痕跡も認められるものの、遅くとも5世紀後半には30号溝ルートによる低地部への送水はできない状態であったものと思われる。この要となる用水路の埋没が、5世紀後半の急激な集落衰退の要因であった可能性が高いのである。一方、田口下田尻遺跡の北端部に検出した31・54号溝は、30号溝の掘削された谷がある程度埋没した段階で、埋没土を削るようにして形成された南東方向に向かう2号低地とした浅い谷の中に掘削されており、形状や構築方法などから30号溝と同様に用水路の可能性の高いものである。底面に間層を挟まずにHr-FAが堆積していることから、5世紀末に近い時期に掘削されたものと考えられる。溝は東側の低地部に向かっており、前述の30号溝の代替として新たに計画された用水路であった可能性が高いのであり、一時頓挫した低地部開発を5世紀後半に再開しようとしたと考えられる。しかし、31・54号溝は、掘削後通水する間もなくHr-FAで埋没した上に、洪水と榛名山の噴火起源の泥流によって埋没したと考えられ、用水路としての機能を十分に果たすことなく放棄され、その後に復旧された痕跡は見られないのである。また、2号低地を埋めた泥流は、二ッ岳系軽石を主体とするもので、用水路が給水したであろう水田域にも多大な被害を及ぼしたことが予測されるのである。31・54号溝掘削を担った5世紀後半の集落が、田口上田尻遺跡の北側に展開していた可能性は否定できないものの、6世紀代に続く集落形成がなかった要因が、こうした自然災害にあった可能性は極めて高いと考えている。

以上のように、3世紀後半から5世紀後半まで継続する集落は、遺跡の東側に広がる低地部開発を目的として



第1008図 3世紀後半～4世紀前半の住居等分布図



第1009図 4世紀後半～5世紀後半の住居等分布図

いたものと思われ、その開発の主体者であった可能性が高いのである。

次に集落形成が確認されるのは、7世紀代になってからである。前半が13棟、後半には27棟と集落が拡大していく。調査範囲の中央に攪乱があるために明瞭に捉えることはできないが、南北2群のまとまりがあるように見える。続く8世紀代の集落は、前半が9棟、後半が8棟とやや縮小傾向が窺えるが、7世紀代を踏襲して南北2群がありそうである。この時期前半には田口下田尻遺跡5号住居、後半には田口上田尻遺跡84号住居とした鍛冶

工房が操業しており、南北2群の集落に継続的に製品生産と供給を行っていたものと考えられる。

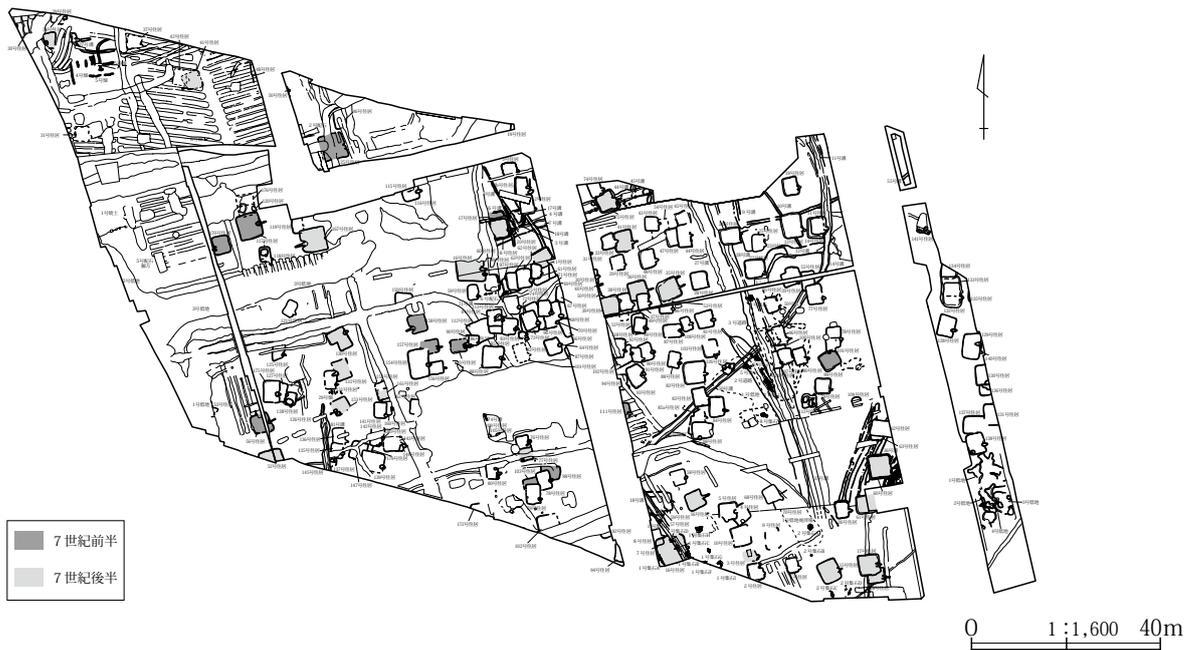
この時期で特筆されるのは、5号住居出土の大型鉸具の存在である。5号住居の鉸具は鉄製の大型品であり、銚帯の鉸具とは考えられないもので、馬具用である可能性が高いのである。駄馬用の馬具については判然としないが、『石山寺縁起絵巻』などでは駄馬には面懸は装着されているものの、轡や辻金具などが用いられたようには見えず、鉸具を必要とするような革帯の使用も見られない。したがって、この大型鉸具は、乗馬用馬具に用いら

第9章 総括

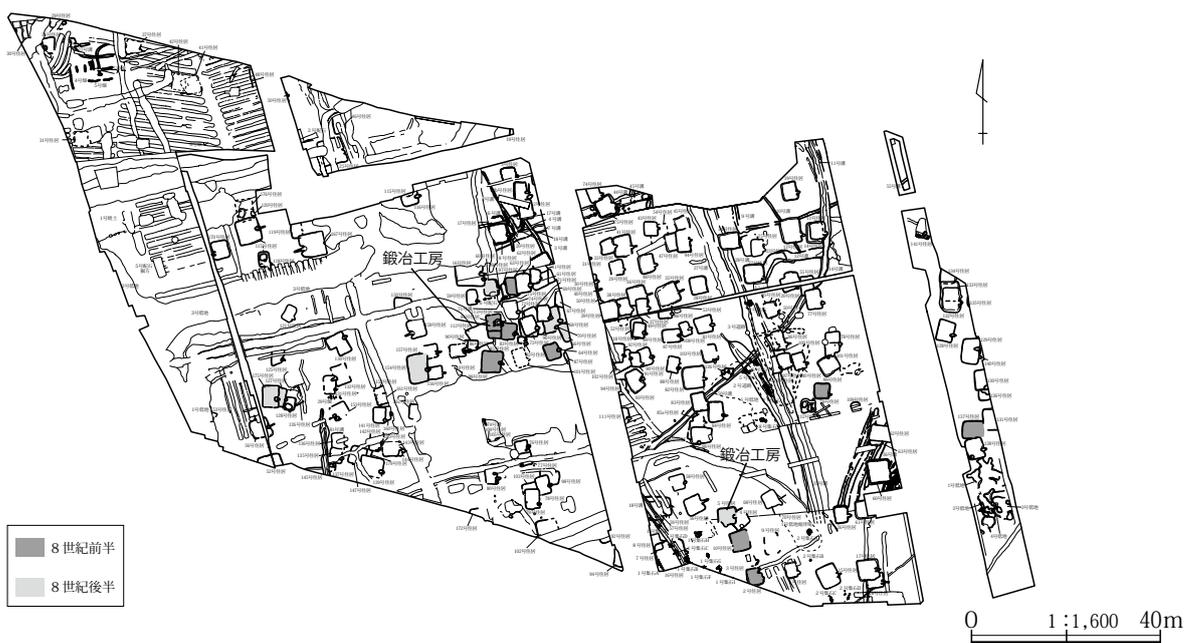
れたものと見るのが妥当であろう。つまり、この資料は、集落付近に乘馬のできるような階層が存在したことを裏付けるものである。小島敦子の集成(1)によれば、9～10世紀代の馬具の出土例は県内でも比較的多いようであるが、8世紀代の馬具出土は稀であり、7世紀代末の資料を加えたとしても半田中原・南原遺跡や鳥羽遺跡など5遺跡5例だけである。その後の資料追加は管見に触れる限り見られないので、今後の調査によって急増することも考えられない。こうした資料の少なさは、この時期乗馬の可能な階層が遍く存在したわけではないことを示す

ものであり、それを出土する遺跡の優位性を裏付けていると見てよいであろう。また、8世紀後半に位置付けた田口上田尻遺跡127号住居から出土した石製の権錘などは、水田経営などと生業を異にする者の存在を示唆しているものとも考えられる(2)。

続く9世紀前半の住居はわずかに5棟しか確認されておらず、8世紀後半の縮小傾向の延長上にあるものと思われるが、後半には21棟と急増している。この段階では7・8世紀代に捉えられた南北2群の間を埋めるように住居が展開するようになり、まとまりは捉えにくくなる。



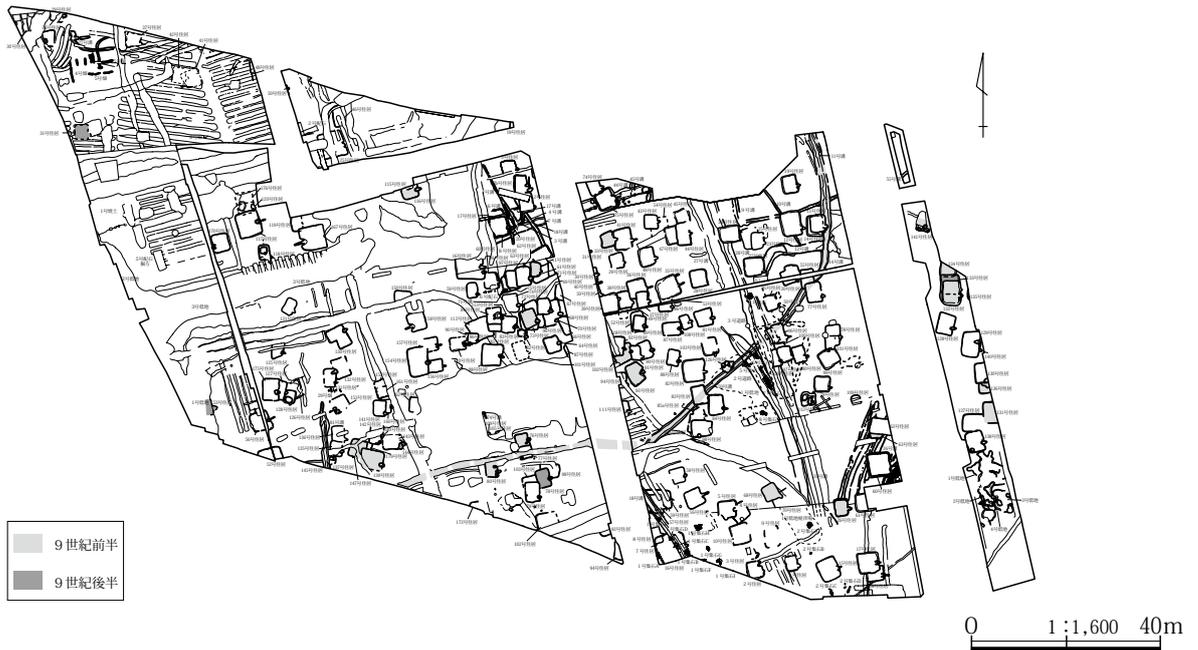
第1010図 7世紀代の住居分布図



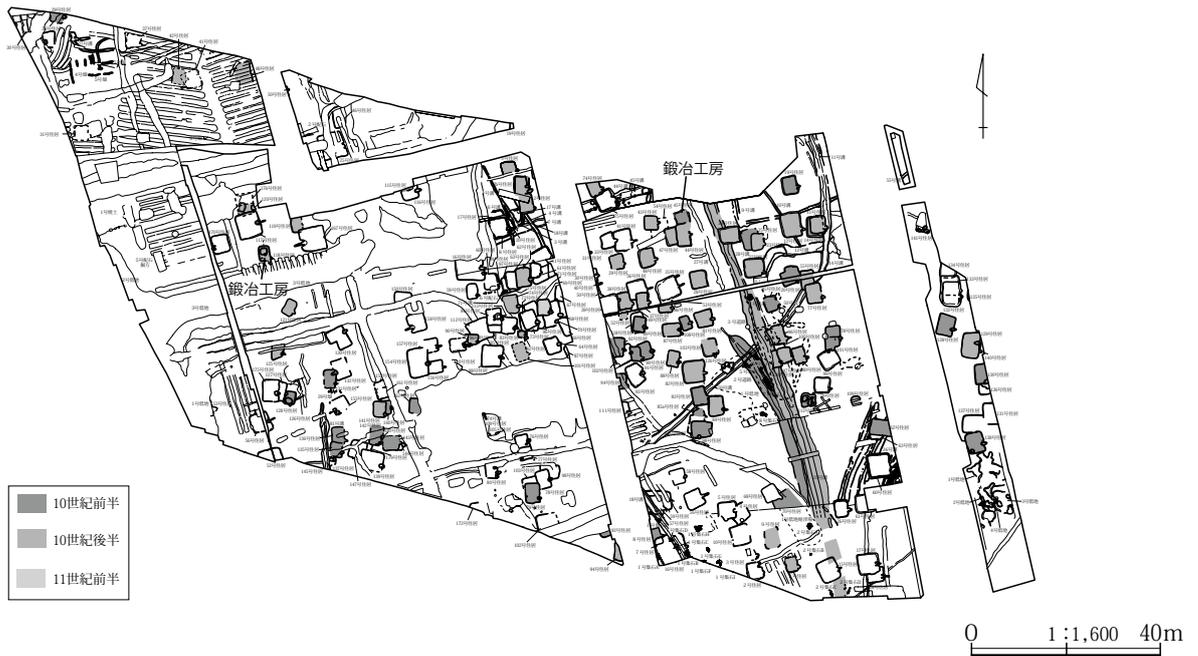
第1011図 8世紀代の住居分布図

また、この時期には、田口下田尻遺跡で北から南西方向へと走行する14号溝が80mほどの長さで検出されており、さらに北と西へと延びていることが想定できる。この溝は、検出状況から用水路や道とは考えられず、区画溝であった可能性が高いものである。したがって、9世紀代には田口上田尻遺跡側に不整形に溝で区画した施設の存在が想定されるのであるが、区画内に際だった遺構は検出されておらず、その性格を特定することはできない。また、この時期の集落縮小が、こうした施設の存在に影響を受けた現象であった可能性がある。

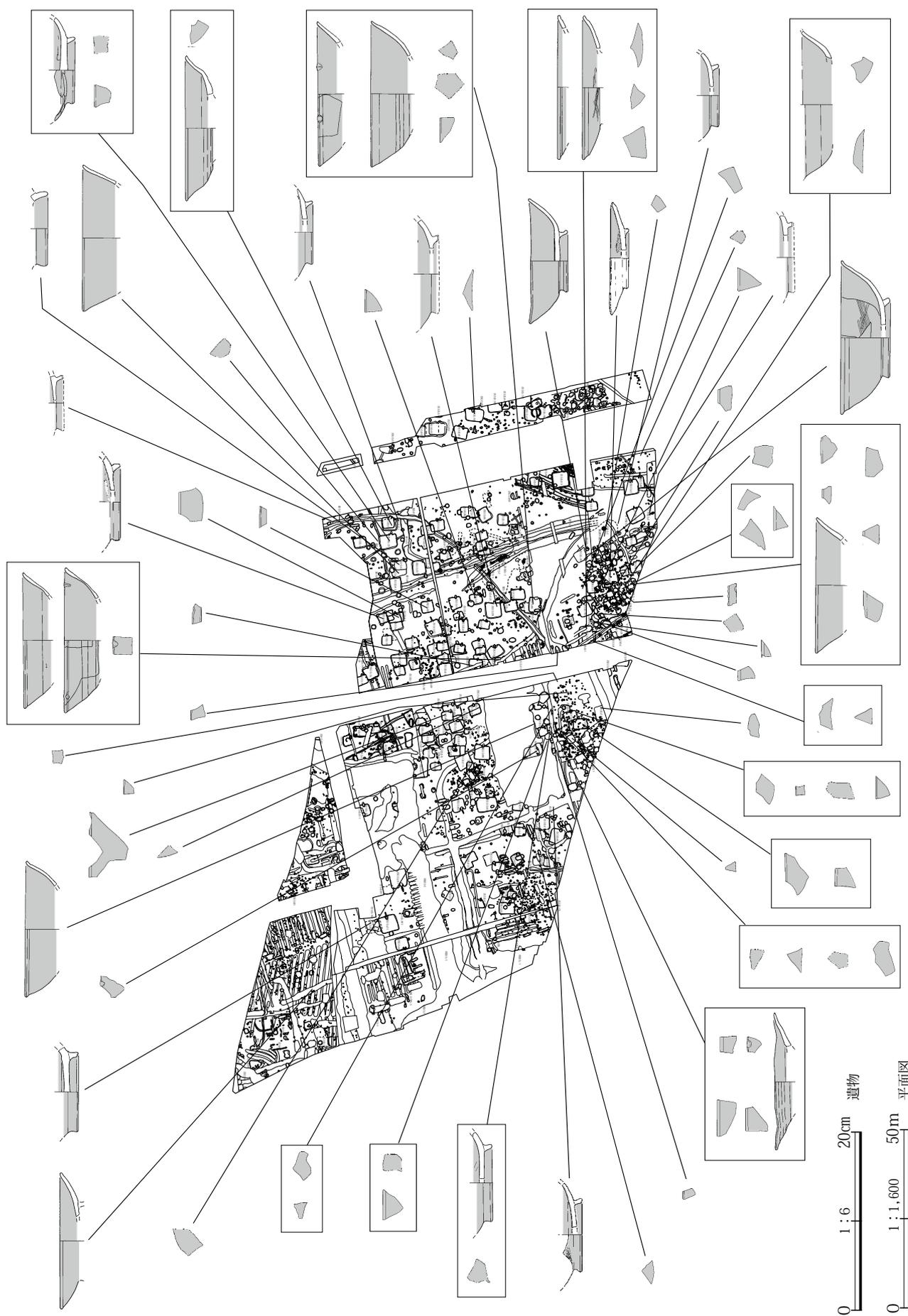
10世紀代の集落は、前半が39棟、後半は52棟と、9世紀後半に開始された拡大傾向が継承され、後半には集落としてのピークを迎えており、11世紀代には集落が継続しない。10世紀代には、南北に走行する道が集落を東西に二分するように存在していたことが分かっているが、この道は溝状に掘り窪めた底面を路面としていた。路面幅は広くないものの、移植ゴテで叩くと音がするほどに硬化が著しく通交も比較的盛んであったものと思われる。駅路などとは比較にならないほど小規模であるが、踏み分け道などと違って明らかに恒常的に使用するため



第1012図 9世紀代の住居等分布図



第1013図 10世紀～11世紀前半の住居等分布図



第1014図 緑釉陶器出土位置図

に構築されたものである。このような構造の道がありふれたものであれば、これまでの集落調査でも広く発見されているはずであるが、検出例が多いとは思えない。この道は、集落間を結ぶような幹道であった可能性が高いものであり、集落規模から見て幹道沿いに形成された拠点的な集落の一つであったと考えられるのである。しかし、集落は竪穴住居だけで構成されており、掘立柱建物などのより優位な建物は検出されていない。一方、出土遺物には集落の優位性を示すような要素をわずかではあるが抽出することができる。それは、施釉陶器の出土量が多いことである。県内では、10世紀代の集落調査で灰釉陶器出土が比較的多いことは認識されているが、当遺跡では灰釉陶器の出土が多いばかりでなく、緑釉陶器が113点出土している(第1014図)。これは清里・陣場遺跡、三ッ寺大下IV遺跡などと並んで、県内でも有数の出土数を誇るものである。壺・皿の2種と単純な器種構成であり、特殊な器種は含まれていないものの、胎土・釉調などの違いから相当の点数があったことは確実である。緑釉陶器を多数保有した可能性のある施設として官衙や寺院が想定されるが、当遺跡に官衙や寺院と関連づけるような遺構はなく、至近にそうした施設の存在も考えられず、本来的に当遺跡の集落内で保有されていたと考えて差支えないであろう。こうした高級食器の多数保有の背景には、富裕層などの優位な階層の存在が最も想定しやすいのであり、これを示唆するような遺物が出土している。それは、10世紀代と判断した田口下田尻遺跡10号住居出土の壺鐙の帯端金具の存在である。帯端金具には鐙の木質が残存しており、鐙そのものが存在したことは明らかであり、この時期にも乗馬できる階層の存在が示唆されるのである。また、他に10世紀前半の田口下田尻遺跡62号住居出土の石製巡方と、10世紀後半の82号住居出土の鉸具がある。62号住居の石製巡方は、4.2cm×3.9cmと大型で、松村恵司氏の銅製銚帯と位階との対応関係(3)に従えば、正6位相当の位階を示す大きさである。また、82号住居出土の鉸具が銚帯のものであるとすると、銚板幅が約3cmであり正8位に相当する。10世紀においても銚帯が位階表示機能を有していたとすれば、短絡的な発想ではあるが、集落周辺に外位としても10世紀前半には正6位、後半には正8位相当の位階保有者の存在が想定されるのである。

以上のように、7世紀代以降に形成された集落は、棟数の増減はあるものの10世紀後半まで途切れることなく継続したものと思われ、8世紀以降には遺構・遺物から優位な階層の存在が示唆されるのである。前述の古墳時代前期の集落形成の背景には、開発集団を率いた外部有力者の存在が想定されるものの、7世紀代以降の集落では、集落内で成長していった有力者の姿が垣間見られるのである。こうした有力者の成長の背景として注目しておきたいのは、道と鍛冶遺構の存在である。特に10世紀代の鍛冶遺構については、上武道路部分において、より大規模な鍛冶遺構が検出されていることから、新たな資料を踏まえた再検討が必要となろう。

引用・参考文献

- (1) 小島敦子「群馬県における集落出土の馬具」『荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ』1997 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (2) 神谷佳明 笹澤泰史「出土度量衡遺物について」『研究紀要26』2008 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (3) 松村恵司「銚帯金具の位階表示機能」『銚帯をめぐる諸問題』2002奈良文化財研究所

第2項 鍛冶工房について

遺跡では、①8世紀前半(A型)、②8世紀後半(B型)、③10世紀後半(C型)、④近世の鍛冶工房(D型)の4時期の鍛冶工房が検出され、時期ごとに遺物や遺構に特徴があることがわかった。

群馬県では、7世紀中頃から8世紀前半は箱形炉、8世紀中頃から10世紀前半は半地下式竪形炉(管ノ沢型・竪形炉)、10世紀後半以降は小型自立炉(西浦北型・竪形炉)による製鉄が行われており、12世紀以降は製鉄が衰退している[笹澤2007]。本遺跡で検出されたA～D型の鍛冶工房は、全ての時期の製鉄炉に対応しており、各製鉄炉に対して集落でどのような鍛冶工程が行われていたかを解明する貴重な資料である。

(1) 検出されている鍛冶工房

検出されている鍛冶工房は、8世紀前半(A型)の田口下田尻遺跡5号住居、8世紀後半(B型)の田口上田尻遺跡84号住、10世紀後半(C型)の田口下田尻遺跡45号住居(C-1型)、田口上田尻遺跡118号住居(C-2型)である。また、近世の屋敷跡周辺から羽口や椀形鍛冶滓が出土した(D型)。

A型(8世紀前半)

8世紀前半の田口下田尻遺跡5号住居(鍛冶工房)をA型とした。遺構内から鍛冶炉1基が検出されている。鍛冶工房自体から出土している鉄滓はほとんどなく、廃滓場と考えられる低地部や周辺の60号住、61号住、68号住、70号住などの覆土から羽口や鉄滓が出土している。

椀形鍛冶滓 椀形鍛冶滓は中以下の小型のものが主体で、細かく割られた椀形鍛冶滓が出土しているのも特徴である。銹化した含鉄部はほとんどなく、内在する鉄部は少ないようである。滓質は粗で比重は比較的低い。数は少ないものの、中には第741図-53のような滓質が密で比重が高い椀形鍛冶滓も含まれている。滓は、光沢のある灰褐色を呈しており高温操業の可能性を示している。同一工房で複数工程を行っていたようだが、小型の粘土質熔解物主体であることから鉄器製作が中心に行われていたと考えられる。サンプル調査ではあるが、遺構内の床面からわずかに粒状滓や鍛造剥片が出土しており、鍛冶工房であったことがわかる。鍛造剥片は薄手で小型のものが多く。

羽口 8世紀前半の羽口は、きめ細かい胎土。白色軽石を含む細かい粒子の胎土で通風孔内面を先端～基部まで丁寧に撫でている。羽口の厚さは通風孔の内径に対してやや薄手。外面は丁寧に撫でており基部周辺は指頭圧痕があるものもある。基部先端部にナデ調整はなく肉厚もまばらで荒れている。先端部の溶損はやや丸みを帯びた形状で直線的に溶損したものはない。通風孔直径は約2.1cmで共通しており、工具の直径を表している。体部～基部に向けてラッパ状に開く。ラッパ状に開いた内面も丁寧に撫でている。様々な部位の羽口が出土しているが、完存していれば1号低地廃滓場から出土している羽口はほぼ同じ形態であろう。

廃滓場の小割りされた椀形鍛冶滓 1号低地廃滓場からは、上面が平坦で下面が椀状を呈し、鍛冶炉の炉床土の付着などがある小割りされた椀形鍛冶滓が0.8kg出土した(廃滓場出土の滓中の3%)。小割りされた滓は、ほとんどが光沢のある灰褐色～青黒色の気泡の少ない滓で破面から銹化した含鉄部が露出している遺物もある。本工房では、椀形鍛冶滓中の金属鉄も割り取っていた可能性がある。

小結 前述したように、A型鍛冶工房の椀形鍛冶滓は小

型のもものが主体で、滓質が粗で比重は比較的低く、鉄器製作時に排出された滓の特徴がある。数は少ないものの、滓質が密で比重が高い椀形鍛冶滓第741図-53も含まれていたが、自然化学分析によると、鉄器製作時の鍛錬鍛冶滓である。

群馬県では、7世紀中頃から後半には箱形炉が導入され、8世紀前半までは箱形炉による製鉄が行われている。この時期の箱形炉が検出される太田市峯山遺跡などの製鉄遺跡には精錬鍛冶工房が付設しており、製錬された原料鉄は、製鉄炉付近の工房で除滓や成分調整を済ませていたと考えられ、集落の鍛冶工房には不純物の少ない鉄素材が搬入されていたと考えられる。また、鉄素材が貴重であるため、椀形鍛冶滓からの金属鉄の取り出しも、行っていたようである。

B型(8世紀後半)

8世紀後半の鍛冶工房である田口上田尻遺跡84号住居をB型とした。工房中央に長軸45cm・短軸38cmの楕円形状の鍛冶炉、直径約110cm・深さ約60cmの円形の土坑、深さ約30cmの方形の金床石設置跡が検出された。粒状滓・鍛造剥片の分布や、鍛冶炉・金床石設置跡・円形土坑の検出位置から、円形土坑内に工人が入り、左手に鍛冶炉、右手に金床石を配置し、立位で鍛冶操業を行っていたと考えられる。鍛冶工房内から遺物が多く出土しており、工房外からの遺物量は少ない。

椀形鍛冶滓 椀形鍛冶滓は特大から極小まで様々なものが出土しているが、大型で完存形が多い。大型のものは厚く、鉄部が多く内在し、滓全体が銹化している。滓質は密で、鉄部が多く、比重が高い。小型の椀形鍛冶滓の中には、粘土質熔解物主体のものもある。大型の椀形鍛冶滓の滓質は精錬鍛冶工程、小型の椀形鍛冶滓は鍛造鍛冶工程で排出される特徴をもつ。椀形鍛冶滓の性質から、同一工房内で精錬から鍛造鍛冶まで工程を行っていたと考えられる。

羽口 8世紀後半の羽口は白色軽石を含む荒い粒子の胎土で、通風孔内面は芯棒を抜き取ったままで、整形されていない特徴がある。外面の整形も荒く、指頭圧痕が観察される。羽口の厚さは通風孔の内径に対してやや薄手である。通風孔の直径は約2.8cmである。基部は比較的直線的で、内面はラッパ状に開く。様々な部位の羽口が出土しているが84号住居から出土している羽口はほぼ同じ

形態である。

微細遺物 本遺構の床面付近からは多量の粒状滓・鍛造剥片などの微細遺物が出土しており、床面直上付近の微細遺物を25cmメッシュで設定したグリッドごとに取り上げ、計測した。鍛造剥片は、鉄が熱せられ、鍛打された際、その表面にできた酸化被膜が飛び散ったもので、金床石周辺の床面で、多く検出される傾向がある。

本遺構で、最も粒状滓・鍛造剥片が飛散しているのはG-6グリッドであり、その次にH-6、G-2が続く。さらにはその周辺のG-7、F-6、H-5、G-4に鍛造剥片が多く出土しており、円形土坑に接した方形の窪みに金床石が設置されていたことが判明した。

小結 B型の鍛冶工房から出土した椀形鍛冶滓は、大型と小型が混在し、大型の椀形鍛冶滓の滓質は密で、小型は粘土質溶解物主体である。椀形鍛冶滓の性質から、同一工房内で精錬から鍛造鍛冶まで工程を行っていたと考えられる。さらに、自然科学分析により、大型が徐滓・成分調整目的の精錬鍛冶滓、小型が高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓であることが確認された。

群馬県地域では8世紀中頃には渋川市金井製鉄遺跡や前橋市乙西尾引遺跡で半地下式豎形炉による操業が行われている。半地下式豎形炉が検出される製鉄遺跡では、必ずしも精錬鍛冶工房が伴う遺跡ばかりではなく、粗鉄の除滓や成分調整は、製鉄工房から搬出された後、鉄器を製造する集落内の鍛冶工房でも行っていたと考えることができる。本遺跡B型の鍛冶工房では精錬鍛冶から鍛錬鍛冶工程を行っており、半地下式豎形炉で生産された除滓の必要な粗鉄が搬入され、精錬から鍛錬までの工程を行い、鉄器製作が行われていたと考えることができる。

椀形鍛冶滓には鉄部が内在しているために錆化しているが、小割りして取り出した痕跡はない。前代(A型)と比較して鉄素材の供給量が増加していることが窺える。

C型(10世紀後半)

C-1型 10世紀後半の鍛冶工房である田口下田尻遺跡45号住居をC-1型とした。鍛冶炉が2基検出された。椀形鍛冶滓・微細遺物 鍛冶工房内からは羽口や椀形鍛冶滓が出土している。椀形鍛冶滓は小型が多く、細質は密で比重が高い。サンプル調査ではあるが、粒状滓・鍛造剥片とも比較的多く出土しており、鍛造剥片は厚手で大型のものから、薄く小型のものまで様々ある。

羽口 田口下田尻遺跡の10世紀後半の羽口は、きめ細かい胎土で、白色軽石を含む細かい粒子の胎土でスサを少量含む。焼成は甘くもろい。成形は歪んでおり、外面は荒いナデ整形をしており、先端部の溶損は通風孔に対して直角で平坦である。肉厚であるため、内径が小さく見えるが、通風孔内径は長軸2.5cm、短軸1.9cmの楕円形を呈する。形状は基部が窄む特徴的な形状で、基部先端部に弱い被熱痕がある特徴がある。

小結 C-1型の椀形鍛冶滓は小型が主体で、滓質が密で比重が高い。自然科学分析によると、椀形鍛冶滓は、脱炭(「下げ」処理)時に排出された可能性がある滓で、銑鉄を素材として鍛造鉄製品を製作していた工程が想定される。分析した椀形鍛冶滓(TAG-13)の中には未溶解の鉄器片が残されており、鋳物を鉄素材として利器に加工していた可能性もある。

C-2型 10世紀後半の鍛冶工房は2基あり、田口上田尻遺跡118号住居をC-2型とした。鍛冶炉が1基、足入れ土坑の可能性が高い円形土坑が1基検出された。

鍛冶工房内からは羽口・椀形鍛冶滓が出土した。粒状滓・鍛造剥片とも比較的多く出土しており、鍛造剥片は厚手で大型のものから、薄く小型のものまで様々である。**椀形鍛冶滓** 椀形鍛冶滓は中から極小があり、滓質は密で比重が高いものから、粘土質溶解物主体のものまである。滓には鉄部が内在し、全体が錆化している特徴があり、C-1型と共通する。滓の種類が多く、同一工房で複数工程を行っていた可能性がある。

羽口 羽口はきめ細かい胎土で、白色軽石を含む細かい粒子とスサを少量含む。焼成は甘くもろい。成形は歪んでおり外面は丁寧なナデ整形を行っている。先端部の溶損は通風孔に対して直角で平坦なものと同先端部の形状が丸いものと2種類ある。

小結 椀形鍛冶滓には様々な形態があり、複数工程が想定される。自然科学分析によると、中型の椀形鍛冶滓(TAG-15)は、銑鉄からの「下げ」脱炭、小型は、低品位粗鉄からの高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓である。断面が肉厚で、先端が直線的に溶損している特徴的な羽口は、「下げ」脱炭時の羽口である可能性がある。

D型(近世)

近世の鍛冶工房を検出することはできなかったが、田口上田尻遺跡屋敷跡を検出したⅢ～Ⅳ区周辺で、近世の

羽口と椀形鍛冶滓が出土した。羽口の形状は2種類あるが、通風孔部内径が基部から先端部に広がる形状や、胎土がきめ細かく、筒状に丁寧に整形し、外面全体を一樣に撫でる特徴は共通している。

椀形鍛冶滓 椀形鍛冶滓は1点出土している。他時期には見られない大型で薄手の特徴的な形状である。滓質は粘土質である。

羽口 羽口はきめ細かい胎土が主体で、焼成は固く締まっている。外面は丁寧に撫でられている。外面基部周辺には炭化物が付着している。

羽口は2種類あり、一方の羽口は外形が筒状で直線的であり、もう一方は外径が先端に向かって広がる特徴的な形状である。両羽口とも内径が3.0～3.5cmと大きく、基部から先端部に向かって内径が広がっている。後者は外面全面に炭化物が付着している。

小結 薄手で大型の粘土質熔解物主体の椀形鍛冶滓は、ほとんど成分調整の必要がない鉄素材が加工されていた際に排出されたと考えられる[大澤2010]。粘土質溶解物主体の滓は、鉄素材が酸化により目減りしないように塗布した粘土汁が起源であることが推定され、成分調整が必要ない状態の鉄素材が、本工房に持ち込まれていたものと考えられる。

(2) まとめ

群馬県地域では、箱形炉から半地下式豎形炉、小型自立炉へと製鉄炉の炉型が展開している。田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡では、箱形炉、半地下式豎形炉、小型自立炉といった古代の群馬県地域で想定される全ての製鉄炉型に対応した時期の鍛冶工房が検出された。

今回の田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡の調査を通して、箱形炉の時期には成分調整のほとんど必要のない鉄素材、半地下式豎形炉の時期には精錬が必要な鉄素材、小型自立炉の時期には鑄造鉄製品を含む銑鉄素材、たたら製鉄の時期には成分調整の必要のない鉄素材が集落内の鍛冶工房に持ち込まれ、鉄器生産が行われていたことが明らかになった。

引用・参考文献

- 大澤正己2010「三軒屋遺跡出土鍛冶関連遺物」『三軒屋遺跡Ⅱ』伊勢崎市教育委員会
 菅澤泰史2007「群馬県における古代製鉄遺跡の出現と展開」『研究紀要25』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

第3項 田口上田尻遺跡1・2号建物について

本項は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団から提供された実測図・写真、及び調査担当者からの聞き取り調査結果をもとに作成したものである。

(1) 1号建物

当建物に関わる発掘資料としては礎石、囲炉裏・竈・便槽等で、建築部材は出土していない。

1 礎石に記された番付と柱心・柱寸法

礎石17個に番付、柱心・柱寸法等と推定する墨書が記されている(第1015図)。その内容は次の通りである。

- 1) 番付、及び柱心・柱寸法の両者を記した礎石～9個
- 2) 番付のみを記した礎石～6個
- 3) 柱心・柱寸法のみを記した礎石～2個

番付は建物を新築または解体移築する場合、柱、梁、桁、束等の部材の組立てに便利なように、部材に付けられる符牒またはそのシステムを示すものである¹⁾。最も簡単なものとして絵柄で会わせる「合紋²⁾(あいもん)」、一定の方向に渦巻状に回る「回り番付³⁾」、ジグザグ状に回る「時香(じこう)番付⁴⁾」、幾何学における座標を利用する「組合せ番付⁵⁾」、等がある。

当建物の礎石に墨書で記された符牒は「九」「十」「十一」「に」「に二」「に八」「二ノ九」、「〇二」「〇三」、「中一」「中二」、「〇」、「ろ」「ろ二」「い十四」等である。このうち「ろ二」は建造当初の位置移動していると推定する礎石に見られるもので、他は全て移動していない建造当初の礎石に見られるものである⁶⁾。当建物に見る番付は、符牒から判断すると、「組合せ番付」といえよう。礎石に記された番付、及び復元平面図(第1017図)より推定する柱位置及び番付を第1016図に示す。

当建物の礎石には前述した符牒の他に、半(以下、ダブルプラスと称する)、+(以下、シングルプラスと称する)等の墨書で記された記号が見られる。これらは柱心・柱寸法を示すもので、ダブルプラスの大きいプラスの交差点とシングルプラスの交差点はそれぞれ柱心、ダブルプラスの大小のプラスの交差点間の寸法は柱の2分の1の太さを示すものと推定する。

遺跡平面図(縮尺40分の1)よりスケールで読み取れた柱心々寸法を示したのが第1015図における寸法値であ

る。これより床上部分の1間相当の平均長(m)を算出すると床上部分と土間部分は共に1.82mとなる⁷⁾。

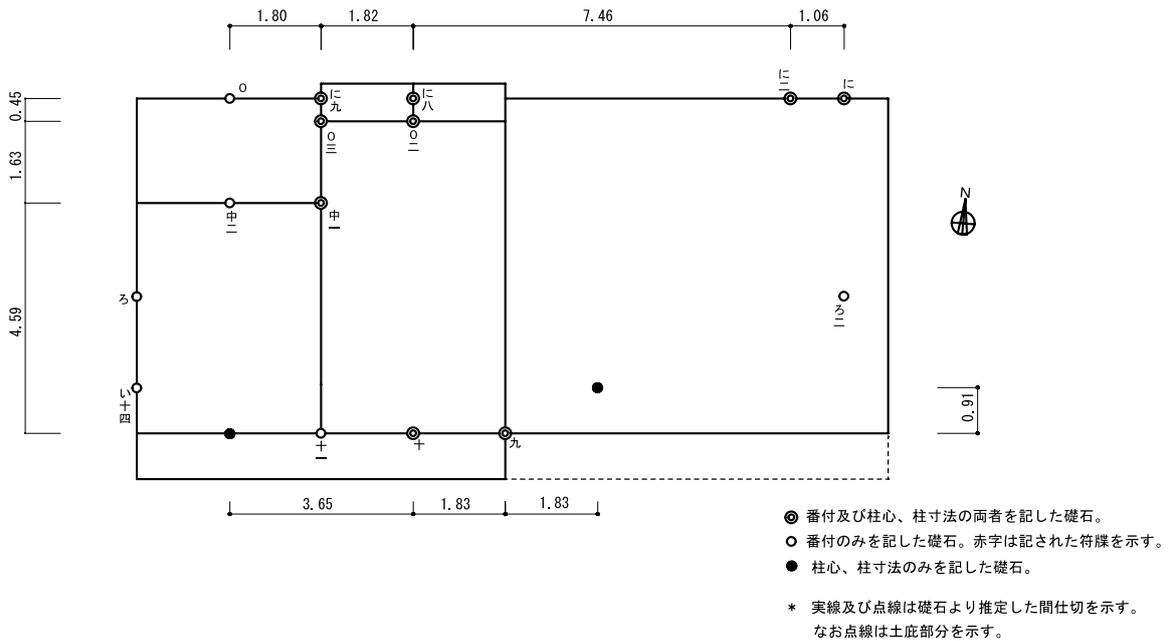
次に、礎石に墨書で記されたダブルプラスの記号を礎石詳細平面図(縮尺4分の1)からスケール読み取り柱寸法(太さ)を推定すると、番付「い十一」に位置する柱が5.4cmの2倍で10.8cm(3.56角)角、番付「に」に位置する柱が6.4cmの2倍で12.8cm(4.22寸)角である。

2 平面形式と構造

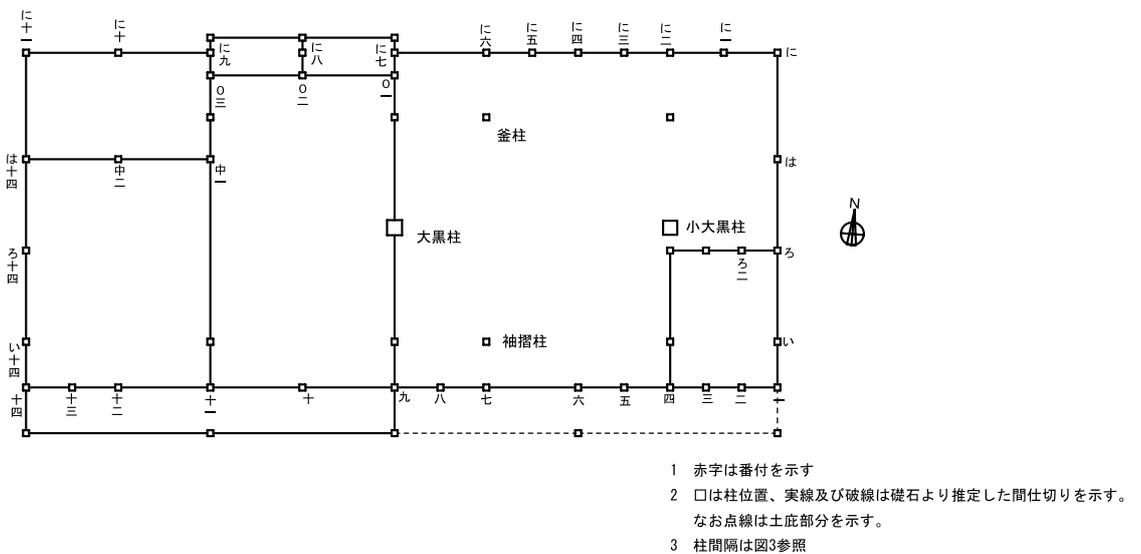
礎石、囲炉裏・竈・便槽等から推定した復元平面図を

第1017図に示す⁸⁾。第1017図では1間の長さの基準寸法は前述した1.82mを採用した。当建物は南面して建つ「左勝手⁹⁾」の建物で、規模は正面14.85m(8間1尺)、側面6.67m(3間4尺)〔正面の土庇¹⁰⁾(どびさし)を含むと7.58m(4間1尺)〕である。

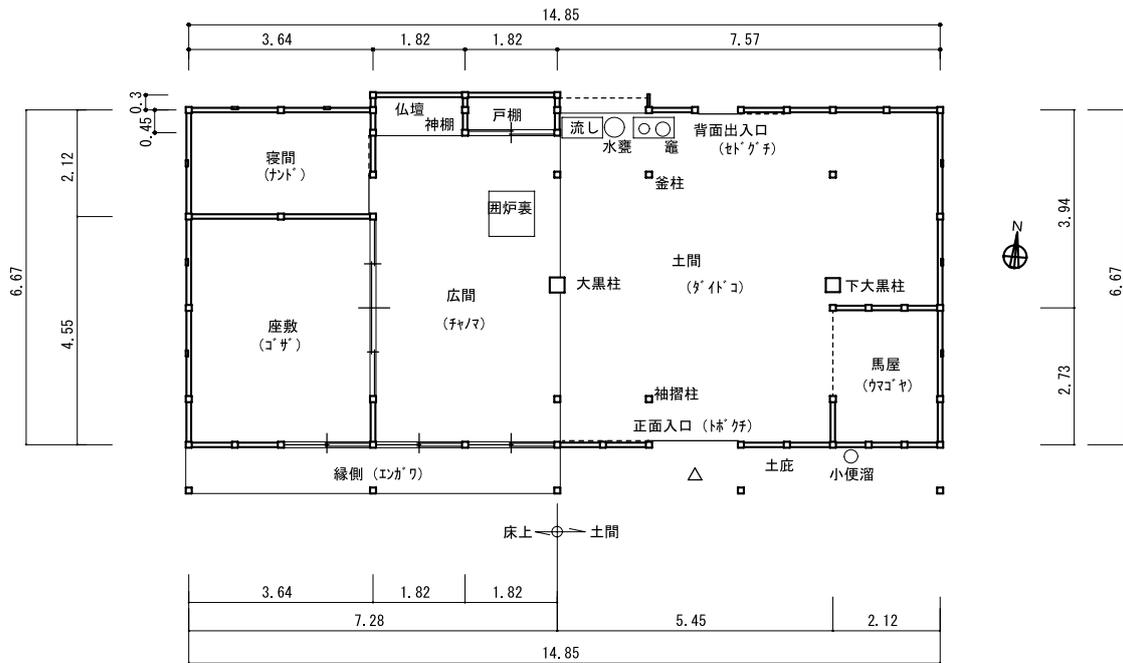
床上は土間に接する広間(チャノマ)、その奥に寝室(ナンド)と座敷(コザ)の3室を配置する。この平面形式は「三間取り・広間型¹¹⁾」と呼ばれ、民家の農家に見られるものである。この平面形式は近世農家の最も一般的平面



第1015図 1号建物 番付、柱心・柱寸法を記した礎石(1/150 単位m)



第1016図 1号建物 推定柱位置及び推定番付(1/150 単位m)



第1017図 1号建物 復元平面図(1/150 単位m)

形式として近世後期に普及した4室を田の字形に配置する「四間取り・田字型¹²⁾」の前段階の平面形式といわれている。

広間は炊事、食事、団欒、さらに作業、日常の接客などに用いられ、囲炉裏は当初からのもので、北側に仏壇・神棚、及び戸棚を配置していたと推定する。座敷は日常は寝間や納戸として用いられるが、冠婚葬祭時、また特別な客の接客用として用いられた部屋である。なお、内便所¹³⁾は設けていない。

土間には広間沿いの北側に流し・水甕、その東側に二口の竈、東南隅に馬屋¹⁴⁾を配置し、正面出入口近くに袖摺柱¹⁵⁾ (そですりばしら)、北側の竈の近くに釜柱(かまばしら)を立てていたと推定する。そして、馬屋外側の土庇部に小便槽¹⁶⁾を設ける。

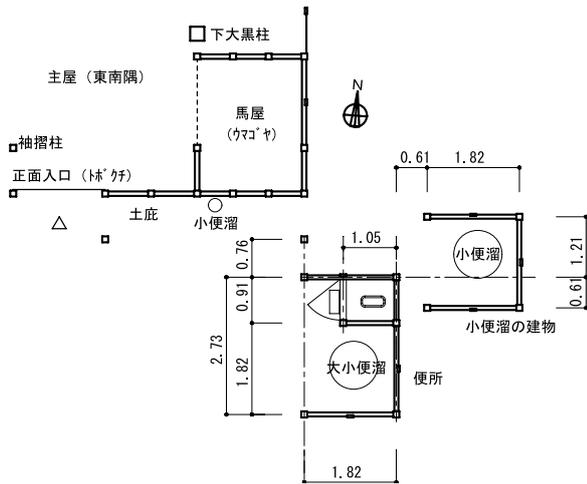
当建物の建造年代は天明の浅間押しの遺構であることから、天明3年(1783)より以前であることは明かである。一般的には座敷における2間の柱間内法寸法は建造年代推定の有力な指標となるわけだが、当建物は心々2間(3.64m)であり、その指標とならない¹⁷⁾。しかし、当建物は平面形式が18世紀中期以降に普及したとされる「四間取り・田の字型」より古い「三間取り・広間型」であること¹⁸⁾、規模は正面8間1尺、側面3間4尺(土庇を含

み4間1尺)と比較的大きく「三間取り・広間型」としてはある程度発展した平面であること、「四間取り・田の字型」ではほとんど見られない古い構法とされる袖摺柱と釜柱を採用し、扱首組のスパン(梁間)が2間半と小さくこと、仏壇を広間の北側に設けていること¹⁹⁾、等の諸点から18世紀前期に建造された遺構であると推定する。

当建物の礎石から推定できる平面形式、構造等について前述したが、これ以外について18世紀前期の建造を前提に、筆者の県内における過去の民家調査結果を考慮して詳細部分を検討してみると次のようになる。当建物は平屋建て²⁰⁾で真壁造²¹⁾、屋根は寄棟造・草葺き²²⁾、袖摺柱及び釜柱の内側が扱首組²³⁾ (さすぐみ)の上屋²⁴⁾ (じょうや)、外側は下屋²⁵⁾ (げや)の構造、柱は石場建て²⁶⁾ (いしばだて)で土台²⁷⁾は用いず、床は広間と寝間を板張り、座敷を畳敷き、天井は座敷のみが棹縁天井²⁸⁾ (さおぶちてんじょう)で他の部屋と土間には張られていなかったと推定する。

(2) 2号建物

発掘された当建物に関わる資料としては礎石と3つの便槽のみである。便槽は3つあるが、南側の大小の2つの便槽は、便所のもので共に大小使用の溜め、北側の1



第1018図 2号建物 復元平面図(1/150 単位m)

つの便槽は小便用の溜めであったと推定する²⁹⁾。このように当建物は2棟から構成されていたと考える。礎石、便槽等から推定した復元平面図を第1018図に示す。

便所は西面して建つ木造・真壁造の平屋建てである。規模は正面2.73m(1間半)、側面1.82m(1間)、屋根は切妻造の板葺(または杉皮葺)、土台は無く柱は石場建てであったと推定する。小便溜めの建物も西面して建つ木造・真壁造の平屋建てである。規模は正面、側面ともに1.82m(1間)、屋根は切妻造の板葺(または杉皮葺)であったと推定する。

民家における便所等の付属建物は、建て替えサイクルが主家より短いことや、研究調査で軽視されてきたことから、建造年代を推定する指標が明らかになっていないといえよう。管見ではあるが先行研究も見あたらない。これらのことから、この二棟の建造年代は天明の浅間押し(天明3年(1783)以前)ということで止めたい。

(3) まとめ

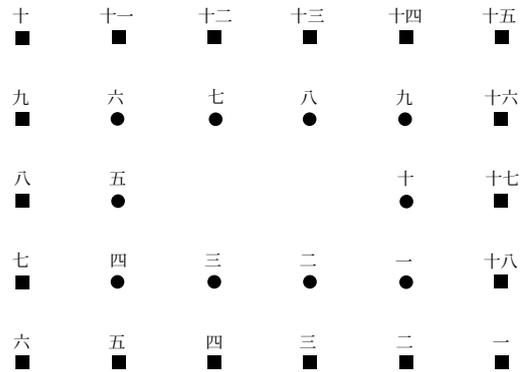
一号建物は18世紀前期における、「三間取り・広間型」の農家の発展過程を明らかにする上で、また、礎石に番付と柱心・柱寸法をの墨書を残していることから、民家の普請技術を知る上で貴重な遺構である³⁰⁾。

二号建物は、肥料において小便が大便より優位性があり、小便溜めの建物が便所とは別棟として建てられていたことを明らかにする遺構として価値がある。

註

- (1) 新築建物に対する番付は15世紀頃に現れた。番付の符牒は仕口・継手部分に墨書きされるので組み立てられてからは外から見えない。桃山時代の城郭建築において最も多く使われるようになり、江戸時代に入ると民家を含めて一般化した。
- (2) パターン(紋)または記号を利用して部材の位置と方向を指示するもの。松本城天守の下見板の框に使われている。「回り番付」「組合せ番付」「時香番付」等に比べると、順序が組織化されていないのと、紋の種類を多く作り出さなければならない点で劣る。紋の代わりに特に数字を使った場合は「合番(あいばん)」という。
- (3) 番付の一つ。数字の「一、二、三」または「い、ろ、は」を使って建物の一隅から時計回りに番を追っていくもの。16世紀初頭に現れ、栃木県の地藏院本堂(1542)の柱に見られるものが古い。城郭建築において初めて最も多く使われ、民家では中国・四国地方で近世を通じて広く行われた。

(背面側)

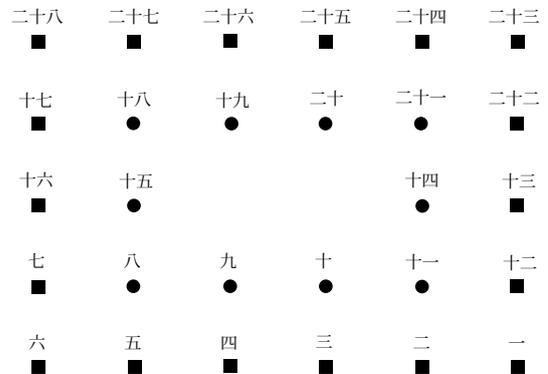


(正面側)

※上図は柱位置を示す平面図で、■は柱を示す。

- (4) 番付の一つ。数字の「一、二、三」または「い、ろ、は」を利用して建物の一隅から時香[香時計(時香盤)のお香]のように蛇行しながら番を追っていくもの。柱と小屋東に対して行われている。その発生は、組合せ番付より古く、合番より新しく、16世紀初頭、玉鳳院開山堂(1538)の小屋東に見られるものが古い。

(背面側)



(正面側)

※上図は柱位置を示す平面図で、■は柱を示す。

第9章 総括

(5) 番付の一。桃山時代の城郭建築で初めて考案されたものといわれ、合紋、回り番付、時香番付等より成立は遅れる。二組の文字または数字を用いて座標的に表示するもの。文字としては「い、ろ、は、…」、数字としては「一、二、三、…」が用いられる。数字と数字、文字と文字の場合も無いわけではないが、縦軸と横軸の区別が付けにくいので、普通は文字と数字の併用である。一つの建物のなかでも関係する大工が違うと、他の形式の番付と共に使われている場合がある。

(6) 調査担当者による。なお、南東隅の「い十四」は「い十一」とご教示いただいたが、筆者が筆跡より「一」を「四」と判断したものである。

(7) 過去の県内民家調査によると江戸時代の遺構の場合、1間の長さは床上部分と土間部分は異なり、土間部分はほとんどが柱心々1.82m、床上は各遺構により異なり1.82mより大きい場合が多い。床上部の座敷における桁行方向(又は梁間方向)2間の柱間寸法をみると、心々ではなく内法が3.64m(2間)の場合がほとんどである。このことから、当建物も両者に分けて検討した。1間相当の長さは、明かとなった柱心々寸法を尺相当のm長さを算出し、それを6倍する方法をとった。

床上部は各所の1間の平均長さは、南面(正面)が1.8264m、西面(右側面)が1.8186m、北面(背面)が1.8096mで、これらを平均すると1.8182mとなり、四捨五入して1.82mとした。土間部は各所の1間の長さは、南面(正面)側が1.8300m、東面(左側面、出入口から袖摺柱までの寸法)が1.8198m、北面(背面)が1.8168mで、これらを平均すると1.8222mとなり、四捨五入して1.82mとした。(図面から読み取る寸法精度であることから、床上部、土間部共に有効数字を3桁のcmとした)

(8) 今回の発掘調査では座敷と寝間の西側の状況が明らかにされており、床の間の有無が確認できない。床の間の有無は農家への「書院造り」導入を知る手懸かりとなることから、その有無が確認できないことは残念である。

(9) 平入りの主家当建物のように人が正面を背にしてみた場合、左手に土間部分、右手に居住部分がある平面形式を「左勝手(ひだりかって)」「または「右住居(みぎすまい)」と呼ぶ。それとは逆に左手に居住部分、右手に土間部分がある平面形式を「右勝手(みぎかって)」「または「左住居(ひだりすまい)」と呼ぶ。「左勝手」の方が多く一般的であることから「本勝手(ほんがって)」「右勝手」はまれに見ることから「逆勝手」とも呼ぶこともある。

(10) 板床を張らない吹き抜けの土間部分を指す。

(11) 「三間取り・広間型」には、当建物のように広間の西側(又は東側)奥に寝間と座敷を配置する場合と、広間を座敷としてその北側奥に寝間(納戸)と台所(炊事場)を配置する場合が見られる。後者は「前座敷三間取り型」と称され関西に分布する。

(12) 「四間取り・田の字型」は「三間取り・広間型」、「前座敷三間取り型」の広間が2室に分割され発展した形式である。「四間取り・田の字型」には「喰違い四間取り」「不整形四間取り」「整形四間取り」等の形式がある。「喰(食)違い四間取り」は田の字のように間仕切りが十字に通らないで食い違う場合、「不整形四間取り」は田の字のように間仕切りは十字に通るが、前の2室と後の2室の大きさが異なる場合、「整形四間取り」は田の字のように間仕切りが十字に通る、前後4室の大きさが同じ場合をいう。

(13) 筆者の県内の調査例によれば、農家が内便所を設けるようになるのは明治期以降である。

(14) 調査担当者によれば、馬屋部分は他の土間の部分より低くなっていったという。

(15) 平入り主家の土間正面出入口を入った辺りに建つ独立柱を指す呼称。土間奥の竈辺りに建つ独立柱は「釜柱(かまばしら)」と呼ぶ。

(16) 筆者の県内の調査例によれば、当建物この位置の小便槽は、土間内の小便槽、土間と外部の境に両方から使用できるようにした小便槽とともに、数は少ないが農家で見られるもので特別な事例ではない。

(17) 渋川市の民家調査例によれば、座敷における桁行方向2間の柱間内法寸法は20世紀初期・中期が12.00尺(3棟の平均)、19世紀中期が12.02尺(3棟の平均)、19世紀初期・18世紀末期が12.05尺(5棟の平均)、18世紀中期・初期が12.10尺(2棟の平均)、17世紀末期が12.13尺(2棟の平均)、17世紀初期が12.19尺(1棟)である(渋川市『渋川市の建造物』昭和63年3月)。

また、前橋の芳賀・南橋・桂萱地区の民家調査によれば、20世紀中期が12.00尺(1棟)、20世紀初期が11.88尺(5棟の平均)、19世紀末期が11.94尺(7棟の平均)、19世紀中期が12.00尺(10棟の平均)、19世紀初期が12.05尺(4棟の平均)、18世紀末期が12.00尺(1棟)、18世紀中期が12.08尺(3棟の平均)、18世紀初期が12.09尺(4棟の平均)、17世紀初期

が12.10尺(3棟の平均)である(前橋市教育委員会『赤城南麓の民俗』平成元年3月)。

これらの例のように、建造年代が遡るにつれて2間の柱間内法寸法が増える傾向は旧子持村、伊勢崎市、旧境町、玉村町などの民家調査からも窺える。また、筆者が調査員の一人として実施した平成22年度の群馬県近代和風建築著調査における養蚕農家の調査では、2間の内法寸法はほぼ12.00尺であり、それが昭和30年代前半まで用いられたことが判明している。筆者が今までに関与した農家の民家調査において、18世紀に遡る建物で柱間2間の心々寸法が12.00尺の建物は1棟もなかった。

(18) 関東では「三間取り・広間型」は関西で17世紀中期には成立し、関東では17世紀後半に普及していたと考えられている。

(19) 大河直躬氏は民家における仏壇の普及は17世紀に始まり、「三間取り・広間型」では古くは座敷の北側において寝間に張り出しており、仏壇と神棚が現在に近い形式を持つようになったのは18世紀前期であるという(大河直躬『住まいの人類学』平凡社、昭和61年)。なお、当建物で推定している広間の仏壇・神棚は、民家調査において多く見られるものである。

(20) 江戸時代の農家における2階の発生は養蚕によるものとされおり、当時まだこの地域では本格的に養蚕が行われていなかったこと、また土屋のスパンが比較的小さいことから平屋であったと推定する。

(21) 和風木造建築における伝統的構法で、壁を柱と柱の間に納め、柱が外面に現れる壁。壁は柱に貫を通して受ける。小舞下地でこれに土壁や漆喰で仕上げるのが一般的である。当建物は土壁であったと考える。なお、柱を隠してしまうものは「大壁造」と呼ぶ。

(22) 当建物が建てられている地域は群馬県の農家建築において草葺き地域である。草葺きの建物は町屋や温泉旅館、農家では多野・碓氷の地域及び山間地等に多く建てられていた。

(23) 草葺きに見られる棟木を支える合掌形の斜材を指す。扱首を用いた小屋組を扱首組と呼ぶ。

(24) 建物の主体構造部。下屋に対しての語。

(25) 上屋に接して設けられる片流の屋根を架けた部分。

(26) 土台を用いずに礎石の上に直接柱を立てる構法を指す呼称。

(27) 礎石に柱心や柱寸法を示す墨書は石場建てであったことを示している。なお、群馬県において農家建築で土台を用いるようになるのは18世紀後期以降とされている。

(28) 棹縁を並べその上に天井板を張った天井。棹縁は天井板を支えるため、または化粧として、天井板と直角に配す細い材をいう。

(29) 糞尿を肥料として使用する場合、大便よりも小便の方が即効性のあることから、小便所を単独で別に設けることが広く知られていたという[日本民俗建築学会編『図説民俗建築大辞典』(「便所」)柏書房、平成13年]。また、筆者の民家調査例によれば、農家の外便所は主家の東の南より、東南、南の東よりに配されることが多い。旧境町(群馬県)では、前述した3つの位置に建てられていた便所は26件中22件(84.6%)であった。

(30) 天明3年の浅間押し遺構である上福島中遺跡(群馬県佐波郡玉村町)「Ⅵ区3号建物」(三間取り・広間型)でも、南東隅を起点とし、礎石にそれぞれ「西に一、二、三……」「北へイ、ロ、ハ……」記されているという(財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『上福島中遺跡』2003)。江戸時代に遡る民家は減少の一途をたどっており、現時点における民家における番付の研究対象は文化財の建物に限られているといっても過言ではない。民家における番付の研究は進んでおらず、発掘遺構で見られる番付は貴重なものといえよう。

第4項 天明泥流の復旧について

天明3年7月8日の浅間山噴火に伴って発生した天明泥流は、吾妻川から利根川へと流れ下り、現在の坂東橋付近から分岐する広瀬川及び桃ノ木川へと流れ込み流域に多大な被害を及ぼしたことは周知のことである。この両河川について松平藩日記(1)には、「一勢多郡桃木堰本川并悪水抜川共、長さ式千七百間程平均幅七間余深九尺余、焼石泥二而埋候二付、用水桃木川干川二相成、御

料私領田方乾上り申候 一同郡広瀬堰本川并悪水抜川共、長さ千九百八拾七間程平均幅九間余深八尺余、焼石泥二而埋候二付、用水広瀬川干川二相成、御料私領田方乾上り候」と記されており、田口村については「前略-勢多郡関根村田口村-中略-民家押流シ或者軒際迄民家焼石泥二而埋候村々二御座候」とあり、両河川ともに泥流に埋もれ、溢れ出した泥流によって周辺の民家まで被害が及んだことがわかる。根岸九郎左衛門の『浅間山焼に付見分覚書』を元に作成された被害状況(2)から田口村について見ると、村高675石のうち492石(72.9%)が泥入り、民家96軒のうち29軒(30.2%)が流失、人的被害はなかったようである。こうした記録を裏付けるように、調査範囲のほぼ全域から天明泥流の復旧痕が検出されているが、場所によって復旧痕のあり方に特徴があるので列記しておきたい。

①掘り方は、溝状のものが主体で、わずかに土坑状に掘削されたものがある。②溝状の復旧痕は、泥だけを入れたものが圧倒的に多く、小振りな焼石の混じった泥を充填しているものがこれに次ぎ、焼石だけを選択的に充填していたものは、1単位の復旧痕に1～2条程度と少ない。③土坑状の復旧痕と単独で掘削された溝状の復旧痕は、焼石を選択的に充填しているものが多い。④掘削単位は、土地区画を意識している。⑤同じ溝状の復旧痕でも田口下田尻遺跡側で検出したものと田口上田尻遺跡側で検出したものには、掘り方に違いが認められる。特に、⑤については、田口下田尻遺跡側の復旧痕は、条が短く間隔も狭いのに対して、田口上田尻遺跡側の復旧痕は条が長く、条間の間隔がやや広い傾向がある。また、深さも田口上田尻遺跡側のもので深く掘削されている。さらに、土坑状の復旧痕は、田口下田尻遺跡にだけ検出されており、田口上田尻遺跡では検出されていないのである。こうした違いは、土地の状況に影響されたものではなく、施工方法の違いであり指揮者を含めた施工グループの違いを示しているものと考えられる。したがって、当遺跡には少なくとも2つのグループが地域を分けて復旧にあたった可能性が高いのである。泥流被害の大きかった吾妻川流域の耕地復旧では、最初は泥流上面の一部の泥流除去と焼石の撤去を行っただけで耕地化したことが、作物の生育が悪かったことから、二番開発として泥流の上から埋もれた耕作土中に達する穴を掘り、掘り出

した耕作土を周辺の泥流の上に被せて耕地化する方法が取られたようである(3)。この二番開発は、いわゆる天地返しであり、史料にある「起こし返し」に当たるものである。当遺跡で検出した復旧痕も泥流を埋め込むと同時に耕作土を掘り出しており、復旧の当初から前述の二番開発を大規模に行ったものと見てよいであろう。

史料からは起こし返しの具体的な作業手順が判然としないので、調査状況からその手順について復元してみたい。復旧痕の掘削単位が土地区画を意識していることから、調査時点では一定範囲の泥流を除去して旧区画を明らかにした上で復旧のための溝などを掘削したと考えていたが、この手順であると、復旧痕の間に畑の畝が良好に残存した状況が説明しにくいことに気づき以下のような手順を想定した。①泥流の上から3条程度の溝を平行して掘削し、泥流だけを掘り出し所定の場所に集積する。②溝の中の耕作土を掘り出して所定の場所に集積する。③掘り上がった溝に先に集積した泥流を充填し平坦に均す。④均した上面に集積しておいた耕作土を被せて均す。⑤①～④の作業を一定方向に繰り返す。以上のような手順であるが、①の作業で選別された焼石は、別に集積され、溜まった時点でまとめて復旧痕に埋め込んだものと考えられるのである。鎌原村における大笹村名主黒岩長左衛門の請け負った復旧では、1畝を10人で再開発したとされ(4)、また、原町の復旧においては1畝を7人で掘り返すことが見積もられていたようであり、復旧作業に当たっては1チームにつき7～10人程度の人数が想定されていたものと思われるのである。この数字を当遺跡の作業単位に当ててみると、1条の復旧痕に、掘削1人、排土運搬2人が当たり、3条を平行作業したとすると9人が必要となり、田口上田尻遺跡13号復旧痕は、871㎡程度の面積があることから、9日間の作業が必要であったことになる。先の掘削状況の違いから、こうしたチームが当遺跡内においては少なくとも2チームが作業したことが想定できるのである。

引用・参考文献

- (1) 『前橋市史 第三巻』1975 前橋市史編さん委員会
- (2) 『群馬県史 通史編6 近世3』1992 群馬県史編さん委員会
- (3) 渡辺尚志『浅間山大噴火』2003 吉川弘文館
- (4) 渡辺尚志『天明三年浅間山噴火時の被災村落の復興過程』『災害と江戸時代』2009 吉川弘文館

抄 録

書名ふりがな	たぐちかみたじりいせき たぐちしもたじりいせき
書名	田口上田尻遺跡 田口下田尻遺跡
副書名	一般国道17号(前橋渋川バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第2集
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第527集
編著者名	桜岡正信 大木紳一郎 大西雅広 笹澤泰史
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120316
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	たぐちかみたじりいせき たぐちしもたじりいせき
遺跡名	田口上田尻遺跡 田口下田尻遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししたぐちまち
遺跡所在地	群馬県前橋市田口町
市町村コード	10201
遺跡番号	00804
北緯(日本測地系)	362614
東経(日本測地系)	1390304
北緯(世界測地系)	362625
東経(世界測地系)	1390252
調査期間	20050801-20090131
調査面積	15485
調査原因	道路建設
種別	集落・生産
主な時代	古墳/奈良/平安/中世/近世
遺跡概要	近世-天明泥流復旧痕59+建物3+井戸1+溝68+水田6+畑21+道12+集石1+墓坑4+土坑140/中世-溝41+畑1+墓坑14+集石16+土坑125/古墳～古代-竪穴住居311+溝24+畑26+道2+墓坑2+集石5+土坑272
特記事項	天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流(天明泥流)被害の復旧痕、天明泥流下の耕地・建物、古墳時代前期～平安時代の集落の調査。
要約	天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う泥流(天明泥流)被害の復旧痕と、天明泥流下の建物と水田・畑、及び中世から近世にかけての溝を多数検出した。特に用水路と思われる大規模な溝の一画には石造物などを使った石積み遺構が検出された。また、古墳時代前期の集落調査ではAs-C降下以前の竪穴住居が多く検出され、水田開発を目指したと思われる南北方向に掘削された大規模な溝が調査された。さらに平安時代の集落からは、道や鍛冶遺構が検出された他、遺物では緑釉陶器が多数出土したことが特筆される。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第527集

田口上田尻遺跡 田口下田尻遺跡

— 本文編 —

一般国道17号(前橋渋川バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

平成24(2012)年3月9日 印刷

平成24(2012)年3月16日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毛新聞社事業局出版部
